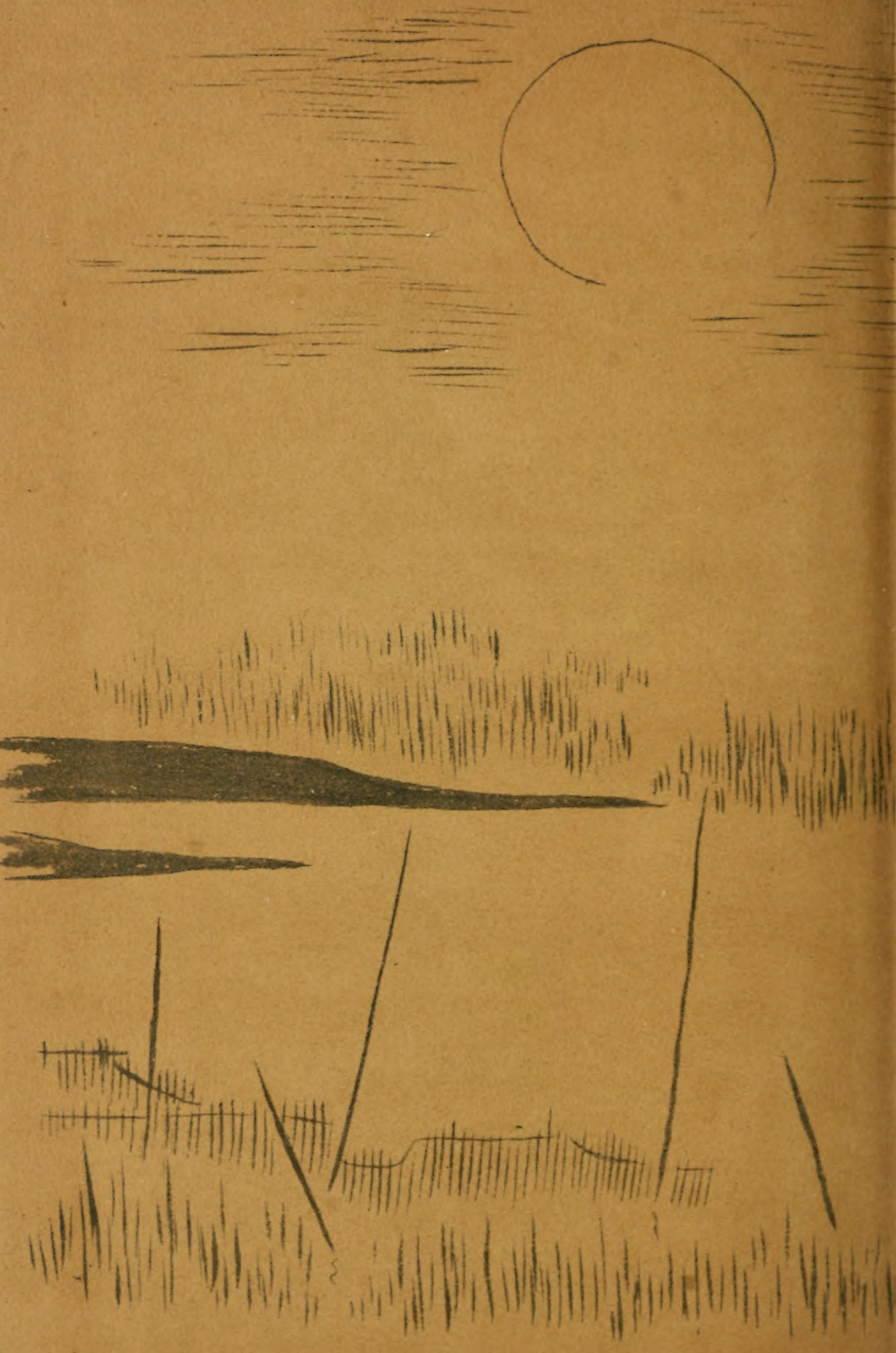


Nihon meicho zenshū; Edo bungei no bu



日本名著全集
江戸文藝之部第廿七巻

俳文俳句集

この卷の裝幀――

背及表紙意匠　森田恒友氏畫
見返し前附・後附　森田恒友氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

俳文俳句集目錄

―(目錄をはり)―

緒言三則

贄川他石

一　編纂をお引受けするまで

大正十四年の初冬頃でした。故加藤氏が故沼波先生の御紹介で御訪問になられまして、日本名著全集發行の計畫のお話があり、江戸文藝之部を其第一期として出版する、俳諧部門に於ては芭蕉の作品及び之に關聯するものを纏めて「芭蕉全集」として、其他の人々のものは元祿から文化文政ごろまでの主要なものをひとまとめにして「俳文俳句集」として出す豫定であると申されて、編入書目の下タ書を見せられたのであります。私はそれを拜見して多少の愚見をも申述べ、尙あれもよいでせう、これもおもしろいものですといふ風に、おもひついたまゝの書名を擧げたのでありました。加藤氏から俳諧部門二種編纂方のお話がありましたが、淺學でもあり又公私多端の境遇にあるから到底困難である旨を以て御辭退いたしました。加藤氏お歸りの際も尙再考してくれといふお詞を殘されたのでありますが、私はたゞ儀禮的言辭と輕く考へてゐたのであります。

越て十五年の春日本名著全集出版の廣告や豫約募集の册子が出まして、それには私が俳諧部門の編纂を擔任する事に明記されてをるのであります。加藤氏からは御尊父が重患であるので、看護の爲めに歸郷してゐるといふ御郷里からお手紙を頂いたのであります。私も其頃三四の重要な案件解決に沒頭してをりましたの

て、何れ更めて何等かお話のある事としてほつて置いたのでありました。

昭和二年四月加藤氏突如長逝されました後、興文社から編輯の方がお見へになりまして、編纂事務速進に就てのお話があつたのでありましたが、上記の次第でありますので、さらば更めて引受けよとのお詞であります。私も少し健康を損ねても居り、多忙を加へて參りましたから、大に躊躇いたしたのでありますが、事玆に至つては如何ともいたしがたい事情にもあるので、敢て微力をつくす事に相成つたのであります。

以上が私の本書編纂をお引受けするまでの經緯であります。此事業計畫者の加藤氏も、加藤氏を私に紹介された沼波先生も、相前後して共に故人になられました。編纂に從事しながらも一たび之をおもふときは、寂寥の感轉々深きものがあります。

二　編入俳書の整理に就て

私が加藤氏にあれもよいでせう、これもおもしろいものですと申しました書目と、加藤氏が豫定されてゐたものとでは、俳書の部數は相當多くなるのであります。最初の考へでは、年代順に代表的俳人の作品集即家集類を編次しまして、其あひだ／＼に撰集類をはさんで、或時代の横斷を示すやうにしたいとおもつたのであります。

お引受けをして一册の豫定頁數などを承知しましてから、『俳文俳句集』編入書目として發表いたしてあります四十八部に就て計算してみますに、到底一册には收まりません。之を二册にするときは體系上も都合がよろしいのでありますから、増册の事を興文社へお謀りしたのですが、既に他の部門に於て増册したものも

あり、又毎冊殆んど豫定頁數を五六割も超過してをる次第であるから、採算上の關係少なからずである。勿論此全集刊行は名著保存の大精神に出發した事業であるゆへ、強ち採算にのみ拘泥するわけではないが、豫約者に對する關係もある事であるから、増頁は止むを得ないが、増冊は免してもらひたいとの事でありました。私としては此上押して増冊を迫るわけにも參りませんので、増頁を以て適當なる編纂を進めねばなりません。

茲に於て尚一度編入書目の研究をいたしました。其結果横斷面を示す意味の撰句類と連句のみのものを整理いたし、其他のものに於ても多少の加除をいたしまして、豫定四十八部のうち五部を『芭蕉全集』に移し、二十部を割愛いたし、其代りに新たに十一部を加へたのであります。卽ち豫定の四十八部に對して差引九部の減少を見たのであります。かくして各時代の代表的俳書を體系的に編次いたしまして、以て本全集の趣旨に副ふことといたした次第であります。

三　代表的俳人の見方

各時代に於ける代表的俳人を選み出すに就きましては、それ〴〵の見解があらうとぞんじます。私が此編纂に就て考へましたのは、各時代の有力なる位置を占め、當時の俳壇に何等かの寄與を爲した所の俳人、又は獨自の地歩を占めて光輝ある作品を留めた所の俳人を選ぶ事が、本書編纂の目的に副ふものであるとぞんじたのであります。

此見地よりして元祿期に於きましては鬼貫素堂其角嵐雪去來丈草許六を選んだのであります。元祿期は中

すまでもなく芭蕉の「心の俳諧」創造の時でありまして、其門下は多士済々であります。又芭蕉と前後して芭蕉とは別派な新風を鼓吹した俳人も少くないのであります。其うちから鬼貫と素堂との二人のみでは少々物足らぬ感が無いでもありません。が、言水來山信徳沾徳の徒は新風を鼓吹したとは申せ、まだ全く遊戯氣分を蟬脱し得ないのでありますから、鬼貫素堂の二人に止めたのであります。

芭蕉門下は其十哲をはじめとして雄を一方に示すものは中々多いのであります。俳諧普及に與つて力あるもの、又は門下養成に努めたものなど除外するに忍びないものもあります。現代に於ても其俳統を繼承して何々門の第幾世など稱してをる次第でありますが、前述の方針によりまして其角嵐雪去來丈草許六の五人だけを採つて他は割愛いたしたのであります。尤も三四のものは其編著を『芭蕉全集』のうちに採錄する事にいたしました。

享保期と申すは正しい區劃でもありませんが、元祿期から天明期に至る中間の潰崩時代を指すのでありまして、假りにかく名づけたのであります。此期間は普及と共に低下した時であります。下れば上るのでありまして、やがて天明期の復興を見んとする氣運は享保の末年『五色墨』の頃から動きつゝあつたのであります。此時代の代表として蓼和也有千代尼の三人を擧げました。

一口に天明の復興と申してをりますが天明は其絕頂でありまして、事實は寶曆の下半頃から其形を現はし來つたのであります。が、通說に隨つて天明期と呼ぶことにいたしませう。此時代に於ては比較的多數の俳人を推薦いたしました。卽ち太祇召波樗良蕪村蓼太几董靑蘿白雄曉臺闌更の十人であります。尙麥水の如き嘯山の如き馬光の如き柳居の如きものもありますが除外いたしました。

文化期の名の下に前は寛政享和、後は文政時代を包含する事にいたしませう。此時代はもう下り坂でありまして、天明期に於ける氣魄の見るべきものはありませんが、恰も江戸文化の爛熟期でありまして、俳諧亦捨て難きものがあるのであります。依て此時代から大江丸士朗巣兆成美道彦乙二一茶抱一の八人を選びました。此八人に比べまして敢て遜色の無い人々もあるのでありますが、各方面の代表者として此八人で事足るものと考へたのであります。

俳書の撰擇に就ては各解題の下に記す事にいたします。編次の順序は俳書出版の年次にはよりませんで、各編著者の歿時の順序による事にいたしました。

此代表的俳人并に其編著の撰擇に就ては、伊藤松宇先生をはじめとして先輩友人各位の多大なる御指示を得ました事を明記して、謹で感謝の意を表します。

解説

贅川他石

ひとり言　半紙本　二冊

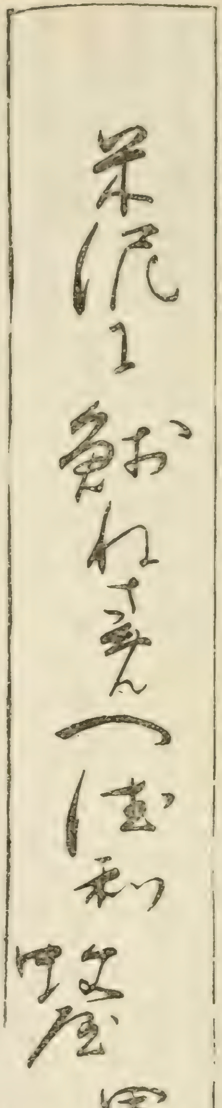
鬼貫句選　同　二冊

七車　同　二冊

芭蕉とは別の途を歩みながら、芭蕉と同じく「誠の俳諧」を唱へたのは伊丹の鬼貫であります。鬼貫は寛文元年四月四日に伊丹の酒造家上島宗次の三男として生れたのであります。『在岡逸士傳』に「天性聰頴而從兒童之時讀書嗜俳諧才富風月」とあります。八才のとき發句を詠んだ逸話があります。其追善集なる『月の月』梅水堂又臥の序文中に「都にあそびては維舟を師とし難波にいでゝは宗因を友とす」とありますので、其俳諧の師友關係を知る事が出來ます。元來伊丹の地は古くから開けた土地で、近衞家の領分でありまして、年貢には年々清酒三千七百五十樽を納める例であつたさうであります。牡丹花肖柏の隱栖した所であります。資産家有閑階級の多い所にはあらゆる藝能が盛行いたします。伊丹に於ては俳諧が茶湯や謡曲と同しやうに旦那樣達の嗜みとして修業されたのでありませう。宗旦鷺助百丸蟻道月笋青人など皆鬼貫の先輩若くは

同罪であつたのであります。此遊戯的雰圍氣の中から「まことの外に俳諧なし」と看破したのは鬼貫の偉なる所であります。

鬼貫は二十七歳の時筑後三池の立花侯に出仕しました。三十人扶持を頂いたと申しますから士分であつたのでせう。が、二年にしてやめました。次で元祿四年三十一の時大和郡山の本多侯に仕へましたが、五年にしてやめ、しばらく京のあたりに住んでゐて、のちに大阪へ引移りました。越前の大野藩に仕へたのは多分この京阪放浪時代であ



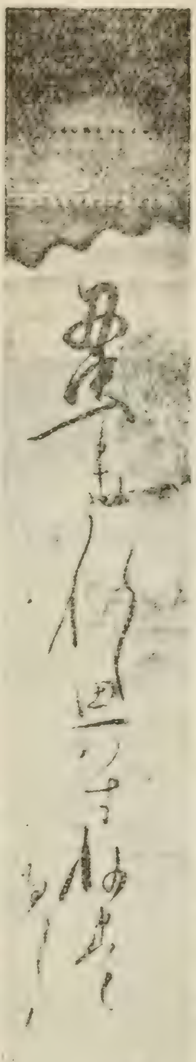
鬼貫筆（伊藤松宇氏藏）



鬼貫像

つたのでありませう。大阪に住んでからも二三ヶ所引越したのでしたが、晩年は鰻谷に居りまして元文三年八月二日そこで歿しました。享年七十八であります。遺骨は伊丹の墨染寺に納めたのでありますが、鬼貫の墓石はありません。一子永太郎の墓石の右側面に「仙林卽翁居士」の法號が刻してあるばかりであります。

鬼貫は導引をよくいたしました。此法は長崎へ亡命して來た明人某が傳へたもので、鬼貫は紀州の人道古から學んだのであります。「七車」に「大久保道古」の名が見へ、又來山の『續今宮草』「寺嶋の記」の中に「爰に醫あり其妙術は京の鬼貫傳授せしを我よく知れり」とあります。只今でも導引家は其流祖として年々鬼貫忌を營



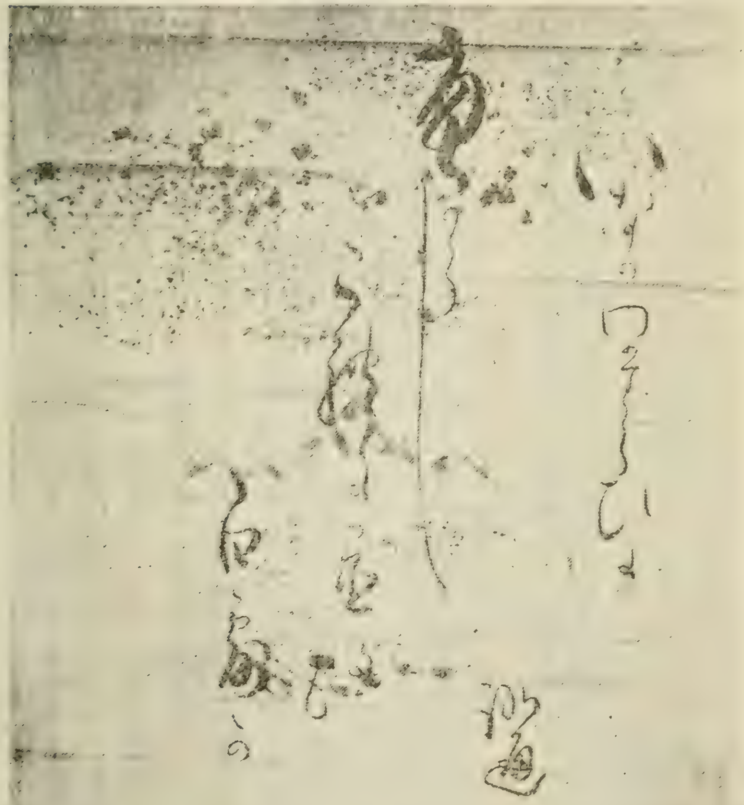
來山筆（伊藤松宇氏藏）

んでをるといふ事であります。諸藩へ仕へたのは或は此術を以てしたのではあるまいかとおもはれます。

鬼貫の至孝でありました事は「禁足之旅記」によつてもうなづかるゝのであります。其貧にせまつて娘を賣らんとしたといふお話は『蕉門頭陀物語』などの記す所でありますが、これは路通を芭蕉の僞筆製造者として惡人視するための作說と見るのが適當であります。幻住庵に芭蕉を訪うて連句をし、「むら紅葉」の次韻に若んだとか、江戸に下つて嵐雪と兩吟したとか申す事は、皆「禁足之旅記」の誤讀から生じたものであります。

鬼貫は七十三歳ではじめて薙髪して卽翁と號したのでありますから、それまでは浪人姿で導引術の先生であつたのでありませう。導引は按摩上下五百文と大道を流してあるく類のものとは大に異なつて、立派な一の醫術であつたと見へまする。

鬼貫の編著は相當多數に上りますが、其情懷を見るべきものは『ひとり言』であります。年頃おもひよりたる事どもを寐覺〳〵に書き付けたものであります。序文を書いた有智長伯は歌人



路通筆

伊藤松宇氏藏

で鬼貫と同庚であります。其家は代々國學者を出してをります。跋を書いた互妙子は紫野大徳寺塔中清源庵の大心義統和尚であります。其六十を賀した句が『鬼貫句選』卷之一にあります。『ひとり言』は門人の千及市貫二人の切望によつて開板したのであります。享保三年に京の華文軒から出したのであります。

享保十二年鬼貫自ら其句と文とを編輯して『七車』と題したものがありましたが、生前上梓を見ませんでした。其稿本から不夜庵太祇が適宜抄錄して『鬼貫句選』と題して明和六年に公刊いたしました。のち天明三年に至つて大阪の書肆興文堂が、鬼貫の門人只川の後裔であるといふ緣故から、稿本『七車』の所藏者荒木氏と謀つて、既に太祇の抄錄したものを除いて、發句を上卷文章を下卷に收めて刊行いたしましたのが即ち板本の『七車』であります。即ち『鬼貫句選』『七車』の二書を併せて鬼貫自選の『七車』に當るのであります。

此三書で鬼貫の面目は露呈するものと信じます。

(二)

とく／＼の句合　半紙本　二冊

西行法師の「御裳濯川歌合」に倣ひまして、自らの發句を左右に合はせて、自ら批評したものが素堂の『とく／＼の句合』であります。素堂は甲斐の致來石の人、山口氏官兵衛と稱しました。鄕に在る時蓬澤の水利に功があつたと申すことで、そこには「山口靈神」として祀られてあると申します。所謂「生祠」であります。和漢の學に通じ最も詩賦に長じてをりました。連俳は季吟門で芭蕉の先輩であります。茶道に詳しく琴をよくしたといふ事であります。いつ頃江戸に出たか判然いたしませんが、一時東叡山下に住しまして詩社を結

んで蓮社と稱しました。晩年は葛飾の阿武に住んでをりました。芭蕉が小名木川の五本松といふ所に舟遊びして「川上と此川下や月の友」と詠じましたのは畏友素堂を思ふての吟懐であります。素堂は俳諧は餘技と見へまして、其作句も多くないのであります。單行の句集と申すものもありませんから、此句合を採錄いたしました次第であります。自撰自評と申す所に、素堂の見解を知るべきよすがが多いわけであります。附載の「俳諧五十韻」は素堂の漢字驅使の巧妙を見るべきものであります。其第一首の第二句「火雛」の二字は松宇文庫本には削り去つてあるのであります。素堂が江戸でたび／＼火難に遭ひましたのを忌んで削去つたのであります。即ち出版後に於て手を加へたのであります。本書には竹冷文庫本によつて補つて置きました。



素堂像

素堂は初め信章のちに來雪と號しました。其俳號は葛飾正風其日庵と稱して只今は多分其十二世でありま

せう。茶道は宗遍流で、宗旦の今日庵を稱しました。素堂は寛永十九年五月五日を以て甲斐に生れ、享保元年八月十五日江戸に歿しました。享年七十五であります。谷中の感應寺に葬りました。

○

五元集　大本　二冊

同拾遺　同　一冊

「兩の手に桃と櫻」と芭蕉に愛されました其一人の其角は、蕉門第一高足として當時からも後代からも推重されたのであります。其角は寛文元年江戸の日本橋堀江町に生れまして、十四歳芭蕉の門に入りて俳諧を學び、二十歳「桃青門人二十歌仙」や「次韻」の作者に加はりなどして、寶永四年二月三十日四十七歳で歿しまするまで、濶達にしてしかも巧緻な才華を縦横に發揮したのであります。左に其編著を年代順に列擧しまして以て彼其角の業績の一斑を示しませう。

延寶八年　田舍の句合　一冊
天和三年　虚栗　二冊
同　年　馬蹄二百句　一冊
貞享元年　蠢集　一冊
同　三年　初懷紙　一冊
同　年　新山家　一冊

同　四年　續虚栗　二册
元祿三年　新三百韻　一册
同　年　いつを昔　一册
同　年　花摘　二册
同　年　たれが家　一册
同　四年　雜談集　二册
同　六年　萩の露　一册
同　七年　歳旦帖　一册
同　年　句兄弟　三册
同　八年　枯尾花　二册
同　九年　若葉合　一册
同　十年　末若葉（うら）　二册
同　年　俳諧錦繡緞　二册
同　十三年　三上吟　一册
同　年　焦尾琴　三册
寶永四年　類柑子　三册

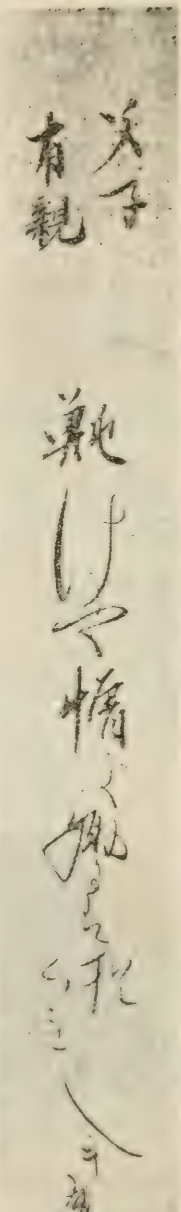
右のうち『虚栗』と『枯尾花』の二書は之を『芭蕉全集』に編入する事になつてをります。『焦尾琴』は其角が類



其角像

燒に遭つて詠草など全部烏有に歸しましたので從來の發句連句の、後世に傳へるに足りると考へましたものだけを編輯上梓しましたものでありますから、其角作品の代表的編著と見てよろしいのであります。『類柑子』は其角の隨筆的雜著でありまして、其編纂の半バに其角が歿しましたので、嵐雪等が庵中の反古どもを整理したものゝ上に、晉子終焉記及び其追悼の發句連句を附け加へまして、篁影堂に沾洲菊后亭秋色阿桑門青流（青流は後の敬雨又祇空）の三人によつて上梓されたものであります。

其句集『五元集』は其角が自ら撰み自ら書いて板にするばかりにいたしました所の稿本が、芝神明の社僧某



其角筆（伊藤松宇氏藏）

の家に秘藏されてゐましたのを、百萬坊旨原が譲り受けまして、其謄寫を蕪村（江戸漂遊中の）に托しました。蕪村は之を引受けながら果たさなかつたので、旨原は更に之を編成に行らせたのであります。これが『五元集』出版　經緯であります。

『五元集』は元亨利貞の四册になつてをりますが、元亨二册が其角自撰のもの利の卷は「おのがね雞合」と申す鬪雞に關した句合でありまして『類柑子』下卷に收めたものゝ續稿であります。貞の卷は拾遺として旨原が

諸書から蒐集したものであります。ですから其角句集としての『五元集』は元亨の二册と貞の一册（拾遺）で足りるのであります。外に豊島由誓編の『五元集脱漏』と題するものが竹冷文庫に藏されてをりますが、寫本でありますから省きました。

其角は町醫竹下東順の子でありますが母方の榎本氏を名乗りました。又寶井とも稱しました。寶晉齋晉子狂雷堂狂而堂雷柱子螺舍螺子善子渉川などの諸號がありました。墓は芝二本榎の上行寺にあります。只今は二月に三十日がありませんから、一ト月おくれの三月三十日を其角忌といたしてをります。其俳系は晉派と呼ばれ、其宗家は其角堂と稱して只今は第九世田邊永澗氏が庵主であります。

○

玄峰集

半紙本　二册



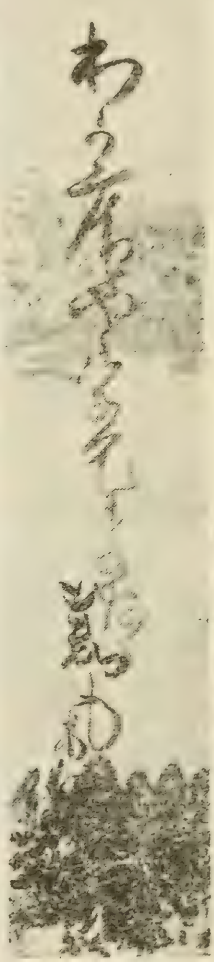
嵐雪像

『桃櫻』の一人たる嵐雪は服部氏、幼名は久米之助、はじめ嵐亭治助と號しまして『蕉門人二十歌仙』作者の一人であります。雪中庵玄峰堂寒蓼堂不白軒などの號があります。其角と同じ寶永四年の、二百餘日あとの十月十三日に歿しました。享年五十四。駒込常檢寺に葬りました。大正八年常檢寺は小石川雜司ケ谷の本敎寺（共に日蓮宗）に合併いたしましたので、嵐雪の墓をも同寺へ引移す事に立至りまして、其第十一世なる現雪中庵主淸水東枝氏によつて莊重なる改葬式が行はれたのであります。

嵐雪は官仕の關係等で江戸に居らなかつた事もありまして、其角ほどの活躍はいたしませんが、おり／＼／＼と踏み固めて行くといふ風でありました。其俳人生活にはいりましてからの樣子は、寥和の記述『風の末』序）に明らかでありますから、左に抄記いたしませう。

抑居士市中に出るの根本は、石町二丁目也。向ひに神叔軒並びに氷花、百里も遠からず。又隣家にありける望月氏野也は、はせを翁の肉親なれば、なを／＼翁の往來も近く、（中略）しかるに元祿寅（十一年）八月の燒亡にみなちり／＼にして、居士は神田やしろの北隣の奥深く僅かなる所に移り、其後彼濱町の邊にあやしの葭垣結廻し、（中略）小ぐらき持佛を朝夕に明て、達磨の尻目を睨み、木魚こと／＼と滯しく、うらの小窓の前は名さへ物凄き山伏井戸といへるあたりへ通る細道にして、人のゆきゝ　たま／＼也。

嵐雪の編著は『其袋』があります。立派なものであります。『芭蕉全集』編入の豫定であります。『若菜』は芭蕉一周忌の追善集であります。『杜撰集』『其濱木綿』なども亦捨て難いものであります。其句集『玄峰集』は『五元集』の上梓者である旨原の編纂校訂する所で、板元も亦同じ日本橋區通三丁目の竹川藤兵衛であります。



蝶夢筆（伊藤松宇氏藏）

此書の板木は只今淺草の淺倉の手に保存されてをりまして、『嵐雪句集』の書名で刷り出されたものも折々見懸けるのであります。

○

去來發句集　半紙本　一冊

丈草發句集　半紙本　一冊

共に蝶夢法師が諸書から拾ひあつめて編輯したものでありまして、はじめは去來のを上卷丈草のを下卷として『去來丈草發句集』の名で安永三年に出したのでありますが、後には



蝶夢像

別々の單行本として發售いたしたのであります。

去來は向井氏、通稱は元淵名は兼時、號は義焉子、儒醫靈蘭先生の第二子でありまして、八歲の時父に從つて京に移つたのであります。兄に向震軒（醫官益壽院法印、元端仁焉子と號す）次弟に魯町（元成禮焉子と號しまして長崎聖堂の祭酒であります）妹に千子（『伊勢紀行』作者）一族に京の風國長崎の卯七などがあります。又其妻可南も俳諧をいたしたのであります。

丈草は尾張侯の世臣犬山城主成瀨隼人正の家臣でありまして、內藤林右衞門の子であります。幼名を林之助と申しまして、成瀨家公子（庶腹で、其母は丈草の叔母であります。即ち公子とは血緣上從兄弟に當るのであります）の扈從でありました。其公子が歿しましたのと、實母に死別したなどの事情から、元祿元年病氣の故を以て遁世したのであります。芭蕉との關係は元祿二年京の史邦（中村春庵と申す醫者で、曾て同じく成瀨家公子に仕へてをつたが、犬山を去つて此時は京にいたのであります）紹介で相見入門したので、爾來專念俳道に進みて、芭蕉をして「此僧此道にすゝみ學ばゞ人の上にたゝんことを月をこゆべからず」（丈草誄）と嘆稱せしめたのであります。丈草は犬山に在る頃穗積某に漢籍を、先聖寺（黃檗宗）の玉堂和尙に禪を學びました。漢詩が得意であつたやうにも見受けられます。義仲寺の裏山なる龍が岡（所の人は岡の堂と申します）に小庵を結び佛幻庵と號しました。蒲柳の質でもあり又逃避的氣分から交友範圍は狹かつたのでありますが、去來とは情誼甚だ深いものがあつたのであります。寶永元年二月二十四日佛幻庵に於て歿しました。享年四十三であります。四十二說四十四說四十五說がありますが、私は門人遠藤重成の輓詩「一濫凋寄生四十三」の一句によりました。佛幻庵の隣の丘の上に葬りました。二尺ばかりの自然石に「丈草墓」と彫つた

ものが、只今も正秀の墓などと共に淋しく立つてをるのであります。

大正十二年野田別天樓氏は蝶夢編の發句集を以て足れりとせずして、弘く諸書や眞蹟をあさりまして、發句文章書簡を蒐集して『丈草集』を發刊されました。更に市橋鐸氏（犬山出身の人）は該博周到な搜査と研究とを重ねまして、丈草傳の眞相を明らかにし、且又其作品は發句連句文章書簡及び漢詩までを編輯して、完美せる丈草全集を出さんとするよしであります。

かくしてはじめて丈草の全面目を見る事を得られるのであります。



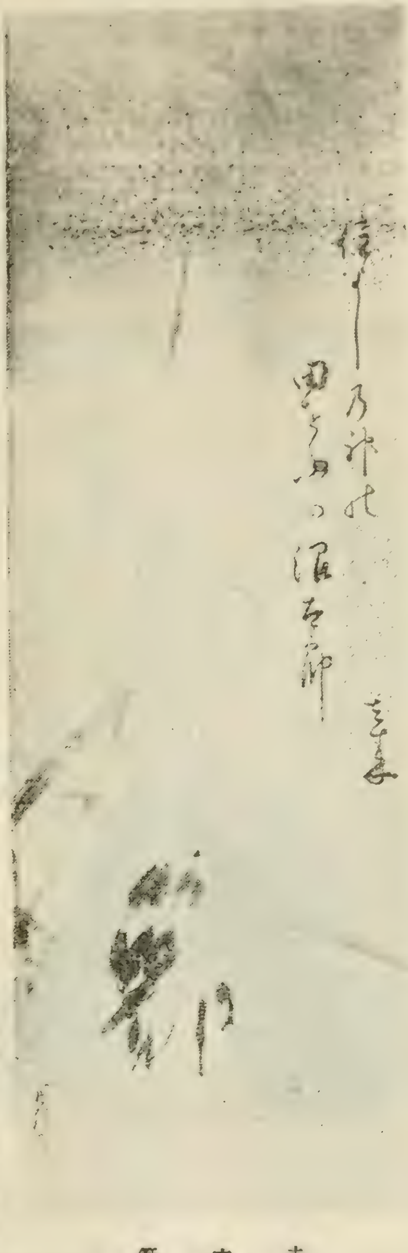
丈草像

去來が芭蕉に從つたのは貞享元年でありませう。去來の蕉門に重きを爲したのは元祿四年の「猿蓑」撰集であります。此書は凡兆と共撰の名になつてをりますが、殆んど芭蕉の刪正を經て出來上つたのであらうと推量されるのであります。此書は「芭蕉七部集」の一でありまして蕉風研究には缺くべからざるものでありますが「芭蕉合集」へ編入いたします。元祿七年芭蕉遷葬の後其角は去來の落柿舍に滯在しまして、互ひに芭蕉の追憶の切情を抱いていろ／＼話し合つたのであります。其筆記稿本を後年「去來抄」の名によつて曉臺が上梓いたしました。「猿蓑」撰集當時の狀況もわか



去來像

り、又芭蕉の俳諧に關する意見の一片も窺はれるものでありますから、『芭蕉全集』に編入する豫定でありま
す。（尙此書と『旅寢問答』とに就て語るべき事がありますが、それは『芭蕉全集』解題に讓ります）許六の『篇突』に就て、長崎滯在中その人々の疑問に答へた筆記がありましたのを、寶曆十一年蓼太指導の下に江戶



去來筆

の桃鏡が『去來湖東問答』の名で、安永七年重厚のすゝめによりて肥後植木の湖桂が『旅寢論』の名で出版いたしました。一讀すべきものであります。

去來は文武の諸藝能に達してをりました。其修業は故鄉の長崎方面に於て爲したかに想察されます。京に於て兄益壽院法印の家事を助けたり、又聖護院宮家に勤仕したりいたしたのであります。林鴻の『誹諧京

羽二重」によりますれば中長者町堀川東入に住んでゐたやうでありますが、晩年には各務支考の「落柿舍先生挽歌」に「家は聖護院の森にかくれて、寒き梟の聲に驚き」とある如く、洛東に居つたのであります。嵯峨の落柿舍は折々遊息の所でありまして、芭蕉の「嵯峨日記」によつて特に名高くなりました。（只今の落柿舍は三度目のもので、場所も全然違つてをるのであります）

去來は丈草の歿した寶永元年の九月十日に享年五十四で歿しました。洛東鈴聲山眞如堂先塋の次に葬りました。其後向井家の墓域は移轉した事もあつたかのやうで、只今の墓域内に去來の墓碣は見えません。寺の過去帳にも記載が無いさうであります。只今の落柿舍のうしろの藪の中に一區の墓域がありまして、其入口の片隅に一尺五寸ほどの自然石に「去來墓」と彫つたものが立つてをりますが、無論埋骨の所ではないのであります。こゝは涌蓮法師の墓を中心とした一墓域であります。

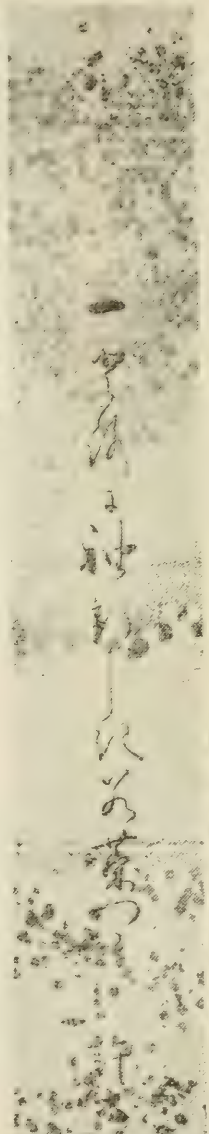
去來作品集の完全なものは潁原退藏氏によつて公刊されるやうに仄聞してをります。玆に於て蝶夢編の兩發句集の缺陷が補正されるのであります。

○

風俗文選　大本三冊

俳諧の心を以て書いたものが卽ち俳諧文であると芭蕉は申しました。漢文系でも國文系でもない一種の文體を創始しました芭蕉の偉大な事は今更申すまでもありません。西鶴の文章なども俳文として見る事が出來ませうが、正しい俳文は芭蕉及其一派のものに限られる感があります。後の之に倣ふものも少なくないので

ありますが、飄逸奇警は在つても典雅清新に乏しいのであります。芭蕉及其一派の文章を集めて大成したものが許六の此「風俗文選」であります。此編輯に就ては李由去來支考などが大に援助したのでありまして、芭蕉一門の優秀なる文章は殆んど網羅してをるのであります。此書はじめは「本朝文選」と題したのでありましたが、世外のものゝ文章を集めたものに「本朝」の文字は憚るべしとして今の如く改めたのであります。又はじめは許六の「返唐文」を編入してあつたのでありますが、作者列傳中路通の條に「其性輕薄不實而長蓮師

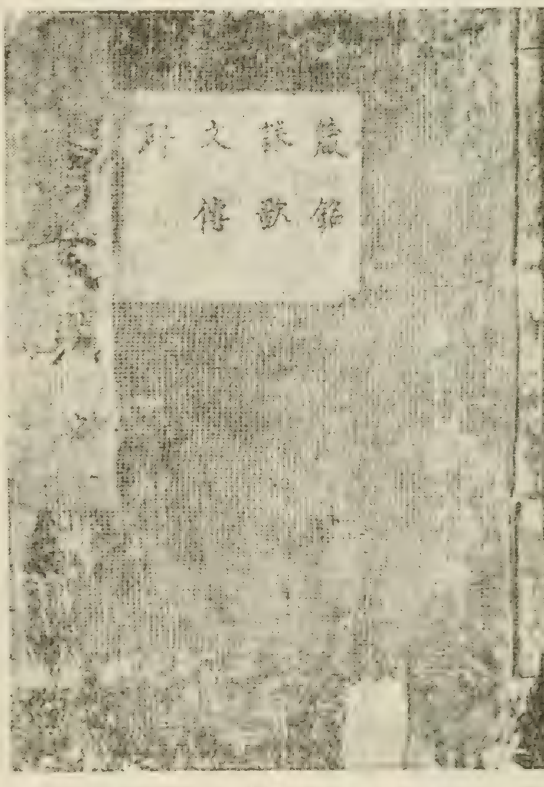


許六筆（伊東松宇氏藏）



許六像

命」と書きました事に就て物議を生じまして遂に「返店文」を削り去つたのであります。其他多少改訂を加へた部分もありまして、精密に申しますれば此書は初板以來數種を生じたのでありますが、大體「本朝」の名を冠し且つ「返店文」を含む初板のものと、書名を「風俗文選」と改め、且つ「返店文」を含まないものとの二種と見てよろしいのであります。本集には「風俗」の名のものを編入しまして、「返店文」だけは特に挿入して置きました。おもふに許六は編輯には其衡に當り自己の意見のやうに運んだのでありましたが、出板等の事は一切之を書肆に一任してしまつたのでありませう。本書を通讀いたしますに、漢字に濁點を付けるなど不自然な事をいたしてあります。改題や路通の文章削除なども主として書肆の策動であつたかも知れません。


「本朝文選」の表紙

許六は彦根藩士三百石の知行取りでありまして、森川氏、名は百仲字は羽官、五老井菊阿佛などの號があ

ります。元祿五年の秋江戸ではじめて芭蕉に相見したのでありますが、其前々から蕉門の諸俳書に親しんでゐたので、初對面とは申しながら芭蕉の琴線に觸れるものがあつたのであります。正德五年八月二十五日六十歲を以て歿しました。其編者は此書の外に數種ありまして皆一讀に値ひするものであります。就中『韻塞』は佳書でありますが、之を『芭蕉全集』に編入する豫定になつてをります。許六は繪をよくいたしまして、芭蕉は「畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす」と其別離詞に記してをります。對句の關係上少し誇張した文字になつたのでありますが、許六の畫の平凡でなかつた事が首肯されるのであります。

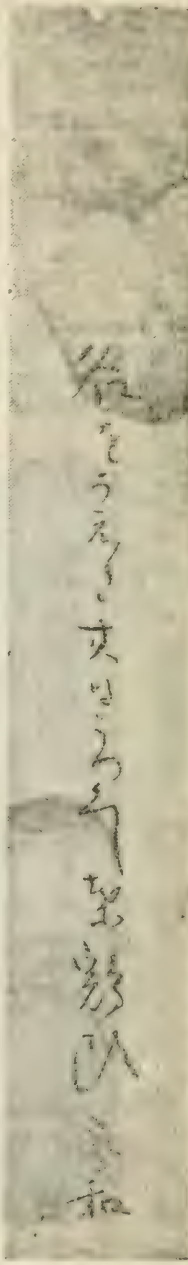
○

誹諧職人盡前集　半紙本　一冊

同　後集　同　一冊

甘露寺親長卿の作と傳へられます所の『七拾壹番歌合』といふ書があります。百四十二種類の人物を左右に番ひ、其人物に因んだ月と戀の歌を合はせたものであります。其人物と挿畫（土佐刑部大輔光信朝臣書）を其まゝ用ひ、之に因める古今の發句を配しましたものが『誹諧職人盡』前後の二集でありまして、寥和の編する所、前集は延享二年仲夏の上梓、後集は四年後の寛延二年の出版であります。俳書としては特種に屬するものでありますが、本集の内容を多趣ならしめる點に於て、又享保期の一俳書を採錄する點に於て敢て編入したのであります。

編者の寥和は大場氏仁左衞門森茂と稱して江戸の人であります。はじめは柳隣咫尺と號しまして『五色墨』の一人であります。『五色墨』と申しますのは、芭蕉歿後寛永正德享保と年を經るに隨ひまして、蕉門の高弟



寥和筆（伊藤松宇氏藏）

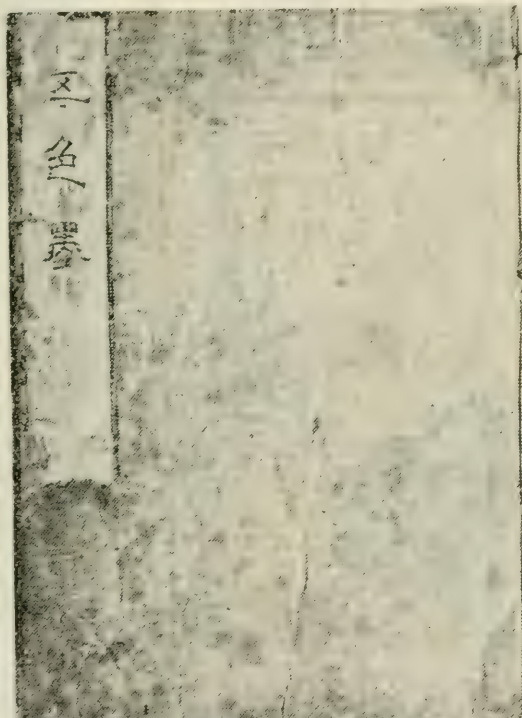
もだん〳〵減つてまゐり、俳諧の水準はます〳〵低下して行くのでありまして、中には謎やらしやれやらわからないものもあるのであります。此等の墮落を一洗して新風を鼓吹せんといたしましたのは、白兎園宗瑞樽巷郎蓮之（後に珪琳）其角の句と誤り傳へられる所の「梅が香や隣は荻生惣右衛門」の句の作者「柳隣咫尺絢堂素丸（後に馬光）鷗心亭長水（後に柳居）の五人でありまして、共に相謀つて一人を判者として除き、他の四人が一巻の連句を賦して其判者の批判を受ける事とし、交互に之を行ひまして五通りの批點ある五巻の



寥和（咫尺）像

連句を得たのであります。之に竟宴の一巻を加へて上梓いたしましたのが『五色墨』であります。即ち此人々は連句からして革新を試んとしたのであります。前句附の紀逸點や川柳點が人氣を呼び、三笠附が遂に賭博類似のものとして禁止命令を受ける始末でありまして、芭蕉が最も力を入れた連句が甚しい墮落をいたししたのであります。享保十六年に於て此連句革新に着眼しました『五色墨』の人々は俳諧史上閑却すべきでありません。其一人たる寥和の編著を採錄した微意亦玆にあるのであります。

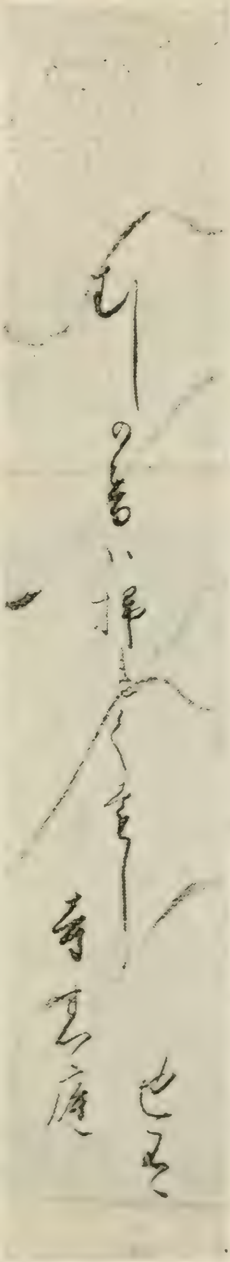
寥和は寶暦九年十月二十九日八十三の高齢を以て歿し、淺草誓願寺中林宗院に葬りました。咫尺齋規矩庵萬里亭茶酒隣などの別號があります其俳系は寥和を第一世として代々咫尺齋寥和と稱しまして、雪門の別働隊として武藏を中心に勢圏を張つてをります。只今は多分第九世であらうとぞんじます。



「五色墨」の表紙

うづら衣正篇	半紙本	三册
同　後篇	同	三册
同　續篇	同	三册
同　拾遺	同	三册

正篇は上下續の三册にて天明五年、後篇は上下鏡裏梅の三册にて年次不明、共に堀田六林の校訂によりて蔦屋重三郎の板であります。續篇上中下三册、拾遺上中下三册共に垂穗の編で、續編は文政六年拾遺は其後



也有筆（伊藤松宇氏藏）

（年次不明）の出板でありますが、後天保十二年に大阪の塩屋忠兵衞が全部をまとめて四册にして再刷したものが只今一般に普及してゐるものであります。本書は松宇文庫靑印本初刷に係る十二册の善本によつて校訂いたしましたが、拾遺の下卷にある五月雨の歌仙一卷はわざと省きました。

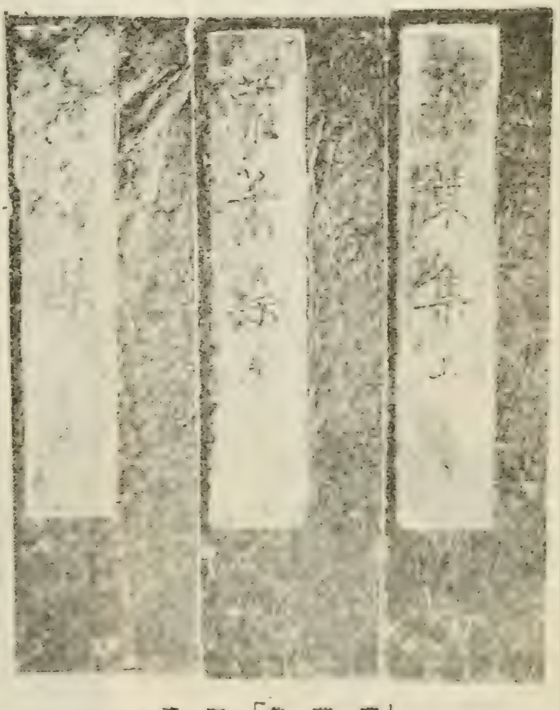
蜀山人が「借物の辨」の一文を讀んで激賞措かず、人を介して六林の藏せる所の『うづら衣』稿本を求め得て上梓したと申す一事で、此書の價値は定まつたのであります。狂歌の盛行しました蜀山人の時代に於て、輕妙奇警の也有の文章が喜ばれましたのに不思議はありません。之を蕉風俳文の標準よりして見まするときは或は俳文ではないかと考へらるゝ人もありませう。さりとて俳文ではないと斷ずるわけにもまゐりません。畢竟也有式俳文と申す外はないのであります。

作者の也有は名古屋藩の重臣でありまして、千五百石の知行取でありました。横井孫右衛門時般が公の氏名で、俳諧には也有（はじめ野有、祖父野双の一字を取つたのでありませう。野双は季吟門で名古屋俳諧の原始期に屬する人であります）狂歌には蟻丸、歌には暮水、詩には北並明（横井氏は伊豆北條氏の系統に屬するといふので「北」の字を冠したのださうであります）など〻稱し、半掃

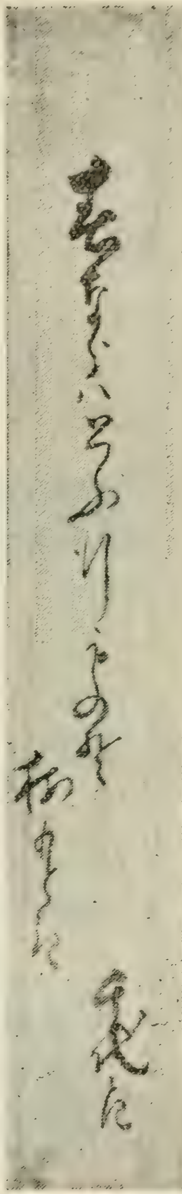


也有像

庵知雨亭蘿隱等の別號がありました。也有は多能の人でありまして、武家としての表藝たる射騎劍槍の四道は申すまでもなく書をよくし、亂舞や琵琶なども堂奥に達してをりました。漢學は小出侗齋に學びましたが俳諧の師は誰であつたか不明であります。或は美濃派の太田巴靜あたりと師友關係があつたのではないかとおもはれます。也有の發句は美濃派の色彩が濃厚であります。天明三年六月十六日歿しました。享年八十二であります。其知行所海部郡八開村藤瀬の西音寺に葬りました。詩集を『蘿隱篇』歌集を『蘿窓集』發句集を『蘿葉集』狂歌集を『行々子』と題していづれも也有の自撰であります。『蘿著集』は也有存生中の明和三年に上梓いたしました。のち明和七年家僕で且つ門人である所の石原文樵が蘿葉後集とし『鶉づか』三册を公刊いたしました。其附從「我洋篇」は也有と六林との漢和及和漢連句五卷であります。是亦也有の行くとして可ならざるなき才藻を見るべきものであります。が、也有の面目は『うづら衣』によつてこと〳〵く露呈するのであります。



「蘿葉集」題簽



千代尼筆（伊藤松宇氏蔵）

○

千代尼句集　半紙本　二冊

安永四年九月八日に七十四（又は七十五）で歿しました千代尼は、其晩年には所謂中興諸大家に接觸したのでありますが、加賀の松任に生れて希因や支考や乙由や盧元坊などから受けた感化で、支麥之徒の俳風に固まつてしまつて、諸大家からは何の影響をも受けなかつたのであります。私は曾て本居派のある歌人から千代尼の句を激賞したお話を仕向けられて、御挨拶に苦しんだ事があります。俳諧



千代尼像

は滑稽也と申す見地から、又は『古今集』等の俳諧歌の標準から申しますときは、貞門の句風が正系で、蕉門の人々は皆異端者なのであります。ある歌人が千代尼の句をお誉めになるのも怪しむに足らないのであります。

女流俳人として、元祿時代から千代尼の頃までのものを列擧いたしますれば、捨女美津女智月尼羽紅尼梢風尼秋色女園女古友尼諸九尼などがあります。其中から千代尼一人を選み出して其句集を採錄する事にいたしましたのは、畢竟時代の代表者として選んだのでありまして、女流と否とにかゝはりません。千代尼の句はある歌人の御推賞を蒙つた通り、最も機智巧思に富んでをりまして、美濃派伊勢派（美濃派は支考の俳系、伊勢派は麥林舍乙由の俳系。即ち支麥之徒と指斥された流派であります）の横行した享保時代を代表し得るからであります。其句の多くが人口に膾炙してをりまして、千代女の名は一般民衆に親しみがあるのであります。此點から見ますれば、千代尼は恰も女流俳人代表者の觀がないでもありません。其句集は寶暦十三年無外坊既白が編纂梓行した『千代尼句集』及び其歿後其續篇として出した『松の聲』があります。本集には『千代尼句集』だけを編入いたしました。

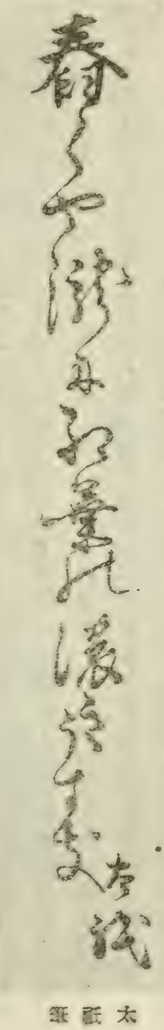
千代尼は松任の表具師福増屋六兵衛の娘でありまして、十八歳のとき同所の福田彌八に嫁しました。不幸夫に早く別れましたので、剃髪して素園と號し、專念俳道に入つたのであります。墓は同所の聖興寺に現存いたしてをります。

○

太祇句選　　半紙本　一冊

太祇の經歴はあまりよくわかつてをりませんが、江戸の人で「炭」氏であります。「炭」は慶紀逸の「慶」、謝蕪村の「謝」と同じ漢籍の一字氏でありませうが、何氏であるかはわかりません。俳諧ははじめ雲津水國（貴志沾洲門）に學んで水語と號しましたが、紀逸（二世湖十門又は白峰門）に從つて太祇と改めたのであります。不夜庵と稱したのは京の島原に住んでからであります。京へ移つたのは四十前後らしく、それまでの江戸の境涯はさつぱりわからないのであります。京の生活に就ては四時堂其諺が其隨筆『翁草』に記した所でほゞ想像が付きますから、左に引抄いたしませう。

太祇は俳諧も人も和らかなり。常に酩酊す。坊主にて、衣類に大なる紋を付る。我にも穴賢紋を付け給へと勸む。役者付き合が好きにて、誰々とも皆懇なり。中にも東武よりの馴染とて、嵐三汐宮之助を贔屓す。

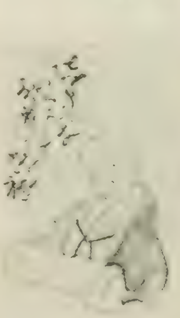


太祇筆

太祇は天明復興先驅の一人でありまして、俳諧史上逸すべからざるものであります。嘯山の『太祇句選』序文中「もし趣を得れば、上に置、下になし、あるは中にもつゞりて、一句を五句にも七句にも造りなし、唯意をうるをもてせ（事）とす」と記した句作態度や、几董がその『新雜談集』に記した所の「題ひとつを得て、趣を百に分ちて案ずる時は、百様の姿情を得るなり、さほど（「の」脱カ）勞煩をなさずしては、さうなき一句の

主にはなりがたし」といへる太祇の詞によつて、その意のある所を窺ひ知らるゝのであります。太祇は江戸座仕込みではありますが、其俗悪卑野の點は微塵もありません。實によく「アクヌケ」がしてをるのであります。畢竟連句から得た人事趣味的俳句の秀抜なるもので、他の追從摸倣を許さない太祇獨得の持味を示してをるのであります。

太祇は明和八年八月九日に六十三で歿しました。其一周忌に出したのが『太祇句選』であります。其詠草には佳句が多くて選抜に苦んだから、各題下のはじめの數句づゝを手にまかせて引抜いたのであると申します。其七年忌に門人で不夜庵二世となつた五雲が『太祇句選後篇』を出しました。外に三回忌のとき同じ五雲が『石の月』を編しまして、この中に太祇の句三十六句を收めたのでありますが、編入の二書で足りるとおもひまして除外いたしたのであります。



太祇像

○

春泥發句集　半紙本　二冊

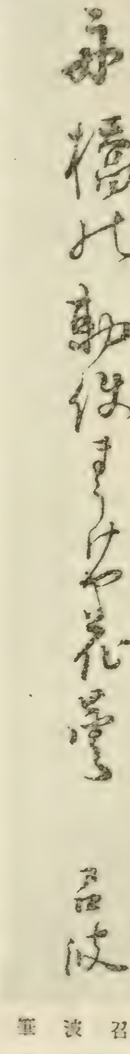
太祇と殆んど句兄弟の觀があります召波は黒柳氏、春泥舍と號して京の人であります。蕪村門人といふことてありますが、蕪村は門人以上に見てゐたやうであります。召波は安永六年十二月に歿しました。享年不明であります。『春泥發句集』は其歿後直に召波の子の維駒が編輯上梓したものでありまして、其蕪村の序文は味讀すべきものであります。(『蕪村文集』編入のものとは多少文字の相違があります。何れが正しいのか判斷いたしかねるのであります)蕪村の筆蹟を其まゝ板下にしたものでありますから、本集には寫眞版にし

て挿入いたして置きました。

「春泥發句集」は只今では稀覯の書に屬してをりまして、京都の藤井紫影博士と、大阪の水落京二氏との外には其所藏者を知りませんほどであります。本書校訂に際しまして博士は喜んで其秘藏書を貸與せられ又潁原退藏先生は原稿との綿密な引合はせにお當り下された事は、私の深く感謝する所であります。（在彦根の佐野伊藤の二氏を煩はした事に對し亦謝意を表したいとおもひます）

樗良發句集　半紙本　一册

安永二年の秋、京は油小路なる嵐

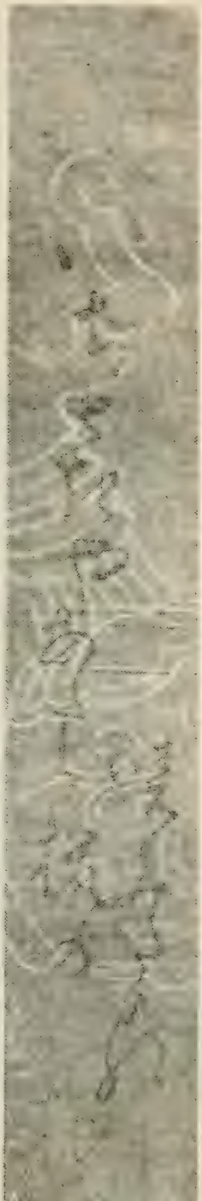


召波筆



樗良像

山の草扉を叩いた三人の俳士は、病臥の庵主を慰めんと、膝押しの俳諧をはじめ、遂に一夜にして四歌仙四卷を得たのでありました。「此ほとり」又「一夜四吟」がそれであります。三人の俳士は即ち樗良蕪村几董であります。樗良の姓氏は不明であります。志州鳥羽の生れで、伊勢の山田に住んでをりましたが、ある時は熊野の「あたしか」といふ所に假の庵を結び、ある時は京の木屋町に錫を挂けて一意俳道に進みまして、中興諸家ことに蕪村一派と深く交はつたのであります。

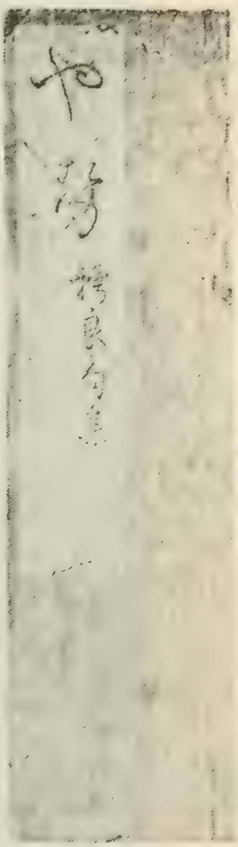


樗良筆（伊藤松宇氏藏）

其草庵を「無爲」と號しました通り、彼は恬澹無爲の生活を樂しんだのでありまして、發句なども其詠草を留めなかつたのであります。門人玄化が句集編むべき志があつて、懇請して漸く百句を書付けてもらつたのでありましたが、果さずして玄化も樗良も歿してしまひました。玄化の弟甫尺深く之を遺憾といたしまして門人達の記憶や反古の中から拾ひ集めて、編纂上梓いたしたのが即ち此『樗良發句集』であります。天明四年の出版であります。

樗良は安永九年十一月十六日に歿しました。享年五十二であります。『一夜四吟』の時には彼は四十六、蕪村は五十八、几董は三十三でありまして　庵主の嵐山は其年の九月二十四日歿しましたが、享年は不明であります。

樗良には『樗良三部集』(我庵集、石をあるじ、蕪つり)『樗良七部集』(時雨笛、菊の香、佛の座、花七日一日行脚、雪の聲、まだら雁)『樗良文集』などがあります。發句集の後篇は豫告だけで、出版にはならなかつたやうであります。又蘇室久安の編した『八瀬』と題する元治元年出版のものもあるさうでありますが、樗良の句風を見るには此發句集だけで事足りるとおもふのであります。



「八瀬」題簽

○

蕪村句集　半紙本　二冊

同文集　同　二冊

『蕪村句集』は蕪村の小祥忌追善の意で、高弟高井几董が編輯出版いたしましたもので、蕪村の佳什は殆んど之に盡きてをるのであります。明治に至りまして故角田竹冷先生の『蕪翁句集拾遺』故大野酒竹氏の『蕪村句集後篇』幷に故水落露石氏の『蕪村遺稿』三種の出版がありまして、蕪村の句の量は増したのであります。尚

近年諸家の研究で其追加を見たのでありますが、蕪村の發句としては、此一書で十分であります。

『蕪村文集』は湖東の忍雪と洛の其成とが蒐集編纂いたしましたもので、文化十三年の出版であります。自在にして趣致多き蕪村の文章は、其發句と共に芭蕉とは別な一新境地を拓いたものでありまして、確實に俳壇の一領域を占有し得るのであります。

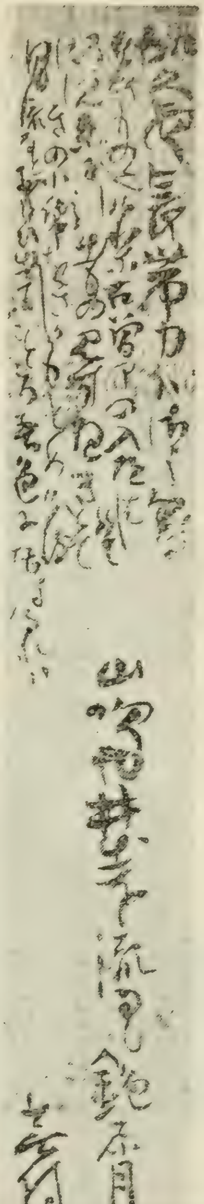
蕪村の編著は『玉藻集』（少々疑問もあるのですが通説に従ひませう）『芭蕉翁附合集』『寫經社集』『夜半樂』『桃李』『花鳥篇』『新花摘』などでありま



蕪村像

す。世に『蕪村七部集』と稱しますものは、前記『桃李』『花鳥篇』の外は、几董編のもの五部維駒のもの一部を含んでをるものでありまして、蕪村はむしろ關係が薄いのであります。然るに之に蕪村の名を冠しましたのは、其盛名を利用せんとする書肆のしわざであります。

　蕪村は攝津の天王寺村に生れ、谷口氏でありましたが、母方の緣故で丹後の與謝の海のほとりに少年時代を送りましたので、與謝氏を稱したのであります。俳諧は早野巴人門で、靑壯年時代を江戸關東奥州方面に



蕪村筆（伊藤松宇氏藏）

漂遊してをつたのであります。其居を京に定めて宗匠の門戸を張りましたのは明和のはじめ頃であつたらうと考へられます。此時夜半亭第二世となつたのであります。其繪畫は南北二宗の精英を咀嚼して、吐いて蕪村風の新機軸を出したのであります。『俳諧三十六歌僊』は義仲寺翁堂に揭げました蕉門三十六人の肖像に、其句を題したものでありまして、蕪村の創意なりと申す所の極端なる減筆法のよい標本であります。蕪村の俳諧は几董之を受け、其繪畫は吳春之を傳へたのであります。蕪村の芝居好きであつたのは著名の話であり

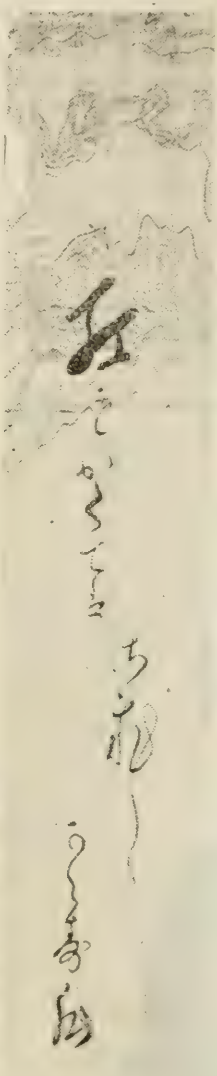
ましてゝ、其句にも芝居がゝりのものがあり、又役者に關した句も集中に散見いたします。

蕪村は天明三年十二月二十五日病んで歿しました。享年六十八であります。洛東一乘寺村の金福寺に葬りました。寺は曾て蕪村等が芭蕉庵を再興した所であります。几董の書きました終焉記を『から檜葉』と申しまして、其角の『枯尾花』に匹敵するものとの定説があるのであります。蕪村名は長庚字は春星、のち名を寅と改めました。落日庵紫狐庵三果堂碧雲洞などの號がありました。

○

蓼太句集初篇　半紙本　二冊

享保時代の雜俳的遊戲に倦んじ果てました人々は、申合せたやうに芭蕉を回顧しはじめたのであります。



蓼太筆（伊藤松宇氏藏）

芭蕉を義仲寺に葬つてから寶暦十一年に至る六十八年の間に、全國各地芭蕉の足跡を印したと否とにかゝは

らず、追慕のために築き立てた所の『翁塚』の數が九十六に上つたといふ事實は、雄辯に此回顧の切情を物語るものであります。其次に來るものは俳書の覆刻であります。稿本の公刊であります。作品の註釋であります。中興諸家で此等の仕事に先鞭を着けたものは實に雪中庵蓼太であります。蓼太の出しました『七部搜』は寶暦十一年でありますが、其師吏登に疑義を質したのは寛保二年であります。東北地方へ旅行しまして拾ひ集めた芭蕉の連句數卷を『奥の細道拾遺』と題し、莎青の名によつて上梓しましたのは延享元年であります。芭蕉の評言ある不玉の獨吟歌仙を『秋の夜』と題して出したのは同四年でありますす『續五色墨』の作者の一人となつたのは寶暦元年であります。『雪おろし』を著はして湖十等の『延享二十歌仙』を難じたのも同年であります。同七年には『芭蕉句解』を著はし、



蓼　太　像

同十三年には『俳諧無門關』を出したのであります。かくの如く蓼太は延享寶暦の頃から芭蕉の復興に努めたのでありまして、明和に入りましては既に蔚然たる大家でありました。其一代の編著は門人の名を以て出しましたものを加へますれば、やがて二百部に達するのであります。此等のうち眞に彼の技倆を見るべきものとしては『住吉千句』『七柏』『百羽がき』などであります。彼は連句に於て其長技を示してをるのであります。後の世評は毀譽區々でありまするが、トニカク雪門の基礎を定めて、其餘淸今に衰ろへず、俳壇の一勢力を爲してをるのは、彼蓼太の力であらねばなりません。其句集初篇は門人子規亭吐月時雨窓月集の校訂で明和六年に、其二篇は門人振々亭三醉膝室志寧文來庵雪萬の校訂で天明五年に上梓されました。歿後の寛政五年雪太郎三醉集輯四世雪中庵完來校訂山花人午心淨書で其三篇を出しましたが、蓼太の句風の一斑は初篇だけでわかるのでありますから、二三篇は割愛したのであります。

蓼太は木曾縣覺の人、大島氏、名は陽喬であります。空摩居士はなにがしの禪師から與へられましたものです。天明七年九月七日八十歳で歿しました。深川六間堀要津寺に葬りました。要津寺は彼が曾て芭蕉庵を造立した所であります。

○

井華集　半紙本　二冊

天明八年に出ました『井華集』は、几董自らの板下であります。几董が句集を出さうとして、幾たびか稿を改めて『晉明集』を編成しましたが、尙意に滿たないものがありまして、更に此『井華集』を編纂したのであり

ますから集中の句々佳ならざるはなしであります。几董のおもむき深い書風の板下に、彫師の腕の冴を見せて、丹表紙の高雅な仕立はいかにも几董の好みらしいものであります。此書只今は稀覯の部に屬してをりますが、幸に松宇文庫の善本をお借りして校訂を了したのであります。

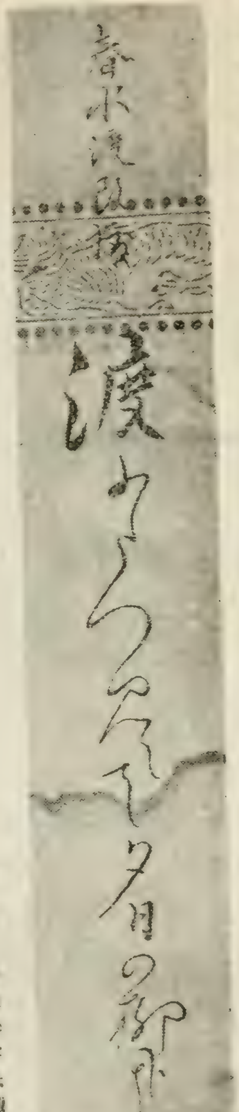
几董は高井氏、几圭の男で、はじめ春夜樓晉明と申しましたが、のち剃髪して詐善居士と名乗りました。蕪村の高弟であります。蕪村が机を立てゝ夜半亭第二世たるべく勸められましたとき「余が師の俳諧を前に繼る几圭か男几董、我門に在て永く先師の教を守らば勸に應ずべし」と答へて、遂に蕪村の希望の如くなつたと申す事であります。此逸話は蕪村が几圭に義理を立てたと考へますよりも、むしろ几董の才藻を深く愛したものと見るのが、正鵠を得た解釋だらうとおもはれます。後年几董が江戸に遊びました時、蓼太は勸めて夜半亭の第



几董像

三世を名乘らしたのも此因縁によるのであります。

几董は其角に私淑してをりまして、其筆蹟を學んだのであります。のみならず其角の『雜談集』に倣つて『新雜談集』を著はしましたが、其内容の編次順序までも强て『雜談集』に似せんとした嫌ひがあるのであります。其編著は此『新雜談集』の外『其雪影』『明烏』『續あけがらす』『一夜四吟』『續四歌仙』（以上の五部は『蕪村七部集』の中のもの）『もゝの雫』『から檜葉』『蕪村句集』『續一夜松』前集、同後集『手びき蔓』『菊の宿』『遊子行』



几董筆（伊藤松宇氏藏）

『非華集』などの多數に上ります。几董亦連句に長じてをりました。

几董は寛政元年十月二十三日門人なる池田の士川が在岡の別墅で頓に歿しました。（腦溢血カ）享年四十九歳であります。門人宮紫曉終焉記を綴つて『鐘筑波』を編しました。

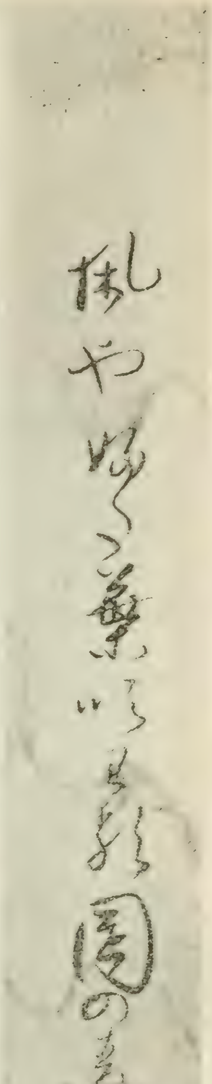
先年故遠藤蓼花氏は几董の草稿十餘册を得ました。不用意に筆を走らせた草按を塗抹改竄した跡はなつかしいものと見たのであります。蓼花氏は此草稿中から拔萃いたしまして『晉明集』『續晉明集』の二册を公刊

いたしました。

寛政の頃二條家で「花本」若くは「大宗匠」の稱號を俳人に與へる新例を開きました。其二年の九月十七日曉

○

青蘿發句集　半紙本　三冊

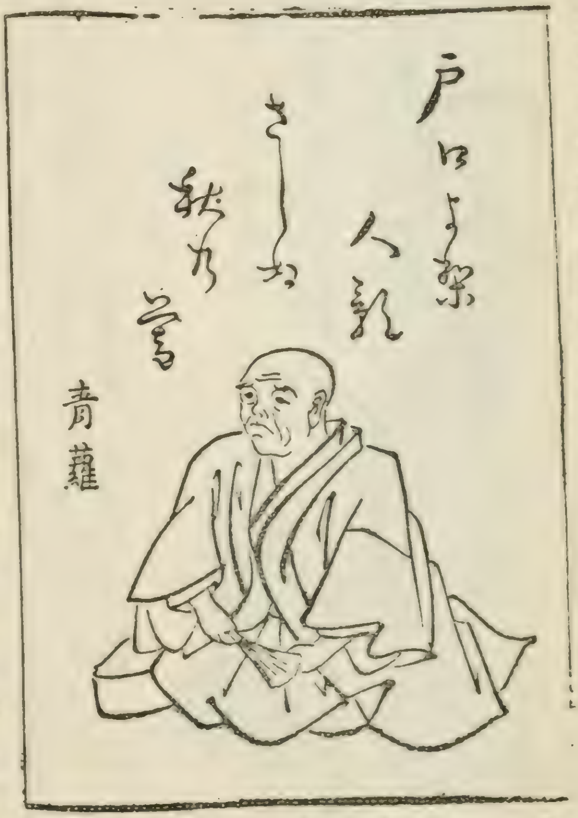


青蘿筆（伊藤松宇氏藏）

臺一門を銅駝御殿にお招きになりまして、左大臣殿の立句で百韻興行がありました。此時が恐らくは二條家が俳諧に干與されました最初でありませう。其翌月の十月十七日には闌更と青蘿が呼ばれましたが、此時は闌更が主であつたのでありませう。其翌年の三月十四日に青蘿は再び銅駝御殿に招かれまして百韻を興行いたしたのであります。『俳諧六家集』青蘿の略傳中に「賜中興宗匠之職服」と嘯山が記してをります所の職服と申すのは、侍烏帽子に布の素袍であつたと傳はつてをるのであります。當時の俳人は之を至大至高の榮譽とい

たしたのださうであります。天明期諸大家にして此二條家の俳諧興行をいたしたのは此三人だけであります。

青蘿は酒井侯（厩橋より姫路へ移封）の家臣で江戸定府の松岡門太夫の三男鍋五郎でありまして、同じく江戸定府の武澤喜太夫の養子となりましたが、六歳の時養父が歿したので家督を嗣ぎました。素行が修らないといふので二十歳の寶暦九年に國詰を命ぜられたのでありますが改悛の狀が見えませんで遂に同十二年に永のお暇となりまして姫路を立退いたのであります。そこで剃髪して山李坊令茶と名乗りまして、東西行脚の後明和四年に播州加古川に住みまして專ら俳諧に遊び、栗之本と號しました。東洲和尚に參禪して青蘿の號を與へられましたのは、此頃の事でありませう。安永のはじめ頃伊勢の樗良がおとづれ來て連句七卷を殘しました。（樗良の七廻忌に「骨書」の名で三木李雨によつて上梓されました）天明七年青蘿は京に遊びました。「續四歌



青蘿像

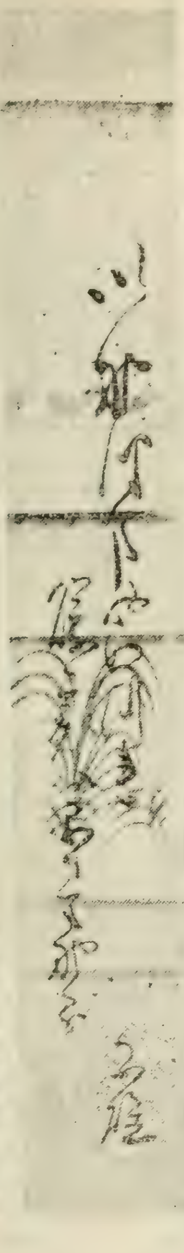
仙』及『みやこ六歌仙』によつて其風懐が窺はれるのであります。此時は曉臺臥央闌更などが京に居り合はせたので、几董月溪などの手練者を加へて俳諧は大にはづんだのであります。

寛政三年五月項部に頭瘡と申すものが出來、その腫物のために遂に六月十七日に五十二歳を以て歿したのであります。栗之本を嗣ぎました淡路の玉屑（肥後の生れで播州米田村神宮寺住僧となりましたがのち淡路に住みました）が追善集を編して『水の月』と題しました。『靑蘿發句集』も亦同じく玉屑の編輯でありまして、寛政九年の出版であります。

○

白雄句集　半紙本　一冊

關屋の巣兆の板下といふ異色を持つた句集一册、それは春秋庵白雄のものでありまして、其三回忌追福の



白雄筆（伊藤松宇氏藏）

意味で、門人川村碩布が鈴木道彦建部巣兆等と謀つて編纂上梓したものであります。

白雄は信州上田の城主松平伊賀守の小姓（家臣伊藤某の息で鬼藏と稱した由）でありましたが、如何なる仔細がありましたのかは存じませんが、十三歳のとき家出したのだとも申しまして、其俳人しら尾坊昨烏として現はれまするまでの徑路はよくわかつてゐないのであります白井烏酔門で、桜露庵三世鴫立庵五世など名乘りましたが、のち春秋庵白雄として江戸に關東正風の旗幟を飜したのであります。其句風が示す通りおとなしい寧ろ高踏的な白雄は、中興諸家と角逐するなどと申す野心はなかつたのでありますが、其門下には道彦長翠碩布巣兆冥々葛三天姥保吉雨塘星布女の如き有力なものが集つたのを見ますれば、彼の德望を認めねばなりません。彼の遺稿に『俳諧寂栞』三册があります。俳諧一般に關する心得書でありまして、所謂「傳書」の一種であります。其『春秋稿』は初篇より第五篇までは白雄の編、以下第九篇までは



白雄像

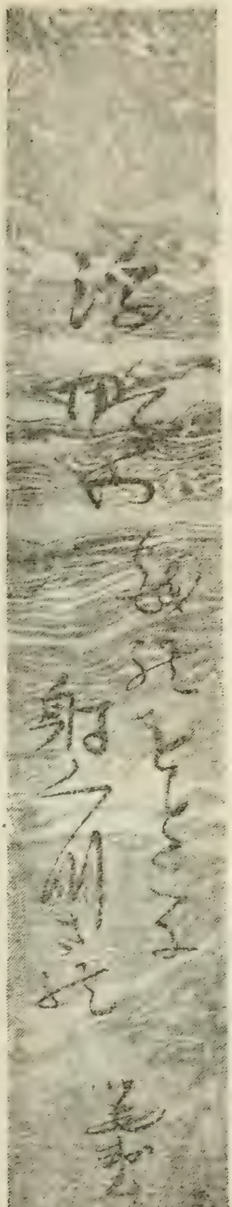
門下の編でありまして、春秋庵社中の隨筆的記錄であります。

白雄は寬政三年九月十三日に歿しました。享年五十七であります。其墓碑は品川海晏寺の門前の叢中に淋しく立つてをりましたが、大正十二年震災後どうなりましたか。其後尋ねないので存否を知りませんが、是非保存して置きたいものであります。

○

曉臺句集　半紙本　二冊

文化六年出版されました「曉臺句集」は門人櫻井臥央の編輯したものであります。寬政六年亭々坊車蓋が編



曉臺筆（伊藤松宇氏藏）

集した「發句三傑集」（曉臺闌更蓼太）中曉臺の句の間違つてをるものが百七十餘ありますので、臥央は士朗と相談して此句集を出したのであります。

曉臺は久村平兵衛と申して名古屋の人であります。蓮阿坊白尼（名古屋の人武藤氏、巴雀の男）の門でありますが、伊勢派の舊染を洗ひ去つて中興新風を鼓つたのであります。寛政二年の九月には二條家に召されて百韻を興行し、貞恕以來約九十年中絶してをつた「花本」の稱號を許されたのであります。其俳席の略圖が『古事類苑』文學部十四俳諧下に出てをります。攝家の御館へ地下のものが參上して俳諧をいたします事は、其當時にありましては無上の光榮であつたのであります

　曉臺は名古屋大池町一丁目に在つて甚しく荒廢した野崎氏の別業を買ひ求めまして、大に修理を加へて「龍門」と名づけたのであります。其歿後轉々して只今は鈴木莊兵衛氏の有に歸したと聞いてをります。服部梅庵の「龍門園記」といふものがありまして、其文中「園中其東面而徹者曰暮雨。曉臺所居。憑欄駛眼。平疇十里。郡落碁置。八琴猿投諸山。翠黛接空。宜雪。宜月。宜朝



曉臺像

霞。而尤宜於暮雨。屏障貼金。蕪村畫石。款曰寫似暮雨兄」などゝあります。曉臺が「暮雨巷」と稱した次第はこれによつてわかるのであります。

曉臺は度々京に遊びまして蕪村一派とも親しく交つたのであります。寛政三年十月には京の白山通二條の北に一庵を設けまして、之にも「龍門」と命名したのであります。日頃咽喉の病がありましたが、此年の十一月十日あたりに痼疾激しく起り、食道も腫れ塞がるほどの惱みでありまして、遂に翌寛政四年の一月二十日に六十一歳を以て歿しました。京極の南大雲寺に葬りました。門人桃睡の書いた終焉記に追悼の連句發句を取合はせて編輯した一書が卽ち『落梅花』であります。『曉臺七部集』は單行の七種を後人が取合はせたものでありまして、彼の技倆を見るべきものであります。『延寶廿歌仙』(『桃青門人二十歌仙』の事) 覆刻及び『去來抄』の梓行の功は沒すべからざるものでありますが、前のは其底本が不完全であり、後のは「故實篇」を省いてありますので、曉臺の不注意として識者の指斥を甘受せねばならないのであります。

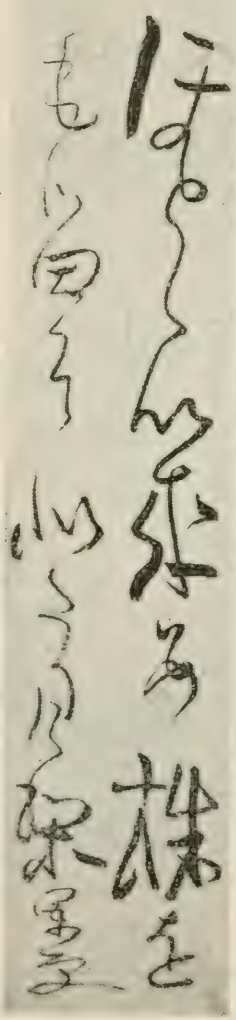
○

半化坊發句集　小本　二冊

曉臺と同じやうに『冬の日』復興を唱道し、曉臺と同じやうに二條家の俳諧に召され、曉臺に次いで「花本」となりました闌更は、加州金澤の人で、高桑氏であります。斎内に從つて半化坊と號しました。晩年には京の東山なる双林寺々畔に芭蕉堂を建てゝ芭蕉を祀り、其傍らに小庵を結びました。卽ち南無庵であります。芭蕉堂が只今も無事に保存されてをりますのは、木村素石氏のおかげであると申します。明治の初年此堂の

將さに取拂はれんとしたときに木村氏（當時三井物產重役、明治三十六年一月二十一日六十七にて歿す）が土地建物を買求めて破壞の手から脫したのであります。のち芭蕉堂第七世安達南德氏の時、木村氏から讓受けて社中共有永代退轉せざる方法を立てたのださうであります。

闌更は寶暦十三年『花故事』を上梓したのをはじめとして、『落葉考』『俳諧世說』『芭蕉翁消息集』『三册子』等を刊行いたしまして、芭蕉の紹介に努めたのであります。其『初懷紙』百韻の前半に對する芭蕉の註釋と稱す



闌更筆（伊藤松宇氏藏）

るものを、どこから手に入れたのであるかは明らかにいたしませんが、それを『花故事』に編入いたしました。それに誤謬があつたといふので、再び『落葉考』に改訂收錄いたしましたが、出自等を明記いたしませんから、文獻價値は幾分減殺されるのでありますが、彼が忠實な仕事振りに對しては敬意をさゝげたいとおもふのであります。

彼の句は『新五子稿』『三傑集』『芭蕉堂三代集』に編入されてをりますが、單行本としては『半化坊發句集』だけであります。彼は句集出版など念頭に無かつたのでありましたが、門人達がかれこれ心配の末、蟠水が自らも集め、又同門車蓋の集めたものをも一所にして、編纂上梓したのが此書でありまして、時は天明七年彼の存生中でありました。

彼は寛政十一年五月三日享年七十三で歿しました。東山高臺寺に葬りました。

○

俳懺悔　　半紙本　二冊

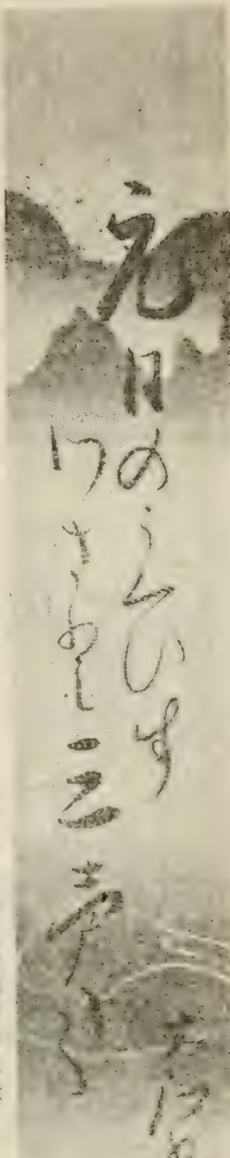
大阪の飛脚問屋島屋の主人で、家業のため江戸をはじめ各地に旅行をし、又十三四の頃から淡々などの所



闌更（半化坊）像

へ出入した大江丸は、健康で筆まめでそして長壽でありました。其隨筆的句錄の「俳懺悔」及「俳諧袋」の二書は彼の句風や好尙を知ると共に、彼の交遊した人々の片鱗をも知り得るもので、共に一讀すべきものであります。前者は寬政二年、後者は享保元年に大江丸が自ら編し自ら書し自ら出版したものであります。本集には他の人々との釣衡上前者だけを收錄いたしたのであります。

大江丸は若い時代に江戸の活々坊舊室の門に入りまして、芥室舊國（又舊州）と稱しましたが句作に身を入



大江丸筆（伊藤松宇氏藏）

れる事もなかつたのであります。家業上多方面の人々と交際するので、俳諧も茶や謠などと同樣な藝能の一つ位に心得てをつたのでありませう。多才多藝な彼は格別力を盡さずして當時の大家仲間にはいつたのであります。それは無論家業の關係も與つて大に力あるものでありませう。ある年松島に遊んで終夜月光の下に呻吟して一句を成し得なかつたのであります。曉に及んで蓼太の「朝きりやあとより戀の千松島」の句の玄妙に感じ、長い間の自慢の鼻を折られたので、歸途直に蓼太の門にはいつたのであります。『俳懺悔』の書名も

こゝに基くのであります。

彼は文化二年三月十八日に歿したのでありますが、其享年に就て異説があります。それは彼自身が此書卷末に記した寛政二年六十九から推算しますれば、歿時は八十四になるのでありますが、『俳諧袋』の享和元年を八十二と自記してをるのから勘定すれば八十六になるのであります。即ち寛政二年の六十九から享保元年の八十二までの間に二年の相違を生じましたので、何れも彼自身の記した所であります年寄達のうちには七十九の年を七難九厄として忌んで、七十八から八十へと飛ばして算へる人があります。大江丸の二年違ひもかういふ類ではないでせうかとおもはれるのであります。

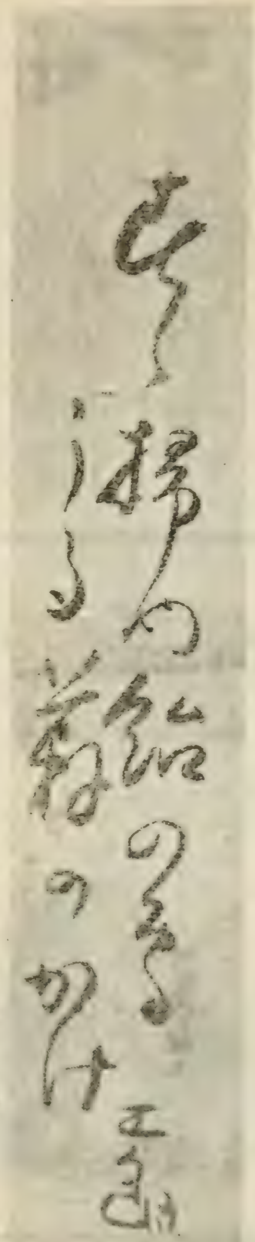
○



大江丸（舊圖）像

枇杷園句集　　半紙本　二冊

產科で名高い專庵先生は卽ち枇杷園士朗であります。名古屋の人井上正春と申しまして曉臺門の達足であります。平家琵琶を好んだので枇杷園と號し、庭前に赤松の老樹があつたので朱樹叟とも稱しました。彼は筆まめ手まめであつたと見へまして、小冊子の編著が澤山あるのであります。人によつては賣名的出版と考へられるかも知れませんほどであります。其うち文化七年に出した『枇杷園隨筆』は芭蕉一派に關する文獻を



士朗筆（伊藤松宇氏藏）

蒐めてありまして、相當の資料價値を持つて居ります。『鶴芝』は享和元年の春士朗が門人松兄卓池等を引連れて、富士の鶴芝を見ると稱して旅途に上り、江戸へ出て道彥成美等と交遊を重ね、信州上田松本飯田を經て名古屋へ歸つたときの紀行であります。『士朗五七集』と申すのは、天明二年の『留主懷紙』から、文化九年の『文化五歌仙』まで、其折々に出した所の小出版が三十五部ありまして、それを七部づゝ組合はせて『士朗

七部集」として初編を文化二年に、あとはつぎ〳〵に出したのでありましたが、のちに之を一とまとめに、五冊ものとして出したのであります。

彼の句集は門人卓池椿堂蕉雨宇洋松兄等の共輯で、文化元年に出版されてをります。外に門人梅間が編して文化八年に上梓した「枇杷園類題發句集」小本二冊がありますが、卓池等のは士朗の生前出版でありますから、之を編入いたしたのであります。

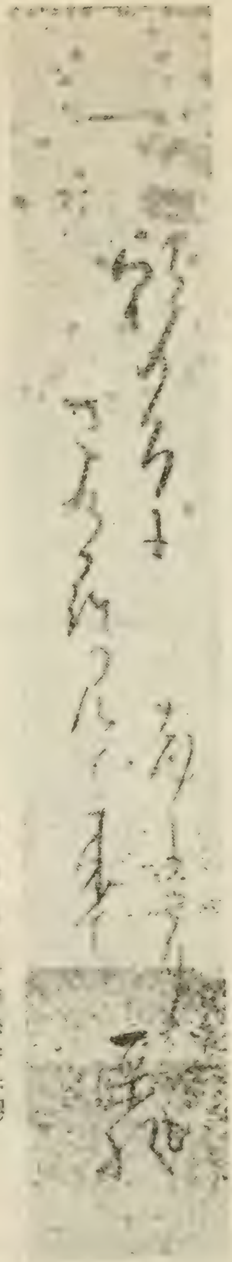
士朗は國學を宣長に繪を范古に學びまして、至つて多能であつたやうであります。文化九年五月十六日に歿しました。享年七十一であります。名古屋市中區新榮町四丁目朝日山照運寺（曹洞宗）に葬りました。別に中區古渡町龍泉寺（眞言宗）に遺愛碑があります。近年名古屋の人々が朱樹會を組織いたしまして、士朗等の事蹟顯揚に努められました。只今は元祿時代まで溯りまして、名古屋俳人に關する展覽會を年々一回開催する事となつたさうであります。



士朗像

○ 曾波可理　　半紙本一冊

「そばかり」は巣兆の句集でありまして、前半春夏の部は巣兆が自ら撰み自ら書いたものでありますが、後半の秋冬は門人加茂國村が師の歿後に撰み且つ書いたので、そのまゝ板にいたしたものであります。



巣兆筆（俳書松宇氏藏）

巣兆は武藏千住の人、建部氏、名は英親字は族父と申しまして、書家山本龍齋先生の子であります。故あつて關屋の里に住んでをりましたから、世間では關屋の巣兆と申しました。白雄門で秋香庵小蓑庵黄雀園寒葉齋菜翁などの諸號があります。繪畫に巧みでありまして、其落欵に押捺する印章は父龍齋が使ひ古した所の「松甫」といふのを、少し斜めに押すので有名であります。それほど無邪氣なのでありますから、巣兆の俳畫は實に高雅なものでありまして、ある人などは天下一品だとさへ激賞してをると聞きました。龜田鵬齋谷

文晁などと親交がありました。俳壇では成美道彦と共に江戸の三人と目せられたのでありますが、人品の高いのでは巣兆が傑出してをるのであります。

　巣兆は文化十一年十一月十七日歿しまして、淺草北寺町の日輪寺に葬りましたが、其享年は不明であります。

○

成美家集　半紙本　二冊

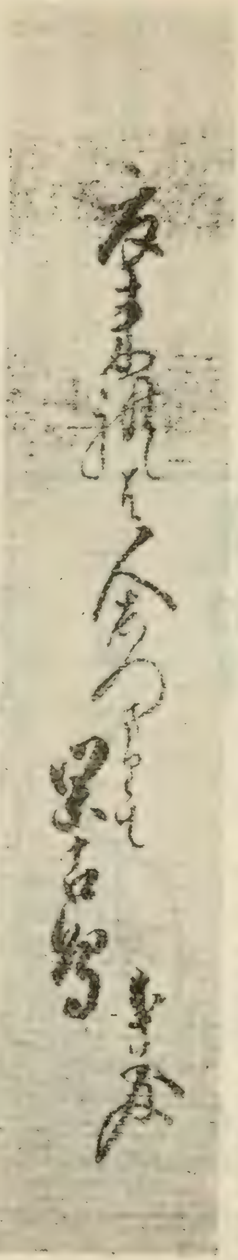
淺草藏前の井筒屋八郎右衛門といふ立派な札差の御主人でありながら、枯淡な俳人生涯に甘んじて、一蓑一笠の行脚坊主をも平等に待遇したのは成美であります。成美は夏目氏で、代々八郎右衛門と稱したのであります。成美の父は淺草天王町の伊藤源兵衛の三男三次郎で、夏目家へ養子に來たのであります。成美一家は健康に惠まれませんで、成美の兄に當る四人の男兒は皆夭死しましたので、成美も生れると直に伊藤家に預けられ、泉太郎と稱して三歳まで育てられたのであります。十七歳家督を嗣ぎましたが、其翌年痛風を煩つて右足不隨となつたのであります。其三十四のとき弟庄兵衛に家を讓つて、隅田川の對岸多田藥師の傍らに小庵を結びましたが、其翌天明三年七月二十三日に庄兵衛が歿しましたので、彼は再び家業



巣兆像

を見なければならないのでありました。かくして彼は半俗半雅の日を送つて、文化十三年十一月十九日に六十八歲で歿しました。下谷下車町蓮華寺に葬りました。等覺院成美日濟居士は其法號でありまして、乙二が「成美はひたと題目にかたぶき」と申されました通り彼の宗旨は日蓮宗でありました。

成美の俳諧は誰に學んだといふ所謂師傳關係はないのであります。彼の父は隨時庵一雨（のち宗成）と號して俳諧をいたしましたから、成美も見やう見まねで覺え込んだとおもはれるのであります。元來藏前の旦那



成美筆（伊藤松宇氏藏）

樣方は俳諧を遊藝の一つで、知つてをらねば何かの場合に恥をかくから習つておく位の程度に、輕く見てをつたと信ずべき理由があります。祇空の指導による四時觀の時代から、又札差なる業務が泰平になればなるほど利益が多くなつて行く立場にある關係から、俳諧は遊戲化して行くのであります。其環境雰圍氣の中に育ちながら、成美の俳諧が藏前臭氣を帶びないのは、彼が所謂師傳關係を有せず、獨歩研鑽を進めて行つたからであらうとおもはれます。成美は輕い筆致の俳文をよくしました。當時盛行した「配り本」などの序跋は

殆んど成美の筆ならざるはなしと申してもよろしいほどであります。其文集を『円山藁』と題して文政四年久蔵包徳同昌包壽の共編上梓する所であります。『隨齋諧話』は彼の隨筆でありまして、彼の識見の一片がほのめいてをるのであります。『芭蕉七部集註解』は未定稿で出版にならなかつたやうであります。外に『淺草ほうご』『鼠の道行』などの編著が出版されてをります。其句集に二三種あるやうでありますが、本集に編入したものは其男諫圃子强の校合、門人久蔵（番頭の一人にて俳諧の門人なる由、豐島氏。のちに由誓と改めました）の補定で、成美の歿する年に上梓したのであります。『はら〳〵傘』と題した自筆の句集稿本があるさうであります。

成美は名を包嘉字を萬齡と申し、父の隨時庵に倣つて隨齋と號しましたが、脚疾にかゝつてからは不隨齋と稱し、家を弟に讓つて多田森へ隱



成美像

時したときは贅亭と呼びました。大必山人四山道人などの別號もあります。此時代の俳人で江戸に住むものは勿論、他國のものでも一たび杖を江戸に入れたもので、成美の世話を受けないものはないのであります。札差の旦那樣でありながら腰が低いのでありますから、當時彼に對しての嘖々たる好評はすばらしいものでありまして、强ち、富豪に阿ねるの聲ばかりでは無いのであります。

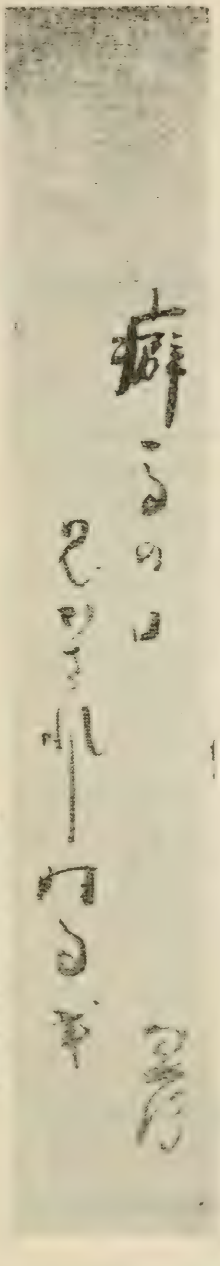
塵境に身をしたがへて靜なるいとまなし。たゞ目くるれば俗事おのづからしりぞきて、しばらく寸心をやしなふ。

人に遠し宵よりこもる蝸の山

の一句はよく成美の面目を傳ふるものとおもふのであります。

○

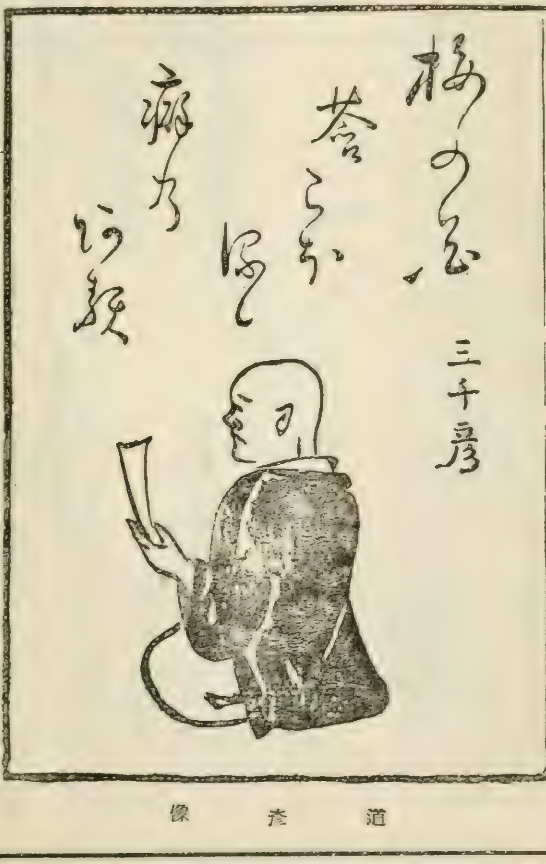
蔦本集　　半紙本　二冊



道彥筆（伊藤松宇氏藏）

春秋庵白雄八大弟子の随一人として、江戸日本橋石町に高く門戸を張りました道彦は、仙臺の人鈴木氏でありまして、町醫を開業してをりました。いつの時代でもお醫者さんは、職業的に世間が廣く且つ世間から尊敬されるのでありますから、道彦が時代の偏見として雄視してをりましたのも、彼が俳諧技倆だけとは考へられないのであります。まして成美といふ力強い推挽者があるのであります。いはゞ道彦は幸運兒であります。

『道彦七部集』といふものがありますが、其うちの『蔦の限』は士朗一派の連句二卷を道彦が批評したもので、彼の識見を知るべきものであります。(『蔦の限』は『士朗五七集』にも編入してあります)又『畑芹』附錄といふものは乙二道彦の共著らしいのでありますが、彼等の作句信條を示したものと解すべきであります。道彦は發句より連句が優さつてをつたではないかとも考へらるゝのであります。發句はまだ脫俗



道彦像

し切らぬ所がありますのを遺憾といたします。其句集なる『蔦本集』は彼の自撰でありまして、出版年月未詳でありますが、鶴齋の序文があるのと、集中の發句の前書に文化三年うるま人云々とあるのによりまして、文化四年から九年までの間と推定いたします。『續蔦本集』半紙本二册は門人氷狐の撰で、天保九年初冬の出版でありますが、道彥の發句の一斑は『蔦本集』だけで足りるとおもひまして除外いたしました。

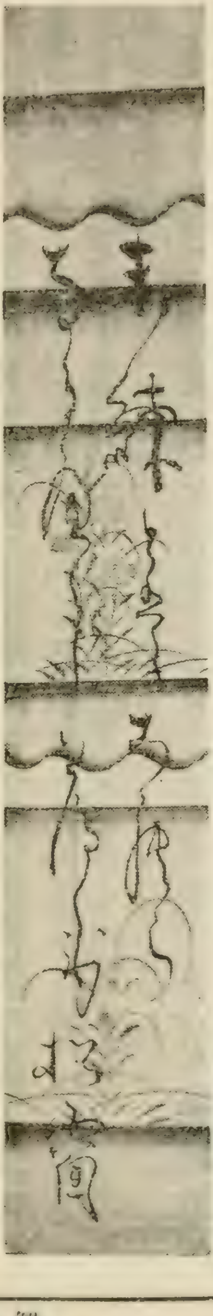
彼は十時庵と號し、又金令舍とも稱しました。「一鈴」の字を割つたのであります。文政元年九月六日歿しました。歿年六十三であります。淺草山之宿の善敎院へ葬りましたが、同院は境內整理の爲め其墓地を巣鴨庚申塚へ引移したよしであります。さすれば道彥の墓は無緣として取拂はれたかも知れないのであります。

◯

松窓乙二發句集

小本二册

奥州白石千手院の權大僧都亘理清雄といふ名前だけ聞いたのでは、甚だいかめしく感ずるのでありますが



乙二筆（伊藤松宇氏藏）

仙臺の乙二と申せば誰でもすぐにあの酒脱な俳人かとうなづくのであります。彼は修驗者卽ち山伏でありまして、六尺ぢかい大男であつたと申しますから、兜巾篠懸に身を固め、金剛杖を突立てた姿は、如何なる惡鬼羅刹も忽ち降服する威嚴を有したのでありませう。其句集中にも修驗道に關したものが散見いたします。

交通も通信も甚だ不便な時代に、其最も甚しい所の松前へ渡り函館へ移つて年を重ねたと申す事は、單なる俳諧宣傳ばかりとも考へられませんが、とにかく大なる勇氣がなければ決行出來ない事であります。四年ばかりの假寐の庵に「斧の柄」と名づけました乙二の情懷察するにあまりあります。其餘流只今も函館地方に殘りまして、斧柄社は其地の一勢力であるやうに聞いてをります。



乙　二　像

豐島由誓の編した『乙二七部集』二册は天保六年の上梓でありますが、乙二の識見を窺ふべきもの『耳さら

へ』『蕪村發句解』『手爾波草』其情懷に浸るべきもの(『斧の柄』『箱根紀行』)など一讀すべきものがあります。『松窓乙二發句集』は門人一具及古翠の共編でありますが、出版年次の不明なのは遺憾であります。其續編が『乙二七部集』のうちに編入されてをりますが、本集には收錄いたしませんでした。

文政六年七月九日歿しました。享年六十九であります。陣場山に葬りました。一女きよ女は仙臺侯の侍醫松井玄圃に嫁しましたが、書も俳句も出來て濟々と號してをりました。天保十二年六十二歲で歿したのであります。

○

一茶發句集　半紙本　二冊

おらが春　同　一冊

どこまでも野性を脫却し得ず、泣くも笑ふも無遠慮であつた點に於て、現代人の心のうちに何等かのつながりを持つ所の一茶は、近來いろ〳〵の人にさま〴〵な論評をせられ、殊に大正十五年は其百年忌に相當するといふので、遺稿出版作品展覽幷に法會などの催がありまして、一茶は一層民衆に親しいものとなつたのであります。が、それは即ち贔屓の引倒しでありまして、一茶の眞相を誤らなければよいと心配するのはひとり私だけではないのであります。一茶は野性其まゝではありません。研いて磨いての上に殘つた野性があるのでありまして、人をして鼻を掩はしめるやうな惡臭ではなく、ある快感を唆る程度の臭氣であります。此臭氣が一茶自身の匂ひであるかも知れません。こゝが一茶研究の要點である事を忘れてはなりません。

信濃の奥の奥なる柏原に生れました彼は幼少から不幸でありました。小林彌五兵衞の長子に生れました彼は、三歳にして母に別れ、十歳繼母に弟の仙六が生れたので、遂に十四のとき江戸へ出たのであります。江戸でどういふ所にどういふ生活をしてをつたのかは判然いたさないのでありますが、俳諧を葛飾派の二六庵竹阿(寛政二年三月十三日歿)に學んだ事は疑の無い所であります。寛政三年二十八歳のとき一寸郷里に歸りましたが、すぐまた出懸けてしまつて、其翌年は關西方面の旅行に上つたのであります。漂遊數年寛政七年(此



一茶筆

時三十三歳)の正月は讃岐にあり、其秋は河内方面に在りまして、一茶坊亞堂と號してをつたことを『寛政紀行』『旅拾遺』の二書(共に一茶の遺稿を信濃教育會に於て出版したものであります)によつて明瞭になりました。享和元年父彌五兵衞が病むと聞きまして、下總あたり行脚中の一茶は直に駈付けたのであります。(看護中の日記があります。以て彼と彼の繼母及異母弟との關係を窺知すべきであります)父は遂に歿しました。「仲よくくらせ」と遺訓の發句も無視されて、兄弟反目の度はますく\高まりました。此頃は江戸を中心とし

て附近諸國の行脚をしてをつたのであります。文化五年に漸く財産分配の協定が出來まして、數年來のあらそひも漸く鎭りました。文化九年頃からは郷里を主に、江戸方面を從に行脚しました。十一年故郷で妻を持ちました。五十二歳の花聟とは類の無いものであります。文政三年輕い中風にかゝりましたが、幸に治りまして蘇生坊と稱しました。六年妻きく女が歿しました。きく女を娶つてから四人の子供がありましたが、皆夭死いたしました。一茶は妻が無智で首の据らぬ前に脊負うて、脊負殺したのだと記してをりますが、幼兒が呼吸器系統の疾患を持つてゐたためであらうと申します。八年やを女を迎へまして後妻といたしました。文政十年一茶が俳諧寺と命名した彼の住宅が燒けまして、土藏だけ殘つたので、それに手入をして住んでをりましたが、十一月十九日に六十五で歿しました。小丸山の上の先塋の次に葬りました。當時姙娠してゐたやを女は翌年になつて一女を生みました。やた女と名づけました。これが只今も古屋敷を守られます所の一茶の血統を繼いだ一粒種であつたのであります。宗旨は代々淨土眞宗で、柏原の妙專寺檀家でありました。一茶の勞苦を味はずして、たゞその野性のみを謳歌するの當を得ざる事は申すまでもないのであります。

彼の句集に文政上梓のものと嘉永のものとの二種あります。文政の『一茶發句集』は嘉永のに比して編入句數は少ないのでありますが、門人達が分擔しての編纂校定でありまして、信據を置かれるものと認めまして採錄いたしました。『おらが春』は文政二年一ケ年の日記らしく見えますやうに、同年の句文をはじめ、前前からの句や文やを工合よく排列編次したものでありまして、稿本が某所にありましたのを、嘉永年代に白井一之が之を模刻出版いたしました。其時册尾に一之西馬逸淵等の脇起連句や其他の發句連句を附載したのでありますが、再刷の時題簽を『一茶翁文集』と改め、且つ附載のものを全部削り去つたのであります。近年

一茶眞蹟の稿本といふのをコロタイプにして出してをります。此板本のものと多少文字の相違がありますが何れを正しいとも斷定いたしかねるのであります。蓋し一茶が淨寫しながら改訂を加へたかも知れないのでありまして、此事實を認めても、どちらが改訂を加へない前のものであるかは到底わからないのであります。

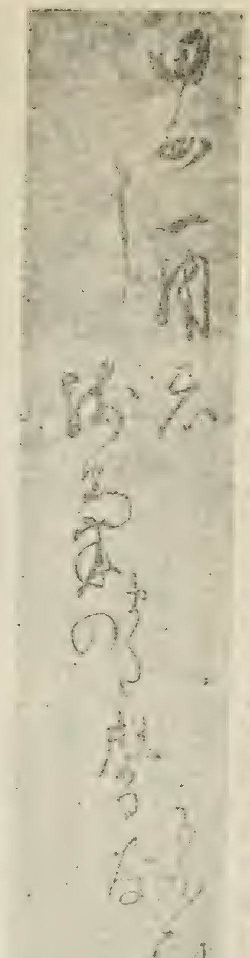
○

屠龍之技　大本一冊

昭和二年は抱一上人の百年忌に當りますので、例によつて記念展覽などがありまして、岩崎の靜嘉堂文庫に深く藏せらるゝ所の『輕擧觀句藻』二十巻が出陳されたのであります。是は申すまでもなく抱一上人自筆の句稿でありまして、上人の生活記錄とも申すべきものであるのであります。此中から拔抄して板にしたものが即ち『屠龍之技』でありますが、其板下は上人の筆蹟であり、拔抄は上人自ら行はれたと申すので、此『屠龍之技』亦俳壇に珍重せらるゝものであります。此板本に二種ある事を今回はじめて氣付いたのであります。本集編入に就ては例の松宇文庫青印本によつたのでありますが「うめの立枝」の條で「歸去來」と題して「歸なむ居酒」の句から「古田高麗　茶盌を」と前書ある「幾時雨」の句へとつゞいてをるのでありますが、帝國圖書館本では、此二句の間に「春興」と題した「うぐひすの口」の句から前書に「至日」とある「冬至梅」の句に至る百三十八句十四枚半を增してをるのであります。竹冷文庫本は表紙を其一が書いた寫本でありまして、其筆蹟は板下はよく似てをるのを見ますれば、抱一門流の人の筆寫であらうとおもはれるのでありますが、同じく此百三十八句を含んでをりますト上に、「補遺」として五十三句を追記してあるのであります。此松宇文庫本に

無い所の百三十八句を點檢いたしますに、文化十十一の二ヶ年に亘るものである事がわかりましたのでありま す。鵬齋の序の九年、蜀山人の跋の十年に書かれたのから考へまして、初めは文化十年頃所謂自費出版で出したのであつたが、同十二年の頃二ヶ年分を追加改版したものであらうと推定いたしました。依て松宇文庫青印本を基礎とし、之に竹冷文庫寫本を參照して、内容を圖書館本と同一ならしめましたのであります。

上人は幕府の親藩姫路の酒井家の御次男樣に生れまして忠因と名乘りました。柔劍弓馬の武藝から書

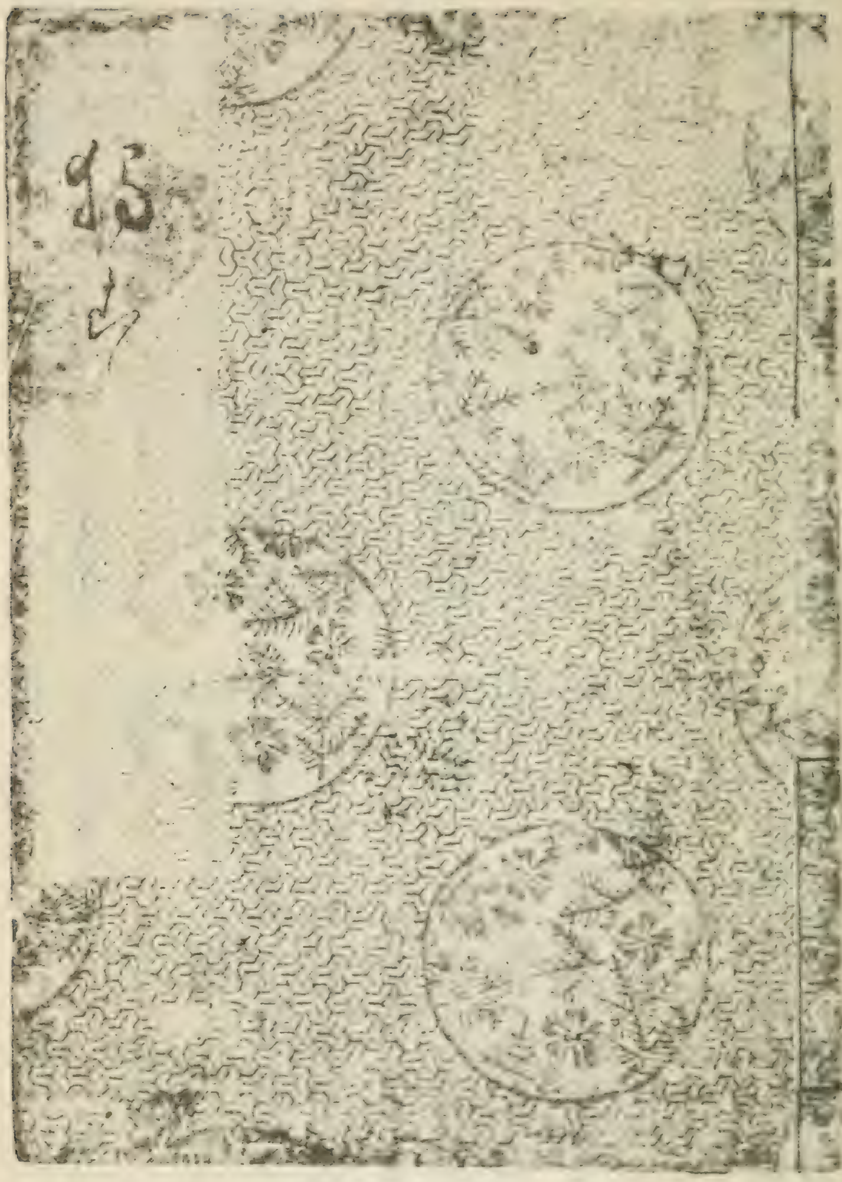


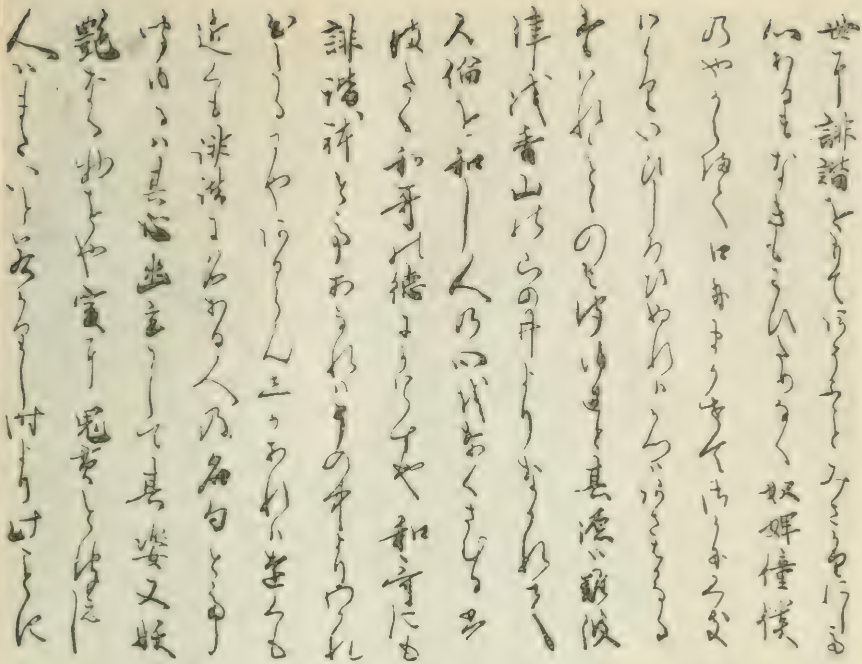
抱一筆（[illegible]藏）

習字など、當時士分の少年として學ぶべき事柄はひと通り修めたのであります。安永九年二十歳のとき大手上屋敷のお長屋に引移りました。武家一人前として、又臣下の一人としての生活が始まつたのであります。併しそれは表面の擬でありまして、内實は矢張り御次男樣らしい吞氣な、責任の無い其日を送つたのでありますから、所謂部屋住みの閑散な身でありますから、文學や遊藝に親む機會は甚だ多いのであります。まして時は田沼時代であります。兄なる雅樂頭忠以は茶や繪や狂歌を好まれまして、蜀山人などは常に伺候して

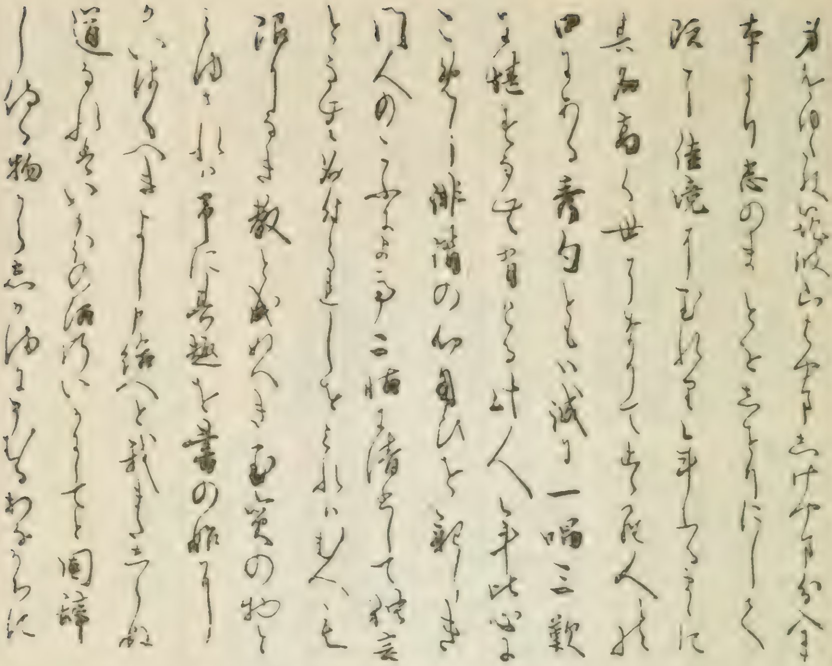
なつたのであります。かういふ環境にあつて多能多藝な上人の素質は、忽ち其光りを現はし來つたのでありまして、金春流の太鼓を打ち、楊弓には江戸一の名を博し、刀劍鑑賞は本阿彌をして後へに瞠若たらしむるのでありました。俳諧は馬場存義系でありまして、初名は濤花のち杜陵と改め、更に晉通で屠龍と號したのであります。繪畫は歌川豐春に浮世繪を、宋紫石に明畫を學びました。聰明にして風雅な貴公子として世評が高かつたのでありませう。養子の懇望がつもり／＼て四十有餘家に上りましたが、皆謝絶してしまひまして、寛政九年(三十七歳)病身を申立てゝ西本願寺文如上人によつて薙髮得度したのであります。等覺院少僧都文詮暉眞は得度後の名で、文如上人の準連枝といふ特別待遇を受けたのであります。宗家(酒井家)からは千石五十人扶持の手當を受けて京住居をする筈でありまして、行裝美々しく京へ上つたのでありましたが矢張病氣を申立てゝ歸東を許されまして、其年江戸へ歸つて千束村に隱栖したのであります。如何なる次第か宗家の手當も中止されて、畫料によつて乏しい生計を立てたので、鴻池の望みによつて描き上げた八橋の六曲屏風の潤筆を、其杜若の花一つを一歩として計算したといふ逸話もあります。晩年には根岸へ移りまして鶯村畫所と稱したのであります。雨華庵と申したのも此頃でありませう。吉原へも出入し、遊女のお弟子があつたり、又其一人と同棲したり、實に自由な氣の向くまゝの生活を樂しんだのであります。「青すだれ洒落れてござつた坊樣よ」とは岡野知十氏が曾て上人を評した一句であります。しやれてござつたのか或はすねてをられたのか、「風流」といふ詞が強い力で、常軌超脱者を保護する時代には、上人の如きは最も隨喜渇仰されたのであらう事を信ずるのであります。一部の『屠龍之技』はよく此上人の心境を語るものであります

(をはり)


95



世に誹諧をもてあそぶとみさかりにして、心あるもなきもわひだめなく、奴婢僮僕のやからまで、口にまかせてさがにくきばかりいひしろひぬれば、かつはあさはかなるたはれごとのみ聞ゆれど、其源は難波津淺香山の山の井よりながれて、人倫を和し人の心をなぐさむるは、またく和歌の德にかはらずや。和哥にも誹諧躰とてあなれば、その中よりわかれ出たるにやあらん。しかあれば遠くも近くも、誹諧に名ある人の名句とて聞ゆるは、其心幽玄にして其姿又妖艶なる物をや。爰に鬼貫と聞えし人は、まだいと若かりし時よ



り、此とに身をゆだね、筑波山はやましげ山分入にも、本より志のまゝとをしをりにして、既に佳境に至れり。年ふるまゝに其名高く世になりて、こゝら人の口にある秀句どもは、誠に一唱三歎に堪ずなむ有ける。此人年比心にこめし誹諧の心用ひを、親しき門人のこふによって、二帖に淸書して獨言となむ名付られしをみれば、むべも限りなき教と成ぬべき玉寶の物とみゆ。されば予に其趣を、書の始にかいつくべきよし申給へど、我まだしらぬ道なれば、いかほの沼のいかにしてと固辭し侍る物から、しかまにそむるあながちに聞

やうな物しぬへくまいまでまくなくて筆にまうを侍る物ならし
以敬齋長伯誌

え物し給へれば、せむすべなくて筆にまかせ侍る物ならし。

以敬齋長伯誌

「俳諧の道は、あさきに似て深く、やすきに似てつたはりがたし。初心の時は淺きよりふかきに入、至りて後は深きよりあさきに出とか聞し。むかしは人の心すなをにして、初中後を經しかど、今はその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。これをおもふに、俳諧は只當座の化口にして、根もなきいひ捨草なりと、かろき事におもへるなるべし。是もまた和歌の一躰とか聞時は、かりにも淺〱敷おもふべき道にはあらぬを、ほいなき事にぞ侍る。

「大かたの人は口にまかせていひつゞくるを、この道の達者なりと心得て、更に我に益ある事をしらず。俳諧は只まことにもとづく中立なりと、心をよせて修行すべし。たとへば、わかき人の親にいたくいさめられん時、腹だゝしきこゝろの出る事あらば、親といふ前句に子として腹立る躰を付句に取なをして見侍るべし。全くのりなじみはあらじ。又打杖のよはきをかなしめる心ならば、よくなじむべし。さあれば親にむかひて蜂吹は、神慮にもにくませ給ふ所なりとおそれて、孝心にもとつき、あるは人につかふる身の、慰むかたにいざなはれて用をうしろになす心をも、付句に取なをしてそれを改め、或は他人のまじはりだに、四海みな兄弟なりと心のあゆみをつけ、常のわざを俳諧になぞらへ、はいかいを又つねのむつまし事に案じよらば、自然と句毎にのりなじみも出來ぬべし。

「ことやうの句を作りて、それを新しとおもふ人は、此道を深く尋ね見されば、遠きさかひに入がたくや侍らん。詞は古きを用ひ、心は新しきを用ゆとこそ聞しか。

「一座におもしろき付句の一二句もつゞき

たらん時、それよりも猶まさりたる句をせんと、大かたの人は一入ちからを入て案じ侍れど、いかにもかろ〴〵とやり句する人まれ也。只よき句を〳〵と獨り〳〵が案じいらば、しかも能句の出る事かたくや侍らん。さら〳〵とやりながしたる跡は、更に能句も出來ぬべし。程よき遣句は未練の人の及ぶ所にはあらず。

「發句は月雪花、木々艸々、其外生る物のたぐひ、すべて何にてもあれ、ひとつ〳〵に物いはせたらんに、かくまでも我事をいひをよぼしぬる物かなと、深くよろこびなん心詞にあらざれば、まことすくなくや侍らん。

「付句はのりなじみを專一にすべし。宗祇法師の雜談にも、上手の付句は他人の中よきがごとし、下手のは、親類の中あしきがごとしと、いひたまひけるとぞ。

「句を作るに、すがた・詞をのみ工みにすれば、まことすくなし。只心を深く入て、姿・ことばにかゝはらぬこそ、このましけれ。古歌にもあれ、古事にもあれ、ひたすら案じ探りて句を作ると、をのづから心にうかぶ所を用ゆるとの、さかひならんか。

「句は師匠のかたちによく似せて仕習ふべし。修し得たらん後は、そのかたちをはなれて、天性ひとり〳〵が得たる風儀をこそ用ひまほしけれ。

「ある人、扨も俳諧はならぬ物にてぬ、といひけるほどに、其ならぬ物と知たまふはひとかどの事にて侍る。予は天性數奇て此道にこゝろを盡す事、をよそ四十年にあまりて、行にも座するにも忘るゝ事なく、臥時はまくらのほとりに硯を置て、寢ざめだに外なければ、道のなりがたしといふ所を聊わきまふに似たり。平生深く心をもいれざる人の、ならぬ物としり顔にいひたまふこそきこえね。

「俳諧をする人、あらましにもいひこなせば、はや得たり顔に止まるあり、無下にほいなくぞ侍る。或時は句もなりやすきやうにおぼえ、又或時はひたすらなりがたくもなり侍らん事、幾かはりも有ぬべし。深く入なん人は、其程〳〵に功つもりて、猶むづかしき事を覺侍らん。修行の道に限りあらざれば、至りて止まる奥もあらじ。只臨終の夕までの修行と知べし。たとへば宗祇法師は連歌の達人にて、余にならべる人もなしとはいへど、祇公ひとりの上には、今五とせゐ給はゞ十五年の功、十とせながらへたまはゞ十年の功も有つべき事にこそ。

「新しく作りたる句は、やがてふるくなるべし。只とこしなへに古くもならず、又あたらしくもならぬをこそ、能句とはいひ侍るべくや。作意にのみかゝはりてい

ふ句とまことを、深く案じ入て、一句のすがた・詞にかゝはらぬとの差別なるべし。

「歳旦の題に、只の春の句も聞え、また元日やとさへいへば、元日の句なりとのみおもひて、心のよそ〳〵しきもおほし。花の句は花のみをいひ、月の句は月のみいひて、しかも意味深きをよしとす。うはの空に案ずる人は、句に心にちからなきにまかせて、色〳〵の事品を取まじへ、おもひよせて、をのづから工みに作るなるべし。

「いつはりを除きて、まことをのみいひのべんとちからを入て案じ侍るは、いつはりいふにはまさりたれど、これも又まことを作りたる細工の句にて侍り。此道を修し得たらん人の、虚實のふたつに力を入ずしていひ出す所、句毎にいつはりなきをこそ、をのづからのまこととはいひ侍るべけれ。是なん常の心に偽りなく、世のあはれをも、深くおもひ入たる故なるべし。

「いにしへの俳諧は、來る幾日の興行なりと前廣に定置て、詠草に刻付して、再ゝ返までもまはしたれば、句數もいでき侍り。當日に至りて、或は朝飯後よりはじまりたるは、夜半をも越て終り、又晝過てあつまりぬるは、大かた夜もしら〳〵と明わたる程にみちぬ。今時の俳諧は再返をだにまはす事まれなりければ、座の上の句數はおほく侍れど、滿る所はいにしへの席の三分が一にもたらじ。古人は各沈思して、尤句毎に宗匠の心をうかゞひ、宗匠は又故なき句を取事なし。あるは前句に不便をくはへ、あるはのりなじみを専一に案じ侍りければ、をのづから時のうつりたるなるべし。

「作意をいひ立たる句は、心なき人の耳にもおもしろしとやおぼえ侍らん。又おもしろきは句のやまひなりとぞ。修し得たる人の幽玄の句は、修行なき人の耳にはおぼろげにもかよふ事かたかるべし。しかもその詞やすければ、いはゞ誰もいふべき所なりとやおもひ侍らん。

「聞えぬといふ句に幽玄と不首尾の差別侍り。まことを辨へぬ人のさま〳〵に句を作りて、是にても未聞え過ておもしろからじとひたぬきに詞をぬきて後には何の事とも聞えぬ句になり侍れど、作者は初一念の趣向をこゝろに忘れ侍らねば、我のみ獨り聞ゆるにまかせて、いひひろむるもかた腹いたし。又幽玄の句はつたなき心をもて、其意味のおもしろきところを聞得ぬなるべし。

「祈禱の俳諧興行して、いひつらぬる所、句にいつはりおほきは、いかでか神慮にかなふべき。句毎にまことを辨へさる人の努〳〵おもひ立べき事にあらず、もたい

なきわざにぞ侍る。御影のかゝりたる座に着ては、各其日の神主なりと心を改め、又御影のかゝらざる席には、心のうちに勧請申て、在がごとくつゝしむ人は、いつはりなき句も出來ぬべしや。

「追善懐舊の俳諧も、まことをはこばざる時は、これも佛の道にそむき侍らん。

「花の句は一座の宗匠、または功者にゆづりて、努々このむべからず。貴人・小人などには花を所望しつべき品も侍り。夫ともに宗匠の言葉をまたずして、外より會釋すべき事にあらず。むかしは月・雪・郭公の類ひは功者の外遠慮しつれど、今時は其わかちをも辨へず、いつしか此道のかたちをとり失ひ侍るもおほし。それより仕習ひたる作者は、斟酌あるべき句のすべをもしらず、なげかしき事にぞ侍る。

「發句・第三などしたる作者は、花の句をせざる物のやうにおぼえたるもおかしくこそ。

「脇句は文字にてとめ、第三は、に留・にて留・らん留・もなし・はなしなどゝもとめ侍るとばかりは誰も皆しる事にて侍れど、何故かくは定置たるぞといふ然る所以をしる人まれなり。又脇句のてには留、第三の文字留、なれや留などゝいふ事もあり來り侍る。

「表の十三句めを月の座、裏にては十一句め月、十三句めを花の座と定侍れど、又月花共に取あげてする時は、何句めにてもくるしからず。さあれば月花の座とは、何ゆへ定置たるぞといふ事をさへ辨へしらぬ人も侍る。

「花は櫻花といふさへ正花にならねば、ましてこと木はいふにも及ばず。しからば何をさして花とはいひけんやと、深く尋ね入べき事にこそ。

「鎌倉の右大將、西行上人に弓馬のみちをたづね給ひし時、馬は大江の千里が、月みればの歌のすがたにて乘たまへと答られければ、ほど拍子を心得たまひて、即座に馬の乘かたをさとり給ひけるとぞ。俳諧にも句のほど拍子は、上手のうへのしわざなるべし。

「我句をおもしろく作り侍らんより、きくははるかにいたりがたしと、古人の詞にも見え侍り。ひたすら修行し侍らん道なるべし。

「發句に動くといふ事侍り。たとへば、つばなの句をすみれの句にしていへば、又それにもなり、杜若の句をあやめの句にして見ればなるをこそ、嫌ふ事にて侍れ。余はなぞらへて考ふべし。

「心すなをに生れつきたる人も、俳諧にてはたゞうそのみいひならひ、かたち實躰なるも、おなじく異形を盡せる人おほ

し。俳諧といふ物はいかなる事を益とはなせるぞと、深く尋ね入なん事もなく、口に出るにまかせていひなぐさむわざなりと、只かろ〴〵敷おもひとるは、聊この道を辨へざる故にて侍る。心すなをなる人、俳諧にていふごとくにうそつきて世に交るべきや。又風俗こうたうにしなして、世に交る人の衣服に興さむる程の模様をそめ、或はまた羽織袴の上に甲か立烏帽子なんどを着して人中へ出よといはば出べきや、能々考しるべし。それ俳諧は和歌のはしなれば、心を種として万づのことの葉となり、目に見えぬ鬼神をも哀とおもはせ、猛きもののふをもなぐさむる道とこそ聞しか。俳諧を修してまことの道を行侍らば、なさけしらぬ人すら情をしり、あるは不孝不忠の人も不の字をとをさくべし。只世に交はりて、さしむく所を前句に立て、ひとつ〳〵付句に取なをして考見るべし。前句と付句と肌もあはず、のりなじみのなき時は、是すなをの道にあらじと、たしなみ改むべき事にこそ。

「人とわれと常いふ詞を句に作れば、悉く俳諧なりと辨へしらざる人は、付句の味ひをもしる事かたかるべし。

「古風もむかしは當風ならし。今はた當風とおぼしき句も、又いつしか古風となり侍らん。古風といふも當風といふも、ともに作り求めたる句のすがたによりて、新古の名はあれど、修し得てまことの道を行けん人の句は、幾とせ經るとも新古の差別はあらじ。只この道に深く心を入なん人の、まれなるこそなげかしけれ。

「俳諧のわる道に入たる人の、會に連りて前句に心をもはこばず、兼てこしらへ置たる句をもてつけはめたるは、古き鞘に刀を入るゝがごとし。又兼てといふにも品あり。心ざし深かりし人の万づに心わたりて、より〳〵おもひをける趣向のうちより、求めずして前句にすがりて出たらんを、程よく句に作りてつけなし侍るは、かの道にふける人の歌袋とやらんいふにもひとしかるべし。

「秀逸の發句といへるは、打きこゆる所何とらへておもしろき事も見えず、只詞すなをにたけ高くして、其意味、口をして述る事かたきをこそいひ侍れ。是は常に詞を巧みよせたる句をのみ面白き事に覺て、もてあそぶ人の耳には聊かよふべからず。世に周ねく人のゆるしたる作者の秀逸と、名にたてる發句を聞て、その底の聞えざる輩は、我心にうたがひをおこして、修し入て見侍らば、自然とおもしろき意味をもしる事あらん。その分上に至らば、自句に秀逸をもまうけぬべし。小細工にのみ心止まりて、我とほめして

ん作者は、終に人の句の秀逸を聞得て、たのしむべきさかひにもいらず。もとより身を終ふるまで、一句のぬしともなりなん事かたくや侍らん。

「此道を修し得たらん人に、いつ時代の句を作りてきかせよといはゞ、それ／＼に句のすがたをいひあらはす事やすかるべし。ましてとやうの句は猶更いひやすき事に侍らん。すべて細工にわたる所、むづかしき事にはあらず。只まことを深くおもひ入て、句のすがたは其時のうまれ次第と、あきらめたらん人の句は、すがたかならず一様ならず。獨吟の俳諧などは、所／＼自然と心かはりて、見るに飽事あらじ。未練の人に、此所をしてきかせよといはゞ、まねても及びがたくや侍らん。一筋にこりかたまりたる作者の獨吟の句は、みづから飽出侍りて、つゐにわが心にもかなふべからず。いはんや人の聞所をや。作り求たる句はいひやすく、もとめざる句はいひがたからん。その所に心をつけ侍りて、他念なく修行すべし。いひやすき事を是として、いひ及ぼしがたきを非なりと、かたくなに覺たる人には、ほどこしぬべき言葉はあらじ。

「鶯はうぐひす、蛙はかはづと聞ゆるこそをのれ／＼が歌なるべけれ。うぐひすに蛙の聲なく、かはづにうぐひすの囀りなきこそまことには侍れ。

「俳諧の修行もなくて、心のみ高く止りたる作者は、たとへばたかどのゝ上にのぼりて、四方山をながめつくしたる人の、心ゆう／＼と打晴たりといへるを聞て、我もともに風景を見てんとて、居ながら其所に至らん事をこのめるがどし。ひとつ／＼階をのぼらずして、いかでか高き所に至るべき。此理りをよくわきまへ侍りて、未練の人はひたすら修行すべき事にぞ侍る。

「未熟にしてわれこそ熟したれとおもへる人は、おろかにぞ侍る。修し得たる覺もなくて、上手になるべき道理はあらじと、我とわが心をさがしてあやまりをしるべし。修行なき人の器用一ぺんにて、及ぶべき事にもあらず。又智惠才覺をもて至るべき道にもあらじ。

「俳諧の修行といへるは、ひたすら句にまことの味ひを稽古して、平生人に交るをも、すぐにそのまことを用ひて、いつはりなき事を、むねと心得たらんをこそいふべけれ。

「我は俳諧を仕習ひてより、いくとせを重ねたりと指をかぞへて、それをのみ修行なりとおもへる人は、心得違ひも侍らん。まことの道にこゝろをよせずして、句のうへをのみいひもてあそびたる作者は、た

とひいくとせをふるとも、身の益とはならずや侍らん。

「俳諧に地・自句・やり句・格外といふ事侍り。地といへるは、さのみおもしろき事にもかゝはらずして、前句によくつけてとをるをいふべし。自句とは、みづからの手くせをもて、おもしろく作りなしたるなるべし。遣句は、其あたり能句のつづきたらん上か、又はむづかしき前句にて付がたき所を、かろ／＼とつけのけ侍りて、程よくやりたるをやいひ侍らん。格外といふは、打きこゆる所更に前句に付よるべき句とも見えねど、底にてよく付侍りて、しかも感深きをいふなるべし。

「百韻の内、地三十三・遣句三十三・自句十七・格外十七・と古人のいひけるは、あながち句の数を其ごくにしわけよといふにはあらず。百韻皆つけかた一様なる時は、見るに飽なんといへる心なるべし。

「連俳のわかれは、遠く見る時はとをく、近く見る時は脊を合するがごとし。たとへば東西にわかれ行人の、一歩しける時は袖をならべ、裾をふまへぬれど、東へ行ん西へ行んと心ざしのちがひたる所より、わかるゝといふ名のあるがごとし。俳言のつよからん句は、一歩よりわかれ行たる人の遠きさかひを隔るたぐひならし。又言葉やすらかにして、打きこゆる所は連歌めきたる句も、心ざす所連歌のいきかたならざるは全く俳諧なるべし。これなん脊合せたる人の東西へ行にひとしかるべしや。あるは又、連歌にいふまじき詞つゞきをもて、俳諧なりといへるたぐひも有ぬべき事にぞ侍る。とかく其一句をとらへて論ぜずんば、又一槩にもいひがたき事なるべし。

「俳諧は連歌を元として連歌を忘るべしと古人の詞にも見え侍りしか。

「つよき句・よはき句の事。大かたの人は俳言がちにいひて、句のかたちいかめしく作り、或は文字を聲にていふたぐひをのみ、つよき句なりと覺侍る。心得ちがひなるべき歟。たとへば、がさつなる人の喧嘩しける時、其さまさながら勇士に似たれど、底意に死べきまこともなく、只人の恐るべき様を作りたれば、死ぬべき場にをよびて逃る事すみやかなるがごとし。又まことを深くおもひ入て、すがた・詞柔和に仕立たるを、よはき句なりといへるも又心得違ひなるべしや。たとへば物とがめしける人に行あひて、我にあやまりなき事にも、詞をつくしてやはらかにいひける時は、よはかりしやうに見え侍れど、やむ事を得ざるになりては、一足もさらずして死をきはむるがごとし。ま

とすくなかりしをよはき句といひ、まとを深くおもひ入なんをつよき句なりとはいふなるべしや。その虚實をも辨へずして、句のすがた・詞にのみかゝはりて、強弱の沙汰しけん人は未熟にして、ひとへにあやまりなん事にや侍らん。

「いにしへの俳諧師は、百日の稽古より一日の座功といひて、只會に出なん事を大切に思ひ侍りし。賓、山類・水邊・居所の躰用、或は句のいき方・つけかた・さし合等、輪廻の沙汰、其外の詮議までくはしく侍れば、一日の座功も大切の事にて侍し。

「まとを深くおもひ入て言のべたるも、詞よろしからざるはほいなくぞ侍る。心と詞とよく應じたらん句をこそ、このむ所には侍らめ。

「詞すなをに仕立たらん句を專一なりと、一槩におもふべからず。俳言たくましからんにこそ、はいかいの趣はたち侍るべけれ。

「宗長法師の雜談に、付句は只前句にはなれて、しかもはなれぬやうに有べし。たとへば蓮の莖を引切て見るべし。はなれやすくして、しかもその糸絶る事なし。其ごとくに打越のがれ、前句の心を捨るは、蓮のくきを切にとならず。扨緣語をひかへ、寄合をわきばさめるは、糸のつゞきけるがごとしと。俳諧にも又ともに信ずべき事にこそ。

「いにしへはいかいの書をあむといへば、國〳〵より發句を書付て撰む人のかたへをくり侍り。其内長點かけたる句を小短冊に書留をきてくはへ侍りしを、今は初心の作者に至るまで、此句を入べしとて、推して書付をくり侍りき。又興行の俳諧に、一順をまはし侍るも、いにしへは付句を二句づゝして宗匠の心をうかゞひ、其後詠草に書付侍り。今は付句も作者の心ひとつにてきはめ、いづれへうかがふよしもなくて、すぐに書付てまはし侍る。かくまで法外の事になりける物かなと、そゞろにかなしく侍る。

「いにしへは名所などに物をもて付る句は、古歌にても古事にても、慥ならん證據なき句は付させ侍らず。某いまだ廿にもみたざる頃、先師松江の翁と梅花翁と列座の會に出て、

　ちよと見には近きも遠し吉野山

といふ前句に、

　　腰にふくべをさげてぶら〳〵

と付侍りければ、吉野山にふくべ、其故有事にやと師のとがめにあひける程に當惑して、先御前句といへど、句前もとをく侍る間、付べきやうあらばその儘付よとひたすら申されける程に、率爾の事をいひ出けんと、一座の人のおもへるとこ

ろも面白なくて、

みよし野の花の盛をさねとひて
ひさごたづさへ道たどりゆく

といふ古歌にすがりて付侍りきと、當座の作意をもて此歌を捧て答ければ、めづらしくは、これは何にある歌にや。と尋ねられける程に、たしか万葉か夫木にて見ぬといひければ、やがて執筆に書せられける。いかなれば師の心をかすめ、かく僞りをもてもたいなくも懐紙をけがしたる咎、かへすがへすも道にそむきし事、今はたおそろしくぞ侍る。其外俳諧を只かろき事におもひなしたるうちの句などひとつひとつかぞへ出さば、無量のあやまりも侍らん。

「元祿十七年の春、きさらぎのはじめ、或人のもとへ行けるに、床に貫之の像をかけて、發句所望せられし時、折ふし空かき曇てこさめ降ける中に、籬の梅のしろく咲て、そこらおぼつかなき程に見え侍りければ、

雨雲の梅を星とも貴ながら

といふ句をつかうまつりぬ。かれこれ案じめぐらしける中に、ふと蟻通の謡をおもひ出して、よき趣向とらへたりとて、取あへず仕立たる句にて侍り。惑説をも辨へずしてうかと心得たれば、かくあやまりなる句をも仕出し侍りぬ。すべてむづかしき句を案じ入たる時、よき趣向のうかみたるは、日でりに雨得たらんこゝちして、やがて句に作り侍る事、大かたの人の常にて侍る。其時今一かへし返して、心のうちに吟味有べき事にこそ。

「いにしへ守武・宗鑑、連歌に對して俳諧を興し、貞德・立圃・重頼、また中興して專ら世上に此道をひろむ。しかれども其詞かたく、式こまやかにして、初學の人の道に入がたき所をおもひよりて、その後梅翁當風を作りてうたふ。其句の姿・詞、花やかに打くつろぎたれば、人皆おほく古風を捨て、その當風にかたぶき侍りぬ。それより猶さまざまに移りかはりて、いつしか彼古風をうしなひ侍りき。其古へをしれる人は次第に世をさり侍りて、風儀のうつりかはりし末より學び入たる作者、そのいにしへをしらざれば、法外なる事を法外なりともしらず。或は又今新しとおもひて仕侍る句も、古來いひつくしたる内にありて、古かりし事をも辨へざるたぐひも見え侍る。只句のすがたはいかやうにうつりかはり侍るとも、古格をたづねしりて、心の底に置たらん作者は、をのづから法外の仕かたは、あるまじき事にや侍らむ。

「それがし八歳に成ける頃いなけなる發句しそめてより、十三歳の頃松江維舟に師のちなみをむすびてかの翁の古風をまな

び、此道に心をいれて不斷獨吟の百韻をつゞり、その頃名に立る古老のかた〳〵へ送りて、點をこのみ見る事いく卷といふ其數をしらず。かくて十六歳の頃より梅翁老人の風流花やかに心うつりて、又其當風をいひ習ひ、猶其のりをもこえ侍りて、文字あまり、文字たらず、或は寓言、或は異形さま〳〵いひちらせし頃、發句・付句によらず、人によしといはれ、我心にもおもしろかりしやうに有けるをも、修行しつる覺もなくてなす所、よき句にて有べきやうはあらじと、ひたすら我心にうたがひを起して、更にこゝろをとゞむる事なく、思ふにいにしへよりの俳諧はみな詞たくみにし、一句のすがたおほくはせちにして、或は色・品をかざるのみにて心淺し。つら〳〵よき哥といふをおもふに、詞に巧みもなく、姿に色・品をもかざらず、只さら〳〵とよみながして、しかも其心深し。いにしへより俳諧の發句をおもふに、

青柳のまゆかく岸のひたい哉

まん丸に出れどながき春日かな

うつぶいておどるゆへにやぼんのくぼ

山伏はしぶくとかぶれときん柿

またその頃當風と聞えし句、

摺小木も紅葉しにけり唐がらし

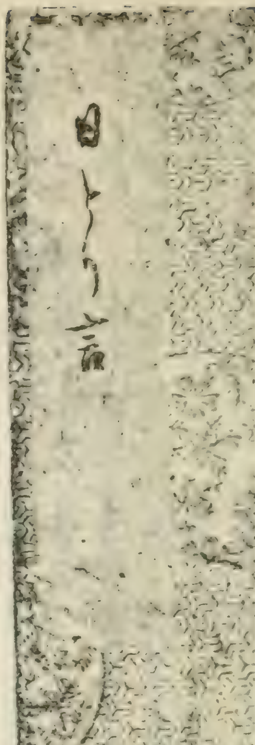
これらはかの宗祇法師の說に、非道・敎道・非正道・進正道といへるたぐひ成べし。たゞ俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるばかり、一槩にかたよるべき道にもあらず。猶深き奧もやあらんと、延寶九年の頃より骨髓にとをりて、物みな心にそむ事なく、やゝ五とせを經て貞享二年の春、まとの外に俳諧なしとおもひもうけしよりそのかざりたる色・品もかの一句のたくみも、こと〳〵くうせて、それ〳〵は皆そらごとゝなりぬ。

「修し得たる人の物がたりを、うつして未熟の人にむかひて、我しり顔にいへるを、力なきひとはそのことばを信じて、げに達人なりとおもふをよろこべる輩は、よこしまのわざにて侍る。及ばぬ道はひたすら修行し侍るべきを、他念心をもこらさず、勞をもついやさずして、只口先をもて上手なりと、人におもはれんことをこのむこゝろこそあさましけれ。

「當時もてはやす俳諧の中に、此句を聞給へと語り侍るを、前句は何といふにやと問人あれば、今時前句をたづね給ふは拙も古めかしく侍る。當風は前句なんどにかゝはる事はすといふ人などもありげに聞ゆ。にが〳〵しくこそ侍れ。

「いにしへ談林風・伊丹風などいひて、句にさま〳〵異形をつくせし時節も、更に前句を忘るゝ事なく、或は文字をけうとくあましたる句も侍れど、二句隔る掟を

守らずといふ事なかりし。
「いにしへは、一座百韻の俳諧をも句毎に覺て、或は歸りて人にかたり、或は悉く書留なんどし侍りし。今當風なりといへるは、歌仙の句をだにおぼゆる人なし。これをおもふに、いにしへは緣語をつたひて付侍れば、一句〳〵おもひ出せばおぼえ侍りし。今は前句に緣語なきことを詮なりとおぼえて、作り立たる句にて侍れば、何とらへておもひ出べき種もあらじ。ひとへに前句につかざる咎なるべし。
「祝儀の發句はそのことぶきをのべ侍りて、さのみ句のかたちに手柄をこのむべからず。付句はたゞいむべき詞に、能〻心をはこびてすべし。
「同季を付ればよしとのみ心得て、たとへば正月の句に三月の物をつけ、四月の句に六月の物をもて付る作者も侍り。付句はよくこゝろをはこびて、時節相違なきやうすにべき事專一なるべし。
「戀の詞をさへいへば戀の句なりとおもひて、本情なき句もおほく聞え侍る。詞に戀はうすく侍るとも、心の深からんこそこのむ所に侍れ。しかはあれど、俳諧の修行もなく、心のみたかくとまりて此所を仕侍らば、かへりてひがごとにも成侍らんか。
「鶯はきゝ、郭公はまち侘るこそ詮なるべけれ。そのほか四季折〳〵の草木・生類に至るまで、ひとつ〳〵その物〳〵をとらへて、くはしく所詮を辨へしりて、句にもをよぼしぬべき事にぞ侍る。うぐひすつけたらん句を郭公にいひかへ、梅つけたらんをさくらにいひかへて、前句になじむべしや。物の所詮を辨しりなんこそ第一の事なるべけれ。
「春の月は、くれそむるより朧だちて、物たらぬけしき。
「夏の月は、灯を遠く置て詠め深し。
「秋の月は、窓に、軒に、海に、川に、野に、山に。
「冬の月は、一むらの雲の、雨こぼし行隙を照していそがし。
「春の雨は、物こもりて淋し。
「夕立は、氣晴て涼し。
「五月雨は、欝〳〵とさびし。
「秋の雨は、底より淋し。
「冬の雨は、するどにさびし。
「未練の人の俳諧は、春雨のと五文字言いでし時、春雨前に出ゆといへば、秋さめのと付替侍らんといふこそうたてけれ。



「とし立かへるあした、去年ことしの雲の引わかるゝ頃、鳥の聲やゝ花やかに、殘る灯に鏡立て、妹がころものうらめづらしく粧ひなし、家〱にかんなどいはひ、かはらけとり〲にむつましく、門には松立ならべ、砂うちまきて、とぶきいひかはす。人の往來も、二日三日までは常の牛馬の通ひもなくてうらゝかに、あるは庭かまどに手あしさしのべて、うちねぶりなんどしたるもいそがしからず。

「梅は、軒の垂氷のふと〲敷、冬のこゝちもまだはなれがたきに、一輪のにほひ窓よりこぼれ入て、やゝ春めき、きさらぎの頃は誓願寺に火をともして、人の心をかゝげ、あるはかた山里の折かけ垣に見ゆるもやさし。

「室咲は、いつの頃、誰人のまち侘ておもひよりけん、寶あたゝかなるを、春にまがへて咲出る花の心こそすなをなれ。

「うぐひすは、聲めづらしき朝より、障子にうつる日影ものどやかにおぼえ、きのふけふ野山もけしきだちて、とぢたる水もをのづからながるゝ頃、聲もともによくほどけて、霞に伴ひ花にあそぶ。又青葉が枝に囀る頃はひたすらおしき。

「蛙は、水の底にて鳴初るより、上に出て雨こふ聲もあはれに、旅にあれば古郷の空なつかしく、あるは夜もすがら野になく聲の、枕につたふ寢覺こそたゞならね。

「柳は、花よりもなを風情に花あり。水にひかれ風にしたがひて、しかも音なく。夏は笠なふして休らふ人を覆ひ。秋は一葉の水にうかみて風にあゆみ。冬はしぐれにおもしろく、雪にながめ深し。

「櫻は、初花より人の心もうき〲敷、きのふくれ、けふくれ、爰かしこ咲も殘らぬ折節は、花もたぬ木の梢〲もうるはしく、くるれば又あすもこんと契り置しに、雨降もうたてし。とかくして春も末になりゆけば、散つくす世の有様を見つれど、又來る春をたのむもはかなし。あるは遠山さくら、青葉がくれの遲ざくら、若葉の花、風情をの〲一樣ならず。櫻は百華に秀て、古今もろ人の風雅の中

立とす。

「桃の花は、櫻よりよく肥てにこやかなり。

「梨子の花は、ひそかに面白し。

「つゝじ・藤・山吹、其外名をもてる物、古歌にすがり古き詞にもたれて、只おもしろしとのみ大かた上にてながむる人おほし。底より詠る人は我心われに道しるべして、まことのおもしろき所に入べし。其感より出たらん發句は、その意味と葉に述る事かたくや侍らん。

「野につくり〱と人の見えしは、わか菜つむ頃より草〱にたはぶれ出て、すみれ・つばなに春おしきまでなるべし。

「卯月朔日は、櫃くさき衣の袖に手さし入るより、身もかろく氣もひときはかはりて覺ゆ。すだれかへらるゝ上ざまの事は、はかりてもいひがたし。

「郭公の頃は誰もみな空に心を置て、月にあこがれ雨にしたへど、まれにもきかぬ折ふしは、もし夢のうちにや鳴つらん、人もや聞つらんと、ねざめ〱をうらみ、又たまさかにも聞つる後は、なをしたはしく、人の家より文もて出るをも、いかなる心をやいひをくりけんとゆかし。

「ふかみ草は、ほこりかにうつくしく。

「芍藥は、すげなきやうにてうつくし。

「卯の花は、郭公と中よく、あるは月と見て闇をわすれ、雪と見て寒からず。

「花橘は、あて〱敷、おもしろしとも見えず。心のうちにながめはふかし。

「螢は、ひとつふたつ見え初る軒ば、夜道行草むら、瀬田の奥に舟さし入て、花と見る柳の盛。

「蟬は、日のつよき程聲くるしげに、夕ぐれは淋し。又山路ゆく折節、梢の聲谷川に落るも涼し。

「蓮の花は、朝のながめ一入いさぎよく、晝は又涼し。夕ぐれは心沉む。此華、佛の物にこゝろうつりてみれば、さかり久しからずして、ちりぎはのもろきもたうとし。猶ふかく賞して觀念の奥に至らば、埋れたる佛性、終に忘心の泥をも出づべし。

「涼は、國阿の堂、華頂山の山門、四條糺の床は、心散てさはがし。又かた田舍は樗なんどの下に、晝寢むしろ敷たるもこのもし。

「秋立朝は、山のすがた雲のたゝずまひ、木草にわたる風のけしきも、きのふには似ず。心よりおもひなせるにはあらで、をのづから情のうごく所なるべし。

「七夕の日は、誰もとく起て露とり初るより、あるは其の葉をならべ、あるは古き歌を吟じて更に心を起し、あるはまた糸竹をならし、酒にたはぶれ、舟に遊びて、あすにならん事をおしむ。

「桐の葉は、やすくおちてあはれを告るさま、いづれの木よりもはやし。月のためには、日頃覆へる窓・軒ばも晴やかに見ゆ。

「朝がほは、はかなき世のことはりをしらしめ、なさけしらぬ人すら、佛にむかふ心をおこせば、しぼめる夕をこそ此花の心とやいはむ。

「萩のさかりは、野をわけ入てかひくるゝをもしらず。人の庭に有ては露ふく風に花をおもひ、かたぶく月に俤をおしむ。又花もやがてならんと見る頃の風情こそ、いひしらずおかしけれ。愛する人のまれなるぞうらみには侍る。

「荻は、むかしより風にしたしみて、そよぐの名あり。

「薄は、色〳〵の花もてる草の中に、ひとり立てかたちつくろはず、かしこからず。心なき人には風情を隠し、心あらん人には風情を顕はす。只その人の程〳〵に見ゆるなるべし。みの笠取もとめて行けん人の、晴間まついのちの程もしらじといひけん、道のこゝろざしはかくおもひ入なんこそ有がたけれ。

「女郎花は、あさはかにながむる時はさのみもあらじ。よりそひてしばし心をうつしみれば、立のきがたし。たとへばすげなき女の情ふかきがごとし。又雨の後は、物やおもふととはれ顔にうつぶき、あるは風に狂ひて、くねりなんどしたるけしきは恨るに似たり。

「中元の日は、蓮葉に飯をもり、鯖といふいをに鯖さし入て生る身をとぶき、親もたらぬ家には鼠尾草に水打そゝぎ、こしかたの有増をおもひ出して、下〻のあやまちを悔、或は万づの恵みをしたひて袖さへぬるゝ折節、佛唱ふるよその夕もおもひやらる。

「次の夕は、火をもて靈送るはかなし。山には大文字・妙法・舟やうの物、火をさしよする程は、しばしこゝろもうき立侍れど、かたちあらはして、やがて跡なく消るも又はかなき。

「躍は、かたちより心を狂はせ、心よりかたちにまよふ。わらんべの品よきには、闇たどる親の夜もすがら付まとひ、あるはあらをのこのさま〴〵に出立たる、けうとくもおかし。顔つゝみたれば誰ともしらず。見る人にたちよりて、我ぞと人に語りなせそとさゝやきなんどしたるは、しらせ顔にて又おかし。あるは身もをしさげがたき女の、帯・帷子など取出して、すがたを人におどらせ見るもやさし。

「虫は、雨しめやかなる日、籬のほとりにおろ〳〵鳴出たる、晝さへ物あはれなり。月の夜は月にほこり、闇の夜はやみ

にむもれず。あるは野ごしの風に、をのれ〳〵が吹送る聲、いつ死ぬべしとも聞えねど、秋かぎる命の程ぞはかなき。つくねんとして、夜も更、こゝろも沉みて、何にこぼるゝとはしらぬなみだぞおつる。

「紅葉の頃は、きのふの雨にけふの梢をおもひ、けふ又あすの時雨をおもふ。時しも空定めなければ、かひ打晴て枝も葉も雫だちたるに、夕日こぼるゝ風情こそ色ことにうるはしけれ。遙に遠山をのぞめば、耳にかよはぬ鹿の聲さへに心うごきて、其里人の目をさましけん夜々の寢覺をおもひ、あるは名にたてる山のあらしはげしき折ふしは、あからめなせそといひけん很士がつゞりの袖も、いつしか錦にかはりて、をのが影さへ底にみゆらん。花は散をいとへど、紅葉はちりてだにながめをのこす。

「鴈は、ひとつ〳〵山こえて、跡なく見果る。舟の上にて、古郷のかたに行ちがふ聲。又番ひ〳〵ならびゆく中に、はしたなる鳥のまじはりたる。いづくの網にか身をうしなひけんと、妻の心ぞおもひやらる。

「鹿は、角ありて、そのかたちいかめしけれど、おそろしき名にもたゝず。あるは紅葉の林にたゝずみ、萩がもとの月にあこがれ、妻をこひ友をしたひて、秋のあはれを聲につかねて鳴ものならし。賢き人の害をさけて友にしけんも、げにさもこそあらめ。又齢ひを延るためしは、蒼く、しろく、黒くなん、色をかゆるときけば、鶴龜のめでたき數にも類ふべしや。

「菊は、霜か花かと見まがふ朝、まち得たる心地ぞする。にほひを万花のしりへにこぼし、風に傲り霜を睨みて、をのれ顏なる風情、殿上の庭に有ては富るがごく、民家の園にありてはひそめるがごし。世人これを愛してちまたに行かふさま、僧に一日の行脚あり、俗に一日の旅行あり、それが中に、鬢老たる人の目鏡なんど顏にをしあてゝ、籬のほとりのぞきまはるあり。わかやかなる人は嘲らめど、松柏の契りによせておぼふ。此花ひとり年〳〵にめづらしきかたちを咲出侍れば、猶いくばくの數つもりけんと、千世經べき後の人のながめぞうらやまれ侍る。

「神無月は、春に似てうるはしく、花は櫻が枝にかへりて俤を見するとすれど、其色打かはきてさすがになやめるがごし。夕陽はやくめぐり、夜たけなはにして、空行風枕にこたへ、木葉の雨軒にそぼちて、更に秋の寢ざめをうしなふ。

「霜は、木草みな枯せど、しろき事花にか

はりて咲がごとし。あるはとしくれぬる人のかしらをおかして、後の世のちかき事をしめし、あるは暁おしむきぬ〴〵には、しばし足跡をのこして形見ともなしけらし。又瓦に置ては鬼の顔さへけはひぬれど、行つかぬさまぞおかし。

「雪は、音なふして、夜もすがら降ともしらず、常の心に朝戸をしひらけば、そこらみな白妙になりて、木々の梢を埋み、あばらなる賤が軒ばも風情つきて、ふくら雀のつく〴〵とならびゐたる、ころもかしたき心地ぞする。又山〳〵を見渡しては、旅行人のさぞなるらめとおもひやり、あるは岡野べの松の一むらより、朝げ夕食のけぶりの細く立のぼるも侘し。

「霰は、松にたまらず、竹に聲もろく、地におちては米簸るに似たれば、すゞめ・鶏なんどのまがへて觜を費しけるもわりなく見ゆ。消る事は露よりも猶すみやかなれば、詠めも又ともにいそがし。

「氷は、風寒き夜、水の面いつしかとぢて、日ごろの月の影も沈めず。朝な〳〵日影にうかめる魚のかしらを覆ひ、かへる浪なきとながめけん、志賀の磯邊の捨ぶねは、繫がずして行事なく。あるは世を捨人の庵には、筧のをとも絶〳〵になりて、事たるほどもかよはず、柄杓は桶のうちにゐつきて、柄を握れどもうごかず。あるはわらんべの瓶より出しもて遊びては、たゝく音かねのごとく、むかへばまた鏡のごとし。とかくして年もきのふにくるゝあした、厚きうすきためさるゝおほん恵みこそ有がたけれ。水無月朔日はこれをはこびて上に奉るとなん。此例は千世万代も消る事なく、めでたき氷なるらん。

「千鳥の聲は、沖にたゞよふ舟の中の旅人。戀路にまよふひとり寝の枕。老たる人のいねがて。すべて耳にかよふ所、心〳〵に品かはりて、あはれの數はおほかりけらし。しかのみならず、汐のみち干を告ては、かの武士の譽れをのこし。加茂のかはらの川風には、夜たゞ聲吹流して、もろ人のねぶりを洗ひ。けふもくれぬる聲のうちには、あすしらぬ身のはかなき事にもうつりやすく、黒谷山の念佛ぞしたはる。是なん夜毎に人の心を殺してん、かの鳥のおこせるならし。

「火は、爐邊に春をまねきて、窓に鶯の聲なき事を恨み。獨り雨闇の中には、夜もすがら灰などせゝりて、やをら心の底をさがし。あるはかゞまる指を補ひては、筆とりて更行鐘のおもひをのべ、あたゝめし衣の化にさめにし心の奥など書つくしたるうさには、下にこがれしその頃ぞしたはる。又むつましくみゆる物は、つま子取まはしたる火燵。あはれしらるゝも

のは、老たる人の火桶にもたれて、何おもふらんと見ゆるの。

「果の朔日は、子をもたぬ人だに、我もやがて臼にちなまんなど、ともに打いさみて、隣の餅にことぶきいひかたらひ、妻なき人はむかへん事をおもひて、顔まだしらぬ子孫をしたふ。又都のはづれ／＼、此日より姥らといふもの出て門／＼にさまよひ、聲ざまのぎやう／＼敷より、人の心も何くれとせはしくぞ覺ゆる。

「節季候は、いつの世よりか初りけん、實春秋のものとは見えぬかたちこそおかしけれ。手うちたゝきて拍子よくそろひたるに、物などいそがしく荷ひて庭通りたる人に、間ぬけのしたるもかた腹いたき。

「煤拂ひは、人の顔みな埃におぼれて誰とも更に見えわかねば、聲をすがたに呼かはすもおかし。又置所わすれて、日頃たづぬれ共見えざりし物の、出なんどしたるは、我物ながら拾ひたる心地ぞする。

「餅突は家／＼に其日をたがへず、けふはあすはと親しき人／＼行かはして、とり／＼賑ふ中に、老たる女の例しり顔に下知なんどしたる家は、物こもりてみゆ。又おさなき人の柳が枝に餅むしりつけて、花と見るよろこびこそ、其むかし戀しくは侍れ。

「としの内にも春たつといへば、日影もをのづから打のどめきて、口もほどけぬうぐひすのおろ／＼鳴出るぞ、折知顔にてやさし。人みなえ方に棚打わたし、くれ初れば新しきかはらけならべて、灯にぎやかにかゝげたて、目にさへ見えぬ鬼にむかひて、豆うつ人のつこと聲出せるにぞ、いづくかすみかなるらんとおぼゆ。又老らくのひとつ／＼かぞふる豆の、手にさへあまる齢ひこそめでたけれ。門にはやくはらひといふものゝ、よぶかたに立よりて、例のことぶき一口にいひながして、又はしりまはる心の内ぞせはしき。年もみなとに漕よする寶舟には、誰も皆いねつみたる眠りのうちこそたのしけれ。

「一とせもはやけふのみにくれよする日、世のわざしげき人すら、爰かしこはしりまどふさま、しれる人に行かふだに、纔に半面を笑ひて物さへいはず、心みな常の所にをかされば、むかふる人に行あたりて、もてる物のそむけるをも辨へずして、ひとつふたつ言あへるもあり。又かたはらには、いかにしてわが足踏てんやととがめ出たるよりこと葉廣がり、手をしまくり、いかりのゝしりなんどして、時のうつるをだにわするゝもけうとし。家／＼に松竹植ならべ、しめ繩とりつけて、例のくさ／＼かざりたるにぞ、事い

そがしき中にもけしき立て、春をそげにみゆ。又むつましきかぎりは大幕のとぶき行かはし、あるは又をけら求むる神の庭には　鈴ふる袖も實なまめかし。風のけしきも猶更過るに、化口いひあへる八坂の奥こそ、むかしおぼえてそゞろにたうとく侍れ。手毎に火繩かひふりて、いさみもて歸るは、あすの竈を賑しそめんとなちし。人の往來もやゝ絶〳〵に、閨のともし火に枕うちかたぶけて、春秋のあらましをおもひかへし、又逢べきけふにもあらじと、かぎりなく名殘しらるゝ折節、明なば袖さゝんとかさね置たる衣のにほやかなるにぞ、心もやがて花にはなりける。

旅

「門出したらん日、行く人とゞまる人ともに打いさみぬれど、見送り見かへりなんどしたるは、心にかなふいのちならばと、相おもふほどこそわりなけれ。住なれし里の木立は行にまかせて梢をかくし、跡しら雲の八重にかさなりては、めなれし山も埋みぬれば、心へだつたとおもふばかりこそかなしけれ。春はもろ鳥の囀に物なつかしく、あるは遠山のしろく見ゆるをも、雲か花かと心をつくし。夏は郭公の一聲に雲の行衛をしたひ、あるは木蔭に立休らひては、汗吹風に袂をなぐさめ、清水ながるゝ道の邊には心をすゞしめて時をうつす。秋は又名もしらぬ草〻に花をむすびて、遠かりし野路澤邊をだに、いつ行としもなくて過ぬ。あるは又夕日程なくかたぶく時は、やどるべきかたもおぼつかなくて、野にゐる人に打むかひて、道の程たづねなんどしたるに、遠くいひなしたるはにくし。時雨の頃は笠の雫も定なくて、日影ながらに身打ぬるゝこそうき物なれ。雪はなをつらくもふる物ながら、木〻の梢しろ妙になりぬる時は、吉野・初瀬のこしかたをおもひ出して、旅の心を慰みけらし。晝の程はまぎるゝ事もおほかりけれど、たじみなき枕に夜〻の寢さめをかぞへみれば、あるはきぬたの音・更行鐘・川の瀬のをと・千鳥の聲・海ちかきやどの磯打浪の聲・風の氣色も更て行雁がね・雨しめやかなる軒の雫・かたすみにて綿つむぐ音・上手に市念佛の音聲・さも侘しげなる犬の長吠。はる〳〵來てはやどりかはらぬ空の星さへ、影あはれにおぼえ、何につけても古郷の便のみおぼつかなくて、人やりならぬ道をうらむる折ふし、我國人のかへるにあひては、文たのまんと筆とりたれど、またせて時うつすべくもあらねば、心の程あらましにも書とりがたくて、物にもなやまで爰までは來ぬる、とばかり

かひしたゝめて、やがて又わかれ行こそほいなけれ。なを行〳〵て心あてなる國に入ては、きのふけふうゐ〳〵しかりしも、人の心に鬼なければ、いつしかなじみ付ておもしろき事・おかしき事にふれては、人なみに興を催すにも、古郷の事のみ心の底に有ければ、慰むわざもみじかく覺ぬ。又かへるさにをもむきては、ひと日〳〵國のちかくなるにまかせて、なをとけしなきに、道をそき馬やとひたる程、腹だゝしき物はあらじ。やう〳〵かへり着なんとしける日、我岡のべの木立なんど見え初るこそうれしけれ。笠破れ、杖みじかく、色さへ黒ふ、おも痩、麻の小衣うちしほれたるに、つま子出むかひて、とぶきいひあへる中に、なみだぐみなんどしたるは、いつかはとおもひしだにまち得たるうれしさ、あるはうからん族のあらましなどをしはかりての心ならめ。童僕よろこびむかへ稚子門にまつといひけん心の程は、國こそかはれ。しばしが内は夜ゝの寝覺も旅のこゝちにまどひぬるを、窓・天井より心づきては、我宿なりとおぼゆる程にぞ有ける。又悔しかりしは、日ごろしたひたる名どころだに、或時は雨にさへられ、あるは日うちかたぶきて泊りをいそぎ、歸さにはかならず立よらんとおもひて過ぬるをも、古郷のかたに打むきては、一足をだに費しがたくて、又來べき折もあらめと見殘したりしも、終に行べきよすがもなくて、としふりなんどしたる後の心こそ口惜けれ。

戀

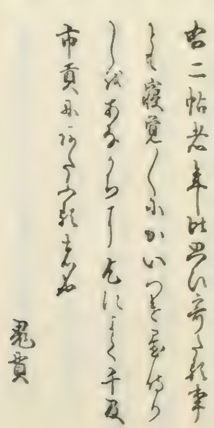
「心は法界にして無量なる物ながら、一念まよふ所は、大河の水の纔なる塵によどむがどし。さればまだみぬ人をも風の便に聞しより、などや忘れがたく思ひ、或は筆のかたちを見ては、やさしからん心をしたひ、あるは芦垣のまぢかきあたりに休らふ折ふし、きよらかなる物ごしを聞ては、水などこひよりてすがた見むよすがを求め、あるは又道行ぶりに、しとみ格子のうちより顔さし出したるを見ては、ほとりの家に立よりて商ふ物の價なんど尋て、よそながらかの家の名をとひて過るもあり。あるは花見る頃ほひ、あるは又神に佛に詣めく日、色よき女の出立たる中に、かりそめにおもひかけては、添よるべき便もがなと思ふ折ふし、俄なる村雨なんどしければ、傘のやどりをもてより、あるは又火繩たつ物さし出してうつしもらひ、或は近きかたの道をしへなんどしたるも、こゝろづくしのはしなりけらし。それが中に、うしろすがた人にすぐれたるを見て、爰かしこつきま

とひたるに、行ぬけてたちむかひたれば、すがたには似つかぬ顔に興さまして立のきたるもおかし。あるは又いはぬおもひにこがるゝ身の、人なみに交りなして折まつ程の久しきにも、何かに調うつりて、われおもふとはしり顔なるもうれし。又片陰にて紙の皺をしのばして、しのびやかによみなんどしたる風情は、まるめて捨置たる文のおぼえもうれし。あるは心にあまるおもひにふしては、佛たのみ神に串て打祈るさま、人にむかひては中〳〵えもいはれぬまでを、物いはせ給はねばとて、心の底うちあかしたるも、をろかにておかし。又人しれぬ通ひ路には犬さへあやしめて、宵〳〵毎に胸さはがしく、打もころしつべしといひけむ、何がしが文もおもひあたれど、喰ふ物こかしやりて、尾をふるまでに飼つけなし、あるはけにくき關守に物あたへなんどしたる心づかひこそいそがしけれ。誰とはしらぬ人の例の時をもたがへずや、竹吹てとをりたるは、今宵もまたあくがれ來ぬるとしらせ顔なるしのび音ならん。鴫の羽がきとよみけんにも、おもひたぐへてやさし。星のあゆみもはるかにかたぶき、空吹風も音さびわたりて、籬のほとりに立休らふ程、よその鷄も聞ゆる頃ほひ、ねやふかくしのびやかにきぬのをとなひしければ、それぞと心もそゞろなるに、いかに久しく待ぬるやと、袂引ゆく手も打ふるひ、ねりの村戸をさぐり〳〵て、身を横さまにひそめ入ては、音せぬまでに跡さしよせ、物さへいはでため息したるも、心あまりてうれし。寢てこそとけめと枕打かたぶけしに、灯遠く置たれば、顔ばせのほのかに見えて、さしむかひながら床しき心ちぞする。とし月つれなかりつるこゝろづくしなど、うらみまじへてかたりたれば、いつはりおほき人の數にやあらん、と思へどいつの文より心ひかれて、とばかり顔うちあかめたるも、こと葉おほきにはまさりておぼゆ。耻らふさまもなどやうちとけ顔に見ゆれば、心にもたぬ人のうはさなんど、いひたはぶれたるに、息みじかくかよへど、上にも見せず腹たて初るよそひこそうれしけれ。あるは又ちかきあたりなる女をこひて、文かよはしけるに、いつの夕かならずと聞えしより、指の數さへ心ひとつにくれかねて、空打ながむる折節は、雨くだすなとたのみをかけ、あふ夜まつ心の程は人こそしらね。やゝその夕になりては、入相の鐘につねのあはれもなくていさましく、ふたつみつ螢とびかふ宵闇には、つたひ來ん君がもすそのあかりせよなど、あらぬ事のみ思ひあつめてまつ心こそたのしけれ。千世をひと夜

とかはす枕は、まだ宵ながらこと葉のこりて、あけぼのいそぐ鳥・鐘の聲におどろかされて、又いつかはといひし名殘もむせるばかりに、起わかれては、沓にしかるゝ草引おこし、そむける籬をつくろひなして、ゆく影うしなふ窓の内には、髪の香殘る枕ひとつこそかた見なれ。又寢の夢の覺る朝は、何につけても心そまねば、野に出ては山うちながめ、川のほとりにかひつくばうては、水の行衞も物なつかしく、そゞろめきたる風情ながれにうつりて、我影ながらすごく見ゆるも淺まし。あるは又ちぎり深かりし中だに、よそに心のうつりなんどしたるは、舟車にもつまれぬばかり腹だゝしきにも、おもひつくせし事のみかぞへて、こゝろひとつのむかし、戀しき我ねやのうちこそ侘しけれ。

祝

それやまと歌は、天地ひらけ初しより、地の花の天にはじまり、天の月の地にすめる、天地和合の大道、たゞちに詞となりて、神を貴み君をあがめ、世を治め身をおさむる道とはなりけらし。春は先梅かざすより、桃の雫の盃にしたゝり、あやめふく軒には、のぼり・甲なんどを立ならべて、よこしまの氣をしりぞけ、菊の白露は淵となるらん、いく世のするまでをいひとぶき、一陽來りかへる頃にはおさなき人の髪を置そめ、袴着初なんどして、神に詣せんとて出たちたるを、老たる人の杖に肱かけて、見送りゐたる心の内こそたのもしけれ。四海浪しづかにして橋わたさぬ道もなければ、往來に足をだにぬらさず。かくおほん惠みふかく、治る國のためしには、民くさ打うるほひて、俳諧の連ね歌をつらね、なを万歳をうたひて、人皆鶴龜の齢をしたふ、かゝる御代こそあふぐべけれ。



跋

古曰詩經變爲楚辭楚辭變爲唐律也。我國和歌有長歌短歌旋頭歌泊連歌誹諧也。乃隨世變也。如誹諧自本歌若論之則野也。然其實不野也。今鬼貫誹諧非野語乃實語也。淵明詩有達磨骨髓、則誹諧亦入其妙處則蓋到古人和歌佳境、其可得乎。余閲鬼貫獨語集其詞絶妙而有味焉。我以謂連歌宗祇宗長得妙誹諧鬼貫獨得妙言者乎。勉旃。

享保戊戌佛誕生日

紫野亘妙子書子淸源南軒

俳書目録

一 俳諧新式　全部一冊　鷺水選
一 同独り言　二冊　鬼貫著
一 増補番匠童　同一冊　和及述
一 俳諧袖かゝみ　同一冊　芦中作
一 俳諧古今百句 附録羅人集　同二冊　羅人選
一 俳諧わこか諸扁　同三冊　子梅述
一 俳諧若須頭　同二冊　鷺水選
一 俳林良栈　同三冊　同撰
一 俳諧齋之白尾　同五冊

京都書林華文軒
建仁寺町四条下ル二丁目加賀屋
中西卯兵衛藏版

鬼貫句選

上

道にたどりふかき翁ありけり。そのゆくやたかきより飛、ひくきより躍いづ。峻に立、ほそきをつたふ。ざれありき、おもむろにありく。夢のうき橋足さはらず、ふむにこころよしとなん。世ばなれければにや、おにつらといふ。むべ鬼なるかな。そのこゑ玉に金（こがね）に、代にきこゆる句そこばくといへども、人のこゝろにたらねばや、猶もとむ。予ももとめて見きゝにうつしけるが、漸かばかりにこそ侍り。七車といふ家の集は、世にあらはれねばよしなしや。あはれそれをもつたえて、あまねく鬼つらのおにたる無凝自在を、見もし學びもせば、わが芭蕉翁にこの翁を東西に左右し、延寶より享保にいたるこの道の盛世をてらし見て、けふこの道にゆく人の、こゝろの花のにほひに足ッ、心の月の影とゞきて、はいかいの幸大ィならんかし。しか思ふものから、自笑が乞にまかせ、これに序してあとふる事になれり。

明和五年春二月不夜庵太祇

鬼貫句選巻之一

春之部

大旦むかし吹にし松の風
ほんのりとほのや元日なりにけり

老松町

我宿の春は來にけり具足餅
中垣や梅にしらける去年の空
五器の香や春たつけふの餅機嫌
何おもふ八十八の親持て

試筆　人麿の尊像にむかひて

雪よ〳〵きのふ忘れし年の花

旋頭句

烏帽子の顔ほの〴〵と
何の花ぞもとしの花
六日八日中に七日のなづな哉
芽柳の遊ぶ鳥まだ寒げなり

不夜菴太祇考訂

風が吹梅のつぼみはしつかりと

初春詠

鶯が梅の小枝に糞をして
山里や井戸のはたなる梅の花
梅散てそれよりのちは天王寺
宿替に鼻毛も抜ぬ梅の花
鶯や梅にとまるはむかしから
うぐひすの鳴けば何やらなつかしう

軒の鶯　窓の鶯　薗の鶯
枝の鶯　谷の鶯

うぐひすは山ほとゝぎすばかりなり

旅行

あふみにもたつや湖水の春霞
春の水ところ〴〵に見ゆる哉
うち晴て障子も白し春日影
曙や麥の葉末の春の霜

しら魚や目まで白魚目は黑魚
日南にも尻のすはらぬ猫の妻

空道和尚、いかなるか是たんぢが誹眼と、とはれしに
即答

庭前に白く咲たる椿かな
水入て鉢にうけたる椿かな

夕霧が塚にて

この塚は柳なくてもあはれなり
懵(もうさ)はおぼろ鳥のねさめ哉
ゆかしさのあて〳〵しきや雉子の聲
草麥や雲雀があがるあれ下(サ)る

二月二日、京に住ところもとめて

北へ出れば東へ出れば花のなんの
誰が家の醬油むすぶ春の草

髑髏を乞て、郡山をたちいづる名殘に

たよりなや笠ぬぐ後の春の雨
春の日や庭に雀の砂あびて

ひとり、舟にて伏見をくだる夜

おぼろ／＼灯見るや淀の橋
月なくて晝は霞むや昆陽の池

玉水にて

山吹は咲かで蛙は水の底

佛前

きさらぎの日和もよしや十五日
何まよふひがんの入日人だかり
人の親の鳥追けり雀の子
人に逃げ人に馴るゝや雀の子
遠里の麥や菜種や朝がすみ
雨だれや曉がたに歸る鴈
狀見れば江戸も降けり春の雨

里家春日

猫の目のまだ晝過ぬ春日かな
あら青の柳の糸や水の流
樹の中に只青柳の尾長鳥

住吉にて

みどり立きしの姫松めでたさよ

月雩が、つまにわかれし悼

春の夜の枕嗅やら目が腫ゝた

二月すへ、惟然にとはれて、のち餞別

いなふとの花の前なりや止られぬ
春草の姿持たる裾野かな
鳥はまだ口もほどけず初ざくら

伊丹俗洗

賤の女や俗あらひの水の汁
から井戸へ飛そこなひし蛙かな
一鍬や折敷にのせしすみれ草
春風や三保の松原清見寺

四日曉

浪の底に我足形の有やらん
永き日を遊び暮たり大津馬
一の洲へ都の客と馬刀とりに
桃の木へ雀吐出す鬼瓦
軒うらに去年の蚊うごく桃の花
杖ついた人は立けり梨子の花

黄檗山にて

ありのみのありとは梨子の花香哉

三月十日、はせを翁懷舊、支考萬句興行に

かけまはる夢は燒野の風の音
それは又それはさへづる鳥の聲
富士は雪は花一時のよしの山
心あての花でよし野で餘をば猶
耻しの老に氣のつく花見かは
何くれと浮世をぬすむ花の陰

煩惱あれば衆生あり

骸骨のうへを粧て花見かな
摺鉢の花に賑ふ庵かた
花鳥に何うばゝれて此うつゝ

鐵卵懷舊

うたてやな櫻を見れば咲にけり
花の頃扇さいたり諸職人

兵部太輔光成のもとより、文の中に櫻の花を入て、送られし返し

九重の狀より花のこぼれけり

去年も咲ことしも咲や櫻の木

さくら咲頃鳥足二本馬四本

日よりよし牛は野に寐て山さくら

谷水や石も歌よむ山さくら

此句、長伯老人より誹諧歌傳受の時の吟なるよし、人申はべる。

黒谷にて

盛なる花にも絶ぬ念佛かな

師弟のむすびせまほしくいはれし人に

花のない木による人ぞたゞならね

大心禪師六十賀

願ふや音なき花も耳の奥

うつろふや陽の花に陰の花

又もまた花にちられてうつら〳〵

定家卿の夢中に、抱とめたまひしとなんきこへし、観世音のたゝせたまふ御寺に行て

花そなら散はや夢も抱くらむ

花散て又しづかなり園城寺

多田院花見

武士も見ながら散す花の風

咲からに見るからに花のちるからに

散花

又ひとつ花につれゆく命かな

鶯よ花はちるとも飛まはれ

野田村に蜆あへけり藤の頃

孝行

目は横に鼻は堅なり春の花

どつちへぞ春も末じやに又ねる歟

京に住ことありて、古郷をはなれける春のすへ、友にむかふて申いでける。

春雨の降にもおもふおもはれふ

彌生晦の雨を

春雨のけふばかりとて降にけり

雜

淀川にすがた重たや水車

初瀬に旅寐して

小夜更て川音高きまくら哉

闇の夜も又おもしろや水の星

塩尻は不二のやうなるものならん

池田唐船淵

むかしの海、中頃の淵、今は田夫が晝まくらをなして夢となる。織女の歡樂の跡をおもふて

棹の歌は松の聲のみ鉄つゝみ

藏にゐて人には見えず白鼠

松風や四十過てもさはがしい

東山院御葬禮を拜み奉りて

御車は闇の月夜のなく音哉

鬼貫句選　巻之二

不夜菴太祇考訂

夏之部

春みてる夜、難波より船にのりて、明ぼの淀のわたり

を過けるほど

淀舟や夏の今來る山かつら

春と夏と手さへ行かふ更衣

一日で花に久しき袷かな

しれるものゝ尼のねがひありて、西方寺に飾りけるを、説にまかせつかはしにとて5月三日かの寺に行て

我はまだ浮世をぬがでころもがへ

戀のない身にも嬉しや衣がへ

花惜しむけも夏山の柴車

きかぬやうに人はいふなり時鳥

おなじ雲井のほとゝぎす

ほとゝぎす耳すり拂ふ峠かな

雲枕花の氣さむるほとゝぎす

津の國の玉川しれずほとゝぎす

傘のしるしに

此夏はいく度きかんほとゝぎす

鳥羽縄手を通りて

空に鳴や水田の底のほとゝぎす

江戸にて

あちらむく君も物いへ郭公

なまじいにいく夜むかしの時鳥

題呉猛

蚊をよけて親の躮や時鳥

夜の後灯白しほとゝぎす

奈良にて

神〳〵と春日茂りてつゞら山

非情にも毛深き枇杷の若葉哉

みよしのゝ川上に、業平の隠れたまひし所とてありけるに、人の發句せよと望みければ、彼男のむかし杜若の例にならひて、むばらの花といふ言葉を沓かふりにをきて

むかしとへば卯塔までの葉末かな

卯月廿七日西吟へ行て

葉なりとも西吟櫻ふところに

おなじく歸るさに

けふの日をさぞ五月雨におもひ出ん

橋にておの〳〵發句せし時

雨ぞふる麻てたち花の起てもぞ

旅行の里

のり懸や橘にほふ塀の内

心ならでまはるもおかし茶引草

つく〳〵とおもふ

我むかし踏つぶしたる蝸牛哉

我(われ)が身の細うなりたや牡丹畑

後に飽(あく)蚊にもなぐさむはし居哉

猫信がつまにおくれし悼

夜もさぞな明やすひとは僞りと

海音快氣のよろこびに發句乞れて

遣はなつ心車に飛ほたる

卯月廿七日道閑といふ醫師の新宅にて發句望れしを

此軒にあやめ葺らん來月は

端午

葦原や豐の粽の國津風

戀しらぬ女の粽不形なり

人の旅宿にて
壁一重雨をへだてつ花あやめ
螢見や桧に数挺つる昆陽の池
藪垣や卒都婆のあいを飛ほたる
野のすへやかりき畑をいづる月
さつき雨たゞふるものと覚へけり
五月雨にさながら渡る二王かな
さみだれや鮓のおもしもなめくじり

西吟興行
侘ぬれど毛虫は落ぬ庵哉
竹のこや雪隠にまで嵯峨の坊
やれ壺におもだか細く咲にけり

鵜飼
鵜とゝもにこゝろは水をくゞり行
根は萍の水に花置く池のうへ

大坂へ行て、東行興行に
草の花の水にまかせて根をひかへ
夕暮は鮎の腹見る川瀬かな

[illegible]や岡崎に人を尋て
飛鮎の底に雲ゆく流かな
蜘の巣はあつきものなり夏木立

鶯の聲なかりせば目白哉
といへるを今ならば
鶯や香を入て只青い鳥

休斗新宅
夏菊に露をうつたる家居哉

探題 蟬
鳴蟬のその木にもまだ居つかぬ歟
鳴ぞはし鳥とりたるせみの聲
ゆく水や竹に蟬なく相國寺

巳夫にゑぼし着せて
夏草の根も葉もどちへどふなりと

京よりいたみへ行
水無月や風にふかれにふる里へ
さは〳〵と蓮うごかす池の亀

小町の繪のかゝりたる家にて
すゞ風やあちらむきたるみだれ髪
夏の日のうかんで水の底にさへ

松雨興行
なでし子よ河原に足のやけるまで

田家
六月や臼をほそふぞつき臼を

知牛老母死を悼
水無月の汗を離るゝほとけ哉
雲の峯なんぼ嵐の崩しても
夕立のまたやいづくに下駄はかん
夕立や隣在所は風ふいて

夕涼
夏草に身をほめかれて庭の空
なんとけふの暑さはと石の塵を吹

旅行
夏の日を事とも瀬田の水の色

獅子谷
涼風や虚空にみちて松の聲

旅行
あの山もけふのあつさの行衛哉

糺の涼
月雪を花とみたらし明日も来ん

夏の星の顔なつかしも暮かゝる

水無月の頃舎羅が剃髪しけるを

關〻を秋になつたら見にまはれ

しらぬ人と諡問答すゞみ哉

冬は又夏がましじやといひにけり

雜

しよろ〳〵と常は流るゝ大井川

須磨に此あづまからげやしほ衣

山崎にて

木神(こだま)せよ油しめ木の音ばかり

鬼貫句選　卷之三

不夜菴太祇考訂

秋之部

初秋

なんで秋の來たとも見えず心から

そよりともせいで秋たつことかいの

ひら〳〵と木の葉うごきて秋ぞたつ

心 略 起 て 秋 た つ 風 の 音

此露を待て寐たぞや起たぞや

初秋雨

初 秋 の ど れ が 露 や ら 雨 の 露

あはれけもまたほめく夜の秋の風

朝 も 秋 ゆ ふ べ も 秋 の 暑 さ 哉

桐の葉は落ても下に廣がれり

下り舟にて

稻 づ ま や 淀 の 與 三 右 が 水 車

人の親のくるとばかりや玉まつり

こゝろにて顏にむかふや玉まつり

こぼるゝにつけてわりなし萩の露

庭の萩

內藏に月もかたぶく萩の露

高井立志餞別

人むかふて笑ふ。わかれて思ふ。ゆくも百三十里、とゞまるも百卅里。

そちへふかばこちらへ吹ば秋の風

家は汐津ばしといふ橋のほとり也。前には軒の松風、流水にひたして、なをひややかに、後には野徑の虫、時しも野分に吹送りて、おのれ〳〵が聲かすかなり。今は闇なれば、やがて月のためにはとたのしく覺えて

闇がりの松の木さへも秋の風

むかふは堂嶋の新地、家建ならび、舟きおふ堀江の川あらしに、西海の浪をわすれ、入日を惜む歸帆、半は屋上に見こして、委しらぬ旅人のわかれをおもふだに此夕はさらにもかなし。

須磨の秋の風のしみたる帆莚か

野徑に遊ぶ

秋 風 の 吹 わ た り け り 人 の 顔

ねものがたりの里を通りて

ふむ足や美濃に近江に草の露

宵はいつも秋にかつ氣をむしの聲

行水の捨どころなきむしのこゑ

野ばなれや風に吹くる虫のこゑ

獨聞虫

人呼にやるも夜更つむしの聲

右には武庫・淡路のつゞき遠く峯へて、左は伊駒・かづらきの峯はるかに高し。來れる人もなければ、物埋む雲もなくうち晴て、致景こと〴〵く的歴なり。

わせるなら霧のない間に誰も哉

有岡のむかしを、あはれにおぼへて

古城や茨くろなるきり〴〵す

おもしろさ急には見えぬ薄かな

露の玉いくつ持たる薄ぞや

茫〳〵と取みだしたるすゝきかな

吹からに薄の露のこぼるゝよ

此薄窓より吹や 秋 の 風

ゆがんだよ雨の後の女郎花

今はむかしの秋もなくて

伏見には町屋のうらに鳴鶉

伊丹あたご火

あたご火に稲づま光るとひやうし哉

芭蕉にもおもはせぶりのうこん哉

思ひ余り戀る名を打碪かな

朝寒のけふの日なたや鳥の聲

來山が老母の死を聞て送る句

おもひやる只の秋さへくらされぬ

老母の身まかりける夜

けふの秋にいつ逢とぞ親にまで

富士の形は、噺るにいさゝかかはることなし。されども腰を帶たる雲の今見しにはやかはり、其けしきもまた〳〵おなじからずして、新なる富士を見ると、暫時にいくばくぞや。あし高山はおのれひとり立なば並びなからん。外山の國に名あるはあれど、古今景色のかわらぬこそあれ。

によつぽりと秋の空なる富士の山

夕ぐれにまた

馬はゆけど今朝の富士見る秋路哉

うら聲といふにもあらで鴈の聲

鴈がねの跡に飛ゆくむら鳥

むかしから穴もあかずよ秋の空

來山が妻の追悼

荻の葉そよぐゆふべ、さよ更る砧、ねやにさし入月かげ、つれてわたる雁がね、人の妻の指鉢の音。

うつゝなの夜とは秋とは今ぞ嘸

踏ては花をやぶり、ふまずしてはゆく道なし。

野の花や月夜うらめし闇ならよかろ

老母をいざなひて

風もなき秋のひがんの綿帽子

旅泊

衣うつ京へは遠き寐覺かな

犬つれて稲見に出れば露の玉

家せばくておほからぬ道具

さへ置所なく、そこ／＼に棚などつらせて、臺のころまでは陋し。やう／＼ほこりはき捨て安座す。

吹風や稲の香にほふ具足櫃

待宵

あすみちて明日かける月のけふこそな

秋はものゝ月夜烏はいつも鳴く

名月 十九句

月よけふよ去年の命に花ぞ咲

珍しと我影さへや窓の月

月をとて漸く雲のちぎれ／＼

野も山も晝かとぞ首のだるくこそ

木も草も世界皆花月の花

連歌

見るほどはいはれぬ月の今宵哉

病後

しみ／＼と立て見にけりけふの月

夜半の雨後

名月や雨戸を明てとんで出る

更行や花は紙にも押ものを

此秋は膝に子のない月見哉

愚痴／＼と獨に更る月見ふは

明なばの佛安ら窓の月

月は此今宵に明て何ひとつ

父の身まかりける忌中の名月

虫も鳴月も更たり忌の中

名月くもりければ

春ならば朧月とも詠めふに

良夜大雨

しよぼ／＼に降なら月を／＼とも

十五夜雨ふりければ

何の木と見えて雨ふる今宵哉

どこ更る空のあてども雨の月

燈火やおのれがほなる雨の月

歌人は居ながら入唐す。

秋の月人の國まで光りけり

富士の山にちいさうもなき月し哉

見ぬけれど月の爲には外の濱

中秋十七日女の身まかりけるを

ゆく水にうき世の月もきのふ哉

述懐

銀もてばとかくかしこし須磨の月

月代やむかしの近きすまの浦

椴の木のすんと立たる月夜哉

遊女の絵に讃す。

どの方をおもふてゐるぞ閨の月

袖が浦といふ盃に

うつゝなや現なの月の袖に／＼

後名月

名月や縄の闇を山の端に

後の月手まめなといふとを

豆を喰て豆の花とも詠ばや

後名月

けふは梢の松風も、くれぬさきより東山の米をまねきて、實非情さへとみゆ。猶頃さりて十五夜の雨も、今宵の空に晴て月の

明〳〵たり。

跡の月雨の降時けふの月

十五夜も雨なりける、十三夜もふりければ

又の月もあふのいてこそ甲斐はあれ

貞享四の秋長月十七日の夜、更行まゝに庭のけしき人はしらず。

今の心是こそ秋の秋の月

おなじ夜ねられぬほどにとこかしこをめぐりて

いとゞ鳴猫の竈にねむるかな

破芭蕉やぶれぬ時もばせを哉

宗因墓

宗因は春死なれしが秋の塚

久かたや朝の夜るから空の菊

重陽

菊の香のひとつをのこす匂ひ哉

翁屋阿貢月次初會

よも盡じ草の翁を露拂

旅泊病

ながき夜を疝氣ひねりて旅ね哉

落穂拾ひ鶉の糞は捨にけり

古寺や栗をいけたる縁の下

しろくれ紅葉の外は奈良の町

文臺記

みむろ山の嵐は立田川の錦におち、別所山の紅葉は今江原氏鶏賀の家にながれよりて、世に其名を照す。

寸法は、

高サ　三寸壹歩、

竪　壹尺八歩

横　壹尺九寸

裏には、

別所山滿願寺尊悟寺住之時
興昌寄進之

と朱を以てならべたり。

蒔繪はむかしの秋、底に匂ひて、夕に月をおもひ、朝に奥山の聲をしたふ。貫月日とこしなへに流れてちらぬ影さへ眼に沈み、やをらこしかたをおもふに、いくばくの人の心の種となりけんぞと、知らぬ言の葉の數さへすゞろに戀しくこそ侍れ。ことし寶永ひのとの亥の秋、菊の花むすぶ窓のもとに筆を置ぬ。

むかし色の底に見えつゝ花紅葉

寄畫無常

目をさませ後しらぬ世の紅葉狩

あゝ蕎麥ひとり茅屋の雨を臼にして

草の葉の岩にとりあふ老母(おもと)草かな

木にも似ず扨もちいさき榎の實哉

去程にうちひらきたる刈田かな

賀

言の葉の落穂拾ふもたのみかな

九月盡

むかしやら今やらうつゝ秋のくれ

雁

來いといふ時にはこいでをふいおい

戀

君もさぞ空をどこらを此ゆふべ

契不逢戀

油さしあぶらさしつゝ寐ぬ夜哉

鬼貫句選 巻之四

不夜菴太祇考訂

冬之部

あたゝかに冬の日なたの寒き哉

夕陽や流石に寒し小六月

大坂へ着て

つめたいにつけてもゆかし京の山

難島住居のとし

冬もまた松の木持てむかひけり

つく〴〵とものゝはじまる火燵哉

さゝ栗の柴にからるゝ小春哉

なんと菊のかなぐられふぞ枯てだに

物すごやあらおもしろや歸り花

世の中をすてよ〳〵と捨させて

あとからひろふ坊主どもかな

古寺に皮むく棕櫚の寒げ也

在郷

種なすび軒に見えつる夕かな

麦蒔や妹が湯をまつ頬かぶり

葉は散てふくら雀が木の枝に

宇治にて

冬枯や平等院の庭の面

枯芦や難波入江のさゞら波

久しく交りける友の身まかりけるときこへ侍りければいとゞさへ旅のね覺は物うきを

木がらしの音も似ぬ夜のおもひ哉

ひう〳〵と風は空ゆく冬牡丹

茶の花や春によう似た朝日山

皆人の匂ひはいはじ枇杷の花

川越て赤き足ゆく枯柳

青空や鷹の羽せゝる峯の松

白拍子の尼になりて、久しくすみける庵に立よりて

引かへて白い毛になるつはの花

荒るものと知(しれ)ばたふとし神送

時雨ても雫みじかし天王寺

おとなしき時雨をきくや高野山

野もかれ落葉さへなき頃、闕をくゞりて不夜城に入ば花ありて委寒からず。歌はふしなふて匂ひあり、聲はこけるといふたぐひならで玉あり。折ふしの雨、むかしをそぼちて更にわれをせむ。

糸に只聲のこぼるゝしぐれかな

ねられぬやにが〳〵しくも鳴千鳥

千鳥鳴須磨の明石の舟にゆられ

汐汲や千鳥のこして歸る海士

家鴨かとおもふ人なし沖の鴨

筑後三毛領にて

遠干潟沖はしら浪鴨の聲

水鳥のおもたく見えて浮にけり

おもふに花の頃より其かたち渕み、時鳥の聲きく夜毎も、懶き聞さぞなにやありけん、散かゝる紅葉のころ故鄉を都にわかれて、立かへる秋をしらぬ身のあはれさよ。はや時うつり一生爰に盡て、月も日も十に滿る夜あらしに、鐵卵去て來らず。是何者ぞ、我また是何者ぞ。空々寂々夢又夢。それが中に親しみにひかれて、きのふけふをばおもはざりしをと、おもふもこれ又何事ぞや。

いつも見るものとは違ふ冬の月

旅泊

宵月の雲にかれゆく寒さかな

膝がしらつめたい木曾の寐覺哉

夜話

灯火の言葉を咲すさむさ哉

待宵の頭巾や耳をあけてゐる

紙子着て見ぬ唐土のほとゝぎす

餞別

盤谷はかたちまで才覺あり。

漸のびて冬のゆく衛やよいつぶり

山家契

はづかしや榾にふすぼる煙草類(つら)

初雪に友をまねきにつかはしける。

我宿の雪のはしり穗見にござれ

白妙のどこが空やら雪の空

雪路哉薪に狸折そへて

十二月二日初雪

この雪が降ふ〳〵と師走まで

富士の雪我津の國の者なるか

寒苦

雪の降夜握ればあつき炭團哉

雪で富士歟富士にて雪かふじの雪

しれる人の中むつまじう、今は闘守もなくてたのしめる宿に行て

雪に笑ひ雨にもわらふむかし哉

おさなき子におくれし人のもとへ悼て申つかはしける

ちらとのみ雪はうき世の花ゝな

飯後の雪を

鰒くふて其後雪の降にけり

ふぐと程鰒のやうなるものはなし

水よりも氷の月はうるみけり

井のもとの草葉におもき氷柱哉

何ゆへに長みじかある氷柱ぞや

朝日かげさすや氷柱の水車

寐て冷て空也きことて覺はせぬ

殊勝也牛の糞ふむ鉢たゝき

われが手で我顔なづる鉢扣(たゝき)

鉢扣古うもならず空也より

節季ゝや臼こかし來て間がぬける

世の花や餅の盛りの人の聲

歳暮

惜めども寐たら起たら春であろ

月花を見かへすや年の峠より

花雪やそれを盡してそれを待

鏡を磨ふ春まつ老の若さかり

灯の花に春まつ庵かな

爛や髪の扇に年ゆく日

惜まじな蕾のつぼみとなる年を

君を月をまつ夜過こし春まつ夜

寐よぞねよ夢のゆく衛の年をまた

流れての底さへ匂ふ年の夜ぞ

華

獨居の僧の庵に行て

燃る火に灰うちきせて念佛哉

人間に知恵ほどわるい物はなし

鬼貫句選 下

鬼貫句選巻之五

不夜菴太祇考訂

禁足旅記

（此旅記は「七車」所載「犬居士」の末につくもの也。校訂者記す。）

北窓の月は遠山の暁にそむき、南面の秋日は軒をめぐる事はやし。我こゝろあらばめでたき閑居なるめれど、いやしければたのしみのおもひみじかく、儔寥たる秋の、中／＼吾妻のかたにたびしたけれど、用なきに身を遠く遊ぶ事、誓老親のためにおもければ、こしかた見つくしたる所／＼、居ながら再廻のまなこをおよぼし、日／＼こゝろばかりを脱けてゆかば、我願ひもたり、不孝にもあらずとおもひ立ぬ。

廿日の夕ぐれ大坂に出て、伏見への船かりてのる。

我が身に秋風寒し親ふたり

ほのくらきころ難波の地をはなれて行。草葉の露は左右おなじくをけど、船ひく男らの岸づたひに、かた／＼は虫のねたへて、是も物のあはれなるべし。江口の里はまだ宵闇の覺束なく、川風は今も旅人の枕に馴て、むかしの秋をしたひ顏なるも、また哀に覺ゆ。

幽靈の出どころはありすゝき原

なを過るに、月は佐田の空に出て、森のともしび影うすく、いと神／＼し。夜は

牧方・葛葉のさとにふくれど、川浪まくらの下をたゝきて、夢もむすばず、こゝろすみて、

　ひや〳〵と月も白しや秋の風

暁ちかきころ淀のわたりをゆく。むら霧川づらに立のぼれど、水車のすがたとは見ゆるほどなり。

　霧の中に何やら見ゆる水車

廿一日、ふしみにつく。朝ぼらけ打ながめ行に、町は所〳〵家の隣、畠になりてさびし。

　伏見人唐黍がらをたばねけり

それより深草に行く。

　少將屋敷

草露道なふして風はむかしのにほひもなく、今は野人の車のみ往來す。

　牛御亭車に落す草の露

　元政舊菴

この沙門日蓮宗なれど常の佛の敎もならべず、ただ釋迦のみたふとく見えたまふを

　箔のない釋迦に深しや秋の色

里はなれて、出家ひとりつれだつ。ゆく〳〵のり（法）の事など殊勝に聞えて、あふさか（逢坂）にいたる。むかし行基の鯖つけたる馬にあひて、よみたまひける歌など、物がたりしければ、かの法師行基に一問ありとて發句す。

　しほ鯖といづれか動く紅葉餠

別れて關の明神にまいる。

　琵琶の音は月の鼠のかぶりけり

案内する子をやとひて、三井寺より高觀音にのぼる。所〳〵の事念比に、夜は湖水の月など、舌さへまはらずいひしも、實（げに）馴ればおとなしき物をと愛らしくて、

　大津の子お月樣とはいはぬかな

松本を過てもろこ川に至る。人の家のうしろに柿の木ありて、

　義仲塚

　柿葺や木曾が精進がうしにて

また膳所を行はなれて、秋の田の面の物あはれなる中に、

　兼平塚

　兼平が塚渺〳〵とかゝ田かな

この所より道を右にのぼりて、

　石山のいしの形もや秋の月

もどりに芭蕉がいほりにたづねて、

　我ゝに喰せ椎の木もあり夏木立

長はしをわたりて、

　瀬田の秋よこ頬（つら）寒しかゞみやま

廿二日、草津を出て宿のわかれに發句す。おもふに付所しな〴〵ありて、句のすがたはかはるやうなれど、みなおなじうつはものゝ中をめぐりて、心新しきはなし。世の常の俗言をもつて作れば全誹諧にして、しかもその古さをのがるべしと、我しばらく爰に遊ぶ。此地にも安心せば、また例の病ひおこらん。只誹諧をのり物

にして常をわたる人あらば、行ず止らずして誹諧もなく、やまひもなき大安樂界にいたらむ。

樂〳〵と姥が屋根ふくや今年藁

此發句にて伊丹風獨吟歌仙あり。
（歌仙にあらず、廿句のもの也。校訂者）

石邊・水口は、この獨吟にまぎれて發句もなく、けふは土山にかり寐す。

廿三日、朝日よりさきに出て、

吹ばふけ櫛を買たに秋の風

白川橋といふをわたりて、爰にもとおもへど、趣向もなくて、蟹が坂になる。それがためにとて、いさゝかの石塔あり。ほとりの松風は苔に聞ゆるばかりわびし。

つま白の石のあはれや秋の霜

近江のくにをわかれて、鈴鹿の峠につく。常はこの所より湖水を見れど、けふは霧ふかふしてあやなし。

狂　歌

鬼貫が鈴鹿の山にきたればや
霧にくもりて見えぬ湖

汗かいて坂をくだる。また田村堂にのぼりて、瓦の奉加つく。

六文が月をもらすな田村堂

道すがら見るに、野山の色は新玉の空よりうつりかはるならひ、げに世の中の事はそれのみならずと、おもひ〳〵て鈴鹿川を渡る。

一とせの鰷(あゆ)もさびけり鈴鹿川

狐界來りぬ。いざとて行。彼もわれも骸は津のくにをきて、こゝろは今、關の宿のほとりに遊ぶ。野は草の茫〳〵として、かれかゝりたる中をみれば、（歌仙連衆發句あり。略す）（連衆略之）四日市といふ所にとゞまりて、今日石藥師にていひたる句書つく。

國富ややくしの前の綿初尾

廿四日、桑名にいづ。風はげしくて船こはさに宿とる。座敷は海を請たる所なり。礒よりちいさき釣ぶねの行衞おぼつかなく見やりて、蛤など燒せてこゝろのびけり。

風の間に鱸の膾させにけり

午のさがりに風なをりて舟だす。うち晴てそこ〳〵おもしろかりし物を、申のかしらより雨になりてういめす。漸日のおはるころ熱田にあがりで、こよひのやどかる。

熱田にて鱸の膾吐にけり

廿五日、なるみの宿をすぎて行さき、尾張・三河のさかひ橋あり。おはりのかた半は板をわたし、三河の地はつちばしなり。

發句合

尾　張

板かけてさらに見するや草の露

此繼橋、おはりのかたよりも土をわたさば、かく

まてながめあるまじ。板よりつちに行うつりて、草は橋にさへうらがれぬと、秋のあはれを見せなん心尤深し。

三河

板わたる人に見するや草の露

此句、三河の人は尾張のかたに板渡せるを見て、橋を土になしたりといへり。意味左右同じきか。されども草は三河の地にうらがれて、あはれは此くにの勝たるべし。

池鯉鮒をすぎてやはぎにつく。藪生たる所、かの長者のあとなどいひて田の中に見ゆ。やとひたる馬士の、是によそへて望むほどに、耳ちかき世の一ふしをとりて、

上瑠璃よかゝり田の番は夜る斗

わがこゝろの留主見まひすとて燈外見ゆ。幸にこの人とらへて、ゆく〳〵雨吟して赤坂に宿とる。亥のさがりまで語りて、また例の獨寐す。（歌仙燈外見句有。此語略之。）

廿六日、ほどなくて御油の宿にかゝる。猶行道の左右に大きなる松はへつゞき、梢ひとつになりて、日の影さへもらぬほどなり。

たびの日はどこらにやある秋の空

よし田の町にて鶉きゝて、

うづら鳴吉田通れば二階から

ひうち坂といふ所に休て、

霧雨に屋ねよりおろす茶の木哉

ふた川を過行。爰にも三河・遠江の境に川橋あり。それを渡りて、

我裾は三河の露とまじりけり

白須賀こえて、荒井につく。濱名の橋のあとなつかしくて、

ことしにて濱名の橋は幾秋ぞ

また夜の心になりて

あの月やむかし濱名の橋の月

舟より前(舞)坂にあがりて、こよひは濱松に明す。

二十七日、天龍を渡る。御上洛の御時は此川舟橋になりぬと、船頭の物がたりす。げに宗府が事を聞つたえて、なつかしくなりたり。

我祖父も舟橋おがむ秋の水

池田の宿に遊也(ゆや)が石塔あり。老母のはかなくやならんとしたひし女も、かくあはれに見ゆるよと、世を観じて、

秋の夢老母もゆやも我もまた

袋井を出て行道の田のほとりに、鴫おどす人あり。されば伊丹の馬櫻が狂句に、

鴫をおどすか千の字が

かくおかしき事をおもひ出て、われもその類にあつまる。

田の中に雪隠一ッ立たるは

箕を伏たるか鹽釜か

この輿に掛川をこえて、けふのとまりは
日坂に定ぬ。
廿八日、佐夜中山。

松杉のすげなふ立たる中に、朝日影ちからなくさし入て猶心ぼそし。

けふともに秋三日あり佐夜の山

菊　川

承久三年の秋、中御門中納言家行と聞えし人、つみありて東へくだられけるに、此宿にとまりけるが、昔は南陽縣の菊、下流を汲てよはひをのぶ。今は東海道の菊川の西のきしに宿して命を失ふ、と、ある家の障子にかゝれたりけると聞をきたれば、あはれにてその家を尋ぬるに、火のためにやけて、かの言の葉も殘らぬと、長明が書たることなどおもひいでゝ、我も家の障子に、

家行は承久三年の秋述懐を書、我は元祿三年の秋其亡魂を弔ふ。

本來の障子はやけじ秋の風

大井川

雨遠く水なふしてこゆるにやすし。

痩ずねに漸寒し大井川

また素龍にとはれて、まりこのやどの初夜までに、（半歌仙其餘發句あり。略之。）
廿九日、阿邊川を行とき、

東路の夜露こふたる紙子哉

道〳〵わがこゝろふたつにわかれて、半心はこの句冬也。惣じて露・月などの類、季のかぎりある物にむすびては、いづれもその季にひかるゝならひ、しかれば夜露こふ紙子至秋ならずといふ。また半心の曰、かなしひ哉、汝色を見ていまだそのいろに奪はるゝ事、尤物につれては四季の間をわたる露・月なれば、句躰うち聞えたる所秋なし。されば一とせの長月は、はやけふ明日のかぎりしられて、この宿を過るに、吾妻の秋の形見は夜露しみたる紙子にこそ殘れりと、深くも秋をしたひてなり。また此露冬にして聞所いささか意味なし。句は是こゝろより作れるすがた、爰に於て汝心をとるや、すがたをとるや、といへば、實至極の秋なりし物をと、心またひとつになりて、府中にかゝる。爰は竹にて物作る家あまたなり。

虫籠を買て裾野に向ひけり

江尻を過て、清見寺にのぼる。

庭上秋深ふして佛閣靜に高し。海原見やる所に望めばこゝろのび、また心よはくなれり。

秋の日や浪に浮たる三穗の邊

興津の浦の海士の蚫とるなど、都にはなきをと見る。猶あら波のいそづたひに、道すなをならで、げに所の名もとおもふに、また古郷なつかしくて、

雜

故郷や猶こゝろぼそ親しらず

由井・かん原をこえて、富士川につく。色さへ余所の水にかはりて、船のさる事甚はやし。

不二川や目くるほしさに秋の空

よし原に臥て晦日の朝、

秋の日や富士の手變の朝朗

うき嶋が原をひさしく通りて、

浮しまや露に香うつす馬の腹

三しまの社を拜み奉るに、みな幾抱あらむとおもふ斗の松杉、間なく立こもりて、さびわたる神風に梢のしづく落るも遠し。眞砂はその白玉にうるほひ、御池は水の面青み立て、底おぼつかなくすごし。

雜

ちはやぶる苔のはへたる神鯉（うなぎ）

のぼり〳〵て箱根のとうげにいたる。けふ三嶋の空にいたゞきたる雲ははるかなれど、こよひはまた其うへに枕す。

十月朔日、宿を出て行。俗にこの山にて死人にあふたる例おほしと、いひならはすほどに、

雜

水海や我影にあふ箱根山

磯はたにさいの川原あり。念佛する法師の家、所〳〵にきこえ、往來の人の小石あまた、つみかさねたるを見るにも、子をしたふ敷しられてものあはれなり。

お地藏のもすそに鳴や磯鵆（ちどり）

權現にまいりて、

神の留主留主とおもへば神の留主

かしの木は皆人馬にものらず。そのほか岩根道いくまがりもまがりて、中〳〵鈴鹿の坂はこの汗にも似ず。漸小田原にくだる。

雜

氣辛勞や馬にのろもの小田原へ

賣こゝろばかり行道なれば、落る事もなきにと後悔してすぐ。曾我の里をとへば、海道より十町ばかり左の山陰なりといふ。

さむ空にいとゞおもふや曾我の里

それより大磯にこえて、

とら御前今はつめたし石の肌

藤澤にとまりて、二日の朝遊行の御堂にまいる。看經の聲たふとく、我も無念の念佛す。

十月の二日も我もなかりけり

之道、けふは隙にしてきたりぬといひけるを、またとらへて、（歌仙之連興句あり。[illegible]）

かな川を過て、爰にも富士の人穴といふあなあり。口廣くあいて、おくの深さ闇くて見えず。

人穴に折ふし寒し風の音

品川より鉄炮洲の御堂を見やりて、

むさしのは堂より出る冬の月

江戸に入て、日本橋を渡る。

いつもながら雪は降けり富士の山

嵐雪に行て宿す。去年の秋は、狐界この庵に來て夜長く、ことしの春は、伴自が日永ふして我事いふにみじかく、また歸りていふに長し。たがひにわらつて夜もすがら兩吟す。句は其袋にむかふ。歌仙嵐雪發句ありし。跋嵐雪之。

甚世ゝの栄花ハ一睡五十年のちめ
嘆ゝ呼ゝ飲水ゝ旅心十三日乃
うけく紹も鬼再ゝのへる居士と
まろゝも歯さ跋もみつゝのうや

元禄三年庚午十月日

鬼貫句選跋

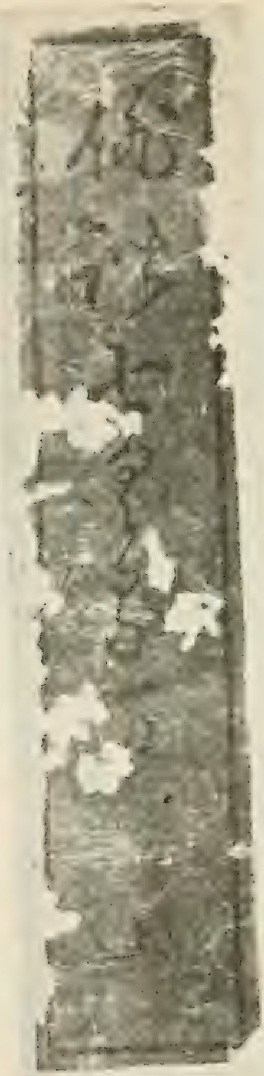
五子の風韻をしらざるものには、ともに俳諧をかたるべからず。こゝに五子といふものは、其角・嵐雪・素堂・去來・鬼つら也。其角・嵐雪おの〳〵其集あり。素堂はもとより句少く、去來はおのづから句多きも、諸家の選にもるゝこと侍らず。ひとり鬼貫は大家にして、世に傳る句まれ也。不夜菴太祇としごろこの事を嘆きて、もしほ草こゝかしこにかき集めて、數百句を得たり。たとはゞ滄海に網して、魚をもとむるがごとし。なをもれたるもののいくばく歟侍らん。さるを鬼つら句選と題して、はやく世の好士につたへむと、例の氣みじかなる板もとは八文字屋自笑也。

于時明和己丑春正月

三菓軒蕪村書

京寺町二条下

橘治板

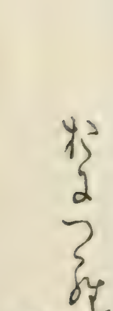


乳ぶさを握るわらべの、花にゑみ月にむかひて指ざすこそ、天性のまことにはあらめかし。いやしくも智恵といふもの出て、そのあしたをまち、其夕をたのしとするより、僞のはしとはなれるなるべし。予は寛文元年かのとのうし、梅さくらのにほひもきのふのまがきにこぼれ、やゝ卯の花の白髮見するみつがひとつのあした、有明の岡、ゐな野細江のほとり、糸海（イタミ）といふ所に胞衣をときぬ。こゝはいにしへより連誹のすき人おほく、おのづから耳に心にうつりて、八ツになりけるとし

こひ／＼といへどほたるがとんでゆく

これを我わざことと歌のはじめとして、より／＼句をいふ事數あり。十三歳の頃、松江の翁をまねきて、流をくまんといふより、明暮此道に心をつくしぬ。そのころ、又世にゝほへる梅の翁をはじめ、名たゝる誹師や、雲の扉をたゝきて來れる時〻、座をならべずといふ事なし。寛文八つちのとのさるのとしより、花月に心を馴るゝこと、凡

六十年に及べり。猶此のち天數のかぎりしらるゝ夕までなるべし。これそもいかなる因縁ぞや。夫誹諧の道に入る事、初心をはなれて上手にいたり、上手をはなるゝ所名人ならむ。上手とは、句をおもしろく作るをいふ。名人とは、さのみおもしろき聞えもなうて、底ふかく匂ひあるをいへり。猶そのおくにいたりては、色もなく香もなきをこそ得たる所とはいふなるべし。抑十七歳のむかしより、人にかはりて梓にちりばめたる誹諧の書あり、獨吟の書あり、とし〴〵いひすてたる發句あり。又序や、跋や、詞書や、つゞまやかにしるし置て子孫にながくのこさんとの心をのするものから、なゝぐるまと名附て、享保十二ひのとの未のとし、さくらをかざす窓のもとに筆をおきぬ。



なゝぐるま全部百三拾餘丁ありて翁の自撰なり。往年揚芳堂これを得て、荒木氏と梓行せんとしていまだ果さず。其本荒木氏に藏して、已に二紀に及べり。先年京人本集より抄して句選を刻すといへども、本集は翁の得意にてものせられぬれば抄せん事其ほいにあらざるべし。余が此集梓行の志をおこせし事は、我が祖父なるもの、只川と號して、翁も親弟なるよしをしるされ、其句など其頃の集物にも散見し、又あつら翁を信ぜられし事は、亡父つねぐかたりきこえしをもて也。ことし某氏に托し、句選に出せるを除き、文部をわかち、或は句選に詞書をもらし、贈答を略せるは重出し、校正をきさめて、荒木氏とはかり世に公にす。冀くは、京本とならべて舊觀に復すといふべし。是や家業をうけつぎ、主顧のたまものゝ餘慶もて、おほぢが師恩をむくふにぞありける。

天明三年癸卯春

大阪興文堂書坊　高橋德恒謹識

なゝかまどその一

春部

歳旦

春立や星の中から松の色

和州郡山に年をむかへて

いたゞくや大和正月三笠山

初日影まづ出たりないこまやま

大ぶくや淡路も見さい茶臼山

猪名野の古郷に春をむかへて

事はじめいくやゐなのゝしらうつぼ

さかづきや先打わらふはなのはる

門松やうしろにわらふ武庫の山

火の數やとし德棚のにぎやかさ

□年の鏡をかほの花にせう

春立や誰も人よりさきへ起き

鳥のこゑ雨あら玉の年立かへる

かをるより雪氣はげしき今朝の空

四十五になりける元日

花といはさ老の五のかふりほろ

雲包む初日を空のをしむやは

雲横に去年のことしの花や空

嘉儀ゆよやをら初日の梅ごゝろ

いねあげよ明て秋の田かゝる世に

此年元日の雪を

降からに鶴を着そむるあしたかな

高砂や去年を捨つゝ初むかし

日よ月よ千代の轍の初ぐるま

祇園の社にまゐりて

あはれげもいにて春たつ朝ちどり

江戸にて大としの夜、いさゝ

かの神の道を受つたへて

あなたのし十種はじめに日の鏡

江戸より歸京のとし

朝紅や水うつくしき初がすみ

ひもといた年の冠のもゝちどり

初風や去年の月さますいねの花

龜の背に海老ほのあかし初日山

梅の湯のすはや明たつ額休み

梅の湯のすき人ならば花も見ん

このみのたねをわりてすつるな

梅や紅人のけはひの初かゞみ

○巳上歳旦巳下本集の列のまゝに

うつせり。但し句選に出たるは

のぞけり。

殘る火燵まだ山里はこたつかな

如月十日鐵卵懷舊誹諧百韵

興行

うたてやなさくらを見れば唉にけり

月の朧は物たらぬ色　才麿

盃の跡も春なるゆふべにて　來山

此連中は鬼貫・才麿・來山・補天

虚・西鶴・万海・執筆七吟なり。

上巳

節句明てはまぐり煮出す障子哉

子をたづぬる母の網もて花すくふを、かきたる繪に讃せよといふ。即時

蔦からす蛙が母も水かゞみ

はじめて和州郡山のきさらぎを、むかへて

君が地の花のつぼみを見初けり

はいかい難波順禮の一番に

喰ておいきやくていかしませ五加木食

百韵獨吟

聞は誰ゝみねのあらしや雉子の聲

明石の人まろ塚の松の木もて造りし文臺硯箱を、靑人が家に求得たるよろこびに

誹諧興行

松の木と名はしりながら呼子鳥

月あかき夜、圓通法師にあひて

こぶりこや木摩の里行餅ぶくろ

正月十五日

小雨降るとへども例の火影かな

居所をうつりかへて

うちはれて障子も白し初日影

井戸堀てまづうつろふや松のはな

ひさしく音信ざりける人のもとに、何となく物語しけるに、そこらまばらなりければ

うぐひすに內藏賣てなんといふ

兵部の大輔光成のもとより、文の內にさくらの花を入ておくられしにかへし、

「九重の狀より花のこぼれけり

こなたよりも花をつゝみて、

その紙のはしに

君見よやゐなかの花の黑き事

うぐひすの靑き音を鳴こずゑかな

雜百韻、獨居の僧の庵に行て

「燃る火に灰うちきせて念佛かな

垣のほとりに人のうつぶく

しらぬ木の鳥の糞よりはえ出て

下略。右句選には冬部に入たり。

今本集にしたがつてこゝに出せり。但し本集一本には冬に入れり。

狀みれば江戶も降けり春の雨

苗代や隱居へ行て手をつかへ

正月十五日亡子が一回忌に

去年より物一時もわすられぬ

二月廿五日惟然にとはれて、廿八日京へかへらんといふ時

止られぬ又きさしませ花ちらば

やよひ二十五日長谷川立賢夢想に、

以ニ一ー枝ー得ニ一ー根ー者ハ大ー欲也

と文字までおぼえたりと、物がたりありけるをことほぎて

芽を出すや心をたねに無根草

春の野に躑躅て居るわかなつむ

角菱の餅にありとも桃の花

宇治に來て屛風に似たる茶つみ哉

はるさめの物の相手をはなれうよ

彌生朔日老母と大久保道古をいざなひて、高臺寺へ行けるに、道古發句所望

松杉にゝほひがある歟頃もころ

上巳

こゝろふとや都の雛に夫婦づれ

玉腕子は惠林大德のたまはりける名となん。それのみならず、あまたの禪師詩をおくり、文をよせられて譽ある筆工なり。元祿みづのとのひつじ卯の花月のはじめ、其隣に居をうつして、やがて心おかぬ程になりければ、發句してくれよかしといひしほどに

月も雪も何か殘ふ花も筆に

牡丹　江戸止水所望

あくたにも散氣はなれてまあ廿日

うつふし染といふ書をして、西吟がはいかいの板行やみなんとて、發句望しほどに

それをだにそなたも春をしまずや

正月廿日高森其愼の許へまねかれて、同氏正因一座しけるに發句所望

老せじと來初たに日も遲かれな

きさらぎ五日大佛のほとりに、高森正因が許にまねかれけるに、をりふし雨ふりあがりて、空のけしきいまだ晴ざりけるに、庭のかたへなる梅の花白く匂ひ、床につらゆきの像をかけて、發句所望ありける卽興

雨雲の梅を星とも晝ながら

おなじく廿五日北野の御神へ奉納すとて、柳水所望

梅をしる心もおのれ鼻もおのれ

彌生九日醍醐の御門主へめされける時、御所望

樹の奥に瀧も音して花や咲

河内國の人八虹があつめし土（は）・師（し）の梅の卷頭、來山取次

そのそこにおのれを梅に鳥とは

三の里といふ題にて

梅の花目にもたまらで網引か

篳といふ盃に

行春の夜を寐ぬ顏の雛から

座神京へまゐりて古鄕へかへる日

去年からの此花の頃又いつか

狩野寀信が勇士に梅をかきたる繪に

うぐひすよいつをむかしの雪のころ

生蓮寺にまねかれて

十かへりのころやたえせん松の花

彌生四日はじめて逢ける人に

膝合す雛の脊中をはじめかな

けふの日を柳にやりて川端に

我寸亭にまねかれし時、春日の題にて所望

しら髮うき今朝の昔の春日かな

賴朝の文もたる人に逢て、言葉の便よく見まほしき事を乞

けれぱ、心とけたりけるよろこびに

幾春の爻のよはひや鶴が岡

我ひとりむれつゝ花の旅がらす

としひとつ又もかさねつ梅の花

伊丹より年〻東武に通ひける人、ことし花のつぼめる頃、我をたづねて京に來りけるほどに、久しく過しむかしをもかたりなんと、引とゞめて

武士の數こそなけれ花ぐるま

新宅のよろこびに誹諧興行

先え方みの幸（サチ）よろしいなり山

來山が男子まうけたるよろこびを、しらせこしけるほどに、いひつかはし侍る。

初聲を鶴ともきかめ松のはな

春のうち青妻のかたにくだりなんやといふを聞て、溪鶯がもとより、むまのはなむけすとて、唐扇に發句をそへておくりけるほどに、ふ[illegible]き

からねば脇句をつくりて、よろこびを述ぬ。

いちよい日末廣御覽春の富士　溪鶯

人の詞の花をはな笠　鬼貫

三日桃賀のもとにて、よろこべる事のありけるものがたりなど聞て

芽柳の奥たのもしき風情かな

すつと立木草の中に松の花

伊勢の涼兎、きさらぎの末京にのぼりて、是より北國行脚おもひ立侍るといひし程に餞別

蛙鳴この夜忘るな旅まくら

三月九日桃賀宅にて即興

折よしと花もほゝゑむ軒端かな

人麿影供に

白雲は幾代の花の歌ぶくろ

戀獨吟

生て聞さむればひとり春の雨

初春　石町旅宿にて上野のかねを聞て

遠う來る鐘のあゆみや春霞

春草のすがた持たるすそ野かな

六十賀に、龜は万年の友といふ題にて

幾春を龜の六つよりとしの友

はじめて孫をまうけたるよろこびにまねかれし時、所望に

鶴龜のあゆみ程よき春日かな

日うつりや花にむせたるよしの山

曉梅

鴈啼て夜のつるべにむめのはな

大舜の繪に

賃とらで象も田をかへす動かな

大坂愛宕の水奉納の繪馬所望に

うかるゝや扇隣に水の花

箔をもて雲をかきたる、ふるき源氏の繪に

花の香やむかしの袖に源氏雲

京の九間がもとより、よひのとし樫木の杖をおくりしに

かしの木や花の初枝百ちどり

小町の繪に
あちらむけうしろもゆかし花の色
半面を見せたる小町の繪に
かたがほや見ぬ奥山のはなの色
七十賀に
つく杖のしちくにあゆめもゝ千鳥
切經堂の繪馬に
梅が香や衆生にみちて軒の壁
八十賀に
さくら咲遠山見こせ眉の八
松に鷹をかきたる繪に
玉爪の金をつかむ春日かな
月次の誹諧せまほしとて、初
會の發句所望に
筆に雲人の言葉の初さくら
妻の一周忌いとなむ人の發句
乞けるほどに
くりことの便りに蒔やさくら麻
古歌に、さくら麻の苧生のした
くさしげれたゞあかでわかれし
妻の名なれば、櫻麻は夏なり。

蒔は春也。さくらの時分に種まく
をいへり。其外麻の花・麻手・麻の
蔵等みな夏也。連に如レ此。
伊丹鶴阜の吟
ひよ鳥や世のさへづりも石の花
こかしの梅かきたる繪に
笠に杖面影さがすんめの花
西行「とめこかし梅さかりなる我宿を
うときも人はをりにこそよれ
佐川流筠雨吟せまほしきとて、
發句所望に
鳥の巣に去年の色出す花の壁
富士のすそ野に櫻の花と、田
子のうらに舟かきたる繪に、
讃望まれて
雲やにほふ海もさくらも富士の枝
ある人の老母八十賀に、發句
所望せられて
口紅の初花ゆかし玉椿
野に馬ひとつかきたる繪に
鞍の上に人もおぼえずさくら時

岡立和尚、佐川充眞に馬の繪
をかゝせて、予に讃を望まれ
し程に書て遣しける。
娑婆の樹と何月花もはなれ馬
英一蝶が書たるほていの繪に
口ほどけにこ〳〵草の花ぶくろ
正月十一日佐川流筠雨吟所望
の時即興
七夕に契りおきてし初ざくら
同十六日或人の老母九十賀に
世の花や百の峠も九十から
同廿日の夜芳室宅へ行て
雨水くむ筆の林に鳳の雛
あさみに雉かきたる繪に、讃
望まれて
ひとつ着て出ぬも悔しき春日かな
下野國那須の住人大金隨有、
みづからのかたちをうつし、
文して予が讃を望めるに
面影はしらぬ翁の花香哉
高砂・住の江のめでたきため
しを、うつし蒔たるさかづき

に
のめやうたへ神の連理の若緑
落日の魚に袖なし花衣
うた三味線をわざにせし女に
春雨の底をさがすや瞬の糸
神祇の春の發句所望に
花垣や雲も和光の八重ざくら
只川は我門を叩く事久し。
何もかもしらぬ顔せよ呼子鳥
立圃のかきけるふたりの翁を、いとけなき童のうつくしくうつしたるに、予がこゝろばせを書と聞えしほどに
此人のうつはもの、方圓自在に輝なん。猶百とせの後をことぶき侍りて
月花や龜鶴の白髪もみかゞみ
山鳥やさくらをしぼる夜の雨
備後國府中の住人龜川氏鬼冬、牡丹花の作れるかたちをうつしたる文臺に
かいほこれ今をむかしのふかみ草
右文臺寸法、竪壹尺九寸、横壹尺壹寸、足ノ高サ三寸壹分、金物打、ケヤキヌグヒ板、裏黒ヌリ
○此句本集夏部にも出たり。ふかみ草初夏なるべけれど、今ここに出して下を略せり。
花桶と名をよびたる竹に、發句書附よと望まれて
花桶や千代の名立の初冠
正月七日雲雅と北野不動の茶店に遊びけるに、はや入相のおとづれ、まうづる人もすくなくなりけるに、發句せよといひければ、とりあへず
またむ月入相のかねに人ぞ散
山櫻のさかりなる枝に、猿の二三疋烏帽子着て幣持たるに、瀧のいさぎよくおちて、其ほとりに離れ馬をふたつ三ツ書たる繪に、讃のぞまれて
しらいとやいなおほせ鳥よぶこ鳥
咲花やとしの下手なる遲ざくら
附誹諧平外(懐)鉢 四季並載
岸陰やけふは汐干の淡路山
京にのぼりて
水無月や伏見の川の水の音
宇治川や朝霧立てふし見山
枯芦や難波入江のさゞら波

七車巻の二
夏部

鶏が塒もあやめふきにけり
かんこ鳥のこゑに脉見る山路かな
さくら塚の西吟へ、おとづれて歸るさに
夕ぐれは鮎の腹見る川瀬かな
春はなく夏の蛙は吠にけり
梵天瓜を
白くても白き味なし眞桑瓜
神まつり大和子供や立田歌
瓢簞の花とおぼえつ麥ぼこり

芝柏東武に行を

田草取に日和聞顔見るやうな

天滿祭を拜みて

菅原やみこし太鼓の夜の音

夢想

京の町で瀧がのぼるやほとゝぎす

瀧の糸はなんの香もなし夏衣

彌生六日蘭舟亭にて

松や竹みどりの中に木瓜つゝじ

坂上宵闇堂にて小倉色紙を乞て見たるに、發句を又乞かやされて即時

秋もはや小倉色紙の隣まで

その夜風呂に入し時、又所望せしを

風呂ふけや蚋にさゝれし所をば

仲夏の頃、京に住ける日野屋何がしといへる雨替屋に行ける日、發句望まれて即時

さみだれに金はしめらぬ手わざ哉

須磨にやすらひて

夕立や卒都婆のよめる鳥の糞

嵐にも崩れぬものや雲の峯

巳夫にえぼし着せて

夏草のひとり花やれ水鏡

山下正榮誹名あらたまりたう思へるを、我に文字定よといひ侍りける程に、其勢になれといへば、發句してくれよと乞ける時即時

水に其勢でこそ夏の花

誹諧の道をしへよと、小桂がいひし時

青梅に顏をしかめぬ味をしれ

五月十四日金毛が家に日を待例有て、青水・轍士・之白・百丸各うちかたらひて行けるに、こよひのもてなしにとて、狩野元信が書たる人麻呂の像を床にかけて誹諧興行有ける。予に發句せよと乞けるほどに即時

明やすの此ほの〴〵や烏帽子顏

五月廿八日雨ふらざりければ

年ふれば虎もなみだや忘れ草

水無月廿五日讃州の人におくる餞別

とぶほたる國へいんだら雲の上

孝玄にはじめて逢て

夏衣きたら〳〵もかね〴〵ぞ

九十二にて身まかりけるにおくる。

九十一も二もなしそれも夏衣

妻におくれしを悼ておくる。

よもさぞな明やすいとは僞と

美濃國加納に行ける時

お多賀への道もおいその夏木立

はん女の住けるあとゝて、人のをしへけるに

秋も來ぬ其人の閨の草まくら

青野が原を通りて

盜人の塚もむさるゝ夏の草

加納にしばらくありける時、野々山内匠にまねかれしに

たのもしや何も加納の青田時
中村氏端山が許にてしばらくやどりけるに、心ざしのあさからねば、歸るさの名殘に
まつとならばいなば又こん秋もやがて
六月の時鳥といふ題にて、發句所望卽時
笋は穗に出る雲のはつねかな
金毛亭にて橘といふ題を出して、發句所望の時
雨ぞ降る寐て橘の起てもぞ
廿八日の雨を
とらが袖そこに有やら降泪
一心院常念佛
あら涼し鉦の音死ぬ一心院
靈山にて
雲水や庭行水に落かゝる
大坂に住ける錫太といひしもの、妻を失ひてのち京にのぼりて、我に發句してくれよかし、石塔に彫附て手向たう侍ると、願しをあはれに覺えて
たちばなは其日〳〵をむかし哉
五月五日はじめて、大野の城下に入て
夏草に馴染初たる大野かな
巳夫が近き隣に住て久しく音信ざりける事を、句に聞えこし彌生の晦日はきのふになり、けふ手に落ければ返し
夏が來た隣へだつも霞だけ
岸野次郞三郞は三筋の糸にほこりて、普く世に其名をしられぬ。夏もまたきのふけふなりける日、初てかれが一曲に耳をよせて
卯の花の糸に先よる初音哉
長風興行
若竹にふしなき中のむすびかな
光彥が有馬の湯より出たるに贈る。
五月雨を跡に置つゝ有馬菅
溪水が新宅にて誹諧興行
花や咲筆に机に雲見草
祇園の御輿洗に
鳳凰のいくたびぬるゝ名殘かな
しれる女の尼の願ありとて、北野の西方寺に籠りけるを、望にまかせやるとて、卯の花月三日かの寺にゆきて
我はまだ浮世をぬがで更衣
忍證上人の所望にて獅子谷眺望
麥の穗も赤らむものを法の聲
しれる人のもとへ、今宮祭りに行て
けふとに枇杷も鈴ふるいさめ哉
五月十三日蟻道身まかりけると聞て、十九日におくる。
竹の穗はむかしの馬の夢路哉
眞葛が原にて座神興行
あら涼し身はのら猫の床めづら
花をしむけも夏山の柴車
五月十日月岑興行

下に居ぬ人のこゝろや雲見草　　不二

夜を残す寐ざめや夏の雲颪　　夾木

夜を残すねざめに聞ぞあはれなる
　　夏野の鹿もかくやなくらむ　　西行

ほたるの卷を書たる繪に讃

物いはぬほたるや袖のたはれ草

橘の島といふ有ける。香ばしき國の人、義島はじめて我術に來て、花橘といふ誹諧の書をおもひ立ける程に、橘の發句してくれよと乞ける程に、けふより幾久しくちなみ結ばんとの悦びを述ぬ。

橘よ今をむかしのこゝろ種

笠をいたゞき杖を攜へて、富士見んと立出たる雲歳法師がすがた、風になびくと詠じけん昔におもひよせて、殊勝に侍りければ、一句をおくりぬ。

風になびくけぶりも夏の雲見哉

卯月の末、安藤賴母殿に行て

葉ざくらに心ゆかしや鞍あぶみ

翅黃香　二句

床まくら父に骨折あふぎかな

日に耳にあふがぬ風のかをり哉

今宮まつりに、桃賀亭へまねかれて卽時

いさましや人の顏照る神祭

願事有ける人のもとへ、廿六夜待にまねかれて所望に

待かひや夜の埒もはや明やすき

北野にまゐりて

むすび葉に心こめたる宮居かな

人の子が身まかりけるを悼て贈る。

あぢきなやひろげぬ文に飛ほたる

輕人がつくしに旅立けるむまのはなむけ

海山やみやこの筆に雲見草

同素山におくる。

青梅のつくしにいさむ旅出かな

端午

霧に雲蓬つむ野の朝かゞみ

しなのゝ國諏訪の湖をよめる古歌に

「うなゐごが氷の上を打ならす
　　石な礫のころ〳〵の里

雲水やいしな礫の端五つ

泉海庵老和尙所望

またもこんこずゑの海を夏の花

卯月の末三人を書たる繪に讃
所望

ほとゝぎす馬追船頭おちの人

禰宜の傘さして、片手に燈を提て行ける繪に　盛

雨雲の影神〳〵し傘の下

呑流といひし人、同江のほとりに住て、花匂ひ月さやかなる時〳〵おとづるゝ事も近かりけるを、ことし水無月の初、居所遠くうつし行ける新宅のこぶきにおくる。

花と實の中垣涼し梨子の窓

一礎一周忌

足跡のなきを首途に夏の霜

小蝶草に水鷄をかきたる繪に

香盤の烟もあつき庵かな

杉の村立にほとゝぎす書たる繪に

鳴ちらせ杉のあらしに聲の花

馬貞といひし人、つくしへ出立けるに餞別

ふところに花こそにほへ夏の雲

老ては子に從ふ。

むぎわらは麥掃庭のはゝきかな

是は予が句のよし、先年京にて流布ありしと或人物語有ける。されど控書になき故とゞめ置也。

子におくれ給へる人に、夜の鵆のねざめおもひやりて一句をおくる。

くちなしにはならちかみて窓の花

西行の夏野の鹿の鳴音を、今東行子に離れたる寐覺におもひよりて

夜をのこす袖にまくらに夏の露

末社の神をかきたる繪に

しら鳥のこゑに尾のある田植かな

凌霄や杖に老嚙む嫁が門

凌霄や蟬の團扇に日の相撲

田家行水

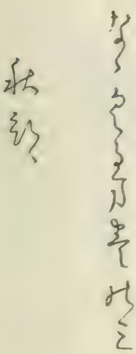
てゝら脫帶跡白し日南水

結髮や鏡はなれて朝すゞみ

夕立やむしろまとひの都麥

麥つきやむしろまとひの俄雨

此句いづれに可定哉、先書付置。西行歌に、「賤の女がかきつき麥をほしかねて夕まどひするこかの里人



から井戸は西瓜に進す月のみか

大和めぐりして

秋もはや宇田の炭がま烟けり

須磨の月は行に十三里、名月を待に廿日あまりといふを聞す、あらじやうこはの法師や。

出ていなば影法師もな須磨の月

休斗宅にて

うづら鳴田も見えたりな鼠丸堂

靈棚や蚊は血ぶくれて飛あるく

光枝氏備後國福山へ、出陣の御供せられしを祝して

しこ草の鬼もしかるゝ陣屋哉

劒術執行する人に

蟷螂の鎌を立るも力味とや

蘭舟亭にて別傳和尙相見の時所望

佛にも是には馴るゝ糸瓜かな

多賀谷氏初の九月江府を出て、伊勢へ代參せし物語をことぶきて

きゝに出て又もや菊の舞の袖

利陽童子に別れし年、八月十

五夜に
「此秋は膝に子のない月見かな
筆とらぬ人もあらふ賦けふの月
をみなへし猿にもなるゝ山路かな
月次の發句乞れて
寄そめて菊をいくへも重ふぞ
重陽
心から栗に味ある節句かな
七夕
田の水の湯と成て星の逢夜哉
九月十三夜、明星待て病後のとぶきをいへる。
後の月入て顔よし星の空
今津に住ける野田某の翁が許に行て、万葉集の物語など聞て日をくれてかへるさ、發句して立といひしほどに、彼集の詞をとりて
二里いぬる門に立たつ芽子の月
宮の嗅あきたつ森のかげろふや
惟然が伊丹の我宿に來りていふ句
秋晴たあら鬼つらのゆふべやな
とりあへず
いぜんおじやつた時はまだ夏
傳の兄の瀬踊をたゝかふと思ふとし、あまたたびなり。荊棘出がたに、やう／＼ことしの秋にこそ其室には入りたれ。
團水
澁柿の霜にあふこそうれしけれ
身は團栗の味もしや／＼りも
紫野といふ題を得て
鳳玉に月の輪きほふむらさき野
九月晦　住吉の神送りに
たれもみな打あふのくや四社の前
奥の海といふ盃に
花に月身をばいづくにおりやしらぬ
いんじ中の秋、老母にはなれける玉祭りに
去年に似たけふならばこそ餚くはめ
猿猴の繪に
御所柿のさもあか／＼と木の空に
也雲軒宗且廣貞
常に思ひ常にむかふ、めぐりて十三のとしになれば
さもこそも香さへ菊さへいつもさへ
鳥塞に
むかふぞや相生のやうに此秋も春に
たが身にもひとつふたつは秋の空
婦子古郷に歸る餞別に
そちとこちの中に季を持わかれ哉
愛宕火やむれつゝ暮を花ざかり
昆陽池
物いはぬ魚の片目や水の月
誹諧獨吟の千句を思ひ出て、長月のはじめ玉津島に願をかけ奉りて
影たのむ三日の月より滿るまで
七月の郭公といふ題にて
卯の花や踊崩れてほとゝぎす
出雲國風水、東武に行なんとて、京にのぼりけるにあひて
八雲立京に秋たつ富士に立
八月十五夜

身ひとつを最中とえなば素秋哉

重陽

久かたや朝の夜ろから空の菊

獨吟戀百句　千句の内

星も曉空をどこらに此ゆふべ

そゞろたがらになみだ吹風

下略

夢見せた枕ひとつに氣をなれて

越前國大野城主に仕へて、八
月廿一日はじめて彼地に到る。

どふ寐ても憐な秋の寐覺哉

大野より京へ歸る時、敦賀と
いふ所見まほしくて、九月五
日彼地に宿し、夜更るまであ
るじとかたりて

弓張のつるがにはなすやどりかな

路通移徙興行

友とする夜も文車の荻の聲

むかしやら今やらうつゝ秋のくれ

九月廿二日出雲の國の人、風
水が死去せしよしを聞て

秋とつれて神に出るかず身はいづこ

芋もやゝみの入るほどぞ三日の月

八月十日溪水、月次の誹諧興
行に

あぶれ蚊のほめかぬ壁を便りかな

心を文車の文にのせて、やさ
しき數に入ける女のもとにて

秋風や窓にまくらに須磨の卷

敦賀宅にて

よひやみに火袋深き木の間かな

九月朔日人の妻もとめたるに

菊にきく垣なき中のむすびかな

文月七日の曇りを

露とりに起て日をするくもりかな

八月十五夜

月見心人の脫（モヌケ）も木にこよひ

九月十三日の月を

身は闇にうづもれし後を此光

立秋

秋立や花の初音のわすれ草

同よろこびを述

秋や今朝たつを眞袖の三ッ柏

七夕

地にあらば薄や星のみだれ髮

中元

鼠尾草のよそも御名よぶゆふべかな

おなじく

魂／＼とて姿なけれど瓜なすび

九月十二日黑門へ、神事にま
ねかれて

神の日と來てさへまねく尾花哉

十五夜　七句こゝに並べ書つ
く。

去年のあすの心にくもる月見かな

めづらしと我影さへや窓の月

明なばの面影こゝら窓の月

愚痴／＼とひとりに更る月見かは

影法師にこゝろを分る月見かな

からやうや月のその空水の月

只の夜の夢のまくらや月の晝

菅家御歌に

「なかめずば夢の枕に通ぬべし
月のきかする時鳥かな

人の妻の身まかりけるときゝておくる。

こぼるゝにつけてわりなし萩の露

鴉賀東武發句餞別

雜

駒引の心にかなふ旅出かな

金毛日待に菊を立添て、發句せよと望し時

幾露と朝待菊の笑顏山

千及がいつくしみ深かりける千白といひし門弟子、長月の末身まかりけるを悼て送る。

燈火をさぞながき夜の力草

中元　二句

わすれめや世にありのみの魂むかへ

靈に玉消ぬほとけに萩の露

九月八日江戸に下りける時、はつかあまりやとせむかしの秋をかさねて、ことし又椙野にむかふ。

その秋のおぼえはなかば富士の空

行秋やむかしをかくて富士ひとり

箱根山にて古郷を思ひ

ふるさとをまねくか尾花二子山

江戸より京にかへりて

秋立や富士をうしろに旅歸り

鯉水といふ人、京に在て我許にたづねよりて誹諧の物語などしけるに、やがて伊豫國に歸りなんといへるほどに書て送りける。

秋かぜを我物顔や旅ぶくろ

題老萊子

世には來て親にそむくを馬鹿踊

長月の末齋藤某が母の身まかりしを悔て

まねくとは有が上こそ薄散る

初秋

初秋や耳かきけづる朝ぼらけ

百丸、因幡堂のほとりに閑居をうつす。むかふに人家もなく、常磐木目を遮てみどり也。

秋は先此宿ゆふべ朝ぼらけ

久しく逢ざる人の、京にのぼりけるが、ちかき内に江戸へかへりなんと聞えし名殘りに

行馬の跡に花なし菊の空

よろこべる事ありとて、何がしの許へはじめてまねかれける時、發句こはれて

千代ませと菊もまひたるすがた哉

五十賀

又五つ走ても光れ星の秋

三宅吟東十三回忌に

袖に玉七ッのむつの鐘に露

七夕

七草や露のさかりを星の花

十六夜

一輪やかけのたれ尾の山かづら

鳴門集といふ書を文十撰し、卷頭兩吟の歌仙あり。

鹿の音や渦にまひこむ浪颪

佐川氏へ行ける時、兩吟所望、
秋季にて吉野の句をとありし
に即時

よし野氣のはなれて白し秋の雲

棄鶯頭に蟷螂をかきたる繪に

柴の戸や入日をぬすむ秋の風

十三夜

春はよし野秋の花とも奥の月

玉井氏松堂、身のさちありて
旅立けるに、馬のはなむけに
一句をつかうまつる。行先も
人これをかざずといふ國にて
侍る。

笠にせよ千といふ字を旅の秋

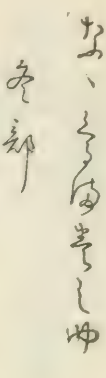
秋月明白ニけ。詠歌の御心
持無御座けや、池の汀に參
會仕度け。

右は松島雲居和尙の手跡にて
持けるを、閑立和尙にまゐら
せける時、發句して書付よと
ありけるに

月影や雲居は消ず鳥の跡

小望月の雨を

待花やこよひ雨月の馬さくり



かけはしに猿の折たる氷柱かな

臘月廿日あまり和州こほり山
に行とて

鎌とぐや伊駒あたりのとしの暮

多賀谷氏江府に歸る餞別

餅歌や君が歲暮の馬下りに

初雪

雪にくにけんによもなふて戸を明た

惠心僧都の作とや、烏丸光廣
卿の讃有ける小野の小町の木
像を、今大路兵部大輔光成の
もとより乞來て、元祿十一戊寅
臘月十七日誹諧興行

花の色はからびはてたる冬木立

おなじ月廿三日芝栢亭にて、
さる事ありて

冬梅の身にあまりたる匂ひかな

をとゝしのから鮭買ふてやすいもの

まつ宵の頭巾や耳を明て居る

ひうくと風は空行冬牡丹

旅泊

つめたさに火を吹おこす大火入

あるゝ物と知ればたふとし神送り

臘月十二日伊駒某宅へはじめ
て行所望

春ちかうわらひ初たかわすられよ歟

なんと菊のかなぐられうぞ枯てだに

餅つく日家の子手をやぶりて、
うすへ血をおとしけるに

かち杵に血を見る餅のつよさ哉

歲暮

としぞけふ朝日や後にくるゝらん

十一月十日鷄賀初て興行
羽二重の御用、新に仰蒙ける

を祝して

羽二重に降やら松に竹に霜

十二月二日鶴賀、東武へ下りける餞別

春待に花の咲身やひがしむき

おなじ月十二日不及宅にまねかれし時所望

何ふるとさだめぬ冬ぞたのもしき

年のくれ　以下十三句

行としのそらの際さへいそがしき

節季候や年の岸なるわすれ草

年をまとふいのちや暮の花かつら

明日ありと闇にふすらんとしの山

としの夜もあかしがたやら須磨心

年の淀春さへひとよ伏見まで

としの瀬や都の世話も角田川

人まろの實へもちかし年の奥

年の鷹神の手業に千代や籠

花もみぢひとつによせつとし車

年木ぬせ輿のおく山馬の聲

行としや市に躁らふ炭翁

山を出て何を聟に飾賣

元祿十五年霜月十五日貞徳翁五十年忌に　團水

なきを霜死なば名はなし若翁

壬白に承り候へば益氣湯參候よし、此頃本草綱目に身を入候、人は日用が大事にて候まま、又肉食も可レ被レ成哉と書付候ると。

霜月十三日

春ならばたんとこしめせ鮒膾

無名庵にては人の口もいかゞに候へく、外へ御出候而御求あるべく候と、鶯助も申傳申候。以上。

惟然坊　おにつら

麥蒔や妹が湯を待頰かぶり

鶴賀亭夢想開の誹諧みちて發句所望の時、錢を吹願ある家なれば祝して

駒引の跡猶はやし梅の陰

翠柏興行

花を雪に見たる法師や雪の花

十二月十二日の夜、各遊興の地に行ける時所望

重ね著に寒さもしらぬ妻かな

冬のにほひをたきとめるむめ　才麿

物音の裏門もはやしづまりて

同じく十九日、鬼貫にをだまきといふ誹諧の書をやりし時、發句して奥に書付くれよかしと望しほどに

うぐひすや五文字ほどく年の内

十月十三日、伊豫國渓島、京に登りて興行

夕陽のさすがに寒し小六月

鳴海の人千鳥の題にてほ句所望

波汐や千鳥のこして歸る海士

鶴賀宅にて

ともしびの青華を咲す寒さかな

備前岡山、山知といふ人に、

はいかいのちなみむすびし時

世の格に居らで冬咲ふかみ草

身にわづらひある人の養生すとて京に登りけるが、やをらこゝろよくて國元の春をむかへ、又春夏の頃來りなんと出立ける、馬のはなむけに

來るとしの身もたのもしや枇杷の花

一馬興行

うつくしく交(まじは)る中や冬椿

何がしが許へ行けるに、太神宮の御祓を備へ、御酒などよろこばしく見えける程に、折ふし筒に入たる花のいろ〳〵とり添て、ことぶきの數にまうけぬ。

天照や梅に椿に冬日和

某が母身まかりけるを、いたみていひやる句

うかりつゝ日頃の桶の水かゞみ

江戸に在ける時、安藤何がしどのゝ館にて

雪霜に程こそ見ゆれ心花

旅泊

よし原にて

寐覺うき身を旅猿の冬木かな

寒からぬ姿夜なき城の花車

江原和風の新宅に招かれ侍りて、布袋の繪にことぶきを添て、進送り侍る。

春待や幸ある家の花ぶくろ

旅宿の寐覺に古郷を思ひて

夜あらしや時雨の底の旅まくら

題大黒天

叶へばぞ陽(やう)につぼめる霜の花

鶏賀宅にて廿六夜待を

うちうるふともしびや冬の心花

素山宅にて挨拶

はや陽(やう)のめぐみて冬の笑ひかな

題王褒

名の消ぬその魂や厚ごほり

題閔子騫

三つがひとつこゝろ香し霜の花

年内立春　二句

去年に似てどこやら霞む年の内

年を産む松も地の、角洞の鹿

葉屋何がしにまねかれて

あらたのし冬たつ窓の釜の音

十月廿四日大森道勇に廿年を經て逢けるに、色〳〵物語ありけるうち、夢中の郭公といふ題にて

「一聲は猶手まくらに殘るかと
　夢もさめあへぬ山ほとゝぎす

といふよみ歌を、かたりけるほどに

冬ながら人のはつねやほとゝぎす

都を去て大坂に居をうつしける砌

つめたいにつけても思ふ京の山

前車といふ釜に發句望ければ

口切やこゝろくるまに前車

肥前國基部莚穂宮奉納卷軸

神杜や稲もあら穂の冬日和
られしきもの、春の曙と夏のゆふぐれ。たのしきもの、秋立朝と、一とせの葬行窓と。

おもかげやとしの鏡もわすれ草
かたち富士に似たる石あり。愛する人の發句せよとしひて聞えしほどに、ひくかりしものを作りておくりぬ。

いつ涌ていつ降雪の玉がしは
水仙にちどりを書たる繪に

夜を残す風猶さむしひとつ窓
塩屋何がし宅にて、諸士參會の時挨拶に

春に似て心うるはし冬日和
備陽の何がし年月難波の地に有て、風雅のまじはりをなしけるに、ことしかしこき仰事ありて古郷に赴なんとて、一何のかをりを菊畑に殘されし程に、予も亦わざことと歌を作りて、馬のはなむけするのみ。

窓ひらけ幸ありのみのかへり花
山家初雪

初雪や柴に咲せて山さくら
稲荷奉納

降からに天女の化粧松の琴
須磨にて

笹鰒や浦風寒ししほ衣
「さゝぼろや浪こゝもとを打過てすまでのむこそにごり酒なれ
・平　敦盛

月に出て德拾ふたり一しぐれ　民鷹
宗月庵に尋しをりから、此道の達人に逢見しに

置事淺し霜の初花　鬼貫
としの暮

老も花と流るゝとしのますかゞみ
此句前に出すべきを一本に見えざる故、校合の後こゝにのす。

七車巻之五

序跋類

高すなご集序

誹諧の大道は言習ふにも得ず。何のかたち作りならふにも得ず。只我平生の氣、心高天原に遊んで、雪月花の誠なるに戯れ、神妙をしらば、目にみえぬ夢の浮橋、足さはらずして踏に心よき地平〳〵たらん。その花に鳴うぐひす、其水に住かはづ、いづれの歌袋も、すべて天地の袋なり。それが中に、羅門外(回)月尋は、難波の流に、高すなごの轍をなして、一集の名とす。いふこゝろは、蹤ぬ道に算へたるの砂子か。あゆみくるしきとよめるのすなごか。さてはかたよらぬすなごたるよな。そのかたよらぬこそ大道なれと

いつて、元祿五年季夏の日、堀川の馬樂堂書ぬ。

佛の兄序

元祿よつのとし、鬼貫の名を馬樂堂にかはり、ことしまた佛兄(サトヱ)になりて、誹諧の自序していふ。そも〳〵此書の名となせし心は、古歌によめる佛の兄にはあらず。是なんのあにぞや。しれる人は弟にあらず。夫道ひろき誹諧、みちせばき誹諧、一筋あり一筋あり、東ねて大道あり、内あり外あり、内外なし。あらむづかしの言葉やな、わすれて年をへし物を。

元祿十一戊寅歲仲冬日

實花集序

いんじ誹諧を古しとすれど、十德をはづさず。今を新しといへど、羽織だにもかさねじとす。道はます〳〵はびこれりといへども、道はいよ〳〵枯に似たり。こゝに八雲たつ國の人丸山子、ことし彌生の中頃、九重の東山に席をまうけて、百韵興行の日、そのかたちたゞしく、禮を上にかさね、儀を下に着す。かの御抄に、公任經信の兩卿もしらざるとか聞えしを、此人は知にやあらん。實花集と題號して、予に序せよといふ。恐れしけれど筆をとるはや。

元祿十六癸未の年花老下弦

何の姿序

細くからび、ふとくたくましく、うつりゆく時〳〵、おの〳〵はいかいに戯れ、それが心を感じ、これが言葉をむつまじとして、ならべたる數にはなりぬ。されど月の隈なきにたらず、花のにほやかなるにとゞかず。たけ高からず心淺ければ、その姿なんかのすがたには似ぬものならし。これはそも何のすがたぞといふより、此書の名にまうけて、たから永き七かさねのとし、春むつみ月のすゑ、連る中の求に應じて　鬼貫書ぬ。

老の寐覺序　百丸所望

誹諧は天のうずめの命の岩戸の戯より、中頃古今集の、もろこしの吉野、うぐひすのひとくのたぐひながく世に傳り、守武・宗鑑其したゝりを汲しより、貞德あり、立圃あり、重賴あり。百丸や、その松江の雫をなめて、花鳥に心をうつし、月雪に笠をたづさへ、此道に耽る事久し。今はた其いひすてたる句をひろひて、六六に希ひ、みづから評を付て、予にはし書せよといへども、一鳥の落字なければ、過策をもて補ふ言葉もなし。おもふに丸はたゞ老の寐覺のよく富る者なるべし。しかのみならず、心また其折毎のむかしにかへりて更に黑髮を撫なん事、是誹中の仙ならんやといふ。

享保元ひのえ申のとし櫻月中旬

誹諧童子教序

呼二水丈一人撰二詩一書二童一子一教一、請二予一序一因賦二一一章一

安一然童一子一教　願一水童一子一教
其説良有レ以　善哉童一子一教

わらべ達皮は味ないぞ眞桑瓜

大語物狂序　并發句跋

予丙一寅季一夏始赴二東一武一。辭二友一人驚一動于其一郷一。送且謂曰吾之所レ欲レ見者、惟富一士一山耳。雖二數聞二諸往一來之客一、言レ大而一已、景一象靡レ詳。請予記一來從二於我一乎。□月歸二于雜一波一。遂至二其塿上一、愴一然而嘆曰、雖二奕生也一、將與レ誰語レ之。但雖二其一人無一言術在レ耳我豈歎二於死一哉、遂出二輸荻一露一效二於緊側一云。

羅々哩居士鬼貫

（□「月歸」の前に數行の脱文あらん（校訂者））

「富士の形は、置るにいさゝかかはる事なし。されども腰に帶たる雲の、今見しにはやかはり、そのけしきもまた／＼おなじからずして、新なる不二をみる事、其數暫時にいくばくぞや。あし高山はおのれ獨り立なば、ならびなからん。外山の園に冬あるはあれど、古今景色のかはらぬこそあれ。

「によつぽりと秋の空なる不盡の山

　夕ぐれにまた

「馬はゆけど今朝の不二みる秋路哉

峯は八葉にひらきて、不生不滅の雪を頂き、吹ぬ嵐の松の聲、裾野になかぬむしの音、驚動／＼、是今たしかに聞く、我レ石を撫て生れぬ先の父ぞこひしき。

此手向草は、よとせむかしの秋にしほれぬ。それが中に、翁が末期に詠メし松は、天地に久し、我レその木のもとに獨句を次で、ことし又不消の露をむかふ。

百韻

根は常磐しばし紅葉ぬ松のつた　鬼貫
　きのふもけふも露は白けれ
あの鴈の來るやよひはかへるらん

下略

和歌の道は我朝の法也。法は常也。その常をしらば誹諧をしるべし。誹諧の夢覺なばまた常をしらん。なれど、我いまだ此道の達人を見ず。世上皆風躰にかゝはり、或は□句を工みにし、言葉をかざりて、前句のなじみをもわきまへず。或は懐紙座所、又は正花をあらそひ、我を立る輩是おのれに德なき故也。德あれば人、夫を惡敷におかず。若我を以て德を押時は、其我にゆづりて、作る所の句の中に、卷頭あるの意味をしらず。只誹諧の味を喰ひ、今日のたすかる事をえずして、得る所、皆病ひのみなり。曰く人と我と常いふ所の言葉、十七十四にきれば、ことごとく誹諧也。其世界をしらば、全體前句のなじみあるべし。發句も亦目前の常を作らば意味深うして、しかも匂ひあらん。その大道にいたらずして、かたちを似せば、一句になどか色香を持ん。善惡を知

て、姿風躰のよき所にとゞまろも、是病ひなれば、只可不可のふたつをもわするべし。わするゝといふも亦おなじ病ひ也。

　ひとり立我誹諧を観すれば
　上手でもなし下手にてもなし

元祿三年五月　日

萩の百よせの序

高津の月は、芦角が萩にかたぶき、大寺のかねは暁の露につたふて感情日閑也。闇の夜の覺束なさは、よきあたりに燈籠置て、其風情あり。夜の露の日に打かはきたる、うるほへる花にはなくてあはれ深し。又雨にうたれ風に吹れて、おのれどち亂合たるは、するどにはあらず。明暮此風情に富る事、秋はたゞ蘆角が家に有べし。見及び聞傳へて、誰それの送れる句、とり揃て、萩の百よせといふ名にして、書をなせる日、序を乞に默止がたくて書ぬ。

　萩を分てもゝをぞかたくわするゝな

遠千鳥序

時は逢がたくて失ひやすし。こゝに來山といひし人、誹道に其名高く、世もて其風をしたはずといふ事なし。予若かりし頃よりしたしく相かたらひ侍りける。昔螢雪の窓をたゝいて、鴬にはあらねど、小鍋やほしきと手づから惠み來りし、其名を小西と呼ていまぞかり。鍋の命はつきなかりしを、去年の時雨月の初、定なき數に入ぬ。其頃句に悼てつかうまつりし、我袖のきはづきもかはかざるに、はや一めぐりのけふにむかふ。

　むかしおもふしぐれ降夜の鍋の音

生前の風流は、木の葉駒にくはしくのすれば、更にもいはじ。彼翁天性酒を愛すといへども、終に親疎青白の眼をわかたず。しば／＼沈醉の中にも、誹諧を諷ふ事、おそらくは一斗百篇の詩を耻ずといふべし。世の人十萬堂と稱美せり。其美をしたひ、其德をあふぐ、食客門人、筆をして盡しがたし。それが中に烏路齋文十、ひとり節を守り、志の高き事、彼陣后山も麓なるべし。よて遠千鳥を編して、いさゝか師恩を酬んとす。これが序を乞にいなみがたく、享保かのとの酉、初冬の日、槿花翁おにつら筆をとるものならし。

伊丹發句合跋

伊丹の發句合といふ物を、月尋が懐より出して、予に跋を乞。見ればかの里の好士等の句に對して、獨四七（板本「つゝ」とあり、今「伊丹發句合」によりて訂正す）の句を番ひたるなり。其姿は面のごとくにして、各一様ならず。天性の得たるをもて、おのづからの風情となるに似たるなるべし。才麿が評は、幕をもて花を粧ひ、卅をうかべて月の見所を求がごとし。難波

津守梅の翁のにほひたえず、柿園の翁のしづくかはかずして、實背からず、誰からぬもの、これ此月尋ならんかし。

正徳甲午年

郭公の巻の跋

支考ほとゝぎすの盃に酔て、西に行ば、座神うのはなの匂ひをしむ。是を束ねて、序は紫堂がすみにすゝめの墨ぐろに書ぬ。

くわい〳〵と夏の蛙の鳴すもと

寶永二乙酉の夏日洛の永昌陽（坊）

鬼貫書

荒小田跋　舎羅撰

あら小田といふ書を作りて、言葉の種をまけば、花あり實あり。［桃々坊］（板本墨消してあり、今『荒小田』によりて補ふ）是はいかいの鳥追。

うれ〳〵と船に筋違ふ鴨の聲　佛兄

古園誹格跋

泉宇盤只（谷カ）ことし仲夏の頃、富士を右にし、頭を誹諧に傾、足を訪尋の車にして、なす所此古園誹格。是を抱きて、初冬久富士を左にして去。

元祿十五壬午初冬

犬居士　鬼貫

贈辭記讃類

南部松井和泉へおくる詞

墨は聖賢の教をとこしなへに傳へ、あるは千里の外に人の心を通はし、あるは四季をり〳〵の詞の花の中立ともなれりける。何がし松井氏、その功を貴み、今製家のおろそかに成ける事を歎きて、遠く橘の京の昔の匂ひをおこし、紀貫之の梅のかをりをしたひて、昔く詩歌連誹の句を乞もとめものしける。それが中に予は伊勢の御の梅の詠歌の句をとりていふのみ。

花と見てをられぬ水に石の雲

開立和尚におくる詞

難波津や、天みつ北のかたほとり、砂原といふ所に、西方便と聞えし隱逸の行者あり。柴の扉をとぢて、甘露王につかへ、庭わづかなるに、こと草を養ひ置て、をり〳〵ごとの花をさゝげ、明暮御名をこがるゝ聲の、いとたふとかりければ、垣のそともをゆきかふ人、袖に露おかずといふ事なし。すべて此世に生るゝ輩、死る例をしり顔なるも、みなしらぬにやあらん。必死る例ある事をひじりにとふてしれ。

まけよ蓮ヶ佛の種も彼岸から

靑松居をことぶく詞

九重や杜鵑の名だゝるは、初音まつ空よりも高く、かへる浪なきといひし磯邊の木陰によりては、かへらん事をしみ、立わかれいなばの山には、今かへりこんとの契りを殘し、都のつとにいさと思し

あねはのすがたは、人ならぬ事をうらみ、曾根高砂のめでたきためしも、住の江の岸におもひよせ、そのことぶきをまた何がしが庭にうつしこしらへて、千代ふべき事をまねくものならし。

青陽の空に鶴さゝき〱花の床

大口理右衛門、去年霜降月のはしめ、白生（しらふ）の鷹ふた羽を二夜つゞけて夢に見しとなん。ことしの秋よろしき　公役の仰蒙りて、家の格式人に越たりけるをことぶきておくることば

大口氏何がし、よゝ難波津に富て、仲尼のほめし所にしたがへば、求ずして万幸おのづからきそひぬ。いんじは、白かねや霜降月のはじめ、玉爪金眸を夢見し事ひと夜ならずとかや。ことし寐覺月の中頃、所の衙吏かしこき仰どありて、又あらたにさきくをかさね揚る事鷹の如し。おほけなけれど、師尚父になぞらへて、陰徳のいさほしならずや。ことぶきいはんとて、寶永つちのえ子、猶千代よばふ菊月の末、筆を取てかいつけて見す。

夢の色のこがね粧ふ日の出かな

一桃子におくる詞

東武一桃と聞えし人は、はるかなる唐土舟の流よる長崎の府生也けらし。一とせなには津の梅のにほひをしたひ、一帆の風に身をまかせて、あまみつや老松の名をもたる所に住とゞまりて、富る人、落葉かく人、あまねく長生の教ひをしたひぬれば、不老を願人すら門前に市をなさずといふ事なし。予もしばらく軒をならべる友となるより、筆をして物いはせよかしと、戯にたはぶれ侍りて、一句をたはぶるゝものなり。

朝風や菊のうなづく菊の露

岡田休意におくる詞

うぐひすの聲めづらしき朝より、ゆふべゆふべかねの音さへ重り、犬吠るあたりを桃盛なる里なるらんといそがれ、とかくして春をしき空も、卯の花月夜に心移りて、さくらの花の俤をわすれ、菖蒲ふく軒端も、きのふになりて、凬のおとづるゝ窓によるこそわりなけれ。秋たつ朝は、星をいたゞきて枕にそむき、やさしき數にも入なんやと、露とるかた手に、硯なんどを洗ひ、それも又跡にながして、くだ物よろこぶ人の心こそ詮からぬ。三五夜の空もひと日／＼指のかずさへをりつくし、其夜になりては、又最中過なん明日の心をおもひおかれ、菊の花日さすあしたは、きぬの綿さへ身になじみて、火桶かゝゆる老の寐覺は、窓に雲行そらをうちながめて、年くるゝこそたのしけれ。

珠數くりて春を待こそ仕事なれ

文臺記　**句選に出たれば略す。**（句選巻之三にあり）

百丸は、一轄の玉川を弄んで、眼をそゝぎ心を洗て、是をたのしみとして、六國の景色身をはなたず。其ちからやつよからん、懐や廣からん。予もひとゝせかの川をわたりて、たのしき事を得たれば、それを投出しぬ。

　是こゝへ蛙の飛んだ足の甲

此の川は、在所分明ならず。畫圖は丸子が扉におなじ。

　玉川を雪かと見れば四月哉

はるかに百餘里はへだゝれど、川は卯の花の瀨にながれて、調布はとこしなへに臼を帶たり。

　川風や夏の日落る臼の音

非情は時を得て花をむすび、月は常住の水にやどる。

　むらさきも白もおなじ萩の枝に
　　いづれを分て月やどるらむ

汐風枯芦に吹わたりて、友ずれの音、かろ〳〵とみゝにさはり、目にさへ寒ういろどりたれば、心既に其國の境界にならふ。

　いざゝらば酴醾瀧のふで千鳥きこ

わすれては汲やしつらんとありしを、皆人毒水などいへどさはあらぬとか聞し。

　谷水や風にたゞよふ月の糞

元祿十三庚辰臘月日　　　佛兄書

犬居士　句選ニ載る所省略せり。故ニ全篇をこゝにうつす。

八月廿日、大坂の市を立て、山居をはなれ、里家の閑なるを好んで、福島に心を動し、みづから犬居士と呼て、誹道をほゆ。尾もなし叉頭もなし。家は汐津橋といふはしのほとり也。前には軒の松風流水に浸して猗ひやゝかに、後には野徑のむし時しも野分に吹おくりて、おのれおのれが聲かすかなり。今は闇なれどやがて月の爲にはとたのしくおぼえて、

　「闇がりの松の木さへも秋の月

明れば長月朔日、家せばくて多からぬ道具さへ置所なく、そこ〳〵に棚などつらせて、ひるの頃まではいそがはし。やう〳〵ほこり掃捨て安坐す。

　吹風や稻の香匂ふ具足櫃

右には武庫・淡路のつゞき遠く聳へ、左は伊駒かつらきの峯はるかに高し。來れる人もなければ、物埋む雲もなく、うちはれて致景こと〴〵くあざやかなり。

　わせるなら霧のないまに誰もがな

むかふ堂島の新地、家立ならび、船きほふ堀江の川風に、西海の浪をわすれ、入日ををしむ。歸帆半は屋上に見こし、萎しらぬ旅人のわかれをおもふだに、此夕はさらにもかなし。

　須磨の秋の風のしみたる帆莚敗

三日瓢海のおとづれに六句の吟。

出て聞はおぬしがいひし秋の風　由平
月も持ったりこちの松の木　鬼貫
跡句略之。

五日十万堂にとはれて兩吟してつれ〳〵を述る。

秋風や男世帶に鳴千鳥　來山
月のあかりに船たでる濱　鬼貫
右歌仙有、跡句略之。

七日盤水みゆ。つれ立出てほとりの野徑に遊ぶ。

秋の風吹わたりけり人の顔
盤水發句略之。

向重陽

けふは家〳〵に鍬を休て、牛馬の息までも靜なり。めのをのこの姿は木綿なれど、綿いれたるころもの時しり顔に、藍までは染ねどやさし。

機しねを網にしたりや栗袋

後名月

けふは梢の松風もくれぬさきより、東山の峯をまねきて、實に非情さへとみゆ。猶頃さりて十五夜の雨も、今宵の空に晴て月明〻たり。

跡の月雨の降時けふの月

十五日家見にとて兩友を得たり。夜までかたりて三吟滿て歸る。

歌仙　盧風發句、鬼貫脇、文十第三。誹諧略之。

『句選』卷の五「禁足旅記」一篇はこの次につゞくもの也。別に『犬居士』と云へるものありて、こゝに略せる連句は悉く掲記せり。校訂者記す。

北條團水が許より愚者といふ題をこして發句乞けるほどに

道に慥なる人は、しらぬをしらざるとす。慥ならざるは、しらず顔なるをよしとす。此故に下手なうして、しかも下手多し。達人の誹諧は、みづから述てみづから心をよろこばしむ。彼知り顔の人は、みづから述て人におよぼし、よしといへば悦び、悪しといへばくるしむ。是己がくらければなり。其くらき事を、己はよくしりて人に隱す。達人は是をみれどもあらはれず、あらはさねばしらざると思ふのたぐひ多し。それ變化をしりて人に先ンずる有。盲者これをにくむ。たとへば剛强のものにつれ立て、柔弱のもの〻道を步むに腹を立るにひとし。抑貞德立圃重頼三老の風姿、世に流布するの後、梅翁出て是を變化す。其時古風をはなれざるの輩、嘲唾して放狂の體といへるを、ふるしと言てわらふ人すら、今の變化をにくむは、其ふるしとさしたる輩のたぐひに、覺えずして今己が心のなりたる事をしれ。

大元式卷頭

「來いといふ時にはこいでおういおい

物狂といふものぐるひに興なきはなし。

我大悟物狂は其興なき初諸人笑ッてとら

す。是珍愛(重カ)。又いやしめさるは柳木ひとり、是迷惑。あらおそろしの此人やな。

寒空に都を迯し物ぐるひ

哀傷類

亡子を悼し詞

元祿八亥のとしのむ月の六日の夜、母の夢想に、南面に松はへにけり、といふ句を見て、其年の亥の月の、中の亥の日、卯の上刻に誕生す。名を永太郎と呼んで、月を送り日を重るにしたがひて、聰明人にこえ、平生もてあそぶわざは、武氣自然に備り、生得强勢なりしを、今年初陽の上の五日より、疱瘡のためにおかされ、霄壤隔ぜずして、中の五日の戊の下刻に終りぬ。抑かゝる凶事のあるべきにや、南面の松ゆゑたきに枯、西裏の松は風やはらかなるに、大枝をれぬ。其外あまたの前表をあらはし來れば、ひとへに天數のまぬがれざる所か。されど愛念しばらくも離がたくて、老少不定の明理、たちまちに曇らんとし、夜の雨は窓をくゞつて胸を叩き、松吹風はいつも聞音にはあらず。とかくして、一七日の夕、骸を納たる寺に行て

土に埋て子の咲花もある事か

日は西山に入て、明朝東山に出。庭の梅の花今年又花生ず。一切是空年の夢。昨日永太郎、今日利陽童子。

木をわりて見たれば中に花もなし
されども木より花はさきぬる

元祿十三庚辰孟春廿一日　　父　佛兄　手向

塩屋何がしが死去を悼て贈る詞

花のあした月のゆふべ、友とせし人の、窓にイむ面影も、いつしか野邊の煙と立のぼりて、その事かの事、夢になりはつるうつゝ心こそかなしけれ。

山吹にさきだつ雨や身のひとつ

百丸追悼

西行は花の下にて我死んとよみて、其きさらぎの中の五日に、ながく世をねぶれるとかや。百翁は上人に一日遲し。歌人誹人ともに、かのきしにいたりて、蓮を同じうせん事をこそ思ひやり侍れ。

落日や釋迦もうしろに入さ山

百丸が妻の身まかりしを聞て おくる悼の詞

此佛、百丸と現のかたらひしける頃より、むつましく、花にほひ月さやかなる時ゝ、九夏の風、玄冬のふすまにも我軒端をとひ彼家に行て、心おかぬ程にありけるを、我やことしの春、さる事ありて京に住離ぬ。彌生の中頃、故郷にくだりてまみえまつるに、はやあす歸りなん、持病御快、やがて都へなんどいさめ侍れば、うちな

みだぐみて、いらへもなきほどに見えつゝ、今のおどろきに思ひ合てあはれにたへがたうこそ侍れ。

春の夜の面さしもなし夏の月

蟻道一周忌に手向る詞

蟻道や維舟の門人にて、我誹諧の弟なり。天性風をいとひ花をおもひ、雲をあやしみて月を愛しつゝ、市中に在て清閑の扉をしむ。かの鷄頭や、鉢叩や、是をいはずば蟻道も蟻道にはあらじ。いひ得て卽蟻道也。その初音や、雪の曙や、心と詞と能相叶て、都鄙遠境の耳をめぐり、貴賤頭を春きて、其感こまやかに味ふ事、舌頭に貨形の業をなさしむ。かくて見もしらぬ人すら、霞をあはれみ、露をかなしむ心を養育するの粮とし、其序ををへずして、いくばくの人に伴ふ。それいづれの上ミをのぞき、又其下モにをらん事かたかるべし。

から鮭は誰が娘ともしれぬなり

此句は予が持し小町の木像のからびたるにむかへるうるはしさ也。若轍の魚の呼事あらば、蟻道又いづれの水をかあたへん。此人や深く風雅の境をこえ、遠く月花の迹をわきまへ、いつしか妄想能斷して、無着空心の佛性をも見得したるなるべし。嗟蟻道、去年の橘月、むかしの人の數に入ぬ。ことしそのけふにむかふ朝、あすしらぬ身ながら一枝を手向るのみ。

夏草の秋まつ程ぞ甘露王　鬼貫

後屋宗旦七回忌をいたむ詞

瓢箪の鯰いんでいづくにかある。なしといはむとすれば、水は流てちん／＼、風は吹て颯々。

死や生や七ッになりし石佛

宗旦末期に「世の中はたゞ瓢箪の大鯰おさへ／＼てにげていにけり」といへるを思ひて書たる詞也。

池西言水が一周忌に發句を手向よと方設が許より乞けるほど送りける詞書をよむ

其名ばかりをとゞめ置て、枯野の薄に佛を見し古人の魂を動せしはむかし也。池西言水誹諧に業をたてゝ、世の中に副ふ。あかれぬ人の數にて、維舟の流を汲ながら、しかも其舟にもつながれず。筆の道學ずして、佐理道風が假名の手もとを覺えぬ。人よくまじはりをむすぶ。七十の年の後、埋れる苔の上をしたひて、今やわすれぬ志にあそび、此いさほしに寄人は、なにがし方設也。是もすける心ざしおとらず。誰かれ月花のかたらひ多して、窓軒端をたのしとす。我も交の莛に曲を覺えし友なれば、をかしさあはれさ心のはしながら、なきあとの石の面こそせんなけれ。

朽もせぬ石に袖なし花すゝき

慶志を悼て鷄賀へ送る言葉

慶志はとし頃はいかいに心をゆだねて、

能友に交、能人したしめる事、たとへば花に、朝のあらしをいとひ、月のゆふべのうき雲を思ふどくにこそ有けれ。されど彼四つの品まぬがれぬ世のならひなれば、いつのころよりか身にいたづきのいるにまかせて、吉野初瀬の春秋も人のながめとはなりぬめれど、ゐながら心をよろこばしむるこそ、去此不遠の理りにも叶ぬべしや。されば飛花落葉のさかひあり、有爲轉變のならひまで、常によくわきまへたるにや。霜の二日の朝嵐に、正念にして念佛とともに行けるこそ有がたけれ。

散とのみ見る日や娑婆の冬木立

來山追悼

花にとはれ月に音信しも、むかしの數に入て、其事かのとに、幾十とせの夢をかぞへ、我袖のきはづきも、戀しき今の形見とはなりぬ。

文も見ぬしぐれふる夜ぞ定なき

補遺

前賢辭の類へ收べきをもらしつ、よてこゝに出せり。

小町の木像を九間にゆづりける副文

小町の名まち／＼なる中に、明月記現形の神名ひとつにのせて、日の本のわざ事に遊びたのしむ人も、わするゝ事なし。昔惠心院源信の観室に有て、人万呂・赤人・猿丸・黒主・小町にあへりと。それより滿誓沙彌が歌を感ず。其因にや、其作は百とせのかたち殘れり。中頃陽明殿下の御家にて寺田無禪に傳はり、ひさしく秘藏して持り。是もゝとせあまり十の五の齡をかさね、手かき歌よむ事人よくしれり。さるを今大路兵部大輔光成あつく信仰して、これが家に祭る。其後ふかき故ありて、我物となれるより、花月の魂いますがどくうやまひ、ほとゝぎすに起され、雪にたはぶれしも、皆御影にさそはれけるよと思ひとりしを、門人何がし養雛齋九間、我にわざことの道しるべせよといふより、燈火のもとにありては、昔の人の俤をしたひ、窓によりては、昨日の雲の行方を思ふ。其風流さすがにいやしからねば、此神像のやどす所も我にひとしき事を思ひよりて、烏丸光廣卿の副文、又予が心覺えをかいそへ、享保五庚子のとし、神むかへ月朔日、九問にこれを讓りて、永く其家に輝ませとあふぐのみならし。

木がらしの底に花行老の浪　鬼貫

七車終

鬼貫一名佛兄、姓は平泉、假名は與三兵衞、津の國伊丹の人、其先はみちのくなる、和泉三郎忠衡より出たり。表して槿花翁といひ、又囉々哩、あるは犬居士馬樂堂など稱せり。中頃洛の堀川に寓し、後は浪華に住す。壯年の頃、やまと郡山本多侯につかへられしかど、久しからで、母の病るにあふて、祿を辭し、歸去來を吟ず。七十三のとし髮おろして、法諱を卽翁と號す。元文三年戊午秋葉月二日、島の内うなぎ谷わたりの家に病沒せりとぞ。今世誹諧を事とする人、鬼貫をしらぬあり、しりぬるも亦深く授りぬるは稀也。これまたく當時此翁はもと伊丹の一豪家にして、點者てふ稱を立ず、はたかの支考野坡などがど、自ら衒(てらひ)ありける類にあらざりし故にや。其小傳を閲するに、鄕を出て後は、浪速に、暫は洛にも居を寓(よ)せ、導引をもて年月を送るのよすがとす。其術たるや、もと明人某國の亂をさけて瓊浦に投ぜしを、道古なるもの、親み隨ひ、賾を探りて、其技をうけ授りぬ。翁は卽古が高弟にして、藍より出るの妙あり。天性眞率不羈にして、よろづ物に拘ず、學あり、才秀で、識尤高し。曾て弱(わか)かりし時、重頼に學び、宗因を友とし、すでに三十年に及ては、卓然として一家をなし、

同郷の百丸青人等を携へ、終に伊丹風なるものを興す。其調天に倚地を抜、俗を用て俗を離れ、初は入易きが如くにして、彌見れば彌難し。生涯の佳什、人のしりぬるかぎりは更にも云ず、すべて集中に、あるは解しがたく、あるは無味なる、あるは嶮なる類などは、初心しばらく手つけずて有なん。束ねていへば、たゞ其氣象の高く逸れたるに、目とゞめぬべくこそ。此道發明の旨は、獨語にみえたり。芭蕉には十六七年もやおくれたりけめど、八ッのころより指を染められしと見ゆれば、稽古の功はけつく先たちてや有けん。よのつねの話にも、さいつころ筆執しめける桃青をのこ、其質さかしとしも覺ざりしが、いつしか諸處にいちじるく振回ありくよなどうちほゝゑみて蔑視せられしよしなれば、まいて其餘の作者は論ずる事をまたず。八十に今ふたつ滿たで、やまふに臥れし時、諸門人枕のもとにさしつどひて何を乞けるにいな吾常々興にふれ、事に感じてほくをもせしかど、今はた實を易るに臨て、頌はしう何をかいひ出べきと答られしを、一人おしてさりともおぼす事なからましや、あはれおせあれかしとしひければ、微笑してさらば吾生付て蛇嫌なる事は、そこたちも知てん、な

くなりて野邊送りすべかめる時、かの柩おほふなる旗の頭に、青き蛇の、赤き舌出したる、いとこゝちあしからめ、これをふよう（不用）にとりはかりたびてよといひつゝ終られぬとぞ。（此ヿ其ノ面側ニアリシ在ノ賜ナル人八十ナカクニテ存生ノ節）さるを今、大坂の書肆高橋生、むかし其祖の翁の徒弟なりし因ミをもて、向に梓行せる選に洩たる句ヽ文章ともについで彫ミて、七車のほいをあらはす。此生もとより雅道にたづさはらねども、相識蘆屋して、余が跋を請ふ。屋も亦誹歌を嗜むにはあらず、たゞ翁の句を喜ぶが故に、此事を託するならし。よつてこれが爲にあら〳〵聞る所をしるして、棠をふさぎ、かつは千載知己の意を淑すといふ。

（蘆屋相識レル醫士某、正サシク翁ノ弟子引傳授ノ人ニテ、常ニ翁ノ昔ヲ語ル。コノ故ニ、尚洩ヌルヿフクヅホマシトスルニ、折節イタハルヿアリテ、止難ク、タヾコノ旨ナ誌シテ余ニ投ゼリ。）

天明三年秋八月上浣

洛　三宅嘯山題

天明三年癸卯初冬

書林

京都二条寺町通
野田治兵衛

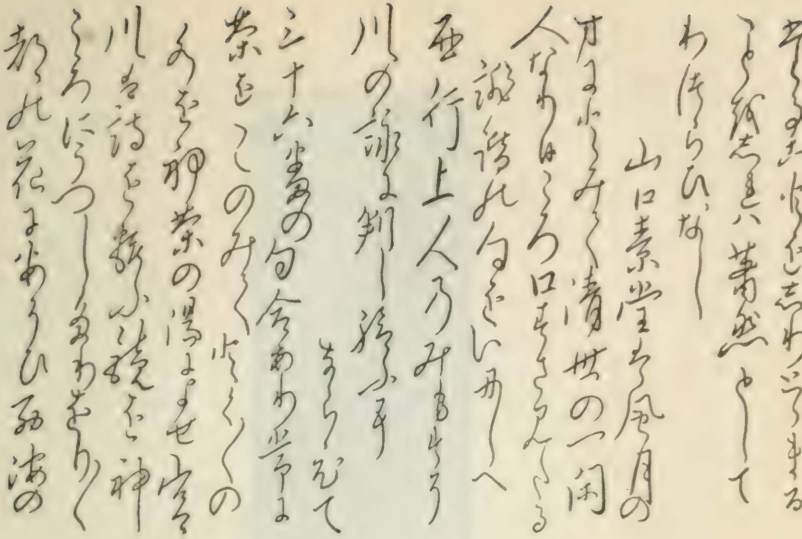
江戸本石町十軒店
山崎金兵衛

大阪心斎橋通北久宝寺町
茨木佐兵衛

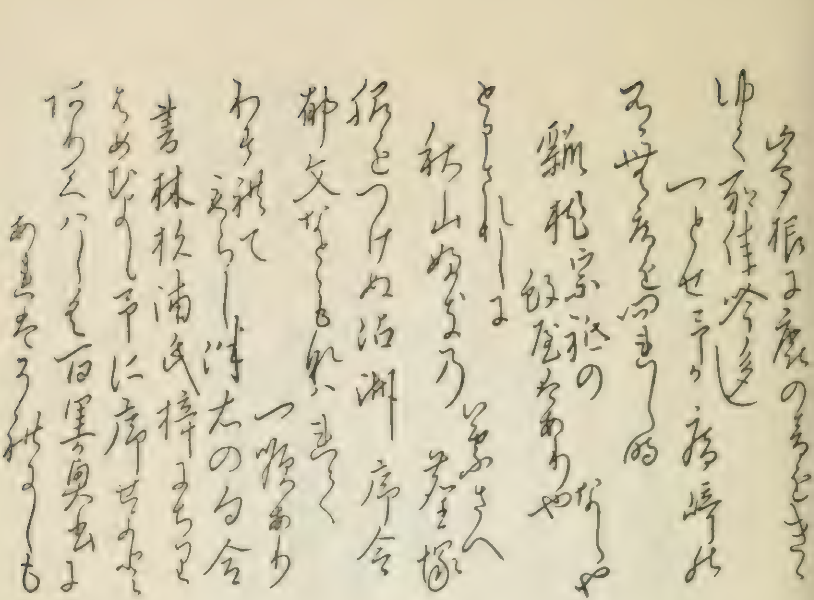
同
大賀惣兵衛

同 心斎橋通南久太郎町
高橋平助

さくく乃台合 上



たることをしり、とゞまるとをしれば、蕭然としてわづらひなし。山口素堂は風月の才にとみて、清世の一閑人なり。日ころ口ずさみたる誹諧の句を、いにしへ西行上人のみもすそ川の詠に判し給ふにならひて、三十六番の句合あり。常に茶をこのみて、とく／＼の水を初茶の湯によせ、宮川は詩を粧ふ鏡を神こゝろにうつした



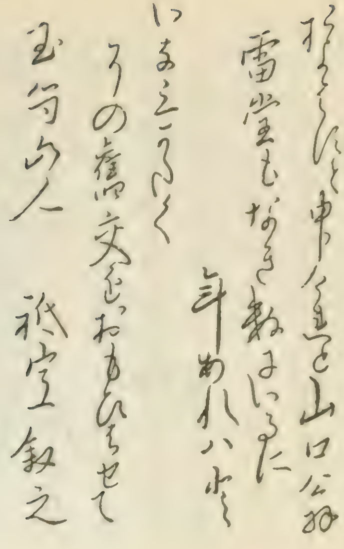
り。　をり〳〵都の花にあそび、西
海の島根に鹿の音をきゝ、ゆく所
佳吟多し。一とせ予が庵崎の有
無庵を問れし時、

　瓢枕宗祇の蚊屋はありやなしや

と申されしに、

　秋山ぶきの葉さへ塵塚

脇をつけぬ。沾洲序令郁文など
ともなはれて一順あり。わすれ
てもらしつ。右の句合、書林杉浦
氏梓にちりばめむよし、予に序せ



よとあり。くはしく百里が奥書にあれば、それにしもおよばずと申けれど、山口翁、雷堂もなき數にいるに年あれぱと、いなみかたく、その舊交をおもひよせて

玉笥山人　祇空叙之

七そぢにちかき秋の頃、わらは病にかゝりて、三途瀬川を二瀬もこへなんとせしが、立歸り、病の間ある時、むかしいひ捨たる狂句どもを、倩おもひ出て、自の句を左右にわかち、西行法師の御裳濯川のまねして、三十六番の句合となし侍れど、今の代に俊成卿とたのむべき人なければ、判者も又素堂なりぬ。其角が句兄弟は、他の句に自の句を寄せ合ての名なり。今此句合は一腹一生にして、多くはみそぢ前後のふるごとなれば、おかしくもつたなくも見給はんかし。

かつしかの隱士　素　堂

一番　歳朝

左

とく／＼の水まねかば来ませ初茶湯

右

宿の春何もなきこそ何もあれ

判に曰。西行法師をしたひての句合なれば、第一番に汲ほす程もなき住居かなと詠じたまふよし野のおくの苔清水を出されけるにや。二月堂のわかさの水もよぶに應じてわき出るといへば、遠くとも来るまじきにあらず。右、何もなきこそとあるは、有無の無にてはあらざるべし。此無にはあらゆる物を備へて、胸中の樂しみはかり難し。よつて勝負をわかたず。

二番　柳

左

西國下りの頃周防長門の間の堤に大木の柳ありけるを

胴をかくし牛の尾戰ぐ柳哉

右

何となう假名書習ふ柳かな

左、大木の柳言外にあらは也。されども右のやなぎに立並ぶべきにあらず。

三番　椿

左

筬の音目を道びくや藪つばき

右

谷川に翡翠と落る椿かな

左、田舎わたらひに有けしき也。右、翡翠の魚を見て飛入たるいきほひに椿の靜に落合たる拍子、非類なきによつて右を勝とす。

四番　紀行

左

大磯にて

あれて中々虎が垣根のつぼ菫

右

命長し其如月の前の顔

左、なだらかにいひくだして文字餘り耳にさはらず。右、西行の顔を見しられたるやうにて、をかしく侍れど、死して亡ざるものは命長しといへるこゝろを持て見れば難ずるにおよばず。よつて持たるべし。

五番　花

左

木の間ゆく被に散し櫻かな

右

所以ありて彌生の頃東武へ下りけるに

ふんぎつて都の花にくだりけり

左、都のすがたながら、しゐて稱するにたらず。右は五文字におほくの心をこめて、一句すこやかなり。洛陽の信徳やゝもすれば此句を

いひ出しけると也。判者も又信徳がこゝろをこゝろとす。

六　番　　花

左　大和めぐりせし頃よしの山にて

是つらよし野の花に三日寐て

右　三輪

至れりや杉をはなとも社とも

三輪の神はやしろなし。なきこそ神のかたちなりけれの心なるべし。
左、論語をよみて是つらの人といへるこゝろばへにや。されども三輪の至りには及がたし。

七　番　　花

左　粟津が原にてはせをの塚を弔ひて

志賀の花湖の水それながら

右　はせを行脚に出て久しく歸らざりしころ

いつか花に小車と見む茶の羽織

左、粟津が原はむかひに志賀の花、折とらば手ふさに氣がるの心をとり、前の湖水をそれながらといへるにて、手向になすぞ加茂川の水、とよめるこゝろをもとるなるべし。
右は司馬温公の花外の小車ひさしく來らずと堯夫をまたれしこゝろと見えたれども、花のあたりの太山(みやま)木におなじ。

八　番　　櫻

左　福原

菜畠の霙が左近のさくらかな

右　豐國にて

たれか見む櫻のころの野人參

左、いかめしく築立られし新都の迹も、今菜ばたけとなりて、感慨すくなからず。
右も又朝鮮までしたがへたまふ名殘に、藥種にも野菜にもならぬ野人參の生出たるとやなぞらへて持たるべし。

九　番

左　雲雀

朝虹やあがる雲雀のちから草

右

夕風に見うしなふまでは雲雀哉

左、高くあがるこゝろは明かなり。
右は何の手もなくてよろし。殊に見うしなふまでは、と文字の餘りたる處に意味あるにや。右尤爲勝。

十　番

左　落花

餘花ありとも楠死して太平記

右　惜春

春もはや山吹しろく苣にがし

左、餘花は夏の題にて侍れども、一句を味ふれば、落花のこゝろ明らか也。むづかしけれども一格あり。
右も春をしむところ淺からず。よき持なるべし。

十一番　　初夏

左

垣根やぶる其わか竹をかきね哉

右

村雨につくらぬ柘植の若葉かな

右、柘植はおかしく作る物のやうになり來るを、おのづからなる若葉にむら雨のけしきさへそひて、うるはしき姿也。

左も八雲の神詠をかりて一ふしなきにあらず。これ又持にさたすべくや。

十二番

左　鎌倉一見の頃。

目には青葉山ほとゝぎすはつ鰹

右

夜鰹やまたじとおもへば蓼の露

左、目には青葉といひて、耳に郭公、口に鰹、とをのづから聞ゆるにや。かまくら中の景色これにすぎず。

右も來ぬ夜あまたの、といふ古歌をとりて、ほとゝぎすの對には尤の事ながら、左と同日の論にあらず。

十三番

左　蓮

我はちす梅に鴉のやどり哉

右

鬚宗祇池に蓮あるたぐひかな

右、むかしの人は髭を貴びて池に蓮なきはよき男の鬚なきがごとしと歌にもよめり。ことに宗祇の髭は香を留んがためときけば、蓮のたぐひとにや。

左、君子の蓮を愛するは、梅にうぐひすの宿るにおなじ。我蓮を愛するは不相應と聞ゆ

無勝劣。

十四番

左　蓮

一葉浮て母に告ぬる蓮かな

開かんとするとき筆に似たり。

右

己（おのれ）つぼみおのれ書て蓮かな

左、蓮、沾徳が幽蘭集孝の部に出せり。山谷詩に、蓮を見て母の慈をおもふとは實の事をいへり。一葉の浮みたる所をつげたるも、猶孝のこゝろなるべし。

右、あまたの中に、もやうにはさもあるべし。左におよばず。

十五番　螢

左　宇治

喜撰法師ほたるの歌も詠れけり

右　瀬田

水や空うなぎの穴もほし（星）螢

左、都の辰巳と詠る外に、甚泉と文字かはりて螢の歌あり、よめる歌おほからぬよし、貫之さたせられ侍れども、僞兼卿、宇治山の喜撰にして、玉葉集へ入たまふ。此論にかゝ

はらず、右のほたるをまされりとす。

十六番

左　河骨

河ほねやつゐに開かぬ花さかり

右　澤瀉

をもだかや弓矢立たる水のはな

左右ほまれもなく、そしりもなし。

十七番

左　箱根

朝涼し沖の小嶋のみゆ泊

右　不二

山頂や鹿子白無垢土用ぼし

左、實朝卿のはこね路をけさ越くれば、と詠じたまふを、峠のしゆく泊りにとりなされて一興あり。所は山路ながら、沖の小嶋のと侍れば、泊の字を用ひてもくるしかるまじきにや。

右、夏の不二さも有べし。ふじといはずとも其心明らか也。勝劣なし。

十八番

左　木曾路を登りける時。

夕立にやけ石涼し浅間山

右

鴨の巣や富士のうへこぐ諏訪の池

右、すはの池には富士のかげうつるといへば、其うへに巣をかけたるにや。

左は一句すこやか也。これ又持ならんかし。

十九番

左　愛宕山に一宿のころ。

しら雲を下界の蚊張につる夜哉

右　比叡山の絶頂にて。

山すゞし京と湖水に眼三ツ

左、あたご山は蚊帳つらず、帷子着ず、夏しらぬ山ともいへり。白雲寺と號すれば、其よせもあるにや。

右、山といへば叡山たるも勿論の義なり。兩眼の外に心眼をつけて見よとにや。山の高さも句どしらへも、甲乙なかるべし。

二十番

左　みな月三十日加茂川にあそびて。

みたらしや半流るゝ年わすれ

右

千鳥聞し風の薫りや蘭奢待

右、東山義政公、鴨河へ千鳥聞に出たまふ。おなじく千本道貞といふ者も、袖に蘭奢待をたきて出けるよし。義政公聞付給ひ、袖香爐を御取かはし有て、今の世に大千鳥小鵆とて名物たり。しかれども左半年の年わすれ、こゝろことば調ひ侍れば、勝たるべし。

二十一番

左　薄

三日月をたはめて宿す薄かな

右

皇や小野のお通が花すゝき

左、こゝろなき物に心を付る體にや。

右、一體ありといへども、左のすゝきにおよばず。

二十二番

左　西瓜。

西瓜ひとつ野分をしらぬ朝哉

右　南瓜。

南瓜やずつしりと落て暮淋し

左、草々はふしたる野分の朝に、西瓜のひとり動きなきさま、見るが如し。

右、南瓜の落て、さびしさをいやましけるにや。西瓜のあした、南瓜の夕、對なるかな、對たり。

二十三番

左　西國下り、のころ。

さびしさを裸にしけり須磨の月

右　明石。

朝霧に歌の元氣やふかれけむ

孔子は四時の元氣とあれば、人丸も歌の聖なれば、かくいへるにや。左も一興はべれば、おとるべきにあらず。

二十四番

左　玉津嶋。

霧雨に衣通姫の素顔見む

右　いつくしま。

回廊に汐みちくれば鹿ぞ鳴

左、西湖の雨のけしきを、美人のよそをはぬ時に詩人のさたし侍れば、素顔といへるにや。

右、いつくしまの景氣は、回廊に汐のみち來る時なるべし。あしべをさして田鶴鳴わたるのおもかげもそひて、玉津しまの雨のけしきよりはまさるべくや。

二十五番

左　甲斐が根にて。

ほぞ落の柿の音きく深山かな

右

晴る夜の江戸より近し霧の不二

左、音なきより、かへつてさびしさまさりけるにや。

右、めづらしくは侍れども、ほぞおちのかたまさるべくや。

二十六番

左　むさしの ゝ月見にまかりてかへるさに。

袖みやげ今朝落しけり野路の月

右　むさし野の薄を手折て大佛の前に耳かきをひろひし事を思ひ出て。

宿に見るもやはり武藏野の薄哉

此番判なし。おもふに翁あやまつて其辭をもらすか。

二十七番

左　石山。

雲半山石を殘して紅葉けり

右　西山の茸狩にいざなはれて。

螢狩やひとつ見付し闇の星

左、石山のいしは尋常の石にあらず。雲もこゝろして、半山におひたるにや。古き歌に もみぢぬもみぢてとも侍れば、紅葉けりも難ずるに及ばず。
右、ほしひとつ見付たるよの、といふ歌をとりて、螢狩の情をよくうつせり。左におさ〱おとるまじきか。

二十八番

左　蓮實

蓮の實の泥濘をうつ何こゝろ

小野川洛陽に住所求とて登りける頃、予も又其心ざしなきにしもあらず。

右

はすの實よとても飛なら廣澤へ

左右の蓮實あまれりや、たらずや。

二十九番

左　みのむし

簑むしの角やゆづりし蝸牛

右　隣家の僧行脚に出て久しく歸らざりしころ

みのむしやおもひし程の庇より

左、清少納言、みのむしおにの子なるよし申侍れば、角の有べきに、かたつぶりにはづりけんとにや。
右、康頼入道の都歸りのころ 思ひしほどはもらぬ月かげ、と詠じたまふをおもひしほどのと云て、荒涼たるけしき有にや。可為持。

三十番

左　蜂

有明も蜂の威に氣をされぬ

右

あさがほよおもはじ鶴と鴨のあし

左、終夜かゞやきたる月も、明がたになり、朝がほのしばしのさかりに、けをされたるにや。世上のありさまかくの如し。
右は莊子に鶴のあし長くとも切らばなくべし、鴨の足みじかくともつがば鳴ん、といふこゝろをとりて、朝顔のさかりすくなきをなだめたるにや。有明のかたこゝろふかきやうに侍れば、勝たるべし。

三十一番　月

左　獨樂

我舞て我に見せけり月夜影

右　十三夜

漢土(もろこし)に富士あらば後の月見せん

左、かくれたる所なし。
右、もろこしには後の月見のさたなし。我日の本の風雅に富るこゝろをいふなるべし。しかれども、獨樂の舞なを見どころあり。

三十二番

左　忍の岡のふもとへ家をうつしける頃

塔高し梢の秋のあらしより

右

鮭の時宿は豆腐の雨夜かな

左、樹の茂りたるうちは、塔も見え隠れなるべきを、秋のすへよりまばらに成て、嵐のうちより塔の生出たるありさま、さながら畫出せるがごとし。

右も蘭省のはなの時もさびたる體、しゐておとるべきにあらず。

三十三番　落葉

左

寒くとも三日月見よと落葉哉

右

松陰におち葉を着よと捨子哉

左右ともにこゝろなき物に、こゝろをつくる體、勝負を分たず。

三十四番

左

天の原よし原富士の中ゆく時雨哉

右　三保夕照

網さらす松原ばかりしぐれかな

左、文字餘耳にたゝず。不二の中ゆくなどおもしろし。

右もしぐれといひて、夕照のけしき明か也。よき持たるべし。

三十五番　雪

左　近江八景の内比良の暮雪をいふ

暮おそしつる賀の津まで比良の雪

右

炭竈や猿も朽葉もまつも雪

雜兄、雜弟。

三十六番　歳暮

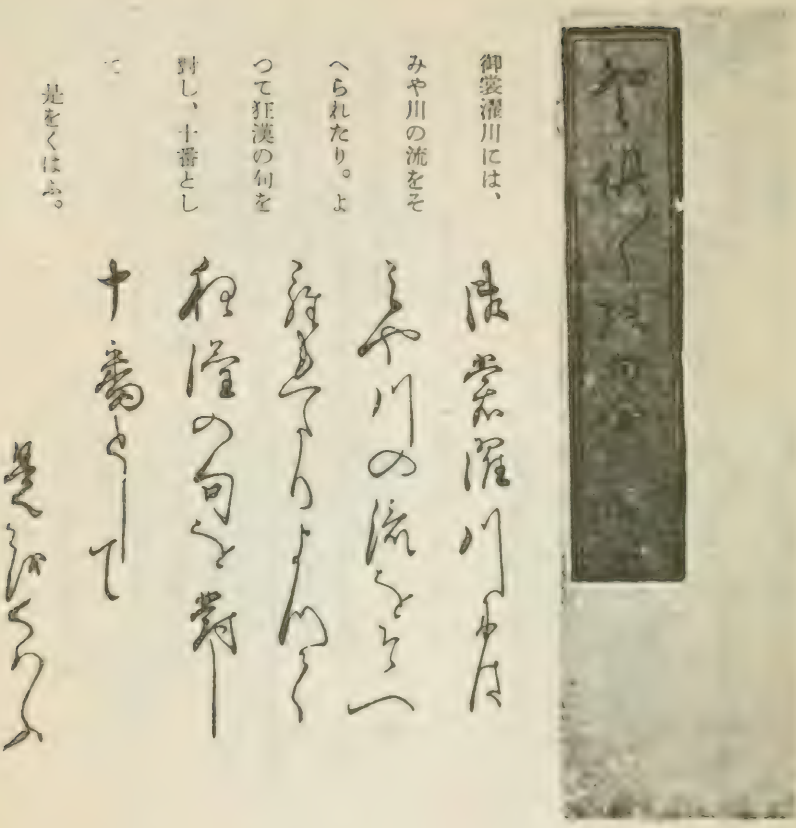
左　大晦日

和布刈遠し王子の狐見にゆかむ

右

鳴戸磯渦まく暦くれはやし

左、めかりの神事は、大晦日の夜半ばかりのよし、遙の西國に侍れば、當國のきつね見にゆかんとにや。年浪のはやき事、鳴戸よりも早しといひて、世中をわたりくらぶる歌のこゝろもこもりて、一巻の軸といひ、感味すくなからず。右尤勝たるべし。



御裳濯川には、みや川の流をそへられたり。よつて狂漢の句を對し、十番として是をくはふ。

其一

左

梅月ヘ詩ノ妻見

右　棹ニ少長子ヲ一

炷（たき）さしや麁朶の中よりこぼれ梅

左、梅月は誠に詩を植ふ鏡なるべし。

右、少長子は名高き七三事にや。名香にたとへられたりとも、誰かすぎたりといはむ。

左勝たるべし。

其二　花

左　よし野山夜興

白雲ヘ花ノ燭（ボン）燈（ボリ）

右　よし野川にて

鮎小あゆ花のしづくを乳房かよ

左、日月の笠を傘と申侍れば花のぼんぼりさもあるべし。

右もいさぎよくははべれども、白雲におよばず。

其　三　　花

左　初瀬山

無價花開張
佛黄金一枚

右

宿からん華のくれなば貫之の（にイ）

左、六月清風を買ば價なからん、のこゝろなるべし。

右、貫之ははつ瀬の中子なれば、宿坊も有ぬべし。の留りは古き歌にもわづか一二首ならでは見え侍らず。めづらしくははべれども、開帳のかた勝ぬべし。

其　四

左　はりまめぐりせしころ

牛行花纔綴

右

遅き日やしかまのかち路牛で行

雨牛無遅速

其　五　　初夏

左

土龍蹟竹子

右　洛陽の花終りける頃

亦是より若葉一見と成けり

（板本下五を「成にけり」とすれど誤なるべし）

左、蹟の字よろし。

右は其角が句兄弟に見えたり。下の五文字異風ながら、不レ爲レ不レ可。可レ爲レ持。

其　六　　蓮

左

礫玉風蓮曲

右

浮葉卷葉立葉折れ葉とはちすらし

左、露といはずして、玉を礫とあるも、おもしろし。

右の蓮はもやらに出されたると見えたり。風蓮に及がたし。

其　七

左

綿花蘭落子

右

獨橋や夢路をたどる蕎麥の花

左、綿の花はまことに蘭のはなの面かげあり。そばの花は夢中に物を見るに似たり。なぞらへて持たるべし。

其　八

左

鬼燈姫一口

右　長崎にて

珠は鬼灯沙糖はつちのごとく也

左、珍らか也。

右、阿房宮の詞をかりて、所がら其多きをいふなるべし。

姫が一口、いさゝかまさるべき歟。

其　九

左

十月爐顔見

右

茶の花や利休が目にはよし野山

左、十月はといひて、霜月在

胥靡の顔見せ、をのづからあらは也。

右、古風ながらしもにたゝず。

其十

左

鑒レ呉西－施－乳

右

名をとげて身退しや西施乳もどき

左、鑒の字意味あるにや。陶朱公西施をつれて身しりぞかれしを、河豚もどきはよき見立也。呉越作稗のかしら書とすべし。勝負なし。

右六ゝの句合、并二五の追加、かつしかの素隱士、みづから舞、みづから戴うつて、老のおもひでとせり。ある人其古めかしきを笑ひ、且今やう姿のきこえぬもいかにぞやと、他の非をやめり。答いふ。もろこしにも盛唐晩唐の品〳〵あり。我日の本にもあるひは花の過たる時有。實の過たるもあり。また花實相應の時節もありけるにや。たとへば夏來りて綿をぬき、冬來りて衣を襲ぬるがごとし。

時のいきほひいかんともするとなし。汝は汝をせよ。我はといひてやみぬ。

俳聯　五十韻

歸－走市－中－市　素堂

火－難地－震－騒　全

主－從更－後－更　知幾

煤拂屋－前敲　全

蒜嗜無餘－念　素

蓄－書有苦－勞　知

月丸同異－國　全

露細碎淺－濤　素

蒲－穗掉狐－尾　全

萩－花散兎－毛　知

大－風通－路障　全

小－霰寢家藏　素

招禿三－絃撥　全

挽君二－艇艚　知

髮－筋綱鬼繫　全

足－袋緒猫跑　素

稚子待宮笥　素
敗軍折月背　知
虫鋼非敢後　全
雁字有何教　素
花不言言當　全
梅無落落撈　知
◉流波盡曲　全
卍滿屋應治　素
鮹鯑金砂子　全
鰻鯰鋳鍔刀　知
薩摩男立揚　全
高野聖商毫　素
要要扇根本　全
釘釘楯板擣　知
茶壺千兩物　全
酒器五文匏　素
枕石而衾草　全
的山兮矢蒿　知
月提常住餅　全
露毀應行饈　素

蓮瘦小町果　素
蘭粧褒姒放　知
麒麟羹鳳炙　全
蝙蝠袴鵂袍　素
木偶人勤在　全
伽羅佛位高　知
隱居時釣狸　全
緩步或騎犛　素
老子非常耳　全
達摩破坐尻　知
金經朝暮役　全
論義古今交　素
若紙着花月　知
捻糸卷柳皐　素

（この巻の第二句「火雞」の二字を缺字とせる板本あり。素堂が數次類燒の厄に遭へるを忌みて削りしならん。今別本によりて之を補ふ。）

俳聯　五十韻

素堂

寒梅魁出鐘　知
雪竹折成節　素
茶煮叩居睡　全
餅虧助困窮　知
謡聲皆歷々　全
仰旨最中々　素
世界挑燈月　全
天河寫繪霧　知
鹿鳴怨獨寐　全
虎墓歎十終　素
敵討狂言切　全
男振乘物供　知
投錢爲買喰　全
横戟好平攻　素
猪武者齒反　全
魚商人足忠　知

投參無定宿　知
遠便聽虚空、　素
歎遺仲丸死、　全
軍傷貞任恩　知
京看花與月　全
天寒柳予虹　素
（二表）蹴笛紙雲響　全
打環繪馬濃　知
ほし家内見　全
あめ戸間通　素
遲白鵜牛牯　全
鞋青蜓蟀桐　知
辻香優作菊　全
園取幅寬楓　素
荷月往銀釜　全
穿山勢鐵弓　知
虎行休一谷　全
願種詩三宮　素
在ゝ物成好　全
方ゝ賣買隆　知

（二裏）流浪西塔辨　知
勇猛拔田公　素
瓜掛附瓜意　全
竹書見竹驢　知
金刀珍客用　全
木几老人從　素
動話鳥原陣　全
飽遣江戸風　知
狹相顏色麗　全
薛女口紅濃　素
鰲甲笄穿月　全
象牙軸掛櫳　知
活花中立後　素
采蕨歩行蹤　知

（この巻ウ五句目「買喚」は「買喚」の誤記ならん。）

かつしかの素堂老人家の集ありてひめ置れけるが、沒後いかなる手よりか洩けむ書肆衛山房今あらたに彫刻せんとす。これを見れば、はじめに初茶の湯の句あり。さるによつて世にとく〳〵の句合と稱す。又一本あり。茶隱士菊道人の俳名をまうけて三日一舌とよぶ。往〳〵たがひある中に、老の春須磨の秋の句あり。いづれの書賦眞僞のわかちもなけれど、此二章を發端として追加歌仙となしぬ。されば序次にある所の御裳濯川宮川の其ながれを結ばんの微意賦。

老の春初はなげぬき今からも　素堂
今からも又閑に呼接　宗瑞
猶なしにしかも胡蝶を遊ばせて　麥阿

にほひハツ〳〵と木葉を干す　素丸
あちらへもこちらへも橋の朝の月　咫尺
鱸もたせて人を尋る　珪琳
ウ 弓取のまだ新米に有つかず　瑞
御縁は深い志貴の毘沙門　阿
傘をかさせば婆々のうれしがる　丸
焼んの薔薇の白き十月　尺
運牛の訶られながら蹉づたひ　琳
ようは寺地に見立給ひし　瑞
泊ツても夜寒がらせぬ金屛風　阿
身の前に月もかたぶく　丸
どつかりと下がる今年の綿相場　尺
佐田の鳥居もすぐ通りする　琳
飯櫃をきつね見送る畑の花　瑞
春やむかしの勤奉公　阿
ナ かけろふのはかなく諷誦(ふじゆ)を作られた　丸
六畳敷の隅に樽酒　尺
隠れてもまだ何所やらに大晦日　琳
あれを雇へば子が付て來る　瑞

腹掛になるほど綾の裾はつれ　阿
路次からもゝる雨の空炷(そらだき)　丸
我事のやうに御供の物おもひ　尺
銅鑼へ星のちら〳〵　琳
初月の出るとなくなる和田峠　瑞
餅屋の戸さへ立て秋風　阿
蜂の聲はきらひな疱瘡神　丸
大僧正の不便(ふびん)がらしやる　尺
ウ 降雪のとにけふから寒の入　琳
屋敷の金の出さうでは出ぬ　瑞
町の衆に歌人〳〵となぶられて　阿
又この春も旅をしたがる　尺
一面に櫻の咲てあたゝかさ　丸
柳のもとにのり捨し馬　琳
土佐が繪の彩色兀(はげ)し須磨の秋　素堂
日は入はてゝうそ寒き松　咫尺

酒もりに月を出て見ぬ人もなし　珪琳
これも殿からわたる燭臺　宗瑞
川風に關所の障子びり〳〵と　素丸
ウ 葱を洗へば鴨は羽たゝく　麥阿
どなたへも今は頭巾をとらぬ也　尺
勧進能のけふの鉢の木　琳
水茶屋がこれは煙たい馳走ぶり　阿
待テどくらせど郭公まだ　丸
夏書(げがき)する机に誰が文じややら　瑞
いもうと君もともに朝起　尺
九日は門の淋しい節句にて　琳
奴と見ゆる居風呂の月　阿
守山は烏も寝れば鶫(むく)も寝る　尺
いつものころの鉦たゝき坊ン　瑞
怖(おど)いても若子は花を折たがる　阿
土筆だらけに社家の古庭　丸
ナ 幾春賊訴訟に出たり戻ツたり　琳
でんがく法師の飛ンだ世の中　瑞
吸物は藻に埋るゝ玉かしは　丸

笑ふてばかりござるかみよ　阿
幾年に殖た銀がふたつみッ　瑞
つまみ蟷折の旅の裝束　尺
山伏の噺しかける氣味わるき　丸
纒すだれから人魂が出る　琳
夕顔の小便壺にほの〴〵と　阿
もはや千守に火の燈る也　丸
芸通になつら男も走るらん　瑞
こちのも踊よそのむす子も　尺
年寄のこゝろ細がる盆も過　琳
何を聞て歟飛脚わさ〴〵　阿
碓の一から殖てきのふから　丸
日出たさうなる明六ッの聲　琳
太ゝは盗りの衆も花こゝろ　尺
海はのろりとしても行春　瑞

敍情返句

有自問自答のぬし素堂は、あづまの長明ともいはんや。山口松兵衛の時変り貧しからず有けるを、こがらしの筑波はけしき冬の風の烟に逢ふ事幾度か。又一族の不幸に纏のたからも失ひ、悔事なく、老母を供して、行水の流もとのあらぬ葛鹿（飾）深川の草むしろ、杜を堀建、ばせを庵の風に耳をひれふせ、元日やおもへば淋し秋の暮、此頃より風俗うつりかはり、古池や蛙飛込水の音、是を味ひ、此池の前にうしろに、素堂は十蓮の句を、持出をめぐり、芋名月の十三句みのむしに筆の枝、ある時ばせを曾良をつれておくの細道におもむかれける餞別、

我をつれて我影歸る月夜哉

松しまの松陰にふたり春死なん

我も死なんと彌陀の顔に落日を請月影は入山の端もつらかりき、此古ことに達ず、一生をすみ畢ぬ。

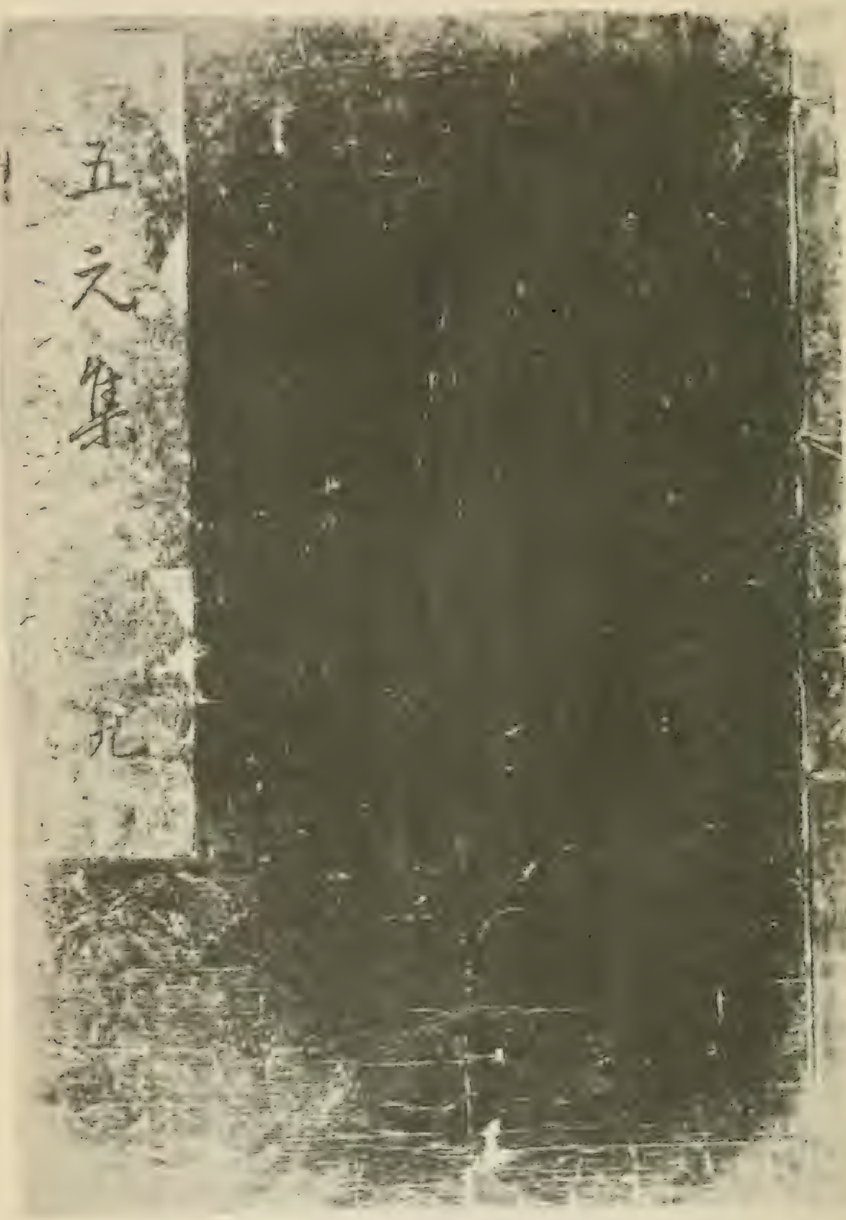
かくれては飽人多し後の月　予

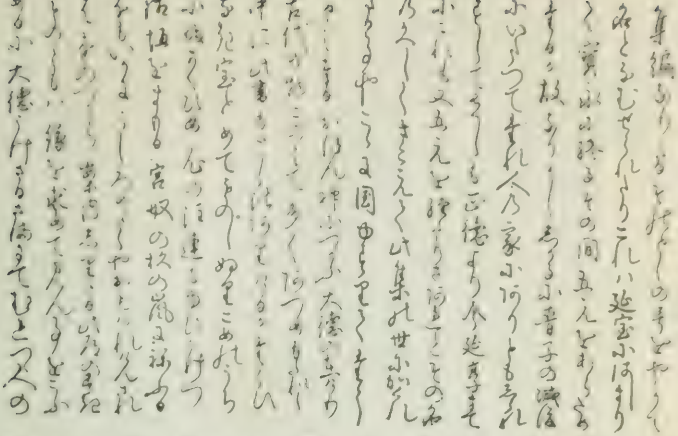
此句を云捨たるも此人にはなしとく〳〵とむかしなつかしく跋に書て置物也。

享保十貳年
丁未春　雷堂百里

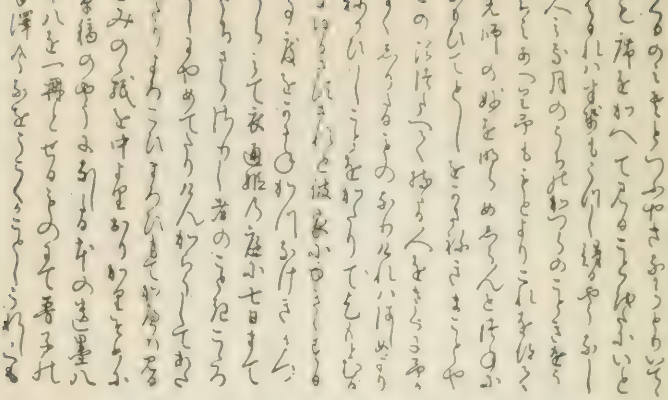
享保二十年乙卯正月

杉浦三郎兵衛蔵

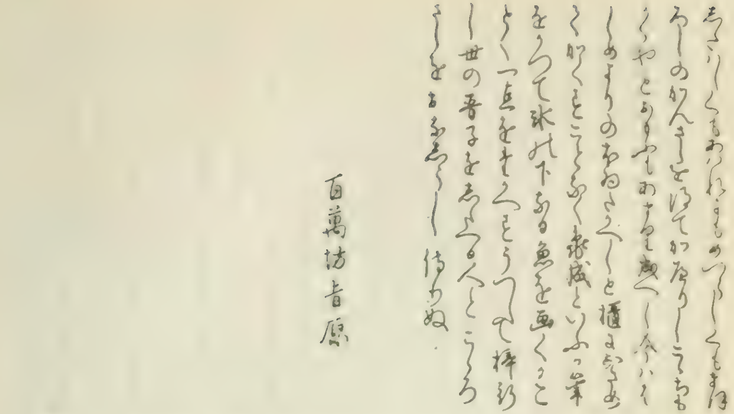

五元集



長慶集元亨釋書などきこえしは、集編なりたるそのとしの號を、やがて名となむせられたり。これは延寶にはじまりて寶永に終るその間、五元をあらためたるが故なりかし。しかるに晋子の滅後にいたつて、たれ人の家にありともしられずして有しも、正德より今延享までにこれも又五元を經たり。さあれどその名の久しくきこえて、此集の世にかくれたる事や。こゝに國ゆすりてたうとみ奉るおほん神につかふ大德の在けり。古代の物このみて、多くあつめもたれし中に此書もとし頃ありけるが、たぐひなき寶とめでものし、ぬりごめのうちにふかくひめ、心の注連もゆひかけつゝ御垣をまもる宮奴の杉の嵐にねぶるをも、いかに



うしろめたくやおもはれけん。さればをのづから案内しりたる此道のすきものどもは、縁を求めて見ん事をこふめるに、大徳うけざるさまにて、むれつゝ人のくるのみぞ、とつぶやきながらとりいでゝも、席をかへて見ることをだにいとはるれば、半紙もうつし得るやうなし。人みな月のうちのかつらのごときをうらみあへり。予ももとよりこれを得て、先師の妙を明らめしらん、とつねにおもひてとしをかさねき。まことや、この頃つたへて持たる人をきくに、予がよくしりたるものなりければ、はじめよりねがひしことをかたりて、乞もとむるにゆるさず。されど彼家にゆきゝする事度をかさね、かつなげき、かつうらみて、衣通姫の庭に



七日までたちさらざりし者のごときこゝろざしにやめでたりけん、からうじてあたへたり。よろこひまろびもてかへり見るに、みのゝ紙を中よりおり、かりそめに草稿のやうになしたる本の、遺墨八十八を一册とせるものにて、晋子の手澤今なをうごくがごとし。うれしくも、したはしくも、あはれにも、めづらしくも、まぼろしのかんざしを得てかへりしこゝちも、かくやとおもふもあまり成べし。今ははじめよりのほゐたがへじと、櫃におさめてかくすことなく、編成といふが筆をかつて、氷の下なる魚を畫くがごとく、一點をたがへずうつして梓行し、世の晋子をしたへる人と、こゝろざしをおなじうし侍りぬ。

百萬坊旨原

五元集

延宝　天和
貞享　元禄
宝永

宝晋齋ハ米元章ヵ硯の裏ニ
鐫入しを号とし三井子其硯
を予ニ附して宝井晋子とし
いつを此号ニ用しくらぶ一りとて
集ヶ一ヶに述ぬへるをや
佳言樂句ヵ類を需へ
新葉ニ入ける
延寶乃とし桃青門ニ入し
より宝永の末ヽ識をヵ
いへるをふりをしかなり

其角

五元集

四十の賀し給へる家にて
御秘藏に墨を摺せて梅見哉

進二大音寺一
んめがゝや乞食の家も覗かるゝ

加州小松観音寺奉納
梅の花且那を待て庭にあり

芭蕉翁の沙彌、かけものほしがりて給讃を乞けるに
せめてもの貧乏柿にんめの花

晩
進上に闇をかねてやむめの花

不曲亭
あぜを越目あても梅の匂哉
こつとりと風のやむ夜は藪の梅
なつかしき枝のさけ目や梅の花

宰府奉納
守梅の遊びわざ也野老賣

和二心水推敲之句一
たゝく時よき月みたり梅の門

梅津氏の祖父、大坂表の軍功によりて御感狀御太刀を頂戴せらる。正月十七日の朝とかや、佐竹上杉蜂須賀等の家臣十七人と也。家の風、相つたえて、今も正月十七日鏡開の興行あり。其年、家督執權として此春の賀會有。
幡持を文臺脇やむめの花

元日、眞珠喰あてし人の、句を祝へといふに
夜光る梅のつぼみや貝の玉

仙石壹岐守どの正月五日に身まかり給ひぬ。玉芙公に御悔申上侍るとて
外様迄手向の梅を拜みけり

元祿十四年二月廿五日、聖廟八百龄御年忌。於二龜戸

御社ニ、諸苗速吉合ニ興行一
座一。
梅松やあがむる數も八百所
氷鼠玉骨とかや
昔見し花にも香にも梅の皮
久松肅山亭にて
梅寒く愛宕の星の匂かな
百八のかねて迷や闇のんめ
芭蕉菴をとひて
鶯や十日過ても同じんめ
うぐひすに藥敎ん聲のあや
腕押のわれならなくに梅の花
誹木のゐくいは是にやみの梅
（頭書「止丘隅」）
鶯の身を逆にはつねかな
うぐひすよいで物みせん杉鋏
茶臼にとまりたる繪に
鶯や氷らぬ聲をあさ日山
茶扮にとまりたる繪に
うぐひすの曲たる枝を削けん
鶯に羅川たよひきがへる
うぐひすや逆路ながら禮返し
市聞
竹と見て鶯來たり竹虎落
（頭書「とびあがりしやうしと
いふらん。」）
雀子やあかり障子の笹の影
長嘯の記に、淺草の觀音と
て、國ゆすりてもてなす佛
をはす。口にまかせて
いかなれや野邊に刈かふあさくさの
くはんをむまのはみのこしつる
其時をおもひて
土手の馬くはんを無下に茱つみ哉
正月巳巳布施の辨才天へ
詣侍る奉納
玉椿晝とみえてや布施篭
梅津硯水會に
憲をやれと梅ほころびぬ大家中
正月廿一日冠里公に侍座
茱刻みの上手を璽る蕨かな
接木を畫て
來ませるの中繼とや見えつらん
十一日
お汁粉を還城樂のたもと哉
景清が所帶みせぬや二薺
漸覺春相泥といふ切句
削かけ青葉ねりの鼻にあれ
畠から頭巾よぶ也わかなつみ
二人しづかのかけ物に
なつみ哉扇二ツをとぶこてふ
百人の雪搔しばし薺ほり
万葉しうにも朱雀の柳と
侍り。所からのけしきを
たびらこは西の禿に習ひけり
とばしりも顏に匂へる薺哉
七種や明ぬに聟の枕もと
なゝ艸や跡にうかるゝ朝鳥
砂植の水茱も來たり初わかな
溪邊双白鷺
氷ふ鷺芹梳る流かな
（頭書「河州八尾娘そしり」）
うすら氷やわづかに咲る芹の花
一升はからき海より蜆哉

石一ツ清き渚やむき蜆
白魚や海苔は下邊の買合せ
行水や何にとゞまるのりの味
白魚や漁翁が歯にはあひながら
白うをの膂にあがるひばり哉
陽炎や小儀の紗も吹たてず
したしき友に
こなたにも女房もたせん水祝
歳鼠人と懐の夢をひらきて
引つれて松をくはゆる鼠かな
寳引に蝸牛の角をたゝく也
帶せぬぞ神代ならまし踏哥宴
羅漢人、福の神を祈りて、七人が句を乞る中に、大黒殿をいさめ申せとて、槌ひとつ送られたり。
年神に槌の口ぬく小槌かな
三月正當三十日
山吹も柳の糸のはらみ哉
（頭書「書成」）
梟にあはぬ目鏡や朧月

種かしや太神宮へ一つかみ
舞鶴や天氣定めて種下し
椿枝、繪馬合に
ことし斯盃ふえたり稲荷山
禁閑ヲ破リテ暇ヲ玉ハル也。
破や見憎い銀を父のため
（頭書「侍としきかば」）
やぶ入やそれはいなばの是は星
故赤穂城主淺野少府監長矩之舊臣大石内藏之助等四十六人、同志異体報亡君之讐、今茲二月四日　官裁下令ニ一時伏レ刄斎ニ屍。万世のさえづり、黄舌をひるがへし、肺肝をつらぬく。
うぐひすに此芥子酢はなみだ哉
富森春帆大高子葉神崎竹平これらが名は焦尾琴にも殘す聞えける也。
點印半面美人の字を彫て、琴形の中ニ備ヘタルを、はじめて冠里公の万句の御巻ニ押弘め侍るとて

春の月琴に物書はじめ哉
悼徳ノ立志一
昔ゑな初音三井寺夢の春
題水
ちくま河春行水や鍋の鍋
畫賛
拾得の凧にからむや玉簾
爰にけふ御馬水かへ水間寺
奉納
金柑や冬青にさしても稲荷山
藪入や一ッはあたるうらや算
やぶ入や牛合點して大原迄
元祿丙子のとしむ月末つかたに淺茅がはら田山寺にあそび侍り。畠中の梅のほづえに、六分斗なる蛙のからを見つけて、鵙の草莖なるべしと折とり侍る。
草莖を包む葉もなき青間哉
蝸牛豆かとばかり柳かな
御忌

人の世やのどかなる日の寺林

本多總州公にて

春の夜や草津の鞭のゆめばかり

淺草川逆上舟

河上は柳かんめか百千鳥

柳には鼓もうたず歌もなし

欄干や柳の曲をつたふ狙

市川才牛追善

一子九歲名をつぎ侍るに

倉頡の父はなからや雉の聲

菜　蔬

黒胡麻でこゝをあへぬか土筆

春雨やひじきものには枯つゝじ

等躬あいさつ

闇の夜のをりないかとは梅の袖

新三十三間堂

若艸やきのふの絹見も木綿うり

青柳に蝙蝠つたふ夕ばえ也

柳上鶯の圖に

さかさまに鶯の影見る柳哉

傾城の賢なるは此柳かな

春　雨

綱が立てつなが噂の雨夜哉

此雨はあたゝかならん日次(ひなみ)哉

二月十五日上京發足

西行の死出路を旅のはじめ哉

渡し舟武士は唯のる彼岸哉

佛若シ大晦日に入滅し給はば、いかに佛ともとんぢやくすべき。かゝる衆生のためには、往生もふのものなるべし。

佛とはさくらの花に月夜哉

山里の名もなつかしや作獨活

初茸の盆と見えたり野老賣

とところうり壁大原の里びたり

野鼠のこれをくふらんつくづくし

竹の香や柳を尋ね蕗のとう

梅がゝや此一すじをふきのとう

二月十七日原驛

富士の朧都の大夫見て聟ん

おぼろとは松の黒さに月夜哉

類燒の頃邊幽の居を問て、

一樽に玉子を添る人に

わらづとや雪の玉水十とよむ

南都にあそぶ　再

傘や薪の夜のありとをし

無二車馬喧一

夕日影町中に飛こてふ哉

見獅子伶有感

てふしるや獅子は獸の君也と

蝶とぶや猿をよび込原屋敷

藁屑に花を見すてしこてふ哉

釋　菜

聖堂にこまぬく蝶の袂哉

百とせはねるが藁のこてふ哉

柳燕圖

乙鳥の塵をうごかす柳哉

茶の水に塵な落しそ里燕

讃さん

燕やかろき巣を曳八巾

階子からとぶさ(鳥總)に及ぶつばめ哉

海面の虹をけしたるつばめ哉

傘に坳かさうよぬれ燕

朧やひばりあがれと夕日影

うつくしき顏かく雉の距かな

人うとし雉をとがむる犬の聲

角田川にて

なれも其子を尋るか雉の聲

海苔すゝぐ水の名にすめ都鳥

小田かへす鍬も柱やのこる鴈

笑かしこかはづ鳴江の星の數

ちんば引蝦にそふる泪かな

帆柱のせみよりおろす雲雀哉

苗代や座頭は得たる畝傳ひ

たねおろし俵に渡す小橋哉

景政が片目をひろふ田螺かな

みの蟲にかゝり侍るに

孫どもの蠶やしなふ日向哉

春雨や桑の香に醉みの尾張

沽徳岩城に逗留して、餞別

の句なき恨むるよし聞え侍りしに

松島や鵆かすむとも此序

南村千圃仙臺へかへるに

行春や猪口を雄鴨の忘貝

富士の繪にのぞまれ侍り

三帆舟は塩尻になるかすみ哉

小庭にうつしたる梅の小枝に鶯の草莖を見出て、人〻に句をすゝめけるついで

梅の名をうたてや鶯のやどりとは

いせの雲津を過侍る、夕げとふ頃に

馬に出る子を待門や傀儡師

傀儡師阿波の鳴戸を小哥哉

四條圖

かげろふにねても動くや虎の耳

三州小酒井村觀音奉納

如意輪や鼾もかゝす春日影

或お寺にねう比丘とて、腰のぬけたるおはしけり。住持の深くいとをしみ申されしに五ツの德を感ず。

(頭書「能薫」)

婦な所喚出すねぶり哉

(頭書「能忘」)

おもへ春七年かふた夜の雨

(頭書「能捕」)

鵜かと鼠の味を問てまし

(頭書「能狂」)

陽炎としきりに狂ふ心哉

(頭書「能耽」)

髭のあるめおとめづらし花心

自得

蝶を嚙で子猫を舐る心かな

足跡をつまこふ猫や雪の中

猫の子のくんづほぐれつ胡蝶哉

市間喧

つけ木屋の手なら足なら雨蛙

遠遊醉歸の駕籠の内にて

(頭書「かひなくたゝん」)

春の夜の女とは我んすめ(娘)哉

宰府參詣の舟中

菜の花の小坊主に角なかりけり

闘に韓幹の詩人髭白し
鶏の獅子にはたらく逆毛哉

王子曲水もよほされて

水呑を烏帽子にきせん岩つゝじ
曙やとに儀花の鶏の聲
花とさふ桃や哥舞妓の脇踊
傳え來て雛の寶や延喜錢
見てのみや笑まぬ雛は松浦舟
おはしたに木兎もあり雛座敷

三月四日雪ふりけるに

雛やそも碁盤にたてしまろがたけ
ひなやその佐野のわたりの雪の袖
買ひひな清水坂を一目かな
折菓子や井筒に成て雛のたけ
雛のさま宮腹〳〵にまし〳〵ける

永代島八幡宮奉納

汐干也たづねて參れ次郎貝
親にらむ比目を踏ん汐干哉
紀國の鯛釣つれて汐干かな

對酌

もどかしや雛に對して小盞
曲水にあの氣違は茶碗哉
菓子盆にけし人形や桃の花
曲水や筧まかする宿ならば
綿とりてねびまさりけり雛の貌
くり言を雛も備め虎が母
雛くれぬ人を初瀬の棧敷哉
綠豆の頭も白し桃の眉
顚倒はよそに拜むやとり合

貝そろへを送られしに

蛤のしかもはさむか玉柳

行露公あたみへ御浴養の頃、はなんけの句奉るべきよし仰ありて、禮遣の御書ども聞えけるに

脇息にあの花おれと山路哉

露沾公御庭にて

寐時分に又みん月か初櫻
緣からはこなた思ふや花の庭
地顯や花の外には松ばかり
花見哉母につれだつ盲兒

いざゝくら小町が姉の名はしらず

黒谷にて

万日の人のちりはや遲櫻

仁和寺

いなづまのやどり木成し櫻哉

上野にて

浮助や歷從見に行櫻寺

妙鏡坊より花送れしに

文は跡に櫻さし出す使哉

花中尋友

饅頭で人をたづねよ山櫻

一筆令二啓上一はと招れて

初櫻天狗のかいた文みせん

三月廿日、含秀亭の山ぶみに御供して

友猿の友ぎらひすな花衣
御近習や花のこなたにかたをなみ

門柳塵をはらふ折ふしうぐひす啼。

御用よぶ丁兒かへすな花の鳥

矮屋妻奴の膝をいるゝのみ

なるに、心まゝなる酒を存
て

傀儡の鼓うつなる華見哉

石河氏宜翁公の山庄に美景
をあつめて、四方に四の風
情をもてなし給へるに

二節の道は角豆か山ざくら

護國寺にあそぶ時、馬にて
なかへられて

白雲や花に成行顔は嵯峨

（頭書「袁中郎 面上有西湖」）

立信をあはれむ

ざれありく主よ下人よ花衣

京よりくだる人にことづてし
て

花に遊で親達よばん都哉

春よとすれば椿つき廻る花の山

山櫻歯を放して情かな

花折て人の礫にあづからん

花は都物くるゝ友はなかりけり

侍座

花にこそ長書陸でお月代

花に来て都は草の庵哉

葦簾子であるかるゝ夫婦哉

はな盛ふくべ踏わる人も有

世の花や五年已前の女とは

目黒松隣堂にて

浮世木を麓に咲ぬ山ざくら

道ニ東叡山・二句

小坊主や松にかくれて山櫻

八ツ過の山のさくらや一沉み

人は人を戀の姿やはなに鳥

芳野山ふみして

明星や櫻さだめぬ山かつら

折に殺生偸盗あり

あだ也と花に五戒の櫻哉

行露公年々御庭の花を給り
ける。ことしおそかりけれ
ば

花を得ん使者の夜道に月を哉

岐子万三郎を供して

その花にあるきながらや小盃

酒のさかなにさくら花をた
しなむ人に

下風に濱味みせよ塩櫻

惜レ花不レ掃レ地

我奴落花に朝寐ゆるしけり

雨後

さくらちる彌生五日はわすれまじ

上野清水堂にて

鐘かけてしかも盛のさくら哉

日輪寺の僧と連歌のかたは
らに對興して

ちる花や踏皮をへだつる足の心

一食千金とかや

花に酒僧とも侘ん塩肴

辛未の春上野にあそべる日
門主薨御のよしをふれて、
世上一時に愁眉ひそめしか
ば

津國の何五兩せんさくら鯛

共彌生その二日ぞや山ざくら

花に鐘そこのき給へ喧嘩買

上野　御（第二ごには季節の句の題ならん）
わたり徒士見立る頃の花見哉

時　花
植木屋の亭主留守也花いまだ

湖春と清水に遊びて
車にて花見を見ばや東山
花笠をきせて似合ん人は誰
酒を妻妻を妾の花見かな

（頭書「王維山水　寸馬豆人」）
此雨に花見ぬ人や家の豆

永代寺池邊
池を呑犬に入あひ花の影

市盛はじめて上京に
花ぞ濃伊勢を仕まへば裏移

大悲心院の花を見侍りて
灌頂の闇より出て櫻哉
茶もらひに此晩鐘を山櫻
折とても花の間のせがれかな
脊足袋や鐙にのこる初ざくら

明ぼのゝ山鳥（原本缺字）櫻かな
海棠の花のうつゝや朧月
小鳥居は葉守の神かつゝじ山
月雪に山吹花の素顔よし
亦是より木屋一見のつゝじ哉
藤咲て輕くふ日をかぞへけり
旦夕のはしゐはじむるつゝじ哉
水影や鼯わたる藤の棚
心なき御影さんは（散飯）に岩つゝじ
よそに見ぬ石の五德や藤の露
白藤を酢みそにつたふ雫哉

淺草川逍遙
鯉の義は山吹の瀬やしらぬ分
錦にも藤の虱は惜からじ

三月十二日合秀亭の花とし
百五十余種らへ添給へる下
庭に侍りて
植足に三切の供や山ざくら

同じく入相
此〳〵と花の名殘や節扇

秋航庭せゝりせらるゝに
たそがれや藤植らるゝ扇取

龍樹菩薩の禪陀伽王に對し
て食欲をしめし給ふに、た
とへば有斎人近猛煉始難悅
後習苦の文のこゝろを
雁瘡のいゆる時得し御法哉

摩訶止観に
一日之羅不能得鳥得鳥之羅
唯是一目、此文のこゝろを
鳥雲にゐさし獨の行衛哉

意馬心猿の解
立馬の曰は猿の華心

雜司谷にて
（頭書「槇のは白くあられふり
せき入し水のおとづれもせ
ぬ」）
山里は人をあられの花見哉

わが三嚥公侍従になりて、
實永二年三月廿七日に京使
にたち給ふを祝して
藤浪や廿七人草履とり

芭蕉の自畫十三懷周之讃

師の坊の十年しばし柳陰

若鳥やあやなき音にも時鳥

有明の面起すやほとゝぎす

淀舟や犬もこがるゝ郭公

夜遣屋鳴つるかたや子規

官城

歷ゝや下馬の折ふし時鳥

河東

川むかひたが屋敷へか子規

鵜啼や此あかつきを郭公

曉の氷雨をさそふや郭公

百間長屋にて

時鳥人のつら見よ下水打

子規一二の橋の夜明かな

阮咸が三味線しばし時鳥

傾廓

時鳥あかつき傘を買せけり

赤打山（まつちやま）

夜こそきけ穢多が太鼓鵑

きぬ／＼の用意か月に時鳥

（頭書「廬山雨夜」）

寮坊主のまねば淋しほとゝぎす

宰府奉納

ほとゝぎす鳥居／＼と越にけり

林中不ㇾ賣ㇾ薪

せになくや山時鳥町はづれ

さる江といふ村にて

くらぶ山村場（むらさき）の日陰や時鳥

麓寺五加（うこぎ）がおくをほとゝぎす

曲終人不ㇾ見

曉の反吐（へど）はとなりか郭公

時鳥われや鼠にひかれけん

子もふます枕もふます時鳥

母におくれ侍りてたのみなき

ゆめのみ見る曉

夢にくる母をかへすか郭公

枳風がつまを供してあたみ

へ行とて

馬の間妹よびかへせほとゝぎす

遊名にて

蛤のやかれて啼やほとゝぎす

それよりして夜明烏や郭公

點滴を石に寄也ほとゝぎす

（頭書「白文」）

人間の四月にふけれ郭公

時鳥茄子も三ッの小籠哉

ら月十七日ある人の愛子に
ねだり申されて

郭公鱗もめよとすゝめけり

月消て票ぬけ風呂や郭公

六阿彌陀かけて鳴らん子規

淺野寺樹下

虫つかぬ銀杏によらん郭公

葉に成て書れぬ梅や郭公

ほとゝぎす只有明の孤落

時鳥人を馳走に寢ぬ夜哉

門の上に日をかく人や子規

夢ゝ法

砂は目にね覺を洗へ郭公

姉が崎の野夫忠功孝心をきこ
しめされて祿を給はりたる事、
世にきこえ侍るを

想てきけ此時鳥市兵衞記

佛さへこの世間(よのなか)はくるしきに
しらでやけふは生れ出けん

麥飯や母にたかせて佛生會

風光別我苦ニ吟身一

大酒に起てものうき給哉

越後屋にきぬさく音や衣更

一ッところに給に成や黑木うり

卯月八日母におくれて

身にとりて衣がへうきう月哉

慈母墓

花水にうつしかへたる茂哉

上行寺

灌佛や捨子則寺の兒

若葉句合に

年寒しわかばの雲の朝ぼらけ

殿つくり並でゆゝし桐の花

夕のはなぶさ

うかれめや異見に溺む夕牡丹

いにしへのならのみやこの牡丹持

河名霊心寺

櫨の鐘ぬがれしぼたん哉

筑前紅を

しらぬ火の鏡にうつる牡丹哉

雨意 壁上にあて、

八事をうつゝに笑ふぼたん哉

池田の海棠子行脚の行状をあ
つめて集あめるに

さゝはうし角に火ともすふかみ草

下洛、卯月の中の一日

隱岐殿のかへり見はやせ鏡山

朝叟百里全阿甫盛等上京の
時、三十三句の吟席也。（こ
の句は伊豫の湯桁の數によ
りて、左八句、中十六句、右
九句、合せて三十三句を以
て一卷となせる連句の立句
也。）

寶永開元奉幣使御代參の人の
家にて

とした氣て伊せ迄誰か衣がへ

屏風に藤房卿仕すつるの所

迷ひ子の三位よぶ也時鳥

長崎屋源左衞門家に紅毛來貢
の品〳〵、奇なりとして

桐の花皆渡の鸚鵡不言(ものいはず)

雪蝶子

鶏啼て王子殿鼓はたかりけり

序令初めて上京に餞

（頭書「揚州鶴」）

涼み迄都のそらや蓮と舎

廣園寺にあそぶ

水漬に泪こぼすや杜若

かきつばた蝶へ水はこぼれても

葉の蝶もありけりかきつばた

簾まけ雨に提来る杜若

作綱

から衣御影やかけて杜若

田家

早乙女に足あらはるゝ嬉しさよ

汁鍋に笠のしづくや早苗取

木賀入湯のころ

しばしとや早苗より見る寺の門

袖裏や茄よりけに白くゝり

舟歌の均しを吹や夕若葉

卯花や蝸がら山の道のくま

うの花やいづれの御所の加茂詣

寄二幻阿長老一

老僧の筍をかむなみだ哉

筍よ竹よりおくに犬あらん

（頭書「腰下無寸鐵」）

竹の屁を折節聞や五月闇

素堂居

筍や丈山などの筆の鞘

艸の戸は皆喰ものぞ夏の艸

楓子居

夏艸や家はかくれて御用茅

夏草や橋臺見えて河通り

日通の関の榎や葉ざかい

吐ぬ鵜のほむらにもゆる篝(かゞり)哉

鵜につれて一里は来り関の松

（頭書「書與」）

爭はぬ兎の耳やかたつぶり

戸塚逃侍るに

鰹荷の跡は巳日の道者哉

帆をおろす舟は鰹か磯がくれ

夕涼や客の間にあふ中ぶくら

しらすか過る時

世中をしらすかしこし小鯵うり

和扇餞に

飯鮓の鱧(はも)なつかしき都かな

伊せにても松魚なるべし酒迎

こよろぎの名は昔にてうづは哉

呈二露江公餞一

篝木や人馬へだつる五月雨

さみだれや是にも外を通る人

顔ぬぐふ田子のもすそや五月雨

さみだれや富士の煙の其後は

五月雨や傘につる小人形

さみだれや酒匂でくさる初茄子

嚴有院殿の大法事を東叡山に拜ミ奉ル

五月雨の雲も体むか法の聲

市驛吟

馬舟とわかる鰹やけいば組

六門に入時

花あやめのぼりもかほる嵐哉

あやめわく、明り障子のみどり哉

錢湯を沼になしたる菖かな

けふもけふあやめもあやめかはらぬに宿こそありしやど〻おぼえね

住なれし所へだて〻よめりと伊せ大輔、家のしらに見え侍る。

菖こそ蛙のつらにあやめ哉

此友や年をかくさず、白髪二毛の身をわすれて、松どの、太郎どの也けりとの〻しれば、今の人形の風俗、とさらに小兵衛などいふ人形はなし。

我むかし坊主大夫や花菖

五月三日わたましせる家にて

屋根葺と並でふける菖哉

あひしれる女の塔の澤に入てふみこ(来)したるに

山笹の粽やせめて湯なぐさみ

艸の戸やいつ迄草のかび粽

本つ〻じ夕べをしめて菖哉

五月十三日

雨雲や竹も醉日(よひ)の人あつめ

藻の花や金魚にか〻るいよ簾

酒讃

葛のはの酒典童子も二面

青嵐といふ題を

海松の脊に杉の嵐や初瀬山

蝙蝠の屎も子になれあやめ草

交代の葉守の神や初柏

疱瘡のあとは遙に蟻哉

綠槐高庵

はつせみや笛に袋を十文字

かたつぶり酒の肴に這せけり

鎌倉やむかしの角の蝸牛

たのめてや竹に生る〻かたつぶり

文七にふまるな庭のかたつぶり

河原町にて

妾が家ほたるに小歌告やらん

宇治にて

川ぐまや水に二重のほたる垣

うつせみの袷に

夏虫の碁にこがれたる命哉

谷中

風ふかぬ森のしづくやかんこ鳥

僧正が谷

侘しらに貝ふく僧よかんこ鳥

下やみや鳩根性のふくれ聲

露江公涵池の高閣にはじめて涼を挽とき、當座とお(御)せありければ

夏山に我は御簾とる女哉

(頭書「宇都宮入道」)

蓮生は歌はよまぬを虫拂ひ

樟腦に代をゆづりはの鎧かな

よめりせし時の枕か土用ぼし

捨人や木艸にかけて土用ぼし

浴衣着て瓜買に行袖も哉

狙公 稲色にて

瓜むいて猿にくはするあつさ哉

水飯にかはかぬ瓜のしづく哉

干瓜やうつむけてほす蜑小舟

瓜の皮水もくもでに流れけり

亀毛に儀

瓜の皮笠は重ゝとかさねけり

破扇の圖

螢光が後架へ持し扇哉

鳥羽繪のあふぎのあつさ哉

紅にうちはのふさの匂哉

せみ啼や木のぼりしたる間うり

隣から此木にくむやせみの聲

竹のせみさゝらにしぼる時も有

水うてやせみも雀もぬるゝ程

白雨や内儀たま〳〵物詣に

市中白雨といふ題

鳶の香も夕だつかたに腥し

白雨やもりをとむれば鼠の子

（頭書「うぐひすとのみ」）

ゆふだちに鶯あつく鳴音哉

夕立にひとり外みる女かな

牛島三遶（みめぐり）の神前にて雨乞する
ものにかはりて

夕立や田を見めぐりの神ならば

翌日雨ふる。

旁中吟

さゝがにの筑波鳴出て畢急き

西行と武藏坊には清水哉

芋のはに命をつゝむし水哉

にんにくの跡が清水の心かな

土用のいりといふ日の吟也。

雑木に茄子たづぬる夕哉

烏山へおもむく人に

青柳やつかむ程ある蚊の聲に

夕がほや白き鶏垣根より

鳴焼は夕べをしらぬ世界哉

麻村や家をへだつる水車

或人の從者參宮しけるに、は
なむけすとて

夏の夜を吉次が冠者に恨哉

夏の夜は寐ぬに瘧氣の起けり

生死去來

烏行蚊はいづくより暮の聲

補虎 東寒

七ッ毛の蚊にくるしむや足疾鬼

蚊柱にゆめのうき橋かゝる也

蚊をやくや褒姒が閨の私語

かやり火や蚊屋つる方に老獨

更闌

行灯蔵蚊屋に消行鵜舟哉

いきげさにずでんどうと、う
ちはなされたるが、さめて後

切（きら）れたる夢は誠か蚤の跡

崔唐

富士の雪蝿は酒屋に殘りけり

ある人、大なるふくべを二に
引割て盞とし、外は地さびの
まゝ、内は朱に塗て、わに口
にむら濃をかゝせて、句をの
ぞむ。

淸水影李白が面にかぶりけり

形目鼻なきめんのやう也。

淺草河歳々吟涼

此人數舟なればこそすゞみ哉

川涼み顔に泥ぬる詠かな

涼みつむ安房や上總に舟はなし

すゞしさや帆に船頭のちらし髪

舟暑し覗かれのぞく闇の顔

千人が手を欄干や橋すゞみ
涼しさや先武藏野の流星
　　　曾退之摘酒吟あり。
酒ほかす舟をうらやむ涼み哉
　　　こまがた
此濤では江を哀まぬ螢哉
　　　牛御前
是や皆雨を聞人下すゞみ
　　　橋上休老といふ題に
牛泥む老の齒がみや橋すゞみ
舷を玉子でたゝくすゞみ哉
海を見て涼む角あり鬼瓦
　　　傳久松肅山
筆をさす御笠やかろき下涼
　　　人の子をめでゝ
涼しいか寐てつむり剃ゆめ心
　　　畫讃
大虛涼し布袋の指のゆく所
　　　日枝にむかひ給ふ御神を
十八の明神つねにすゞみ哉
　　　河原にて
曉を牛さえすゞみ車かな
此松にかへす風あり庭すゞみ
　　　（頭書「遊子殘月」）
勘當の月夜に成し涼み哉
　　　暑字　行露公にて
むら雨の木賊に通る暑さ哉
　　　早稜　露江公
供がたの鞘の暑さや岡の松
人に又暑い顏あり端涼み
　　　自棄
たが爲ぞ朝起晝寐夕すゞみ
　　　五月十日雷雨、永代島の茶店
　　　にやどりして
明石より神鳴晴て鮎の蓋
　　　住吉にて西鶴が矢數誹諧せし
　　　時に後見たのみければ
驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり
　　　七十余の老醫みまかりて、弟
　　　子どもこぞりてなくまゝ、予
　　　に追善の句を乞ける。その老
　　　醫のいまそかりける時、さら
　　　に見しれる人にもあらず、哀
　　　にもおもひよらずして、古來
　　　稀なる年にこそなどいへど、
　　　とかくゆるさざりければ
六尺も力おとしや五月雨
　　　甘田忠貞が序を。
　　　年〻の春秋武江の寺社に廻り
　　　給ふなる靈佛靈神、君を守り
　　　のあとしめて、興廢の御威現
　　　あらたなる中にも、當時の開
　　　帳はさがの御てらと札をうた
　　　れて、官鶯蹄馬のさかひに暑
　　　をなやます、霍亂虫氣のさは
　　　りもなく蟻のごくにまふでつ
　　　だふ。行程の遠近を辻番にた
　　　づねて
まはらば廻れ振舞水の下向道
　　　祐天和尚に申す
夕顏にあはれをかけよ賣名號
　　　書額に米搗涼む哀也
　　　故翁の句を繪にかゝせて讃の
　　　ぞむあり。その繪は夕良の花
　　　を書たり。句とたがひ侍るゆ
　　　へ自句を書侍る。
夕顏や一円のこす花の宿

送二歐陽公賦一
鰒の子の兒に罪なき憎さ哉

畫讃
蟷螂の小野とはいはじ車百合
（頭書「市中芬」）
子の肩とみつわぐむ也夏早

魚市涼宵
楊貴妃の夜は活たる鰹かな

七月七日靈夢を感じて東湖の
辨才天に詣侍るに
出ぬ茶屋に歎かれても蓮哉
嵜切や下手にし切れば薹を角

歌仙貫之の古畫に
冠にも指をそふめり歌の汗

吉濃亡妻をいたみて
團女とはこれや此世を夏の海
上下と裸の間を夕すゞみ

ある御方よりあさがほ書たる
扇にさんせよとあり
蕣や扇のほねを垣根哉

と書て奉けるにかさねてまた
軍給かいたる扇にさん望ませ
給ふ。再は申かねて
涼風や與一をまねく女なし

鬼のやうなる法師みちのくへ
くだるとて、道祖神にとがめ
られ、異例して何がしのもと
に介抱せられ、漸生のびて心
よはき文ども送られしかへし
に
辨慶も食養性や瓜畠
瓜守や桂の生洲たえてより

越前の人の土産をめでゝ光廣
卿のうたをおもひ合侍り
鰹哉先きなばしを袖で拭

元角田川牛田といふ所にて
いそのかみ清水也けり手前橋

湖舟筏に酒たうべて
貫之の鮨のすしくふわかれ哉

はなんけの一句を扇に望れて
生の松ばらのうたをよす
木曾路とや涼しき味をしられたり

市原にて
虫はむと朽木の小町干れたり
手にとるも林檎は嶋で面白し
百日のあゝら戀しや洗ひ鯉
皿鉢に駒のけあげや心てん
乳のめば清水がもとの祭哉

七日
鉾にのる人のきほひも都哉

山王の氏子として
我等迄天下祭や土ぐるま
番附をうるも祭のきほひ哉
松原に田舎祭や晝休み
夏瘦に能因しかも小食也
乞食哉天地を着たる夏衣

高園挽涼
香薷散犬がねぶつて雲の峰
蝙蝠に宇治のさらしや一景

蟹をもてなす人に
うき舟の涼しき中へかにの甲
ねてかとへ蓮にさそふ朝朗

大雨大風
吹降の合羽にそよぐ御祓哉



待宵や明日は二見へ道者われ

雲井にかけれの繪に

傘持は月に後るゝすがた也

木母寺に歌の會ありけふの月

名月やこゝ住吉のつくだ嶋

名所月（頭書「繡獻上」）

小ぐらから古郷の月や明石潟

雨（頭書「上州佐野」）

駒とめて釜買獨けふの月

川筋の關屋はいくつけふの月

新月やいつをむかしの男山

水相觀の繪に

我書てよめぬ物有水の月

名月や居酒のまんと頬かぶり

得レ蟹無レ酒

蟹を畵て座敷道する月み哉

名月や疊のうへに松の影

雨

納屋に何雨吹晴てけふの月

名月や竹を定むるむら雀

あつたにて

夢かとよ時宗起て月の色

更〻と禰宜の鬢や杉の月

紀川 いくせもあり

たつか弓箭に行水やみかの月

所思

いさよひも心づくしや十四日

名月や金くらひ子の雨の友

闇の夜は吉原ばかり月夜哉

月出て座頭傾く小舟かな

人音や月見と明す伏見舛

維摩のさん

山のはは大衆也けり床の月

張良圖

胸中の兵用よ千〻の月

布袋の月を掬ル繪に

有てなき水の月とや爪はじき

寺

寺の月ぶだう瞻は葉にもらん

名月やかゞやくまゝに袖几帳

（頭書「木がくれてのみ」）

烏帽子屋はゑぼしきて見よけふの月

閑倚橋

猿逼に我とらんとや橋の月

含秀亭

富士に入日を空蟬やけふの月

風雨

雷に檝はなびきそ月見舟

小野川けんぎやうに餞

入月や琵琶を袋におさめけん

三日燈をつゝむといふに

名月や十歩に錢を握りけり

巴江

蘗かれて猿の歯白し峯の月

舟中にほていを書て、袋にそへたる杖の檝に似たるを

月見るも杖につなげる小舟哉

琵琶行をよむ

良夜に琵琶を興じて、客も淨

陽の客と思ひなす。酒をそへ灯を遠めて、深更いやましに村雨の心をはらし、私語の耳をそばだつめる感あり。かの十三より學得てし曾保は、総角もさぞな、人を泣しむと聞えつるすさびも、とはりにこそと云に、其庵閑なる閨て哉と聲をひそむるものはなくて、長うなれと枕を投出す。かく無風情の人、一藝ありやといへば、

十五から酒をのみ出てけふの月

あさづま舟につゞみを入て月をみる女の水干に扇かざしたる繪に

おもふ事なげぶしは誰月見舟

所望

いはぬ事三ッ心に名有けふの月

母と月見けるに、

ねられねば雨元政の十三夜

旅泊

うれしさや江尻で三穗の十三夜

薬研では粉炊（こがし）おろすか後の月

住の江や夜芝居過て浦の月

白玉に芋を交ばや瀧の月

後の月上（たか）の太子の雨夜哉

しかぞすむ茶師は旅ねの十三夜

後の月躍かけたり日傘

十三夜を

やよや月夜は物なき木挽町

閏十五夜　前の良夜は江戸雨ふりければ

御番衆は照月を見て駿河舞

平家落足の屏風に

宿なしのとられて行し月見哉

柴ふるひ荷へる人に

名月や皺ふる人の心世話

名月や人を抱手を膝頭

待乳山　（原本句の右肩に圏せり）

こよひ滿（みて）り棹のふとんにのる烏

契不レ逢戀

閨の灯に光る座頭や袖の月

一休の狂詠自畫を寫して

（頭書「甲申」）

律師沙彌相判をして月み哉

松前のきみに申遣り侍る

こさふかば大根で消さん秋の月

十六宿（夜）は儒者と名乗し姿也

濱蓼の穂に出る月を名殘かな

同十三夜

茂の菓子古郷寒き月見哉

病中制禁好

橋桁の串（くし）海鼠（こ）はづすや月の友

新宅吟

汐汲をかゝへてみばやけふの月

宗因、先月をうるの句をとりて

芋は〳〵凡僧都の二百貫

君がいひけんとのは、といひすてゝ出たりけんあした

物かはと青豆うりか袖の月

鐘犀客船

名月や御堂の皷かねて聞

（頭書「遊子」）

いねぶるな松の嵐も江戸の月

鴈鳴や弓弛（ゆはず）をみれば昏の月

玉津嶋歸望

わかはみつ更井の月を夜道哉

いざよひや龍眼肉のから衣

上交語上

平家也太平記には月も見ず

吉野の山ぶみせしころ
こよひたれすゝふく風、とよまれし世尊寺に篠分て

頼政の月見所や九月盡

九月廿七日の月を惜

見し月や大かた晴て九月盡

不卜家句合

文月や陰を感ずる蚊屋の中

七夕や暮露よび入て笛を聞

星合やいかに痩地の瓜つくり

雨後

鵲や石をおもしの橋も有

星合や山里持し霧のひま

新居

塀梢かけてかよへや銀河(あまのかは)

天川けふのさらしや一しぼり

青山邊にて

獅子を馬でいづくへ星は北

侍座

刺鯖も廣間に羽をかはしけり

笹のはに枕つけてやほしむかへ

二星恨む隣のむすめ年十五

かさゝぎや丸太の上に天川

星合や女の手にて歌は見ん

ほしあひや曉になる高灯籠

丸腰の治郎笠とれ星むかへ

比叡にのぼりて

星あひや双林塔の鈴の音

橋と成烏はいづれ夕がらす

七月朔日餞二蕭山子一

かけて待伊豫簾も輕し桐の秋

葛花や角豆も星の玉かづら

小娘の生さきしるしかけ躍

小屋涼し花火の筒のわるゝ音

鵜さばきも逆櫓もやるや花火賣

玉川の水筋、かれたるとし

水汲の曉起やすまふ觸

増上寺晩景

馬老ぬ灯籠使の道しるべ

七夕うたづくしなどいふ草紙

行水に數かくよりも鷺に傘

弄化生

あひろの子字(かへ)〃といなや天川

棚經よみにまいられし僧の袖よりおひねりを落しける。かの授記品の有無價寶珠と說せ給ふ心をおもひて

衣なる錢ともいさや玉まつり

永代島にあそぶ

遊山火を芦のははけや玉迎

玉まつり門の乞食の親とはん

きのふみし人や隣の玉まつり

得二斗酒一（頭書「陌上塵」）

淵明が隣あつめや生身玉

棚經や此あかつきのあかの水

見る人も廻り灯籠に廻りけり

送り火や定家の煙十文字

千之と黄檗にあそぶ

盆前をのがれし山の二人哉
稲づまやきのふは東けふは西

妻におくれて後子にもはなれたる人に

いなづまや思ふもいふも紛るゝも
伊勢の鬼見うしなひたる躍哉
身にしむや宵曉の舟じめり

肩輿

萱雨が花火間もなき光哉
局的花火たてたる屋從哉

紋子万三郎を悼て

折釘にかつらや殘る秋のせみ
鬼灯のからを見つゝやせみの空

悼ニコ齋一

其人の斷さえなし秋の蟬
投られて坊主也けり辻相撲
よき衣の殊(ことに)いやしやすまひ取
ト石やしとゞにぬれて辻相撲
神のため女も賣や相撲札
相撲氣を髮月代の夕かな
山崎がまだ鑄ぬ形や鮎西瓜

遊二弘福寺一

木犀や六尺四人唐めかす

中の郷にて

幸清が露のまがきや昔然

雨後二句

あまがへる芭蕉にのりてそよぎけり
殊晴て雷側顔にいさぎよし
萍の日陰まだあり中老女
萍に立かへれとや水の物

（頭書「いせぜにかけ松」）

蛛のゐや薄をかけて小松原

種竹三竿

竹の聲許由がひさごまだ靑し
つぼみとも見えず露あり庭の萩

「長野豐受野をわたりて

角文字やいせの野飼の花薄
岡釣のうしろ姿や秋の暮
芦の穗や纜をやとひて折もせん

客至

醬油汲小屋の堺や蓼の花

葬送といふを

朝顔に花なき年の夕哉
花もうし佐野の渡の草屋敷
酢を乞あり隣の蓼の花盛

三圍奉納

早稲酒や稲荷よび出す姥がもと
露の間や淺茅原へ寄草履
頬摺やおもはぬ人に虫屋迄

野店無二看板一

足あぶる亭主にとへば新酒哉
酒買に行か雨夜の鴈孤(ひと)ッ

淺茅原にて

化(あだし)野や焼もろこしの骨ばかり

春日法樂

今幾日秋の夜詰をかすが山

同所の宮人夜ごとにとのゐして、秋の闇をかぎりとし侍る也。

野外夕虫といふ題にて

蜻蛉や狂ひしづまる三日の月

相撲川洪落水接レ天

狼の浮木に乘や秋の水

二挺立の舟棹
髪を焼枕つれなし星の露
鶏頭や松にならびの清閑寺
こまひきの題にて
甲斐駒や江戸へ〳〵と柿ぶだう
みの路に入て　荒井にて
駒曳や岩ふみたてゝ元箱根
ある長者のもとにて
砧きかん孫六屋敷志津屋敷
中の間にねぬ子幾人さよ砧
和水新宅
さい槌の音を仕まへば礪かな
奥好の殿やうつらんから衣
遠里小野の虫聞にまかりて
霧雨は尾花がものよ朝ぼらけ
唇や御幸のあとの眉つくり
あたかのわらべに扇とらする
ゑに
關守の心ゆるすや栗かます
大和路の女に物いひて
泊瀬女に柿のしぶさを忍びけり

嵯峨遊吟
清瀧や澁柿さはす我心
茸狩や山のあなたに虚勞病
女中の茸がりを
茸狩や鼻の先なる歌がるた
舟中
ない山の富士に並ぶや秋の暮
秋山や駒もゆるがぬ鞍の上
（頭書「隅田高橋之記」）
稲葉見に女待そへすみだ河
秋の空尾上の杉をはなれたり
餞二秋航一
諸鶉駒はまかせぬ脇目かな
松虫に狐を見れば友もなし
柴雫といせをかたりて
故郷も隣長屋かむしの聲
すむ月や髭をたてたる蟇
夜過レ山
鈴虫や松明先へ荷はせて
山川や梢に毬はありながら
たばこ干す山田の畔の夕日哉

二見にて
岩のうへに神風寒しはな薄
長谷越
山畑の芋ほるあとに伏猪かな
川芎の香にながるゝや谷の水
遠州二股川を河舟にて下り侍るに椎河脇といふ所、逆水大
切所をこえて
打櫂に鱸はねたり淵の色
一夜前栽といふ事を
御城へは何に入やらをみなへし
切悠亭にて
日盛を御傘と申せ萩に汗
専吟庵
萩薄むすび分ばやサヽ井
曉松亭
獅子舞の胸分にすな庭の萩
楓子亭
ねだり込は誰の内儀ぞはぎに鹿
井筒を略したる畫に
いそのかみ竹輪にむすぶ薄かな
田家

庭鳥の卵うみ捨し落穂かな
黄蓮に餌[illegible]す家は手鏡哉
餞二青流難波一
青刈のうらを喰せて砧哉
隣家にもと結こくを
大綾は晒す元結に落る雁
元結のねる間はかなし虫の聲
太郎二郎の貝をとりて
かけ出の貝にもてなす新酒哉
曾谷月打を讃
古寺や書経よまん所だに
輩府御番に旅だち給へる人に
たが上に眺暮ごろも木葉雨
同仙石玉英公御加番に餞別
袂すりや傘すかす昔鞍
（冬）（上）あ[illegible]のうへの後、花子、吉
太郎
三界のうはなり打や角積
在[illegible]寺にて
僧ワキのしづかにむかふ薄かな
松のはにその火先たけ薄醤油
（此句は松茸の隠題也）

惑徹和尚に対す
そば打や鶉衣に玉だすき
品川送別
雁の腹見送る空や舟の上
白雲に聲の遠さよ鷹は雁
むすめ喰そめに
鶉啼や赤子の頬を喰時に
順検にとはず語や百舌の聲
（頭書「曳尾」）
泥亀の鴫に這よる夕哉
餞二少長上京一
うら枯に花の袂や女ぼれ
如是果のこゝろを
二子山二子ひろはん栗のから
尾州浄教寺にて
燕もお寺のつゞみかへりうて
宵闇や霧のけしきに鳴海がた
鹿の一聲といふ小うたのさんに
更がたを誰が御嘉得て鹿の聲
木辻にて
さほしかや樹き籬より此濱

門立の秋くはゆる男鹿かな
小原女や紅葉でたゝく鹿の尻
秋葉禅定の時
合羽着て鹿にすがるやあきは道
下山
かし鳥に杖を投たるふもと哉
芭蕉翁嵐蘭を悼める詞あり、嵐蘭一子、孤愁をあはれむ。
芋の子も芭蕉の秋を力かな
めおとむつましくて年頃子なき事をなげく人に
おもふ葉は思ふ華にそへ秋葉
二月堂にまいりけるに七日断食の僧、堂のかたはらに行ふところを聞て
日の目見ぬ紙張もてらす椛（もみぢ）哉
甚五左衛門にあひて
此風情狂言にせよつたの道
薩埵坂くだりて
菊紅葉鳥邊野としもなかりけり
戸越山庄
むら椛の實をはたく匂哉

かつちりて掌熊に掃るゝ栬哉

あきふ山庄

谷へつけ鹿のまたきの栬狩

三修禪士

片時は都にのこす紅葉哉

ある人の從者に

紅葉にはたが教えける酒のかん

山姫の染から流すもみぢ哉

菅根

杉の上に馬ぞ見えくる村紅葉

高尾にて

此秋暮文覺我をころせかし

泊瀬にて

栬見る公家の子達かはつせ山

山行

道役に紅葉はく也さよの山

いせにて

紅葉して朝熊の柘といはれけり

南天やをのがみほどの山のおく

南天の實を包めとや鴈の聲

南天や秋をかまゆる小倉山

うつの山の繪に

（頭書「旅思四句」）

笈の角梢の蔦にしられけり

七十の腰もそらすか鳴子曳

いつしかに稲を干瀬や大井川

山の端をやんまかへすや破れ笠

水郷

唐穂を流るゝ脊や水見舞

富士

笠取よ富士の霧笠時雨笠

朝霧や空飛夢を不二颪

背面達磨を讃て

武帝には留守とこたえよ秋の風

旅思　二句

みゝづくの獨笑ひや秋の昏

みゝづくの頭巾は人にぬはせけり

（頭書「本多下總守どの御侍宴」）

召どに馴し子方や花薄

うら枯や馬も餌くふうつの山

後園

いきぬけの庭や鑓摺菊の花

手の内の鷇こぼれてきくの露

旅行

駕籠に濡て山路の菊を三嶋哉

しほらしき道具何ある菊の宿

荷分が從者たんざくほしがる

に

土器の手ぎはみせばやけふの菊

けふの菊小僧でしるやさらさ好

きくの香や瓶よりあまる水に迄

白鶏の碁石になりぬきくの露

雨重し地に這菊を先折ん

こは誰に雨ののこりの袋菊

素堂、殘菊の會に

此菊に十日の酒の亭主あり

畫菊

きく白く苔は後にかゝれたり

菜苑

菊を切跡まばらにもなかりけり

水鼻にくさめ也けり菊栬

菊起　千山ニ菊ヲ借て

七日衣のうしろを押や顏の菊

三嶋にて重陽

門酒や馬屋の鶴のきくを折

宮川のほとりへ酒送せられて

垣籬に花なき時の野菊哉

みちとせのもゝの名におふきくの笆（まがき）に、とよみけるにおもひよりて

いかで我七百の師走菊にへん

竹苑のやどなきたねをうつし奉りて茫奇なるを

出世者の一もとゆかしつくり菊

翁さび菊の交（ツル）むに任せたり

時服藏菊にはきくの笆哉

十日菊

猩世殿十日の菊をかねてより

女子をねがひてまふけたる人に

かに屋にうつろふ花の妹哉

十日菊

饗宴の殘りもがもな菊膾

笠きたる西行の圖に

菊を着てわらぢさながら芳しや

袖の浦といふ貝づくしに

白菊を貝の實にせん袖の浦

那波屋九郎左衛門がさかづき也。

御遷宮の奥村ども拜奉りて

大工達の久しき顔や神の秋

御齋にまふで奉りて

御穗を取て髪あるまねのかざし哉

内宮 [illegible]

身の秋や赤子もまいる神路山

外宮

日は晴て古殿は霧のかゞみ哉

いづれも〳〵わが身はゞかりあるゆへに申侍る也。

太〻や小判ならべて菊の花

雲津川にて

花すゝき祭主の輿を送りけり

冠里公御わたまし祝奉て

初鴈や嚢は場はれて百足持

周信が狐の畫に

白露も一升入のめぐみ哉

平家の襄（哀カ）を語るに

かへり來て福原淋しうづら立

元祿辛未のとし、大山[illegible]へ參詣

品川

品河もつれにめづらし鴈の聲

とつか

稻塚の戸塚につゞく田守哉

藤澤

宿とりて東を開やくれの月

いせ原

よこ雲や離〳〵の蕎麥畠

御向松にて

生栗を握つめたる山路哉

大山

腰押やかゝる岩根の下もみぢ

石藏寺對レ僧

手に提し茶瓶やさめて苔の露

二間茶屋にて

白馬の尾髮吹とるすゝき哉

由井がはま

朝霧に一の鳥居や波のおと

雪の下にやどりて

砧うつ宿の庭子や茶の給仕

鶴岡左の古樹のもとにて

有し代の供奉の扇やちる銀杏

横几追悼

一鍬を手向にとるや新糀

酒もる詞を切題にして各一字を探る中に聞(きく)を

あいせばや夜寒さこその空麻入

白齒雁

片足はやつしゝ也小田の鴈

秋のくれ祖父(おほぢ)のふぐり見てのみぞ

白扇倒懸東海天といへる句つね此いたゞきに對して手ににぎりたる心ちせらる。このあした雲霧立おほひて山の半腹より見わたされたるを、要(かなめ)よりすそといはんも後句なりとて

白雲の西に行衛や普賢富士

未曉吟

鐘つきよ階子に立てみる菊は

洞房の茶屋平兄生前笛を好けるがうせたるを悼て

とぶらへや笛の爲には塗足屐

悼二朝叟一

此人に二百十日はあれずして

吉田氏

唐秬も糸をたれたる手向哉

芭蕉翁十三回

辰霜や鳳尾の印のそれよりは

寶永三戌十一月廿二日、妙身童女を葬りて

霜の鶴土にふとんも被されず

神無月ふくら雀ぞ先寒き

玉津嶋にて

高砂や禰宜の湯治の神無月

御留居に巾置也かみな月

高野にて　十月三日

卵塔の花表やげにも神無月

驚からす片日かはりやむら時雨

あれきけと時雨來る夜の鐘の聲

時雨ゝや葱臺の片柳

芭蕉翁三回

しぐるゝや此(こゝ)も舟路を墓参

帆かけ舟あれや堅田の冬げしき

遊二金閣寺一

八疊の楠の板間をもるしぐれ

蓑を着て鷺こそ進め夕しぐれ

大和めぐりせし頃

むら時雨三輪の近道たづねけり
芭蕉翁病床
吹井より鶴をまねかん時雨哉
釣柿の夕日ぞかはる北しぐれ
飼猿の引窓つたふしぐれ哉
時雨くる酔やのこりて村霽
しぐれもつ雲の間にあへ酒の間　とたはぶれし人にこたえし也。
小夜時雨人を身にする山居哉
當麻寺おくのゐんにて
當院に重寶什物さま〴〵多し。中にも小松どの、法然上人へまいらせられし松かげの硯あり。箱の上に馬蹄とかきて硯のうみの形容とす。
松陰の硯に息をしぐれ哉
世尊寺よりにしからの識を見やりて
三尺の身を西河のしぐれ哉
本多總州公に侍座しける夜むら雨とひとしくからほりの鳴たるを發句せよ、と仰られしに
蝙蝠や柱を捻たる一しぐれ
守山の子にもりを葺時雨哉
三か月のおぐらき程に玄猪哉
東には祇園清水とうたへば
楊弓に名のある女やかみな月
神の旅酒匂は橋と成にけり
家〻の留守居よる也大社
大和めぐりしせし頃
たかとりの城の寒さやよしの山
使者獨書院へ通るさむさ哉
井波門主惠心院殿　ありそうみとなみ山の二集ゑらみ給ふに　御所望
凩や沖より寒き山のきれ
何がしの家にて　御流頂戴のことぶきに
紅葉の下部もあらんゐのこ哉
玄猪とや祖父のうたふ枝折萩
くろの者代〻のゐの子に歸花
つみ綿に兎の耳を引たてよ
大町新宅
水仙や鉇ついでの小鳩棗
水仙に猶分行や星月夜
凩に氷るけしきや狐の尾
捨人やあたゝかさうに冬野行
父が醫師なれば戯に
鱇汁に又本膳の鯛かな
河豚ゐらふ水のにごりや下河原
何よけん藻魚はた白冬肴
表伐十九日から見へぬ也
大黒のうせたる家にて
酔さめて大黒出ん夕ゑびす
まな板に小判投けり夷講
糸屋十右衞門宅にて
嵯峨山や都は酒の夜かう
人妻は大根ばかりを鱇汁
打鍋に鱇もゑびすの笑哉
生煮をふぐといふ也ふぐと汁
世中に舅をよぶやふぐと汁

日本の風呂吹といへ比叡山

ふけゐの浦打めぐりて

鰒ひとつとらへかねたる網引哉

幻住菴にて

雑水の名どころならば冬籠

蕪汁や霜のふりはも今朝は又

宗降尼みまかり給ふ年、千那
にぐして堅田へ行とて

婆に逢にかゝる命やせたの霜

笹の刈蕪おかしや見るめなき

秘蔵がる鍋のかるさや筑摩汁

鰒汁や祝言のこす能戻り

かへり花それにも敷ん蓮切

柳寒く弓は昔の憲清也

雲山のみちにて

かまきりの尋常に死ぬ枯野哉

生嶋新五郎上京に

鉢の木の扇笑ふなかへり花

野の宮のやぶかげにわびしき
槌のおとしけるに

鍬鍛冶に隠者尋ん畑の霜

淀にて

初霜に何とおよるぞ舟の中

しばらくもやさし枯木の夕附日

園城寺にて

からびたる三井の二王や冬木立

凩や勢田の小橋の塵も過

芭蕉翁を見送りて

冬枯をきみが首途や花曇

石菖の露もかれ葉や水の霜

加生のつまの心づかひを得て

縫かゝる紙子にいはん嵯峨の冬

むかしせし戀の重荷や紙子夜着

起出て事しげき身や足袋頭巾

寐心やこたつぶとんのさめぬ中

紙子着てくゝり頭巾もみそじ哉

長途狂僧吟

紙子きて渡る瀬も有大井川

日ばかりを氣まゝ頭巾の浮世哉

山鳥のねかぬる山に月寒し

何となく冬夜隣を聞れけり

此木戸や鎖のさゝれて冬の月

閑さや二冬なれて京の夜

新宅二句

竹の場の小庭成べし炭俵

鼠にもやがてなじまん冬籠

遠水三十五日に

おほふ哉さまさぬ袖を納豆汁

霜月朔日の例を

諸人や嵐芝居を冬籠

好柳が市店

人を見ん冬のはしゐも夕涼

顔みせや曉いさむ下部の橋

朝叟老父七十の賀に

白河の波をかゝばや桐火桶

播州たち野に一僧のすきあり。六十年の榮花を誹諧にきはめて終りを取侍る。ことに我をしたへるよし聞え侍るに、いたみ

栗飯の焦て匂ふや霜の聲

法雲寺老僧春色と聞へたり。

源氏もや手吟の家の夷講
さびしさは獨我住ほいろ哉
蠖の手に匂のこるや霜の菊
捨人の爲の切とて火打哉
鬢の霜木賊のひと夜枯にけり
路のとう其根うへをけ冬構

蜆のうつせ貝を題にして、都鳥と名付たるによせて

炭賣は炭こそはかれみやこ鳥

柯求老人の手向

山茶花や獨もれたるお盛物
海へ降あられや雲に浪のおと
みがゝれて木賊に消るあられ哉

山行

山犬を馬が嗅出す霜夜かな
みぞれにも身はかまへたり池の鷺

寒芦畫讃

あな寒しかくれ家いそげ霜の蟹
氷にも鳥とぢよ鷺の中

住吉にて

蘆の葉を手より流すや冬の海

周防どのは才ある人にて、政事行るゝに一生非なし。ひなきをめでゝ、板くらどのと申とかや。この中より、やけたる錢をひろひ出て

火燵から青砥が錢を拾けり

片手打落したる火鉢を幸のものかなとて

忠度と灰にかゝれし火鉢かな

名もたゞのりといふべし。これに對して

炭とりに鏡のぬけし手樽哉

三年成就の閑に入

爐開や汝をよぶは金の事

炭竈　三句

炭やきの獨ぞあらん釜のきは
炭がまや鈴木龜井が軒の松
炭うりや朧の清水鼻を見る
炭竈や煙をぬけば猿の聲
かたすみも其木葉より驕りけり
うづみ火の南をきけやきり〳〵す
埋火に芋やく人は薫す
炭屑にいやしからざる木のは哉
とてもならかの一車とのゐ炭

寒蠅爐をめぐる。

憎まれてながらふる人冬の蠅
口切や海のひだに綢繆

梅津其雫秋田へ發駕を粕壁の宿まで送侍て

こゝに芥座敷しつらへ網代守

岡居安樹

へら鷺の爐を破さぬや灰せゝり

山中　高客

冷苍の松にかゝるや三穗の海
並蔵はひゞきの灘や寒作り
十石は鶴につく也れうあん寺
冬川や筏のすはる艸の原

開倚橋

うすら氷や鐙長なる橋柱
瀧幅や氷の中にゐざり松
鯉一ッあじろの夜のきほひ哉
煮凍や簀子の竹のうす緑

内藏の古酒をねだるや室の梅

市隣の侘人に

宮薫屋はてしなければ矢倉賣

揚屋の外塗に鳥うるもの鴨の
毛を引を見て

鴨の毛や鷺の衾の道ふさげ

心をや筌(うき)にゆらるゝうら千鳥

浦觸さこそ明石も大神鳴

網代屋にところてん屋の古簾

塩籠子や投てたゆたふ礒鵆

よき日和に月のけしきやむら鵆

薩埵山にて

妹が手は鼠の足かさよちどり

汐瀨の猪首も波のかもめ哉

珍しき鷹わたらぬか對馬舟

京なる人に案内して

ゑぼしきた船頭はなしみやこ鳥

瀧口やおもひ捨ても池の鷺

人丸講　月次に

沖の帆も十はたみそや濱千鳥

兩國橋上　二句

曉の筑波にたつや寒念佛

寒念佛橋をこゆれば跡からも

酒飯の飲酒(おんじゆ)はいかに寒念佛

去來家にて

千鳥たつ加茂川こえて鉢扣(たゝき)

こと〴〵くね覺はやらじ鉢扣

南都にあそべる時

寒聲や南大門の水の月

ひたち帶のならはしなどおも
ひよせ侍りて

たれとたが緣組すんで里神樂

夜神樂や鼻息白き面の内

雪買に雪を沽ばや鶴の雪

清水修行にとまりて

むかしたれ雪の葬臺の日の氣色

知恩院町に宿とりて

初雪にまくすがはらの姿かな

大津まつもとにて

雪の日や船頭どのゝ顔の色

ひらかたの宿にて

馬かたに貧きはなし雪の宿

寒山のさん

ねる恩に門の雪はく乞食哉

西運寺興行

初雪に人ものぼるか伏見舟

我雪とおもへば輕し笠のうへ

はつ雪や赤子に見する朝朗

はつ雪や雀の扶持の小土器

門といふ字を得て

馬に炭さこそはたゝけ雪の門

矮屋

窓鏡のうき世を咄すゆき見哉

官城御普請成就して諸家御褒
美給はりける頃

陪臣は朱買臣也ゆきの袖

芭蕉空庵をとひて

衰老は簾もあげず菴の雪

門の雪樒ありやとゝはれけり

山居の僧に

雪を汲て猿が茶を煮けり太山寺(みやまでら)

かも川に一むれとよみたるを

禪迦とよぶ頭も雪の黒木かな

ちとれがみなる女のあだ名にや。いとけうざめたり。

酔吟

雪うちややり手をかへす小忌衣

望二叡山一

薄雪や大の字枯る山の草

戸障子のおとは雪也松の聲

かはかうや竹田へ歸るゆきの暮

遊女土佐をむかへたる人にうとく成て

黒塚の客あしらひや闇の雪

立待側

はつ雪や内にゐざうな人は誰

めづらしい物が降ます垣ねかな

鴨川の鴨を鐵輪に雪見かな

或御方より雪見にむかへさせ給ふ鳥上時

初雪に牧やえられて無事なやつ

楠の銅壺四間に一間とかや。万客の唇をうるほせば

はつ雪や湯のみ所の大銅壺

もとすみだ川と云わたりにて

半衿の洲崎もありや雪の松

人も来ぬ夜の獨酌

初雪や十に成子の酒のかん

軍兵を團炭でまつや雪礫

松の雪蔦につらゝのさがりけり

前といふ字で雪の句

叡覽の人になりつゝけふの雪

初雪は盆にもるべきながめ哉

出口にて

きぬ〴〵に犬を拂ふや袖の雪

すてゝあるといふ小歌を句の題にして

おもはめや捨てあるかは雪の宿

市中閑

初雪や門に橋ある夕間ぐれ

不分當春作病夫

酒ゆへと病を悟るしはす哉

極月十日西吟大坂へのぼるに

いそがしや足袋賣に逢うつの山

新壕にて食くふやうに師走哉

餅花や灯たてゝ壁の影

餅と屁と宿はきゝわく事ぞなき

やりくれて又や狭莚年のくれ

書出しを何としはすの卷柱

座右銘

行年や壁に耻たる覺書

乳母ふえてしかも美女なし年忘

鍋荷ふ中間殿にかくれけり

のり物の中に眠沈て

年忘劉伯倫はおぶはれて

震威流火しづまりて

妹が子や薺とけて餅の番

煤掃てねた夜は女房めづらしや

京に春をむかゆる年おはらの賤に問事あり。

行年の牛洗ひけり年の暮

臘兎五ッの子を産り。獎中にやしなはれて、若舞にかけらん事をいはひて

年をとる兎に祝へ熬ぬ豆

すゝはらひ暫しと侘て世捨藏

童にはしころ頭巾や煤はらひ
忠信が芳野仕廻やすゝはらひ
行がたき親の悋氣も師走哉
閑窓に羽箒をめでゝ
煤ごもりつもれば人の陳皮哉
梟を持孔雀の玉や煤ごもり
御煤ノ篇ハ竹取。
千山宅とし忘に
割すそや八乙女神楽男より
揚屋に醉房して
鯲の年蓮紙籠をさらへけり
年の市たれをよぶらん羽織どの
小傾城行てなぶらんとしの昏
山陵の壹分をまはすしはす哉
女子の疱瘡しける家にきげん
とりて
餅の粉や花雪うつる神の笑
行歸公万句御興行巻軸
萬代のゞをあげけり神楽帳
市隅
弱法師我門ゆるせ餅の札

鳩部屋の夕日しづけし年の昏
梟よ松なき市の夕あらし
自悔 三十
子をもたば幾ッなるべき年の昏
大津驛
千観の馬もせはしやとしの暮
雪窓
損料の史記を師走の螢かな
年の瀬やひらめのむ鶴の物思
行年や貉評定夜明迄

[illegible]文集 拾壹

晋子一世の奇句は、ことゞく五元につくせりといへども、興ある自畫に戯言の句をなし、あるは一斗百篇の醉吟、又は柳巷の曉、旅店の昏、みづからも覺ずしてもれたるなど、人ゝはこれをもてはやして、箱にひめ、物にとゞめ、吾家ゝの青氈とよぶを、これかれあまねくさがしもとめて、編てまた一書となすのみ。

晋子一世の奇句はことゝく五元につくせりといへとも興ある自畫に戯言の句をなしあるは一斗百篇の醉吟又は柳巷の曉旅店の昏みつからも覺すしてもれたるなと人ゝはこれをもてはやして箱にひめ物にとゝめ吾家ゝの青氈とよふをこれかれあまねくさかしもとめて編てまた一書となすのみ

五元集拾遺

春之部

日の春をさすがに鶴の歩み哉

年立や家中の禮は星月夜

松かざり伊勢が家かふ人は誰

神田町に居をしめて

行合の松もかたそぎかざり竹

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春

鵜さもあれ顏淵生て千ゝの春

元日や月見ぬ人の橋の音

はま弓や當時紅裏四天王

元日の覺うり十の指黑し

手ニ握レ蘭ヲ口ニ含レ雞ー舌ヲ

ゆづり葉や口にふくみて筆はじめ

簡進の分野是かや春の物狂ひ

高砂住の江の松を、古今万葉にためしにひかれしより、詠うせずして連歌に傳ふ。しかるに此松は枝葉百間にあまりて、諸木にことなる氣色、尤はいかいなるべし。

蓬萊の松にたてばや曾根の松

庭竈牛も雜煮を居りけり

題黃金

目には見ず一万枚を御代の春

若水に鰹のおどる涼しさよ

春王正月老

生死のむかし男ぞと水祝ひ

明る夜のほのかにうれし嫁が君

初夢や額にあつる扇子より

世の中の榮螺も鼻をあけの春

參宮の四判は來たり亥子の間

蓬萊の讃

鳩そよる三の書院のかどやくまで

福祿壽の讃

長き日や年のかしらの影法師

寶引の讃

保昌がちから引なり鬮ふぐり

松かさやまはさばこまにまはるべく

花さかば昔よ尾上の春おろし

春の水かろく能書の手をはしらす

若菜

傘持はつくばひなれし若菜哉

菜つみ近し白魚を吉野川に放て見う

さわらびの七種打は寒からん

うかれ雀妻よぶ里の朝若菜

大根の畫讃

兵のひかへてふたり子の日哉

惠美須紙かけ取帳の三枚目

此句は睦月十一日内田市左衛門が家にて、帳のおもてにかゝれしと也。

梅　柳

さす枝のゆきとゞかぬや繪馬の堆

旅立ける人に

古郷へ梅おり入れよかたな箱

白主改名　副書らせてなし

白黒の間の障子やむめと屋

梅にはゞよき句帳とり

此句五文字ちぎれて見へず

借べし、

小袖着せて佛付へむめが妻

芭蕉翁百ヶ日懐舊

宿の梅椴いかばかり青かつし

同書略

雪の梅有やなかしのむかし哉

同書有　今略

三日月の命あやなし闇の梅

猿のこゝろ手に懐の柳かな

あるまんす所持の掛物自賛

曲れるを曲てまがらぬ柳哉

風たりに青い雨ふる柳かな

山更上京

貫さしもわがねて輕き柳哉

傾城の画

青柳の額の櫛や三ケの月

畫

鶯に長刀かゝるなげし哉

うぐひすの曉寒しきりぐす

鶯がねぐら笛吹おこせ笹鸝

うぐひすや鼠ちり行閨のひま

あらし座にて

鶯の子は子なりけり三右衛門

雪消て富士をはだかに青肥たり

杉起て鳥を見する雪間哉

すべらずに筏さす見よ雪の水

こまの戀

（頭書「近隣戀」）

京町の猫かよひけり揚屋丁

（頭書「寄竹戀」）

埋られたをのが涙やまだら竹

（頭書「幼戀」）

はゝきゞの百日なき子に別れ哉

（頭書「寄寺戀」）

柏木の柳もそれかあかり猫

（頭書「思他戀」）

飯くへば君が方へと訴訟猫

（頭書「疑戀」）

花の夢胡蝶に似たり辰之介

人にこしやらの袴をふりかけられて

耳ふつてくさめもあへず鳴音哉

吉原の初午

初午や賽錢よみは芝居から

初午に寺のぼりの例をふたりの御子達に祝願いたしけ、

いの字より習ひそめてやいなり山

山の端に乙鳥をかへす入日かな

川燕纜さす邪魔と見ゆる哉

歸る鷹米つきも古郷やおもふ

授記品無有魔事

くもりしがふらで彼岸の夕日影

不生不滅の心を

海棠の餅を悟れねはん像

伶人の門なつかしや春の聲

世の中は何かさかしき雉子の聲

信濃

梅ちるやこれを貨にせん蕨市

かつしかや江戸をはなれぬ鹽山

ともに蓮寶の亭にこもりし侍け
るに

白川の關に見返れいかのぼり

白魚露命

川と海生雪白魚の鬮闇

白魚の色かはるもの用げしき

帰雁

浦鶴がたよりの春か鶴の聲

引かへて糞をはたのに春の鴈

駒とめて雪見る僧に露のたう

すご〳〵と摘やつますやつく〳〵し

泥亀の顔とおもへば土わさび

燕にすさめられてや庭の桃

東湖留守見舞

出替りや人置使話も連業から

やぶ入やはやいにろくなつらはなし

鶏合

炭喰の聲だにたゝぬねらひ哉

干衣に罪黒き名を響けり

割って入るくるみ花冠も實子哉

老の身のけふ若やぎぬ隅田川

蜂居をひたさば田の清水かな

汐干

貝(バイ)つるや白洲の末の流れ松

貝にて貝をむき侍るを

あさり貝むかしの面うらさびぬ

蓬萊や塩瀬によするふくさ貝

子安貝二見の浦を産湯かな

鐵槌にわれから嬴螺(ニシ)のからみ哉

へたたりやかつぎ上げしは木の葉

海松ふさや浪のかけたるほらの貝

すだれ貝雪の高濱見し人か

われからと雀はすゞめからす貝

江鴫や日暮鐘から汐干貝

雛

かつらぎの神はいづれぞ夜の雛

いもうとのもとにて

見ぬ世にも我酒かはん雛が前

上座ほど雛のすがたの新なり

紙雛のさう〴〵しさよ立すがた

花

燕の宿る酒屋きはめて櫻かな

さくら狩けふは目黒のしるべせよ

けばるを魚に喰るゝ櫻哉

これは〳〵と斗散も櫻哉

京中へ地主のさくらや飛胡蝶

勢田の春望

山櫻身を湖うたの擔子かな

墨染に鯛彼さくらいつかこちけん

山櫻鏡こひしき僧あらん

浦人の花をもらふとて

散時を斗に買む磯さくら

出羽の車に拾ふや千き櫻

鯉立かけし花の陰に娘の産れ
る猶に

隙(ひま)な手の鏈持さむし山さくら

花ひとつ袂に御乳の手出し哉

大佛膝うづむらむ花の雪
泥坊や花のかげにてふまれたり
德利狂人いたはしや花ゆへにこそ

庚申の雨といふ題にて

此降を人が延さる花見かな

讃莊子

徒是は嵐雪の蝴蝶のうそ
花鳥もうづらとならむ願哉
かんざしやちり行花のおもしにも
花下げてやり手がひとり寺参

神力品現大神力

法の花ちるや高座をたゝく音

憶芭蕉翁

月花や洛陽の寺社殘りなく

代樵

彫リ笛ノ縫ヒ簑ノ花に晴せん浮世哉
屋形舟花見ぬ女中出にけり

惜春をいたみて

泣てよむ短冊もあり花は夢
名ざかりや作戀五郎花さだめ

梅島

花鳳や天女負れて歩渡り

寒食二句

寒食や竈下に猫の目を怪しむ
今案するに寒食の家には自身番

畫讃

藤の花これまで顯れいで蛸なり
山吹は黄玉青玉露ぞうき
きりしまに豆腐を切て捨ばやな
柴舟の里は茶摘の水けぶり

ある人の子の名を聞て

ことはりや養ひ子なら蜂之介

竹に蜂の巣かけし繪に

なよ竹のさゝら三八宿とこそ

何必進杯走似雲　此侍大酒盛
と見へたり

此虻をたばこで迯すけぶり哉
ねぶる蝶夜る／＼何をする事ぞ
俗にいふうぶめなるべしよぶこ鳥

三月盡

駕に乗て春を送るに白雲や

夏之部

寄廿己

白禿もなをる斗ぞころもがへ
法躰もしまの下着や更衣
ぬがでやは千手觀音衣がへ

東叡山院

僧正の青きひとへや若楓
今日にかはる浄瑠璃殿の青簾

時鳥

ほとゝぎす二聲めには出馬哉
あの聲で鯨（トカゲ）くらふかほとゝぎす
晋を守る夜寺に鬼なし子規

山田市之丞

ちつ／＼と歸すつゝみや郭公
觀音で耳をほらせてほとゝぎす
我何人しらず我を啼ものは杜宇
鉦かん／＼鷲破（すはや）時鳥艸の戸に

あれ〳〵と轡ならはづれてほとゝぎす
ほとゝぎす家隆のうそやきり〴〵す
明がたに鳴すてし一聲を
郭公中入までのはせをかな
さもこそは木見わらへほとゝぎす
嵐寺うこぎが輿をほとゝぎす
狩の戸や犬に初音を時雨鳥
須磨にて
ほとゝぎす雲も輪になる浦は哉
夏
たのみなき夢のみ見けるに
うたゝねのゆめにみへたる鰹哉
[illegible]鰹の腹の中のめぢか哉
人のもとにて
人のまことまづあたらしき鰹哉
卜賀
名所は海を見ずして鰹哉
丹羽左京かうがとかゝはゝし
かゝける雲鶴を
黒牡丹ねるやねりその大鳥毛
むら雨や[illegible]山を名にしふかみ草
須磨の山うしろに何をかんこ鳥
蹄をふんで夜卯の花を惜けり
浅野家の義士等をいたむ
おもだかの鏃を引也かきつばた
伏見の何某に
杜若女せつたのかたしあり
傾城の夏書やさしやかりの宿
けしの花朝精進の凋れかな
散り際は風もたのまじけしの花
芥子ばたけ花ちる跡の須彌いくつ
上行寺
灌佛や墓にむかへる獨言
紙合羽かろしやうき世夏念佛
岩翁亭追善
みじか夜や隣へはこぶ蚤の足
短夜や朝日まつ間の納屋の雛
ある人の別墅にて
内川や鳰のうき巣になく蛙
枇杷の葉やとれば角なき蝸牛
秋しらぬしげりもにくし烏麥
馬士寝て馬をたづぬる夏野哉
麥にかなし瀬に月を見ん迄の秋
能化堂麥つく僧を氣色哉
[illegible]の夏暮に年を笑ふとかや
[illegible]年
ぬか味噌に年を語らむ瓜茄子
干瓜やおしろいしても黒き顔
祝産育
たかうなの皮に臍の緒つゝみけり
大町亭法會　調書略
法のため筍羹皿もかたみかな
しなびたる法師の梅干けるを見て
梅いくつ閼伽の折敷に玉あられ
壬二集
さみだれと五月きぬれば名をかへていかにひまなき雨とおもへば
さみだれの名も心せよ節句前
なよ竹の末葉のこして紙のぼり

かぶと取出すを見て

ものゝふの鐵甲や庫のうち

粽かはん驛(うまや)にとめて鈴のぼり

鐵網沖には幾つ帆かけ舟

鐵立長者の夢や黑牡丹

畫讃

粽ゆふはさみや芦の薬分盤

きる手元ふるひ見へけり花あやめ

根合や御池にひたす花筐

題文

けさたんとのめや菖の富田酒

千山亭新宅雪舟の繪に

闇に巣を營こそねらへ五月雨

さみだれにやがて吉野を出ぬべし

三味線や褻衣にくるむ五月雨

燕もかはく色なしさつきあめ

題江戸八景

住べくはすまば深川の夜の雨五月

さみだれや湯の樋外山にけぶりけり

五月雨や君の心のかくれ笠

江の島、

黴雨の窟座頭一曲聞へ給へ

何を音にすぽん鳴らむ五月雨闇

（「五月雨闇」恐くは「五月闇」の誤記ならん）

傾廓

八兵衛やなかさなるまい虎が雨

旅人をあはれみて

舞坂や闇の五月のめくら馬

腰越

篠すがき慰斗を敷寐の五月かな

自懐

夜あるきを母寐さりけるくゐな哉

水鷄鳴く夜半に逆行のつとめかな

和古詩

琴を燒て水鷄を煮る夜酒淋し

いらこの杜國、例ならでうせけるよしを、越人より申聞へける。翁にもむつましくて、鷹ひとつ見つけてうれし、と迄たづねあはれける昔をおもひて

羽ぬけ鳥鳴音ばかりぞいらこ崎

引舟の讃

夏婦に鍔でかるたをそろへけり

夏川に藪より仕出す簀子かな

宇治にて

柴舟にこがれてとまる螢かな

婦の戸に我は蓼くふ螢哉

蠹しらみ窓の螢にかたる也

若竹や簾にわかぬる箱根山

田植まで水茶屋するか角田川

合羽着て友となるべき田うへ哉

早乙女のよごれぬ顔は朝ばかり

摺鉢の早苗穂に出る秋こそあらめ

會盟

交りのさめて亦よし夏料理

手にかはく蓼摺小木の雫哉

籠前栽

陸官士迎客の興をまうけ侍ると聞ゆ。いさゝかなる菜園を

とゝのへて、關前屋と名付、
手鍋に雨の雫をいとはず。そ
の題をとゝにおにどりし侍る
句に

海松和布をや蟹の腰簑青角豆

望海觀漁

海松の香や汐こす風の磯馴松

鎌倉の濱出を

海松ふさや貝取出刄を蟹にかる

止波浦にて

地引すと舩のまに／＼暮の汐

津島の漁舩押送りして此橋の
下に入ぐ

帆をかぶる網のさはぎや薫る風

舟興

更るほど四ッ手のいなの光かな

晴日に七里は出たり行ごや鮓

行の枕に鮓やありける今の茶屋

岩根こす鮭に鱗あり走鱗

遊女小むらさきをかゝせて讃
望れしに

蓮のはなや蕾に書分てさそふ水

蘭の花や海老觸す端にさゝれ石

藤の露にと思ふもかなし深草寺

夏木立黄檗上の破風五寸

建長寺無レ詩僧一了人

又に詩なし我に俗なし夏木立

谷木（ウツボ）の鬼なおそれそともし笛

午の年午の月午の日午の時う
けに入る。

競馬埒に入る身のいさみ哉

日待酔しらけてみな逃ちりた
る跡に、ひとり燈火をかゝげ
たる難有さよ。

いつの間にお行ひとりぞ夏の月

雲に入る月やしろりと富士の山

夏の月蚊を疵にして五百両

市の假屋のいぶせきに

吾つくり藁打つ宵の蚊遣哉

夜讀書

蚊を打つや枕にしたる本の重（カサ）

申の日とて蚊屋まいりたり。

夜早ねん紙帳に風を入る宵

蚊は名のりけり蚤はぬす人のゆかり

醉て忘

宵の蚊も枕をわたる八難かな

宗長の句をとりて

橘の一ツ二ツは蚊もせゝれ

むかし匂ふ花さへ實さへ陳皮さへ

蚊遣り火に夕顔白し檐は

松賀秋航岩城へ還に初宿千住
とかや聞へければ

蚊遣り火に挾箱から團扇哉

傳青衣

しばらくは蠅を打けり韓退之

射ル者ハ中リ突ク者ハ躱ス

蠅打よいづれにあたる默ごゝろ

信濃へ登らるゝ人暇をせらる
る餞に

梁の蠅を送らむ馬の上

蠅なくば一華折ん夏の菊

土さへさけてる日にも
蠅追ふに蛛忘れめや瓜作り
母の日や又泣いだす眞桑瓜
あたまから鴫に成けり六皮牛
ならはしの鹽茶のみけり瓜の後
　瓜の一花　文はこゝに略す
此花に誰あやまつて瓜持參
　淺草川逍遙
富士行や網代に火なき夜の小屋
白雪に黒き若葉やふじ詣
はれてゆ又曇りゆふじ日記
順禮のよる木のもとやところてん
氷室山里葱の葉白し日かげ草
　本ノ集ニ百姓ノ青葉ニとは文選の
　詞也
百姓のしぼる油や一夜酒
　鬪ニ農
燒鎌の背中にあつし田草取
紅粉買や朝見し花を夕日影
晝がほや猫の糸目になる思ひ

葎に鳴くや六月ほとゝぎす
百合の花折られぬ先にうつむきぬ
白露を石菖にもつ價哉
　三藏といひけるかたひのもの、つゞれたる袋より俳諧の歌仙取出して、點願はしきよしを申てしさりぬ。其卷の前書に、爰にいやしき土の車の林のかげに身をかなしめるありと書り。いかなる者のなれるはてにか有けむ、かの卷の奥に申遣しける。
あまさかる非人貴し麻座
　一品の宿坊にて
日蓮よ木すゑに蟬の鳴く時は
客蟬に吉原もの〻訴訟かな
　木戸番をあはれむ
蟬を聞け一日鳴て夜の露
　人語の人木傳をかたりしに
蟬の聲ましらもしあつき榾哉
　紙子を懐紙の表紙にして點取におこせければ

價値にかけもたらぬか蟬の衣
買彼ノ蟬ヲ貧者に衣をぬぐ事を
　戒園殿のかり屋しつらふを
杉の葉も青水無月の御旅哉
　拜天王之御旅所
里の子の夜宮にいさむ鼓かな
　茂叔讃
傘に蝶蓮の立葉に蛙かな
　同普賢
香一爐蓮に錢を包みけり
　得二正觀音像一
手に蓮膠にしまぬ匂ひ哉
　惠遠法師は法花の奉受たりといへども、廬山の交りをゆるさゞりけるとかや。
王あらば爰で筆とれ白蓮社
泥坊の影さへ水の蓮かな
蓮の葉の赤鱏もかゝる暑哉
蜘かけの欄干暑し星は北
　（「欄干」恐くは「闌干」の誤記ならん）

於甲斐、國中樵山村人の許

川と書や酒の萬屋の軸うつり

小女の帶にくるまるあつさかな

傳九郎が持し團扇に

朝比奈の楽屋へ入し暑哉

宗竹のもとへはかたより文参りたり。送りものやさしかりければぬしにかはりて申侍る。

生の松いかに忘れむ汗拭ひ

死の海を汗のうき麻や夢中人

山田視亭にて

汗濃さよ衣の背縫のゆがみたり

身にからむ一重羽織も浮世かな

何と羽織縮帷は重し紗は輕し

小町の讃

顏かけて休むなるべき大うちわ

かはほりの物かきちらす羽色哉

水の紛に風の頭たる扇かな

うすもの丶風情日にはる團扇哉

所見

賎か家か星か川邊の涼かた

翁らの文に都のすゞみ過て又とち風になりともまかせてなど丶聞へけるをとゞめて

丈山の濱らのあとを涼みかな

夕薬師すゞしき風の誓哉

涼舟泥ぬり合し瀬かな

少年を舟に俵して不知の青をとゝのへたる

此舟に老たるはなし夕すゞみ

在尭の讃

寐たちを子とも起すな夕涼

義公日次の題をとりあはせて

河貫垣徳利もひたす流かな

芝物のすゞしきとこなつの卷を見ておもふ

軒合に猫よく寐たり下すゞみ

夕すゞみよくぞ男に生れけり

此句をいづれの集にか他人の句にせり。予晋子の書れし自書讃を見たり。

抱籠や妾かゝえてきのふけふ

田水の置宿に清水を思ひ出して

瀧やあふみ其またかむしろ

甍よりいねて

うたゝねやかほりつめたる晒巾

夏醉や曉ごとの柄杓水

井にかみあらふ賤の女はおもひもかけぬつやなり。

顏あげよ清水をながす髮の艶

露沾公能興行

日にやけて酒のみけるか清水鼻

左右に立わかりて、清り濁りとあらそふ心を、知る人ぞ汲得侍るべきなれば、松かげに下涼せし我に判者をせよといはれて、亂心水の底をたゞし侍る。

此岡は一荷ににたへ求水

世にあり侘て西行の跡なつかしきまゝに

蝸すむ家よ蟬の鳴聲清水

夕立や法華かけ込あみだ堂

灸すへて夕だつ雲のあゆみ哉

烟南竹

夕立や洗ひ分たる土の色

ゆふだちやきのふの坂をとらば瀧

雨中吟

白雨に獨活の葉ひろき匂哉

淺茅が原に遊びて晴間られし
く露を見るに

夕立や益ちいさき艸の原

ゆふだちや薬屋をかふる傀儡師

夕立や家を廻りて啼家鴨

八雲たつ此簸川を雲の峯

構擬の心すかすや雲のみね

望相州

雲見草鎌倉ばかり日が照るか

うたゝ寐や揚屋に似たる土用干

夜着を着てあるいて見たり土用干

法の聲むなしき鐘の扇かな

醉登二二階一

酒の瀑布冷麥の九天より落るならむ

ひや酒やはしりの下の石疊

庵の留守に

すびつさへすごきに夏の炭俵

隣家に樹をすく人有。其四時
先後を愛する事をしらず。

何かいはん六月桐を植る人

市中の光陰はことさらにいそ
がしきを

秋ならずさゝら太鼓や夏神樂

御　秡

夏秡御師の宿札尋ねけり

秋之部

井の柳きのふを桐の一葉哉

水の蜘一葉にちかくおよぎ寄

書山子のもとめ　賛は採雪
なり。琴と笙と太鼓と讃窠ま
れしに

右　笙

けしからぬ桐の一葉や笙の聲

舜庵に水つきて住わびける僧
をとひて

手拭の筐よりもろ一葉かな

春日野や風こし猿の一葉川

詞書略之

空や秋蚊屋を明れば七多羅樹

父の煩はしきを心元なくまも
り居たるに、いなみがたき會
に呼たてられて、此句を申出
たれば、一折過るほどに快し
と、いふを告たり。妙感の餘り
にこゝにしるし侍る。

秋といふかぜは身にしむ薬哉

格枝亭柱かくしに

乾ケン　兌　坎　震　離ス　艮　坤　巽

空や秋水ゆりはなす山おろし
と御よみけへ。下の字自然に
まはりけこそ彌三五郎にてけ

雨アマ冷ヒエに羽織や夜の簑ならむ

秋夜訪二隱林一

市　隅

西國に雅意なかれや三日の月
美女美男僧顔にてらす蓮哉

市中の閑居

あさがほやよし見む人は竹格子

朝な〳〵に咲かへて盛ひさし

きよみる御歌をかんじ奉りて

草は仙翁様をいのちかな
あさがほやとれきはに咲猪口の物
朝顔にしほれし人や髪帽子

すゝきを掛けるかけものゝ讃

あさがほや穂に出るまで通あかる
露にきのふの瓜の二葉哉
朝顔にいつ宿出し御使
首心の妻しほれて恨む権垣

七夕

星合や人の心を爪はじき
露橋や待とは宇治の星姫も

東叟百翁七十七歳の秋万葉の
歌よ七夕の賀句勧進

星の夜よ花火紐とく藤ばかま

三遷のおしへに慣ひて七ツに
なりける姫を寺へのぼせたれ
ば一日ありて七夕に歌を奉り
けるをいとおしみて

文月や産るゝ文字も母の恩
樽買がひとつ流すや天の川
妻星よあふに一くせある女か
大切の夜は明にけり天の川

後七夕

明星や額に落る鵲ほくろ
けふ星の賀にあふ花や女郎花

女わらべの心ばへして籠に露
かひ侍るを七夕の手向艸にせ
しかば

露まつや咲音こしふせてきり〴〵す

海邊晩雲

稲妻や朝暾したる空に又

彌陀のりさうをかふむらずばと
こそたのみしにこれらが結縁は

夏のうちに杓子をかぶる鼠哉

七月十日の夜東潮が食客に杪
子のらせけるをとぶらひける
也

夢となりし骸骨おどる蓑の露

同書あり略す

萩もがな菩薩にて見し上童

文は萩の露にありこれを略

はぎの露蛤貝にくすりかな
萩な刈そ西瓜にまくら借す男
牛に乗る嫁御落すな女郎花

遍照の讃

僧正よ鞍がかへつて女郎花

短冊書せらるゝ達慕さを

葛の葉の赤い色紙をうらみ哉

髭がちなる男の権つみたるは
にげなかるべし。

西瓜喰ふ奴の髭の流れけり
西瓜くふ跡は安達が原なれや

沾徳餞別

點せがむ人の宿かれ花すゝき
かなしとや見猿のためにまんじゆさげ

芭蕉葉に雀も角をかくしけり

取る日よりかけてながむるたばこ哉

芋をうへて雨を聞風のやどりかな

　風・薬・「秋廻」

風秋の荷葉二扇をくゝるなり

茶筅もて眞の持除や白芙蓉

　往會

かへらずにかのなき魂の夕かな

たらちねに借金乞はなかりけり

　右の二句文あり今こゝに略す。

　随意尼品

錦を罪の秤や墓をいり

　分銅原（分倍が原か）

みそはぎや分限に見ゆる髑髏

　文月をかねて剃髪を遂願し世の人のいはひくさとすと。

錆切のかくてもへけり大赦迄

生薑酒の下がらぬ親仁哉

　花はかたみに入、葉はあしかに荷ひ分て、その労をいとふ。まことに聞なる争ひを

親も子もきよき心や蓮實

聞經や鐘のたゝきは弟子坊主

一長屋錠をおろしておどり哉

踊召て番の太郎に酒たらべけり

上手ほど名も優美なり角力取

　露

齋院の此戸さしけん露なれや

船ばりをまくらの露や閨の外

文月やひとりはほしき娘の子

子子等には猫もかまはず夜寒哉

茶のけしき喘しむころや新豆腐

　芭蕉庵の夜

墨染を鉦鼓に晴るきぬた哉

砧の町妻吼る犬あはれなり

　點取におこせたる懐紙の奥に

二巻に目をさましたる砧かな

　宇治の山水

川霧や茶立ふくさののし加減

霧汐烟行末かけてすまの浦

　寂蓮

和歌の骨（コツ）槇たつ山の夕かな

青海や淺黄になりて秋の暮

秋の心法師は俗の寐覺哉

　南都の井関寺ね来りて野田の玉川には西行上人の堀井ありと語りしに

濁る井を名にな語りそ秋の雨

　七月廿一日ハ昔三回忌なれば智海師をともなひて　墓誌

　淺井誓願寺念佛堂

三人の聲にこたへよ秋の聲

　虫

まくり手に松むしさがす淺茅哉

猫にくはれしを蛼の妻はすだくらん

酒さびて釜やく野の草もみち

　元祿六酉仲秋深川芭蕉庵留主の戸に入て

生綿とる雨雲たちぬ生駒山

　（前書と句と一致せざるが如し）

一しほの妻も有らむ天津雁

翁にともなはれて来る人のめづらしきに
（元祿元年越人江戸へ下る）
落着に荷兮の文や天津雁
雁満豆腐
鎧の湯が膽を濁さぬ豆腐哉
士は先祖の功にほこるといへ共、身を橋警にやすんぜず、一歩戦場にのぞむ心ざし有。古郷に文をおくりけむ人々は、命を露の草葉にかけて、なつかしき詞のみを残し置れたるをおもひ出られて、露補子が愁眠をさませり。
陣中の飛脚もなくや雁の聲
暮の山遠きを鹿のすがた哉
あはうとは鹿も見るらん鳴子引
刈のけよそれを縄なへ小田の鮭
カジカ非々悪人は瀧の聲を釣
さちほこに笹をかまする鱸かな
いはし性柔弱にしてもろし、濁をはなれて急に死す。鰮俗字なり。よはしと訓ず。おむらとはいかに。
小いはしや一口茄子藤の門
ほの〴〵と朝飯匂ふ根釣かな
月
池水も七分にあり青の月
鯛は花は江戸に生れてけふの月
てつぺんに丸盆おゐて月見哉
ましらふにのまさるもありけふの月
月になり泊波に米守る高潮歌
詞書こゝに略
名月や今年も筆にへらず口
詞書略
信濃にも老が子はありけふの月
仲秋の賞讃
月かげや舌を帆にまく三笠山
長崎文塞の記
もる月もむかしの橋の朽目哉
月を隔れ越路の小者木曾の下女
有明や待夜ながらの君と伯父
満百
あり明の月に出けり狩の影
娘には丸き柱を月見かた
酒くさき嫁うちけりけふの月
庖丁の片袖くらし月の雲
燃くいに火の付やすき月夜哉
盃と椀を賞て
中椀の黒いも御意に三日の月
月のさそう時の舟か山市か川頭か
僧と噺し明して
小便に起てば月を見ざりけり
眺めやる函谷やけふ驢馬迎
月日の栗鼠葡萄かつらの甘露あり
間來かし椎いる里の桑葉より
御所柿や我歯にきゆる今朝の霜
いが栗に袖なき猿のおもひ哉
深川藁屋しきにて
栗實の玄關へかゝる閑居かな
癸酉八月廿九日の亡父葬送の場にて、幽心の悲を懐て四

生の別をしる。

一鉄に蟬も木葉も脱かな

鶏たちてさびしきものを鳴居らば

律師子北斗をねらふ光かな

宿こゝや竈を撮る菓の中

松吟尼の庭にさが野の土を堀うつして、薄に松などそのまゝにもてなす中に、しめじ初たけ有。

行かずして都の土や木の子狩

松の音は花と吹なり櫻茸

東山鳳来寺の山の邊を過る時

冷泉の珠散につなげる茸哉

茸狩十唱句

其真　不二雌雄茸

うら　叢四変白作

其釉　茸蟻蟻消半

石突　角仙居角帯

つぼみ　笠回菌獨楽

黄松茸　松枝茵返報

寶松茸　不香松雪漬

京には一斤といへり　葉匆山雨重

其實　北嵬小松茸

献上の中にも　睨筒崎生茸

菊

鶏の下葉つみけり宿の菊

籠鳥のゆるすにうとし園の菊

千ゝの菊歌人の名字しのばしゝ

柚の色や起上りたる菊の露

重陽

菊の酒葡萄のからにしたみけり

千家の騒人百菊の餘情

菊うりや菊に詩人の質を賣

きくもみぢ水屋はぢけて流るめり

手入かなよしある賤がむかし菊

内藤風虎公十三回忌

菊の香やたゞさよごれぬ簾さし

九月九日扇を拾ひける人に

きくや名も星に輝く禮あふぎ

菜花餞別

友成は菊の使に播磨迄

子籠の柚の葉にのりし匂哉

十三夜

内膳の簔ぬぐやうに後の月

いづれも故郷をかたるに

後の月松やさながら江戸の庭

はらゝ子を干ゝにくだくや後の月

樽むしの身を栗に鳴今宵哉

家こぼつ木立も寒し後の月

鳥

木兎や百會にばかり巾りもの

仁兵衛の片山かげや笑ひ莵

山がらの戸にも窓にもなら柏

春澄にとへ稲負鳥と云へる有

小島盡長歌

四十から小夜の中山五十から

中村少長夫婦連にて上京せし時

山鳥も人をうらやむ旅寐哉

紀路行く山はみかんの吉野かな
山ふさぐこなた面や初もみぢ
新殿六間造
水つかぬ塵のはじめや下紅葉
氣のつまる世やさだまりて岩に蔦
木葉の食蠹を狄のにしき哉
暮秋
雁鹿虫と斗おもふてくれけり暮
九月盡
ねぬ夜拾風身のうき秋を師走哉
怨閨詞
傾城の小歌はかなし九月盡

冬之部

夢よりか見はてぬ芝居むら時雨
柴はぬれ牛はさながら時雨哉
蟬鳴のまことになりし時雨哉
今熊をしぐるゝ頃はあれぞかし
圓覺の鐘

我山は足駄いたゞくしぐれ哉
はせを翁七回忌
七とせとしらずやひとり小夜時雨
よそに名たつるから崎の松
しぐるゝや有し卿の一ツ松
時雨瘦松私の物干にと書けり
おもしろき人をよび出すしぐれ哉
鵯むろで茶を申こそ時雨哉
松原のすき間を見する時雨哉
此句は晋子夢に若宮八幡宮に語られての吟なりとぞ。
凩　文は略
木がらしよ世に拾はれぬみなし栗
凩となりぬ蝸牛のうつせ貝
芭蕉翁參詣の記　文略
なきがらを笠にかくすや枯尾花
冬來ては案山子にとまる烏哉
冬木立いかめしや山のたゝずまひ
曲翠と幻住庵にともなひて翁の隱れ所といへる椎の木を見る。

まぼろしもすまぬ嵐の木のは哉
眞實を世に見るさまか千葉實
自讃
松一本乞食の夜着の枯野哉
坊主小兵衛道心して人々小兵衛坊主と申ければ
坊主小兵衛小兵衛坊主と歸り花
朝鮮の妻や引らむ菫人參
ゑびす講
鯛代守大根畠をとがめけり
鰯天の床机にするや仕切帳
子は衣裳親はつねなり夷講
金藏のおのれとうなる霜の聲
道業城の火洞にあらば霜の臺
酒くさきふとん剝けり霜の聲
貞佐新宅
此宿を御師もたづねて杉の霜
眞崇割る火箸を斧の寓たり
埋火や土器かけていちり燒

火燵のうたゝ寐夢に眞柔を枕とす

閑居の雖みそ浮世に配る納豆哉

砧つきて又の寐覺や納豆汁

　　立鷹

冬待わ足下をかけんたるとぜめ

關守の紙子もむ矢かたつか弓

朝嵐馬の目で行頭巾哉

ふれみぞれ柊の花の七日市

　　宿俳房

あられなし團伽の折敷に冬菜哉

取次へ霰をはじく長柄かな

武藏野や富士の霰のこけ所

越後屋の算盤過て小夜衞

鳴千鳥夜明石の夢おどろく

村千鳥その夜は寒し虎が許

　　人の妻むかへたりしに

鴬雀の盃とぢようすこほり

つくぐゝと壁の兎や冬籠り

達磨忌や白刺にさぐる水かゞみ

　　夜興

夜興引盗人犬やたつた山

犬引て豆腐狩得たり里夜興

薦一重わぶや乞食のぬくめ鳥

　　顔見世　市川三升を祝す

みつますやおよそ氷らぬ水の筋

　　夜學戀

鴬氷る夜や蜉蝣灯盞に羽を閉て

　　長屋割付られし人の有明の月
　　に酒賣不許入内とてなきあか
　　したり。

水寒の網手もきるゝ氷柱哉

鯛むきや我には見えぬ水かゞみ

町神業店前のひがけをかつらとし

　　貞徳翁五十年忌　元祿十五年
　　壬午霜月十五日　懷舊の心を
　　述侍る。

帶ときも花橘のむかしかな

　　霜月廿七日侍ニ予黄門光圀卿
　　之御茶亭一題ニ周山之佳景一

一　びゐどろの御茶屋

　　むかふに清水音羽をうつし
　　まふけ給ふ。高田の奇山、
　　あたごかとおもはる。

水の工み醉顔清し氷茶屋

二　清水寺音羽

　　六角堂、孔子堂、小町が石薔
　　なんどあり。むなしく行過ぬ。

櫻梢舍梢や千々の雪さかり

三　耕作の御茶屋

　　丸屋といふ茶屋に蔦はへる
　　へついありて、大根薫ねぶ
　　かなど引うへ、枯たる梢に
　　鍬をかけたり。

根深ひく麥の早苗やあやめ艸

四　黑木の御茶屋

　　此道すがら竹生嶋をわたる。
　　堂舍樹林いたづらに見殘し
　　ぬ。茶屋の躰かやふける軒
　　に酒旗をかゝぐ。軒端に黑
　　木つみ置り。

我や賤牛に雪喫黑木茶や

五　藤　棚

　　冬枯たり。藤二本にて三丁餘

あり。

藤菲やあられにやどる不破庇

六　西行堂

　是の一の清水理眞也。後法師よしの山に閉て、とくとく〳〵落る岩間の苔清水くみほす程もなき住居かな。と言しをよせて

筧や岩間こかしの清水とく〳〵と

七　唐橋

　唐門を見て是はしを渡る。瀬あつて瀬田に汐干を見せたり。

目橋や鴫雨にあひ見んふじき松

八　八はしの花のかほよきを
　嘆て

坊主影月にも冴よ御川水

九　青蓮院はじめて御青蓮院を拜しての賀

八千代とぞ河原御館の御千どり

十　西湖

　はじめびいどろの御茶亭に入る時、舊句を慎むてけり。夢に瑞雲に乗じて西湖にあそぶ。と言し其夢ことを衣で

詩をゐさる瀬らむ雪の柳小舟

　右十章

茶の湯居炭の黒人を佗名なり

松風や爐に富士をやく西屋形

佗に絶て一爐の散茶氣味ふかし

　鰒

寒ならぬ顔たうらみそ小夜衣

鐵炮のそれとひゞくやふぐと汁

手を切ていよ〳〵にくし鰒の面

詩人ゆるせ松江の河豚といはんに

鯖にこりず鰹にこりず雪の鰒

　文略す

茶の湯にはまだとらぬ也瓢汁

饅頭をふりさけ見れば厨かな

足袋うりやたびかさなれば學鰹

　雪

はつ雪や犬の面出す杉の垣

鵜を塩にさけぶや雪の鵜

瓢簞屋へ行金佛也夜の雪

　文略す

黑塚のまことこもれり雪女

埋木のふしみ勝手や雪の友

　富士の烟のかひやなからんとの御製をよく〳〵了簡せば、ふじ無念に思ひ、淺間を討ぬべきもの。とかく作を無編に極め置て、淺間がうらみなるべしといひて

淵にてあさまになりぬふじの雪

雪の日は寡斗買くろ木賣

富士うつす寒田は雪の早苗かな

青漆を雪の襖野や丸合羽

なら茶の詩さこそ盧仝も雪の日には

はつ雪に此小便は何奴ッぞ

拔出して雪うち拂ふ柄袋

雪おもしろ軒の掛茶にみそさゞゐ

　秘藏の鶏の落たるをおしめる

人に

藍染に御弔や雪うづら

田ごみや月雪薄き酒の味

雪に問へばかれも蘇鐵の女なり

秋にあハ師走の菊も寒畑

歳暮

さためよの遺精もつらし寒の水

伊勢縞を着ぬぞまことの鉢扣

鉢たゝきの歌

鉢たゝき／＼　曉かたの一聲に
初音きかれて　はつがつほ
花はしら魚　もみぢのはぜ
雪にや鰒を　ねさむらむ
おもしろや此　樽たゝき
寐さめ／＼て　つねならぬ
世をおどろけば　としのくれ
氣のふるふたる　ばかりなり
七十古來　稀なりと
やつこ道心　捨ごろも
酒にかへてん　樽たゝき
あらなまぐさの　樽たゝきやな

凍死ぬ身の曉や樽たゝき

漫成五倫

君臣有義

家の子等けふを忘るな年忘

父子有親

鮑汁や憎き娘には猶くれじ

夫婦有別

鉢たゝきめおと出ぬも哀なり

長幼有序

袴着は娘の子にもはかま着

朋友有信

君と我嫌に手をかへすしかなかれ

大小の吟　元祿十丁丑年

大庭[二]をし[四六]ろくは[八九]く霜師走哉

荷よばりの小坊主にこそ師走聲

竹町讃しの畫讃

節季卟や口をとぢたる渡し舟

元日を起すやうなり節季候

節季卟は左の耳になるとかな

辰之助に申遣す

漢禍や諸人がまねる節おどり

寒苦鳥明日餅つかふとぞ鳴けり

いさ／＼、まん年の酒屋の上へたまり

酒債尋常往處有人生七十古來

樹

詩あきんど年を貪る酒債哉

流るゝや千手陀羅尼の年の垢

年中の放下見へけりとしの暮

豆をうつ聲のうちなる笑ひかな

乾元の節分

長き夜の遠くて近し得方丸

三升所持箱道の自畫讃

今こゝに團十郎や鬼は外

流るゝ年のあはれ世につくもかみさへものうき

年越や只業平の御袖ひき

はせを翁はてのとしは、堅田のゆかり、伊賀のしるべ、おもひの外になりぬるをわびて、うつの山より人／＼に申遣す。

置捨に笈の小文や年の暮

住すてし幻住庵にはいかなる何をか残されけん。それはそれ、さて世の中をうけ給るに

妖ながら狐貸しき師走かな

大晦日ねいつたらちがた年忘れ

御支配より破魔弓をかぞへ奉りて

誰いふとなしに大殿とし忘れ

行としも戸板めでたし餅の跡

行年に唾吐らむかゞみとぎ

翠代

鶏おりて日こそ多きに大晦日

雜之部

十牛之圖　嵐亭嘲之

往昔廓庵の佛國禪師十牛を圖して人間迷悟の間をしめされたり。其書を狂言にし取て、牛は犀音妓有也。又及とももてあつかふは誹なれば也。實に十牛の圖を誹諧し侍て笑を万世に残すもの　晋其角

尋牛

やみの夜はよしはら斗月夜哉

呼牛

よぶこ鳥あはれ聞てもきかぬかな

闘牛

夏の夜はねぬに痾氣の起りけり

貧牛（「貧」恐くは「貪」ならん）

仁朱判やとるがうへにも年男

廻牛

小便も覓にあまる五月かな

番牛

ほとゝぎす曉傘をかはせけり

無牛

きり〴〵す枕も床も紳履哉

半牛

何となく冬夜となりを聞れけり

迷牛

さめよとの千手陀羅尼や霜の聲

老牛

けふもまたうどんのはいる時雨哉

於某里公各題五色梅

黒梅

黒梅や華の調べのかけちがへ

花かたのまだ干ぬ草や梅の露

村雨のとぎれ〳〵や管棋の松

凡蟬丸より官をつぐ坐頭の都とはいかにといはれて

三味線に引て殘りし四の緒の
一チはめくらの名になりにけり

しからば城とはいかにといふ

時

幸になりあがりたる土めくら
城といふ字のかきのぞきせよ

捨子ありとて一町世話をやくを見て

子を捨てむなしく歸る親の身の
金をひらはゞくやしからまし

盆會

なき魂も三日いやるはあはれなり
十日いやらばさぞなあき風

ひさしくへだゝりし人のもとより、見にくきすがたを得わすれずと申けるに

馬糞紙にきたなきつらといふ文を
あくるわびしきかつらぎの神

我死ば湯棺らうすき酒
鴉のむらさめ加茂のあけぼの

追加

なすきや心を花に浮藏主

天智天皇

餅無り圓融人ごきめ寒してより

打おさむ入鹿が首に四海波

鎌倉にて

夢なを實し國家に蛉をかしぐ背

山賤が額の瘤のあつさかな

畫讃

餅花や鼠が目にはよし野山

妙法蓮華經

たへなりや法の蓮の華經

雪荷亭の花見にまかりて

身をひねる詠なりけり糸櫻

自畫讃

棹鹿やはせをに夢の待合

九條殿御下向

闇より大工召けりむろの梅

傳奏にものかは見ばや花の門

御殿場に馬休めけり大根引

御師殿は先こなたへと大根引

駿州久能の別當さんざめかして御通りあるを

ゆゝしさや御年男の旅姿

旹延享四丁卯年秋八月全編校合成

百萬旨原

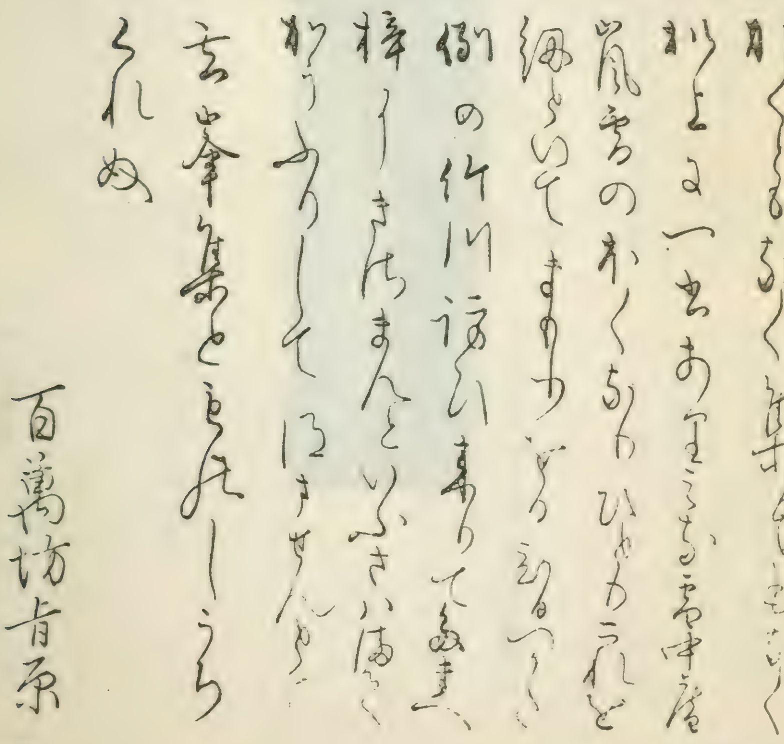
續五元集　其角附合　全部三冊　出來

江都書肆　日本橋通二丁目　前川六左衛門梓



かくともなく、集るともなく、机上に一書あり。みな雪中庵嵐雪のほくなり。ひとりこれを紐といて、まもりをる、ひるつかた、例の竹川訪ひ來りて、たまへ、梓にきざまんといふ。さはまて、かうぶりして得させんとて、玄峰集とものし、うちくれぬ。

百萬坊旨原



玄峰集春之部

改正
四海波魚のきゝ耳あけの春
元日や漸〱うごくいかのぼり
元日やはれて雀のものがたり
年すでに明て達磨の尻目哉
面〱の蜂をはらふや花の春
三ッの朝三夕暮を見はやさん
今朝春の與孫もあり彦も有栖を富
若水に智惠の鏡を磨うよや
五十にて四谷を見たり花の春
あら玉の馬も泥障をおしむには
初空や鳥をのする牛の鞍
楪の世阿彌祭りや青かづら
惟茂と起しに來たる二日かな
此句は睦月二日にあさゐせしな、人の來て起せしにかく申されしとかや。

寶ぶね　詞書有爰に略
須磨明石見ぬ寐ごゝろや寶舟
む月はじめのめおといさかひな人〻に笑はれ侍りて
夢明て浪のりぶねや泊瀬寺
よろこぶをみよやはつねの玉はゝ木
若菜七つがひな列する詞略
七草を三べんうつた手首かな
ぬれ縁や薺こぼるゝ土ながら
霜は苦に雪に樂する若菜哉
憶翁之客中
裾折て菜をつみしらん草枕
と夫ゝははやすめ妻は聲若しなつみ歌
春朝
蔀あげてくゝだち買ん朝まだき

風渡て石にすがれる薺かな
題しらず
ほつ〱と喰摘あらす夫婦哉
鶯
鶯にほうと息する山路かな
うぐひすや書院の雨戸はしる音
鶯をなぶらせはせじ村すゞめ
鶯の宿とこそ見れ小摺鉢
梅
むめ一輪一りんほどのあたゝかさ
此句ある集に冬之部ニ入たり又おもしろきか
輪に結ぶ梅をぬけたる月夜哉
臥龍梅
白雲の龍をつゝむや梅の花
荏柄天神奉納
こぼれ梅かたじけなさのなみだ哉
北といふ一字題
手のゆかぬ背中を梅の木ぶり哉
梅ちるや鞍のない馬に乗かしき

梅雨のぬし京うち參りとて出ぬ。行かたの覺束なく、知る人はそこ〳〵にみちのほどはかう〳〵といひふくめて出したてつ。卯の花の雪消へ、五月雨のくもらぬほどに歸り來べきなれどいと名殘おしくて

梅にさむる朝けわするな辛きもの

翁の春もやゝけしきとゝのふと申殘されし句意を味へ侍りて

この梅を遙に月のにほひかな

梅干じや見知つて居るか梅の花

椿

鍔のからき目見しを花つばき

柳

目前に杖つく鶯や柳かげ

中納言藤房於ニ馬場殿一龍馬に付て直諫を奉られしが其言行末如ㇾ讚

亂るべき風の柳をさすの神子(みこ)

春の水に秋の木葉を柳鮠(はへ)

題しらず

正月も廿日に成て雜煮かな

一トつ鹽の聲さぞあらん南部雉

せはしなき身は痩にけり作り獨活

蕗のとうほうけて人の詠かな

狗脊の薹にゐらるゝわらび哉

きさらぎや火燵のふちを枕もと

春風の石を引切わかれかな

此句は門人なにがしが旅立けるに、硯石をおくるとてかく申されしと也

なんなにかはりて

なれも戀猫に伽羅燒てうかれけり

燕

旅に入て美人に馴るゝ燕かな

柳にはふかでおのれ嵐の夕燕

歸雁

順禮に打まじり行歸雁哉

箱根にて

かへる雁關とび越る勢なり

紙鳶

糸つくる人と遊ぶや几巾(いかのぼり)

惜ニ暫別一

虚空(おほぞら)を引とゞめばやいかのぼり

蚊足が鄕かへたるに申つかはしける

此夕べ軒端へだちぬいかのぼり

行脚悵然へ申おくり侍る

木の枝にしばしかゝるや几巾

蛙合

よしなしやさでの芥とゆく蛙

上野より歸り侍るとて

酒くさき人にからまる胡蝶かな

朧月

我等今日聞佛音歡喜踊躍と讀誦し奉りて

中川やほゝり込んでも朧月

出かはり

嬉しいか念佛おどりの柄杓ふり

出かはりや幼心にものあはれ

出かはりや其門に雛辰の市

接木

見たい物花もみぢより接穂かな

苗代

なはしろに老のちからや尻だすき

青精飯

桐柳民濃(コマヤカ)に茶飯かな

上巳

隣〳〵雛見廻るゝ小家かな

うます女の雛かしづくぞ哀なる

鶯の来て染つらん艸の餅

汐干に

水葦の馬刀かき寄ん筆の鞘

しほひくれて蟹が裾引なごり哉

桃

おの〳〵の桃の席(ムシロ)や等持院

桃の日や蟹は美人に笑はるゝ

華

あらおそや爪あがりなる花の山

白鳥の酒を吐らんはなのやま

花に風かろくきてふけ酒の泡

櫻川はほそくながれて青柳の里一トかまへうちかすめり

膝(ヒザ)木(キ)よる長女(アマ)いやしや糸櫻

殿は狩ッ姜餅うるさくら茶屋

手習の師を車座や花の兒

兼好の莚おりけり花ざかり

遊ニ遊鵬鷃之間一出ニ入是非之境一

花の夢此身をるすに置けるか

花はよも毛蟲にならじ家櫻

はなを出て松へしみ込ム霞かな

頼光山入之賛

新發意が花折あとや山颪

小町賛

なまぐさき風おとすなり山櫻

原の宿を通るに、勅使の歸京ましますとて、海道も塵をはらひ、山も殊更に恥かしげに、けふを晴とつくろひたてり、御のすだれは巻上られたるに、

我戀よ目も鼻もなき花の色

みぼうしの用意なんどきらきらと見ゆ。おそらくは未きかず、富士に雲井の客人を見る人は仕合なる旅に參合たり。

富士を見ぬ歌人もあらん花の山

雲雪と仇名も言はじはなざかり

筆とるは硯やほしき兒ざくら

花片〳〵鞁にあたる舌の先キ

月花の其ひとふしや火吹竹

女中方尼前(アマゼ)は花の先達か

大和廻りの東潮、めぐれ〳〵風車、東風ふかば西へ行、にし吹ばもどれ、前後與す。箱根は手形有り、大井は川越有り、左右廣し。空吹く風の何が吹やら。

逢坂は關の跡なりはなの雲

大井川船有ルごとし花の旅

關路

白つゝじまねくやうなり角櫓

藤　同書あり略す（「裝遊稿」にあり）

ふぢ浪に鵤は得たりいらこ崎

小奴吉齋に花を見せて

小坊主よ足なげかけん松に藤

立志追善

山ぶきのうつりて黄なる泉哉

ばせを翁は普化の師、晋子は臨濟の忽子、三十年來は面にから笋をならして、他のつらを出せるなし。末期に及で半句を吐ず。さらに遺跡を止めざるは、若夫それもしらず。大悲院へ齋噴に行賦。

中院廻向

普化去りぬ匂ひ殘りて花の雲

亡跡

菜の花や坊が灰まく果はみな

三七日

蔦や弓にとまりて法の聲

墓参

山ぶきの實を穴掘の鍬ひとつ

玄峰集

夏之部

更衣

鹽魚の裏ほす日なり衣がえ

腸は野に捨たれど袷かな

詞書あり略

すゞりする傍につくし白がさね

青簾

老ひとつこれを荷にして夏衣

五位六位色こきまぜよ靑すだれ

時鳥

行燈を月の夜にせんほとゝぎす

ほとゝぎす耻かき道具かたづけん

伊勢法樂

こゝろには松杉ばかり郭公

錦帳の鴉世を草の戸や蜀魂

たちばなを喰ひもつみもし時鳥

待乳山の祉頭に雨をしのぎて

空は墨に畫龍のぞきぬ郭公

時鳥鳴や利休の落し穴

悼晋子が母

啼いりて音もなしそれは時鳥

ほとゝぎす旦夕(タソガレ)。里さび燧(ヒウチ)うつ頃

御成筋いかなる筋をほとゝぎす

冠里公にて

ありがたやたゞとり山の郭公

時鳥聞ヶば坐頭の根付かな

似た鳥を賣付けてゆけ時鳥

卯花

聲もなく兎うごきぬ花卯木

齋をまうく

楠賣あなうの花の飯を見る

川骨や撥に洲める夜半樂

經の偈は連歌ときゝぬ時鳥

此三句は晋子追善の吟なりとぞ

懷舊

からびたる秋なりけるを若楓

　嶋田の宿に虎倩をとふ

やすき瀬を人に教へよかきつばた

　牡丹

古庭にあり来りたるぼたん哉

土筆てはにかむ顔が牡丹かな

はつ鰹盛ならべたるぼたん哉

　青嵐

青あらし定まる時や苗の色

　義仲寺師父之廟

色としもなかりける哉青あらし

　新樹

若葉ふく風やたばこの割よし

炙鰹をほして新樹の烟かな

　鎌倉鶴が岡

並松の行列ありし夏木立

　こがね海道にて

霧雨に木下闇の紙帳かな

　ばせを庵にて

庵の夜もみじかく成ぬ少しヅヽ

　うたゝ寝の夢に見えたる鰹哉　晋子

　其夢に戯る。

下部等に鰹くはする日や佛

　内外の神拝終りて猗蘭の宮の奥ふかく八十瀬をわたりぬ。郭外五里の山陰にして森の雫に舎殿破れ、寄生となかされて夜のあらしいぶせげなるにいとゞかみさびわたらせ給ふ。

神ませばかつほもすめり山の奥

大勢の中へ一本かつをかな

　熊野

貢取たく炙でもお僧愚なり

　南無大悲観世音ぼさつと罪よくうたひ連たり

桑実ゝや名とりの老女鄰達者

このごろは新炙くるゝ友もあり

　燕居もやう〳〵見いだされて

　氷花へ祝義つかはすとて

澤瀉の花にくはへの銚子かな

　筍

竹の子や兒の歯ぐきのうつくしき

たけの子やかり寐の床の隅よりも

　善光寺にてみる哫ける尼に

海松ふさやかゝれとてしも寺の尼

　悼二青流亡妻一

物どに妻なき家の茄子づけ

　蝸牛

白露や角に目をもつ蝸牛

　坂本の宿にとまりたるに、樵木つみたる火たき屋の隅に、具足と太刀の鞘にまじりて侍りけるを持つたへたる、故やあるとたづねければ、炙のならはしにてかばかりの兵具もたぬ家は侍らずと申ける。心にくかりける。

なめくじり這て光るや古具足

大津の驛に出て

あぢさいを五器に盛ばや草枕

大津の梅主、入集の句あまたこされけるを艸案(庵カ)みだりがはしく失ひければ

あちさいやどこやら物のとたらず

漁父

簑ほして朝〳〵ふるふ螢かな

照射

弓杖に歌よみ顔のともし哉

端午

しだり尾の長屋〳〵に菖蒲哉

一刀見せんあやめの九節

あやめ草賀茂の假橋いま幾日

世のあやめ見ずや菰(まこも)の髑髏(されかうべ)

曾根太郎を登り曾根次郎を下る

片足は岩に放ってかぶとかな

粽一ふさ全阿袖にし來りればふりかたむきたるに

粽もつ扨はうつゝの草むすび

文もなく口上もなし粽五把

楞佩(かふちおび)てわざとめかしや芝肴

印地

おもふ人にあたれ印地のそら礫

競馬　賀茂

落たるがとに目立やあし揃

拔レ劔逐レ蠅

蠅はぢき怒る心よ手束弓

顏につく飯粒蠅におたへけり

獨座

來るのみか裾から蠅の折ふしは

題しらず

それにさへ願ひ絶めや金(きん)の釜

めづらしや唐の蚊、詩人を喰ッて桃のどし。珍らしやからの蚊、美人の眼にこがれて、痩て柳に似たり。からの蚊〳〵。

唐の蚊や終に枯たる藻鹽草

此句は唐紙に蚊を漉いれたるに書れたるよし。

うち歎く事侍りて

哀れとより外には見えぬ蚊遣哉

蚊遣木や斧に女の名をうつ

旅意

萍の實もいさぎよし水驛(ムマヤ)

紀の山きの浦、海にいり江に入る。禹谷の水を治て異物をしろせる海外山表のありさま、ルスンカボチヤなどいふ遠津嶋根の人がらは書にのみ見たり。目前に南のゑびすの洞にかくれいはほに走るを、鬼にもせよ人にもせよ、こゝろおかるゝ旅寐也。

蛇いちご半弓提て夫婦づれ

和泉式部之石塔

本宮より一里彼式部の月のさはりと詠たる所といふ

蚋(ブト)のさす其跡ながらなつかしき

継盛彌助

十津川近き湯のかはのほとり也。除田百五十石、代かはり

家くだりたれど、さすがに今
も平家也。
川骨の花一時もさるほどに
婆鬣詣(めぐみ)　文アリ略
荊の花裾(もすそ)きらしや旅ごろも
梶原屋しきを見る。此人はさ
ばかり文筆には達せざれども、
歌も詠、物の情もしれる人に
や。折ふしの口ずさみもきこ
えとゞまりしを、にくきもの
のひとつには、先此一族ない
ひふらしぬるは、いかなる宿
執のつきたるにか。舊跡あは
れに覺侍りて
むつかしき中に香もありばらの花
茱萸(グミ)
山茱萸のかざしや重きふじ嵐
瓜
兒の手の玉にもあまる眞桑哉
八幡太郎贊
御堂關白殿御物忌に義家朝臣
參候の時、南都より早瓜をた
てまつりしに、博士毒氣有よ
しを申。義家に仰て瓜を割た
るに毒氣則出。下略
瓜切てさびぬ鍛の光かな
氷花が妻うしなひたるにいた
みとて遣す　前書有略
なでし子は紅粉おしろいも散(ちら)しすて
常盤木のちるや母さへ其子さへ
うち籠るほど訪ひ侍りて
山鳥のほろ〱なきや五月雨
夜雨吟
五月雨や硯箱なる唐がらし
さみだれや蚯蚓の徹(トヲ)す鍋のそこ
時鳥の二聲三聲おとづれけれ
ば
五月雨の端居ふるき平家をうなりけり
亡母を夢見る
五月音に我簑蟲や母戀し
伏見撞木町
炬松ふつて野邊を行もげに要
もとの古風なるべし
行燈で來る夜送る夜五月雨
明てのく家に伏見や夏の月
艸菴むすび侍るとて
蓼紫蘇にむすばぬ先の白露か
題しらず
鶯の音を入あやし二ツぼし
早乙女にかへて取たる茶飯かな
三河鳳來寺
一もとのあふひを登る山路哉
打麥歌
蟬鳴や麥をうつ音三ゝ三
六本木にて
下闇や地虫ながらの蟬の聲
あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲
那智山
暑雲の外瀑(タキ)に奪(とら)るゝ人の色
夏の日に懶(ものう)き飴のもやし哉
おもだかのふとりすぎたる暑さ哉
江の嶋
夏の日やさめて窟(イハヤ)のいなびかり

稲村が崎な過るに、木陰ともなき砂のうへに漁父のこぞりて、わかなごといへるものを忍りとり侍る。

照付てひかりも暑し海の上

貝うる家の男のわらはゝ、麥の粉な盒子にもりて、かしら揃えてうちなめたるに水を乞て

蚤の子にたうとがらせん道明寺

長谷寺の前にて

飴賣の箱にさいたやゆりの花

能見堂

ふるく侍るといふ人あり

（この詞書、東潮の「渡鳥」には脇書となり居れり。）

汗ぬぐひ小松に干て沖津風

雪の下に泊り侍りしに、蚊やりたきたてけぶたかりければ、みたらしのふちにむしろ敷て

川岸のたまさか匂ふ茂り哉

藤澤を出行、民家の門に木有。根は土を抜あがりて五尺ばかりも高く、左右にひろごり、元木たくましく肥て、末葉もつたて、蟷螂の鎌をもて鼻にかへたるさまして蟠屈たり。西行のもどり松とかや申侍る。越路松島のかたにもか　る名のきこへ侍る故はしらず。

童にあふぎとらせん松の陰

納涼

犬に逃犬を追ふ夜のすゞみ哉

水車のしづくをうけて

すゞしさや心手へとる水の色

かはらの凉

來る水の行ク水洗ふすゞみ哉

埋火を凉とあふぐ夜的かな

一種賞翫にとて皆ゆく中にまじはり侍りて

味噌するにすゞ鰍の游哉

祇園の會の七日の鉾、十四日の山、綾より錦より見ものなるは、荻野いがらし松尾まつむら、素袍に太刀はきて四條高倉の辻に床几な居れば、下の雜式おなじさまにて、紅の總さげたる鐵棒かいこみ、かちんの上下着たる男等、黒漆の棒てに手に持て紙なつくろひ、非常ないましむ。兼て定められたる一二の圖を改めかへす。威儀嚴重なる中に、はしごと臼と車に積て、所どに引は何の用にか侍りけん。

たて臼もともに踊や祇園の會

移徙の祝義に

とこなつの家にいれたる德利哉

逢恨戀

我戀や口もすはれぬ青鬼灯

竹婦はなれて抱よけれどと人やれたまん凉しくて一人ねんには

汗に朽ば風すゝぐべし竹褥袢

ちんじやうの和巾さばきや汗拭

淸水　詞書あり略

抜ヶたりなあはれ清水の片草鞋

目黒の瀧し人のまふでぬ日

底しみづ心の塵ぞしづみつゝ

序令沽洲ちなみ侍りて、京より大和路かけて和歌の道たづねんと出立けるを、跡おしみして

神奈川の台(臺)の清水に先ッ進め

紀伊野中の清水　播州に同名有

すみかねて道まで出るか山清水

柴の菴

夕だちや障子かけたる片びさし

題しらず

すゞろだつ羽黒のきゞす夏尾花

夏畑に折くうごく岡穂哉

(東湖の「渡島」に「やつくな廻るに、五月雨も降ず、てりに照ル日に、青さといふ藻屑を田の畔につみて、雨をこふ鼓の音そぼろくと聞ゆ」とありてこの句を記せり。目雪紀行の挟書なり。)

切味噌のひなた臭さや夏消り

芭蕉の墓まいりのつゐで義仲菴へ詣侍りけるに庵主出奔せられければ

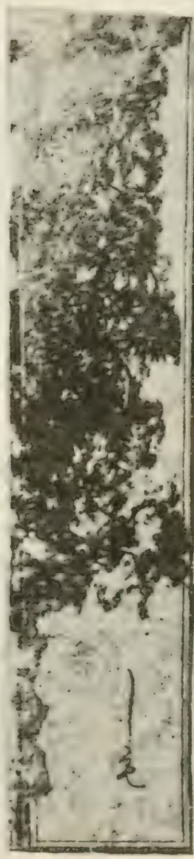
住持まで拂ひ果けり夏の空

御祓

今日の日は東北の隅より出て西北の間におさまる。長日短夜の頂上なりとて、此國の法しれる家々には、とさらに日の神を祭り侍るとかや。青海のおもても限りなく覺て、尤敲すべき趣なるべし。

いくばくの溜息つきて夏はらひ

なつはらひ日の行かたや淡路島





初秋

秋風の心うごきぬ縄すだれ

つくり木の糸をゆるすや秋の風

洛外の辻堂いくつあきのかぜ

閑居

痩る身をさするに似たり秋の風

葛

蔦のあとのあり蔦の葉のうら表

宗祇之廟

石塔をなでゝは休む一葉かな

市中

盆迄は秋なき門の灯籠かな

七夕

眞夜半やふりかはりたる天の川

ほし合に我妹かさん待女郎

ほし合や瞽女も願ひの糸とらん

大伽藍造營まし〳〵ける年の今日、遠くおがみ侍けるに、富士筑波根の間に更に山ひとつ出來たるかと、空のにほひもちかく成べきほどなりけり。（元祿十年東叡山の根本中堂建立の時也。）

上野より道や付らん銀河

瀧飛のけろりと浮や星使

名月の夜はいかならんはかりがたし

七夕は降と思ふがうき世かな

七夕や賀茂川わたる牛車

防鴨河使（ばうがし）

妻越や人目づゝみの河づかひ

梶の葉に小うたかくとて

我や來ぬひと夜よし原天の川

年渡りえや隅田川原の橋柱

さもあらば有れ句を洗ふ天の川

飛鳥井なんばどのゝ蹴鞠、いけの坊の立花、みやこの田夫、いなかの風流、立て見るあり居て見るあり。

秋風のうしろを覗く立花哉

薄

のゝ宮にまいりて

嵯峨中の淋しさくゝる薄かな

花すゝき階子つれなくこけかゝり

品川へ二里の休や花すゝき

野の華

おもしろく富士にすじかふ花野哉

花の秋草に喰あく野馬かな

盃のそばを切題にして一字を探うろ。（「う」は衍か。）

洗

くゞらせて色〳〵にこそ萩の露

蟲

寺にて

常燈や壁あたゝかにきり〳〵す

簑蟲の音をきゝに來よ草の菴　芭蕉翁

聞にゆきて

何も音もなし稲うちくふて螽哉

茶碗銘

黒茶碗あり。花の朝はますくろく、雪の夕はいよ〳〵黒し。月待宵のやみをさぐり、闇夜に鼻をとられしは、おの〳〵つちめくらのまじはりなるべし。

検校　貧僧　大黒　小ぐろ

はちの子　早ふれ　小雲雀

三代目なのんこといふ。のむここそ猶ふかき意味あれ。總してしばらく残す。

松むしのりんともいはず黒茶碗

底倉木香(賀)あしの湯を經て地獄めぐりといふとあり。惣じて此邊の濕化、蛛蛸の類盃なぬりたるがごとし。

おのれさへ餓鬼に似たるよきり〱す

露

草の葉を遊びありけよ露の玉

十歳に成ける童の身まかりけるに

駒取りのもとの雫や末の露

うすひ權現にて

いなづまにけしからぬ神子が目ざしやな

鶏頭

まだ夏の心ならひや葉鶏頭

味噌で煮て喰ふとはしらじ鶏頭花

鶏頭は兵のたきさす煙かな

西瓜

身ひとつをもてあつかへる西瓜哉

妻悼

尸かな桔梗かるかやおみなへし

蓮の骨あはれは美女の尸哉

朝叟をとぶらふ

蓮の實の飛(とび)はとびしがそもされば

同 一周忌

青ふくべひとり廻ッて一周忌

里右が娵うしなひたるに遣す

鬼灯のさすればつぶす歎哉

盆會

魂棚は露も涙もあぶらかな

魂祭母屋の妻戸の音は何

喰ものも皆水くさし魂祭

たま棚や皆こま〱と茄子あへ

詞書有略(「裝遊稿」にあり。)

たま祭り叓が顔のみやこなり

九日の六道まいり、小野のたかむらの冥途にかよへる道なりとて洛中の貴賤まふでゝ嶺の葉をもとめて魂をむかふる印とし侍る

打ばひゞく物としりつゝむかへ鐘

靈棚の栗にさきだついの字哉

あかれや美濃やと聞えたる、なき名のながれとゞまる所は、千日寺の蓮生の露ときへかゑりぬ。盆のこのごろは夜どに群集して、逆縁にとぶらふ人もあまた侍りけり。改名嵐雪月照と石の塔婆に彫入たり、あるまじきをとならねど、おりからは思ひかけずおぼえ侍りければ

夢によく似たる夢哉墓參り

松が崎妙法の火

經を燒く火のたうとさや秋の風

大文字の句をもとめたれば雪のこゝろの出けるまゝに

山の端を雪にも見ばや大文字

相撲

角力とり並ぶや秋のから錦

千本を南へよつづかの邊りへ行とて

嶋原の外もそむるや藍畠

蘭鵲同肆

戻りにも貰ゝずに鵙（モズ）の草鞋哉

盜たる蘭や乞食の襞の下

秋暮

立出てうしろ歩や秋のくれ

もどかしく吾面くはす秋の暮

寐て起て又寐て見ても秋の暮

秋の暮石山寺の鐘のそば

定家

舟炙（アブ）るとま屋の秋の夕かな

單誓上人之岩室

燕のかへりみちありほらの雨

江之嶋

日を拜む海士のふるへや初あらし

江の島の穴をうなるや秋の夢

鶴が岡の放生會拜みにとて待宵の月かけて雪の下のやどりに侍り。試樂の笛に夜すがらうかれぬ。明れば朝霧の木の間たへ〳〵に、樂人鳥のごとくつらなり社僧雲に似てたなびき出る。神のみゆきの嚴重なるに、階下塵しづまり松の嵐も聲をとゞめぬ。

烏帽子着て白きもの皆小田の雁

月

名月や柳の抜を空へ吹く

名月や烟這ゆく水のうへ

旅泊

錢矢立空に三五とよぶ聲を

仕合な艫の松かなけふの月

青空に松を書たりけふの月

花折新發意に戸ぼそを扣て、茶飯の狼藉をする一客有。

名月は蜂もおよばぬ梢かな

（「花折新發意」は狂言の名也。）

明月や先ッ盞取りて蕎麥を鯸

清涼紫宸のあらたにつくりみがゝれたる中に

海も山も坊主にしたりけふの月

新月や内侍所の棟の草

名月や歌人に髭のなきがごと

青鷺の叱（ギャツ）と鳴つゝけふの月

名月の團友坊は男かな

土臭き鰌にはあらずけふの月

ひたちの鮭、かまくらのかつほ、松江の鱸鱠、わたらぬ雁に俎板をならし、遠き海の珍物ちかき江のひれもの、心におもへばよだれに流れ、さもあれとしの名月ながめ得たり。

獻（こん）〳〵は嘶ですみぬけふの月

名月は絶たる瀧のひかり哉

詞書あり略（「塔澤記」にあり。）

早雲寺名月の雲はやきなり

鎌倉大佛

明月は南を得たり佛頂珠

名月やたしかに渡る鶴の聲

高笑ひ月見る人に見さけたり

けふ長崎の泥足、めづらしき顏もて目なれぬうつは物をおくり侍るに

新月の心ばえなり唐煙筒

明月や道心の名のおもしろき

事とは外よりしらぬ月見哉

詞書有略（「裝潢稿」にあり。）

野に寐たる牛の黑さを秋の月

とこぶしは宵の小貝か磯の月

信濃催馬樂

君來ずばねこにせん信濃の眞そば

初眞蕎麥

新酒

我もらじ新酒は人の醒やすき

題しらず

はぜ釣や水村山廓酒旗風

あしの穗やおやぢと呼ぶは渡し守

木犀の晝は醒たる香爐かな

八九月風やいづこのほらの貝

穗に出て世の中は田も畴もなし

（この句は渭北が奥州行脚の餞別なりと云。）

水音も鮎さびけりな山里は

柿栗

ひとり旅しぶ柿くふた顏は誰

詞書有略（「塔澤記」にあり。）

猶石にしぶ柿をぬる翁かな

毬栗や手にさゝげたる法の場

秋のくれ井手の蛙のから見ん　舟竹

といふて土產れたられけるに、人丸の柿の實、山の邊の栗のから、けふの得ものゝあまりなりと笑興じて

榧のからよし野ゝ山の木の實見よ

標茅

林間に炎燒する日をたどたのめ

くち木となおぼしめされそ榎茸

菊

初菊やほじろの頬の白きほど

指に入る風はや寒しけふの菊

蒼浪にのぞみたえけり菊の岸

一くねりくねるにもこそ菊の水

菊九章

其一　九日

菊もまだつゆ〳〵つぼむ九日哉

其二　素堂亭にて人〻菊見られけるに

かくれ家やよめ菜の中に交る菊

其三　百菊を揃けるに

黃菊白菊其外の名はなくも哉

其四　名所の菊

白ぎくの鎌倉やすまば扇が谷

其五　菖のたけのみやびやかなるは歌のすがた也けらし。菊を見て句なまふく。

鶴の脛菊七尺のながめかな

其六　琴

琴は甫る菊はうなづく籬かな

其七　棊

菊買ふは又棊にまけし人やらん

其八　書

書を抽(ヌキ)芭蕉にねぶれ菊の兒

其九　畫

菊さけり蝶來て遊べ繪の具皿

京よりから崎へ詣るとてしが
の山越はするとなり

志賀越とありし被(カツギ)や菊の花

舁にてをのれと覺ぬきくの蕋

霜の菊杖がなければおきふしも

繪の菊に今朝は餓たる胡蝶哉

蜂はさし蝶はねぶるや菊の華

瀧下圓哲に無フ

きくの香にさすが山路の雫踏哉

山路ふるこゝたや菊に榎たけ

きく添ふやまた重箱に鮭の魚

されぱこそひなの揃子のおなるかな

神田祭のつゞみうつ音　敏　足

ひやうしさへあづまなりとや

花すゝき大名衆をまつりかな

詞書有略(「塔澤記」にあり。)

袖つまにもつれし雲や露時雨

まつ風の里は籾するしぐれ哉

狐林紅葉

牛まれに茶道をかくす枪かな

莊子樗木の大きさ牛なかく
す。紅葉の際ざめな一ぶく
とかや。化されけんと放散
逍遙のたはむれ事なり。

ちり行も二度の情や梅紅葉

去かたへまいりて

蔦の葉やつたの身ながらかゝる時

病床に虱をとる辨

しらず身の毛いよだちて、襟の程うざ〳〵としつるが、飯つぶの牛したる物さすりあてたり。疾くものゝ上に赦しはなち、めがね二重に掛て、渠(カレ)がさまを窺ひ見るに、白き肉黑き腸、呼吸につれて動搖ゆるぐ。眼きらきらと見すへ、手足よつか六つかありて怒げなるが、護摩堂にまします明王尊に似たり。虎にも戰ひ、龍とも爭ふべし。誠や必死の人の床には、かいふり戻りてあざむきにらむ、とこそ本帥には見へたれ。いまだ死まじきにや、しり慾ひ(にカ)むけて行く。恐ろしとみれば、こそさも覺ゆれ。おのれが姿の、なべての虫におとれるものかは。歌うたはぬは

壁のなければなり。今少身かろがらば、待宵のふるまひもしかねやはすべきを、蓑虫にゆかりたる鬼の子なればか、かく世にうとみ果られたる業生のほどこそいと拙けれ。臭穢の中に質を請て、襦に潜り、ぬひめにかくれて、人の血氣を犯し吸ふと、蚊子の鐵牛を嚙むより猶甚し。その生涯の終れる所は、火とりの中に細きけぶりと飛び木枕の角にからき耻をばさらされぬ。されば眞如の性のみてる事や。屎竭なにとかいへる魚の大百由旬より、蟭螟の微細なるまで行わたりて、愉愛かはる事なしとこそ見ゆれ。內裏にもの祈けるひじりの御灯の光に、一夜しらみ拾はれたるに、物の化のこと治りけるとぞ。知識の肌に馴まとひて、德をおなじういはれけるも、さるべき因緣にや。狂の穴に生をたくはへて、舊年の怨人には報ふとも、さもあれさつ(這奴)いかにゆるしてんと、かたなひねくり鎗とりしごく近いらちおもふ間に、ころ〳〵ところげて見へず。こはもらしつるはと騷て、あなぐり求れどなし。淵に物落せし人の顏して、手打はたきてより、夢もしらみにしらみ、東雲の窓もしらみはてぬ。白身坊が衣被けしものか。

あさがほの花ほど口をあくび哉

玄峰集　冬之部

讃大黑

神の留主能、女房を守るべし

十月ノ蛬

きり〳〵す鼠の巣にて鳴終りぬ

凩

木がらしに梢の柿の名殘かな

前川亭にて

木がらしのわつかにまねく庭木哉

芭蕉翁回嚮

凩の吹ゆくうしろすがたかな

一葉ちりいくらもちりて月夜哉

時雨

茶を煎て時雨あまたに聞なさん

深谷やしきる時雨の音もなし

山茶花

いさはやの葉やおは雪も消かてに

延喜帝
寒夜に國土の民どもが寒からんと夜のおとゞにて御衣をぬがせ給ひけるとなり
脱たまふ御衣は天下の衾かな

京にて
ふとん着て寐たる姿や東山

足袋はきて寐る夜隔そ女房共

爐
爐びらきの日をしめじ野ゝ土茶哉

法華を聞侍りて
沉著世樂無有慧心
つとめよと親もあたらぬ火燵哉

冬の日客をもてなす
君見よや我手いるゝぞ莖の桶

たまたまに引人の有赤大根

午といふ一字題
萱原や枯かげろひて馬の陰嚢

水鳥
鈴鴨の聲ふり渡る月寒し

萍に何を喰やらいけのかも

汀氷
鴨おりて水まで歩む氷かな

題夷講
鱈汁をついて巌に落るなる

霜朝の嵐やつゝむ生姜味噌

十月廿五日共ニ桃隣ニ出ニ武江ニ而題ニ義仲寺ニ望ニ芭蕉翁之墓ニ歎唱。

上略
霜月七日のゆふづくよの程に義仲寺の冢上にひざまづく。空華散じ水月うちこぼす時、心鏡一塵をひかざれば万象よくうつる。此前この道におゐてみづから利し他を利して終に其神不レ竭。今も見給へ今も聞給へとて
此下にかくねむるらん雪ほとけ

十月廿二日夜
十月を夢かとばかりさくらばな

四七日　題ニ翁ノ三物ニ
木がらしの猿も馴染か蓑と笠

十一月十二日初月忌
泣中に寒菊ひとり耐へたり

元祿乙亥十月十二日一周忌
夢人の裾を摑めば納豆哉

七回忌
霜時雨それもむかしや坐興菴

十三回
品々の蒲團にのぼる木魚哉

歸依法　肉邊の菜を喰ふ
鰒のやうに腹を立するあけ麩哉

海鼠
海鼠喰ふはきたないものかお僧達

海鼠だゝみもむつかしき世や獨住

颯を得て返事に

たまはるは石花にかしこしひねり文

神楽

かぐら舟澪(みを)の灯(アカリ)の御火白くたけ

雪

門の雪臼とたらひのすがたかな

竹の雪百歩の馬屋見すかせり

蛇もせよ木兎もせよゆきの猫

初雪や裾へとゞかぬ白丁花

御築地のうちをおがみ侍りけるに、如意が嶽より出る月の、南門にかゝりてかぎりなくめでたかりければ

から花に月雪こぼすとびら哉

菓子盆やそもそめいろの雪ならば

澤菴の若衆せゝりや雪のふみ

藏ありと知たる雪の光かな

今の嶋田よし助が門も見すてがたくて

鍛冶の火も殊さらにこそ笠の雪

明星は乞食も見るか雪のうへ

雪中に雪を投込ムあそび哉

雪はまうさず先ッ紫の筑波山

此雪にむかひにおこす人も人

霰

武士の足で米とぐあられかな

顔出してはづみをうけん玉霰

鉢たゝき

今少し年より見たし鉢扣

煤拂

畑中によし野靜やすゝ拂

歳暮

山伏の見どに出立師走かな

古足袋の四十に足をふみ込ぬ

東湖が子もてるに申遣す

つき立の餅に赤子や年の暮

おもへばや泣れ笑はれとしの暮

とし一夜幔残さじ日の鼠

又汁粉さまで浮世にあかねども

はせを菴の芭蕉もいまだういくしかりける秋、桐の葉の一葉とへと告(つげ)こし給へる事なんどおもひ出られ侍りて

錢ほしとよむ人ゆかし年の暮

慰ニ女房ニ

三盒子(ガウシ)とたらはずや年の暮

古暦ほしき人には参らせん

岡見すと妹つくろひぬこへ(小家)の門

五十ばかりの古猫の鼠もとらずなりて、常にいろりに鼻さしくべて冬ごもりたり。なまじいに南泉の刀をのがれたるを身の幸にして、今年も暮ぬ。

いづれもの猫なで聲にとしの暮

軒の柊梅を探るにおぼつかなし

豆をさへ聞ぬ薬屋にこれや此

此句は家をやきたる年、小

屋の住居のわびしきに、眼
なさへやみての吟なるよし。

蕎麦うちて眉髭白し年の暮

猿猴のてに手をかるやとしのくれ

辞世

一葉ちる咄一葉ちる風のうへ

旹寛延三庚午正月　百萬旨原　校訂

東都書肆
日本橋通三町目
竹川藤兵衛板

去来発句集

わが世尊に十大弟子とて、やごとなき羅漢達のおはしけるにも、智恵第一の何、神通第一の何とかやいふて、その一ッ〳〵修し得たる徳のおはしける。また孔子の十哲とて、かしこき人〳〵のいまぞかりけるにも、徳行は誰、言語には誰と、己〳〵が學び得し道の有けるとぞ。芭蕉翁の風雅の門人にも、其角はその句躰花やかに、丈草は靜に、野坡は輕く、土芳はあだに、許六ははたらきあり、正秀は奇に、支考はほどけたりなど、去來の評ありし如く、己が好たる句躰の一すぢによりて、かた糸のかた〳〵に習ひ得たるなるべし。これみな蕉翁一人の敎より出て、かくその句躰のかはりたる、これや世尊の十大弟子、孔子の十哲のたぐひなるべし。さればその門人多かる中にも、關東に其角嵐雪といひ、關西に去來丈草とて、難弟難兄の上足なれども、其角嵐雪は風雅を弘むるを業とし、もはら名利の境に遊べば、またその流れを汲む輩も多くて、其角に五元集、嵐雪に玄峰集などいへる家の集ありて世につたふ。さるを去來丈草は、蕉翁の直指のむねをあやまらず、風雅の名利を深くいとひて、たゞ拈華微笑のこゝろをよく傳へて、一紙の傳書をも著さず、一人の門人をもとめざれば、ましてその發句

を書集べき人もなし。この寥ゝたるこそ蕉翁の風雅の骨髄たるべけれ。予としごろ此二人の風雅をしたひて嵯峨野ゝ春に遊びては、梢にちかき嵐山と吟じて落柿舎にむかしをかたり、粟津の浦の秋の月にうかれては、秋の廻るや原の菴と詠て、岡の堂のすたれたるをなげく。かしこにずし、爰に思ひ出て、書あつめたる發句を久しく衣嚢の底にかくし置しを、このごろ嵯峨の重厚粟津の魯江の二法師、寫んことをあながちにこひもとめぬるに見せしむ。かならずや窓の外へ出して、いたづらに古人の心に背く事なかれ。

明和八年卯の春三月東山岡崎の杜里

五升菴主

蝶夢記

去來姓は向井、名は平次郎、號義焉と。肥前長崎の人なり。彼地の聖堂祭酒の氏族にして、世々儒を業とす。博く書をよみ、天文暦學をきわめ、詩歌を翫ぶ。また沈勇にして猛猪を刺す。都にありて何がしの殿下に仕へ奉る。官袴の暇には芭蕉翁に隨ひて誹諧の風雅を學ぶ。鴨川の東聖護院村に住り。また嵯峨の小倉山の麓に別莊をいとなみて行通ふ。ある秋のころ庭に柿の落しを見て、その居を落柿舍と名づく。菊亭內府公よりその三字を賜ふ。寶永元年の秋九月十日沒す。墓は東山眞如堂にあり。今の落柿舍は明和のころ、重厚再興して今存せり。

（落柿舍は天龍寺附近なるべし。重厚再興のものは小倉山の麓にて「弘源寺の跡」といへる所、現代のものは弘化の頃石外といへるものの造りしなりと。他石）

去來發句集

春

元日や家に讓りの太刀帶ん
元日や土つかふだる顏もせず
變形では逢じいふても花の春
商人の空音ゆたかや伊勢の春
蓬萊にかけてかざるや老の袖
萬歲や左右にひらいて松の陰
月雪のためにもしたし門の松
獨り寐もよき宿とらん初子の日
わか菜つみ敷ものやらうさん俵

嵯峨にてある曙に

春や祝ふ丹波の鹿も歸るとて
鶯の啼や餌ひらふ片手にも
うぐひすの音づよになりぬ二三日
鶯や内のも啼ば野から來る
黃鳥のなく〳〵そこに薬寐かな
うぐひすの朝日まつ音や谷の底
鶯や雀よけ行枝うつり

（この句「平安二十歌仙」蕪村の序文に引ける「一紙兩筆の書」といへるものによれば、芭蕉の句なるが如きも、「蕨の實」には去來と明記しあり。）

黃鸝のまだ啼まひか今朝の雪

風叩が春の景色見んと舟に乗て出けるに

うぐひすか人の眞似るか梅が崎
痩はてゝ香にさく梅のおもひかな

上﨟の山莊にまし〳〵けるに候し侍りて

梅が香や山路分入る犬のまね
高汐や海より暮てうめの花
五六本よりてしだるゝ柳かな
應〳〵で人をすかせるやなぎかな
青柳のたゝいて遊ぶ板戸かな
姑の氣に入る人は柳かな
たのしさよ闇のあけくの朧月
鉢たゝき來ぬ夜となれば朧なり

洛よりの文の返しに
（「炭俵」には「洛よりの文のはしに」とあり。）

朧月一足づゝにわかれかな

弟魯町故郷へ歸りけるに

手をはなつ中に落けり朧月
呼出しに來てはうかすや猫の戀
うき友にかまれて猫の空ながめ
竹原や二疋あれこむ猫のこひ
いくすべり骨折岸の蛙かな
田の畔や虹を背負てなく蛙
一畔はしばし啼やむ蛙かな
湖つぼもひしけと雉子のほろゝかな
雉のおかしがるらんきじの雛
歸るとてあつまる雁よ海のはた
遊ぶとも行ともしらぬ燕かな

（この句は歸燕にて、秋季ならん。）

山雀の高音になるも別かな
振舞や下座に直る去年の雛
上り帆の淡路はなれぬ汐干哉
うごくとも見へで畑うつ男かな
（「曠野」に下五を「麓かな」とす。）
陽炎や足もとにつく戻り駕
神鳴や一むら雨のさへかへり
春風に吹出されけり水の胡蘆

呂丸追悼

踏きやす雪も名殘や野邊の供

丈草を哭す。

凡十年の契は三年の恨に化し、その恨は百年の悲を生ず。惜しみても猶名殘おしく、此一句を手向て、來しかた行すゑを語り侍るのみ。

（此文は『風俗文選』所載「丈草誄」の末段也。）

なき名きく春や三とせの生別
花をまつ日數によごすころもかな

西行の詞をかりて頼政の詠を難ず。疎きも人は折にこそよれ。使は來たり馬に鞍おけ。

供備も折にこそよれ初ざくら
花守や白き頭をつき合せ
知る人にあはじ〳〵と花見哉
何事ぞ花見る人の長刀
咲花にうき世の人や神せゝり
よし野山またちる方に花めぐり
小袖ほす尻なつかしや窓の花
一昨日はあの山こへつ花ざかり
花見にもたゝせぬ里の犬の聲

湖上の花

花に今眠入けり志賀の浦
立枯の殘り多さよ花の中

田上の尼へ花見にまねかれて

海を見る目つきも出す花の雲

山深く分入りて

木の空の天狗も今は花の友

南都の般若寺にて

散こもる花や般若の紙の間
散錢も用意顏なり森の花
花雪とちらすや錢の間の山
朝ざくら芳野ふかしや夕櫻
一むしろちるや日うらの赤椿
手一ぱいゆすのかるたや躑躅山
（「ゆすのかるた」は（サンスンカルタ」の轉訛ならん。）

閑居

山藤のもとのゆがみを机かな
藪の根やあけてゆり出す茶つみうた
百姓も麥にとりつく茶摘歌
（この句「猿蓑」には夏の部にあり。）

翁の身まかり給ひし明る年の春義仲寺へ詣て

石塔もはや苔つくや春の雨
三月と文に書のも名殘かな

參宮の折奉納の心を

神風の彌生はふかし門の竹

夏

郭公なくや雲雀と十文字

うかれ出て山がへするか子規

兄弟が顔見合すやほとゝぎす

心なき代官殿や時鳥

吉野にて逢れう物かほとゝぎす

横雲の間や山出しの郭公

ほとゝぎすきのふ一聲けふ三聲

うぐひすもやゝ受太刀や時鳥

明くれの空啼ひらけほとゝぎす

西山へまかるとて

新足に聞や内野ゝ子規

熊野にあたしか（南牟婁郡新鹿村）といふ所あり初音をききて

こちの身もあたしかに聞郭公

伊勢にて

卯の花も海のかざりや朝熊山

うの花の絶間たゝかん闇の門

巡禮のころ

卯の花に笈摺寒し初瀬山

光りあふ二ツの山の茂りかな

色〳〵の作となりけり麥のあと

つかみあふ子供のたけや麥畑

（この句『猿蓑』『去來抄』共に游刀の句とす。）

朝〳〵の葉のはたらきやかきつばた

舟乗の一濱留主ぞけしの花

熊野路にしる人もちぬ桐の花

元祿七年久しく絶たりける祭の行れけるを拜して

醉顔に葵こぼるゝ匂ひかな

竹の子や畠隣に悪太郎

武士の子の生長をいはふて

笋の時よりしるし弓の竹

湖の水まさりけり五月雨

たま〳〵に三日月拜む五月かな

大和紀伊の境はてなし坂にて、往來の順禮などとゞめて奉加すすめければ、料足つゝみたる紙のはしに書付ける。

つゞくりもはてなし坂や五月雨

雲とりの峠にて

五月雨に沈むや紀伊の八莊司

曲水子にいざなはれて勢田の螢見にまかりけるに、夕べの程流れにつゞきて下りぬと語れば、猪舟をさし下して

ほたる火や黒津の梢兒が嶋

螢火や吹とばされて鳰の闇

（『猿蓑』に「膳所曲水の樓にて」と前書あり。）

妹千子身まかりけるに

手の上に悲しく消るほたるかな

水札（くゐな）啼や懸浪したる岩の上

鶏もはら〳〵時か水鷄なく

石垣になを喰入るや淵の鮎

見物の火にはぐれたる歩行（かち）鵜哉

旅寝して香わろき草の蚊遣かな

木津へまかりて

山里の蚊は晝中に喰ひけり

其角の母の悼に

蚊遣にはなさで香たく悔かな

青柴を蚊帳にも釣や八瀬大原

谷汲寺にて

順禮もしまふや襟に鮓の飯

すゞしさや浮洲の上のざこくらべ

立ありく人にまぎれて凉かな

凉しさよ夕立ながら入日影

町すじは祭に似たり夕すゞみ

更る夜を隣になろふ納凉哉

猫の子の巾着なぶるすゞみかな

紀伊の藤代を通りける頃、此所に三郎重家の末今にありと聞及びぬれば、尋入侍りしに、門築地押廻し、餇たる馬、みがき立たる矢の根立かざりて、いみじき武士なり。また庭にいにしへの弓掛松とて古木今もあり。

藤しろやこひしき門に立すゞみ

洛東眞如堂にて善光寺如來開帳の時

すゞしくも野山にみつる念佛かな

夕すゞみ疝氣起して歸りけり

じだらくに寐れば凉しき夕かな

（この句『猿蓑』『去來抄』共に宗次の句とす。）

蕣の二葉にうくる暑かな

石も木も眼に光る暑かな

美濃の國熊坂が人見の松にて

わるあつく吹や人見の松の風

住かへよ人見の松の蟬の聲

同じ國にて

夏かけて眞桑もみへぬ暑かな

葉がくれをこけ出て瓜の暑かな

暮まつや藪のひかへの雲の嶺

夕ぐれや兀ならびたる雲のみね

伏見の舟中より都の方をながめて

夕立の雲もかゝらず留主の空

六玉川の記あり

（伊丹の百丸の需によりて綴りし記文なり。）

六玉川高野ゝ外は淸水かや

鎧着て疲ためさん土用干

水無月の竹の子うれし竹生嶋

從兄弟の筑紫より上りけるに

むかし思へ一ッ畑のふり(瓜)茄子

洒堂が難波に居を移せし時

夕顔や名を落したる花の形

門賓も聲自由なり夏ざかな

秋

蠅ならぶはや初秋の日數かな

（この句『幽蘭集』には野童とす。）

うちたゝく駒のかしらや天の河

酒盛となくて酒のむ星むかへ

筑前の黑崎にて、明日は此邊

りのたゝども沖に出て雨乞の
踊し侍るといふを聞て

七夕をよけてやたゝが舟踊

たゝとは、此邊にて漁父の
妻娘の事也。けふは七月七
日の事にぞ侍りける。

黑崎砂明亭にて

うちつけに星まつ顔や浦の宿

魯町が許にて

山本や鳥入り來る星むかへ

魂棚の奥なつかしや親の顔

妻におくれたる人の許にて

寐道具のかた／＼やうき魂まつり

年經て長崎に歸りけるに

見し人も孫子となりて墓參り

踊子よ翌は畑の草ぬかん

朝顔や夜は葎の博奕宿

秋の日のかりそめながらみだれけり

初露や猪の臥芝の起上り

露落て尻こそばゆき木陰哉

悼二風國一

朝夕にかたらふものを袖の露

嵐蘭追悼

千貫の劍うめけり苔の露

遊女常盤身まかりけるをいた
みて相しれりける人に申侍る。

露けぶり此世の外の身受かな

芭蕉翁の奥の細道を拜してそ
の書寫の奥に書付ける。

ぬれつ干つ旅やつもりて袖の露

稻妻のかきまぜて行闇夜哉

長崎丸山にて

いなづまやどの傾城とかり枕

都にも住まじりけりすまひとり

淺茅生やまくり手下す虫の聲

早稻ほすや人見えそむる山のあし

田上にて

山家にて魚喰ふ上に早稻のめし

こけ様(ざま)にほうと抱つく西瓜かな

尻撫て馬飛(とば)するな花すゝき

ひみといふ山にて卯七に別る
るとて

君が手もまじる成べし花すゝき

岩端(はな)や爰にもひとり月の客

盲より啞のかはゆき月見かな

名月や緣とりまはす黍のから

名月や海もおもはず山も見ず

月見せん伏見の城の捨郭

名月やむかひの柿屋照さるゝ

乘ながら馬草はませて月見かな

黑い身に照こむ旅の月見かな

誰／＼も東向らん月のくれ

猪の寢にゆく方や明の月

嵯峨に小屋作りて折ふしに休
息仕ゆなれば

月のこよひ我里人の藪うたん

世波にたゞよひて日ぐれの頃
岡崎より京に歸るとて

鴨川や月見の客に行あたり

長崎素行亭

浦人を寐せて海みる月夜かな

長崎より田上に旅寐うつしける時

名月やたが身にせまる旅ごゝろ

岡木の宿にて小姫のまだらぶしうたふを聞て

月かげに裙を染たようらの秋

中秋の泉猶子を送葬して

かゝる夜の月も見にけり野邊送り

長崎諏訪の社にて前書あり

尊とさを京でかたるも諏訪の月

十六夜やたしかにくるゝ空の色

駒牽の木曾や出らん三日の月

海山を覺へて後の月見かな

宰府奉納

幾秋の白毛（髮）も神の光かな

一戸（いちのへ）や衣もやぶるゝ駒むかへ

乘掛の眠をさますきぬた哉

娘より嫁よりよはき砧かな

（「去來抄」に中七「嫁の音弱き」とあり。）

あき風やしら木の弓に弦はらん

秋風に耳の垢とれわたし守

吉備津宮奉納

秋かぜや鬼とりひしぐ吉備の山

臥所（ふしど）かや小萩にもるゝ鹿の角

小男鹿や岩に踏ばる雲のすき

啼鹿を椎の木の間に見付けり

夜あらしや空に吹とる鹿のこへ

おく山や五聲つゞく鹿の聲

伊都岐島にて

みつ潮の岩ほに立や鹿の聲

浦陰や通しも交るわたり鳥

朝あらし天窓の上を渡り鳥

長月のすゑ筑紫より上りける道安藝の廣嶋を通けるに、人々とらへけれども、故郷に心いそぎせられてのがれいづる晩、一夜の宿に書とゞめ侍る。

けふ翌と成ていそがしわたり鳥

長崎に旅寐のころ

ふるさとも今はかり寐や渡りどり

筑前の國にて

雁がねの竿になる時猶さびし

同黑崎にて

福岡や千賀もあらはに鴈すゝき

氣遣ふてわたる灘女や鱸つり

（「なだめ」は漁船の一種也。）

先放なあくの浦に訪ふ。

八月や潮のさはぎを山かづら

田家

聞まいといふか案山子の腰刀

有礒海集撰給ひける時入句ども書あつめ參らせけるに添て祝す。

鷲の巣や野分にふとる有礒海

松茸や人にとらるゝ鼻の先

老て神職かふむりたる人を賀して

花も實も晩稲に多し神の秋

難波津にて

芦の穂に箸うつかたや客の膳

園女亭にて先師の事ども申出ける序に

秋はまづ目にたつ菊の蕾かな

菊咲て屋根のかざりや山畑

筑前博多にて

菊の香にもまれて寐ばや藁庇

自題ニ落柿舎一（『落柿舎記』一篇『風俗文選』にあり。）

柿ぬしや梢はちかきあらし山

落柿舎感偶

柿買や見ればぬいたる眞桑賣

芽立より二葉にしげる柿の實と丈草申されしも、いつの頃にや有けん。彼落柿舎もうちこぼつよし。

（『小文庫』には「丈草」の二字なし。）

やがて散る柿の紅葉も寐間の跡

長崎にて支考に逢て京の事などたづねられて

息才の數に問れん嵯峨の柿

周防にて

木のもとに圓坐とりまけ木練（こねり）どし

唐人の枕とて故郷にて人のくれけるに

徳山の蕎麥白たへや綿もふく

囉（もら）へどもまづ此秋はかり枕

鼠の説（『華摘』に文章あり。）

面扶持をへつるか粟の鼠ども

題ニ甲陽軍鑑一

あら蕎麥の信濃の武士はまぶし哉

聖護院にて

長き夜も旅草臥に寐られけり

櫨の木の色もさめるや秋の空

うき人をまた口説みんあきのくれ

冬

鴬の羽もかいつくろいぬ初しぐれ

かはらけの烏帽子の上や初時雨

柳など天窓は寒き初しぐれ

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆

一時雨しぐれて明し辻行灯

こがらしの地にも落さぬしぐれかな

しぐるゝや紅の小袖を吹かへし

雲よりも先にこぼるゝ時雨かな

山雀の里なせぎするしぐれかな

塗物の上にちよぼ〳〵しぐれ哉

食時（かしどき）にさしあふ村の時雨かな

翁の病給ふを聞て伏見より夜舟さし下す。

舟に寐て荷物の間や冬籠

翁の病中

白粥のあまりすゝるやふゆごもり

看病も一人前の火燵かな

（『續有磯海』に「病中吟」と題して、上中を「介病も一人前なる」としたり。）

眞夜中や火燵際まで月の影

翁の病中祈禱の句

木がらしの空見直すや鶴のこへ

傷二亡師終焉一

わすれ得ぬ空も十夜の泪かな

丈草の許より、芭蕉翁の七日〳〵とうつり行あはれさ猶無名庵に偶居して心境さへすぐれずとて、朝霜や茶湯の後の薬鍋　といへるかへし

朝霜や人参つんで墓まいり

翁三回忌に義仲寺にて

夢うつゝ三度は袖のしぐれかな

行かゝり客に成けり蛭子講

木曾墳に参りて

船馬にまた泣よるや神無月

松本にて

初雪や四五里へだてゝ比良の嶽

應〳〵といへどたゝくや雪の門

せめよせて雪のつもるや小野の嶺

雪の山かはつた脚もなかりけり

九重に見なれぬ雪の厚さかな

詠やる奥のとろくや比良の雪

旅人の外は通らず雪の朝

綿の中に居て見る雪の山路かな

雪空や鬼も腕を出すべう

悼二浪化君一

その時や空に花ふる野邊の雪

暖簾や雪吹わたす旅籠町

軍書を讀て

雪降れば常盤御前の最惜しき（いとほ）

ひつかけて行や雪吹の豐嶋御座（さしまござ）

松杉にすくひ上たるみぞれ哉

老武者と指やさゝれん玉あられ

訪二僧丈草一

馬道や菴をはなれて霜のやね

山畑や青みのこして冬がまえ

墨染に眉の毛長し冬籠

卯七亭

霜月や日まぜにしけく冬ごもり

其角へかへし

放すかと問るゝ家や冬籠

賀二碼波山撰集一

木がらしや劔をふるふとなみ山

夕照にひらつく礒のかれ葉哉

冬がれの木の間覗ん賣屋敷

賽錢を落して拂ふ落葉哉

布子着て淋しき顔や神送り

荒礒やはしり馴たる友千鳥

鴨なくや弓矢を捨て十五年

尾頭の心もとなき生海鼠かな

その古き瓢簞見せよ鉢たゝき

物くるゝ門にも立ず鉢たゝき

箒來（こ）せ眞似ても見せん鉢蔵

十錢を投じて百辟の瓢を開しむ。

旅人の馳走にうれし鉢たゝき

榾の火に親子足さす侘寐かな

懐二僧丈草一

寒き夜や思ひつゝける山の上

堀川を通りて

有明にふり向がたき寒さかな

火いけ虫背戸から寒し竈の前

李下が妻の身まかれるに

麻られずやかたへ冷ゆく北下し

盗人におひともいはん飯の錢

御神樂や火を焚く衛士にあやからん

老樂の口もと寒し御佛名

廣澤

池の面雲の氷るや愛宕山

除風子の撰集を祝ひ發句參らせんとおもふに、青むしろはことしの集をもて織出たる物なりと人の申ければ、かならず冬季なるべしと沙汰し侍りて

草庭に一の寶や青むしろ

くれて行年のまうけや伊勢熊野

行年に疊の跡や尻の形

うす壁の一重は何かとしの宿

としもはや牛の尾ほどのたより哉

神鳴もさはぐや年の市の音

長崎の浦に旅寐して

年浪のくゞりて行や足の下

としの夜の鰤や鰯や三の膳

年の夜や人に手足の十ばかり

追加

青柳や覆ひかさなる糸ざくら

十五夜の月のひらきや前うしろ

日和見る窓にはちかし月の暮

牛賣て伯父と道きるしぐれ哉


去來發句集

丈草、俗姓は内藤にして、世〻尾張の國犬山の城主に武を以て仕ゆ。文を右にして和漢の才あり。若きより佛乘に歸して玉堂和尙の禪意をつたへ、奉公を辭して薙髮す。偈曰、多年負屋一蝸牛、化做蛞蝓得自由、火宅最惶涎沫盡、追尋法雨入林丘。發句、凉風にきゆるを雲のやどり哉。と云〻。終に故郷を去りて、湖南の粟津龍が岡に茅屋をむすび、佛幻庵と號し、芭蕉翁を開祖とす。ちかくまでその跡ありて、岡の堂といふ。翁の滅後、山に籠りて師恩の(を)報ぜんために、一石一字の法華經を書寫して墳に築く。元祿十七年(三月、寶永と改元す)の春二月廿四日病床に坐化す。塚は龍が岡の東林の中にあり。正秀が墓にとなる。

丈草發句集

春

うぐひすや茶の木畑の朧月夜
竹簀戸のあふちこぼつや梅の花
床脇は梅さくかたか荷茶屋
待ことは梅にあるかも茶摺子木

早梅

梅がゝや湯立の跡の釜の切
片屋根の梅ひらきけり畑出し

遲望が新宅を賀す。

水仙に作事は済で梅の客

尾張の国に春を探りて

うめの花ちり初にけり鷹追風

芭蕉翁の往昔を思ふ。

梅が香にまよはぬ道のすまたかな
引よせてはなしかねたる柳かな
我事と鰌の逃し根芹哉

寒だけは寒く、土用だけは暑し。春ひとりなんぞ餘興なきや。
（「一葉日誌集」に「寒は寒だけ寒く、土用に土用だけ暑し、春ひとり餘興なからんや」とあり）

春だけはもらりのこさぬやおもしろみ
背戸中はさえかへりけり田螺から

里の男の田螺がらを水底に沈め、まち居たれば、鰌をむさぼる鰌のいくらともなく入こもりて

入替る鰌も死ぬに田にしがら

梅本寺に遊びて

取つかぬ心でうかぶ蛙かな
松風をうちこして聞蛙かな

艸菴

火をうてば軒に啼あふ雨がへる
のら猫やうかれ行ほど松の中
歸る空なくてや夜半のやもめ鴈
眞野燒て雲雀にとゞく煙かな
朝ごとに同じひばりか屋根の空

支考餞別

松風の空や雲雀の舞別れ
燕の鴈に問てや鳩まはり

芦文に別るゝとて

落付のしれぬわかれや頭巾
大原や蝶の出てまふ朧月
陽炎に隣の茶さへすみにけり

芭蕉翁の墳にまふでゝ我病身をおもふ。

かげろふや塚より外に住ばかり
春雨や何からいはん嵯峨戻り
はるさめやぬけ出たまゝの夜着の穴

身を風雲にまろめ、あらゆる乏しさを物とせず、たゞ一ツの頭の病もてるゆへに、枕のかたきを嫌ふのみ、椎樵子か不自由なり。蕉翁も折／＼是を戯れ興ぜられしに（はなゝ、此人はつぶりにのみ斧を持る人なりとぞ。此春故郷へとて

湖上の草菴を覗れける。猶すゑ遠き山村野亭の枕にいかなる木のふしをか佗て、殘る寒さも一入にこそ。と後見送る岐にのぞみて

木枕の垢や伊吹に殘る雪

閑居

朝夕にせゝる火燵や春のたし

白妙に月夜鳥や花の奥

眞先に見し枝ならんちるさくら

掬入れた人をかしらや花の友

更に劉伶が鋤を倩しと興じて

酔死ぬ先から花のうづみけり

うか／＼と來ては花見の留主居哉

鳶の輪の崩て入るや山櫻

花曇り田螺のあとや水の底

死だとも留主ともしれず庵の花

塗榑の庵に立よる花見かな

花ちるや覗あひたる岩の穴

水壺にうつるや花の人出入

片尻は岩にかけたり花むしろ

ちるかたは志賀にしておけ澳の花

木啄や枯木をさがす花の中

笠松に舞もどりけり花の友

小疊の火燵ぬけてや花の下

洛東の花

落こむや花見の中のとまり鳥

病中

山がらは花見もどりや枕もと

夕ばへや花の波こすあらつゝみ

餞別

見送りの先に立けりつく／＼し

咲立て柴のならぬや躑躅山

さし覗く窓へつゝじの日足かな

あぐらかく岩から下や藤の花

畫讃

何の葉の影ぞねぢむく雉子のてり

三月や冬の景色の桑一木

三月盡

明ぬ間は星もあらしも春の持

夏

時鳥啼や湖水のさゝ濁り

飛込だまゝか都のほとゝぎす

子規瀧より上のわたりかな

川越の渡(途)中に立や郭公

ほとゝぎす誰にわたさん川むかひ

啼ぬ間よ空一ぱいの時鳥

菜種がら焚や野風の子規

杜鵑なくや榎も梅さくら

(この句『嵯峨日記』には史邦の句とす)

しるべして山路もどせよ杜宇

山道や壺荷にひゞく時鳥

嵯峨にて

鹿追の寐入るや藪の杜鵑

木曾川のほとりにて

ながれ木や篝火の上の不如歸

月夜の松原に醉出て

狂亂のけいこの中にほとゝぎす

蓬・長谷寺・

笋の餅を喃出せ郭公

篳て待や梅田枇杷麥蜀魂

屋の棟の麥や穗に出て夕日影

杉なりにせり上りたる田植かな

谷風や青田を廻る庵の客

松風を中に青田の戰ぎかな

夕ばへや茂みにもるゝ川の跡

去來が落柿舍にて

芽出しより二葉に茂る柿の實

（この句『小文庫』秋之部、去來の「やがて散る」の句の前書によれば史邦の句なるが如し。『嵯峨日記』の一本にも亦史邦の句とせるものあり）

はね釣瓶蛇の行衛や杜若

青雲や馬鍬やすむる蕓の芥子

蕓鐘や若竹そよぐ山づたひ

子につれて歸る靑みや去年の竹

草芝を出るほたるの羽音かな

はしりこむ螢の中や谷の水

螢火や盥のあらせし庭のへり

豐後信門寺の瀧

螢火や村中に取る瀧の水

曲水の子を悼

呼聲は絕てほたるのさかり哉

やう〳〵と出て啼時かかんこ鳥

仰木の里書懷

おのが音の尼や水鷄の礒の闇

血を分しものとおもはず蚊のにくさ

朝日さす紙帳のうちや蚊の迷ひ

衰病倚人

行先にのがれ入けり蚊帳のうち

魯九剃髮せし時垂辭（垂示カ）

蚊帳を出て又障子あり夏の月

隙明や蚤の出てゆく耳の穴

電のさそひ出してや火とり虫

梅本寺より歸るとて

蟬啼やわかれて上る軒の山

夕立のかしら入たる梅雨かな

美濃の關にて

町中の山や五月の上（のぼ）り雲

白雨にはしり下るや竹の蟻

夕立に飛のく月や松のうへ

涼しさに麻よとや岩のくぼたまり

小屛風に山里すゞし腹の上

あら壁や水で字をふく夕すゞみ

つゝ立て帆になる袖や涼ぶね

草臥の根ぬけや澳（おき）の蕓すゞみ

すゞしさの心もとなしつたうるし

丈山の像

さか樣に扇を懸て猶すゞし

犬山にて市中苦熱

涼しさを見せてやうごく城の松

ぬけ果し納涼のあとや緣の月

四梅廬の納涼

打水にのこるすゞみや梅の中

蕓笠に受合せけり蓮の露

浦舟の頭へしに匂ふ蓮かな

惟然行脚を送りて

炎天に步行神つくうねり笠

雨乞の雨氣こはがるかり着哉

元春法師身まかりけるに

世の中を投出したる團扇かな

旅行

帷子にあたゝまりまつ口の出かな

梅本寺を立出るとて

雨乞に先立けふややぶれ笠

秋

朝夕べ秋の廻るや原の庵

夜明まで雨吹中や二ツぼし

精靈のすかれし人をあつめけり

聖靈の隣ありきや山の上

魂棚や藪木をもるゝ月の影

精靈も出てかりの世の旅寐哉

舊里に歸りて

精靈にもどりあはせつ十年ぶり

送り火の山に上るや家の數

稻妻のわれて落るや山のうへ

夜舟より上りて酒堂亭に眠る

いなづまや夜明て後も卅ごゝろ

悔いふ人のとぎれやきり〴〵す

行燈に飛や袂のきり〴〵す

宵までや戸にうたれたる蟋蟀

踊子のかへり來ぬ夜や蛬

寒けれど穴にも啼すきり〴〵す

きり〴〵す啼や出立の膳の下

物かけて寐よとや褂のきり〴〵す

寐がへりの方になじむや蟋蟀

つれのある所へ掃ぞきり〴〵す

病床

虫の音の中に咳出す寢覺哉

啄木の入まはりけり藪の松

はせを翁に文通の奥に

まねけどもとゞかぬ空や天津鴈
（この句は丈草が犬山勤仕中
芭蕉を敬慕して、遙かに贈
りし書簡の末に記せしもの
なりと云ふ）

山はなやわたりつきたる鳥のこへ

ぬけがらにならびて死る秋の蟬

旅中

蜻蛉の來ては蠅とる笠の中

啼はれて目ざしもうとし鹿の聲

北嵯峨や町をうちこす鹿の聲

あれこれを思ひはづれる花野かな

早稻の香や雁出さるゝ庵の舟

名月や雨にはりあふ風光

名月や車きしらす辻番屋

辻堂に梟たてこむ月夜かな

戸を明て月のならしや芝の上

から樽を漏にあてけり月の雨

野山にもつかで晝から月の客

京筑紫去年の月とふ僧仲間

淀川の邊りにて

舟引の道かたよけて月見かな

發句してわらはれにけりけふの月
此句は林之助といひける九
歳の時、はじめて言出せる
句のよし。

[illegible]れの舟に寝付ぬ夜寒哉

[illegible]夏堂二句

[illegible]も寺も飛ゆく夜寒かな

病人に撞木に寝たる夜寒かな

洛の惟然が宅より故郷へ帰るに

鼠ども出立の芋をこかしけり

鶏頭に置て逃るや笠の雫

朝[illegible]をこうすや白枕

つり柿や障子にくるふ夕日影

木づたふて穴熊出る熟柿哉

[illegible]のすたれけるところ

澁柿はかみのかたさよ明屋敷

谷ごしに鳴子の綱や霧の中

居風呂の下や案山子の身の終

借かけし庵の噂やけふの菊

嵯峨にて

竹伐の外には見へす菊のぬし

芦の穂や顔撫上る夢さかり

あしの穂や蟹をやらひて折もせす

早咲の得手を[illegible]の紅葉かな

朝晴に出るあるしや[illegible]

[illegible]の葉の地に立ならふ秋の雨

ねばりなき空をはしるやあきの雲

伊賀へこす時おとき峠にて

いひおとす峠の外も秋の雲

飼猿も秋はことさら山のこへ（聲）

[illegible]便を見にはよらぬに秋の[illegible]

青空や手さしもならす秋の水

帰り来る魚のすみかや崩れ簗

堂頭の[illegible]寒に出る[illegible]かな

夜嵐の長さを行ばとこの山

須磨の浦

[illegible]あふ秋のあてどや寺と[illegible]

行秋や桁にかゝる鉋屑

行秋の四五日弱る薄かな

冬

[illegible]し[illegible]はかれ野の初しぐれ

一方は[illegible]のすつたふ時雨かな

黒みけり沖の時雨の行處

幾人かしぐれかけぬく瀬田の橋

鳥の羽もさはらば雲のしぐれ口

[illegible]の[illegible]をふりむく時雨かな

鍋もとにかたぐ日影や村しぐれ

風雲や時雨をくゞる比良おもて

[illegible]あたりの[illegible]を吟じて

むきたらぬ[illegible]や時雨の[illegible]

越中翁塚手向

入月や時雨るゝ雲の底光

海山のしぐれつきあふ庵の上

所思

もたれたる柱も終に[illegible]しぐれ

芭蕉翁病中祈禱の句

峠こす鴨の[illegible]

はせを翁の病床に侍りて

うづくまる薬の下の寒さかな

[illegible]

曉の墓もゆるぐや千鳥数寄

芭蕉翁[illegible]

ゆりすはる小春の湖や墳の前

芭蕉翁の七日〳〵もうつり行哀さ、無名庵に偶居して心地さへすぐれず、去來が許へ申送る。

朝霜や茶湯の後のくすり鍋

國〳〵の墓所も同じ蕉葉の霜にしらめる。三年の喪は跡ならぬ中に、湖上の木曾寺はそのまたき姿を改て、人〳〵のぬかづきよる袖の泪も、一しほの時雨をすゝむる。舊寺の夕〻より朝をかけて、梵筵吟席のつとめねもごろ也。然ども野衲はひとり財なく病ある身なれば、なみ〳〵の手向も心にまかせず、あたり近き谷川の小石かきあつめて蓮經の要品を寫し、その菩提を祈りその恩を謝せん事を願へり。誠に今更の夢とのみ驚く心喪のかぎりに、筆を投うち手を拱して、たゞ墓前の枯野をみるのみ。

石經の墨を添けり初しぐれ

芭蕉翁七回忌追福の時法華經頓寫の前書あり。

待うけて經かく風の落葉哉

水底の岩に落つく木の葉かな

風のあたり處やこぶ柳

奈良の玄梅、蕉翁のこがらしの身は竹齋に似たる哉といへる句を夢見てその翁の像を書て讃望けるに

木がらしの身は猶かろし夢の中

飛かへる岩のあられや窓のうち

山中泊

霰ふる宿のしまりや簑の夜着

はつ霜の泥によごれつ草の色

思はずの雪見や比叡の前うしろ

雪空の片隅さびし牛の留主

狼の聲そろふなり雪のくれ

納豆するとぎれや嶺の雪おこし

ふりかへて山から見たし雪の窓

狐なく岡の書間や雪曇り

野も山も雪にとられて何もなし

さかまくやふりつむ峰の雪の雲

おれあふて中行道や雪の友

都の人に申し遣しける

山雲のあまりをやれば京の雪

嵯峨の野明別莊にて

柴の戸や夜の間に我を雪の客

去來が菴を訪ひ來れるに別るるとて

雪曇り身の上を啼鳥かな

村雲の岩を出るや雪吹の根

しまき來る雪の黒みや雲の間

淋しさの底ぬけて降みぞれかな

背戸口の入江に上る千鳥かな

さよ千鳥庚申待の舟屋形

水底を見て來た顔の小鴨哉

夜がらすをそやし立けり鴨のむれ

霜腹の寐覺〳〵や鴨の聲

榾の火や曉がたの五六尺

草庵の火燵の下や古狸

下京を廻りて火燵行脚かな

ほた／＼と朝日さし込火燵かな

守り居る火燵を菴の本尊かな

吹嵐あらしや今は山やおもふ
行脚の寐覚なりしを、といふ
を誦して

山やおもふ紙帳の中の置火燵

炭賣や隣の人が焚に行

紙子着てよれば火燵のはしり炭

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり

一夜さに猫も紙子もやけどかな

居寐さへかゝらぬ物なりけれ
ば立別るゝ宿の跡もさこそと
思ひて

踏やぶる紙帳の穴や置土産

鶏の片足づゝや冬ごもり

しづかさを數珠も思はず網代守

舟岡に影氷(こほる)すや鉢たゝき

一月はわれに米かせはちたゝき

うら門の竹にひゞくや鉢敲

長崎卯七渡鳥撰集の時

何撰やみぞれ降夜のあられ酒

水風呂に筧しかけて谷の柴

臘の日の枯野に居(すわ)るあらしかな

神松のさえこむ影や禰宜の夢

黒海苔は雪海苔ともいふ。岩
間に降つもれる雪の日に照さ
れて此物とはなれりとぞ。浪
化より惠れしにとりあへず。

海苔の名やたゞうち見には雪と墨

あら猫のかけ出す軒や冬の月

雪よりも寒し白髪に冬の月

獨法師は中／＼の手廻しにて

煤掃や山風うけて吹通し

寒は旣望の日より明て風景殊
更に悠然たり。

十五日春やのしこむ年の暮

行燈を消せば鼠のとし忘

追鳥も山へ歸るか年のくれ

安永三年午六月　墨梅堂

蕉門俳諧書林
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛
梓行

追加

うぐひすにとらばや菴の風ふせぎ

着てたてば夜の衾もなかりけり

影法師の横になりたる火燵哉

しら粥の茶碗くまなし初日影

酒賣のもどりは樽に野梅かな

子規たしかに峯の早松茸

とゝ川の春やくれ行葭の中

船待の笠にためたる落葉哉

月代やしぐれの中の虫の聲

栗津野や山から京のほとゝぎす

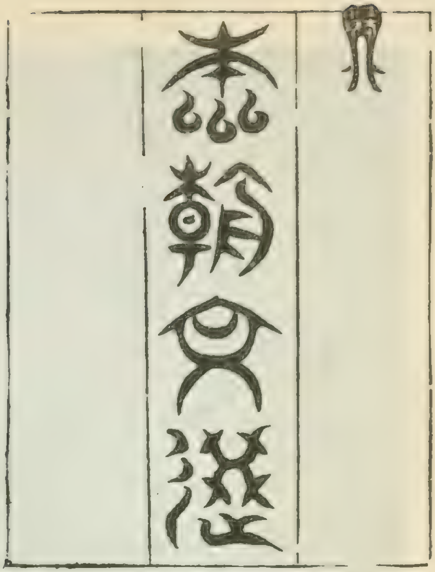
荊口寄られしに

名月の前へ廻るや旅まくら

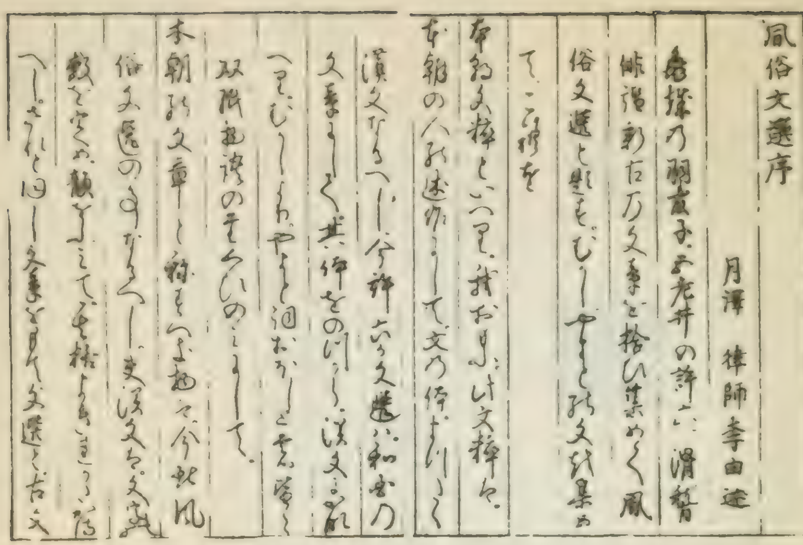
賀二助然于山彦撰集一

月花やよきこたへある里の山


風俗文選


本朝文選


五老井 許六選



風俗文選序

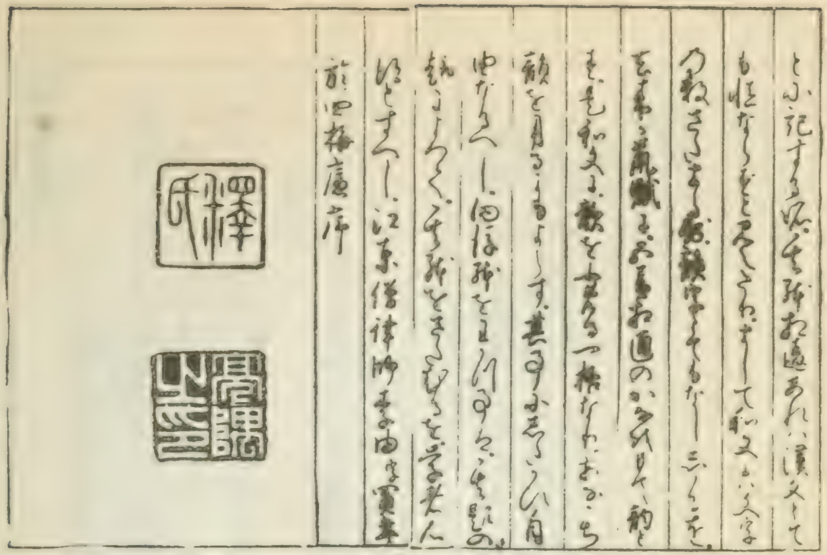
月澤　律師李由述

龜城の羽官子。五老井の許六。滑稽俳諧新古の文を拾ひ集めて風俗文選と題す。むかしやまとの文を集めて。これを

本朝文粹といへり。我おもふ。此文粹は。本朝の人の述作にして。文の体。まつたく

漢文なるべし。今許六が文選は。和國の文章にして。其体をのづから。漢文にかなへり。むかしより。やまと詞おほしとも。皆〻双紙物語のたぐひのみにして。

本朝の文章と稱すべき物は、今此風俗文選の事なるべし。夫漢文は。文字の數を定め。韻をふみて。其格まぎれがたか

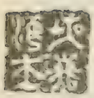


るべし。されど同じ文章をもて。文選と。古文とに記する所。其躰相違あれば。漢文とても恠ならずと見えたり。まして和文には。文字の數さだまらず。韻字とてもなし。しかるを。去來が鼠賦に。五音相通のかなをもて韻とす。是和文に。韻をふめる一格なり。あながち韻を用るにもよらず。其事にしたがひ自由なるべし。向後躰をわかつ事は。其題の趣によつて。其躰をさだむるを。學者心得とすべし。江東僧律師李由字買年於四梅廬序

風俗文選序

落柿舎　去来

世に俳諧の文あつて。其集といふもの いまだ聞ず。先師一たび思ひ立給ふ事侍れど、心にかなふ物希なれば、むなしくやみぬるも十とせ余。五とせなるらん。今や門葉いたれかれ、風雅に腹ふくらるゝまゝに、管城に鞘を横へ。文場に臂をふるふもの すくなからず。今此文集に斧を入て、始に柴門辭あり。終に頌讃の風流を盡す。或は書あり。或は譜ありて。記賦のまとを逹。文談の裏を蔵す。自堪能の才ありて。許多の躰をもらされず。これを千歳の後に施して。はいかい文章の手本とせば。彼童子の師の。句讀を教ふる類ならんや。此文をしれる者は。此道をしる者なり。作者みづから五老先生と稱するものは。湖東森氏六子にして。虚賀にあそべる人といふべし。しからば今の名望を感じて。此文選を難ざらめかも。寶永元秋日序。

印 

印 

風俗文選序

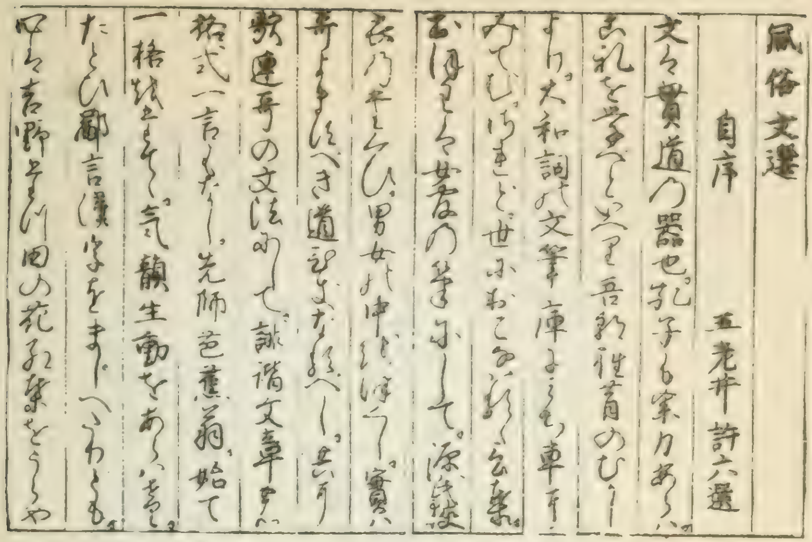
東華坊　支考

もろこしに文選ある時は。吾朝に文選なからんやと。ことしえらびてあそぶものは。湖東の武子。許羽官なり。凡文章は。周孔の心を傳へ。莊孟の筆に鼓舞せられて。和漢に心をつたふれども。姿を傳ふるものは又まれ也。人は其すがたはつたふべく。その心はつたへがたしとぞおぼえぬる。文章に何の心かあらん。心は天地の心なり。すがたは世々に變化して。其變化をしれる人をこそ。姿をしれる人とはいふなれ。昔の人の下恵をまなべるも。道につたふべき心なければ。すがたの變化をまなべる人とはいふべし。されば源氏物語は。はじめ終ありてたやすからず。人の見てあそぶ處も。巻〳〵にまち〳〵なるべし。狭衣は。歌にあそべりとぞ。うつぼ。竹とり。おちくぼの草子など。清少納言が枕双紙は。見る事にあそび。聴事にあそびて。はじめ終あらせむとせば。いかでかは。榮花物がたりとかいへるものを。我いまだ見ねばよくもしらず。伊勢物語の。こと葉はふきたるをさへ。土佐日記はまたさらなり。日記は。おのれがおぼえ書なれば。人の見て。えしらぬ事をも。我は見てあそぶ覧かし。記と紀とは。おなじ心ながら。旅には紀行といふ事もあるにや。世に平家物語といふものありて。ひとへにもの〻ふの草紙にはあらせじとて。祇園精舎の鐘の聲に「無為のあそびを書添たるなり。平家物語とつけたる名も。物に對したる名なるべし。鴨の何がしは。方丈の記にあそべる人也。發心集といふ物は。さるものともおぼえぬにや。

四季物語といふものありて。其人の作にはあらずとこそ。撰集抄のみいとたふとし。歌の心のきすくなるは。まして。撰者の法師のあそび處なるべし。雜好法しのつれ〴〵草は。それにはおとりても侍らんか。硯にむかひて。物をさだめねば。世情の境目にあそぶ合點と見えたり。あるひは宗祇の終焉ノ記も。あるひは長嘯の擧白集も。おのれ〳〵が心にあそびて。むかしのすがたをつたへずといふ事なし。天はこれをもて月にあそび。地はこれをもて花にあそぶ。龍吟ずれば雲起り。虎嘯けば竹すゞし。梅に鶯。紅葉に鹿。いづれかかたちを傳へずしてあそばむ。先師。つねにいへりけり。漢には之乎者也の四字をもて。貴賤尊卑の詞をわかち。和には手爾遠波の四字をもて。暑し涼しの時宜をとゝのふ。文章はまして。手爾遠波の事なりとぞ。されば一句の長短をしらず。二句の句讀をしらざれば。よむ者息のつぎはをわすれて。海雲海鼠腸と。すゝりつゞけたらんは。はてしなき心やすらん。世はかくそしりてもあそび。又そしられてもあそぶ中に。我は此文選の時をほめて。あそぶものなるべしとか。

寶永元年甲申臘月日



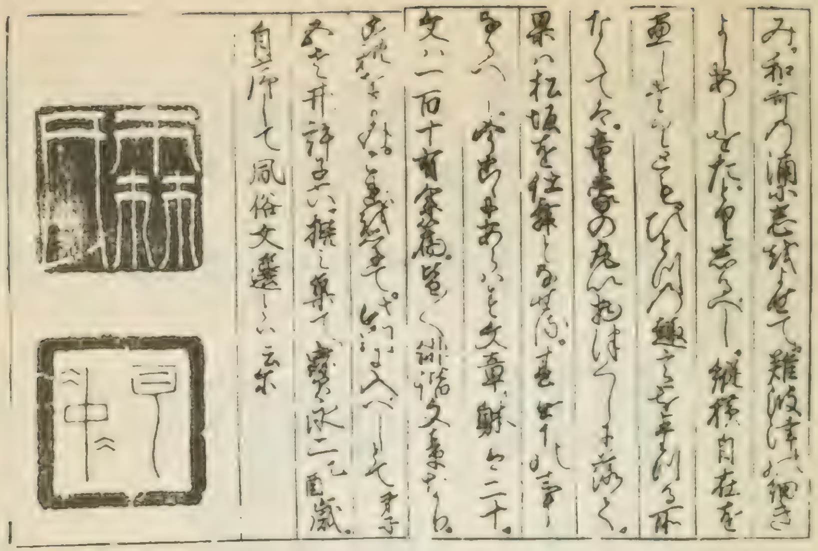


風俗文選

自序

五老井許六選

文は貫道の器也。孔子も余力あらば。これを學べといへり。吾朝往昔のむかしより。大和詞の文筆。庫にみち車にみてむ。されど。世におこなはるゝ言葉。おほくは女官の筆にして。源氏狹衣のたぐひ。男女の中をつくし。實は歌よますべき道びきなるべし。共に歌連歌の文法にして。誹諧文章の格式一言もなし。先師芭蕉翁。始て一格をたてゝ。氣韻生動をあらはせり。たとひ鄙言漢字をまじへたりとも。心は吉野たつ田の花紅葉をうらやみ。和歌の浦に志をよせて。難波津の細きよしあしをたどりしるべし。縦



横自在を盡したりとも。ひとつの趣意をたつる所なくては。童蒙の丸い物つくしに落て。果は松坂を仕舞となせる。甚無下の事なるべし。今こゝにあらはす文章。躰は二十。文は一百十有余篇。皆〳〵俳諧文章なり。これをよみ。これを學て。此門に入べしとて弟子五老井。許子六。撰み集て。寶永二乙酉歳。自序して風俗文選とは云爾。

印　印

風俗文選目錄

五老井　許六選

○卷之五

記類

落柿舍ノ記　去來　幻住菴ノ記　芭蕉
十八樓ノ記　芭蕉　五老井ノ記　許六
九華亭ノ記　汶村　琵琶亭ノ記　許六
風水二臺ノ記　許六

紀行類

鹿島ノ紀行　芭蕉　南行ノ紀　李由 許六

序類

曠野ノ序　芭蕉　猿簑ノ序　其角
宴ニ柳後園ニ序　支考　要文集ノ序　許六
近江八景ノ序　千那　畫樓繪合ノ序　許六
四絕文章ノ序　李由　麻生ノ後序　許六
銀河ノ序　芭蕉　番椒ノ序　野坡

○卷之六

箴類

飲食色欲ノ箴　許六　聽ノ箴　許六

銘類

机ノ銘　芭蕉　柬ノ銘　支考
酉ノ銘　許六　茶碗ノ銘　嵐雪
雲華園ノ銘　汶村　飯鮓ノ銘　吾仲
左右ノ銘　芭蕉　是非齋ノ銘　許六

誄類

嵐蘭ガ誄　芭蕉　丈艸ガ誄　去來
去來ガ誄　許六

○卷之七

歌類

挽歌　支考　鄙歌　五首

文類

俳諧發願ノ文　浪化　聖靈ノ祭文　李由
剃髮ノ文　支考　祭ル猫ヲ文　支考
弔ニ古戰場ヲ文　芭蕉　返店ノ文　路通
斷絃ノ文　許六

○作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也。武名松尾甚七郎。奉仕藤堂家。壯年辭官遊武州江戶。風雅爲業。號桃青。乃誹諧正風躰中興開祖也。當世爲遺功。修武小石川之水道四年成。速捨功而入深川芭蕉菴出家。年三十七。天下稱芭蕉翁。遊東西南北。說風雅助諸門人。國中悉歸芭蕉風。一遇(寓)難波津伏病。終卒年五十一。葬江州義仲寺。

浪化者。東門主一如大僧正之連枝也。號應眞院。居于越中井波瑞泉寺。一日遊洛。會芭蕉翁效風雅。後著有磯海前後集。病寒。年三十二。

僧丈艸者。尾州犬山産也。壯年辭武出家。隱松本山上。蕉門之騷客也。能詩。後三年閉關而終不出。病死。常讀法華經。年四十四。

僧千那者。江州堅田産也。居于本福寺。釋名妙式上人。嘗任律師。號蒲萄

坊。中華蕉門之高弟也。

僧李由字買年。近州之産也。居于光明遍照寺。釋名亮隅上人。嘗任律師。入蕉門而學風雅有年矣。著有韻塞、篇突、宇陀法師書。病死。年四十五。

支考字蓮二。號東花坊。亦號獅子庵。濃州之産也。入蕉門業風雅。一方門人也。先師歿後遊東西南北。說風雅而勸諸生。或住或往焉。支考風者多矣。自選（篤）居于勢州山田。後歸故國。作詩書數篇。辨俳諧之論。

晉其角者。武州江戶産也。生醫家。不學醫術。終業俳諧。實井氏。號狂雷堂。蕉門之一人而後起己一風。著詩書數篇。

嵐雪者。服部氏。不知何許人。業風雅。遊武江戶。蕉門之高弟也。後贅妻田家。

野坡者。越之前州人。生商家。寓于武江戶。蕉門之學者也。一遊西海。不定其所居。晩歸郡家。後之撰號。

北枝者加州金澤之人也。業彫工。見蕉翁好風雅。北方之逸士也。

涼菟者勢州山田神職之人也。業風雅。初號團友。

[illegible]者也。[illegible]之人也。生[illegible]家[illegible]也。好[illegible]門之[illegible]
[illegible]之人。[illegible]年入[illegible]人[illegible]
一[illegible]入日[illegible]
[illegible]人也。[illegible]
[illegible]三[illegible]
[illegible]不[illegible]不[illegible]一[illegible]其性不[illegible]
[illegible]之[illegible]之[illegible]
凡[illegible]也。[illegible]門之[illegible]一[illegible]不[illegible]也。
[illegible]日[illegible]
[illegible]不[illegible]人[illegible]
[illegible]門之[illegible]
[illegible]日[illegible]之[illegible]門[illegible]之[illegible]。千[illegible]文[illegible]。三
[illegible]之[illegible]
[illegible]也。[illegible]門之[illegible]

舍。隨師選猿蓑。後病死年五十三。

万子者加州金澤之武士也。生駒氏。號此君菴。蕉門之英士也。

厚爲者。加州大聖寺之武士也。河地氏。蕉門之英士也。病死。

木導者。江州彥城之武士也。直江氏。自號阿山人。蕉門之英才也。師翁稱奇異逸物。

汶村者。江州彥城之武士也。松井氏。字師董。號九華亭。蕉門之達士也。嘗能書畫。繪師五老井。

毛紈者。江陽彥城之武士也。北山氏。號大雅堂。好風雅愛書圖。師五老井。

程已者。近州彥城之武士也。朝倉氏。號白日堂。愛蕉門之風雅。

朱廸者。江陽彥城之武士也。寺島氏。號甘露臺。年久好風雅而入蕉門。病死年四十三。

撰者許六者。江州彥城之武士也。名百仲。字羽官。森川氏。號五老井。別號菊阿佛。一見蕉翁得正風躰實。血脈道統之門人也。常友李由撰俳書數篇。

以上二十八人



柴門辭　芭蕉　　飄辭　許六

示秋之坊辭　支考　　示古鏡辭　李由

送新道心辭　丈艸　　燒蚊辭　嵐蘭

鉢扣辭　去來　　四季辭　許六

五老井 許六 選

○辭類

柴門ノ辭

送ㇾ師ニ許六之故郷ニ餞別之文也

芭蕉翁

○去年の秋。かり初に面をあはせ。ことし五月のはじめ。深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて。ひとひ草扉をたゝいて。終日閑談をなす。其器。繪を好み。風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其まなぶ事二にして。用をなす事一なり。まことや。君子は多能を耻といへれば。品二にして。用一なる事。感ずべきにや。畫はとつて予が師とし。風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入り。筆端妙をふるふ。其幽遠なる處。予が見る所にあらず。予が風雅は。夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿。西行のことばのみ。かり初にいひちらされし。あだなるたはぶれども。あはれなる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも。これらは歌に實ありて。しかもかなしびをそふると。の給ひ侍りしとかや。されば此御言葉を力とし。其ほそき一すじをたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人のもとめたる所をもとめよと。南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて。灯をかゝげて。柴門の外におくりてわかるゝのみ。

瓢ノ辭

許六

○男鹿なく。此山里と詠じける。嵯峨野方に隠れたる人あり。まだつり兀の跡もきえかね。わり菱の系圖咄に。甲州の鈒も。今は菜刀一丁の身帶にて。あまりさびしさに。垣に瓢箪を植て。折ふしの筆次手にや。中にもしたゝか物に書付侍る。

へ甲にもならで果たるふくべ哉。無名子とは見え侍れど、身は雲水の便りなき。浪人ひがみとぞおぼえける。かの岡に草刈るおのこあつまり。此甲のにくさに。ざと返しとはなくて。

へかまきりに降参したるふくべ哉と

ぞ笑ひける。あるじきゝつけて。陋巷にあつて一瓢のたのしびは。賢人の上。里の子はしるまじ。草刈の中より。其賢人くらべならば。許由はかしがましとて

拾たりとのゝしる。あるじいよ〳〵勝に乘て。かゝる名物もしらず。汝等は田植の煎茶を入れ。たね物の納所とおぼえたるこそ口をしけれ。花はむづかしき色もなくて。楊墨がこゝろざしに叶ひ。源氏の巻の名となり。歌人の腸にまとひたる夕顔ぞかし。抑夕がほの。玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず。たゞ喰物とほしき。五條あたりに徘徊して。貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰く。汝宇治の物語をしらずや。答て曰く。其拾遺の瓢も。咎なき隣人が一命をたてり。これ全く瓢の罪といはむ。かゝる目出度ひさごに。何の罪かあらん。かれ佛緣深きゆへ。空也上人には携へられ。鉢たゝきの祖師とはなりける。かのさゞ波や。かたゝの海士が海老すくひも。佛緣の內かとぞいひける。隱士大きに打腹立て。汝がいひ分。皆〳〵理屈の論なり。曾て風雅をしらず。古人生前一瓢の樂は。身の後の金よりは勝たりといへり。草刈が云く。其樂といつぱ。上戸の情也。瓢のかたちをいはむ。腹便〻と肥ふとりて。口のせまきは何ぞや。せまくて餅の入らざるは。下戸のなげきなりと大笑して。歌て云く。滄浪の水。すめらはつけて泳ぐべし。濁らば餡を押ゆべしといひて。去て共に物いはず。

示秋之坊辭

支考

○あら秋の坊や。紅葉の秋か。世の秋か。又たゞ秋の坊なるか。見ればいとにくさげに。見ねば又なつかし。好惡は人の心にありて。彼は一物もなきもの也。むかし湖南の幻住庵に。一夜の夢をむすびしが。其夜もしらず。よみしやすらん。にくみしやすらん。無常迅速の一句をあたへて。先師も麓までおくりは申されしか。今此草庵に。同じ心にすね合たる法師の。相住て侍るが。物いはぬ日の終日も侍りて。かく住けるこそあやしくたふとけれ。我又こゝに來りてあそばゞ。何某が三十年といふ。歌よみにやあらんと。そこの人〳〵もわらひけるなり。秋の坊が云く。はいかいはさる事ならんか。曰く。さだむべからず。俳諧にくはしからんとせば。世情におちて。心の花にうつろひぬべし。花なきは又世の風流なし。世にはたゞするすみならんこそ。法師達におきてはさる事なれ。たゞはいかいにはあそぶべし。俳諧にまどふべからず。しゐてくはしからんとせば。東花坊がごとき。世情のうき名とりてむ。はいかいのくるしさ。誠にしかのみならんや。

へ瓜ふたつ二ッにわる手や塵劫記

示僧古鏡辭

李由

○こゝに僧あり。古-鏡といふ。學-業にわしりて。東-湖の濱にあそぶ。産は濃-州關なれば。なほ志津。孫六が鍛を得て。紫-電白-虹赫-々とし。三尺のひかりを誰はゞるや。天下靜しあつてから。斷するものあらん。さるはむかしの釼。今の菜刀とおほえ。俊成卿の花の鏡もうち曇り。今は閑-村の葎にうづもれ。祭のはやしにもたゝかれず。終に鍋-鑄の本-國道-共にきはまり。きのふもまるく。けふも又丸し。



此人かつて詩をよくす。多-情有-業の畫を彩り。美-言無-糸の弄をあやつるといへども。猶風雅に足をそばだて。數-鳴の道をさぐり。一とせ先師。關の旅寢の頃まみえて。一-棒をうけたりといへども。いまだ澁-皮もむけず。今幸に予に參じて。又鏡を磨がむとす。風雅はもと明なる物なり。鏡の物の影をうつすが如し。汝元來磨とをしらず。速に去つて。木鏡を求め來れ。

〽分別に花のかゞみも曇りけり

贈新-道-心辭　丈艸

○世をのがれて道を求るほどの人は。皆一かどの志を發して。まとしきつとめとらしあへれど。年を重ねぬれば。又かれこれにひかるゝ緣おほく。事繁くなりて。更にはじめの人ともおもほえぬ。ふるまひのみぞおほかる。古人も此事をいましめて。出家は出家以後の。出家を遂べきよし。勸めはげましぬ。務-九子は。みのゝ國蜂屋の山里にあそびて。いまださかなる齢の。いかなる緣にや。俄に墨の袂に染かへて。ちゝのすみかをかけ出。山寺にかきこもれるよし。傳聞侍りて。今のこゝろざしの正しきに。猶後の出家をおこたらぬ。みさほのほどをねがひて。拙き辭を申おくりぬ。

〽蚊屋を出て又障子あり夏の月

燒蚊辭　嵐蘭

○蚊。蚊。帳-中の蚊。汝を燒に辭をもてす。汝此辭を聞時は。わが手に死すとも。みづからたれりとせよ。夫澤-雉は。樊-中にやしなはれ(れむ)ことをねがはずと。彼は心をとる。これは食をもとめて。人の肌にせまる。かれを愛せむや。これをにくまむや。

「きゞすは草にかくれて。草の爲にやかる。汝は帳に入つて。帳の爲にやかる。

あはれなるかた。いづれとかせんや。

「蟋蟀の火に入んは。戀ゆへときけば。わりなしや。雨に濡露にそぼちて。さそはれし風だにもつらし。けに玉の緒の絶なむ事もしらず。いく僞の夜や頼み來し。汝がやかるゝ事。何を情とせむ。義經の逆落は。暫時さしをく。須山小宮山が夜討は。かくれて謀をなすといへども。天下の爲にして。名をのづからしたがふ。又汝といはむや。虞舜は頑父をさけ。日本武尊は。夷賊をのがれ給ふ。共に天にして。汝といふべきにあらず。大盗あに樞戸を穿むや。汝がふるまふを見るに。帳をたるゝ時は。其闕〳〵の間をうかゞひ。垂おはつて。縦横の透間をたづね。すべて小破の所をもとめ。人のしりへにつきて。入らむとはかる。嗚呼跖蹻が徒にはあらじ。

「すべて汝がおこなふ處。猛き事もなく。たのしむ事もなし。あはれなるかたにも。やさしきかたにもあらず。たゞにくむべきものゝ甚しき也。

「蚊。蚊。帳中の蚊。汝をやくに辭をもてす。汝此ことばをきく時は。我手に死すとも。みづからたれりとせよ。

〽子や啼む其子の母も蚊の喰む

鉢扣ノ辭

去來

○師走も二十四日。冬もかぎりなれば。鉢たゝき聞むと。例の翁のわたりましける。こよひは風はげしく。雨そぼふりて。とみにも來らねば。いかに待侘び給ひなむといぶかりおもひて。

〽箒こせ眞似ても見せむ鉢扣と。灰吹の竹うちならしける。其聲妙也。火宅を出よとほのめかしぬれど。猶あはれなるふし〳〵の。似るべくもあらず。かれが修行は。瓢簞をならし。鉦打たゝき。二人三人つれてもうたひ。かけ合ても謳ふ。其唱歌は。空也の作也。かくて寒の中と。春秋の彼岸は。晝夜をわかず。都の外。七所の三昧をめぐりぬ。無縁の手向のたふとければ。かの湖春も。わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶筌をさし。大路小路に出て。商ふ業かはりぬれど。さま同じければ。たゝかぬ時も鉢扣とぞ。曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり。或は四方にからげ。法師ならぬすがたの衣引かけたれど。それも墨染にはあらず。おほくは萠黄に鷹の羽。打ちがへたる紋をつけて着たれば。月雪に名は甚之亟と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬。ことゞくね覺はやらじと吟じけるも。ひとり聞にやたへざりけむ。打とけて寝たらむは。かへり聞むも口おしかるべし。明して社との給ひける。横雲の影より。からび

たる聲して出來れり。げに老ほれ足よはきものは。友どちにもあゆみおくれて。ひとり今にやなりぬらんと。翁の。〽長嘯の墓もめぐるか鉢たゝきと。聞え給ひけるは。此あかつきの事にてぞ侍りける。

四季ノ辭

許六

古今和歌文章謂四季者多矣假令姿用俳諧詞僞之其情和歌文章不可更今此辭全篇以財寳之上盡四時情是誹諧也

○行年の晝夜はたへずして。しかももとの晝夜にはあらず。子取婆ゝの足手を返し。隠坊の鐵鍬休する時なし。人若かりし時の月日は。行道ゆるやかに廻り。老ての後の光陰は。憶に徑路を行にきはまれり。五十年来のすぐるは。一杯の蕎麦切よりも早く。今又五十年生む事は。田桑を翻すよりもやすし。いづれかあはれならざるはなし。むかし紫氏清氏の物語にも。華ちり時鳥とかはるあはれをのべて。錢金のあはれをいはず。世わたるわざのはたらきは。たゞ此ものゝ手柄にして。神佛とても及びがたし。まづ春の御ッ賀の引出物より。八朔歳暮のたてまつり物。皆金銀の手柄にて。下万民の末々まで。千代よろづ代をかへりと。あふぎ奉るもとはり也。金子の威徳とて。大判は裸で出仕し。白銀は付臺とて卑下したるこそ哀なれ。錢は凡夫の手に落て。青ざし一貫文を頭とし。こき箸。蠟燭一挺ぎり。廿五十の年玉まで。皆相應にこそめでたけれ。春寶引をせぬ人は。六月の蚊にくはるゝとて。しはき親仁もゆるされて。錢つかはすもとはり也。え方参の十二燈より。よろづの神々はとりそめられて。細き穴から世の中を。廣くめぐみをたれ給ふ。梅は花の兄とかや。春の風やはらかに吹て。里の中道溝石をつたふ頃。まづ江南の一二輪咲初て。白きは本色といひながら。南鐐の寒き風情をこのむならむ。御連翹の黄色に。茶たね山吹のあたゝかにさけるは。かの大判の裸をうらやむか。鶯の金衣鳥とは。直に似せ金の同類なるべし。きぬさらき二日の空は。まだ鴨の羽音ながら。日影うらゝかに。南の障子押やり。飛石よりかけろふもゆる頃。かはらけのひねりもぐさ。誰にかすゆらんと。おぼつかなく見なさる。風くろふたる惡太郎。小路がくれを尋出し。お乳めのととり廻し。あたり近き。やいとの婆ゝをかり招き。筋違風門すへられて。涙のかゝる饅頭も。中

中それちうろさくて。やう〳〵膝をすべり落。からき命いきたる心地して。灸甕の芥子銀は。湯氣のたつまで握られて。何買ふ物とはしらね共。たゞ嬉しとばかりおぼえける。明日は初午とかや。錢數寄の稲荷殿。御簾の中より。千貫の散錢に。めでさせ給ふ。御物好こそ有難けれ。されば佛とてもいやにはあらず。黄金の膚を願ひ。閻浮檀金を最上とおぼえ。極樂には金銀を鋪とかや。いづれの佛神に詣でゝも。錢箱の響にめでたまはぬはなし。世の中の人の。心の花にはうつりやすく。智は日〳〵に長じて。田舎の金銀は。すべて都のあたゝまりなるべし。西東の遊び所。南北の參事。すべて錢なし人は。一足もすゝみがたし。櫻は四方山にさきこぼれても。吉野を花の名所とはいへり。飯貝六田の軒端より。幾重の雲をわけつらん。此御山は。彌勒の代につかふべき金とかや。むかしより世の人の。面白しとおもふもとはりなり。やう〳〵やよひもくれて。ほとゝぎすの來べき。卯月の空打曇たる。片山里の垣根の雪は。何を卯の花とうらやみけむ。錫も鉛も。ともに白銀の膚なるべし。牡丹の花の白きはさら也。世に稀なる紅とて。長安の豪富はもてあそび。これに魂をうばゝれける。その面白き所は。たゞ小判を植て。詠むるなるべし。雲雀は終日に囀り。水鷄はよもすがらたゝく。池鯉鮒野の馬市なるべし。一歩はひとつふたつなどいひならひけるに。馬買ィ牛買ィの詞とて。五つぶ十粒とならべてかぞへ。伯樂が錢金を皆あてに。集りたる遊女野郎のたぐひ。塞ふり樗蒲一のより所にして。廣野の小屋のたゝずまゐ。しばし里あるこゝ地なるべし。はやし祭。喰ひ祭。打つゞき。桑子庭に迎かゝる頃。茶山いそがしく。からし種こぼるゝなど。麥跡の田植さへおくれて。例の五月雨ふりつゞき。舟にて市に入る時。矢矧堤はきれて。道筋かはり。大井川とまりて。嶋田金谷に。陣を張大名小名いくかしら。猶行末の川〳〵。いかばかり出らんと心ぼそし。此時例の一歩小判のはたらきこそ。目さむるわざなれ。梅雨晴の六月空さえて。峯に雲をく頃。植田沸かえり。天地は蟬の聲に鳴ひしがれ。一日の暑さもたへて。千とせをふる思ひなるに。十九土用とかや。京田舎熱病にたふれ臥。家〳〵わらはやみはやりて。水藥師の泉も。其功ぬるく。驗者のいのりもたへまある頃。紫雪とかや。世に良藥ありて。たち所に醒たり。これこそ黄がねの鍋にて。黄金を煎じたる物なれ。やゝすゞ風栗の葉むけに立初。芋の葉ぶりつく頃は。金氣世にお

こなはれて。星合の空もうち過。物際近づく頃。革籠布とびまはり。丁銀箱を出てうそぶく。奥の世の中打つゞき。巡禮のぼりつどひ。金の直下る頃を。巡禮小判とはいふ也。家〱むかひ火焼捨て。魂祭ころ。旦那寺の小僧。棚經とてよみありく。物喰せ酒のませ。やがてかけ合に。一粒包みてやれば。またはづかしと思へる。いとあはれなり。やう〱生身玉。養父入事過て。踊見る心にはなりぬ。彼嶋原と申は。廿四日をかぎりと定め。世界の金銀は。此時この里にとらるゝなるべし。たゞ一夜さの假のにほひに心とゞまりて。これよりえにしの中立となるたぐひもあれば。釣がへといふはいかにぞや。こはき風。あらき日影をさへ。いとふしとおもふべき身を。いまいましく大秤にふらば。昆布干鮭の思ひをすらん。あるは家を賣り。家督をうりて。

くはす貧樂の道。樂人。つまる所は俳諸師也。いくとせか。松嶋象潟の旅をうらやみ。此秋しきりに。姨捨更科の月見むと。三衣袋に身帶をたゝみ込み。木曾の御坂を越かねて。尾花のつてにまねかるゝ。かけ路の下の草枕。一夜二夜はもてなされて。長逗留に飽れぬる。たゞ行さきの袖の露。ちらりと見せてあはれ也。秋もはや。くるゝと菊の名に立て。かれも黄々白々粃二束籬といふは。金銀をうらやむたぐひか。時雨ふりそむる頃は。諸家の爐開きとて。名物の寶くらべ。風流に似て。金づくのはたらきなるべし。霜月朔日より。野郎の顔見せ。給分は小判也。むかしは吉原堺町と打ならび。中なるがふき屋町。天下の金をとらかして。まぶといふ詞も。此時より出つらん。今朝からは師走とかや。乙子の朔日とて。節季ゆの來初る日也。空は

うす墨の多氣色。比良の高根。志賀の山。むかし長等の峯の雪。都の方はあられふる。音羽の瀧の音もなし。嵐木がらし唐がらし。岡部の里の冬ごもり。何を師走の年くれて。金一段に責寄たり。かはせ小判。大名借。つゝみ廻して相坂をこえ。高瀬の舟のから枕。汐路はるかにとられ行。鄙の旅寝ぞあはれなる。神は人の敬によつて威をますとかや。伊勢熊野のお初尾(穂)時。幣代は銀一枚。衣配は小判なるべし。すでに煤と明。餅と暮て。廿九日といふなり。けふは小の大晦日。一日の違ひとはいひながら。一年中の大油斷。今此時にあらはれたり。三千世界の金銀は。けふ一日の亂世にて。入みだれ〱。あたる所さはる所。皆と〱くしたがへて。壽永も已に暮にけり。抑やまと哥は。神代より傳はりて。おもき國の翫びなれば。天下誰

あつてこれをおさむ。されど末の代にあたつて。和歌の道に對するものは金也。目に見えぬ鬼神をなかしめ。おとこ女の中をやはらげ。たけきものゝふの。心をなぐさむるものはこれ也。上古はいやしきものにいひなされたる。それもさる事ながら。今やうは此ものににくまれたる人。此界にては。二日の逗留ならず。たゞあはれなるは金なるべし。





南都賦　汶村　鎌倉賦　許六

吉野賦　丈艸　松嶋賦　芭蕉

富士賦　嵐蘭　湖水賦　李由

前磨山賦　支考　後磨山賦　去来

風俗文選巻之二　五老井　許六選

○賦類

南都ノ賦　　汶邨

○あをによしならの都は。御さぶらひ三笠山の麓なり。元明天皇。和銅二年。藤原の宮より。此京に移さる。大宮殿。大佛殿。佛神をあがめて。王法を輔く。若宮のやしろ。月日の宮。竈殿。尾上の宮。鏡の神は。橘の廣纓をまつり。浮雲の宮は。鹿嶋立の始とす。氷室。卒川。東大寺の八幡。二月堂に若狭井あり。三月堂。四月堂。鈞鐘は。久我の入道の詩をとゞめ。大門の折釘は。源の頼朝の幕を張。興福寺は。七堂伽藍。はじめは山階寺といひ。中頃は馬屋寺と號す。東金堂。中金堂。食堂。講堂。南圓堂には。補陀落の藤をうつして。順禮の札を納め。東圓堂には。いにしへの八重櫻を殘して。花垣の庄を領ず。西金堂の樂をあらため南大門にうつして。薪の能をはじむ。七度半の使に。四座の猿樂をめす。雨天には紙を踏で試み。夜陰には薪を積で焚。保生が鉢の木に。名人の號をとり。大倉が芭蕉に。達人の名をあらはす。水屋の能。若宮の能。春日祭。御祭。素絹に大衆の顔をつゝみて。大華表につらなり。錦を着て。松の下に弓矢の立合を舞。頭屋の兒は。牀木に腰をかけ。赤衣の仕丁は棒を横ふ。大名馬。大名鑓。大太刀持。小太刀持。競馬。流鏑馬。長谷川黨は甲冑を帶し。射手の兒は。綾藺笠に弓矢を持。關白代は束帶して。藤の花をかざし。パヂョの兒は供つれて。腰に木履をつくる。ハイケンの神子。奈良の神子。細男。氷室村の樂人。トカミ。拍手は。仕丁の宿老。頭屋の御幣。田樂のピンヅロ。春は二月の雪をちらし。冬は霜月の花をさかす。手向山に。菅家の紅葉を詠じ。武藏野に。業平の若草をよむ。雪消の澤。野守の池。御手洗川。佐保川。一位。二位。五位の橋。馬出。轟。故鄉の橋。鶯の瀧。青龍の瀧。森は神垣。手分の杜。地獄谷。千手谷。劍塚。逢火塚。むら雨のたえ間には。雲井坂に晴を祈り。雉の羽音には。わか草山に眠をさます。鹿は春日野に臥。魚は猿澤の池に浮ぶ。衣懸柳。良辨杉。夜泣の地藏。文使の地藏。元興寺の鐘は。鬼の手の痕になだれ。十三鐘は。七ッ六ッの間につく。角寺。紀寺。般若寺には。大塔の宮を隱し。何がしの坊には。義經の鎧をとゞむ。重衡は治承に燒。松永は永祿に亡す。俊乘坊の

跡をふむで。龍松院は願をおこす。興懸石は。伊勢の御の眺望をなし。柳緑花紅の碑は。紹巴翁のしるしとかや。華原磬。泗濱石。蘭奢待の伽羅。鴨の毛の屏風。柳生家の劍術。寶藏院の十文字。法花寺の作り犬。西大寺の豐心丹。法論味噌。力饅頭。なら漬。奈良酒。奈良こんがう。なら團扇。墨。曝。世に名高く。打箔。中繼は此京より起る。岩井が具足。文殊が打物。膠。綠青。紐。鼓の皮。土風呂。灰焙烙。櫟。木練。なら茶はヤヂウと名づけ。晝食を硯水といふ。油烟取。五合禰宜。乞丐坂の石。穢多村の木格子。赤き物は。頭屋の赤飯にたとへ。痩たる人は。金堂の鉦打といふ。木辻の待宵。鳴川の別れ。情に万金を盡し。思ひに一命を輕むず。口は七口。景は八景。町〱に御門の名ありて。五條三條の巷をわかつ。夏冬の朝起。春秋のならはひ。諸國にすぐれ。諸人にこえたり。是皆舊都の。ありがたき遺風なるべし。

鎌倉ノ賦 幷序

許六

夫相摸國。鎌倉は。郡の名にして。大職冠鎌子丸の時。靈夢によつて。鎌を埋むの地也。このゆへに郡の名とす。染屋の時忠。惣追捕使として。文武の御宇より。聖武の神龜年中まで。こゝに居す。それより上總介平直方。これに住して。八幡太郎義家朝臣より。源家代〱居住の地なり。賦して曰。

〇三代の將軍。九代の執權。春の花さけば。秋の紅葉と變ず。御のみやこ。もろこしの里。鶴が岡。雲井の嶺。下の若宮は。賴義朝臣の建立にして。上の若宮は。源二位の勸請なり。宮柱ふとしき立て。民の戸烟にぎはへり。江の島は。三辨財天。三浦三崎に。杜戸の明神あり。鳥合が原は。相摸入道が鬪犬の地。由井の濱は。下河邊の庄司が。笠懸を射初る。小袋坂。稻村が崎。七里が濱。月かげが谷には。曆を作り。扇が谷には。佐竹の紋の畦あり。腰越の寺には。辨慶が申狀の下書を殘し。兒が淵には。白菊が最期の歌をとゞむ。片瀨川には。宗尊親王の影をうつし。滑川には。青砥が錢を搜す。日蓮盛久が首の座。景清からいとが籠のあと。大塔の宮は。佞臣の讒にくるしみ。實朝の卿は。公曉が爲に弑せらる。勝長壽院には。義朝の髑髏を葬り。法花堂には。賴朝の墳墓を築く。西行上人は。三夜に軍法を說。定家の卿は。七年和哥を談ず。化粧坂は。少將に名高く。神前の舞臺は。靜が舞をはやす。和田。畠山。千葉。北條。官(管)領屋敷。梶原屋鋪。佐ゝ木屋敷には。馬ひやし場の水あり。正宗が舊跡には。刄をきたふ泉を見る。

花が谷。蛇が谷。梅が谷。松葉が谷。建長寺。最明寺。圓覺寺。壽福寺。海藏寺は。石割玄翁の開基。松が岡は。實朝の尼寺也。籠釋迦。鉄地藏。深澤の大佛。長谷の觀音。金洗澤。星月夜の井。橋の下の小哥は。あめ牛めくらが威勢をそしり。小栗の說經は。横山が强盜を語る。阿佛。長明が日記。重衡。俊基の紀行。春は雪の下に花を踏で惜み。夏は山の內に鵑を待て眠る。美奈能瀨川の月。御輿が嶽の雪。礒のあとは。感慨の情をまし。鳩の聲は。懷舊の腸を斷。鰹は兼好が筆にいやしめ。左蒔の榮螺は。實平が麁相を殘す。苔。磨砂。海老。柴胡。すべて魚鼈の類。あまかづき（あまがかつきカ）いとまあらず。高瀨おしをくり。かよはぬ日なし。名にしの地藏は。武相の境にして。六浦。金澤は。むさしの地なり。瀨戶の明神には。四橋一覽の眼をさき。能見堂には。八景惣詠の詩を見る。照手の松。筆捨の松。金澤の文庫といふは。稱名寺にあつて今はなし。文殊像。普賢像。こく梅。櫻梅。せいこ梅。青葉の紅葉。わづかに西湖。さくらの二梅をとぶむ。大きなるものは。賴朝のかうべにたとへ。廣き所は。かまくらの海道に比す。今の戶塚は。いにしへの材木町といひ。大磯の宿は。遊女町の沙汰なり。されど東南に海近く。西北に山つらなれり。境地狹してすでに谷〳〵の號あり。むかしの繁花繁榮を論ぜば。なんぞ今の泰平不易の江戶に及ばむや。

吉野ノ賦

丈艸

○よし野を御吉野といふは。皇居の地なればなり。山。川。里。嶺。嶽。高根。尾上。山の井。花園を詠ず。すべて二十一代の歌數三百七十余首。猶家〳〵の集。物語類。詩連俳諧のたぐひ。佐川田喜六があさな〳〵。貞室老人のこれは〳〵まで。かぞふに中〳〵いとまなからん。さればもろこしの吉野とは。おほいもうちぎみの誹諧の歌より始り。芳野川花の音するとは。慈鎭和尙の大きなる歌の手柄なり。川は巴が淵よりわかれて。紀の和哥山に落。山は大峯よりつゞきて。那智高野につらなれり。藏王堂は。三ところに安置し。一郡は八ー鄕とかや。上市よりは飯貝にわたり。下市をこえては。六田よりのぼる。妹背山をへだて。高取の城にむかふ。ちもとの櫻。日本が花。櫻田の谷。さくらが嶽。關屋の花。瀧ざくら。雲井櫻。布引の櫻。花矢倉。花籠の水。嵐山は。龜山の御宇に都にうつされ。袖振山は。天武帝より五節の舞を始む。淸見原の天皇は。國栖人の舟にかくし。後醍醐帝は。吉水院を皇居に定む。義經も

此院にやどり。秀吉も此寺を本陣とす。賀名生は要害の御所。如意輪寺には御廟を築く。厨子の戸びらに。南帝勅作の詩を。みづからあそばし。過去帳の奥には。楠正行最期の歌をとゞむ。判官の鎧。辨慶が太刀。口の山門は。彦四が痛腹の所。つゝじが岡は。忠信が空腹の地なり。勝手の寶藏には。靜が舞の裝束を納め。子守の拜殿の歌仙は。定家卿の眞蹟（炎上の後狩野永納が筆）なり櫻木の宮。金精の明神。力乞の不動。廻り地藏。尊算の御影堂には。花供養の餅をまき。五臺寺。櫻本は。當山の先達也。大瀧。宮瀧。西河の瀧。高瀧。蟬が瀧。清明が瀧。菜つみ川。とく〳〵の清水。外象の橋。神子の水。鷲の尾の鐘。龍返しの岩。龜石。玉石。大杉殿。人丸塚。若葉の鳥井。鎧懸の松。かけろふの小野。猿引坂。琴堂。琵琶山。青根が嶺。釋迦が嶽。七十二なびき。八十の宿。これ皆順逆。二つの通路なるべし。産は頭巾。ほらの貝。火打。塗物。紙。漆。葛。榧。たばこ。釣瓶鮨。柿。木の子。籠細工。木鉢。材木。山折敷。さくらは吉野に名たかく。よしのは櫻にて名を擧たり。麓より奥の院まで。左右の山〳〵。前後の谷〳〵。たゞ雲を攀上り。たゞ雲をくだるがごとし。海道の吹だめには。落花の波を揚。木の間の嵐は。寒からぬ雪をふらす。麓ははやく。奥はをそし。開落山の淺深によれり。春此山に上り。いづれか花の盛ならぬ所はあらじ。夫櫻の名目は。伊勢櫻。江戸ざくら。火櫻。樺ざくら。うば櫻は葉のなきをいひ。しほ竈とは濱に咲といふ事にや。熊坂といひ。楊貴妃といふ。世に色よき杜若は。八橋と名付。よく垂る萩を。宮城野と號す。さればむかしより。たゞさくらの名に。吉野といへる花をきかず。たゞ吉野とも櫻とも。理屈をつけぬこそ高みなれ。

松島ノ賦

芭蕉翁

○そも〳〵事ふりにたれど。松嶋は扶桑第一の好風にして。凡洞庭西湖を耻ず。東南より海を入て。江の中三里。浙江の潮をたゝふ。七十二峯。數百の嶋ゝ。欹つものは天を指。ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり。三重にたゝみて。左にわかれ。右につらなる。負るあり。抱るあり。兒孫愛するがごとし。内ふたご。外ふた子。鎧嶋。かぶと嶋。牛嶋。蛇じま。內裏嶋。屏風じま。笆が嶋はあまの小舟漕つれて。肴わかつ聲〳〵に。つなでかなしもとよみけむ俤を殘し。末の松山は寺となりて。松のひま〳〵墓を築く。羽をかはし。枝をならぶる契の末も。終には皆かくのごとしと悲し。野田の玉川。沖の石。宮城のゝ萩。武隈の松。

猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には。塩がまの明神あり。神前のかな灯籠。文治三年。泉の三郎寄進と記す。雄嶋が礒は地つゞきにて。雲居禪師の別室のあとに。坐禪石。瑞岩寺は。相摸守時頼入道の建立。當時三十二世のむかし。眞壁平四郎出家して。入唐歸朝の後開山す。其後伊達政宗再興して。七堂伽藍となれりける。法蓮寺は。海岸に峙。老杉影をひたし。花鯨波にひゞく。松の綠こまやかに。枝葉汐風に吹たはめて。屈曲をのづからためたるがごとし。其氣色窅然として。美人の顏を粧ふ。ちはや振神のむかし。大山ずみのなせるわざにや。造化の天工。いづれの人か筆をふるひ。詞を盡さむ。

富士ノ賦

嵐蘭

〇不二は日本の蓬萊山也。むかし孝靈五年。山はじめて現ず。徐福も此山に登りて仙薬を求め。かくや姫も神と化してこゝに靈をとゞむ。峯は八葉にわれて。根は四州にまだかる。道路は三口よりのぼりて。千筋にわかれ。すそ野は東西に長して。百里につらなる。形けづりたるがごとく。高き事北斗に近し。夜陰に旭をかゞやかし。夏天に雪をいたゞく。山間に海をたゝへ。山上は眞砂を攀。和國異朝類するものなく。三國名山と稱じて。義楚六帖に甚ほめたり。日本武尊は。東夷をたいらげて。草薙の名をあらため。右大將賴朝は。ものゝふをあつめて。牧狩をかる。鳴澤の池は。俊成の仇名をとり。人穴の奥は。仁田が無分別さうなり。十郎の宮。五郎の社。西行は五文字をすへかね。探幽は墨色にあぐむ。烟は古今の序に。二流によまれ。雲は廻船に怖れて。一尺八寸の號をとゞむ。禪定の人は。寶冠に頭をつゝみ。下向道は。小袖の砂をふるふ。絶頂の鮗。半腹の雀。巣鷹は大心にして。伊豫の松山におとし。水鳥の羽音には。臆病になつて。都の方に迯る。ふじ海苔。不蠹灰。富士甘艸。ふじ黄茋。栗。柹。松。檜の木のたぐひ。往還は竹の下越。根原ごえ。關は足柄の關。横ばしりの關。あら井の渡口。佐夜の山越。海を隔し峰をかさぬ。三保清見寺の見越。箱根。鎌倉の姿。日本。兩國の橋上には。馬上の人の首をめぐらし。赤坂。駿河臺には。乗物の窓に眸をさく。遠くは朝熊山をかぎり。ちかくは原よし原のあたりなるべし。諏訪の湖には。倒の影を浸し。甲州の府には。三つ峯に見えて。扇の繪はこゝなるべし。むかしより、詩歌連俳の句數。合せてこれをつまらば。大かた此山の高さには比せむ。されど古今

の間。たゞ一首秀たる者は。赤人の白妙なるべし。其余は此山に對して。万が一にも及ばず。吾翁。富士吉野の句。一生なしとかや。東路に趣く人は。かくなりがたきふじの詠に。心力を費し。又あづま路におもむかぬ人は。かく有難き富士を見ずして。一生を終るも。共に殘多き事なるべし。

湖水ノ賦

李由

○近江。もと淡海なりしを。大宮にちかき江とて。近江につくり。遠き江を。遠江と號すとかや。仁皇十二代。景行の御宇。滋賀の郡に。迁都あつて。高穴穂宮に行幸す。三十九代。天智帝。大津の宮にうつり。廢帝の御宇。保良の都をたつ。近州はじめは十三郡。保饒潤澤。種千倍を得。春氣早く到。日本四番。大上ゞ國と稱す。仁皇七代。孝靈五年。地裂湖となる。同時富士山現ず。されば不二禪定するに。近江人を先達とさだむ。善積一郡は。已に湖となりて今はなし。わづか礒といふ一村殘り。古郡變じて。坂田の新郡に屬す。同國余吾。筑摩江の兩湖あれど。大きさわづかに二里に過ず。たゞ日本みづうみと稱する物は。琵琶湖の事也。形似たればとて其名とす。佐ゞ波賓國とは。風土記に出て。樂ゞ波や丹穗てるの文字は。萬葉よりはじまれり。東西十一里。南北二十余里。山谷のしたゞる所。八百八川。湖を圍む水郷五百余村。中に大小の嶋あり。竹生嶋は周廻一里。寺院九坊。天女をあがめて。岩つなぎの神事あり。空海の祕密を封じ。經政の撥をひびかす。武嶋はつくぶの半にたらず。沖の嶋は。沖津嶋山とよめる。漁人わづかにすめり。白石といふは。四石湖上に峙。樹木一株もなし。奥の嶋は。人家數百。疊の表を産とす。猪崎。岡山。黒津の八嶋。なら島は水鳥の巣つくり。勢田の中嶋には。蛇柳あり。入龜。出龜の二嶋は。筑摩江の中に浮ぶ。山は比良四明の翠をひたし。鏡伊吹の影をうつす。橋は勢田。青柳の橋。松は辛崎。千ゞの松。蓮は支那に名高く。蓴菜は四川に肥たり。柳大根。兵主蕪。八幡蚊屋。長濱絹。高宮布。野洲ざらし。高嶋硯。武佐墨。白部石。舟木材木。庭石は木戸によろしく。盆山の敷砂は大洞の白石。（是方解石也。）伊吹の産は。蕎麥。からみ。艾。石灰。藥種の類。すくも。岩木。日野椀は會津の根本。しがらき燒は高麗の薬也。混元丹。百ゞ藥。幡磨田米。醒が井餅。多賀杓子。綣村鍋。四十九張のきせる。池の川縫針。守山鍬。國友鉄炮。武佐判の八合

升。〔是レ至田野家々之畜。軍中兵糧ノ助トス。〕端無のヂバン。〔佐々木ガ其ノ具足膚也。其子孫ノ者ノ。良父マデ手レ今着レ之。〕大津馬は飛彈材木を飛し。鎌倉の生食も。本此國より出たり。湖中の獵頭は。尾上片山に綸旨をいたゞき。石垣つきは。阿野尺を天下に用ゆ。白髭の御神は。湖水七度の芦原を見給ひ。磯崎の明神は。日本武の御廟也。多賀。日吉の神社は。しらぬ人なくして更なり。筑摩の神は。鍋の數に名高く。新羅の社は。源氏の大將より。處を益とかや。大津四の宮の神社。今濱の八幡宮。豐滿の神は。幡竿を守り。宇智野の神明は。第十四座の迁坐也。彦根山の天神は。幾津彦根命と申奉る。金徳の御神なれば。金龜山に迹を垂。吾すむ平田山。鳴宮の天神は。御旅所也。流天神は。天津彦根命なり。木徳の神にて。千々の松原に宮居し給ふ。名は神代よりはじまりて。大納言經信。贈答の歌にも。彦根山とよめる也。山上の觀世音。堀川の御宇。寛治三年。白川の上皇。御幸の地也。神社佛閣。金龜山の城の爲に。地を移して。今の北野寺に同坐あり。石山は觀音道場。石は白瑪瑙。山は黃金なり。阜州金山の始り。三井は園城寺。鐘に名高く。むかしながらの山ともよめり。夫山といへば。延暦寺にきはまり。寺といへば園城寺をさす。共に押出したる靈場也。坂本西教寺は。天台淨土の一本寺。堅田の浮御堂は。惠心僧都の千躰佛。長命寺は。順禮の札に顯れ。猪崎の不動尊は。棹飛の術に名高し。矢取の地藏。木の本の地藏。石塔寺には。天竺阿育王の塔をとゞめ。〔是所謂八万四千塔ノ一也。日本ニ來ル此。三ツノ其ノ一也。〕平流山は。行基四十九院をたてゝ。都卒の内院を移す。三講齋〔記ニ云。昔シ鬼神童山ノ一ノ峯ヲ盗ミ。湖水ノ濱ニオロスニ其下ニ隠レテ石ト化ス。今ノ荒神山ノ蛇石是レナリ。〕高野永源寺は。寂室派の一本寺。女人の高野山になぞらへ。番場の辻堂は。一向時宗の源にして。仲時已下の過去帳よりは。如是畜生の願文にてかくれなし。百濟寺の下乘は。小野道風の眞蹟。池寺の八夫の繪は。金岡の筆也。正樂寺は。佐々木道譽が菩提所。コンクハイの狂言。白藏主が寺也。敏滿寺般若坊には。那須與市が願書をとゞむ。野寺の鐘。練貫の水。松尾寺の本堂は。飛彈の匠が建て。千年の星霜をかさね。瓦屋寺は。太子。天王寺の瓦をつくらせて。共殘り此地に埋て今もあり。東西本願寺の御坊。院家一家の寺々。清凉寺。龍潭寺は。禪の道場。窓には千嶺の雪を含み。門には万里の舟をとゞむ。菅山寺は。世に菅の寺といふ。菅家の遺愛寺也。安土山摠見寺は。信

長の城跡。日本天守の始り。七重の甍を聳かす。廣間の名額。此寺に殘る。觀音寺は。佐々木の城山。すなはち觀音城也。今濱の城は、太閤秀吉の。城の持初。坂本の城は。明智光秀が終りをとれり。佐藤太のながれは。蒲生家に殘り。六角京極は。佐々木のわかれなり。稻毛三郎は。供御の瀨を知て。多勢を渡し。賤が嶽の七本鎗は。後代に名を擧たり。木の匠の豐後は。甲良の庄より出て。道を坂東に傳へ。鍛冶の貞宗は。高木より出て。名を鎌倉に揚たり。猿丸。黑主の舊跡をとゞめ。僧元政。季吟翁。皆此國の產也。すべて歌名所。一百余ケ所。猶撰集に殘るものすくなからず。近江八景は。騷人墨客これを翫ぶ。これ近衛政家公の歌をはじめとす。國中土に灰汁なく。水に泥なし。音聲に清濁をわかちて。うらの言葉をつかふ。柔によろしく。又茶に宜し。世に川魚といへる物は。湖魚の事なり。汐ならぬ海士のいとなみもをかしけれ。大網。卷網。四手。跡懸。手丸。投網。魞。簗。カリ〳〵。竹瓶あさり。いさりのあはれもふかゝるべし。鯉。鮒は惣名にして。鯉の品類。鮒のたぐひ。其名かぞふにいとまなからん。春は山吹の子をいだき。秋は鱗に紅葉をちらす。江鮭。鱒の名を變じ。鯽。鰱の味をわかつ。取よする物は鮒と名づけ。鮎は王城五十里を去ずとかや。勢田鰻。和邇鯰。氷魚は近江にかぎる。（内膳式云。自上二限許シタルヲ。宇治ニテ取。九月ヨリ十二月マデ供ㇾ之ヲ。氷魚ヲ捕モノヲ。網代ト云ナリ。）不賀比。（鮒ノフト。鯉ノカト。鯰ノヒヲ合テ。其形トスル魚也。）鮎。小鮎。鮠。鰤。水鮭子。山水鮭。ギヽ。鰩。蟹。小蝦。蜷。蜆。胴龜。石龜のたぐひ。獺は魚を祭り。川太郎は相撲を好。船は大津百艘と稱す。八十の湊。津〳〵浦〳〵。大丸子。小丸子。小ばや。川御座は大名船。高瀨。傳馬は川舟なり。段平に大石を積。艜は耕作のたすけ也。（往ニ記付所ニ不ㇾ入ニ舟數ニ）一村なし小舟。堅田舟。比良の八講は。舟ノ人湖上の風をおそれ。論義とは。風のさだまらぬをいふ。トイテとは。日和風。ハヤテとは。雨をさそふ。勢田嵐。伊吹風。ヤマセ風。ナガセ風。サキ風は春夏の名にして。秋冬は日あらし也。根わたしは湖上の風の名にして。宮内卿は漕行舟をながめ。臥佛老人は。路縱橫と吟ず。眞野の鶉に袖をぬらし。山吹の崎にはこ鳥を聞く。万木の鷺。老曾の時鳥。鶴。白鳥。鵆。水鷄。鹿は玉川に啼て。百足は三上山をまくとかや。玉の濱の郁子を獻じては。新米の供御を備へ。在士の藤咲ては。藤堂家に花を捧ぐ。栗本の栗の木は。神代の沙汰にして。花

澤の花の木は。今も咲なり。龍灯松は。巳待の夜毎に光をあけ。大藪の雨夜には。星鬼の火を簑にうつす。抑江州八十余万石。皆此水にやしなはれて。年々の貢を備。大嘗會の稻穗を奉るも。たゞ此湖の潤ひなるべし。

前鷹山賦

鷹山者丸山也。在肥長崎妖冶之地也。

支考

○七月十日。けふは二万五千日の功徳とかや。殊に女心の賴をける。物詣の日なるべし。此津の遊女どもの。人も見。人にも見られむと。よそほひたたたるに。ゆきゝの追風に。心ときめきせられて。花すゝきのなびき合たる野邊は。男山もあだにたてりと見ゆらんかし。さるは浮草の世にうかれて。身をあだなりと見る人は。浦の見るめも。いかにあだならん。今さしあたりたる物思ひはなけれど。左右の翠簾ごしにのぞかれて。顔のをき所なからんこそ。うたておもはるれ。禿といふものゝ。何心なくて。茶漬喰たしと思へる。雀の花見顔にもたとへ侍らむ。をひさきいかなるあだ人にか馴て。物思ふ事もならひてむと。これさへあはれにおぼえられける。

　ヘ草花の名に旅ねせむ禿ども

後鷹山賦

去來

○十日八日は。たふときちかひありて。ちかき山寺に佛をがまむとて。こゝの遊女共の。月まうでするなり。唐土舟も入つどふ湊なれば。浦人の氣色さへうちさはぎて。秋風の折にふれては。葛の葉のうらみがほに。磯邊の鴈の大空に吹なされて。そゞろに人を思ひ驚くならん。それが中にも。はかなき世をちぎり。諸共に苔の下になどゝ。一すじに。祈りおもへらむ人もあるべしと。あらぬ心さへ取そへられてかなし。見渡したる人々の。をのが國びゐきに。物くらべしあそばむにも。難波の浦の。あしさまにはいはぬをと。ひたすらにあまの子の。あさましとのみ思ひあなづりて。都の商人も。手袋ひきたるためしおほしとかや。かゝる事などはいひいたるべき。年のほどにはあらぬを。西花坊に。此ながめの賦つくりたりとほのめかされて。終に後の賦のぬしとはなり侍りける。

　ヘいなづまやどの傾城とかりまくら

（この二篇共に支考の『梟日記』にあり）



風俗文選卷之三　五老井　許六選

○賦類 附譜

鼠ノ賦 并引　去來

此ノ賦以ニ五ノ音相-通ノ假-名-字ヲ一爲レ韻ト

鼠。一ツの名はよめが君。又よめともよめり。其たね品あり。四尺の鼠は圖はづれにして。大なるは五六寸。ちいさきは寸にみたず。山-椒の眼。小-豆の鼻。齒は糸をつけて小袖も縫べく。耳は木の芽のめだつに似たり。尾をきつて錐のさやとなさばなしてむ。背-腹の色にめでゝ。うすくも濃も染出せり。其行や。夜出て晝隱る。常にぬすみをもて身を養ふ。まとにくむべきものゝ一つなり。乃賦を作りて曰ク。

○二月鼠の穴を塞ぐ。つく〴〵汝がいたづらをおもへ。家に居て人をおそるゝは。足のうらに疵持けらし。油をのむ事。世の酒にひとしけれど。いつしか沈-醉を見す。粟を盡し。器をそこなふは。殊更にいはじ。大-棗をかむ牙にふるれば。病を生ず。はづかしき文をちらして。男-女の中をもさまたげ。あやしき巣をつくりて。源平の亂をきく。何をへつらひて。佞-人のためしに引出られ。いかにすゝめてか。書を焚代の宰-相となしぬる。神-佛のたふときも。尿-糞に汚したてまつる。草の根をはむ月の鼠は。俊成ノ卿のうらみなりけり。つく〴〵汝があやうきヲおもへ。それ人の賢しきや。万木鼈をまき吹-矢を備。黐をぬりて。往-來もたやすからず。けはしき城をたのむとも鼬を

防ぐ手段はあらじ。脊なる客をながめては。鳶のつかまむ愁わするべからず。桁走り。障子のぼり。早業得たりがほなるも。おもはず升にかゝりて。いかばかりの思ひをすらん。虚死仕て仕合に。東坡が袋を逃たりとも。生捕れてなまなか。張湯が文をうけなむ。或は命を頸にさげて。兒童の戲となり。あるひは筆の用に髭をぬかれて。老の悔を殘せり。あやまりて蟹鼠とあなづられ。濡鼠と笑はれ。更に吹鼠とくるしみて。人の爲にご悦ばれぬる。我さへかなしきを。燒鼠となりて。狐狸の命とらむこそ。あさましく罪ふかけれ。つくづく汝が尊きを思へ。日よみの初に呼れて。位司いやしからず。百敷のかしこきも。甲子をむかへて。年の號あらため給ふぞかし。あら玉の春立かへれば。子の日の御賀あり。子祭といへるは。いづれの長者の傳へなる。からの日本の諺にもよめり。海原や。もしほの陰に友なふなまこは。海鼠とかゝれ。秋風の尾花がするゐに妻こふ鶉は。田鼠の化したる也。烏羽玉の闇き夜には。いかづちともなれり。象といへる獸すら。かつ恐懼ぬる。麝香鼠は筑紫に住なれて。こと國に行ず。かづき姿のわかやかなるは。嫁入の繪虛事にぞ。どこの乙子を七郎とは申す。新左衞門とつけるは。さかやきすりての後なるべし。大ねら小ねら。將廿日鼠と名のり。月々十二の子をうむ。誰が家にかとりつくし得む。もし白子出て。福の神にや愛せられむ。汝が隱里はいづくのほとりぞや。武藏野の鼠穴にや。出羽の境の鼠が關なるか。信濃の奧の鼠宿なるか。目出度身をもて。かり初の世をむさぶる。などか歸らん事をおもはざる。窮鼠かへりて猫を噛の志ありとも。三井の頼豪が。千疋のいきほひすら。本意を遂る事は。猶きこえざりけり。

旅ノ賦并引

許六

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見殘しは。皆誹諧の情なり。我翁。白川の田植歌を聞初。奧羽の間をめぐり。高館の夏草に。兵共が夢を驚かし。あつみ山の夕涼には。吹浦を詠め。佐渡に横たふ天の川に。初秋の袂をしほる。それより蛤の二見を渡りて。七百三十余程を吟ず。曾良が落髮の力量を感じて。一鉢の飯を分ケて。風流を盡さる。ひとひ芭蕉庵をたゝき。繪の雜談に及ぶ時。予に旅十躰の繪をかゝせて。讃じて何某が求めに應ず。其風雅にたより。俗語をあつめ。狂賦五段となす。あなかしこ奧の細道。草枕の類に

はあらず。

「旅店のさま。上段に書院床。銀菱のすかし。火のなき火燵にやぐらかけて。門口の入湯桶。かたぶけて居たり。庭に小砂のさはるは。夜べの残りもいぶかし。出女のたて縞は。春秋をしらず。根太板敷は落て。隅々まで畳とゞかず。天井板は。雨もりにきはづき。鉄行灯はくらく。紙はわらんべの心といふ事に燃たり。銭賃。草鞋賃にせがまれ。やう／＼に枕をかたぶけ。心よき寐入ばなは。馬さしの聲に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに。旅人も亭主もよく寐て。夜のあけてふためくつらもにくし。

〽大名の寐間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはゞ。結頭の胸づくしをとり。駕籠廻しをたゝき。馬さしとつかみ合。一僕の跡にさがるをねめまはし。鶏のなかぬに。つれの男を起し。挑灯とほして。夜道を行を手柄とし。入湯の一番に入たがるは何の為ぞや。つはの枯葉に雨のはら／＼といふ前に。

〽世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も。此情にかなへり。

「海道の賣物に。餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはねば。未来焔王の前にて。からきめを見るといへり。寒天にも冷素麺をすゝむるは。逢坂の茶屋。饅頭のほか／＼と見えたるは。見付の薬也。卵子の煮ぬきは。木曾の旅。はな紙は竹にはさみ。錢の看板は筒をかけたり。昆蒻の田楽は。何ものゝ喰けるぞ。

〽乗かけに春の蜜柑や宇津の山

「舟川の上。馬駕籠の情。しば／＼かぞへがたし。五月の大水も。かり借の手形に書入。おのが草の戸は流るれど。首だけの借銭を納して。しばらく息をつぐものは。島田金谷の賊なり。水の淺深を何文川とこたえたるは。大きなる洒落也。天龍の中の瀬は。馬人足を空にまどふ。乗人は股だけ入て。荷を肩にかけて待。あがるものは。負れ支度して舟端に立ッ。旦那が鑓をかたねたるは。渡し場の情也。馬士駕籠舁は。輕重に日月を送り。一盃の酒に。浩然の氣をやしなふ。一生を漂々飄々とすまして。雲介の號を蒙り。炎暑の日も。玄冬のあしたも。榎の木の下に眠ッて。蟻の都に到る。終に飲喰を座敷につかず。汁かけて出す馬士の食と作られ。小便ははしりながら。咳がらは手の裏にはたき。銭は耳の穴に納め。金は犢鼻褌に結ぶ。一とせの名残も暮て。世にある人ゝのとぶく月日を。出替の季と定めけるは。世をやすうをくる人にも似たり。

〽出女も出かはり顔や年の暮

「流浪漂泊の上にこそ。あはれなるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし兼。同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝。霙の夕暮に。情ふかきあるじは。長持くさき布子かして。ぬれたる物を燒火にあぶる。あるは三寶荒神といふ物にしがみ付て。しばらく足を休れど。極めの札場より追おろされて。却てのらぬ前より股をすくめ。兩方の手に杖を携て。あゆむべしとも見えず。人間病死の到來は。時も所もまたず。醫療のたすけうとく。懐中のふり薬は。やう／＼急病を防ぐ。巡禮飛脚の族は。路頭に倒れ臥。片目なる肝煎に追たてられ。老僧の愍みにて門下に入。おとろへかさなり。終に黄泉の下に赴く。かねて何國の土とならん。終をしらず。犬走の土中にこめて。年の齢。衣類の摸様を小札にしろされて。何國のいかなる人と。いふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に。經文をよみて。同行の別を惜み。隅田川の念佛を尋て。我子の古墳にのほる。今來古往の人。旅懐の情を盡して。風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて。二たびみちのくにおもむき。不二都鳥の二句を求めて。すみやかに故鄕に歸る者は。貞室老人なり。東海道の一すじもしらぬ人の。風雅におぼつかなしといはれし。翁の聲耳の底にとゞまる。

揚揮豆ノ賦

毛紈

○赤小豆殿の能には。一に俵に納り。二ににつとあかふて。是よりあかの仇名を取。初春の粥には疫をのぞき。卯月の空の牡丹餅。うるはしき名目を略して。今様のいき過は。ほた／＼とのみいひならはし。歌よむ人は。秋の夕のあはれなる名を好みて。萩の花とめされてより。誹諧の人は。隣しらずともよむなり。饅頭の唐韻めく時は。アンとよばれ。學のつよき物識のこびる時は。赤飯ともいふ也。深更とは。理屈人の名づけたる名にして。あかつきと解謎なるべし。蕉蘆亭に君臣の義を盡し。七歩の詩は兄弟の情を述。從兄弟煮。不死汁の名は。いづれの御時にはじまりたる由緒をしらず。又あや折の付にからめき。張皷の糸につながるゝも。かれが中の一つの遊なり。嫌となれば大きに嫌ひ、好に逢ぬればおほきにすく。かゝる堪能を持ながら。頓の料理に煮かぬるは。いかなる小豆殿の御分別かおはしけむ。

四梅廬ノ賦

僧李由

○恙を怖れたる時は。窩に住居し。氷の

雨の用心とて。岩窟の所々に残りたる世もあるに。廂に揉鹿をおろし。下側にしころをつけて。民の竈の賑ひける祉めでたけれ。堅田の蜑の舟に年を重ね。乞食は橋の下に子を産たぐひ。鶯の巣のやさしく。鳥の巣のふつゝかなる。皆おのれ〳〵が生得なり。ことしの秋。予ひとつの巣を営む。燕の土をはこび。蟻の塔をくみて。四根の梅をたより。頰白の家をかゆるたぐひにはあらで。病鶏が塒に憑む。鳳凰の威をふるはむよりは。凡鳥の嘲りなからん事をよろこぶ。山鳩が逸物の鷹と吹たらるゝも心ぐるしく。たゞ一日の閑鷗とおぼえて眠る。蝸牛の釜打破らむとせがまれては。又出て蚰蜒の部とのらめく。蚫の貝の牛造作。榮螺の蓋の戸もつらぬ住るながら風雅の友の入乱れ。賓主寄居虫の家をわすれて。例の夜鷹の寄合よと。はやされてたのしむのみ。

閑居賦

汶村

○廬山の雨の夜に月をしたひ。たれこめて。春の行衛しらぬ住るもあるに。よしや吉野ゝ奥は住うくとも。うき世の嵯峨のさがなきよりは。中〳〵すみまさりけめ。栗栖野のおくの。菊紅葉の閼伽棚も。柑子の垣に見おとされ。宇治山の隠レ家には。梅柳の風流を爲れど人喰犬にさめたり。花は一もとのさびしきをうらやみ。水はとく〳〵の雫をしたふ。秋は東籬の下をめぐつて。脊の底をきらし。冬は西嶺のさむきを望て。笠の重さをわする。茶粥糂粏の輕みに。五臓を沙羅し。紙子背身のさびしき音に。千石をかへたり。詩は三籟の蓋をさとり。歌は山家の風を好む。手桶一ッ。鍋二ッ。疊三疊米四五升。手鼻の拍子をおぼえて。紙のたくはへを忘れ。自觀の自由を得て。耳の危きをのがる。壁一重に市聲の喧しきを隔て。簾一枚に車馬の埃を避たり。世を捨。世に捨らるゝ類。まつ事もなくて明しくらす祉。まとの閑居とはいふべけれ。今の閑居めくものを見るに。食には八珍を盡し。酒には五味をたしむ。摺板の障子には。四季の花鳥を彩り。皮付の柱には。樟ふくらの名木を求む。額には花紺青の文字を彫め。軸にはきれ人形の箔を光らす。窪き所には水を湛へ。高き所に亭を築く。琴三味線の夕。小歌浄瑠璃の曉。隣家の眠を覺し。行人の足をとゞむ。粉白く黛黒なるもの屋をつらね。帶廣く袖長きたぐひ廊をめぐる。牡丹芍藥に數金を盡し。蘇鉄海石に財をついやす。伽羅は交趾をくべて蚊ふすとし。燭は會津をたてゝ。月の光を奪ふ。或は地黄

拘杞子を植て。地子をつぐのひ又は瓜茄子を作りて。八百の店に出す。夕顔の借屋に。隣の生業を語らせ。柑類の葉摘には。錢の算用を聞。これらの閑居も。彼清貧の閑居と名を同じうせむや。聖人いへる事あり。小人閑居して不善をなすとは。此閑居の見通しなるべし。

招魂賦

文考

〇西方の吾翁の魂あり。行ていづこにか歸ざらむ。たましゐ速に歸來れ。ことし神無月十日あまり。湖南の舊草に。門人あそむでたましゐをまつ。またばなどか歸り來ざらむ。たましゐそれかへり來れ。柴門に春の花ちれば。鳥驚きて別をうらむ。蓬窓に秋の月落れば。人無て住ずなりぬ。さればすみれ草の住よき世中に。何に卯の花の垣ねとはよみけむ。時鳥の行衛なからむにも。春の鴈の終にかへらずやあらむ。しからばたましゐいづこに行としてか。還るに道なからむ。還來れ〳〵。王孫むかしは草とおひぬ。蘼蕪の香いまや衣にみつらむ。まして花薄の穗に出てよ。まねかばなどかへらざらむ。魂すみやかに還來れ。東花坊は。此日のあるじまうけせむに。かの蕎麥切は。宇津の山道の細き手際にはあらねど。むかしの心わすれざればなり。豆腐は夜寒の都ぢかく。蒟蒻は黑津の里の名にしあへり。いかで世の人の風味にあまからんや。琥珀の霜をふるは。菓やゝかうばしく。瑪瑙の氷をふくめるは。酒更にみどり也。香花なをさばかりならむや。魂まづ歸り來れ。たましゐ何にかあかざらむ。さゞ波や。打出の濱のむかしおほゆらむ。水渺〻とながれて。山更に長し。長等の山の山櫻も。たゞ春のあだなる物にさきちりて。志賀の古びぞ年〳〵なりける。かの辛崎の松の孤のみ。花の朧のちぎりやはわすれむ。殊にあはれむべき比良の高根は。入江の駒とむべき人こそなけれ。むかし堅田の。秋の夜寒に落ては。病鴈の旅ねに。其身を佗しか。其後のたよりはきかずなりぬ。さるは水ぐきの岡の。名のみとむらん。鏡山の面かげも。今宵は待人あるにぞありける。松風の音羽山とかや。こなたの岡はまそばの花も咲たり。世に逢坂の關はあれど。粟津の原のあはでや歸らん。魂こゝに歸り來れ。世にいふ天堂は。人の心あまし。さるは風月の情過たらん。地獄はたゞおろそかに。まして風雅のいとまもなからむ。されば彌陀ほとけのねぶりて。いとたふとげにおはせど。左右の御手の置處なからむに。地藏ほさつは色のみ白うして。梅

の花の寒き所こそおはせね。焔王宮の人ゝも。たゞ世の人の是非のみ見むとすらむ。そも打とけたる心もあるまじ。しかるに杜國嵐蘭がともがら。圖司何がし。岐山の落梧までに。明幕の心隔つまじけれど。十とせあまりの。風雅の變におくれたれば。それも心ゆかぬ所ありて。相手にはいととほしからむよ。然らばたましゐ誰にかよらむ。歸りて是を見ざらむや。たましゐとく歸りきたれ。むかし俳諧に。詩歌の信ありといはれて。鶯の花に鳴。蛙の水にすめるたぐひ。いづれか信なからんと。俗は是をもて世をいとなみ。俗は是をもて後世をたのまむとせしに。中頃はいかいは信あらずとふみやぶられて。信ある人は。このまゝとなしと誹り。僞ある人は。このいつはりなしとよろこぶ。そも又炭俵。後猿蓑の變なるべし。今や俳諧は。信あらざるにもあらずといはむに。世に指をたふすもの。終にいくばくもあらず。共あらずといふもの。こゝにあらざらんや。此日の魂すみやかに歸り來れ。かへらば吾ヵ翁にせむ。魂誠にかへり來れ。魂誠に歸り來れ。

○諧類

百鳥譜

支考

○鶴は仙家のもの也。是がみさほは人にちかゝらず。むかし陶淵明に。達磨の風骨ありといへるものは。鶴に淵明が風流ある事をしらず。されば野草の花の。あきらかにひらきぬる時。柴門の月のあらたにすめる夜ならむ。此ものひとりは見まくおもふ也。しかるを鳶の無能にして。衣裳もおろそかに侍るは。まして風雨にもいとはじとならん。かの

非周が夢に。胡蝶とあそべる。是もむつかしとやはおもふ。

「雉子の啼聲はいとかしこきに。百矢の數をのがれずやあらんといはれて。一朝にたまの命を落しぬるは。是も韓信が輩の。文武をつくさゞるものなるべし。

「蒼鷹の人を見こなして。眼の内に。あらゝかなる才智をそなへたる。いとにくし。されど一藝に名あるものは。世の人それをゆるしもしつべし。

「かの斥鷃が蓬生の宿は。膝をいるゝに過ねば。大鵬の雲の万里をうらやまず。さらばをのれをたのしむのみにして。かならずうらやむ方にもあらず。彼鳳凰といふ鳥は。いかなる鳥にかあらむ。

「稲負鳥呼子鳥とかや。はこ鳥は春に住なるよし。なかぬ物にやしらず。椋と樫との二鳥は。其實をはめる時の名な

るべし。しかるを鶫といふ鳥の。花におきふしたらむ。いと心得ね。木〻の花の咲こぼれて。明ぼの丶雪にもまがへる時は。駒鳥の聲のみ。ひや丶かにしていとよし。されば此鳥の名は。聲のたぐひをいへるならん。そのれがかたちを。名になせるものは。月白頬白のたぐひなるに。鶎は殊におかし。年〳〵菊をいたゞきける。自然の理はあやまたねど。ことしは珍しう。梅花をもかざせよかし。

「雲雀は終日に啼暮して。はては雲にもふすにかあらむ。此ものは小春の空をよくおぼへて。鳥羽の田づらなどに。ふと啼出たるに。かゐつけて囀る鳥もなければ。あはれさびしきものかなと。おもふ時もある也。

「三光は。啼時に月日星といふなるよし。むつかしとも思はめや。佛法僧と啼鳥ありて。高野の山にのみ住なる。是をも三寶とこそいはめ。しかるに鶯の。法花經と唱ふる。さるは世さらに老めきたるわざ也。提壺の美酒をかひ。布穀の袴をぬけよといふは。皆をのれがゆへならねど。世の人のしからしむるものなるか。蜀魄の不如歸と啼は。きはめて托物の聲ならくのみ。

「秋の鴈の江天におくれ。時鳥の曉の雲にさけぶ。いづれにかさだめ侍らん。鴈はあはれに。ほとゝぎすは悲し。

「鸚鵡は恩をわすれぬよし。此國にはまれ〳〵なれば。よくもしらず。むかし蔡君が鸚鵡は。琵琶が身まかりし。跡の名を呼つたへしに。心をいたましむ瘴江のほとり。おなじくあそべどもおなじくかへらずといへる。配所の詩ならばさもあるべし。我國の鳥も。物はえいはねして。万里の別をしたひ行けるとかや。

朱子桑十寓志八ニ有下偶鳥後テ言、道ニ君之故事上

是さへおもひかけぬ事なるべし。

「燕もゆかりはわすれぬ鳥也。終日にひるがへり。終日に囀りて餌にはかならず身をつくさずや。いはゞ江湖の僧の。一夜二夜にちぎり捨て。身を雲水にまかせたるが。年を經て後は。見しらぬ人もおほかる。されば行脚の身の。人にもおくられ。をのれもおくりたらんに。涙のこぼるゝは。いかなる時にかあらん。かの法師の。宿かし鳥とよみつゞけぬるより。孤村に出て夕陽を啼盡せば。誰が家にか今宵もおくらんと。あぢきなき事もおもはるゝなり。

「鷓鴣とは名のかしこきもの也。青草の暮の雨には。遊子の魂をおどろかし。黄陵の曉の雲には。旅人の涙を催す。すべて夜啼ものはかなしきに。水鷄は隠逸の風情を得たり。

「星月夜のおぼつかなき頃は。礒のち

どりのおほくあつまりゐて啼は。心もきゆべくてかなし。たゞ人の別-墅なる所に。水の濱もいと淺くて。常は來-馴にあそぶらん。戸などかゐやりたる音に驚て。忽ニ一-葉のすみ行は。其あとも遥に見-遣られて。河-風寒しと思ひ出たるは。またゐゝ人もなくて。何にかはせむ。

「鷗はましてたつ時のあはれなるに。馬蛩といふ鷹の。風にひるがへりたる。なまうかひにていとにくし。彼澤の夕暮は。江-山の風-情をそなへたれば。もろこしの雲-夢ときこえし澤は。いかなる澤にかあらむ。

「白-鷗は人をさけて。をのれ靜なるものなり。しかるを諫-鼓-鳥の。をのれ啼て。人をさびしがらせむとす。なべて卯の花の垣は。いとねぶげなるに。夕日の影も木の間にちり殘りて。山にはおもひかけぬ鳩も啼也。啼-鹿のさだかにしれねば。是もいとさびし。此ものはひとへに雨の日をかなしめるとかや。百-花の深き所ならば。終-日ゐるともいとにぎらまし。

「梟の貌出て。まよひありきぬるいとおかし。かならず笑はれじと。はたらきたる顏にもあらず。さるたぐひの老-僧にや。むかしも市-中にあそびゐける也。

「深-草に住なる鶉は。其聲すみやかにして。世をはゞからず。山にもちかく。水にも遠からず。粟の穗の靜なる時は。ここにも出てあそぶなるべし。

「啄木鳥の飢をしのびかねて。木にそひ。梢をたゝきあるきて。終-日しづかならぬこそ。はかなきわざなれ。かぎりなき生-涯の。いとなみとならば。誰も〱あさましき事おほかるべし。されば空-山の日-影に。巷たはしりて。梢の柏もちり〱に吹れ行頃は。此鳥の聲の更に幽にして。いざや。張-道士が家を。とぶらふ人にも似たれ。

「木がらしの夜一-夜吹あかして。しのゝめには吹ずなりぬるを。さし出る朝-日の。殊に珍しう。さし籠たる障子のかぎりは。もゆるばかり長閑なるに。物の影のさと過て。またゝきもあへぬは。いかなる鳥にか侍らんと。いつも〱おもはるゝ也。鷦鷯などの。ゆるやかに舞ありくも。隙を過るほどなれば。あはたゞしきか。

「軒の雀の晴をよろこびて。何やら殊の外に囀る。是は市-人にもたとへ侍らん。鷄は碁-僧の風-情にして。人の隙を窺ひありくものなり。家鴨もおなじ家にはありて。をのれが身をおしともおもはずや。たゞに淤-泥のけがれをもいとはずして。是を世の外に出て。物にもかゝはらぬとおもふは。さばかり悟たがへたる事は。世の人の上にもあるかし。そなへをきた

る翅も。いつかは青-雲の心ざしにあへらむ。誠にあはれむべし。

「世に人を葬る者ありて。常は顔など見合すべきにもあらねど。なすべきわざあれば。呼て酒のませ。價をもやりつ。しかるに鵜といふものは。證なき鳥なるべし。早-川に魚などかづきあげたる。をのれならずとも。網しても得つべし。さるものならば。わきまへぬ事もあるべきに。人の手にかはれて。追はみたる魚をも。白地に吐せて。それをめでたしとささめかし。笹の葉打きせて。おくりもおくられもする人は。鳥よりは一しほもおとり侍らんか。鷹は羽の下に鳥をくみ敷て。暴れを人にも見られむと思ふは。せめて名の爲にもなさばなりぬべし。さらば此ふたつのものを。我-友となさば。打をきたる心のいとまもなからん。

「鵙はたちゐにつれなくて。へつらはぬものなり。子など持たらばいかにかあらん。

「鷺の風情はいとなまめかし。何がしの中-將が。はつかに人を思ひそめて。雨にもそほち。露にもしほたれて。常の心もさだかならねど。色には出じ。〳〵とこそしのぶなりけれ。されど田-面にうかれ出て。田-螺ふみまよふ頃は。まさしくさるものゝ。たとへともおぼへずなり。

「楚-臺の夢は。一-夜の枕に驚き。驪-山の契は。万-里の雲を隔つ。朝の嵐に。錦-帳を動せば。李-夫-人が影も。ふたゝびはかほる事なし。しからば翡-翠といふ鳥は。いかなる美-人の魂にかあらむ。杜子美が衣-桁に啼といへるも。此鳥ならで外はあらじ。名にめでゝ是を我-友となさば。はしなき人にやおやしまれむ。名を聞より。其-姿のおもはるゝ。鴛-鴦の中は更也琉璃といふ名は。世の人のきゝをもかざれるかな。

「鶯の聲は。滑にして。殊に住-所もいやしからねば。是も美-少-年のたぐひにはあらめど。風-情やゝおだやかならず。まして夜なかぬは。いぎたなしともいへりけり。

「鳶烏の世をさみたる中にも。烏ばかり觜のいやしきものはあらじ。夕べには寐まどひ。朝にははやく起て。前-栽の木の實などにつきては。えおもひ捨ずや。いかなる時にか。息などもつまるやうに啼て。いとゞにくさげには侍るなり。それをも神のつかひのみならば。かゝる事いひもせまじ。

「およそ鳥の。觜のたいらぎたるものは。死-水のおかを噪り。とがつて長きものは。魚を探り侍る。五-穀をはめる鳥の。まどかにしてほそやかならぬは。誠に備

たる事なるべし。猶のさきのかゐまがりたるは。をのれが友をやぶるべきたくみにや。いとおそろし。

「鳥にして鳥の名にあらざるものは。鷓鴣の一名を泥滑々といひ。倭國にも。行々子といふ鳥ありて。聲は少にごりたるやうに侍れど。啼時はやゝ涼し。かの明々といふ鳥は。かしらふたつにてはめるよし。むかへて我友となさば。米櫃の底をやはらはれむかし。

「世を便々といふ鳥ありて。春秋のさかゐをしらず。遊ぶ所又常なし。しかれども。巣つくらふ鳥の。明てはわすれ。暮てはかなしめる類にもあらず。たま〳〵啼聲はありながら。公冶長が輩ならねば。しるものなし。（一說ニ夜鳴テ明ヲ好鳥也。其聲ハ。幾度白）（米ノ類。鷦鷯ハ雀ナリ。）誠にしるものなからましかば。世にありて是も又詮なし。其形にたぐへたる隆鼻鳥は。常に人の悪をたゞし。（愛宕西塔ノ山ニ在テ。杉ノ木ニ栖ル鳥ナリ。）迦陵頻は。聲の美におほれたれば。我はしらず。かの蝙蝠といふものにしたがはむか。

百花ノ譜

許六

○當世の人の花過。古人の質すぎたる。いづれの時か。花實兼備の世あらむ。

「梅の風骨たる事。水陸草木の中に。似たる物はあらじ。十月一陽の氣に。燦々たる江南の玉妃。まづえめるより。生涯を物ずきにくるしみ。風流のほそみに終る。是を色にたとへていはゞ。吉野高尾などいふべき遊君の。心おとなしく。名を耻。いき過たる心より。桐火の高ぶり。かたち痩ぎすに。涙もろく。きのふの我に飽ける心より。一たび着たる衣類調度など。ふたゝび目にもかけず。人に打くれ。金くれる男なれども。愚癡なるにはすりぬけ。請出さるゝ場所をはづして。はづむだる男の一言に。百年の富貴をかへたり。借錢の利に利をかさね。やう〳〵盛も過たる頃。生前の本望を遂て。幽なる住居に。朝夕の烟をたてゝも。猶物ずき風流の細みに富めり。子さへなくて。夏冬の寐覚もやすし。待事もなくて。世を靜にいとなみ。同穴のかたらひを。なせる人には似たり。

「紅梅といふ花は。一度彼岸参の心を動かし。未開紅の光をはなちぬれども。やがて蒼くだけ。花ひらけてより。日〳〵におとろへ。雨風を帶。夕日にしらけて。つぼめる色を失ふ。たとへば三十過たる野郎の。大躍につらなり。心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

「櫻は全盛の傾城なり。天晴當風に打こみたる風俗。行末明日のたくはえ

の。一點もなき花なり。

海棠は。同じく時を得たる野郎の。大夫と仰がれ。勢ひもさかむに。世ノ中猛との〻しれども。質素にしてうるほひ少し。誠に香のなき一色の。欠たる心地こそ本意なけれ。

梨花は。本妻の傍に侍る。妾のごし。よろづ物おもひにうちしづみ。常に人の下にたてるがごし。

椿は。たゞありの人の。本妻とむかへたるが。端手なる風俗をも似せず。ありが〻りに家を治め。身を脩めるをもとし侍れども。さすが女色なれば。うす化粧に紅粉をたえさぬ。身持のよき花なり。

桃は。元來いやしき木ぶりにて。梅櫻の物好。風流なる氣色も見えず。たとへば下司の子の。俄に化粧し。一歳を着飾て出たるがごし。爛漫と咲みだれたる中にも。首筋小耳のあたりに。産毛のふかき所ありていやし。

藤は。執心のふかき花なり。いかなるうらみをか下に持けむ。いとおぼつかなし。

山吹のきよげなる。眉目容すぐれ。鼻筋おしとをり。襟廻り奇麗に生れつきたゞ透融なンどいへるばかりにて。さして命をかけてとおもはざるたぐひこそ。女の本意といふまじけれ。

長春。薔薇のたぐひは。紅白うつくしく。粧ひたるには似たれど。元來いやしき花の。殊にさかり久しきこそうたてけれ。たとへば惣嫁といへる辻君の。日のくる〻を待兼。世上に徘徊し。物ご〻ろおぼへてより。共ながれをたてて。五十にちかき比まで振袖を着し。始もなく。終もなきこそうるさけれ。

牡丹は。寵愛時を得たる妾の。天下にはゞかれる。心なげに打ほこり。常は嫉妬我執のいかりふかくして。青天にむかつて。吐息をつきたる風情に似たり。

芍薬といふ花は。いまだ嫁せざる娘のよはひも二八にあまりたるが。ねよげに見ゆる心地ぞする。

罌粟は。眉目容すぐれ。髪ながく。常は西施が鏡を愛して。粧臺に眠り。後世なンどの事は。露ばかり心にかけぬ身の。一念のうらみによりてごそと剃こぼして。尼になりたるこそ。肝つぶる〻わざなれ。

杜若は。のぶとき花也。うつくしき女の盗して。耻をしらぬに似たり。

あやめは。小づくりなる女の。目を病る心地ぞする。

百合花は數品おほし。笹ゆり。博多ゆり。鬼百合。色は異なれども。元來一種にして。生得いやしき花なり。たと

へば輿車にのれる位なければ。かゝえ帶つよくからげあげ。上づりに腰たかく。あゆみ出たる女に似たり。

「姫百合は。十二三ばかりなる娘の。後に帶うつくしく結びたるがごとし。

「合歡の花のねぶ氣なるは。深閨の中に遠物をかゝえ。晝眠る女に似たり。過にし夜半の。いかなる事かありて。かくはねぶりけむ。いとおほつかなし。

「其下に晝顔の目を覺したるは。廿にちかき頃まで。男心をしらぬ女の。はじめて宮づかへに出たる頃の。よろづつきなきありさまならんか。

「紫陽花の花は。色白に肥ふとりたるが。ちかくよりてみれば。白病瘡のあとのすき間もなくて。興さめてやみぬ。

「蓮はうつくしき所すくなし。たとへば上手の繪にかける。天人の顔にひとし。どこやら佛めきて。心こそおかるれ。

「卯の花は。第一名目よし。時鳥の來べき頃は。かならず咲とおぼえたるこそをかしけれ。うつ木の花といふ人は。無下の事なり。卯の花月夜の夕すゞみこ。しろめなる衣裝に。黑き帶仕なしたる女の。ふと打つれたるが。行違ふ程もなく立わかれて。顔のほどもおほつかなく見かへせば。はや尻影ばかりを。見送りたる心地ぞする。何方へかかよふらんといとなつかし。

「朝顔の盛すくなきは。よき女の常は病がちに打なやみ。土用八專のかはるがはる。隙なきに打ふし。一月の日數も。廿日はかしらからげ。引込たるが。たまく空晴きり。朝日さし出たるに。心地よげに打粧ひ。衣裝などあらためて。ほのめき出たるには似たり。

「鷄頭は。和のなき花なり。よからぬ女の。一筋に貞女をたてるがごとし。

「らにの花は。蝶の羽に薫物すと。先師の腸より捜出し侍るこそ。其佳人の面影もなつかしければ。これに先をこされて。口を閉ていはず。

「鳳仙花といふ花は。是もけばけばしく。紅粉鉄醤を粧ひ。人の眼を驚かすやうなれども。手に携えて見るべきものにもあらず。木ぶり葉つきのいやしき事は。彼出女の李喰口もとには似たり。

「女郎花は。いにしへより女にたとへ。我落にきと。法師の破戒によめるは。女郎の二字になづめるならんか。初秋の風によろめきたてるも。菊にさきをかけられたらむは。手柄やすくなからんと。おもへる物ずきこそやさしけれ。此女郎花といへる物。花にしてはちと請取がたし。たとへば聲のうつくしきを撰みて。小歌を習はせ。髮をおろして是を比丘尼とはいふ也。大率は女色にし

て。かざりなければ。大象をつなぐべき。執心のきづなもなし。されぱとて。男色のかたづまりたる類にもあらで。男女の中にたてる風俗也。此花百花に類する姿なし。古人蒸栗のごとしといへるは。草實のたぐひに比すべきか。莖も花も等しく黄にして下葉すくなによろめきたるは。彼比丘尼のたぐひとや見む。

「桔梗は。其色に目をとられり。野草の中に。おもひかけず咲出たるは。田家の草の戸に。よき娘見たる心地ぞする。

「萩はやさしき花也。さして手にとりて愛すべき姿は。すくなけれど。萩といへる名目にて。人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の。よく歌よむときゝつたへたる。なつかしさには似たり。

「菊の隠逸なるは。和漢ともに名にたちたる花なれば。あらためてはいひがたし。風流物好。目だちたる事を嫌へるは。よき女のおつとなどにおくれて。閑なる片はづれに立しのび。よはひもいまだ三十に。なるやならずの盛なれば。さすがに髪などおろすべくもあらず。たゞ一人あるおさなきものにひかれて。心ならず世中に住侘たるを。はづかしとおもへる人には似たり。

「寒菊の霜をいたゞき。雪をかづける中に。忽然と精骨を露したるは。天地造化の行はれざる所はなしと感ぜり。たとへば越路の果のはてにも。三國。金澤。富山。高岡などいへる所〳〵に。おもひかけず風流のある心地ぞする。

「冬牡丹のしやれ過たる。たとへば大津伏見など。分内狭き所の遊女町。工商の家ゐ軒をならべ。打交りたれば。白地のむすめども。傾國の風俗を見習ひ。養父入。生身玉の里がへりに。しやれを盡し。一向遊女の立振舞に似たれば。兩親いかばかり悲しと制しつらむ。時と所をしらざるは。大きなるいき過ならむ。

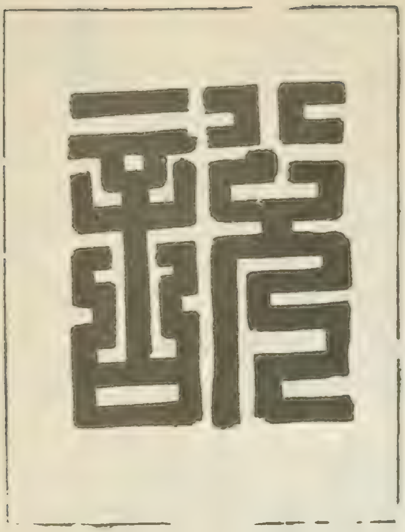
「當世の人の花過。古人の實過たる。嗚呼いづれの時か。花實兼備の世あらむ。或問云。當時人情の花にうつり。鳥に心を驚かしやすきは。こと〴〵く此文章に盡て。はじめて人の耳目を動し侍る。今先生が歎く所の俳諧の實は。いかなるをいふにかあらん。おぼつかなし。はやくこれを明し。はいかい大道に悟入させよ。答云。夫實のかたちをいはむ。茘子の顔のぶつ〳〵としたる。實性の人の髭尤よりくるしく。若暑き題の歌よまむとおもはゞ。はやく此もとに立よるべし。姫瓜の丸顔は。さんちや風の俤あり。瓢の青ざめたる。熟柿のあから顔。下戸上戸はふるくして。今様は是をとらず。日やけの梨のじや

ぐれたる。座頭（頭カ）のあたまこそ。俳諧の實には究り侍る。

山水ノ譜

許六

○凡山水をゑがくに法あり。一丈の山には一尺の樹。一寸の馬には豆ほどの人なるべし。遠人には目鼻を書ず。遠樹には枝なし。遠水波なくして雲とひとしかるべし。岩に三面を見せて。道には二の岐あるべし。すべて畫は遠近を知を第一とす。遠山ちかき山とつらならず。遠水ちかき水とまじはらず。林木遠きものは疎平にして。近きは高密なるべし。葉あるものは枝やはらかに。葉なきものは硬。土に生ずる時はなかく。石に生ずるものは曲れり。古木は節多して。半は死を書べし。四時の變化を察し、山の淺深をしるべし。山谷樹深き所には。寺觀樓閣の屋ねを重ね。水郷山店の間には。酒旗の青白を翩すべし。これ王摩詰が。山水の賦の法式なるべし。やまと山水とてかはりあらず。されど城ある所には。天守を聳かし。神社ある地には。鳥居を書べし。山石水木ともにやはらかに。櫻は白妙に。和松は緑にして。これ其和漢各別の沙汰なるべし。冨士は下野長く。景大やうに書べし。松嶋はあやしくたえに。景冷じからべし。象潟は景を殘してあはれに。九世戸は景等分にして麗しかるべし。須磨明石はあはれにさびしく。吉野龍田は花やかにさびし。住吉は神久て面白く。泊瀬はむかしなつかしかるべし。六玉川。近江八景。風雅の上をもて知べし。唐の僧。和の江湖を見ていへる事あり。これ唐の西湖に十倍せりと。和書西湖を寫して。帆ある舟をはしらす。唐の西湖は水淺くして。人の溺る〻湖にあらず。たゞ遊人の舟のみといへり。世上に洛中洛外の繪とて。切箔惣金をきちらし。丹青鮮かに彩り。黄白細微に文をなす。奴の頬髭に墨を點じ。傾城の唇に丹を含む。これ其遠近をしらざるもの也。假令丹青は塗とも。洛中城外の景色は。まつたく山水の部にして。遠人の格式なるべし。すべて畫圖をよくせむものは。先風雅をしるべし。古人畫中ノ詩。詩中の畫といふは。此所なるをや。世に料理する者。魚鳥を切事を知て。喰事をしらず。畫工はゑがく事を知て。面白事をしらず。されば面白事しらずして。面白事を書ざるは。何のおもしろき事あらんや。





風俗文選
三

風俗文選巻之四　五老井　許六選

○説類

蓑虫説　素堂

○みのむし〳〵。聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよ〳〵となくは。孝に専なるものか。いかに傳へて鬼の子なるらん。清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも。瞽叟を父として舜あり。汝はむしの舜ならんか。

「みの虫〳〵。聲のおぼつかなくて。かつ無能なるをあはれぶ。松虫は聲の美なるが爲に。籠中に花野をなき。桑子は絲を吐により。からうじて賤の手に死す。

「みのむし〳〵。無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく。蜂は蜜をいとなむにより。往來おだやかならず。誰が爲にこれをあまくするや。

「みのむし〳〵。かたちの少なるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば。其身をうるほし。一葉を得れば。これがすみかとなれり。龍蛇のいきほひあるも。おほくは人の爲に身をそこなふ。しかじ汝がすこしきなるには。

「蓑虫〳〵。漁父が一糸をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわすれず。風波にたへず。幾度かこれをときて。酒にあてむとする。太公すら文王を釣の誘あり。子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。

「みのむし〳〵。玉虫ゆへに袖ぬらしけむ。田蓑の嶋の名にかくれずや。いけるもの誰か此まどひなからん。鳥は見て高くあがり。魚は見て深く入。遍照が蓑をしぼりしも。ふるつまを猶わすれざる也。

「蓑虫〳〵。春は柳につきそめしより。櫻が塵にすがりて。定家の心を起し。秋は荻ふく風に音をそへて。寂蓮に感をすゝむ。木がらしの後は。空蟬に身をならふや。骸も躬も共にすつるや。

又以男文字述古風

蓑虫ゝゝ　落入牕中
一絲欲絶　寸心共空
似寄居狀　無蜘蛛工
白露甘口　青苔粧躬
從容侵雨　飄然乘風
栖鴉莫啄　家童禁叢
天許作隱　我憐稱翁
脱蓑衣去　誰識其終

柴賣説　凡兆

○柴賣の柴うる事。小野。細河。く

らま。高雄もあれ。矢背。小原は。花園梅が畑よりは先おかし。深山栞をのが宿に折くべてといへるは。すめるあたりの氣色ならん。かの秦の毛女が賢にも似ず。河陽の樵子が仁にもあらず。唯世渡りのよすがにして。女は都に出てこれを賣。夫は山に入てこれを樵る。頭は日に曬せども黒く。足は泥に染れども白し。さすがに建禮門院の女房。阿波の典侍の局などいふ人の名殘あるにや。あをきひとへは。色香の爲に衿をつくろひ。袺して二布をあらはし。白き手おほひ。しろきはゞき。白き帶はうすくたゝむでうしろにむすびさけ。幾男の心をか動す。春は躑躅山藤を戴き。茅花虎杖をたばね。行さき〴〵の山づとゝなしぬ。道のほど一里二里。とをくは三里にあまりて。肩かゆる業もなく。花の陰には睡をもかけず。漸々京の町にちかづきては。歸の事どもちぎりて。大路小路にわかる。或はおろして門をはき。あるひは出口の市に米をしろがへて。小袋の首をくゝる。月の夕はつれにおくれて。紅葉の雨を分行こそ。いつかは我屋にいたらめと。見るをだに物うきに。東の翁の笑ひて曰く。身のいやしきを思へば。官女もかたらひがたし。心の鈍を思へば。傾城もなをまじはりがたし。若妹背をなさむに。此をなごをなむといたはり給へり。左禮言ながら殊勝にぞ侍る。

閉關說　芭蕉翁

○色は君子のにくむ所にして。佛も五戒のはじめにをくといへども。さすがに捨がたき情のあやにくに。あはれなるかた〴〵もおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに。おもひの外の匂ひにしみて。忍ぶの岡の人めの關も。もる人なくばいかなるあやまちをか仕出てむ。あまの子の波の枕に袖しほれて。家をうり身をうしなふためしもおほかれど。老の身の行末をむさぶり。米錢の中に魂をくるしめて。物の情をわきまへざるには。遙にまして罪ゆるしぬべく。人生七十を稀なりとして。身の盛なる事は。わづかに二十余年也。はじめの老の來れる事。一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより。あさましうくづをれて。宵寐がちに朝起したる。ね覺の分別なに事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩惱增長して。一藝すぐるゝものは。是非の勝るもの也。是をもて世のいとなみにあてゝ。貪欲の魔界に心を怒し。溝洫におぼれて。生かす事あたはずと。南華老仙の唯利害を破却し。老若をわすれて。閑にならむこそ。老の樂とはいふべけれ。人來

れば無用の論あり。出ては他の家業をさまたぐるもうし。鑰（孫）敬が戸を閉て。杜五郎が門を鎖さむには。友なきを友とし。貧を富りとして。五十年の頭に失。自警し。みづから禁戒となす。

へ朝がほや昼は鎖おろす門の垣

師ノ説

許六

○いにしへ學ぶものは必師あり。師は道をつたへ。業を受。惑を解ものなりと。されどもろこしにも。此事久しくたえてつたはらず。まして吾朝には。むかしよりさる事をきかず。往昔神道のさかむなりし時は。唯一の師ありて道を教る事。退之がいひにかゝはらず。然るをいつの頃よりか。兩部といふ事はじまり。神道は日々にをとろへ。佛法は月々にさかむにして。和國の風俗はたえ果。やうやう家々に大黒どのをあがめ。初春をむかへては。え方棚にしめ引まはしたるこそ。はつかに和國の道の殘りたるしるしならめ。當世佛道の師たる人を見るに。大路に門をし披き。鐘鼓を打て貴賤をあつめ。利益を說て寶を諂かす。其弟子となる者を見るに。孤になりて家業にたよりなき人。あるは飛鳥川の淵瀬にかはりて。家を賣田をうり果ては。行所なき人。又はあほうの子共。片輪者の行末。父母の産つけたる黒髪。露ばかりもをしまず剃落し。素性法師がつぶりを撫ては。たらちめはかゝる涼しき事は。よもしらじなど輕みに落し。何某寺の新發意とはいふなりけり。これもいにしへの師道に相似たれど。世を渡る口すぎなれば。巫醫樂師。百工の師を求むるにかはらず。又は弓馬兵法の道。諸禮。鉄方。讀書。有職の師たる人の。油断せぬ顔つきこそをかしけれ。山伏の師を先達といひ。強力と名付。比丘尼の師たるものを。お寮といひて。其弟子を米かみとはいふなり。伊勢富士の神職の人を。御師といふはいかなるゆへかしらず。其道其業を教へて。仁にちかしとはいへど。二朱壹歩年の暮のあはれを感じては。無盡の企。表がへの割付の使を待かね。朝夕の摺鉢時を考へ。夜食の遲きなら茶を侘たり。さるは世の風俗にして。教ゆる人もぬからず。習ふ人も猶ぬかる事なし。こゝに俳諧の師たる事。貞徳老人よりおこりて。貞室は弟子となり。花の本をうけ繼。これを天下の宗匠とはいふならし。それより廚子小路に。點者の看板をかけて。あたらしき道を說て。宗匠めくものは。一座一興の宗匠にして。眞の花のもとゝはいはず。先師芭蕉翁。ひとり天下

に甲たり。世挙て道を受。まどひを解。これを天下の宗匠とはいふなり。今のはいかい人を見るに。一生師と頼む人も見えず。見取聞どりの人真似に。朝夕をあやまり。まどひより惑ひに分入事をしらず。人生れながらしるものなし。師にしたがひて惑を解。師説にうとき人は。自己の善悪を究る事をしらず。先師身まかりて。十とせ餘。二とせの春秋をへぬれど。師の餘光いまだ國中をかゞやかせり。其道を継十哲の門人。口をならべて。我こそ血脈道統なれと。手ほめの宗匠にかどはされ。眞の道統ある事をしらず。其人の俳諧をしらんとおもはば。先其所のはいかいを見るべし。眞の俳諧一人あれば。一郷すべて道に迷はず。これ言下に惑を解て。あらぬくまぐまをたどらぬ故なり。茲に弟子孟遠。余にしたがひて道を聞事久し。我官袴懸命につながれ。沈痾老衰の床になやみて。たすけとなる事稀也。今かれが爲に師ノ説作つて送る。かならず余が俳諧のたとき事を知て。余がはいかいのたふとき事に迷ふ事なかれ。若明眼有徳の師あらば。すみやかに乗かへて。行たき方へ行べし。

名阿段説

許六

○左右の下に物をつけて。文字の埒を明したるを社。李斯が手柄とはいふなれど。通字ありて己の己ともよむまじければ。なくても事は欠まじくや。名目のなき世ならば。一日もあるまじ。されば味噌桶に水風呂もせず。尿桶に飯をもらぬためしは。ありがたき名目にあらずや。さるを今の人。名は天地以前より。つけ置たるとおもへる。いとはかなし。けふ名をあらため。明日はや目のさけやう。鼻のかゝり。さも呼べき人とは見する。教識とは顕密の名。鐵巌とつめてはぬれば。禅師の號。大むね一派一流の名目あり。もろこしの人の名つく事。深き心なし。敵を殺して我子の名とし。白魚を得て其名を定む。わづか一両字の間に。ふかき心をふくめ。夕可木端の類も。漸きゝあき。一笑志計もあまりにつたなし。小坊主阿段よく茶をくむ。予が渇をとゞむ事。杜子が獠奴に等しければ。名づくる説つくつて。かれにとらする事かくのごとし。

出女ノ説

木導

○傾城傾國は。唐人のつけたる名にして。白拍子ながれの女は。我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまた。かぞふにいとまなからん。國〱の名目。當世の洒落。柄杓。干瓢。白人。巾

着のたぐひ。大むね一種より出て。位階の高下は金銀の相當なるべし。たつとからずして勅撰にゆるされ。貴人のかたはらに侍るゆへにや。少子細過て。おほくはふるみに落たり。爰に道人がゝりの遊君ありて。終に人の魂をとらかす意氣張も見えず。まして歌よむ程の戀にてもなし。たゞ物くひ。酒のみ。言語進退のやすき事は。かりに和光同塵の姿をあらはし。慈悲第一の出女とはいふなりけり。傾生涯のありさまを見るに。地をはしる旅客の勢をなぐさめ。女郎花のたぐひにもあらで。江湖行脚の獨坊主を落さむとす。あるは朝立の旅人を送り。打着姿をぬぎ捨ては。箒を飛し。蔀やり戸おしひらきてより。やがて衣引かづき。再寐の夢のさめ時は。腹の減期を相圖とおもへり。高足打の塗膳にすはりながら。通りの馬士に言葉をかはす。やう〳〵晝の日ざしはれやかにかゞやく頃。見世の正面に座をしめ。泊り作らんとて兩肌ぬぎの大けはひ。首筋のあたりより。燕の舞ありく景氣こそ。目さむる心地はせらるれ。關札の泊りをうけては。あたらしき竪縞に。京染の帶むすびさげて。鬢の雫のまだ露ながら。門の柱にうち添たるは。かれが一世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて。いかばかりの仕合すらんもしらずと。賴母しく見やられ侍る。あるはすさまじき蛇やつこになぶられ。弓同心の灸のふたつけかへ。座敷の手拍子に輕忽の聲を上て。返事をこたへ。油火かきたてる指は。をのがつぶりにぬぐふなるべし。青天に塗木履を引づり。急用には赤脚で飛。御油。岡崎の至盛もむかしになり果。班女照手がうけ出されたる取沙汰もなし。もろこしの楓橋にて。月落烏啼の吟も。此君にあはぬうらみをのべ。江口の泊に。宿かさぬ君もなくなりて。今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかぬがちにて。大津草津は少しうすかるべし。冬枯のまばらなる頃は。いつとなくよはり果て。鼻の下の煤氣も寒く。木綿所の小車の音も。さびしく暮て。水風呂の火影に足袋さすわざも侘し。片田舎は法度きびしく。表向は勤もせず。されどあはれなるかたには心ひかるゝならひ。夜更亭主しづまり。ぬけ道よりしのびやかに。書院床の小障子あけて。神の瑞籬もはゞかりなくて大股に打こへ。終に一夜の枕をならぶ。出替は年の暮を定め。給分の加增は赤前垂をこぎる。物皆終りあれば。古蓮も鳶にはなりけり。此ものゝ行衛何にかならん。昔は普賢ほさつにもなりける先例もあれど。今

はすこしの違ひありて。果は駕籠舁の妻にこもり。痩子あまた産捨。間鍋の間に餓て。生涯を終る。未来とても覚束なし。紺屋の地獄まではあれど。出女の地獄の沙汰はきかず。たゞ八万地獄の門〳〵にたゝむも。又あはれなるべし。

雑ノ説

不知作者

○人物禽獣は。其人物禽獣の粉骨なる所に倒れ。山川草木は。其山川草木のすぐれたる所にたふる。物皆をのがたのしみの纔なる所に。たふれ果るも哀なる事なるべし。瞿曇は無為に倒れ。仲尼は仁義にたふる。荘老は寓言にたふれ。神仙は霊異に倒る。伯夷叔齊は賢にたふれ。楠正成は忠に倒る。火はあつきにたふれ。水はひやゝかなるにたふる。砂糖はあまきにたふれ。野老はにがきにたふる。長はながきにたふれ。短はみぢかきに倒る。されば瘡を愁ふる人は。痒をかく所にたのしみ。貧をくるしむものは。盗賊の難なき事をたのしぶ。是皆和漢人情の趣く事は。さら〳〵かはる事あるべからず。昔より風雅に倒るゝ人おほき中に。西行は歌に倒れ。宗祇は連歌にたふる。先師はせを翁は。はいかいにたふれて。生涯を終る。其門葉あまたの中に。たふるゝ所同じからず。武の杉風は耳のとをきにたふれて。微細の論をきかざれば。二十余年半は流行し。半は流行せず。洛の去来は。風雅の正直にたふれて。春風桃李花の開くる日をしらず。其角は作にたふれ。支考は理にたふる。凉菟はふるみのしたるきに倒れ。露川は誹諧の数にたふる。史邦木導は風雅のつよみに倒れ。千那李由は。風月の情の過たるに倒る。嵐蘭は鎌倉の月にたふれ。丈艸は松本の閉関にたふる。杜国は横にたふれ。惟然は高みにたふる。尚白は忘梅の趣向に倒れ。許六は文章の文に倒る。されば芭蕉流に倒るゝものあれば。はせを流をたふす人もあるなり。鶯は時鳥に倒れ。櫻は紅葉にたふる。人は人にたふるゝもあれば。我は我に倒るものなり。（本書の初版本と推定せらるゝ『本朝文選』には杜国以下を「諷竹は大坂に倒れ、尚白は大津にたふさる。桃隣は松本の追善に倒れ、洒落は難波の病床にたふる。嵐雪は妻にたふれ、如行は友にたふる。正秀は金山に倒れ、乙州は兒にたふる。舍羅は道楽にたふれ、惟然は高みに倒る。我は口にたふるゝものなり」とす。）

愛梅ノ説

万子

全篇説レ梅而無ニ梅字一。終句以ニ一梅字一結レ之

○屈原楚辭にわすれ。菅家宰府に招く。西の對のおぼろ夜に。我身ひとつをかこち。孤山のたそがれに。疎影横斜をうつす。山路の朝日のどやかにさし出たる。折かけ垣の匂ひ殊に春めき。谷の扉うらゝかに打霞み。竹の嵐枯葉がちなるに。初音ほころび。十月江南の天氣。醉客馬にねて。酒家の村を出。師走の冬籠たる。越路の雪の中に。朝數寄の袂に匂ひをとゞむ。遍照が折箸。皇居の額。數珠。十露盤の粒。香木。染屋の汁。これ皆かれが。風姿風情のわづかの端なるべし。彼說にいへるは。牡丹は花の富貴なる物なり。菊は花の隱逸なる物なりと。是そのかたちにより。其愛する人によれり。蓮は花の君子なる物なりと。是は其理屈によれり。我は其理屈をとらず。梅は花の風雅を好むもの也。我は其風雅を好むものを愛する物なり。

艸字藤ノ說　程已

五老井四絶之一也

○草臥て宿かる藤は大和路や。實となつては。誹諧のかたちにあらはれ。手折て塗笠にかざゝば。大津繪の風流なるべし。高松に倚托して。佞者のためしにひかれ。梅の傍に來れば。怒て斧をとるわづらひもなし。藤の性酒をこのむ。山主常に餅をたしむに何の興ありて。かゝる癖ゝとは長き事ぞ。我おもふ。草字藤は。藤の中の下戸なるべし。情中にあれば色に出ツ。これ其餅のかたちをあらはし。三尺さがりを咲けるよと。賓主とり廻してうらやまれける。

へ打鎰に蛸のかざしや藤の花

草苅ノ說　露川

○松の葉かきは雪間のけしきありながら。その親のまづしきより。其子はつゞれ着ておかしからず。馬糞かく子のいかなれば。親もなく。兄弟もなく。いづこより出て。いづこには歸るらん。さゞ波や。粟津の松の木の間かけて。馬の鈴音に風情は得たれど。鮑のいふかゐなき名なるべし。此草苅は。笛の名人。さてこそ牛にも乘せておきたれ。夏は朝かけの。見てもいと涼しく。百合風車苅入て。絡緯のゐて鳴日もあるべし。秋はむら雨のとりあへず。道かきいそぎ。荷ひつれたるに。空また晴て又おかし。鈴鹿はかゝるけしきありて。坂は日のてる所なるべし。

へ草苅の道〳〵こぼす野菊哉

山芋説

吾仲

○芋に數種あり。山中に生ずるを山芋と號し。自然生と稱して山藥に用ゆ。畑に植てまろがせとなるを。つくねと呼んで。其功もすくなく。其味も次也。秦楚には玉延といひ。鄭越には土藷と號す。杜詩囊中の法をこゝろみず。陳簡齋は玉延の賦作る。鍾山の薯蕷は。三日炊るれど色を變ぜず。我國みちのくの芋は。糸を引事藕のごとし。四月に蘖を生じ。初秋に子を結ぶ。ぬかごとよばれて座禪豆に入られ。いもが子ははふ程とよみて。叡聞に預る。寒夜の寐酒には。峨眉山の芋をすり込。卯月の麥飯には。まり子の宿のとろゝをうらやむ。世に腎藥ともてはやさるれど。貧僧の爲には少よろしからず。人參よく人を活し。よく人を殺す類なればとて。棕櫚ばせをを植まぜて。其勢ひをもどされけるこそおかしけれ。

嘲宵惑説

毛紈

○秋の暮のあはれをしらぬ人は。入麪をこのみ。長雪院(隠)をする人は。唐様の書をすく。風雅のうつる。うつらざるの違ひなり。かの人生得灯を見ず。眠室にかきこもり。寐る事を樂の最上とする。寐酒さめ。夢盡て。ひたものねがへれども。夜の明るけしきもなく。屋普請の胸算用も仕あき。大國を領じ。治めむとおもへば。言下に治り。又は金持の浪人となりては。嵯峨の奥に引こみ。斗藪頭陀に心を變じては。松嶋象潟に身をよす。されど繪に書る色に心を動かし。献立紙にすはりたる心地せられて。やがて興盡ぬ。たまたま庚申の夜ありて。宵寐せぬ物とおどされ。大欠に懸金をはづし。田樂の燒るを待かね。病人の夜伽にあたつては。藥風爐に額を焦す。かゝる人たのしぶといふ事をしらず。琴碁書畫は屛風の摸樣とおぼへ。花鳥風月は手本に書とばかりしる。昔宰予が晝寐も。夜ふかすあてにねつらんかし。古人の燭をとるといへる。誠にゆへあり。人生七十今時はいきず。たとひ五十で死たりとも。百年の算用にはたつべし。晝ありく鶴鴻は。鷹につかまるれど。夜出る惰鳥は。網にかゝりても。やがていなさるゝを。たふとしとおぼえたり。

解

○解類

獲麟ノ解

許六

○魯の哀公十四年。西の狩に麟を得たり。孔子大きになげき給ひて。春秋をとどむ。夫麟はいづれの時出て。孔子は見覚え給ふぞいといぶかし。鼠は愚にして火難の家をさけて命をたもつ。麟は四霊の随一にして。狩ある事をしらず。うろたへ出たるも又いぶかし。孔子みづから聖に高ぶり。もしや牛馬の生れそこなへるにてやありけむ。これも又いぶかし。麟うせ。道おこなはれざる物ならば。道は麟にのみありて。聖人の上にはなき事にや。猶又いぶかし。麟ほろぶれば。聖人も共にうせ給ふ例にてもあるや。たとひ聖人うせ給ふ例ありとも。道はまさしく存せり。是とてもなげくにたらず。儒道たふとしとおもふものは。麒麟を第一にたふとび。次に聖人をあがむべきか。箸折るれば親に離れ。櫛の歯欠れば子に別るゝ占とて。童蒙のものはふかく悲しめり。箸おるゝ毎に親にもはなれず。櫛木履欠るたびに。子を失ふにてもなし。されば仁義の占もあはぬためしもありぬべし。麟をすかぬ聖人もありや。又聖人を好ぬ麟鳳もありや。むかし三皇五帝より以来。孔子の外出たる聖なし。和國も神代より打つゞき。當時百年枝をならさぬ聖朝なるに。麟鳳出たる取沙汰もなし。犬は戸口を守り。鶏は時を報ず。麟出て人もおどさず。鳳啼て旅客の夢を破る能なし。出ぬ方の聖人。いよ〳〵目出たかりぬべし。見ぬ唐土の鳥もねじと。微書記があやまりた

るは。もし出ぬ方をよみたるにや。世間聖人をしらずして。麟鳳にのみ目をつけて。末の凡夫の不目利は。かの一言のあやまりにて。聖人なしとおもふなるべし。今此麟を解して見るに。とまり衆たる春秋の。よき場所に出合せ。事句の趣向と見こなしたらば。何の麒麟に理屈のあらむや。

長雪隠ノ解

許六

○一藝の達人は。郷童に上座を許され。名字持たる人と。座席の爭ひをする。早喰。早糞は。男子の一藝とは稱じ侍る。此藝おほくは無風雅の人にあり。たとひ一藝はつきたりとも。一藝一徳ありて。万徳一藝にはかへがたからんか。されば甲斐の名将の分別所に定め。山といふ隠語を殘し。森ノ蘭丸が。きざみ納かぞへたるは。信長公も藝者と見えたり。詩歌連俳の名句も。此所より産出し。大悟十八度も。此室に入て工夫を極めり。つくづくと一とせのあはれを盡して。鳴や霜夜の蓑。菰の編目をもる月夜まで。人に心はつゝめり。いにしへより朝市に隠家ありといへるは。誠に此所の事なり。世務所用のいとまなき身も。しばらく閉關する時は。印綬を解て。公役を許す。いそぎ閑居に入て。跡を遠ざけ。半日の寂莫を樂まむと。尻をかゝげて走る。

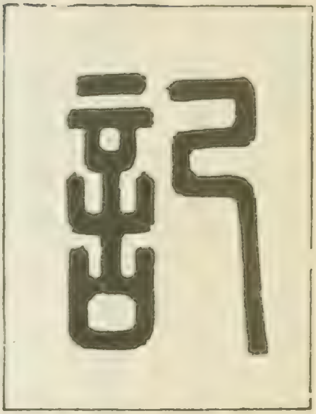
〽何おもふ長雪隠のしぶ團

藪醫者ノ解

汶村

○世に藪醫者と號するは。本名醫の稱にして。今いふ下手の上にはあらず。いづれの御時にか。何がしの良醫。但州養父といふ所に隠れて。治療をほどこし。死を起し。生に回すものすくなからず。されば其風をしたひ。其業を習ふ輩。津々浦々にはびこり。やぶとだにいへば。病家も信をまし。藥力も飛がごし。それより物換星移つて。今は長助も長庵となり。勘大夫は勘益となる。當時の藪連を見るに。先門口に底抜の駕乗物をつるし。竹格子に賣藥の看板をかけて。文字の紺青も。半は兀たり。たまさかの藥取を頼みて。藥店にはしらせ。物申は暖簾の内に答へて。女房の顔をつゝむ。町役には牢舎を療じ。藥代にめでゝは。河原者にのます。牛膝には牛の膝を尋ね。鶴虱は鶴のしらみをさがす。藥のみも次第にかれて。胃の氣よはり。元氣衰へて。果は何がし村の道場の明をまつ。我ガ俳諧の道をもてこれを押ば。師説もいまだとをからざるに。其手筋を失ひながら。宗匠めくをみるに。今はやらるゝ紗綾ちりめんの。

栗物の中もおほつかなく。緋衣木蘭色のさとりの拂子も。心許なけれど。佛法には藥毒の氣遣なければ。其分なるべし。たゞ藪醫者のやぶはらに。又出る竹の子も。藪とならむこそうるさけれ。



風俗文選卷之五　五老井　許六選

○記類

落柿舎記　去來

○嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど。このみも持來らず。代がゆるわざもきかねば。もし雨風に落されなば。王祥が志にもはぢよ。若鳶烏にとられなば。天の帝のめぐみにももれなむと。屋敷もる人を。常はいどみのゝしりけり。ことし八月の末。かしこにいたりぬ。折ふしみやこより商人の來り。立木にかい求めむと。一貫文さし出し悦びかへりぬ。予は猶そこにとゞまりけるに。ころ〳〵と屋根はしる音。ひし〳〵と庭につぶるゝ聲。よすがら落もやまず。明れば商人の見舞來たり。梢つく〴〵と打詠

め。我むかふ髪の頃より。白髪生るまで。此事を業とし侍れど。かくばかり落ぬる柿を見ず。きのふの價。かへしくれたびてむやと侘。いと便なければ。ゆるしやりぬ。此者のかへりに。友どちの許へ消息送るとて。みづから落柿舎の去来と書はじめけり。

〽柿ぬしや木ずゑはちかきあらし山

幻住菴記

芭蕉翁

○石山の奥。岩間のうしろに山あり。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて。翠微に登る事。三曲二百歩にして。八幡宮たゝせ給ふ。神体は彌陀の尊像とかや。唯一の家には。甚忌なる事を。両部光をやはらげ。利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日頃は人の詣ざりければ。いとゞ神さび。物しづかなる傍に。住捨し草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ。屋ねもり壁落て。狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじの僧何がしは。勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを。今は八年ばかり。むかしになりて。正に幻住老人の名をのみ残せり。予又市中をさる事十年ばかりにして。五十年やゝちかき身は。簑虫のみのを失ひ。蝸牛の家を離れて。奥羽象潟の暑き日に面をこがし。高すなごあゆみくるしき。北海の荒磯にきびすを破りて。今歳湖水の波にたゞよひ。鳰の浮巣のながれとゞまるべき。芦の一本の陰たのもしく。軒端茨あらため。垣ね結そへなどして。卯月のはじめ。いとかり初に入し山の。やがて出じとさへおもひそみぬ。さすが春の名残も遠からず。つゝじ咲残り。山藤松にかゝつて。時鳥しば〳〵過るほど。宿かし鳥の便さへあるを。木つゝきのつゝくともいとはじなど。そゞろに興じて。魂呉楚東南にはしり。身は瀟湘洞庭に立。山は未申にそばだち。人家よきほどに隔り。南薫峯よりおろし。北風海を浸して涼し。日枝の山。比良の高根より。辛崎の松は霞こめて。城あり。橋あり。釣たるゝ舟あり。笠どりにかよふ木樵の聲。麓の小田に早苗とる歌。螢飛かふ夕闇の空に。水鶏のたゝく音。美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は。士峯の俤にかよひて。武蔵野ゝふるきすみかもおもひでられ。田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽。千丈が峯。袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて。網代守にぞとよみけむ。萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと。後の峯に這のぼり。松の棚つくり。藁の圓座を敷て。猿の腰掛と名づけ(くヵ)。彼海棠に巣

をいとなび。主簿峯に菴を結べる。王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて。孱顔に足をなげ出し。空山に虱を捫て座す。たま／＼心まめなる時は。谷の清水を汲て自炊ぐ。とく／＼の雫を侘て。一爐の備いとかろし。はたむかし住けむ人の。殊に心高く住なし侍りて。たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔て。夜の物おさむべき處など。いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は。加茂の甲斐何がしが嚴子にて。此たび洛にのぼりいまそかりけるを。ある人をして額を乞。いとやす／＼と筆を染て。幻住菴の三字を送らる。頓て草菴の記念となしぬ。すべて山居といひ。旅寐といひ。さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠。越の菅蓑ばかり。枕の上の柱に懸たり。晝はまれ／＼とぶらふ人々に心を動し。あるは宮守の翁。里のおのこ共入来りて。ゐのしゝの稲くひあらし。兎の豆畑にかよふなど。我聞しらぬ農談。日既に山の端にかゝれば。夜座静に。月を待ては影を伴ひ。燈を取ては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて。ひたぶるに閑寂を好み。山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦で。世をいとひし人に似たり。つら／＼年月の移こし。拙き身の科をおもふに。ある時は仕官懸命の地をうらやみ。一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも。たよりなき風雲に身をせめ。花鳥に情を勞じて。しばらく生涯の計とさへなれば。終に無能無才にして。此一筋につながる。樂天は五臓の神をやぶり。老杜は痩たり。賢愚文質のひとしからざるも。いづれか幻の栖ならずやと。おもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

十八樓記

芭蕉翁

○みのゝ國。ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀嶋氏といふ。稲葉山後に高く。亂山左右にかさなりて。ちかゝらず遠からず。田中の寺は。杉の一むらにかくれて。岸にそふ民家は。竹のかこみのみどりも深し。曝布所／＼に引はえて。右に渡し船浮ぶ。里人行かひしげく。漁村軒をならべて。網をひき。鈎をたるゝ。をのがさま／＼も。たゞ此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るばかり。入日の影も月にかはりて。波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝちかく。高欄のもとに鵜飼するなど。誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八のながめ。西湖の十の境も。涼風一味のうちにおもひためたり。もし此樓に名をいはむとならば。十八樓

ともいはまほしきなり。

へ此あたり目に見ゆるもの皆涼し

五老井ノ記

許六

○靈泉あり。水のたゝゆる事。纔に尺あまりにして。三尺の盆池よりながれ出る事。潺々濇々たり。五老井と名づく。別墅をひらきて。五老庵を結ぶ。主人姓は森。名は許六。みづから五老井ノ先生と借す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川ながれて。鳥籠の山南に近し。十旬の休暇をうかゞひ。半日の閑を領ずる所なり。遙に聞。東江はせをの翁。錫を坂西に赴しめ給へるの折ふし。靈泉を共に汲で。風騷の句ひを。蓁の中にとゞめむとならし。其水の清き事は。惠山の泉脉を通じ。甘き事は鷹州の金泉にひとし。立かへる春の朝。白散の藥をさけてより以後。四時の生涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間に。わきて泉を賞ぶ事は。夏を主とす。霍山鳴が井盤の納涼。西上人の柳の陰も。今此水に俤そひぬ。其徳其要廣大にして。神佛のたふときをすゞしめ。且堯の井を掘。禹の水土をたいらけてより。四民猶おだやかならしむ。後に山あり。さゝ栗の岡といふ。晴にのぞみ。雪に對して。眺望きはまりなし。湖水の嶋々。江南江北の山のたゝずまる。日枝伊吹の嵩。比良三上の高根に眸をさく。西南の間に千鳥が岡あり。聖德太子の御歌より。犬上の名どころとなりぬ。杖を曳ては籬を廻り岡に登る。蕨は齋をたすけ。栗は茗粥を炊ぐ。抑庵は。纔に莚三枚をまうけて膝を容め。賓主六人一座に至からず。茶碗五つ。枕五。筆墨の外に物なし。月に杜鵑をそへ。驛路の鈴に。里の砧を合せて。秋をかなしむ。庭に箒をあてず。樹に木鋏を入ず。窓前の草をのづからなり。たま〱畑を穿ては。狛の瓜種を求め。五色の茄子を植るといへども。山蛾の爲にせゝり落さる。吁借居士。文書に僻する事二十余年。子瞻。芝瑞を師とし。楊子。梅道人が骨髓を伺て。雪裡のばせを。炎天の梅。自然に一味の風雅を兼むとす。世上予が筆痕を樂て。予が心頭のたのしびをしらず。風雅は是非をあらそひ。書圖は鄕童の前のたはぶれとなる。いまだ風雅の爲に。文書をたのしぶといふものを聞ず。予と共に志を同じうして。はやく吾をたすけよや。〱。終日樹下に徘徊すれども。更に答ふるものなし。四隣の鳥聲。花間の蜂蝶のみ。笑て青天に腹鼓を皷し。五老の流に脚を洗て歸る。于レ時元祿五年壬申ノ春。二月。於二婆羅樹林下一識レ焉。

へ水筋をたづねて見れば柳かな

九花亭記　汶村

○亭あり。九花と名づく。九華は何ぞや。抑九花安妃は。神仙の名にして。山に九花あり。丹に九花あり。食に名あるは王侯の用る處。魏の武帝は臺に名づけ。唐の伊氏は室に名づく。観あり。殿あり。帳あり。扇あり。菊に九花の名ありて。茶にも又此美稱あり。上清眞人は。日月を呼で大賓九華とし。亭正臣は。壺中の九花をたくはふ。建勲は九花先生と號し。荀鶴は九花山人と稱す。我四柱の亭。九は陽の極數といふ。理屈にもわたらず。華は壯麗のひくみにもあらず。たゞ方寸をやしなふの天地にして。春は曙。千里鶯啼て。梅かうばしき朧月に嘯き。青楓風すゞしく。ほとゝぎすあやめにかほり。水鶏若竹に敲く。萩女郎花露細うして。菊は黄に。柞さびしけなり。比良伊吹遠くそびへ。金龜金花ちかく峙てり。亭外の風物すくなからず。亭中の物數。又いくばくぞや。屏風傘米哈疊。馬一疋。鶏一羽。亭あり。其主人は誰ぞ。近陽城下。松氏汶村みづから記すといふ。

琵琶亭記　許六

○むかし嘉祥の頃。貞敏といふ人。三面の琵琶を唐土より傳り。猶代々に作りおかれたる。樂器おほしといへども。あるは火の爲にやかれ。又は田舎の土に落て。口おしき事のみおほし。こゝに名物一面ありて。終にもてあそぶ人なし。嶋の經政も。撥短うしてとゞきがたく。關の蟬丸も。膝せまければすみ所なし。柱には四の嶋々をたてゝ。落べきわづらひもなく。何某が袂のそくいゐもいたづらなるべし。撥面にはから﨑の松をゑがき。覆手には。勢田の長橋を横たへたり。二の月は。出しほ入方のながめを添。四時の細きいと筋を。絃手にねぢあけ。花さそふ山風に。春のわかれをおしみ。鶉鳴濱の夕ぐれには。秋のあはれをかなしむ。あけては彈じ。暮てはおさむ。倦時は比良横川に足を打かけ。眠る時は三上伊吹に枕を高うす。此亭のあるじは誰ぞ。杉原氏みづから高ぶり。これを琵琶亭と名づく。むかし伯牙がしらべも。鍾子期が耳なくては益なし。これをきく人は誰ぞ。五老井の許子六。力を合せ口にまかせて記す。同じ穴の狐の寄合。犬の嗅つけぬ間を。重寶と見るべし。

風臺水臺ノ記　許六

○四梅廬の南北に。風臺水臺を築く。風は凉をとり。水は月を弄するの心なるべし。春の風あたゝかに吹ば。水香しうして。梅の影を浸し。秋の嵐雲に音信ては。池あれて荷葉おろそかなり。主人律師。風に乘じて遊び。辨客李氏酌で月をとる。兼て榮耀をこのまざれば。まして名利の煩しきもなし。常に風狂の遊士。此臺にのぼつて。風水の二を諍ふ。其爭ふ處は。たゞ餅酒にあり。上戸方は。風臺にふかれて水をうらやみ。下戸等は。水臺に腹をふくらかして風を望む。其いどみを見るに。蝸牛双角の諍に等しく。源平水陸の戰に似たり。されど酒のみは。舌もぢれ。足よろめきて。下る事得難く。餅好は。胸こがれ。喰おもりして。更に動に懶し。終に相引に引退き。上戸は。桓公の蚊となつて禮を忘れ。下戸は。蝦蟇と化して。腹を撫て樂しむのみ。

○紀行類

五老井 許六選

鹿島ノ紀行

芭蕉

○洛の貞室。須磨の浦の月見に行て。へ松かげや。月は三五夜中納言といひけむ。狂夫のむかしもなつかしきまゝに。此秋鹿嶋山の月見むと。おもひ立事あり。伴なふ人ふたり。ひとりは浪客の士。ひとりは水雲の僧。僧はからすのどくなる墨の衣に。三衣の袋をえりに打かけ。出山の尊像を。厨子にあがめ入て。背中にせをふ。柱杖曳ならして。無門の關もさはるものなく。あめつちに獨歩して出ぬ。今ひとりは。僧にもあらず。俗にもあらず。鳥鼠の間に。名をかうふりの。鳥なき嶋にも渡りぬべくて。門より船に乘て。行德といふ所にいたる。船をあがれば。馬にものらず。細脛のちからためさむと。歩行よりぞ行。甲斐ノ國より。ある人の得させたる。檜ノ木もてつくれる笠を。おのおのいたゞきよそひて。やはたといふ里をすぐれば。かまかいの原といふ。ひろき野あり。秦甸の一千里とかや。目もはるかに見わたさるゝ。つくば山むかふに高く。二峰ならびたてり。かの唐土の双劔の峯ありと聞へしは。廬山の一隅なり。雪は申さず。先むらさきのつくばかなとは。我ガ門人嵐雪が句なり。すべて此山は。日本武尊の言葉をつたへて。連歌する人の。はじめにも名づけたり。和歌なくはあるべからず。句なくは過べからず。誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地にしけらんやうにて。爲仲が長櫃に

折入て。都の土産に持せたるも。風流にくからず。きちかう。をみなへし。かるかや。尾花みだれ合て。小男鹿のつま戀ふ聲。いとあはれなり。野の駒。所得がほにむれありく。又あはれ也。日すでに暮かゝる程に。利根川のほとり。ふさといふ所につく。此川にて鮭の網代といふものをたくみて。武江の市にひさぐ者あり。宵のほど。その漁家に入てやすらふ。夜の宿腥し。月くまなく晴けるままに。夜船さしくだして。鹿嶋にいたる。晝より雨しきりに降て。見らるべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚。いまは世をのがれて。此所におはしけるといふを聞て。尋ね入てふしぬ。すこぶる人をして。深省を發せしむと吟じけむ。しばらく清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴ぬるを。和尚おどろかし給ふれば。人々おどろき出ぬ。月の光。雨の音。たゞあはれなるけしきのみ。むねにみちて。いふべき言の葉もなし。はる〳〵と月見に來たる。かゐなきこそほゐなきわざなれど。かの何がしの女すら。時鳥の歌。えよまでかへりわづらひしも。我ためにはよき荷擔の人ならむかし。

〽月はやし梢は雨を持ながら　翁

〽雨に寐て竹おきかへる月見哉　曾良

南行ノ紀

李由
許六

○鳥は黒く生れながら。鷺の白からん願ひもなし。笠はあるにまかせ。雨をしのぐ物に。蓑はあれど。今様は合羽で仕廻ふ。錢を入レたるは。草鞋一足にて。天晴旅人の出立は出來たり。二月晦日といふ日に。蝸牛の家を離れ。名吉の國廻りにうかれ出て。田づらの柳。木瓜すみれ。遠音の雉子のうす曇。旅の心にはなりきりたり。前途路遠しと。杖の頭をからめかし。首にかけたる頭陀袋。身は雲水の果しなき。布引山の山中に。道づれせばやと見れば。見しれる聖なりけり。男是より。角文字やいせの野飼の。跡や先やと打つれ。やがて土山の泊につく。手ぶるき水風呂の時宜に時をうつし。聖長袖の役に。其夜はあら湯を請取ぬ。明日よりは湯番の前後を定め。猶日〳〵の事を筆に記さむ。これも湯番につけて廻すべしとて。書記も湯番も男に渡しぬ。

「明れば彌生朔日。湯番の男ぬからじと起て。行べき所へはしる。例の一藝長々と動ければ。聖もゝ尻にて待衆たり。天氣よき夜明の雲あひしらみかゝり。並木の木陰まだほのくらく。遠近人の笠の内。そろ〳〵見えたり。鈴鹿山越むとて。聖駕籠。男馬。

〽天井に首はつかへて山ざくら　聖

〽伊勢はてる馬士の鈴鹿や花曇　男

「下り坂。山あひくらく。朝霞の中に。坂泊の咄も程なくちかよりたり。

〽鶯も竹屋どまりや朝あらし　聖

「晝氣色は。關の地藏にて見るなり。茶店をすこし打たゝきて。しばらく腰をかけたり。

〽田楽やあふのく口になく雲雀　男

たそがれ過る頃。雲津に着ば。宿の案内もおほつかなし。

「二日。聖夜ぶかく起て。非番の男を起す。煤氣たる行燈の影に。會津盆の打ひらめたるに。日野椀の壺皿。いとさびしげにつきすへたり。見る目いぶせく胸ふさがり。やがてもかゝらず。杉箸しらけ直し。腹のけしきつれなければ其日の役をはらふ。はき物は寐所よりしめつけ。笠は上壇より着ながら。此宿を出たり。前後の家並はしづまりかへり。左右の鶏の聲。みだれたる中を出ぬけて。火縄の火影ちら〳〵と見えがくれなり。紀行毎に。還庭均(筠)が早行も聞あきぬれば。此度は法度にして。雲津川の假橋を渡る。かくはいへど景氣胸の內にうかめたり。松坂の矢川といふは。人の面白がる所なり。其所さき肩にとへば。今は絶てたゞの所になりたりといふ。筑摩。朝妻。江口。神崎は。むかし語りともおぼえぬるに。きのふの淵は。けふの矢河となりて。人かはり。家かはりぬれば。搗米の船には。むなしく蠅のむらがり。草履草鞋の鎰は。徒に風に動く。今は其土に色香もなし。

〽松坂や越後屋とへば江戸ざくら　男

〽出女の雪むら消て明野哉　聖

宮川の渡りを越て。代垢離の子共は。蛙のごとく。一錢剃の鋏は。蟹に似たり。

〽髮結の腰にしだるゝ柳かな　聖

山田に入て。何がし大夫のもとにつく。日高ければ。參宮の支度して出たり。抑神前に詣でぬれば。よろづの事は忽わすれて。かたじけなさの一すじに。涙はおとし侍りぬ。

奉納二句

〽青海苔も和光の塵のひとつ哉　男

〽松櫻川を隔てゝ墨の袖　聖

天の岩戸に入れば。常闇のむかし思ひ出られ。灯明かゞやかし。有難き事かぎりなし。

〽穴藏と見ればおそろし雉の聲　男

內宮に詣でゝ。御社ちかき杉のむら立に。御裳濯川はきよくながれ。御寶前はしん〳〵としてくり石の上に畏り拜し奉る。つたなき心にもまとはありて又上もなき嶺の松風身にしみわたり。小袖の膚にさはりぬるも。いま〳〵しき心地

せられ。あまりに忝きと思ふおりは。さむきものなり。又奉-納。

〽百八のなみだのかゝる蕨かな　聖

〽今ぞしる月-日の花も梅さくら　男

つきせぬ御名殘も暮に及べば。すでに御暇申て出たり。二-見の方ゆかしけれど。行さきいそがしければ。おもひとゞまりて。例の大夫の許に歸りて臥ぬ。

序

○序類

五老井　許六選

曠-野-集ノ序

芭蕉

○尾陽蓬-左。橿-木-堂主-人荷-兮子。集を編て名をあら野といふ。何ゆへに此名ある事をしらず。予はるかにおもひやるに。ひとゝせ此-郷に旅-寐せし。おり〳〵の書-捨をあつめて。冬の日といふ。其日かげ相つゞきて。春の日また世にかがやかす。げにや衣-更-着彌生の空のけしき柳-櫻の錦をあらそひ。蝶-鳥の。おのがさま〴〵なる風-情につきて。聊-實をそこなふものもあればにや。糸遊のいとかすかなる。心のはしのあるかなきかにたどりて。姫ゆりのなにゝもつかず。雲-雀のおほ空にはなれて。無-景のきはまりなき。道-芝のみちしるべせむと。此野の原の野-守とぞなれるべらし。

元-祿二年彌-生書

猿-蓑ノ序

其角

○はいかいの集つくる事。古-今にわたりて。此-道のおもて起すべき時なれや。幻-術の第一として。其句に魂の入ざれば。夢に夢見るに似たるべし。久しく世にとどまり。ながく人にうつりて。不-變の變をしらしむ。五-德はいふに及ばず。心をこらすべきたしなみなり。彼西-行上-人

の。骨にて人を作りたてゝ。聲はわれたる笛を。吹やうになむ侍ると申されける。人には成て侍れども。五の聲のわかれざるは。反魂の法のおろそかに侍るにや。さればたましゐの入たらば。アイウエヲよくひゞきて。いかならん吟聲も出ぬべし。たゞ俳諧に魂の入たらんにこそとて。我翁行脚のころ。伊賀越しける山中にて。猿に小蓑をきせて。はいかいの神を入たまひければ。たちまち断腸のおもひを叫びけむ。あだに懼るべき幻術なり。これをもとゝして。此集を作りたて。猿みのとは名づけ申されける。これが序も。其心をとりて。魂を合せて。去來凡兆のほしげなるにまかせて序す。

宴ニ柳後園ニ序

支考

○世にあそぶ人ありて。綾羅錦繍にたのしぶ時は。樂つきて後たのしむものなし。山林樹下にあそぶものは。心にみたざれば。世にうらやむかたち出きぬべし。此ふたつのさかひに居らざるものを。心に天遊ありとぞ。むかしの人もいへりける。されば柳後園の何がし。三四の友達ありて。あそぶ事日あらず。額には閑の一字を題して。しづかならぬ時は横になし。やかましき時はさかさまに置て。その時の心に隨ひ行は。大小の額見る心にや侍りけむ。此日東花坊も。此中にあそびて。人ゝ酒のまむと催したるに。心に物をとめ。口に余情をいふ人ならば。罰は金谷の酒もおしからむ。俳諧に案じ入たる時は。こよりといふものして。くさめさせむとぞたはぶれける。

近江八景ノ序

千那

○近江八景は。湖水の絶景をあつむ。比良堅田より。三井石山につらなり。栗津辛崎を見渡し。勢田矢橋を合せ。瀟湘の八景になずらへ。八の所を定む。そのかみ永祿第五。仲秋の月に乘じて。近衛の政家公。石山寺にあそべる時。はじめて此景を詠ず。すべて我朝國〱の八景。諸寺諸山の十境。題せずといふ事なし。されど此湖上の八に。いまだ並ぶものを見ず。いにしへより。八の詩歌はあまたあれど。俳諧の八景ある事を聞ず。されば近江八景はあふみ人がよしとて。繪は五老子が筆をかり。題はわが里。堅田の病鴈の夜寒をはじめ。自他遠境の作を集て。すでに近江八景の一軸となす。これをあつめ。是に自序するものは江州の産。蒲萄坊の主人。僧千那。筆を本福寺の東軒にとる。

四絶文章ノ序

李由

○許氏が五老井に四絶あり。絶は絶勝の義なるべし。ひとつには艸字藤。二には揚揮亘。三には雲花園。四には紫芝岡なるべし。我問事あり。四は須彌の四州によるや。曰く。不レ然。四海四方の四にあらずば。四時四月の四ならずや。曰。不レ然。四恩四教の四にたよらずば。四民四姓の四の數によるや。曰。不レ然。四天四睡の四をねがはずば。四王四皓の四をうらやむか。曰。不レ然。我倜然として問をやめたり。許子が曰。分別理屈は我有にあらず。若二絶五絶の増減あらば。吾子が算用はたち所に相違すべし。たゞ一二三四の第四番にあたれば。四絶とはいふ也。むかし愚なる法師あり。無才にして法名の文字にくるしめり。ある人をしへて云。まづ法の一字をかしらにかうぶらしめて。下はいろはを以てつぐべしと。法師おほきにちからを得て。やがて法以法呂と。段々に名づけて。すでに一二の篇にいたり。第六の番にあたれり。時にかはらけ寶身まかりて。法名たべといへば。法六と改名して。やがてとらせぬ。妻子ふかくかなしび。たとひ此世の業は是非なし。せめて來世に生るゝ時。此苦患をたすけたべといへど。法師かしらをふりて。我法名は土のたぐひにはあらず。今六の當番なれば。是非なしとて。終に法六になして贈りぬ。今予が四絶もかくのごとしと。おの〱これを感じて。說。賦。銘。賛の四文を書して。終に五老志にとゞむ。某李由これに一章をくはへば。おそらくは五絶とならん事を知て。やがて四文章の始に序して。此心をのべて。此罪をのがるゝのみ。

要文集序

許六

○相坂山の杉に雪はふれども。法花經〱と囀出し。淀のわたりの夜ぶかきに。本尊かけた〱とぞ鳴ける。百千のとり〱に。おのが一聲の外に。かはりたる音聲もきかず。烏のかあ〱と鳴暮し雀のちい〱と同じ事囀るに。飽ずやありけむ。本尊をかけ。法花經よむ鳥は。かあ〱。ちい〱よりは。少物しりたる顏つきこそおかしけれ。其顏つきにても。同じ事ばかり囀るに。イヤ。チウ。にくし。可愛しのかはりめやありけむかし。よくぞ聞わけける。もろこしの鸚鵡といふ鳥は。人のいふ事をよく眞似ける。此國に渡りても。和語を聞しり。父。母。爺。口鼻をよくぞまねける。此鳥此國になければ。はじめ終り慥ならず。かれもこれも。もどかし鳥といふは。父母の產つけたる囀りもなくて。明幕諸鳥の眞似を所作とし。一生餌袋にたくはへた

る事もなし。たゞさら〳〵。さら〳〵と筏ふりける柞原に。ある事ない事虚言八百。これを樂の最上とおぼえて。筆にまかせ書付たるを。要文集とぞ申侍りける。

書樓繪合序　　許六

〇和朝のいにしへ。繪かく人の中に。火難に家を燒て。不動尊の妙筆をふるひ。あるは他の國に趣き。漢王の夢に入て。雪ふねの名を殘す人もありけり。當世の風情はあはれすくなし。布袋。福祿壽の二筆をおぼえて。あつぱれ畫師の一列に入。弟子となり。師と頼む時。第一番に人前をおしへ。次に筆法をしめす。唐土のゑかく人は。樓を造りて人を禁す。起てゑがき。寐てゑがき。おのが精神を盡す。猫をゑがきて鼠を絶すも。むべなるかな。われ畫樓を造らむ事。望久し。されど沈痾老病につかれて。筆をとる日稀也。一とせの中。夏暑の六七月は。墨爛れ。膠とらけて。ゑがく日なし。冬寒の三月は。水凍。筆かじけてゑがく日なし。是を一とせ五ケ月の禁筆とさだむ。猶雷雨風霜は。一日の禁筆。又公私のいとまをぬすみ。花に座し。水に戯れ。月に嘯き。雪に吟じて。又ゑがく日すくなし。たま〳〵清朗の日あつて。ゑがゝむと席をうつし。水を汲時。例の雜客入みだれ。あるは物喰。酒飮。炭火にからをはたき。果は莊蝶が生寫しにあき果て。今年の春。頻に畫樓を造る。おほきさ方丈餘。東西の銘は。薄暮雲霧のくらきを扶て。北に書齋あり。半日は樓にのぼり。半日は齋にこもる。人來て繪を好む時。きはめていふ詞あり。遲き事は。三會の曉を期すと約して歸る。次の日來て。はや遲遲の罪を責む。予が隣家にすむ人。一生ゑがく事をしらず。一生遲ゝの罪をうけず。我たま〳〵繪なつて求に應ず。遲しといへども隣人にははやし。三年過る日は五年め也。五年終る時は。七年の月日也。これ成就の時節としるべし。樓成て門弟子六人。題を探て。人物山水花禽をうつす。各一軸を懷にして左右に列なり。すでに勝負を爭ふ。此撰にあるゝ門人すくなからず。これを畫樓の繪合といふ。樓主五老井。許子六。自序作つてふける。鄭公が樗散にして。老畫師と稱ずるのみ。于時元祿壬午ノ冬。十一月日書之。

麻生後序　　許六

〇麻生の名を。烏帽子折ともいふは。好に赤烏帽子と。同じゑぼしの釋なるべし。すべて世は好嫌ひの二より流れ出て。天

地黒白のたがひともなるなるべし。妹といふは人丸の好。西行はなりけりより事起りて。後京極殿は。雪の明ぼのやうを好給ふ。俊成卿の鶉に。寂蓮法師の槇の夕暮は。たま〱なるべし。桃といへば桃隣にきはまり。翁は崑蒻をすかれたり。是は精進物の沙汰に及べし。晋子が傾城に。阿山人が出女は。朝夕にして。名護屋の柿の。かの字のひゞきは。末摘花のから衣と。同じ五音のカキクケコなるべし。鳥落人が。赤いは〱の赤きは。好に赤烏帽子の。あかい所を發明したり。されば撰者の沾字も。柳後園の一人なれば。柳の青き所をも。此集に遠るべしと。俳諧大居士跋す。

銀河ノ序

芭蕉

○北陸道に行脚して。越後ノ國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは。海の面十八里。滄波を隔て。東西三十五里に。よこおりふしたり。みねの險難谷の隅〱まで。さすがに手にとるばかり。あざやかに見わたさる。むべ此嶋は。こがねおほく出て。あまねく世の寳となれば。限りなき目出度嶋にて侍るを。大罪朝敵のたぐひ。遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞えあるも。本意なき事におもひて。窓押開きて。暫時の旅愁をいたはらむとするほど。日既に海に沈で。月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら〱と冴たるに。沖のかたより。波の音しば〱はこびて。たましゐけづるがごとく。腸ちぎれて。そゞろにかなしびきたれば。草の枕も定らず。墨の袂なにゆへとはなくて。しほるばかりになむ侍る。

へあら海や佐渡に横たふあまの川

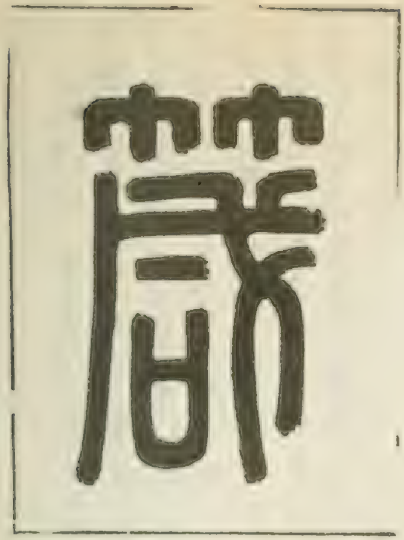
番椒ノ序

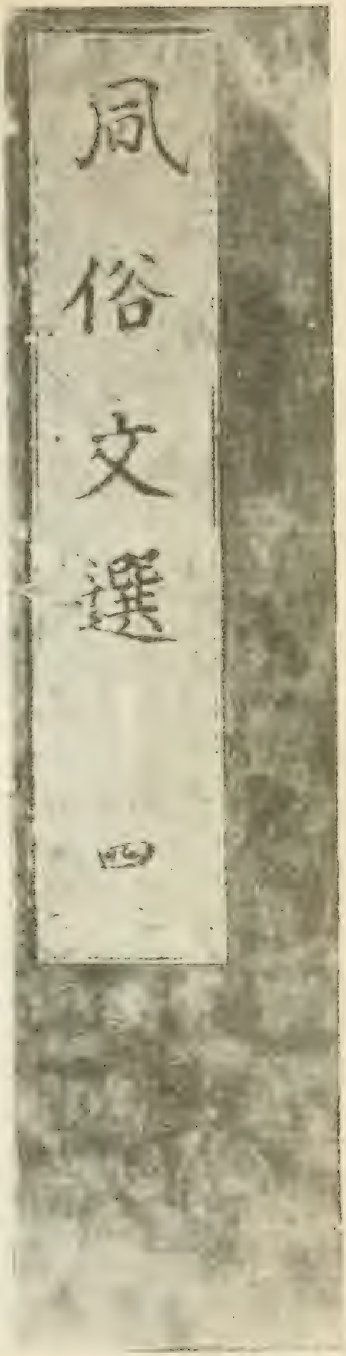
野坡

○とうがらしの名を。南蠻がらしといへるは。かれが治世。南蠻にて久しかりしゆへにや。未詳酸醤子。天覗き。空見。八なりなどいへるは。おのがかたちを好める人〱の。翫びて付たるなるべし。皆やさしからぬ名目は。汝が生得のふつつかなれば。天資自然の理。さら〱うらむべからず。かれが愛をうくるや。石臺にのせられて。竹縁の端のかたにあるは。上々の仕合なり。ともすれば擂鉢のわれ。底ぬけ釣瓶に培れて。やねのはづれ。二階のつま。物ほしの日陰をたのめるなど。あやうく見え侍るを。朝皃のはかなきたぐひには。誰も〱おもはず。大かたはかづら髭つり髭の益雄にかしづかれて。貧乏樽の口をうつすみさかなとなり。不食無菜の時。ふ圖取

出され。おほくは如-彼五-臟の中 紅葉の色を見するを。榮-花の最-上とせり。かくはいへど。ある人北野詣の歸るさに。道の邊の小-童に。こがね一兩くれて。汝が靑-ゝとひとつみのりしを。所-望せし事ありといへば。いやしめらるべきにもあらず。しかじ。今は其人ゝも此世をさりつれば。いよ〳〵愛をも賴むべからず。からき目も見すべからずと。小-序をしかいふ。

へ石-臺を終(ツキ)に根こぎや番椒(トウガラシ)





飲食色欲箴 許六

戀箴 許六

風俗文選 四

○**歳類**

飲食色欲箴　許六

○善は常也。悪は變なり。悪出て後善あらはる。善悪に迷はぬ人は。其善悪になづまぬ人なり。食は禮より重く。色は民と共にせよとかや。されど食の命をやしなひ。色のあはれをしれる功も。なづむ心より。やがて大病を生ぜり。色は三教ともににくむ事甚しきゆへに。甚制せられず。和朝歌道のおしへの高き事は。戀を第一とす。色は風雅也。風雅は仁なり。惻隠の心あり。大舜の二女に嫁し給へるも。今日おして見る時は。是畜生なり。かのながれを汲やからは。これらをもよしとなづめり。元來畜生兄弟姉妹と嫁する事をせずは。人倫は姉妹と嫁する事を道とやはいはむか。彼教には。後なきを不孝の第一とたてて。孝を五倫の始にをけり。若周公。孔子。天性精の慮したる人ならば。子なけむ。第一の孝道は欠ぬべし。是とても聖人のまつたきといふべきか。桀紂が極悪も。子あれば是孝子なり。子なき君子にはまし侍らんか。

「吾朝。いづれの御時よりか。西域の教を廣めり。此教は。後なきを第一とせり。其ながれをたつる者世に多し。大路を行人も。十が三四はこれ也。神の道に合して。これを南部といへり。扶桑東夷の機をよくしり。かつ小國の分量をよくさとせり。地のせまく。人の過たる國也。彼やからの人々。後なきを不孝とし。鼠の子を産捨侍らば。程なく富士山もこぼち入られ。湖も彌。鹿猿を切ぬく沙汰に及ばむ。堂塔に金銀をちりばめ。法事法席に美を盡すといふとも。其費は國にとゞまりて。他の所へはもれず。多の眷屬の食ひつぶし侍らんよりは。いとめでたし。佛供といへる物は。備へたるばかりにて。曾てへらず。是日の本建立の源ならむか。こゝをきれ。かしこをたて。子孫あらせじと思ふなりとの給ひて。一人の罪人となり給ふ。御心こそありがたけれ。しかはあれ共。此頃は。僧のかくし子といへるものあれば。少はもどるか。

「温飩は汁をほめられ。蕎麥切は。からみに威をとられり。奈良茶は。跡一盃を茶につけらるれども。其詭を持り。飲食器物共に。すぐれたる極品の物は。賓客のもてなしとせるに。たばこばかり

は。亭主を奔走せり。客人たばこはへらぬを調法とせるは。何ぞや。

「餅は心地よき物。酒はうれしき物。茶は淋しき物。もちくひは酒をのまず。酒好(ズキ)は饅頭をくはず。是天の自然か。たま〳〵上戸に。嫌なき生れつきあるは。牙(キバ)あるもの丶角(ツノ)をいたゞきたる類(タグイ)とやいはむ。

「傾城の色は。晋子が見届て。いひふるしたれども。遊君の情は。下品にこそおかしき事はあれとて。木導は。出女の上を羨せり。よき遊女のきぬ〳〵のうつり香は。こぬか袋の匂ひかともおもはる。やす傾城の匂ひは。那内穢のうつり香ならん。追(ツイ)込(コミ)辻君のたぐひは。にほひ骨(カツ)て定まらず。

「隠居の姿(スガタ)ほど。うらやましからぬものはあらじ。さだまれる名をさへいはれず。若(ワカ)きをも。祖母(ババ)〳〵とよばれつるこそうたてけれ。色欲におぼれて。あくまで淫ずるものは。男女に上下のたがひありて。高家富貴の人の妻は。七人半のあてがいといへるも。男子の徳とおぼえり。たとひ七人が十人といはれたり共。いやとはいふまじきに。半とかぎりたる。はしたの妻こそおぼつかなけれ。

「雪駄(セキダ)の男。鼻紙の知音とさだめて。いくたりの妻を重ね侍るは。下女やはしたの上の奢なりけり。筑摩(ツクマ)の祭のあとたえて。おこなはれざるは。かれらが為には。おほきなる仕合ならん。かゝる淫楽の世となり行も。神道のおとろへたる。神のとがめとやいふべき。

「鮟(アン)鱇(カウ)。河豚(フグトウ)魚といふ魚(ウヲ)あり。形(カタチ)も大きにうまれつきて。あくまで肉(ニク)をくはれながら。汁を吸るゝを。手柄にいはれけるこそ。大きなる損なれ。

「鯛は魚の最上とほめられながら。鼻(ハナ)尿にて釣(ツ)られける。ためしもありや。いとロおし。

「鰯(イワシ)といふものは。魚類の下品にいひなされて。いやしきもの丶そへ物となるのみならず。田畠の肥(コヤ)しとなるこそ。猶口をしけれ。しかれども。正月のとぶきに引出されて。上臈のまじはりをするを。自慢顔なり。されどもかしらばかりをはやされ。獄門のごくになりて。口〳〵(門〳〵カ)にさゝれ。果は棘の先(サキ)にかゝりて。行方しらず成行けるも。猶〳〵口をし。

「かながしらといふ魚は。あたまがちのみにて。くふべき所すくなし。彼かしらのかたき所に手柄ありて。産屋(ウブヤ)のとぶきには。かしづかれて出る。惟然坊が。つぶりのやはらかなるは。かれにも似よかし。

「魚鳥の匂ひをもてなさるゝは。むしり

喰れながらも。本意とやはおもふらん。

「鶴は。芹の香の俤を殘し。雉子は。昔なつかしき匂ひをとゞめり。痩て小兵とはいへども。雲雀のいきりもの。水無月の鶴鴈とほこりける。

「生海鼠といふものゝ匂ひは。たとふべき物なし。牛房の香にかよひておかし。松茸のふん〳〵たる物に。毎度柚の相客に出らるゝ類ひ。

「燒蛤の馨しきには。胡桝の粉の鼻に入たるがうれし。かばやきの匂ひ。風流にはあらねど。うまき匂ひとやいはむ。

「ある法師の。茄子の鴫やきをほめられければ。傍の俗人。鴫の茄子やきも又よしと返しける。

「時を感ずるといへるは。かけ菜に打大豆汁の春めきたるもあるに。つまみ菜に。唐がらしの青くさきは。初秋のあはれをすゝめり。

「芹蕗のたうを。春の景物に撰置は無念なり。定家の卿。冬の花に梅をよみ給ふいとよし。

「鰤は。節振舞をかぎりとし。鯖は生身玉を終にとれり。

「さんちやは四つ時。出女は八つを威勢の盛といふべし。吾翁。色と義の道をしめし給へる詞に云。

色をおもふ事は。うどんを見るがごとく。義を守るものは。唐がらしの辛に類せよと。

「山葵。生姜。蓼。からし。山椒の辛き類も。各其場所を得たり。海鼠腸といへる物には。わさびの打あがりたるからみをすり込。昆布に卷込るゝ時は。山椒の手柄を見せたり。鯉のにつけの清けに。飯蛸のおぼつかなき味をもてる。

「色はおもひのまゝならぬ命とはよめり。あはぬをかこち。逢夜の鳥をうらみ。吾待宵の鐘に。戀の情を盡せり。湯殿柴部屋のせは〳〵しきちぎりに。百とせのよはひを。のべたる心地して。さらぬ顔をつくりて出たるもをかし。せはしき事を。戀のあはれといふとも。八坂北野の茶屋ものゝ振廻ほど。手廻しなるはなし。燭臺を握り。階子に上り。客を迎ふるより進退に左右の手を空しくせず。內の亭主心得て。二階口へ銚子盃さし出し。取肴あまたならべり。二三獻の過るを待かね。屛風引廻したるは。つまみくらひたる。蛸や酢貝の。胸につかへたる心地やせむ。

「玉子。山ノ芋は。腎の藥とばかりおぼえて。同じくい物ならば。水をます物にしくはなしとて。朝夕すゝめり。虛實ともに病となりて。剋する所をしらず。古人も。口よく病を致し。其德を敗る。口を守る事は瓶のごとくせよとはいへり。吾

生はかぎりあり。情欲はかぎりなし。色好むものは。みだりに淫せず。傾城に家を亡すものはあれど。腎虚をしたる人をきかず。

聴ノ箴

許六

○耳はきく事の役者にして。聖人耳に悪聲をきかずといふは。大きなる無理也。たとひ山林深谷にかくれたり共。悪聲を聞まじとはいひがたかるべし。されば釣鐘も通ぜぬかな聾をよしとはせず。瘂は元来母の胎内より聾にして。此世の音聲をきかずとかや。元来舌の短きにはあらず。其かたちを見ず。其聲を聞て好するものは。神鳴。ほとゝぎすのたぐひなるべし。尤鳴神は。雲中の沙汰なればさもあらんか。昔より此鳥。此聲をなくと。慥に引合てきく人なし。當世は鳩鴨のたぐひ。此聲を鳴もしらず。たゞ本尊かけたとなけば。是非共此鳥にするもおぼつかなし。和漢詩歌の相違あり。千聲万聲。たゞ鳴〳〵とばかり。詩には作れり。此國の歌には。なかぬ事をかこちて。きかぬうらみをよめり。つまる所はひとつなり。和國風流の手柄にして。此鳥にかぎらず。此たぐひ多し。琴をきむとよむは。禁の字の心なるべし。此音を聞時は。邪念を禁ずる事也。もろこしの人は。常住これを左右にし。旅行にも携へ。瀧を詠むるにももたせたり。すべて一日の中。見る事は一にして。きく事は九つなるべし。須臾の間も。耳中に物の音聲の。客とならざる間なし。されば見る警よりも。聞警はさきなるべし。其かたち見たらんより。其聲をきくに。情をますたぐひこそおほけれ。むかしより見ぬ戀にあこがれ。思ひをちゞにくだき。傾城の箱階子あらゝかに蹈ならす音は。見るよりも其音に胸つぶるゝわざなれ。蕎麦切はおろしの音に心ときめき。楽屋の笛のしらべは。其猿楽のめでたく舞かなづるよりも。ゆかしきわざなれ。隣家に餅つく音。極熱の頃。垣を隔てゝ車井のはしる音は。其亭主の心まで。涼しく思はれ侍る。和朝もてはやす。小歌。浄瑠璃。箜篌。三味線。是皆婬楽とて。君子はいやしまれける。此音曲をきく時は。何のあて事もなくて。不圖戀慕のおもひを催す。鉦鐃鉢の音は。我人心よからぬ聲と。おぼえたるこそことはりなれ。此音聲は。無常を催す事を。第一につくれり。むかし聖人。楽を以て天下を治め給ふ。我朝の楽も又同じ。夫楽は。天地を動かし。神鬼をなかしむるもの也。これを聞人感をなさずといふ事なし。是其民の邪を禁ずるの源也。されば咄を譏

り。戸ざしをわするゝもことはりならん。姪樂暗に戀の思ひをなし。　鐃。（鉦カ）鐃鉢。　自然に死の近づく事を悲しぶ。是人心の私なきしるし也。　何ぞ聖人樂を以て。國を治るに治らざらんや。王昭。西施が美なるをきけど。人終にほれたるためしなし。これ其王昭西施に念を動かさゞるしるし也。吾情たゞしき時は。其物にあつからず。聖人耳に惡聲をきかずといましめ。禮にあらざればきく事なかれといふも。此あたりのいましめなるべし。



○銘類

五老井　許六選

机ノ銘　芭蕉

○間なる時は臂をかけて。嗒焉吹噓の氣をやしなふ。しづかなる時は書を紐とひて。聖意賢才の精神をさぐり。靜なる時は筆をとりて。義素の方寸に入。たくみなすおしまづき。高さ八寸。面二尺。兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして。潜龍牝馬の貞に習ふ。是をあけて一用とせむや。また二用とせむや。

東ノ銘　支考

雙白堂主野紅子。夫妻相共好ニ風雅一。因有ニ双白之號一。東銘指ニ野紅一。西銘曰ニ其妻一。

○むかし人の繪を書そめしに。丹青は後の事なりとて。此白の一字をぞたふとま

れける。身に錦繡をまとひ。頭に金冠をいたゞきて。君といひ。臣といひ。男といひ。女といふ。さるは人の見て名づけたる名なるべし。しかるに女のをみなへしは。嵯峨野の露のよすがもあるに。男のをみなへしは。いづこの野邊の秋にかあらん。たゞ此双白堂のあるじとならば。かの商山の翁に頭ならべて。花もおもしろからん。月も面白からむ。其銘にいはく。

へ花鳥にさとればもとのしら髮かな　許六

西ノ銘

○つよからずつよからぬ女の風雅は。糸筋のごとく。此糸五色に汚れざれば。狂客の悲しみをそへても。何がしが繩墨にそまらざるよろこびを見せたり。天の香來山の衣をたち。布引の機物をはえたる糸すじも。皆是ほそみより出たる。女の手わざならん。猶日本紀の局が。初音の卷にいひけむ。瀧のよどみの年なみより。水上としつもりて。老にけらしな。黑き筋なしとは。共に双白堂の事なるべし。其銘にいはく。

へ髮の花女瀧男瀧のかざしかな　嵐雪

茶碗ノ銘

○黑茶碗あり。花の朝は。ますく黑く。雪の夕は。いよく黑し。月待宵のやみをさぐり。闇夜に鼻をとられしは。をのくつちめくらのまじはりなるべし。

はちの子　早ふね　小雲雀

撿挍　貧僧　大黑　小ぐろ

三代目をのん子といふ。のむここそ猶ふかき意味あれ祕してしばらく殘す。

へまつむしのりんともいはず黑茶碗

雲華園ノ銘　汶村

五老井四銘ノ一章也

○夫茶は龍鳳を貴とするは。歸田錄の詞也。和漢飮食の中の重味也。陸羽が茶經にのする所。建州。洪州に名茶多して。杜牧もこれをほめたり。和朝明惠といふ聖。唐巴東の實をとりて。始て越前の國に植。都の北。栂の尾に移せり。猶茶の土地に佳ならずとて。終に宇治山に掘うつして。上林何某が家をかゞやかす。近世の土產は。駿州の安部。みの丶莖長。熊野。近江。其中に江東の茶勝れたり。政所。松ノ尾は極品也。しがらき。宇治田原は。又其次也。檗山禪師來朝して。唐茶の鍋煎を製す。世もつて隱元茶と號す。これは是出し茶也。それより首の長き茶鑵を作って。給仕の小坊主をたすけ。几下牀頭

にすへて。手づからくむ。其ノ銘に云ク。

能さゝす　能まじはる
よく悟る　よく寂す
能すゝむ　能へらす

六の徳を兼るといふ共。茶ありて水な　。水あつて茶なくば益なし。龍焙。金砂の二泉は。茶を烹るによろし。三の間の水。柳の水ありといへども。許子が五老井を汲ンで。此茶を烹る時は。白雲満テ碗花徘徊す。一たびこれをすゝる人は。専風雅の志をすゝむ。盧仝が七椀といふは長過たり。

飯酢ノ銘

吾仲

○飯鮓は。いづれの時よりかもてはやしけむ。此六條の銘物にはいへりけり。今はおほやけの奉りものにかぞふれば。下ざまの人は。日を限りても待べし。まして卯の花の咲ころは。此ものゝけしきも清からんに。藤の花の咲時に。それがいかなる人の深き心節をあはせたらん。いかなる人の深き心か侍りけむ。是にて二季草の名も。世の人はいふべし。器物は。杉の香もてつけたる折に入レて。此花をかざしにも。又は文など付てもやるべし。かくことぐしきやうなれど。すべて上ざまのもてあそびもの也。長良の鮓は。むかしをしのぶより。梅津かつらの名にしられて。大津松本の旅人も。笠をかたぶけずといふ事なし。かの茄子たけの子の鮓といへば。何のこけらにも似かよひて。あま法師のこがれものならんに。是は形のもてはなれたれば。人の得しらぬも尤なるべし。是に黄な粉といふものを。など添ては給はらぬぞと。ある人のいひたるを。飯ずし見るたびの。笑ひ草にはいふなるべし。其銘にいはく。

以飯名鮓　鮓而非飯

一點鱸皮　十重鳥子
色於雪白　香非梅酸
藤花漸暗　橘香已近
貴介尤褒　下臈未知
昔卞和玉　似之是照

座右ノ銘

芭蕉

○人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

銘に云ク

へものいへばくちびるさむし
あきのかぜ

是非齋ノ銘

許六

○是を是とするは。諂へるにちかし。
非を非とするは。謗るに近し。

羽官平日。儒釋道の書をよむ。道は儒の敵となり。儒は佛のむかふ座主にとれり。若酢吸の三翁。世に再生して。吾

はいかいの道を塩梅せば。きはめて是非齋の遊を翫ひて。簪纓の連衆に入らむと。あの方より望まむ。



嵐蘭誄　芭蕉
丈艸誄　支考
去来誄　許六

○誄類

五老井　許六選

嵐蘭ノ誄

芭蕉

○金革を褥にして。あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるを以て。君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は。義を骨にして。實を腸にし。老荘を魂にかけて。風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事。十とせあまり九とせにや。此三とせばかり官を辭して。岩淵に先賢の跡をしたふといへども。老母を荷なひ。稚子をほだしとして。いまだ世波にたゞよふ。されども柴扉の間に居らず。日々に風雲に座して。今年仲の秋中の三日。由井金澤の波の枕に月をそふとて。鎌倉に杖を曳。其かへるさより。心地なやましうして。終に息絶ぬ。おなじき廿七日の夜の事にや。七十年の母に先だち。七歳の稚子におもひを殘す。いまだおしむべき齡ひの。五十年にだにたらず。公の爲には。職をしきりても。悔まじきうつはものゝ。はかなき秋風に。吹しほたれたる草の袂。いかに露けくも。口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに。老母の恨。はらからのなげき。したしきかぎりは聞傳へて。偏に親族の別にひとし。過つる睦月ばかりに。稚子が手をとりて。予か草庵に來たり。かれに號得さすべきよしを乞。王戎五歳の眼ざしうるはしと。戎の一字を摘で。嵐戎と名づく。其よろこべる色。今目のあたりをさらず。いける時むつまじからぬをだに。なくてぞ人はとしのばるゝ習。まして父のごとく。子のごとく。手の如く。足の如く。年頃いひな

れむかびたる俤の。愁の袂にむすほゝれて。枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべむとすれば才つたなく。いはむとすれば胸ふたがりて。たゞおしまづきにかゝりて。夕の雲にむかふのみ。

〽秋風に折てかなしき桑の杖

丈艸ガ誄

去來

○今歳二月末の四日。月は草庵に殘る物から。禪師身まかり給ひけりと。湖南の正秀が許よりしらされけるにぞ。胸ふさがり涙とゞめかねぬ。つく〴〵此人のむかしを思ふに。尾張の國に生れ。犬山に仕へて。勇猛の名もありしとかや。一日若黨一人を供し。ひそかに君父の前をしのび出。道の傍に髮おしきり。黒衆には引かへられける。常の物語には。指の痛ありて。刀の柄握るべくもあらねば。かく法師にはなり侍ると也。ある人のいへるは。其弟に家祿譲り侍らんと。かねて人しれず志ありて。病にはいひよせられけるとなむ。其後洛の史邦にゆかり。五雨亭に假寐し。先師にま見え初られしより。二疊の蚊屋の内に。頭をおし並べ。四間の火燵の上に。面をさしむけて。吟會おほくは此人をかゝず。先師の言に。此僧此道にすゝみ學ばゝ。人の上にたゝむ事。月を越べからずとのたまへり。其下地のうるはしき事。うらやむべし。然れども。性くるしみ學ぶ事を好まず。感ありて吟じ。人ありて談じ。常は此事打わすれたるが如し。先師深川に歸り給ふ頃。此邊の句ども。書あつめまいらせけるうち。大原や蝶の出て舞ふおぼろ月などいへる句。二つ三つ書入侍りしに。風雅のやゝ上達せる事を評し。此僧なつかしといへとは。我方への傳へなり。又難波の病床。側に侍るもの共に。伽の發句をすゝめ。けふより我が死後の句なるべし。一字の相談を加ふべからずとの給ひければ。或は吹飯より鶴を招むと。折からの景物にかけてことぶきを述。あるはしかられて次の間に出ると。たよりなき思ひにしほれ。又は病人の餘りすゝるやと。むつましきかぎりを盡しける。其ふし〴〵も等閑に見やり。たゞうづくまる寒さかなといへる一句のみぞ。丈草出來たりとは。感じ給ひける。實にかゝる折には。かゝる誠こそうごかめ。興を探り。作を求るいとまあらじとは。其時にこそ思ひ知侍りけれ。先師遷化の後は。膳所松本の誰かれ。たふとみなづきて。義仲寺の上の山に。草庵をむすびければ。時々門自啓。曲々水相逢などゝ打吟じ。あるは杖を横たへ。落柿舍を扣て。飛込たままか都の子規とも驚かされ。予も彼山に

道のぼりて。脚下琶湖水。指頭花洛山と。眺望を共にし侍りしを。人は山を下らざるの誓ひあり。予は世にたゞよふの役ありて。久しく逢坂の關越る道もしらず。去ゝ年の神無月。一夜の閑をぬすみ。草庵にやどりて。さむき夜や。おもひつくれば山の上と申て。こよひの芳話に。よろづを忘れけりと。其喜びも斜ならず。更行まゝに雷鳴地にひゞき。吹風扉をはなちければ。虚室欲奪閑是寶。滿山雷雨震寒更と。興じ出られ。笑ひ明してわかれぬ。身の上を啼からす哉ときこえし。雪氣の空もふたゝび行めぐり。今むなしき名のみ殘りける。凡十年のわらひは。三年のうらみに化し。其恨は百年のかなしみを生ず。をしみても猶名殘をしく。此一句を手向て。來しかた行末を語り侍るのみ。

〽なき名きく春や三とせの生別れ

去來ガ誄

許六

○維寶永元甲申のとし秋九月。落柿舎の去來卒す。嗚呼悲しひかな。此郎は。向井氏玄勝老人の末の子に生れて。筑紫の方におひたち。名は平次郎。武を業とし。若かりし時より洛に居す。弓矢を捨て十五年と吟じたるは。十五年先の事也。合せて三十年來の大隱士。和名これを浪人とはいふ也けり。いつの頃よりか。先師蕉翁にま見えて。風雅の名高ぶり。京師にかまへて。諸子のかしらに坐す。南西の氣を押へ。東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱じて。あら野の時。正風体のまなこをひらきて。

〽湖の水まさりけり五月雨とかや。

猿蓑の選を蒙りて。不易流行の巷をわかち。後猿の新風にのぞみても。終に幽玄の細みをわすれず。

〽木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほとゝぎす啼や雲雀の十文字とは申けり。又いづれの仲秋にや。

〽岩ばなやこゝにもひとり月の客と吟じて。先師の耳を驚かし。月賞翫の第一。古今の秀逸にはきはまりたり。すべて一兩句もてる人さへ稀なるべし。此おのこは。已に數句に及べり。二十余年薪水の功積り。嵯峨の落柹舎に師を迎へ。石山の幻住庵に老を訪ふ。心ざし深くて。一とせ難波の變を聞て。速にともづなを解。義仲寺の葬りにも。肩衣に鋤鍬を携ふ。死後の城を堅守り。諸生をなづけ。初心をたすく。越の浪化にかはりて。有礒砥波の書を選し。崎の卯七をたすけて。渡り鳥を集む。此秋我大願に力をよせて。文選序者の一人にすゝみ。病床に伏ても。三度白他の書を寄たる

に。いかなる蕉門滅亡の月日にやありけむ。去年の冬は。中越の院家薨じ給ひぬ。ことし衣更着。丈艸卒す。秋九月此郎去て。手もぎ足もぎの思ひをさせて。人の腸を斷せけるぞや。猶生き殘りたる十大弟子の中にも。世のたすけとなりがたきもあるべし。其人かの人と。かへまくほしと思ふ方も有べし。從來の因緣ふかきえにしありて。しかも同じ痢疾のやまひをうけて。共に終りをとれり。身は貧閑清寂の高みに遊びながら。老兄法印の孝養をわすれずして。常は心ならぬ。余所のいとなみもいそがしく。ある時は攝家親王の御館に候じ。遠近の來客に對し。四時の運氣を察し。二六の陰晴を考ふ。されど花鳥の細みをわすれず。月雪のあはれに。情をなやます病ありて。起臥のさびしきをしらずとかや。猶おもふ人のなきにしもあらで。此事かの事仕果してむ。今宵は森の下露わけそぼちて。小萩がもとに臥しぼらんと。玉だれのひまもとむるに。あらぬさはりのみ出來がちにて。初夜過る雪駄の音も程なくしづまり。夜がれのみぞおほかる。又の日もつとめて。とくより例のいそぎに。心のどまるきはもなくて。そゞろ事に暮しつゝ。夕陽西にかたぶけり。こよひこそと。物くひ湯あみし。みじか羽織に長刀。足ばやにすべり出て。東がしらにむかふたるは。天晴私の黨の旗頭。熊谷笠の見いれもよしや。よしやあしやの取沙汰はせぞ。うき名は賀茂の早瀬にながせと。川風寒み千鳥さへ啼て。下庵ちかき聲づくろひ。仕はてざるにさつと明て。打入たるけはひ。しばしいふべき事さへなくて。灯火ほそき方に向ひ。盃引よせ。少くゆらせてより。心地づきたり。此ほど四五日のとだへに。珍しと見るなでしこの。もとゆひものびやかに。露けき心地せられて。あはれなる事ぐさに。節小袖の染もやうも。いまだ其夜はきはまり兼て。膝のはづれに打ふしたれば。小夜もやう〳〵更て。衣手さむくそひ臥たり。明ばとくかへらむなど。契りかたらふひまもなくて。南禪寺の豆腐屋も曉をおかし。白川黑谷の鐘も。手枕のすき間をつとふに。うち驚かされて。帶引しめ。刀ぼつ込。氷まじりの朝川越て。小芋中ぬきの頃。京にはいきつきたり。今はの時の人しらぬ。心の中さへ思ひやりぬ。現の境も千々の思ひを碎き。娘の生さき。其子の母の行末。いかに覺束なく見果つらん。

ア、悲哉。松本山の僧が身まかりぬる時は。此秋我に誄せらるべしとは。よも思ひよるまじ。今我辭を作て彼を痛む。此次必我番にあたらむも。又哀なるべし。ア、悲哉や。

風俗文選　巻之七　　五老井　許六選



落柿先生挽歌　支考
郎歌　五首

○歌類

落柿先生挽歌

支考

此歌四章而後。加變聲之歌三章。漢無此法。蓋和文一體歟。

○ことしはいかなる年なれば。かくあぢきなき人をのみ見るらん。去年の神無月は。浪化の君にわかれて。霜の光に名をしたひ。粟津の丈艸は。花の陰に歸り給ひぬ。此きさらぎの願ひにみちて。卯月のはじめは。落柿舎に日をくらし。其事後事語り合て。是よりたれが身の上をや。烏も啼らむと。はかなみいひしが。去來はいはるゝ人の數に入て。かくいふ我ばかり殘り居たらん。沖の船の友を失ひて。老の波のよるかたなき心地ぞせらる。なき人の此ごろおほき世やさらにと。むかしの人のなげかれしも。かくあぢきなきをりなるべし。人は廿ばかり。三十も過るまでは。をのれが友達も。同じ心のすこやかにおひたちて。たまたまなき人の上を見ても。あはれとはおもひけめ。おどろくほどの悲しさにはあらず。よそぢも過行ほどよりは。幾とせの交をかさねて。その人ならねば此事はしらず。あはでは戀しう。見ざらんはいかにと。文にもいひかはすほどに。けふは其人もなくなりて。世は扨はかなきもの哉と。ことしはじめてしらる也。誠に此人よ。風雅は武門より出れば。かたき所にやはらみありて。先師もそれを

ゆるし給へりしが。我はやはらぎたる所にかたみあらんをと。逢時はたはぶれていひもしつ。まして蕉門の高弟にして。吾輩の先生なるをや。何にか此人をおしまざらん。我のみかくおしむにや。あやし。其歌ニ曰ク。

家は聖護院の森にかくれて。寒き梟の聲に驚き。名は落柿舎の梢に殘りて。空しき秋の色を恨む。

世ははたいかならん。我はたかくならん。

窓のあらしに燈をまもり。

軒のしづくに影をしたふ。

おしむべし。ア、かなしむべし。ア、

柿の木もあれ行猿のなみだには。夜こそねられね。人も歎らむ。嵐の山の山あらし。世にあらしとは山ぞしる。嵯峨野に人のさがなごゝろや。

○鄙歌

あふみぶり　　よみ人しらず

「鶯に。きとろはさぶいみなべらの。うらゝかことの。軒にけよやれ。

自得　　はせを

「思ふと。ふたつのけたる其あとは。花のみやこも。ゐなかなりけり。

題しらず　　おなじく

「あみ雜喉を。升にはかりて賣人は。かふ人よりも。あはれなりけり。

二かいより落てよめる　　去來

「などてかく。いそがしいとて二階から。おちての後は。ひまになりけり。

やまひにふして　　許六

「白かゆは。きらいなれどもやめはただ。いゐをばくはで。啜る也けり。

文

〇文類

五老井 許六選

誹諧發願文 浪化

〇人死して六道に生れ。からき目見むは。ひとへに娑婆の業因によれりけるとかや。世に立花すく人は。たてゝは崩し。くづして又たて。終日大汗ながし。葭のさきに枇杷の葉つけて。馬の耳のおもひをなし。屈曲を好みて。鉄釘に打つけ。針がねにしはりかゞめて。見るめもくるしかるべし。わづか五寸の瓶に。千山万水のおもひをこめむも。猶〳〵氣づまりならんかし。若立花せむとならば。竹根の松を心に立て。ながしに清見寺の梅ならば。少は心ののびやかなる風情もあるべし。されど一時の榮花も盡て。まづ椿ころりと落て。無常をしめし。木槿一日の榮をさとりて。程なくしほる。例の心短きにや。やがてぬき捨。果は畑と立のぼる。それさへあるを。棊うつ人は。赤日引つり。喰物時をわすれ。終夜同じ事ならべたらんは。飽ずやあらん。よき手あしき手とて。一座打こぞり。案じふくれ。棊石のかぎり蒔盡す時。何のをし氣もなく打崩したるは。さりとは殘多き事なるべし。さしも手間入て案じたらんは。せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は。かならずさゐの河原に生れて。父母戀しがる子共に立まじはり。地藏おぼさつの御衣の下にかくれ。あけくれ同じ事すらんも。又あはれなるべし。若一枝さして諸佛に奉り。一日投てはあみだぶ唱へたらん人は。うたがひなく西方に生れて。百味の外の飯食には。なら茶。蕎麥切はくひ次第たるべし。今吾はいかいの結縁は。狂言綺語のふるみにおとし。百韻千句の數を合せて。一座の廻向は。あみだぶ〳〵と申て仕舞侍りける。

聖靈祭文 李由

〇それ娑婆のありさまは。寸地に五穀を植ぬ所なく。寡婦が紡績の隙なる日なし。されど貧報に追ぬかれて。餓口更に閉る事かたし。いかなれば極樂淨土の臺を去り。百味の飯食をさし置。盂蘭盆になれば。取物とりあへず。瓜の馬の迎を待かね。麻骨の杖引づり。戸板あら筵の座敷つき。莧荒和布の賞翫殊に。きり麥冷素麺の腹中あひこそ。覺束なけれ。淨土のあまみに飽て。娑婆のかるみをよろこばれたる。聖靈もあるかし。地獄の釜の御戸ひらけたらんは。たまさかの仕合なるべし。食好みの振舞

まては、ちと奢の沙汰にもなるべし。ただ修羅畜生のあぶれ者。中有の浪人かはきとこそ。おもひやられ侍れ。常に願ひ置れたる作善功徳。讀經念佛の行は。そも何になりたるぞや。佛果を得られたる歴々も。餓鬼あしらひにおもはれ。中にも新聖靈は。葛籠持の夫にさされて。外側に直るこそあはれなるべけれ。生前の列座のころは。あたま數よみて。膳だてもせられたるに。灰の足跡に人數をしられ。終に送火の明に。はやし出されて。草葉の陰に歸りても。料理馳走の評判せんは。もとの人界より。願ひ損の後生なるべし。伏惟。中元の佳節。浮屠の教におほはれ。目連の母を始とし。西の海へ父を沈めしあはれまで。放逸の衆生。たま〳〵五倫親屬の名を呼出し。我も一たびは此馳走の數には入べし。一念の慈悲に。寺の小僧が腹ふくらかし。一包をよろこばしむるこそ有難けれ。あがり膳は齒のあともなし。果は魚鳥のたすけとなりぬ。報恩經に。一とせの中六度。聖靈の來去の日ありて。上古は年の暮にも。此祭ありしを。いつの頃の簡略よりか。世間一統にいひ合せて。其沙汰もなくなりたるは。たゞつまる所は。坊主の迷惑とはなりにけり。聖靈連〳〵。今年は殊に穗づるもよし。地獄極樂の亡者連。才太郎畑のいき過まで。さそひ合せて御出あるべし。六日飛脚の頓死をききたて。一紙の祭文は御免を蒙らんと。仍テ謹ミ如レ斯。

へ聖靈よ蓮にあまらば芋ばたけ

剃髪ノ文　　支考

○浪花の舍羅。剃髪の前も舍羅といひ。ていはつの後も舍羅といふ。此舍羅を捨て。どの舍羅をか求めむ。舍羅〳〵として。更に舍羅なし。

へ一たびは瓢の花のあたまかな

祭レル猫ヲ文　小序　　同

此文以ニ四六之法ヲ用ニ漢字ノ韻ヲ也。是全ク似ニ誹諧之漢和ニ而不レ然。始以テ万葉手爾波ノ文字ヲ用レ之。爲レ韻惟爲ニ和文ニ用レ韻之始ト。雖ト太タ奇也

○李四が草庵に、ひとつの猫兒ありて。これをいつくしみ思ふ事。人の子をそだつるに殊ならず。ことし長月廿日ばかり。隣家の井にまどひ入て身まかりぬ。其墓を庵のほとりに作りて。釋ノ自圓とぞ改名しける。彼レをまつる事。人をまつるに殊ならぬは。此たび爪牙の罪をまぬがれて。變成男子の人果にいたらむとなり。其ノ

文ニ曰ク。

「秋の蟬の聲に忘れては。鳥部山を四時に噪ぎ。秋の花の霜にほころも。馬鬼が原の一夜に衰ふ。

きのふは錦茵に千金の娘たりしも。けふは墨染の一重の尼となれり。

されば柏木ノ衛門の夢。虚堂和尚の詩。欒にはまよふ。欄干に水ながれて。梅花の朧なる夜。貧にはぬすむ。障子に雨そゝひで。燈火の幽なる時。

良は可レ捕とつくりて。楽美は杜工部。蛙は無用といましめて。異見は白舍司。

昔は女三の宮の中。牡丹花にかゞやきて。花まさにはやく。

今は李四が庭の[illegible]籬垣にあれて。實すでにおそし。

前生は誰が膝枕にちぎりてか。さらに傾城の身仕舞。

後世はかならず音樂にあそばむ。

ともに菩薩の物數奇。

玉の林の鳥も啼らむ。

蓮の臺の花も降らし。

涅槃の鐘の聲冴て。闍維裏の眠たちまちにおどろき。菩提の月の影晴て。卒都婆の心なにゝかうたがはむ。

如是畜生

南無阿彌

弔ニ古戰場ヲ文

芭蕉

○三代の榮耀。一睡の中にして。大門の跡は。一里こなたにあり。秀衡が跡は。田野になりて。金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば。北上川は南部よりながるゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて。高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は。衣が關を隔て。南部口をさしかため。えびすをふせぐと見えたり。扨も義臣すぐつて此城にこもり。功名一時の叢となる。國破れては山河あり。城春にしては。草青みたりと。笠打鋪て。時うつるまで涙を落し侍りぬ。

「夏草や兵どもがゆめのあと

返店ノ文

路通

（流布本此一篇なし。今『本朝文選』によりて補ふ。）

○旅店喰物をかしがむとて。鍋ひとつを求めたり。おほきさ一升あまり。其料にすへ置たるへつゐ。また一めぐりもちいさかるべし。火のあたる所わづかなれば。鍋の底みなひゞきれたり。手にふるゝ毎に。いとうあやうければ。煤おとす業もなむなかりけり。

「旅店一物二用の物あり。夏はすみ〱を釣て。蚊虻の觜をとをざけ。冬はよきころにたゝみて打かぶりぬれば。霜雪の愁。藁のふすまにかへたり。

「旅店はわづかの板庇なり。是は貧しき人ゝのすむ。長屋の端をしきりて。一間なる所にしつらひたれば。假のやどりに事かよひて。中〱おかしき住居なりけり。月の末には。家のあるじなりける人に少づゝのあたひをやる。もらひ求めて贈る時は。心を易し。贈ざるをりは。追出されむ事を思ふ。其是非にある事三十日。日ゝ世にむかひ。人に隨ふ毎に。にくまれむ事を悲しみ。譽られむ事をよろこぶ。油皿をこほさゞるがごとく。氷の橋をつとふばかりになむ侍りける。

「おの〱二ッの物。求ざりしむかし。髮すり足をかろくして。容も潤ひ。心もさかむなりしかば。十とせ餘り。こゝろざしの至るに任せて。乞丐のまねをしあるきけり。しかありしも。其境にいらざればにや。あるは風雅に魂うごき。あるは人情にすがた轉ぜられて。いまだ止ぬる道をしらず。折から深川の翁。行脚のつてに。かり初の緣を結び。その樣もゆかしかりければ。過し頃の春。江戸の府まで尋ね來れり。六十余州あまねく人擧り氣のあつまる所なれば。ゆゝしき事の數〱にして悲しき品をかくせり。まづはとて。翁を訪ひまいらせければ。古鄕の方に斗藪し給ふと。あたりの人〱こたえ侍りぬ。むなしき跡は草ふかき庵を閉て。はせを一もとを殘せり。藪梅のにほひ簾にちり。小鳥の聲軒にあそぶ。賴み來し心より。悲しみを求めて。しばしのあはれさいはむ方なし。情あるものありて。なつかしがりつゝ。我を伴ひ。おもひがけぬ此すまるのあるじとなせりける。それかれはちなみやすく。友とする人ひとりふたりまうけ侍れば。あなたこなたに思ひそみて。一とせあまり。ふたとせの春までとゞまりけり。翁も頃日歸庵なりしかば。かぎりある命に。求がたき願ひみちて。侘るにつのり。詠ずるに高し。晝は杖を攀。脊を曳て。志を雲雨の外にあそばしめ。夜はともしびをとり机にそひて。おほくは千古の餘を論ず。かならず世をいろひ。人を謗るとはなけれど。目なれ聞馴し。上ざま下ざまの品など。物ずきにいひのゝしるは。暫時の情をむすぶなるべし。かくてなむ。此春も春めきぬれば。霞の朦ゝたるは。目をくつろげ。梅のかうばしきは。鼻をうごかし。雲雀のちり〱と囀るは。我に流浪の思ひをすゝむ。嗚呼。いづれの時。いづれの里。いづれの狂人か。同じく此むねをあはれまむ。つながれたる庵は

ぬしにかへし。彼鍋は人にうちくれて。身は笠ひとつのかけを頼みて。行衛なき方をぞたのしみけり。

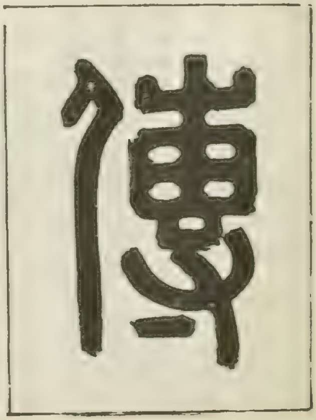
へ肌のよき石にねむらん花のやま

斷絃ノ文

許六

○鳥の嚶々と啼き。木の丁々とひゞく。專友をもとむるかなしみの聲也。人はいふにたらず。子を捨妻をすてゝ。山林の友にまじはり。琴を斷。金を擲て。まとのこゝろざしを盡し。語りかたらふこそ。うき世のおもひ出とはいふべけれ。假初の旅ねに。一夜二夜の別をさへ。かなしと思ふならひなるに。あるは雲井の國に貶せられ。遠きあら磯に配せらるるわかれ。いたりてかなしかるべし。されど濁江に影見ざる歎きのみにて。同じ世にすむなぐさめもある也けり。たゞ長門ノ國に舟を出し。廣嶋の方に赴く人の別は。みるめなき海士の呼聲のいなせもきかず。磯馴松の獨さびしきに音信るゝ便もなし。こしかた行末おもひつゞけぬる悲しさは。遣方なからん。我に方外の友あり。江東平田ノ邑。光明遍照寺。十四世の僧。亮隅上人。字ハ李由。一の字は。買年。四梅廬と號す。嘗て律師に任ず。姓は豫州河野の嫡流にして。安藝の宍戸を兼合せたり。母なむ。やむ事なき深窓の女にして。藤原なりけり。僧三代。我三代。あるは茶に交りてさびを好み。又は碁に暮して勝負をよろこばず。我レ僧は風雅に交る事二十余年。僧は寺を忘れ。我は家に歸る事をしらず。ひとつ蚊帳にむれ入り。同じ衾に足をつゝむ。若孔孟の理屈人を親にもたば。生たる甲斐はあるまじといへば。老佛のいき過たるを。子にしたらん時。身代破滅は立所なるべしとて。是より天地をそしり初て。牡丹芍藥はひくき花也。櫻海棠は能過たり。かれは愚痴。それは鈍なりとて。果は食好の上に落て。餅蕎麥切は食用にたゝず。終にはやみの豆腐に流れて、夜中の勝手をおびやかし。面目もなく其夜も明たり。月見。雪見。星祭。玉まつり。四梅廬の明ほのには。鳥の初音を待佗び。七種の踏草には。蕗の薹を捜す。筍の藪を覗き。瓜なすびの畠をあらす。風臺にふかれ。水臺に冷し。爐開きの次手には。歲旦の句を鍛ふ。煤掃の逃所。鰒汁の定舞臺。從者が無返事に空耳をつぶし。小僧が白眼もわきむいて通る。遲々たる春の日みじかければ。長々たる秋の夜長からず。伊勢住吉の物まふでの頃も共に奉幣をさゝげ。吉野龍田の旅ねの夜も。同じ花紅葉に臥たり。三日對せざる時は。

百日のおもひをなし。五日音信されば。三年の月日を隔つるがごとし。然るにことし寶永第二。乙酉の六月廿二日の夜。例の積氣胸膈（クワカク）にさしつめ。終に息絶ぬ。親族朋友のしたしきかぎり。末寺諸檀の僧俗男女。足を空にまどひ。國中さはぎかなしみ。四日五日はとりつゝみ物しけれど。壁生草（イツマデグサ）の。いつまでかはとて。終に夏野ゝ原に送り捨て。平田山に立のぼる一すじの烟に。遠近の里人もいまはと思ひやるべし。後の事共は。有難きかぎりとり盡し。法中の高僧。日夜に席をかさね。和泉なるはらからの御坊も。朝夕のまとをつとむ。中陰の日數も程なくすぐれば。つどひあつまれる人〳〵も。おのがかたざまにわかれさりぬ。反魂の香も。招魂の祓も。共に手ぶるき處を好まざれば。ふたゝび佛を見る人もなし。無碍（ムゲ）堂の垂布（タレヌノ）の色も。鴈来紅に時を奪（ウバ）はれ。五老井のまつ宵も。一人の席を欠たり。つら〳〵四とせ五とせ。僧は肝腎に積（しやく）をうれへ。我は肺肝に疝をやむ。平生病がちに打なやみて。朝ﾀの露に世をはかなみ。夕の鐘に命をかぞふ。僧と我といへる事あり。我死ば。僧ロを閉む。僧身まからば。我絃をたゝむ。思ふに蕉門のはいかいも。日〻に衰へ。正風の血脉も。次第に絕て。きく人もなければ。する人も猶なし。孔子の道は。春秋にとゞまり。五老子がはいかいは。此文選に盡て。これより後。はいかい聞の博士（ハカセ）とはなる也。僧すでに身まかりぬれば。我果して絃を斷（タチ）ぬ。



東寰（トウカン）傳　世直　徽童傳　文考

公平（コウヘイ）傳　扱郎　五郎四郎傳　支考

霊鼡（レイソ）傳　李東　痴癡傳　李由

直指（ヂキシ）傳　許六

風俗文選 巻之八　五老井　許六選

○傳類

東順ノ傳　芭蕉

○老人東順は。榎氏にして。其祖父江州堅田の農士。竹氏と称す。榎氏といふものは。晋子が母方によるものならし。ことし七十歳ふたとせの秋の月を。やめる枕の上に詠めて。花鳥の情露を悲しめる思ひ。かぎりの床のほとりまで。筆みだれず。終に更科の句をかたみとして。大乗妙典の臺に隠る。若かりし時。醫を學むで。恒の産とし。本多何某の公より。俸禄を得て。釜魚塵の歎すくなし。されども世醫をいとひて。名聞の衣をやぶり。杖を折て薬を捨。既に六十年のはじめ也。市店を山居にかへて。楽む處筆をはなさず。机をさらぬ事十とせあまり。其筆のすさみ。車にこぼるゝがごとし。湖上に生れて。東野に終りをとる。是かならず大隠朝市の人なるべし。

　入月のあとは机の四隅かな

牧童ガ傳　支考

○牧童は。もと小松の素生にして。賀の金城に居る事年ひさし。家は研刀の業をもて。よのつねのたつきとはなせりけり。牧童は彼が兄にして。北枝は是が弟也。本より謝公が才能をあらそはされば。かつて院家の富貴をもうらやまず。たゞ同胞のあはれみ。をのづから世の人の鏡ともいふ也けり。むかしは梅翁の風流をしたひ。中頃は芭蕉の門に入て。時の風雅にあそべる心の。ふたりともにあそぶ所おなじからず。たとへば一巣におひたちぬる鳥の。彼は梅の花の清きに囀り。是は卯の花の曇れるにあそぶ。あそぶ處の同じからずといふは。たのしむ心の殊なればならじ。砥取の山の時鳥も。けふはとぎそと啼わたれば。夜を梟のあそび数奇とたりて。吟席交會此人をしらずといふ人なし。時に居眠りをもて。生涯の得物とせり。ある時は欄干の花にそむき。ある時は檐外の鳥を聞ながら。眠り来りねぶり去て。四十年の春秋も過行ぬれば。貴介もこれをわすれ。高明も是をゆるし給へば。終に兜卒の内院にも。高くねぶらんとぞたかぶりける。湖南翁。かつてある法師に向ひて。牧童はよき者なりと申されしよし。よくてあしからんや。あしくてよからんや。其翁ならずはしらじかし。

しからば生天は先なるべくとも。成佛は後ならんといへる。むかしの人の心も。人はふたりの人に似てや侍らん。牧童常にいへりけり。我むかし。芭蕉の翁にま見えて。武の素子堂が。浮葉卷葉。此蓮風情過たらんといふ句の。物語に及ぶ。此句は此蓮と聲にとなへたるがよしと。おしへ給へりし外は。別に何事もおぼえ侍らずと。時の人是を許して。けに人は人のならひありて。さらぬみなもともたどりたるやうに。およづけいふらん。かくたゞありの人は。世にたふとしと。されば世の中の老の坂越たらん。其人は飢寒の間におきて。風雅もやゝあやうからずといふべし。

東花坊賛して曰く。むかし人は。恒の産なければ。つねの心なしとて。つれ〴〵の法師だに。安部野のあたりに。花むしろ織て。都のつてには賣もせられしか。まして世にある此人ならば。硎刀のわざのみいときよけなり。かくするどなる物の中にも。かの居眠りのさむまじくは。物と我とわすれたりとやいふべき。物其我をや忘れけむ。我其物をやわすれ劍。ねぶるに時もなく。さむるに又時もなし。何がし和尚の。虎によりて居ねぶりたらん。世におこがましく見られがまし。ある上人は。目のさめたらん時。俳諧せよとも仰せられしか。扨はいかいは人の心にすまじきや。たゞ我心にすなりけり。然れども。人のおもしろがらずば。我もおもしろからず。此さかるをしりてこそ。俳諧はすなりけれ。さりや。はいかいは人の心をやはらけて。花に啼鳥の。花ならずしてかうばしといへる。世のまじはりの媒とならば。彼鶺鴒のはらからも。などや一巣のよしみなからん。俳諧はたゞ戯也。はいかいにはあそぶべし。世にたはぶれ。世にあそぶ時は。草苅笛の世にわすれて。牧童の名もおしむまじけれ。所謂素子堂が一蓮のちぎりあらば。其時の翁の心にあそびて。今も一字の師の影をも。ふまざれとなり。

公平ガ傳

汶邨

○坂田ノ公平は。何の處の人といふ事をしらず。源ノ頼義朝臣に仕へて。公時が男。山姥が孫とはいひ傳ふ。年のほどは三十あまりにして。終に衰老の容なし。其生質正直正路にして。人の異見を聞ず。一生彼が妻といふものゝ沙汰なし。其高名をいはゞ。夷が千嶋の末〴〵まで。しらざる人もなく。楢に見

たる者もなし。たゞ好む物には茶筌髪に鉄棒にて。其勇力のつよき事は。恰も木綿織物の名目にさへなりにける。かゝる兵も。すこし艶だちたる所のあるや。公平女とはいへ共。いまだ男子の號には蒙せず。治世榮花の程を見むと思はゞ。和泉大夫が芝居に走ッて。寺上りのわらんべ。又はつよみを好む中小姓の。感に堪たる顔つきを見るべし。つら〳〵無常迅速の哀をしるや。いづくの隠元禅師にはだまされけむ。ごそとすりて。公平道心とはこゝをいふ。剛き物先ほろぶためし。死ぬべき場所をこしらへ。終に黄泉に旗立せて。地獄破りの沙汰まではありて。其後は便りをせず。彼公平が手柄のほど。上下万民をしなべて。かんぜぬものこそなかりけれ。

五郎四郎傳

文考

筑紫に五郎四郎といふものあり。其性は小麦の餅也。明暮これに馴たる人は。たゞ五郎四ともいふ也。此もの野畠の間に生じて。肌をろそかに色くろし。しかれども菓子屋の手にわたりて。百練千鍛すれば。あるひは饅頭の肌やはらかに。かすてらの味ありて。ほとんど僧を落さむとす。むかし志賀寺法師の。容こそ痩たれ。心は花の都人を戀そめて。玉の緒の歌はよみ給へり。まして其名も。三輪の山本に住て。葛城の神の。晝のかたちにもはづる事なし。されば心くだり。姿いやしきだに。色はすつまじき世なりけり。五郎四何にか侘しからんよ。あるつらの人は。衣食の價をむさぼらず。酒醴婬坊の眼高しと。人の人にもてはやされて。こゝろの外に見ぐるしうやつれ。座上にありて。虱をひねる。さばかり捨はてたる世ならば。石上樹下のすまゐこそあるべけれ。しのぶ山の關路も。こゆる人のあればこそあれ。戀せじ。酒のまじとは。誰にかかためたるぞや。先師ノ曰ク。色をおもふ事。溫飩のごとくせよと。汝をよろこぶもの。日夜に愛せず。汝をにくむもの。絶て嫌事なし。しからば物のほどをいへるなるべし。汝が本性はいやしからねど。おほくは賤の女の杪子にかゝりて。ありがたき生涯をあやまる。されど世をてらひ人にこびて。身をかざらむとする人には。をのづからまさりもすべし。此さかるは。汝チ五郎四がしる處にもあるまじ。何晏がおしろいせぬ顔も。一世の願ひにはあらず。兵部卿の宮の。かりのにほひもまた化なりとしるべし。世はたゞ世にしたがひて。眼前のたのしびをたのしむ

べき事なり。
へ夕がほに鏡見せばや五郎四郎

霊虫ノ傳

去來

○浮世に米といふ虫あり。母は出雲の國。稲田姫のながれとかや。父はゆく衛もしらぬ稲のとのゝ。夜な〳〵かよひ來りて。かくはいなほの孕み初けるとなむ。ふるさとに侍りし中は。川水にやしなはれ。案山子法師にもりそだてられ。やゝ生ひたちぬるまゝ。賤のふせ屋に籾とよばれ。晝はあら莚の上にならび。夜はせはしき俵の中に臥。されど久しく民間にとゞまらず。地頭代官のもとに上られ。或は鞍つぼに這のぼりて。須磨逢坂の關をこえ。あるひは船板に飛うつりて。敦賀下田の沖をはしる。終に商家の藏の中にかくれて。おそろしき空音を啼出しぬるは。あやしき里に。春の鳥の花にたはぶれ。秋の虫の露をかなしめるおもひにもあらず。時しらぬ虫の音ながら。春は一しほ音もまさりけり。又は旱うちつゞき。雨風さはがしき年の暮には。かならず高ねを出して。嫠婦の胸をおどらせ。窮士の腸を斷せるのみか。乞食などのこれになきころされむも。いとあはれふかゝるべし。常に國〳〵よりあつまりて。おほき時はねよはく。旁〳〵に分れて。すくなき時は音つよし。まゝやみづからなかずして。人の口をかりて音をふるゝとぞ。あだにあやしかりける虫のしわざなり。たゞ冨貴の場にあそべる事をよろこびて。貧賎の竈に入事を耻。しかはあれど家〳〵にかひとられ。唐櫃の中の辛め見しより。ながく晝ねをとゞめて。いつとなく滅失けるにぞ。人〳〵は皆あきれ果侍られける。

疝氣ノ傳

李由

○疝は病の名にして。氣をつむ事山のごとしとは。素問の説なり。いづれの臓腑より出る事をしらず。陰經に城郭をかまへ。淫嚢をかくれ里にさだむ。常は腰のあたりに逍遥して。火箱煖母の陽氣にうそぶく。かれが一世の手柄をかぞへば。花に啼。梅に薫る時。人のとがめをうけず。卯の花に千聲万聲を叫び。陰を感じては。秋の野もせの聲よりもしげく。時雨ふり初る頃。火燵にやりわたしては。きり〳〵すのよはりにひきかえ。高音をはりても。屁負比丘尼の働も見えず。公界に出て不圖とりはづしても。をのづから咎を疝氣に蒙らしめ。病氣不相應の大食も。かれが病の色に取なし。青ざめたる顔色も。ふく病やみと名付がたし。貴賎老若。男女

小兒のさかるもなく。又虚實のわかちもなし。大雪をしり。雨氣をさとり。土用八專には毎度蜂起して。胸膈に積たはり。痰を帶ては眩暈を起し。怔忡をしては胸をおどらす。世に醫術の良藥ありて。三和五積の煎湯を施し。あるは蕎麥切のおろしに驚き。芥子番椒に目を醒して。斗方を失ふ時か。飛脚の腨にかくれ。鴻腹の勢ひにさそはれて。不圖此界に下る時。矢場に杖のさきに投出されて。巣は六條河原にさらされて。尸の上の耻辱をかうむる。一陣やぶれては殘黨まつたからずして。終に太平を謡ひ。腹つゞみを鼓いて。天下戸ざしをわすれたり。

へ噎や疝氣治る御代の春　　許六

直指ノ傳

○百年後の人に傳へて云く。誹諧直指の傳あり。たとひ上手の名ありとも。理屈あるは。眞の直指の俳諧にはあらずと知べし。むかし守武宗鑑より以來。興をとる物をはいかいと名づけ。實ある事はかつてしらず。先師はじめて。躬恒貫之の魂を見ぬき。正風幽玄の實を得たり。道のべの木槿は馬に喰れたるより。あら野猿蓑に至つて。正風の躰を備に顯はせり。俳諧中興の開山となつて。是より翁とは稱し侍りける。されば其風になびく門葉。里にみち。巷にみてり。されど理屈の境にまよひて。直指のはいかいは一人もなし。夫理屈を離るゝはやすし。理屈をはなれたる後は。趣向をはなれ。手に携る一物もなし。人麿のほのぼの。赤人の田子の浦の場所は。先師のはいかいにして。ふるくさひかへりたる事は。たゞ百人一首の歌を見るがごとし。無爲の妙句はいひながして盡ず。跡に光明の光を放つ。理屈の句はつまりて跡へもどる。是彼ノ光明をあやまり覺て。終に理屈の境をしらず。和歌は貫之より。基俊。俊成に傳り。連歌は宗祇宗長とつゞく。今先師の俳諧血脈相承の者を聞ず。我東に赴き。始て師にまみゆる時。旅の句問れけるに。宇津の山にて。

へ十團子も小粒になりぬ秋の風　と申ければ。師驚ていへり。汝いづれの敎によつて。愚老が流を見届たるやと問。我あら野猿蓑を師とすと。吾子は誹諧の集を見る者なり。今わが膓は見ぬかれたりといふ。再會の日。嵐蘭子に語つて云く。我門人の器をもとめて。はいかいを殘さむと思ふに。昨日許子に會して我が望を休せり。撰集に我が魂をとゞむる時は。後代許子がごときも又あるべし。千歳の後も。愚老が血脈は朽ざる

事をしれり。其後三月盡の夜。師來りて。終宵閑談して。衣更の句を望めり。我一兩句いへどいまだ叶はず。師ノ云ク。すべて世の人。句の慥を好む。上手はあやうき所に居れり。されば上手の上には。かならず仕損じおほし。愚老が當歳旦。

〽年々や猿にきせたる猿の面は。まつたく仕損じの句也と。我問。師の上にも仕損じありや。答て云。毎句あり。仕損じたらんに何のくるしみかあらん。下手は仕損じを得せずと。我此時はじめて眼をひらきて。

〽人先に醫者の袷や衣更といへば。師ノ云ク。是也。吾子が俳諧の底は此所にてぬけたり。はいかいに底ある者は。新古にわたりて自由を得ず。愚老は常に許子が行末を恐れて。みだりに句をいはず。諸門人油斷すべからずといへり。當時もてはやす門人の俳諧は。全く先師の流にはあらず。晋子は作を好みて。己が一風を立たり。猶頃日の風躰は。はいかいの名を改め。酔とも酒とも名づけたらんに。何のたがひかあらん。東花坊は賢き者也。先師身まかりて後。みづから上手といはせ。師說にうとき事もあるにや。虛實新古の取ちがへも有べし。俳諧を弘むるには利ありて。はいかいの道を殘す爲には。おほきに害あり。他の俳諧の事はおいて論ぜず。其角支考は下手にてはなし。先師の口觧はよく眞似ける。芭蕉流にはあらず。はせを流正風躰の血脉を得たる者は我也。當時ははいかいに醉て甲乙をしらず。後世は忽醒て善惡を定むるに遠慮なし。其遠慮なき人に正風躰を示す。

三月盡

〽けふ限の春の行衛や帆かけ船

〽春なれや田の青苔に啼ク蛙

〽四五月の卯波さ波やほとゝぎす

〽わが跡へ缺口立よる清水かな

〽欄干にのぼるや菊の影法師

〽看經の間を朝がほのさかり哉

〽初霜や鐘樓の道の沓の跡

〽はつ雪や治る江戸の人ごゝろ

是先師滅後の句也。先師生前の耳を驚せざるも無念にして。今又一人も。此何の腸を聞人なきこそ。猶又無念の事なれ。後人芭蕉翁の血脉。嗣人なしといふ事なかれ。今此傳を讀で。定て過當といはむ。謝して云ク。過當人も死し。又過當といふ人もほどなく死せむ。これその怒をやはらぐる處なれば。かならず見ゆるしをくべしと云〻。

○**碑類**

五老井　許六選



壺ノ碑

在奥州市川村多賀城

芭蕉

○つほの石文は。高さ六尺あまり。横三尺ばかりか。苔を穿て文字かすか也。四維國さかゐの數里(里數カ)をしるす。此ノ城。神龜元年。按察使。鎭守府將軍。大野朝臣。東人之所里(置)也。天平寶字六年。參議東海東山節度使。同將軍惠美朝臣(原本朝ノ字ヲ脱セリ)獦。修造而。十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る歌枕。おほく語り傳ふといへども。山崩れ川落て。道あらたまり。石は埋れて土にかくれ。木は老て若木にかはれば。時移り代變じて。其跡たしかならぬ事のみを。こゝに至りて。疑ひなき千歳の記念。眼前に古人の心を閲す。行脚の一德。存命の悦び。羇旅の勞をわすれて。泪もおつる計になむ。

笠塚ノ碑

李由

○江東平田邑。光明遍照寺の地に。先師はせを翁の笠塚あり。十四世の脩栞。蕉門に入て學をつむ事二十余年。恩は琵琶湖より深く。をしへは打出の眞砂より高し。朝には香華を備へ。夕には句を錬て。推敲を定めむ事を祈る。むかし芳野山にのぼりては。花の明ほのを見せかけ。竹植る日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に。時雨霰のいかめしき音を。侘られたる俤もなつかしとて。死後に此笠を乞うけ。終に土中にこめて。門人各一句をさゝげて。か

の塚に同じく納む。世に報恩を殘した
る。長崎に尾花塚。深川に發句塚。
越中に翁塚。木曾塚は直に遺骨を葬
る地なり。されば西行の塚とて。國〳〵
に殘したるも。此類（タグヒ）ならん。あなかしこ。
死後の門人。師にま見えぬ事を。なげ
く事なかれ。はやく此塚に來り。季札（キサツ）
が釼をかけて。一句をたてまつらば。
生前の門葉にひとしかるべしと。弟子
李由字買年謹でこれを書す。

辨



風俗文選巻之九　五老井　許六選

○辭類

詩歌誹諧辯　文艸

○一士あり。火燵壇上に誹毫を把て。誹生に示して曰。泰平鼓震つて。風雅四海に波わく事久し。中にも俳道の一流。あらゆる國郷に入わたりて。村童野老も干矛を流し。鍬杖を朽さむとす。しかれども。詩歌の高みに凉居て。古人よばりする輩は。にが〳〵しく彈指していへり。渠がと。なんぞこゝろざしをやしなひ。道におもむくたよりならむや。ひとへに滑稽の雜口。虚言にして。俗中の俗なるもの也と。今我一辨を出して。銘〳〵の境をあらため。道〳〵のをし及べき所を判断すべし。まづ和歌の德たる事。誰かあふがざらん。上つ代より傳へ來て。人の心を種とする言葉。其職より貴らるれば。鬼もあら男も。頂をたるゝ正道なり。其様躰。たとへば雲の上人の。衣冠つやゝかに。帶笏けだかうして。轅の中にいまそかるがごとし。青侍白丁はな〴〵しく。警よそほひ。住吉玉津嶋と氣色うかび。あるひはよし野はつ瀬の遊山めきたり。たま〳〵には富士。あさ間。須磨。明石の逆旅に。雨のとま屋の夕暮までは。ながめ盡しぬれど。さすがに蛸壺の底さし覗きて。あはれしるにたよりなく。小鰕まじりに。絲馬鳴蜑の屋には。腰かくべき褥も見えず。まして野くれ山くれのはし〳〵。牛道。鹿道。猿すべりの邊は。名を聞にも及ばず。これその位高く。官高きが故に。下に臨める風景。業る物おほしといつつべし。誹ははなはだ無碍自在にして。志々のおもむく處。辭の隨ざるはなし。其躰行のすみやかなるありさま。かの名におふ。八匹の駿馬をまるめ合せて。飼にかふたるがごとし。手綱すれば。鞭面にしどまり。撲すれば。四方八極。時の間なり。況やその上の風流。山を見て後むきに跨り。何を練て手間をなしぬ。鞍の上鼻膀りにして。前後左右かけ障りなし。嗚呼快なる哉〳〵。如何せむ。今是に乘るものの。おほくは桃尻なる事を。俳諧のかたちたたるや。簑笠竹枝帰鞋しめつけて。朝立したるがごとし。京田舍去嫌ひせず。一所にあなまどひせず。雪の市中に押れ。陽炎の芝原にこけたり。あるは山寺の小料理になぐさみ。士亭に逗留をおかれたるも。一段の笑ひなるをや。月

ほとゝぎすの曉を。木の根。岩ばなに寐覺て。又見ぬ方に步をすゝむ。はてかぎりなき津〻浦〻。薩摩潟。蝦夷が千嶋の門背戸までも。さらばいへ。殘す物あるかは。是吾道の廣みにして。我あそび所といふべし。氣のむく處。目のおよぶたけ。風せよやくと。寐ておほえず手をうちけれど。從者は例の茶に倦じて。火の氣を打消し。勝手は夜半の時雨じみけり。

定先後ノ辯

支考

林紅法師。むかし浪化に具せられ侍りて。吾翁と物いひ。顏をもしれる(りカ)ける人なりしが。其頃は年いとわかくて。風雅もねぶたきころなるべし。此地に嵐青のおのこありて。其時の次手ならん。手水湯もまたなつかしき梅の花といふ句を。手水湯に竹椽あをし梅の花と。翁の生前に筆を添られたれば。かれは林紅が下にたゝむ事を耻。是は嵐青が上にあらん事をあらそふ。其あらそひは。まことに君子なるや。東花坊これが判者たらんといふに。いとけぶたし。風雅に通じて。翁を見ざる嵐青は。見ぬ戀にあくがれ。翁を見て。風雅に通ぜざる林紅は。逢ってあはざる戀なり。いづれも戀の部にはありながら。心とけぬほどはいかにかまさらむ。くらぶ山の嵐も吹あへず。あだし野の露もをきかはりて。八とせのむかし語ならば。我も其翁は戀しかりける。世に風雅の信あらば。其翁は湖南におはして。面白き人には見ゆべきとなり。されば風雅の心にあそべ。心の風雅をば求むまじき也。

へ逢坂も粟津も果は秋の草

豆腐ノ辯

許六

○むかし晝とあけ。夜〻と暮たる時。豆腐といふ物一丁出て。名もなく。類もなく。甲もなく乙もなし。たゞうまきと斗おほえたるこそありがたけれ。それより小路〻に出生して。世〻の聖賢に料理せられ。昔豆腐は。石部金吉とてすたり果て。今やうのおぼろめく物を。豆腐の聖とはいひはやらす。猶五倫五常の獻立を作りて。是は仁也。それは義なりと。急用に取出す。七つ入子の三つめ五つめを。求に應ずるには似たり。田樂一串にも。仁義は自然にありて。天地をつらぬく風味はもてり。折ふし藪賢人あつて。豆腐をあへ物にせむといへば。朱子程子の塩から口は。これを異端寂滅と呵すれども。元來聰明睿智の飛助ならでは。此行過はならず。たとへば用名ノ介が（朱ニ遇名ノ介ニ口傳云〻）隣家にあたつて。碓を穿てり。終日耳

中に客たり。過去の聲は盡て。未來の音はひゞかず。たゞ一聲の碓にして。終日一聲のからうす也。許由むかし。堯の天下をうけず。なりひさごもかしがましとて捨たり。天下國家のたくはへは。輕して棄るにやすく。耳中の瓢の畜は。重うして捨るに難し。巣父が牛をあらはざるは。元來許由が耳の汚れたるを。にくむなるべし。和漢同じ耳垢等が。ほめしるしたるこそ口をしけれ。されば前後なき事をみづからしらば。すたりたる田舍豆腐も。開闢一丁の豆腐に。異なる事は。なかるまじかし。

天狗ノ辯

木導

○萬の形ある物。いづれか畫圖にうつされぬ物はあらじ。されど眞向の天狗ばかりはなるまじとて。繪かく人は常に笑ひ侍りけり。いかにぞや。天狗しりの古法眼も。正面の鼻にはこまりぬらん。此もの。神祇釋教にもあらず。人倫生類の部をのがれて。俳諧の爲には。よき道具ならむ。世の人の我慢長ずれば。鼻にあらはれ。天狗となりて。杉の木ずゑに居をトし。愛宕高雄の山住を好み。都の秋のなつかしとや。うき世の嵯峨のあたり近き。嵐の山の夜あらしに。木の葉天狗ぞさそはるゝ。又は大峯かつらぎや。高間の山の花ざかり。富士の高根にねぶりては。月雪のふる里をわすれたる。浮世のさまぞあはれなる。されど名歌などよむべき顏にもあらず。かの里も出かはりやありけむ。虛氣たる男をたぶらかし。嫁取もせぬ宿に。礫を打かけ。火事をすかれたるこそうるさけれ。かゝる境界にも。何の奢かありて。無盡の沙汰には及び。天狗賴母子と人にはいはれ。弦めその一座につらなり。六波羅の酒盛には。醉狂ひの擧句もいぶかし。うるさき顏にても。花の都人を戀そめ。牛若殿に浮名をながし。心中のしるしにや。爪をはなし。果は竹生嶋に送られて。たから物の數には入ぬ。ある人。洛の大儒に天狗を問。これ深山幽谷のいきれより。かゝる變異は生ずる也。何の怪とするにたらんと。されば天狗を山谷のいきれといはゞ。麟鳳は聖人のいきれならん。尾長虫は糞土のいきれにして。虱は乞食のいきれなる事儻なるべし。

手足ノ辯

汶村

○甲冑のよろひかぶとをあやまり。行燈挑灯をとりちがへたるは。むかしより國中みな誤りおぼえければ。却てあらためたる人を。あやまりといふも理ならん。こゝに一身の中。足をいやしとし。

手を貴しと定め置たるは。いづれか賤とし。いづれかたふとしとせむや。いやしとて。雑に斬捨たる人もきかざれば。持にこそ定メ置たけれ。それ足は行歩を産として。外の用をしらず。沓木履をかけ。草履わらぢをはきて。直に土をふます。居る時は。平生錦につゝみまはし。あゆみつかるれば。馬駕籠に扶乗られ。千山万水の間に動して。風情に嘯く。手は一身の奴にして。定めたる座なし。頭の虱を捫り。眼のあかぎれを撫る。至らざる所なく。又なさずといふ事なし。是いやしき事の第一なるべし。貴人高家の傍に。侍女小姓のつとめあれど。眼の役ある事を聞す。されば我脚にて。他の鼻毛の塵を拂はゞ。人怒つて。我を罪せむ。人また我頭の蝿を。足にて追はゞ。我是をたふとしとおもへど。世の人我に代つて。にくみのゝしれ。怒をうつして。我を阿方と號するこそ。おほきなる僭上なれ。其僭上人。蒲團簟に臥て。休する時も。かならず足を伸すを一番とす。湯に入ん人も。足からならでは這入がたし。向後足にあたらしみをつけて。手を古風のふるみにおとさむ。但し徳利子は。各別の沙汰なるべし。

人参ノ辨

許六

○夫レ人参は。元氣大補の聖藥也。とりわきからやまと。これを貴とす。三十年来の和醫。人参なくて。人を療する事かたしと見えたり。邪氣温熱陰虚火動のわかちもなく。人参〳〵には。病家おほきに草臥たり。凡人参の斤兩はかぎりあり。かぎりなき人参つかひに買とられて。世界の人参。貴をまし。時を得たり。價高直にして。凡夫貧僧の口に入事かたし。産は朝鮮を最上とす。其代物。たゞどころに魂を失ふ。醫家利の産を好るゝは。おもきがうへの小夜衣。質に置より外はなし。彼ノ人参醫者を察し見るに。理屈人の利に貪する心になぞらへ。又は佞人の價高直物にめでゝ。ひたすらたふとまるゝと見えたり。人参の力にて。あまねく人の命をたすかるならば。邊塞醫療なき地は。人種は盡べし。たとへ死ぬるにもせよ。人参に殺さるゝ者なし。人参ある國は。人参にて人を助け。又人参にて人を殺す。生死の算用は。持にして置くべし。されど大切の金銀。ついへぬ方勝ならん。やまひに三ッあり。人参にてたすかる病。人参なくて治るやまひ。人参にて死ぬる病。此三ッの内。人参なくて事欠ぬ方。ふたつなれば。是もひとつの勝なるべし。我沈痾老衰して。

折ふし人参を用ゆ。唐の産。朝鮮の産。其功すこしもかはる事なし。醫家は人にあたへて。外より察し。病者は我が呑て功を知る。たま〳〵病家に入て脉をつまみ。そこ〳〵に尋ねちらし。病見どをしの顔つきにて。合點〳〵で歸らるゝなり。彼ノ人参にもり殺され。忽あたりたる事をしらず。其功いまだとゞかずして。むなしくなりたるに極ぬれば。又人参のきゝたるをも。たしかには知リ給ふまじと覺束なし。きくとあたるとの境目もわかれざるに。朝鮮唐の産の微細の詮は。知リ給ふまじと。猶〳〵おぼつかなし。我レおもふ唐より渡す所の。數百方の醫書。皆唐人参にて組たる方也。若シ人参朝鮮にかぎらば。其國所を記すべし。唐人何ンの遠慮すべき。されば川芎窮弓のたぐひも多し。それ萊菔は。尾張の産を極上とす。されど大根のなき國所。なくて事の欠たる事を。きかざるがごとし。それ醫道。俳諧。よく相似たるべし。醫者やまひにむかひて方をつけ。作者前句題に望みて。趣向をよする所。其理屈をはなれ。つく。つかぬの危き境は上手名人の手際。同じ場所ならん。當時醫をまなび。歌道を習ぶ人を見るに。其稽古前後なり。まづ所作を盡しからして。なを其道に精からん時の。學文なるべし。これ古人上手の仕かたなり。さるを學文よりまなび入て。一切理屈にてすますゆへ。祭過ての皆掃除也。むかし丹溪。素問を見て。四十より醫に入る。古今の醫聖と稱す。すべて醫學は。狭き物ならん。道を盡し。理を究るは。素問一部の事也。其餘は。味噌塩の献立にして。以呂波寄の字盡を引よりもやすかるべし。今の上手めく人は。毎度素問の語で堅め。本草の説をつばなかす。文盲の病家。平詞を信ぜずして。大きに漢字に驚きて。上手名醫に極む。當世のやまひは文盲にて。素問本草を聞しらずして。彼ノ名人の御薬はかつてきかず。ある人犬の吠かゝるには。虎といふ字を。書て見すれば。忽にぐると習ひ置て。ある時人喰とびかゝりけるに。習の文字を書て見すれば。其手にくらひつかれけり。日本の犬は文盲にて。虎の字のよめぬがごとし。たゞ理屈より理屈にくひ入リ。是は上を見てゐる句。これは下を見てゐる句なりと。小刀劔の小細工は。みな素人に耳ぢかければ。終に理屈にすゝめ入レて。理屈地獄に墮すなり。されば霍亂の賣薬は。はくらん病が買なりとは。名人の一言なり。百年の後。若シ理屈がすたらば。わが借上のこと葉も。又眞となるべし。

射御ノ辭　許六

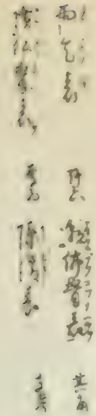
○比類なき勇武の木陰をたのみ。百年の高恩は。廣く天をいたゞき。三代の俸祿は。徒に地をせばむ。是を食る腸は。忠義をのべて形となし。武道を錬て肉を作る。膚たゆまず。目まじろかず。能登殿の矢尻は。胸板におれこみ。彦四郎が切先は。腹の皮におさめかくす。老は齋藤が鬢にちかより。年は諸葛が齡に隣る。嗚呼千行万行の涙をおとし。三思一言の辭を殘す。夫レ武士の武道だて珍しからずとて。商人のなすにもあらず。たゞ武士は。武士の眞似がよき也。さればとて。武士の武士臭きは。鼻を覆ふ。おのれ〳〵が家職の。ふるき事をしらず。魚物野菜のたぐひも。ふるき物はかならず臭し。武士の武藝を好ムといふは。本意にあらず。其武士幸ィに武藝に好當れり。博奕遊興好に會てかはらず。武術力量をあてにおもふべからず。馬物具を賴むべからず。佐々木四郎は。わが氏姓の祖なれど。生食賴みに宇治川の先をかけられたり。もし世に生食和墨なくば。先のならぬも不自由なるべし。搦手數方の油斷人。一騎も殘らず渡しぬれば。佐々木が鎌倉の荒言も。すこしは是にて戾りけり。嘲笑ふに似侍れど。佐々木。梶原になづまぬものは。おほきに褒たる言葉とは。かならず知べし。一とせ大坂表におゐて。穴澤といふ天下無双の長刀の名人も。折下外記にたばかられて。終に組討には討れたり。一生の骨折は。此時一度の用なるを。打わすれたる不覺仁の。穴澤をいふにはあらず。たゞ藝術を賴むべからず。むかしより。一番鑓をしたる人に。上手の號もなく。又下手の號もなし。かくいへばとて。武藝をなすなといふにはあらず。武藝の名稱は。太平の代の看板なり。武藝とて。我役にあらぬ事は。せぬがよし。しらぬといふて恥にならず。立身にしたがひ。役替にのぞみて。其時すみやかに當役は習ふべし。其癖當役は無沙汰にして。いらざる說經者の馬乘習ふたぐひならん。一藝すぐれたりとも。武の全きにはあらねど。一藝をも愛し給ふは。大將の役なり。我わかゝりし時。此道にふかくわけ入。春の花のむなしくちり。秋の月もおもしろからず。あけては食をわすれ。暮ては寐る事をしらず。されど弓は力よはくて矢束を引ず。玉打は目にやまひありて。細ヵにあたらず。此二いろの道は。口おしく欠たり。凡ッ手足にかぎりあれば。しりても持では益あるまじ。劒術は。母方の祖父にしたがひ。正法

念流の兵法を學び。すでに未來記の奥義を傳ふ。祖祖父より四代の門弟。二千余人の中。未來記を鬮もの纔二三子に過ず。これ劍術諸流の源也。鏈は横手物に利ありとて。父が術を繼。寶藏院の法印より。我〻に至りて五代なり。馬は悪馬新當流を學むで。かけひきの道は達者なり。此三のものは。一騎武者の手足にして。これをしらぬものは曾てなし。これに精からんとおもふに。太刀打はつよく首に斬つけ。鏈ははやく敵の胴腹を。突ぬくより外に道なし。馬は其品おほし。よく乗得たりとも。軍馬の上をしらぬ時は。おほきに欠たりとて。黄母衣の隨一。河合氏の祕術を尋ねて。常に數巻のおもむきを。ふところに納む。馬はわが足なり。いたはる道をしらでは。息合病馬に疎しとて。大閤秀吉公の愛臣。桑嶋左近は和の馬師公也。此術をたづねもとめて。百二十巻の祕方に渉る。馬の好悪をしらざれば。求る道に疎し。古今目利は一流にして。山上入道が傳也。世に馬を見るといふ人あれど。山上入道の名をだにしらず。まして深き習ひある事は猶しらず。往昔は此藝稱せられて。祿をいたゞくものおほし。今はしる人さへなくなりたり。これを段の目利とはいふなり。馬上の五物。鏈合。太刀打。早乗。早をりは。鞍鐙の善悪によれり。これをしりて求めざれば此事かなはず。大因幡三代より。代〻の手曲をしり。寸法。曲尺合。殘る所なくおほえて。これらを常に肺肝の間にかくし。泰平の世の安居の樂となせり。汝ひとゝなり。筋骨つよく。力つきなば。おのが分限をしりて。當役を勵むべし。功成名遂て餘力あらば。天地陰陽の理を探り。仁義五常の道を學びもすべし。これを文武の侍とはいふなり。かならず文にながるゝ事なかれ。武士は武道を先にして。文は後にと心得べし。今吾が猶子十歳の時。遺誡のはじめに。此辯を書して。武の魂をいるゝものなり。

○表類

五老井 許六選





雨乞ノ表

許六

○皇天天に位し給ひてより以来。四海の民を愛し。農業おこたらず。蠶飼時をうしなふ事なし。あまねく御うつくしみの波は。八嶋の外までながれ。ひろき御めぐみの風は。いたらぬ里〳〵もなかりけり。しかるにことしの夏六月。おほひに旱して。雨一すじも降らず。千里草枯て赤地となり。百川水盡て川原となる。野老たふれふし。村翁饑つかる。牛羊喘ぎはき。犬馬舌こがれたり。白雲に星あらはれ。日月に赫ゝとしてあかし。龍神も岩穴に引こみ。鳴神の駒も蹄を閑してたゝず。土器の大豆は。忽いれこがれて。水晶の艾は。たゞところに火となる。白鷺の鳥居は出て。菴原の寮を悩し。匙般若あらはれては。曲者の外を盡す。大葛桂の水いさかひには。鋤鍬の鉾先をあらそひ。鳥羽の田づらの古井を識っては。前畝のひまもなかりけり。されば國王もまとありて。政たゞしく。古代の風を興し。かりほの庵のあらはなるをあはれび。寒夜のあかつきには。御衣をぬがせ給ふ。百官忠義を盡し。郡主民を撫ては。かぎりある貢物をゆるされけるに。天何の科があつて。かゝるからき目見せ給ふぞ。神泉苑の昔さへしるしなくて。布留の社の名のみ空し。牛を洗ふては雨をいのり。簑笠をかけては氏神をたのむ。天はやくあはれみをたれて。雨をほどこし給はゞ。御湯は大釜を甕し。相撲はあたらしき鼻神をかゝげむ。猫ひたびたる

笠の躍もおかしく。甚東州立に揃はずとも。借着ばかりはゆるされて。摸様は天道次第たるべし。庄屋肝煎謹んでかくのごとし。臣悲歎の情にたえず。拝表して以て聞す。

嘲佛骨表　其角

古文傳ノ積進讀孟嘗君傳之例

○むかし韓退之。表を奉つて佛骨を嘲る。今我これを讀んで。退子をあざける。人死して骨となり。骨朽て土とかはる。佛骨何の王位をけがさむ。佛骨もし人を穢さば。禽獸の皮骨は。猶人をけがすべし。人は天地の靈にして。禽獸人に及ばず。夫東帝のかざりには象牙をたふとび。珍寶の飾物には。虎豹の皮にふす。鼈甲は笄につくり。尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸。牛角。鯨の髭のたぐひ。宮室を飾り。器物を造る。たゝき膾は。なめて口中を潤し。雉子の胴鼓。蕉骨は。膏で直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし。禽獸をたふとしとするは。何の謂ぞや。若佛骨細工のたすけにもならずといはゞ。はやく疾鬼にあたへて。錢かねとせざる。假令拂底の鬼なりとも。虎の革の犢鼻褌は取べしと。かれが淺見を嘲つて。しかいふのみ。

へしばらくは蝿を打けり韓退之

讀佛骨表　厚爲

○佛骨は西域の人の骨なり。漢土を飛こえ。日本に來る。豆蒟蒻に足突給ふな。いらざる長逗留して。厨子にこめられ。外より鎖をおろしぬれば。大小用にからき目見給ふこそあはれなれ。はやく手作の紫雲に打のり歸去給へ〳〵。

へから鮭の舍利にならぬこそ過分なれ

陳情表　支考

美濃ノ國山縣郡ニ。在ル三輪ノ明神ノ社。淸輔ノ袋冊子ニ。記ス此神詠ヲ。東華坊。作テ文奉ル此ノ神ニ云云。愚謂借用李令伯ガ之表ノ題號ヲ耳。

○世に天地ありて。天地は人の父母とこそいふなれ。人は万物の上にたてる物なり。その人に我あり。その我に東華坊ありて。西にあそぶ時は。西花坊ともいへり。東西の二華は。支考が坊號にして。野にある時は。野盤子といひ。家にある時は。獅子庵といふなるべし。さるは此御神の氏子にして。風雅はをのづから漂泊のたつきとぞな

れりける。むかしは桑門に袂を染て。ほのかに祖佛の影をしたひ。中頃は翰窓に灯をとつて。ふかく孔老の腸を見むとせしも。をのれが智をたのみ。物の理にたどりて。たゞ春の蜂の。窓にまどへるたとへにぞ侍りける。一とせ湖南の幻住庵に。白頭の翁を見て。才能は文字をはなれ。風雅は心を。あそばしむる物なりと聞て。此翁とあそぶ時は。酒にえへる人の。何ゆへならでも。たゞおもしろきこゝちにぞ侍りける。翁の曰く。俳諧といふに。三ッの品あり。寂莫はその情をいへり。女色美肴にあそびて。麁食のさびをたのしみ。風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繍に居て。薦着たる人をわすれず。風狂は其言語をいへり。言語は。虚に居て實をおこなふべし。實に居て。虚にあそぶ事はかたし。此三ッの品は。ひくき所に。高き所をいふにはあらず。高き人の。ひくき所をいふなりとぞいへる。されば此さかるは。人のほめ。人のそしる所なるを。ほめられむとおもひ。そしられむとおもふ。をのれがおもひにまどひぬるをと。理ははじめていたりぬ。事はつくすべからず。かくて俳諧は。まのあたりにありて。口まさにいはむとすれば。心のくまをつくさず。人のやすき所をまなばむとて。をのれはむづかしき奥をたどり。をのれむづかしからざらむとすれば。人は金玉の手づまをつくす。ふかゝらずしてあさく。あさからずしてふかし。朝におもひ。ゆふべにいねて。此心又やすからず。ある夜。曲翠亭にあそぶ事ありて。尾の荷兮が。蔦の葉の一句を評して。俳諧はかくいひつくすまじきをと申されしに。さはとむづかしき夢の。さめたる心地ぞせらる。落柿舎のぬし。洒落堂のあるじも。おなじ夜のあそびに侍りて。我はかくおぼゆるをといへば。人はさもおもはずとこそ。あざむかるれ。よしや我心のせまりたらん時は。焼火の轉寐に。雪折ゝ竹をきゝ。戸の節穴に。稲妻を見ても。我はかくまどひたりと。おもひしらんに。我はわがやすき所をしれりけりと。今宵はじめてぞさだめける。是よりあづま路のかたに旅立て。松嶋象潟のながめにあき。越の白根のしらぬ行すゑも。心づくしのたびねをだに。生の松原の名によそひて。いけるかひありとぞ見はてぬる。今年は老の名によばれて。此古里の春をもむかふるなるべし。人の命のさだめがたきに。耕ずして食ひ。織ずして着る。我はた世の人に。何をかおふせたらん。入ては此神の光にてらされ。出てはかの翁の徳にあそぶ。俳諧はおのづから。人の上にいはれて。我は

いかいの人をあやまてるなるべし。人の俳諧のあしからんをば。我俳諧のあしき也。我俳諧のよからぬをば。神の風雅のよからぬをといふべし。まして夜居りの神心には。朝寐も身につみておほすらんかし。此表をいさにくみ給ふな。疎くはかうまで頼むまじき物を。たゞ俳諧に命をかふべくとも。四時の變化に私なからんとを、幣の御まへにかしこまりて稽首の涙をかけ奉ける。



風俗文選卷之十　五老井　許六選

○論類

旅ノ論　許六

○陰陽にしたがふ蒼生は。これ皆天地の蝸蛆也。脂食に生ずる蛆は。生れながら粮に富。口あきて夜〻出る鳥は。觜にさはるをとりて。やう〳〵おのが糧とす。さればとて粮のとぼしきを歎き。俄に業をかへむ手段もなければ。木啄のつゝきまはり。蜘蛛の網を張て。待より外はなし。つら〳〵東西に奔走する旅客。粮の爲にせざる人稀なり。かの中に。風雅に旅する人に代て。論をくはふ時。こゝに大國を領じ。大軍を將て。往來する人は。粮を求る事おほひなれば。又その罪も甚深し。又貪引の錢をたくはへ。十一二灯をあつめて。ぬけ参りする一藏

三歳。一生の間を是に論足して。五十歳をやしなふ。かれと是とを論ぜば。二歳三八が上にたつ事かたし。一日の糧。一月の粮。一年のかて。一生の糧。もとめたくはふる計。其根ふかく。其源とをし。又馬士舟子輩にやかれも。時に生涯を果す。圓位。風羅のたぐひも。旅に死なむとはかりて。心のまゝに終る。されはかたちの似て。志のたがふ所は。雲泥の論なり。我ことし衣更着のはじめより。五月の半ばまでに。旅する事。すでに四百余里。おのが身ノ上を論じて見る時。大軍の將は。罪重しといへども。其利益大きにふかし。吾今日の一錢をも求めず。五斗の米を備ふて。東西に漂泊する事。馬子駕籠かきの論に落て。終には並松の間に餓死せむ。されはとて。鯖めしの蝿を願ひ。蓑虫の粮に嘯けるを。うらやむにあらず。

仁不仁ノ論

北枝

○楯つくる人は仁にして。鏃するものは不仁なりとかや。醫をなす人は國を醫し。醫レ人ヲの名目は仁にして。實は不仁なるべし。病者おほく療する人を。名醫とも。はやり醫者ともいふ也。其はやる所をよろこび。乗物ざしめかして隙なからむは。不仁の第一なるべし。されはとて。かの藪醫者のはやらざるも。仁とはいひがたからん。たまくの病人とて。むかへたらんをうれしと。羽織打かけ。時得たり顔に。はしり出らるゝこそこれも不仁なるべけれ。むかしもろこしに。矛盾を一荷にしてうる人あり。矛うらん時は。いかなる楯もたまらずといひ。盾かふ人には。干将鏌鎁も。通る事あたはずといふ也。かたへの人きゝて。其方が盾を。其方が矛にてとをさば。いかにやと問れて。終にものいはずして。本國に逃かへりぬ。これを矛盾とて。おかしきたとへにはいふ也けり。吾朝にはこれをやはらげて。慶庵とも。ゐるしやほんともいふ也。又は小村の道場坊も。藥をほどこす道は。仁者なれど。これもはやりをよろこばれて。縮禮者にかはる事なし。又は後生たすけむといふも仁の道にちかし。されど釋氏も死をよろこび。鉦打ならしてとぶらはるゝは。これも不仁の沙汰なるべし。むかしより此譬を。穢多の伯樂とはいふなりけり。

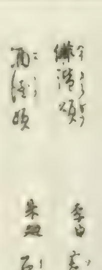
蕎麦ノ論

許六

○天は天ずき。地は地ずきにして。いづれの時。おもき命あり。又は誰レ人頼みあつらへ。陰陽五行を以て。万物化生する事をきかず。聖人天地の沙汰を

大きにほめたり。天地はほむれ共よろこびず。そしれどもいからず。これ皆聖賢の理屈にして。元來天地に分別はなし。天は升る事を好。地は降る事を好みて。四時の骨おり。晝夜の苦勞。人もやとはぬ儋上こそ。大きなる損なれ。それより人物山川草木鳥獸まで。おのが一筋に好入って。外の物好は更になし。雨は雨好。風は風ずき。夏は暑ずき。冬は寒ずき、されば櫻に梅もさかず。鶯がほとゝぎすを鳴たるためしなし。聖人は聖人好。阿方はあほうずき。鬼は地獄ずき。佛は極樂ずき。人は人ずき。我は我ずきより外になし。世に儒釋道の好人出て。位鼎の足のたてるが如し。世ゝの方人ありて。わが好たる道の外なしとおもへり。五戒五常は此方より出ると思へど。五倫五戒の墨曲尺をはづれて。人一日のたゝぬ上は。儒佛なくても事は欠まじ。儒佛崇敬の人。聖人佛より。飯一盃ふるまはれたる沙汰をきかず。たゞ士農工商の家業の外。さら／＼別に大道なし。當時儒好を見るに。敬の一字は胸中にありて外より察しがたし。たゞ坊主を悪み。佛をそしり。親兄弟身まかる時。大きなる棺槨をこしらへ。檀那寺のやつかいとなす。是より外によき事は見えず。異朝の法に。地を買とりて葬るは。大國の風俗にして。ふかきわづらひなきと見えたり。和國廟の爲に。地を買とらば。 神代より日本半國は買とられむ。砂糖曲物にて埒するこそ。佛家大きなる才覺なれ。いにしへより鳥邊船岡に葬あまりたる事をきかず。釋氏の事たる事。田畑もたで秋おさめ。蠶飼せずして冬あたゝかなり。人間一種の建立にして。もし此法なくは。此ともがら。いづれの嶋にかわたさむ。佛法には精進日あり。むかしは祥月一日の沙汰なり。それさへ大小のくり合。閏月の相違にて。命日の錐もみは覺束なきに。眷屬あまた出來て。飯料不足を補はむ爲。毎月にはなりたるとや。月／＼齋米をやりながら。二親もたぬものなければ。一とせの中。二日はのけて。廿二日魚くはぬ日こそ口をしけれ。佛法修行の人を見るに。其なす業は坊主のまねなり。成就の時と見えて。くり／＼と剃まはし。袈裟衣の仲間に入って。上品上生とおもへる時。其なり濟したる所を見れば。物も見事なる坊主なり。たま／＼佛法をたのしみて。浮世をやすふおもはるゝ。人のなきこそ本意なけれ。儒佛の最初はあたらしからん。次第／＼にふるくなりて。聖人佛も出給はず。是にはいかいを加へたらば。忽あた

らしき聖人も出。當流の佛も出生し給はむ。むかし堯の二女を許したるは。舜も舅も聖人の寄あひ。孟子嫂おほるる時。さし合をくりはじめたるは。豈孟軻の流行におちずや。達磨の無功徳はいき過ながら。これ佛法のあたらしみならん。夫レ當時凡家の人。聖人佛になりて何の益かあらん。たゞ一家の中の聖人にて。世のたすけにはなりがたし。其上仕官は浪人のもとひ。工商農業の人は。金銀田畑をかすめとられ。道しりだけの損をして。たちまち非人乞食なり。その時例のふるみにおとし。時にあはぬとて仕舞けり。とてもなりにくき。聖人佛をうらやまむよりは。たゞ愚痴に金銀をたくはへ。世の爲。人の爲。ほどこし侍らば。生聖人生佛とて。釋迦孔子より有難がらん。たとへば運飩を好人あり。其子は蕎麦切を好めり。蕎ずきはうどんそば好。麦は麦ずき。天は天ずき。地は地好には極れり。そしりてをかしければ日夜朝暮此論やまず。むかしより。蕎謗り。ほめてあたらしき時変るものは。とも麦とも。世の一統せざれば。蕎は我ガ大道のはいかいなり。





○**頌類**

五老井　許六選

俳諧頌

李由

○はいかいもと和歌の一躰にして。神代よりはじまり。更に連歌より出たるにあらず。其法式。連歌に相似たれど。おながち無言。新式になづむ事なかれ。俳諧。誹諧。誹諧。滑稽。諧謔。謎字。空戯。鄙諺。狂言。九つの品にわけられ侍る。いかなるをいふにかあらん。まさしくしる人なし。公任

經信ときの人もしらざる事なれば。末代にさだむべきにあらずとは。御抄のをもむきなり。古今。千載。後拾遺等に見え侍れど。今のはいかいも。九つの中には。相かなへるならん。これ和國末代の風俗にして。四海こと〴〵くながれわたり。あまねきもてあそび物とはなりにけり。石筆の早態に。花月のおもしろみを記し。火燵にずりこみ。障子の穴に。雪霙を吟じては。余所の寒さを侘たり。獨居無言の行に倦ず。旅店山野の道づれを求めず。豪貴にともなひ。鄙賤にまじはり。夜明しの會に。親の心をやすめ。年に似合ぬあだ口も。俳諧師にゆるされ。野老村童も。睦月五月のひまを伺ひ。馬士船頭も。山川万里の勞をなぐさむ。夫レ俳は。市中にあつて。山林のさびしきをうらやむものなり。全く山居の道具にあらず。目に見えぬ鬼を泣しめ。勇武の心をやはらぐるものは。詩歌連俳ともに。其感ひとしかるべし。かの中にも。一言の活法に。白髪を若やかし。忽チ千歳の命を延るは。ひとり俳諧の徳也。鄙言俗風とて。君子いやしめ給ふ。連歌は徳高うして。やむごなき御もてあそびよりはじまり。宗祇一代は百韻に花三本なりしが。宗長の時。ふかくかなしみ。花四本。雨二つの勅許を蒙る。腹は毒ありとて。喰ふ人の稀なるに。陰徳をかくし。俳諧俗流とて。捨られたるに。おほきなる手柄ありて。日〳〵の流行に。新風をおこす。これ其徳のすぐれたる第一なるべし。

蕎麥切ノ頌　雲鈴

○蕎麥切といつば。もと信濃ノ國。本山宿より出て。あまねく國〳〵にもてはやされける。されば宇治の茶あつて。同じく茶臼石に名高く。伊吹蕎麥。天下にかくれなければ。からみ大根。又此山を極上とさだむ。酒々落々の風流物。誰レか是を崇敬せぬものはあらじ。世に道成寺の能あれば。其次キは三輪にきはまり。鶴の料理過て。後段の時は。かならず蕎麥切の場所なるべし。常に胃の氣をめぐらし。諸鬱を散じ。壽命を延る聖藥なるに。いづれの虚氣人か。中風の毒とあだ名をたてられ。蕎麥喰ぬ人も。頓死中風はするなるべし。たゞ蕎麥一人の罪となるこそ口をしけれ。近頃は慳貪屋の手に落て。所化寮の俄客に。青貝の手桶荷ひこみ。比丘尼宿の大よせに。錫の鉢をすえならぶ。壁に紋書たる大濱茶屋には。一本鎗の旅客をとゞめ。寐覺の門前の何ノ本もりには。通りの馬士を招く。

有馬の夜食。淀の川舟の乗合。眞那精進のわかちもなく。をとこ女の去嫌ひもなし。夫誹諧大様は。君臣佐使の付合なるを。越路の國に。胡椒の粉の折形を備へ。都の方には。山葵薑にてやらるゝこそ本意なけれ。先師翁のいへる事あり。蕎麦切誹諧は。都の土地に應ぜずとて。一生請合申されずとかや。花車を好みたるあるへいとう盛もくるしく。又は一箸づゝの盛並べも。中く待遠なれば。たゞつくね盛の大椀にて。三盃目の時。はじめて本性には立もどりけり。仕舞限の二番がさねは。無念無想の境界になつて。うき世のおもひ出を申けり。

酒徳頌

朱廸

○伯倫酒徳の頌作る。其徳あけてかぞへがたし。さる徳ありて。内損脾虚の病を愁へ。酒毒悪腫の痛を生じ。身をやぶり。徳を失ひ。なま酔の號をとりて。朋友のまじはりを斷。破戒の過を蒙りては。佛の道にそむく。されば盗跖にも徳ありて。伯夷にも損あり。これ其用る人によりて。其理のとりあやまりなるべし。我今酒の徳を見るに。京奈良の酒店。伊丹鴻の池の酒藏。日ゝに身を潤し。月ゝに屋を潤す。綾羅錦繍に目を見出し。五味八珍に腹をこやす。ある時は吉原嶋原の揚屋にあそび。大臣とあふがれ。作善供養の場につらなりては。大檀那の號をとる。是みな酒袋のしぼり粕なるべし。きのふまでは下部の藤次といへるものも。けふは何がし町の名主。宿老の列につらなり。小賓請酒の細望姫も。白壁をならべ。大釜の煙絶る時なし。これ世に上戸といふものありて。酒の徳は顕れたり。さあらば下戸はあまねく富るものにやといへど。むかしより下戸のたてたる藏もなしとは。皆飲ぬけの金銀にて。三ッ葉四ッ葉の酒藏とはなれるなり。是も又理のとりあやまりなるべし。其徳孤ならむやく。

石臼頌

芭蕉

○市中にあつて。俗塵によごれぬものは。げにそのはじめをよくするよりも。その終りをとぐるとはかたし。商山竹林の猛士も。猶出てつかへ。寛平華山の上皇も。終りたしかならず。たまくこれを見るに。たゞ石臼のひとつのみ。聖一國師は。これをもて肉身をやしなひ。法身をしる。民家にはまた。麥刈そむるころよりも。籾こきおとす冬にいたるまで。片時も余所にする事なし。其高き事を論ずれば。役優婆塞の庵の中にかくれて。彼たぐひを道引きり（一、小文

庫」に「功」とす。從ふべきか。）の上に立べし。上と下とふたつなるは。ちからたらざる者の爲にもつぱらなればなり。不斷士間にあつて。莚より外を見ぬは。謙に居る事のとゝのへるにあらずや。かりにも黄-姉の手にとられざるとの。ありがたき事を。ふかくさぐりしるべし。日なだらかなる時は。かますを擔ふ老翁の出-來て。こつ〳〵とする音すみて後は。季札が劍を。塚にかくるとをはづべし。名をぬすむ盜人はなし。名をぬすむ盜人はあれど。石臼をぬすむ盜人はなし。また人の心をみださゞるのいたりならずや。月さしのぼる夕顏の陰に。ひとりはをどろの髮をまくね。ひとりは佛のまねをするあたまなりにて。くるしき事をおぼえず。挽まはすちからに。其飢をたすくるは。文王の始につかへたまへるに事たがはず。やゝいま樣の。むづかしき歌のふしにもかまはず。聲も唱歌も古代のまゝにして。枝もさかゆる葉もしげると。しはぶきがちに。わなゝかれたるぞをかしきや。

（越人の『不猫蛇』によれば、此文章は越人の作なるが如し。）

讃

西行上人像讃　芭蕉
神農像讃　涼菟
團扇讃　荊口
入學讃　許六
紫式部讃　許六

○讃賛類

五老井　許六選

西行上人ノ像讃　芭蕉

○すてはてゝ。身はなきものと。おもへども。雪のふる日は。

さぶくこそあれ。花のふる日はうかれこそすれ。

神農ノ像讃　涼菟

○野にもね。山にも寐る人を。人は神とも。佛とも思へど。薦着たる乞食は。門にもたゝせず。この皇いかなれば。十善の位におはして。手づかみに物はきこしめすらむ。さはいへ。春の野あそびには。酢味噌あらばといひおきけむ。慮外ながらもわれらが活計なり。

〽神農もおもへば苣に野蒜かな

團扇ノ賛　荊口

○詩あり。歌あり。はいかいあり。おほくは班女が似せ箔つかひ。これこそ古手の打ぬきなれ。中にも山崎にすめるさる法師が。

〽月に柄をさしたらばよき團扇かな

とは。いふたりけりにて詮はなし。上弦下弦は。月の部に入れぬ合點も迷惑なり。今當流のちか道は。其その傍の炙餅。いかなる人も一串は。塩梅よしに賛して曰く。

〽味噌つけてあぶられればよき團扇かな

入學ノ賛　許六

○儒家何がしが猶子。洛に入って道をまなぶ。賛していはく。もろこしに櫲樟七年の才といふは。鈍にして遅し。當時は三年にして。大木の幅する木あり。油断すべからず。

〽本箱にまづなる桐の若芽哉

紫芝岡ノ賛　許六

五老井四絶之一絶也

○靈芝の産たる事。王者仁慈ある時は。かならず生ずと。泰平長久の時をしりける。いとめでたし。されど聖代に。あはじ〳〵と待けん長さよ。さる心ながさにては。不圖うちわすれたる代もありけむかし。又地靈なれば生ずともいへり。ある書にいはく。東坡夢に人家にあそぶ。堂西に小園あり。古井の石上に石芝あり。上に紫藤を生ず。折て喰ふ。味ひ鶏蘇のごとし。予が五老井の上に。艸字藤あり。其西に紫芝岡あり。されば坡翁が夢は。余が五老の地なる事

明ヵなり。戯れに賛して云ク。

靈芝よ　靈芝よ
田夫の孫の手となる事なかれ
禪僧の如意となる事なかれ

我きく。いにしへの韓氏は。楚にあつては。わづか執戟郎にいやしといへども。漢につかへては。元帥にのぼつて。終に大漢を興す。器物も又同じ。我朝とゝやといふ。名物の茶碗は。魚店何がしが猫の飯器たるを。達人とつて万貫の道具となせり。これ用ひらるゝと。用ひられざるとなり。あなかしこ〳〵。證文の出しおくれ。出損になる事なかれ。



院艶書　日蓮上人報書

○書類

五老井　許六選

院ノ艶書

○やまとの國に梟といふ鳥あり。鶯姫をこひて。文かきやるごとにそもじはまともじ。いくたびも文かよはして。まとの文字の返し見るまで。

日蓮上人報書

○新麥壹斗。たかむな三本。油のやうな酒五升。南無妙法蓮花經と回向いたし候。

以呂波文字後序

上古日本の文字ありて。今に用來るもの。兩三字あるべし。いつの頃よりか。漢字わたりて。本朝の文字は。たえ果てしる人もなし。もと假名字といふは。萬葉書の事にして。訓と聲とを交へ用ゆ。これ以呂波文字のなき以前。男女筆集。これをもて文字の用を達せり。源順が。萬葉集のかな付も。聲と訓とのまぎらはしきが故なり。片かなは。吉備公の製作にして。アイウエヲの五音相通の文字とす。大和假名とは此事なり。又いろは文字は。世に弘法の作とのみおもへるも。一決しがたし。一說に

以呂波仁保へ土。知利奴留遠。

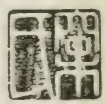
以上十二字護命の作。

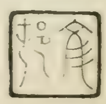
和加與太禮曾。門禰奈良牟。宇爲乃於久也末。計不己衣天。安左幾由女美之惠比毛世寸。以上三十五字は弘法の作。

京の一字は傳教の作也。いろはもと四十七字なるを。傳教此一字を加て。邊鄙遠境の男女迄。王土の字をしらすべき心ざしにて。一二三より。千万億の數字は。聖德太子のかぞへ歌を。こゝに添たりといふ。又は空海。勤操。傳教の三師。共に造ゝともいへり。又兼良の纂疏には。四十七字は天地自然の聲。後漢聲を假て。和字となすとかや。さればいろはを國字といひて。天竺震旦になき字とはいひがたし。是まつたく漢字にして。草書のすがたなるをや。文の躰は。長歌短歌のさまにして。あまねく末世に。手習ふはじめにぞなれりける。さるを後代此中の字性。とりあやまり。書あやまる事おほし。まづへの字は。へノのへにして。ためずして斜なるべし。これ。へとえの分にて。たはみたるを。ちどみえといふなり。とは土なり。止の字にあらず。すべていろはは訓をとらず。皆聲を用るによつて。土なる事明なり。つの字に說ゞ多し。たゞ門の字と心得べし。但口傳。(円也)むは牟也。世に歩武とおもへるは。點をうつ所になづめり。またく歩武にあらず。點はムの押の點なり。おの字はおゐての字にして。木篇に作るは非也。又をの字は遠の字なり。これを口のを。奥のおといふ。𛀂は衣の字にて。ちどみえといふは。兄の字に歸す。これ橘諸兄の兄なり。上代のいろは文字と。中頃今樣の字なりは。はなはだちがへり。次第にあやまりもて行て、あらぬ物にな

り果たり。そのかみ。源氏物語出る頃にさへ。はやとりあやまれりとて。紫式部も。これを歎きたるを。當世野郎傾城の書ちらしたる字形には。正字の俤もなく。此後次第にしる人もなくなり果。いかばかりの字形にか。なり行むもはかりがたし。京極黄門定家卿の。かなづかひとて。定めおかれしより。歌道の傳授物にして。是をしらざるものは。無下の事なるべし。されど大和言葉に用る假名字には。まつたく字心なし。上古の万葉書にて知ルべし。これ天竺の陀羅尼字の類ならん。假名遣一通は。和國のものゝしるべき事にして。しるて吾ガ俳諧の上にては。ふかく吟味サむもむづかしかるべし。たゞかな書のたぐひには。此以呂波の正字を。たゞしおほゆるを。第一とすべき事なり。文字のたゞしきもろこしにさへ。文字をとりあやまりて。古篆の篆書に。たがふものおほし。眞は眞なり。行は眞より出る。草は古篆より出て。まつたく行をやつすにあらず。草書に精しからんとおもはゞ。篆字にわたつて。其源をたゞしてしるべし。されば和朝のいろは文字も。此正字をもて。たしかに書ば。たとひ異朝にわたしたりとも。文字の正字はすみやかに。異國人もよみあかすべしと。九花亭の主人。条

氏汶村。風俗文選。かなづかひをたすけむが爲に。これを跋す。旹寶永三丙戌春三月ノ望。





右此本朝文選全部十巻者五老井許六先生之撰也嘗聞先師芭蕉翁雖レ有ニ此志一文章未レ調而止レ之先生十五年來繼ニ此志一終其功成雖レ然甚祕レ之深藏レ之門人等空歎レ朽ニ文庫一二三子合レ力而借發ニ書笈一爲ニ自他一直ニ其本書一與ニ書林井筒屋一彫ニ之梓一全無ニ一字誤一最無レ類本只恐ニ借偸罪一可レ蒙ニ　和歌三神御罰一者乎

寶永三丙戌年秋九月吉日

五老井門人

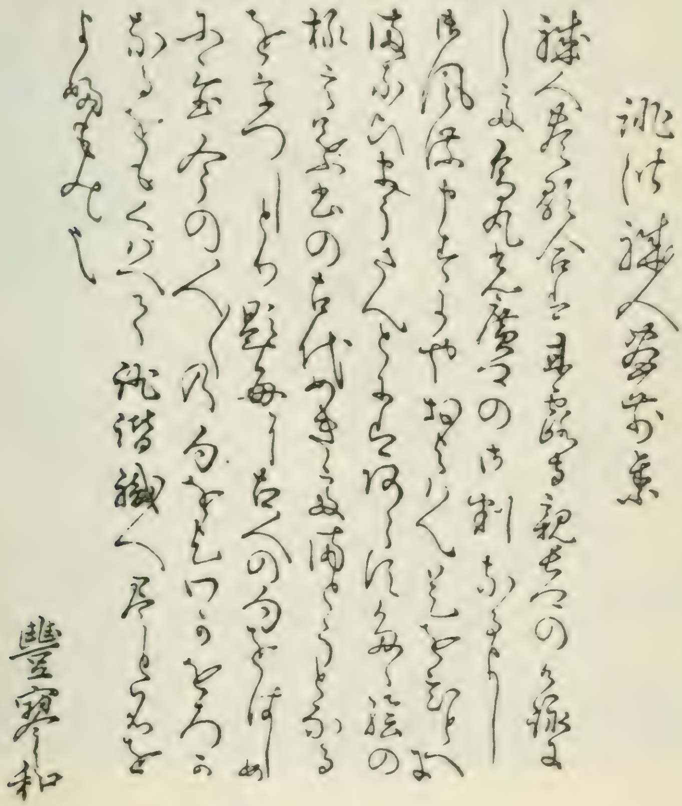
洛下二條下寺町　野田彌兵衛尉梓



誹諧職人盡前集

職人盡歌合は、甘露寺親長卿の御詠にして、烏丸光廣卿の御判なるよし。御風流申すにやおよばん。是をひとへにまなびまうさんとにはあらず、たゞ絵の様言葉書の古代めきて、まとうとなるをうつしとり、題録に古人の句をはしめに置、今の人〳〵の句を乞、わがをろかなるをもくはへて、誹諧職人盡と名をよぶもの也

豊　寥　和



七十一番歌合之追題
月
戀　古人之句を記希成雜之



御句到來次第載之句順混雜

ばんざう　かぢ

涼しさを飛騨のたくみが指圖哉　芭蕉
大工達久しき顏や神の秋　其角
煤はきはをのが棚つる大工かな　芭蕉
棟上の鏡ひかるや春の月　咫尺
目に涼し坂をころがすかんな屑　當宇
船大工音にかはれてしくれかな　沾山
番匠の宿に蟻やさつき雨　卷石
足代へ誰かはこひて雉子の聲　白曉
木がらしや大工童に火の氣なし　甘石
日ぐらしや仕廻ひ大工の足のうら　沖而
番匠の建た宿かすしぐれかな　文鯉
番匠や柳に風の工夫もの　其月
朝がほの垣につれなき大工かな　淇洲
番匠の鑿とぐ空や舞雲雀　八橋亭　其流
花鳥や寺の手本に天王寺　東風
氣のひづみ十夜に直す大工かな　兎園

ひら〳〵と蝶むらがるや鉋屑　用枝
ばんさうの歸つた跡もきぬた哉　佐原　青坡
ふらこゝの壁もきこゆやひだたくみ　寥和
春雨や光うつろふ鍛冶が槌　桃首
小米花奈良のはづれやかぢが家　万乎
をく霜を手際にとくや鍛冶が軒　沾脅
夕立や鍛冶が内から稻びかり　也足亭　登度
大根煮る鍋もちいさしかぢやの火　沖而
ほたけ〳〵わらべは門に市をなし　紫仙
立よればむつと鍛冶屋の暑哉　二世　立甫
初霜の置所なし鍛冶の軒　北之
正宗の隣はさむしかぢの音　沼津驛　同波
春の内に夏は來にけり鍛冶屋町　小田原驛　司朔
鍰鍛冶の工みそめけん逆卷舟　立圃
番鍛冶へ屆け文あり縣めし　寥和

壁塗　ひはだぶき

爐ひらきや左官老ゆく鬢の霜　芭蕉
鶺鴒やかべ土こぬる畔のうへ　磨盤
片壁や雪ふりかゝるすさ俵　圃吟



蜂とまる木舞の竹や虫の糞　昌房
ぬり直す壁のしめりや軒の華　卓袋
壁しるしいかに鴫野の秋のくれ　周竹
蔦這ふてかべを塗足す庵哉　琴風
燕よわかしら土はまことなし　不詳作者
壁ぬりや塗出す處が雲の峰　水府　低哉
生壁に寢られぬ旅の寒さ哉　我鄉
つばくらや左官と顔を見合る　文尺
兼康の屋根に手つまの暑さ哉　路道

壁土の水にもすめるかはづかな　寥和
屋根ふきと並らんでふける菖蒲哉　其角
木がらしの根にすがりつくひはだ哉　桃林
さし茅の棟をばいかにわすれ草　祇風
とがらしやふいて來る身の跡しさり　九皐亭　何江
屋根ふきやひとりは霞む槌の音　水府　豆花
やねふきは先耳ちかやほとゝぎす　蓮外
やねふきのほぐしかねるや蔦かつら　夜白
屋根ふきの笠に反來る暑さかな　千糸
やねふきの恩に着するや五月雨　里山
屋根ふきの梯子を旋やしぐれの日　水府　低哉
長き日を屋根にやねやのひる寢哉　遠谷　千鳥
やねふきに遊べとふるやけふの雪　伊豫松山　吏互
やねふきは雇れて來た水鶏かな　鳥羽　霜鵲
水茶屋の葺むらみせずはなの雪　梅徳
屋根ふきはあたまのうへの田植哉　了因
やねふきよ人丸の日にも花の雲　井蛙
やねふきの吹れてふくや初嵐　白主
神樂月廿露ふるかもひはだぶき　寥和



研塗師

高雄なる砥取の山のほとゝぎす
おのがかたなをとぎすとぞなく　環堵庵
砥にあてしかたなも夜半の郭公　桃兆
曇る空晴てするどき氷かな　常龍
正宗へ漏るや研屋のさよしぐれ　玉宇
寒研の音もするどく更る夜や　寥和
あの中にまきゑ書たし宿の月　はせを
なでしこや蒔畫書人を恨むらん　越人

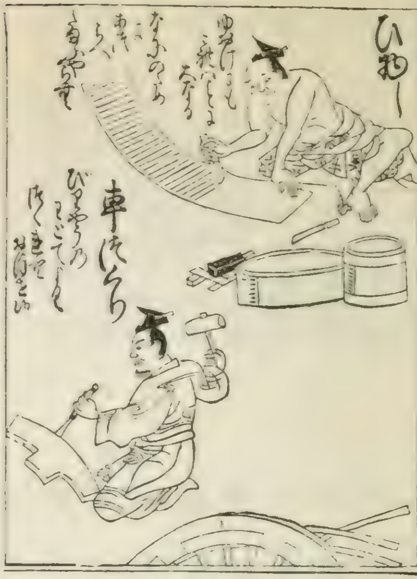
磨出しも見事ｹむらもみぢ　作節
花くもりよし野うるしや白うるし　一尺
木がらしやぬしの紙帳も波の音　魚沽
龍田山櫨やぬるでは刷毛序　寥和



こうかき　機織

しぶ柿はをのが手ぞめか村もみぢ　宗鑑
紅梅は誰ふれし香の染小そで　前　立甫
さら〳〵に戀は倭ざらさたつ田姫　二世　調和
礎ひとりよき染物の匂ひかな　大坂　酒堂

島原の外も染るや藍はたけ　嵐雪
帷子や佐保と龍田の間の姫　前　青峨
大雪にかた付がたきしら地哉
此句は越後國紺屋文左衞門といふもの
一代一句ならんと晋子物かたりあり
粒にさゝ師走さくらや紺屋町　秀葉
光琳はかはゆきそめやきそはじめ　女　可代
ものあれてこゝろも寒し紺屋竹　沖而
さみだれの空や紺屋の物ぐるひ　万井
紺搔の明日といへとも花さかり　埃庵
染草のすゑや水菜の花さかり　知圭
京ぞめの中にも上手をくら山　寥和
蟬なくや布織る窓の暮時分　曉鳥
當麻にて
衣がへみつから織らぬ罪ふかし　そのめ
秋の日や機をり虫も織つめる　貞壁　秀橘
のびちゞみはた織足すやきり〴〵す　裏袖
機をりや二人へ分る秋の窓　仙菓
窓寒し法師が母のはたの音　寥和



檜物師　車作

喰つみも木曾のにほひの檜物　　岱水
檜物屋も間に合せけりお取こし　　養浩
飛騨山の雪も凝たる湯桶かな　　寥和
山さくらちるや小川の水くるま　　智月
斫にてちやつるまつりの車哉　　前　白雲
誂の車打夜やしかも雪　　玉榮
御車の調子聞ばやきり〳〵す　　東風
下寺へまはるやはなの車坂　　柳車

日もなかく夜なべも牛の車哉　　志諷
涼しさや龜山殿の水音請　　寥和

蓮見の辭　并句

池をめぐりて皆家也。朱樓白屋のそれがさま〳〵なる住かたは、左にもあれ右にもあれ、うちむかふ花のたよりはをのづから中流の島山にぞ愛情の眸はとゞまり侍る。さはいへ物堅き人がらをめづるにしもあらず。呉越の又尊き趺坐を思ひ出んは元より法氣ついたり。其一遠津國には、紅の袖に袂に採蓮のかほりを爭ひ、ひたすら曲をうたひ傳へし。今のあつまの女どもは、ひたすら岡の櫻にのみあそび暮し　夏の詠の朝けしきを木男にまかせたる、口惜し。

三十の輻の落合ふ爰の蓮見哉　　龜毛

右龜毛は明石仕人桑田先生の誹號也。江府におはしける時の作なり。車に便よろしければ、爰にあらはす。

鍋賣　酒つくり

君が代や筑摩まつりも鍋ひとつ　　越人
たが猫ぞ棚から落す鍋の數　　沾徳
鍋の數いたゞきまつるつくま哉　　三征



鍋うりに先聞く須磨の櫻かな　宵々子

おもしろやかついで戻る鍋の雪　松井田　潭考

なべうりは鍋に波也花の瀧　丹鳳樓　雨夕

ゆくとしや顔のさびしき古手鍋　寥和

きさらぎに酒の飲知るふすま哉　露沾

花ざかりいはとみやこの酒屋哉　守武

酒一升九月九日使きく　宗因

花に風かろく來てふけ酒の泡　嵐雪

酒買にゆくか雨夜の一つ鷹　其角

山寒し酒買せけり尼法師　和及

いさ酒の降とやいはん雪の松　如泉

風に名の付て吹より新酒哉　そのめ

夕闇はほたるも知るや酒はやし　水鷗

小男の胸の毛光り寒づくり　沖而

見給へや杜氏老ても向ふ椎　志靜

酒蔵の一重降や秋のくれ　寸松

松の尾の祭へのぼる杜氏かな　白抄

酒めしの筵も白しあまの川　寥和



蛤賣　いきうり

はまぐりは野でも燒るゝ雉子かな　芳心
宮殿も買は賣べし蜃氣樓　常國
何所となく聲の時雨るゝ夜蛤　咫堂
蛤にならでや雪のむらすゞめ　寥和
鰹うりいかなる人を醉すらん　はせを
花よりも實こそほしけれ櫻鯛　兼載
都見ん小桶に鯲華かつみ　高政
吻の細魚斗こそ囀らめ　一晶
塩魚の裏干す日也ころもかえ　嵐雪
魚店や筵打上て冬の月　里東
一塩に初白魚や雪の松　杉風
しら魚のしろき匂ひや杉の箸　大坂　之道
二の富は廓へおちて初がつほ　沾洲
若竹の香に新しき鱸哉　百里
世を見れば鰒に毒なし待乳山　青流
おちつきは魚屋まかせや櫻がり　利牛
夏陰や木末をはしる魚荷籠　秀室
賣る人の手もしら魚に目立けり　佐原　此溪

魚うりの世渡り寒し霜の朝　竹里亭　李冠
魚賣の師走也けり初松魚　老魚
元日は嗅きを知るか魚の店　寥和



傘張　あしだ作り

からかさはたゞゑかゝみの今朝の春　守武
さみだれはたゞ傘を晴間哉　正甫
傘張の眠胡蝶のやどり哉　重五
白雨にかさ借る家やま一町　團水
傘張りや菜の花に迯よい日向　夏人

からかさの姿をわすれて花の春　木牛

かさ張の蛇の目をまはす師走哉　水府　沾鱗

傘はりやかざりも錦冬紅葉　常州眞壁　秀鴎

かさ張はすぼめて仕舞ふ時雨哉　小田原　華瀧

夕だちや日の影盜むからかさ屋　文尺

あぶら引傘の匂ひや草いきれ　鬼髪

傘にひくあぶらもをのが暑哉　祇明

かさはりやしぐれ来る日の放下僧　笠間　古淳

五月雨の雲かたつくや日傘張　寥和

馬下駄や引とも上らず厚氷　常矩

さみだれは浪の緒すげし足駄哉　長治

あしだはく僧も見えたり花の雨　翁

（原本此句の作者を「翁」としたるは誤にて杜國の句なり）

梅咲や一度は雪踏二度は下駄　我兒

雪解や都に出る下駄の跡　沾徳

卯月からぬからぬ顔や下駄作り　志友

棹鹿のよるべやかねかあしだにも　寥和

はく打　白かね細工

上人の顔に箔置けおめい講　史邦



箔うちは冬の紙帳に氣をこらし　龜仙

はく屋さへ障子明たる暑哉　寥和

こま鳥の音に似合しきしろかね屋　長江

しら魚やいきて働く銀目貫　如天

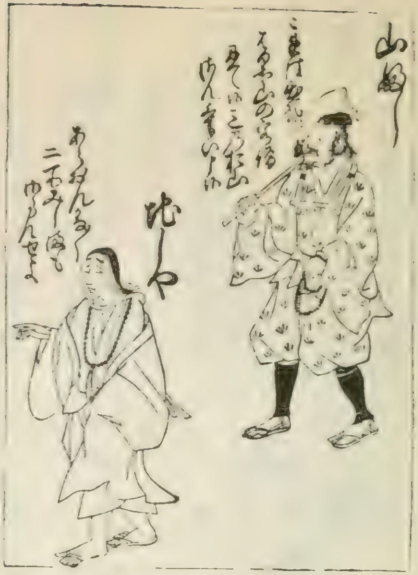
こがねより涼しさ増れ銀道具　寥和

山伏　地しや

峰入や雲に起臥ときんもあり　重頼

大みねやよし野の奥の花の果　倉良

初午や役行者の知らぬ路次　壺月



山ぶしの火の印むすぶ寒さかな　帆歩
山臥のはたけを通る暑かな　栢莚
やまぶしに貰ふて凄き茸かな　佐原　青藍
山ぶしのだまつて通る枯野哉　草也
螺貝を吹さして行さくら哉　雩廬
山ぶしにちるや櫻の一つかみ　樓川
みね入や隣も寐せずめつた町　寥和
物すごの女の經や雪の月　寥和



油賣　もちいうり

あぶらはかる玉散ばかりたま柳　專吟
哀に淋しきものは
あぶらいや遠里小野の鹿の聲　法眼　不角
はまぐりの山吹煉もあぶらかな　似詩
やま寺の春を惜むやあぶら賣　小田原　錦江
かはかふの聲秋深しあぶら筒　沾涼
口きりの柄杓さはきやあぶら賣　貴月
秋の暮油柄杓の露重し　大鶴
夕ぐれに秋の聲あり油うり　鳥羽　嵐角

蚊遣火やなをたえかゐゝ油賣　甲府　里百
糸遊を柄杓で汲やあぶら賣　泉布
祇園會や患盧しばし油うり　夫憐
油屋の撞白きしぐれかな　寥和
垣衣草さへ枯て餅買ふ亥子哉　はせを
（「甲子吟行」には下五を「やどり哉」とせり）
雨の手に桃と櫻や草の餅　仝
焼ずとも草はもえなんわらび餅　伏見西岸寺　任口上人
もち賣の下馬によしある玄猪哉　五筿
餅賣のわれは酒買ふや雪の市　寥和

追加

瓢箪の花見がてらやあぶら賣　白主

筆結　莚打

筆にこそ畫染さくらかばさくら　徳元
君が代の久しかくべき試筆哉　正村
筆ゆひの顏に夏毛のあつさ哉　志友
宗鑑へ小法師よりぞつくづくし　寥和
莱好も莚織けり花ざかり　嵐雪
庭に居て月見ながらや莚織　利合



きりぐす鳴や霜夜のむしろ打　閑斗
冬の日や京間に足らぬ莚うち　トバ芭秋改　巴洲
蟀のむしろ織れとや霜の聲　雪鷹
名どころや此よし野にも花むしろ　寥和

烏帽子折　あふぎ賣

松魚にも着せてみましやゑぼし折　寥和
物書て扇引裂名ごりかな　はせを
逆さまに扇をかけて又涼し　丈草
縮合に十二のほねのあふぎかな　守武



しら菊に與一か扇さもあらば　秋色

扇屋の暖簾白しころもかへ　嵐竹

おふぎ折いかに持たる汗拭ひ　千那

扇折子に恥しき化粧ひ哉　尙白

つくぐと繪を見る秋の扇哉　小節

葉は直にまいらせ扇嶌尾のはな　安士

ひらく手に梅が薫りや扇うり　祇中

正月をまねいで行や扇賣　和菓

しら雪をそくいにせうよ加賀扇　旨原

涼風を封じこめたりあふぎ賣　好古堂以貫

夕顔に一聲くれぬ扇うり　紀円

暑にのぞむ風の小賣や扇賣　照月堂魚漣

花をまつ身や末ひろの扇うり　雨巴

一軒で日をくらしけり地紙折　一調

凉しさを手折の風や扇うり　思靜

山里はあふぎ入らずや冬籠　東榮

夕貌の門なたがへそ御影堂　寥和



豆腐賣　索麵うり



蔦や門はたまくくとうふうり　野坡
豆腐屋は水が第一ほたる哉　貞佐
松井の器に預る豆腐かな　乙由
豆腐賣の呼聲しぶる霜夜かな　谷水
明がらすことへる聲やとうふ賣　世田谷　和雪
とうふやの起て朧の月見かな　僻隣
拔る鐘ある時は無し夏豆腐　寥和
かけて干す二輪の臺や糸さくら　佳節
素麵の白さやひるのあまの川　抱村
そうめんも秋はてられて悲しけれ　寥和

塩賣　かうぢ賣

しほうりも辛き目を見る寒さ哉　梅是
雪そらや塩うりの手のおもしろき　蘿菁
塩賣の手からはたくや橋の霜　水巴
しほ賣の吾妻からけや歸り花　尾谷
しほうりのたごも濡るや五月空　一尺
秋寒し塩荷の連るゝ六浦道　寥和
鵜島奉納　花見や麹屋殿も老まつも　甘谷
室咲や椛むしろのふところ子　秀谷
道ニ逢麹車日ニ流避
椛屋もあまさけごろやもゝの花　文尺
室咲をゑびらにさすや椛うり　寥和

すあひ　藏廻り

秋の日やすあひくれ行烏丸　隨意
鹿馴るゝさらしすあひや塗足駄　佳節
糀麹の戯れとや見ん布ぶくろ　路道
水鳥の顔靜なる牙婆かな　寥和
淋しみを押賣する賤かんこ鳥　活曆
藏まはり年の端や拂ひ物　寥和



枕賣　疊さし

鴈がねを頃とやおもふまくらうり　欣穿
誰皷家に賣人ふたりか枕かな　五丈
若草やねよげに見ゆる枕うり　里牛
晝寐よの鐘も日長し枕賣　寥和
けふよりも眞菰に恥よ疊さし　沾德
引糸に蛙なくなりたゝみさし　尺子
青みたつ備後表も霞けり　黄英
糸遊の手からもるゝやたゝみさし　芳尺
青柳や糸くりかえすたゝみさし　里牛
春の日も打うたふ日やたゝみさし　雁洲
年浪の青海原やおもてかゑ　寥和

暮露　通事

かげろふや虚無僧通る窓の前　廣滌齋　寸龍
こも僧の若き姿や竹の春　尺子
虚無僧の浮世はかぜの柳哉　蘆雪
訴
巣籠りやうたふかごくやま櫻　和圭
紫陽花や内も淺黄も暮路の伊達　女　可代



寺を出てこも僧二人やまさくら　寒和
唐歌に花咲せけり倭仮名　桃兆
うぐひすの歌に昔の通事哉　文尺
紅毛に口動かすや江戸鑑　白抄
夏旗や象に通事の呵り事　寒和

筏士　櫛ひき

筏士の裸を安き角力かな　不卜
いかだしの笠美しきさくら哉　嵐水
あの男筏に寐るか夕千鳥　山夕

筏士の寐すがた見ゆる螢かな　長流舎呉江
筏士の鴨の中ゆくさむさかな　蛙井
筏士の涼しかるらむ柳陰　珠龍
筏士や陸は手ぶりの旅ころも　道吟
筏士のそこりになりし寒サ哉　夜白



筏士の職に幾夜の衛哉　松巴
筏士や霜に目をする水かゞみ　万夫
筏士の枕にちかき氷かな　伴路
いかだしやけふの雪解を懐手　万尺

いかだしも布顱を掛たる寒サ哉　上州桐生　喜考
藻の華を鍋にも汲や筏乗　樓舞
筏士の一夜を蘆の花の蔭　銀砂
筏士のいてつけらるゝ霜夜哉　閑明
筏士の跡追ふて降るや花の雪　咫堂
すが〳〵し筏の上に松かざり　寥和
十三屋女の買人後の月　佳節
櫛挽の笑ふや鴨のそゝけ髪　東風
手心に啼や櫛屋のきり〴〵す　田女
あつらへのくしもそよぐや夏柳　寥和

瓦焼　笠縫

梅の咲わきにすゝどし瓦焼　一歩庵　千里
花鳥や縫てふ笠の入り仕事　茂井改　桃蹊
笠ぬいの里や手つから田植うた　鳥羽　塩塵
瓦焼煙は低しあまの川　（御影唐）　蟠桃
あつらへのおそこも近し瓦ふき　寥和
蓮の葉や聖靈達のかくれ笠　貞德
市人にいでこれ賣らん雪の笠　はせを
笠縫も晝から休めはなの雪　癡狄



日まはりの花の笠ぬふ麓かな　和晋斎　百二
出來揃ふ麥に並ぶや笠の秋　蓼花
御地藏へ笠参らせん六ツの花　寥和

金掘　水かね掘

山吹はやまにも捨ぬこがねかな　憲文
草の露ゆりよせて見よ只の水　作者不詳
金ほりやなを行〳〵て千鳥聞　玉榮
金掘がすてたる山の松に月　馬光
金ほりの闇(くらき)を出てほとゝぎす　金舛

かねほりの眼は休まれず菊の宿　跡蓬
時を得て莚にも咲や金銀花　文笑
かねほりやつなに取つく銀眞桑　共木
金掘も穴を出たる彼岸哉　上州桐生　青里
金掘やあたゝかに寐る雪の暮　丕朝



金ほりや煙草きらして秋の暮　大輔
かねほりや山口しる(澪)き春まちぬ　薬五
さみだれやなほ目に疎きこがね掘り　卯雲
金ほりもわが一日やとしの市　歩東

ひいやりと莚にあたるや秋の音　大室
たのもしやかね掘やまの高笑ひ　寥和
水かねは斯は掘られじ蓮の雨　里百
葛の花水かねほりの笭なれや　寥和

追加

水かねの戸樋をこぼれてこぼる哉　茂林



苧賣　綿うり

夏引の共麻むすぶ襷かな　木司
菱蕢や苧に尾をつける賣詞　雪麿

花形にしらべの艶やいづれの苧　淀　等丈
紡績の窓や苧賣も秋の聲　寥和
箕に干て窓にとぢふくや綿の桃　孤屋
綿打の是も花より朧にて　咫堂
わたうちの窓は雲なきふゞきかな　千調
綿うりに化しても白し紙帳賣　寥和



ねぎ　かんなぎ

冬ざれや禰宜の提たる油筒　落梧
留守のまゝ荒たる神の落葉哉　芭蕉

禰宜達の馬も白いか神むかひ　世田谷　雨眠
門寒し高天原か麻はかま　寥和
おもしろき神樂乙女の化粧かな　望一
むつかしき拍子も見えず里神樂　倉良
ふるかれや神樂拍子に神樂聲　路通
駄賃馬に夜は明にけり里神樂　和尹
ほとゝぎす神樂の中を通りけり　玄札
氣色あり顔見せ月の雇ひ神子　寥和



炭燒　小原女

かた炭の崩れかな身のなる行衛　湖春
すみ賣や宿に一ッの明き俵　心流
すみうりのおのが妻こそ黑からめ　重五
すみ賣も一重櫻のあるじ哉　野水
水仙に炭あつかひし手なふれそ　一品
すみやきの工夫は雲の山路かな　長梢
人ありやかゝる山にも炭煙　心牛
すみやきの鷲刀おしみする木立哉　一聲
枯薄花にわかれて炭だはら　大鶴
すみ焼の手をふく草も畑かな　連尺
すみ焼を恥しめたり雪の軒　寥和

漢和半歌仙

炭竈焚ッ驢ノ雪　水和
のこる冬木もまばらなる郷　栗橋住　仙閣
一文錢ハ挟レ耳ニ　連璐
百兩判ハ掣(ヒキツル)レ亢ノ　仝
ありありと月の數る潦　仙
椋も木賊もみな露の琅(タマ)　水
朝霧の晴てまばゆき淺艸寺　連
危(アブナシ)老ノ二階襄(ノボリ)　水
蝿ヲ拂ヒ除マ箒(タカ)箒　仙
鰒ニ持テ來イ大鷹　仝
かいどりにかくまはれたるかくれんぼ　水
客へ笑顔をくばる小娘　連
盆ノ上研(タタク)ニ凍リ餅ノ　水
雜坑(アナ)流ニス水糖ノ　仝
焼付るたびに田舍を自慢する　仙
月も隙なく狂ふ青楊　水
鋼師ノ側ニ花ノ陶(トツクリ)　連
のどかに咄すつれの中芳(ヨシ)　仙

小原女

一とろにあわせになるや黑木賣　其角
柴うりやいてゝしぐれの幾廻り　閣指
大原女の力の外やけふの雪　不詳作者
小原女の牛にかぶさる落葉哉　生花
蕪の葉や大根に似たる言葉つき　春里
小はらめの牛とぬればや初しぐれ　雪川

我ものとありし晋子の句にすがりて

はつ雪の黒木に輕し懐手　銀枝
木がらしや小原を出る髪の上　中村氏　東流
九重の雪にはづかし黒木うり　鳳葉
小はら女や頃も師走のれん木賣　東籬
小原女やむめ折添てとしの市　一和
はつ雪をみやげにはこぶ黒木うり　致曲菴
其角　數入や牛合點して小原まで
冬の日や牛合點して小原より　寥和



立君　辻君

夕顔のおぼつかなくも化粧哉　丈國
たちあかす君がけはいや秋の霜　笠翁
たち君や行も歸るもわたり鳥　蛙井
たち君の小松にしのぐ時雨かな　遊之
立君のあはれを知る歟千鳥聞　小田原　丹志
たち君は何買ふて居る雪あかり　志友
立君と思へどうれし時雨の夜　和柔
たち君の常の顔見るしぐれ哉　柳枝
たち君のあやなく白し梅の花　一尺
立君もたのしみけらし雪一夜　文尺
朧月夜にしくものもなし柳原　可圭
立君のゑりへしぐるゝ柳かな　斗南
てうちんで見らるゝや辻の女郎花　隹和
立君の夜寒も來たり居待月　柳隣
たち君のよも更にけり橋の霜　寥和
つじ君のやどり定ぬしぐれ哉　サハラ　米碩
つじ君の草に倦れて冬の月　欣宇
つじ君に涼みながらやかくれんぼ　路道
厨子君の朝も佛のわかれかな　寥和



樂人　舞人

笙の音の自然〳〵に肌さむし　越谷千鳥

舞がねは我を舞つゝ紅葉の賀　沽灑改合浦亮

舌になる廬も年貢の數なるか　寥和

舞人に幾度指を折にけり　荷兮

吹風に舞の出來たる小蝶哉　田羽重行

（上五「續寒菊」には「風吹に」とあり）

舞人の袖ものどかや日の光　柳隣

感應の風に動くや鳥甲　舊馬

ことぐ〜し舞茸かりに鳥甲　寥和



草履作　ゆわう箒賣

華踏むも生のうらなし草履哉　長治

時雨ふる奈良や草履のうらおもて　祇口

足輕のこゝろも長閑や江戸ぞうり　寥和

拾得は箒なりけり寒牡丹　貞佐

其つもる初雪かはむ箒うり　氷花

水木辰之助に初參會の時挨拶

蝶はきや諸人が眞似る鑓おどり　其角

木からしや老を養ふ箒賣　小田原花外

秋の田のおもかけ實やみごはゝき　長孝
元日をゆわら箒の朝寝かな　寥和



木こり　草刈

痩牛に柴付て秋のすがた哉　調柳
實躰に見ゆる木こりの頭巾かな　佐原青々
花見むとさくら覺えて年木樵　笠間孤遊
柴人のやすめばすぐにかゝしかな　水戸低哉
猿の子を愛して居たり年木樵　越谷千鳥
凩や峯に木樵のつゞらおり　柳隣

雪ほどは木を伐殘す山路かな　寥和
いたゞける柴をおろせばあられ哉　宗之
草かりやかりにもすだく鬼薊　芳心
骨柴の刈れながらも木の芽哉　凢兆
草かりのいつしか夏に成にけり　玉榮
くさ刈の濁して通る清水哉　溪翁
草かりの鎌の刄を引螢かな　不正
草かりの鎌や背中に夏の月　叉尺
草刈や身柱(ちりけ)の上のきりぎりす　白鷗
朝すゞの間を草かりの小唄哉　柳隣
草かりや笛でくらはす牛の尻　活々
くさかりや歸る小坂の月の笛　風耳
辨慶が扇ほしいか草いきれ　木雪
草かりの御家流とやかぶつきり　未醒
草刈の戻ればまねく尾花哉　寥和

びわ法師　女めくら

目に見えぬ風は座頭の涼哉　宗靜
新琵琶はたゝそげ〳〵の時雨哉　氷花
何人のもどす坐頭ぞ小夜しぐれ　珪琳



びわ法師てうしにのせる落葉哉　景湘
作まつや別當の坊のびわの音　寥和
初むまや琴柱に並ぶ稽古宿　二世　調和
紅梅やりんと親ある琴の音　喬谷
てうちんで瞽女の送りやけふの月　茶外
狂ふなよ冬のしらべの松の聲　旦調
いとゆふや女めくらのしのびごま　草也
雨のはな淋しや瞽女のうしろ帯　寥和



繪師　冠師

朝がほは下手の繪にさへ哀也　はせを
（「いつを昔」には「嵐雪がゑがきしにさんのぞみければ」と前書して、中七「下手のかくさへ」とあり）

大和繪のまゝをすくなき柳哉　仙鶴
時雨行やまや繪書の筆のさき　小田原　巴丘
雪の日や繪師の胡粉の餅合せ　深川軒　仙子
燒筆の山は淋しにゆふしぐれ　晋如
干す繪絹一枚づゝや菊畑　笙和
土佐流の花は千枝を元木かな　寥和

冠着てあたまと知れし厚ふすま　野水
業平を女につくる菊苗や　馬勃
冠師の心に厚き牡丹かな　友以
玉の春たまの仰もかうむり師　寥和



けいばくみ　角力取

落たるがとに日だつや足揃へ　嵐雪
くらべ馬持になるといふ事はなし　玉芝
くらべむま神の科かは負のかた　周木
松風や天窓は暑きくらべ馬　錦綉園

あふちの木の古路もあれば

ゆめさめて競馬はあとの祭哉　文市
くらべむま冠の紐のゆるみけり　莚祥
火消にもすがたありけりくらべ馬　寥和
むかしきけちゝぶ殿さへ角力取　芭蕉
角力とり並ぶや秋の唐にしき　嵐雪
都にも住まじりけりすまふ取　去來
つねぐゝは後生願ひや角力取　史邦
わが宿へ負て歸る歟すまふとり　前 白雲
見合て妻の諌やすまふとり　魚貫
根津鈴鹿根や分そむる深見草　正與
七ころび八起也けりすまふとり　秋社
前髪の秋を惜しむ歟相撲取　露計

翁の句にすがりて

雪ならはころんでも見よすまふ取　陶巾
褌は殿のちからやすまふとり　擧遠
足あとに女有けり辻すまふ　沙文
痩すがたの淋しや雨のすまふ草　柳隣
一人して年の歩みや相撲とり　寥和



べにとき　鏡磨

春風や紅はく郷の上りはな　柯木

寒紅の一はけさくや藪椿　沼津驛 同波

何にこの比丘尼ふれけむ寒の紅　寥和

人も見ぬかゞみの裏や梅の花　芭蕉

（此句「已が光」には「人も見ぬ春や鏡のうらの梅」とあり）

うす霜の眉毛もしらむ鏡とぎ　萬井

花の顔梅酢に知るやかゞみとぎ　和葉

見よや見よ月はますみの鏡とぎ　僊松

鏡ときおのが貌見ぬ師走かな　指水

玉の汗ふんだ鏡に骨や折る　五明

むら雲の月を拭ふかかゞみ磨　萬秋

水かねのしまつも寒し鏡とぎ　寥和



藥師　陰陽師

うづき來てねぶとに鳴やほとゝぎす　（宗鑑）守武

代脉やころびて歸る雪の朝　臥莒

枇杷は黄にいそがしぶりや和氣丹波　沾鱗

糸脉を見ばや柳に風の朝　馬齋
連にして旅の力や香需散　白猿堂　和圭
繪馬醫者のいとゞ目立や神無月　沛雨
藪椿玄的は古き名也けり　寥和
陰陽師身のうへしらぬ時雨哉　葛三
身のうへは何と定て神送り　京南居　律山
桐の葉は墨付わろし星祭　石腸
歳且も序に買はん年八卦　寥和



文者　弓取

空蝉は唐の歌にもかくとなん　徳入
椴の月心斗の分限かな　一雨
右所中は人の名歳暮苞　寥和
貌見せはあたらずしかも弓はしめ　冠里
歌軍文武二道の蛙かな　正章
おもだかや弓矢たてたる水の花　素堂
むかしいつ武者六七騎門の雪　沾徳
得手勝手與一は扇射さりけり　白峯
義經に辨當はくれ春いかに　貞佐
ものゝふの紅葉に懲ず女とは　秋色
元日や二日は月の弓はじめ　宗瑞
照月や礒にけだかき星かぶと　沾吏
頼政の手心いかに雪の竹　楚望
鬼の名の薊も切ん鈴鹿山　東風
弓とりや急度明六つ門かざり　立葵
弓勢は蛇の手を取雉子哉　万旭
若武者の中につもるさくらかな　笙和
日にやけて弓とり立やねむの花　降玉川　三入
弓取も鐵炮取やねらひ狩　兆賀

ゆみとりや七日八日の月を友　重丈
弓取の數にも入し案山子かな　小田原　居川
引ばよる放せばのびる柳かな　欣洲
彼石に苔の花さくや泉岳寺　寥和



放下鉢叩

回文　六句

河骨やきさまのまさきやねほうか　古白雲
竹の子なくばはくなこの下駄　寥和
照れはきた南はみなみ瀧はれて　同

才覺咄し品は公界さ　寥和
來つる供やとひの人や戻ル月　ゝ
栢榴の事をおとこのろくさ　ゝ

我家より樗のかげの廣さ哉　欣子
稲妻に袂を文の樂屋かな　女　花虹
散花を綾に織込放下かな　寸龍
涼風よ崩して見せよ雲のみね　寥和
瓢箪の内も空也ぞはちたゝき　貞德
長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき　芭蕉
顔入の門も過けりはちたゝき　許六
世中は是より寒し鉢叩　尚白
ことしくねさめは寒し鉢たゝき　其角
（此句中七『五元集』には「ねさめはやらじ」とあり）
一月は我に米かせはちたゝき　丈草
幽靈に水呑せたか鉢叩　尼　智月
今少年寄見たしはち叩　嵐雪
鉢敲に物うき老の寐覺かな　笠翁
曉や尻尾を見せて鉢たゝき　壺龍
聲寒し賣も己もちやせん髮　欣塒

墨衣雪にしらけて鉢たゝき　曉雨
寐てきけば猶哀也はち叩　佐原　袋中
淨土への近道見よやはちたゝき　亭牛
若竹のちやせん一ふしはちたゝき　憐松
嶋原の竹の青さや鉢叩　金幣
星なれや西へ入町聲寒し　田社
爪さきの覺なき夜や鉢叩　皃眠
狼の送ル夜もありはちたゝき　祚祥
七墓のめぐり仕廻や霜の聲　可圭
鉢たゝき取あげ婆の跡や先　寥和

山法師　奈良法師

五月雨や水にごるかも山法師　沖而
さゞなみや鎧の下の更衣　米仲
芳野ともさくらに意地や山法師　東風
煤掃の出立栄ありやま法師　寥和

いにしへならの八重櫻を、上東門院九重へ移し給んと有しに、衆徒甚惜み、強て訴ければ、却て花をおしむ風流を感じ思召、其まゝをかせられ、櫻に庄園を寄られけるといへり。



強訴訟とつとほめたり八重ざくら　桃兆
三日月や鐘の師匠の罔兩　祇丞
法師原氷にすべる般若坂　仙泉
八郎が扇でさすや奈良法師　寥和

念佛宗　法華宗

雪と消し跡の光や彌陀如來　貞徳
散花を南無あみだ佛とゆふべ哉　守武
我家の佛尊しかみな月　任口上人
居風呂を振廻れたる十夜かな　史邦

あさがほの阿の字忘るな南無佛　珪琳

日ぐらしや羽織揃ふて夕念佛　東國

黒谷へ獅子が谷から牡丹かな　長孝

雪折を起して行や寒念佛　買明



本爲凡夫兼爲聖人

寒聲をつかひならすや歌念佛　鳥左

文盲な人ぞ尊き法の春　祇明郎頓心

狐釣宿は窓なし寒念佛　羊素

蕎麥の湯に舌のまはりや寒念佛　水府遊鱗

甲城の南、寺家といふ町はづれに、いかにも古き物斗商ふ店のすみに、彌陀如來と書たる額あり。大さ尺にみたず、箔の文字もいたく煤けたれど、さすがに御佛の光殘りてしたはし。僅の價やりて我物と思ふもおかし。折から刈とる麥の秋風も西より來るなるべし。草庵の西の小窓にかけたり。能結緣し奉るとやがてこの窓の名として、明くれお念佛を申さんと嬉し。

麥秋の風も西ふくや彌陀の窓　黒露

念佛講に入ては死なぬが損なりと云

うかめ〳〵念佛講の錢も蓮　寥和

深著世界無惠心

つとめよや親もあたらぬ巨燵哉　嵐雪

又わか葉我は身延の奥を見ん　敬雨

（御影講）

かた言（こと）のおめこも同じ佛哉　水國

妙法の明るき山も一夜かな　蟬話

起かへる身延は寒し十三夜　水語

ちりはめむ末を身延のさくら苗　可速

うくひすやよそめもふらず藪の中　隨之

八宗の中の堅みや法の華　吹笙舍子鳳

元政の軒も光るかおめいかう　寥和



禅宗律家

西ふくは達磨の息か秋のかぜ　貞徳
何もなく我頭陀袋夏はらへ　澤菴和尚
一葉ちる喝一葉ちる風のうへ　嵐雪
食堂に雀鳴也夕しぐれ　支考
禅林の松の落葉やかみな月　凡兆
こがらしや夜の落葉に明やらぬ　李下
我目には師走八日の空寒し　杉風
禅林の苦ミを秋のさくら哉　百里

享保十四酉年四月象潟る

初に見て象先和尚我を折られ　古白雲
ぶんまはし眠て居ても月まどか　常仙
貯ぬ佾のけしきや石蕗の花　笠間 得秀
達磨會やあふらけの棒くらはせん　默齋
山ざくら畧の花や無一物　五滴
蠟引の袖に悟の畧さかた　有佐
煎茶(せんじちゃ)に霰ふる夜や江湖寮　和葉
冬枯のはせをや禅の心もち　秋社
寺にめてゝ木魚に悟る落葉哉　白沾
小便に行も放參かんこ鳥　寥和
菊の香や薬の名をも西大寺　寥和

山人浦人

ほたる火や爰おそろしき八鬼尾谷　長崎 田上尼
山人の晝寐を縛れ蔦かつら　加賀山中 桃妖
鵜鳴て雲に露ある山路かな　學白
たちつけの華なやぶりそ棘の花　茶酒隣 局和
山人の捨し籠や霜ばしら　和風
山人は貧しからざる木の實哉　梧尋



やま人の赤い物喰ふさむさかな　栢莚
山人の馬酔木の花や幾曲り　故一
やまびとの晝飯埋む落葉哉　甲州　東和
山人や是もぬふてふ雪の笠　和葉
山人や蜜柑でもなき手折もの　青湛
三月のさくら見ましや深山人　寥和
雁がねにゆらつく浦の苫屋かな　馬莧
こまりけり浦の苫屋の秋の暮　一鐵
こがらしの果は有けり海の音　言水

見渡せば詠れば見れば須磨の秋　芭蕉
浦人の秋のねざめや日和占　水戸　苦夕
うらびとの簑猶重し二時雨　敬亭
目薬や明石の濱の春霞　門勝
浦人の旭にぬるゝ汐干哉　仙路
須磨人を何になれとやかんこ鳥　寥和



馬買う　皮買う

嘶や池鯉鮒の市の小雨がへ　露月
幸やさくら咲野の馬買う　叉尺

手拍手で直乞濟けり菫はら　麥夫
馬かひの年の尾ひれや酒肴　寥和
下タ馬の地道も寒し雪の中　可圭
前金や春たつ旅は太夫黑　知圭
皮買う奇麗に料れ藥食ヒ　叉尺
こがらしや宿とる門を皮買う　宗孚
子灯心片荷に太皷皮買う　寥和

職人盡附錄

春之部

歌仙

職人の雪駄のをとやむめの門　寥和
わらべこゝろのたるむ七くさ　一尺
鶯の聲を二階へ及ぼして　咫尺
南そよ〳〵起〳〵の空　氷尺
あり明の月も行燈も消殘り　可圭
ならにさくらに染るまち合　尺子
ウ
遠く近く淋しき秋のほらの貝　叉尺
ひくにの船の綱手かなしも　雪麿
去程にてには揃はぬそらうらみ　里百
初奉公の月もおほろけ　東風
お花見はいよ〳〵あすか〳〵山　和風
ころは着(きる)もの一ッでもまた　如尺
弓とりの的の賭袋し□(不明)　万旭
雪もうす〳〵越後屋の傘　笠翁
小原女の牛は牛つれ大根馬　笙和
刀くはへて多賀からの札　白杪
尺八のちらりほらりと簾ごし　和藥
大工のあたま數に三吉　和柔
ニオ
奉加場へ晝寐しに來る鳩の杖　夜白
ましら〳〵とさるすべり咲　女可代
半日の連にはなるゝ瀧の音　志諷
戀しき時は嗅で見る文　十丈
三ッの津を遊びはけたるまめ男　万秋
やりての字(あさな)ならばよくとく　文尺
法華とはみす〳〵しれる顏かまへ　豐水
とかく戸塚に泊る足もと　連尺
山彦の返事も待ず定使　万井
迷子たづぬる鉦も木がらし　木雪
ひっそりと更にたりける薄月夜　柳隣
ニウ
貧乏小路うそ寒き窓　路道
松一木冬の隣を預りて　東和
主のこゝろに似た太郎冠者　芳尺
合羽から衣の袖のびよろ〳〵と　南林

霞にてあきなひ仕ゐ　來賀
眞黒な柱に櫻花久し　蔚和
百囀りの樹のさへずり　佳常

新柳

一すじもあだにはたれぬ柳かな　雪中
樋の口へ風のこぼるゝやなぎかな　文尺
樋の跡にやなぎの雫かな　柳降
むめ咲や餅にも黴の二三りん　馬光
うぐひすのどちがはつ音ぞ二子山　芳尺
苗代やみの毛に鷺の降る姿　文尺
陽炎のひかれて燃るつゝじ哉　團齋

いでやけふの佳節に鶏をたゝかはしめんも童べらしく、又桃林に遊ばゞ牛にひとしかるべし。いざやといふまゝ尻つまげて、酒壺を肩にし杖を引てはる〳〵の平塚飛鳥山をくだりて瀧野川に至りてたよりよき所にむしろをしきまうけて、たゞ日のかたぶくをおしむ。

杏や流れて笈に岩つゝじ　馬光

田家

次小屋は簾おろして柳かな　宗瑞
しだれんとおもふて居るかさし柳　寥和

久しく飼ふ猫あり。春ごとに子を四ツづつ生り。としも左のごとくなりしに、友ねこの來りて皆くひころしたり。その悲しむ聲人にも越つべく覺へしが、程なく又夏子をなせりけり。此たびはみなわづらひて死たり。さあれば春夏に子を八ツ失ひたり。人ならば尼法師にも成べき身の、まその夜に二階より鼠くはへて出たるぞ淺まし。

戀すらもわすれはやさよ猫の母　寥和

佛滅日に雪ふりければ

ねはん會や麥に藥の雪がふり　東風
はつ午やたまつても居ず法華寺　寥和
藤棚やぬすめば呵る水かゞみ　ゝ
花に人麓の蓮は鐘もなし　黒露

夏之部

卯の花やそら〳〵しくも鳴鳥　柳降
うの花や笠縫ふ膝の時明り　木雪
卯の花や明かり過たる草の庭　寥和

さらしなにて

田植歌伯母もお婆ゞも捨られず　文尺

歌仙

花守の家は若葉に隱れけり　東風
二月三月四月朔日　笙和
水さしに見ぬ唐士をそめ付て　路道
たが物ずきしあるへいの鳩　木雪
十六夜や脇本陣の古ゑの木　笙
藪も垣ねも匂ふ掛稲　東
此秋も年預太夫のにこやかに　木
蓋する椀へ打まける蕎麥　路
いとしげに住寺の留守は鬼の留守　東
頃しも風の落葉月かな　笙
行德は須磨にをとらぬ鹽けぶり　路
鶏まいらせて神をいさめん　木
青物の片〳〵に熨斗提て行　笙
お端女衆はどれも氣がるな　東

蜩の月痳たい願ひの人はたれ　木
宵に尋ねた伽羅がふすぼる　路
ゑぼし着し迎も交る初瀨寺　東
椎の下枝に杣の手ぬぐひ　笙
楯と思ふ兵法つかひひだるがり　路
あの耳たぶへ米が乘げな　木
唐紙は澤山さうに菊と桐　笙
朧〳〵夜の明る梅澤　東
橙は葉陰に青く若かへり　木
おろすあふぎに新しい風　路
兄よりも妹は膳所によい奉公　東
としが十九は死さうな年　笙
水入の鴛もひとつは淋しくて　木
兜腕をく御所の緣先　東
汲かはす酒も泉か三ヶの月　路
櫨もぬるでも色に出にけり　木
わたる雁むかしは文も屆けたに　笙
八反掛の命知らずめ　路
たゝき割鞘もおそろし源吾兵衛　東

舟あたり合ふ風の福島　笙
花さかり城も九輪も和らきて　木
蝶〳〵もまた笠をぬふてふ　路

道灌山は太田入道の居城の跡なるよし申つたへ侍れば

兵粮のこぼれてや今麥の花　東風
きのふ花けふは葉櫻飛鳥山　ゝ
風をまだしらぬばせをの若葉哉　尺子
よし垣の猫のひたいにわか葉かな　寥和
物おもふ車のもとの水雞かな　連尺
一聲で闇の夜はなし郭公　志諷
梢みな青山赤坂ほとゝぎす　寥和
夕すゞみ燈すや岸の花ざかり　夜白
夕立やまだかはかぬに蟬の聲　叉尺
たれも斯痳た昔あり枕蜩　白杪
武者ぶりを妻に見よとや土用干　一尺
松風に管絃する也山のせみ　馬光

鳴立澤にて西行上人の杖を拜し奉りて

夏きくや屆かぬ迄も力竹　女 可代

夜鰹の船のどめきや星月夜　如尺

生ふねの鯉の物すまし顔に尾鰭うごかしたるも淸らかなり

生鯉の鬐もそゝげず涼しけれ　寥和
池を出て抹香くさし蓮の花　路道
つる〳〵と日出度蓮の旭かな　和葉
明六ツの鐘をこぼすなはすの露　雪麿

溽暑

高すなによる浪やけるあつさ哉　沾洲
心つよき人は日ぐれの暑さかな　寥和

薰風自南來

北風もかほるばかりぞ綠のはな　寥和

秋之部

むすび置鳴子や窓も一人役　馬光
星合や面かはりせし御祓川　寥和
秋の蟬衣わすれそ三保の松　鵑翁
秋海棠唐のをんなのすがた哉　佳節

良夜

照る月に若過たりし姨の顔　黑露

名月や呵られもせぬいわし雲　可圭

蘆の葉や横に流るゝ月見船　寥和

延享子八月十五日の夕日ほがらかにして、こよひ清光ならん事を知る。かねてしか〳〵といひける三四子と小舟をうかめ、先三叉口に押出すに、業ならぬ人の網打あり、罾おろすあり、いづれもこよひのもうけならんとおもへば心なしとも云がたし。都て此川の邊のけしき常の夕には似ざりけり。まいてよしある御方の御別墅なんどは厳重のよそほひ也。又待乳の山根に急ぐ小舟あり、是も捨がたし。兎角して日もくれなん頃三めぐりに着く。頓てはひ上りて見れば、夜はゆきゝもまれ〳〵なれば、岸上に筵をのべ、酒肴やうのもの取ひろげたるは、人もなげなるふるまひなるべし。月はからびたる森の上に満ちたり。林棲見鳥毛といひしもこよひのごくならんとをの〳〵口號。

名月や柳も白髪梳くべし　寥和

船蔭の月を見めぐるこよひかな　志諷

墨色の森の深さやけふの月　木雪

名月や柴を積んでもたから船　長孝

織牛の太鼓鳴りやむ月見哉　佳節

又船に乗て金風銀波を漕もする

初夜後夜を男ざかりや月こよひ　寥和

稲妻の唐黍わけて月見かな　鳩光

重陽の日伊勢に遊ぶ

柊赤いわしさす除夜の軒は常にして、又榊飾るこそ目出たしと見るに、猶とりも捨ず。年中立つゞけたる門〳〵の姿も、神代ふるき習しにやと尊し。おほやけには今日葵に菊をとりかへらるゝときくに、

榊葉やとりかへもせずけふの菊　黒露

秋色

虫も機織ると聞しか野の錦　團齋

錦着る野山の中にからしかな　東風

唐松に一すじ三筋蔦の秋　柳隣

寐がへりのうつゝに変るきぬた哉　万旭

いつの間に来て居る事ぞ小田の雁　雪中

冬之部

水仙や又格別な葉のひねり　黒露

霜の中にさく事奇也つはの花　里百

規矩菴を修復せし時

やねふきの終には下りる時雨かな　寥和

新しき傘に嬉しきしぐれかな　路道

琵琶抱てつきなき晝のしぐれ哉　一尺

驛路

江戸を出てけふ三日の月不二寒し　寥和

鎌倉七里が濱は行程四十町斗に覺ゆ。いかなればいふぞと尋しに、當浦の者申す、六町一里也と。

しぐるゝや唐の七里の濱づたひ　寥和

稲むらの風を休めてしぐれかな　白杪

宮様のさくら椅むらしぐれ　万尺

牛嶋の邊りに一夜泊りして

近づきの鐘も氷るや川むかひ　寥和

お霜月ほとけ／＼や夫婦づれ　和柔

亭ゝで見しはもし此雲か初時雨　花藝洞 南林

はつ雪や折／＼傘をすぼめけり　ゝ

盗めばやちからも募る大根引　ゝ

ぼうふらは年を取らんと思ふかや　東潮

としの矢を請て　お見やれ蛍火丸　前 白雲

一ッ脱キふたつぬく夜や年わすれ　可圭

年浪やよる／＼削る花かつほ　柳隣

としの夜や一筆書の太神樂　寥和

五六十年を賣たしとしの市　八十三歳 笠翁

職人盡執毫

龍水

路道

柳隣

可圭

附錄 鳩光

後序

凡百工の成れる事つたへて久しきにや、やゝ霞たつ山の端よりそらのけしきもにほはしく、窓に影さすうぐひすも、筏とる賤にひやうしをそへ、何くれとなく春も過て青葉の翠簾の懸かはりたる、鶉啼野の深草は土器にも露はほしあへぬぞかし。炭焼小野の里はけふりの行衛だに猶恋かりき。すべて四時の民の手業これにしもかぎるべきかは。されはその品をつらねたる古き歌合の侍りしを、いまや萬里亭の物ずきによりて、狂句に一轉せられしかば、さびしくもあり、おかしみもありて、まことにもてあそぶべきはこの一帖にとゞまれり。と珍重して筆をさしおくのみ。

長谷川馬光

延享二乙丑年　仲夏上旬
梓工　吉田魚川

職人盡誹諧集後編發題

延享きのとの丑の夏、萬里亭のあるじ、職人づくしの前編を作る。その風流古雅のすがた詞今世に翫ぶ所也。職や誠に上王侯の尊きより、下部賤の下ゝの下の事わざ迄、職分の離るゝものなし。彼深くさの野に啼すてし一聲も、身にしみたる夕邊なるを、旅する鳥の北斗の前に横たはるなど、あるは山のもみぢの色こくかつちりゆく、ちりやちりとも鳴通ふ夜ころには、其關守のねざめも哀なるべし。いつか人めすら枯はてたる中に、水仙の清げにひとり茶室をうれしがらせ、又寒菊のかしこげなるに、はや室の戸に咲そめしより猶睦月のにほひ深かく成そもて行、白のよき、紅のなつかしきのに、春は月日ほしとさへ啼うつる色音こそ花鳥のしよくなれや。此外のはなの垣ねにしてのたおさを朝な／＼なき過るに、是等げに勸農の職なりけり。されや飛脚は馳行を以てし、禁足の僧は林下に止靜して出ず。森羅万象いづれか職とすといふに洩んや。此職を大成して後集とよぶも、俳家者流の職にして、寥叟は爰にこれをわすれざらしむるの職叟也。と其あらましを僅に綴るも亦さし當ての職人ならんと、寛延改元戊辰の秋草の庵崎の旅屋にするがの黒露發題す。



帯賣

姫松の帯か腰まく藤かつら　宗鑑
白雲の天の原帯土用かな　望一
帯ほどに川は流れて汐干哉　沾徳
おびふるしいまだ旅なる衣更　一有
帯賣の端落すなり初あらし　祇梁
おび賣に呼戻されて藤の尺　雨橋
うり買にならぬえにしや常陸帯　有佐
さけ帯の〻ちからなきあはせかな　杏露
おびにする霞はほそしおとこ山　豐水
帯賣や幾重に廻るはなの京　秀谷
立髪のはつ花さくら名護屋帯　寥和

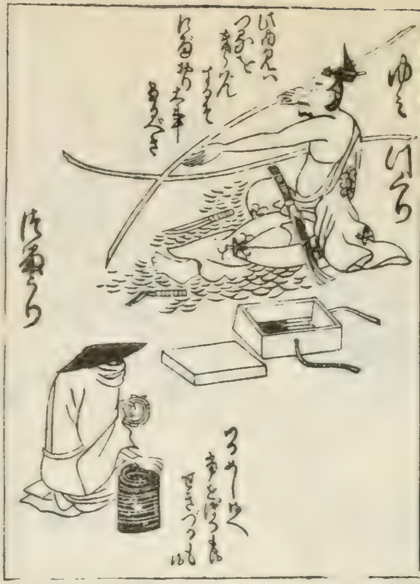
白粉賣

降る雪は京白粉とみやこかな　重頼
化粧する果や啼出す猫の戀　史邦
みじか夜やまだ白粉の香は殘り　ナコヤ　一雫
出かはりやをしろい賣の誘ふ水　水戸　鯨石
箱入の雪をみやげや薬おしろい　一和
白粉にこゝろのこる雪見かな　文尺

雪の箕ひらくひじりの恵美須制　　路道

京師井上長門が源氏白粉の包紙に、筒いづゝを畵る事、井の字によりて也。今東武製にも互にかけを水鏡にうつして、皆長門と銘を打てつゝ井筒を畵かけり。

白粉の花摺にせよつゝいづゝ　　寥和



弓作り

松の葉の弓作らせん花の春　　信徳
うぐひすや弓にとまりて法の聲　　嵐雪
紀の山路にて
蛇覆盆子牛弓さげて夫婦連　　仝
竹の子の時よりしるし弓の竹　　去來
太平にゆみの月日や若和布むこ　　佳風
梅咲て肩もひろいそ弓つくり　　桂石
さみだれやけふも寐に來る弓作り　　思明
ひいて見る雪荷の村の宵月夜　　白主
反かへる弓師の伸や雲の峰　　万船
弓作る夜なべにさすや三日の月　　鳥朝
青柳の反りを師匠やゆみつくり　　和龍
押せば出る弓張月やゆみつくり　　青鳩
金貝のすこししさりて弓はしめ　　不尺
弓町の聲靜なりとしわすれ　　杏露
ゆみ町は障子に名乘霜寒し　　寥和

弦賣

花瓜や弦をかしたる琵琶の上　　言水
あきかぜや白木の弓に弦はらん　　去來
梓弓つるがの海や春の景　　重相
弦うりに近みち問ん花の里　　其蔦
つるめそが蜘の威光や祇薗の會　　鵑翁
つるめそが弟子等までけふひた甲　　寥和



ひきれ賣

四ッ五器の揃はぬ花見ごゝろ哉　はせを
紫陽花を五器に盛らばや草枕　嵐雪
椀屋より手を打つゞけ神の春　沾洲
ちりうせす梅に松華や會津椀　松遊
わんうりの年の夜たゝく水鷄かな　青祇
椀うりや蛙鳴するとしの市　志諷
わん郷に春のひかりや年の市　万廸
椀飯（わうはん）のねんごろ久し根來わん　寥和

土器作り

愛宕にて

綿を散てかはらけを待かすみかな　氷花
愛宕から土器町へほとゝぎす　珪琳
手のひらへ落葉うけたりかはらけ師　二世 盤谷
土器の干かねるうへに落葉かな　鵜名
炭竈にけぶりは低しかはらけ師　子蓬
かはらけのかたまりかねし秋日より　水戸 豆花
谷底にをのがはなありかはらけ師　仝晴蜂改 意中

夕されは野邊の秋風身に入てと詠ぜしを

かはらけもわるゝはかりのうつらかな　上總武士郡 壽躰
元政の會式の客ぞかはらけ師　雅光
鶉啼深草や子も土なぶり　經祥
おもへばや土器つくるはなどころ　調羽
白雨や干ぬに取こむうち曇り　祇風
あつき日や名も深草の土器師　園芝
土器のくちびる寒し初揚屋　寥和



まんぢう賣

佛名やまんぢうの香の薄けぶり　洒堂
まんぢう〳〵釣のいとまも波のうへ　亀毛
饅頭は鶴に長閑し林氏　盛山
まんぢうや杖いま坂のおぼろ月　志友
まんぢうのうはさもたらず岡すゞみ　蕉渓
（餡）あんなしに象も繋がん美人草　路道

饅頭は異國の製にして、林和靖をうけつぎたるよしにて鹽瀬を根本とす。又本町にも桔梗鳥飼の跡絶ず。近來鈴木の風流つぼ屋の一流をはじめ、いづれをろかならざる中にも、主水を最上とす。

まんぢうや嘉定の中の富貴草　寥和

法論味噌賣

味噌大豆の煮（に）る匂ひや朧月　史邦
夕だちにほろ味噌賣のうき世かな　水戸　璘瑞
白雨を鬼とぞそしる法論味噌　露秀
豆からを焚や師走の寺の場　長梢

昔千宗易、宇治の柿入るゝ箱を以て料紙箱とし、奈良のほろみそのはこをすゞり筥と物ずきせられしより、其物のほどをたゞちに其ものに用ひらるゝ事、誠に獨歩の茶聖なりとぞ。

保呂味噌や奈良からふるき硯ばこ　黒露
はふり子のほろ〳〵味噌や神無月　寥和

紙すき

薄氷上手にすくや紙屋川　徳元
紙すきのはた〳〵嬉し谷の花　琴風
かみすきの手妻や美濃に散る紅葉　好古堂　以貫
紙すきや日脚覺える冬至過　備中成羽　素道
かみすきのはた〳〵寒しから衣　水府　沾橋



紙すきや流るゝ花に春をしみ　仝　苫夕
すき出す紙に五色のはなちどり　仝　遊璘
梶の葉の秋や紙漉墨田川　嘉廷
御成川するゑや紙漉ゆふだすき　栖雀
かりがねや灯のもる家に紙きぬた　徹中
心には花をさろふや芳野紙　田社
かみすきや水の中うつ小夜きぬた　松巴
紙すきの里や礎の夜のあまり　竹阿
かみすきの手妻に早き小鮎かな　鳥羽　巴洲

散はなや塵を漉こむかみ屋川　蓮外
なでしこの花のあたりや地紙漉　万珠
すきあける紙に残れやほとゝぎす　世田谷　今之
紙漉の目にも芳野やねりの花　寥和

さいすり

帷子の四五六月のさいみかな　宗鑑
わさとならぬ葉のうら表いちこかな　青嶽
賽すりの手からこぼれつ梅のはな　露斗
さいすりよみがけや年の市のうら　寥和

紙漉　追加

しら菊や紙漉里の朝ぼらけ　砂川堂　涼翠
すき込やちればぞさくら芳野紙　伊十

回文

紙漉よ花見て皆はよき住家　共月
かみ漉に涼しさとはん窓の顔　万夫
紙すきの灯火白し小夜千鳥　野州足利　鹿如
花の香や紙に漉こむ妹背川　涼花
浅間根や爰はとろゝのはな盛　魚里
名月や雲紙すける水にまで　丈室

新古誹諧の職人をあつめて此職人集よく調たるをうらやみて

我も戀しのぶ紙子や集の主　仝

ろくろ挽

蓋挽の兎に角冬のあはせ貝　專吟
木地ひきの醉顔見たり山の色　沽涼
夏の日や乳母が水汲む錫ろくろ　東風
觝のつれなく見へし轆轤ひき　寥和

鎧細工

坂本ニ泊りて
なめくじり這ふて光るや古具足　嵐雪
三保野矢は首の骨こそ甲なれ　仙花
清水長谷川が繪馬を見て
草摺の唯今切るゝあつさかな　氷花
卯の花のおどし手際やあさぼらけ　涼龜
よろひ師は裸でさはぐ野分かな　連尺
老武者も具足の餅に居りけり　寥和



みすあみ

翠簾かけて誰妻ならん涼ミ舟　秋色
身半分花にかくれて編すだれ　岩城 芳津
かゝぐる歟みすあみ仕舞ふ雪の幕　羊素
みすあみや竹に雀の子もち筋　水戸 遊璘
翠簾あみの夜なべ邪魔するさかり猫　栢筵
暖簾からすだれや軒もころもがへ　万船
あむみすや垂るゝをまたぬ秋の風　寸龍
風寒し旭織こむ翠簾のあや　調羽

みすあみも脂なわすれそ月の秋　秀室
春風やゆかしきたねのみす作り　万珠
みすあみやふしの間にく横かすみ　尺子
おもしろやみすに柳の竹配り　素蔦
翠簾あみやかざして見れば片時雨　白圭
みすあみのをのが手もとや雁の空　拾翠
かほる風誰にもらさん翠簾作り　鋤之
初雪やみす屋もすだれかゝげけり　川何
戀よ猫美壽屋の妻もたち姿　寥和

唐紙師

たつ波はから紙ばかり汐干かな　夏人
からかみに水と雪との寒さかな　志誠
紅葉を惜しむ手しなやから紙師　閑芝
あつらへて二尺に咲を菊の花　可圭
まつ春の唐紙帳やきみがひさ　和尺
から紙の桐も天下の秋なれや　寥和

一ふく一錢

雷や門の茶に寄ものがたり　伽香
茶ばかりときつね鳴なり枯薄　涼菟



關守も寐られぬ須磨の新茶哉　支考
宿はづれ霜消る間は朝茶めせ　如泥
連翹や茶に山吹を捨さする　巴静
あが國の名におふ茶あり榜うけ　午橋莊　杏英
夕すゞみ橋のたもとや袖引茶　佳節
風薫る一ぷく一錢宇治のさと　琴鶴
棚はしや大和なでしこ爺が釜　水馬
うつら野や旅の餁のたちなから　硯壽
茶賣迄袷になるや大手先キ　一壺

煮ェばなの鑵子の蕎やくつはむし　如尺

一ぷくに一錢浮くやいけの蓮　寥和

せんじ物師

酒賣もせんじ茶で見よ姥さくら　重頼

茶も月の名に合せけり後むかし　老鼠

獨吟の內ニ

どこでがな湯立初ん永き日に　貞徳

のみてもあらぬ此荷ひ茶屋

出籠に果報こそ茶のあまり水　來至

風引の雪の戸あくやせんじもの　不尺

待花や目のつく所になひ茶屋　淀　等丈

道芝や十夜御命講を荷ひ茶屋　雪膺

來よかしの時雨の雨や煎じもの　寥和

佛師

光さゝらぬ內に拜むや雪ほとけ　玄札

涅槃會やけふは佛師の惠美須講　蛙足

佛師の砥石はかなやくさの露　麥仙

法橋は山の出入ぞほとゝぎす　少我

箔ちるや佛師の膝に飛ぶ螢　鈫尺



雨雪とわれても一ツ佛師かな　宜朝

箔散るや佛師のひざへ靑あらし　南社

其國は佛師の屑を落葉にも　道淡

佛師とは親のから名や生身魂　寥和

經師

鶯の初音や經の一の卷　松一

とくぞ今四十九年の粘の花　寥和



まきゑ師

小つゝみや蒔繪に見ゆる松はやし　方閑
あの中にまき繪書たし宿の月　はせを
なでしこやまき繪書人を恨らん　越人
梅一輪咲て天下の蒔繪哉　巴人
砂子地やあかしの月のほの〴〵と　生花
まき繪師のおもはゞ淋し秋の雲　文笑
野を見せてまきゑ筆らん草の花　備中成羽 依水
まきゑ師の手の油氣に花曇　何調

とぎ出しの月の光やかゞみやま　咫斗
まき繪師のこぼるゝ露の裾野哉　水戸 來由
まき繪師の心や狂ふ村紅葉　翔雨亭 斐靚
光阿彌が目にもさくらやひがし山　佳境
まき繪師の紙帳を花の舍りかな　筌二
ならの葉の錦や奈良の古蒔繪　寥和

貝摺

浪の間や小貝にまじる萩の塵　はせを
とこぶしは宵の小貝や磯の月　嵐雪
かげろふや小磯の貝も吹立ず　晋子
朝鮮の貝もひろはんけふの汐　万尺
貝摺の鞘に暮たる螢かな　丈國
貝すりの窓を訪ふほたるかな　柳隣
かい摺の耳にばかりの師走かな　景湘
貝すりの寒さ忘れし水仙花　貞芙
後貝と見ゆる女房やわか楓　寥和

沓作り

ゆふぐれは沓につまづく乙鳥かな　風瀑
初雪やみなやどなき沓の音　山川



夕がほや沓かへ宿のまくらにも　大町
さみだれや沓の直あげる間の宿　永我
くつ作り紛れてつかむ尾花かな　嘉橋
まりほどな鮟鱇を沓となぶる也　寥和

鞠くゝり

まり子にて

くつ音も靜にかざすさくら哉　荷兮
吹息は鳩呼秋歟まりくゝり　蟻舟
永き日をくゝり寄てや鞠の音　沼津驛　同　波

七夕の日を誰がはれぞ鞠くゝり　道淡
年の暮數ありや〳〵やまりくゝり　寥和



針すり

藤瘤にたつるは松の葉針かな　吉貞
わたに針包むこゝろか雪の松　正直
名月や針するひさのまつの塵　夜白
釣はりに釣も崩さん鱚時分　寥和

念珠挽



幾度の彼岸に逢や珠數の艶　淙萑
珠數くりて蝿打人の片手かな　雨軒
無量壽の年とり豆や珠數の玉　卯斗
淺草や珠數屋に降る海苔の道　豐水
呟夜半もあやなし梅の玉木賊　水馬
飛花も枯るゝも挽や珠數作り　釵尺
後の世の落葉かくなり念珠ひき（風カ）　百二改　蟻道
刀豆の珠數も淋しゝあきの數　寥和

米賣

年たつや新年ふくべ米五升　はせを
此句の瓢は芭蕉菴の柱に掛置れし米かろうと也其後素堂
黒漆にて
一瓢重泰山　自笑稱箕山
朱にて
四山
莫習首陽山　這中飯顆山
朱にて
葛飾隱士素堂書　書判
此銘をかゝれてなを珍器となれり
今栢莚所持之　笠翁添書アリ

北濱の市は崩れて雲の峰　万珠
石町を米うり歩行彌生かな　文隴
米賣や外はあさがほの花さかり　五啓
年を經る天秤棒やことし米　一壺
米賣の道や一すじけさの雪　釵尺
新米や舟まで隣る美濃近江　尺子
雪の夜や迷子も米のはかりこと　寥和

豆賣

せつぶんやつねは小豆を賣ながら　谷水

外と我としの豆賣翁かな　輝雄

さみだれのそら豆うりや待乳山　潜魚

豆うりや一夜は鬼のかたきもち　水戸 沾璘

まめ賣に音を負るな玉あられ　友松

豆賣の輕〳〵しさよ年の關　達平

新大豆もしやが父に似ぬ俵かな　寥和



いたか

驚くや門もてありく施餓鬼棚　荷兮

瓜李罪の有なし水せがき　京 順也

報謝せんそこにもいたか盆の月　万旭

佛にもならぬ響や辻施餓鬼　寥和

穢多

穢多ならで狐かははる少かな　宗鑑

夜こそきけ穢多が太鼓ほとゝぎす　キ角

神の代を知らずや時の花見たち　白雲

明行や妙法蓮華ゑたが池　故一

虫干に信者這入や穢多が門　棄五

我犬に穢多と知られそ皐月闇　群牛



太鼓張る門邊に清しむめのはな　寥和

玉すり

君が代やみがく事なき玉椿　越人

玉摺のかはらをてらすほたる哉　半秋

草の葉のほと／＼するや露の玉　白主

たま摺のする／＼眠る春日かな　杉國

玉すりの痲覺も丸くとしくれぬ　水府　麗斗

玉摺よ人もこゝろの花曇り　仝　沾璘

玉すりの手本にせよと霰かな　鳥羽　巴洲

木賊から磨き出すやたまうさぎ　波道

枝梅や玉にくらべてまたをろか　芳津

玉すりや磨き上たる夏日和　都江

たま摺のこゝろはいかにけふの月　万珠

玉摺の手のくぼよりぞ月寒し　七十翁　常仙

みがけばや背中女あり雪の窓　水戸　露白

あまかはらこゝろよやあら玉細工　寥和

硯きり

菊の香に鳩も硯の水添ん　嵐雪

ありがたや花の硯の石見がた　青流

硯切蔓やするがの葡萄石　雲藏

汐干にも乾かぬ袖よ硯きり　水戸　豆花

硯きる音もたま／＼しぐれ哉　杉國

手はしめには若むらさきやすゞり切　逸秋

花や鳥やしづこゝろなき硯きり　水戸　沾橋

いろ／＼の花のすがたや嵯峨すゞり　万珠

土佐といふ硯屋でけふ石買ん　寥和



一もじ賣

一もじや一字の題のわすれ草　百花

葱しろくあらひ立たる寒さ哉　翁
下男水仙かりつ夜の河豚　一晶
ねぎ賣の籠輕さうな歌ふくろ　祇章
ひともじはしらねや饅のかくしつま　寥和

灯心賣

子まつりや梅待宿の赤豆めし　山店
子祭に日貫ほり出す自慢哉　史邦
夕立や灯心うりの荷も重し　英露
吹けば飛灯心賣のすゞみかな　志諷



身のためにちと賣殘せ子灯心　万旭
書初の下繪して見ん子とうしん　寥和

鞘巻切

風さそふ梅の小たちに鞘もなし　谷光
永き日はさやつき詰の刀かな　春可
節餅やこがね作りの鞘巻師　志友
鞍口のあふ夜も更る師走かな　寥和

くら細工

秋山や物もゆるかぬくらの上　キ角



荷鞍ふむ春の雀や緣の先　士芳

さくら山目に付て居ん鞍細工　菓五

春の日や伊勢の馳走のくら皆具　雪唐

饗應の鞍馬は國々の諸士より結構を盡さる

高麗人にもてなしぐらや金銀花　寥和

白拍子

柳にはつゞみもうたず唄もなし　其角

宿下りの叟も露けし妓王村　午寂

大象の傾城をゆみあつさ哉　六椀 青峨

古代付合の句に

廣き世に名を取れる遊君

嵯峨の西とぢこもりたる生佛　立甫

同

舞姫の裾からそつと手を入て

靜はなく〳〵出るせつちん　堺 元順

入相に要もゆるむさつきあめ　溪淵

佛出て扇露けし嵯峨の庵　也足亭 登度

夕がほや隣をきけば白拍子　祇山

白拍子また裾輕し十三夜　逸秋

蝶々も狂ひなか間やしら拍子　川越 連國

白拍子白衣になりて涼かな　仝

花とりに我身の上や白びやうし　隹節

太刀帶て媚を賣けん月の眉　桃溪改 桃兒

しらびやうし隙な手もあり小夜きぬた　嘉橋

題歌妓　狂詩一律

吉野丸花躍　歌鶯姿似燕　北陀齊 水和

橘町振袖香　遊女意如娘

流液平相國　誰知明且景

拔腰源九郎　還勝昨宵涼

秋淋し佛の景の草まくら　仝

檜扇子を柱に干すや五月雨　水樓

長刀も持たせて見たき扇かな　如尺

白拍子言葉に花の女かな　列張

名月もいさよひもしら〳〵拍子　寥和

歌仙

嶋臺に扇子わするゝ別れ哉　昜和

猿の袖まで匂ふ名月　寥和

漉し水の音も漸寒うして　仝

紺屋の垣に畠少〱　勗和
小細工は端居の内の氣なくさみ　仝
物喰ふ馬へ横に日かさす　寥和
入相の鐘にいぼたの動くらん　仝
早稲田の町の遠い雪隠　勗和
藝もないところに是は惜しい石　寥和
八十七ではしめての灸　勗和
優婆塞も優婆夷も酒は一雫　寥和
地形のわるい飛神の茶屋　勗和
筏士の帶で手を拭く暮の月　寥和
志賀之助なし今も丸山　仝
本堂の瓦下地に稲むしろ　勗和
花にも若衆また紅葉にも　寥和
むらさきのさめるも早き男やま　勗和
八まんと云ふ事が口癖　寥和
物ずきな極樂國土世間寺　仝
踏んだ敷居をいたゞいて行　勗和
箸紙を持るばかりの節句にて　仝
かな法師殿雛立たがる　寥和
水へ浮かす繪の相傳も油花の占　仝
塵もうごかず箔置の鄽　勗和
小便の色までかはる二日醉　仝
若上人の俗はられける　寥和
薬じやと鞠をすゝめに來ては賛　仝
逆澤瀉は類のない紋　勗和
朝の月潮に魚の伊勢同者　寥和
露を抓ンで悟ひらける　勗和
癩にとんと預ける紙きぬた　仝
奈良へかゝれば麥の秋風　寥和
出るとはや錢突習ふ恥しさ　勗和
男の給仕つき〲しさよ　寥和
職人の顔新しき花の雲　勗和
みそし二もし皆春のいろ　寥和

追加

袖の香の流れて水木春深し　白杪
舞の手の波間を潜る御哉　友以
茸狩やまた覗かるゝ祇王庵　東風

曲舞舞

一夜來て三井寺うたへ初しぐれ　（尙）夜白

曲のうちは辨慶いかに合歡の花　水馬

御命講の日暮や尼の居曲舞　寥和



てんがく

手拍子の品玉にとるあられかな　重頼

綾織の白刄の上のさくらかな　濟通

田楽の我名を喰ふはなみかな　蓬谷

でんがくの新座や花の祇園串　寥和

さるがく

里人の渡り候歟はしの霜　宗因

幸淸か霧のまがきやむかし松　音子

夕くれは〳〵何とほとゝぎす　麥林

役者達奈良に居付や花の春　殘花

家に三老女といふ事あり、亡父將監秘して傳え侍りしを思ひ出て

伯母捨を闇にのぼるやけふの月　立甫

金剛の尉もさびたりかみな月　寥和

猿物し



前

紅梅は誰がふれし香のそめ小袖　立甫
きそ始松に柳の糸とめん　嵐雪妻
蟬衣ぬひ物のとし歌と葉　一守
袖へいの縫や朽葉の蔦かつら　令德
藤よりはさきに暮けり針の溝　五啓
鴛鴦や水は金沙に流れ行　馬光
上へ前にとまる葉多き胡蝶哉　永我
縫物師出した儘なり五月雨　珠龍
わか芝や觀音を縫ふかさのうち　寥和

くみし

からくりの九月や花のいとすゝき　蓮外
よりて見ん本町二丁目の糸やなぎ　寥和

追加　縫物師

しづこゝろ素縫の菊に伊達はなし　祇山
遲藪入をうらむ戯れ男　寥和
水〳〵と五日の月のさし出て　來至
宵講釋をもどる一つれ　祇山
ほとゝぎすに顏の筋違ふ座頭の坊　寥和
色も匂ひも濃き若葉山　來至

仝　組師

姫國の春のひかりや五色いと　來至

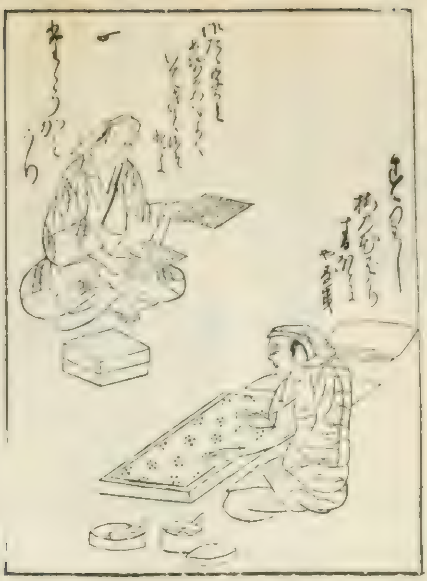
すり師

石摺のやうに霜置や菊ばたけ　貞芙
板すりの手なら足なら雨蛙　尺子
板摺の得手に帆かけんたから船　佳境
はん摺の咲ぬ花見る花見かな　一尺
草花や八重菊小きく植字板　如此
山吹のひとへや八重やあはせ板　寥和



畳紙うり

初花の賣言葉かなたとふがみ　雨夕
行秋の夜なべひろげん畳紙　路道
虫干や短冊明ヶる畳がみ　佳節
桐の葉やたき物姫の畳がみ　寥和



つゞら作り

解にくきつゞらを春の日影哉　休甫
薬さくらや過來し伊達のつゞら笠　一尺
ちるや桃葛籠に足駄なみだ雨　不尺

細元手くりてや秋のつゞら町　文國
ゆくとくと君がつゞらやはるの宵　寥和

かはご作り

新澁のはりま鹿兒嶋誰か家　專吟
剃るとはや皮籠に溜る秋の暮　水馬
對子王かもぬけのかはご今も蟬　何江
虫干に皮籠もあるか國分寺　万廸
峰入の笠もかはごもそげ〳〵し　寥和



矢細工

年の矢を請てお見やれ蛍火丸　白雲

沾洲點、羅浮印譜最初の句

前句　十六夜の且は袖も酒臭き

早稲はして取流鏑馬の端矢　咫尺齋

猪は來ずとしの矢はぎの拵哉　水戸 低哉

矢ともなり手とも成たる案山子哉　沾涼

征矢つくれ鴈は八百鹿の聲　五啓

楊弓の矢の秤目やはるのひま　寥和

箙細工



梅咲やゑびら細工の窓あかり　水戸 歩月

靈寶も梅にかざすや古ゑびら　寥和

ひきめくり

くり絶ひき目もわかねさつき雨　二世 沾涼

秋かぜや目にはさやかにひきめくり　豐水

弓張のこゝろひきめやまめ男　寥和

むかばき作り

むかばきやかゝる山路の菊の露　兀峰

當世にむかばきつくれ射場はじめ　如此



蘭の花や撫つくるはなれざと　沾涼
むかばきや妻も見まがふ夜興引　路道
むかばきや裾野のはれに桐の花　一尺
むかばきの毛色を鹿の尻目哉　寥和

庖丁師

宇治丸といふは人なりうなき鮓　長治
柚の花やむかしを忍ぶ料理の間　はせを
名月やこゝろからこそ料理人　和葉
庖丁のはたらき見たりはつかつほ　千里



百日の手際見せばや洗ひ鯉　硯壽
初鮭や細いたけづる波の音　超風
忠政も心得てし敷つるしきり　寥和

てうさい

都にて珍しく海松のさしみかな　長治
喰ものゝ花咲にけり夕すゞみ　乙由
提重の中をうらなえ梅の花　超波
油揚の音も日永し唐料理　寥和

白布賣

布しまを織ばやをらん霜ふり地　宗伴
波の音しろくや布の嶋さらし　女 山人
ぬの嶋のしら波を月のさらし物　重次
衣かへ白きは物に手のつかず　路通
布賣やみな香久山の干あまり　田社
白布の雪は降けり富士詣　文尺
ぬの賣のいたゞくゆきやゑちご布　寥和

ひたゝれ賣

直垂を脱ずに結ぶ清水哉　一髪
立出てひたゝれ賣らん花の春　群牛

曾我殿は町直垂の袖寒し　雪麿

寺紅葉ひたゝれほしき夕部かな　寥和



薫物賣

身にしむや香爐の煙秋の風　徳元

おぼろ月薫物賣がしめりかな　才麿

賣ながらたき物ひめへたむけ哉　貞鴒

風馨し薫ものうりかはなのさき　硯壽

みなみよりたき物賣も來るかも　和圭

夜くだちに誰か薫物ぞ星むかへ　寥和

藥賣

松脂はたゞ膏藥の子の日哉　貞徳

見るは目の藥となりの壺すみれ　正成

きくや聞ぬ初ほとゝぎす藥うり　杉國

蛤も栗も夜聲やくすり賣　麥仙

雪の夜や道正庵をたゝく音　寥和



連歌師

蔦は連歌もするやはなのもと　親重

髭宗祇池に蓮あるこゝろ哉　素堂

歌か否連歌にあらすにし肴　文　隣
二年の月のあるじや珠玉庵　宗　瑞
あさがほや廿九日は曇れかし　珪　琳
はつ雪や連歌座敷は寒けれど　梅　徳
連歌師としたしく成ぬ五月雨　林　里
連歌しの信濃をつかふ師走哉　経　祥
吐月峯の秋やむかしのいものやま　永　家
たち花や連歌のとうのかり座敷　寥　和



早歌うたひ

寒聲につれもなげなる早歌かな　寥　和

びくに

あつらへて折や比丘尼の鍮わらび　休　甫
みるふさはかゝれとてしも寺の尼　嵐　雪
女中がた尼前ははなの先達か　仝
かれ菊の名の實殘るやまつが岡　谷　水
すた髪は糸のやなぎや松が岡　蓮　尺
歸るさの阿武に荻の風凄し　知　圭
弟子あまの汲や若水わか菜つみ　寥　和



にしう

尼達の手染は薄し燕子花　乙由

さまを恨てなりし尼寺

古き付句

煩悩の犬や土にて作るらん

秋の夜やつとめの隙の土小いぬ　寥和

けごん宗

東晋の學賢三藏華嚴經を譯せられける時、庭前の池中より忽百葉の蓮花生じけると也。

三界唯心の　心より外には法の舟もなし

こゝろを　しらねばしづみ知ればうかばん

わたるべし蓮の花びら法のふね　桃兆

作りかなはや序開きに詰のはな　龜毛

口きりや衆生はいまだ呑みこまず　永我

池水に雨もかほるやはすの花　市寶

法旦か雪道明るあしたかな　寥和

倶舍宗

初霜に行や北斗の星の前　イカ　百歳

東大寺にて兼學ありといふ事を

大佛に副て花とや蘭奢待　桃兆

くしや〳〵と糊こは晒奈良法師　龜毛

倶舍をたて入にしてけごん宗の心を

うつくしや五時のひとつを法の花　心祇

狂歌

題倶舍華嚴法花　拾遺哀傷

ほけ經をわがえし事は薪こり　大僧正行基

菜つみ水汲つかへてぞえし

くしや〳〵と年はよりてもたしやさの

菜摘水くみ毛ごんぼう（牛房）ひく　栢莚



但含蓄十哲傳のこゝろを

伊勢で覺るとうの眠りや吉田祭　寥和

酢作り

惠比須講酢うりに袴着せにけり　はせを
酢つくりの麹の側やむめのはな　松巴
すつくりの梅に慣や水かげん　兆賀
酢つくりの鼻をはぢいて梅の花　沖而
きた風の身にしむ簾や塩かつほ　蓮外
煤の日の北風寒き鱠かな　豐水
酒は酢に成て侘しや秋のくれ　寥和

ところてん賣

涼しさや心手へとる水のいろ　嵐雪
水門の内を呼せんところてん　序令
遊ぶ事白雲深きところてむ　白雲
水ゆれて井桁になるやところてん　二世節士
道野邊のやすむ木陰や心太　尺波
醬油にも三輪の印ゃところてん　道雲
腰かけて喰ふが作法かところ天　佳節
道野邊に清水流るゝ大凝菜　桃兆

靜さは浪のすだれやところてん　曉雨
蕎麥くさき佛もあり石花菜　梅德
鬼灯やまりと蹴上のところてん　甫琴
松一木てりのこしけりところてん　万舟
秋もはや幟たつやまぞ心太　文東
ところてん女房に見世を預ケけり　谷水
木の下や爰も涼しきところてん　咫斗
追わけやいやといはれぬころてん　祇亟
こゝろ手へ渡すぞ是を文とよめ　寥和



元朝雪

皓は四ツ今朝より五ツ六の花　龜毛

若菜つむ程の明りや初月夜　寥和

梅さくや一夜〱に水の味　勗和

むめ咲や餅にも蝶の二三りん　馬光

梅咲や五百羅漢の鼻の穴　柳隣

九ッに汐の滿來る花見かな　寥和

花鳥もまくらの伽よねはん像　柳下

山ぶきの花と磬手や國なまり　佳節

蝶の羽に知らぬや比良の山をろし　沾涼

蝶〱やおなし畑に日を暮し　東風

坂に杖段のつゝじのなさけ哉　樓川

春雨やない物喰はんほとゝぎす　鶏口

軒近き椿どものこもりたるに鶯の綿蠻たるはよき遊び所にや

うぐひすの椿を縫ふや仕出し笠　水戸 露白

菜の花や雜煮の屑の一さかり　調羽

彼岸のおくは又かのさくらかな　黑露

暮色

花の日や入相のかねのなりて後　春來

朝毎の曇りは花の化粧かな　志諷

彌生中五雪降ければ

雪散るやさらばさくらもつもるほど　和風

驛路

桑飼ふや淋しき雨のびわのくぼ　寥和

誰が手よりはなれて藪の月日星　可圭

しらをとるいざりの更ゆくけしきこそ物悲しげなるに漸夜もしらみあひて漕わかれたるも又ほいなし

白魚や明て行衞も水の色　和風

不遠慮に長くなれとぞ藤の花　欽尺

松の聲うけてはこぼす柳かな　ゝ

佐保姬に柳は衣紋つくりけり　文尺

夏之部　歌仙

先師をはじめ老俳達の曲節なる手事に我不拍子なるしころを彈て

五位六位色こき交よ靑すだれ　嵐雪

きぬた涼しきかたびらの音　寥和

うつそりと物見に烏ふり向て　笠翁

さかなの取れる雲の夕暮　寥和

三日月の影に塩木を運びつれ　可圭

あいな賴みのどぶろくの旗　寥和

又相撲みねの松風かよふらし　ゝ

いづれ伏見に似たり深川　ゝ

元船へこがれ來にけり小山臥　ゝ

若葉に風のうつくしく吹　ゝ

さけ帶の日はどこに置戀どころ　ゝ

障子越にも匂ふ物ごし　ゝ

靑蕎麥の葉もこき交て手向草　ゝ

大文字屋も今が送り火　ゝ

給人は月の都に着にけり　蓮谷

着にけり迄秋はかなしき　寥和

豆腐煮て庵の奢りは花鰹　黑露

隣の鞠にこちの靑柳　寥和

やふ入の間は猫をかりて置キ　ゝ

人の戀しき赤坂の鐘　ゝ

足輕は雪に虎枕うりに出て　露月

けふは爰へ猷はこびから臼　寥和

嚢めしの腹でも届く尼が崎　ゝ
旅にも死なずめくら道心　ゝ
旨そうにたばこの煙る笠の内　ゝ
月はおぼろを頼むわかれ路　晋如
梅咲や二階の口に若おとこ　寥和
皆めんどりと見ゆる燕　ゝ
いさゝめの事にも嵯峨の高雄のと　ゝ
尼のむかしを聞人も尼　ゝ
仙翁の跡に眼皮のから衣　ゝ
獨参湯の出る饗應　ゝ
板土圭淋しそうなる息つかひ　ゝ
物いふ鳥も起〳〵の顔　ゝ
翌迄は請合にくき花ぐもり　馬光
蒔はまかるゝ言の葉の種　路道

田家

灸居て山なき里は青田かな　勗和
青空に遠山黒きわかば哉　連園
五月雨燈すははやし鐘の聲　硯壽
紫蘇の葉に又一しほや五月雨　一尺

あの船に人も寐ぬのり皐雨　寥和
舟ひきに力かさばや夕すゞみ　水戸 低哉
乗かけに草の匂ひのあつさ哉　調羽
小ひらめの釣上られて袷かな　竹因
傾城のうつむいて居る暑かな　和葉
鴈の捨た雲井やほとゝぎす　ゝ
梅漬や羅葡流るゝたつた川　錫尺
雲の峰その日〳〵のかけ流し　竹阿
入梅あけて雲押出すや帆かけ舟　馬光
ほたる火や夕がほ棚の光る君　黒露
むく〳〵とそなたの空や雲の嶺　柳隣
螢うりをのれは闇をもどる哉　水戸 遊鱗
石竹に四五寸殘る夕日かな　東風
時鳥餘所は遣ても勢田の橋　水馬
露はまだ玉に作らぬ若葉かな　有佐

大坂淡々老人を尋侍りし時

隱れなきかくれ家つゝむ若葉哉　文尺
鯛ひらめ白粉厚しはつ松魚　路道

ある夜青樓をゆめむ。覺て夢のやうをおもふに、久しく打絶たるを立越し證にて、しか〳〵の事尋ぬれば皆去年の暦をくるがごとし。汝が黨の何と云たる者はと問へば、それは死たり、かれは尾張へ立歸りたるなんど、よろづ移りかはれる中に、只かわらざるは夏の夕げしき也。若き人の足もと定まらずうかれあるき、老後のおもひ出と諷ふが我むねにこたへてゆめ覺ぬ。

喰れしは背寐せし間の蚊なるべし　寥和
さかづきに請ても見たし初茄子　路道
五月雨やみじかき夜を引延し　白杪

苦熱行

われ暑をくるしむ事人にこえたり。よつて衆好が指圖にまかせ、南にいさゝかの庭を構へ、折ふしの風を甘ひて日をくらしぬれど、夜はさながら其まゝにも臥がたく蔀をろせば紅爐の中に在がごとし。竹婦人を持ねばたはぶれんよすがもなく、漸〳〵ながら圓をうごかして明しぬ。

朝はけにうす墨に書あつさ哉　寥和

ねぶの木は今をはるべの暑さ哉　〻
絕がたやけふは一日裸富士　〻

秋之部

寐てばかり勿躰なしや菊の花　雪井
吹風を箒につかふ花野かな　昴和
一ツづゝあさがほ咲ぬ星きえぬ　夜白
驚た風より細し秋のかね　柳下
打かえす女波に誘ふ秋の風　沾涼
聞人から耳ふり立る山路かな　龜毛

兩國の橋上にして木犀を嗅ゝ遠近いづちともわきがたくて

木犀や國ふたつある橋のうへ　可圭

歌仙

波のうね疊つのべつ磯の月　柳下
秋ふくやまの小鬢から兀　寥和
一炷に塒出の鷹や勇むらん　志靜
菓子もあかる歟片よらぬ人　有佐
ウ 唐紙は心の丸い玉あられ　且調
指南をうけて草鞋履なり　文尺
云事も物の上手はそらさぬぞ　水巴
袴で寐るは爺樣の癖　執筆
組やしき鉢ッチ／＼は通りけり　有佐
笑て左右へひとつ雷　志靜
雫にも短くは着ぬ汐衣　文尺
吝くせよとの御觸戴く　且調
合點して戀路に隙を費かし　柳下
きのふ洗ッた髮の手ごゝろ　水巴
和らかく風も淸めの水の月　且調
若むらさきはしらぬ草刈　文尺
華ざかりもはや鰹はかたき持チ　有佐
皮足袋うりの旅もたび／＼　志靜
外聞に茶臼を人に見せたがり　柳下
時日を撰む社家の振舞　水巴
鬼がわら鼻をつまんで蟬が啼　文尺
杵くゞらせる繩の智惠の輪　且調
わざくれの出た淺草へ孫をつれ　有佐
四十八夜の寺を垣間見　柳下
絹ばりを乾のかたへつむじ風　志靜
飯綱づかひに遣はれにけり　且調
毛がきれて雪に働く棧櫚箒　水巴
鍛冶の戶棚に風折の綴　有佐
嵯峨までの月の土產に針仕事　文尺
柿のあるじの氣に澁氣なし　水巴
ウ 蛤と成歟雀はをとけもの　柳下
腐らせるのは眞鍮の伊達　志靜
ありもせぬ錢を大屋のかせ／＼と　文尺
竹の葉ごしに鐘をつくみゆ　水巴
花の山汀にもゝの燃しさり　寥和
冬なら二日一日の旅　超雪

淸夜

ちとは寐よけふの月又翌の月　寥和
名月や空かゝはゆき峯の雪　水馬
名月や鳴せたきもの郭公　尺子
獵人の門ともしらず鴈の聲　一尺
猪しゝの富貴に寐るや野の錦　釣尺
乙女子や袖ふる山に尾花ちる　佳節
入相も實のいる秋に成にけり　文尺

首尾吟

初秋や門ッ過よりの月のいろ　寥和
一心不亂蒲つ虫の聲　笙和
庭の毛は筆で見るさへ哀にて　仝
五里隔たればはや旅ごろも　寥和
いつの間の風に崩るゝ雲の峰　仝
ほからかしても子は育なり　笙和
難の爲に斑女の宮へまいる人　仝
當世染を着て候と　寥和
はな紙も少は濡るゝ調子竹　笙和
花は芳野か鐘は上野歟　仝
春やげにのろり〳〵と暮かゝり　寥和
彌生晦日の空を見送る　笙和

蘆刈の満の宿のあるじを武左衛門といふを聞て

武左衛門と聞名も淋し鹿の聲　黒露
名月や朝貌の花も咲んとす　仝

十三夜

ひつぢ穂の青〳〵とまたけふの月　寥和

燕雁の二鳥誠に社日の時を忘れず、春秋を教る而已歟。頃は八月九日の夜初雁を聞て

初雁の聲や寒さの片たより　志温
やはらかに日をあてかふや菊の花　東風
初汐やまだ新しきかんな屑　調羽

九月盡

秋と冬と壁ひとへ也きり〳〵す　沾橋
此寺の二王は黒きもみぢ哉　谷水

留守せし孫のさぞや待わびぬらんかれに土産物取らせんとある市店へ立よりみれば

是も菜に返すや葛の煎餅焼　馬光

冬之部

初雪や鳥のとまらぬ枝の上　鴎和
老の肥巨燵にかけて筒井づゝ　黒露

初冬六日は十日十夜のはしめなれば、宿なる尼を伴ひ朝日の彌陀に詣奉る。つき〳〵しき軒端をつたひ行て、かの人知れぬ事のみ多かる宿の奥屋なる所に安置せり。かくと云入たるに折ふし看主の在合さるよしにて、黒羽織着たる若男帳を開たり。香の煙薫じわたり幡幢の飾の香より外は人音だにも遠し。かゝる所に是等の道場の有べきとも覺ず。去斯不遠にして別世界に至れるやとおもふ斗涙をとして禮拝す。

此庭の習午時より別當の所の朝のどし

初霜や麻過す彌陀へ朝日影　寥和
手にうけて笑ふ間もなし初氷　寸龍
肱を曲てとは時雨きく夜なるべし　亀毛
しら鷺の行さき晴し雪の朝　沾涼

回祿以來造作もそこ〳〵なりければ

爐の土は乾かぬに扱はつしぐれ　水戸 沾橋

茶に好ける人のもとへ招かれて

ほのくらし落葉の上に刀かけ　寥和
納豆の花を恥よむろの梅　釣尺

分別をかりに預る火燵かな　谷水
初雪やねぢれた枝のあからさま　尺子
うそつかぬ傾城さびし小夜時雨　寥和
顔見せや棧敷こぞりてせばく共　白抄
臘八の粥の片手や無實汁　寥和

一折

拍子木は笠より内のしぐれかな　文尺
夜の筧の凅れ初る音　寥和
籠ぬけも佗しき草の枕して　ゝ
顔を自慢の夕暮の月　文尺
蜻蛉の目のあぶなさは竿のうら　ゝ
摺違ふ香も松茸の使者　寥和
ウ　脇ざしを差たそうなる御新發意　ゝ
金魚へこぼす白鷺の影　文尺
すんすりと袷の伊達も夏右衛門　寥和
琴の嫌ひな人もないもの　文尺
掛乞も火鉢の側へにじり寄　寥和
棒を喰ふ鰍とそこが日光　文尺
山川に嶺のあらしは生れ付キ　ゝ
男の湯立あらつきもなや　寥和
手拭を一ッ振ふて頬かぶり　文尺
喜も怒も愛も樂も酒より　寥和
其つもり大坂を月京を花　栢筵
笠の外まで匂ふ春雨　白抄

歌仙

職人盡歌合は七十一番也。延享丑年に半過る迄を集て前集とす。其残れるを盡して後集成れり。前後百四十二番の祭、首尾能わたりたるを祝す。

數鐃に祭もしまる旭かな　寥和
合歡の葉陰に遠き拍手　路道
田の鶴も歌ある峰を仰きて　東風
一本きめる鳥の餞　万珠
薪河岸に聲の始る霧の月　一尺
飪の湯氣のなびく秋風　佳節
ウ　筒とりの袖へ飛こむきり〳〵す　尺子
五人で抱て見たる神木　志諷
雨はれて又取かゝる池普請　和柔
結構過る尻御前の御意　万旭
おもひには師走油もこぼすべし　豊水
夢てふ物に肱が痺れる　東風
書飯に階子下りれば郭公　佳節
月も出て居て土圭草咲　尺子
秀衡の今に古金を秘し隠し　路道
仙に通ずる霖酒あさ酒　一尺
華の旅生れもつかぬ刀さし　水馬
芝も汗かく春の日當り　和柔
ナ　蝶〳〵に追はれて行や隅田川　東風
鳶の機嫌も天氣也けり　豊水
手まはりも若衆は淋し冬籠　万珠
役者附にて深窓が明く　硯壽
入相の能聞えるぞどつち風　志諷
今にぶんぶく寺に侍べる　路道
瞽女坐頭珠數に列なる麥の秋　万旭
大いさかひの濟だ夕ぐれ　万珠
傘にあぢな印の蜆川　豊水
玉にわたして戻る玉章　佳節

宵月に獨あかるき番椒　和柔

多葉粉の繩のゆれる初鳫　硯壽

爰ら(ウ)から誰か見に行歟角力札　万珠

百六ッにて百年忌吊ふ　志諷

初松魚伊豆の御崎の舟競ふ　佳節

雲を帶たり遠山の眉　尺子

藁葺へ大名菓子も花の恩　硯壽

一聲二聲雉子の朝起　豐水

寥和氏嘗選俳諧職人盡。其前集既已印行。近選其後集。余閲其集畫諸伎百工之圖。句選其上。每圖有端詞。其圖則摸古將監土佐氏所畫。端詞則出于昔時和歌者流之手。則其風流古雅可見矣。蓋夫博通人事世態之變而後和歌之敎可施也。則備之逍遙之具。使夫貴价公子宮姬閨秀、日屛居深宮之中、目未嘗觸人間俗事者、其談笑之間就之以通彼人事世態之變也。夫然後和歌之敎可得而施、夫然後可施諸廊廟野、可施諸縉紳冠章疇人子弟之間。是謂整之於身施及黎庶矣。雖邈矣古乎、吾忖度之則古之撰亦彀於此

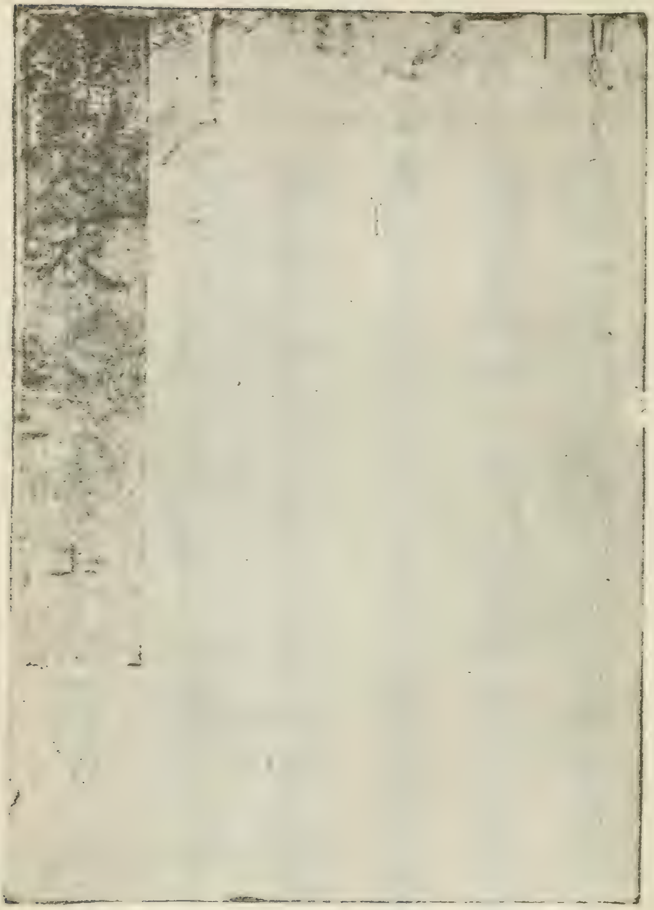
也。俳諧之道亦復爾。爾則寥之選此集指意所在可知耳。若廼選也論何容易。廼論之則南山之竹不足受我辭。故不論云。

寛政巳已秋

東皐跋







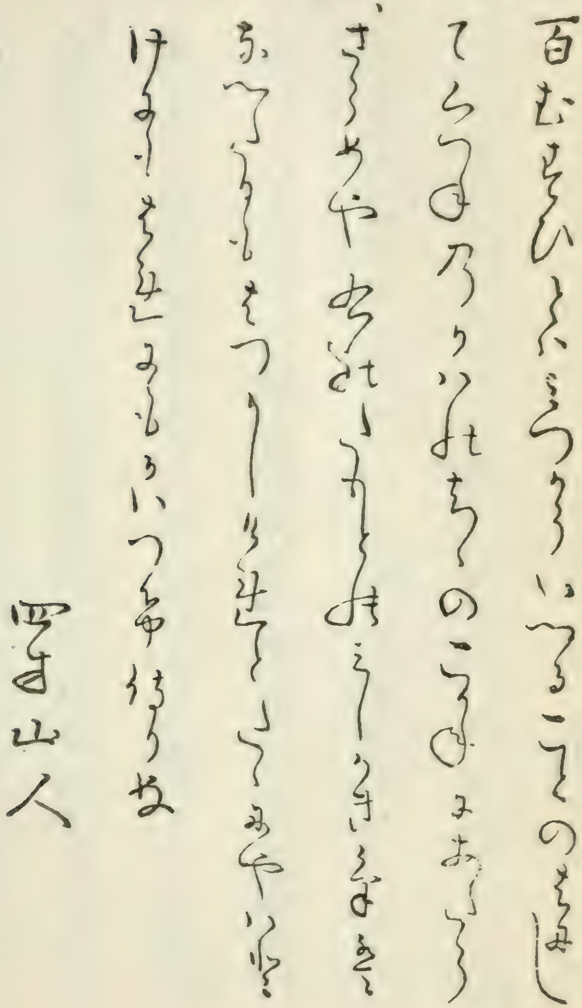
いにし安永のはじめ、すみだ川のほとり長樂精舍にあそびて、也有翁の借物の辨を見侍りしが、あまりに面白ければうつしかへり侍りき。それより山鳥の尾張のくにの人にあふごとに、この事うち出てとひ侍りければ、金森桂五うさぎの裘にはあらぬ鶉衣といへるもの、二まきをもてきてみせ給へり。翁なくなりぬときゝて、なを馬相如が書のこせるふみもや

衣らづう

あるとゆかしがりしに、細井春幸天野布川に託してその門人紀六林のうつしをける全本をおくれり。まきかへしみ侍るに、からにしきたたまくをしく、とみに梓のたくみに命じて、これを世上にはれぎぬとす。翁の文にをけるや、錦をきてうはおそひし、けたなる袖をまどかになして、よく人の心をうつし、よく方の外に遊べり。鶉ごろもの百むすびとは、み

づからいへることのは
にして、くつね(狐)の
かはのちどのこがねに
あたらざらめや。右の
たもとのみじかき筆は、
なへたるもはづかしけ
れど、たゞにやはと、
げにもはれにもかいつ
け侍りぬ。

四方山人



あやしくはへもなききれぐ＼を、あつめつどりたるを、うづら衣とはいふなり。げにその鶉ならば、たゞふか草のふかくかくろへて、かりにだも人にはしらるまじきものにこそ。

也有

うづら衣　上

奈良團賛

青によしならの帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此地の名產とはなれりけむ。世はたゞ其道の藝くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外はたえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゝまれて公界にへつらふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは桐の箱の家をも求ず、ひさごがもとの夕すゞみ、晝ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれども、地帯をまくられて野ざらしとなる扇にはまぎれなむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴てはだか身の寐姿をあなかしこ、人にかたる事なかれ。

袴着る日はやすますする團かな

蓼花巻記

一もとの芭蕉、五株の柳の其人の德にてらされて、枯ぬ名をとゞめしもあるに、不仕合なる榎木は、ある僧正の號に呼れて、つゐに斧の怒をかうぶり、なを切杭、堀池の名をさへ流しけむ。我劍冠の仕途に身を置ながら、一ツの隱家あり。これを蓼花巻と名づく。蓼花にむづかしき心はなけれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり、その一もとのゆかりなきにもあらず。松菲さふの聲きけばと、俊成卿の庭もせちなつかしく、世にわびたるさまのおかしけなれば、みづからこれが名とせり。そも此幽栖、無何有の郷にとなりて、山に向ひ海にそひ、河あり野あり、月雪花鳥は四の時の詠を供し、時わかぬ松の夕風、竹の夜雨の音までもきくにいとはず、見るにとぼしきものあらず。城市を出て遠からねど、人たゞ杖、草鞋をもてとはむとせば、たとへ方士がまめはふみ出すとも、三輪の山もと杉立る門に迷ひて、ふせ屋のはゝ木ゝの寰狐に化され、うつの山邊の道とふべき人にもあはで、ふたゝび桃源に棹さすごとくならむ。たゞ梅の色も香もしりて、思ふ事いふべき人ならば、今も壺入にたづねあたらん茅門とはしるべしとなり。

物ずきの虫はきてなけ蓼の花

長短解

大はよく小をかね、短は長にまかるゝためし、世にそのたぐひ多かり。たゞ君を賀

し人を壽くにぞ、よはひを長濱の鶴にたぐへ、あるは龜の尾山の尾を引て、五百八十七曲と祝ひものするには、あくかたあらじかし。その余はひたぶるに十八さたけのゆたけきにならへば、獨活の大木の謗をのがれず、矮雞の足はみじかきを愛し、禿が返辭はながきにのどけし。出る杭かしらうたれてつゐの益なく、下手の談議のとまりかねては、軒の柳もねむり貌なり。たゞ女の髮こそめでたくてあらましを、手ながき人は一門にも遠ざけられ、鼻の下ののび過たるは、大事の相談にもらされて、其夜の濕飩のながきをしらず。されば必ながきはみじかきが上にも立がたし。物はたゞ秋の夜のながくてよからむは長く、難波潟みじかき芦の長からずしてよきはみじかくてあらなん。さるを聖人も右の袂の自由を物ずけり。世に式法をこまかにさだめて、かね合極るものもあれど、そのむづかしき境は人の製作なり。天地もと窮屈ならず、長短は自然にそなへて、寸分の詮議はなし。摺粉木は兩手に握るを程とし、抄子さい槌はかた手にたれり。下ざまの物ながら天理のまゝなるぞたうとけれ。我友田氏、過し頃かりそめの旅のつとに煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。我この秋西郊にあそぶ事ありて、調寳はなはだ長きにまされり。是をくはへて手をからず、久くして齒を勞せず、ゆく／＼野山に雲を吹、あく時は袖におさむ。張子が馬を懷にするがごとし。こゝにおいて感あり。つゐに長短の辨をつくりて、是をむくふの詞にかふ。其辭の長過たるはまた才のみじかき故ならし。

木履說

木履ゝゝ、笠は東坡が寐の野かけの尻にしかるゝ折もあるべきに、などや汝は夏の日の宰予が枕にも雇はれざる。日和つづきて隙なる時は、椽の下に寐ころび、蛬の霜夜にともなひ、又は座頭の杖にさゝれて、日待の壁にふらつきては、かたぶくまでの月をも見るらむ。たま／＼かるわざのつなわたりにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、常は脊ぬぎにひざまづき、洗濯の日のこしかけとなりて、それよりうへの交はしらず。かく下ざまのものながら狩人の笛となりては、口にふかるゝためしも有とや。その鹿の命を斷るは、罪ふかき身の果なれど、佛も下駄もおなじ木のきれと、例の一休のしめしに逢て、はじめて輪廻の鼻緒はきれてん。抑、足高きものを木履足駄と號し、たけ低きを下駄といへるは、いづれ一体分身にして、こゝに尊卑の差別はあらねど、俳諧のうへに二ツの姿を論ずべくば、ほくり

〳〵と静なるは、雪降の朝にして、下駄〳〵といそがしきは、むら雨の夕部なるべし。

鳥羽繪賛

蝦蟆の息に虹を起し、蜃はよく樓臺を吐。腹中の虫、氣を吹て聲を出すも、さらにあやしきわざには有べからず。くさめもあくびもおなじものならんに、かれが出所のいやしければ貴賤これをつゝしみて、かたく公界の嗜とす。されば退之が鳴物づくしにも此沙汰なきは、もしとりはづしにてもやあるらん。その鳴こと不平にもかぎらず、たゞ盛親僧都の芋の腹味、あるは婆僧おなら茶の過食にさそはれ、勢ひことに甚し。むかし太平記の無禮講に、はじめて屁をゆるしそめけるより、つるに鎌倉に嗅つけられて、七日の說法屁一ツに破れぬれば、はては資朝・俊基の屁負ひ比丘尼となられける。または雜混雜のくらがりに、ぬししらぬ香こそ匂へれと、歌人はよみも置しか。思ふに鳥羽の僧正の筆あとも、ひとへにたはぶれのみにあらず。かの音あれども目にみえず、物にあとなくあたなる事は、更に電光石火にまされるをもて、人につねなき世のことはりもしらしめむとなるべし。

摺鉢傳

備前のくにゝひとりの少女あり。あまざかるひなの生れながら、姿は名高き富士の峰にかよひて、片山里に朽はてん身をうきものにや思ひそみけん、馬舟の便につけて遠く都の市中に出で、しるよしある店先にしばしたづきをもとめけるに、師走の空いそがしく、木の葉を風のさそひ盡す頃は、世も煤掃のふるきをすて、物みな新器を求るにつれて、ある臺所によきロありて、宮仕の極がてら摺木と聞へしもとに、うち合せの夫婦とはなりける。かれは柏木の右衛門にも似ず。松木のあらくましき男ぶりながら、少もかざりなき氣だてのまめやかなれば、女も心に蓋もなく、明くれいそがしきつとめもおなじ心にはたらきて、とろゝ白あへの雪いたゞくまで、糊米のはなれぬ中をねがひ、水もらさじとはちぎりけるに、その頃せ[七]つかひといひしおのこは、檜のきの木目細かにその姿やさしきから、昔は御所にうぐひすの名にも呼れしが、おなじつとめの夜ふくる時は、走水の下のころびねがちなるを、よそのいがきの目にもれしより、さらでも住うき傍輩の中に、はしたなき間ゞ鍋の口さし出、杓子の曲り心より、うき名は立そめ、炮烙さへ仲まで破れしてあけくれ茶釜にふすべられ、なら坂やわさびおろしのふた面、とにもかくにも

たゝずむかたなく、身をあへ物の顔よごれぬれば、買臣が妻の耻をいだき、手ならひの君のむかしを思ひ、つゐには土にかへるべき無常をや觀じけむ。ある夜鼠のあるゝまぎれに、棚の端より身を投けるにぞ、顏かたちかけ損じ、見にくきまでの姿にはなりける。かくては食物のつとめ叶はじとて、あるじの怒りはなはだしく、石漆の妙薬にも及ばず、妹脊の中も引わかれ、内庭まで下られたれども、猶さみだれの折〻は雨もりの役につらなれば、いとゞ長門の涙かはく隙なく、こゝにもすはりあしくなりて、井戸端にころがり出、蓼葎に埋れて、後はたれ哀とふ人もなかりしに、ほどなく露霜も置うつり、壁の虫の音もかれゆく頃ならん、間ぢかき寺の門番にひろはれ、ふたゝび部屋にかくまはれながら、ならはぬ火鉢にさまをかへ、酒をあたゝめ茶を煎じて、ことしはこゝにうさを忍びしに、やゝ春雨に梅もちりて、きさらぎの灸もすめば、また灰をさへ打あけられ、唐がらしといへるものを植られしが、からき目ながらさてあらばあるべきを、それさへ秋のいろみ過つゝ、つゐに橋づめの塵塚によごれふし、果はさがなき童部のまゝごとにくだかれ、行衛もしらぬ闇の夜の礫とはなりけるとぞ。

武陽官邸記

百里の海山かぎりなくこえ來たる目には、こゝに一年の起臥はと、顏に物のふたがる樣に覺えしが、けふよあすよとすめば都の月もさし入て、寐心よき夢もむすぶばかりにはなりける。四疊ばかりの所に、手ぢかき調度どもかたづけて常の居所に定めつ。庭は二三間に穴藏なかばの場をふさぎて、のこれる所わづかなるに、誰植すてし一もとのつは(石蕗)、二もとのつゝじ、花は時過て青葉つやゝかに、我たのみ顏なるを、そここゝと植かへなどして朝夕の水そゝぐも、うき身わするゝたづきとはなれりける。軒の風鈴に夏山のすずしさを招き、壁のやぶれに色帋をおし、障子のたらぬにあやしきすだれをかけて、月の夕暮なかば卷たるは、かの行平の須磨の住居も、かくやと思ひ出らるゝに、うしろの松風とう〳〵と吹ならせば、なみこゝもとになどぞひとりごたるれ。西あかりの二階窓、御土居間ぢかく梢さしおほひて、遠望をさえぎれども、富士は木の間にくまなく、かきがら屋根はるかに見こして、時しらぬ雪をあらそふ。常にはなやかなるゆきゝはまれに、音なふ物、念佛題目代待代參り、あるは木魚のひゞき幽に、箔置の佛になひて、建立奉加のかねさはがしく、比丘尼は赤坂に晝の情を

賣て、夕暮のかへるさ雪踏を引つれ、辻君は白過たる額明はなれて、手ぬぐひによしばみたれど心の動べくもあらず。隣は一重の壁をへだてゝ、朝の火打の音ひゞくより、擂鉢に客待日も、たばこきる日のつれ〴〵なるも、紙帳に團の寐しづまるまで、こなたに物のかくれなければ、かしこにも又くまなくしりかはすなるべし。日數ふるまゝに從者どもゝ所得がほに、貧乏樽にとうがらしを植て紅の秋を待、蔭垣に刀豆を這はせ、塵塚に蓼をそだてて、餅賣の聲をわぶるなど、かく不自由のくらしを、商人はかしこく餅を艾の底に忍ばせ、酒に味噌桶の似せ酩を書付、御門の咎をのがれて、范蠡が忠をもどき、煮豆・和物に朝夕の飯時をかんがへ、雨のあかりは灸賣るなど、なか〳〵おかしき住るのさまなりける。されば阿房の雲をしのぐも、煤拂のやかましからむに、かたつぶりの戸一枚もたでも、うき世はぬめりわたりなるをや。たるもたらぬも住人の心にして、我は故郷の外とも思はずと、此心を額に題して、とひ來る人にも興じさせける。

餅辭

君見ずや餅は例のおかしみありて、しかも四時の流行あり。まづは一とせの初空、松も竹もあらたまるあしたに、飯はもとより常住にして、なら茶麵類もしどけなければ、雜煮と趣向を定めたるぞ、神代の骨折のところなるべし。それより具足かがみびらき餅に、睦月の寒さもくれて、二月は彼岸の團子をぞ、花よりとよみし人もありしを、草餅の節供に桃もちりて、つつじ山吹とふけ行まゝに、まんぢう賣の聲もねぶたく、空は蛙に暈を呼れて、春雨つれ〴〵とふり出る頃は、かき餅のいじり燒にぞ、かの右馬頭が夜咄もしみつべけれ。卯月は例の卯花ぐもりに、蚊屋の香もめづらしく、やぶ蚊も軒にもちつく頃は、牡丹餅の花いとむまく、千團子ときくもたうとしや。粽はそのまゝに見るいとすゞしく、ときたるほど假の匂ひ又おかし。水無月の朔日は氷餅とて、やごとなき上ッがたにもてはやし給ふに、草葉もよらるゝ土用の頃、水餅の鍋鉢こうかび出たるぞ、上戸のしらぬすゞしさなりけり。風も文月の音づれして、七夕のあふ夜はみきのみ奉りて、子のこの餅もまいらせぬは葛餅のうらみながら、その鵲のはしとよみしも、やかもちときけばゆかし。魂まつりも團子におくりすて、お萩の花に秋もたけて、こもちもち月の團子より、栗の子餅の節句も過れば、十月はもとより亥の子の餅に荒初て、時雨こがらしの寒きまどるに、火鉢のもとのやき

餅も、おもしろき時節なるべし。やゝ御佛事のもちゐ始る頃、つもる粉雪ももち雪もあられも、酒の名のみにはあらず。おとごの餅は朔日にいはひて、師走はなべて餅の世界なれば、あけてもいふべからず。さればよ、いかなれば詩人は酒のみ友にかぞへ入れて、李杜が筆にも餅の沙汰はなけれど、兩部習合の俳諧には、劉伯倫がのみぬけも、夏爐亭の餅ずきなるも、ともに俳諧の趣向なれば、我門には上戸もめでたく下戸も猶めでたし。

鬼傳

むかしは佛の國に住しが、舍利をぬすみし科により、天竺牢人の部になりて、もろこしへわたりしを、鬼も十八のあだし心より楊貴妃の枕にしのびて、鍾馗といへる髭男に追はれ、かくれ簑の身も住うしとや、十郎姫にも引わかれ、赤裸に身代たゝみて、はじめて日本へ親に似ぬ子と生れ出けるとかや。其頃はまだ涙もろくやありけん。朝雄が歌の理屈につまりて、一ト先分散しけるまでは、さすがに横道なしと、役の行者の情ふかく大峯かづらきの荷持にも雇はれしに、次第に身持あしくなりて、煎餅もめづらしからずと、芥川のくらまぎれに、鬼一口のあばれ喰にむかし男を泣せ、それのみならず、鈴鹿山の好色、大江山の醉狂、戸隱山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、洗濯ゝ鬼の留主にと世上物躁になりけるにぞ、神ゝのいかりつよく、鰯柊の責道具にかり出され、つゐに煎豆の追放にあふて、娑婆にもたたずむかたなくて、冥途の出かはりに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合あはぬむまれつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を覺え、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、地獄の六尺とはなりける。扨こそ瘤とられたる天下となりて、万民泰平を謳ひ、丹後丹波の境なる城跡も松風さびしく、安達が原の黑塚も草茫ゝとしてとふ人なければ、今はたゞ棟瓦に俤をのこし、大津繪にわらはれて下戸と鬼とはなき世とぞなりける。

朝寐辭

神儒佛の敎さま〲なる中に、上はかしこき朝まつりごとより、下は十露盤のせはしき世わたり、市の出買のその日過まで朝寐せよとの敎こそなけれ。まして、雞はじめて鳴てより、忠臣は蚊にせゝられて、たばこに明ゆく鐘をかぞふとや。げにも唐帝の玉妃に腰うたせて、飯時もわすれ給ひたらむ。又は若むすこの色酒にあそび過して、むねふくれ、かしらおもくて、いつも朝がほの花をしらず、

の事は手代まかせならんは、身代破滅のはじまりなるべし。さはれ世にする事なき姑の佛なぶりの朝起に、おも屋の家うちにそしられたらむより、これらは火燵に火をおこす間を、うち寐がへりてもあれかし。されば用をかきても寐よとにはあらねど、三四五月の短夜に枕加減のよき頃は、朝寐こそ又おかしけれ。必目のさめぬにもあらねど、うつら〳〵と夢見夢みず、花に朝日のにほひたるも、松に有明の残たらむも、かのねやながら思へるは、起てみるにもまさるべけれ。いつもの豆腐うりの聲行過て、車井の走るおと、雀の餌はみにあつまり鳴など、幽閑の情にたへぬ折しも、けうとき物中の聲に胸つぶれて、雨戸一本おしあけたれば、空は四ツ頃にもたけ過て、さし心得たるわらはのくみ置たる手水湯は名ごりなくさめきりて、その奉公の水になるもかはゆし。

さればかしこけに朝起して、一日目のさめがたく、晝寐に光陰を盗まむより、枕序に朝寐たるこそましならめとさとりて、此睡工夫をなす事になむ有ける。さはいへ秋の夜長になりて、又朝起の面白き時は、たちまち朝起の男と呼るべければ、釋迦も孔子もしばし氣長にみゆるし給ふべし。

　鶯を夜にして聞あさ寐かな

炮烙賛

一生をつくろひなく、その日ぐらしに覚えたる炮烙といふものは、圍爐裏のもとにいやしまるれども、その徳を論ずればいとたうとし。鍋釜は眷族も多くわかれて、藥鍋などゝ號するは、銀に毛彫の繪様にほこり、數奇の茶釜は天明芦屋の作にたうとまれ、探幽が下繪にあたえを高ぶれば、臺所の太郎二郎もをのづから、氏族の栄に心おごりはするなるべし。炮烙は一類もなく、世にかゝづらふほだしもたず。盧仝が夜なべに茶をほうじて、雨夜のさびに伴ひ、炙餅(やいもち)の豆のから〳〵となる時は、隣のやもめの耳を悦ばす。いでや是を荷なふ商人は、程朱の説をきかざれども、常に身をつゝしみて細道假橋を大足にはこばず。市中に殿をくゞれどもふかくいさかひをたしなめば、馬士船頭の氣隨には似ざらん。なげくべきは本間の狂言に、鍋蓋と威勢をあらそひ、又は歐陽公が工夫より糯といふものを尻にぬられて、蝿をとる道具となれるは、をのが心にもあらで、にげなきわざながら、かのあし鼎の酔狂人の鼻をかゝし、石川五右衛門が釜いりより論ずれば、罪は至て輕かるべし。しかるに和田殿の大磯がよひに、頭巾の名に物ずかれてより、今に老人の寵愛にあひて、常にきんかあた

まにいたゞかるれば、かれは藥罐の下に立む事かたくなんありける。

ほうろくや棚から下りる秋の暮

隅田川凉賦

水無月のあつさのけふことにさめがたければ、いざ隅田の川風に扇やすめばやと、牛込といへる所より舟出して、　まづ凉しおし出す舟に芦の音　などたはぶれつつ竿をめぐらすに、舟はもとより一葉のこと〳〵しからず、破子も場どらぬ趣向ながら、けふの乘合に、手なみしれるくせものもあればと、樽一ッはいかめしくつきすえたり。數〻の橋こえ過、兩國の河づらにこぎ出れば、風はかたびらの袖さむきまで吹かへすは、秋もたゞこの水上より立初るなるべし。椎の木の蟬日ぐらし、けふもくれぬと啼すさみ、岸の茶屋〳〵火影をあらそふほど、今戸あたりのかけ船もともづなを解、糸竹をならして、をのがさま〳〵にうかべ出ぬ。京に四條の床をならぶるより、爰に百艘のふなばたをつらねたるは、誠に都鳥の目にも恥ざるべし。舟として謳はざるはなく、人として狂ぜざるなし。高雄丸の屋形の前には、花火の光もみぢを散し、吉野屋が行燈の影には、樺燒のけぶり花とのりち馥し。幕の內の舞子は鶯聲聞にゆかしく、舳先の生醉は衛足みるにあぶなし。伽羅薰物のかほり心ときめきて、吸物かよふ振袖は燭臺のすきかげいとわかく、大名の次の間には袴着たる物眞似あり、女中の酒座には頭巾かぶりし醫者坊〻あり。かしこにどよむ大笑ひはいかなる興にかあらん。こゝに船頭のいさかふは何の理屈もなき事なり。老人の碁會は仙家のかげをうつし、役者の聲色は芝居もこゝにうかぶかとうたがふ。卯子〳〵田樂〳〵瓜西瓜、三味の長糸賣る聲、西南にかしかましく東北に漕めぐる。風呂をたく船、酒をうる船、菓子にあらぬ饅頭あり、藪にあはぬ曲舞あり、あるはみめぐり深川にうかれ、あるは兩國の橋にとゞまる。遊ぶ姿さま〳〵なれども、たのしむ心ふたつならず。それが中にも猶淺草の淺からぬちぎりたがへじ。待乳山の待やわぶらんと、ふけ行空に漕わかれて、里にひかるる人もあるべし。さるはいかならむ遊びも、おなじ心におもてをならべて、見ましきかばと、こゝにだに物のかなしく、事たらはぬ心地せむも、はたにくからず。やゝ銀河の水東西にながれ、あなにくのやもめがらす、ひま白き松に啼かはせば、さしも所せき舟もみないづち行けん、霧わたるそなたに漕きえて、瓜の皮のみただよふ曉の名殘こそ、見しには引かへてまた哀なれ。

謝ニ無馳走ニ辭

こよひのあるじ野有、人々に謝してまうす。こと〴〵しく招まいらせて、汁に關殿の鯉も料らず、皿に張翰が鱠ももらず。夜食は例の奈良茶に濁らして、豆腐に鰹の花の名はちらせど、何をよし野ゝ色香とはめでむ。さはれ旅路の椎の葉に、もるものゝさびしき山家にもあらず。肴は宮の夕あかりを荷ひつれ、八百屋に二月の瓜をならぶれば自由はこゝも都ながら、もとより曾我の内證にして、いとなみとゝなふにわびしければなり。人々俳諧に信ましまさば、いざ是をしもにくみ給ふな。いでやかの土器の味噌を思しすて給はずば、風雅に喰寄の他人むきを離れ、けふを龜茶の矢合せとして、雨の夕べ雪のあした、鍋摺粉木はさはがせずとも、いざと心のむかふにまかせて、折々の廻状をはじむべし。さるも貧富は等しからず、我をそなたへ招給はむに、膏粱珍味のきらひならねば、よき魚よき肴はかへても給はらむ。まして茶ばかりたまはるとも、吾門のあそびならば、はたかごちまいらせじ。けふの無馳走は紫隠里の掟にして、菜根咬得ば百事なすべしを、貧の風雅の方人とはし侍るなり。

魚うりの聲よそにふけ青嵐

鍋蓋額贊

むさしにかりの旅居せし比、あやしの店に求め出せるものあり。さるは篇やほしからむ小鍋の蓋なりけり。さんは落て釘の跡のこり、月もるばかりの節穴ありていと古うすゝけたる色のわざとならず。そのわびしさのほどを思ふに、獨坊主の佛供をや調じけむ、借屋の婆の娵をやふすべけむ、是をたつきとしろなしける哀は、あみざこ賣る人にもまさりて思はるるに、今はたこれを貰取し我を、あるじのいかに見なしぬらむ。世に摺鉢に蓋なきと謳はるゝを、かれは蓋のみありて、みはいづこにか引わかれし。いまさらに異ト鍋にうちきせたらむは、小夜衣の名に立もうしとあはれに見しまゝに、物よくかく人かたらひて、これを閑居の額となしぬ。

たれ雜炊に落葉たきぬる
すゝけし昔とへどこたへず
われわれ鍋の世をのがれなば
よし綴蓋の汝とあそばむ

問菊辭

植すてし菊のをのづからに痩、をのづからにひらきて、赤きはたゞあかく白きはたゞしら菊なり。今や世上の富家にかしづかれて、箱に戸ざゝれ曲尺にあてられ、花は年〳〵にあらたなる其全盛を人にた

とへば、傾城といへるものゝうきふしの里にうられ、高雄奥州と時めき立て、心にあらぬ人にめでられ、あだなる枕に起ふすたぐひ。かゝれとてしもたらちねはそだてじ。かゝれとてや雨露はめぐまむ。むかし彭祖が盃にくめば、八百歳の齢をたもち、正成が旗に畫がけば、十万騎の敵をなびかす。癡人はこのためにたのみ、愚将はかの功をうらやむとも、それだに花のこゝろにや高ぶらん。菊よ。こころみに物とはむ。その肥たるやしたはしき、この痩たるやうれしき。よしさらば答ずとも、汝が心われよくしりぬとささやけば、秋風の物いはぬ花をぞうなづかせける。

我菊や尺とりむしの手もからず

俳席之掟

一 飯は三石の掟を守るべし。

茶の花の頃をなら茶も盛かな

一 汁一ッ菜一ッ酒の肴も一ッに限りて、鰹に精進の咎をのがるべし。夏は必茄子を用ひ、豆腐は三季にわたるべし。香の物は論ずるにたらず。

音もせぬや豆腐の冬籠

一 酒は膳の前後をすべて三盃を過べからず。さるから盃は得道具をゆるすべし。

いかさまに四たびはくどし村しぐれ

連衆に酒ずきありて、此箇條の掟にはなはだくるしむ。よつて了簡の一句をしめす。

狐さへ五こんとどもる霜夜かな

一 菓子は其日のあるに任す。まづは煎豆に定むべし。

煎豆に音こきまぜてあられ哉

一 燈は行灯にて事たりぬべし。

蠟燭はたつといふ名の寒さかな

右之條々けふよりかたく守るべし。亭主に卑下の辭なければ、客に輕薄の挨拶も古し。此やくそくをそらになして、厚味を求むる輩あらば、後の世蝿とむまれて、風雅に不信第一の人とすべし。

元文元年

誓文はたてぬ筈なり神無月

藏人傳

天に信天翁あり。地にはあすならふといふ木あれば、人にも此おのこありて、かの世にむかしよりいひわたれる。

世中にねたほどらくはなきものを
しらでおほうが起てはたらく

とよめる歌の、これが返しとはなくて

はたらかで起て居る身の氣楽さよ
寐てもあほうは物思ふ世に

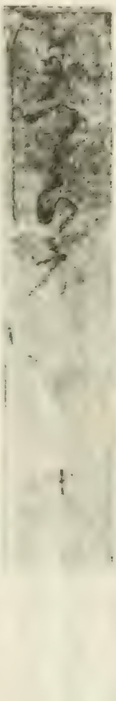
とよめりけるを、何がしの大将は大きに此歌におどろきて、物ぐさの藏人と召れ

けるより、世にはなまかはの藏人ともよぶ事になむ。されば此うたの心はその藏人ならでしりがたし。たゞ藏人もしらずしてやよみけむ。

寐てや樂起てや安き雪の竹

夢　辨　（寐ナラン）

節分の夜の寶船に一年の幸を待より、一富士二鷹の品定も、これらは和朝のならはしにて、唐人の耳には日本人の寐言なるべし。されば夢の得失を思ふに、かの邯鄲の枕はあまり古ければさらにいはず。蝶となりて漆園にたはぶれ、蟻にひかれて槐國にあそぶ。かしこき雲の上人は、うば玉の夜の衣をかへしては、銀いらずの戀をもたくむらん。あるはかづらきの神にもかぎらず、晝は見しらぬ神ゝも、七日滿するあけがたの枕上には、まみえさせ給ふなる。かゝるたつとき夢の告を、佛はいかなれば例の世をはかなみて、夢幻泡影のたとへごとより、人は現ち夢の部に入て、世中をいとふまでこそうたてけれ。とても夢現のおなじものならば、夢を現にかぞへ入れて、起てたのしみねてたのしまば、五十年の月日をわたるも、百年の算用にはあふべきをや。鬼神に横道なし、傾城にまことなし、聖人に夢なしとは、いつの世に誰が定めたるぞ。鬼神は聞てよろこび、傾城は聞て腹たつらむも、聖人ばかりは何とも思しめさず。さるは冷にも熱にもならねば、どちらでもよしとの御こゝろこそ世にありがたけれ。



うづら衣　下

鼻　箴

しのぶの浦のみる目は、もとより耳とも口ともつゞけたらむ、歌にもさのみけやけからず。いかなれば鼻といふ名のひとへに俳諧にはとゞまりぬらむ。末摘花のわる口もあからさまにはよみなし給はず、そのおかしみこそ俳諧にはうれしけれ。さりとて臍の尻のとて、いやしむたぐひの物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は神代一番の見事さにて、愛宕高雄の天狗達も、自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間に露霜のをきどころなくて、いかに寒からむ。見よや人の老ゆけば、目は遠山の霞たな引、耳には鳥虫の聲もうと

く、口は冬がれの歯も落て、盛衰まのあたりかなしみを催す。たとへ百年のつくも髪だに、鼻ばかりはかけもやらず、つぶれて用をかく事もなし。ひとり常盤の操を守りて、時しらぬ山とも稱すべけむ。さればおそるべき人心、むかし聖賢のおしへにも、視聽言動の四つばかりをあけて、鼻に警のゆるがせなるより、世におごりのきざし起りて、寵にほこる妾小姓のおほくは主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩をも、鼻にあしらふ高ぶりより、すでに鼻つくあやまちも仕出ぬる。えならぬかほりにひかれよる色のいましめは猶さらにして、女のよれる髪筋には、鼻の高き大象もつながれ、あほうの延せる鼻毛には、蜻蛉もつらるゝためし。わざはひ蕭墻より起るときけば、つゝしむべきは鼻のさきなるべし。

手水鉢銘

いでや此手水鉢に若水くめるあしたより、おこたらず立なれて歯みがく楊の枝をうつし、軒端の梅のひとえに清かれと、時に口すゝぎ時に手あらひて、あらはゞ心の塵もなどかは去ざらむ。さるに此亭に愛せる鉢は、石なるや銅なるや、もしは陶なるや。我さらにしらねども、水はもとより方圓の鉢にしたがひ、鉢はたゞあるじの物好によるべし。見ずや此水の四時にたへずして、しかも朝ごとにもとの水にあらず。万理のこれにこもれるが中にも、風雅のことに水に似て世ゝに盡ず。水に似て時ゝにあらたなるも、汲てしらばこゝにあきらかなるべきを。されば頃日人につたへて、予に此銘を求らる。我きく湯の盤に銘して日ゝに新なりとは、もとの汚を濯ひさりて、心も日ゝに清かれと也。まして此物は飯くひ酒のむすさびにも、常に柄杓を手にふるれば、しばらく俳諧のおかしみをはなれて、これに時ゝ新の三字を銘せむに、かの盤の銘にもまさりて、先聖もたしかにうなづき給ふべし。世はよし五月雨のはれみくもりみ、滄浪の水は濁るとも、ひとつ此水の底清からましかば、纓を洗ひ耳をすゝぎて、長く閑居の契をもむすべとぞ。

汲かへてもとの月あり手水鉢

名德利說

つくねんと靜なる時、泥塑人のごとしとは、賢德の姿をほめて此物にはあらざれども、したしめば一團の和氣あたゝかに、雪の夜あらしも身にしまざるは、これがためのたとへにもいふべかりける。まして備前の名産にして、六升ばかりを入るるときけば、たとへ八仙の客にはとほし

くとも、虎渓の禁足は忘るゝにたりぬべし。なを此物の徳を思ふに、斗樽は座敷に場をとれば、これがたぐひにはいふべからず。あるはちろりといひ、間鍋といひ、前後左右のむづかしみありて、弦によそほひ袴をかけて、實は心のとけざるかたもあるべきに、たゞ此物の口をそらさまになして、なみ居る人の中に出ても、いづれに向ふともなく、たれにそむくともなき姿をもそなふなるべし。此ぬしこれに名を呼む事を求む。むかし子猷が竹は見ぬ日ありとも、さてやみぬべし。此ぬしのこの物における、一日もなくてはあらざるべく、つねに膝下に召まつはさるれば、かの此君の名の古きを尋て、此童とよばんにいかゞ有べき。されば世の近侍の童は、立居に尻のかろきをほむれども、此童の奉公振は、たとひいつまでもいつまで草の根つよく尻の重からむこそ、主人の心には叶ふなるべけれ。

月に雪に花に徳利の四方面

樂老記

樂肋堂にめでたき徳利あり。もとよりその名を此童と呼て、あけくれの愛をかうぶりしに、ことしまた一つを求出で、樂老とゑぼし着せけるとぞ。されば昔男ありけり。井筒の女の底意なくかたらひける後に、高安のこほりに行かよふ所いできにけるは、げには心の花のうつろひて、ますかたに引るゝあだし心ならむにや。これはそのたぐひにはあらで、主人の腹のはかりなきに、此わらはも折ゝの宵ねにこりて、たゞこれをもてかれをたすけ、かれをもてこれがたすけとなせれば、棚に兩雄の爭もなく、此童に月をむかへては此樂老に月をゝしむ。肴核すでに狼藉して水雑炊のやゝしらむ比、此童は膝にねころべば樂老は枕とこけて、主人の鼾の響わたり、そこの柳もねぶりそへたらむば、おもしろき四睡の圖なるべし。

旅賦

春は乘かけの鈴なりて、浴衣染の花やかなるは參宮の都道者か。夏はさみだれのかきたれて金谷島田に大名の市をなし、秋は木曾路の木ゝも紅葉して猿三聲の涙、ひとり行脚の頭陀をうるほし、冬は鈴鹿のふゞきに飛脚の足も定かねたる、いづれもとり〴〵の哀なるべし。五十三次の紀行はあまねく人のいひふるせど、多くは歌よみ連歌師のぬめりに、さよの中山に旅ねの詞をつゞけ、宇津の山邊の蔦にまとはりて、十團子のさびしさはしらず。さらねば寺社舊跡の由來書、道のり方角の詮義に落て、猶俳諧にひらふべきものはのこれり。許六が賦に馬かたの

境界を盡し、木導が說に出女の盛衰を述たり。しゐてそのまねびせんとにはあらねど、例の腹ふくるゝわざなればならし。旅の哀といへば、西行の笠しめつけ、宗祇の草鞋の跡を思へど、大名の往來とても、たとへ煙草盆の銀かな物はかゞやけど、竟日の駕籠に足をいため、緞子の夜着に雨もりをきくも、旅ならずしてはいかでかは。いでや本陣の夕ぐれは、たて砂に蓆をひるがへし、すそする馬のしりをならべ、亭主が袴はそゝけながら、上下に泥足をすゝぎて、塗臺に小鯛のはね廻りたるは、さすがに草枕とはいひがたかるべし。下宿のさまは引おとりて、見せ先に居風呂ふすぼり、小くらき行灯の陰とり廻して、ねころぶものは木まくらに風をつぶし、まだねぬ者は取かへ錢の勘定にのゝしる。人よぶ手拍子のならぬこそことにわびしけれ。月おち馬いなゝき、草鞋うり燒酎うり、あんまけんびきの聲もおさまりて後、拍子木丁ゝとして、これらはいかめしき旅の一体なり。すべて旅籠屋の庭の氣色は、蘇鐵つくり、松を植ぬはなし。畑峠には山みづをしかけ、大磯小田原には小石をまきちらす。塀にしのびがへしはありながら、大戸のかけがねはひづみてかゝらず。湯殿は無性にひろくて蜚鼠を迷はし、雪隱の疊は座數よりつらなりて、張付の裏梅もあらぬ匂ひに破れかゝり、蛩の啼こそ哀なれ。膳にはいなだの鱠かすかに、鰹のやき物、大根葉のあえ物、壺皿の豆腐にきざみ昆布の味も覺束なく、箸のふときはいく度もけづり直さんとにや、いとうるさし。出女を赤まへだれとは、みやこにちかき名のみなるべし。宵は返辭の尻がるに立廻り、鼻歌に雨戸はしらかすも、こよひいかなるさゝやきの橋をかけたるちぎりもとこそゆかしけれ。沓草鞋笠の頭甲はゆく先ゝの店につるし、あやしのはなれ屋には竹につけて道はたにも出せり。赤表紙の道中記、おもりに鉄鍔をさげ、榧のほた餅にはすす黒き雜巾を覆ふ。箱根の赤腹は卷わらにさし、梅澤の鮟鱇は鍵にかけて軒につるす。されば日よりは天道次第ながら、さしも大井川は膝たけにこして、思はぬ酒匂に二日留られたる、あら居の茶屋にうなぎのあたらしき日は、親の精進にあたりて、ひしけたる小家に日こしの燒餅をくふなど、きのふは絹賣に道づれして大濱に温飩をふるまはれ、けふはぬけ參の介抱して、天龍の川風にあたらしき笠をとられたる、哀樂日ゝにうつりかはりて、幸と不幸は首途の吉日にもよらぬなるべし。旅に哀をしるとは、その行客の身の上のみにあらず。駕かる人はかく人の達者をうらやめども、駕かく人はかる人

の錢をうらやむ。小揚のあひことばいつの世よりの酒落ならん。やみけんことは三十五文にして、またと坂東とは二十八文なるべし。朝は鳥羽の早追にはしり、晩は姫路の女中をつりて、身は定なきむらしぐれ、雲助のゆく末もいとこゝろもとなし。疝氣たまの川越の首に髭奴のまたがりて及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬かたの座當のせて、くらがり峠こすも、いづれ世わたりのかなしからぬかは。それが中にも口の過たる船頭は大坂番にたゝかれ、鼻の落たる餅屋は六十六部にさへきたなまれぬ。誠に一生涯のありさま、覩ずればみな旅にして、世を旅の空にたとへたるは、かりの住居といふのみにあらず。たのしみもくるしみも行先に見離して、たとへ女院の六道の沙汰とても是にもれざるべし。たゞ俳諧師のなる果のみぞ、棄恩入無爲のしめしもまたず、ふつゝかにあたま丸めて、吉野初瀬の春をゆかしみ、松嶋象潟の浪にうかれ廻り、三文ねぎりて戻り馬にはぐれ、乗合なくてわたし舟も出さず、たが爲ならぬ雨にもぬれ、月にも道のりをつもりちがへて、きのどくの山かげに一ト夜は一ッ家の情をかりて、すゝき折たく圍爐裏ばたに膝さらあぶりながら、虫歯やむ子にまじなひ敎て稗團子のもてなしにあふ。あるはしるべの古寺をたづぬれば、和尚は漢和もすこしなりて、足のぬけたる碁盤になぐさみ、五六日の名殘をゝしまれて松茸に喰あきたるなど、水雲万里をうかれありきて、ほだしなき身のやすさながら。そこの下人を孫平とは、我伯母聟の名なるものをと、ふと故郷の戀しき折もあるべし。われ仕官十年の間、木曾路東海道のくりごとながら、のぶれば行程千四十里ばかり、猶ながらへていかばかりの旅行もしらねど、ことしは齢も四十の老ちかく、しきりに懷舊感慨の情に忍びず。旅の賦一章を書て寓居の筆をつるやすも、まことはあぢきなきすさびなるべし。

借物の辨

久かたの月だに日の光をかりて照れば、露また月の光をかりてつらぬきとめぬ玉ともちるなり。むかし何某のみことの、このかみのつりばりをかり給ひしより、まして人代に及んで一切の道具を借るに、借すものもたがひなれど、砥の挽臼のといへるたぐひは、借すたびに脊ひきく、經ぶしはかりられて痩てもどるこそあはれなれ。金銀ばかりは德つきて戻れば、もとかる事のかたきにはあらぬを、かへす事のかたきより、今は借る事だにたやすからず。むかし男ありて、身代もな

らの京春日の里にかす人ありてかりにいにけるより、やごとなき雲の上人もかりにだにやは君は來ざらんと、露ふか草のふか入し給へば、鬼のやうなるものゝふも、霜月頃よりは地藏顏して人にたのむのかりがねは尾羽うちからして、春來てもこし地にかへらず。かりの宿りに心とむなと、人をだにいさむる出家達も、借らでは現世の立がたきにや、二季の臺所には掛乞の衆生來りて、色衣の長老これが爲におがみ給へば、又ある寺には有德の知識ありて、これはこちから借しつけて、きりの算用滯れば貧なる檀方を呵責し給ふ。かれもこれもともに佛の御心にはたがふらむとぞ覺ゆる。そも顏子陋巷にありて、いがきのめし瓢單酒に貧の樂をあらためずと也。さるを今世の人ゝ借金の山なして、是を苦にすれば限なし。百までいきぬ身を持て、さのみは心をかなしめむや。一寸さきはやみの世ぞと放言に腹うちたゝきて、家は貧に安んじたりなど、おなじ貧樂の引ことにいふは、やるせなき心のはらへならめど、まことは雲水の間違なり。なべて世にある人の衣服調度をはじめて、人なみならねば耻かしとて、そのためにかねをかりて、世上の耻はつくらふらめど、人の物をかりてかへさぬを耻と思はざるは、たゞ傾城の客にむかひて、飯くふ口もとを耻かしがれど、うそつく口は耻ざるにおなじ。かくいへる我も借らぬにてはなし。かす人だにあらば誰とても、かりのうき世に金銀道具はいふに及ばず、かり親かり養子も勝手次第にて、女房ばかりはかりひきのならぬ世のおきてこそ有がたきためしなれ。

かる人の手によごれけり金銀花

訪剃髮辭

五夕剃髮して桐の坊といへりとぞ。まづは殊勝の法師ぶり、名をきくよりやがて俤の推はからるれ。されども十德はきるやきぬや。饂汁はくふやらん。くはしきたよりはいまだきかず。

襟垢の世をぬぎ捨て紙衣かな

猫自畫贊

此小ふすまの白くてさう／＼しきに、物かきてえさせよとあるに、さらに何かくべしとも覺へず。されど辭してもゆるさるまじきかたをはやくしりて、よしさらば此棚に鼠のあれぬまじなひせむと、おこがましく筆とりて書たるは何ぞ。我は猫なりと思へども、大宮人はいかゞいふらん。むかし金岡が書たる萩の戸の馬は、よる／＼萩を喰あらしたるとか。もしはさる能書の筆して、四條のすゞみ清水の花見など、にぎはゝしき繪の屛風襖にも

あらば、あまたの人の夜ごとに出て扶持方もつゞきがたかるべし。我が妻戸の猫は、たとへすゝけて千とせふるとも、赤手のごひの踊もしらず。まして肴のたなさがしもせねば、あるしの爲は中ゝ心やすきかたならむを、朧月夜にうかれぬのみぞ、玉の卮の底なしとやそしられぬべき。世につたなき筆の虎をゑがきては、必猫なりとわらはるれば、われ又猫をうつさば虎にも似るべきを、杓子にはちいさく、耳かきには大きなりと、かの柿の木のむかし咄ならん。かくいへば鼠の爲とてもよしなし事に似たれども、いでや鼠にも白黒の賢愚ありて、子祭の白鼠はあるじもいざにくむまじければ、かしこく知りてさけぬもよし。心の鬼のわる鼠のみ、これだにも氣づかふべきは、落武者の薄の穗を人なりとみるたぐひにて、少はそれよりも近かるべし。さらば牡丹花下にてふを驚かさむよりは、此棚にねぶりてかのわる鼠をいましむべしと、かれにしめしの一句にいはく、

ゆだんすな鼠の名にも廿日草

戀説

かはゆき子も旅はさせよといひ、戀は道ならぬ道もあれば、ふみ迷ふさのゝ舟ばし親もさけて、あだし心はいざ神とてもいさめずやはあらむ。さてしも世にたへぬすさびにて、身にこそ人のいましむべけれ。そのくま／＼は尋わけてぞ物の哀もしろ端なるべきを、歌にはもとよりもつぱらにして、荻の上葉にとはぬをうらみ、有明の月に別れをかこつより、沖の石に涙をかけ、衞士のたく火に思ひをよそへて、たとへ雲かゝる高間の山も、浪よする高師の濱も、てにはの詞に品はかざれども、逢ふの別るゝの、忍ぶぞうらむぞと、たゞ一筋の情のみをいひて、女の男を思ふやらむ、男の女をしたふやらむ、姿に千變の品はわかれず。俳諧は万化にくだけて老若貴賤をわかつより、姿に自由の働あれば、井筒がもとのうなひ子の、手鞠もらふたる情わすれず。源內侍の十夜參りは紅裏に名をたてゝ、逢ふの待つのと詞にはもたれず。其句の姿に戀をみすれば、戀を一句で捨る事歟と、他門の初心の迷ふもこゝならん。しかればかの法師の筆にもかける。また男女の情は雖の夫婦に立ならびたる中をのみいふ物かは。逢はでよめりし娘を思ひ、小ぶとき乳母をかこち、長廊下にまどひ明し、向ひの女房を詠やり、淺茅が宿に後家忍ぶのおそるべき、所ゝに遊里の軒をきしれば、しばしこそ親の關守もかたけれ。物よみ謠のつれにさゝやかれ、東は朝日の

陰なる遊びも、つのれば西にかたむき安く、もらひのなりし夜は面白く、くぜつにあけし曉はおかしく、うそは誠にかくれ、恨は情に負けてより、人のいさめ世のそしりも行過の古みに見下し、宿はお留守の夢のうき橋程なくとだへして、耆るものなど久しからむや。秋風內證に吹わたり、出口の柳身すほけに散初るより、丹波口の茶屋も見ぬ顏して、身をこりずまの浦ならずも、うしろに山の借金負となれば、今出川の家も質に流れ、姉が小路の妹聟よりよすが求て、今ぞ落目の境に下り、わづか二三年の夢茫然とさめて、思へば千束の文は何の爲になりけるぞや。昔の孔子も今の伯父坊も、異見はこの事なるべし。新町ちもりの夕ぐれ、木辻鳴川の曙、もろこしちかきまる山とても、おなじ戀風はふきかよへど、猶とりく\に加はる佛は、色をも香をもしる人やしるらん。まして江戸ざくらの花やかに、人の心のはりもつよく、上野淺草の花ぐもりより箕の輪の雨の名にぬれて、土手の露ふむ戶なし駕より、今戶の舟のこがれよるこそ、遊びに巾の廣がり安きは、さしもむさし野のふか入する人も少なからじ。波にうかるゝうかれめ、草に音をなく辻君白人比丘尼野郞影間、それとて賣かふものはさらなり、御油赤坂の留メ女さへ、おかしからぬ事もよくわらひて、ねよげにみゆる旅人に、なじみの文よみてもらひ、さし足袋賣たるえにしより、七日つゝしみし始末もやぶれて、一夜の露に落やすきは、いざ此道のならひならぬかは。それよりの世のさま、人しれぬ事のみ多き中に、お比丘尼のかたみわけに、似げなき文の簞笥から出たるも、若旦那の鼻毛ぬきを物縫の部屋に見付たるも、みなく\跡のまつりなれど、物いひさがなき世にしあれば、うき名は千里に立安きを、蚊をやく帋燭にいねわるき蚊屋をすかし、小角豆つむ垣ねに隣の行水をのぞくなど、わづかに蟻穴のあやまり心ながら、身をはふらかす端ともなるべしや。されば社呉服屋の手代は思はぬぬれ衣着て、稻荷の前に帋屑をひろへば、四條河原へ賣たる子の大名に抱へられ、親までゆたかなる扶持方を得て、長かたなの銀こじりは、ひとへに我子の光ながら、むかしの念佛講中はからかさもどさぬ誘ものこるべし。これらや一生浮沈なれど、其源はたゞかりそめの檜原が露の奥にはじまりけむ。しかるに色白なる疊さしありて、屋敷かたにてたばこ入をもらひ、琴の指南の檢校が月見の夜から出入とめられたるなど、あるはお寺から手を廻して山歸來買るゝも、飯のくはるゝ痞に、折ゝ針立の泊りて行も、わけを糺

の神にとはゞ、表八句につかはれぬ事も有べし。又は風俗にいにしへ今のたがひもありて、律儀なる漢奇は反魂香をたきて、よすがら夫人の面影をしたひ、榮耀なる隱居は地黃丸をのみて、季時に猶燒の器量をゑらむ。猫にひかれて見そめし夕べは、玉だれのへだてをかこち、蚤にくはれて待わびし夜は、古夜着のうらみあかすなど、おのづから貴賤のけぢ目なきにも有べからず。慈鎭和尙の眞葛が原も、破戒の罪のそしりもなければ、其身に戀をせよとにはあらず。戀に心の覺束なかりせば、前句に對して趣向はありても、句作も道具も取つくかたなく、思ふにも手の屆かぬは、具足着て灸を搔くより猶不自由のくるしみあるべし。いでや戀といひ旅といふ、旅はかたちを勞して情は後なるべく、戀は情を先にして裏は姿に品をわかてば、內外いさゝか先後のたがひもあらむか。さらば句案の上にも、其心あらざらむや。おそるべし、かゝる說は饒舌の罪おふべくして、只後の君子をも待べきを、忍びもはてずして筆とり侍る。これもまた戀の闇に迷ふたぐひかも。

閑居記

忘るまじ、此一室はふるき世のわがゆかりなりけり。もとは城西の閑居にして、我曾祖母のいまぞかりし、今は四十年の昔ならむ。その人おはせずなりて、鴉の軒をあらし、鼠の壁を穿しほどもやゝ年あり。そのゝち母のすみ給へるかたに、ふたゝびいとなみしつらひつれば、あけくれの定省に寒喧をとひ馴しは、十とせあまり三とせばかり。千代もと祈りしそのかひもなく、むなしく風木のかなしみを抱き、桃李物いはぬ昔とはなりぬ。しかればこほつに忍びず、今官邸に閑地あるにまかせ、暫こゝに引移し、猶菅原や伏見の里もと契り置て、平生座臥の一ト間となせるよりは、馴來つる眞木柱も我を忘れじを、我はまして馴こしかたの花もなつかしく風も忍ばしく、窓に雪みる夕べは早梅色養の笑をふくみ、軒に月もる曉は鷄聲盥漱の期を告て、猶孝情の盡さゞりし事を惜む。されば一室は八疊の南を請て、床も押込みももとみしまゝの名ごりとゞめつ。北に三疊のおくまりたる所、夏はあけわたして風を通はす便あり。中はまして冬ごもりによろし。爰に襖さし、ともし火をかゝげて、讀書靜座のかくれ所とす。その窓に子猷が竹あり。陰を愛して杖にもきらず。その軒に弘景が松あり。聲をたのしみて蚊やりにも手折らず。脊戶には淵明が西疇ありて、雪間の若菜つみそむるより、韮も酢味噌にとほしか

らず。茄子はもとより世に久しくて、あけくれのあつものには少あかるゝもつれなしや。牛房はほそくとも大根はふときをいとはず。まして芋は地に叶ひて、いかめしきまでそよぎたち、豆も賓入の折すぐさねば、せみの小川の影ならずとも、月も此軒をたづねずやはあらむ。十日驅馳のさはがしきも一日の閑にとりかへして、これだに治世の仕よきをしるにも、おはさぬ人のいかでかと、あかずたゞ口おしく、忍ぶ草の忘られず、へだちゆくあとのみおしまるれば、額に無待の二字を書しも、たゞこの心に思ひよれるを、いざほとゝぎす我なうとみそとぞ。

断酒辨

もとより李杜が酒腸もなければ、上戸の目には下戸なりといへども、下戸なる人には上戸ともいはれて酒に剛臆の座をわかてば、おのづからのむ人のかたにかずまへられて、南郭が竽をふきけるほども、思へば四十の年にもちかし。されば衆人みな酒臭しと世に鼻覆ひたる心はしらず。まして五十にして非を知りしとか、かしこきためしにはたぐひも似ず。近き頃いたましう酒のあたりけるまゝに、藻にすむ虫と思ひたつ事ありて、試に一月の飲をたてば、身はなら柴の木下戸となりて、花のあした月の夕べ、かくてもあられけるものをと、はじめて夢のさめし心ぞする。けふより春の蝶の醉心をわすれ、秋のもみぢも茶の下にたきて、長下戸の樂に老を待べし。さもあれ此誓ひ、みたらし川に御祓もせねば、たとへ八仙の一座なりとも、まねかば柳の青眼に交り、吸物さかなは人よりもあらして、おなじ醉郷にあそぶべくば、いざ松の尾の山からすも、月にはもとのうかれ仲まと思ふべし。

花あらば花の留守せん下戸ひとり

物忘翁傳

わすれ草生ふる仕よしのあたりに、住わびたる物わすれの翁あり。さるは健忘などいへる病の筋にはあらで、只身のおろかに生れつきて、物覺のおろそかなるにぞありける。昔は經學の道をもとひきゝ、作文和歌の席などにもさそふ人あればまじらひけれど、きく事習ふ事のさすがに面白しと思ふ物から、夕べに覺しことごとも、朝ぼらけにはこぎ行舟の跡なくて、身にも心にものこる事すくなし。されば是を書付置むと、しゐて硯ならし机によれば、春の日はてふ鳥に心うかれて過、秋の夜は虫なきていとねぶたし。かくてぞ老曾の森の草、かりそめの人のやくそくも、小指を結び手のひらにしるしても、

行水の數かくはかなさ、人もわらひても罪ゆるしつべし。さればその翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きにかずまへられしほどは、人やりならずはづかしかりしが、つんぼうの雷にさはがず、座當の蛇におどろかざるこぼれ幸なきにもあらず。よのつねきゝわたる茶のみがたりも、はじめ聞ける事の耳にのこらねば、世に板かへしといふ咄ありて、またかの例の大坂陣かと、若き人々はつきじろひて小便にもたつが中にも、我は何がし僧正のほとゝぎすならねど、きくたびにめづらしければ、げにときくかひある翁かなと、かたる人は心ゆきても思ふべし。ましてつね／＼手馴古せし文章物がたりの双帋も、去年見しことはことし覺えず、春よみしふみは秋たど／＼しく、又もくりかへしみる時は、只あらたなる文にむかふ心地して、あかず幾たびも面白ければ、わづか兩三帙の書籍ありて、心のたのしみさらに盡る事なし。むかし炎天に腹をさらしたるおのこは、人にもおり／＼物をとはれて、とりまがはじいひたがへじと、いかにかしましき心かしけん、今は中々うれしき物わすれかなとぞいひける。猶かの翁が家の集に、何の本歌をかとりけるならむ。

わすれてはうちなげかるゝ夕べかなと

物覺えよき人はよみしか

妖物論

世にばけ物といふ物ありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、さかやきそりたるはつゐに聞かず。夜るばかり出るはいかなるゆへぞと、或人の問たるに、晝は例の子供のたかりてわづらはしさにと答たるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病ものを相手にとれば、その藝ことに出來榮して、武功の人に出あはすれば、思ひの外のあやまちをかふむる。鬼は伯母に化てかひなをとりかへし、狐は叔父にばけて甥の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化たらんは、その姿おかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落て、猫また河童はたま／＼の沙汰なれども、その正躰の穿鑿は、樂屋の見えておもしろからず。たゞ理屈なきばけ物といふものこそ、ことにゆかしけれ。そも／＼神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此ばけ物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にものせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表帋の小双紙にはづかしき姿はとゞめられける。さるに昔今の美婦國色すら身の終はみぐるしく、關守におちぶれ、檜垣

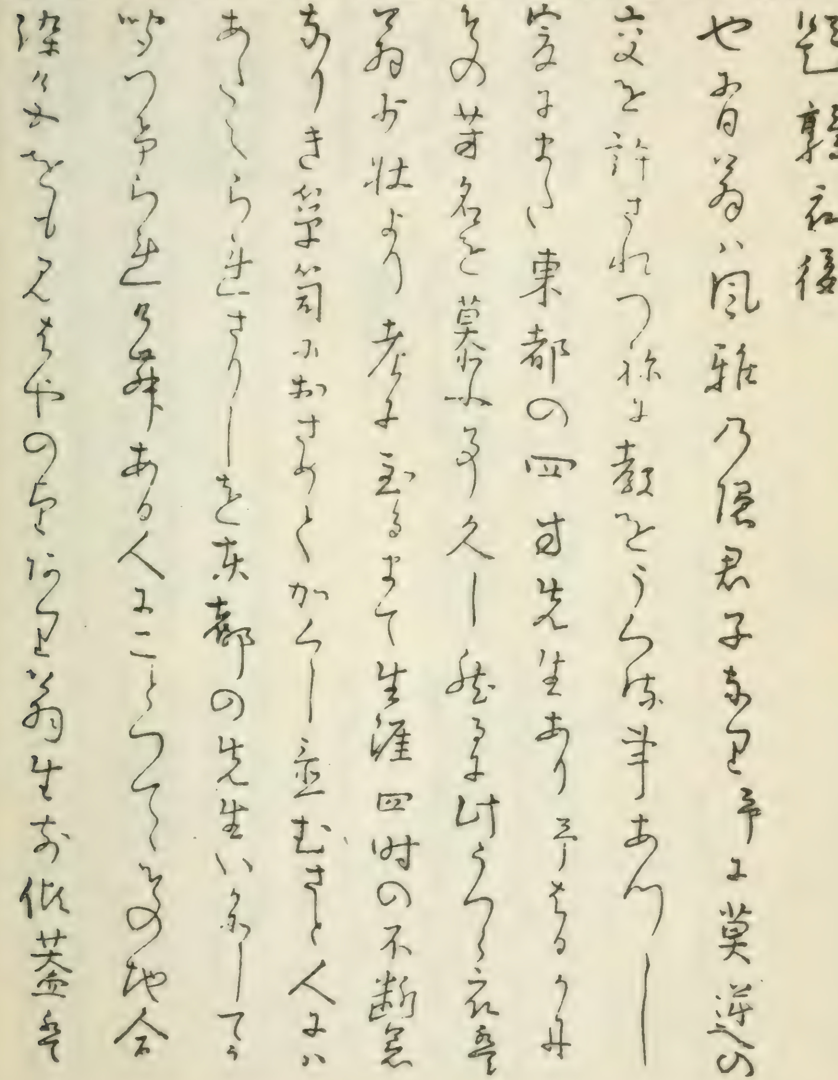
にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見たてもうるさきに、たゞこの物の絵ばかり引幕の陰をもたのまず、あとに箒も雑巾もいらず、かきけすやうに失にけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

右の文章、享保の初より寛保の頃まで、半掃菴著述の遺稿也。

張藩　六林　校

題鶉衣後

也有翁は風雅の隠君子なり。予に莫逆の交を許され、つねに教をうくる事あつし。爰にまた東都の四方先生あり。予はるかにその芳名を慕ふ事久し。然るに此うづら衣は、翁少壮より老に至るまで生涯四時の不断着なりき。篭笥におさめてかくし置、むざと人にはあたえざりしを、東都の先生いかにしてか聞つけられけむ、ある人にことつて、その地合染色をも見ばやの望あり。翁生前傾蓋はあらざれども、高



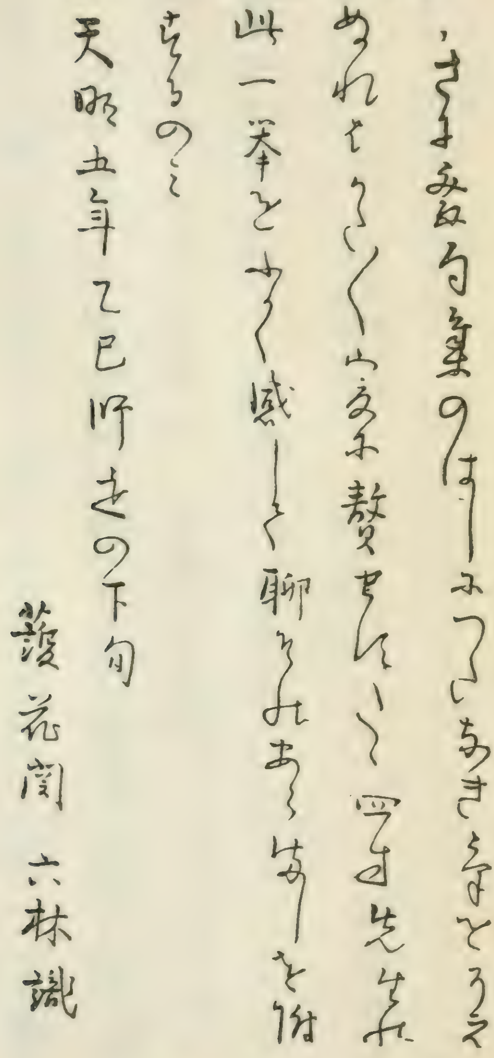
山流水の音しる人また外にやはあると、前津の舊庵へかけ込て、そこを守れる文樵なる男に、さびたる鍵とらせて、押いれの引出しをさがし、文匣の底ふるひてあまたの中にゑり垢のつかぬを、かれこれと撰出し、遠にこれを贈れり日あらずして梓に上せられ、遠近の好士に一襲ツヽ衣配せばやとの沙汰あり。誠に翁に於て隔世の知音といふべし。さぞな泉下にも雀躍して歡喜あらむ。そも四方先生の高誼は海内みなしる所なり

也有翁のうへは、さきに發句集のはしにつたなき筆をそえぬれば、かた〴〵爰に贅せず。たゞ四方先生の此一擧をふかく感じて、聊そのあらましを附するのみ。

天明五年乙巳

師走の下旬

護花關　六林識





うづら衣 續編

煙草説

夜道の旅のねぶたきとて腰に茶瓶も提られず、秋の寐覺の淋しきとて棚の餅にも手のとゞかねば、只この烟草の友となるこそ、琴詩酒の三ツにもまさるべけれ。埃(くど)のもえ杭をさがしたるは、宰予が晝ねの目ざましにて、行燈に首延したるは小侍従が待宵ならむ。達摩は九年の壁にむかひて炭團の重寶を悟り、西行は柳陰にしばし火打の光を楽む。されば出女の長きせるは、夕ぐれの柱にもたれて、口紅兀さじと吸たる、少は心づかひすらんを、船頭の短きせるは、舳さきに匍匐て、有明の月を詠ながら、大海へ吸がら投たるよ、いかに心のはれやかならむ。やごとなき座敷に緞子張の煙草盆をあたま數に引わたしたるより、路次の待合に吸口包たるは、にくからぬ風流なれど、さすがに辭義合に手間も取べし。只木がらしの松陰に駕立て、繼ぎせる取まはせば、茶屋の嚊のさし心得て、蚫からに藁火もりてさし出したる、一瓢千金のたとへも此時をいふにや。または雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひながら、烟打のきせるにがん首さしあはせて一ぷく吸付たる心こそ、漂母が飯の情よりうれしさはまさらめ。そも煙草の徳もむかしより人のかぞへ古して、今さらいふもくどければ、かの愛蓮にならひて、たゞ此類の品定せむに、酒は富貴なる者なり、茶は隱逸なる者なり。煙草はさしづめ君子の畨にあたりて、用る時は一座に雲を起し、しりぞく時は袖のうちに隱る。こゝに神龍の働ありともいふべし。下戸と妖物は世にすたれて、下戸は猶少からず。今や稀なるはたばこきらひにして、野にも吸、山にも吸へば、たばこ入の風流日ゝにさかんに、きせるの物ずきとし〴〵にあたらしくて、若輩の目を迷せども、楠が金剛山の壁書をみて思ふに、たばこはさがぬ(乾燥)を尊とし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ。さらば色みえてうつろふ花の人心にも、畢竟そのものゝ本情實儀をうしなはざれとなり。

蔦野記

つのもじや、いせの蔦野なる山にいでゆ(温泉)

あり。年ごろなやめる疝疾にこゝろみむとて思ひたつ。頃は七月の廿日あまり、尾城を舟出して寒名にいたる。あさけ川といへるより道わかれてかの山へむかふ。

鴫たゝば夕べはいかにあさけ川

その末は人家もまばらに、薄はまねけど酒屋もなく、餅は萩の花の名のみして、秋草のやさしく咲みだれたる、こゝを繪野とはいふなるよし。

誰すてゝ扇の繪野の花づくし

山口といへる一つ家ありて菓子などうる。店に尻かけて、

こだまより外隣なき砧かな

それよりはけはしき道細く、あやうき岩をつたひ、谷をわたりて、雲より雲にわけ入れば、世の外遠くへだゝる心地して、さてはしづけき山の中にこそと思ひやりしには似もやらず、湯本の家はわづか二十にたらねど、二階づくりの家居つきつきしく、古市などいへるあたりより、たはれ女多く來り居りて、糸竹に客をなぐさむれば、小哥淨る理山どよむばかり峯の松風も三線に音をうばゝれ、淸き谷水も脂水のけがれに濁るべきぞ、思ひし外の山里には有ける。今年はことに湯入の多くて、いよの湯けたもよみつくすまじく、近き頃にすぐれたりと、所の人もいふめり。わかくしきかたは心にもとまらず、あたら山里の秋の夕をと、ほゐたがひたる心地するが、もと見し事どものさすがに思ひ出らるゝ折もありて、むかし忍ぶの家の名も橘屋といへるに、しばしのやどりもとめて居れり。襖一重へだてゝ、ことににぎはしく諷ひさはぐに、

色鳥のねぐら隣や山がらす

日ゝの口號、

湯の山やにしきに交る染ゆかた

暮は湯にゆづりて秋の櫻かな

山の上に藥師堂あり。三岳寺と名のみことくしく、回祿ありける後はかたばかりにいとなみて、すめる僧もなく、明くれかねつくは堂守の男にて、法師にはあらざりけり。

鐘つきや剃らぬあたまに散柳

六日ばかりの月山のはにかゝりて、風も湯あがりの身にしむばかり、端居の夕べおかしきに、鹿の聲遠く聞つけぬ。

笛にせぬ湯下駄にもよるか鹿の聲

つれぐまぎるゝかたなき日は、そこらみめぐり侍るに、大石と名に立るあり。

友寐して猿と月みむ石の上

靑瀧といへる、うしろの山をへだてゝ西より落る。

靑瀧や竪に音きく初あらし

この山下にあやしき野火あり、人の亡魂とかいひつたふ。

たが魂ぞほたるともならで秋の風

我名もつゝみ人の名もとはねど、をのづから見なれ、ものいひかはして、いざたまへ、けふは花火あげてなぐさまむ、あまごといへる魚とりになどさそふ人ゝもあるが中に、ことに明くれとひ來りし覺樹といへる若き僧あり。下手なる象戯などさして、淋しさまぎるゝたつきともなれり。過る日數も二廻りばかり、今はとてかへる日は雨にふられて、

湯にぬれし袂の果や秋の雨

かばかりの事も、後の思ひ出にもやと書つけ侍る。頃は乙亥の年になん有ける。

（乙亥は寶暦五年也）

樂老庵主像賛

滄浪の月すめらば酒におしむべし、くもらば茶に遊ぶべしと、二つの間になぐさむは樂老庵のあるじなり。これをゑがき、是に賛して、

酒に待茶に待かへて月二夜

といへるは、その友紫隠里の某がもとめに應ずるなり。

贈二奥州株人一辭

朱硯の來由を記て、株人雅伯に謝する辭に代ふ。

世には芦垣の間ちかき軒をならべてだに、心あはぬどちは音づれもせぬならひなるを、遠き陸奥の見もしらぬもとより、一句を添てかの地の産なるよし、さゝやかなる硯を贈り給りぬ。あやし、しのぶ文字摺たれならん、我ならなくに人たがへもやと、その便せし風水翁にとへば、その國に名たゝる騷客島庵主の何がしとや。かの翁のたび寐に、いかなる序か我名もらし給へるより、そは俳門の友なりとて寄せ給へりとぞ。されば我及ばぬ此道に心入れてより、蕉門の人としきけば、皆十年の舊相知のごとく思へるが、さては我ならでもかゝる心のならひにやと、うれしき傳のいひ盡すまじう、硯は袖にかくすばかりなるも、遠き惠の荷恩を思へば、千引の石の心地こそすれ。

ためしなき雁に重荷やすゞり石

いでや、このなさけのかきけつまじくば、松の烟の黒からむよりと、これを文房の朱硯には定めぬ。世をもてかぞふ壽によらば、長く風雅のちぎりもたへざれとぞ。

朱硯にまづ手染せむ窓の蔦

そもや芭蕉翁は、生涯を雲水に終り、杖を引ざる國ゝもなきが中に、奥羽は行脚のはじめにて、奥の細道の紀行をあらはし、その句は人の耳口に殘れば、ことにゆかしきくまぐ〵も多し。さるを仕官にはだされて、雄島の笘やまたも來てみんと、欲なる願ひは思ひもかけず、たゞ一度の見るめも及ばぬその千賀のうらみは、千島も數ならず、千

ひろの海も浅からむ。されば能因の一首を思ひて、一句はその人にゆかしさを告るならし。

しら川や夢にこす夜も秋の風

一色亭記

豆州熱海に滞留の時、渡邊彦左衛門といふものゝ求によりて記す。

沂に浴し詠じてかへらむとねがひし彌生の空にはあらで、秋もわた入の羽おりきる頃、此あたみの湯本に一月ばかりのやどりする事あり。さるは我國君の母公にしたがひまいらせて、身のためならぬ旅寐ながら、舊痾幸の折を得て、瘧氣の厚を温泉に浴し、浮世の耳を潤水に洗ふ。されば此里の地理、うしろに山かこみ、海はもとより波こゝもとによせて、月の寐覺に枕を支ふれば、鹿の妻乞巴峡の猿にまさり、雨のつれ〴〵に盃をとれば、鰹の刺身、松江の鱸に耻ず。伊豆の於山、まな鶴が崎、久かたの日かね山、朝もよひ紀僧正の宮、眺て吟魂をなぐさめ、歩して舊迹をたづぬ。沖の小島は朝夕にみればこそあれ、大島はやゝ波路へだゝり、雲晴てあらはれ、霧わたりてかくすも、けにくまなきをのみ見るものかはと、えならぬ眺望いひ盡すべからず。しかれば家ごとに東面をひらき、湯入の客の目をよろこばすが中に、渡邊氏某が亭にぞ、わきてたよりよき樓はかまえり。むかし佐文山こゝに來けるついで、三字の額に筆をぬらせしより、一色亭の名によべるは滕王閣の趣なりとや。落霞孤鶩と齊しく飛び、その長天と共なる海づらの秋も、今にして浦のみるめ、軒端にさはるかたなく、心あるあまの庇のわざと荒してとよみけむには事かはりて、家居もことにつき〴〵しければ、たちよる人もこゝをせに、先やどりとる事にぞ有ける。

心ありて荒さぬ軒に浦の月

乞食畫贊

もとより小町が身の果にもあらず、豫讓が忠のやつしにもあらず、君よく是を忘れずば、廚に肥肉を遠ざけて仁政野邊の草葉に及ぶべく、臣よくこれを忘れずば、つねに飽温の恩澤を省て、報國の志もいかでかこゝに起らざらむ。ちかく治世の明くれとても、これを見かれをおもひしらば、花に一盃の望は足りやすく、雪に饅汁の奢やむべきをや。あはれ世の人心、螢の目のうへにのみつきて、猿の手の及ばぬかたにのばすらんを、あが佛を香華にまほりて、その黄金の肌を美むよりは、たゞよしこれを起居に詠て、薦一枚を忘れざらむにはと、みづから坐右に書贅す。

十六夜賦

いざよひの月みむと、勢（熱ヵ）田潟に

舟よそひするに、何がしがあるじまうけして、世帯道具もとほしからず。巨口細鱗もまないたにひるがへれば、斗酒はもとより坡翁が妻の才覺もからず。海老煮る闇も濱はなれて、くまなき月の海づらにのほれば、こよひや星崎の千鳥も月みよとは啼ならん。いでや其翁も潮水にけふのかげをめでゝ、成秀が門敲給ひしとか。むかしかゞみの山こそなけれ、呼續の濱松風の里、波のみるめもまよふばかり、西湖江湖の秋風も、今宵はこゝに吹ざらむやと、酒ににぎはし茶にさばして、やゝ清興を高ぶれば、まして鳴海潟夜寒寐覺の里の名に歌よむ人は、衣かたしき物思ひがほなるを、いざや宮こんにやくの寂しみこそと、例の唐がらしのいらひどきに、戀ならぬ袂をぬらして、又一盃をあらたむれば、白鳥山の鐘の聲、おどろくばかりにぞ更わたりける。

呼つぎの名にいざよひの月見かな

螻翁傳

螻といふ虫は、よく飛べども家を過る事あたはず、よくのほれども木を窮る事あたはず、よくおよげども谷を渡る事あたはず、よく穴ほれども掩ふ事あたはず、よく走れども人を免るゝ事あたはず。是をかれが五能ありて、一ツをもなさずとはいへりとぞ。こゝに翁あり、詩つくれども詩ならず、歌よめども歌に似ず、物かけどもよからず、繪かけどもつたなく、俳諧すれども下手なり。我かの虫におとらめやとて、みづから螻翁とぞ名のりける。やゝ老にたり、今はかゝる身のほどをしりて、他にほめちれむ事をねがはず、人の誹をいとはず。さらば何に歟も腹たてゝ、かのつぐみといふ鳥にはよろこばるべき。よし、たゞかれは腹たつべくとも、我は笑はむと思へるなりけり。

三日月堂記

鷹二大督根成就院需一

そもや故人の手にならせし調度、筆にのこせる跡は、もとよりめでたきかたみなれど、世に露霜もをきかはれば、あるはうせ、あるはそこねて、にせかまことかのうたがひもむづかし。只よし人のことのはばかりこそ、代々にむしばまぬたからとはいふべけれ。されば翁も一生の吟、いづくはあれど、此府下にしては、何がし院のかへるさにとさして、其寺のまぎれざるは、たゞ爰に此一句のみならん。猶その詠し物の上にいはゞ、かの武隈の松も跡なく、井出の欵冬六浦のもみぢも今はむなしき名ばかりなるを、たうとくも此寺にいにしへの月そのまゝに有て、眺望もまた世にこえたれば、昔をしたひ道しのぶ人の、たれかはこゝに來てあふが

ざるべき。さるを五條房のぬし、朽せぬ印をたて、院主また堂に名づけて此句の光いやましにかゝげしより、雲上の鴈も水底の魚も、弓と驚かす、釣とうたがはず。まして舟とも鳶とも、一度たとへて二度目は古ければ、たゞ三日月の三日月なるそのかけは世ゝにかはらずして、いつも此寺に隠なからむとぞ。

猿の手に摩づともつきじ三日の月

翁像賛

道は古池の吟にひらけつ、　吟は枯野の夢におはりぬ。檜の木は月の笠ならねども、影を風雅の世にあふぐらむ。

音曲說

今様則詠といへる、むかしは遊びの最上にてや有けむ。かの催馬樂などいふものは、我つるにきける事もなし。たま〳〵幸若が家に、舞といふ事のかすかにのこれるもめづらしとて、一度は人の聞もすべし、二度と聞べしとも覺えず。いまは謡といふもの、上中のもてあそびとなりて、はなはだ下〳〵は至らず、法制そなはり、老若のさかひなく、古今に變なし。されば是を玩ぶは人品よろしきかたにさだまりて、たとへ商人のよきゝぬ着たらんほどのきはゝ、高砂東北をもしらぬは、玉ならでも盃の底なき心地ぞする。世にさるべき饗應の席へは、その職なる人めし出されて、小袖と上下の紋は定らねども、時ならぬ足袋はきたるは、ひとさしも心得たるなるべし。一座のさし合、折からの文句には心づかひして、いかで盃の間をぬかさじと眼を配りたるなど、扇は膝の上に斜なり。あるは亂酒の打やはらぎて、やごとなきかたよりも上調子に鼕打いで給へるに、やがて一座聲をあはせて、中にも手皷の心得たるなど、蟬のごとく蛙に似たり。かゝる中にたま〳〵その道心得ぬ人は、炙物にせゝり箸してうちそむきたるは口おしとや思ふらむ。しかるにはれがましき舞臺の面に、眞貌に足拍子ふんで、辯財天とはわが事なりとは、まことに仁躰にも似あはず、あまりなる事と思へば、すこしかたはらいたくおぼゆる折もありけり。

されば世うつり、人の耳も心もたゞ向上にはしりて、淨るりといふものは洒落のはじまりにてやありけん。夫だに五十年のむかしは、さてもそのゝち弓とり一人おはしましてと、一部を發端に名のり、みだい姫君の道行もたゞこゝに哀をとゞめしに、今世は年ゝ月ゝに新奇をあらそひ、義理に虛實の入組て、二重どきの謎よりはむづかしく、不飲込なる老人の耳には、善も惡もおぼろ〳〵として、三段

目の愁には、あたりの顔を詠わたしてただ泣より外の事ぞなき。是をもてあそぶ人の、外の音曲とはふりかはりて、本ッひかへたるは上手めき、そらにかたるは心おとりぞする。日待庚申にもつぱらにして、燭臺の陰に衣紋かきつくろひ、翠簾あるかたを側目にかけて、こはづくりたるよそほひ、やゝ三重の間に息つきて、けしきばかり汗のごひ、湯をのみたる様よかりけりなど、人のつきじろひたるけはひ、世にある思ひ出かくこそなど、若きはうらやむ心もあらむに、よく其人の上をきけば、多くは兄に見かぎられ、親の勘當も少からず、養子緣組の相談には少さゝはるかたも有ぬべし。きはめて工商の間にありて、年も三十ばかりまでのわざなるべし。

歌とはすべたる名目なるべけれど、今をのづから筋わかれて、其品また貴賤の異なるあり。古今も一様ならず。琴の組などは上代のまゝにて不易の眞なり。今三線にあやどるたぐひは、流行しばらくもとゞまらず、文句も百端に、音節さだまりなし。本調子は、たとへば女のさげ髪にうちかけしたるごとく、二上りは髪當流にとりあげ、姿もひとつまへにみだれたり。三下りはしづまりたるに似たれど、かくし化粧にしごき帶したるよそほひ、物思ふ人はこゝに淚をも落して、中ゝ淫奔の媒とはなりぬべし。すこしも品あがりたる人は、耳にこれをなぐさめども、みづから口には弄しがたし。やゝさだ過たる身の上には、猶にげなくてうたふべくもあらず。かの牛の角を敲きて田のあぜにうたひ、あじか(簣)荷ひの一トふしは、今も月夜の門過がてには、さるたぐひもあるべきか。鋏を彈じてうたひしなどは、おとなげなくもなかりしにや。いさもろこしの事はしらぬ風俗なり。たゞ糸によるものならなくに、賤の男賤の女のうへにこそ、歌はすてがたき哀ぞ多かる。舟歌はめでたく祝ひていさましき物から、漁歌の棹歌のと古人のいへるは、波間苫間のさびしさにて、是にてはあらざるべし。山更に幽なるに樵の歌のきこへたるは、伐木の丁ゝたるよりもまさり、あけ野が原にすみれ咲て、比丘尼のうたのなめげなるより、さよの中山夜ふかき霧わけて、馬かたの欠まじりにうち出たる一トふしぞ、楚客の魂たゞこゝにくだけぬべし。田うへ歌麥歌臼挽うた水汲うた、いさゝか折ゝにたがひありて、所ゝに品ことなり。いづれか哀ならざるべき。和歌にはさして稱せざれども、詩客俳人多くはこれに情を託せり。

平家といふもの有て、まづは琵琶法師の家にのみ傳れども、はやりうたのはなや

かなるにも似ず、せつきやうの哀なるにも似ず、蟬のすたれたるにも似ず、浄るりのあらたなるにも似ず、すかぬ人は甚すかず、すく人はことにすけり。我に友あり。其人のいへる、稍老になん〱として、かの青曲の品〻、一ツも身の上に唱がたし。されば此平家は、こと〱く信ずべからねども、和朝の記錄にして、懷舊覽古の情ふかく、謡のねからつくり事なるにはまされり。老ては人のまじはりうとく、獨居がちにかきこもりたらむには、是こそ三の友の一ッにはたりぬべけれとて、かの無絃にあらぬ一面の琶琵を抱いて、雨の日、月の夜、官務の隙に搔ならせば、人はたゞ平家を習ふとや見るらん。我はひそかに老隱の稽古をするなりといへり。さればかの琵琶も母かたの祖父よりつたへたれば、たゆまじき糸筋なめり。撥面に三日ばかりの月さし出て、桐の一葉の散たれば、新凉とはよぶ事とぞ。これにさびしがらむ句ひとつとこふまゝに、

膝瘦て琵琶のなづきや秋の暮

知雨亭記

市中はなはだ遠からねば、枕頭に錢をかけて酒を賖る足を勞せず、市中また近からねば、窓底に枕を支へて夢を求る耳靜なり。こゝに少の地を求めて、聊膝を容るの幽居をいとなむ。よしかの鬼はわらひもすらん、我世のあらましたがふまじくば、花とならびの岡ならずも、有とだにしられてぞ老の春をも過さばやと、人しれず思へるなりけり。かの山雀の身のほど隱して、四壁たゞ風をふせぎ、三徑わづかに草を拂ふ。こゝに汲べき山の井なければ、井戸ひとつこそ過分のたくはへなれ。あたりは夕がほの小家がちなれば、枕に鷄の曉を告げ、夜はとがむる犬も聲して、ひたすらとをきほどにもあらず。門を出て東北の方しばらく十歩の杖を曳けば、指頭万疊の山横おれ、眼下千町の田つらなり、村落畫圖の中に入る。南は高くらの森高く、鳴海の浦風も通へばや、勢(熱)田潟も名のみして、夏は夏しらぬ日も多かり。やゝ賤が屋の蚊やりも細りて、衣うつ聲虫の音もよそよりは早き心地するは、夜寒の里も近ければならし。年くれ年かへり、垣ねの梅は遲からねども、万歲鳥追などいふものゝ、うき世の春には一日二日も立おくれたるなど、さすがに片里めきたり。されば名付て知雨亭とよぶ事、かの蘇氏が喜雨にも習らはず、何がし黄門のしぐれをも追はず、只これ穴居に似たればなり。やゝ多病の老にともなひ、しけきことはさに物ぐさなるには、あはれ思ひし儘なるをと、我は心ゆきて覺ゆるを、こゝもまた府城の辰

已なれば、世をうぢ山と人はいふらんかも。

百魚譜

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置ける、世の人の口にをける、をのがさま〴〵なる物ずきはあれども、此魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。糸かけて臺に居たる男ぶりさへ、外に似るべくもなし。しかるをもろこしには、いかにしてかことに賞翫の沙汰も聞へず、是に乘ける仙人もなし。されば東三郎殿も他の葉武者には目もかけず、たゞ是にこそ釣もたれ給へ。龍を鱗の司といふは、食味はなれたる理屈にして、さは是を料理せんと學びたる人は、むかし愚なる名をもこそとゞめたる。

龍門瀧にのぼらんとする魚有りて、おほけなくも大聖の御子にも此名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ばむとす。かれはいかなる幸にかあらむ。味ひ美なりといへども、鯛の料理の品〻なるにはにるべくもなし。乾物炙物にせず、鱠すまし(清汁)によろしからず、くずし蒲鉾に用ひがたく、塩にも鮨にも調ぜず、只さし身あつ物にとゞまるは、多能を耻といひけんを、中〻ほまれと思へるにや。

昔平家に悪七兵衛景清と名乘て、今民間には泣子をも威すべく、朝比奈辨慶に肩をならべんとす。しかるに記錄の上にしては、しころ(錣)曳の外はさせる働なくて、只二郎兵衛も五郎兵衛もおなじつらなる侍なり。いかに世に名のこと〴〵しきぞと、ある人評したるものあり。かれたゞ七兵衛が類なるべし。

松江の名產、我朝にも品くだらず。張氏は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家は是を船中に得て官路に進む。進退いづれをかうらやむべき。

鮒は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉に似て位階おとれり。名には紅葉をかざしたれど、鱠は春の賞翫となれり。

鰤は節饗の頃もてはやされ、梅咲ころを世に匂ふ。

鯖は初秋に祝はれて、空也の蓮のはに登るは、後生善處の契もたのもし。

鰹は芥子鮓(酢カ)の風味、上戸は千金にかへむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性を兼好にいひさがされたる、いと口おし。鰹節となりては木の端のやふにも思はれず。その梢とも見えずして、花の名をさへ世にちらしぬる。

鮟鱇の唐めきて子細らしきに、つるし切とはいぶせくして、桀紂が料理めきたり。かれは本汁にゑらまれ、鱈はかならず二の汁の大將にて、掬手をぞうけ給りぬ。もしは文字の理屈によらば、鮗の上には

鰆をめでさせ給ひ、中宮の御膳にはことに鰍をやめさせ給ひけん。

鮭は越路に名ありて其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染て、うるはしく照たるこそいみじけれ。たま〳〵鱒といふものも、その色はまけじとやいどむらんを。

狹夜姫は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非情となり、これは非情の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝万葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも、劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふものゝ世にもてはやさるゝは、かの鯛鱸の大魚に比すれば、今いふ梅櫻の類と等し。しかるに國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしら魚ともいへり。是いづれならんといふに、さればしろ菊とも、しろ鷺ともいはねば、しら魚といふこそよからめといへば、かたへの童のさし出て、いなとよ世にしら猫とも、しら鼠ともいふにこそとうちこまれて、爰に物定の博士しばらく默然たり。

鮎は鵜川の篝火に責られ、鯰は濁江の瓢單(簞)におさへらる。比目魚は黒白に裏表をあらはし、海鼠は跡も先もなし。齒にもたまらぬゑいの骨は、何の爲に持たるや。それも海月のなきにはまされるか。

こゝに蛸の入道は、壺に入てとらるゝこそ愚なれ。邪智の瀧壺ならば、文覺が行力をも傳ふべきを、一休の口にはほめられながら、まさなの法師の身の果かな。

かながしらといふ名のめでたくてぞ、產屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを石持といふものゝ、かね持ともいはゞ、世にいかばかりもてなされむを、益なき名をもちて口をしとや思ふらん。

鱵よりは、をさなき心地ぞする。大男の髭口そらしてくふべきとも覺えず。

鯊はたゞ釣る頃の面白きなり。里は砧に蚊屋しまひて、木曾に便よき人は、まだき新蕎麥喰たりなどほのめかされて、うらやましき頃ならん。

泥鰌は、酒の上に赤味噌ほどよく調じて、唐がらしくはへたるこそよけれ。白味噌がちなる大みや人は、いかに喰らんとさへ覺束なし。

鰒とは先名のふつゝかなり。いかで無比の美味をそなへて、おやしき毒をもたりけむ。その味ひと毒の世にすぐれたれば、くふ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいへり。

鰯といふものゝ味ひことにすぐれたれども、崑山のもとに玉を礫にするとか、多きが故にいやしまる。たとへ骸は田畠のこやしとなるとも、頭は門を守りて天下

の鬼を防ぐ。其功、鰐鯨も及ぶべからず。されば歌人は鳥虫に四季をわかちて、魚に四時の題詠はなし。俳人兼て魚を品題とするは、もつぱら味ひの賞翫を捨ざる故なり。しかれば歌よみは耳目の愛にとどまりて、食は野卑なりとてとらざるに似たれど、かの喰ふべき若菜をもつぱらによみて、菜の花のうつくしきを歌の沙汰に及ばぬは、喰れぬ故によまざるにや、無下に口惜しと人のいひたる、さがなき詞ながらおかしかりけり。

案山子辭

もるとせしおくてのいな葉刈はてゝ、山田の畔にひとりたてるかゝしあり。むれわたるいな雀の落穗ひろひけるが、例の口さがなくてわらひけるは、養由は百歩に柳のはをはづさず、義家は鳴弦を雲のうへにひゞかせ、賴政は鵺を射る。その外武將名士の弓箭に功ある、みなその藝を發して世に名をふるへり。なんぞや、あやしの竹に繩はりて、射る事しらぬ弓の形をいつはり、我輩をあざむかんとするや。案山子これにこたへていふ。ひかぬ弓放さぬ矢にて射る時は中らずしかもはづれざりけり、とよみける歌の心をしらずや。その奥州の鳴弦も、矢は放さずして德をあらはせり。麟は角をそなへたれども、肉ありて物をやぶらず。むかし忠盛の闇討も、木太刀に身の難をのがれてこそ、かしこしと人にはほめられつれ。しゐて物をやぶりそこなひて後その功をなさむとするは、愚將のなす所なり。いでやかの鵬といふ鳥を聞けるや。九万里に羽うつて翼垂天の雲のごとし。おどりはねて穗ひろふ汝らが、よくその心をしる所にあらず。いかで我をみゝづくに類して、みだりに笑はんとするや。雀なをも口〻にいふ。さればその大鵬の雲に羽うつは、莊子の例の大嘘にして、斥鷃のよもぎふに飛ぶは、今見る所の實なり。たゞその實を以ていはむ。世に鶴といへるものだに、千とせの齡はことぶかるれども、今は是を取て大饗に居られ、羽は矢にはがれ、殼は黑やきにして、何かれの藥とて爭ひ求めらる。鷹はこれらをも組敷て、其功上に出るに似たれども、その藝のすぐれたる故に、朝三暮四の餌をあてがはれ、足をつながれ、架にほだされて、雲をこふの愁をまぬかれず。しかじ、世中の人には葛の松原に一枝のねぐら求て、淺茅が露にかくれやすからむには。そもや汝が身にあきはてゝ、稻くき已に霜寒し。などや五湖に棹さして、婆笠の塵をはらはざるや。他をそしり我をしらざるは、共にいふべからず。昔うぐひすは歌をよみたれども、それは花に啼

ぬめりなりとて、

拾時をしらぬ案山子の弓矢かな

と轉りて去らむとす。案山子猶よびとゞめて、汝かしこきに似て又わが心をしらず。そも笠を誇るや簑をそしるや。其句の返しにはあらず、たゞ此歌をきけとてよみける。

是は笠これは簑とてのけたれば
あとには何かかゝしなるらむ

糸瓜辭

むくつけきふくべも、ひさごといへば、伏猪のやさしみあり。花はまして夕がほの人めきてよそほへるを、此ものゝへつらはず、うき世をへちまと名のりけるより、源氏の御目もとゞまらず。まして歌よみは此名にもてあつかひて、こちの料理にはつかはれずとて、ほからかし捨たるを、やがて俳諧師のひろひとりて、己が垣ねには這せたるなり。その味ひの美ならねば、鴉もぬすまず蟻もせゝらず、鉢坊主もみかへらねば、隣の人をもうたがはず。

草刈のそしるをきけば糸瓜かな

猶又いみじき疝氣の藥なりとて、ことに此翁の愛するにぞありける。むかし水の流に光さして、楊柳觀音のあり所はしられ、栗栖野の柑子には、きたなきあるじの心をさへしられつ。白壁のらく書には、醫者の家なる事もしらるべし。されば色をも香をもしらざればしらず、しる人はしりぬるかし。

垣にへちまさてはあるじも疝氣持

百蟲譜

てふの花に飛びかひたる、やさしきもののかぎりなるべし。それも啼音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢も此物には託しけめ。只とんぼうのみこそ、かれにはやゝ並ぶらめど、糸につながれ黐にさゝれて、童のもてあそびとなるたにくるしきを、あほうの鼻毛につながるゝとは、いと口おしき諺かな。美人の眉にたとへたる蛾といふ虫もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をとりて我子となす、老の行衛をかゝらんとにもあらず。何を譲むとてかくはほね折るや。我に似よ〳〵とは、いかにをのが身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂するとは詩人の稱にして、歌にはさしもよまず。蜜をこぼして世のためとするはよし。只人目稀なる藥師堂に大きなる巣作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人にはにくまれじを。

娃は古今の序にかゝれてより、歌よみの

部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此物の事さらにも謗がたし。

蟬はたゞ五月晴に聞そめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼さかる頃は、人の汗しぼる心地す。されは初蝶とも初かはづともいふ事をきかず。此物ばかり初せみといはるゝこそ、大きなる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えずと、此もののうへは翁の一句に盡たりといふべし。

ほたるはたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびかひ草にすだく。五月の闇はたゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代にせられたるは、此ものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過て、夕は草に露をく頃ならん。つく〲ほうしといふせみは、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魄の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せんとす。待くれの歌によまれ、又は退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の始として、頼光をさへおびやかしたる、いとおそろし。さはいへ廢宅の荒たる軒に蟬の羽などかけ捨たるは、いさゝかあはれそふ折もあらんか。かれはかひ〲しく巣つくりてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、蜘とはいかでいふやらむ。

芋虫は腹たつものにたとへ、毛虫はむづかしき親仁の號とす。脊むし否むしは名のみして虫ならず。油むしといふは虫にありてにくまれず、人にありてきらはる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とりむしはたがために身をこがすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふむしはふ（ふ字衍ナラン）物ずきの謗となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ寶の名によばれて、玉むしはやさしく、こがね虫はいやし。

蟻は明くれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求てやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず。蝿は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に嚙るゝ蚤はたま〳〵にして、猿の手にさぐらるゝ虱は、のがるゝ事かたかるべし。

虱を千手觀音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるは梶原が異名なりや、けぢ〳〵が異名なりや、先後今はしりがたし。

蝸牛は只水に有べきものゝ、いかで草葉に遊ぶらん。家は持たれどもゆく先ゝを負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇蚯蚓の足なくてもあるくべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の瘦たるも、斧を持たるほこりより、その心いかつなり。人のうへにも此たぐひはあるべし。

蟹のあゆみにたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を、駕にのりて富士を詠ゆく人には似たり。

促織鈴虫くつわむしは、その音の似たるを以て名によべる。松むしの、その木にもよらで、いかでかく名を付たるならん。毛生ひむくつけき虫にも同じ名有て、松を枯し人にうとまる。一ト在所にふたりの八兵衛ありて、ひとりは後生をねがひ、ひとりは殺生を事とす。これ松むしのたぐひなるべし。

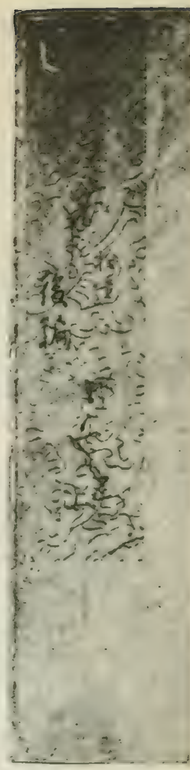
きり〳〵すのつゞりさせとは、人のために夜寒をおしへ、蓑にすむ虫は我からと、只身の上をなげくらんを、蓑虫の父よと呼は、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみこひて、などかは母をしたはざるらん。

蚊はにくむべき限ながら、さすが卯月の頃端居めづらしき夕べ、はじめてほのかにきゝたらむ、又は長月の比ちからなくのこりたるは、さびしきかたもあり。蚊屋釣たる家のさま、蚊やり焼里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團(うちは)の隙なかりけむ。

むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、花に愛着せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる虫にかなるらん。花にくるひ月にうかれて、更行燈の影をしたひ、なら茶の匂ひに音を啼らんこそ哀なるべけれ。

この稿篇は、也有翁寛保のすゑより寶曆のはじめの頃までの遺稿をもて抄出す。

未偉　い林



うづら衣　後編　上

歎老辭

芭蕉翁は五十一にて世をさり給ひ、作文に名を得し難波の西鶴も五十二にて一期を終り、見過しにけり末二年の辭世を殘せり。わが虚弱多病なる、それらの年もかぞへこして、今年は五十三の秋も立ぬ。爲賴の中納言の若き人〻の逃かくれければ、いづくにか身をばよせましとよみて歎かれけんも、やゝ思ひしる身とはなれりけり。さればうき世に立交らんとすれば、なきが多くもなりゆきて、松も昔の友にはあらず。たま〳〵一座につらなりて、若き人〻にもいやがられじと、心かろくうちふるまへども、耳うとくなれば咄も間違ひ、たとへ聞ゆるさゝやきも、當時のはやり詞をしらねば、それは何事何ゆへぞと、根問葉問をむづかしがりて、枕相撲も拳酒も、さはぎは次へ遠ざかれば、奥の間に只一人火燵蒲團の島守となりて、おむかひがまいりましたと、とはぬに告る人にも、忝しと禮はいへども、何のかたじけなき事かあらむ。六十の髭を墨にそめて北國の軍に向ひ、五十の顏におしろいして三ケの津の舞臺にまじはるも、いづれか老を歎かずやある。歌も淨るりもおとし咄も、昔は今のにまさりしものをと、老人ごとに覺えたるは、をのが心の愚なり。物は次第に面白けれども、今のはわれが面白からぬにて、昔は我が面白かりしなり。しかれば人にもうとまれず、我も心のたのしむべき身のをき所もやと思ひめぐらすに、わが身の老を忘れざれば、しばらくも心たのしまず。わが身の老を忘るれば、例の人にはいやがられて、あるはにげなき酒色の上にあやまちをも取出てん。されば老はわするべし。又老は忘るべからず。二つの境まことに得がたしや。今もし蓬萊の店をさがさんに、不老の藥はうり切たり、不死の藥ばかりありといはゞ、たとへ一錢に十袋うるとも、不老をはなれて何かせん。不死はなくとも不老あらば、十日なりとも足ぬべし。神仙不死何事をかなす。たゞ秋風に向て感慨多からむと、薊子訓をそしりしもさる事ぞかし。ねがはくば人はよ

きほどのしまひあらばや。衆好がいひし四十たらずの物ずきは、なべてのうへには早過たり。かの稀なりといひし七十まではいかゞあるべき。こゝにいさゝかわが物ずきをいはゞ、あたり隣の耳にやかゝらん。とても願のとゞくまじきには、不用の長談議、いはぬはいふにまさらんをと、此論こゝに筆を拭ぬ。

四藝賦

琴棊書畫は異國の沙汰なるべく、こゝにあはぬ評ながら、しばらく名をかりて論ぜむに、琴はことさら品の異なるやらむ。かしこにはもつぱら隠者閑人のもてあそびにして、十三絃だに所せきに、二十五絃のいそがしきも、いかなる嶺の松風にやかよひけん。さるも無絃の琴を撫て意ありとたのしみけんは、こゝにも上戸の樽のせんを嗅で、月みたる咄には似たりけり。棊にすける人ほどうらやましきはなし。さしむかひたる内の無念想なる、士は金門に腰を折しけさのつかれを忘るれば、貧僧はあすの米櫃のあてなき事を思はず。夏は入日の西に迫りて膝の上までさし入れども、たゞ地を造りはま巻盡してぞ、始て蚊の口のかゆさを覚へ、菓子盆に蟻の付たるを驚く。冬はみづはなの露落て無常を死石の上に観じ、火燵蒲團に吸物はいつの間にかはこぼれけん。たゞかの蟬といふものゝ、をのれなく音にのみ心を入れ、それをねらふものはうしろに鳥の窺ふをしらぬに似たり。その樵夫の斧朽て、七世の孫にあひし時、久しき年月の別ながら、咄すべき事のひとつもなかりけんは、大きなる損といふべし。我もとより不機根にて、此樂をしらざるはふかき恨なり。さて手跡のつたなからぬは、ことにあらまほしきわざなり。夫も上品の人は詩歌文章にのみ筆を染め、書翰もいやしからぬ文躰に、万世の後ち名はとゞむべし。品下りたる人は日用の事ゝにも用ゆれば、或は文庫の覚書に何匁何分何厘、此錢何百何十文と定家やぶの筆法もいとおしく、又は此暮利分ばかりに御了簡偏に頼み奉ると、文徴明が跡をのこすもにげなきわざにして、心の外なる事ながら、世わたるならひいかゞはせむ。悪筆兵衛が出るまゝ口に、手は只よめ安きこそ要なるべけれ、たとへ能筆が書たりとて、一字が二字の用もせず、といひたるは、ことはりに似て無下に覚しか。そも又讃ばかり位の品ゝなるはなし。能書のうへはさらにもいはず、鳥羽繪の男は痩てさびしく、大津繪の若衆は肥て哀なり。うき世繪は又平に始り、菱川に定り、今西川に盡たるといふべし。英蝶屋の屏風には、けしか牡丹かしれぬ花

咲て、人より大きなる雞の、屋のむねにとまりたるこそ目さむるわざなれ。又は藪寺のふすまには、遠水に波高く、遠人の目鼻あざやかに、帆かけ舟に乘て跡へ走る、これらも繪にあらずとはいはざるべし。俳諧師の繪は上手下手の沙汰なしとて、翁も跡をのこし給へば、我も我流の筆ぬらしそめて、破れ鍋の畫賛をかけば、綴蓋の望みてありて、こゝかしこにちりぼふ。あはれ耻しらぬわざながら、はゞからず書ちらすはよしと、吉田の法師を無理なる荷擔人にして、此年頃硯の海にも遊ぶ事にぞありける。

隱居辨

箕山の月は高うして望べからず、五湖の水も深うして窺がたし。垣は紫陌に隣れども、大隱の市にもへだゝり、菴は黃稻の陰にまじはれども、小隱の陵藪よりも淺し。されば昔の隱者を思ふに、德ある人の世にしたふをむづかしがり、仇ある人の敵を恐れて、さてこそ名をもかへ、かたちをも忍びけめ。德もなく仇もなき人の、たとへ四條五條に金の看板を出したりとも、問べきよしの人こそとはめ、さもなき人は見むきもせざらむ。おさなき遊びのかくれんぼも、尋る鬼のあればこそあれ。さるをうき世にかくれ顏なるぞ、中〳〵はづかしき心地ぞする。いでや世に隱居の二字至からむと、みそかにちかき有明の月さしこめて、門は葎に閉させ、かりにも人にあはじ〳〵とひそまりたらむ。さは見事なる隱居ぶりかな。是を社[三]見ならへと、出すりこ木なる隱居をはぢしめて、人もよしとはほむるならむ。それは後世にもかたぶきたる人の、あが佛をこらへ力にして、たま〳〵たへてもとげぬべし。さもなくて命つれなき人は、朝ね晝寢のしづかづくしにも飽けば、次第にさびしくくらし侘て、かれはかくいふゆかりあり、これは久しき友なればと、おとづれかはすほどに野中の清水にことよせて、そろ〳〵昔をとりかへし、始には似ぬ人もあるべし。花山の上皇もかゝるうき名には立せ給ひたりとか。さるは北山の神靈にもいかられ、俗の諺にはよりがもどけたともいふなりけり。されば物の始にぞ、ゆく末はよく思ひはかるべき事にこそ。そもや我身の上をいはゞ、かしこき陰を賴奉り、官路に立しも久しけれど、もとより毒にも藥にもならねば、人にあかれし身とも覺えず、雨露のめぐみ深くして、すなをなる國に鬼もなければ、世に人に我もあかず。只病になやまされ、今は弓も引がたく、馬にも乘がたく、さてもものゝふの名にかずまへられんは、南郭が竽を吹けん此身のうへのは

づかしければ、老と病を一荷にして、うき世の關はのがれ出たるなり。しかれば誰をおそれ何を耻て、さのみは逃もかくれもすべき。さりとて又貴顯の門松をくゞり、桃に菖蒲に袖ふりはへて、こゝの嫁入かしこの法事にもつらならんは、いと見ぐるしう　官事をさへ辭したれば、いかでかは。こゝにうき世の店をしまへば、まことはたゞ遁世者とこそいふべけれ。さるを押付て隱居ゝゝとは、いたみ入たる名目ながら、是非なき世の通稱となりて、行灯挑灯の取ちがへも多勢に無勢叶はねば、益なき事はあらためぬをよしとこそ。過し頃いづくの程にか、市中の門柱に隱居某と書ける家札をみて、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、隱居したる悦とて、したしき限はいふに及ばず、うとき人ゝにまでとはれて、門前しばらく市めけば、きのふのうき世よりやかましく、それ又謝せずば有べからずとて、家を尋ね門たゝかせて、物まうに人を驚かし、隱居の禮にいそがしきは、おかしかりける世のさまかな。やいとけに食傷して煩ふ人のたぐひなるべし。

四角なる浮世の蚊屋はしまひけり

剃髪辨

すべて天地の間その理ありて姿あるべく、すがたありて後名はあるべし。いでや世をのがれてうき世の名をあらためんには、その姿まづあらざらむや。今やさかやきの世間をやめては、神儒の束髪にや似せん、釋氏の剃髪にやならはんと、模稜の手に思へるも、かりそめながら生涯の仕上なれば、一大事の分別にはありけり。さるも心にまなぶ事なく、かの三教のよしあしもわかたねば、只あけくれの自由を思ふに、かれは夏あつくこれは冬寒し。けに楊州の鶴はあたまにだになかりけり。これを吉田の法師にとへば、冬はいかなる所にもすまる。あつき頃わろき住居はたへがたしとぞ。是こそ此爲の師なりけれ。誠に頭巾といふものあらざらむや。手水行水にさはるものなく、襟に垢しみず枕に油つかざらむは、心も共に清かるべし。夏をむねとこそと思ひ定て、つるに剃にはきはまりぬ。されば遍昭がよみけんたらちねも、今は世におはさねども、官路の險難をしのぎ盡し、功こそならね、名こそとげね、ほまれなきは耻なきにかへて、今此老の身しりぞき、浮世の塵を剃すつべきは、いかでうれしとおぼさゞらんや。かゝれとてこそ撫給ひけめと、こゝにうたがふ心ちなし。されども儒者の顏付をうかゞへば、あまり機嫌のよからぬは、父母の遺體をとの咎めなるべし。さ

るは一朝の怒に喧嘩を起し、二世の契に心中をくはだて、我とわが身を愛せざる無分別をするなどの道理にさとす教なるべし。それを理屈の十露盤にかけて、分厘までをはじき詰れば、爪も剪がたく髭もぬきがたく、鼻毛も蜻蛉のうき名をつなぎて、かへつて親をもはづかしめぬべし。その上わが双親世にましませし時、老後は共に剃髪の望もおはせしかども、その世にいさゝか障る事ありて、いまだ心に任せ給はざりし事、我よくこれをしる故に、かつはかの遺髻を以て寸志を繼ともいはゞいふべし。そもまた釋門に此姿の始る事、深き心はいざしらねども、先はうき世のかざりともなれば、これも煩惱の端ぞと拂ひすてゝ、もつぱら色のふせぎにもやあらむ。されども今は醫者も連歌師も剃こぼして、妻帶はあたまにしもよらず。まして妻こもれる武藏野の八貫町には、四部の御弟子の比丘尼をあつめて、比丘も優婆塞も入交れば、頭巾は紫の色ならねど、吉原の朱をも奪んとす。しかれば佛もあたまばかりの目利にて、御弟子帳には書のせ給ふまじ。ましてわがあたま、道にいらねば入道ともいひがたく、人を教ねば法師にもあらず。禪門でもなし、坊主にてもなし。さはいへ世のならひにて字義にはかゝはらず、湯茶ばかりを沸せども、その名は藥鑵とよばれ、藥ばかりに用るも、茶碗は茶わんの名をのがれず。されば容のおなじき故に、妖物の見こしも、もだ書のヘマムシも、蛸も、入道の號あれば、我を坊主とも法師とも、よばゞよぶ人に隨べし。

剃てこそ月にまことの影法師

自名づく說

遁世の姿すでに定りぬ。さてはうき世の名にもあらじ。さるべき二字にあらためばやと、名を思ひ字をゑらむに、今は父母も世にまさず、官路もいとひ離れたれば、忠孝の字義をとらむも、跡のまつりとやいふべからむ。よし又四書古文の拔書も、あまねく人の取盡し、まして歸去來のことばなど、あらゆる隱者のむしり取て、骨ばかりに喰ちらしたる。さらば博識の門に乞はゞ、意味深長の二字もなどあらざるべき。されども夫は耳遠ければ、名はいかにと問聞む人の、とみに心得ぬ顏の口おしく、ほね折の詮なき心地すれば、これは其書のたが言なりなど、一人〳〵に講釋せんは、いとむづかしかりぬべし。菩提の道も疎ければ、西念淨運にても有べからず。されば世の人のうへをみるに、金藏といふも貧に責られ、万吉も不幸はのがれず。玉といふ下女光もなく、かるとつけても尻重し。名はそ

の人によらぬものかも。よしさらばたゞ調市走女も覺よく、嬶も娘もかきやすからむをと、此日人のもとへ消息の筆にまかせて、たゞ暮水とは書はじめける。それだに人の味ひて、これは何の心にて、それは此語によるならむと、蛇に足をそへ、摺小木に耳をもはやして、自然とふかき字義にも叶はゞ、それも又おかしかりぬべし。

へちまとはへちまに似たで糸瓜哉

鍾馗畫讃

豆をうたぬ家もなし
いづこに鬼をたづぬらん
薬人摘の幟にかゝれて
あやめふく軒にひらめく
疫神除の板に押れて
ひいらぎの門をまもる
其団と摺小木と
つゐにいまだ朝を見ず

雪請序

ことし前津の里に世をのがれて、秋の月は心ゆくばかり詠すごしぬ。山野の眺望くまなきには、雪のけしきのことによからむと、我も思ひ人もおもへるにや、雪の朝は必とひ來んといひし人ゝもあれども、その日の火燵のはなれがたくば、林下なんぞかつて一人を見むといひし詩のたぐひならむと、かねてまたるゝ思ひもなし。木の葉もしぐれもふり盡して、霜ふり月の半すぐれども、けしきばかりにのみうち散て、蓑笠に見むまでの雪は猶つれなし。されば昔より雨を請ふためしはありて、神泉苑の四ケ度の祈は、貴僧高僧の法力をあらそひ、小町が歌は兒女の諺にのみつたへて、あめが下の理屈にとがめ、能因の天河は古書にもしるして、そのことさだかなり。雨は五穀の爲ながら、雪も豊年の瑞とこそきけ。そもや雨を降らす神あらば、雪ふらす神などかなからむ。歌に感應あらば俳諧にも感なからむや。いでやおほけなくも鳥羽院のおさなくおはして、ふれ〳〵粉雪の御いのりをためしにたのみ奉り、名におふ富士のいたゞきも一望の內にあれば、半掃菴に雪乞をせばや。年頃の俳諧もか樣の時の爲にこそあれ。かた〳〵も力をそへて給はりゆへと、ことには不元庵の老和尚を先達として、好事の連衆をかたらひ、丹誠を抽て一夜火燵の壇をかざり、雪請の一卷をぞ催しける。

雪の願ひ水にはなしそ夕あらし

贈説

世を捨たる法師の、物くるゝ人をよき友にかぞへたるは、にげなき心地するに、

けに思へば其庵に一鉢のまうけも咳氣にさへられ、あつものゝ藜も多かれては、物くるゝ友のことにうれしき日もありけるか。もしは又くるゝものをよろこばねども、くるゝ心の慾なきをよろこぶや。我はかく世は捨たれど、かしこきめぐみの祿を世ゝにして、そのかげにやしなはるれば、もとより凍餒の患はいはず。たゞ虫干も煤はきも世話なからむ事を思ふには、無用のものをたくはへず、うちある調度も事足るを限として、只一用に物の多からむをいとひ、一物にして多用ならむを思ふに、抄子は定規にならざれども、煙草箱は枕となるべく、頭巾に酒は漉さずとも、火燵のやぐらは足代に足りぬべし。そも一物にして多用の省略は、天地開闢よりその沙汰あり。今見よ鼻は呼吸をかよはし、物嗅ぐ用を兼ね、口は飲食をなしながら言語の用をかねたり。天もし人を尊からしめんとて、二つの鼻をあたへ、目を三つ四つも付たらば、因果物語にのせられて、開帳芝居の見せ物となるべし。これ天の長物をとらざる所なり。又は鼻ばしらを眼鏡の臺とし、耳を笠紐のたよりとする類は、天の理に則つて聖人是をおしゆるもの歟。その中に臍といふものゝ、蓬生のかげにかくれて、衣のかざりともならず、何の益なき道具にして、久しく不審の晴ざりしが、今此身にしてはじめてしりぬ、慥に天地開闢の時、餘義なきかたよりの貫物なるべし。その理いかにといはんに、我かく物の不用をいとふに、飲でしまひ喰てしまひ、又は遣ひてのこらぬ料紙やふのものは、うれしき折もあらんが、さもなき調度のたぐひ、是は仕出しの風流なり、これは細工の面白しなどいひて、人のくるゝものあるにのぞみて、とらざれば心を破る。さすがにうれしき顔してもらへば、一つ二つと物のつもる、いとほゐならず思へどもいかゞはせむ。こゝに世のためしを思へば、むかし西行の鎌倉にとゞめられて、銀の猫を給りしを、やがて門前の童にうちくれてさりしとぞ。されば其人の身を思ふに、何ぞ王侯にも將軍にもへつらふ心あらむや。しかるを猫はいらぬともいひがたくて、其座は取ていたゞきければこそ門前までは携へ出けめ。是をもつて彼を思ふに、我はまして斗擻の身にもあらず、わが子の祿に命をかくれば、さすがに人の心をもやぶりがたし。是たゞかの臍と思へるなりけり。豈臍此理にあらざらむや。

弔ニ不幸ニ文　闇六林

君きけや、鳥にあらざれば鳥の心をしらず、魚ならざれば魚の心をしらず。君愛

女を失ひて貫之が涙袖を浸し、長嘯のいたみ襟に滿つ。さだめて知る、とぶらふ人〻の少物わきまへたるかぎりは、例の天命を說き、哀むでやぶらずなど、しゐて忘憂の物をすゝめ、只あきらめよ忘れよ、と君がもとよりしりたる事をくり言して、うき世の義理の蒸籠を贈り、あるは樹木の菓子籠に長口上をもつらね添らん。いかで饅頭に涙かはかん。何ぞ栗柿に悲をまぎれん。果は出入のうばかゝが懷を高うして、もらひ泣とは是をしもいふにや。是たゞ鳥にして魚を弔ふなり。我も近き頃十九の愛女を先たてり。されば君が心我よくしりぬ。君又はじめて我を察すべし。我かの魚にして魚をいさむ。只なげき給へ〳〵。けふも歎きあすもなげき、なげき〳〵てゆくまゝに、なげきの森に秋ふけては、柞の色のうすきをも覺らむ。七〻の日の法事には万行の涙千行に減じ、百ケ日の墓參には百行やゝ十行にしてやむ。まして一周忌のかい餅は、その日の空の腸は斷てども、砂糖つけて最一つともいふべし。されども節の膳をならべ、桃に雛の祝ひ日には、あらましかばの怨は盡ず。盆の踊の手拍子は人しれぬ胸にこたへて、此かなしみは一生の病なりとしり給へ。されば子の親をうしなひてこそ、手ふれし調度目にめでし草木までも、長くとゞめてそこなはず、是を見かれにつけて、したふ心を忘れじとはするなれ。今君が歎くたぐひ、世の倒の別なれば、書のこせし筆の跡も鬼となりて引やり捨、手なれしものも火にうちくべて、兒女の態をなし給ひそ。かくして早く住吉の岸なる草をもとめむにはしかず。噫我今先達の顏して君をいさむ。君また先達の顏して　たがあすの身の上をかいさむべき。只あだし野ゝ草のもと末、さだめなき露こそかなしけれ。

　跡の鳫先へとはたが秋のそら

賛㆘ス補㆓ニ破㆑レ茶碗㆒ヲ辭㆖ヲ

大極の氣二つに破れて陰陽となる。その陰陽の叉あふからに、夫婦いもせの契ともなれり。おもしろし、此茶碗のまどかに望月のくまなきのみかはと、一たびわれて有明の盈虛を示し、會者定離を打かへして、離たるものゝ又あふたるぞ、佛も我を折給ふべき。嚮に此事に文あらむ事を我に求む。我田先生が言にきけり、騏は壯なる時一日に千里をはしる、老ては駑馬も先だつとか。まして駑馬の老たるもの、何のいふ事をかしらむ。そも〳〵是より北にあたつて護花關あり、そこに一人の好事あり、かしこに乞て求むべし。あなかしこ、うたがふ事なかれ。只たのめ〳〵と、あらたに告て我は火燧の山に

かくれぬ。かくてかしこに共文成れり。始の茶碗のあやまちに懲りて、いかにもそつと蔵て見るに、果して金玉の響あり。噫此茶碗のわれずば此文あらじを。あざ丸の太刀蟬折の笛も、その瑕ありて瑕ならず、繼目をいたむ事なかるべし。嫦娥が天上の藥はいさしらず、人間に石うるしといふものなからむや。

はなれたら繼げはなれたらつけ幾度も
破れ世中にあらむかぎりは

贈二分平菴一文

平易を以てわが分とす。たれか是をねがはざらむ。もと此菴只はなれ家にして、呼て餘盃をつくさしむべき垣越の翁もなかりしが、あるじの德の孤ならぬにや、隣めく軒のこゝかしこに建ならびたるは、よしやとみるらん、むづかしとや思ふ。いざあるじの心はしらず。されど東面はもとのまゝにして、わが庵とても月まつ嶺はおなじ方ながら、廣寒宮への道のりは一町ばかりも近かるべし。こゝに一句をとゞめよと乞はるゝに、四時の多景何れをかわきていふべき。されど庵ちかきよしみもあれば、つれなくいなびがたく、只眼前の姿をいふ。

繪の中にうごくものあり

として、下五もじに掛はづしの自由あり。春は田にし取とすべし。夏は早苗取、秋は木わた取、冬は大根引、とをきかへて見よ。一物四用にはたらきあれば、句のつたなきをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして、おくり物とはなせりけり。

臍頌

臍を不用の物なりとは、我も誘りし人の數なり。されば他の一寸は見へて、わが一尺は見へずとか。世にやくなきものくらべせむには、まづ我こそは先なるべけれ。そもかの臍は物やは食ふ。素餐の誘もなし。さらば物やはいふ。三緘の警にも及ばず。わが世にありて物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論ぜば、男の乳ばかりこそ、いかなる益のあるとも見えねど、今更これらをとり拂はゞ、腹は渾沌王の面かげにして、世にすけなきものなるべし。いでかの臍は頓死急症のせんかたなきにも、まづとて是に灸する時は、泉下の首途を留るためしも多し。扨こそ腹のさしも草、只たのめともよみ給ひけん。たとへ項羽が山を拔く力も、此垢を取れば忽に落つとぞ。痛悔臍をかむとは漢文の古語にして、我朝に人を嘲りては臍が笑ふともいへりけり。しかるにつましき隱居ありて、臍がねといふを溜られしより、天津空の鳴神もこのもし

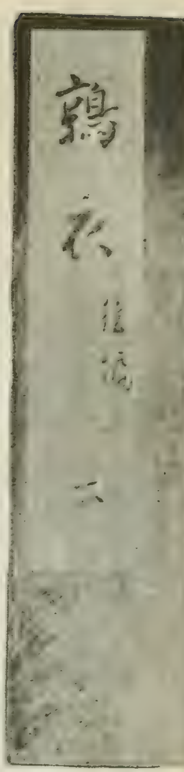
がりて、いかで是抓むとし給ふより、女ご（ご字衍ナラン）わらべの氣づかふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこへたり。むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣年の暮　と懷舊の袖をぬらさせしは、耳も及ばじ鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我身を何にたとへん。されば臍はわが下に立む事かたくとも、われも又臍の下といはんは、何とやらむ場所よからず。かれにならはむとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし。しかれば上下の品定はやめて、けふより只かれをそしるまじとぞ。

友とせむ臍物いはゞ秋の暮

望嶽樓記

樓成れり。成りて望嶽とよぶ事はいかに。名高き富士にむかへばならし。そも此樓の眺望、東南北にひらけたれば、かの望嶽の一つならず。千里吟畔の内、田あり野あり村落あり。神社佛閣のこるものなく、畫に似て畫には及べからず。龍興寺に龍吟じて花まづ雨を催し、猿投（サナゲ）山の猿の手に雲なき月を擧ぐ。下戸は餅にもつく名とて、蓬が島に頭をめぐらせば、上戸は酒のゆかりを思ひて、麹が池に涎を流すべし。もとより主翁文章に富れば、こゝに來り遊ぶ客、皆一時の英才にして、新詩百篇瞬くうちになり、雅談一日あく（欠）びをしらず。抑や好文の花もこゝに向ひて色香を増し、天津空の德星もこゝを會所とは定むるならん。玉も錦も事かくまじきを、あるじ詩歌の遊びに餘りて、狂夫に俳語の文を請へり。其心いかにぞや。さては知んぬ、砥石を拾ひて玉を琢き、あく（灰汁）をもとめて錦を浣はむの爲か。それだにも不才なる、何を以て砥にあて、何を言てか灰汁に代む。されども我賀する事あり。世に祭の棧舗の、幕毛氈に餝れども、わづかに槿花一日の榮をなすは、其見るものゝ動いて過ればなり。此理によれば、此樓はたしかに松樹千年の久しきを期すべし。さるはその見るものゝ動かずして、しかも時しらぬ名山なればなり。しかればあるじも老をしらず、共に幾代の齡をたもち、卒には此樓に簫を吹て、鳳に駕して登仙せむとにや。我居も幸にこゝに近し。もし長壽の契あらば、木のは衣の着替を負ひて、其日の供にははづるべからずとぞ。

月花に配れ富士見る目の餘り



うづら衣　後編　下

編笠賛

迹を深山の雲にくらまし、身を蓬生の陰に隠しても、浮世より通ふ道あれば、顔しる人にも逢はでやあらむ。蓬萊の島なる鬼の持たる寳はしらず、昔靑明が隱形の祕術を傳へて、世に編笠といふものあり。是を戴いて出る時は、車紛ゝたる市中をあるけども人我をしらず。まして朱雀の夕ぐれ日本堤の曉、いかなるやごとなき人かもしらず。鳥追ひ節季ゆの世わたり、謠うたひよみ賣も、其人の果ともみしられば、貴賤通用の寳にして、今泰平の世中には、妙珍きたひの兜より、其德はるかに優れりとせむ。しかれども女はかぶらず、出家には似合ず、みさぶらひみかさとよみしは此物ならず。笠がよく似たとうたはれし淸十郞が俤も、是にてはあらざりけり。もとより旅の具ならねば、順禮ぬけ參りの筆にもよごされざるを、茶屋の燒印は平大納言のしわざ歟。そもや印籠巾着脇差のたぐひは、世にある時に愛せられて、翠帳紅閨の內までも腰をはなれぬ寵あれども、金銀の盡るに隨ひて、つれなくも主を見放して、いづれか漂泊の落目を見つぎたるや。只此物ばかり賴母しくも恩を忘れず、手拍編笠と謗にもいはれて、破れ帋衣の先途をも見屆るにぞ、疾風勁草をしり、松の凋むにをくるゝ操も此時にいちじるし。されども異國には此寳をもたざる故に、豫讓は顏を隱しかねて、漆をさして癩となり。伯休は藥を賣れども、女わらべに見付られたり。たうとしや、我朝には此ものゝ一蓋あらば、大隱の德あらずとも安く朝市に隱るべしとぞ。

編笠の餓隱者や年の市

幽靈説

鬼一口のいきほひもなく、妖物のやつしも叶はず、幽靈はそもいかなる者ぞ。其姿を寫し繪にみれば、三角なる紙をいただき、廣袖のゆかたに竹杖をつき、膝より下はあるもありないもあり。あゝら閨浮戀しやと、子細らしきは雄幽靈なり。もうし〳〵とよびかけたるは雌幽靈とし

ゐべし。多くは行脚の僧に近よりて布施なしの經を賴み、或は剛なる侍を見かけて無心をいふもたま〳〵なり。何の用もなきにあらはれて、女わらべをおどしたがるは、木のは幽靈のわざなるべし。そちや人死て幽靈の自由あらば、佛果を得ぬ亡者共は、我も〳〵と立かへり來て、訪ひ弔ひのあつらへは勿論にして、言殘したる巾着のこまがね、隣の親仁の無沙汰して居る取かへ錢の事までを告て、妄執の雲は拂ふべきを、あだし野の露消へぬ日もなき世中に、幽靈の至つて稀なるは、むざとはおこさぬあの世の法度なる歟。されば初秋の盆會には、みそ萩灯籠に座敷をかざり、かはらけ麻木の膳だてに、索麪團子の献立をまうけて、家〻に招請すれば、表門より手を引つれてはれやかに來たらむも、何の遠慮かあるべきに、其俤も見及ばぬは、迎ひ火の馳走過て、かゞはゆしと思へるにや、踊ゆかたの伊達染の中へ、經かたびらを耻るにや。そも〳〵舟岡鳥邊野は幽靈の名所なれども、いづくに住居の穴もみえず、はいり所を見た者もなし。しかれば幽靈を出る〳〵といふは、世俗のとなへあやまりなり。出るといふは芝居の幽靈に限る事なりと、ある故實者の申しき。

笠もたで幽靈消るしぐれ哉

杉の門序

李眞は金の龜を解き、祐乘は銅の猿を彫て酒手に宛し風流は傳ふれども、酒屋はいづこの誰にてか有けん、いさしら雲の跡だになきを、ひとりかしこき聖の歌に、又六が名をしられたゐ酒屋冥加こそ有がたけれ。さるから其名をしたひ繼て、こゝに酒屋の新見世あり。いでかの五文字のたうとさには、にくしあるじの高ぶりて、極樂の出店とも思へるならん、姿も木の端の法師にぞ有ける。世に此得意を附むとて、撰集一部を思ひ立事あり。只是酒腸の有なしを問はず、月花の方人を求るとぞ。さればこそ此庵の夕顏に隣れども、碓（カラウス）のおとも響かず、酒桶の一つもあらず、壚に文君が色もかざらず、お菊と呼ぶ娘もなし。人見よや、悟れる目には七寶の臺もかゞやかず、菩薩の音樂も聞かざれども、杉立る門の極樂となれば、枕頭に錢をかけて迷ふ人は迷ひもすらむ。只已身の彌陀唯心の上戸と悟らば、貴らぬ酒屋の酒にも醉ふべしとぞ。

月花の下戸に案山子や酒ばやし

與二時節庵一文

尾城の西南に把茅の一廬あり。そこに住ける八龜法師、此頃思ひ立る事ありて、みづから其意を說て曰、今世のさまをみ

るに、菩提に心有ほどの人、家あれば必佛あり。我も其道をたのまざるにはあらねど、咫尺に淨刹の多くて、朝夕數十歩を勞せずして、佛に向ひまいらせん事、いと安ければ、十方億土の遠きをしらず。まして己身の佛と聞けば、庵に佛像はなくてもあらなん。されば此ならはしの古ければ、只芭蕉翁の像一躰を刻て、新に庵の本尊とす。そも我生涯、あけくれ遊ぶ所、たうとむ所、偏に蕉門の俳諧なればなり。狂言綺語もをのづから讃佛乘の因とならば、わけのぼる道はかはるとも、同じ高ねの月も見ざらめや。我ももと商家に産れて、昔は十月廿日ごとに三郎殿を祭りまいらせしが、今其家を出、世をのがれたる身に、かの御神には申べき事なし。同じ時雨の十二日は、殊に忘るまじき諱忌なれば、有し世の鯛の奢を、なら茶田樂のさびにかへて、是を一年の會日と定め、同志の友をかたらひて一卷の祭をなさんとなり。願はくば尾城下に此道の光いやましにかゝげそへて、祭奠たへず取傳ふべくば、わが此報謝の志も長く後の世に殘すべしとぞ。かの庵主がいふ所、是の如く我聞き。同調の志げにとうなづきあふまゝに、夫を筆にうつしてと庵主が請ふに任せて、記して贈る事しかり。

盆石記

盆石あり、江の島と名づく。我もと聞ける事あり。虎の怖しき物がたり仕出たるに、其座にむかし虎に遇ける人ありて、實に其人のみ色を變じたりとぞ。我此石に對し此名を聞に、ことに戀ゝとしてなつかしきは、少壯の頃かの島に遊ぶ事ふた度有て、今も絶境の忘がたき故ならし。そもや此石の容をみるに、わづか尺ばかりにして、峯聳へ谷邃りて、裾にことさら一つの巖穴あり。是もつばら此名のよる所也。主人一語の記を請はる。あるは巨靈が手に擘き持來れるか、壺公が術に地を縮たりなどいはんも、今は文人のいひふるしたる糟粕なり。思ふに此地は勝槩の名あるのみならず、妙音天の迹たれませし靈場なれば、ゑの嶋の繪にかくとも筆はえも及ばじとて、十五童子の手を勞して、かくは佛を石に削りなし、風騷の人の手に傳ふるならん。主人もとより風雅に好けり。是を文房の座右に愛すべくば、詩に和歌に俳諧に、只知んぬ、神助をのづからむなしからざる事を。

波すゞし江の島うかぶ青疊

悼二子禮一文

若くて十人の友を失ひたらむも、たとへば髮のぬけたるごとく、日あらば又生ひ

揃ひぬべし。かなしき哉、老て一人の友の闕たるは、歯の落たるがごとく、ふたゝび生ひ出るたのしみなし。今かく歎くは何故ぞ。久しくしれる子禮翁、此睦月の廿日あまり身まかりぬ。此老一たび仕官のほだしを遁れてより殘生を風雅に寄せ、其道の友に交れるにも聊世の是非を論ぜず。かりにも人の長短をいはず。よく知る事も知らざるが如く、知らざる事に下問を耻ず。有がたき隱者の鑑なりと、知るとしる人に稱歎せられしかば、今や世の惜めるも尋常に過たり。まして同じ老の身の恨、一句はわづかに其かたはしをいふのみ。

魂はかり秋來む雁のうきわかれ

六十齢說

上壽は百歳、中壽は八十、下壽は六十とかや。蒲柳多病の身の、いかで六十の齢に至り、かの壽の數にはつらなりけん。けふは長月の四日、我生れたる日なりけり。世の人の賀とてもてさはぐは此日なり。妹あり、妻あり、男女の子どもあり。かれらが心にはうれしともめでたしとも思はゞ思ひもすらめ、只犬馬の年老たるにこそあれ。もしはかなたこなたに詩を乞ひ、和歌もとめなどして世にしられ顔なる、我に於てはいと耻かし。必音なせそとかねていましめて、さる事せず。けにや古人の耻多しといひけん、我は愚に知らずとも、人はかぞへても笑ふらんを。

六十てふ身や夫だけのはぢ紅葉

夜着頌

まくらといへる和訓はいかなる故ならむ。蒲團とは字義いとむづかし。夜る着る故に夜着といふは、五尺の童子も義解に及ばず。媚を求めぬ自然の名にして、俳諧の正風とても是を鑑とはいふべかりける。此物　下ざまに在ては蚊屋と矛盾の中にて、雁と燕の行かふ如く、多くは質屋へゆきかへるこそわびしきわざなれ。昔孫晨は是をうき瀬に流してより藁一つかねに冬を送り、我國の聖主は寒夜にぬがせ給へる有がたきためしも有を、空蟬のもぬけを恨しは以の外の不埒といはむ。鴛鴦のかたらひにはとめ木をくゆらせ、旅のかりねには順禮の虱をのこす。なべては此物冬の用にして、夏は必遠ざけらるるに、我は多病の枕低きをきらへば、夏も疊てよりかゝりとす。殊に此君なくてはと四時にかはらず愛する中より、聊發明する事あり。そも世に不用の用といふ事ありて、人に其心のさとしがたく、莊子が喩へていへるにも、地に入用は足二本をいるゝ所なれど、其餘を不用とて地を堀うがちなば、二本の足もはこぶ用な

からむ。其空地を全うするが不用の用といふものなりと。是も喩のさる事ながら、間ぢかく此理を知らむとせば、今此夜着の袖といふものを見るべし。手を通すべき用はなけれども、今不用とて是を闕なば、徳利子のすけなきに似るのみならず、是を左右に覆ふが故に手を働き、寝がへるにも自由のくつろぎとなり、をのづからの重しとなりて寒を防ぐの便となる事、鳥に翅のなくて叶はぬがごとし。されど人ゝ常に馴て是に心のつかざるべし。さればこよひも此夜着を引かぶりて蒲團よりあたゝかならば、不用の用をさとるべしと、そこの童子にをしへ侍る。

夢をのせて飛ぶ翅あり夜着の袖

與二舎螢子一文

酒よく人を浮べ、酒又人を覆す。是非庵の主がもと酒に耽るや、雪月花の興にもよらず。友あるにも飲み、友なきにも飲み、志學の始より四十の此頃に至るまで、腸は只沖の石のかはく間もなき生涯なれば、昔の人に思ひなぞらへて、ある時左螢の二字を戯れあたへしが、辛巳の秋重くなやみてより後いかなる時か來りけん、のまぬはのむに勝り、醉ざるは醉ふよりも面白き物をと、卅餘年の夢忽然とさめて、さしも世のそしり人の諫も蚊虻に聞捨しおのこの、壺を破り盞を碎きて、雫もいとふ下戸となりけるこそ目ざむる業なりけれ。此人の痛飲せしほど、下戸はさらなり、上戸仲間さへつぶやきて、かくては命もつゞくまじく、錢はた頓て盡なんと、うたてき事に思ひし人ゝ、且驚且賞して、是を賀してやまず。されば楓の青きより霜を經て染出せるは、二月の花よりも紅に、枝柿の澁きより甘きにかはれる味は、蜜砂糖に勝れるを思へば、生れながらの下戸に彌増て、もとの青きに戻るまじう、始の澁にかへるべからず。さらば其名の螢をも舎て、今より左に餅を持し、右に煎茶を甘なひて、再び昔の醉郷には頭をめぐらすべからずと、舎螢の二字に改て贈る事しかり。

贈二不及法師一文

でゞむしのなまじゐに家持て、螻蚯蚓にはうらやまれ貌なるも、行先ゝを負ありく苦しさは中ゝなきが勝るべし。不及法師が求えたる方丈の栖は、もとより樹下石上の身にほだされざる借屋といふものなりけり。落たる壁も雨もる軒も只家主のあつかへば、我手に勞する事をしらず。夕顔のゆふべにあけば、朝顔の朝は捨るに安し。況や津梁の大志あらば、しばし只神龍の雲待つほどのやどりにして、卒に地中の物にあらず。我知りぬ、我しりぬ。

心とめぬ安さはしらじ蝸牛

濯老井賦

瓜島に分ち得て早き二月の初物を賦すといひしは、華清の温泉なり。我に事たるとよみしは、はつかに山水の滴るならん。それは至尊の遊びに愛し、これは隱者の徒閑を助く。それにあらず、これにあらず。其二つの間に湧出せる濯老井なるものあり。これ布袋庵の名水にして、あるじはもつぱら蕉門の俳諧に遊ぶ人なり。天昔孝行の德によりて養老の水流出づ。はた風雅を感じて殊に此井の生ずるにかあらむ。あるじのこゝに樂むや、もとより其名にしおへる年立かへる若水はさらにして、夏は葛に汲て河朔の飲の渇を消し、秋はさやけき月をうかべ、雪の夜の茶を煮るにも氷を敲く手を勞せず。四時の幽趣、老のまさに至るをしらず。誠にしんぬ、濯老の名のむなしからざる事を。されば我聞、一たび貪泉を飲時は皆千金を懐とす。しからば此井の水を甘なふ人は、假令無風雅の腸なりとも、忽三石のなら茶を思ふべし。

岐岨賦 木曾 岐岨 古來共通用

信濃は吾が尾藩に隣り、朝もよひ岐岨の山は即封疆の内に入れり。そこに好事の巴笑なるおのこ有て、予が草廬に來るごとに其地の山川勝槩を話る。語り〳〵て後に請ふ事あり。其所ゝをつらねて賦を作れとぞ。されば、木曾は文武帝大寶二年始て此道を開きしより、今や西東兩都の通路にして、予も三度の往來せしかば、いざまだふみも見ずとはいふべからず。馬籠より妻籠の宿、三留野(ミトノ)は木曾家の舊居にて、もとは御殿と書けるとぞ。野尻須原・上松・福島は山中の一都會、則巴笑も爰にすめり。宮ノ越・藪原・風こよぐ楢井の里・贄川の宿まで十餘の驛亭、各家居つき〴〵敷、大名の旅ねには本陣の幕をも翻し、荷馬の鈴の聲夜る山を過て、今は椎の葉にもる不自由もなし。しかれども此山中に、覺束なくも呼子鳥の出女の色を置ざるは、是聊の傳授事にして、淫靡の風を恐れ給へる我邦昔よりの法令なり。されども宿の間ゝは深山幽谷の難所なれば、詩人は偏に蜀道の險に比し、斷腸三聲の猿を憐み、和歌には兼好法師が世を遁れし始、麻ぎぬの色の淺くてはやまじとよみしも、先此山中をこそしたひしか。俳諧猶此地をゆかしみ、玉味噌の木曾路とは吾翁の置初し枕詞なるをや。元より朝日將軍の興りし所、今のこゝもの城山あり。福島の興禪寺・宮の越の德恩寺に各その影像を留む。元服の松矢筵竹硯水兼遠の故宅、御料の森は光盛が陣

迹、樋口が谷は兼光が舊蹤。栖の小彌太は野上に生れ、今井が城址は野尻に遺る。山中の藥師は行基の作、臨川寺の寢覺の床は仙客の釣垂し所、奇石怪巖、人よくしれり。されども歌人の慕ふものは、掛其原御坂風越の峯。小野の瀧はすぐれたる飛泉なるを、戶難瀨布引にも名を爭はざるは都に遠き恨ならむ。男瀧女瀧の契はかはらずも、連理の松は今名のみなり。名にたつ烟の淺間山はこゝに境のへだゝれども、御嶽駒が嵩に不斷の雪を見せて、富士にも肩を並ぶべし。三歸りの翁の齡は死(シニ)嫌ひの人に羨れ、巴女が勇力は男勝りの高名をとゞむ。良材昔より伐れども盡ず、尾城に運びて万家の用とす。山を出して溜川の漲る岩間を下すには、筏工の術に馴て、曲乘踏かへしの自在を働く。他鄕の及ぶ所にあらず。神風や伊勢の宮木は湯舟澤より奉る例とぞ。福島には關門ありて、治る世にも備へ固く、鷄のそら音もゆるさゞるは、代々山村氏のあづかれる守りなり。南宮諏訪明神鎭(シヅメ)の明神八幡宮、禪刹には定勝寺長福寺兜の觀音岩戶の觀音。鐘の峯は相圖の古迹、根の井の峯は火ともしともいへり。彌生の浮石明星が岩釜が橋伊奈川橋滑川橋櫻澤の橋は是岐岨と松本を分てる堺なり。かゝる佳境に居て風雅に遊び、三石の奈良茶をしも十石峠の名に積らば、俳諧骨張の古狐となりて、鳥居峠を越すも難からじ。正月のことぶきは木曾雜煮の風俗あり。盆の遊びには木曾踊の風流あり。牧はなけれども馬市を賑はし、巢鷹は年々尾府より尋て東都へ獻ぜらる。橡(トチ)けやきの類多きが故に、器に製して近国に販ぎ、行客必是を求む。產する所干瓢岩茸、蕎麥は殊更佳名ありて、名月前の走を賞す。末川の蕪、風味又世に超たり。すべては雪深き故、春の花遲く、霜又早ければ、秋の紅葉は里に先だつ。抑信濃は十郡、此賦豈一國の牛をも盡さんや。只是木曾に屬する事を纔に描き筆につらぬ。

四州亭記

尾府の西に一亭あり、四州亭と名づく。さるは濃江勢の三つを兼て一望の內に入ればなり。其一望に入る事は、つらなれる山々の是をみすればなり。むかし妓を携し東山はしたはしからず、北山はまして移文のうき名もよしなしや。主人は今猶仕官の身にしあれば、悠然として見し南山も侶ならず。をのづから此亭のむかふ所、立つゞく西の山々にして、高低の容淡濃の色、よく眼を悅ばしむ。されば山を愛するに品々あり。仁者の樂むといひけんは、理屈なればこゝに論ぜず。深く吉野の奥を尋ねて身の隱れ家を求る者

は、偏に山の世に遠き寂寞を愛する者なり。笏を拄へ簾を挑て雪の朝雲の夕を憐むは、山の風景を愛する者にして、必しも靈運が屐に烟霞を攀て 山の寂寞を問ふにあらず。然ればいづれの賞心か勝らむ。思ふに夫三國一の名山とても、扇にたとへ烟を詠めて、只眺望の上にこそめでつれ、鹿のこまだらの雪ふみわけて富士詣とて登るなどは、必無風雅の人のなす事なり。山に入る人山にても猶うき時はいづ地行らんと、よみて擲りし人も有をや。此亭の愛する山は、かの風景を愛するにして、寂寞を愛する山にあらず。飽て枕に倚る時は山なく、起て檻に倚る時は山あり。自由は名畫を卷舒するに似たり。高き哉其趣、須彌の四州も下視すべし。已に能書の手に求て、三字を題して楷に掲ぐ。其餘狂詣を予に請はる。いでや其あるじは、知己の舊きといふのみならず、もとより同じ瓜の蔓に、茄子ならでも紫のゆかりあればや、我も其地は能く知るよしあり。鄙陋は愧るに堪たるも、辭すまじき故ありて、筆に信せて記して贈れり。

六林文集序

俳諧の世に行はる事や、今は縉紳の品高きより、あやしの柴ふる人までも、此道に遊ぶ事むべなるかな。ことしの春三韓の客東都に使する道すがら、我蓬左に宿りせしを、出會ける人ゝ扇をさし出し一筆を請けるに、韓人笑つて芭蕉のほ句書てあたへける。そもいづこにて學びしやらむ。ふりにし王仁が難波津のためし、ふたゝび俳諧に立かへりて今見けるめづらしさよ。かゝれば花に啼く鶯も、なら茶たく小鍋やほしからむ。水にすむ蛙も俳諧ゝゝとは鳴なるべし。しかるに世の俳人、ともかふも五七五はいふべし、只俳諧の文章は難し。風俗文選世に行はれて後、其体を學ぶ者の間ゝあるも、よくいふものは甚稀なり。古人の文とても其風体一つならず。祖翁の筆を評するはいとこちたきわざなれど、普に是をいふべくば、蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず。たとへばやごなき人の、編笠羽織にやつして花のもとの床几によりたれど、田樂團子に手をふれず、茶ばかり飲てやすらひたるが如し。其位に至らぬ人の及ぶ事やかたからん。東花坊支考が文は、はたらきて逼らず、おもしろくいひなぐりて情を深く含ませたり。たとへば諸藝に勝れたる當世男の、一座の興に三線とりて、相の手ばかり引捨たるがごとし。彦根の許六は物の委情をよくいひて、詞を飾るにおくれたれば、やゝ卑きに似たれども、さりとて雅趣のなきにあらず。

たとへば何がしの忠右衛門など、人に顔よく見しられて、駒下駄に尺八吹て大道に肩いからし、あはれかたはらに人なきがごとしといはん。其餘碌々たるは論に及ばず。只和漢の故事古語をしり、俗の諺にも入わたり、其影を用ひてあらはならず、長きを縮め堅きをこなして、俗ならず雅に過ず、主意よくもとすえを貫きたるをこそ、調ひたる文章とはいはめ。誠に難からざらめやは。我友護花閣の六林子が文章、章ごとに玉をつらね、錦を綴れり。我常に目を驚して三の舍を避るに至る。他はいさしるべからず、本州誰か其右に出む。されども音を知る人は稀に、巍々洋々もいたづらに、猫に小判の耳なければとて、包て光を世にあらはさず、只獨の樂とす。頃日みづから輯錄して予に小序を求らる。久しく金蘭の契ありて辭すまじきゆへながら、不才の臆何を探りてか是に當らむ。されども又思へる事あり。世に呉服を商ふ家の、繻子緞子紗綾縮紗(ちりめん)は、店に庫に滿々たれども、入口の暖簾には必木綿をこそ用れ。其店を尋る人の、まづこれに目を留れども、暖簾地相のよしあしはいはず。されば我が木綿の才を以て、始に一重の暖簾を掛むには、などか店物の價を妨けんやと、つるにはゞからず序書て贈りぬ。

與ㇾ號說　爲二紺屋巴良一

和歌には神とも世にしたはるゝ昔男の昔をきけば、芥川のかけ落にあだ名の髮を切られ、詩賦に秀しもろこし人は酒屋に掛のたゝまりて、朝三暮四の燒餅さへ乏しかりしためし多し。こゝにしれや、風雅必しも身を修る助とならず、道は外に學ぶべし。文章もとより富を來たさず、家業に思ひかふべからず。人の咄にきける事あり。そのかみ藥種を商ふあるじの連歌に好けるありて、たま〳〵宗祇を招き請、一座の興行に及びけるが、我が句の順に當りて案じ入ける時、表に人の音なひして、僅に一二錢の胡椒を求る者あり。折しも店に應對の人なきを見て、我句を惜がらず他に讓りて其座を立、胡椒を商ひ遺しけるを、宗祇見て深く感じ、世わたる人の連歌にすける、かくこそ有べき事なれと、殊更に稱美有けるとぞ。吾子が俳諧に耽るとも、此ためし忘るべからず。產を破り家を沽りて、頭陀草鞋の先蹤をよき事としてこれをしたはゞ、傾城買も博奕打も同じつらなる俳諧なるべし。或はまた身持よく家榮へば、見る者ごとに必いはむ、俳諧はめでたき物なり、翫ぶに妨なしと。さらば俳諧に第一の奉公となりて、三神の冥慮に叶ひ、夷大黑も風雅を助けて、つゐに俳諧の妙處

にも至るべし。今や其居に號を乞れて其家の業を棄ず、藍光舍と書て贈るも此意有による。今我が贈る藍より出て藍よりも濃き趣を得ば、世に俳諧の名も高くあらはれて、光の一字も空しからじとぞ。

聯句 井引

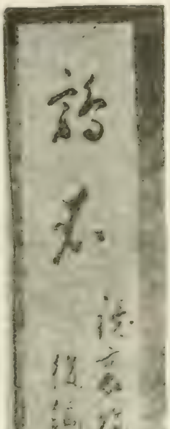
甞寐に槐安へ至りしは、夢にも足のまめなる男なればならし。我が夏の蘿の門をも鎖して、戸出もせぬ物くさをしればにや、あちらからこちらへ見しらぬ老僧の訪ひ來て、半日の閑談をす。いづこにすむ人ぞと問へば、近き方の穴にすむと、しらばけいへば、根問に及ばず。聯句せんと筆とりて挨拶の發句を唱れば、妖僧會釋の對を吟ず。やゝ短歌の二卷に至れば、異屈の尾を見られじとや、末は又の夕べと歸るを送れば夢さめぬ。跡に黍團子の土産も見えず、只たばこの火の僅に殘れり。

挨拶

雖汲水無葛　可涼風在嵓　借宿崇弘法　換題試頓阿
庭宜松氣色　山惡月邪魔　耳言楽袖笑　口說入牀和
長啼夜方冷　大跳盆亦過　截指女郎誓　浮腰祖父痾
酒醒懸綵々　茶沸甕婆々　移歡殘暑褥　脫曬有明簑
擇日四火灸　憐春万葉歌　濱市初鮭貴　辻能油虫多
遲櫻留記念　歸雁惜余波　花開粧寺院　柳動彩溪河

後うづら衣、寶暦より明和の末まで、出帯窟の遺稿をもてこれをうつす。

六林校



鏡裏梅 うづら衣拾遺

節分賦

こよひは鬼のすだく夜なりとて、家々に鰯の頭柊さし渡す。我大君の國のならはし、いづくか鬼のすみかなるべき。昔の聖は衣冠して殊に此夜をつゝしみ給ふとこそ。世をのがれたる翁の巨燵に足さしわたし、年を惜むの外に、何のわきまへたる事もなきこそ、中々安かりけれ。今は捨たる世ににげなきわざながら、家には老たる男のかゞめる腰にしほたれ袴かけ

て、けしきばかり豆うちちらし、聲わななきて鬼やらひたるも、昔覺えておかし。年の數を豆に拾ひて、厄拂ふ者にとらするものとて、をのがさまざまする事なるに、むかしは膝のあたりかい探りても、其數は得たりしが、今は八疊の一ト間にもあまるばかりに成にたるぞ佗しきや。厄拂ふ男の、宵は町々をめぐりて後、夜更るほど聲呼からして、此わたりへも音なふ事にぞ有ける。行年波のしげく打よせて、かたち見にくう心かたくなに、今は世にいとはるゝ身の、老はそとへと打出されざるこそせめての幸なれ。

一えだの梅はそへずや柊うり

雲はらふ垣ねや梅の厄おとし

梅やさく福と鬼とのへだて垣

八百坊記

二十五ヶ條といふものに、蕉翁の詞とて、詩歌連俳は上手にうそをつく事也とぞ。翁は俳諧の祖師なり。詩歌連歌の人はいさしらず、俳諧師は是を守りて、我劣らじとうそをつけども、夫も翁のうそかもしらず。あるは門人のうそにもやあらむ。うそは乾坤に滿々たれば、我口にうそはつかねども、耳にはうそを聞ぬ日もなし。そもやつれづれ草に、うそ聞く人の品々を言たれども、うそつく人の品はいはず。うそに大うそあり、小うそあり。佛のうそは人を救ひ、莊子のうそは人を敎へ、傾城のうそは人を迷はす。只はいかいのうそばかり人の爲にいはず、身の爲にせず。跡なき雲の郭公、名のりかけてつくうそは、人をあやまる罪なしとて、うそ八百坊の額うちて俳諧に遊ぶ人あり。實にも鼻のほどおごめきて世路にうそつく人は、我はうそならずと僞り、みづからうそなりといひて俳諧する人は、それ則まことなれば、交を結ばむには頼むべき友の一ツなるべし。されども麁忽の者ありて、坊と屋の字を心得違て、茄子を大根をと求めに來たらむに、是は靑物賣る店にあらずと、あるじの答に不興して、さては家名にうそつきたりと、つぶやかむ無風雅人は、論ずるに足ざるべし。八百坊の記を請はる。我八百の意を問はねども、そのよる所を推量して、此一語を書て贈る。あるじの心まことあらば、よもや此記を捨べからず。

自在鍵頌

世に自在鍵と呼ぶ物あり。夫は爐上に下げて茶釜藥鑵をつるすに、延縮を心に任する物とぞ。わづかに一用をなして、何ぞ其名のみことごと敷や。予別に自在鍵を得たり。是は路兮のぬし、我が老衰の立居むづかしきを見て、居ながらの用を

なせとて、新に工夫してみづから造り出し、我に贈れる物にして、もとより手の巧なる事、左甚五郎が右に出づともいふべし。しかのみならず一章の文を書て添ふ。仙才又妙にして愛すべし。予も此頃を書むと思ふに、義経の弓流猿猴の手の喩を彼文章に取られたれば、外に文華を餝るべき言のはもなし。抑此物の多能なる、庵右に入用の調度を掻寄するはさらなり、杖として老を助け、棚の鼠を驅出し、落にすかく蜘の巣を拂ふ。俯して石公か橋下の履を取り、仰いで伯獵が松の羽衣を盜むに便あり。花は折たし梢は高しと、心づくしの木のもとにも、是をもつて兎たはめて、ほしき枝をもたやすく得べければ、まして柿を落し柚子をちぎるに、心の欲する所に隨ふ。採蓮の舟に借さば、西施が袖をぬらすに及ばず。洗濯の盥のもとには、淵明が酒臭き頭巾も懸て干つべし。さればたとへ八町二郎か手には短しとて捨るとも、物くさ太郎が膝もとには、此君なくてはとも愛しぬべし。もし此物の世に弘まりて、彼爐上の自在鍵、我名を奪ひたると爭論を起し、訴に及ぶとも、對決の場に臨で能の多少をくらべんには、板倉殿の捌にもあやまたず勝を取べし。自在鍵〳〵、世に己か名を憚る事なかれ。

發句塚序

聞ならく時節庵の社中、庵主に告て云、足下百年の後には生前得意の句を石に彫、不朽の發句塚を築くべし、此約必しもたがへじと。庵主云、誠に厚情謝するに堪たり。しかるに、たとへ劉伶が墳に酒を灑ぐとも、只徒に蟻の穴を潤かし、徐君の塚に掛し劍も、其意しらぬ人は鴉威しともみてや止なん。汝達その志あらば、同じくは生前に其事あれかし、さらばまのあたり見て悅び、一言の謝禮も述なんをと。社中皆云、是只忌ゝ敷の憚あり、庵主其望あらば、もとより我曹の願ふ所なり。さてぞ言を食まぬ寸志も見えんと、しきりに此事を營て、時しも春の鶯なく寶生院の傍にさるべき地を求め、一基の石を建、一堆の塚なんぬとぞ。頃日庵主來り、予に此事を語りて一句を請り。實にかの北斗をさゝふこがねも、南都をほむる諸白も、身の後には何かせん。そもや生れぬ前の襁褓定めとは、早計を譬る諺にいひて、花見にと催す興は、嵐に吹さまされ、月みんとたくむ空は三五の十八、にくの雨に妨られて、世にあて事の違ふは多きならひなるに、只此終焉のまうけばかり、万に一つもたがはねば、あすの事笑ふ鬼も眞顔になりてうなづくべし。風雅に心ある人の誰かうらやまざ

らむ。年〳〵春の草生ずと白氏が數には事かはりて、是はめでたきためしなるをと、とみに手向の一句を寄す。

　我とわが塚の掃除や春の草

節分庵記

もろこしには鍾馗といふ者ありて、能く鬼を逐ふとぞ。其容を見るに、眼を怒らし臂を擐(かゝ)げて長劍をふり廻せば、實(げに)鬼は恐れつべし。されどもさはがしき其中へは、用心ふかき福の神は、怪我を氣づかひあぶながりて、あたりへはよりつき給ふまじ。かしこき我國のならはし、年〳〵の節分には、ひよはき親仁も年男と名のりて、二句の文を唱へ、豆をつかんで蒔ちらせば、鬼は外へと逃ちり、福の神は呼に隨ひ、いり豆の香にめでゝ入かはり給ふこそめでたけれ。されば爰に節分菴あり。是常住の節分にして、來る福は日日に親しく、去る鬼は日ゝに踈し。されどもあるじは殊に酒を好みて酒豪の名をとれば、酒の一座にては鬼とや人のいふらむ。鬼とな思しそよ、赤きは酒の咎なるものを。只是常に訪ひよりて友とする者、とく〳〵上戸なるべければ、古く諺にいひ來る、下戸と鬼とはなき世なりとは、この節分庵の事なるべしと、請はれて以て是を記す。

與二晋路一辭

晋路は竹内某が男兒、二歲なる春の初に、正月が來たうま〳〵をおれもくはふといふをよみて見れば發句也。翁感じて路を付て、戲て門人とす。

不佞少年の頃より俳諧を好み、今老境にも此一癖はやまず。是を幽居の友とすれば、何知り得たる事もなけれども、さすがに年久しきに迷ひて、人はゆかしくも思ふやらん。推敲を問寄るもあれど、師弟に似たるを慙(はぢ)いとへば、身の薄劣を告て固く辭し來れり。さるを玆年六十六歲、始て一人の門人を約する事有て、名をも晋路と授く。此弟子年二歲、火燵に春をくらべ、乳を明暮にして、いまだ奈良茶を甘(あまな)はず。もてあそぶ物は何ぞや。風車の花につらきも、起上り小法師は月に寐ぬ夜の心あるかも。さるから師に對していまだ一字の問をなさず。我が物ぐさを勞せざる事、深切最上の門弟、いづれの人か是にしかん。我辭せずして約をなすは此ゆへなり。しかれども我おひ先に示す事あり。故人いはずや、和歌に師なしと。況や俳諧に於てをや。只法式はよく習ふべし。されども其道に交れば、法式はおのづからにも知ぬべし。法といへば理非の穿鑿なし。天下の公道にして、隨分人のしる事を專とす。祕する法は有べからず。しかれば世に祕事口訣とするは何ぞや。物に用捨の心得あり。或はてに於葉の習あり。夫は皆當然の理にして、

我智明らかなる時は、已と知りて無理はいはず。習ひて知るものは、只其一事に止りて他に働かず。我と一理を知る時は、万端にわたりて物みな明らかなり。師はたゞしばらく東西を指さすのみ。たとへば詩文章を學ぶ人の、秘事口訣といふ事は一ツもなし。しかれども上手あり、下手あり。只我才のなす所にして、何ぞ別に秘事を貴まむ。世に秘事傳授といふものは、渡世の者の術なり。予は渡世の爲にせねば秘事口訣はならはず、習はねば何をか秘せむ。五倫五常は外に師あり。狐狸の輩に迷はされて俳諧に混ずべからず。

明和四年朔旦冬至、半掃庵隱士示レ之。

寄二未足齋一歌

未足齋〳〵。未足齋のあるじ、こゝろみに物とはむ。そもや花にめでゝ春の日の足らざる歟。傾く月をゝしみて秋の夜の足らざるか。目に物のたらざるか。心に物のたらざる歟。世にいふ長者富にあかず、蟻の如くにいそがしく、蝿のごとくにあつまるは、あるじの常に笑ふところ。茶漬に菜のたらぬ日も、酒に肴の足らぬ夜も、人に未足の名はしめして、未足をもとむる心なし。君が心我しりぬ、未足は知足なる事を。未足齋のあるじなる哉。

足して見ぬ心や月の十三夜

夢二二客一賦

秋の蟬猶梢の暑さをのこし、暮待つ翁の肱を曲たるかりの夢に、怪しき二客の爭ひを見ける。一人は色黒くして疎なる髭針の如く、みづから崑崙先生と名のる。一人は面長に、頂すこし窪(クボカ)なるが、眞桑居士と稱す。共に酒臭きはいたく酔たるやらむ。先生まづ進て云、我そも居士の下に立べくもあらぬを、今一桶の内に在て、何ぞ我より上つかたに横たはれるやと。居士云、我もまたいかでか先生の下とは定らむ。予はひたぶる賤しき農夫の手にのみもなれず。昔邵平が東門に作り、殊に驪山の溫湯を分ちて、二月中旬の走りをも獻ぜしものを。へいな、もろこしの事はしらず、山時鳥里馴る頃は、駿河のはつなり、價玉の如く、籠に盛り馬にのぼりて、東都に下る勢ひを見ずや。たま〳〵しろ瓜といふものありて、わづかに其威を借れども、我目には驥尾の蠅とこそ見れ。へそも〳〵官人の他鄕の役に倦て、故國へ還る悦の時を、瓜期とて殊に待るゝものを。へさらば一富士二鷹に並びて、夢の吉兆とするにはいづれ。へ我聞、むかし禪僧にふみ躙(ニジ)られて、夢裡の蝦蟆となりて命を請し妖怪はいかに。へいざ我も亦聞り。一條帝の御時に、怪しき毒を含み、晴明に占はれ行尊に祈られて、

踊り狂し不祥こそ増りぬべけれ。へ山城のこまのわたりの瓜作りと、故人の詞にもつらねしぞかし。へ扨はかのわざゝの檜につけ置てと、讀ける歌はしらざりけるよ。へうたてやそれは秋茄子の、郷に立けるうき名ならずや。へ大原や田中の村の瓜作り秋は果ともかりもりなせそ、としめしける歌も有しを、見ぐるしく世にすさめられ、名をさへかりもりとは、平家の公達を似せけるやらむ。へ只已が身を省るべし。味噌に油に味ひをかざりて、寺に鴫焼の仇名こそにくむべきを。かくいひ〳〵て果しなければ、今は翁も枕をもたげて、あなよしなし〳〵、かれはかれ、これはこれ、瓜の蔓に茄子はならず、只已がさま〳〵にて、何ぞ尊卑の品あらむや。不用の爭ひをして、なれそこなひ味變じなば、人に厭まれ捨られて、畠のこやしと成や果なむ、やみね〳〵と扇を把て席をうつ事三下。ふたつの姿たちまち消て、夢も亦さむれば、只青丹よし奈良漬桶のみ、依然として棚本に殘れり。

祭二嘯花一文

この秋は毛利嘯花子が卅三回の忌に當りて、いさゝか其魂を祭る。我少壯の日、明暮の友なりし昔を思へば、まづ身の老ぞおどろかれぬる。そも文場に交りし其世の人を指に折れば、夫も失せ是も去て、のこる者けふこゝに打かたらふ只三人斗。木兒翁は七十を越へて猶健に、米布は六十に臨てもとの姿さしもかはらず。只我のみ六七十の間にながらへて　其數に入ながら病み衰へ、さまもかえて有しにも似ねば、魂もし歸り來るとも、野中の清水も影迷て、知らぬ翁とおぼめきやすらん。よし只かはらぬ心の手向を、倘くばうけよとぞ。

露は袖萩の名にあるみそ三とせ

送二曉臺一辭

此秋名にしおふ更科の月みん、それより武藏野の露をも分けばやと、思ひ立る曉臺を送る。其行先の信濃路には、我知れる千丈友梅なるおのこあり。武藏に布袋庵の主は、殊に年來の交あれば、我が一言を傳へて立よらむには、假のやどりをよも惜むまじ。行くればよし此陰によりて、心の花のあるじとせよと、陽關の一句を筆して、別るゝ袵にさしいれぬ。

漏らぬ宿おしえむ月の旅ながら

懷舊辭

風月堂を訪ひて、むかし翁の此家に書殘されし一軸を見て感ある餘り、紙筆を請て一句をとゞむ。

手の跡や雪の足あと見ぬ世まで

六林いはく、風月堂は尾府本町書林なり。此家に芭蕉翁行脚の頃立よられて、一句を殘されし眞蹟あり。今此に模寫す。

印
書林風月とききしは
名もやさしく覺えて
しばし立寄てやすらふ程に
雪の降出ければ
　　　　はせを印
いざ出む
　ゆきみに
　　ころぶ所まで
丁卯臘月初
　夕道何がしに送る

竪九寸五分斗、横一尺四寸五分斗有。今掛物の一軸とす。是貞享四年丁卯冬の筆なり。今天明八年戊申に至て百二年なり。夕道は今の風月堂孫助が曾祖父にて、あら野集の作者なり。

題レ像文

人の見よとて携來る一軸をひらけば、上に我何の書添てあり。さては此翁は我姿を寫せるにこそ有けれ。老の手に鏡も捨て久しければ、我面かげは我忘れにたり。今は此繪よりも劣りぬらむものをと、あさましく且なつかしく、暫見とれぬる内に、傍の童の口さがなくてよみける。

金岡が馬にならはば夜は出て
　萩の戸棚の餅や搜さむ

いとにくけれどいかゞはせん。

更幽亭記

から衣うつゝの山里に、代々藥を鬻ぐ家あり。所は少陵がたづねし張氏が隱栖に似て、貧富は同じからず。夜金銀の氣は只此家より立のぼりて、上清童子常にはたらけば、物の不自由なる山中ならず。今のあるじ風雅にふけりて客を愛する中に、實に山間の閑寂を求る時は、襖に風塵を隔て、名におふ手杵の茶を煮て、一室に幽趣をたのしめば、もとより深山路に近くして、伐木の丁々たる、耳さらに清かるべし。此亭に號を呼ぶに、更幽の二字を以てす。我は老と病にほだされて、神飛べども訪ふ事あたはず。訪ふ人あらば、此名の虛ならざるを知るべし。

つのもじ序

むかし〳〵蒙恬といへる人、始て筆を造りけるより、和漢に能書の人こも〳〵出て、我朝の高野大師は五筆の名をふるひ給ふ。されば五筆のほまれは、蒙恬かつて知る所にあらず。かつその大師、又四十七のいろはを造りて、和國に自由の働をなす。しかるに今また六林出て、その四十七字を配りて、文を綴り歌をつらぬ

るに自在を得て、人の目を驚し、つもりて一巻の小冊子なんぬ。是また假名を始し大師のしろしめさゞる所なり。聞ならく、むかし世に文字てふ物の始りし時、かく人の智さかしくなりて、已等がかくろへて住かたなからんと、鬼の目に涙して泣けるとぞ。それもかばかりの事とは思はざりけむ。思ふにむくつけき姿は似もよらねど、もろこしの鍾馗と我朝の六林を、鬼一口にいひて畏るべし。さらば此一巻をたくはふ家には、鰯の頭も何かせむ、柊もたのむべからず。奇なる假名、妙なるかな。舞津の老隱感嘆の餘り、戯れて此端に筆とる事しかり。

釜賦

舞津の老農が忘年の一知己あり。俳諧に遊ぶ日はみづから名を釜月と稱す。もとより大邦に祿を得て、さばかり物のやつ〳〵しからぬを、濁りて富るよりも清くて貧しからむこそと、高きを慕ふ心より、史雲が釜の魚を生ずるに至らざれども、弊居の板間まばらに荒て、月もまに〳〵竈に漏るの心なるか。あるは又巷の世話にいふ、月夜に釜のおかしみによるにや。さるに近き頃、市中に時雨のやどりならむ、ある店先によりて郭巨が鍬もからず、あやしくさゝやかなる釜ひとつ掘出せり。是を得て大に歡ぶ。そのさま茶人のたのしめる物ともみへず。又塵俗の世帶じみたる物にもあらず。すべて夕顔の地紋心ありけに、其容つぶ〳〵といふに及はず、ゆかしむ人は尋てみるべし。もと此人久しく茶道に遊びて、其奥儀熟して後の今は、必しも茶に専ならず。さりとて思ひ捨たるにもあらず。むべなり、此釜のこゝろに叶ひて愛するや。冬籠の爐に懸て湯を湧し茶を煮るの外、あるは霜夜に雜炊を焚き、雪の朝に粥を煮るに、六七合の用をなせり。其大さ是を以て知べし。然るに奇妙に驚くべきは、かつて釜月の名を定る事年有て、果して此釜を得たるはいかに。其名や渠を呼出しけん、かれや此名を兼て呼せけむ。我(おれ)が釜か、かまが我か。されば世の物語に、昔俵藤太なる者、龍宮に賴れて、その謝禮として、取れども盡ぬ俵を得たり。夫より俵藤太とは號せしとぞ。是を思ふに、蜈蚣を射ざりし始の姓を何と言けむ、世に傳へず。只もとより俵藤太にして、後に俵を得たるなるべし。しからば此釜と同じ日の談にして、釜月も釜を得て後の名なりと、世にまた誤傳ふべし。よしそれはともあれ、此かまのかまはぬ事。つら〳〵思ふに、名にのみ聞るぶんぶく茶釜とはいかなる物ぞ。字は分福とも書やらむ。或はこれらの事をもいふか。もし年を經

下毛がはえたらば、茶筅で剃て事なかるべしと、かの老農求めにあふて筆に信せて漫に記す。

與脇息文 應濃州内津更尚亭三止之需

机には狭し脇息には長過たり。是は我庵の長物といはむ。用る事もなく側に捨置たるを、世にすたるものはなかりけり、三止なるおのこ、是を得させよといふ。もとよりおしまづきのおしまずして譲り與ふ。小庵の棚を狭め、煤拂の厄介なりしを、我はうつゝ山の鬼に瘤とられたる心地ぞする。其事を書て添よといふ。筆に任せてかくのごとし。

漢和手引草序

俳諧の漢和、昔今さく物多からず。さるはもとより俗語ながら、一向に字を知らぬ人はしにくき業にて、假令志ある人も、法式も覺束なく、かたらふ人も稀なれば、興なきが故ならし。爰に未足齋の主人、此道に遊ぶ。天斯文を助けしにや、はからずも壁の中より古き一帖を得たりとぞ。猶是に筆を加へ、こまかに料理塩梅して、齒のなき口にも味ひ安き一卷を著して、手引草と題して初心の俳士の便とす。我はもとより一ツ穴の狐、快なる哉〱と、撰者の求に任せて、序者と化て一語を贅す。

香木記

むかし龍の繪を好ける人には、眞の龍顯れて姿見せけるとぞ。好むに信あれば物に感應ある事なきにあらず。我府下に花非菜、深く香の道を好みて常に樂む事久し。しかるに其家に古く傳たる臼あり。いたく年經るまゝに底なども破れにたれば、今は所せき不用の物なりとて、くだきて釜木に打交けるに、ある日いみじき妙なる香の家にみちわたりけるを、あやしみて求るに、かの竈に焼ける臼の木なりけり。心いれて見るに、實木のさまもよのつねならず。おどろきて香の師のがりたづさへ行て是を問ふに、うたがはず赤栴檀にさだまりぬ。名はそのまゝに花井臼と呼ぶとぞ。柯亭竹の笛焦尾の琴を得たるためしにもかよひ、邇日こゝらあつかひ草にして、めで羨む事にぞ有ける。されば臼といふものは、賤の手にならしてそのしな下れるに似たれど、君みずや、久かたの月の中にも藥を搗ときけば、もしや其臼も此木の類にやあらむ。

臼の香や月の兎はきゝ知らむ

百話亭辭

金人の口を緘し、物いへば唇寒しのいましめも、只いふ人のうへにして、聞者に

はあづからず。さればにや耳を絨せるためしもなく、耳たぶ塞しとの句も聞かず。非禮聽く事なかれの教は、たとへばまろふどの來りて非禮を語ればとて、庚申堂の猿の如く、耳をふたぎてもむかはるべきかは。たゞ是聞は聞ながら、其よきはとゞめ、あしきは捨て、心に撰のあらむのみ。ましてよしあしの理屈を離れ、俳諧一時の談笑に客を愛せる百話亭には、さぞなあるじのつれ〴〵もなからむ。そも〳〵世に百物語といふ事を傳へて、ともし火のもとにまどゐして、奇怪の談をかたみにいひもてゆき、其數百に滿る時は、かならず妖物の出るとぞ。人もし百話亭の名を聞て、扨はかの百物語の會所かとも訝からん。さればこそ俳諧の夜會ありて、其句數百に滿る頃ほひ、勝手口の屛風の上より、女の首ばかり忽然と見えて失たるは、夜食の時分を覗ふならむ。やがて臺所に摺小木踊り、爼板動き出、膳棚のあたりぐはら〳〵として、しばらく家鳴のけはひするは、妖物の出るにはあらで、奈良茶の出るなりけりと、見し人の語りしなり。此亭に一章の文を請れて、例の戯言を筆に任す。是も亦世のよしあしにわたらざる、百話の內のひとつに宛んには、饒舌の咎もあらざるべし。

贈二佐屋洗耳一序

をしめども限あるものは命なりけり。佐屋の里に世にしられたる水鷄塚あり。されば四方に蕉翁を慕ふが故に、其句を殘せし地をしたひ、地をしたふが故に此塚をしたひ、塚を慕ふがゆへに築し人をしたふ。其したはるゝ人は誰ぞや。此里に久しき騷士吟山なり。むかし月空庵に其道を學びて生涯風雅に遊しが、惜しむべし、丙申(安永五年)の冬、享年古稀に四つを添て、卒に夜臺の客となんぬ。孝子洗耳哀傷のあまり、遠近親疎の挽詞をつらねて世に一帖を遺さんとす。予に小序を請はる。嗟乎我もとより不才の樗櫟、今は猶老朽て、花もなく葉も落て、聊のことのはも綴にたへず。たま〳〵かゝる求あるも、固く辭して筆をたつ事已に年あり。いまさらに何をかいはむ。わづかに一句を寄せて且いたみ且弔ひ、且は求に答る事しかり。其蒿里の歌に曰、

清女が筆の跡も、たゞよのつれのさまをこそいへれ。

かなしきものことし師走の月夜哉

知雨亭後記

城北の市中におそろしきおのこ有けり。世々薬を鬻て業とす。表には兒玉屋の暖簾をうき世の風になびかせ、世わたる塵の紛々と見ゆれど、內々は孤松軒の額を

閑適の月に照して筆硯にあそび、詩を賦し文章をつゞりて、見ぬ世の人を友とす。此樂、世の俗客は夢しらず。吏隱祿隱の類にして商隱とこそいふべかりけり。昔伯休は身も名も隱して藥を賣らんとして、かへつて安く見知られぬ。今此おのこは隱れずして賣る故に、其心をよく隱る。一日我が幽栖を敲て後、はじめて其高致をしれり。そも〳〵我は隱遁の客をまねびたれども、猶世に隣るが故に舊識遊人に擦されて、夙志の閑を得る日少し。かれは中ゝ世路に立て、人しれず閑を得る。鷺と烏のうへを見るに、夏木立のしげみによれば、烏よく隱れて鷺はあらはなり。雪のあしたに見わたせば、鷺よく隱れて鴉は紛れず。黑白の隱見いづれをか得たりとせむ。されば我亭の、もとより知雨と號する其意を汲たりとて、頃日例の金玉の文をつらねて我に試み問ふ。文意識に面白く、くり返して撃節に堪ず。されども此二字を取る事、聊別に微意あり。巣居知風穴居知雨の語あり。つら〳〵我身の上を思ふに、幸に上國世臣の家に生れて、不肖の身のおほけなくも父祖の祿を傳へ、剰こちたき官に承乏して、南郭が竽を吹しも二十とせあまり。たとへば狐狸の人らしく化て、よく尾を藏したるが如し。程ふるまゝに、しかすがに、青松葉の辱を忘れて、みづから妖の皮を脱、魯鈍の心肺を顯し、卒に蓬蒿のもとに穴を營、かく世の外に餘齢を守るなり。知雨の因縁かくのごとし。今は鼪鼠にも迷はじとこそ思へるに、人やゝ穴を嗅つけて、佗たる栖も面白きやらむ、今は叢に道ふみひろげて、腹つゞみの閑を妨らるゝ事しば〳〵なり。されどもしか厭ふは塵客の事、孤松のあるじは同調相應ずるの人、世にいふひとつ穴の狐なれば、來ん〳〵といはむには、昆布に山椒の淡茶をまうけて、我も亦快ゝとかたらふべし。

方十園記

あるじ名付て方十園といふ。十は十里の十にあらず、町にあらず、反にもあらず、只わづかの間地なり。爰に山をも築かず、泉をも引かず、賤がこもりのまねびして、明暮慰むつまとはなせり。世の人はともいへ、有宗入道をして此園を見せしめば、かくこそ有べけれと、手を拍て稱嘆すべし。時も今安永四年閏臘月、若菜つむべき春巳にちかき日、七十四翁半掃庵筆とる。

指峯堂記

年頃相知れる好事の漢あり。あらたに世わたる業をいとなむとて書坊の主と成けり。けに世に商沽のさま〳〵なる中に、

是ぞうらやましきなりはひならし。店締にして秤十露盤もさはがず、常に文人雅士になづさひて、我智の益るたつきとなるべく、諺にさがなきものにかぞへたるお乳の人はいさしらず、船頭馬かたのゐせたるかぎりは、立よるべき店にはあらず。むかし孟母の借屋を撰て、衒賣とていやがられしは、三錢五錢の利を爭ひ、手をうち訇る商家のうへにして、かゝる類にはさしもあらじ。いでや市中に栖を求むとならば、此隣こそ子を育る最上の所なるべけれ。然るにあるじ、かつてある先生の門に乞て、號を指峯と定けるとぞ。其意いかならむ。あるじもおぼろ〳〵として、予に此記を書てと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるもの歟。猶も心の奥の海のふかき心やあらむ、又は山の井の淺きやらむ、いさ汲しらぬ予にもとむる事や。かの天に張ゆみといひ出けむ、安らかなるためしにもあらで、いとむづかしきなぞ〳〵を造りて、予に解けといふに似たり。老懶の手に及ばずとむづかりて、固辭すれどもうけひかず。とまれかくまれ筆染てと、ひたぶるに責られて、聊取次のすゞろごとを書ちらして、是を記とはせよとて贈るとしかり。

送月堂記

西濃成戸の里に世々栖る人の號を求けるまゝ、送月堂の三字を與へぬ。猶其記をと乞ふに、只ふかく思ひ入たる謂もなけれど、其事しば〳〵にして止事を得ず。そも〳〵此地景、東は朝もよひ岐岨の大河清く流れて、雨に着る美濃と尾張を分てり。西は角もじや伊勢より近江の山々まで、嶺をつらねて甚遠からず、又ちかゝらず、只よき程に屏風をひけるごとし。もとより城下へだゝれば、風塵の喧しきなく、常に農業の目を慰るあり。四時の佳観いひつくすまじく、何を揚てか此名とはせん。されば蛙なく朧夜、時鳥にのこる有明、秋は稻葉の露に宿し、冬は霜雪に冴る詠、只夫月にのみこそ遺るまじけれ。且又一字を添ふに、物皆入といへば出るはこもり、歸るといへば來るを兼ね、送るといはゞ迎ふは兼つべし。是を以て此二字に定む。隈なき影を惜む心也。所謂東坡が亭とは、裏合せの隣ならむも亦おかしからずやと、筆に任せて記とす。

歳旦の口號

舞津に久しくかくろへて棲む翁あり。年明けていくつぞと人の問ひしかば、もとより絳縣の老人のむづかしきなぞ〳〵は知るべくもあらず。かた腹いたき歌よみて答ける。

足らで死ねといひし四十もふたり前
　つれ〴〵草に面目もなし

松　歌　并引

金森氏桂五子の庭に一株の松あり。此松によりて我に一語を求らる。そも此求めはいかにといふに、慈母のいとけなくて始て髪置ける年、すさびにうへし小松の、其人と共につゝがなく幾星霜をかさねて、梢は鶴も巣くふべく、影は雨も凌ぐべく、今はなりにたりとぞ。我知りぬ、桂子の意必しも此松にはあらず。只たらちめをとぶく孝情より、其愛松に及べるならし。されば少女の琴を習ふに、かならずふき組といふ曲よりす。此はじめの唱歌を四句にして假名の韵をふめり。自然に叶へるものか。いと興ありて覚ゆるまゝ、是に習ひて琴曲のうたひとつ作りて、かの求めに答ふ。松に琴のえにしもあればなり。

　かりそめにうへしまつ。
　人と共に年ふりぬ。
　たとへ松はふるくとも
　人は千代をたもたむ。

六林校

補　逸

布袋庵風客句集序

風雅を帯て西東するもの、布袋庵を訪はざるはなし。訪へば句のあらざるなし。句あれば記せざるはなし。その記する者三百余吟、かつて一軸に満り。さるを過し亥の年の夏、情なき青あらし丙丁を延きて、池魚の災此冊子に及び、年来のすさび端なく一時の烏有となんぬ。惜むべし、恨むべし。あるじ深く悔み、猶幸に心に記するを思ひ出〳〵、ふたゝびつらねてこの一帖を起せり。さるも其もと有しもの、十にしてそれが一つにも及ばず。されどもあるじの年いまだ甚老ず、徳いやましに隣ありて、是より書つゞけば、ほどなく又棟にも充ぬべし。序を請れてたはぶれていふ、君みずや青山の草、一たび焼けば後に生ふ蕨必茂し。されば祝融心ありて、これより句を多からしめむとて、初の草を焼くものならむ。何か悔ん。かの塞翁が馬のためしも、今十年の霜積て後、さてこそとは知らるべしとぞ。

　花のやどり音をのこす鳥の跡たへじ

明和歳庚寅に集る。古稀前一年の翁也有、蘿の隠家に筆をとる。

山鳥のをはりの國年魚市の郡なる前津の里に、一老翁おはしき。半掃菴也有の翁とぞまうしゝ。さるは尾張の　君に世ゝつかへたてまつり、中ごろはやごなきつかさにものして、　君の御おぼえもあさからずぞありける。わかきより月花に心をしめ、雪のあしたをたのしみ、郭公の一聲をしたひつるが、身にやまひ多きを常にうれへ、はやくつかへをかへしきこえて、前津の里に世をのがれ、俳諧滑稽のふみどもに心をやりつゝ、常のすさみにこゝらものせられつれど、深く菴にかくして祕めおかれつれば、をさ〳〵世にしるもの少かりき。おのれがうみの父なる文声翁は、此翁と交はりて俳諧滑稽のふみに心をよせられける。おのれがおほぢなる楚巾翁と也有翁とは、うるはしき友なりければ、いよ〳〵ゆきかひもしげく、つねにむつまじくうちかたらはれける。おのれも稚き頃、父のせうそこ持たるずさのせにまたがりて、半掃菴に行通ひぬ。翁天明の始みまかられし後、くさ〴〵の文ども、半掃庵および護花園六林翁のもとにのこりありしが、月を經るまゝ、彼のふみども世にちりぼひ出づ。さるを、天明のころ大江戸なる南畝のぬし、護花園にたよりもとめて、翁の遺稿鶉衣の前後篇は

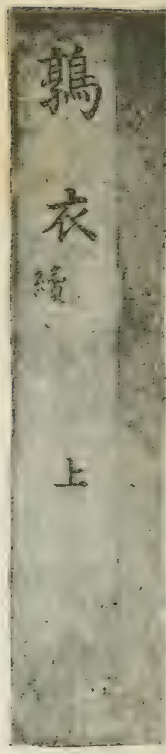
木にゑりて世にひろめられける。されどのこりの文ども猶こゝら多かりけるを、護花園みまかりて後は、あともなくちりうせぬ。垂穂幼より父の志をつぎて、翁の文どものこりなく見るまゝにうつし、聞まゝにかいあつめおきつるが、おのれも亦老の坂路のたのもしげなければ、おのれがみまかりし後は、さながらすたれうせなむとおもひて、こたび木にゑりて世にひろめつ。さるはうづら衣にもれたるくさ〴〵の文ども、或は紀行の類也けり。是を鶉衣の三かさね四かさねとして木にゑらせつ。亦翁の文に、管見草・短綆録・古革籠・美南無壽比・野夫談・永代藏・無夜食談あり。詩集を蘿隠篇、和歌の集を蘿窓集、狂歌の集を行ゝ子と云。また俳諧の集に、千句集・五百句集・蘿葉集・蟻塚集・もり桶あり。漢和聯句集二巻あり。昔翁の遺稿にして、みなおのれなからん後のかたみにもとて、たくはへおける物になむ。

をはり人

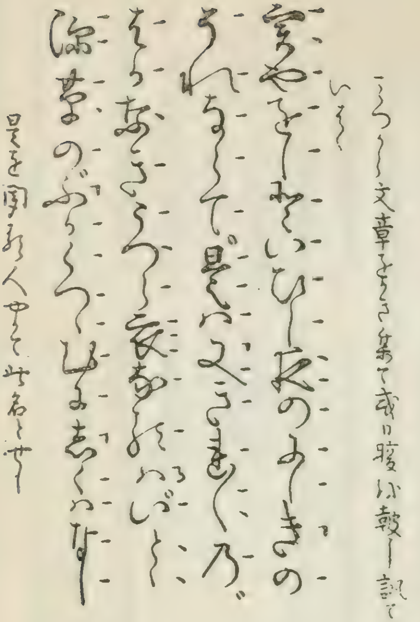
たりほ

印 印

文政未のさし



鶉衣 續編 上



百六歳なる大工甚助がけづりたる箸を人の饋ければ

食は是（これ）、とことはに命をたもつもとにして、四時其元氣を養ふの主、はしは又食をすゝむる從者にして、常につかへ怠らず。さればこそことぶきをのぶ。こゝに或所に百六歳に成れる翁ありて、是がけづりなす箸たつとみうるはしく、珍らしくめでたき物なればとておくる人あり。是をよろこび、又百齢命長きを尊ぶは、人の品によらざれば彼の翁を賀して、たはむれのと葉に、

久しくものぶる齢はきくの露
　はらふ千とせのしろき老樂
獻立に百六歳のはしとりて
　これはめでたき世の茶めしくふ

田子菴記

こゝに田子庵と號するいはれは、此家に愛翫せる鮑貝の盃ありて、それを田子浦といふ故也とぞ。そはさらば難波にきこえたる浮瀨屋の出店かといふ人も有ぬべし。そもや浦の名をとりて盃の名とし、亦盃の名をとりて菴の名とす。かくまで物を用ひたらんに、器財衣服の類ならば手譜の入りて古びぬべきに、用る度に新なる田子の名こそめでたけれ。思ふにそれ地翁が亭の名も、其時は左も有つらん。欄によりて散る花を惜み、簾をかゝげて月待夕、よろこばぬ雨もあるべきに、此菴の名のそれには似ず、いふ度聞度に、名におふ佳境俤にうかびて、常に雪月花の風情を添ふ。さてこそあるじ深く愛して、年立かへる屠蘇よりもまづ此物を手にふるれば、醉來る初夢にも、其名のえにしあれば、などか一富士の嘉兆をも見ずやはあるべき。あるじ一語を予にもとむ。其物其名の來由は、かねてあるじの筆に盡せり。我才の藻屑なる、何をか其汀にかきよすべき。只予に酒腸の乏しくて、八仙の仲まにも入らず、是に對しても鮑のいひかひなき、是のみ田子のうらみなるものを。

贈二或人一書

吾子今講武を以て軒號とし、句にも俳諧にも用ひて名とす。あら面白からずや。吾子はもとより武門の人也。紙賣者の暖簾に紙屋としるし、油賣家の看板に油屋と名のるは、買ふる人のまがふまじきためなれば、其いはれあり。吾子たゞ風雅の最屓なるより、武道も一ッに混ぜんとす。私心の迷ひといふべし。槊を横たへて詩を賦するも、扇を敷て歌よみけるも、それはそれ是は是にして、しかも是を以てそれをあやまらず、それを以て是を害せず。文武二道と稱するは、其事跡を見て後人是を嘆美せる也。我れと名のるとは甚臭し。五老井が射御の辯すら、或人是を評して曰、其文の始には、武士の武士臭きは鼻を掩ふと書て、人の誘りに針をさし、武藝をあてにすべからずといひて、他の嘲に蓋をして、さて其末に書たる一篇、臭きと糞土のごとく、藝の自慢は傍若無人也。律を知りたる僧の破戒無慙と、經學にわたりたる人の不行跡なるは、あしきをしりつゝあしきをなせば、世にいふ三寶の捨物にして、異見も療治もほどこす所なし。白藏主も口を閉、扁鵲も手を袖にして、只つゝさせて見るより外なし。新當流も正法念流も、もとより武士の常にして、それがこゝへ出るとにはあらず。誰か武門に生れて是をたしなまざるべき。二流三流の印可免許も、此邊にては珍らしからず。天下の名人はおの

づから人もしり、世に顯はれて各別のさた也。世に馬を見ると云人あれど、山上入道の名をだにしらずとは、入道が身にとりては迷惑なる披露なるべし。昔或人歌を自讃して、この歌の心の奥はよもしらじ定家家隆も釋迦も達摩も、と讀たる返しに、釋迦達摩定家家隆もしらぬうたくそのやくにもたゝぬなりけり、とはよみしか。其ためしも思ひ出らる。師匠が下手ならば、弟子は師匠を越すもあるべし。只我のみにほこるは遼東の豕也。めづらしさうにかきたるにて、のこりの衆の思ひやられて、と云或狂歌の下の句やつくべからむ。佐ゝ木梶原が先陣を評して、搦手數万の油斷人一騎も殘らずわたしたれば、鎌倉にての荒言も少しは是にて戻りけりとは、余りに不案内なる心得違ひ也。二騎より外渡されぬ川ならば、何しに不覺の先陣して犬死をばすべき。後陣のつよく川と見たればこそ先登の功は立たれ。抑武藝十万人に勝れたりとも、用る所不義ならば、明智を誅せし土民の竹鑓にも劣るべし。しかるに功なり名とげて余力あらば、仁義五常の道を學びもすべしとは、碁象戲も舞謠もおなじ物と覺えたる也。そもや五常の規矩にはづれて、何を以て其功をなし、何を以て其名をとげむ。家を建て後に地築せよといふがごとし。功なり名遂るとは、我が行ひの仕上を云也。老子は身退けといひたる、已に暮合頃ぞかし。夫から仁義の學問は、隱居してからいろは習ふに異ならず。仁義五常と云詞も重言にしてくどし。外に皷三線にのせる五常もあるかはしらねど、先ヅは五常のうちに仁義はありて、仁義五常といふに及ばず。願人坊主がかのえ庚申〳〵とよびありくとおなじヿ也。我はそも俳諧はしらねど、釋迦の鼻をせゝりたる蝿が金色の光もさゝず、孔子の肌着を這たる蚤に道德備はる物にもあらず。勸學院の雀が蒙求を囀れども、だみたる聲を啼ぬ也けりと、鄙生立をほめたる鶯には及ぶべからず。されば其世に生れ合せて、碩德の直弟とても必上手とも極めがたし。しかるに滑稽傳直指の傳を見れば、祖翁の血脉をうけて俳諧文章の名人は、我一人也とはすゝどし。そも又翁の方からも、此一人に渡したりとの賣上け證文のさたを聞かねば、心もとなき樣なれど、俳諧は定めて上手にてやありけむ。武士道は只臭くして覩くはおぼえず。泰平の代に手ぐすね引て、楠村上が上に立むと大言いふ人も、其場に臨み其ヿにあづからざれば、ほか〳〵とはうけとられず。さるを聖賢もこり給ひて、言を以て人を擧ずとはの給へり。是を我里にては陰辨慶とはいふ也けり。文選は俳諧の文

集とこそきけ。此一篇にやさしき言葉もをかしき語もなし。我子への異見ならば、部屋の壁にはり置にはしかじ。何故に此辯はありやと、潜に誇りたる人もありしぞかし。是臭きが故に鼬のたかるがごとく、人も其非をいひたがる物なり。されば武を講ずるも兵を鍛ふも、武士には勿論と云附合なれば、俳諧においてはいとうるさし。早ゝ此號を改給ふべし。我も武門に生れたれば、第一に先ヅ鼻を掩ふ。たゞしかくいふも則臭きやらん。さればこそ臭きもの身しらずといへば、少しの匂ひは塞し給ふべからず。

俳席掟

一 袴を取るに辭義あるまじき事。

一 夜更て時を問ふべからざる事。
　但勝手の鼾におどろくべからず。

一 世間ばなしにわやつく人は、たとひ王衍が麈尾を揮ふとも、漆園の居眠には劣るべし。

右先達ての定にもれたるを拾うて菴の新制とす。飮食もとより亭主の了簡なれば、客の心得に及ぶべからず。且は言譯に似たらんも口をし。そも奈良茶にも限るべからず。なら茶の奈良茶なる心を守らば、茶めしも麥飯も則三石の內としるべし。

贈ㇾ人俳席定

一 飯はなら茶專用なるべし。汁なきは勿論にして、奈良茶ならずば汁あるべし。

一 茶は一ツとして魚鳥は有に任せ、珍奇を必求むべからず。なき時は豆腐茄子に、精進ならぬ言譯は、かつをといふものあらざらんや。

一 香の物は論ずるに及ばず。

一 もしは麵類の好ありとも、定規は右に准べし。

一 酒は盃に大小あれば、上戸とても二献に限るべし。

酒に肴といふ物は、すゝまぬ酒をすゝむる助にして、もとよりも宴會ならねば、しひてすゝむる道理はなし。しかれば肴は不用なれども、膳に一菜の乏しければ、若は到來殺生の物あらば、肴と名づけて一種もあらむは亭主の心に任すべし。或は雪霜の夜風に歸路の寒さを防むには、膳後の銚子を殘し置て、一坐滿尾の上において一酌をめぐらすも、又其時の摸樣によるべし。それとても一種二盃の掟を堅く背べからず。相撲芝居の果は必喧嘩に成りやすく、俳諧の集會の飲食に流たがるは、今世のならはしにて、其道の歎なるをや。されば翁のなら茶三石は、皆人の口實としながら、其しめしを思ふ人少し。なら茶といへば汁一ツをだに省く

数なれば、まして茶数を奢むや。さしみの、鱠の、壺の、平のと、奈良茶の膳にならべむは、たとへば行脚の僧の、頭陀をすてゝ荷馬荷持をつれたるがごとく、本姿本情にあらざることをしるべし。梅二なるをのこ、此ことを恐れて予に俳席の掟を請ふ。道に信ある志を賞して、饌具の定をしるして贈るもの也。

硯部文

動靜壽夭の論をなして、硯の壽は世ゝを斗(かぞ)ふといへり。石の性は硬くして、もとより筆墨の類にはあらず。その害ともいふべけれど、只事はるゝ身の幸によるものの歟。たとへば燧石となりては鋏にもまれてうち碎かれ、其齢は月を以てかぞふべし。あるはまた挽磨と用られては、おどろ〱しく挽廻され、目きりの親仁に蔵かれては、是も齢はたゞ年を斗へぬべし。これらは皆下ざまの娃嫁に仕(つか)はれて、貴介膝もとの勤にあらず。さればかの硯は昵近のつとめにして、さてや世を以て計ふべき己が壽をも遂るなるべきをや。こゝに山田生は、致仕大夫鏡徹君の近侍にして、多年の奉公他にことに、寵遇のあまり一面の硯を賜ふ。常に拜して是を祕藏す。予に硯の記を求むるに、此ぬしの勤るところ硯のつとめに似たらむには、ともに幾代の春永くつかへ奉るべき行末を賀して、筆にまかせてかきおくりぬ。

仍㆓某求㆒作序

其人のために此人の此集編るといかにぞや。紫の露のゆかりあるにもあらず、只風月の席に交ること年あり。さるも其齢をたくらぶるに、かれは八十宇治川もわたり過、是はこゆるぎのいそにもいまだ至らねば、いざ月見む、いざ雪見むと、さそふもいざなふも、おのづから物好のたがふふし〱もあらざらむや。かれは此ためにねぶたき月をも詠め、是は彼の爲に惜き雪をも見捨て、さてや莫逆の遊びをなしけむは、祀輿犁來が交にも、厚は勝る方にやあらむ。そもや彼の老は風雅に遊び、客を愛し緇素の友に信ありて万にたのみ思へる人多ければ、此別を惜む涙、墓栢も色のかはるばかりになむ。さるを思へば、それらも只口にいひ、心にこそいため、今此時に此集を編て、其人の跡とふは誰ぞ。獨此人に止りけること、手向の山の郭公も雲のそなたに呼つれて、此信いかで其魂に届かざるべき。

傍硯亭記 應㆓野呂氏需㆒

こゝに新に此居いとなむと聞しは更に久しからねど、いざ又隈なき軒端に鳥もなじまずと、思ひやりしにはさまかはりて、

木立ものふり竹も陰ふかめて、只此ころのやうにもなきは、いかにあるじの心つくせるにかあらん。あるじは猶年わかうして、身は世路に立ながら、こゝに半日の閑をうる時は、窓に高嶺の月を招き、池に潁川のながれを引て、官暇塵衛の耳を洗ふ。そこに水鳥の馴ておどろかざるは、かの鷗のためならでも人の心をよくしるならん。されば昔蜀山兀として阿房出づ。今田を埋んで傍睨なんぬ。百尺の樓閣八疊の座敷、足れる心の二ッやは有。それは天下に猛威をふるへば、やがて楚人の手に毀たれ、是は僻地に閑寂をたのしめば、老の行へを養ふのみにあらず、千代まつ岩に苔を敷てかの青鮏のおもひをなさば、長く子孫を守り傳えて、こや色かへぬ幽居なるべし。たま〳〵爰の門敲きける日、あるじ一筆の記を求む。されば最勝寺の額書て後悔けむ人も有しが、我既に老にむかへり、よし名をおもふ人ならばこそと、東籬のもとの酔に乗じて、つひに狂語一篇をとゞむ。中ゝ勝景をけがすわざにして、あはれ此句なからましかばと、にくみおもはむ人もありぬべし。

蘭をとりてみる山のはゝ西にあり

一徳辨

鞠をすかぬ人は九損ありとそしり、好く人は一徳ありと尊ぶ。あらゆる遊藝、九損はこれに限べからず。もしは十損もしりがたし。さはいへいかなる不用の事にも、しひて求れば一徳もなきといふ事なし。つら〳〵おもふに、人のもとめてなす業の外、天よりしからしめ、身に備りたる業は何ぞといふに、只飲食と二便にとゞまる。然るに飲食の重きこと、聖主の國を養ひ民をめぐむといへるも、畢竟はたゞ飲食なり。さるから奢れば法にすぎて、三條中納言の大食には醫師もあきれて逆、何曾が万錢には料理人の手も廻らず。されど二便はこれが類にてもなし。雪隱に高麗緣の疊を敷、きんかくしに蒔繪を粧ひ、たとひおかはを梨子地にするとても、いくばくの費をかなさん。道具好の茶人とても、南京青磁のしゆ瓶は尋ねず。しかれば出入の違ひありて、飲食とは各別のさた也。そも又大小の二ッが中に、大は人の平生に長雪隱の時をうつすも、纔に一晝夜に一兩度に過ず。只小便のわづらはしき、さのみ隙はとらねども、しきりに是を催す時は、いかなる公卿僧正も輿車にたまりかね、武者の戰場に急なる場にても、草摺をたゝみ上て、思はぬ敵に後をもみすべし。まして談義芝居の中に、こらへ袋の切かゝる時は、群集の膝をおし分出て、往生の要文を聞もらし、大事の狂言の所作を見殘す。あるは

下馬先に供をはづす鎗持、長舟にもみ尻する女中など、是が爲に惱さるゝ事世に多し。されど馬方小揚の身の上のみ、あるきながらもやり放し、淸水をけがし、雪にも跡をつけて、人目を恥ぬは論ずるにたらず。かくとりへなき物なれども、猶其德を尋るに、地藏の開眼に一休の法力は、茶のみ噺の眞僞をしらず。昔鴻門の會に、高祖は是にかこつけて危き座敷をはづし給ひ、越王はこれをなめて會稽の耻をすゝぐ。今も世上の途中にて、いやなる人に行あうたる時は、たちやどるべき家もなく、逃る方なき道芝の露とこたへて消たき時には、件の用をとゝのふ振にて、やがて溝端に後をむけて、時宜にもおよばすやり過したるぞ、此ことなくてはいかで此難をのがれん。これを小便にも一德ありといふべし。幼子の居びたれは乳母の油斷と叱られて、其子の科にはならざるを、老人の取はづしは、子にもはづかしく嫁にうとまれて、老てふたゝび兒とはいへど、昔の兒より大きにきたなし。さらでも老の身の苦しき、霜冴る夜もすがら、深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん師走の月を、あかぬ顔に詠めて折ゝかよふ寒さは、御衣をぬがせ給ひけん有がたき御心にも、是迄の事はおぼしもよらざるべし。あはれ今宵も風さわがし、幾度の行かひかせんと、寐よとの鐘に寐所とゝのへて、例の椽ばなにまづ立出たるに、餘所にも夜なべの身じまひにや、戸のから〳〵と鳴音のしければ、一首はかうぞおもひつきける。

死さまに念佛申さぬ人はあれど
　ねさまに小便せぬ人ぞなき

東甫東湖雨筆の万歳の畫賛

師の畫けるを發句として、弟子のこれに書添たるは、則脇の趣あり。我も又其鼓にはやされて、かたはらに筆をとる。是や此第賛也といはゞいふべし。

節季ゆにつもりし雪を万歳の
　けさとくわかの春は來にけり

若菜賣序

七十二候の三ッが一ッを省て俳諧の月令あり。蓑月文樵の二士、集のもやうとして予に序を請ふ。是田鼠に羽がはえて深草の秋に啼、雀が踊忘れて桑名の松かさに燒るゝなど、怪しき說にはあらず。誰も見て疑はざる俗間の有ことなり。蕉門正風の本意かくこそあらめ。乍麼生か是俳諧は上手にうそをつくとゝは。よしや世に煩惱あれば菩提あり、うそあれば誠あり。柳はみどり花は紅の色と悟れば、すべて俳諧の種にして、糺の神に問ふもよ

しなし。君見ずや、たとへば彼の田鼠ゝ鴽となりて初て和歌によまれ、雀は蛤となりて後歌人には見限らる。夫も是も漏さるは我が俳諧の大綱なるをや。かゝる自在の手にえらまば何ごかならざらむ。いざ見ぬ國のことはさもあらばあれ、和朝に民の時をしる、是や月令の始なるべし。

棧集小序

我庵に隣せし咄ゝ庵のぬし、名におふ蕎麥の花咲ころ、木曾の旅にとて假初に別れし袂も、ことしの春に指折れば、早蕨の片手握る斗になん。かくて行先ゝのことをきけば、岐岨のかり寐におもひ立て、そこに翁の一句をしるし、棧のあたりに一堆の塚を築き、旅客のしたふ便とし、それより越路の雪をふみ、奥の細道の跡までめぐりて、國ゝの句を拾ひ、今は武城に錫を休めしとぞ。頃日隅田の春雁に消息をつたへ、まめなる便に此事を告こしぬ。實や釋氏の説にきく、聚レ沙爲ニ佛塔一功徳猶空しからずとなり。夫は一時のまさなごとをさへに、まして永き世に此跡を遺せる祖翁の追福、何ごとか是にまさるべき。其句どもやゝ頭陀に滿れば、まづ東都の梓工をかたらひて編集一部の口をひらくと、余に其小序の望あり。江戸は騒士の輻輳する所、隣に乞途に需むとも、かばかりの一語はいと安からんを、遠く老拙に此望を思ふに、さすがに法規の扇に泣き、漢の食を願ひしためし、旅客の情の故あるにかこち、殊には雁の便をよろこび、人の笑ひもこりずまに、またすゝろなる筆をとりぬ。噫我病の膏肓に入るか。

咄ゝ房挽歌并序

咄ゝ房委迺は、一たび天台の数に入、豆腐蒟蒻の清僧なりしを、いかにおもへるならむ、只かしらのみ其儘にて、袂は浮世の色にそみかへり、或は和歌を學び茶に樂み、殊には俳諧に遊ぶ狂客とはなれりけり。かくて其身の年もつもりて後、我隱家の蓬生ちかく一廬を結びてすめりければ、明くれに事とひかはせしが、七年ばかりのさきならむ、信濃へ行脚し、夫より北越に渡り、奥羽の隈ゝまで見むとて、菴はあたりの人に預け置て、杖笠にうかれ出しが、ほいのごとく打巡て、頃日は武藏に情ある宿かり求て、暫尻のあたゝまりぬるよしきこえかはしぬ。さるに信濃路や木曾の旅ねに夜をかさねしほど、そこの人ゝをかたらひて、名におふ棧のもとに一基の塚をいとなみ、翁の句を表して、ゆきゝの好士の跡したふたづきとはなせりとぞ。猶夫よりの行先ゝに此句を乞ひすゝめて、やゝ一軸をなす

ばかりなれば、棧塚を撰集して世に行はむの志ありとて、過し夏の頃予に小序の求もせしが、其事なかばにして病にかゝり、此長月の廿日あまり卒に夜臺の客とはなりぬ。かなしむべし、をしむべし。只年〻になき數をそへて、老の心をいたましむよ。齢又われと同じかりければ、過し行李の頃はことにうらやみて、我はかく病みおとろへたるに、猶四方の志あるいさましさよ。さるにてもかくまで人の强弱はたがへるものか。是や世の定むまじきさだめならんと、思ひもしいひもせしが、我身の露はかく殘りて、其人の爲に袖ぬらすや。是又定むまじき世のさだめにはありけり。驢鳴の挽歌を裁して曰、

木曾路に假の旅とて別しが
武藏野に長きうらみとは成ぬる　留
呼べばこたふ松の風
消てもろし水の漚
わすれめや　茶に語し月雪の夜
おもはずよ　茶に悲しむ露霜の秋。
蓰は鼠の巣にあれて　蝙蝠群て遊。
垣は犬の道あけて　蟋蟀啼て愁。
昔の文なほ殘　老の涙まづ流。
よしかけ橋の雲にかゝらば
招くに魂もかへらんや不

悼ニ楚巾子一文

卯月末の四日に消息あり。使のをのこの外へまかりて、返事は後ニ取侍らんとて、さし置て出ける。其文をひらけば、尋常の無事を問終りて、此頃かしえさせたる双紙のおもしろくて、永き日をまぎれぬ。猶是が末〻の巻取かへてかしてよなど、其事ならぬ明くれのすさびも、例の筆まめにこまやかに見えたるに、そこ〳〵に返事とゝのへ、使のかへり來むをまつ程ち久しからず、其家の從者のもとよりあはたゞしき便して、此老今俄に終り給へりと告こしたるぞ、誠にあきれたる世のさまなりける。齢は八十に猶一ッをそへて、さこそは天年の終なりけめど、かくまであだならんとは誰かはおもひかけじ。朝につく杖はとりながら、耳目もなほおとろへず、浮世の是非を渡り盡して、古きためしもよくしれるうへ、人の爲に事をはかるもまめやかに物し給へば、よろつにたのもしき人にして、若き人〻も遠ざけず、常に出入る人、文をかよはし音信して、門には苔のみどりもみず。朝にとひ夕になぐさみて、かたらふ友のとぼしからねば、九人はなしと數つる白氏が酬和の恨も薄かりけむ。さるは老のにげなくも身の靜ならぬをとて、あざむく人もあるべけれど、すべて老はむづかしとて世にうとまれ勝なるには、かゝる老の生涯は、なべての人のまねびがたき業に、

うらやむ者はた少からざらん。我にも忘年の交久しかりければ、是より後の明くれには、あらましかばとおもふ悔あらでやは有べき。よはひは恨なき齢ともいへ、別はうらめしきわかれ也けり。

弓張の梓にもよればとゝぎす

方笠庵記　應二松涼氏需一

方笠庵のぬし、方笠庵をいとなみて方笠庵の記をもとむ。けだし此庵に此名をよぶ事、いかならんとゆかしむに、たゞ世を例の洒落に見破りて、爰に五十年の尻をすゆるとも、味噌する朝、茶を煎るゆふべも世帶にほだされず。耳目は四季の花鳥にあそばせ、吟魂は千里の雲水にかけめぐりて、是を一かいの笠とおもへるにや。方の一字は、笠のかさならぬ形をさしていふなるべし。さるは蟻通の明神もゆるし給へば、箱根今切の關守もとがめず。あるは吉野の櫻みせんとうかれしも、市人に是うらんと雪に狂せし昔人も、居ながら爰の佛にぞみゆらん。されば世の俗客は、此庵のありとはみえて、是が笠なる事をしらず。あるじは是が笠なる事をさとりて、これが菴なる事をしる。いざや我も此道の同行なり。春はござれと謳ひ古せし拔參といふ物の眞似せんと、此笠の端に書付侍る。

袋賛

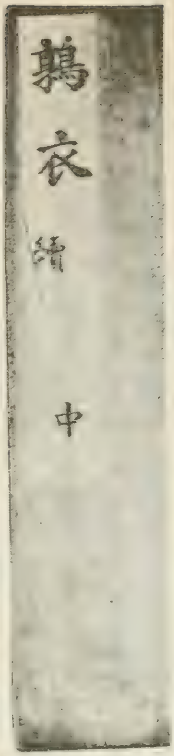
器は入るゝ物をして已が方円に從へむとし、袋は入るゝ物に隨て已が方円を必とせず。實なる時は肩に余り、虚なる時はたゝみて懐に隱る。虚實の自在をしる布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

月花の袋や形は定まらず

花瓶臺記

井戸車の古びたるを以て花瓶の臺となせるあり。是はある官邸の天井のうへにかくろへて、塵にうづもれありしを見出て、面白き容なりとて其片面に漆して、かく風流なる物とはなれり。さればにや、渠がむかしを思ふに、至つて危き所にかゝり、若水の晨より大晦日の風呂の夕べまで、一日も休する事なし。其古びたるさまを見るに、それも暫のほどにはあらじ。影うつせしうなひ子のふりわけがみより、檜垣の嫗みつわぐむまでも見果しならむ。さてや其危きを經つくし、いそがしきを仕果して、今の身の安く靜なると、釣瓶の露ばかりも昔に似たる事なし。さもいそがはしかりしほどは、あやしの五助六助にまはされ、飯たきの玉や竹が手にのみひかれつらん。物換り星うつりて、玉も六助も今何くにかある。思ひきや、ひとり此物の身を全うして、今は蟲

に登り、花瓶を負て、大賓書客のために
も聊も床を下らず。かゝる貴き行末なら
むとは。昔の菜刀今の劍ともいふべから
む。かく安く靜にしてこそ、千世の壽も
持ぬべし。そも又擂鉢の缺けて犬の飯器
に下られ、磨の引わけられて踏石となる
など、靜なりとも何の面目かあらむ。只
此物の宿世こそありがたけれ。人も少壯
の頃は、世につれ、ことにあづかる習ひ、
危き所にも身をおき、いそがしき勉も遁
るべからず。其灘をつゝがなく越えすま
して、かく安靜の境に至らむは、誠にあ
やかりものなるをや。それも只ひとへに
かく用る人にあひける幸ぞかし。もと此
ぬしのつかへたてまつる老君の、是を物
好て久しく座右にもてあそび給ひしを、
新居を卜せし歡とて賜りけると也。愛藏
することむべなるかな。予に一語の記を求
るまゝ、思ひよれる趣を漫に筆して贈こと
に成ぬ。



宇都良衣　續編　中

贈㆓交花堂㆒　住㆓柳町㆒

所の名にふる遍昭が見わたせばのうたを
思ひよりて、かくのごとく書て贈りし。
時も今春の半なれば、東坡が亭に名づけ
たる前蹤にも似たらむにや。此心を一句
にいはゞ、

さく花や交てにしきの柳町

續後朗詠集跋

むかふの町にさじの廻らぬ醫師あり。三
年に三度名をかふるに、かの梟のおなじ
音を啼て他の里へうつるの喩にして、は
やらぬはもとのはやらぬ也。夜話亭に三
度の撰集ありて、題號は同じ朗詠なり。
かの醫師を見て是をしりぬ。よく人のも
てはやすことを賀すべし〳〵。

爲㆓或人㆒書序

五十にして親を慕ふは、世にありがたき
ためしとは、昔大賢もの給ひし。七十に
して慕ふ人、今參陽の箕山翁か。此秋先
考の五十回の忌に、佛事作善のいとなみ
はさら也、其生前にすける道とて、四方
の俳士に手向の句をもとむ。されば心の
水の淺からぬより、かけ見ぬ人までもよ

せおくり、やごなきかたにもきこえあけて、かたじけなく給はりし句どもゝありとか。誠に人を動すこと、いつはりにはあらざりけり。そもかの先人烈志子は、貞享元祿の比にありて、其角嵐雪が曹を友として、深く風雅に遊べりとぞ。其世の詠句は古集にも見えたり。其子うまごまでも猶風月の才に富ること、ためしはた世に多からむや。昔曾子が羊棗を食はざるは、父の嗜しことをわすれざれば也。今此箕山子の俳諧を翫るも、父父の嗜るを慕へば也。それは孝よりして捨、是は孝よりしてすてず。捨ると捨ぬと表裏ながら、追慕孝情の重さを荷はゞ、只釣がねとつり鐘にして、挑灯のさたに及ばず。もとより挑灯、何ぞたのまむ。孝子の追福、よく冥闇はてらすべしとぞ。

新古菴記

數奇者ありて、其閑居に名あらむことを予に請ふ。請へば辭し、辭すれば請ふ。請ふと辭すると織るがごとし。つゐに辭しまけて止ことをえず。されば予が辭するは茶道に疎ければ也。しらざれどもはた是を思ふに、此道はそも古式ありて、一事一盞も矩をはづさず、はづせば放埓の譏りあり。茶杓のあつかひ、ふくささばきも、さすてひくての舞曲ならねば、さして上手のけじめもわかれじ。しかれば古き二の舞して何の面白きことかあらむ。それを面白がるは其故あり。同じことのかはらざれども、きのふの古きも、けふすればあたらし。けふの新きはあすの古きにして、まして道具の古きを賞すれども、用る心は日ゝにあたらし。新しき物の古くなるは天地自然のことにして、古き物のあたらしくなるは、人の才覺智のはたらきなるをや。さればこそ目に見えぬ鬼神も我が折、武きものゝふも丸腰の交をなせば、一椀のつけざしに男女の中立とも成べきを、傾城の客なき宵を御茶ひくとはいかにぞや。予が此論もし偶中ならば、あるじの取ることあるべし。そこを天道まかせにして、新古菴の記と題して贈りぬ。誠はせめをのがれむための御茶にごらすといふ物か。もし早合点の人聞て、しんことは園子のことかといはゞ、よしそれも茶うけのさびとなるべし。

贈二或法師一辭

衣を墨に染ねども世を遁れたる法師あり。むかしは城下に富る家、たれかれとかぞふるには、指一本のあるじなりしが、利欲に心のうときより、畢竟は無分別の二字に、家居も蔵も盧生が夢となして、蒔る種の菜の花と咲日は、身を蝶ゝの袖かろくうかれありきて、今は寝覺樂也と

ぞいへりける。さるにかの祖翁のけむ作菴も、人の住捨ける跡なりとぞ。其椎の木の陰を慕へば、おのづから似るとありて、こゝに一處の主とはなりけり。もとすみし主は茶に遊ぶ人なりとぞ。げに窓も垣ねもよしあるさまなり。されば境によりて心を轉ずとか。聊あるじのためにいはむ。昔の數寄者、今の俳諧、其風流は通ひもすらん、心はおのづからけじめやわかるべき。そもや茶道は、すべての調度も古き物をと愛るが中にも、長月頃の水仙をたづね、雪間に蕨菜をさがし、三月の筍も孝行のさたにはあらず。なべてはしりの初物を爭へば、二月の梅秋の茄子は捨る心も早からむ。これらを風雅の上に思へば、年の内の梅のみこそ花なき時の賞翫なれ。其余ははしりの物を問はず、只のこる雪殘る花、萱も菊も名殘を慕ひ、おくれし物を四季に憐みて、行く物はなじめども、來るは物の時節に任す。さらでも隙行駒の足に心の鞭は加ふるとなし。是は茶人を誚るにはあらず。其道ゝのよる所にして、こゝに風雅の本意をしるべしとぞ。

紙袋序　其考句集　其子洞同が家に藏す。

紙袋を披けば金玉有。錦幾重に包たる宋人の燕石もあるを、是かの綱を倚にすといへるかしこき教にして叶ふ物か。されば其玉も價をもとめてうらんとにはあらず。只これ父を慕ふ孝子の手になれるなり。そもやよしのゝ春にあはざりし人も、靑葉の木末しげきを見ては、さこそと花は思ひしりぬべし。今此集に序を請れて、生前の至孝問はずしていちじるし。人其誠を感ぜざらむや。我が辭せずして筆をとるも、此ことのかくあれば也。

九日寄二服先生一辭

我を生むものは父母也。我を蘇する者は先生なり。僕が今年の秋いたく病るや、此六十こそ我が世のかぎりなりけれと、みづからも思ひ、人も左思へるにや。さし向ひてはいはざれども、つきしろうさまいちじるし。さるを先生の良劑、日をかさね、再九死の地を出て、世は今草木黄み落、虫の音よわり行ほど、我は引たがへて心地たのもしう、菊祝ふけふは聊盃をさへ手にふるれば、したしきものどもの、たゞ此翁を拾ひたるものゝごとく笑ひのゝしるさま、いとうれしげなり。さながら例の一癖は止ず、つたなき狂句して、けふの歡を先生に告るとしかり。

菊の日やまづ初立の東籬まで

三士挽歌

只年〻の上をおもふにも、あるはなき無きは數そふと歎くは老の常なるを、今年いかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。睦月も若菜つむ頃、有癖子世をさりぬ。

　十くだりにたらでなき身や初暦

と袖の涙もかわかぬに、其廿日餘り百枳身まかりぬ。かれはおなじ世を捨人、とに住菴も呼びかはすばかりなれば、明暮にかたらひしを、立登る無常の煙も見るかたにたなびけば、猶思ひ出るふし〴〵も多し。

　摘菜せし友を其野の煙とは

是だにさしつどふ悲なるを、きさらぎの初、再兒子江戸にてうせけるよし。嗚呼今年はいかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。

　なきかずに指をる蕨はる寒し

爾住菴説

こゝにしか住ける法師の、妻もち魚喰て、樂きとはなけれど、只世を遁れ風雅に遊ぶとの聊喜撰に似たらむと、筆にまかせてかく書贈れる也。よし今は世にたゝぬ身を、たつみとは人もいはじとぞ。

示二先以一醉

横須賀の先以は桶を結を以て業とす。深く蕉門の風雅に耽り、手は世渡りの隙なきも、心は向上の月花に遊ぶ。知多の浦浪かへすがへすも、予逢ふ時はかれにしめす。風雅を以家業を妨ぐべからず、家業を以風雅は妨ぐべし。せぬも其日の俳諧にして、障るも其夜の俳諧なり。此と五論によくいへり。あはでやみにしうさをおもひ、仇なる契をかこつをこそ、色好まむとはいはめと高く論ずれば、戀すらかくのごし。まして俳諧においてをや。月更ては十市の里の哀にも通ふらんと、丁東舎と書て與へぬ。只其業の家にたえず、いとまも浪の音さへ打添て、長く風雅の冥加もあれと也。

如是菴挽詞

かりそめの旅とて立別れしが、はかなくも遠きあふみの土となりし南窓坊が魂に告。むかし祖翁は浪華の露と消え、嵐雪(蘭)は鎌倉の月に身を終ふ。もとより俳諧行脚の調する所かくのごしとしれば、如是菴何ぞうらみむ。何ぞ驚くべき。さはいへ齢は一ツの兄にして、交りし我が年月も久し。嗚呼哀れなるかな。此度は不之菴におくれ、今亦此漢を悼(イタム)。老の身のいづれか人の上には見聞ならむ。

　呼ぶかひもなし鳶鷹の雲陰

與二有功子一書

愛して其惡きを知り、憎て其よきをしれとか。人を以言を捨ずとも聞けり。花に囀る鶯も夜なかぬはわるし。畠ほる鳥も月に啼くはよしと、世におほやけの眼こそあらまほしけれ。そもや我若き時君をしらず。一度見て肝膽をかたぶく。君はもとより和漢の才に富て、詩を以府下に鳴る。且俳諧に遊ては貴賤の情を知ると歟、口を開けば玉を吐、筆をとれば錦を綴る。我が鷄の群にはあらず。思ふにいかなる夙縁にや、君がいふと我が心に違はず、我が云と君に叶ふ。あはれ老の身の容をてらす鏡は、今あるとても何かせむ。我が俳諧の好惡をてらすに、君をますみの鏡とせむに、五十餘年の非をもしるべしと、今や老後の力を得たり。つら〳〵君が俳諧を見るに、もと露川が藍に出るがごとしといへども、其藍の藍ならざるをしりて其色を慕はず。今たゞ濃きみどりは獨染出せる物也。このごろひそかに論ずる所、文操十論の上において、誠に我多年睥睨するところ、涓埃もたがはず。不思議や、しらず我魂もし君が懐をかるかと、一度は驚き一度は嘆ず。こゝに論ぜむ。抑東花坊は蕉門の逸物也。昔葛の松原より續五論を著す。姿情花實附合の論、實に俳諧の骨髓を顯はす。其後東西夜話夏衣、所々に云物、金言妙說少からず。さるを惜べしみづから終焉の記を書て、支考の名をなきものに擬してより、すべての咎を蓮二に讓せて、文鑑を選して自註をはゞからず、文操を編て眞名の新製に及ぶ。十論を著ては虛實を論じ、名に俳諧の二字を假れども、長助李助が耳に入らず。酒はやしして餅賣がごとし。徒然草の贊は俳學のさたに及ばず。毀譽は見る人の心にあるべし。かの君がいふ所、確論にして殘さず。今はた是に何をか加へむ。しかるに先にいふごとく、我君を鏡とせむには、我又淸き光なくとも、只潦水の淺きを恥ず。聊君をてらさむとす。其いふ所他にあらず。君、蓮二を誇るをきけども、いまだ支考を稱するを見ず。儒士は釋氏を防げども、其說のよろしきあれば潜にとりて身の上の益とし、佛徒は儒道をいやしめども、其ことの理に叶へば聊用ひて今日の法とす。內證皆かくのごとし。況や支考は蕉門の俊良也。舊說もとより規矩とすべし。かの文操十論の說においても、猶俳諧にとるべき物少からず。君俳諧の益をもとむるに、必是を誤ることなかれ。そも我は君が愛する物なり。君もし憎てよきを忘れむは、其損只君にあり。君もし愛して惡きを知らずば、其損我にありて、くもれる鏡にむ

かふがごくならむ。歎く所こゝにあり。呵ゝ。今書をよせて寸志をいふ。多言まとに恐るべし。但我君にかくすとなし。君はた我をいかる者ならんや。知雨亭の秋日にふかく、川崎やが酒日ゝに厚し。訪れむといづれの日ぞ。又一飲に相笑ひて三秋の悶を解むのみ。多罪ゝゝ。

秋の日の序

蕉翁生前の七部集とて世にあがむるが中に、冬の日の集は尾はり五哥仙ともいふなりけり。しかるに暮雨巷の門人麒六なる者の家につたへとゞむる一巻の哥仙あり。これは往昔竹葉軒のあるじの、翁を招きて其日になれるものにして、其坐の荷兮が筆したるまゝに遺せる也。いづれの集に出たりとも見えず。されば暮雨巷の曉臺子、是ををしみ是を尊みて、社中をかたらひて四巻の哥仙をつらね、再尾張五歌仙を継むとす。稿なりて閲するに、誰かは狗の尾をもつて貂を続たりといふべき。祖翁の魂もしかへりきたるとも、青眼にして賞し給はむ。今人なしといふべからず。實に本州の面起すともいふべし。浄寫に臨て予に一語をそへよと請はる。嗟乎是また蕉門の盛事也。何ぞ口を噤んやと、年は明和の五めぐり、龍證方に集る、頃もあひに逢ふ冬の日の短き筆さしぬらして、聊責をふさぐとしかり。

郭公文臺記

郭公の文臺は、名におふ二見潟の浪に立並ばむとにはあらず。昔持ける文臺は、世を遁れかくれ入ける頃、今は蓬がもとに客をかぞへて、奈良茶たくべき身にもあらず、さらば不用の物はなきこそまさらめと、ほしがる人に打くれて過ける程も二十年に近し。通日蓼哉なるをのこ訪ひきて物語ける序に、此菴に此物なきは寺に鉦なき心地ぞする、かばかりの物一ッ何の所せきとかあらむ、かゝるとよく心得たる者あれば翁のために造らせんと、しひてすゝむ。げに思へば必懐紙を置のみにあらず、坐右にあらばよろづにたよりよきともあるべし。長明が車につみて、建つ崩しつ、とそぎたる方丈にだにも、折琴継琵琶を貯たるためしを思ふに、あらばさてありなむ。さるにても今世に此道の行はるゝとや、凡心なき惣内杢兵が徒まで、家に一脚の二見なきは稀なり。さるから裏書ゝゝの望たえず。老の手もたゆきばかり、夢にも見え幻にも立がごく、いとむづかし。只晝もうらがきもなき物あらばやと、この一脚を新製して葟廬の藏物とはなせる也。身の後に財のこるは吉田の法師も憎しが、心とめけむと云べき程にもあらず、よからぬ物をとの

誇りもあらじ。且此名をかくよぶは、もし見る人あらば見てしるべきのみ。

一聲や二見にかよふほとゝぎす

白藏主贊

醫者の若死少からず。出家の地獄さぞあるべし。人の口ばたの飯粒を笑はむより、まづ我が鼻毛をかへり見るべし。

異見いふ尻に尾花や白藏主

櫻の句小序

松井氏壽菴の主の、こゝに千もとの櫻を植る心や、只遊人の興を誘ふのみにあらず、おのづから精舍にたよりて佛緣をもむすばしめむとするにあり。剩四方に櫻の句を請集て、永く寶前にとゞめむとす。其志なるに及て予に小序の需あり。我きく、後京極攝政殿のうたに、むかし誰かゝる櫻のたねをうゑてよしのを春の山となしけむ、と。是を以てしる、万世の後も花見む人の植にしもとのぬしを慕ふことを。よし野には其人をしらず。こゝには其人いちじるし。されば不朽の名をうゝるといふべし。我が短才なる、他のいふべきことをしらず、只此一句を擧て、願主の勞の後の世に傳てむなしからざることを賀す。是をも小序といはゞいふべし。

今植る櫻や世ゝの春の雲

八橋集序

はるばるきぬるあとの年月にはあらず。きのふはけふのむかし男ありけり。參河に序草とよばれて風雅に耽るあまり、此國に迹ふる名によりて八橋集選んと思ひわたりしが、たのむまじき世のはかなくも水行川の泡と消て、かけはてざりしうらみの捨がたしとて、二三の門人遺志をつぎたして、かく一部の功なりぬ。されば名をかりて容はからず。必しも蜘手にかけし姿にかゝはらで、只四季の表をならべて、是を八ッわたせる也。是且選者の洒落なるべし。我は其澤にさく花の紫のゆかりにもあらねど、ありし世には物いひかはし、此集のあらましをもかたりものせし言の葉のつましあれば、小序を請はる。老のまさなごと何のはえかあらむと、辭するも辭し得ず。すゞろごとを書て贈るに、猶謝していふことあり。驪馬の車にのらずばと青雲をのぞみしかしこき人のしわざには似ず、かの順禮といふものゝ行過がてにははゞからずふでとりて、かくあらたなる八橋にもはしたなく物かきつく。我只かれがたぐひならじ。もし見苦しと人の憎まば、橋守の心にまかせてけづりさらむも、よしや安かるべし。

拾レ扇說

人の手より得るを賜といひ、交易して得るを賂ると云。もらへば謝するの禮あり。買へば價に高下の論あり。二ツのせわをはなれて拾ふといふ幸あり。住吉の濱の小貝も、秋の山路の落栗も、ひろふは拾ふ物ながら、それはあるべき所にあれば、幸のきたには及ばず。思ひかけざるところに得るを、天の與へともいひて、人のよろこぶとなるをや。されば慾に爪長きをのこは、天もあたへぬ物を望て、くらがりに狗子をつかみ、牛の糞に手を汚す。求ては得がたきならひ、かゝる愚人は論するに足らず。金銀を拾ふは、ことに幸の甚しきに似たれど、それは落したる人に穴があきて、身上破滅に及ぶもあれば、心ある人は其ぬしを尋て戻し、又は心のねぢけ人はかくして戻さぬ不埒もあれば、其ぬしの怨をおひ、世話を拾ふ筋ともたり。災を拾ふ端とも成ぬべし。このごろ知樂舍の主人、途に一柄の扇を拾へり。是人の落したる物ながら、其ぬしはたゞ腰を撫て、是はといひたるばかりにして、さして惜しとも妬しとも思ふべからず。世に澤山なる拾ひ物ながら、其畫は松竹華花にもあらず、鯉の龍門に登れる畫とぞ。されば此人の心につねに願望のかゝれるありて、天にも神にも祈る中に、此登龍門の吉兆を得たるとをたのもしき物にして、歡ぶと大かたならず。むべなりや其知樂舍の号も、もとは其住るあたりの青木川の鯉によりて名づけたる謂あればならし。さるや怪みを見ても恠まざれば、其あやしみ破るとぞ。よろこびを見てよろこばゞ、其悦はた空しからじ。頃は霜解て梅咲折なれば、戯てかくいひ贈る。

鯉はさぞな烏賊さへのぼる春の雲

「戯ニ八龜」

五十やら六十やら、七寺の裏に八龜と名のれども、はつきと年のしれざれば、厄年もいつなりしや。有卦に入るやら、むけたやら。泥田に棒の土性か、膝皿から出る火性か、金性にてはあらざるべし。かくては年の賀も祝はれず。先生にはあるまじきとなり。いざや年を定めむと連中いひ合せて目利講をもよほし、さすり佛のごとく先生をすゑて各入札をするに、其さま、年の古びやう、所せん了簡をやめて、くる年を生れ年とし、六十一歳本卦のかへり、みづのとの丑(享保十八年)もう〳〵是にうつておけ、しやん〳〵と埒あけぬ。世はこのごろ年忘の最中に、わすれた年を定むるも定めなき世の中やと觀念して笑ひける人の、

今迄ははつきとしれぬ生れ年

けふ定まるも又時節菴

三鴉集序

信濃なる駒が嶽は、名におふ富士の俤して、四時の雪たえず。花の名所と呼る吉野も、卯月のあらしに吹ちらされ、淀のわたりの郭公も聲とゞまらず。須磨更科の月といへど、山にかくれてあとの闇は、よのつねにかはることなし。よそにはなき雪をとゞめてこそ、誠に雪の名所ともいふべけれ。されども歌人の目にいらず。淺間の煙にだに立おとれる詠を惜みて、此國に好事の三士、集作りて世に挑けむとす。集成りて題號を三鴉とはいかに。されば古今集に三鳥の傳ありて、それは安からぬ習なるよし。今又こゝに三鴉の傳あり。そも此撰者三人の各羽の字を以名とせる、いまだ其羽はいづれの鳥とも定らざりしが、いでや今定めむとするに、もとより異國のことはとはず、我朝にても春ぞ秋ぞと季節あるものはむづかし。あるは山にかたより、水にのみ住るは不自由なり。さらばかたよらぬ常住の物をえらぶに、寉の羽は仙人くさく、鷹は猛くて寂しみなし。まして鳶のむくつけなる、鷄は山野にわたらず、鳩は不情に、雀はいそがし。只月にうかれて夜もすがらいも寢ず、雪の寒きにも朝起する鴉の羽こそ、俳諧に借るべき物にありけれと、終に此羽は此鳥に定りぬ。さてこそ烏羽玉のひかりさして、此集も世にはかゞやくならむ。是此三鳥の傳にして、我はた幸にきくことを得たり。歌學者の三鳥は、われのみしりて意地わろく人にをしへぬがうるさければ、此序に是をあらはして、撰者のもとめにかふるとしかいふ。

笠の次手序

東羽に花雲師は、予と時をおなじうし、好む所も同じうして、只其國のおなじからざる故に、つひに半面の識ともならず。わづかに紙筆に風雅を通ずれども、それさへ幾重の山を隔、海を渉れば、あるは洪喬が不埒にあふこともなきにあらず。されども芦垣のまぢかくて心のうとからむよりは、荻の葉の稀なる音信も、心のしたしきは老を慰む友なるべし。一日假初に畫ねのひぢを曲たる漆園の胡蝶にもあらで、人もすさめぬ身は似合しき蠅となりてたはむれしが、そこにも一顆の玉の上に卒然として立とまりたるを、我ながらおほけなく、物汚したる心地して夢さめぬ。蠅や我ならん、われや蠅ならんと分別いまだ定らざる所に、花雲師の消息いたりぬ。緘を披けば、されば こそ書中にいへることあり。師會て掛錫の所ゝ、或は其地に問訊の句どもを解て、笠の次手といへる一集梓行の志あり。予に其小序

をそへよとぞ。先づ名を聞てより其集の
王なるべき佛こそおしはからるれ。さる
に其地には文人の輻輳する東都にもいと
近し。金蘭の序文は得るも易かりぬべき
を、雲水遠き弊邑の老拙に請るゝとや。
たとへば崑山の下に居ながら、遥の鞍馬
に便して燧石を求るがごとし。實に不才の
あたらざるを以て辭せむとするに、彼の
思ひ合する夢あり。天已に是を定め、物
已に知りて遁るまじきを論すにこそと、
只此物がたりを述て其せめに代ふ。思ふ
にまた其蠅の、かゝる笠の次手を得て、驥
尾につき千里に蹤を遺さむは、李漢が、
韓文に序かきて世にしらるゝためしにも
似たりと、厚顔に筆とりて雁の翅を勞す
るとしかり。

法樂俳諧序

聞説、むかし頓阿法師、みづから百體の人丸の聖像をきざみて殘せしが、今も世にちりぼひて、たま〳〵和歌者流の家に求得れば、こよなうかしづきもてはやしけるとぞ。過日黒田氏釜月子の手にかの一體を求出せり。黒田氏嘗て城南前津の里に別荘あり。此地に名におふ富士の高根を、こと山の間よりわづかに望めば、かねて富士見原ともいへりけり。釜月子の嚴父、過し寛延の頃ほひ韓使の朝にきたりける時、異客の手に請ひて第一樓の三字をかゝしめ、則此別莊の號とす。此樓の向ふ所、富士はさら也、其餘參州の猿投信州の御ゝ嶽駒が嶽まで皆一望の内にいる。南に指をうつせば、熱田鳴海潟より、すべて當國の歌枕なるもの、十にして七八を斗（かぞ）ふ。實に府下の第一樓なる哉。さればかの聖像をこゝに安置し、あけくれの富士にむかはしめ、石見潟高津の松に見果し日も、ふたゝびこゝにてらさむと也。しかるに主人、つねに俳諧の連歌に遊びて和歌は專とせず。そも俳諧は連歌に出、連歌はもとより和歌の流れにして、皆伯仲の風雅なれば、枝こそわかれたれ、根はおなじ柿の本の、何ぞ白眼し給はむやと、いま一卷の俳諧をつらねて法樂に供へんとす。連衆已に定りて、予が老たるを以て小序の求あり。薄劣のあたらざるを慙て辭せんとするに、またおもへらく、實に世の諺に年役といひ若役といへる、手足を勞し働くわざは若役の請とりにして、居ながらなす業は多く老年の課役となれり。今や一坐に頭をめぐらすに、あぢきなきかな齢は吾が右に出る人なし。よしや鬢髭を染て、わかとのばらと競はむは、たとへ病衰の思ふとも叶はじ。眼鏡にしばし筆をとらむは、難きより見れば易かりぬべしと、鄙陋はみづから年に許して、こちたくも此日の序

者となんぬ。

舎螢挽哥并序

今年寛暦甲申の五月、是非菴舎螢身まかりぬ。舊知各追悼の句を賦し、惜み歎くもむべなる哉。年頃夜話亭に風雅を學び、其志厚きより、文會必此人を欠ず。予もまた親しく草廬を訪はれて、句あればともに支吾を定め、吟ずれば互に敲推を論ぜし、今更に往事を思へば、老涙しばしば白鬚をうるほす。聊挽詞を諷て曰、

句ノ中所謂藟子者、生前所嗜、勸酒必爲下物、且石榴一株、嘗與予今猶存庭畔。

其齢なほわかし
此わかれなんぞはからむ
面影をしたへば　暁の月枕にのこり
音信をまてば　夕の嵐簷にたえぬ
忍ぶ涙を添ふさつきあめ
歸らぬ魂を喚ぶほとゝぎす
手向の藟子　酒むなしくあり
記念の石榴　露おのづからうるほふ
仇なりやさて
怨むべしあゝ
短夜やうそと見なほす夢もなき

巴雀、木兒三吟十二表長歌行の奥書

我が祖父野双翁、其世に季吟老人の門に學びて、吟老人及び湖春と兩吟三吟の二百韻をとゞめて家にあり。さるは延寶八年野双の齢四十四歳。今七十年の後是を見るに、其たのしむ心一ながらも、風躰まとに今とおなじからず。我又此道に遊ぶが故に當時尾城の兩宗匠をかたらひて、賡て一巻の三吟をとゞむ。嗟呼又七十年の後に至らば、今のつるぎ棊刀とやならむ。さらば今の棊刀のひかりあらたまりて、紫氣の斗邊を射るべきもいさしるべからず。されば子孫の古きを慕はゞ、是ぞ風雅の變遷をしれと、あはせて靑氈の櫃に納めおくとになむ。

寛延三年庚午にあり。紫隱里野有四十九齢の秋八月、知雨亭に筆をとる。



うづら衣　續編　下

嘲レ蚊辭

おのが身ひとつは、たゞ塵ひぢの幽なる物ながら、類を引群をなし、夕のせどに柱を立、軒端に雷の聲をなし、貴賤の肌をなやますより、世に蚊帳といふ物を以て汝を防ぎ、末〻の品に至るまで、誰か一鈞の紙帳をもたざるべき。積りて世の費いくばくぞや。されば虻の利觜蜂の毒尾も、しひて人を害せむともせず。既に仇の逼る時、是をもて防がんとするは、人の刀鎗を帶するにひとし。汝が針は只人の油断をうかゞひ、ひとり口腹のためにむさぼらんとす。たま〳〵蜘の巣につゝまれ、人の手に握られて、其針を出すことあたはず。然れば巾着切のはさみには劣れり。今宵一把の杉の葉をたいて、端居をこゝちよくせんとすれど、猶も透間をうかゞふ憎さに、おとなげなきわざながら、紙燭さして汝を駈る。ひとへに汝が業火なれば、他をうらむ事あるべからず。さるにても淺ましき汝が身を觀ずれば、

火をとりに來ぬ蚊は人に燒れけり

送二其常一辭

浮藻の花のあふつわかれつ、さるは仕官の常ながら、きのふまで待れし身の、まだ笠紐のあともうせぬに、けふは見送りの席につらなりて、盃を上て贐歌をとなふ。各餞別は今年竹に祝詞をよせて、是より無事の便をのみ。

まつといふ名はそひものぞことし竹

蟬引

三伏の日ざかりの暑さにたえがたくて、

蟬あつし松きらばやとおもふまで

と口ずさびし日數も程なく立かはりて、やゝ秋風に其聲のへり行ほど、さすが哀におもひかへして、

死のこれ一ッばかりは秋の蟬

賀二某剃髮一文

漁父が曰、柳は物に凝滞せず、よく春秋の風にしたがふと。さるも官路にある中は、身を淸からんとては世にさからひて

人に憎まれ、身も安からんとては世にへつらひて心に耻かし。今や浮世の譽をはらひて、二ッの間に住安き人あり。

滄浪の水すめらば頭巾あらふべし

星夕賦

今宵は星の逢夜なりとて、小娘どもの暮待かねて、帶帷子も常ならずそうぞきつれて、硯洗ひ、梶の葉求め、笹に短冊し、竿に糸懸るなど、此節句斗に殊にをかしきを、いかで清少納言はあやめにしかずとは定めけむ。人間のさゝやきは、天の聞こと雷の如しとか。星のむつことは二階の耳へも洩さず、天上下界のたがひめこそ殊にねたましけれ。ことしはまだき秋の名の、みな月のなかばに立そめて、けふくれ行月も影さやかに、端居の袖もすゞしきに、一人の客西瓜によりそひて、我はた星にむかひて何の願かあらん、あはれ此西瓜の赤くてあれかしとおもふこそ、さしあたりてのねがひなれといふ。かたへの翁打わらひて、おもへばかの樂天が、海底の魚も、天上の鳥も、高くとも射つべく、ふかくとも釣べし、たゞあひむかひて咫尺の間もはかりがたしといひしは、たゞ此西瓜の事にこそありけれ。されど織女にいのらむは、門たがへにもやあらんとて、

赤かれと西瓜いのらむ龍田姫

とおもひかけぬ山姫をおどろかして、ほしの手向はなくてぞやみにける。

七景記

知雨亭とは嚮に其譯(本ノマヽ)たゞはへるが如く、務觀が詩によせて靜なる心をいへり。今又半掃庵とは、我物くさの明くれ、掃日よりは、はかぬ日多く、床は塵、庭は落葉に任せがちなる庵のだゝくさをいふ也けり。名は二ッにして物二ッならず。さればこれに七景を撰ぶ。

東嶺孤月　路傍古松　蓬丘畑樹
海天歸雁　龍興寺鐘　市門曉鷄
隣舍春歌

東嶺孤月とは、嶺は三河の猿投山なり。遥き山ゝの夫より北につらなりて、此山のあはひより、十月ばかりのよく晴たるには、士峯のいたゞきもみゆる事あり。夫かあらぬかと昔は人の疑しが、寶永の頃かの山の焼ける時、夫とは定まりしかと古き人のいへりけり。さればさなげ山とは、名のをかしくて歌などにも讀べきを、文字を猿投と書けるは少しくちをし。たゞ万葉にぞかゝまほしけれ。されど目には猿の名もよそならず。ほとゝぎすも蜀魂と書、朝がほも牽牛とかけば、むくつけきたぐひにや。清氏の女も畫にかきておとるものといひしが、字に書て劣る

さたはなし。月は夜の長短によりて此山の南北より出て、清光ことにさはる物なし。此府下に月の名所をえらまば、此地をこそいふべかりける。

路傍古松とは、世に七本松とよべり。あるは相生めきてたてるもあり、又程へだゝりてみゆるもあり。染ぬ時雨のゆふべ、積る雪の朝、ながめことに勝れたり。草薙の御劔のむかし語を追ひて、もしは此七ッを以て辛崎の一ッにかへむといふ人ありとも、我は更におもひかへじ。

蓬丘蓬樹は則熱田の御社なり。高藏の杜は猶ちかくて、春の霞秋の嵐、此亭の南の観、たゞ此景にとゞまる。しばらく杖を曳ば、あけの華表も木の間にみゆめり。

鳴海は熱田につらなりて、松風の里夜寒の里呼續濱星崎など、我國の歌枕は、皆此あたりにあつめたり。すべて是熱田の浦邊なれば、海づらもやゝみゆべきほどなれども、家店にさわり森にへだちて、一望のうちにいらず。されば、

海天新雁も此あたりをいへるなりけり。

龍興寺鐘は庵の東、よき程に隔たる木立一村の禪林なり。ある日客ありて物語しける折しも、此鐘のつく〳〵と雲よりつたふを聞て、問て曰、けふ此聲の殊に身にしめる、何ぞ然るやと。我是に答て曰、客もかの廿年の昔をしるならん。此あたりはしばし歌舞の遊里となりて、あけ暮糸竹のえむをあらそひ、月雪花もたゞ少年醉客の遊にうばゝれしが、其世は此鐘の曉ごとに別を告て、幾衣ゝの腸をたちけむ。世かはり事あらたまりて、今は其形だになく、蛾眉蟬鬢も今いづくんかあるや。さればつく人に心なくとも、聞人の耳にのこりて遺響を悲風に託せるならんと。客も實と聞て、かついたみ、かつ笑ひにき。さてや、

市門の曉鷄は、此西の方あやしの小借屋といふ物軒をならべ、おのがさま〳〵の世渡り倖しげなれど、かゝればおのづから遠里小野のかばかりの聲も、事かゝね程に音づれ、はか〳〵敷商人は來らね共、海老鰯小貝やうの物名のりて過る事も明くれなり。さればたま〳〵とふ人ありて、みさかなに何よけんなど、一盃をすゝむるには、こゆるぎのいそぎありかねども、居ながら求得る日も有べし。家ゐは是より市門へつらなれば、曉の鳥も枕につたへて、老のね覺のちからとはなれる也。

隣舍の舂歌は、もとよりの農家の間なればいふにも及ばず。かのからうすのこほ〳〵となりし夕がほの隣どのは、なほゆたかなる家ゐにてもやありけん。こゝらはたゞ手杵の業わびしく、麥の秋稻の秋、あはれは砧の丁東にもゆづらず。是をまじへて七景とはなせりけり。さるはいと

をこがましく、遼東の豕にも似たれど、賞心は必しも山水の奇絶にもよらじ。名にしおふみの人のみるとも、おのが八所の厚味にあかば、かゝる淡薄のけしきも又めづらしきにめでゝ、一たびの目をとゞめざらめや。

不美庵記

經がたくみゆる世に、わびてはすむらん月をうらやみ、過にし方の戀しさには、伊勢や尾張の波をもうらやみけん。月も浪もおのれ人にうらやまれんとは思はぬを、心に物の叶はざるには、無情の物だにうらやむ世の人心なりけらし。されば身に富あまり、幸心のまゝにしては、只事毎につきて、他にうらやまれんとのみおもふこそ、くるしきならひなれ。我此草の庵のことそぎたる、更に羨む人なければ、我また爰に事たりて、他をうらやめる心なし。人此庵を思ふにも、我他のうへを思ふにも、ともに不美の庵にして、自他の境をわくべからず。若此うらやまざるを美む人ありとも、我はたゞうらやまれんとの心にはあらず。

讓二菴名一文

鯉とは魚の名なり。大聖取て御子の名とし給へり。虎は獸なり。名を大磯の妓女にとらる。鯉の意よろこぶにあらず、虎はたこれを怒らんや。不美庵とは我昔しばしつき捨つる號なるを、はたして羨む人ありて、請うて其居に呼ばむとす。我かの鯉と虎とにならひて、よろこぶにあらず、をしみもせず、たはぶれて是に答ふ。

さかばさけつきすてし名を手鞠花

水音舍記

鈴木氏某が居、みづから名づけて水音舍とよぶ。其よぶこと他にあらず。家に久しく傳たる翁の自畫賛あり。かの古池の蛙をかける也。あるじの祕藏むべなるかな。そもや雷霆の百里に轟くも、過れば人の耳にも殘らず。此古池の水の音は、翁の耳に入て口にいづ。其音また人の耳にひゞきて、正風大悟の一句なりとぞ傳へて口にいふ事やまず。耳に入口にいひ、又耳に入口にはいへども、目にかの昔をみんとする者、今深川の陳迹はたづねても、世うつり人すみかはりて、いづこか夫としる人もなし。たとへば今うつさんとするも、たえてその池なければ、いかに能畫のたくみをなせりとも、皆他の池にして此池にはあらず。さればたゞ是をみん物、ひとり自畫の一軸にあるべし。アヽ此家の風雅を守りて、高く雲井に虹をはくは遠し。此風を望まん者誰か此水音舍をしらざるべき。

青白舍記

壘は常に青かるべし。障子行燈は白をいとはず。清きことその内にあり。其居清ければ、佳人の心すなはち清し。あるじもとより風月に遊べり。口に風雅をいふとても、清からざれば佳句を得がたし。昔阮籍が我まゝにして、すく友とすかぬ人に二色の眼をつかひたるは、つらくせわるき名に立て、人又かれに白眼せざらんや。青白さらに此名によらず。今壮年の官路にたゝむには、友に善悪はえらむとも、只よく衆に交りて禮を忘れず、心に忠を存べくば、かの霜雪のしろきをえて、松はいよ〳〵青かるべし。道なんぞ風雅をたのまむ、風雅なんぞ道をそこなはん。あけては金城に登って青雲の志たわまず、暮ては閑居に休て白露のさびをたのしみ、ながく青白舍の主ならむには、青白舍の名空しからじとぞ。

七不思議後序

和歌に西行あり、連歌に宗祇あり、俳諧に芭蕉翁ありて、三筋ニ道はわかれども、皆雲水に境界をよす。文人騒士其跡はゆかしむものから、殊に俳諧する人の、杖草鞋のさびをしたひ、四方の志を専とするより、今や松嶋象潟をもいまだ見ずといふ俳諧師は、世に開眼せぬ佛の如く、痴せざる娘のごとし。されども家業に手のひかれず、仕官に脚をほだされて、本意をとげぬも又多し。我はた其とげぬものゝ一ッなり。布袋庵の主人は世に素封の名をしられ、もとより風雅に富れば、身健に年壮にして何ぞ雌伏をなすべきやと、年ゝ東西の旅になぐさみ、ことし又こしの七不思議みんとおもひたてるも、此人にして此病、さらに不思議にはあらざりけり。さればめでたき御代に俳諧の行はるゝことや、西行に宿をしみし江口の君のつれなさもなく、宗祇に髭をこひし盗賊のおそれもなし。行先〳〵に同志の徒ありて鷄黍の約をなさゞれども、草履を倒にはき、鉢の木をも蚊遣にたきて、まめやかにもてなし、手より手へおくらるゝ事、紀行を見てしんぬべし。主人紀行の稿を示すに、末に二三葉の白を餘したるは、予に物書そへよとの設なりとぞ。されど染べき一ことの葉もつや〳〵おもひよらず。たゞおもふに主人の遠遊に耽る、歸郷のけふも猶越の旅寐のこし方やをしむらんと、句一ッ書て贈る。

捨かねん扇もこしの馴染より

贈ニ曉吾ニ辭

曉吾子は、我きく公の悲歡丁ど五十年、盧生が夢の勘定さらりと済して、老を告

致仕をこふに、勤勞むなしからず、其子に職祿をうつし給はりて、けふや衣食住の求もいらぬ有がたき隱居とはなりぬ。同じ穴の狐、これをよろこびていひ贈る。

梅雨晴や世を卯の花は跡の事

菴記 應三院吾齋一

緡蠻たる黃鳥の丘隅に止るも、止るは其栖なり。世に雲水を追ふ僧侶の、一所不住を事とするは、假の宿にも心とむまじとにや。夫だにも年老足弱らば、止る栖なくてやは有べき。恒の栖なき時は恒の心靜ならず。むべなり、此翁のこの菴むすべることや。子あり姉ありて朝夕の餐を饋れば、維摩の三万二千はしらず、安置する物佛一たい、行灯一ッ、簫一本、茶瓶は火燵にかくべく、硯は机に屬すべし。臥具を納る櫝あり、書籍をあぐる架あり。膝を容るにいと安し。風雨の防、座臥の役、いくばくの晷をか費すべき。是たゞ姑く支躰の爲にして、心は無邊の天地に遊べば、世人はこれを狹しといふとも、あるじは猶ひろしとぞいふなりける。

蚊屋つりてなほあまりあり草の庵

蝸牛齋頌

梢による物は風のおそれあり、土にかくるゝ物は雨のうれひ有。かの蓮胤が車二ッにつむといひしも、猶此ものゝ安きにはしかず。あるじはこれにならふものか。

巢でもなく穴にもあらず蝸牛

黃岡亭記

世の求る所、衣食住の三ッありて、一日もなくては叶はず。されど心をして淸からしめ、心をして靜ならしむるは、只樓ゝ所によれる事、かの江南の橘のたぐひあらざらんや。我きけり、此亭は西南に望をひらき、其まゝに月もたのまじ と翁の吟を殘されける伊吹の嶽は殊にしるし。南宮の山つらなり、養老の瀧一眸に入る。眼下は千町田かぎりなく、村落よきほどにへだゝれば、春は雲雀の雲に啼、秋は砧の月に音なふ。螢飛ぶ夜は欄によりて班女が扇をわすれ、雪つもる朝は爐に坐して淸女が簾を挑て、四時の農業目をたのしましむる外、岐山の街道もこゝによれば、通ふ市人の負ふ者うたひ行者、おのがさまゝゝなり。かれはせわしき世わたりならんも、よそにみる目はいそがしからず。東には岐岨川ながれて、とわたる舟の榜の音も夜半の枕にひゞくとぞ。されば歌人の題する物、詩客の吟に入る所、こゝにとりてあまり有。此頃人ありて此亭に名を求、且記をもとむ。辭する事度ゝなれば、請ふこと又度ゝなり。しかれば我猶きける事あり。此居の北にめぐ

りて竹の林しけれり、大なる物椽のごとしと。是ぞ此家のときはを守りて、あるじの千代の友ならんには、かの地に是をなぞらへて楽齋に黄岡亭とよぶ。たゞ我聞てめにはみず、心に察して筆に寫す。もし此言のかなふべくば、取て此亭の記とすべし。もし此言のあたらずんば、よし酒瓶に蓋してやみなむ。やみね〳〵、重ねておれを煩はす事なかれ。

名㆓茶杓㆒辭

茶杓に名を付て得させよといふ人あり。其いふ人はわが此道によらざるをしりていふなれば、おもしろくおぼえて、雪の夜と書て贈る。君しるや、雪はしろく夜は寒し。

　茶にたわむ竹や雪より猶寒し

飛鳥山賦

けふはこの事かの事にさはる事あり、あすは飛鳥山の花みん〳〵と心に過る日數も、やゝ彌生の廿日あまり、尋し花は名殘なくちりて、染かはる若葉の其色としもなきを、春を惜む遊人は我のみにもあらず。爰に酒のみ、かしこにうたひて、此夕暮に歸るさわするゝも、中〳〵心ふかきかたにおもひなさる。

　ちり殘る茶屋はまだあり花のもと

山下千里のまなじり、さはる物なく、らう〳〵と霞わたれる田野村落の詠、えならず。きせるをくゆらすこと暫時あり。

　雲雀より田打へ遠し山の上

贈㆓所㆑訪不㆑遇人㆒文

安達が原の闇ならずも、さしもしのびし蓬生の隱家を、留守のすき間に見顯はされたる、ねたきわざなれ。菴もりける男の思ひがけなくて、顏は目ばかりになりて、おどろきまどひぬらんさまも、思ひやるにをかしかりけり。さるもあるじのいたらましかば、椎の葉にもるもてなしもすべきをと、今さらいひたらんは、かの千切木といふ猿樂狂言の心地やせん。秋もやゝくれぬ。時雨のやどりはさらにして、友おもはるゝ雪もあらざらんや。かさねて夜うちの油斷すべからずと、茶碗とゝのへ、きせる求めて、是よりひそかに人待心はならひ侍り。猶菊によせて句を殘し給へる楚巾子へいひつかはす。

　犬蓼のはなやとがめし留守の門

芭蕉によせて句を殘し給ひし芦丈子へ贈る。

　いかにとひし立枝も見えぬ梅もどき

望鱸亭記　應㆓永田氏需㆒

目に視る所にして思是に從ふとは古人の言なりかし。されば世の人の住する所、

或は山林にむかひ江湖を望むを以て其居に誇れども、官士の上に於て此望にこゝろをとめば、いでや印を解き冠をかけばやと、世を逃尻の心も誘べし。孟母の折〻借屋替も只それなり。永田氏の居宅は、城樓を望みて金鯱常に軒に輝き、朝日夕日の詠となりとて主人是を愛し、則望鯱の號を揭ぐ。愛するも誠にむべなり。官路に立、青雲の志ある眼に、常にかしこき御座所を仰げば、世祿の高恩忘るゝとなく、報國の忠情日〻に撓むべからず。かくて功なり名とげて後こそ、子孫に長く傳讓りて、かの山林江湖に望をうつしかへ、殘生をも安く養はめ。今は此望何かは是にしかむ。主人此記を求てゆるさず。筆にまかせて其責をふさぐ。人嗚呼なりと笑はむもよしや。請はるゝよりも笑はるゝは身に安ければなり。

訪二以文一辭

以文子君にしたがひたてまつりて、木曾路の夏げしき、名におふかけ橋寐覺の詠をつくして歸國の折しも、かねてあらたに家居をまうけ、此新宅に馬をとゞむ。さてもつりそめしかやの匂ひに、猶旅寐の心やせむ。今とに夏をむねとする物ずきに叶ひて、あるじの風流いかに心にくき住居ならんと、おもへばゆかしく、見ねばいよ〳〵なつかし。

生壁にまだ旅の香やほとゝぎす

嘯花誄

絃を斷、劍をかけしむかしの涙袖にしたゝりて、ことしぞ身一ッの秋とは歎かれぬる。さるは梅軒の嘯花子、いまた廿に三ッを一期とし、此中秋の月をも待たで故鄕の露と消ぬとつげこすにぞ、目に見えぬ風の音におどろくはたゞよのつねにして、ひとへに鳥の翅をかゝれたる悲、たとへていはんかたなし。誰かをしまざらん。此花子は武門の藝能他に勝れ、百事百成の器用のみか、深く蕉門の跡を慕ひ、過し頃は一日に千句の獨吟を試み、又は夏中百題の日發句をつらね、明暮風雲霜露に魂をなやまし、一たび此道の大悟せむとは常の諺なりしぞかし。我はたいかなるすくせなりけむ、斷金の交久しく、月の夜ばなし雪の朝會、其人もれて我をかしからず、我かけて花子たのしまず。さるを一坐の口くせに、花子は天象時節のけしきを好み、我は人事の上かちて、常に其ことをたはぶれにくみ、たま〳〵取かへたる句振有れば、是は我ながらそこの句をいひたり、それは我が句をそこのいはれたりなど、さるがひ興じけるも、はかなく一夜の夢とはなりけるよ。思ふに

かなし。ある年はそこの別墅にいざなはれて、夜をかさねたる清談をなし、あるは其山かしこの寺に、すべての行樂、杖をあひ合吸筒を荷ひて、露もたがふことなかりしながらひの、此春君の御恵によりて我はおもはぬ官にうつり、いとまなきにうちまぎれて風雅の會もひまありしが、卯月は旅の衣にぬぎかへて百里の東に別るゝ名殘、たゞにやは止むと、梅軒に半日の閑をぬすみて、かの山に花あり雪の郭公　と我を見立しに、四月になじむ菅笠の旅　といひつゝ猶我もまた、一しけり蔭そへて待て今年竹　と取あえぬ辭に、たがひの無事を祝しける中にも、世のあだなる習ひもあればと、かなしく額のうちまもられつるも、それは我身の上をこそ思ひつれ、花子はすぐれてすこやかなれば、かゝる歎を我聞かむとは思ひもかけざりしに、かくぞ定めなきとは始めて思ひ合されぬる。されば此別のかくあやしきまでに覺ゆるも、我にはことわりと人もおもひゆるすべし。若靈魂物しることあらば、粱月の夢にも見えて、此手向の蔵推を定めよ。嗚呼それ富士の雪は時有て消べし。此恨綿々として盡る期あるべからず。

供花　そちむけて魂まねかせな花すゝき

拜鐘　祉齋に泣袖もなき夜寒哉

草風誄

おとゝしの秋は此武藏のにありて、嘯花子が訃音に魂をけづり、今年もおなじ吾妻に下りて、祈るかひなき神無月に、草風子がはかなき便をきゝけるは、いかなることにや。其文披き見しには、餘りなる驚にや涙さへ落ず。たゞ空をのみうち詠められしを、猶さだかに夢ならざりけりと思ひしるにぞ、ほろ〳〵と袖はぬれそめぬる。過し秋の頃、けにいつの日なりけむ、いまだ旅立ほども定まらざりし頃、いたはりをとひ侍りけるに、其をりはたのもしく見なして、露落る萩か枝のかしらもかろげにもたげて、いでよこのごろは心地ち死ぬべく覺えたれば、辭世の句など思ひよせたるを、かゝることもむだ骨折となりぬべきなど、うちゑみきこえしを、あなゆゝし、かばかりのなやみに、いかでさることのあらん、今は日にそへてぞ力つき給ふべからん、たれかれなどかたらひて、やがて一夜の伽をし侍らんなど、さしむかひたる俤の、今更に目の前をさらず。猶ものにかんじたる氣色なれば、又こそといひて立つるが、それこそ長き別れとはなれりける。我嘯花子が誄かきしほどは、かたみに袖をぬらして、さるにても世に不思議なる人の終かなと、有まじきならひの樣に、おろかなる

までをしみあひけるを、間もなく又其人を、おなじむかしに見なしける、此恨みいかゞはせん。起て思ひ臥てかなしみ、空しく隣笛に腸を斷て、一句を手向るもゝのうけれど、

誠とはまだ思はれず初しぐれ

悼二鶴此一文

今年の秋にあはじとは、誰れに誓ひし命なりけむ。此水無月の晦日に櫻井氏鶴此身まかりぬ。かく短夜の短かるべき端なるにや、いまだ年も廿四ばかり、月花の哀も身にしむべきほどにもあらぬを、深く風雅に心を入て、其才の勝れたるのみか、只明暮のふるまひもまめやかに、人にもてはやされて、只此人を見ならへと、若き子持たりける親ゝは、異見の度のと草には引出されつるが、あはれ世にあらば蕉門にも一旗の大將とは、たしかに秀づべき器を、かゝる夏野の露と見なせし恨、けふ御祓せぬ人の袖も、誰が泪の川浪にしほゝざるべき。今は詮なきたまよばひして、牌前に一句を手向侍る。

こぬわかれあすの文月も片だより

悼二八龜一辭

時節庵のぬし身まかりぬ。馴むつみし年月を思へば、老涙さらに禁じがたし。我庵の巽にあたりて、其あだし野も遠からねば、夕べの霧かと立のぼるはかなき空を詠やりて、

蚊やりにも泣て見る野の煙かな

悼二五條坊一文

六ゝ菴に別れ、反喬舍世をさりし其折ゝの傷はさるとながら、猶此五條坊の健なる、忍山かひなき其世のことどもをも、かたみにいひ出て老を慰むつまともなりしを、名に呼れし葬のはかなき秋をだに待ず、此水無月の露と消し。惜むべし、悲べし。松竹卒に齢を譲らず、桃李もとよりものいはず。そも我けふよりして、誰れとゝもにかむかしを語らん。

なき友に泣くや心の羽ぬけ鳥

贈二信州松本射山一

姑山といふは、さきに宗匠某にうけえたる名なりとぞ。しかるに此となへの差合ど出來て、改名の字を予にもとむ。されば此名を思ふに、めでたき姑射山の字を摘てかくはいひしならむ。しからば上の一字を置かへて射山とやいはむ、下の一字をあらためて姑峯とやいはむ。いづれももとの意は失はじ。二ッに一ッを定めむは、ぬしの撰にあるべしと、筆の序にかくいふ。

おなじ山たゞ名をかへて呼子鳥

興レ某文

好て豪飲に耽る人あり。いかに思ひよるとか有けん、忽八仙の仲まを遁れて、今よりはいたく醉はじと固く誓けるが、猶行末の亂、我ながらうしろめたし。坐右に守るべき語を書て得させよと請。我はもとより下戸なり。醉て面白きやらん、止てよきやらん、其心に闘はらず。されども其責のいと切なれば、いなびがたくてすゞろなる一句を筆す。

神もうけよ酒過さじとせし御祓

一老翁書賛

此畫は誰をうつせるならん。しひて名をつけてと望まる。容貌うたがふらくは、陶氏に髣髴たり。されども例の菊なきはいかに。嗚呼我是をしれり。東籬すでに霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる頃か。是を更に冬淵明とはいふなるべし。

菊とりし手もふところや霜の朝

定二茶名一文

茶をあらたに製して、名をいかゞ定めむと我にかたらふに、とりあへず雜の一句を筆に任せて、

茶の下をあふぐ片手は枕かな

さればたまくらともいはゞや。

醉鶴亭記

こゝに吳竹の世ゝ經たる酒肆あり。さるは臨邛にかけむかひのわびしき店には似るべくもあらず。又六が杉葉常盤の色深く、碓のこだま花紅葉をうなづかせ、土藏の白壁雪を奪ふ。其あるじ又風雅にさへ富ば・騷人とにこゝにたよるに、酒債尋常行處にありといひしは、つもる行への覺束なくも、毎日杖に百錢をかけて現金買のをのこゝそ、二季の帳をも騷がせず、たのもしき得意ならめ。されば暖簾には名におふ淺野屋の風を傳ふれど、猶一室に扁すべき號あらむとを予に求む。卒爾に醉鶴の二字を與ふ。其意いかにと問ふに、かの鸚鵡の盃を脫、金龜を解て價にあてしためしあれば、仙鶴を日ゝ五杯に醉しめて、もとよりかれが持合せの千年の齡を、酒手にこちへとる合点也と、且戲れ且祝して、あるじが爲に漫に筆を採る。

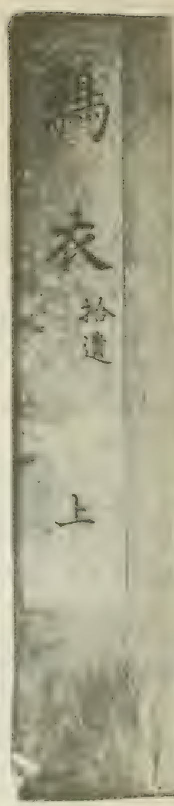
秋千居記

居所に號を定てと請ふ人あり。其人もとより名を楓夜とよぶ。楓は紅葉にて夜の錦にかよへるにや。實それ錦をきて夜行がごとしとは、富貴にして人にしられぬをしむ辭とぞ。されども其業を他に羨ませ誇る心のある人ならばこそ、白晝に面

をさゝげて、是見よかしのふるまひもすべけれ。身に徳あり家富まば、いかにかくろへたらんとも、世におのづからかくれなかるべし。さてこそ錦着て絅をうへにすとのかしこきをしへもある物を。我は只其夜の錦こそ床しけれ。物必尤からぬは長久の端なるをや。されば夜の楓の限りなき世ゝを祝して、千秋の二字に定めむとするに、其唱古くしてめづらしからず。此字を上下と置かふるにも、心おなじくして呼ぶ所聊あたらし。終に秋千居の三字を題して、此主の求にかふるとしかり。

也有翁の著述のふみ、鶉ごろもにつきぬとおもひつるに、猶かゝるめでたき錦繡のかゞやける衣ぞのこりたりける。いでや、さかさまに着し朝服より、葛巾山服の老の末まで、さる斑爛のいろにほこらず、てゝらふたのゝいやしきをすてず。常談俗語にこゝろをやりて常のすさみとせられしは、はづきにさらすほしぎぬの、すぐれてたかきこゝろとぞしられたる。あはれ六德そなへし君子にておはしけるを、十德きたる誹諧子とのみおもふめるは、ばくゑのをのみめにふれし、ふるぎの市のふみちがへなりけり。そも〱このふみは、なごやなる垂穗ぬしの篳笥のそこにかくしおかれしさいでなるを、袖おほくびととりならべて、衫にたけある衣とはなしつとぞ。かゝるみけしにおのれらが墨つくべくもおぼえざれど、ふるきとくいのこはるゝまゝに、此はたそでをかいけがすも、じちにかり着のまへしりへ、身にあひがたきことになむ。

竹柳園主人



宇都良衣　拾遺　上

壽亭記

むべなり、此亭にことぶきの名ある事。門に万里の湖を通じて、千艘の出入あした、一葉の行かふ夕、此によりて閑を求れば、軒端にたれて伴ふ鶴あり。酒をとゝのへて肴をよべば、俎板に生てはたらく鯛あり。さるは所の仙境に似て、漁村に近き自由なるべし。ましてやごとなき蘭の葉、桂の棹もこゝにうかぶ日は、枝も栄ゆるとうたひつれたる松風の里の松風も、濱の名にしおふ君が千年をや呼續ぬらん。もとより熱田渇蓬が嶋ゝはひわたるばかりかしこき神のめぐみはさらにして、塵外の佳觀にあそべば、世にありふれたる温飩蕎麦切も、爰に不老の薬となりて、ことさらに壽の一字の僞ならぬことわりをしるべしと也。

松に鶴さて新そばに雁の聲

須磨硯記　應二加賀島氏之需一

連城の珠は其徳を名とし、小烏の劍は來るいはれをしらせ、蟬折の笛はそのかたちの似たるをいふならん。それが中に此硯をあるじの須磨とよべる事は、此海の際に櫻の花を彫なせるが、名におふ若木の佛ありと也。けにおもしろし。此浦はむかし平家の陣をとりては、ものゝふの譽をあらそひ、又は源氏のかりのうつろひに、艶なる物語のあはれもそひて、武になつかしく文にゆかしきを、まして其六十帖も此卷より筆はたてそめて、もと末もとゝのほりぬとか。其人の名の紫なるに此石の紫なる、それも捨がたきゆかりなるべし。さればあるじのつれ〴〵のすさびに、みづから妙觀が刀をもて、これに覆へる物つくり、猶我に一語をそへよといふに、そのいふ人もいはるゝ我も、今年は吾嬬に旅客となりて、ともに故郷戀しきすさびに、美しくもかへる波かなと、此須磨の海の名にひかれて、つひに此記のぬしに成ぬ。いざや浦のみるめもはづかしけれど、よしあまの子のはかなきしわざと、其關守もとがめざるべし。

する墨や明くれ須磨の花ぐもり

鴉箴

孝は百行のもとゝこそきくに、かれは反哺の孝心はありながら、いかで啼聲をさへ不祥の物にゝくまれけむ。夫も夕ぐれの端居に、泊がらすの三ッ四ッつれたるは、清少納言もあはれとはみしを、まだ曉の鐘もならぬに、月夜あるきに起さわぎて、常に閨の夢をやぶり、かの楓橋の漁火に旅人の寐言をも驚しぬ。これらは人にかこたれながら、かへつて風雅の種となりて、烏丸殿の歌にもよまれべきが、田畑にむらがりては、麥をほぜり大根をつゝき、曾晳が隱居屋のなつめも、栗栖野の秘藏の柑子も、などいたづらにあらしけむ。然るに古きためしには、かの烏羽玉も汝が寶にて、名劍に小烏あり、おふけなくも日輪に三足のからすもおはしませば、さのみさがなき物ともおもひくたされず。されば一たび己を顧て、鵜の眞似をする僭上をやめ、鷺を烏の無理をたしなみ、烏麥烏瓜の備はりたる食もあれば、身を墨染の善心に發起して、今かくいへるしめしをも、よくあゝ〳〵と打うなづかば、あんかうからすのら烏うかれがらすの浮名もきえて、長くお烏大明神のめぐみかうむるべし。さらば鳴子の枝もならさず、案山子も弓を袋の世となりてん。ア、人の爲におそるべし、身のために愼むべし。

送咳氣神表 (于時在武州)

今年秋の初かぜ身にしみわたるより、老となく若きとなく疫氣になやみて、清濁(みすまし)の露草葉を爭ひ、穂薄のかしらふらつきて、喰物の味をもいさしら河のそれならずも、とめがたきせきに苦しみぬ。上は玉だれのひまより煎薬のかほりほのもるより、下はあやしの柴ふ(こゝ)る人までも、かしらをからけずといふ事なし。芝居入なうして、盆狂言の櫓幕いたづらにしぼり上、色里客たえて、夜見世の行燈かゝぐるによしなし。葛西の瓜畑も下冷に守る人なければ、隅田川の渡守も發熱にこがれ〳〵て、水關竿の細元でを流す。祈禱の法師も衰髪に忍辱の姿を失ひ、(宜)貴禰も祝詞の聲うらがれたり。醫者賣薬の門のみ賑ひて、きのふ剃の匕先も正氣散にやすむひまなく、かれらは時を得たるに似たれど、さして手柄の療治ならねば、はか〳〵敷薬代もよるまじ。噫此秋、いかなればかゝる災を下して吏民にくるしみをかけ給ふぞ。願くば天神地祇愛愍の眸をめぐらして、咳氣の邪神を速に西の海へ送り給へ。さらば臣等も幣帛のむづかしきわざはしらずとも、笹の葉にして切かけ、太鼓をならして及ばずながら

ちからを合せ奉るべしと、丹誠を抽て告奉る微志を、それみそなはし給へ。

菊合賦 與二成田某一

此あるじの菊作るにすける、すかずば誠にかくあらましや。されば作るべき花の、これならで何ならん。白は吉野の雲をなびかせ、黄は玉川の露をあらそふ。あるは二月の紅にまさり、あるは八橋の紫をうばひて、詩客の車を停むべし。昔をとこの袖もぬれなん。浅深濃淡の色はさら也、花形は百種の新奇を咲て、年〻に其目をおどろかし、國〻に其名を聞ゆ。むかし陶氏が菊に名立るは、只有のまゝの色香にとゞまりて、あるじのためにはいふべくもあらず。春の雨に鍬を入ては、栽るに槖陀が手をくだき、秋の霜に簾をあてゝ、凋むに佐國が心をなやます。むくつけき土大根だに恩をしる心あれば、まして年月の愛をかさねて、いかでか此宿の千年を守らざらん。いでや世に此花ありとも、此人あらずばこの色にさかじ。さらば此人ありとも、此花ならずば此色にさかじ。あるじや此あるじならん、菊や此あるじならんといふに、あるじは其譽を菊にゆづり、きくは其功を主ニ譲りて、この挨拶の果しなくば、世にいふ水懸論にして、秋やむなしく暮ぬらん。いざ我判者せんといふに、物定のはかせにはあらねど、只賦つくりて其日の笑とはなせりける。

蝶〳〵も土ふまぬ日やきく合

雪見賦

月華は其へだてなきを、雪見はひたぶるに下戸ならぬ物好ならん。さるは香爐峯に簾を捲き、こたつに目ばかり出したる、それも雪見といはゞいふべけれど、我門には是をとらず。いざころぶまでとながめし草鞋の跡を尋ねて、白妙なる夜の目もをかしからんと、たれかれの無差別づれ、いづこはあれど例の新地にぞ人は起居たらんと、南頭にあゆませいづるに、町はねぶかの所〻かほりて、酒屋饂飩の行燈にこそ、まづは目とゞまる夜のさまなれ。廓の門にさしかゝれば、おなじ心のうかれ人も見えず。月は師走の空すさまじくさえわたりて、はえあひたる雪も、さすがによそよりは身にしむ心地して、過し年武陽の其里にて、誰送られし下駄の跡と朝霜を詠捨しふるごと、今我ながらなつかしく、ふと打ずんじたるに、見もしらぬをのこの頭巾まぶかくあたゝかげに、木綿羽織にふくだみたるが、行過がてに耳とくもきゝとゞめて、げに此心ばへの浅からず面白くさぶらふと、打かへし吟じて、むかし伊勢の富倉屋とかいへ

ゐに住ける女の、なじみの客の別を見送りて、雪のあしたに立つくして、初雪やわがふところのさむる迄　と口ずさびしをぞ思ひ出侍る。今こゝらにも、さる情しれる女こそはね、口をしくこそと、なれ〳〵しげに語りて、やがて立別れぬ。いかなるものなりけん、名もとはず。さては今宵いづ方にてか酒一ッくまんといふに、蕉翁の前ならずも、雪に立よらば松尾の名もをかしと、つひに此門に下駄の歯をたゝきて、

面白の雪の蹴あけや小挑灯

旅論

俳諧は人ゝ笠草鞋の情を専にして、旅情をしらぬ人は風雅もいととほしくや。かはゆき子に旅をさせよとは、風雅に魂入よとの金言にぞ覺え侍る。誠に花鳥月雪は、うちあるさまにも有ぬべし。戀と旅とに深き哀はしるならひを、我十六の春やらん、始て伊勢に詣でゝ、わづかに六日ばかりの旅行をなせり。其頃風雅もかつてしらず、今のおもひ出とするにたらず。是より十とせの今にいたり、たゞ官路にのみ往來して、さらに旅だつ事なし。しかるに、川風寒み千鳥なく也の歌を唱れば、六月の晝中も寒く覺ゆると古人もいへりける。げにや妙句を吟ずれば其境の思はれ、其境を思へば新句を得る。予

瓜や汐のひかたの捨小舟　とはいともかしこき

御製なり。此捨小舟、玉敷の庭にある事をきかず。たゞおやしの箱（いひはゝき）といふものにいれて、葭垣の南うけ、又は井戸屋形の端にさし置たるをこそみれ。さるを、御製のめでたきをおもへば、目にみると、こゝろにしるの二ッならざるいはれならずや。其雲のうへにこちたくもたぐふるにあらねど、わが旅情の十が一ッもくみしるは、風雅の門を覗くによれり。抑明日の足をたばひて、くたびれぬさきに馬にたより、閑けんこの相詞をもて、行過がてに鶏のねをなし、物をおとさず、草鞋をぬがさず、茶屋の嫁ゝ泊の下女にもしこなして物いひたるさま、初心の者のうらやましと思へるばかり、旅になれたるわざならん。旅を家とし、千里を隣にかけたる者は、蓑休の店に[illegible]ても、やがていびきはかくなれ。只年わかき初たびこそ、其きはゝ物も手につかず。無用の證きせるに物ずきを盡し、笠草鞋も十日以前より鼻の先に掛置て、細川の説法きかじと、伯父の見舞に出違ひてそはつきあへるは、駒の朝はやり也。さるを故鄕の旅とおもへば、さすがに節分の豆、早船の守とさわがれて、少しは心の覺束なき方もあらん。出立は茶漬にはしらか

し、菅笠の緒の取いそぎたるも、さすがに堺川越る時心細く見かへるは、父母の國をはなるゝ誠也。案のごとくあゆみつかれては泊を待かね、わらぢの緒はときたれど、揚りはなに兩手をつき、やゝひざがらしらにて這あがり、居風呂によびたてらるゝも中ゝ物うきばかりにて、桶に手をかけぬれども、緣のいと高くおぼえて、横ざまにまろびこみたれば、四方はせばくて肩はすぼめたり。折釘に物かけるなど、つれのをとこに氣を付られ、財布の置所に迷ふ。あるは名物の小刀、仕出しの煙草入賣、ねぶたき耳にかしがましくて、木枕に横たわりてぞ一日のたのしみはおぼえぬ。心よき夢は七ッの鐘にゆすられ、起出る床のうさは戀の別にもまさりぬべし。鷄の聲もなきわたり、馬の鈴音などして、馬士のあくびに横雲はわかるれど、目は猶さめかねて追分の並松にだきつき、出はなれの橋につまづく。道端の家に松葉ぱち〱と打くべて、茶の匂ひかうばしきは、浦山しく心とまるわざなるべし。安倍川の餅は山吹の面影ありて淸らかに、岩淵の小豆餅はふじの覺束なきに似よらで、いとむくつけ也。大根漬は喰次第として、すべて五錢の定なるべし。茶屋の田樂は串の數をあらため、酒の直は茶碗に極置て、口のかけたるを置はいとさもしきを、其缺口に親指をあてるは、ともにぬからぬ才覺なりけり。出女の上は木導が說につくしぬ。御油赤坂ははでにて名高く、吉田濱松は地味にして艶くし。足袋鼻紙の商ひは譯の相紋としるべし。赤前垂紺前だれは所の風にもよらん。片輪車の染入も、引には廻るならひにて、旅客のうさを慰さむ便とはなれり。かりの契もなほざりならず、草鞋のふしに心をつけ、くみ茶に情をはこぶなど、さすがに涙もよほす人もありなん。五十三次はさら也、邊土の旅に猶うき事はありとしるべし。木賃の宿いといぶせくて、行水の湯は鍋にてわかす。片破月の蓋をしたれば、藁火の灰飯にまじはりて、喰べくもおぼえず。さらでも蚊屋は破れたるを、赤子せわりて夢も結ばず。向ひの土臼のうたはおさまりて、隣の女夫いさかひを聞、ふすまは引立たれど、おくび形にあきたるなど、足つかれては、褌かゝぬ男に罵かゝれ、戻り馬にまたがれば、新鞍に腰骨をいたむ。うき目つらき目則風雅の種にして、言につきず、思ふに限なかるべし。あるはいかつの乘合に興をうしなひ、馬やろの聲は魂を消す。雨の夕は殊に悲しく、月の曉はいつもねぶたし。我かくしりて一座旅情の附合に及ぶ時、眼をふさぎて爰に來往すれば、筒(箇ヵ)のうち新規無量の事あり。

たとへば今世の軍者としるべし。つひに軍はせざれど、かけ引備立の師となりて人をも教ふるは、あつぱれ軍者也。我又門を出ずといへども、心をこゝに用る時は、則千里の旅客としるべし。此一段は、われ廿七歳にて書つけぬ。行末いかなる旅をして猶奥深き隈はしるとも、此論は一字をかへじ。蕉風雅の居ながら物情に亘るの謂を、後見ん人にしらせんとなり。

馬かたの寐たあともありつく〳〵し
月ひとつほしや〳〵とたび乞食
我紋の夜着にあふたる旅寐哉
出女の口に蚊のよるくもりかな

賀二小女一辭

婦に三從の道あるや、其家に在て親にしたがふも、父母まめにして揃へばなり。嫁して夫に從ふも、中の睦まじければ也。老て子に從ふも、よき子をもてば也。物の三ッ揃ふは稀にして有がたし。鼎の脚も三ッ揃へばこそかたぶかね。宮地氏の家に娘を持り。子の年子の月子の日に生れたりとぞ。願うてなり難く、求ても得まじきふしぎなるをや。子はそも十二の始にありて、しかも大黒天のつかはしめ、打出の小槌おもふまゝなる行末の幸を賀して、宮地氏に贈る。これ其求なればならし。

花も何みねにみどりの姫小松　娘は三子の隱語也。

鉏花生箴

見ぬ國の上戸が、我飲死たらん所に埋よと、其具を常に荷はせてありきたるとか。けふもわするな、あすも忘るなと、調市(でつち)にせわやきて、祝言ふるまひの門よへも持て立せたらん。物いまひする人はさぞ惡み嫌らむ。これらは鉏(すき)に赤烏帽子ながら、わる物ずきとはいふべからん。我せどに古き鉏あり。久しく久三が手にも捨られて、今は玉が齒黒壺にも沈むべき身の果なるを、取上て閑居の花生となしぬ。鉏よ〳〵示て云、

幾春庭の土をかへして
もえ出る草の根は斷つらめ
今より過し罪を悔まば
いけおく花ッよはひをまもれ

杓子銘　或人杓子を床の飾物に物ずきして此銘をもとむ。

爰に千早振お多賀杓子ありて、用ひざれば鼠と遊びて味噌桶の陰にかくれ、用ひられては虎の勢ありて床のうへにものほらんとす。さるを杵も摺小木も同じ幸を眞似んと思へる、これを世のたとへにして、杓子定規とはいふなりけり。

千竿亭記　應二下條氏之需一

亭に名づくるに千竿を以てする、君きらふ事なかれ。竹は古人のとり〳〵に愛して、友には今更ふるめかしきも、物は年〻にふりゆき、姿は日〻にあたらしからんに、まして蕉門の風雅にいはゞ、句は此君の空心にもとむべく、てにははふし〳〵のほどよからんをそふ。不易は時雨の色もかはらず、流行は折〻の風になびきて、爰に東坡も七賢も、いさしらぬ趣ありといふべし。身はよし紱冠の仕途におきて、理窟の塵にまじはるとも、纔に半日の閑を得る時は、是を五湖の舟棹とも詠め、富春の釣竿ともなし、あるひは竹馬の稚心に戯れ、鳩の杖の老をもまねびて、俳諧自在の遊をしれるより、千竿の名のむなしからずば、よもつきじ〳〵、万代までの竹のやどりと、名におふ鳥も此枝をたのみて、ゆかしき軒端なるべし。猶思ふに此亭の朝風さやぐ春も有べく、雪にをかしき夕もあるべけれど、我はたゞ郭公の告るを待て、筍のさかりをこそ問べけれと、たはぶれて筆をとゞめぬ。

野遊集序　應二川合氏需一

仁者の山をも逐はず、智者の水をもしたはずして、今年野遊をおもひ立るは、むべなり武藏野の騒客なればならし。そも歌よむ人のいへるは、其道を濱の眞砂とは、盡ぬたとへはさもありぬべし。おなじものゝいつも白からんは、目まぎろしき方のいかゞはあるべき。そこを正風の俳諧にいはゞ、同じ野の草ながら、みどりにもえ、錦にそめて、古き物は古き儘にして、其日其時に新しき、此野に心を遊ばしめば、たねはよし武藏野の、是もつきしなき言の葉なるべし。

寐物語後序　應二安田氏之需一

灞(は)橋に巵(さかづき)を擧て陽關の曲を諷ひ、八橋(やつはし)に餉をひらきてから衣の歌よみしも、同じ旅の露けさながら、それはみぬ國の花鳥をかしからず、是はやまとことばにさへられて、にげなきわざはいひもらすふし〳〵も多かるべし。むかしわが翁、川ばたの捨子に物なげくはせ、芋あらふ女をも詠すてざりしより、世に其風を學ぶ人、多くは杖笠の姿情をしたひ、紀行まことに牛に汗すべし。それが中にも此一軸の殊に縦横自在をえて、あるは猿渡(さわたり)の舟に無常を観じ、志津が嶽に忠義をしたふ。小谷の城の跡をとへば、物おぼえよき男出きたりて、昔がたりに竹杖も朽(くた)しつべく、今庄の驛に宿をかれば、笑上手の女ありて酒あひに草鞋の疲れをわする。たのしみかなしみ見るうちに行かふ中に、かの金津の里には、いとなまめいたる女はらからすみて、そこの旅ねの枕にぞ、

常盤の山の岩つゝじ、わすれがたきかくろへことも、おもひやるにねたかりぬべし。さるを此作者は蕉門の俳士とこそ聞に、千万言のうちに、などや一句の吟もなし。是や無絃の琴を撫したる、誠に琴道の尋常ならず。音立る調にも勝れる事を、ひそかに此寐物語に聞侍る。

贈二五條房一書贊

小松殿の教訓は琵琶法師の曲に殘りて、聞人涙を催し、白藏主が異見は大藏和泉が家に傳えて、見る者笑を催す。誠のあるとあらざる成べし。我筆すさびのざれ書ながらも、やう過たらんは正風にやたがふべきと、深切の一棒に始て目悟ておもふに、誠に是よりいくばくの謗をか遁るべき。我爲には千金にもかふまじき賜なるをや。是を賜りて是を謝す。願くば五條坊に納て、昨非を改むるしるしと見給へと也。

　こゝろある人の垣ゆふ野菊かな

蛙歌

蛙ゝ、すみよしの浦のみるめのかりならぬ、古今の序にのこされて其徳のたかきや。

かはづ〳〵、廬山の雨のつれ〴〵に、詩人も鼓吹とほめおきて、その聲のたえなるや。

蛙ゝ、木曾路の橋のそれならで、幽谷に虹を吐て、そのわざのあやしきや。

かはづ〳〵、玉川の水にすだき、歌人のことばにめでられて、其名の世ゝに聞えたるや。

かはづ〳〵、朱雀の小田に啼つれて、逢夜わかれの曉に、嬉し悲しとうたはるゝ、其哀のわりなきや。

かはづ〳〵、深川の古池にさびしき音をきかせて、おきなのゆめをさましたる、其功のうへなきや。

夢人記

旅の住るは殊にすきまがちなる、木がらしの窓さしかためて、今宵は世務の妨なければ、ありし猪の子の餘波とて、人のえさせたるもちゐ煎させなど、其間のすさびに大根引の發句せむと、例の集ども取ちらすに、猿蓑の時雨も折からの軒に音なふ。まして炭俵の其夜の切火桶も、この頃にやとゆかしければ、これらを枕として思ひ寐の夢なりけり。忽然と人ありて、世ゝの誹諧の變化などかたる。其辯懸河の如し。さて我いはく、今案ずる所の大根引は、はじめて祖翁の季を定めて、古人のしらぬ題なれば、こゝろみにこれを以てとはむ。季吟老人世にありて、其時此句を求めんとせばいかに。夢人言下

に吟じていはく、

暮るまでやすまずひくや大根機

増山井續連珠の趣もこれ也。根機つよきといふ秀句を思ひよりて、あとはそれに叶はせたる迄なり。其後宗因に變化してはいかに、

大根引あと黒波とぞなりにける

黒の一字をあたらしみにして、謠の詞を用ひたる、これらや談林にあらずといはざるべし。いでや元祿の頃正風世にひらけて、其門人三千の徒すべて是に德化せられたれど、猶おのがじゝこのむ所にひかれて、風体のくせはわかるべし。晉其角は作にひかれて、其枝其葉にいたりては、嵐子が歎きし白糸も、本の色なくむすほゝれて、とけがたきなぞ〳〵なるべし。强てそのかたはしを求めば、

今ぞ小春見よ大ぬさの大根畑

かくもいふべくや。引手あまたの詞をかくして、其餘は風流をかざる。さてや許六がこのむ所はいかに、

手の甲で鼻ぬぐひけり大根引

惟然坊が手筋はいかに、

大根引ちから出ひても哀なぞ

露川が身のなる果はいかに、

繼母やたぶさ亂んで大根引

さま〳〵の風格は得てきゝぬ。さらに我をたすけて正風不偏の一句を得させよと乞うに、笑てこたへず。いざや〳〵とせむる內に、無下にゆりおこされ、驚て打寐がへれば、例の折敷をつきすゑたり。誠や五十年の變化をみしも、思へば粟餠のにゆる間にてぞありける。

悼二反喬舍一文

無常の風のおどろかすは、めに見えぬ秋をしも待ざりけり。此水無月の十八日に、便の人につけて、過し頃より痰のなやましく、うちこもり侍れば、久しくおとなひ侍らず、いぶかしとやおもふらんときこえしに、筆の跡も例のこまやかに、物うげにもみえねば、たゞ此暑さの故にやあらん、庭に秋草の秋まちかねて咲出るもあれば、是折て便せんと、さしもいそがぬ心に、其日又の日と暮し侍るを、あくるあしたの露と消べしとは、いかにおもひかくべき。世はたゞ夢としりながら、かゝる夢もならはざりけり。吉田法師がいひけんまゝ子立の石も、一ッうせ二ッうせて、今は尾城に蕉門の一老となれば、名望四方に高かりしが、年も古稀には猶三ッばかりもたらずや。吟行いまだ杖にもよらず、机に眼鏡も忘がちなれば、行末遠くたのみし人ゝのいかに翅もがれたる歎すらんと、我にてよそもおもひしられぬ。夜話てう（本ノマヽ）、くたすばかりの袖いかにと、かの庭の草どもを手札がむかしに手

折て、あすの七日をぞとひ侍りける。

虫はまだ人になかせて夏の草

贈二巴水一辭

廿五年の勤務めでたく功なりて、今や耳目肺腸わが物にもちひかへして、みづからの世帶をいとなむ。かゝる身において、はじめにその心あらざる物なく、巴水がごとく終をよくするは世に多からず。

鶯や籠をいでゝ竹に巣ごしらへ

茱別墅記

あしたに劍を佩て營中にひざを屈し、ゆふべにはゆふつけ鳥のそら音ははからねば、理窟の關の戸をのがれて此閑居に耳をあらふ。そのあるじは茶をこのめども、茶人ならねば利休が寸法にもほだされず。下戸なれども酒をにくまず。しかも淵明が風流をしたふ。さてこそ所も柳町の、その五株のゆかりなるべきにや。みよしのゝ山のあなたに宿もがな　とは何をおもひのすてこと葉ぞや。靜なる望はさも有べきが、雪の朝に豆腐賣もこず、つきの夕は酒をも佗らむを。たゞ此幽栖のあやしくも市の中にありて、さらに車馬の喧をきかず。塩も油も求るにやすく、溫飩蕎麥切にも自由をえたり。庭は僅の間地ながら、北に一重の窓をひらけば、千町の田づら軒よりつゞきて、田がへす春は蛙の聲近く、詩家の皷吹を木枕に聞、早苗とる頃は螢のとびちがひて車胤が夜なべにとぼしからず。まして稻葉の雲も色づけば、雁わたり虫啼て、ひとりぞ月はみるべかりける、と寂し好のかの法師も心とむべき住居なるを、冬はことさらに山〳〵の雪を、剡溪に棹をもさゝず、佐野のわたりに袖もはらはず、火燵に目ばかり出せる詠は、昔王維が輞川の別墅も、この物ずきはいさしらざるべし。頃は長月なりけり。うらなき舊友みたりよたり爰に招かれて、酒のみ茶呑事ありしが、折しも十五夜の月いとよく晴たるに、此興は忘がたしなどうかれさわぎ、裏なる柴折戸開て稻葉の露にそほち遊し序、あるじ此記を記してよと求む。莫逆の間に辭する事を忘れて、かたはらいたき筆とる事にはなりぬ。あなかしこ、知己ならぬ世の人になもらし給ひそ。

又とはむ菊より後の根ぶか畑

吾樂菴記　應二桑雨需一

獨樂園のぬしは、みづから其記を書て人に其樂をしらしめ、吾樂庵のあるじは、我に其記を求て其樂をかたらず。我こちたくも君にさとさむ。世にたのしみのおのがさま〳〵ながら、樂を求て樂とするものは、哀情これが爲に先だつ。まだき

秋風のはやうよりいひしろひて、今年は珍らしき月見せむと催せば、巫山の雲心なく立さわぎて、夕の雨吟魂をなやまし、其日彼の日は興ある花見せんとさわげば、祈らぬ山おろしはげしく吹て、賞心霞にへだち安し。況娼楼舞莚のたのしみにおける、まして世務仕官の上においてをや。芦分船のさはりがちにて、難波に恨のはれまなからん。さるはたのしみを求てかなしみを求むともいふべし。さればこゝの境にありて、世に平生のたのしみをしらぬ人は、夕にたのしみて朝にたのしまず。よく楽をしる人は、何か心のたのしまざらん。もし此楽に乏しからずば、誠に吾楽庵のあるじなるべし。

月 花 の 富 や 心 の 蔵 の 数

桃花石記

一日木仝(もくどう)きたり、告て曰。或人の家の藪に色異なる石のうづもれてある事久し。或は人是を怪めども、わづかに半面をあらはして、出す事いとたやすからねば、さてやみぬとぞ。さるを頃日其友烏貢なる者深く望みて、あるじに受得、とかくして堀出せり。是を石工に見するに、驚て曰。此名を桃花石とよぶ。むかし津の國の御影村勝原村より出し、其性至て硬し。物に用ゆるに最上とす。然るに今其もとより絶て出す事なし。世に稀にして人知ず。最珍とすべしと。其ぬしよろこびて是を彫しめ、手水を湛ふる具となせり。翁これが爲に記を書む事を乞。予曰。誠に既に盡せり、其外に何をいひてか記を作らん、只其人にかく傳へよと。木仝猶こふてやまず。予重ねて云、むかし三人の僧あり、ともに不言の行を約す。既にして一人の僧誤て言を發す。一僧驚きあわてゝ云、何ぞ誓を敗りて物いひしやと。残の僧かへりみていはく、二人は既に行をやぶる。今守る者は我一人なりと。卒に三僧の行、ともにやぶれりとぞ。此僧の例をおもへば、いはずといふもの即いふなる時は、我記を作らずといふも亦即記を作るといふものならんをや。是を以かの石にとへ。名にしおふ桃花ものいはぬも、蹊をなすはいふに似たり。石も又うなづきたるためしあるをと、笑て卒に是を記とす。

定二齋號一序

大井氏瓦光子は、武門に生れて其家の技に拙からず。されど胸に惱る所ありて駈走に健ならず。かくては弓箭も取がたしとて、すつべき物はとよみけん藥師寺が心をしりて、五斗の米の望をたち、三石の奈良茶を甘なひ、常に蕉門の月花に遊ぶ。さりとて熊谷が無常を觀じ、瀧口

が何にも與はねば、髪をもそらず、法衣もきとにせず。猶其中間には鶴叢、野中の清水のむかしをのこせば、心しらぬ人にこはがらるゝもをかし。静なる事に好き ならひたる事ありて、つれ〴〵の手すさびがてら、今のたつきとも成から、市中に業をうらず、一頃の田に足もよごさず。朝三暮四に餘りあれば、かの塞翁が馬のためし、幸や不幸ならん、不幸や幸ならむ。世に誇る人はいさ、うらやむ人の多きをみるべし。此ごろ茶話の餘、我に齋號を定てよとこはる。口にまかせて自至齋と名づく。其心あるにあらず。なきかといはゞ、なきにしもあらじ。(以下脱文あるが如し)

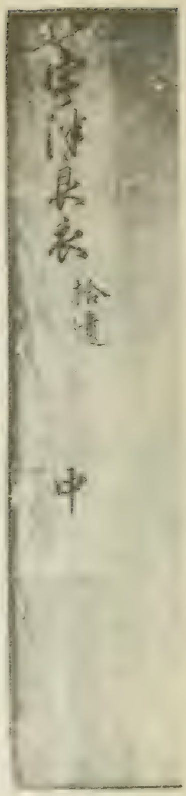
名亭説

青木川の済にすむ人の、其居に號あらん事を望む。かの川はもとより鯉の多くすむ所とこそきけ。爰に此人の逍遥せば、魚の樂をよくしるなるべし。されば魚ならずして魚の樂をいかでかしらんと難ぜし人は、はた其知る人のしることをも、其人ならねばしらじとぞ。今此人の知る事をしるも、我ならずして何ぞしらんやと、笑て亭に知樂舍と書て贈る。

見えすくや魚のこゝろも水の月

宜白亭記 (爲二山村氏之需一)

見て是をいはむとする時は、詞の及ばざる事をくるしみ、見ずしていはんとする者は、心のおよばざらん事を恐る。我聞、此亭は領主の閑に號る所にして、謝氏が履を勞する事二町許、脩竹深樹の間をひらきて、登臨亦たぐひなしとか。けに樂好も、此麻衣の木曾にぞまづとて、靜なる方は求しをや。されば領主反斎舍にさゝやき合て、いざや此亭にさせる名なし、試に予に記をこひて、是が名もそれによらむとたくむ事あり。名を聞てこそ佛もおしはからるれ、名はこれが後ならんぞことにかたきわざなりと、むつかれど、此ごろそゝのかさるゝ事いと切也。爰に風雅の天眼通なからんやと、潜に此亭をはかるに、嶺の尾上の花によろしく、月によろしきより夏によろしく、名におふ駒が嶽にむかつて、雪に又よろしからざらんや。眼下一條の谷川流れて、岩にくだけてちる浪も、心の塵を洗ふによろしく、持て贈るにたえずといひし雲心なくて吟魂を助くるによろし。かれといひ是といひ、此亭に宜からむと、宜白の二字を名として贈る。もし宜からずといはゞ、白は物の下地にして、染ればそまる色なるからに、他の宜しきに染かふべしと、爰に云拔々の詞をまうけて責をのがるゝ物ならし。



宇都良衣　拾遺中

岐岨路紀行　延享二年

乙丑のことし、　君にしたがひ奉りて、卯月六日江戸を出て尾陽にのぼる。一年を恙なく歸國のけふを待えたるよろこび、人々も賀しあへるに、

　卯花の中にうからぬ首途かな

年々になじみし武府の人々には、淺からず名殘をしまるゝもありて、さすがにこころひかるゝ別とり〳〵なり。

　麥の穗の腰もぬれてわかれかな

今年は木曾の山路を分る也けり。仕官の身のならはし、こゝろならず馬鎗のいかめしくさゞめきつれたる、野老村童に事問まほしきも、物いひかはさんはにけなきやうなれば、店の餅酒は見ぬ顏して過侍る。まことに風雅の本意ならぬもいかがはせむ。こゝの山はとありて、かしこの川はかくありてと書付たらん、その所みぬ人はさらおぼえぬ物にて、殊に筆の及まじう、何のはえかあらん。たゞおゝひよれる句ども少し筆にとむるのみ。

蕨といへる所に、とばかり書けとゝのへて出づ。

　我とむる手もなき夏のわらび哉

此夜上尾に泊る。

七日

熊谷寺に直實が像などあるよし。みちのあはたゞしくて立よらず。

　熊谷もはては坊主やけしの花

今夜本庄に泊る。

八日

かくいへる所にて、

　くらが野ときけばや里も木下闇

けふは過る道すがら、家々の軒に藤をさし侍り、花をもさし、葉をもさせり。所の人にきけば、佛生會の手向也と云。故郷にて見聞ぬ事也。みちの國に花かつみふくたぐひにやとめづらし。

　灌佛もやがてはへとて藤の花

此夜板鼻にとまる。

九日

碓氷峠を越侍る。般若石といへる嶮岨をすぎてより、さのみけはしからねば歩行にて行。山谷の桃櫻は夏としもなく、木のめなど打けぶるやうなるもあり。けふ

御前に出たるに、いかにや、山はいまだ衣かふべき時節ともなし。花なども春のこゝちするに、例のくちずさぶ事も有べし。此心おもひよれるや、との給はするに、いさ道のくるしうゆひて、むけに申出る事もゆはやと、御いらへ申に、さりともこゝにはあるべき物をとて笑はせ給ふ。

　綿入を木曾路の夏や花の旅

　雛の見ぬ山路の桃は四月かな

などさま〴〵に句をつくりみるに、よくもあらねば、

御前に侍する事もなくてやみぬ。

追分にとまる。

宿の軒端に浅間山ま近くみえて、けふは晴たる空に、ことに煙のまがふ方なく立登るさまめづらし。此あたりはいまだ蚊も出ねば、

十日

　蚊にはまだたかぬ煙を浅間山

此夜和田にとまる。

あるじが子とて惣太郎といへる十二三なる童の、茶など運びてかしこげなるに、見えわたりたる山をとへば、かれは大田澤、これは檳榔山とをしゆ。名にしおふくろかみ山にもよらずして、いかで此名をよびけんとゆかし。つれ〴〵なるに、おもしろき草帋やある、みせよといへば、あるじのいかにたくはへ置るにか、運氣論といへる醫書を取出たり。是はむづかしくてよみがたしといへば、義經記を持來れり。こゝかしこよみてつかれをまぎるゝほど、童はそこにかしこまりをれり。

　やがてみむ幟もちかし武藏坊

十一日

和田峠をかちにてこす。こゝはすぐれて高き嶺にて、今すこし上の方に鳩の峯といへるは、日本にならぶ方なく高きよし。されど此國は地高き故、人はさしも覺えぬと也。げに雪の多く殘て有。けふはことに雲深き中をわけ行に、咫尺もわかぬほど也。

　雲ふみてなほゆかし山郭公

行尊僧正の、花より外にとよみ給ひし谷の鶯のみ、けぢかき心地ぞする。かしこへも山里に春は告ると歌にもよみし雪のうちの、夏はしらでやあらん。歌よむ人などは、此心もていひつゞくるふしもあるべし。

本山にとまる。

十二日

けふは福しまにて、山村氏か亭にいらせたまふ。家ゐつき〴〵敷、のしめ上下にもてさわぎて、何くれともてなしたてまつる。饗饍などの膳にひろごりたる、けふは山家めきたる心地もせず。

十三日

　俎板のなる日はきかずかんこ鳥

けふは名におふかけ橋をわたる。

　眠るなと馬士はしかれど百合の花

臨川寺にいらせ給ひて、寐覺の床御覽ず。爰に筏士のさま〴〵自由をえたるを、めつらしき物にめでさせ給ふ。いかばかり吹と、とふべき折にもあらず。

　ちる物はなくて筏に青あらし

此あたりを見かへりの里といふ也と、人の指さしてをしふ。

　又いつか木曾の麻衣あさからぬ
　　なごりやあとにみかへりの里

是はもとより歌枕にもあらねど、句のなかりければ、歌よむ人のまねびしてかく口ずさむ。いとかたはらいたし。こゝにあやしき翁のこと、世俗にいひつたへて、誠は三歸の里とかけり。

野尻にとまる。

十四日

大井にとまる。山中はたえて竹のなき所にて、桶の輪などいふ物も木にて營めり。こゝの宿にて初て竹の子を調じて出せるを、いとめづらしくて、

　竹の子にあふて家路もほどちかし

十五日

土田にとまる。

あくる日家につき侍る。此間句もなし。

熱海紀行

府君の御母公、ゆあみせさせ給はむとて、延享のことし、江戸より豆州のあたみといへる所へわたらせ給ふ御ともつかうまつり、葉月の廿九日江戸を出て、熱海にいたるは長月二日なり。

　草の葉に月のたびねも二日から

此里のさま、後に山めぐり、前に海近くして、いさみぬ須磨のけしきもかくやあらんと、折から秋のね覺も心すむ旅寐には有ける。湯本はことに我やどりの後に近ければ、日夜に六たびばかり、おどろ〳〵しくわき出る音高く、山水涌波にひびきあひてかしがましき物から、世の中と渡りくらべて、いかにとかいふべき。網引釣するわざもあれど、おり立ておのが世のたつときとするものは少し。耳なれぬ魚の名ども、うづは、ひらこ、はまち、そうだなど、後にはおのづから見おぼえてみないふ。山田色づく頃にて、鹿追ふ小屋に引板ひきならすなど、めづらしう哀なり。鹿の聲は夜ゝすがら聞えて、夕霧の巻などよむこゝちす。

　夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲

月は殊に海より出て山に入。宵ゝの詠えならず。浪よするうらのけしき、我やどりの東おもてよりもくまなく見えわたれ

ば、暁幕欄干に打もたれて、烏帽子きたらましかば、我を屏風の繪に書べきをと笑ふ。

ほし棹の是にも月や濡浴衣

尾花ちるかたはへりけり浦の波

打まぜて浪にまけたる砧かな

釣舟や案山子のり行波の上

あるじの子、彦助といふ。年十四ばかり。常に來なれて、あまのさへづりめきて、所のことなど聞おぼえて語る。かれに案内させて、あたりの宮寺など見めぐり、漁家に茶を乞ひ、樵夫にたばこの火かりて、吟歩幾を忘るゝ程いひ捨たる句ども、例のしる人のもとに書つけてつかはす。登歩一里ばかり、日かね山にのぼれば地藏堂あり。駿豆の海山眼下につらなり、景色いふばかりなし。富士は西に隈なく、こと山の秋にわかれて雪しろき姿、衣は錦ヽ尙レヘニ綱とかくいへる、此山の德に比すべきにぞ。

四方山のにしきや富士にはづかしき

都松といへるは、染殿の后の跡のしるし也と、野老のいひ傳へたりと語る。いづれの時にか、柿本紀僧正、染殿の后と密通の事ありとて、さらぬ罪の科にてこゝに流されて後失給ふ。后は八幡といはひ、紀僧正も宮といはひしが、其仇名のうきをいとひて、二ッの祠、むかしはたがひに相そむきてありし。今は八幡は外にうつして、其闇も殘り侍らず。常に后のみあこを戀たまひしが、あとのしるしの松も、都の方へ枝葉さしむかひければ、これを都松といひける。僧正の社のきはに大きなるさくらの有し、中頃此うしろに御殿作けるが、さはりなりとて此木を伐しかば、かの松も程なく枯にけりとぞ。其木のともに枯たるちぎりならば、ぬれ衣の名もいかなりけんと覺束なし。

松かれてどの木へ蔦や所がへ

僧正の祠は、ことに大きなる椎の木二本のはざまにあり。

御所柿の色にこりてや椎が本

湯前權現に我疾をいのる。

新蕎麥や疝氣に利生みせたまへ

伊豆權現奉納。

海と山兩部に月のくまもなし

業平井は里中にあり。爰の男女の常に水汲かけうつして、おのづから妹脊の媒ともなれば、いひならはしたりとぞ。

豆ひきの影や井筒にまめをとこ

平左衞門湯といふあり。平左衞門かひなしとよばれば湧出るとて、里の子どもの呼て旅客に錢などもらふ。

子どもいざよばれ紅葉に立田姫

重陽にあふ。

撰り出して菊をいはゝむくさ枕

後の月。

山の湯も温飩にわくか後の月

木の宮。

木の宮も草からさきへ秋くれぬ

暮秋。

行秋の干魚に残る鳴子かな

天神。

飛石や梅にまけじと霜の花

眞鶴が崎。

まな鶴もみじかき冬の日あし哉

大嶋は遠くかすかなり

大しまや片目しぐるゝ遠目鏡

はつ嶋はいとちいさき嶋の向に近く浮べり。沖の小嶋はこれ也といふ。又は大嶋をいへりとも、里人のつたへもまち〳〵なり。

木がらしや片手に撫る嶋ひとつ

十月十三日、あたみをたゝせ給ひて、江府へかへらせ給ふ。道すがら鎌倉に三夜ばかりおはして、寺社古跡ども御覽ず。したがひ奉りて、のこりなくみめぐるほど、句などいふべき所もおほかりけれど、事にまぎれてみなもらしつ。道をまもりの神に申。

守り給へ神もおたびの道すがら

榎の島。

此神の御手にやにほふびはの花

白菊が淵。

十月やけにしら菊の名もむかし

龍穴。

此洞をおもへば神も冬ごもり

鎌倉にて、

鎌倉のかまの名さびて枯野かな

梶原が矢筈もふゆのかゝし哉

何がしの寺にて重衡の盃をみる。

さかづきに銚子もそへず寒さ哉

盛久が首の座。

盛久が命や濱のかへり花

鶴が岡八幡。

御供して鶴もゐるすなり神の松

十九日、金澤の方にまはらせ給ふ。能見堂といへるより八景を見わたす。奇絶の勝景、ことばにのべがたし。折からうちしぐれしに、

八景のうちふたつみつしぐれけり

廿一日、武府にかへらせ給ふ。

武藏野紀行

庚申のことし(元文五年)霜月のはじめなりけり。江戸を出て淸戸といふ所に、旅よりたびのかりねも十日あまり、母やある、子やもてると、あるじに咄もやをらなじみそめて、此あたりの事など尋きくに、昔はこゝもとも月の名におふ武藏野なりしよし。今は家つらなり、田畠と變じて、露おく草の名にもあらぬ大根牛房の、ことにめでたき里なりと語る。

武藏野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶端ゞには、其廣き野の迹のこれりと聞て見にまかりける。案内するをとこの聟なるも、時鳥きくしるべならねばと其日の興にして、龜が谷下富などいへる村ゞを過て、かの野には出ぬ。誠に四方に木竹もなく、草さへも今は霜がれはてゝ、哀に物すごき原のさま也。

武蔵野やいづこを草のかけひなた

そこら見めぐりて、

枯野にもすゝきばかりは薄かな

くれ行空もおもひやりて、

武蔵野に露ひとつなし冬の月

又の日、野火留といふ所を尋侍り。こゝは伊勢物語にけふはなやきそとよみし跡なれば、里の名もかくよび侍とか。業平塚とてさびしきしるし今も殘れり。歌のこゝろをしらば枯草に吸がらなすてそ、とたはむれて、

こもるかと問へば枯野のきり〴〵す

内津草

うつゝの里に住る更幽居三止なるをのこ、予が菴に來る毎に、いかでかの山里にも尋來よかし、あるじせんとそゝのかす事年あり。されど今はたゞ老の鴉の月に浮るゝ心さへ懶て眠がちなれば、羽をのぶる事もなくて打過しが、此秋いかなりけん、しきりに山里のけしきゆかしく、ゆくりなく思立て、かのがりとはんと葉月中の八日丑三ッ過る頃、庵を出たつ。月くまなくすみわたりて晝のごとし。也陪なるをのこは、三止にも予にも常にうらなくむつまじければ、よべより庵に來りて此行に伴へり。櫛(比ヵ)次の市中長く過行に、千家いねしづまりて物音もなく、往來の人影もたえてなし。今宵は居待月なれど、まつ名のみにて傾ぶく影は惜まずや、いとくちをしとおもへど、さはれ我も又かゝらましかば、かゝる清光もいぎたなくしらでぞあらまし。大曾根といへるあたりに至れば、家ゐどもゝさま劣りて、鷄の聲戸ゞにきこえたり。

おもひいづる詩ありとりなく里の月

かくいはゞ、そは何の詩ぞとおほめく人もあらんかし。

片耳にかたかは町のむしの聲

やゝ人家をはなれて、野山のけしき月の光に見渡す、いとあはれ也。山田川かち川をわたるほど夜猶ふかし。此川ゞはかちわたり也。

八月の川かさゝぎの橋もなし

ずさども、あなつめたなどわらひのゝしる聲に、我は駕よりさしのぞきて、

かち人の蹴あけや駕に露時雨

ゆく〳〵月もかたぶき過て、夜も明なんとす。

麓からしらむ夜あけや蕎麥畑

鳥居松といふ所にて、わりごやうのもの
とうでゝよとていこふ。
　夜と晝の目は色かへて鳥居松
是より杖曳てかちより行。大泉寺といふ所にいたる。わづかに一里ばかりを歩びて、老の足まだきこうじにたり。又駕にのる。
　山がらの出て又籠にもどりけり
道の側に尻ひやし地藏といへるあり。靈驗あるとて人の信仰するとぞ。
　尻ひやし地藏はこゝにいつまでも
　　しりやけ猿のこゝろではなし
坂下明知西尾などいふ里ゝをへつゝ行。
　駕たてるところ〴〵や蓼の花
むかふより來れる人の、うちそばみて笠ぬぎたるを見れば、内津にすめる試夕なりけり。かれは彼さとに茶をひさぐ者にて、菴へもうとからず訪ひて、年頃相しれり。兼てけふ我とふべきあらまし聞えて、三止がかたらひて出せるならし。とばかり行て三止も出むかへり。こゝの名をとへば鞍骨といふよし。むくつけき名のいかなる故ならん。
　けふこゝへたづね來むとはくらほねや
　　くらげの骨にあふ心地する
と戯れて打つれゆく。此あたりより山路やゝさかしく、峯ゝ左右に近くそびえ、大きなる岩ども道もせにそばだち横たはりて、決ゝたる溪泉いたる處にきく。
　名もにたり蔦の細道うつゝ山
ひるばかり内津につく。此所のさま、妙見宮の山うちかこみ、杉の木立物すごくしげりて、ふもとにつき〴〵敷家ゐつらなれり。
　山は杉さとも新酒に一つかね
あるじねもごろにもてなし、湯あみ物くひて心落ゐたり。
　夢もみじ鹿きくまでは臂まくら
あるじ、
　まつ名もはての十九夜の月
と脇してその末ゝもありつ。美濃なる虎溪といへる所ながめよしと、はやうより聞わたりつれば、行ばやの心ありけれど、其あくる日はまづとゞまりて、何くれと語りなぐさむ。亭の前、とばかり庭ありて、いと間近く山さし覆へり。其間に細谷川ながれて、水の音岩にたえず。此上にさしわたして造れる小亭あり。枕流亭と額を掲たり。此名は孫楚が意ならんと。
　口すゝぐ石もあたりにきり〴〵す
此日妙見宮に詣す。舍よりはいとちかし。猶奥の院へ參らむといふに、こよなうさかしき道なめり、老の歩の及ぶまじければ、只やみね、と人ゝいふ。されど阮籍が窮途にこそとゞまらめと笑ひて登る。左右大きなる杉どもの枝さしかはして、日の影もゝれず。細き道の苔なめらかに

石高し。右の方に天狗岩といへる世にしらず大きなる巖そばだてり。只一ッの山とこそ見しらるれ。かゝる怪しき岩は他の國にもをさ〳〵なしとぞ。

道ひのほる蔦もなやむや天狗岩

次第に道さかしく、岩を攀、木の根にすがりて、七町ばかり登りて、少足とゞまる所に休らふ。こゝに、あふげばかうがうしき拜殿みえたり。夫までは十間斗、ことに危き坂あり。社は猶奥まりてましますよし。是まで登しだにも我にはこちたきわざなり、今はふようなりとて爰にぬかづきて歸る。

杉ふかしかたじけなさに袖の露

けに本州にかゝる宮ゐありともしらざりけり。若き人ゝはふりはへてもまうでぬべき靈地ならし。其あくる日より雨ふり出て、廿四日まではれやらず。其ほどの事ども筆にまかせて書あつむ。

一日枕流臺にて俳諧す。余興に戯れて、こゝに住て善正日夜きく水は

ひんがしならで西にながるゝ

あるじが常の名、長谷川善正といへば、かくいへるならし。明智にすむ醫師羽白なるもの尋來りて初てあふ。

堀て來て草に藥の名をとはむ

と書てあたふ。此人も俳諧を好めり。一日試夕が家は更幽居にさしむかへり。こゝにも遊ぶに、あるじ一句を請へり。なりはひいとゆたかなるをのこなれば、

あたゝかな家あり山は秋ながら

こゝはひたぶるの片山里とこそ思ひしか。更幽居はさらにもいはず、試夕があるじまうけのさますら、すべてよづきて、調度などもいと清らに、こゝろつかひたるふるまひどもけしうはあらず。よろづ目安かりけり。

府下萬松寺にさきにいまぞかりし綱國和尙、退隱して此里見性寺といへるに假に住給へり。久しくしれるなからひなれば雨の隙に訪ひて、とばかり語りて歸りし後に寄らる。

深山客稀有孤猿

豈謂高軒過遠村

煨芋無收寒涕力

背令王帶鎖空門

韵を賡で謝す。

滿耳溪泉又斷猿

渾忘塵想宿山村

逢君猶憶重遊約

嶺上雲多忍鎖門

ある夕あるじ酒すゝむとて、こゆるぎのいそぎありくまゝに、鉢に杜若をつくりて水をもり、肴調じて出せり。みれば茄荷の子をもて、巧に花の形をまねびたり。

八月のはちに咲たるかきつばた

さてはみやうがに物わすれ花

若きをのこの、醉のあまりに、かうやうの細工に思付けるにや、柿にて猿を造らんとて手をあやまち、血流れたり。人ゝさわぎてやみたりと聞て戯ぶる。

こりはてゝまう此趣向手がきれた
　いらざる柿のへたの細工に

といふに、例のどよみになりぬ。

あるじ墨竹の一幅をとう出て賛を求む。唐さまの筆なれば、ざればみたるほ句はいかゞならむと、一絶をつくりて、

不ㇾ與二梅柳一交ヘ　心似ㇾ厭二塵累一
露深夜雨餘　何惜二一妃涙一

と書てあたふ。

雨にたれこめて日をふるまゝに、試夕がもとに信濃なる新蕎麥をえたり。是ひとくさにてもてなさむと招くに任せて、二度此家に遊ぶ。其日はしばし雨小止みて、後の山近く猿の聲しばしばきこゆ。過し日桃流臺のうへの山邊なる梢に、猿の餌を求めて木づたふを、端居ながらめづらしとて見たりしが、けふは雲樹ふかくかくろへて姿はみえず。

新蕎麥に猿きく山の夕かな

と書てあるじにとゞむ。

廿五日からうじて雨晴ぬ。けふは虎溪見むとて出たつ。はひわたるほどゝ思ひしも、二里ばかり隔てりとぞ。道の具ども、例のあるじの心いれてこまやかにまうけぬ。猶あなひがてらとて伴ひ行。里の數越へて、ゆくゆくいとくるしき坂一ッ登り下りて、やをら至り着ぬ。彼の境は、かねてきゝわたりしにも似ず、寺のけはひいたうふりたるとはみゆるものから、住なせる僧の心からにや、哀にたふとき方たえてなし。柱・格子など、願禮といへるものゝならひに、あさましきまで物書けがしたり。庭のさま、人の手して造なせるものゝ荒たるなめり。とざまかうざまによそほへるも大どかならず、いみじう心おとりして、人はとまれ、我はめもとまらず。門の前小川清く流れ、岩そばだち、木立ものふりたる隈ゝ、されど見所あり。庭なども、たゞかくおのづからにてあらまほし。庭のかたはらに座禪石とよべる高き岩あり。是にのほれば遠近の望よし。

座禪にも目はまよふ山の秋の色

歸るさの道すがらもいふべき事なし。すべて此頃の明くれに、鹿の聲は聞ざりけり。我耳のうとき故かとうたがふに、いまだ時早くして啼ずとぞ。されど若かりし昔、所ゝの旅ねに聞馴つれば、こたみ聞もらしぬるもほいなき事ともおもはず。三止はもとより年ごろなづさひて、共に心をもしりかわしぬ。母なるものも、過し年めのいたはりありて、醫をもとめにとて府下にいでしようすがに相しれり。家

とうじさへに、此ほどの日かずにうちなれて、よろづまめやかに、あかなきさまにもてなさるれば、老の心なぐさみて、あやにくのながめにふりこめられぬれど、つれ〴〵わぶる事もなく、あからさまとおもひしも、かゞなへて七日のかりねをぞ重ねぬる。故郷に待人もたる身にしもあらねど、かゝらば斧の柄もくたしぬべし、あすは歸らんといふに、あるじ猶轄(くさび)を投るの意ありて、今ひと日はとせちにとゞむ。

　も一りんみよと木槿の莟かな

いな船のいなにもあらず、心よわくて又とゞまりつ。

　追はれねばたつ事しらず秋の蝿

是にて一巻の名殘をつらぬ。すべてしづけき日くらしには、俳諧して遊びつる巻ゝもつもりぬ。あるじはもとより、也陪、わが從者の文樵なども、時ゝ句ども有つれど、事繁くて洩しぬ。詩ひとつ作りてあるじによす。

張北山林遠府城
相逢多日雅談清
秋深老樹添霜色
夜靜流泉疑雨聲
驛馬稀傳都下信
啼猿常動客中情
纔看隣店商家在
豈比塵衢爭利名

こゝに來てわがのがれにしかくれ家は
　猶世にちかきほどぞしらるゝ

あくる日は妙見寺にともなはる。あるじの僧、我たしめる事聞しりて、例の河漏子にてもてなされぬ。

　鐘にちる葉や山寺の秋のくれ

あるじの求にかくいひてとゞめぬ。

廿七日にはつとめて内津を出てかへる。あるじも猶府下まで送らんとてともなひ出。行厨(カウチウ)の事などいかめしくかまへて、世を捨人に似げなきほど也。又例のたはぶれて、

　老武者の我もながゐのさね盛が
　　さいとう辨當までせわになる

いでや身の一たびやまひつきてより、つや〳〵世をはかなみ、たゞかげろふの夕をまつ心地しつれば、たまはりし祿をもかへし奉り、蓬がもとに隱れしは、はたとせの昔なりけり。其ためならぬ物から、とみに仕への途をのがれ、おのづから名利にかゝづらふ心の疎くなりもてゆくや、中ゝ命つれなきたつきとはなりけん。稀てふよはひもかぞへ過て、此秋かゝる山ぶみをさへ思ひたちし、我身よくしれる我心のあやしきまでになん。さるにてもふたゝび來べき境ならねば、しかすがに名殘おぼえて、跡の山ゝかへりみがち也。

鷹に似ず跡にこゝろの山わかれ

左を右にながめはかはれども、かへさはみなもと見し野山也。ゆき〳〵て、かち川にいたる。こたみは水かさ増りたれば、駕ひでゝ此まゝ渡りがたしとており立ぬ。ずさどものおはむといふに、いな、そは中ゝあやうからん、けふはいたうも寒からざれば、たゞ手をたすけよ、かちわたりせむ、老にたれども猶かばかりは難からじと、ほそはぎいと高くかゝげたり。わかえたるふるまひの我ながらをかし。老の浪そふ影もはづかし、淺くとも渡らじとこそ丈山翁はよまれしを。

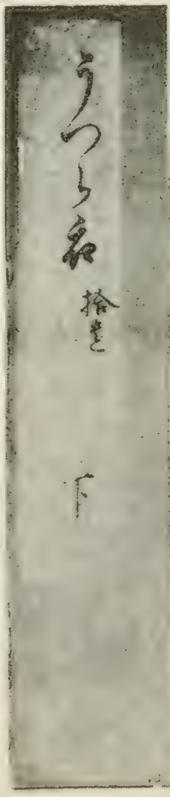
紙衣(かみこ)きぬ秋なればこそ河渡り

夫より大曾根にしばしやすらひて、夕日うすつくほど、わが桑梓にはかへり着ぬ。

思ひいづるきのふはけふの夢なれや
　しばしうつゝの山のかりねも

歸りて後さう〴〵しきすさびに、いひ捨かきすてたる事どもあつめつゞりて更幽居に贈る。字のたがひ、かんなの書誤れる物も少からじ。かたはらいたき詩歌のまねびし、さるがひ歌のはしたなきほぐどものかたほなるなど、物くるひしてかいまじへたる老のまさなごと、珷玞とだにいふべからず。只これ搏黍の一帖なり。愛、屋上の烏に及ぶとか。我をいつくしむ心にあやまちて、燕石を十襲せし宋人の愚に、ゆめならふことなかれ。もとより人の知るものならねど、四知ありといへば、天わらひ、神笑はむ。見果なば、とみに引やりて、我ため耻をとゞむべからず。

安永二年巳九月　七十二翁狂夫也有



宇づら衣　拾遺　下

記ニ余白ニ俚歌

相知る人のがり、梅雨晴の空もとめて問ふと侍り。そのあるじ俳諧も少ししりて、ざれどよくいふものなり。そこなる机のもとに引ちらしたる反古あり。何ぞとゝへば、此盆あそびに、例の子供の踊るべきうたの唱歌作れと、人にそゝのかされてかきたるなめり、されど又心におもふとありて、世に出さずなりぬ、只やがて引やり捨る物也といふ。とりて見れば、

賀さゝしらぬ無のともあり。中にをかし
くもつゞけたる畝ふ覺ゆるふしぐもあり。われ俳諧して彼れに負べきと思はぬを、かゝる物つくれといはむに、いかで是ほどにいひ出べき。世はさまぐのざえある物かなと、をしき様に思へるまゝ、只こなたにて肌やりすてん、我に得させよといひて取かへりつ。此端に余白あるにまかせて、瀟に書とめおきぬ。題號をいはゞ、さと茶の湯などこそいはめと、其人いへりけり。

世の中にすぐれて花はよしの山、紅葉は龍田、茶は宇治の、都の外已それならで、さゝ目の名所、新茶十日前に立て、濃茶の色の深みどり、松の位にくらべては、園いさいふはひくけれど、情はおなじ床かざり、かざらぬ詠おかし合、開炉や人目の中くゞり、なかだちいらぬ日切の、後はうき名の下地紙、漉もる月のさしつけて、それぞいはねど世の人の、目に聞も立られぬ、[illegible]池田炭、炭を雪かといふたがむりか、北白炭の歯を見て、雪にはあらぬあられ炭、くだけて物をおもふ夜は、夢さへあらにみすこぼし、水さす人にふかぐと、のみは三國のかゞみはげみ、釜いはいやさ飛石の、すわらぬむねのうら炭、ふくささばけぬ心かゝ、きけばおもはくちがひだな、逢うてござりかふ箱の、柄杓の竹は直なれど、そちは茶杓のゆがみ心字、くぜつにとけし茶せんがみ、にくいわたまの鉢たゝき、ひやうたんならぬ炭とりの、ふくべも花は冬籠り、それはなつめのたそがれに、五器あたりずや四畳半、よしや風爐に障子せ、茶をすのめぐる月と日も、あらば花咲花生に、はなれぬ中ばしよりそひて、うさもはなしのはつむかし、昔ばなしのおいばゞと、なれまで置の中ぬのき、縁はくさりの末長く、千代万代もへ。

題をいはば茶てまへとなづけ、もてはやす。園殺にいたりと、翁は女浮紛にもとづきかゝれしなど、人が眼はむねわずらはしければ、そのことわりをかいつけおく。

鶉 讃 ウヅラノ讃

隣に倣ふ仙室の風流
もつぱら隠逸の庭に遊ず
松に伴ふ鳥籠の規式
ひらふ十数番の席に鳴る。

辻 君 ツヂギミノ賦

月にうかるゝ鳥も多きに
いかで夜鷹と浮名にはたつ
袖はやなぎの人を招きて
枕の草にむしやとびかぶ
待ぐ相図うたはうたへど
あふてわかれの文はおくらず
鷄かへるそでのしあさは
馬場の夜寒の霜やおくらむ。

茄 子 ナスビノ賦

むらさきの名にめでゝ
まづふきあげどのはたけ。

柿にへたはまなぶとも
風のつるにはならざれ
つけもの丶夏のあした
鳴焼の秋のゆふべ
蔽だてのしなぐ\は
豆腐にも駄ざらめ

風鈴　ウタノ曲

はるは山寺ならでも
ちとつらし此かねよ
なる日はおのづから
花も風のふくものぞ

鶉像賛

百年翁に[illegible]　蔣精句[illegible]
道のほとりの木橡を吟じて
ひとかに人の[illegible]有
[illegible]のまへに[illegible]を[illegible]
永く已が名とす

此翁たれか高く
[illegible]て旅[illegible]
笠を携て旅の情やます
筆をとりて賛する辭なし

又　ウタノ曲

俳諧に故人なしといひける
いひける翁故人となりぬ
それより故人[illegible]故人
只此故人を慕ふ[illegible]

又　イヨノ曲

詩家[illegible]して[illegible]
俳門に[illegible]青[illegible]翁と稱り
かれも三石の奈良茶を味はゞ
さらに百盃の酒たかふべし

翁頭ニ笠圖賛

頭ニ笠旅發吟一[illegible]ニ花[illegible]客心
[illegible]

人日　ウタノ曲

棚も雪間に若がへりつゝ
去年の案山子も老は忘れぬ
なづな七草七日つみては
はなのなの字は猶待るゝ

鶯　アカノ曲

もとの身の雀ならば
竹の枝にもなれじや
今は桑名に焼れて
臥かさのおもしろや

寄團扇戀　ウタノ曲

えにし夏の手にはふれつゝ
いかゞとばに書そらでなる
一夜あふぎの名におやからば
とけて心のうちはかたらむ

手習の帋に書てあたへし聯句

硯の海は明暮に湛へて
桃の日の汐干もなく。
筆の林は夜日に茂りて
霜の後に落葉も見ず。

大匏銘

賢人の耳に鳴らねば
風の吹日もすてられじ
鉢叩も手に余れば
雪の降る夜も靜なり

鯉の賛

及ばぬ瀧に思ひをかけて。
戀をすればや鯉と呼らめ。
のぼれば落る悔ある世に
淵に住身を安きとはしれ。

布袋賛

餝る錦の世はうらやまず
布の袋の名ともなりぬる。
梅は肥たと我を笑はゞ
我は痩たと梅を笑はむ。

廻文

さくみつゝつまで待てまつつゞみ草

俳諧歌幷辨

煤はきの日とて立たる居風呂に
よごれぬ旦那先へ入けり

娑婆にては善知鳥(うとう)安方(やすかた)と見えしも、冥途にては怪鳥となり、よのつねの米屋味噌やも、節季には懸乞となりて罪人を責はたる、世の有様を詠めて、あか拾坊主の口ずさびける。

たつた今乞食しかりし門口へ直にむくいて懸乞がくるあてなしにつかひ〳〵て節季には錢は無いとて留守つかひけり

俳諧歌は古今集にいへる俳諧躰にもあらず。かの集にあるは歌人の俳諧歌にて、俳諧師の歌にはあらず。狂歌とは混ずべからず。狂歌は全躰の趣向を求めず。其物其ことにすがりて、他のものゝ名をかり、秀句をとりなし、こと葉をもぢりて、全く言句にをかしみを求む。俳諧歌は趣向一ッをたてゝ、其ことをすら〳〵といひ流して、こと葉の縁字義の理窟は曾てとらず。されば右に云二首、はじめのは全く俳諧歌にして、後のは狂歌といふにのがれず。二ッのさかひ、こゝをもつてしるべし。

いろは歌

いろはの四十七字を以てうたをつくり、六林子よりよせらる。それにならひて三首つくり、返しながらに贈る。

和ス下六林子雅伯題シ二作諧一ニ所レ寄歌ヲ上

（原註。以下同ジ）

芭蕉翁　待得ヌル
はせをおきなまちえぬる
宜モ世ニ色音　遺ラス
むべもよにいろねのこらす
和哥ヤ詩作　故有レト
わかやしつくりゆゑあれと
叢受テ民　褒云フ
さそひうけてたみほめ給ふ

雪中寄レ梅

今　雪ヨリ明　初ル
いまゆきよりあけそむる
誰　殺ヌ花　開テ咲ク
たれうゑぬはなすべてさく
得　匂ハテ共　香　珍ラシ
えにほわねどゐやめづらし
爐ノ火ヲ　圍　セチニ　思フ
ろのひをかこみせちにおもふ

題ニ早梅一

室　滴マデ宿　笑ツル
むろたのまでよべゑみつる
逸　早モ咲ケ　見ト云フ
いちはやもさけあにとゐふ
是ヲ　褒　得ソ　折セテ
これをほめえそおりせね
雪　乍　主ハ　鶯
ゆきながらぬしわうぐひす
冬　一夜　六林子ノ　歌ヲ見キ賞
ふゆひとよろくりむしのうたをみきげ
留惠ヤオ　有レラバコソ得ハセメ學
にちゑやさいあれらばこそえわせめま
ベルモ手オ　東テヌ
なべるもておつかねぬ

蘇水
ほする

國の名二十をかくしてよみける　二首

いつ(伊豆)いか(伊賀)であふ道(近江)あらむつ(陸奥)ひに身の(美濃)あは(阿波)
では(出羽)いかゞ(加賀)いき(壹岐)がひ(甲斐)もなし

秋(安藝)も最中と(長門)ひ來(肥後)よあは(安房)れ月い(紀伊)く夜野と(能登)川(河)
近(内)く山遠(大和)き(隱岐)里(佐渡)

國の名十づゝ入れて戀の心を

いづ(伊豆)み川(三河)いせ(伊勢)き(紀伊)〳〵にかゝ(加賀)る浪の(美濃)うし名(信)
の(濃)たゝむ(丹後)戀よ(伊與（豫）)あは(阿波)ずも

旅のこゝろを

漕(紀伊)出ば(出羽)いつ(伊豆)あは(安房)む身の(美濃)跡を遠(遠江)み浪や眞白(山城)
に沖(隱岐)津しま(對馬)〳〵(志摩)

祝のこゝろを

里(佐渡)の(能登)戸もと(土佐)ざゝぬ(讃岐)君の(美濃)かゝ(加賀)る世にあふみ(近江)
はうき(伯耆)をき(隱岐)かで老ひせん(肥前)

鳥の名　十

う(鵜)かり(雁)つる(鶴)世はをし(鴛)から(烏)ずそむきし(雉子)も都
こひ(五位)しき(鴫)とき(木札)は有けり

獸の名　十

こりす(栗鼠)二(豕)夜い(猪)も寢ずみ(鼠)しか(鹿)君來ざる(猿)うし(牛)
やくま(熊)なき(狐)月のかねこ(猫)と

草の名　十

道(菖)さへもなくず(葛)住(麥)君が(萓)山遠き(荻)世のよし(葭)あし(芦)
うど(獨活)くき(菊)くらん(蘭)

庚寅六十九歲元日試筆

東風回暖入嵒阿
老對鶯花樂若何
六十余齡今得九
人生誰道古來多

をしむともいそぐともなき年くれて
　待ずいとはぬ春はきにけり

初日の外面を見渡せば、けさは農夫も働鍬を休て、惠慶の葎の宿とよまれし秋ならねども春はきにけり。

圓畠に人こそ見えね年の市
　夜半まで室にまどひし足ら皆
　　かしこまりてや雜煮喰らん

八體付方

閑耳　たつる門の人音
其人　ふぐ汁の鍋を片手に提ながら
其場　片側はくら屋も交る与力町
時分　夜なかゝと思へば星の明かゝり
時節　延び〳〵た緣の空も五月雨
天相　一しきり雨やら松の嵐やら
觀相　勘當の跡にまよひの親ごゝろ
俤　木曾もまたのがれて見れば浮世なり

丈草文跋

傘と剃刀なさへもたぬ身の上かなさ、よしなき貧乏自慢がこうじて、明日ある人のもさへ齋によばれ候に、鬚は汁をすゝる邪魔になり、雨は衣の袖しぼらんを思ふに、ひしさこまりはて申候まゝ、御無心申入候。よく〳〵さぎすまして一丁、たさへやぶれかゝりても一本、御かし可レ被レ下候。委は參候而可二申述一候。御內儀御息女御心得可レ被レ下候、さ申候て存出候先夕はゆる〳〵さ語候而滿悅申候。
以上

正月八日　　丈草

堀彥左衛門樣

此文跡に日附なき見れば
髭の邪魔いかにきのふの齋粥
　　蘿隱戲書

寫二海洲子文一

このごろ反古を引やる中に、海洲子が文一章あり。此人柳川氏、文才ありて詩を能し、書を能す。俳諧又幽趣を得たり。惜むべし、五十の頃世をさりぬ。遺文いづれにかちりうせけむ、今わづかに此一章を見て捨るに忍びず、又のこすべきかたもなし。しばらく我が文章のなかにとどめて、追慕を慰む助とす。

蕭光先生傳（蕭光は鐵也）　　海洲

蕭光先生もさ山中なる出て人間に交はり、つれに一人臺上に坐して默爾たり。人來て笑へば笑ひ、怒れば怒れり。只人に順へり。是を莫逆とやいはむ。しかれども美人に愛せられ、醜き人ににくまれ、やゝもすれば地になげうたるゝのをあるこそはいぶかしけれ。予久しく先生を拜せず。早に起、往て拜すっげに先生や婀娜たる美少年なりし、秋の霜一度下り、蘭艾さもにくだけ、しら髮雨鬢にたれ、笑へる齒あばらとなれり。

かく零悴せるとの須臾なるはいかむぞや。先生默爾たり。それ人は一世にありて名こそ遂べきに、一毫の上に逼〳〵さしてかゝる姿さなりたり。たとへ鶴書のいたるとありとも、今はた用には立じ。素餐の責はいかむぞや。先生默爾たり。予淚を含でつら〳〵先生を見れば、先生も淚を含んでつら〳〵我を臨めり。長物語に朝飯の時過て、さらむさすれば、去らむさせり。立歸れば、立歸り、しばしわかれをゝしみ、ともに默爾さしてわかれぬ。其後古かれ店を見れば、先生默爾として居れり。また其後神路山に登りて見れば、先生猶また默爾さして居れり。先生のことは測るべからず。

悼㆓伯母㆒辭

是は徵[illegible]と書をかりて、倖文に[illegible]とのぶかるべき[illegible]只是[illegible]に任せし一然のすさびなり。

こはそもはかなき世なりけり。過しはわづかに廿日あまり、武藏に旅立する御いとま申さむとてとひまゐらせしに、例のまめやかにもてなさせ給ひ、のどやかに御物語ありしが、おまへなる瓶に花ども多くさゝせ置給ひしにつけて、過し冬さくらのさし木といふを人にならひて、庭にさゝせ侍りしに、まとにあやまたずなんとけいしし侍りつれば、うれしきときゝつる物哉としの冬かならずさゝせてむ、其すべきやうをしへてと、のたまはせしほどに、かゝる御わかれあるべしとはおぼしかくべきや。なほ何くれとかたりつづけさせ給ふついでに、此ごろおぼしよれるとあり。下にあやしの耕すをのこかきて、上つかたに雲雀の高く上りたるさま書て、それにほ句してえさせよとありしに、いとこちたくこそ、すゞろなる筆のいかゞおよびがたくや侍らん。今は旅のいそぎにしづ心なく侍れば、さるべき發句もとみにはおもひよりがたくなむ、さるにても吾妻に下り侍りて、いかでねんじて、まほならずともかきとゝのへて奉りてむ、とうけがひまゐらせし、其いとまもなくて、今はたくやしきかずとはなりぬ。我母上をはじめて、あの御はらから九ところまでおはしつ。みなにげなからぬよすが定まらせ給ひながら、うちつゞきて世を早うさり給ひ、今は二方ばかりぞ殘りとゞまり給へば、母上うせさせ給ひし後は、いとゞ御かたみとも見奉れば、なほざりに過こしほどもとりかへさまほしう、今は身のおほやけにいとまなき物から、いかでうとからずつかへ奉るをりもがなと、行末遠く思ひてしを、かゝるはかなきたよりきゝける心の、いくたびも只夢かとぞたどられ侍る。彼ののたまはせし空の雲雀も、雲がくれ給ふべきはかなきさとしにやとさへ、のこるかたなくおもひつゞくるまゝに、

なき魂やたづねて雲になく雲雀

鳥獣魚虫の掟

世上困窮につき、今般鳥獣并虫のともがらへ一統の簡略申付候。其外行作悪敷品相改申渡候。左の條々急度相守申べき事。

一蟬、すゞしの羽織を着候事、過分の至候。向後は横麻一羽ぬきに仕替申べき事。

一松虫鈴虫のともがら、籠のうちにて砂糖水を好み、奢のさたに候。向後は野山の通、露ばかりにて精出なき申べき事。

一蟻、塔を組候事、自身の功を以建立いたし候儀はくるしからず候。寄進奉加等頼候義は一切いたすまじく候。且又熊野へまゐり候に、大勢連にて無益の事候。已後は二三人づゝひま次第に參り申べき事。

一蛍、夜中火を燈し飛行候事、町々家込の所は火のもと氣遣敷候得ば、遠慮いたすべく候。池川田地等の水邊はくるしからず候事。

一蜘蛛、御領地の内においてみだりに網をはり、諸虫を捕候事不届の至候。以後は其場所相應の運上さし上申すべき事。

　但、蝿とり蜘は運上に不レ及事。

一蜜蜂の小便高直に賣候よし、諸方の痛になり、よろしからず候。向後は世間一統に、只米六升ほどの積を以相はらひ申べき事。

一蟷螂、己が短慮の我慢にまかせ、斧を以諸虫を殺害いたし、不届千万に候。向後はむね打をも一切いたすまじき事。

一金魚のともがら、近年ことに花美に相なり候。向後金銀の飾一せついたすまじく候。

　但、赤塗に砂箔等まではくるしからず候。

一蛤、春暖のころ己が快晴にほこり、樓閣を建候事、甚奢のさたに相きこえ候。向後は右躰の普請一切無用候。もし居宅の柱損候とも、根つぎいたし用ひ申べき事。

一蝙蝠、晝は橋下にかくれ居、夜々人里村里へ徘徊いたし候と、其意を得ず候。鳥獣のあらためこれあるせつは、何方へも申ぬけ役義等相つとめず候よし、不届の至候。向後は立合の支配をうけ、兩役屹度つとめ申べき事。

一音喚鳥、猥に五色の錦繡を着いたし候事、甚奢に候。向後は何色にても一色に相改、勿論縫箔等一切いたすまじき事。

一白鳥白雀等、此間は相見え候。先年は頭ばかり白きさへ稀なるとに候ところ、近年猥に相なり、よろしからず候。以

後會て異相の躰いたすまじき事。

一鼠、嫁入の躰、ヿ〴〵しく相聞え候。廿日鼠に五升樽もたせ候ヿ過分の至り、以後は提錫にて相濟し申べく候。振舞の上、天井にて躍など催、さはがしく候。人々妨に相ならず候樣、明き二階椽の下等にても盆の中躍候ヿくるしからず候。

一狸々、つねに大酒を好み、亂舞の樂奢のヿに候。潯陽の江邊にて持出しふるまひ、向後一切無用たるべく候。據なき義にて會合これあり候とも、一種一獻にかぎるべく候。尤酒は最寄のうけ酒屋にて小買いたし申べき事。

一狸、ふぐりを四疊半にのばし、茶を立、人を迷はし、諸道具に金銀を費さしむるヿよろしからず候。右の業相止申べく候。自分の樂としてはら皷打候事はくるしからず候。

一馬の太皷の義、往還問屋前を憚らず不禮の至候。畢竟これも榮曜のヿに候得ば、以後は相止申べく候。

但、厩にては苦しからず候得ども、火の見時の太皷にさし合申さゞる樣相つゝしみ申べき事。

一靑鬼赤鬼のともがら、虎の皮の褌いたすまじく候。當時病犬の皮澤山に候得ば、早速仕替申べく候。

但、右は家持頭分の鬼の事候。借屋住召仕の鬼どもは、古き桐油合羽の切レを腰に卷用ひ申べき事。

右の條々かたく相守申べく候。忽に心得違これあるやからこれあるにおいては、急度咎申付べく候。品により蟻の町代組頭まで越度たるべく候。

寶曆九卯七月

玉壺軒記 應二菴原楚巾老人之需一

何ぞ必ずしも深山の中蒿廬の下のみならむやと、むかし朝廷に俗を避たるも、耳目はおのづから世につかはれもしつらん。

こゝの市中に一ッの隱家ありて、豆腐賣はよくしれども、とりあげ婆々はさらにしらず。つき〴〵しき住居のほか、九尺にたらぬ別室、ヿにおも白うまうけ、前に泉石の目を娯ましむるも、今の主翁のたくみなせるにはあらず。もと住し人の殘し置る月と花とは、今も閑にして今は猶ふるびたり。人の多きを深山木にして、とよみしも此あたりにや。伐木丁々たるは、桶屋のたゝく也。鳴子のから〳〵となるは、菓子屋の脊戸か。田家山莊の風流、こゝに備るのみならず、四方は城下の豐なれば、朧夜の笛も雨の日の三味線も、近からぬ方に音なひて、我身はよそに聞流せば、樵歌牧笛にもさびしさは劣まじや。そもや主翁の身のうへ安きヿ、仕官

はわかきにつくしたれば、北山移文の惡口にもあふべからず。色は老をしりて遠ざけ、酒は淵明が勝ちなけれど、是ばかりは俳諧師のをり〳〵來りて戸棚をさがすは、つもりの外なるべし。されば此軒に玉壺の二字を題せられたるは、一大事のはんじ物にして、町代宿老も分別の頭を傾け、老功の道具屋もこの壺の目利は及ばずとや。實も酒にあらず、茶にあらず、まして塩辛砂糖づけにもあらず。さては仙術に天地をちゞめし市中の壺かと、潜に內證を問合すれば、是はむづかしき古みにはあらで、只此亭の入口はなはだ窄けれども、內に閑地の廣きかたち、尋常の壺に似たればいふ也とぞ。さてこそ所〳〵の入札も、彼上人の狛犬はまりとなりて、まとに分別は一生の損也と、世にほださるゝ理屈人は、此壺の底がぬけて此曉にも夢はさむべきにぞ。

松操菴記

かくいへる閑居は、塵境にありながら、庭に千章の松陰ふかく、寂寞山中に彷彿たり。あるじはその閑にふけりて、もつぱら煎茶に遊べりとぞ。そこに安置せる大悲閣あり。さぞな靈驗もあらたならめど、まづたゞ此庭の景色をそふるぞ尊とかりける。さればしめぢが原の御うたも、こゝに五文字を吟ずれば、たゞ茶のめとこそ聞ゆなれ。あるじこゝに餘白をまうけて、一句を請うてやまず。君見ずやかの御製に、枯たる木にもはなさかせむとは、もとより木ゝは歳寒の操に其用なきに似たれども、よし一鼎の煎茶とても、そのひかりにもれざらめやと、半掃庵の狂夫筆にまかせてもとめをふさぐ。

落葉にもたかば花香の誓あり

瓢長者傳

巴陵舍に一ッの瓢あり。其かたちをかしく曲れり。曲る物は全きとか、久しく爰につかへて許由がにくみをかうぶらず、鉢扣にも奪はれず。あるじも中流に舟を失はねど、常に愛して千金の價に思へりとぞ。むかし不之庵の翁は是を褒稱して、長者瓢の三字を銘せしより、頓て此名を打かへして、みづから瓢長者とは名乘ける也。長者の自稱必しも其故のみにもあらず。此瓢に不思議ありて、酒を出す事綿ゝとして不ㇾ止。是仙術にも幻術にもあらず。只一婢に阮宣が杖を持せて、一度市中に往來すれば、朝に尻の輕しとみえしも、忽然と夕に滿り。かゝれば宇治の物語にいへる姥が米は盡る期有とも、此酒は盡る日あるべからず。むべ也長者の號ある事。あるじ我に一語を求む。卒爾

に記て贈るとしかり。

名レ亭説

前に洋ゝたる長良川ながれて、向には巍巍たる稲葉山たてり。まことにあるじの素絃子なるかな。亭に名付るに巍洋の二字を贈る。山間の月江上の風、とれども禁ぜず用ひて盡ざらんには、何ぞ必しも知音をとはむ。

悼二六々庵一辭

桃は盛りに梅は散過る此曉を世の見果にして、六ゝ庵のぬし身まかりぬ。當時蕉門に俊良の才、世こぞりてをしむはさら也。我にはことに廿年の推敲をとひししたしみのみならず、かの父貞靜は、季吟老人に道を學びて　其世のすき人は名もよくしれりとぞ。我祖父の野双といひし、又同じ門下にかゞまへられ、たがひに顔しれるほどはしらず、多く撰集には名をならべたれば、いでそよ篠の一よならぬちぎりと、つねに其ことをいひかはしつれば、猶一しほの袖はぬらしける也。西行法師の願足れる其きさらぎの花のかげに、望月の頃は過しぬれど、春は追手も西にふきて、彼きしの船路も便あしからじと、いさみぬ世のたのみに、今は此わかれをなぐさむばかり也。

蝶鳥もいざ涅槃會の帋ついで

與二自若庵一文

ものゝ足る日も自若たり、物たらぬ日も自若たり。顔子が一瓢の花垣ねに白くさきて、其たのしみをあらためず。善哉。馬山子、予に菴號をもとむるに、自若の二字をおくりて清貧の生涯を稱す。もし千兩のこがねをひろはゞ。それも又自若たらむ。

夕がほにあすの米あり袋あり

名レ亭辭

いざゝらば此居をさして三富亭とよばむとは、なにをかさすや。只物のよきほどなれば也。人或は三ッの心を深めて衣食住と判ぜんに。それもよし。雪月花とかぞへむにも。はたうらやまるべき住るなるべし。

花と見せ綿とも見せて雪の宿

長榮寺碑

何にかも人は忍ばむなき跡の
石にはかなき名はとゞむとも

辭世

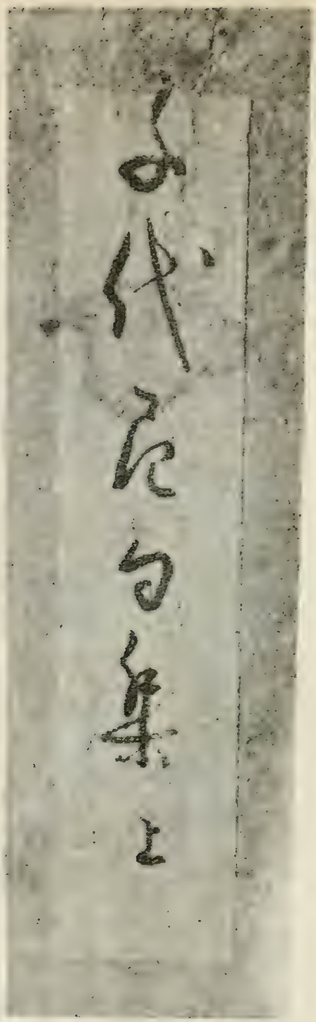
病來辭二世路一　久隱二舞津農一　八十余年夢　驚回曉寺鐘

きのふけふと思ひつゝ經し身の程ぞ

中〱長き世はかぞへぬる
短夜やわれにはながきゆめ覚ぬ

書林

京新町二条上ル　西村平八
大阪心齊橋筋順慶町　柏原屋清右衞門
尾州名古屋本町一丁目　風月堂孫助
江戸本町三丁目　西村源六
同本町筋北へ八丁目通油町　蔦屋重三郎板

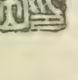


句集和

載籍所レ傳。女而秀峙者。其有レ之矣。至ニ其修辭一也。少也。微也。勿レ論下如ニ斑氏曹大家一者上。自レ此以還屈レ指可レ殫。難哉辭也。夫純樸不レ彫。熟爲ニ儀措一。白玉不レ琢。熟爲ニ琲璋一。其斯謂ニ之死不レ朽。古君子其猶病レ諸。況女子乎。日本自ニ紫式部野小町之倫一。至ニ淸少納言輩一。開レ口成レ珠。下レ筆爲レ章者。于レ朝于レ野不レ匱ニ其人一。豈氣運令ニ之然一乎。千代尼少々。淸淡简暢。土ニ木其形骸一。枕石嗽流。卒意嘯咏。遂斷レ髮從ニ釋氏之敎一。自號ニ素園一。而益寓ニ意匠於風月一。振ニ奇藻於林澤一。抑雖レ非ニ和歌者流一。實可レ比ニ其悟賞一矣。每レ得ニ一句一。知與レ不レ知。皆無レ不レ曰ニ某所有一。若ニ人勉々相ニ傳口實一焉。其斯謂ニ之死不レ朽。然而道聽膚受。前者唱レ于。而隨者唱レ喁。則異同不レ爲レ不レ多。是故所ニ與親善一者。將韓刊ニ定之一。而請ニ之尼一。辭曰。我得ニ之造化一。卒歸ニ之造化一乎。何勞レ之爲。是以不ニ上木一者久矣。白法師悲ニ其終爲墜ニ地。探レ簏僅得ニ若干首一。躬自挍ニ正之一。將レ屬ニ剞劂氏一而語レ予。我雖レ未レ識レ尼。既欽ニ其風韻一。猶且感ニ白法師賞心之切一。以ニ此言ニ冠レ之云。

寶曆十四年甲申初春

南越勝松因撰





遠き所わざ〳〵とのせうそこ、あさからずよろこび入〳〵。やくそくの一おり、ほ句はよそよりとや、げにもをとこめき候。御わキ殊之外宜候。をくら堤の句は、人にも聞およびてなされ候や。外山あきし野ゝ雨のけしきも只見るやうにおもしろく候。其外もしほらしく、附合は是にてよく候。かならずや、人になをして御もらひあるまじく候。とゝなはぬ所あるを、をなごの本情とほめ申事にて候。ほ句の事も、藤の花すぐれて面白候。

末畧



傳千代女書

墨の江の松は、幾世經ぬらん老木のさかへ、いまに久しく、武隈の松は、千とせの秋や過ぬらん、名のみ傳へて跡もなし。こゝに一木のまつあり。やゝ廿とせの春秋を經て、千代の翠におひさきしるし。いまだ高砂の尾上に、相生の名もあらずとかや。其聲高くひゞきて、芭蕉葉のやぶれひさしき不傳の妙音をうたふ事、自然の天籟にかたへり。されど凄々凛烈のつよみなき事は、姫小松の風姿なるべし。ある時、漂泊の蓮二法師、その聲を聞ていへる事あり。必これに斧斤を加ふることなかれ。大道すたれて仁義あり、智惠いでゝ大僞ありと。これこの謂あるべし。おもふに木鐸に圓團の笠をかざり、針鉄に屈曲の縄を張べからずのこゝろならんか。たゞ敷しまの風にさらし、寂々は花柳の妖艶をわすれ、亭々は萩薄の柔弱をはなるべしと。この時千代の功をまつの葉のながくつたえむと、其心を知らしめむと、いさゝかしるしを顯はさむに、

冬からの皺もぬがばやころもがへ

百日の皺もぬがばやころもがへ

寒かりし皺も脱ばや更衣

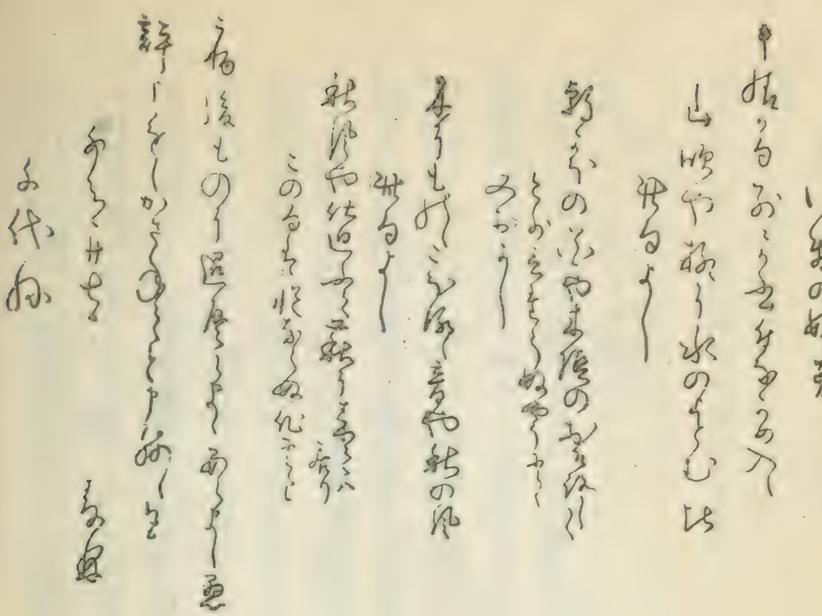
此ふたつの中に、初韵はおとこまつのかど〳〵しく、一句のつよみともいふべく、寒か

りしといふ聲や、衣の皺を引かへて寒苦の皺を脱たれば、一作の針鉄に曲節ありて、これを松風の上手とはいふべく、これを妙とはいふべからず。冬からの音は姫小松のよはみにして、天然の風聲なれば也。むかしも衣通姫のながれに、小野小町なん此妙音を得たるとかや。抑上手は人を敎ふるに尊く、名人は天理をつたふるの靈なり。玄又玄衆妙の門といへる人は、八十章に万理を通じ、明德をあかし止善にとゞまる聖人は、十三經にひろまる。こゝに南無妙法蓮華經の妙は、五千余卷に上ぬりして大自在を得たり。せばむれば芥子の中に入、ひろがれば那由他の大身を現ずるがごとく、颯とも、瑟とも、風とも、凛とも、四時に流行し、千歲に不易せばこれを蕉門の虛に居て、實にはたらくといふ一傳なりと知るべし。これは是不知して、かしこかれといふにはあらず。しりておろかなれと、そらうその調子をあわせたるのみ。

享保十孟夏上浣　　　　不五舍人宇中誌之

老ぬればやがて死ぬべき身なりと、
すへの世の記念にしるし侍る。

片われのいの字書間や夏の月



いせのふみ

貴様が句、別〻に書付ながめ入候。

山吹や柳に水のよどむ頃

此句よし。

朝がほの花や木陰のおそろしく

今少見たらぬやうにて又おかし。

木にものゝこぼるゝ音や秋の風

此句よし。

秋風や仕廻ふて萩に來ては居り

この句は慥ならぬ作にて候。

病後ものに退屈候まゝ、あらまし愚評申進候。かさねてと申殘候。以上

卯月二十七日　麥林

千代様

對加陽千代女

國の名の笠に芳はし花の雪　麥林
とをき日影も水ぬるむころ　ちよ
うぐひすに雀の朝寐起されて　蒼紫
机の塵を笑ふ羽箒　風二
栗柹に月下の門のたのしさよ　東棠
薄着の人に冬は近よる　奈良 乙峯
雁がねも乘合せたる渡し舟　代
元三大師橫川ともいふ　林
灯をとぼす間を狀の筆とめて　二
牡丹の筒も庭の藪から　紫
啼そめる日和せはしい蟬の聲　峯
虹も凉しき紅の乘掛　棠

千代女の許にやどりて

おしむなよ芙蓉の陰の雨舍り　蓮二

もとよしの道すがら、千代女とつれだちて

紅茸や老人茸も杖の友　盧元坊

千代女の許にて

凉風の配りや萩の亭主ぶり

千代女の許にて

鬢水の手染もはやし庭の蔦　暮柳舍 希因

千代尼句集 乾

歲旦

福わらや塵さへ今朝のうつくしさ
よき事の日にもあまるや花の春
初空や鳥はよし野ゝかたへ行
我裾の鳥も遊ぶやきそはじめ
かざらぬは初音も來よし庭の竹
松竹や世にほめらるゝ口の始
竹も起て音吹かはす初日哉
福わらや御所の裾にも袂にも
鶴のあそび雲井にかなふ初日哉

布袋の贊

初空や袋も山の笑ひより

初霞

まだ顏の空へはおもし初霞

鶴ひとつ何のこゝろや梅の花

鶯

うぐひすや又言ひなをし〳〵
鶯はともあれ爰の初音かな
黄鸝や聲からすとも富士の雪
うぐひすや都ぎらひの竹の奥
鶯やよし野ゝ沙汰に氣もつかず
うぐひすや初音に聞くは幾所
うぐひすや冬其儘の竹もあり
鶯や梅にも問ずよそ歩行
黄鳥のものに倦るか竹の奥
うぐひすは人も寐させて初音哉

柳

みよし野に闇一結び柳かな
晝の夢ひとりたのしむ柳哉
青柳や地の果もなき水の上
うぐひすは起せどねぶる柳哉
青柳は何所に植ても靜なり
結(むすば)ふと解(とか)ふと風のやなぎかな
ながれては又根にかへる柳かな
青柳やどちらの世話で水の音
柳から殘らず動く氷かな
おそろしき根を耻入て柳哉
手折らるゝ花から見ては柳かな
根を置てけふもどらぬ柳哉

惠び壽の贊

釣竿の糸吹そめて柳まで

八十の賀

百とせに最一眠り柳かな

桑名のわたしにて

見るうちにわすれて仕廻ふ柳哉

かすみ

青柳の朝寐をまくる霞かな

春雨

もえしざる草何〳〵ぞ春の雨
春雨やうつくしうなる物ばかり
春雨や土の笑ひも野に餘り
春雨にぬれてや水も靑う行

蝶

蝶〳〵や何を夢見て羽づかひ
夢ながら蝶も手折や花戻り
蝶折〳〵扇いで出たる霞かな
たんぽゝや折〳〵さます蝶の夢
蝶〳〵やをなごの道の跡や先
わが風で我吹おとす胡蝶かな

飛しらの人に對して

蝶〳〵や裾から戻る位山

五百年の法會

をしなべて聲なき蝶も法の場

猫戀　淡雪

聲たてぬ時がわかれぞ猫の戀
ふみ分て雪にまよふや猫の戀
淡ゆきや幾筋きえてもとの道

風巾　霞　山吹

吹〳〵ど花に欲なし鳳巾
鳥は音に跡先さそふ霞かな
山吹や柳に水のよどむころ
山吹のほどけかゝるや水の幅

木のもとは翌の事也はつ霞
地に遊ぶ鳥は鳥なり初がすみ

文臺のうら書

初がすみたつや二見のわかるほど

若水

わかみづや流るゝうちに去年ことし
若水や藻に咲花も此雫
若みづや迷ふ色なき鷺の影

万歳

万歳やもどりは老のはづかしく
萬歳の口や眞砂は盡るとも

人日

七草やつれにかえ合ふ草もあり
道くさも數のうちなり若菜摘
人あしに驚も消るやわかなの野
若菜摘けふより花の道廣し
七種のひゞきからある水の音
仕事なら暮るゝおしまじ若なつみ
手の跡を雪のうけとる若菜かな
花までは出惜しむ足を若菜哉
ひとつ家も摘出す雪の若菜哉
七くさや翌からは目の地につかず
七草やあまれどたらぬものも有
一いろのあまりは白き若な哉
七くさや都の文を見る日數
なゝくさや我は背戸にてよみ盡し
風の手にけふまで入ぬわかな哉
七草や雪を拂へばそれでなし
白い手の鳥追もあり若菜畑
山彦はよ所の事なりわかな摘

鶴の畫贊

人音を鶴もしたふて若菜哉

梅

梅咲や何が降ても春ははる
梅が香や風のあい〳〵木にもどり
梅の花咲日は木ゝに雫あり
むめがゝや百もかほ出す雪間より
梅がゝや戸の開音はおぼえねど
咲事に日を撰ばずや梅の花
梅がゝや尋ぬるほどの枝にさへ
梅が香や鳥は寐させてよもすがら

文臺のうら書

梅の月浪の間に〳〵二見かな
梅が香やことに月夜の面白し
梅がゝや谷へむかいに行戻り

仇を恩にて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薫るや梅花

追悼

梅ちるやまつのゆふ邊も秋の聲

梅花佛手向

なごり〳〵散までは見ず梅の花
梅がゝや朝〳〵氷る花の陰
梅咲や水さへ水にならぬ折

大黑の繪贊

梅がゝや何所へ吹るゝ雪女

繪贊 三首

有手からこぼれ初てや梅花
もどかしや香はとゞけどもんめの花
梅がゝにつれ立日さへまだ寒し

祖師五百年御忌法會 二章

ながれ合ふてひとつぬるみや淵も瀬も
すゑの世にながれてぬるみ增りけり

櫻

あしあとは男なりけり初櫻
初はなやまだ松竹は冬の聲
明ぼのゝさくらに成て朝日かな
どち見むと花に狂ふやよしの山
けふ來ずば人のあとにか初櫻
唯かへる心で出たにはつさくら
見て戻る人には逢ず初櫻
むすばれて蝶も雙寐や糸さくら
明ぬれどいよ／＼白し初櫻
影は瀧空は花なりいとさくら
月の夜の櫻に蝶の朝寐哉
何にすれて端／＼青し山さくら
潜るとて剃はせねども山櫻
晩鐘を空におさゆるさくらかな
短冊は風をあつかふさくら哉
花は櫻まことの雲は消にけり
見る人も麁相なりや初さくら
ふか入のした日の脚や山さくら
花もりや人の嵐は晝ばかり
だまされて來て誠也初さくら
女子どし押てのぼるや山さくら
見ぬものを見るより嬉しさくら花

奉納

うち外を鳥の仕事や神の花

畫賛

道くさに蝶も寐させぬ花見哉

桃花

富士の笑ひ日に／＼高し桃の花
それほどにかはかぬ道やもゝのはな
よし野から鳥も戻るや桃の華
桃咲やよしのゝこゝろ捨てから
里の子の肌まだ白しもゝの花
桃咲や幾度馬に行あたり
隱れ家も色に出にけり桃の花
もゝさくや名は何とやらいふ所

富士見にまかる人に

桃の色目におさまりて富士見哉
戸の開てあれど留守也桃の花

汐干

青柳のけふは短きしほ干かな
拾ふものみな動く也鹽干潟
海士の子に習らはせて置汐干哉
蝶／＼のつまだてゝ居るしほ干かな

雛

鏡もちや雛のかほも戀しらず
轉びても笑ふてばかりひゝな哉
とぼし灯の用意や雛の臺所

朧月

穴の明松風もなし朧月
おぼろ夜やそれではなふて人は人
拂ふ事松もかなはず朧月
朧夜や見居たもの梅ばかり
おぼろ夜や松の子どもに行あたり

言さして見直す人や朧月

朧夜やうたはぬ歌に行過し

世の花を丸うつゝむや朧月

雉子

きじ啼て土いろ／＼の草となる

若くさや尾の顯はるゝ雉子の聲

耳遠い事でもあるかきじのこゑ

隱すべき事もあれ也雉の聲

雲雀

ふたつみつ夜に入そうな雲雀哉

折ふしは雲のうしなふひばりかな

てふ／＼は寐てもすますに雲雀哉

草むらの留守に風留雲雀哉

あがりては下を見て鳴ひばりかな

ある折はうそにも落て雲雀哉

畫賛に

身あがりや雲雀の籠も地に置ず

燕

乙鳥來てあゆみそめるや舟の脚

畫賛

舍りして筈とはならぬ燕かな

蛙

雨ぐもにはらのふくるゝ蛙かな

鳴雲雀呼戻したるかはづ哉

踞はふて雲を伺ふ蛙かな

蓑生濱といふに

蛙鳴てその蓑ゆかし濱つたひ

若艸　畫賛

若くさや駒の寐起もうつくしき

送別

若くさや歸り路はその花にまつ

祖師五百年御忌法會

地も雲に染らぬはなきすみれ哉

駈出る駒も足嗅ぐすみれ哉

松花

吹つもる塵出なをして松の花

あいさつに

二むかしつもる目はなし松の華

隱居をとぶきて

囀りを世にや讓りて松の琴

閑かさは何の心や春のそら

下萌や水仙ひとり立しざり

送別

見送れば墨染に成花になり

藤花

藤のはなながふて連におくれけり

鶯の聲もさかるや藤の花

おそろしのよりやもとりて藤の花

まつかぜも小聲になるやふぢのはな

あそびたい心のなりや藤の花

地にとゞく願ひはやすし藤の花

更衣

花の香にうしろ見せてや更衣

綿ぬきや蝶はもとより輕／＼し

わたぬきやはじめて夜着のおそろしき
綿脱やまだ朝〳〵にうそもあり
脱捨の山に（と）つもるや更衣
おもたさの日にあつまるや更衣
冬からの繊をぬがばや更衣
二日三日身の添かぬる袷かな

餞別

日はながし卯月の空もきのふけふ

卯花

うのはなは日をもちながら曇り皃
卯花や垣の結目も降かくし
うのはなの闇に手のつく若葉哉

牡丹

垣間より隣あやかる牡丹かな
水に添はゞまた名もあらむ白ぼたん
蝶〳〵の夫婦寐あまるぼたん哉
指折ば翌へもかゝる牡丹かな

衣通姫の賛に

ゆふかぜに蜘も影かる牡丹かな

杜若

水の書水の消したり杜若
萍の身はまだおもしかきつばた
行春の水そのまゝや杜若

をうなの身まかりけるに

雲のゆかりそれかとばかり杜若

浴佛

灌佛や蔦の若葉もあゆみそめ
蚊屋つりの草もさげてや花御堂

若葉

晩鐘に雫もちらぬ若葉哉
日の脚の道付かへる茂りかな
葉櫻や知らぬむかしのものに成

行々子

むさし野に聲はこもらず行々子

諫鼓鳥

淋しさは閑人にこそかんこどり
分入ば風さへきえて諫鼓鳥

筍 若竹

竹の子やその日のうちにひとり立

餞別

若竹と成て千里も遠からず
風毎に葉を吹出すやとし竹
若竹の風は日に〳〵かわりけり
わかたけや雀の耳に這入る時

婦人の追悼

そのわかれ浮艸の花けしの花

郭公

鶏の聲つもりし耳やほとゝぎす
ものゝ音水に入夜やほとゝぎす
あすの夜は寐させてくれよ蜀魂

書賛

音をいかに雲井にむすぶ郭公
起あがる鳥もあるべし子規

風人にたづねられて

木々の闇植ても置ず杜宇

あいさつ

道〳〵に残した聲や蜀魂

きぬ〳〵のあちらにはなしほとゝぎす

男さへきかれぬものをほとゝぎす

唯置て枕の塵や杜鵑

おもひ切てこちら向時ほとゝぎす

唯もどる道なが〳〵し時鳥

子規聞入の口もとぢて置

百合

姫ゆりやあかるい事をあちら向

ひめ百合や姿見をする子供から

水鶏

水音は水にもどりて水鶏哉

蛍

下闇に居りわすれてや飛蛍

しのゝめやとめし蛍を置忘れ

川ばかり闇はながれて蛍かな

茨

花と針の心問たき茨かな

菖蒲

降らひでもぬるゝ名のあるあやめ哉

音ばかり覓失なふあやめ哉

澤にあるうちは名だゝぬ菖蒲哉

風よりも雫のものぞ軒あやめ

五月雨

短夜のうらみもどすや五月雨

田植

まだ神のむすばぬも出て田植哉

つれよりも跡へ〳〵と田うへかな

田うへ唄あしたも有に道すがら

けふばかり男をつかふ田植哉

早乙女やわかな摘たる連も有

夕顔

ゆふがほは朝〳〵もどるさかり哉

夕顔や女子の肌の見ゆる時

ゆふがほや物のかくれてうつくしき

あいさつ

ゆふがほの宿や茶の香も水くさき

紅花

あつき日や指もさゝれぬ紅畠

涼風の這入て見えぬ紅畑

こぼれては常の水也紅の露

短夜のつのる花かや紅ばたけ

山蔭やこゝもとの日は紅の花

暑

あさの間は空にしられぬ暑さ哉

塩竈のほそふ立日はあつさかな

晩鐘に散残りたる暑さかな

來て見れば森には森のあつさ哉

萍　藻花

うきくさや蝶のちからの押へても

蘋(うきくさ)を岸に繋ぐや蜘の糸

浮艸に我は根の付涼みかな

萍やとりおとしたる咲所

藻花や濡ずにあそぶ鳥は何

氷室

涼しさや氷室の雫〳〵より

蓋とりてつめたきかさや氷餅

蟬

初蟬や風にも用のある日から

せみの音やからはその根に有ながら

松風もをのがのにして蝉の聲

納涼

松の葉もよみつくすほど涼けり

涼しさや梢／＼の吹あまり

涼風や押れ合たる草とくさ

すゞしさや手は届かねど松の聲

涼しさやあるほど出して鷺の首

影坊の森ではぐるゝ涼かな

唐崎の莖は涼しき雫かな

送別

道もその道に叶ふてもの涼し

涼しさや耻かしいほど行戻り

八十の賀

涼しさやとに八十年の松の聲

ひよ子の賛

子の闇に鷄も迷ふやゆふ涼

あいさつ

涼風の植所なき住ゐかな

伊勢の人に對して

あいさつはうちとの風でしまひ皃

白雨　越の日和山にて

ゆふだちの道よりもなし日和山

夕立や卒爾な雲の一とをり

雲峯

眼にさわる鳥は消たり雲の峰

松風を植て聞たしくもの嶺

あいさつ

仰むけばきれいにあつしくもの峰

送別

何里ほど我目のうちぞ雲のみね

清水

山のすそ野ゝ裾むすぶ清水かな

青／＼と見えて根のある清水哉

暫の旅に赴きし人へ

道くさも手のうつくしき清水哉

紅さいた口もわするゝしみづかな

行さきで又我に逢清水哉

手あくれば結びめのなき清水哉

近道を來て日の足らぬ清水哉

目にむすぶ谷間／＼の清水哉

都のかたへ旅だつ人に

おくらばや清水に影の見ゆるまで

近道によき事ふたつ清水哉

結ぶ手にあつさをほどく清水哉

眞如平等

清水には裏も表もなかりけり

夏の月

釣竿の糸にさはるや夏の月



千代尼句集　坤

初秋

蚊屋の浪かほにぬるゝや今朝の秋
秋たつやきのふのむかし有の儘
これこそと何も見初めず今朝の秋
荻の葉のもの言かほやけさの秋
琴の音の我にかよふや今朝のあき
秋たつやはじめて葛のあちら向
初秋やまだうつくしい水の音
はつあきやまだ顯はれぬ庭の色
秋立や風幾たびも聞直し

かたびらの襟にはくさし荻の音

殘暑

荻の聲のこるあつさを隙で居る
秋の部へこぼれてはへる暑さ哉
朝の間はかたづいて居る殘暑哉

はじめてのあいさつに
文月や空にまたるゝひかりあり
文月の返しに落る一葉哉

七夕

荻も穗に出るやほしのあそびより
ほし合や心して行雲の脚
かさゝぎや別れの橋は懸ねども
朝がほや星のわかれをあちら向
夕顔も寐るやくそくぞほしまつり
ほし逢や月入までは何の蔭
鵲もねぶたき笘の八日哉

朝顔

牽牛花やまだ灯火の影も有
あさがほや鳴所替るきり〴〵す
朝がほや起したものは花も見ず
朝顏は蜘のいとにも咲にけり
蕣の花や木陰のおそろしき
あさがほはその日に逢ふて仕廻皃
牽牛子やをのが蔓かと蔦に咲
あさがほや誠は花の人ぎらひ
朝がほや裾は日もまつ草の花
あさがほや草臥直る夜は持ず
朝がほや夏の夜ならば夢の内
朝顔に釣瓶とられて囉ひ水

稻妻

いなづまも鴉の聲にわかれけり
稻妻や何にしるしをつけて行
いなづまの裾をぬらすや水の上

草の花　花野

蝶〳〵の身の上しらぬ花野哉

畫賛　二章

蘆間から風の拾ふや捨小舟
蘆の葉にすはらぬ尻となりにけり

文臺のうら書

よしあしの穂に顯はれて二見哉

千種貝の題にて

波のうへに秋の咲なり千種貝

送別　二章

日和〳〵道は薄の雫まで
下冷を咲あたゝめよ道の艸
見送るに目のはなされぬ花野哉
どう見ても春散種や草のはな
秋風のいふまゝに成尾花かな
草の戸や手によごれたる花も咲

畫賛

雉子のつま隱し置たる薄かな
晩鐘に幾つか沈む尾花哉
桔梗の花咲時ポンと言そうな
川音の晝はもどりて花野哉

あいさつ

千秋を咲むすびてや草の庵
秋の野や花となる草成らぬ艸
明てから蔦となりけり石燈籠
鷄頭やならべてものゝ干て有
鷄頭やまことの聲は根に遊び

剃髪の人

塵と見て露にもぬれそ萩の花

秋風　虫

木からものゝこぼるゝ音や秋の風
行水にをのが影追ふ蜻蛉哉
虫の音に心も置ず降夜かな
脫捨の笠着て啼やきり〳〵す
虫の音や野におさまりて庭の內

良夜

名月や人に押合ふ鳥の影
明月や雪間(?)につもる水の音
名月やよし野ゝ葉にも咲あまり
名月や行ても〳〵よその空
名月やはづかしの森いかばかり
明月や白きにも似ず水の音
晩鐘の耳失ふやけふの月
名月や眼に置ながら遠歩行

畫賛

きぬ〴〵は月にもありて明をしみ
名月や手屆きならば何とせむ
何着てもうつくしうなる月見哉
名月や鳥も寐ぐらの戸をさゝず
月見にも陰ほしがるや女子達
名月や闇を尋ぬる鳥もあり
月の夜や石に出て啼きり〴〵す
人中を潜る欲なき月見哉
名月の舟やあそこもこゝもよし
舟からはちかしとむかふ月見哉
名月やあかるいものに行あたり
名月や何所までのばす富士の裾

名月や留主の人にも丸ながら
うら町の軒あかるしけふの月
名月や唐崎の雨明てから
あかるふてわからぬ水やけふの月

硯の題

名月やそのうらも見る丸硯

石山書賛

名月や雪踏分て石の音

十六夜

いざよひや今あそこにて見ゆる雁
十六夜や囁く人のうしろより
いざよひやいざよいと言果ぬうち
十六夜の闇をこぼすや芋の露
いさよひの闇や耻かく人もあり

初雁

はつかりや通り過して聲ばかり
初雁やならべて聞はおしい事
はつ雁や山へ配れば野に足らず
初雁や聲あるものを見失ひ
はつ鳫や見捨た花を草の時

鶉

聞人の目の色狂ふ鶉から
賣られても秋をわすれぬ鶉哉
縫物に針のこぼるゝ鶉かな

蒲萄

雫かと鳥もあやぶむぶどうかな

菊

蘭の香にあそぶ日はなし菊の花
菊畑やけふ目に見ゆる足の跡
咲花をいくらか捨てけふの菊
菊咲て餘の香は草に戻りけり
白菊や紅さいた手のおそろしき
菊咲てけふまでの世話わすれけり
きく畑や花の行衛は雲井まで
菊の香や茶に押合ふも此日より
朝〳〵の露にもはげず菊の花
菊畑や夢に彳む八日の夜
けふばかり見てすむものを菊の花
しら菊や寒いといふもいへる頃
けふに成て草臥おかし菊作り
今日のきく獨咲ではなかりけり
しら菊や日に咲ふとはおもわれず
子ども手にかなふ盛りや菊の花

後月

影坊も出ては隠るゝ后の月
しかられた畑も踏よし後の月
のちの月始めてせばきいろりかな
とり残す梨のやもめや後の月
たち盡すものはかゝしぞ后月
山彦は宵に戻るやのちの月

瓢

夕顔の身は持にくしあきの風

三界唯心

百生や蔓一すじの心より
約束を何〳〵持や種ふくべ

一瓢菴にて

九十九をよ所に持たる瓢かな

花や葉に耻かしいほど長瓢
行秋の聲も出るや瓢から

紅葉

木陰から出て日の暮る紅葉哉
ゆふぐれを餘所に預けてもみぢ哉
折〳〵は霧にもあまる紅葉哉
色に出て竹も狂ふや蔦紅葉

餞別

闇からぬ空はともあれ初もみぢ

鹿

水の色赤うなりてや鹿の聲
夕ぐれを引あつめてぞしかのこゑ
獨聞我にはほしき鹿の聲

砧

聲添ふて雨にしづまる砧かな

案山子　鳴子

冬瓜の枕さだむるかゝしかな
風の日は餘所の仕事を鳴子哉

鴫　追善

鴫たつやよそのわかれに暮まさり

遠忌

百とせのその日も鴫のゆふべ有

暮秋

行秋や持て來た風は置ながら

山代の温泉にて

温泉の山や秋の夕部はよその事
行秋やひとり身をもむ松の聲

時雨

降さしてまた幾所か初しぐれ
柳にも雫みじかしはつしぐれ
日の脚に追はるゝ雲やはつしぐれ
その中に唯の雲あり初時雨
水鳥の背の高う成しぐれかな
松風のぬけて行たるしぐれ哉
此うへは白きものとてしぐれけり
初しぐれ風もぬれずに通りけり
まだ鹿の迷ふ道なり初しぐれ
京へ出て目にたつ雲や初時雨
九重の人も見え透しぐれ哉
田はもとの地に落付や初時雨
きのふけふあしたは只のしぐれ哉

畫賛

仰向て見る人もなきしぐれ哉

歸花

みよし野はよその春ほど歸り華
春の夜の夢見て咲や歸花
明ぼのも暮の姿やかへりばな
寐た草の馴染はづかし歸り花
咲〳〵も果はうそなり歸花

落葉

見るうちに月の影減る落葉哉
落葉まで風の物とや持歩行
水のうへに置霜流す落葉かな

寒山の賛

隣り〳〵わからぬものは落葉哉

冬枯

冬枯やひとり牡丹のあたゝまり

枯野

鷺の雪降さだめなき枯野哉

いろ〳〵を石に仕あげてかれの哉

枯野行人や少さう見ゆるまで

枯尾花

決定心

根て切て極楽にあり枯尾ばな

安心

ともかくも風にまかせてかれ尾花

大根引　蕪

道くさの草にはおもし大根引

降ものに根をそゝぎたる蕪哉

手のちからそゆる根はなしかぶら引

凩　小六月

こがらしやすぐに落付水の月

似た事の三つ四つはなし小六月

紙衣　火燵

待暮も曙もなき紙衣かな

尼になりし時

髪を結ふ手の隙明て巨燵哉

冬の鳥

こぼれては風拾ひ行衛かな

三つ五つまではよみたる千鳥哉

池の雪鴨やあそべと明て有

花にとは願はず雪のみそさゞゐ

吹たびにあたらしうなる千どりかな

山彦の口まね寒きからす哉

拂はぬはをのが羽とや雪の鷺

鳥影も葉に見て淋し冬の月

霜　霰　寒

夏の夜のちぎりおそろし橋の霜

水にうくものとは見えぬ霰かな

朝の日の裾にとゞかぬ寒さ哉

水仙

水仙の香やこぼれても雪の上

水仙は香をながめけり今朝の雪

水仙は名さへつめたう覚えけり

冬梅

冬の梅咲やむかしのあたゝまり

折〳〵の日のあし跡や冬のむめ

雪

初雪や見るうちに茶の花は花

聲なくば鷺うしなはむ今朝の雪

初雪や鶏の色の狂ふほど

はつ雪やほむる詞もきのふけふ

はつゆきや落葉拾へば穴が明

初雪や麥の葉先キを仕廻かな

はつ雪は朝寐に雫見せにけり

はつゆきや子共の持て歩行ほど

初雪や水へも分ず橋の上

はつ雪や降おそろしう水の上

初ゆきや風のねぶりのさむるまで

初雪や根の付さうな竹の間

はつゆきは松の雫に殘りけり

そつと来る物に氣づくや竹の雪
しなわねばならぬ浮世や竹の雪
吹事をわすれて見るや竹の雪
青き葉の目にたつ頃や竹の雪
花となり雫となるや今朝の雪
雪の有ものにきかすな松の聲
つめたさは目の外ㇳにありけさの雪
手をうちていやそちでなし竹の雪

あいさつ

取あへず座に敷けり今朝の雪

五百回御忌
東御門跡へ上る

葉も塵もひとつ臺や雪の花

鉢扣

山彦をつれて歩行や鉢たゝき
鉢たゝき夜毎に竹を起しける

臘八

臘八や流るゝ水も物いはず

餅花

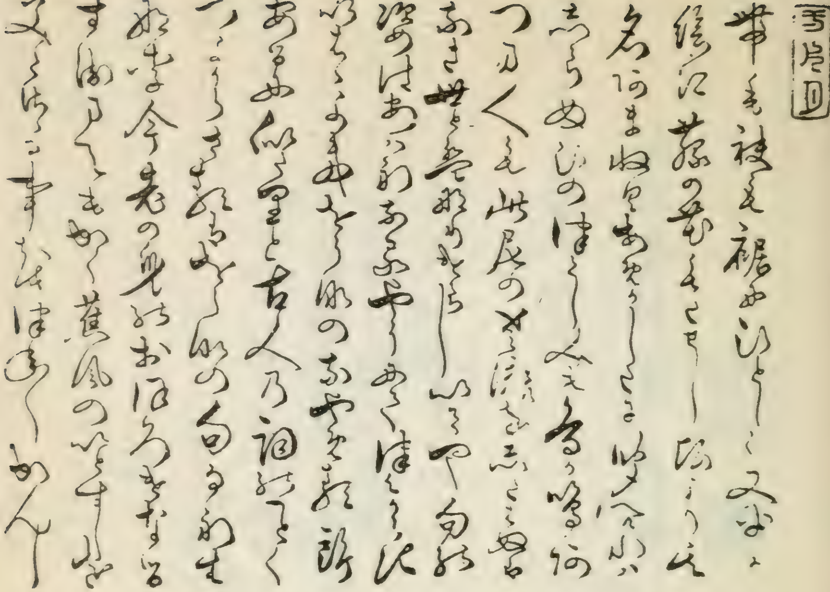
けふばかり背高からばや煤拂
散事を待とはおかし餅の花

歳暮

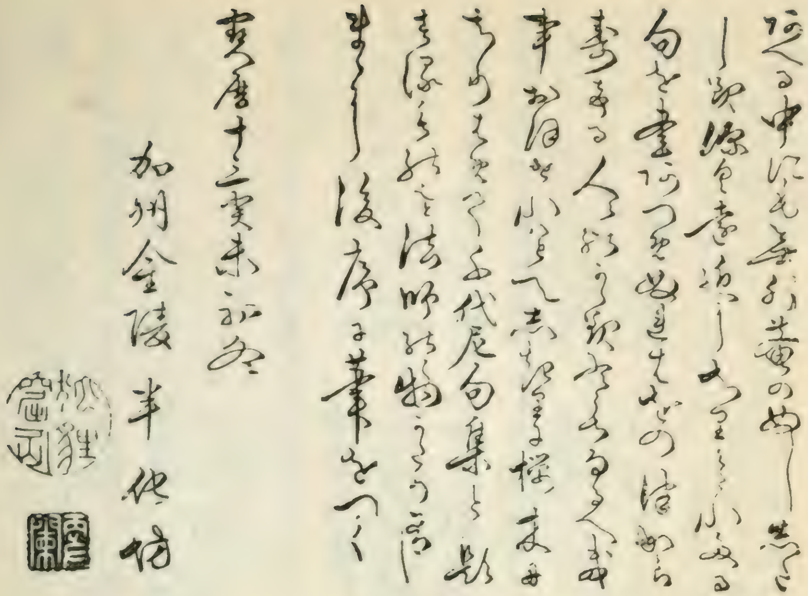
行としやもどかしきもの水斗
閏月のそのめも見えず年のくれ
朝起もひとつに年はくれに梟
行としや連だつものは何と何
としの尾や柳に青ふ結び行

年内立春

としのうちの春やたしかに水の音
年のうちの春やしらずに行もあり
着よごしたなりに春とやとしの内
十のもの幾つの春ぞ年のうち
春めかぬ詞づかひやとしの内
おもひ出した樣な春なりとしのうち



帯も袂も裾にひとしく、又平が繪に藤の花もたせし頃より、其名あまねく、あめがしたに聞へければ、しらぬひのつくし人も、烏が鳴あづま人も、此尼の風流をしたはぬはなき世とはなりけらし。いでや句の姿は、あはれなるやうにてつよからず、いはゞよきをうなのなやめる所あるに似たりと、古人の詞のどく、つよからざるはをうなの句なればなり。今老の身のおぼろげなるすゑまでも、かく蕉風の



いとすじをみださゞる事を、つね
ゞかんじあへる中にも、無外菴
のぬし、したしみ深く、遠近にちり
みだれたる句を書あつめぬれば、
をのづからすける人ゝのかゞみ
ともなるべき事おほければとて、
しきりに櫻木にちりばめて、千代
尼句集と題するもの也と、法師の
物がたり有しまゝに、後序に筆を
つく。

寳暦十三年癸未初冬

加州金陵　半化坊

［印］［印］

薪一束　全　既白選	うつゝ　全　加賀金沢　麦水選
続笠　全　同	月のまき　全　半化坊評
冬日鳥　全　同	千代尼句集　全二冊　既白校
北時雨　全　加金沢　如本選	蕉門芳縁　出来　同

皇都書林　二条寺町　橘屋治兵衛

東都書林　銀座二丁目　山崎金兵衛

太祇句選

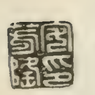
太祇句集序

交は易からぬもの也。始は刎頸にして半に寇讐たるの類、古より少からず。太祇はもと江戸の產にて、中年都に上り、住心やよかりけむ、其まゝに廿餘年の春を迎へ、秋風のたつを、さまで蓴鱸をも思ず。本より山水の癖ありて、みちのくつくしの果迄も杖を引、弱(わか)かりしより好る俳諧をもて生涯の樂とす。はた其好るや樂るや尋常にかはりて、行住座臥燕飮病床といへども、日課の句を怠ず。まいて誰某が會など云には、一の題に十餘章を並べ、三に五に及るにも此規矩を違ふ事なく、もし趣を得れば上に置下になし、あるは中にもつゞりて、一句を五句にも七句にも造りなし、唯意をうるをもてせ(專)とす。故に其篇什佳境に入もの許多也。又連ね句をなすにも、いつも沉唫する事他に倍せり。こゝをもて何れの卷にも造語連續の率易なるを見ず。惜哉去年の秋文月の半より半身痿るのやまふを感じて、幾程なく葉月上の九日に、折からの草の露と消失ぬ。平生友とせる人あまたなる中に、わきて嵯峨の宛在主人と予と三人雅莚を共にせし事、亦復他に類ふべきにあらず。あるは雨しめやかなる春の夕、はた雪面白き冬の夜など硯にむかひて、おのがじゝ得たると得ざるの自らなるをしらべ合、巨燵に倚居て櫓の上に杯をめぐらし、果ゝはなき跡の事まで語出て、吾儕かうやうに此道に

執深うとゞめぬれば、誰にまれながらへ殘たらん者、志を一にして草稿を選出、世に殘さましかば、生に死に改ざるの交ならんかし。實もさ也やなど、互に契り約せしとも亦幾度にか及けん。されば今雅因とゝもに遺草數十卷を閲して、その中より先初稿を編輯して世に廣うせんとす。事成の日雅因亦來會して、一は此功を終るを喜び、一は多からざる心友の缺ぬるを嘆じけるに、予頭を掉て、それもさる事なれど、兄も我も元來二腰を横たふ身ならねば、生前刎頸の交は思懸ず、されど風雅の可否を討論せしより外、さらに市道の交をなさゞりしがうへ、契し事のかうなんとみに成ぬるは、易からぬ交のよく終あん也と、祇もまた我等が相倍（そむか）ざるのこゝろを、黄壤の下に眉を開ざらましや。遂に此語をもて序とす。

明和九年壬辰夏五月

洛　嘯山書



太祇師年ごろいひ捨をかれしほくの草稿なるもの、みな我に譲られ侍る。紙魚のためにむなしくせむ事本意なく、選を葎亭夜半亭の兩匠へまかせ、老師生涯のあらましまで序跋に述、一册となして給りぬ。さるを竹護叟の清書を乞、さくら木にゑるとて、今の不夜庵のあるじ、師の俤をいたづらに書うつし置れし反古を、あながちに所望して、こゝに彫刻し侍りぬ。

呑獅

太祇曾而小言すらく、青丹よしなら漬と云んより、なら茶と云んこそ俳諧のさびしみなれ。焦遂が五斗はそちにさはがし。蕉翁の三斛こそ長く靜にして鉄杵を鍼に磨し、點滴の石を穿つをしへにも叶て、我業の卒る時もありなむ。かりにもおこたりすさむべからずとて、佛を拜むにもほ句し、神にぬかづくにも發句せり。されば祇が句集の艸稿を打かさね見るに、あなおびたゞし、人のイめる肩ばかりにくらべおぼゆ。げにやいせのはま荻のおきふしにもふんでをはなたず、勃窣として口よりいづるにまかせ書おけるものにしあれど、なにはのあしのいづれ刈すつべきも見へねば、葎亭・宛在の撰者も眼つかれ、こゝろまどひて、まめやかにゑらみ得べうもあらじかし。余二子にいふ、さははつべき期あらめや。大かたにこそあらまほしけれ。たゞ四時のはじめごとに出せる五六紙がほどをゑらみ取て初稿と題し、木にきざみて世にひろうし、二稿三稿といへるものは、年を經てもほゐとぐべきわざなれとすゝめければ、二子もうけひて、かしこうこそ巾つれ、さらば其ことを世にことはり聞へよとあるにぞ、やがてしりへにかいつく。

明和壬辰九月　　　　蕪村書


朱雀柵巷
歌酒常酣
叟之雪月
覧不夜菴
嘯山題
五雲坊必化寫

不夜菴太祇發句集

春

日を明て聞て居る也四方の春
鰒喰し我にもあらぬ雑煮哉
元日の居ごゝろや世にふる疊
元朝や鼠顔出すものゝ愛
年玉や利ぬくすりの醫三代
とし玉や杪子數添ふ草の庵
げにも春寐過しぬれど初日影
七草や餘所の聞へもあまり下手
子を抱て御階を上る御修法哉
初寅や慾づらあかき山おろし
春駒や男顔なるおゝなの子
春駒やよい子育し小屋の者
萬歳や舞おさめたるしたり顔
万歳やめしのふきたつ竈の前

羽つくや用意おかしき立まはり
はねつくや世ごゝろしらぬ大またげ
北山やしざり〳〵て殘る雪
家遠き大竹はらや殘る雪
梅活て月とも侘んともし影
虚無僧のあやしく立り塀の梅
春もやゝ遠目に白しむめの花
な折そと折てくれけり園の梅
紅梅の散るやわらべの紙つゝみ

誓願寺

紅梅や大きな彌陀に光さす
東風吹とかたりもぞ行主と従者
春風や薙刀持の目八分
糊おける絹に東風行門邊哉
投出すやをのれ引得し胴ふぐり
情なふ蛤乾く餘寒かな

色〳〵に谷のこたへる雪解かな
里の子や髪に結なす春の草
丸盆に八幡みやげの弓矢かな
元船の水汲うらや蕗の薹
花活に二寸短し富貴の薹
朱を研や蓬萊の野老人間に落
こゝろゆく極彩色や涅槃像
ねはむ會に來てもめでたし嵯峨の釋迦
引寄て折手をぬける柳かな
善根に灸居てやる彼岸かな
起ゝに蒟蒻囉ふ彼岸かな
川下に網うつ音やおぼろ月
海の鳴南やおぼろ〳〵月
月更て朧の底の野風哉
島原へ愛宕もどりやおぼろ月
欺て行キぬけ寺やおぼろ月
連翹や黄母衣の衆の屋敷町
實の爲に枝たはめじな梨の花
皮ひてし穢多が入江や芦の角

江をわたる漁村の犬や芦の角
野をやくや荒くれ武士の烟草の火
畑うつやいづくはあれど京の土
耕すやむかし右京の土の艶
山葵ありて俗ならしめず辛キ物
春雨のふるきたなみだや梓神子
はる雨や芝居みる日も旅姿
春雨や晝間經よむおもひもの

德門より春雨の句聞ゆ。それに對す。

春雨やうち身痒がるすまひ取
壁眞似る小者おかしや猫の戀
草をはむ胸安からじ猫の戀
おもひ寐の耳に動くや猫の戀
諫めつゝ繫ぎ居にけり猫の戀
遲き日を膝へ待とる番所かな
春の日や午時も門掃く人心
扨永き日の行方や老の坂
遲き日を見るや眼鏡を懸ながら

長閑さや早き月日を忘れたる
矢橋乘る娵よむすめよ春の風
春風にてらすや騎射の綾藺笠
燕來てなき人問ん此彼岸
ゆた〳〵と畝へだて來る雉子かな
雉子追ふて呵られて出る畠哉
葉隱れの機嫌伺ふ桑子哉
髮結ふて花には行ず蠶時
華稀に老て木高きつゝじ哉
蠶飼ふ女やふるき身だしなみ
小一月つゝじ賣來る女かな
御影供やひとの問よる守敏塚
菜の花やよし野下來る向ふ山
猪垣に餘寒はげしや旅の空
川の香のほのかに東風の渡りけり
東風吹や道行人の面にも
下萠や土の裂目の物の色
やぶ入や琴かき鳴す親の前
出替や朝飯すはる胸ふくれ

親に逢に行出代や老の坂
出替りの疊へおとすなみだかな

春江華月夜

花守のあづかり船や岸の月

きさらぎの頃嵯峨の雅因がいとなめる家見にまかりけるに、そこらいまだ半なり。木の工ミどもきそひはげみぬる其かたはらに、むしろ設、酒うち呑居たるに、句を乞れて

大工先あそむで見せつ春日影

又彌生廿日餘行ぬ。元の竹林にあらず、もとの水にあらず、おかしう造りなして宛在樓に(?)たり。

靑(?)みけりな椀洗ふ水もありす川

中風めきて手痿ける春

不自由なる手で候よ花のもと
付まとふ內義の沙汰や花ざかり
鞦韆や隣みこさぬ御身躰
ふらこゝの會釋こぼるゝや高みより

寒食に火くれぬ加茂を行や我
介子推お七がやうになられけむ
うぐひすの聲せで來けり苫の上
うぐひすや聟に來にける子の一間
うぐひすや薬の動く水の笹がくれ
江戸へやるうぐひす鳴や海の上
鶯の目には籠なき高音かな
人をとにこけ込龜や春の水
行舟に岸根をうつや春の水
堀川や家の下行春の水
穂は枯て接木の臺の芽立けり
接佗ぬ世になき一穂得てしより
奉る花に手ならぬわらびかな
紫の塵やつもりて問屋もの
つみ草や背に負ふ子も手まさぐり
摘草やよそにも見ゆる母娘
來るとはや往來數ある燕かな
あながまと鳥の巣みせぬ菴主哉
落て啼く子に聲かはす雀かな

あながちに木ぶりは言ず桃の花
大船の岩におそるゝ霞かな
ふりむけば灯とぼす關や夕霞
つぎねふの山睦しきかすみかな
田螺みへて風腥し水のうへ
山獨活(うど)に木賃の飯の忘られぬ
崖路行寺の背や松の藤
朝風呂はけふの櫻の機嫌哉
したゝかなさくらかたげて夜道かな
塵はみなさくら也けり寺の暮
咲出すといなや都はさくら哉
京中の未見ぬ寺や遲櫻
身をやつし御庭みる日や遲櫻
あるじする乳母よ御針よ庭の花
見つれて花見にまかり帽子哉
ちる花の雪の草鞋や二王門

歯をたゝく事三十六、我白樂天にならふ。

歯を鳴し句成先立り花の陰

宋屋は杖引ことまめなる叟、みちのく西の海邊より近所はさら也、花に京に我わたり灯籠の夜までもらさず。此春身まかりけるを猶幻に有心地す。

死れたを留守とおもふや花盛
蛙居て啼やうき藻の上と下
出代や厩は馬にいとまごひ
出代やきのふからいふいとまごひ
養父(やぶ)入(いり)の貌けば〳〵し草の宿
やぶ入の寐るやひとりの親の側
商人や干鱈かさねるはたり〳〵
長閑さに無沙汰の神社回りけり
からくりの首尾のわるさよ鳳巾
落かゝる夕べの鐘やいかのぼり
屋ね低き聲の籠りや茶摘歌
世を宇治の門にも寝るや茶つみ共
桃ありてます〳〵白し雛の殿
華の色や頭の雪もたとゑもの
御僧のその手嗅たや御身拭

百歳賀

口馴し百や孫子の手毬うた

太宰府の神池に鳧雁群をなす

飛びむめにもどらぬ雁を拝みけり

陽炎や景清入れし洞の口

墨染のうしろすがたや壬生念佛

爐ふさぎや老の機嫌の俄事

春の夜や女を怖す作りごと

節(ふし)に成る古き詑や傀儡師

山吹や葉に花に葉に花に葉に

腹立て水呑蜂や手水鉢

人とふて蜂もどりけり花の上

聲立て居代る蜂や花の蝶

見初ると日〻に蝶みる旅路かな

苗代や日あらで又も通る路

御供してあるかせ申汐干哉

女見る春も名残やわたし守

春ふかし伊勢を戻りし一在所

夜歩く春の餘波や芝居者

行春や旅へ出て居る友の數

夏

物がたき老の化粧や衣更

いとをしい瘦子の裾や更衣

綿脱ておます施主有旅の宿

かしこげに着て出て寒き袷哉

行女袷着なすや憎きまで

能答ふわか侍や靑すだれ

盗れし牡丹に逢り明る年

猫の妻かの生節(なまぶし)を取畢(をはんぬ)

夜渡る川のめあてや夏木立

甘き香は何の花ぞも夏木立

高麗人の旅の厠や夏木立

孑孑やてる日に乾く根なし水

景清は地主祭にも七兵衛

呑獅參宮を送る。

餘花もあらむ子に教へ行神路山

西風の若葉をしぼるしなへかな

みじか夜や今朝關守のふくれ面

ある人のもとにて

め(?)かしさよ夏書を忍ぶ後。向

青梅のにほひ佗しくもなかりけり

抽てむめ勝けりな寺若衆

靑梅や女のすなる飯の菜

傘燒し其日も來けり虎が雨

さみだれの漏て出て行庵かな

つれ〳〵に水風呂たくや五月雨

歸來る夫の咽ぶ蚊やりかな

蚊屋に居て戸をさす腰を譽にけり

事よせて蚊へさし出す腕かな

蚊屋くゞる今更老が不調法

やさしやな田を植るにも母の側

早乙女や先へ下りたつ年の程

蚊屋くゞる女は髮に罪深し

蓴菜やしろよししける水所

閨怨

飛螢あれといはむもひとりかな
三布(みの)に寐て蚊屋越の蚊に喰れけむ

御即位きのふありて、けふは庭上の御規式の跡拜し奉るとて、みなつどひまふのぼるを聞て

蚊屋釣て豐に安し住る民
蚊屋釣や夜學を好む眞ッ裸
蚊の有に跨(またが)るふりや稚がほ
蚊遣火もみゆや戸さゝぬ門並び
下手乘せて馬もあそぶや藤の森
妾が家は江の西にあり菰粽
武士の子の眠さも堪る照射かな
月かけて竹植し日のはし居哉
しらで猶餘所に聞なす水雞かな
妾人にくれし夜ほとゝぎす
追もどす坊主が手にも葵かな
葵かけてもどるよそめや駕の内

碓の幕にかくるゝ祭かな
低く居て富貴をたもつ牡丹哉
こゝろほど牡丹の撓む日數かな
門へ來し花屋にみせるぼたん哉
切る人やうけとる人や燕子花
深山路を出拔てあかし麥の秋
麥秋や馬に出て行馬鹿息子
笋を堀邊(部カ)彌兵衛や年の功
筍のすへ筍や丈あまり
白罌粟や片山里の隙(?)の中
牡丹一輪筒に傾く日數かな
麥打に三女夫並ぶ榮へかな
さつき咲庭や岩根の黴ながら
濡ともと幟立けり朝のさま
くらべ馬顏みへぬ迄譽にけり
なぐさめて粽解なり母の前
物に飽くこゝろ耻かし茄子汁
列立て火影行鵜や夜の水
舟梁に細きぬれ身やあら鵜共

いで來たる硯の蠅の一つかみ
ひとくゝる繩も有けり瓜作り
姬顏に生し立けむ瓜ばたけ
盜人に出合ふ狐や瓜ばたけ
二階から物のいひたや鉾の兒
あふぎける團を腕に敷寐かな
書棄し歌もこし折うちは哉
風呂布のつゝむに餘る團かな
輿ごしに柄から參らすうちはかな
扇とる手へもてなしのうちは哉
貯ともなくて數あるあふぎ哉
雷止んで太平簫ひく涼かな
蠅をうつ音も嚴しや關の人
夜を寐ぬと見ゆる歩みや蝸牛
有侘て這ふて出けむかたつぶり
怠ぬあゆみおそろしかたつぶり
引入て夢見顏也かたつぶり
折あしと角おさめけむ蝸牛
水の中へ錢遣りけらし心太

もとの水にあらぬしかけや心太
蚊屋釣てくるゝ友あり草の庵

偶成

よしはら烏のよしとおもへば
これも鳴音のあらぎやう〱し
氣のゆるむあつさの顔や致仕の君
世の外に身をゆるめゐる暑かな
めでたきも女は髪の暑サ哉
あつき日に水からくりの濁かな
朝寐してをのれ悔しき暑さ哉
病で死ぬ人を感ずる暑哉
色濃くも藍の干上るあつさかな
釣瓶から水呑ひとや道の端
虫ぼしや片山里の松魚節

かこつとある人の許へ

來し跡のつくが淺まし蝸牛
草の戸の草に住蚊も有ときけ
水練の師は敷革のすゞみ哉
空をみてすゞみとる夜や宿直の間
前鬼にも呑せて行や香需散
川狩や夜日にもそれと長刀
あしらひて卷葉添けり瓶の莖
蓮の香や深くも籠る葉の茂

寄蓮戀

蓮の香の深くつゝみそ君が家

百園より東寺の蓮贈られて

先いけて返事書也蓮のもと
たつ蟬の聲引放すはづみかな
澤瀉や花の數そふ魚の泡
かたびらのそこら縮て晝寐かな
晝顏や夜は水行溝のへり
夕皃やそこら暮るに白き花
夕顏のまとひも足らぬ垣根かな
白雨や膳最中の大書院
白雨や戸ざしにもどる草の庵
ゆふだちや落馬もふせぐ旅の笠
白雨やこと鎭めたる使者の馬
橋落て人岸にあり夏の月

琴泉と東寺へ蓮見にまかりて醉中の吟

引寄て蓮の露吸ふ汀かな

秋

すゞしさのめでたかり皃今朝の秋
初秋や障子さす夜とさゝぬよと
七夕や家中大かた妹と居(きょ)す
月入て闇にもなさず銀河
家づとの京知顏やすまひとり
裸身に夜半の鐘や辻相撲
勝逃の旅人あやしや辻角力
引組で猶分別やすまひとり
山霧や宮を守護なす法螺の音
さし鯖や袖とおぼしき振あはせ

明はなし寐た夜つもりぬ虫の聲

城内に踏ぬ庭あり轡むし

見かけ行ふもとの宿や高灯籠

夕立の晴行かたや揚灯籠

聲きけば古き男や音頭取

彼後家のうしろにおどる狐かな

末摘のあちら向ひてもおどり哉

番椒畳の上へはかりけり

つる草や蔓の先なる秋の風

痩たるをかなしむ蘭の莟けり

あるかたより蘭を贈らるゝに、名立事ありて

蘭の香や君がとめ奇楠(き)に若も又

長月の末、召波訪來りし時

何もなし夫婦訪來し宿の秋

行先に都の塔や秋の空

岩倉にて雨にあひ、金藏寺大德の情に一夜の舍り免され、嬉しと這上りて

笠ぬげば鹿の鬪度夜とぞなる

南谷上人の書の額あり。藥師の寶前に二種の草あり。

南無藥師藥の事もきく桔梗

をぐら山のふもとなる湧蓮子の庵を、卯雲子と共に尋侍るに、あらざりければ扉にかいつく。

留守の戸の外や露をく物ばかり

此鱸口明せずと足ンぬべし

畠から西瓜くれたる庵かな

遺言の酒備へけり魂まつり

懸乞の不機嫌みせそ魂祭

おもへども一向宗やたま祭

魂棚やぼた餅さめる秋の風

たま祭る料理帳有筆の跡

送り火や顏覗あふ川むかひ

いなづまや舟幽靈の呼(よぼ)ふ聲

鬼灯や摑み出したる袖の土産

乞ければ刈てこしけり草の花

二里といひ一里ともいふ花野哉

蛸追へば蟹もはしるや芋畠

餓てだに痩んとすらむ女郎花

其藥さへ細きこゝろや女郎花

鷄頭やはかなきあきを天窓勝

鷄頭やすかと佛に奉る

蜘の圍に棒しばりなるとむぼ哉

静なる水や蜻蛉の尾に打も

荻原に棄て有けり風の神

荻吹や燃る淺間の荒(あれ)殘り

椋鳥百羽命拾ひし羽をと哉

繪師何がし、芭蕉書る扇に賛望れて

裂やすきばせをに裏を打人歟

秋さびしおぼえたる句を皆申す

簗をうつ漁翁がうそやことし限

ものゝ葉に魚のまとふや下簗

京へのぼりし時

葎に垣ねさへなき住居かな

みどり子に竹筒負せて生身魂

野分して樹々の葉も戸に流れけり

浅川の水も吹散る野分かな
渡し守舟流したる野分哉
片店はさして餅賣野分かな
芋窓さへ門賑しやひとの妻
おもはゆく鴉なく也蚊屋の外
畠踏む似せ侍や小鳥狩
身の秋やあつ燗好む胸赤し

いとわかき大女に秋來て、柳絮の才も一葉と散行、蘭蕙の質も芳しき名のみに歸り來ぬ。道のくま〳〵問よる中に交りて、父の閫所によす。

此夕べぬしなき櫛の露や照

花燭をゝくりて靈前にさしよするは、いさゝか其情を慰するにあり。

みそなはせ花野もうつる月の中
あさがほに夜も寐ぬ嘔や番太郎
みか月やかたち作りてかつ寂し
三日月の船行かたや西の海
みか月や膝へ影さす舟の中
雨に來て泊とりたる月見かな
狂はしやこゝに月見て亦かしこ
來ると否端居や月のねだり者
名月や君かねてより寢ぬ病
名月や花屋寐てゐる門の松
うかれ來て蚊屋外しけり月の友
後の月庭に化物作りけり
灯の居かぬ庫裏やきり〳〵す
雪ふれば鹿のよる戸やきり〳〵す
大根も葱もそこらや蕎麥の花
うら枯ていよ〳〵赤しからす瓜
萩活て置けり人のさはるまで
石榴喰ふ女かしこうほどきけり
喰ずともざくろ興有形かな
菊の香やひとつ葉をかく手先にも
見通しに菊作りけりな問れがほ
菊の香や山路の旅籠奇麗也
旅人やきくの酒くむ晝休み
殘菊や昨日迯にし酒の禮
朝露や菊の節句は町中も
古畑の疇ありながら野菊かな
泊問ふ船の法度や秋の暮
有佗て酒の稽古やあきの暮
おどり人も減し芝居や秋のくれ
ひとり居や足の湯湧す秋のくれ
夕露に蜂這入たる垣根哉
出女の垣間見らるゝきぬた哉
泊居てきぬた打也尼の友
菊の香や花屋が灯むせぶ程
剃て住法師が母のきぬた哉
寐よといふ寢ざめの夫や小夜砧
夜あらしに吹細りたるかゞし哉
やゝ老て初子育る夜寒かな
旅人や夜寒問合ふねぶた聲
舟曳のふねへ來ていふ夜寒哉
水瓶へ鼠の落し夜さむかな
朝寒や起てしはぶく古ごたち

椽端の濡てわびしやあきの雨
茄子賣揚屋が門やあきの雨
夜に入ば灯のもる壁や蔦かづら
引けば寄蔦や梢のこゝかしこ
町庭のこゝろに足るやうす紅葉
銕槌に女や踴るうちもみぢ
空遠く聲あはせ行小鳥哉
露を見る我戸や草の中
青き葉の吹れ殘るや綿畠
柹賣の旅寢は寒し柹の側
關越て亦柹かぶる袂かな
殘る葉と染かはす柹や二ツ三ツ
かぶり缺く柹の澁さや十が十
戀にせし新酒呑けりかづら結
よく飲まば價はとらじことし酒
きりはたりてうさやようさや呉服祭
新米のもたるゝ腹や穀潰し
どうあろと先新米にうまし國
芦の穗に沖の早風の餘哉

迷ひ出る道の藪根の照葉かな
薬掘蝮も提てもどりけり
身ひとつをよせる籬や種ふくべ
口を切る瓢や禪のかの刀
此あたり書出し入もふくべ哉
ひとつ家に年あるさまや若烟草
夜の香や烟草寐せ置庭の隅
事繁く臼ふむ軒やかけたばこ
小山田の水落す日やしたりがほ
永き夜を半分酒に遣ひけり
あきの夜や自問自答の氣の弱（よわり）
長き夜や夢想さらりと忘れける
寐て起て長き夜にすむひとり哉
永き夜や思ひけし行老の夢
落る日や北に雨もつ暮の秋
長きよや餘所に寢覺し酒の醉
壁つゞる傾城町やくれのあき
塵塚に葬さきぬくれの秋
行秋や抱けば身に添ふ膝頭
孳せし馬の弱りや暮の秋

冬

玄關にて御傘と申時雨哉
うぐひすのしのび歩行や夕時雨
濡にける的矢をしはくしぐれ哉
しぐるゝや筏の棹のさし急ぎ
中窪き徑わび行落葉かな
米搗の所を替る落葉哉
盗人に鐘つく寺や冬木立
冬枯や雀のありく戸樋の中
爐開や世に遁たる夫婦合
川澄や落葉の上の水五寸
麥蒔や聲で鴈追ふ片手業
達磨忌や宗旨代ゝ不信心

おどらせぬむすめ連行十夜哉
なまふだや十夜の路のあぶれ者
夜歩行の子に門で逢ふ十夜かな
追〳〵に十夜籠りや遣り手迄
あら笑止十夜に落る庵の根太
苦しはしらでゐにけり歸花
京の水遣ふてうれし冬ごもり
身に添てさび行壁や冬籠
冬ごもり古き揚屋に訊れけり
なき妻の名にあふ下女や冬籠
尻重き業の秤やふゆごもり
僧にする子を膝もとや冬ごもり
いつまでも女嫌ひぞ冬籠
來て留守といはれし果や冬籠
それ〳〵の星あらはるゝさむさ哉
紙子着てはる〲來たり寺林
紙子着しをとや夜舟の隅の方
わびしさや旅寐の蒲團數をよむ
活僧の蒲團をたゝむ魔風哉

足が出て夢も短かき蒲團かな
旅の身に添や鋪寐の鶉ぶとん
夜明ぬとふとん剝けり旅の友
人ごゝろ幾度河豚を洗ひけむ
死ぬやうにひとは言也ふぐと汁
鰒喰ふて酒呑下戸のおもひかな
鰒賣に喰ふべき顏とみられけり
河豚喰し人の寐言の念佛かな
意趣のある狐見廻す枯野かな

不夜庵に芭蕉翁を祭る。

塀越の枯野やけふの魂祭
行〻てこゝろ後るゝかれ野かな
行馬の人を身にする枯野かな

分稻一周の忌となりぬ。此叟のすゝめにて、大原野吟行せし往事を思ひて

なつかしや枯野にひとり立心
鼠喰ふ鳶のゐにけり枯柳
日にぞしむ頭巾着て寐る父が貌

新尼の頭巾おかしや家の内
頭巾をく袂や老のひが覺へ
法躰をみせて又着る頭巾かな

庚寅冬十月、亦例の一七日禁足して俳諧三昧に入に、草の屋せばく、浴も心にまかせねば、やう〳〵かゝり湯いとなむに、時雨さへ降かゝりて、いとゞ寒きを侘ゐしに、呑獅より居風呂わかして、男どもにさし荷せ來したり。贈ものゝ珍らしくうれしと、やがてとび入て、心ゆく迄浴しつゝかく申侍る。

頭巾脫でいたゞくやこのぬくい物
眼までくる頭巾あぐるや幾寐覺
歸來て夜をねぬ音や池の鴛
草の屋の行灯もとぼす火桶哉
塩鰚や旅はる〲のよごれ面
手へしたむ髮のあぶらや初氷
朝顏の朝にならへりはつ氷
勤行に起別たる湯婆かな

茶の花や風寒き野ゝの菓の園
口切や花月さそふて大天狗
口きりやこゝろひそかに犂撰ミ
菊好や切らで枯行花の數
ちどり啼曉もどる女かな

爐に銚子かけて酒あたゝむる自在の竹に、鬼女の面かけたるを、人の仰ぎ居る圖に賛をせよと、田福より賴れて

吹きやす胸はしり火や卵酒
鴨の毛を捨るも元の流かな
胴切にしもせざりける海鼠かな
海鼠だゝみや有し形を忘れ顏
身を守る尖ともみへぬ海鼠哉
うぐひすや月日覺へる親の側
大食のむかしがたりや鰤の前
剛の座は鰤大ばえに見へにけり
立波に足みせて行ちどりかな
莖漬や妻なく住を問ふおゝな

草の庵童子は炭を敲く也
水仙や胞衣を出たる花の數
膳の時はづす遊女や納豆汁
曲輪にも納豆の匂ふ齋日哉
僧と居て古び行氣や納豆汁
御命講の華のあるじや女形
人の來て言ねばしらぬ猪子哉

喜介を江戸へ下せしあくる日

初雪や旅へ遣たる從者が跡
はつ雪や酒の意趣ある人の妹
木がらしの箱根に澄や伊豆の海
陰陽師歩にとられ行冬至哉
野ゝ中に土御門家や冬至の日
雨水も赤くさび行冬田かな
たのみなき若草生ふる冬田哉
木がらしや柴負ふ老が後より
今更にわたせる霜や藤の棚
腰かける舟梁の霜や野ゝわたし
鶤の起けり霜のかすり聲

笘ぶねの霜や寐覺の鼻の先
行舟にこぼるゝ霜や蘆の音
耻かしやあたりゆがめし置火燵
埋火に猫背あらはれ玉ひけり
埋火にとめれば留る我が友
あでやかにふりし女や敷巨燵
火を運ぶ旅の巨燵や夕嵐
淀舟やこたつの下の水の音
草の戸や巨燵の中も風の行
攝待へよらで過けり鉢たゝき
曉の一文錢やはちたゝき
はげしさや鳥もがれたる鷹の聲
鷹の眼や鳥によせ行袖がくれ
雪やつむ障子の紙の音更ぬ
小盃雪に埋てかくしけり

汲公と葎亭に宿して、そのあした道にて別るとて

見返るやいまは互に雪の人
宿とりて山路の雪吹覗けり

室附の竹も庇も雪吹かな
うつくしき日和になりぬ雪のうへ
降遂ぬ雪におかしや簑と笠
御次男は馬が上手で雪見かな
足つめたし日たおもしろし手にかゝん
里へ出る鹿の背高し雪明り
長橋の行先かくす雪吹かな
交りは葱の室に入にけり
寒垢離の耳の水ふる勢かな
寒月や我ひとり行橋の音
寒月の門へ火の飛ブ鍛冶屋哉
寒月や留守頼れし奥の院
鶴を出て寒月高し己が門
鍋捨る師走の隅やくすり喰
日頃經て旨き顔なり藥ぐひ
枯草に立テは落る圀(?)かな
氷つく薗分卅や寺の門
御手洗も御燈も氷る嵐かな
垣よりに若き小草や冬の雨

父と子よよき梢くべしうれし顔
勤行に腕の胼やうす衣

几圭、師走廿三日の夜死せり。
節分の夜明なりければ

死ぬとしもひとつ取たよ筆の跡

梅幸へ言遣る。

積物や我つむ年をかほ見せに
大名に酒の友あり年忘れ
夢殿の戸へなさはりそ煤拂
聲立る池の家鴨やすゝ拂
煤を掃く音せまり來ぬ市の中
剃こかす若衆のもめや年の暮
禪に二百くゝるや厄おとし
すゝ掃の埃かつぐや奈良の鹿
怖す也年暮るよとうしろから
年とるもわかきはおかし妹が許
寶ぶね譯の聞へぬ寐言かな
聲よきも頼もし氣也厄拂
年とりて内裏を出るや小挑灯

谷越に聲かけ合ふや年木樵
兼てよく貌見られけむ衣配
唐へ行屛風も畵やとしの暮

雅因を訪ふ

年の暮嵯峨の近道習ひけり

年内立春

歳のうちの春やいさよふ月の前

書林 京 室町中立賣上ル
平野屋善兵衛

太祇句選

後編

不夜庵太祇句集を撰して序を夜半翁にもとむ。翁曰、序はかりそめにすべからず。祇と因ゝの深きものをよしとす。これを菴亭・宛在に歸せよ。退て菴亭・宛在の二翁にはかる。二翁曰、序はかりそめにすべからず。祇と因ゝの深きものをよしとす。これを呑獅に歸す。退て序つくる。意匠万端、つゐに章をなさず。ひそかに思ふ、序のこと既前集に盡たり。今はた何をかいはん。たゞちに三翁の言をもて序とす。

不夜城

呑獅

春

小書院のこの夕ぐれや福壽草
二日には箒のさきやふく壽草
七くさや兄弟の子の起そろひ
初寅や頼光しばし市原野
鉢の子に粥たく庵も若なかな
あら手きて羽子つき上し軒端かな
萬歳のゑぼし姿やわたし船
穴一の筋引すてつ梅が下
若くさや四角に切し芝の色
若草ややがて田になるやすめ畑
旅立の東風に吹する火縄かな
駕に居て東風に向ふやふところ手
紅梅や公家町こして日枝山
嚙れしが思ひもすてず猫の聲
白魚やきよきにつけてなまぐさき

陽かさを覗く雨夜の柳かな
嫁入せし娘も多し御忌詣
はる寒く葱の折ふす畠かな
白雲や雪解の澤へうつる空
芹の香や摘あらしたる道の泥
ぬす人の梅やうかゞふ夜の庵
うつくしき男もちたる雉子かな
つみ草や馬のはせきぬ馬場の末
鶴を畫く雲井の空や雛合
物音は人にありけりおぼろ月
歸來て灰にもいねず猫の妻
髭につく飯さへみへずねこの妻
漏る雨をひとゝかたるや春の宵
はる雨や風呂いそがする旅の暮
水吸に鼠出けり瓶の花
宵月や船にもさくら打かたげ

女を供して旅だつ人へつかはす。
女にかはりて

枕香の梅をみよとの旅路かな

はる風や殿まちうくる船かざり
濡れて來し雨をふるふや猫の妻
挑灯で若鮎を賣る光かな
拾ひあげて櫻に珠數や御忌の場
餅やくをおいとま乞のどんど哉
籠耳に山の名を問ふかすみ哉
陽炎や板とりて干す池のふね
踏つけし雪解にけり深山寺
うぐひすや君こぬ宿の經机
初午や狐つくねしあまり土
はつ午やもの問初る一の橋
おそろしの掛物釘やねはん像
ちるなどゝみへぬ若さやはつ櫻
見へ初て夕汐みちぬ蘆の角
すみの江に高き櫓やおぼろ月
春寒し泊瀬の廊下の足のうら
陽炎や筏木かはく岸の上
かげろふや夜べの網干す川の岸
涅槃會や憎いひありく十五日

はる雨や背もいろ〳〵に初夜のかね
今日は身を船子にまかすかすみかな
若鮎や水さへあれば岩の肩
散てある椿にみやる木の間かな
蝶飛ぶや腹に子ありてねむる猫
うばかゝのさくらを覗く彼岸かな
歸る雁きかぬ夜がちに成にけり
吹はれてまたふる空や春の雪
いろ〳〵の名は我言はずさくらかな
情なの莟さくらやひなの前
むかひ居てさくらに明す詞かな

あらし山の花みにまかりて

從士よ足のとまらぬ花さかり
はる雨や講釋すみて殘る顔
三日月に木間出はらふ茶つみ哉
行雁の高キや花につりあはず
地借衆へ一枝づゝやもゝの花
掃あへぬ桃よさくらよ雛の塵
紙びなや立そふべくは袖の上

照り返す伏水のかたやもゝの花
二里程は鳶も出て舞ふ汐干哉
勝雛の抱く手にあまる力かな
下手の焚くひなの竈ぞ賑はしき
巣を守る燕のはらの白さかな
山吹や腕さし込て折にけり
船よせてさくらぬすむや月夜影
塀ごしやさくら斗の庭の躰
半ば來て雨にぬれいる花見哉
狂言は南無ともいわず壬生念佛
暮遲く日の這わたる疊かな
口たゝく夜の往來や花さかり
しなへよく疊へ置や藤の花
遲日の光のせたり沖の浪
八巾(たこ)持て風尋るや御伽の衆
山路きてむかふ城下や八巾の數
家内して覗(のぞき)からせし接木かな
永日やいまだ泊らぬ鷄の聲
堀川の島からたつ胡蝶かな

寄添て眠(ねむる)でもなきこてふかな
ひと眞似のおぼつかなくも接穗哉
泊らばや遲き日の照る奥座敷
膝たてゝおそき日みるや天の原
池のふねへ藤こぼるゝや此夕べ
蕨採て筧にあらふひとりかな
八巾白し長閑過ての夕ぐもり
諸聲やうき藻にまとふむら蛙
京へきて息もつきあへず遲さくら
のびよかし藤の莟の咲かで先
寒食や竈をめぐるあぶら虫
はるの行音や夜すがら雨のあし
下戸の子の上戸と生れ春暮ぬ

夏

立むかふ廣間代りや更衣

ほとゝぎす今見し人へ文使ひ
卯の花はまはりこくらの垣根かな
かきつばたやがて田へとる池の水
切るひとの帶とらへけり杜若
湖へ神輿さし出てほとゝぎす
ほとゝぎす江戸のむかしを夢の内
布子賣回國どのよころもがへ

江戸雅光訊來て旨原珠來などが噂申いでゝ、予が顏の年よらぬ事、おもひしにたがへるなどゝむかしかたり出て興じける。

年よらぬ顏ならべたやはつ鰹
など我は寢ざめぬ老ぞ時鳥
灌佛や假りに刻し小刀目
新茶煮る曉おきや佛生會
麥秋や埃にかすむ晝の鐘
あまた蚊の血にふくれ居る座禪哉
蝿を打おとや隣もきのふけふ
年よれば疲もおかし更衣
濃く薄く奥ある色や谷若ば

ほり上てあやめ葺けり草の庵
川風に水打ながす晒かな
用意せし袷出す日や晝旅籠
葉ざくらのひと木淋しや堂の前
川留の伊東どのやな虎が雨
あら浪に蝿とまりけり船の腹
麥を打ほこりの先に聟男
穗にむせぶ咳もさはがしむぎの秋
みじか夜やむりに寐ならふ老心
雨に倦く人もこそあれかきつばた
泥の干る池あたらしや杜若
寐た顏へ團吹あてるはし居哉
飲きりし旅の日數や香需散
みじかよや來ると寢に行うき勤
うつす手に光る螢や指のまた

音はして行みづくらき木がくれを
てらすほたるの影もすゞしき　逕村

螢火や岸にしづまる夜の水
柳みんよそに夕立あまり風

帷子や明の別のすそかろき
蝙蝠や千木みへわかる闇の空
白雨はあなたの空よ鷺の行
みじか夜や雲引殘す富士のみね
雨の日は行かれぬ橋やかきつばた
蚊の聲は打も消さぬよ雨の音
一日は物あたらしき五月雨
たけの子や己が薬分に衝のぼる
笋やおもひもかけず宇津の山
底見へて鵜川あさまし夜の水
八重雲に朝日のにほふ五月哉
手から手へわたしわづらふ螢かな
若竹や數もなき葉の露の數
ゆふだちの月に成ぬる鵜川かな
今朝みれば夜の歩みやかたつむり
さみだれや夜半に貝吹まさり水
笋やほりつゝ行けばぬいた道
早乙女の下りたつあのたこの田哉
旅びとや曾我の里とふ五月雨

みじかよや旅寐のまくら投わたし
古き代を紋に問るゝのぼりかな
幟たつ母たん遊女なりけらし
塩魚も庭の雫やさつきあめ
岩角や火縄すり消す苔の花
ぼうふりや蓮の浮葉の露の上

呑獅またことしも

旅立を人もうらやむ袷かな
ほとゝぎすきくや汗とる夜着の中
影高き松にのぞむや蝸牛
君めして突せられけりこゝろぶと
かはほりや簾の間みめぐる人の上
蝙蝠やけいせい出る傘の上
わびしげや麦の穂なみにかくれ妻
麦埃樽にくもる門邊かな
思案して旅の袷にうつりけり
側に置て着ぬ斷や夏羽織
ひるの蚊の顔に鳴り行廣間かな
かやり火のうたてのこるや夜の儘

とりにがす隣の聲や行ほたる
寺からも婆を出されし田植哉
白雨のすは來るおとよ森の上
雨あれて筍をふむ山路かな
隣には木造(きつくり)のぼる新樹哉
孑孑やなまなか澄るくされ水
回國の笈にさし行團かな

竹醉日

草の戸や竹植る日を覺書
物あぶる染どのふかし五月雨
漣にうしろ吹るゝ田植かな
さみだれや夜明見はづす旅の宿
掃流す橋の埃や夏の月
五月雨や川うちわたす簑の裾
角出して這はでやみけり蝸牛
化猫も置手拭やむぎの秋
かたびらの無理な節句や傘の下
松陰に旅人帶とく暑かな
飛石にとかき(蜥蜴)の光る暑かな

松明に雨乞行やよるの嶺
夕立や扇にうけし下り蜘
木枕に耳のさはりて暑き也

向陽軒にて

あつきひや明放す戸のやらんかた
鵜ぶねみる岸や闇路をたどり〳〵
ゆふ顔のまとひもたらぬ垣根哉
帷子や蝿のつといる袖のうら
かゝる日や今年も一度心太
松かげにみるや扇の道中記
汗とりや弓に肩ぬぐ袖のうち
はや鮓の蓋とる迄の唱和かな
早鮓に宰相國の鱸かな
ひとり言いふて立さる清水哉
關守の背戸口にたつ涼み哉
片道はかはきて白し夏の月
屋根葺は屋根で涼の噂かな
酔ふして一村起ぬ祭かな
虫ぼしのすゞしさかたれ角櫓

むし干や祓（抜カ）身をさます松の風
まし水にあやうき橋を涼かな
鉾處〻にゆふ風そよぐ囃子哉
老たりといふや祭の重鎧
まつりの日屛風合の判者かな
花鳥もうら繪はうすき扇かな
酒藏に蝿の聲きく暑かな
かたびらの辮はつきよき腕まくり
涼風に角力とらふよ草の上
土照りを裂るや草の生ひながら
むし干やむかしの旅のはさみ箱
水打て露こしらへる門邊哉
草の戸や疊かへたる夏祓

秋

眼ざましにみる背戸ながら今朝の露
木戸しめて明る夜惜むおどり哉
船よせて見れば柳のちる日かな
たま祭持佛に殘す阿彌陀かな
駕に居て挑灯もつやはつ嵐
君こねばあぶら灯うすし初嵐
めでたくも作り出けり芋の丈
浦風に蜑もきにけり芋畠
初戀や燈籠によする顔と顔
よひやみや門に稚き踊聲
狼のまつりか狂ふ牧の駒
はつ秋や團扇の風をひいた人
手習子（てらこ）や門うつ子あり朝さむみ
夕されや軒の烟草に野分ふく
朝さむく蝿のわたるや竈の松
刀豆やのたりと下る花まぢり
夜の間の露ゆりすふる廣葉哉
吹倒す起す吹るゝ案山子かな
片足は踏とゞまるやきり〳〵す
初鴈や遊女にあぶらさゝせけり
はつ鴈や夜は日の行ものゝ隅
さはがしき露の栖やくつわ虫
脱すてゝ角力になりぬ草の上
着物のうせてわめくや辻角力
鬼灯や物うちかこつ口のうち
はつ雁やこゝろつもりの下り所
かけ稲や大門ふかき並木松
鉢の子ににへたつ粥や今年米
里の燈をちからによれば灯籠哉
立寄ば椎はふりきぬ雨合
猪の庭ふみ音や木の實ふる
待宵やくるゝにはやき家の奥
手折てははなはだ長し女郎花
蚊のありつなかりつ月の船路哉
呵（しかる）程袖さきへ出たき月み哉
あさ貌や小詰役者のひとり起
稲妻の無き日は空のなつかしき
いなづまのこもりてみゆれ草の原
いなづまやなきとおもへば雲間より

いなづまやよわり／＼て雲の果
芋むしはいものそよぎにみへにけり
もろゝ香や蘭も獲の紙一重
芋の露野守の鏡何ならん
降れても行や月見の泊客
いなづまや雨雲わかるやみのそら
あと追ふてわめきくる也橋の月
名月や船なき磯の岩づたひ
日は竹に落て人なし小鳥網
聞はづす聲につゞくや鹿の聲
名月の晝迄大工遣ひかな
くさの戸の用意おかしや菊の酒
朝市や通かゝりてけふの菊
ひとり居やおもひもふけし十三夜
田舎から柹くれにけり十三夜
十三夜月はみるやととなりから
表から出汐昔來つ十三夜
おもはずもよそに更しぬ十三夜
朝市や虫まだ聲すものゝ下

あさ寒や旅の宿たつ人の聲
打やまぬ碪たのもし夜の旅
枝裂てしろりと明る野分哉
よる浪やたつとしもなき鴫一ツ
白き花のこぼれてもあり番椒
中入に見まふ和尚や茸がり
うかれ女や言葉のはしに後の月
一葉さへかさなりやすき日數かな
家ゝや銚子のきくの咲さかぬ
しづめたるきくの節句の匂ひ哉
臺灣を當推量や十三夜
いく浦のきぬたや聞てかゝり船
馴て出る鼠のつらや小夜ぎぬた

庭のもみぢの染たるとて、魯庸もちきたりける。

やゝあつて水に生たるもみぢ哉

哲哉、卷を袖にし來て引墨を乞ついで、菊をおくりけるに、哲哉もときくを養ひつくり得しが、今は平常のきくのみ愛すなどゝかたり出たるに、予も同意なるよし答て

中菊や地に這ふばかり閑なる
曉の籠をぬけけんむしの聲
寒きとて寐る人もあり暮の秋
氣のつかぬ隣の顏や暮の秋
鷄頭やひとつはそだつこぼれ種

冬

水仙を生しや葉先枯る迄
木戸しまる音やあら井の夕千鳥
水仙や疊の上に横たをし
よるみゆる寺のたき火や冬木立
一番は迯て跡なし鯨突
宵やみのすぐれてくらし冬の雨
十月の笹の葉青し肴籠
つめたさに箒捨けり松の下

人顔も旅の晝間や神無月
かみ無月旅なつかしき日さし哉
御築地に見こす山邊やいく時雨
ひとの子の悪處戻りや門の霜
千人の日用そろふや雪明り
人去て曉くらき十夜かな
とする間に水にかくれつ初氷

千本をもどる。

霜をける畠の冴へや鍬の音
下戸ひとり酒に迯たる火燵哉
木葉散雨うちはれて夜明たり
人跡し落葉のくぼむ森の道
本がらしや手にみへ初る老が皺
木枯や大津脚絆の店ざらし
ぬれいろをこがらし吹や水車
晝になつて亥子と知りぬ重の内
炭賣よ手なら顏なら夕まぐれ
たそがれに吹おこす炭の明り哉
獺に飯とられたる網代かな

水指のうつぶけてある寒かな
花もなき水仙埋む落ばかな
起うきを起出て冬のいさみ哉
飯喰ふて隙にしてみる冬至哉
掃けるが終には掃ず落葉かな
壁までが板であられの山居哉
鳴ながら狐火ともす寒かな
初霜やさすが都の竹箒
はつ雪や町に居あはす桑門
初ゆきや酒の意趣ある人の妹
末摘や炭吹おこす鼻の先
はつ雪や醫師に酒出す奥座敷
醫師へ行子の美しき頭巾かな
盃を持て出けり雪の中
ゆきをみる人さわがしや夜の門
犬にうつ石の扨なし冬の月
かさの雪たがひに杖で打はらひ
よるのゆき寐よともいわぬ主哉
口切のとまり客あり峯の坊

寒ぎくや垣根つゞきの庵の數

一とせ翁をゆめみ侍をおもひよせて

其魂の朱雀もめぐる枯野哉
今朝は先消てみするや初氷

冬の朝ひのあはれなりけり　と
はせを翁の句をおもひよりて

身をよする冬の朝日の草のいほ
藤棚のうへからぬける落ばかな
水せんや幸あたりに草もなき
くらがりの柄杓にさはる氷かな
さむき夜や探れば窪き老が肩
水仙や葉みじかくと己が園
腰かくる舟梁の霜や野のわたし
顏みせの難波のよるは夢なれや
寒聲や親かたどのゝまくらもと
寒菊や茂る葉末のはだれ雪
苞にする十の命や寒雛卵
親も子も醉へばねる氣よ卵酒
腰かけて紅葉みつらん炭俵

かれ蘆や鴨見なくせし鷹の聲
鶯に藪の掛菜のにほひかな
木葉ちる風や戸をさす竈の前
あるほどの水を入江の氷かな
關守へ膳おくり來つゑびす講
句を煉て膓うごく霜よかな
枯くさの藪根の椿落る迄
雪見とて出るや武士の馬に鞍
ゆふ風や木咲といふて梅持参
獵人の鐵砲うつや雪の中
うまきとはいつはりがまし薬喰
稚子の寐て物とふや薬ぐひ
手燈しの低き明りやくすり喰
盃になるもの多し卵酒
魚ぬすむ狐のぞくや網代守
髮おきやちと寒くとも肩車
町中のあられさはがしひとの顔
かみ置やかゝへ相撲の肩の上
髮おきやうしろ姿もみせ歩く

それとみる松の戸尻や莖の桶
顔みせや狀を出しあふ宇津の山
嫁みせに出て來る茶やの落ば哉
對にしてかぞへて歩く鴛見哉
霜の聲ひとの鼾で寐ぬよ哉
咲ている梅にもあふや寒念佛
冬ごもる心の松の戸をほそめ
かたちして孤屋までぞ水の色
節季ゆややむときはやむ物の聲
狐なく霜夜にいづこ煤はらひ
樓に歌舞妓の眞似や煤拂
とし〳〵や煤よう掃て手向水
道ばたの天秤棒や大根引
組板に這ふかとみゆる海鼠かな
餅つきやものゝ答へる深山寺
とし忘扨もひとには精進日
餅の粉の家内に白きゆふべかな
二階から土器投やすゝはらひ
居風呂の底ふみぬくや年の暮

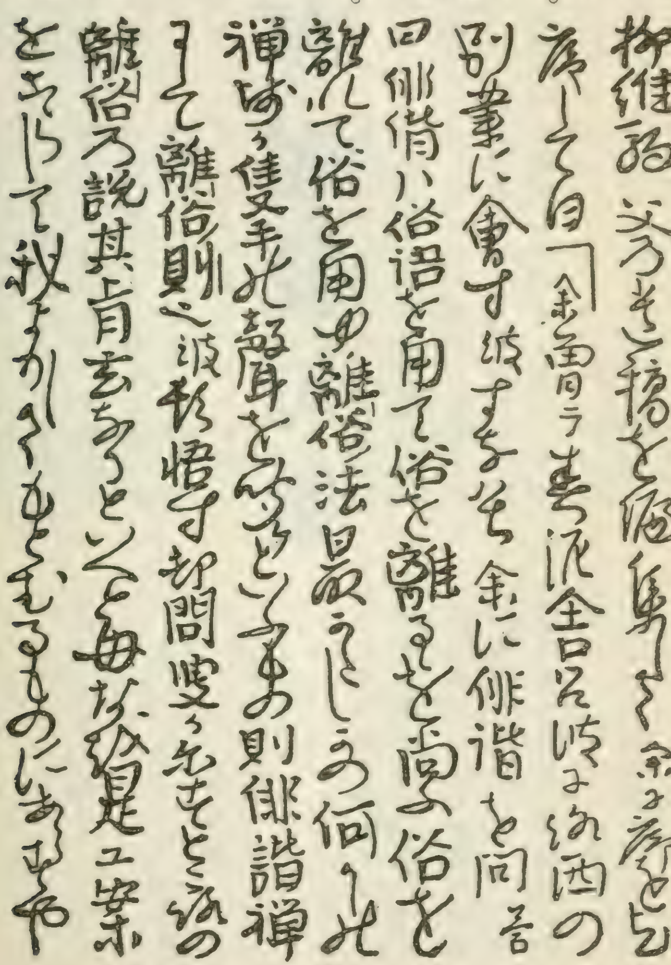
わびしさや思ひたつ日を煤拂
すゝ拂てそろりとひらく持佛哉
すゝはきの中へ使やひねり文
煤拂のあら湯へ入る座頭かな
すゝはきや挑灯しらむ門の霜
山ぶきのいわぬ色あり衣配
とにかくにたらぬ日數や年忘
眼に殘る親の若さよ年の暮
年とるや帆柱の數ありそうみ

安永丁酉秋八月

不夜庵　五雲　撰

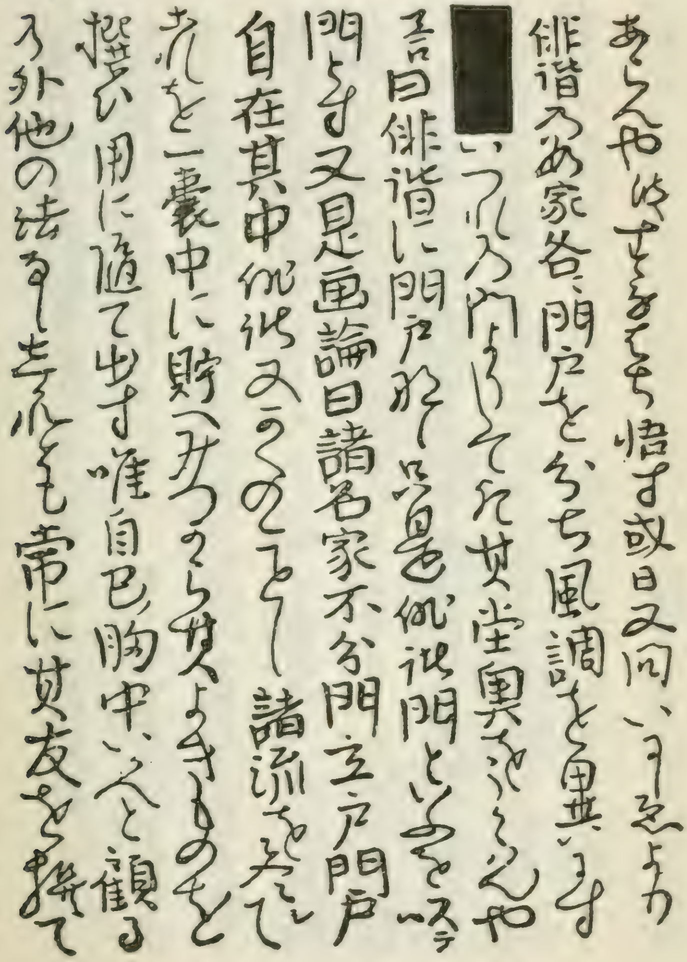
春泥發句集

柳維駒父の遺稿を編集して余に序を乞。序して曰。「余曾テ春泥舍召波に洛西の別業に會す。波すなはち余に俳諧を問。答曰。俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ。俗を離れて俗を用ゆ、離-俗ノ法最かたし。かの何がしの禪師が、隻手の聲を聞ケといふもの、則俳諧禪にして離-俗ノ則也。波頓悟す。却問。叟が示すところの離-俗の說、其旨玄なりといへども、なを是工案をこらして我よりしてもとむるものに



あらずや。しかじ彼もしらず、我もしらず、自然に化して俗を離るるの捷徑ありや。答曰。あり。詩を語るべし。子もとより詩を能す。他にもとむべからず。波疑敢問。夫詩と俳諧といさゝか其致を異にす。さるを俳諧をすてて詩を語れと云。迂遠なるにあらずや。答曰。畫家去俗論あり。曰。畫去レ俗無ニ他法一。多讀レ書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣。學者其愼旃哉。それ畫の俗を去だも筆を投じて書

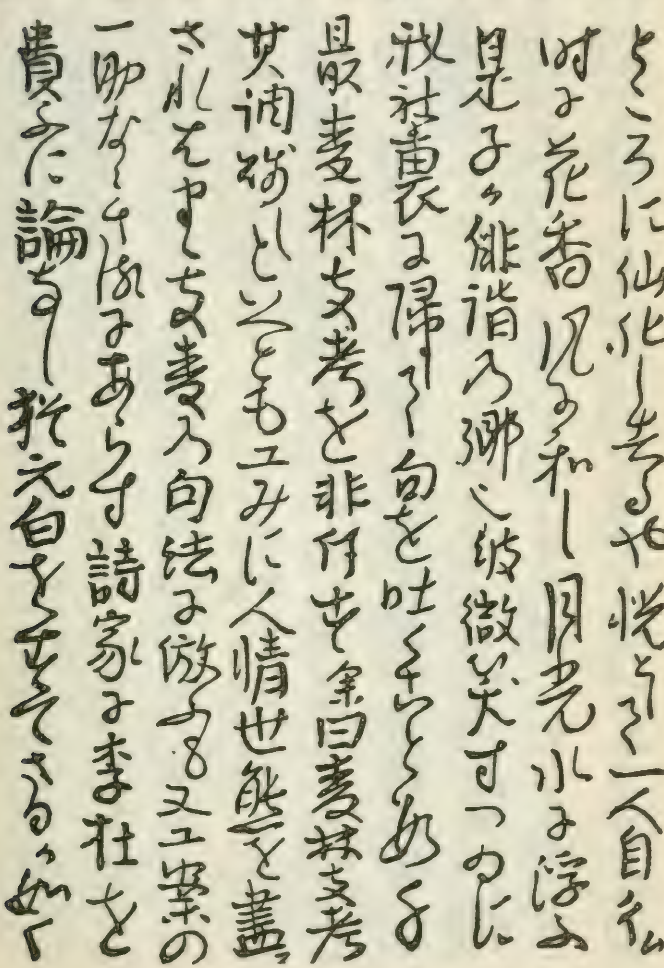
を讀しむ。況詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや。或すなはち悟す。或日又問。いにしゑより俳諧の數家各々門戸を分ち、風調を異にす。[redacted]いづれの門よりして歟其堂奥をうかゞはんや。答曰。俳諧に門戸なし只是俳諧門といふを以テ門とす。又是甚論曰。諸名家不分門立戸、門戸自在其中。俳諧又かくのごとし。諸流を盡シてこれを一嚢中に貯へ、みづから其よきものを撰び、ひ用に隨て出す。唯自



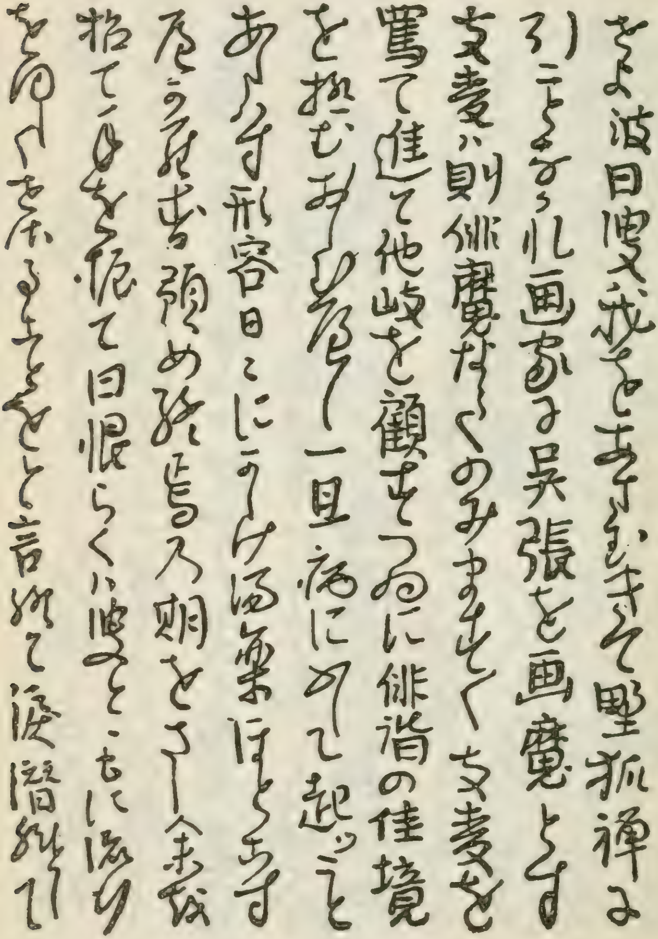
己ノ胸中いかんと顧るの外他の法なし。しかれども常に其友を撰て其人に交るにあらざれば、其郷に至ることかたし。或問。其友とするものは誰ゾや。答其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日々此四老に會してはつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び、山水にうたげし、酒を酌て談笑し、句を得ることは専ラ不用意を貴ぶ。如此する事日々。或日又四老に會す。幽賞雅懐はじめのごとし。

其人に交るにあらされは其郷に至ることかたし
或問其友とするものハ誰ッや答其角を尋ね
嵐雪を訪ひ素堂を倡ひ鬼貫に伴ふ日々
此四老に會してはつかに市城名利の域を離れ
林園に遊ひ山水にうたけし酒を酌て談笑し
句を得ることハ専ラ不用意を貴ふ如此
する事日々或日又四老に會す幽賞雅懐
はしめのことし眼を閉て苦吟し句を得て
眼を開く忽四老の所在を失すしらすいつれの

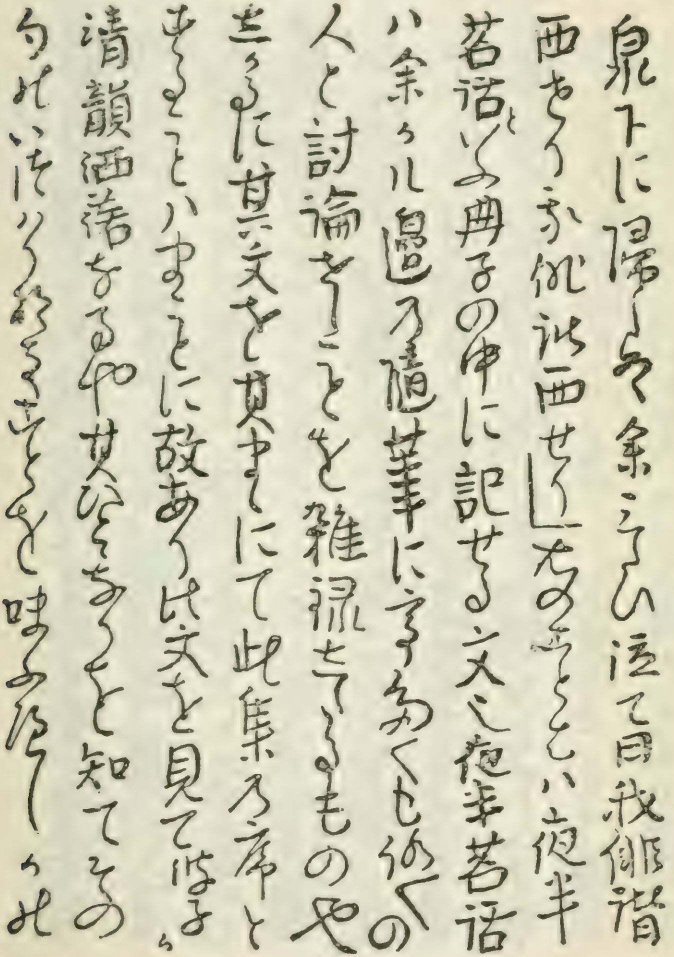
眼を閉て苦吟し、句を得て眼を開く。忽四老の所在を失す。しらずいづれのところに仙化し去るや。恍として一人自イム。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是子が俳諧の郷也。彼微笑す。つゐに我社裏に歸して句を吐くこと數千。最麥林支考を非斥す。余曰。麥林支考、其調賤しといへども、工みに人情世態を盡ス。さればまゝ支麥の句法に倣ふも、又工案の一助ならざるにあらず。詩家に李杜を貴ぶに論



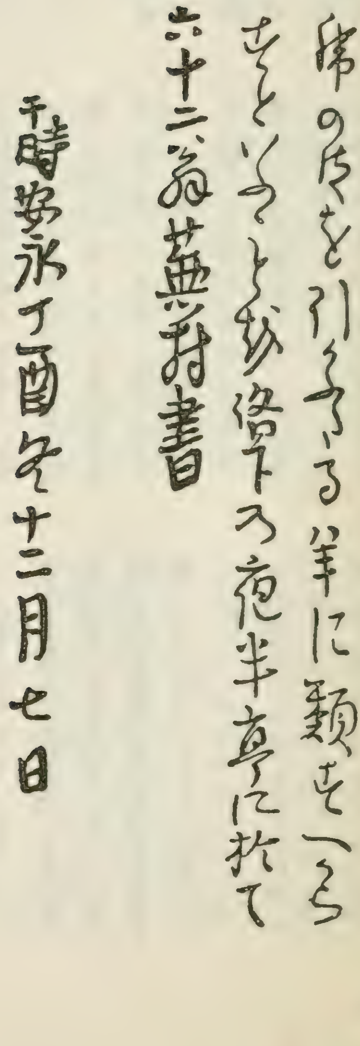
なし。猶元白をすてざるが如くせよ。波曰。叟我をあざむきて野狐禪に引ことなかれ。畫家に吳張を畫魔とす。支麥は則俳魔ならくのみ。ます〳〵支麥を罵て、進て他岐を顧ず。つゐに俳諧の佳境を極む。おしむべし、一旦病にふして起ッことあたはず、形容日々にかじけ、湯藥ほどこすべからず。預(豫)め終焉の期をさし、余を招て手を振て曰。恨らくは叟とゝもに流行を同しくせざることを。と、言終て涙



潸然として泉下に歸しぬ。余三たび泣て曰。我俳諧西せり。我俳諧西せり。」右のことばは夜半若話といふ册子の中に記せる文也。夜半若話は余が几邊の隨筆にて、多くもろ／＼の人と討論せしことを雜錄したるもの也。しかるに其文を其まゝにて此集の序とすることはまことに故あり。此文を見て讀者が淸韻洒落なるや、其ひとゝなりを知て、その何のいつはりなきことを味ふべし。かの虎の皮を引か



ふたる羊に類すべから
ずといふことを、洛下
の夜半亭に於て
六十二翁蕪村書
于時安永丁酉
冬十二月七日



春泥發句選

春之部

元旦

こと〴〵く中は盡じ花の春

けさ春の氷ともなし水の糟

春たつや靜に鶴の一歩より

素袍着た酢賣出こよ花の春

等持院寓居の頃

元日や草の戸越の麥畠

元日雪ふる

野一過雪見ありきぬ雜煮腹

福壽草

ひともとはかたき苔やふく壽艸

鏡開

うれしさや養君のかゞみ割

學寮や祖師の鏡のあぶり喰

賣引　羽子板

賣引の味方にまいるおとな哉

羽子板の一筆書や内裏髮

猿曳　年玉

猿引の村へ來たるよ呼子鳥

とし玉や抱ありく子に小人形

年だまやわび寐の菴の枕上

若菜

小わらはの物は買よきわかな哉

ほとゝぎすわたらぬさきに薺かな

御飛脚の堀河出てなづな哉

野老

ところ掘おのれが髮も結ふる

梅

此日ごろ梅にながるゝ野河哉

宦高き人のにがみや梅花

うめ生て是より瓶の春いくつ

梅白く藪の緣にさす枝哉

梅ぼしの酒しほすゝめ寺の梅

梅折て斜にし見る木曲哉

梅の月源氏の噂女芳(房)達

御室の僧梅花一枝をたまふ

衣裡よりも得たりかしこし梅の珠

梅折ば先夕月のうごく也

醍醐出て二度に曬ひぬ梅二本

二日目に葛家は成りぬうめの花

伏見鶴英任口上人の眞跡を惠ければ

短册と伏見の梅を一荷かな

梅花美人來れり漸二更

咄されぬ梅のあるじや道心者

歸さの梅の片そぎんめの花

柳

さし柳五尺の春を見せにけり

五條まで舟は登りて柳かな

青柳や堤の春のいく所

かたり合いかにもそこの柳哉

椿

我庭を瓶に憐む椿かな
里の子が拾ひ首する椿かな
落なんを葉にかゝへたる椿かな

黄鳥

鶯につめたき雨のあした哉
うぐひすの聲あはせけり春の奥
鶯の聲は戸にあるあしたかな
うぐひすや銅蓮水を湛ぬる
無人境うぐひす庭を歩りきけり

御忌

八郡の空の霞や御忌鐘

土筆　獨活

つくづくしほうけては日の影ぼうし
組ばしやかづき上ゲしはうどの線

所思

土筆經木のかゝる河邊哉

東風　餘寒

東風うけて川添ゆくや久しぶり
飲過た禮者のつらへ餘寒哉
いかづちの後にも春のさむさ哉
思ひ出て藥湯たてる餘寒哉
からびたる竹の寒や春いまだ

白梅

四十にも餘る寒さやものゝ梅
底たゝく音や餘寒の炭俵

霞

望汐の遠くも響くかすみ哉
日三竿雨になり行霞かな
波の寄ル小じまも見へて霞哉

海苔　若鮎

生海苔の波打際や東海寺
鮎ゝと折敷に見せる小鮎哉
汲鮎や青山高く水長し
柴にとる海苔大分も見へぬ也

朧月

おぼろ月獺の飛込水古し
我影や心もとなき朧月
田園の趣さらにおぼろ月
土とりのあとの溜りや朧月

囀　春風

囀に獨起出るや泊客
撫あげる晝寐の顔や春の風

紙鳶

暮かゝる空をかこつや几巾
里坊に兒やおはしていかのぼり
朝東風に几巾賣店を開きけり
此糊のひるま過せよ紙鳶
几巾買て子心ぞ憂雨つゞき
いかのぼり遠まさり行反古かな

白魚

白魚に餘寒の海やいせ尾張
しらうをゝめづるや老のうん呑に
しら魚やつきまとはるゝ海の塵

蛙

こもり江や雲母うく水に啼蛙
西行の席さはがしき蛙かな
いづちともなくや蛙の在所

はじめから壁からしたる蛙かな
江の蛙生駒の雲のかゝる也

猫戀

木づたひにいどみより來ぬ猫の夫
思ひかね夜べ寐ぬ猫の眠哉
よく見れば乞るゝ妻やこちの猫

歸雁

あたゝかな雨間を雁の呼夜哉
沖に降小雨に入や春の雁
北ぞらや霞て長し雁の道

燕

古き戸に影うつり行燕かな
酒旗につばめ吹るゝ夕かな
幢の佛間へ道入乙鳥哉

蜆

みづうみの淺瀨覺へつ蜆取

和海藻

わかめ刈乙女に袖はなかりけり
春深く和布の塩を拂ひけり
わかめ刈竹枝のことば習けり

蕗臺

酒いたく呑ておかしや蕗のとう
晋人の味噌の酒落や蕗臺
梅生てねじめに折そふきのたう

初午　二日灸

初むまや足踏れたる申分ン
鴬の灸に二日やいとかな

涅槃

天人の肘に泪やねはん像

悼北邑幸順

苦き手の其人ゆかし蕗のとう

木芽　山葵

大原や木の芽すり行牛の頬
麥蕎打テば山葵ありやと夕かな
おもしろうわさびに咽ぶ泪かな

摘草

摘艸やいとはしたなき包もの

蕨　さし木

野の河や蕨さはしてひたしもの
古箸に人をよけたるさし木哉

雀子

すゞめ子や書窩の机のほとり迄
人の手に巣へ戻されつ雀の子
雀子や並ビ居つゝも黄ナル觜

畑打

瘦脚や畑打休ム日なたぼこ

蝶

地車に起(おき)行(ゆく)草の胡蝶哉
はかなしや蝶の羽染る鳥の糞
屋根ふきのあがれば下るこてふ哉

上巳

雛の宴天井に雲畫せん
曲水に病後の僧の苦吟哉
曲水や江家の作者誰〳〵ぞ
有常は娘育てゝ家の雛
雛の宴五十の内侍醉れけり
桃花盃疊のうへを流(ながる)めり

雛店に彷彿として毬かな

鶏合

鶏合左右百羽を分チけり
暹羅かしは桃花の雨のみだれ哉
鴾のしはがれ聲に名乗けり

桃

劉阮の桃に泊るや撞木町
風呂に見る早き泊りやもゝの花
立よりて荳な荒しそ桃の花

雲雀

庵室や雲雀見し目のまくらやみ
島原に田舎の空や夕ひばり

耕

耕に馬持る身のうれしさよ
たがへしやいづこ道ある谷の底
耕や矢背は王氏の孫なりと
十津河や耕人の山刀

田螺　鳥巣

片口のわぶと答へよ田にしあへ
泥澄てそこらに見ゆる田螺哉
鳥の巣や誰か髪もじの一摑
此殿の古巣たづねつ鳥二ツ

花　櫻

舟橋の勅使まうけや花の雲
定りの花見の日あり家の風
侘人の虱盡して花ごろも
いで花に君粮包め我は酒
花のため家に醸する主かな
哀れなる痩地の麥や花の道

嵯峨にて

材木の上にあらしや山櫻
むかし道見上て過ぬ山さくら
北谷は南谷はいま山ざくら
やま櫻うつぼに折て歸也
須磨寺のめしのけぶりや山さくら

晩望

燒火賊と夕日の藪や花に鐘
落る花ひとかたならぬ夕かな
莖ながら雨の日頃や落る花
菴の雨花相似ざるきのふには

御室にて

仁和寺やあしもとよりぞ花の雲
脱かけの袖や花見る舞子ども
ことしまた花見の顏を合せけり
西陣や花に夫婦のにしめもの
いとゞしく花に怠る箒哉
花踏て戻る公卿の艸履かな
その寺の名はわすれたり糸さくら
さくら狩古き手代や飯奉行
遅櫻驗なる聖住おはす

壬生念佛

山吹やいはでめでたき壬生ねぶつ

御身拭　御影供

乘物で優婆夷も來るや御身拭
北面の御堂かしこし御影供

人丸忌

石見のや月も朧の人丸忌

出代　養父入

出代や人の心のうす月夜
やぶ入の枕うれしき姉姉
養父入や行燈の下の物語

山吹

折ばちる八重山吹の盛かな
山ぶきや雨水ひかぬ地のひくみ

苗代

宵月や苗代水の細き音
里の犬苗しろ水を吸けり
松遠し苗代水に日の當る

春夜

春の夜や足洗はする奈良泊
春の夜もかたぶく月や連歌町

春雨

春雨や野老喰ふて見る女あり
最前に起てもよきを春の雨
文ぬれしことはりいふや春のあめ
迎待つ母よ娘よ春の雨
春の雨あるじは猫でおはす也
春雨や財布ぬらして節句前
春さめや暮を約せし妻戸口
春雨や谷の古葉も流出ッ
春雨の泥や棧敷の楷子まで
はるさめや柳の雫梅の塵
春雨に鐘のうねりや障子越

春水

しづかさや雨の後なる春の水

玄水七十賀

まな鶴をほとりの友や春の水

探題　春燈

春の燈油盛りたる宵の儘
春深く蔀に透るともし哉

蠶

浴して蠶につかふ心かな
月更て桑に音ある蠶かな

雉子

背のひくき木瓜に身を置雉子哉
いで其頃竹抜五郎きじの聲

菜花

菜の花の道行人の岡見哉
なのはなや此邊までは大内裏
菜の花に春行水の光かな

躑躅

白雲の根を尋けり岩つゝじ
苔には蘂を見せたるつゝじ哉

陽炎

かげろふや燃てはしさる物のひま
陽炎に兎出てゐる檜原哉
かげろふを掻出す鶏の距かな
陽炎に美しき妻の頭痛かな

遲日

遲日を追分ゆくや馬と駕
枕して遲キ日を行のぼり舟

寒食

寒食や餞に馴たるひとり住

爐塞

爐ふさぎや旅に一人は老の友
物ぐさく爐塞ぐとしも見へぬ也
爐塞て主おかしや力あし
爐ふさぎや招隱の詩を口ずさむ

藤

しら藤や奈良は久しき宮造
白藤や開帳前のひらき道
なつかしき湖水の隅やふぢの花
藤棚や小詰役者の草鞋がけ

春暮　晩春

橋守の錢かぞへけり春夕
大原の千句過たり春のくれ
公家町や春物深き金屛風
ゆく春やいづこ流人の迎舟
狩倉の矢來出來たり暮の春
春おしむ人や落花を行戻り
たんぽゝもけふ白頭に暮の春
ほし衣も暮行春の木間（このま）かな
行春に流しかけたる筏かな

題　鞍馬

ゆく春のとゞまる所遲ざくら
鷲尾は親子住居て春おしむ
八專の空たのめなくゆく春や
野に山に閑人春を惜みけり

夏之部

郭公

あかつきの一言ぬしやほとゝぎす
烏帽子にも耳は出るよ時鳥
ほとゝぎす我も都のうつけ哉
今宮の煤掃しばしほとゝぎす
貧乏性いたゞく星や蜀魂
うぐひすの箱根や伊豆の子規
ことかたを歩行て訪ふや杜宇
ほとゝぎす啼やあふみの西東
郭公夜もいろ〳〵の物の音

更衣

遣唐のいとま賜ひぬ更衣
更衣ひそかに綿を着します
親殿の御物めかしや更衣
馬場騎の背中ふくるゝ袷哉

うのはな

卯の花や茶俵作る宇治の里
卯の花に貴舟のみこの箒哉
うのはなやかきあげ城の湛水

茨　桐花

道のべの低きにほひや茨の花
逞しき葉のさまうたて桐の花

ぎやう〳〵し

ぎやう〳〵し日高に著て伏見哉

佛生會

灌佛や雲慶閑に刻けん
灌佛やわらぢも許す堂の椽

閑居鳥

さびしさの中に聲ありかんこ鳥

日くるればあふ人もなし正木ちる
峯のあらしの音ばかりして

晝日中逢ふ人もなしかんこどり

若葉

あはしまを女の出るわか葉哉

水音も若葉も木曾の日〻〈に

題 橋

虹たるゝもとや橋の木間より

祭

加茂衆の御所に紛るゝ祭かな

牡丹

大坂の牡丹さゝげぬ本願寺

おめかけを牡丹の花の主かな

夜を〻しむ筒のぼたんや枕上

嘗(かつて)見しぼたんにめでゝ入院哉

御出入の李白を搜すぼたん哉

園廣し黄なるも交る牡丹哉

夏書

人しらぬ不犯誓ふて夏書かな

似合しき聟おもふ身の夏書哉

夏書さへ晝に成けり妾

麥

覆面の内儀しのばし麥の秋

痩麥や我身ひとりの小百姓

麥秋や聟殿ことしはじめじやの

十津河や見込の武具も麥埃

題 豆査

餘花いまだきのふの酒や豆査汁

短夜

短夜や老しり初る食もたれ

みじか夜をしらで明けり草の雨

短夜の獲(えもの)見せうぞ桶の鮒

みじか夜や宿立出て小石原

蝸牛

かたつぶりけさとも同じあり所

夜べの雨馬蘭に殖ぬ蝸牛

青梅

青んめや黄なるも交雨の中

燕子花

かきつばた深く住(すむ)戸に鴨子哉

鍵の手の寺前の池やかきつばた

小瓶もてみやげにくれし杜若

杜若門から覗く賣屋鋪

女臈なら舟へと申せ杜若

重五 幟 競馬 菖蒲

齋に來て幟うらやむ小僧哉

ことし又おと子うみけん幟數

凄哉競馬左右の貌合せ

我牛をめでゝやふけるあやめ艸

題 竹酔日

此日よと竹移しけり玄關前

杏

醫者どのと酒屋の間の杏かな

早苗 田植

山城へあふみの早苗移けり

白雲や早苗とりさす水の面
早乙女やひとりは見ゆる猫背中
けふも又田植あるやら竹の奥

筍

笋やしづかに見れば草の中
笋や脚の黒子も七十二

水雞

日も暮ぬ人もかへりぬ水鷄なく
月の出に川筋白しくゐな鳴

射照

百姓の弓矢古たるともし哉
十五から列卒にさゝるゝ射照哉
一雨を擲つ木香のともしかな
鹿遠しいでや射照の手だれ者

五月雨

さみだれの石に鑿する日數哉
五月雨や晝寐の夢にうつの山
貌につく蠏のしめりや五月雨

農業

笠に入て燧うちけりさ月雨

螢

雨の夜や猶おもむろに行螢
行螢夜のみかうしまいりけり

夏草　夏野

夏草に狩入犬の見へぬ也
夏野ゆく村商人やひとへもの

夏山

夏の山しづかに鳥の鳴音哉

鮎

我井戸に桂の鮎の雫かな

河骨

水渉〳〵河骨莖をかくしけり

藻花

藻の花やわれても末に舟の跡

若竹

若竹に蝿のはなれぬ甘み哉
わかたけや村百軒の麥の音

麥粉

むせるなと麥の粉くれぬ男の童

梅漬

梅漬にむかしをしのぶ眞壺哉

青田

むら雨の離宮を過る青田哉

百合　蓼

ゆりあまた束ネて涼し伏見舟
脛高く摘をく蓼や雨の園

夏木立　木下暗

夏木立いつ遁失て裸城
下闇の三輪も過けり泊瀬の町
谷河の空を閉るや夏こだち
市人の爰見立けり夏木だち
夏木立阿闍梨の供の後ばせ

茄子

人妻のこれを饗應す茄子漬
茄子ありこゝ武藏野ゝ這入口
なすび賣一夏の僧を音信るゝ

蚊　蟵

うき人に蚊の口見せる腕かな

雪隠に信玄おはす蚊やり哉
世やうつりかはらの院の蚊遣かな
翌までと括りよせけり蟵の破
燈に書のおぼろや蚊屋の中

待戀

苦しさや蟵へも入らず蚊屋の傍
植込の蚊に罵しる女かな
物得たり蟵のかくれの妹が文
いぶせきや子のあまたある蟵の内
淋しさは天井高し寺の蟵
蚊の聲の日口を過るうき世哉
蚊やりして武士守りぬ崩レ塀
淺ましや蚊屋に透たる夜のもの
はづかしや朝ゐの蟵を覗く人

蠅　毛蟲

詩にあらず錦にあらず機の蠅
あさましく蠅打音や臺所
羽ネもいだ蠅歩行けり誰が所爲
桃原の岸に流るゝけむし哉

夏羽織　帷子

交れば世にむづかしや薄羽織
かたびらや浴して來し人の貌
新尼の着つゝおかしや繪かたびら

鮓

鮓壓て我は人待男かな
早鮓に王思は飯をあふぎけり
酒呵る人もや鮓に小盃

鵜

曲り江にものいひかはす鵜ぶね哉
早瀬とは鵜の火に見ゆる逶也
吐す鵜と放ッ鵜縄のいとまなみ

夏月

夏の月よき人加茂の歩わたり
涼しさの日枝をのぼるや夏の月
少年の犬走らすや夏の月
ほのめけるはし居の君や夏の月
檀林に談義果しよ夏の月

川狩

河狩や身にそふ陰間かたらひぬ
水更ぬ岸をうちゆく網の音

白雨　雨乞

ゆふだちや市の中ゆくさゝら波
君王のゆふだち譽る臺かな
雨乞に夜ひと經よむ僧徒哉

暑

暑日や産婦も見へて半屏風
町あつく振舞水の埃かな

雲峯

假そめの油廣がる雲のみね
良のをに恐し雲の峯
兀山のうしろをのぼる雲の峰

題斧

つゝ立て雲峰見る五鬼善鬼

汗拭

目ざましに水ひてゝ來よ汗拭

團扇

うす雲に歌や望まむ白うちは

まらう人へ團まいらせん白き方
前帯の友むつまじき團かな
面頬をはづして將の扇哉

蟬　夏虫

さまかへて御庭拜むや蟬の聲
蟬鳴や晝寐しばらく旨かつし
啼蟬の岩くらたどる目疾哉
せみの聲茶屋なき岨を通りけり
夏むしや夜學の人の貌をうつ

納　涼

涼舟いとし若衆の小鼓は
水練を舟の御遊やゆふ涼
うか〳〵と南草に醉ふや朝涼

簟

浴して且うれしさよたかむしろ
もろこしの夢はさめたり簟

竹婦人

抱籠や誰に倦れて拂もの

虫　拂

筆のもの忌日ながらやむし拂
上野や足利代〳〵の虫拂

祇園會

かしこくも羯鼓學びぬ鉾の兒
祇園會に曳や手摩ッ乳あしなづち

晝　顔

晝がほや子を運ぶ鼬垣根より

蓮

とく起よ花の君子を訪日なら
麻頭巾蓮見にまかる小舟哉
瓶の蓮としも卷葉ばかり也
何いふて呷く舟ぞ採蓮歌

瓜

先すゞめ東寺はちかき瓜所
瓜刻むあした隣を聞れけり
冷し瓜加茂の流に枕せむ

醴

あまざけや盆に居並ぶ父と母

海松　ところてん

汐染ぬ雫うれしや籠のみる
旅人の買はじめけんところてん
心太酒の肴にたうべけれ

夕　顔

ゆふがほや古君今の名はしらず
夕貌や用所見て置旅の宿

施　米

腰ぬけの僧扶ヶ來る施米哉

麻

なつかしき闇のにほひや麻畠
あさかりてかつぱり淋し門の外

清　水

川上は溫泉の涌なる清水哉
旅人の藥たてたる清水哉
かけ出の髭を絞りて清水哉

常　夏

なでしこや美人手づから灌ぬる

氷　餅

あひにあふ氷をろしやこほり餅

夏祓

兒つれて法師のしのぶ御祓哉

白幣のはや西を吹みそぎ哉

春泥發句選

秋之部

白馬寺に如來うつしてけさの秋

今朝の秋を遊びありくや水すまし

荒海に題目見へてけさの秋

秋たつやさらに更行小田の泡

初秋や藥にうつる星の影

六月閏ありけるとし

水なしの繼橋越ぬ今朝の秋

脈はるゝ身を起されつけさの秋

水底に青砥が錢やけさのあき

一葉

禪の竿を落けり桐一葉

散柳

古御所の寺になりけり散柳

七夕

七夕やよみ歌聞に梶が茶屋

きぬ〲に鵲尻を向ヶにけり

七夕や藍屋の女肩に糸

あまさかる鄙を川下天河

とかくして夜とはなりけり天の川

魂祭

槇買て方士戻りぬ玉まつり

侘しさや葬所ちかき魂祭

燈籠

行ほどに上京淋し高燈籠

長旅の城下へ出れば灯籠哉

高燈籠寺前の池に移りけり

つと立てあぶら浴たる切籠哉

踊

乙の君ある夜ひそかに躍かな

母式部閣よりやみへ踊かな

うかと出て家路に遠き踊哉

かの後家のうしろに踊る狐哉

（此句「太祇句選」にあり）

霜天にみち〲明るをどり哉

うき人の貌猶深き躍かな

相撲

賭の御馬ひき出すすまひ哉
老にきと妻定めけりすまひ取
弓張に暮行角力柱かな

花火

花火舟遊人去ッて秋の水
花火舟家老ながらも叔父の殿

蕣

朝がほや日剃の髭も薄淺黄
ひともとの蕣や日に出來ふでき
あさがほや盥の前に新也
明暮と朝顔守るいほりかな

露

蛛の巣に露ふりよする晉かな
露けしや朝草喰ふた馬の鼻
草高く露も穂に出る夕かな
庭ゆくも露に裾とる女哉
松明に露の白さや夜の道
蘆撫て鷸たちぬ月の露
狩入て露打拂ふ靫かな
膏薬になる草とはん原の露
むさし野や合羽に震ふ露の玉

萩 荻

ほろ／＼と秋風こぼす萩がもと
爰かしこ小家隱して岡のはぎ
似合しき萩のあるじや女宮
明ぬとて萩を分ゆく聖かな
なつかしき荻の葉伸や塀の上
一本の荻にも秋のそよぐ音

薄

山犬のがばと起ゆくすゝき哉
身がまへて芒かる也下男

苦葴

鬼灯や老ても妓女の愚かしき

木槿

白木槿夏華も末の一二りん

秋風

物換る壁の夕日やあきの風
子の貌に秋かぜ白し天瓜粉
秋風や蚊屋に刀の鎭置ん

秋扇

秋かぜの閨に殘せし要哉

蜻蛉

とんぼうや飯の先までひたと來る
白壁に蜻蛉過る日影哉

秋蚊

秋の蚊や默／＼として喰ひ行

鱸

かゝる日に貰ひ鱸や生腐り

八朔

八朔や四座の登城の袖かへす

稲妻

いなづまや雨月の夫婦まだ寐(いね)ず
稲づまにあやしき舟の訴哉
いなづまや其はゝ木ゝの梢まで
稲妻や夜もをり／＼の横渋し

霧　秋雲

霧雨の外面にうごく曇哉
行火矢に出行船や霧のひま
山霧の梢に透る朝日かな
入相や霧になり行一ッづゝ
霧立て遠里小野となりにけり
二色の繪具に足るや秋の雲

稻　落穗

稻の香やゆりもて運ぶ行違
めでたさよ稻穗落ちる路の傍
稻ぶさや誰むすび置宮柱
何かせん稻刈頃のかゝり人
あしあとのそこら數ある落穗哉

鳴子　引板

野ねづみの逃るも見ゆる鳴子哉
水盡て引とる息や引板の音

秋暮　秋旅

加茂の町業も聞えず秋の暮
婚禮の家を出ればあきの暮
寺子屋のてら子去ニけり秋暮
短冊の屛風を見たり秋のくれ
しられじと旅の身に添ふ金氣哉

月

名月や此松陰の硯水
唐砧に駒や繫ん野路の月
名月や懷紙拾ひし夜の道
名月に辻の地藏のともし哉
百貫の坊に客ありけふの月
橋の月裸乞食の念佛かな

東寺寓居にて

山ぶきは社家町に似てけふの月
名月や厠にて詩の案じぐせ
名月や瓶子奪合ふ上達部
夕月や驢鞍過ゆく驢鞍橋
月影や田をゝちこちの水の音
見るものにしてや月見の小百姓
名月や金拾はんとたち出る
月かけて砦築くや兵等
湖を月見の旅や友二人
ありときく彙栽松や月の前
後の月何か肴に湯氣のもの

悼移竹叟

硯箱ふたよの月を見納めぬ

同十三回忌

乙御前や顏見ぬばかり月の前

放生會

曉の霧しづかに神の下山哉
浪黑き鰻十荷や放生會
山崎へあまれる鳩や放生會

秋夜

秋の夜をあはれ田守の鼓かな
秋の夜に江師兵を談じけり
畑ものに秋の夜を守燒火哉
長き夜の寐覺語るや父と母
永夜にやゝ讀盡ぬ若菜の下

題　妓

秋の夜を何かしろ女が丸行燈

長き夜やあらまし成ぬ翌の業

案山子

夕日影道まで出るかゞし哉

立されば形チなしたる鹿驚哉

をちこちのたづきなき身のかゞし哉

編笠のとにわびしき案山子哉

二ッあるかゞし容を達へけり

題俵

腰を折五斗の脱(ぬけ)のかゞし哉

朝風に弓返(ゆがへ)りしたる案山子哉

冬瓜 糸瓜

よきものと冬瓜勧るくすし哉

汁菜にならでうき世をへちま哉

江鮭 下簗

あめ来るや普請半の川堤

(又)またしては狐見舞(みまひ)ぬくだり簗

蕎麦花 穂蓼

そばの花畠の秋も後段哉

花を見て蓼の多さよ此邊

草花 野菊 蘿

あつめねば花にもあらぬ小草哉

折(をる)よりは行(ゆく)に慰む花野哉

かたはらにかぼちや花咲野菊哉

藪畳半は蔦のもみぢけり

代なしに譲らんといふ蘿の宿

野分

(一息)まひといき野分吹らん薄月夜

子狐を穴へ呼込のはき哉

雪隠のかきがねはづす野分かな

獨居の野分ながらに朝寐哉

宿|までは闇の野分や馬の上

秋水

白髭の笠木も見へて秋の水

送蕪村先生之讃州

江|山の助(たすけ)況や秋添て

葛 蘭

くずの葉も吹や鳴子のうら表

栗に飽て蘭につく鼠とらへけり

柿

秋されや柿さま〴〵の物のした

蕃椒 南草

年よりの唇いやしとうがらし

蕃椒常世(つねよ)が鉢にちぎりけり

た葉ことりて荒に就たる畠哉

南草干すどしても縄の中だるみ

鶏頭花 葡萄

けいとうの宿や窓から答へけり

ぶどうめす水銀盤をうたれけり

虫 蟋蟀

乾きたる虫籠の草やあら無沙汰

虫聞てたつや野人の怪しむまで

虫籠の總角さめぬ致仕の君

秋風に渧(はな)すゝりけりきり〴〵す

九日

人心しづかに菊の節句かな

菊

宿のきく陶にさして憐まん

櫻井が跡に宗長菊持參
すがりかと思はるゝ菊の開きけり
菊の香や花賣が身の袂にも
初ぎくや九日までの宵月夜
土龍妹が黄菊は荒にけり
うたゝねの顔に離騷や菊の花
雞老ぬ茄子黄みぬきく畠
とく遲く菊此頃のたのしさよ
草の戸の酢德利ふるや菊膾

殘菊

見る時は殘菊としもなかりけり
菊の香や十日の朝のめしの前

栗

料足に栗まいらする忌日哉
落栗や墓に經よむ僧の前
いがぐりに鼠のしのぶ妻戸哉

題 老坂

毬栗に踏あやまちそ老の坂

蜜柑

埋み置灰に音を鳴くみかん哉

擣衣

いねがしの男うれたき砧かな
小どもしの油あやまつきぬた哉
相住や砧に向ふ比丘比丘尼
山うばと貌見あはしてきぬた哉

牛祭

油斷して京へ連なし牛まつり

新米

船頭に乞とるめしやことし米
燒米や其家〳〵のいせの神

新酒

父が醉家の新酒のうれしさに
買ほどは盡さぬ旅の新酒哉
新酒や天窓叩てまいる人
つけさしの穗に出る君やことし酒
母衣かけて新酒に醉る祭哉

初紅葉 照葉

いづちよりいづち使ぞ初もみぢ
切溜につゝふと見せたる照葉哉

銀杏

北は黄にいてふぞ見ゆる大德寺

秋雨

秋雨や四方椽にも濡るゝ方
揚屋から旅乘物や秋の雨
秋雨や旅に行あふ芝居もの

芭蕉 新綿

墓の背にばせをの雨の雫哉
何となき綿のにほひや宿通

鶉

うづら籠棚の皷に並びけり

夜寒

明ばまた夜寒の雨戸繕はん
ふさとめす地藏の綿も夜寒哉
怪談の後(うしろ)更行夜寒哉
月の洩穴も夜寒のひとつ哉
あとさして夜寒に慮外申ばや

題 妖もの

炭とりに早足のつく夜寒哉

鹿

鹿寒く月輪どのゝ寐覺哉
鳴川の戸に寄鹿や下駄の音
ぬれ色に起行鹿や草の雨
賓主鹿聞ぬ夜をかこちぬる
身は痩て草嚙ム鹿の思かな

小鳥　鵯　鴫

川上や黄昏かゝる小鳥あみ
通とぶ鵯一群や森の月
鬼貫も歌よみにけり鴫おとし
鴫鳴くや黍より低き小松原

瓠瓜

種瓢斑なつらを見はやさん
いつしかにうとろなものよ種瓢

木犀

木犀や禪をいふなる僧と我

雁

大宮や南がしらに雁の聲
初雁や目に相手なき海の月
はつ雁も春の覺への舟路哉
低く飛雁あり扨は水近し

探題　鍛冶

月―山の梢に響く秋の聲

茸

唐櫃の北山戻るきのこかな
さし上て獲見せけり菌狩
降出して茸狩殘す遺恨哉
茸山や轂鐵砲の一けぶり

紅葉

紅葉見や小雨つれなき村はづれ
山づとの紅葉投けり上り口
吹さます酒や紅葉の燒過し

老母艸　梅擬

花の時は氣づかざりしが老母草(おもと)の實
梅もどき我あり顔や暮の秋

暮秋

長き藻も秋行筋や水の底
枯てたつ草のはづかやくれの秋
四町なる御歌使や昏の秋

題闕

月影の不破にも洩らず九月盡
禪に贈(送カ)別の詩や九月盡
石女(うまずめ)と暮ゆく秋を惜しみけり

冬之部

初冬や兵庫の魚荷何〱ぞ
はつ冬や戸さし寄たる芳野殿
初ふゆは曇とのみぞ障子越
はつ冬や空へ吹るゝ蜘のいと

時雨

しぐれする音聞初る山路かな
傘の上は月夜のしぐれ哉
三度まで時雨ていとゞ黑木馬

生て世に寐覺うれしき時雨哉
夕しぐれ古江に沈む木の實哉
雲母行豆腐にかゝるしぐれ哉
江戸住やしぐれ聞こす人ゆかし
衰やしぐれ待身となりにける
喘息に寐つかぬ聲や小夜時雨
山城のとはかは急ぐ時雨かな
妻木とる內侍の尼のしぐれ哉
むらしぐれ古市の里にしばしとて
寺深く竹伐音や夕時雨

爐開

爐びらきやけふも灯下に老の日記
爐開や庭はあらしの樅を吹

芭蕉忌

冬の雨しぐれのあとを纔夜哉

嵐雪祥忌

其集に洩せし十夜袋かな

十夜

人聲の小寺にあまる十夜かな
燒寺の早くも建て十夜哉

口切

口切や寺へ呼れて竹の奥
口切や彈正といふ人のさま

夷講　達磨忌

前髮に戀はありけり夷講
蛭子講火鉢うれしとこぞりぬる
達磨忌や和尙いづちを尻目なる

茶花

茶の花にきゞす鳴也谷の坊
茶のはなに文覺のやうな庵主哉

歸花

かへり花蟬のもぬけに薫す
はゝ木ゝの梢はこゝぞ歸花
雨雲の梢は奇也かへり花
咲出て心ならずや歸ばな
歸花桃李の美人覺束な

草枯

いさゝかな草も枯けり石の間

霜

日三竿檜原に耐ぬ霜の色
羊煮て兵を勞ふ霜夜哉
手してうつ鐘は石也寺の霜
織殿の霜夜も更ぬ女聲

落葉

あちこちとして居りたる落葉哉
篦深にも射たる塚の落葉哉
寺ゆかし山路の落葉しめりけり
水含む落葉わび行草履かな
宮つこの闇の顏うつ落葉哉

大根

冬偈ある寺にひかるゝ大根かな
胡蘿も色こきまぜて大根曳

納豆汁

納豆汁比丘尼は比丘に劣りけり
反椀は家にふりたり納豆汁
翌といふ隣の音や納豆汁
齋腹の便ゝたりや納豆汁

海鼠

麗しく玉堂佳器にこたゝみぬ
憂ことを海月に語る海鼠哉
海鼠たゝみの饗應しのばし聚楽御所

蠣

煎蠣に土器とりし釆女かな

冬至　御火焼

雨ながら朔旦冬至たゞならね
よそながら冬至と聞や草の庵
天文の博士ほのめく冬至かな
百姓に浴ほどこす冬至哉
禪院の子も菓子貰ふ冬至哉
御火焼や積上し傍へ先よるな

枇杷花

輪番にさびしき僧やびはの花

木枯

こがらしや瀧吹わけて岩の肩
凩や花子の宿の戸にさはる
木がらしの夜にゆたふる菴哉

貌見世

顔見せや伏見くらまの夜の旅

浪花

顔みせや空炷ものゝ舟一片

寒　鐘氷

さす敵に矢をとり落す寒かな
本陣に鼠の糞のさむさ哉
鐘氷尾上の寺や月孤ッ

氷

初氷許由此朝掬すれは
うすら氷や格子の透の器
琥珀には蟻氷には紅葉哉

水鳥　鴨　鴛

水鳥やかねて郷士の聟撰び
水とりや心の闇の流し鶵
浮鳥を石とあやまる水遠し
毛を立て驚く鴨の眠かな
水鳥に唐輪の兒の餌蒔哉
鴨の毛や荒打たゝく軒の水
かたよりて島根の鴛の夕かな

千鳥

江南は鳥飛也むら千鳥

雪　霙

初雪に人寒からぬ御宴かな
客去て寺しづか也夜の雪
何を釣沖の小舟ぞ笠の雪
羽織着て門の雪掃女房哉
雪の日や笠着た人をみさぶらひ
袖を出る香爐も雪の衙哉
ぬけがけの手綱ひかゆる雪吹哉
物焚て夜すがら雪の乞食哉
山買ふて我雪多きあるじ哉
都邊や坂に足駄の雪月夜
雪の日や隣家の童子欠木履
村人に雪の見所習らひけり
よき君の雪の礫に預らん
夜着を着て障子明たりけさの雪
初雪や既に薄暮の嵐より

雪の朝童子茶臼を敲く也
寒して海老吹寄る汀かな

遠忌

その夜半の啼音は遠し浦鵆

仙鶴追善

弔へば今もきませる頭巾哉

冬枯

冬がれの里を見おろす峠かな
家遠し枯木のもとの夕けぶり

冬野

枯野していづこ〱の道の數
伯樂が鍼に血を見る冬野哉
生て世に古錢掘出す冬野哉
枯野して松二もとやむかし道
上京の湯どのに續く枯野哉
枯野のや簑着し人に日の當る
關屋より道のさだまる枯野哉

鷹

あたゝめよ瓶子ながらの酒の君
冷めしの霰たばしる鷹野哉
鳥叫や鷹にあたへる肉一臠
草の戸に茶ひとつ乞ﾘ狩の君

炭

炭うりや京に七ッの這入口
うき人の顏にもかゝれはしり炭
消炭に薄雪かゝる垣根かな
炭を挽(ひく)下部ゆがまぬ心かな
炭取に侘しき客の火ばし哉

榾

榾の火にあやしき僧の山居哉
榾けぶる住居侘しや疊なき

埋火

うづみ火に我夜計るや枕上
おの〱の埋火抱て繼句かな

冬籠

冬ごもり五車の反古の主哉
仁齋の巨燵に袴冬ごもり
思ふ事戸に書れたり冬籠
住つかぬ歌舞妓役者や冬籠
雉子一羽諸生二人の冬ごもり

隔なき友とさし向ひおろ〱のみたるいとおかし

何なりと薄鍋かけん冬座敷

水仙

水仙や室町殿の五間床
水仙や藥の御園守あたり
すいせんや先揚屋から生ケそむる
水仙や引さき紙に珍重す

寒菊

寒菊や猶なつかしき光悅寺
寒菊やわきてかしこき苔がち
寒ぎくや四ッまで園の日のあたる

冬椿

冬つばき難波の梅の時分哉

冬木立

郊外に酒屋の藏や冬木だち
孟子讀鄕士の窓や冬木立

蒂見ゆる貧乏柿や冬こだち
垣結へる御修理の橋や冬木立

綿帽子　綿子

里下りの野ひとつ越ュや綿ばうし
留主がちの夜を守妻の綿子哉
綿帽子士農工商の妻の體

紙子

小夜更て紙子まいらす迎かな
弓の師の家中をありく紙子哉
ながらへば紙子を貰ふすまひ哉
紙衣着てふくれありくや後影
紙子きて嫁が手利をほゝゑみぬ

足袋　胝

扨あかき娘の足袋や都どり
あさましや足袋に足袋はく虚勞病
子の母よいく度結ぶ足袋の紐
革足袋で村あるかるゝ醫師哉
競べあふ胝の手先や寮の尼

頭巾

凩に頭巾忘れてうき身哉
頭巾さへ多田の新發意の左折
酒臭やうかれ頭巾の行違ひ
異見など投頭巾着て馬の耳
頭巾着て法師か知らじ安良殿
頭巾深しとても聞えぬ老の耳
楊虎ぞと取違たるづきん哉
學して痒ずや頭巾の影ぼうし
袂なる頭巾さがすや物わすれ
頭巾着し冶郎に逢りうつの山
引かふて棧敷に忍ぶづきん哉

火桶

光茂が膠兀たる火桶哉
火桶はる暦わびしき月日かな
山伏も舞子も住て火桶哉
炭をふく紀の關守が火桶かな

蒲團

身に添はで憂しやふとんの透間風
輕井澤君がきませるふとん哉
紡績に妻老けるよ敷ぶとん
旅の夜の我瘦る蒲團哉

火燵

亘燵してくれる驛の馴染哉
山鳥の病妻へだつ亘燵哉
侘しさや亘燵に焦る蜘の糸

圍爐裡

大原女の足投出していろり哉

冬月

しづかなる柿の木ばらや冬の月
質置の彳む門や冬の月
寒月や穢多が虎竹に肉の影
溫石の百兩握るふゆの月

寒燈

氈帳に短檠くらし藥喰

河豚

鈍あらふいつもの男まいりたり
ふぐと汁我が使に我ぞ來ぬ
歸らめや鰒喰ぬ家によせし身を

河豚汁鯛は凡にてましく〳〵ける
河豚しらず四十九年のひがごよ
廻文の點の長さよふぐと汁
佐殿に文覺鰒を進めけり

雞卵酒

玉子酒賓主を分ッ小盃
沫を消す内儀老たり玉子酒
草の戸や盃足らぬ鷄卵酒
寐酒せん先たのもしき鷄卵百
玉子酒十重ねたる小さかづき

煮凍　藥喰

煮凍を旦夕やひとり住
煮凍にともに箸さす女夫かな
長言す人去レけり藥喰
夕べ誰疊焦しつくすり喰

葱　韮菜

小灯に葱洗ふ川や夜半の月
僕等のよゝと盛けりねぶか汁
重箱に縮て贈る韮菜哉
後妻のをど〳〵に問ふ韮菜哉
韮をしに寺中をめぐる老女哉

鯨　鰤

鯨舟新島守を慰めつ
一のもり突や日來の飯の恩
めでたしな御子達からの臺の鰤

寒造　御佛名

碓の十挺だてや寒づくり
佛名や柿の衣の僧ばかり

鉢敲

鉢たゝき頭巾まくれて髮の霜
愚なる御僧と申せ鉢叩
鉢たゝき右京左京の行戻

寒念佛　寒垢離

無縁寺の夜は明にけり寒ねぶつ
茶を申をうなの聲や寒念佛
寒垢離の風に乗行歩み哉

病中吟

鏡とらば雨の鬢や枯尾花

煤掃

門口に歩みの板や煤拂
煤拂あやしの頭巾着たりけり
平仲が貌ともはやせ煤拂
一函の皿あやまつやすゝ拂
すゝ掃や宵のさむしろ大書院
煤掃やいつから見えぬ物のふた
きぬ〴〵の鴛も過けり煤拂
何やらん妻火ともして翌の煤

年忘

家中衆のしのび〳〵や年忘
玉子吸ふ女も見えつ年忘
宮方の武士うつくしや年忘
國衆は舞子が好でとし忘
貝で吞ム人をあふぐや年忘
腰越や鎌倉は嘸年わすれ
醉臥の妹なつかしや年忘
燭まして夜を繼にけり年忘

寒聲

寒聲や京に住居の能太夫

衣配　餅搗

橘のむかし文庫やきぬくばり
百疋は握る使や衣くばり
餅つきや焚火のうつる嫁の貌

節季候　掛乞

恥しらぬ老の戯れや節季候
掛乞や雪ふみわけて妹が許
書出しに小町が返事なかりけり

年木樵　岡見

うれしさよ御寺へ年木まいらせて
此村に長生多き岡見哉

追儺　節分

追儺うらの町にも聞えけり
先生も人のすゝめや厄おとし
厄落し石女年をあかしけり
節分やよい巫女譽る神樂堂
寳舟御枕香ぞいや高き
そごとたき一筆がきや寳舟
節分をともし立たり獨住

年内立春

宵闇に春ぞ立ゐる十日ほど

年ごもり

月もなき杉の嵐や年籠

歳暮

行としや月日の鼠どこへやら
春正があつらへ來しぬ年暮
口上のせいぼ使や古男
年のいそぎ聖の衣みじかしや
馬の背にまたるゝ銀やとしのくれ
行としやたゞならぬ身の妹分
錢はさむ下部の腰や年暮
ゆくとしや六波羅禿おぼつかな
常よりも遊ぶ日多しとしの暮
年の市や馬士によみやる送り狀
名の高き茶入も見けり年のくれ
竈塗の心しづかにとしの暮

樗良發句集

南勢無爲庵のあるじ、しば〳〵洛に寓居の時、このかみ玄化なるものつねにゆきかよひて、主が句を集〆梓にせん事を乞ふ。主の云、我この一筋に心を遊ばし、或年はむさしのゝ露にわけ入、あるとしは越路の雪にさまよひ、興にうかれ時にのぞめば、いたづらに言出せることくさもあめれど、忘れがちにして、まいてとめをける物なく、今はたおもひいでんもむづかしなど、いなみ聞えけれど、そゝなかす事(あ)またたびに及べば、是非なく筆を染て、心とめたるほ句百吟かいつけくれぬ。時にこのかみまなく病伏て、つゐに身まかり侍れば、おこたりにして三とせを過る霜月、主も古郷無爲庵に世をさり、今や亡主が記念といひ、かつは亡兄が遺志といひ、やつがれ其しりへにありて等閑ならず。此ことを社中何がしくれがしに告に、草稿を閲して、たれ〳〵のいへる、亡主風雅にとみて世のほまれめでたゝへ、名だゝる秀吟多くは稿にもれたり。これみづからよしとせずして捨たるもあるべく、はたかいつけ落たるも有べければ、ほゐなしとて、人ゝの口にのこり耳にとゞまれるをあつめ、あるは文のはしよりも拾ひもとめて、そが中三百章えらび、乾坤の巻して樗良發句集と題する事を、甫尺序にいふのみ。

天明辰の春

樗良發句集　天

甫尺著

春之部

あめつちや實(げに)もはへある春の色

相模國片瀨の里に春をむかへ、
江の嶋山に神路山を思ひ寄て

ふるさとの伊勢なを戀し初日かげ

むつましやもろ人競ふ花の春

熊野の岐川菴に春たつ日

山〳〵やさくらの中の花の春

ふるとしの儘にて脫かへもせぬ
衣の袖に、ひがし山の朝日かゞ
やきて、けふや春の色のきよら
なるにおどろく。

袖口に日の色うれし今朝の春

眼前に白根を見て春をむかふ

心よりたつやしらねの春霞

鳥の羽に見初る春の光かな

梅

白梅や春毎に見てめづらしき

谷口やこゝろすゞしき梅の花

むめが香に誰も來ぬこそうれしけれ

匂ひして隣の梅の見えぬかな

暮る日や庭の隅よりうめの影

白梅や譽て這入らるゝ男どの

しら梅や垣の内外にこぼれちる

んめの花なかばひらきて盛かな

梅が香や風にみだるゝ糸のどし

梅が香や折とる心はづかしき

門あげて朝から梅のにほひ哉

閑居

梅が香におどろく梅のちる日哉

うぐひす

鶯の古聲したふ初音哉

しのゝめやうぐひす啼て松の風

うぐひすやよきほどヅ、の聲の間

曉に鶯なくや裏のやま

黄鳥の啼やきのふの今時分

うぐひすや春の山里風けぶる

野外

鶯の山越見ゆる海のどか

柳

すかし見て星にさびしき柳哉

旅人の見て行門のやなぎ哉

菴室や柳をもるゝはなし聲

白雲を目當に野邊の柳かな

もつれつゝ見事や雨の糸柳

はからずも見てもどりたる柳哉

霞

うた諷ふ薪士かすむ山邊かな
鳥もろとも野に出し我も霞らん
殘月に日のうつりつゝ朝霞

題 混

きのふけふやゝあらはるゝ若菜哉
若菜つみ野になれそむる袂かな
春の雪風ふきあれて日の暮る
山寺や誰も參らぬねはん像

今江湯に船をうかべて

船に寐む我に過たる春の興

秦夫亭を訪て

風流や窓の白梅　軒の竹

春 雨

鳥ぬれて猶色ふかし春の雨
夜はうれしく晝は靜なり春の雨
花鳥をおもふや夜のはるの雨

旅 宿

柳をり〳〵疊にふるゝ春の雨

和歌浦にて

春雨や松に鶴たく和かの浦

山 吹

水越して山吹あるゝわたり哉

湯尾峠にて

やまぶきの花吹とぢよ雪あらし

花

雨風のあらきひまより初櫻
人傳に聞て悔けりはつざくら
花を照らし月又花にくもる哉
過行ば又見えそむる櫻哉
四五日や花に天氣の片心
花ざかり鳥のたよりに曇けり
油斷して花に成たる櫻かな
四方の花に心さはがしき都哉
ちる花やまぎれて見へぬ人の顔
一時やあたら櫻の咲みだれ
引組て轉たり花に酒の醉
見かへればうしろを覆ふ櫻かな
散さくらつらくもまさる見事哉

閑 居

しづかさや散るにすれあふ花の音

御室にて

もろ人や花を分入花を出す

嵐山にて

雲高く風たえて花のあらし山
めざむるや花吹おろす大炊川

草庵に陸史をとゞめて

食をわけて樂みたれり軒の花

前山花見

櫻はけふをさかりにて、麥畑の緣に莚をしき、空豆の中に盃をとる。山の半腹には幕をうち、峰には人イて人を呼。人花をなぐさむならん歟。花の餘情をそこなふならんか。

人のあたま花に隱るゝ麓かな

蛙 蝶

蛙啼や水玉うかぶ春の水
たはれ來よ袂に入ん飛胡蝶

野子が妻の身まかりけるに

まぼろしに痩顔見へて梅白し

名のみしりてま見へざる人の悼

逢はぬのみ歟遠き別を春の夢

暮春

蝶が身の人よりかなし春のくれ

花ながら春の暮るぞたよりなき

放下師の眠のひまに春ぞ行

安永七三越路行

ことしの春は心おとろへ、筋骨からみ、たましゐの靜ならざれば、加賀の國山代の温泉にあそばんとおもひ立出る。山路さむけれどやよひのすゑなれば、桃さくら山吹など咲みだれたり。

花にこそ命惜けれ春の暮

夏之部

ころもがへ

春をおしむ心の外に衣がへ

ころもがへ鳥はくろく鷺白し

題混

つみ花や刀にむすぶ山法師

うの花の中に崩れし庵かな

世をいとふ我はづかしやかんこ鳥

時鳥

ほとゝぎすあやしく過る初音哉

はつねしてなをまたれけり郭公

時鳥晝の初音ぞうらみなる

ほとゝぎす二聲聞しはつねかな

杜鵑はるかにもどる深山かな

ほとゝぎす啼やちらりと月に移り

松の葉に下腹つくな子規

時鳥聞なをす間に遠音かな

ほとゝぎす曉にせまる高音哉

卯月十日、人〳〵にひかれ三條の西に出はなれければ、あけぼのゝ雲、山〳〵のこしをめぐり、畑のつくりもの、おのがさま〳〵に露を帶ていさぎよし。時鳥しきりにこひしくて

ほとゝぎす野山に聲のすがたあり

比叡山にて

大日枝や麓を横にほとゝぎす

須磨にて

郭公のなみだに曇れすまの月

串のさとにて

北國や雪の中なる青あらし

今江にて

裸身や水鷄を尻に蜆とり

くゐな啼や幽になりし我心

加茂川夜行

水鷄なけ夜の市人酒の醉

夏の日、竹の一むらかこみたるは、いとめざむる心地こそすれ。

めづらしや水鷄の遠音竹をうつ

病中

病中や旅寐の水鷄蚊帳に聞

まつり

吳竹のよゝにあふひの祭かな

餘にも響くまつり太皷かな

中々亭にて

葵艸むすびて古きあそび哉

題混

かりそめに見て過がたしかきつばた

君が代や鉾たてかざるくらべ馬

五月雨や折〳〵出る竹の蝶

波泉の祝事有ければ

ことぶきや亀のひたひの花あやめ

金閣寺にて

こがね鋪て若葉にしのぶ昔哉

燕釣　鵜飼

おそろしや燕つる男妻はなきか

鵜遣ひを見に來し我ぞあさましき

蘭臺子へ留別

別かなし身は五月雨の孤一ッ

留　別　三句おの〳〵前書略

まねきあふ扇に寒きうしろ哉

時鳥歟花歟戀路か此わかれ

わかれ路や今朝短夜の夢千里

佛が原にて

おもかげや佛酒賣苦清水

ほたる

もつれつゝ水無瀬をのぼる螢哉

山や水見えてはくらみ散ほたる

宇治川やよしのゝ花をちる螢

入佐山眺望

月にゆかし照射にかなし入佐山

梯峠よりのぞみて

六月や天の橋立しぐるゝ歟

納　涼

涼風や我にふるゝもおしまるゝ

すゞしさや袖にさし入る海の月

すゞしさや旅に出る日の朝ぼらけ

奥山や月花やかに風涼し

涼しさや松の木の間よりもるゝ風

加茂川にて

水音の袂にこたふすゞみかな

湖水に舟を浮て

すゞしさや船に吹入るゝ浪の露

たえて逢ざりし人にあふて

嬉しさとすゞしさに心亂けり

都に庵をもとめて

みな月の朝貌すゞし朝の月

蒿平亭にて

梅が香も月のなさけも夏一夜

羅外上人の塚に詣侍りしに、愛し給ふ蓮はめでたく花咲て、おり〳〵ごとの風のかほりに、いにしへを我にかたるかと見えて

蓮咲て花物いはず泣もせず

夕貌　瓜

ゆふがほの中より出る主かな

水よりもわづかに涼し瓜の色

延々子の旅宿にて

涼かぜの傘き森の宮ゐかな

故山を草庵にとゞめて

稀人の寐姿うれし蚊帳のやれ

麻青庵に添書を貰て

わすれめや扇にむすぶ文の數

百史亭にて

言葉盡て扇に書し雫しぐれ

悼

今更や日にみな月の水寒し

名　越

六月晦日加茂の社に詣て、みたらしのながれにあそぶ。
泪して命うれしき御祓かな

上の巻終

樗良發句集　地

秋之部

かくこそとわかで今朝より秋の雲
秋たつや雲はながれて風見ゆる
目に見えぬ秋にこゝろの弱りかな

あさがほ

朝貌や露もこぼさず咲ならぶ
あさがほにあぶなき棒の稽古かな
葉の露に朝貌の花のうつりけり
蕣やわづかのうちを日のあたる

悼

あさがほにかはるうき世や七ゝ日

七夕

逢夜とてめでたき星のひかり哉
たなばたや兒の額に笹のかげ
露の間を世にふる星のあふ夜哉
かなしさをかさぬる星の一夜哉

魂まつり

なき父の膝もとうれし玉まつり
たま祭り茄子に見ゆる母の顔

南都より紀の路へおもむく頃、
旅宿の吟

奈良初瀬めぐりて旅の魂まつり

懐舊

巴雲老人が去年の旅姿、ことし難波の蘆のかげにあらはれ見えて、其魂のかへり來たるをしる。

魂まつり雪も時雨の袖の露

秋かぜ

あさがほに吹そめてより秋の風
柳にも竹にもよらず秋のかぜ

鬼の畫讚
物のあはれは秋こそまされ
秋のあはれは夕こそまされ

なけ〳〵と我をせめけり秋のかぜ

述懐

老が身やかりそめならぬあきの風

題混

すまひ取扇遣ひの見事かな

花桔梗名のみの色を咲にけり

見るうちや風の吹折ル女郎花

あはれさに折て持けり花木槿

萩

秋はぎのうつろひて風人をふく

戀よりもくるしき萩のみだれ哉

萩が根に月さし入て風ほそし

緣先やよべに見殘すけさの萩

風あれて萩にうれしきかぎり哉

吹分るひまもあらしの庭の萩

むし

虫ほろ〳〵艸にこぼるゝ音色かな

むし啼や木賊がもとの露の影

八朔

燕々亭にて

八朔やかたびらさむし酒酌む

あはれとも見るにたえたり三日の月

良夜

嵐ふく草の中よりけふの月

名月や只うつくしくすみわたる

雲を拂ひ雲にたゞよふ風の月

たのしみや松にかくれしけふの月

うらめしきまでに月すむ今宵哉

山風のあるかなきかに今日の月

年〳〵にこりて月見ぬ今年かな

畫讃

狩くれて馬のうへなる月見哉

石山にて

ことなるや實（げに）石山の秋の月

安宅の關は名のみして、海のおもて十餘町を望む。

月のみぞ花の安宅は海の雲

更科にて

姥捨やあだにかなしき夜半の月

十六夜　後の月

いさよひや闇より出る木々の影

後の月水よりも靑き雲井かな

見事なり薄雲はしる后の月

雁

はつかりや月のほとりより顯るゝ

雁金のかさなり落る山邊かな

うどん焚空や雨夜の雁の聲

落もはてず迷ひめぐるや雨の鴈

親しらずにて

荒磯や初雁渡るしほけぶり

湖水眺望　二句

夕ぐれや露にけぶれる鳰の海

山も岡も芙蓉に露を置がどし

鹿

夜もすがらなかで曉の鹿の聲

おのれのみとかなしく鹿の啼音哉

朝しかや櫟の林を出るこゑ

秋の夜や時雨る山の鹿の聲

題しらず

賣切の鮫のあたひや大唐籾

籾だねに餘所へ出かけの指圖哉

篠原にて實盛の魂をなぐさむ

命かな露よりもかろく月よりも白し

おなじく兜を見て

骨きえてかぶとに殘る秋の聲

井波なる臼波水

世に古し薄が中のいづみかな

忠度の塚にて

時なれやかぼちやの煮入なみだなる

菊

露の菊さはらば花もきえぬべし

しらぎくや心あまりてねたましき

夕風やさかりの菊に吹渡る

花と花さはりてきくのこぼれ哉

物入や屋形つくりて菊の花

白ぎくやあたりも倶にうるはしき

青竹にかゞやく菊の盛かな

菊の花こゝろ憎さに手折けり

おもふ事ありて

露もちれうきがうへなる野分の日

なま中にしらでもよきに秋のくれ

斧亭にて夜話

ながき夜や眠らば顔に墨ぬらん

半化房をたづねて

秋のあはれあるじはうらみ我は泣

越中の國井波なる所に浪花公、芭蕉翁の剃髪を埋み、碑を建給ひ、其角筆をとりて、はせを翁と書たり。なつかしき事のかぎりなければ

野ざらしの露よしぐれよ剃髪塚（おぞりつか）

おなじく此地に遊ぶ頃、長兵衞庵より眺望して

時雨來よ花も紅葉(も)有磯海

楚丁亭にて

したしみは花八重菊のかさね哉

龍石にわかるゝとて

秋ぞかなし後の世の友に契り置ん

紅葉

見めぐるやもみぢ靜に色まさる

谷川や紅葉の絕間水寒し

落葉さへ紅葉の山の高雄かな

黒部川をのぞむに、愛本の橋は雨岸の巖より刎上て高き事數十丈、川水白波をたゝみ、早き事眼をくらまし、音は心を寒かす。水烟四方に起て雨中の雲に交り、物凄くもいさぎよし。暫橋上にイて

橋高しもみぢを埋む雨のくも

あらし山にて

花や紅葉松も常ならず嵐山

大炊川にて

暮凄し金氣あふるゝ大ゐ川

北國病中吟

骨をたゝき肉をふるふか北の秋

詩雀亭にて

まじはりやもみぢ照そふ小盃

留別

愛で死ねといへどもきかず行秋や

洛西にさまよひあるき秋をおしむ

嵯峨にさへとゞまらぬ秋の行衞哉

老懷

秋のすゑ身もふるはれて虫の聲

行秋やあはれ非情の草も木も

冬之部

しぐれ

秋のあはれわすれんとすれば初時雨
はつしぐれやむやしばしのから錦
降そめてふりもさだめずはつ時雨
此ごろの野邊にまたるゝ時雨かな
吸物を出せば晴行しぐれ哉
ゆふべより降まさりつゝ小夜時雨
立臼のぐるりは晴し夕しぐれ
雨にわかち風にまぎるゝしぐれかな

旅行

きのふけふ我身になるゝ時雨哉

題混雜

十夜とてかしこき法の敎かな
あきなひや店へ酒出すゑびす講
はつしもや飯の湯あまき朝日和
霜の夜や鴫の羽がき尙さむし

冬ごもり

風あらき曉よりぞふゆごもり
夜〻〳〵のおもしろければ冬籠

はせを忌 三句

旅すがた時雨の鶴よ芭蕉翁
はせを忌に薄茶手向る寒さ哉
木がらしに古人荷葉の夢さむし

ちどり

消もせん有明月の濱ちどり

須磨にて

小夜千鳥羽風もいとふ聲の瘦

明石にて

一夜聞てほゐなきすまの千鳥かな
日は落て波をあかしの夕時雨

鉢たゝき

まぎるべき物音たえて鉢たゝき
兄弟賊同じ聲なるはちたゝき
はちたゝき少し踊て廻向かな
さゆる音の雲井にかよふ鉢叩

寒苦

霜さむや小鳥の足も地につかず

栗津原馬上の吟

こがらしや日も照り雪も吹ちらす

雪

よきほどを越えて雪ふる夕かな
雪ふかし野寺の鐘の聲のみに
白ゆきやあまり深さにのどかなる
枯杉の赤葉さま〳〵に雪うすし

立山眺望

立山や雪に分入鴈の影
立やまの雪白龍のたり哉

富士山眺望

白妙や雪もろともにふじの雲

大嶋に庵を結て

心細し雪やは我を降うづむ

那谷寺にて

なた寺や池の毘沙門松のゆき

留別

雪によばふ我聲跡に屆（とゞけ）かし

戀路のあはれなるも、貧のせつなるも、やまひのくるしきも、皆まとを顯（あらはす）のひとつにして、病

て死せざるは、戀て逢ざるに情ひとしく　加茂川の堤の家を賣たる貧女も、やまひにふせる武士に異なる事なけれ。予このごろ此ものに犯されて、これが爲にせめをたのしむ。

海老焼てやまひに遊ぶ寒の中

寒月

あかるさや風さへ吹ず寒の月

寒の月川風岩をけづるかな

大日寺にて

角立て居風呂のぞく雪の鹿

太中菴を送る

春來よとあふさか山のわかれかな

病中

月雪や酒を冬瓜に腫やまひ

年暮

とし忘れ廣野の鶴を見に行ん

ゐねぶれば誰やら起す年の暮

うき事はしらじ師走の嵩烏

白雪のつもる思ひに年くれぬ

我風狂いたづらに年くれて、軒の梅さへわすれがちなり。

ゆかしやと見れば見えけり除夜の梅

下の巻終

句と三百詠は、亡師樗良叟のほ句なり。いたづらにならん事をかなしみ、甲辰の春玄化堂天つちの集を著す。げにや此法師古里無爲庵をいでしより、大嶋に九尺四方のいほりをたて、月雪の夢をやぶり、はた南紀あたしかのさとにあだなるすみどをまうけ、二また庵となむ號。爰に三とせ四とせの春秋を過し、いづこかつゐの住家ならんと、この庵をも藁沓の如くすて、夫より洛木や町に寓居して、浮世の嵯峨の花もみぢをながめ、世を宇治川の螢見に、よしのゝ花のちるかとあやしみ、みやこの雨にうどん焚夜の雁を愛し、粟津の旅行に木がらしの姿をのこし、立山の雪に西行の魂をさぐり、雨にあらしに心をあそばし、句はあだにしてあだならずとやいはん。只情をかんじ實をうつし、利をいはず巧を求めず、艶をきらふ。花鳥にたはれては、句のおくれん事をなげき、萩薄に姿情のまさらん事をねがふ滑稽の道人なりけらし。嗚呼かりそめにいひ出せる平話さへもおかしかりし。まいて吟章におけるをや。是に洩たるもあまたあるらめ。されど、ものは只と、なふらざらんこそよけれと、此叟も常につぶやけるをもて、もらゝしてんやと、予同友のゆかりなれば荷擔して拙筆をとる。なまじゐにいはゞ拔舌の罪ふかく、かつは高風にたがふなめれば、三ツ二ツをあげて跋書す事しかり。

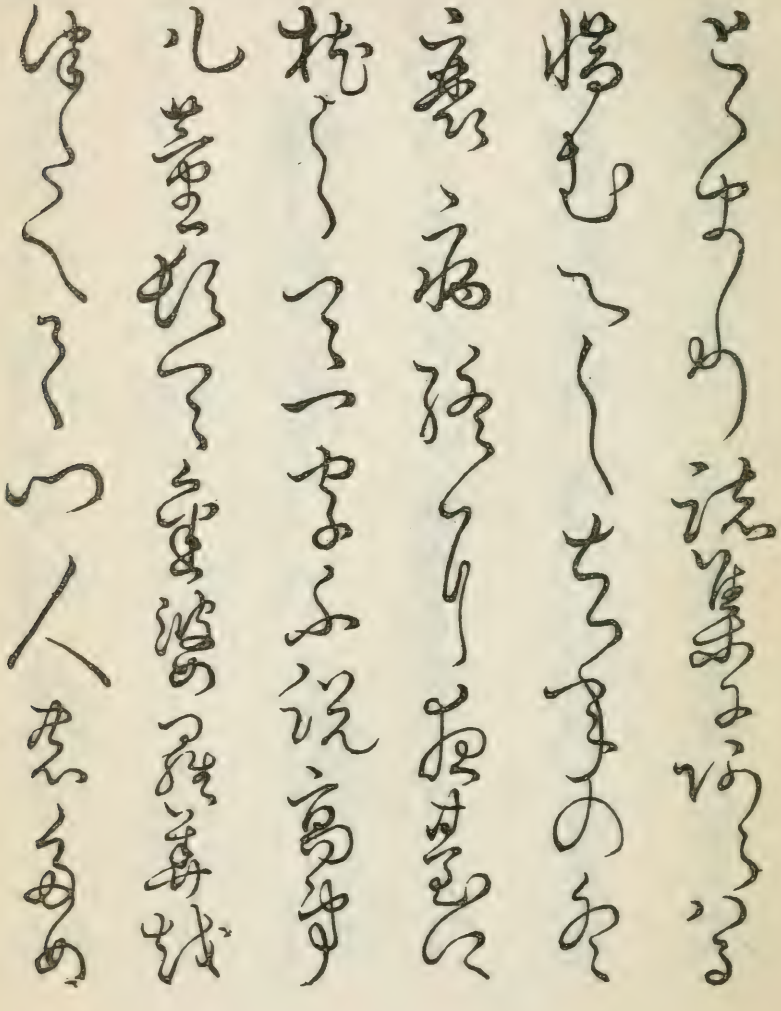
城南春風亭　秦　夫

蕪村句集

上

洛、夜半亭蕪村老人、とし頃海に對し、山に嘯き、花に眠、鳥に寐覺て、句を吐事十万八千、その秀たるものは、ひとの耳底にとゞま

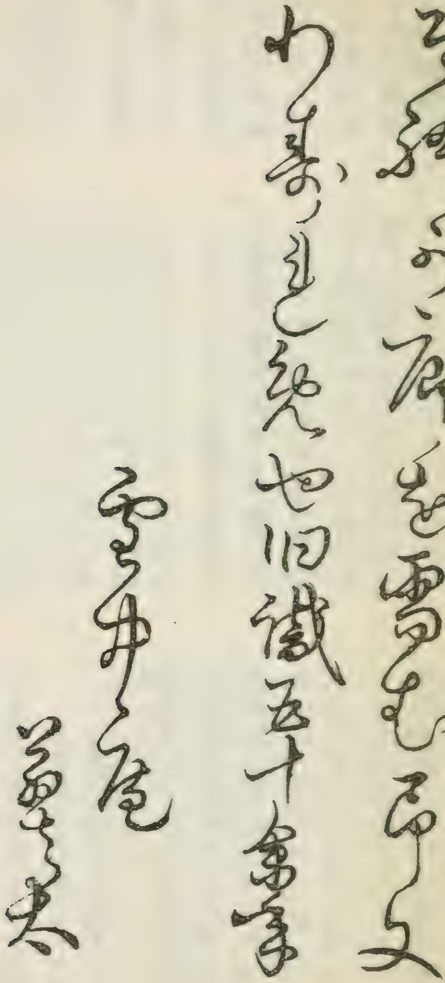
り、諸集にあらはる。惜むべし去年の冬衰病終に夜臺に枕して一字不說。高弟几董頓て金婆羅華をつたへて、門人のため一集



を撰、書肆佳棠にちからをあはせて、ことし小祥忌辰の永慕とす。はた予と亡児とまじはりひさしきまゝに、遥に武江に告て

それが序を需む。予又わすれめや舊識五十余年。

雪中庵
蓼　太



蕪村句集巻之上

几董著

春之部

ほうらいの山まつりせむ老の春
日の光今朝や鰯のかしらより
三椀の雑煮かゆるや長者ぶり

　離落

うぐひすのあちこちとするや小家がち
鶯の聲遠き日も暮にけり
うぐひすの麁相がましき初音哉
鶯を雀歟と見しそれも春

　畫賛

うぐひすや賢過たる軒の梅
鶯の日枝をうしろに高音哉
うぐひすや家内揃ふて飯時分
鶯や茨くゞりて高う飛ぶ
うぐひすの啼やちいさき口明て

　禁城春色曉蒼々

青柳や我大君の草か木か
若草に根をわすれたる柳かな
梅ちりてさびしく成しやなぎ哉
捨やらで柳さしけり雨のひま
青柳や芹生の里のせりの中
出る杭をうたうとしたりや柳かな

　草菴

二もとの梅に遅速を愛す哉
うめ折て皺手にかこつ薫かな
白梅や墨芳しき鴻臚館
しら梅や誰むかしより垣の外
舞〳〵の場もふけたり梅がもと
出べくとして出ずなりぬうめの宿
宿の梅折取ほどになりにけり

　摺子木で重箱を洗ふがごとくせよ
　とは、政の厳刻なるをいましめ
　給ふ。賢き御代の春にあふて

隈〳〵に殘る寒さやうめの花
しら梅や北野の茶店にすまひ取
うめ散や螺鈿こぼるゝ卓の上
梅咲て帯買ふ室の遊女かな
源八をわたりて梅のあるじ哉
燈を置かで人あるさまや梅が宿

　あらむつかしの假名遣ひやな。
　字儀（義）に害あらずんばアヽま
　ゝよ

梅咲ぬどれがむめやらうめじややら
しら梅の枯木にもどる月夜哉
小豆賣小家の梅のつぼみがち
梅遠近南すべく北すべく

　早春

なには女や京を寒がる御忌詣
御忌の鐘ひゞくや谷の氷まで
やぶ入の夢や小豆の煮るうち
藪いりやよそ目ながらの愛宕山

やぶいりや守袋をわすれ草

養父入や鉄漿もらひ來る傘の下

やぶ入は中山寺の男かな

人日

七くさや袴の紐の片むすび

これきりに徑盡たり芹の中

古寺やほうろく捨るせりの中

几董とわきのはまにあそびし時

筋違にふとん敷たり宵の春

肘白き僧のかり寢や宵の春

春の夜に尊き御所を守身かな

春月や印金堂の木間より

春夜聞レ琴

瀟湘の鴈のなみだやおぼろ月

折釘に烏帽子かけたり春の宿

公達に狐化たり宵の春

もろこしの詩客は千金の宵をゝしみ、我朝の歌人はむらさきの曙を賞す

春の夜や宵あけぼのゝ其中に

女倶して内裏拝まんおぼろ月

薬盗む女やは有おぼろ月

よき人を宿す小家や朧月

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

野望

草霞み水に聲なき日ぐれ哉

指南車を胡地に引去ル霞哉

高麗舟のよらで過ゆく霞かな

橋なくて日暮んとする春の水

春水や四條五條の橋の下

足よはのわたりて濁るはるの水

春の水背戸に田作らんとぞ思ふ

春の水にうたゝ鵜縄の稽古哉

虵を追ふ鱒のおもひや春の水

西の京にばけもの栖て、久しくあれ果たる家有けり。今は其さたなくて

春雨や人住ミて煙壁を洩る

物種の袋ぬらしつ春のあめ

春雨や身にふる頭巾着たりけり

春雨や小磯の小貝ぬるゝほど

瀧口に燈を呼聲や春の雨

ぬなは生ふ池の水かさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書ぬ身のあはれなる

はるさめや暮なんとしてけふも有

春雨やものがたりゆく簑と傘

柴漬の沈みもやらで春の雨

春雨やいざよふ月の海半

はるさめや綱が袂に小でうちん

ある隠士のもとにて

古庭に茶筌花さく椿かな

あぢきなや椿落うづむにはたずみ

玉人(タマスリ)の座右にひらくつばき哉

初午やその家〱の袖だゝみ

はつむまや鳥羽四塚の鷄の聲

初午や物種うりに日のあたる

苔とはなれもしらずよ蕗のとう

ある人のもとにて

命婦よりぼた餅たばす彼岸哉

そこ〳〵に京見過しぬ田にし賣

なつかしき津守の里や田螺あへ

静さに堪えて水澄たにしかな

腹立て鷲破田にしの戸を閉る

雁行て門田も遠くおもはるゝ

歸る雁田ごとの月の曇る夜に

きのふ去けふいに雁のなき夜哉

郊外

陽炎や名もしらぬ虫の白き飛

かげろふや簀に土をめづる人

芭蕉庵會

畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ

はた打よこちの在所の鐘が鳴

畑打や木間の寺の鐘供養

小原にて

春雨の中におぼろの清水哉

日くるゝに雉子うつ春の山邊かな

柴刈に砦を出るや雉の聲

紙山へ通ふ大工やきじの聲

兀山や何にかくれてきじのこゑ

むくと起て雉追ふ犬や寶でら

木瓜の陰に貌類ひ住むきゞす哉

琴心挑二美人一

妹が垣根さみせん草の花咲ぬ

紅梅や比丘より劣る比丘尼寺

紅梅の落花燃らむ馬の糞

垣越にものうちかたる接木哉

裏門の寺に逢着す蓬かな

畑うちや法三章の札のもと

きじ啼や草の武藏の八平氏

きじ鳴や坂を下りの驛舍

西山遲日

山鳥の尾をふむ春の入日哉

遲キ日や雉子の下りゐる橋の上

懷舊

遲き日のつもりて遠きむかしかな

春の海終日のたり〳〵哉

畠うつや鳥さへ啼ぬ山かげに

耕すや五石の粟のあるじ貌

飛かはすやたけごゝろや親雀

大津繪に糞落しゆく燕かな

大和路の宮もわら屋もつばめ哉

つばくらや水田の風に吹れ貌

燕啼て夜蛇をうつ小家哉

無爲庵會

曙のむらさきの幕や春の風

野ばかまの法師が旅や春のかぜ

片町にさらさ染るや春の風

のうれんに東風吹いせの出店哉

河内路や東風吹送る巫女が袖

几董が蛙合催しけるに

月に聞て蛙ながむる田面かな

閣に座して遠き蛙をきく夜哉

苗代の色紙に遊ぶかはづかな

日は日くれよ夜は夜明ヶよと啼蛙

連歌してもどる夜鳥羽の蛙哉

獨鈷鎌首水かけ論のかはづかな
うつゝなきつまみごゝろの胡蝶哉
曉の雨やすぐろの薄はら
よもすがら音なき雨や種俵
古河の流を引つ種おろし
しのゝめに小雨降出す焼野哉

加久夜長帶刀はさうなき數寄もの也けり。古曾部の入道はじめてのげざんに、引出物見すべきとて、錦の小袋をさがしもとめける風流などおもひ出つゝ、すずろ春色にたえず侍れば

山吹や井手を流るゝ鉋屑
居りたる舟を上ればすみれ哉
骨拾ふ人にしたしき菫かな
わらび野やいざ物焚ん枯つゝじ
野とゝもに焼る地藏のしきみ哉
つゝじ野やあらぬ所に麥畠
つゝじ咲て石移したる嬉しさよ
近道へ出てうれし野ゝ躑躅哉
つゝじ咲て片山里の飯白し
岩に腰我頼光のつゝじ哉

上巳

古雛やむかしの人の袖几帳
箱を出る貌わすれめや雛二對
たらちねのつまゝずありや雛の鼻
出代や春さめ〴〵と古葛籠
雛見世の灯を引ころや春の雨
雛祭る都はづれや桃の月
喰ふて寝て牛にならばや桃花
商人を吼る犬ありもゝの花
さくらより桃にしたしき小家哉
家中衆にさむしろ振ふもゝの宿
几巾きのふの空のありどころ
やぶいりのまたいで過ぬ几巾の糸

風入馬蹄輕

木の下が蹄のかぜや散さくら
手まくらの夢はかざしの櫻哉
剛力は徒(ただ)に見過ぬ山ざくら

曉臺が伏水嵯峨に遊べるに伴ひて

夜桃林を出てあかつき嵯峨の櫻人
暮んとす春をゝしほの山ざくら
錢買て入るやよしのゝ山ざくら

糸櫻賛

ゆき暮て雨もる宿やいとざくら
歌屑の松に吹れて山ざくら
まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻
嵯峨ひと日閑院樣のさくら哉
みよし野ゝちか道寒し山櫻
旅人の鼻まだ寒し初ざくら
海手より日は照つけて山ざくら

吉野

花に遠く櫻に近しよしの川
花に暮て我家遠き野道かな
花ちるやおもたき笈のうしろより
花の御能過て夜を泣ク浪花人
阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉

高野を下る日

かくれ住て花に眞田が謠かな
玉川に高野ゝ花や流れ去
なら道や當帰ばたけの花一木

日暮るゝほど嵐山を出る

嵯峨へ歸る人はいづこの花に暮し
花の香や嵯峨のともし火消る時

雨日嵐山にあそぶ

筏士の簑やあらしの花衣
傾城は後の世かけて花見かな
花に舞ゝで歸るさにくし白拍子
花に來て花にいねぶるいとま哉

なには人の木や町にやどりゐしを訪ひて

花を踏し草履も見えて朝寐哉
居風呂に後夜きく花のもどりかな
鶯のたま／＼啼や花の山
ねぶたさの春は御室の花よりぞ

一片花飛減却春

さくら狩美人の腹や減却す
花の幕兼好を覗く女あり

やごとなき御かたのかざりおろさせ給ひて、かゝるさびしき地にすみ給ひけるにや

小冠者出て花見る人を咎けり
にほひある衣も疊まず春の暮
誰ためのひくき枕ぞはるのくれ
閉帳の錦たれたり春の夕
うたゝ寢のさむれば春の日くれたり
春の夕たえなむとする香をつぐ
花ちりて木間の寺と成にけり
苗代や鞍馬の櫻ちりにけり
甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花
梨の花月に書よむ女あり
人なき日藤に培ふ法師かな
山もとに米蹈音や藤のはな
うつむけに春うちあけて藤の花

春景

菜の花や月は東に日は西に
なのはなや笋見ゆる小風呂敷
菜の花や鯨もよらず海暮ぬ

春夜盧會

爐塞て南元の風呂に入身哉
爐ふさぎや床は維摩に掛替る

暮春

ゆく春や逡巡として遲ざくら
行春や撰者をうらむ歌の主
洗足の盥も漏りてゆく春や
けふのみの春をあるひて仕舞けり

召波の別業に遊びて

行春や白き花見ゆ垣のひま
春をしむ座主の聯句に召れけり
行春やむらさきさむる筑波山
まだ長ふなる日に春の限りかな
ゆく春や横河へのぼるいもの神

ある人に句を乞はれて

返歌なき青女房よくれの春
春惜しむ宿やあふみの置火燵

夏之部

絹着せぬ家中ゆゝしき更衣
辻駕によき人のせつころもがへ
大兵の廿チあまりや更衣
ころもがへ印籠買に所化二人

阰宍

更衣野路の人はつかに白し
たのもしき矢數のぬしの袷哉
痩臑の毛に微風あり更衣
御手討の夫婦なりしを更衣

しれるおうなのもとより、ふるきゝぬのわたぬきたるに、ふみ添てをくりければ

橘のかごとがましきあはせかな
更衣いやしからざるはした錢
韜走る友切丸やほとゝぎす
ほとゝぎす平安城を筋違に
子規柩をつかむ雲間より
春過てなつかぬ鳥や杜鵑
ほとゝぎす待や都のそらだのめ

大德寺にて

時鳥繪になけ東四郎次郎
岩倉の狂女戀せよ子規
稻葉殿の御茶たぶ夜や時鳥

箱根山を越る日、みやこの友に申遣す

わするなよほどは雲助ほとゝぎす
歌なくてきぬ〲つらし時鳥
草の雨祭の車過てのち
牡丹散て打かさなりぬ二三片

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐んとす
寂として客の絶間のぼたん哉
地車のとゞろとひゞく牡丹かな
ちりて後おもかげにたつぼたん哉
牡丹切て氣のおとろひし夕かな
山蟻のあからさま也白牡丹
廣庭のぼたんや天の一方に

柴庵の主人、杜鵑布穀の二題を出していづれ一題に發句せよと有。されば雲井に走て王侯に交らむよりは、鶉衣被髪にして山中に名利をいとわんには。

狂居士の首にかけた歟鞨鼓鳥
閑居鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ
山人は人也かんこどりは鳥なりけり
食次(めしつぎ)の底たゝく音(ト)やかんこ鳥
足跡を字にもよまれず閑居鳥
うへ見えぬ笠置の森やかんこどり
むづかしき鳩の禮義やかんこどり
閑居鳥さくらの枝も踏で居る
かんこどり可もなく不可もなくね哉

探題 實盛

名のれ〱雨しのはらのほとゝぎす
かきつばたべたりと鳶のたれてける
宵〱の雨に音なし杜若

雲裡房に橋立に別る

みじか夜や六里の松に更たらず

鮎くれてよらで過行夜半の門
みじか夜や毛むしの上に露の玉
短夜や同心衆の川手水
みじか夜や枕にちかき銀屏風
短夜や芦間流るゝ蟹の泡
みじか夜や二尺落ゆく大井川

探題 老犬

みじか夜を眠らでもるや翁丸
短夜や浪うち際の捨篝
みじか夜やいとま給る白拍子
みじか夜や小見世明たる町はづれ

東都の人を大津の驛に送る

短夜や一ツあまりて志賀の松
みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窓
卯の花のこぼるゝ蕗の廣葉哉
來て見れば夕の櫻實となりぬ

圓位上人の所願にもそむきたる
身のいとかなしきさま也

實ざくらや死のこりたる菴の主
しのゝめや雲見えなくに蓼の雨
砂川や或は蓼を流れ越す
蓼の葉を此君と申せ雀鮓
三井寺や日は午にせまる若楓

あらたに居を卜したるに

釣しのぶ軒にさはらぬ住居かな
蚊屋を出て奈良を立ゆく若葉哉
窓の燈の梢にのぼる若葉哉
不二ひとつうづみ殘してわかばかな
絶頂の城たのもしき若葉かな
若葉して水白く麥黄ゞたり
山に添ふて小舟漕ゆく若ば哉
蛇を截てわたる谷路の若葉哉
蚊屋の内にほたる放してア、樂や
尼寺や能幮たるゝ宵月夜
あら涼し裾吹蚊屋も根なし草
蚊屋を出て内に居ぬ身の夜は明ぬ

よすがら三本樹の水樓に宴して

明やすき夜をかくしてや東山
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音くらし
うは風に蚊の流れゆく野河哉
蚊やりしてまいらす僧の坐右かな

嵯峨にて

三軒家大坂人のかやり哉
蚊の聲す忍冬の花の散ルたびに

諸子比枝の僧房に會す。余はい
たつきのために此行にもれぬ

蚊屋つりて翠微つくらむ家の内
若竹や橋本の遊女ありやなし
笋の藪の案内やをとしざし
若竹や夕日の嵯峨と成にけり
筍や甥の法師が寺とはん
けしの花籬すべくもあらぬ哉
垣越て蟇の避行かやりかな

嵯峨の雅因が閑を訪て

うは風に音なき麥を枕もと
長旅や駕なき村の麥ぼこり
病人の駕も過けり麥の秋
旅芝居穗麥がもとの鏡たて

洛東のはせを菴にて、目前のけしきを申出侍る

蕎麥あしき京をかくして穗麥哉

大魯几董などゝ布引瀧見にまかりてかへさ途中吟

狐火やいづこ河内の麥畠

丹波の加悦といふ所にて

春や穗麥が中の水車

夏河を越すうれしさよ手に草履

なれ過た鮓をあるじの遺恨哉

鮓桶をこれへと樹下に床几哉

鮓つけて誰待としもなき身哉

謝すしや彥根が城に雲かゝる

兎足三周の正當は文月中の四日なるを、卯月のけふにしとあて、追善いとなみけるに申遣す。

麥刈ぬ近道來ませ法の杖

かりそめに早百合生ヶたり谷の房

かの東皐にのぼれば

花いばら故鄕の路に似たる哉

路たえて香にせまり咲いばらかな

愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

洛東芭蕉菴落成日

耳目肺腸こゝに玉卷ばせを菴

青梅に眉あつめたる美人哉

青うめをうてばかつ散る靑葉かな

かはほりやむかひの女房こちを見る

夕風や水靑鷺の脛をうつ

たちばなのかはたれ時や古館

浪花の一本亭に訪れて

粽解て芦吹風の音聞ん

夏山や通ひなれたる若狹人

追　懷

椎の花人もすさめぬにほひ哉

水深く利鎌鳴らす眞菰刈

しのゝめや露の近江の麻畠

採蓴を謳ふ彥根の傖夫哉

藻の花や片われからの月もすむ

路邊の刈藻花さく宵の雨

虫のために害はれ落つ柿の花

浪華の舊國あるじゝて諸國の俳士を集めて圓山に會莚しける時

うき草を吹あつめてや花むしろ

さみだれのうつぼ柱や老が耳

湖へ富士をもどすやさつき雨

さみだれや大河を前に家二軒

さみだれや佛の花を捨に出る

小田原で合羽買たり皐月雨

さみだれの大井越たるかしこさよ

さつき雨田毎の闇となりにけり

青飯法師にはじめて逢けるに舊識のごとくかたり合て

水桶にうなづきあふや瓜茄子

いづこより礫うちけむ夏木立

酒十駄ゆりもて行や夏こだち

おろし置笈に地震（ナヘフル）なつ野哉

行〻てこゝに行〻夏野かな

みちのくの吾友に草扉をたゝかれて

葉がくれの枕さがせよ瓜ばたけ
離別れたる身を踏込で田植哉
綰得て歸る田植の男かな
狩衣の袖のうら這ふほたる哉

一書生の閑窓に書す

學問は尻からぬけるほたる哉
でゝむしやその角文字のにじり書
蝸牛の住はてし宿やうつせ貝
こもり居て雨うたがふや蝸牛
雪信が蠅うち拂ふ硯かな

畫賛

こと葉多く早瓜くるゝ女かな
關の戸に水雞のそら音なかりけり
蟒の鼾も合歡の葉陰哉
蠅いとふ身を古郷に晝寢かな

春泥舍會、東寺山吹にて有けるに

誰住て樒流るゝ鵜川哉
しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し
老なりし鵜飼ことしは見えぬ哉

殿原の名古屋貌なる鵜川かな
鵜舟漕ぐ水窮まれば照射哉
夏百日墨もゆがまぬこゝろかな
日を以て數ふる筆の夏書哉

慶子病後不二の夢見けるに申遣す

降かへて日枝を廿チの化粧かな

馬南剃髪、三本樹にて

脱かゆる梢もせみの小河哉
石工の鑿冷したる清水かな
落合ふて音なくなれる清水哉

丸山主水がちいさき龜を寫したるに賛せよとのぞみければ、仕官懸命の地に榮利をもとめむよりは、しかじ、尾を泥中に曳んには

錢龜や青砥もしらぬ山清水
二人してむすべば濁る清水哉
我宿にいかに引べきしみづ哉
草いきれ人死居ると札の立

晝がほやこの道唐の三十里
ゆふがほや黄に咲たるも有べかり
夕貌の花嚙む猫や餘所ごゝろ

律院を覗きて

飛石も三ツ四ツ蓮のうき葉哉
蓮の香や水をはなるゝ莖二寸
吹亮の浮葉にけぶる蓮見哉
白蓮を切らんとぞおもふ僧のさま
河骨の二もとさくや雨の中

座主のみこの、あなかまとて、やをらたち入給ひける、いとたうとくて

羅に遮る蓮のにほひ哉

夏日　三句

雨乞に曇る國司のなみだ哉
負腹の守敏も降らす旱かな
大粒な雨は祈の奇特かな
夜水とる里人の聲や夏の月
堂守の小草ながめつ夏の月
ぬけがけの淺瀬わたるや夏の月

河童の戀する宿や夏の月
瓜小家の月にやおはす隱君子
雷に小家は焼れて瓜の花
あだ花は雨にうたれて瓜ばたけ

あるかたにて
弓取の帶の細さよたかむしろ
細脛に夕風さはる簟

箱根にて
あま酒の地獄もちかし箱根山
御佛に晝供へけりひと夜酒
愚痴無智のあま酒造る松が岡

寓居
半日の閑を榎やせみの聲
大佛のあなた宮様せみの聲
蟬鳴や行者の過る午の刻
蟬啼や僧正坊のゆあみ時
かけ香や何にとゞまるせみ衣
かけ香や啞の娘のひとゝなり
かけ香やわすれ貌なる袖だゝみ

雁宕久しくおとづれせざりければ
有と見えて扇の裏繪おぼつかな
とかくして笠になしつる扇哉
繪團のそれも淸十郎にお夏かな
手すさびの團畫かん草の汁
渡し呼草のあなたの扇哉

七日
祇園會や眞葛原の風かほる
ぎをん會や僧の訪よる梶が許

加茂の西岸に榻を下して
丈山の口が過たり夕すゞみ
網打の見えずなり行涼かな
すゞしさや都を竪にながれ川

葛岡が魂をまねく
河床や蓮からまたぐ便にも
川床に憎き法師の立居かな
涼しさや鐘をはなるゝかねの聲

鴨河にあそぶ
川狩や楼上の人の見しり貌
雨後の月誰ッや夜ぶりの脛白き
月に對す君に唐網の水煙
川狩や歸去來といふ聲す也

雙林寺獨吟千句
ゆふだちや筆もかはかず一千言
白雨や門脇どのゝ人だまり
夕だちや草葉をつかむむら雀

施米　水粉
腹あしき僧こぼし行施米哉
水の粉のきのふに盡ぬ草の菴
水の粉やあるじかしこき後家の君

旅意
廿日路の背中にたつや雲の峰
揚州の津も見えそめて雲の峰
雨と成戀はしらじな雲の峯
雲のみね四澤の水の涸てより
飛蟻とぶや富士の裾野ゝ小家より
日歸りの兀山越るあつさ哉
居りたる舟に寐てゐる暑かな

探題　寄扇武者

暑き日の刀にかゆる扇かな

宗鑑に葛水給ふ大臣かな

葛を得て清水に遠きうらみ哉

端居して妻子を避る暑かな

花頂山に会して探題

龐居士はかたい親父よ竹婦人

虫干や甥の僧訪ふ東大寺

ところてん逆しまに銀河三千尺

宮島

薫風やともしたてかねついつくしま

裸身に神うつりませ夏神楽

つくばふた禰宜でことすむ御祓哉

灸のない背中流すや夏はらへ

出水の加茂に橋なし夏祓

鴨河のほとりなる田中といへる里にて

ゆふがほに秋風そよぐみそぎ川

蕪村句集上巻終



蕪村句集巻之下

几董著

秋之部

秋来ぬと合点させたる嚔かな

秋たつや何におどろく陰陽師

貧乏に追つかれけりけさの秋

秋立や素湯香しき施薬院

初秋や餘所の灯見ゆる宵のほど

秋夜閑窓のもとに指を屈して世になき友を算ふ

とうろうを三たびかゝげぬ露ながら

高燈籠滅なんとするあまたゝび

七夕

梶の葉を朗詠集のしほり哉

恋さまざま願の糸も白きより

つと入やしる人に逢ふ拍子ぬけ

あぢきなや蚊屋の補綴魂祭

魂棚をほどけばもとの座敷哉

十六日の夕加茂河の辺りにあそぶ

大文字やあふみの空もたゞならね

相阿弥の宵寝起すや大文字

摂待にきせるわすれて西へ行

英一蝶が書に賛望れて

四五人に月落かゝるおどり哉

ひたと犬の啼町越えて踊かな

葎のさそひ合せておどり哉

かな河浦にて

いな妻や八丈かけてきくた摺

いな妻の一網うつやいせのうみ

いなづまや堅田泊りの宵の空

稻妻にこぼるゝ音や竹の露

　　春夜に句をとはれて

日ごろ中よくて恥あるすまひ哉

飛入の力者あやしき角力かな

夕露や伏見の角力ちりぢりに

負まじき角力を寢ものがたり哉

　　遊行柳のもとにて

柳散淸水涸石處々

小狐の何にむせけむ小萩はら

薄見つ萩やなからむ此ほとり

山は暮て野は黄昏の薄哉

女郎花そも莖ながら花ながら

里人はさともおもはじをみなへし

　　永西法師はさうなきすきもの也し。世を去りてふたとせに成ければ、

秋ふたつうきをますほの薄哉

茨老すゝき痩萩おぼつかな

猪の露折かけてをみなへし

白萩を春わかちとるちぎり哉

垣ね潜る薄ひともと眞蘇枋なる

きちかうも見ゆる花屋が持佛堂

　　澗水湛如藍

朝がほや一輪深き淵のいろ

朝貌や手拭のはしの藍をかこつ

夜の蘭香にかくれてや花白し

蘭夕狐のくれし奇楠を炷む

　　辨慶贊

花すゝきひと夜はなびけ武藏坊

しら露やさつ男の胸毛ぬるゝほど

ものゝふの露はらひ行弰かな

　　妙義山

立去ル事一里眉毛に秋の峰寒し

白露や茨の刺にひとつづゝ

狩倉の露におもたきうつぼ哉

市人の物うちかたる露の中

身にしむや横川のきぬをすます時

身にしむや亡妻の櫛を閨に踏

朝露やまだ霜しらぬ髮の落

　　葛の棚葉しげく軒端を覆ひければ晝さへいとくらきに

葛の葉のうらみ貌なる細雨哉

朝貌にうすきゆかりの木槿哉

朝霧や村千軒の市の音

朝霧や杭打音丁々たり

もの焚て花火に遠きかゝり舟

花火せよ淀の御茶屋の夕月夜

八朔や扨明日よりは二日月

初汐に追れてのぼる小魚哉

　　となせの瀧

水一筋月よりうつす桂河

虫賣のかごとがましき朝寢哉

むし啼や河内通ひの小でうちん

みのむしや秋ひだるしと鳴なめり

蘆て下葉ゆかしきたばこ哉
小百姓鶉(鶉カ)を取老となりにけり
鬼灯や清原の女が生寫し
日は斜關屋の鎗にとんぼかな

良夜とふかたもなくに訪來る人もなければ

中〳〵にひとりあればぞ月を友
名月にゑのころ捨る下部哉
身の闇の頭巾も通る月見かな
月天心貧しき町を通りけり

忠則古墳一樹の松に倚れり

月今宵松にかへたるやどり哉
名月や雨を溜たる池のうへ
名月やうさぎのわたる諏訪の海

探題　雨月

旅人よ笠嶋かたれ雨の月
月今宵あるじの翁舞出よ
仲丸の魂祭せむけふの月
名月や夜は人住ぬ峰の茶屋
山の端や海を離るゝ月も今
庵の月主をとへば芋掘に
かつまたの池は闇也けふの月

鯉長が醉るや嵬峩として玉山のまさに崩れんとするがごとし其佛今なを眼中に在て

月見ればなみだに碎く千〻の玉
花守は野守に劣るけふの月

雨のいのりのむかしをおもひて

名月や神泉苑の魚躍る

探題　雁字

一行の鴈や端山に月を印す
紀の路にも下りず夜を行鴈ひとつ

雨中の鹿といふ題を得て

雨の鹿戀に朽ぬは角ばかり
鹿寒し角も身に添ふ枯木哉
鹿啼てはゝその木末あれにけり
茶畠の霜夜は早し鹿の聲
三度啼て聞えずなりぬ鹿の聲

殘照亭晩望

鹿ながら山影門に入日哉

ある山寺へ鹿聞にまかりけるに茶を汲沙彌の夜すがらねぶらで有ければ晋子が狂句をおもひ出て

鹿の聲小坊主に角なかりけり
折あしく門こそ叩け鹿の聲

老　懷

去年より又さびしひぞ秋の暮
父母のことのみおもふ秋のくれ
あちらむきに鴫も立たり秋の暮

猿丸太夫贊

我がてに我をまねくや秋の暮
門を出れば我も行人秋のくれ
弓取に歌とはれけり秋の暮
淋し身に杖わすれたり秋の暮

故人に別る

木曾路行ていざとしよらん秋ひとり
かなしさや釣の糸吹あきの風
秋の風書むしばまず成にけり

金屏の羅は誰があきのかぜ

秋風や干魚かけたる濱庇

古人移竹をおもふ

去來去移竹移りぬいく秋ぞ

順禮の目鼻書ゆくふくべ哉

腹の中へ歯はぬけけらし種ふくべ

四十にみたずして死んこそめやすけれ

あだ花にかゝる恥なし種ふくべ

人の世に尻を居へたるふくべ哉

我足にかうべぬかるゝ案山子哉

武者繪賛

御所柹にたのまれ貌のかゝし哉

姓名は何子か號は案山子哉

三輪の田に頭巾着て居るかゝしかな

山陰や誰呼子鳥引板の音

雲裡房、つくしへ旅だつとて我に同行をすゝめけるに、えゆかざりければ

秋かぜのうごかして行案山子哉

水落て細脛高きかゞし哉

故郷や酒はあしくとそばの花

宮城野ゝ萩更科の蕎麥にいづれ

道のべや手よりこぼれて蕎麥花

落る日のくゝりて染る蕎麥の莖

題白川

黒谷の隣はしろしそばのはな

なつかしきしをにがもとの野菊哉

綿つみやたばこの花を見て休む

三徑の十歩に盡て蓼の花

甲斐がねや穂蓼の上を塩車

沙魚釣の小舟漕なる窓の前

百日の鯉切盡て鱸かな

釣上し鱸の巨口玉や吐

ひとり大原野ゝほとり吟行しけるに、田疇荒蕪して千ぐさの下葉霜をしのぎ、つれなき秋の日影をたのみて、はつかに花の咲出たるなど、ことにあはれ深し。

水かれ〴〵蓼歟あらぬ歟蕎麥歟否歟

小鳥來る音うれしさよ板びさし

此森もとかく過けり鵙おどし

山雀や榧の老木に寝にもどる

竹溪法師丹後へ下るに

たつ鴫に眠る鴫ありふた法師

鴫立て秋天ひきゝながめ哉

わたり鳥こゝをせにせん寺林

わたり鳥雲の機手のにしき哉

瀬田降て志賀の夕日や江鮭(あめのうを)

駒迎ことにゆゝしや額白

秋の暮辻の地藏に油さす

秋の燈やゆかしき奈良の道具市

追剝を弟子に剃けり秋の旅

秋雨や水底の草を蹈わたる

丸山氏が黒き犬を畫たるに讃せよと望みければ

おのが身の闇より吼て夜半の秋

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋

枕上秋の夜を守る刀かな

身の秋や今宵をしのぶ翌もあり

我則あるじして會催しけるに

小路行ばちかく聞ゆるきぬた哉
うき人に手をうたれたる砧かな
遠近をちこちとうつきぬた哉
うき我に砧うて今は又止ね
石を打狐守夜のきぬた哉
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな
門前の老婆子薪貪る野分かな
麓なる我蕎麦存す野分哉
市人のよべ問かはすのはきかな
客僧の二階下り來る野分哉

三井の山上より三上山を望て

秋寒し藤太が鏑ひゞく時
角文字のいざ月もよし牛祭
うら枯やからきめ見つる漆の樹
物書に葉うらにめづる芭蕉哉

斗文、父の八十の賀をことぶくに申贈る

稲かけて風もひかさじ老の松

嘯澤

水かれて池のひづみや後の月
山茶花の木間見せけり後の月
泊る氣でひとり來ませり十三夜
十月の今宵はしぐれ後の月

十三夜の月を賞することは我日のもとの風流也けり

唐人よ此花過てのちの月

山家の菊見にまかりけるに、あるじの翁、紙硯をとうでゝほ句もとめければ、

日でりどし伏水の小菊もらひけり
きくの露受て硯のいのち哉
いでさらば投壺まいらせん菊の花

菊に古笠を覆たる畫に

白菊や呉山の雪を笠の下
手燭して色失へる黄菊哉
村百戸菊なき門も見えぬ哉
あさましき桃の落葉よ菊畠
菊作り汝は菊の奴かな

高華

西行の夜具も出て有紅葉哉
ひつぢ田に紅葉ちりかゝる夕日かな
谷水の盡てこがるゝもみぢ哉
よらで過る藤澤寺のもみぢ哉
むら紅葉會津商人なつかしき

須磨寺にて

笛の音に波もより來る須磨の秋
雨乞の小町が果やをとし水
村〳〵の寢ごゝろ更ぬ落し水
毛見の衆の舟さし下せ最上川
新米の坂田は早しもがみ河
落穂拾ひ日あたる方へあゆみ行

山家

猿どのゝ夜寒訪ゆく兎かな
壁隣ものごとつかす夜さむ哉
缺〳〵て月もなくなる夜寒哉
起て居てもう寢たといふ夜寒哉
夜を寒み小冠者臥たり北枕

長き夜や通夜の連歌のこぼれ月

山鳥の枝踏かゆる夜長哉

子鼠のちゝよと啼や夜半の秋

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

秋はものゝそばの不作もなつかしき

幻住菴に曉臺が旅寢せしを訪ひて

丸盆の椎にむかしの音聞む

椎拾ふ横河の兒のいとま哉

探題

餉(かれいひ)にからき涙やとうがらし

倭して蔵め蓄へぬ番椒

折くるゝ心こぼさじ梅もどき

梅もどき折や念珠をかけながら

にしき木を立(たて)ぬ垣根や番椒

稚子の寺なつかしむいてう哉

几董と鳴瀧に遊ぶ

茸狩や頭を擧れば峰の月

茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ

うれしさの箕にあまりたるむかご哉

鬼貫や新酒の中の貧に處ス

栗備ふ惠心の作の彌陀佛

にしき木は吹たふされて鷄頭花

ある方にて

くれの秋有職(いうそく)の人は宿に在(おは)す

いさゝかなを價(あたひ)いめ乞れぬ暮の秋

行秋やよき衣きたる掛ッ人

跡かくす師の行方や暮の秋

洛東ばせを庵にて

冬ちかし時雨の雲もこゝよりぞ

冬之部

みのむしの得たりかしこし初時雨

初しぐれ眉に烏帽子の雫哉

楠の根を靜にぬらす時雨哉

時雨るゝや簑買ふ人のまことより

しぐるゝや鼠のわたる琴の上

古傘の婆娑と月夜の時雨哉

しぐるゝや我も古人の夜に似たる

夕時雨蟇ひそみ音に愁ふ哉

人〻高尾の山ぶみして一枝の丹楓を贈れり。頃は神無月十日まり、老葉霜に堪えず、やがてはら〻と打ちりたる、ことにあはれふかし。

爐に燒てけぶりを握る紅葉哉

初冬や日和になりし京はづれ

居眠りて我にかくれん冬ごもり

冬ごもり壁をこゝろの山に倚

冬ごもり燈下に書すとかゝれたり

勝手まで誰が妻子ぞ冬ごもり

冬ごもり佛にうときこゝろ哉

東山の麓に住どころトしたる一音法師に申遣す

嵐雪とふとん引合ふ侘寢かな

いばりせしふとんほしたり須磨の里

古郷にひと夜は更るふとんかな
かしらへやかけん裾へや古衾
大兵のかり寝あはれむ蒲團哉
虎の尾を踏つゝ裾にふとんかな

十夜

あなたうと茶もだぶ〳〵と十夜哉

浪花遊行寺にてばせを忌をいとなみける二柳庵に

簑笠の衣鉢つたへて時雨哉
夜興引や犬のとがむる塀の内
枇杷の花鳥もすさめず日くれたり
茶の花や白にも黄にもおぼつかな
茶のはなや石をめぐりて路を取
咲べくもおもはであるを石蕗花

几董にいざなはれて、岡崎なる下村氏の別業に遊びて

口切や五山衆なんどほのめきて
口切や小城下ながら只ならね
爐びらきや雪中庵の霰酒
狐火や髑髏に雨のたまる夜に

一條もどり橋のもとに柳風呂といふ娼家有。ある夜、太祇とともに此樓にのぼりて

羽織着て綱もきく夜や川ちどり
風雲の夜すがら月の千鳥哉
磯ちどり足をぬらして遊びけり
打よする浪や千鳥の横ありき
水鳥や百姓ながら弓矢取
里過て古江に鴛を見付たり
水鳥や舟に菜を洗ふ女有
加茂人の火を燧(キル)音や小夜衛

泰里が東武に歸を送る

嵯峨寒しいざ先くだれ都鳥
早梅や御室の里の賣屋敷
宗任に水仙見せよ神無月

うかぶ瀬に遊びて、むかし栢莚が此所にての狂句を思ひ出て、其風調に倣ふ。

小春凪眞帆も七合五勺かな
冬の梅きのふやちりぬ石の上
千葉どのゝ假家引ヶたり枯尾花
たんぽゝのわすれ花あり路の霜

老女の火をふき居る畫に

小野ゝ炭匂ふ火桶のあなめ哉
われぬべき年もありしを古火桶
うづみ火や終には煮る鍋のもの
炭うりに鏡見せたる女かな
裾に置て心に遠き火桶かな
炭團法師火桶の穴より覗ひけり

讃州高松にしばらく旅やどりしけるに、あるじ夫婦の隔なきこころざしのうれしさに、けふや其家を立出るとて

巨燵出て早あしもとの野河哉
腰ぬけの妻うつくしき巨燵かな
沙彌律師ころり〳〵とふすま哉
鉦の音貧しさよ夜半の冬
飛彈山の質屋とざしぬ夜半の冬

春夜樓會

むさゝびの小鳥はみ居る枯野哉

大とこの糞ひりおはすかれの哉
水鳥や枯木の中に駕二挺
子を捨る藪さへなくて枯野哉
草枯て狐の飛脚通りけり
狐火の燃へつくばかり枯尾花
息杖に石の火を見る枯野哉

金福寺芭蕉翁墓

我も死して碑に邊せむ枯尾花
馬の尾にいばらのかゝる枯野哉
蕭條として石に日の入枯野かな

大魯が病の復常をいのる

痩脛や病より起ッ鶴寒し
待人の足音遠き落葉哉
菊は黄に雨疎かに落葉かな
古寺の藤あさましき落葉哉
往來待て吹田(すいた)をわたる落ば哉

蓬葉を拾ひて紙に換たるもろこしの貧しき人も、腹中の書には富るなるべし。さればやまとうたのしげきこととのはのうち散たるをかきあつめて捨ざるは、我はいかいの道なるべし。

もしほ草柿のもと成落葉さへ
西吹ヶば東にたまる落葉かな
鰒汁の宿赤〳〵と燈しけり
ふぐ汁の我活きて居る寢覺哉
秋風の呉人はしらじふぐと汁
音なせそ叩くは僧よ鰒じる
河豚の面世上の人を白眼ム哉
甚うつて鰒になき世の友とはむ
袴着て鰒喰ふて居る町人よ

鶴英は一向宗にて、信ふかきおのこ也けり。愛子を失ひて悲しびに堪えず、朝暮佛につかふまつりて、讀經をこたらざりければ、

らうそくの涙氷るや夜の鶴

大魯が兵庫の隱栖を、几董とゝもに訪ひて人〻と海邊を吟行しけるに、

凩に鰓吹るゝや鉤の魚
こがらしやひたとつまづく戻り馬
こがらしや畠の小石目に見ゆる
こがらしや何に世わたる家五軒
凩やこの頃までは荻の風
木枯や鐘に小石を吹あてる
こがらしや岩に裂行水の聲

晉子三十三回

擂盆のみそみぐりや寺の霜
麥蒔や百まで生る貌ばかり
初雪や消ればぞ又草の露
初雪の底を叩ば竹の月

題 七歩詩

雪折や雪を湯に焚釜の下
雪の暮鴫はもどつて居るような
うづみ火や我かくれ家も雪の中
いざ雪見容(カタチヅクリ)す蓑と笠
鍋さげて淀の小橋を雪の人
雪白し加茂の氏人馬でうて
雪折やよし野ゝ夢のさめる時

漁家寒し酒に頭の雪を焼
朝霜や室の揚屋の納豆汁
入道のよゝとまいりぬ納豆汁
朝霜や劒を握るつるべ縄
宿かさぬ火影や雪の家つゞき
霜百里舟中に我月を領す

几董と浪華より歸さ

故人曉臺、余が寒爐を訪はずして歸郷す。知、是東山西野に吟行して、荏苒として晦朔の代謝をしらず、歸期のせまりたるをいかむともせざる成べし。

牙寒き梁の月の鼠かな

陶弘景賛

山中の相雪中のぼたん哉
町はづれいでや頭巾は小風呂敷
引かふて耳をあはれむ頭巾哉
みどり子の頭巾眉深きいとをしみ
めし粒で紙子の破れふたぎけり
此冬や紙衣着ようとおもひけり
老を山へ捨し世も有に紙子哉
我頭巾うき世のさまに似ずもがな
さゝめごと頭巾にかづく羽折哉
頭巾着て聲こもりくの初瀬法師

題戀

皃見せや夜着をはなるゝ妹が許
かほ見せや既うき世の飯時分

かの曉の霜に跡つけたる晋子が信に背きて嵐雪が懶に倣ふ

皃見せやふとんをまくる東山
新右衛門蛇足を誘ふ冬至かな
書記典主故園に遊ぶ冬至哉
水仙や寒き都のこゝかしこ
水仙や美人かうべをいたむらし
水仙や鵙の草茎花咲ぬ
冬ざれや小鳥のあさる韮畠
霜あれて韮を刈取翁かな
葱買て枯木の中を歸りけり
ひともじの北へ枯臥古葉哉
易水にねぶか流るゝ寒かな
皿を踏鼠の音のさむさ哉

郊外

靜なるかしの木ばらや冬の月
冬こだち月に隣をわすれたり

この句は夢想に感ぜし也

同二句

二村に質屋一軒冬こだち
このむらの人は猿也冬木だち
鴛に美を盡してや冬木立
斧入て香におどろくや冬こだち
鳴らし來て我夜あはれめ鉢叩
一瓢のいんで寢よやれ鉢たゝき
木のはしの坊主のはしやはちたゝき
ゆふがほのそれは髑髏歟鉢敲
花に表太雪に君あり鉢叩
西念はもう寢た里をはち敲

御火焚といふ題にて

御火焚や霜うつくしき京の町

御火たきや犬も中〳〵そゞろ貌
足袋はいて寢る夜ものうき夢見哉
宿かせと刀投出す雪吹哉
寺寒く樒はみこぼす鼠かな
杜父魚のえものすくなき翁哉

貧居八詠

愚に耐よと窓を暗す雪の竹
かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥
我のみの柴折くべるそば湯哉
紙ぶすま折目正しくあはれ也
氷る燈の油うかゞふ鼠かな
炭取のひさご火桶に並び居る
我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴ラす
齒豁(アラハ)に筆の氷を嚙ム夜哉
一しきり矢種の盡るあられ哉
玉霰漂母が鍋をみだれうつ
古池に草履沈ミてみぞれ哉
山水の減るほど減りて氷かな

倣二素堂一

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり
から鮭に腰する市の翁かな
からざけや帯刀殿の臺所
詫禪師乾鮭に白頭の吟を彫

鐵骨といふは梅の枝を寫する書法也

寒梅や火の迸(ホトバシ)る鐵(マガネ)より
寒梅を手折響や老が肘

感偶

寒月や門なき寺の天高し
寒月や鋸岩のあからさま
寒月や枯木の中の竹三竿
寒月や衆徒の群議の過て後
寒聲や古うた謡ふ誰が子ぞ
細道になり行聲や寒念佛
極樂の近道いくつ寒念佛
寒垢離や上の町まで來たりけり
寒ごりやいざまいりぞふ一手桶

几董判句合

鯨賣市に刀を皷(ナラ)しけり

しづ〳〵と五徳居えけり藥喰
藥喰隣の亭主箸持參
くすり喰人に語るな鹿ヶ谷
妻や子の寢貌も見えつ藥喰
客僧の狸寢入やくすり喰

春泥舍に遊びて

靈運もこよひはゆるせとし忘
にしき木の立聞もなき雜魚寢哉
おとろひや小枝も捨ぬとし木樵
うぐひすの啼や師走の羅生門
御經に似てゆかしさよ古暦
としひとつ積るや雪の小町寺
ゆく年の瀬田を廻るや金飛脚
とし守夜老はたうとく見られたり

題沓

石公へ五百目もどすとしのくれ
とし守や乾鮭の太刀鱈の棒

笠着てわらぢはきながら

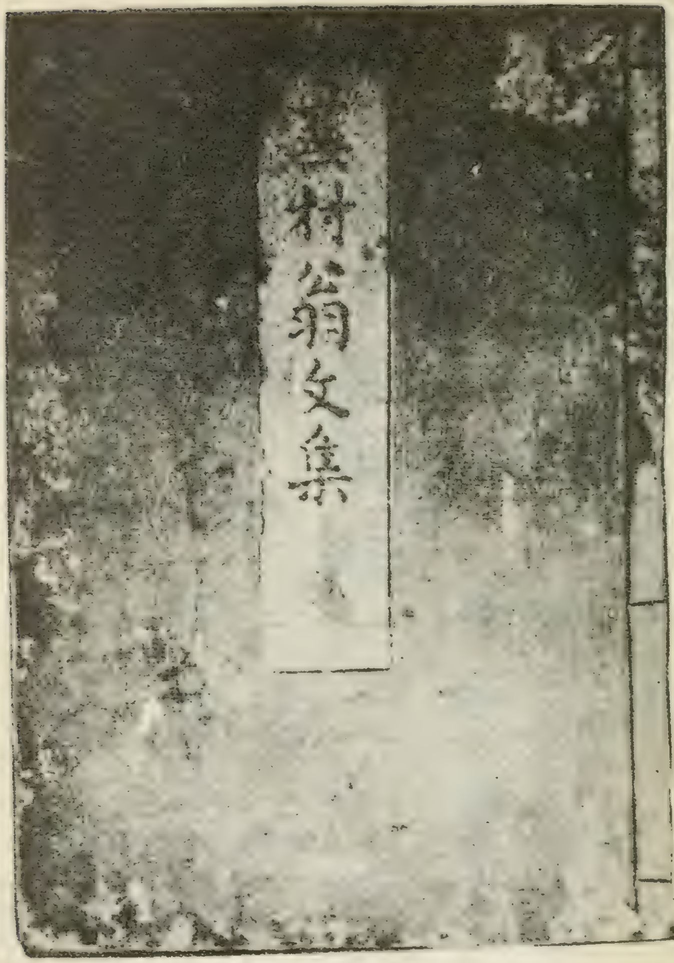
芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず

蕪村句集下巻終

夜半翁常に いへらく、發句集は なくてもありなんかし、世に名だゝる人の 其句集出て、日來の聲譽を減ずるもの多し、況汎ゝの輩をやと。しかるに門派に一人の書肆ありて、あながちに句集を梓にちりばめむことをもとむ、翁もとよりゆるさず。翁滅後にいたりて、二三子が書とめおけるをあつめて、是を前後の二編に撰分ヶて、小祥・大祥二忌の追福のためとすと也。其志又淺からずといふべし。されば句集を世に弘うすることは、あなかしこ翁の本意にはあらず、全く是をもて此翁を議すべからずといふ事を田福しるす。

天明四甲辰之冬十二月

京寺町通五條上ル町
書肆　汲古堂　業佳

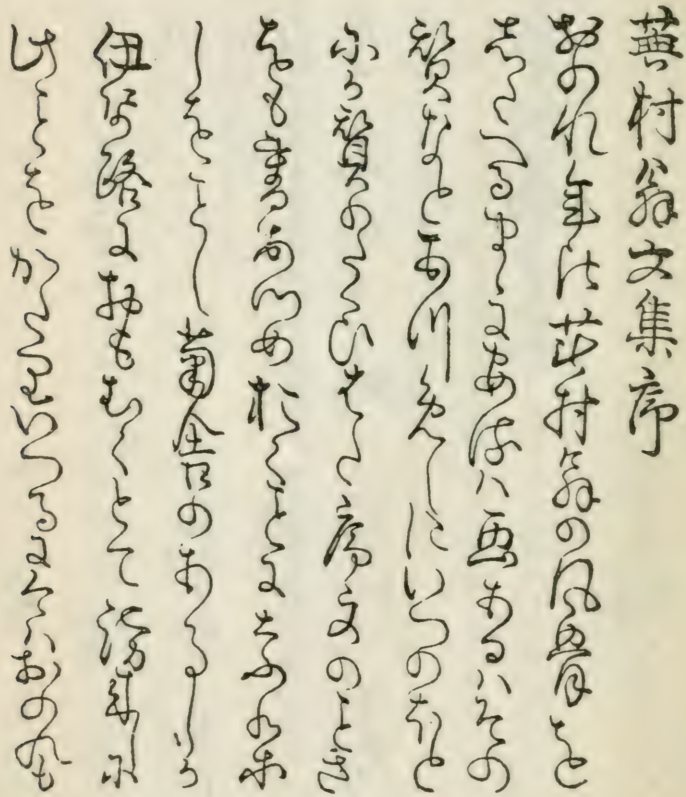

蕪村翁文集

蕪村文集乾

一歳旦辞
一楼望辞
一歳旦説
一芭蕉堂再興記
一馬堤曲
一土器賣賛
一俳仙賛
一賀辞
一追慕辞
一夢説
一宇治行
一螺盃銘
一翁の賛
一狐の法は、よ
化さる頼人

蕪村翁文集序

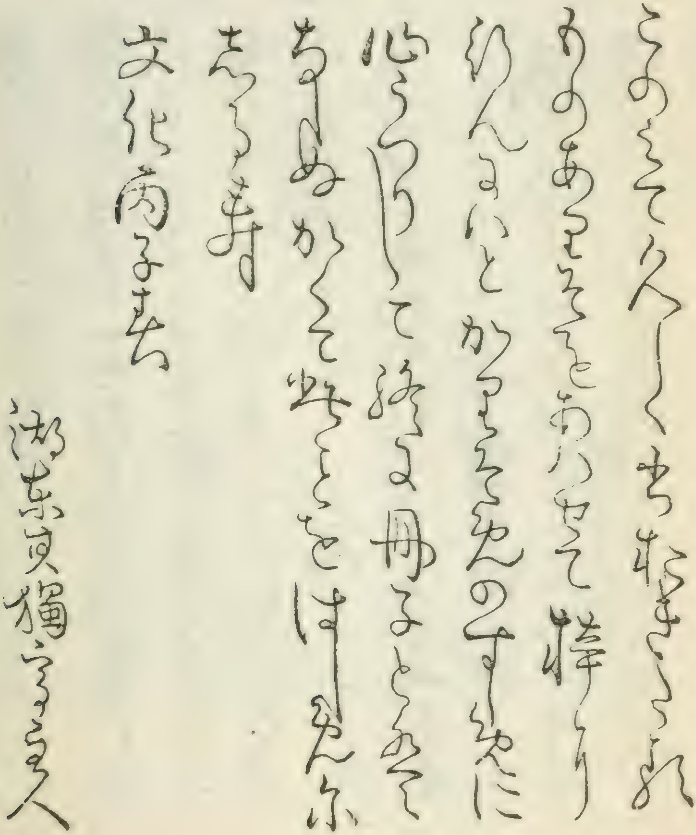
おのれ年頃、蕪村翁の風骨をしたへるまゝに、あるは畫あるはその賛などあつめしに、いつのほどにか賛のたぐひ、はた序文のごときをも書あつめおくことになりしを、ことし菊舎のあるじが伊勢路におもむくとて訪來しに、此ことをかたりいへるに、そはおのれも



このみて久しく書おきたるものあり、そをあはせて梓に行んにはと、かりそめのすゝめに心うつりして、終に册子とはなしぬ。かくて此とをはじめにしるす。

文化丙子春

湖東其獨亭主人



凡例

一、燕村翁文集は先年月居叟の門人宰町子に託して書あつめられし草稿ありしが、いつの頃にや其稿失ぬるよし、をしむべし。已もとより翁が文をしたひ、見るにまかせ聞にまかせて書あつめたるものあり。はた湖東忍雪ぬしもおなじ心に書とめられしを、ともに爪ぞろへしてかゝることにはなしぬ。

一、支麥の文章妙なりといへども、言卑俗なるもの多ければ、翁が文章の世にひろからんことをねがふは、かゝるゆゑんにこそ。

洛其成しるす

蕪村文集乾

洛　竹巣月居　閱
湖東　眞獨亭忍雪
洛　醉菴甚成　輯

歳旦辭

祇園會のはやしものは、不協秋風音律。
蕉門のさびしをりは、可避春興盛席。
　歳旦をしたり貌なる俳諧師

賀辭

つちのとの亥をはじめとし、又もや松のみどり子にこまがへり、老行さきの千ゝの春風吹つたへて、つきせぬ宿のめでたさを、大和の國なる何來の主が本卦の賀に申侍る。

一字借音

大和假名いの字を兒の筆はじめ

檜笠辭

さくら見せうぞ、ひの木笠と、よし野の旅にいそがれし風流はしたはず。家にのみありて、うき世のわざにくるしみ、そのことはとやせまし、このことはかくやあらむなど、かねておもひはかりしことども、えはたさず。つひには煙霞花鳥に辜負するためしは、たゞ世のありさまなれど、今更我のみおろかなるやうにて、人に相見んおもてもあらぬこゝ地す。

　花ちりて身の下やみやひの木笠

追悼辭

太祇居士が十三回追善の俳諧にまねかれける日、風雨ことに烈しかりければ、かくては道のほどいかにやなど人のせちにとゞめけるを、簑笠や有、とく得させよと云罵りて、ことぐ〳〵しき老の出立いとおかしく、からうじて不夜庵にいたりぬ。かの登蓮法師が風流とは品かはりたると、こゝろざしの誠はなどか恥べきにやと、頓て佛前に向て、

　線香やますほのすゝき一二三本

歳旦説

ことしは歳旦の句もあらじなどおもひゐけるに、臘月廿日あまり八日の夜のあかつきのゆめに、あやしき翁の來りていふやう、おのれはみちのくにの善正殿にたのまれまいらせて、京うちまゐりし侍るおきななるが、よきついでなれば、そこに奉るべきものゝ侍れば、こゝにまほで

來ぬとて、ひらつゞみときて、根松のみどりなるをふたもととうでゝ、これを御庭のいぬゐの隈に植おき給はゞ、かぎりなきよろこびをも見はやし給はんといひつゝ、かいけちて見えずなりぬ。ゆめうちおどろきても、此翁にむかひかたるやうにおぼえて、かの武隈の古ことおもひ出られてかくは申侍る。

我門や松はふた木を三の朝

夢説

夢に播磨がたに舟をうかぶ。風おもむろに浪あらそはず。悠ゝたる春光、其興いふばかりなし。さあるほどに、此舟つゆもうごかず、只鉄索をもて金輪に繋ぎたるがごとく、舟子どもとかくすれど、やりぬべくもあらず。思ふに罪てふものゝねたく見入たるにこそと、舟中の人々ただ泣になきつ。おのノ\身にそふ寶をときて海中に投じ、かの魚の執はらさせよなど、ひそめき聞ゆるに、夢うちおどろきて、

帆虱のふどし流さん春の海

芭蕉堂再興記

四明山下の西南、一乗寺村に禪房あり、金福寺といふ。土人口稱して芭蕉庵と呼。階前より翠微に入ること二十歩、一塊の丘あり、すなはちばせをを庵の遺蹟なりとぞ。もとより閑寂玄隠の地にして、綠苔やゝ百年の人跡をうづむといへども、幽篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行雲停り、樹老鳥睡りて、頻に懷古の情に絕ず。やうやく長安名利の境を離るゝといへども、ひたぶるに俗塵をいとふとしもあらず。鷄犬の聲籬を隔て、樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家もちかく、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。されば詞人吟客の相往來して、半日の閑を貪るたよりもよく、飢をふせぐまほけも自在なるべし。抑いつの頃よりさは唱へ來りけるにや。草かる童麥うつ女にも、芭蕉庵を問へば必ずかしこを指す。むべ古き名なりけらし。さるを人其ゆへをしらず。竊に聞、いにしへ鉄舟といへる大德、この寺に住たまひけるに、別に一室を此ところに構へ、手自雪炊の資をたのしみ、客を謝して深くかきこもりおはしける。蕉翁の句を聞ては泪うちこぼしつゝ、あなたうと、忘機逃禪の郷を得たりとて、常に口ずさみ給ひけるとぞ。其頃や蕉翁、山城の東西に吟行して、淸瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に、薫風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に、寒夜獨行の鉢たゝきを憐み、あるは鷹を着て誰人いますとうちうめかれしより、きのふや鶴を盗まれしと

孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳ては、麻のたもとに曉天の霞をはらひ、白河の山越して、湖水一望のうちに杜甫が眥を決、つひに辛崎の松の朧〻たるに、一世の妙境を極め給ひけん。されば都俳佪のたよりよければとて、をり〳〵此岩阿に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野の夢のあとなくなりたまひしのち、かの大德ふかくなげきて、すなはち艸堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけるなるべし。雨をよろこびて亭に名づくるなど、異くにゝもさるためしは多かるとぞ。しかはあれど此ところにて蕉翁の口號なりと世に聞ゆるもあらず。ましてかい給へるものゝ筆のかたみだになければ、いちじるくあらそひはつべくも覺えね。住侶松宗師の曰。さりやうき我をさびしがらせよとわび申されたる閑古鳥のおぼつかなきは此山寺に入おはしてのすさみなるよし、此ころまで世にありし耆老のふみのみちにも心かしこきが物がたりし侍りし。されば露霜のきえやらぬ墨の色めでたく、年月流去水ぐきの跡などかのこらさるべき。さるを無功德の宗風こゝろ猛く、不立文字の見解まなこきらめき、佛經聖典もすてゝ長物とす。いかでさばかりのものたくはへ藏すべきなんど、いとさう〴〵しき狂漢のために、いたづらに塵壺の底にくち、等閑に紙魚のやどりとほろびにけん。びんなきわざなりなど、かなしみ聞ゆ。よしやさは追ふべくもあらず、唯かゝる勝地に、かゝるたとき名のゝこりたるを、あいなくうちすておかんこと、罪さへおそろしく侍れば、やがて同志の人〻をかたらひ、かくのごとくの一艸屋を再興して、ほとゝぎす待卯月のはじめ、をしが啼長月のすゑ、かならず此寺に會して翁の高風を仰ぐことゝはなりぬ。再興發起の魁首は自在庵道立子なり。道立子の大祖父坦庵先生は、蕉翁のもろこしのふみ學びたまへりける師にておはしけるとぞ。されば道立子今此擧にあづかり給ふも、大かたならぬすぐ世のちぎりなりかし。

宇治行

宇治山の南、田原の里の山ふかく茸狩し侍けるに、わかきどちはえものを貪り先を爭ひ、余ははるかに後れてこゝろ靜に、くま〴〵さがしもとめけるに、菅の小笠ばかりなる松たけ五本を得たり。あなめざまし、いかに宇治大納言隆國の卿は、ひらたけのあやしきさたはかいとめ給ひて、など松茸のめでたきことはもらし給ひけるにや。

君見よや拾遺の茸の露五本

最高頂上に人家見えて高尾村といふ。汲鮎を業として、世わたるたよりとなすよし。茅屋雲に架し、斷橋水に臨む。かゝる絶地にもすむ人有やと、そゞろに客魂を冷す。

鮎落ていよ〳〵高き尾上かな

米かしといへるは宇治河第一の急灘にして、水石相戰奔波激浪、雪の飛がごとく雲のめぐるに似たり。聲山谷に響て人語をみだる。銀瓶乍チ破ニ水漿迸リ。鐵騎突出ス刀鎗鳴。四絃一聲如裂帛と白居易が琵琶の妙音を比喩せる絶唱をおもひ出て

帛を裂琵琶の流や秋の聲

余一日問耆老於故園。渡澱水過馬堤。偶逢女歸省郷者。先後行數里。相顧語。容姿嬋娟癡情可憐。因製歌曲十八首。代女述意。題曰春風馬堤曲。

春風馬堤曲　十八首

やぶ入や浪花を出て長柄川
春風や堤長うして家遠し
堤下摘芳草　荊與蕀塞路
荊蕀何無情　裂裙且傷股。
溪流石點々　踏石撮香芹
多謝水上石　敎儂不沾裙。
一軒の茶見世の柳老にけり
茶店の老婆子儂を見て慇懃に
無恙を賀し且儂が春衣を美ム。
店中有二客　能解江南語
酒錢擲三緡　迎我讓榻去。
古驛三兩家猫兒妻を呼妻來らず
呼雛籬外鷄　籬外艸滿地
雛飛欲越籬　籬高墮三四。
春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ。
たんぽゝ花咲り三々五々五々は黄に
三々は白し記得す去年此路よりす。
憐しる蒲公莖短して乳を浥。
むかし〳〵しきりにおもふ慈母の恩。
慈母の懷袍別に春あり。
春あり成長して浪花にあり。
梅は白し浪花橋邊財主の家。
春情まなび得たり浪花風流。
郷を辭し弟に負て身三春。
本をわすれ末を取接木の梅。
古郷春深し行々て又行々。
楊柳長堤道漸くくれたり。
矯首はじめて見る故園の家、
黄昏戸に倚る白髮の人、
弟を抱き我を待春又春。
君不見古人太祇が句

藪入の寐るやひとりの親の側

澱河歌　三首

春水浮梅花　南流菟合澱
錦纜君勿解　急瀨舟如電。
菟水合澱水　交流如一身
舟中願同寢　長爲浪花人。
君は水上の梅のごとし、花水に

浮て去こと急也。妾は江頭の柳のごとし、影水に沈てしたがふことあたはず。

老鶯兒

春もやゝあなうぐひすよむかし聲

春もさむき春にて御座候、いかゞ御暮被成候や、御ゆかしく存候。しかれば春興小冊漸出板に付、早速御めにかけ申候。外へも乍御面倒、早ゝ御達被下度候。延引に及候故、片時はやく御届可被下候。

一春風馬堤曲（馬堤は毛馬塘也 則余が故園也）

余幼童の時、春色清和の日には必友どちと此堤上にのぼりて遊び候。水には上下の船あり。堤には往来の客あり。其中には田舎娘の浪花に奉公して、かしこく浪花の時勢粧に倣ひ、髪かたちも妓家の風情をまなび、正傳しげ太夫の心中のうき名をうらやみ、故郷の兄弟を恥いやしむもの有。されども流石故園の情に不堪、偶親里に歸省するあだ者成べし。浪花を出てより親里迄の道行にて、引道具の狂言、座元夜半亭と御笑ひ可被下候。實は愚老懷舊のやるかたなきより、うめき出たる實情に候。

當春帖は同盟の社中斗にて、他家を交す候。それ故伏水の諸家をもらし申候。御出會候節共御噂被成、諸子腹立なき樣に被仰談可被下候。桃には下り候て、寛ゝ御物がたり可仕候。數狀したゝめ老眼つかれ、艸ゝかしこ

二月二十三日　夜半

螺盃銘

むかし〳〵うら嶋が子、龍のみやこに至りて、乙姫に配偶す。あらぶる眷族貢を獻す。おの〳〵かしらに鱗甲をかざりとす。それが中に大なる貝をいたゞくもの有、光輝人を射る。浦嶋子心に是を欲す、終に得て水の江の浦にうかぶ。浪花のうかぶ瀬是なり。後又乙姫、俵藤太を迎て宴す。玉盃を出して酒をすゝむ。藤太其盃の美なるを愛す。別に臨て、乙姫許多の寶を將て藤太を送る。其貝すなはち其一つなり。傳て今德野が家に藏む。予に其銘を乞ふ。予おもふ浦嶋が子は與謝の海に得たるをもてうかぶ瀬といふ。藤太鳰のうみにこれを得たり。それ浮巢と呼ん歟。一盃一盃又一盃。長く子が家に傳て　しらず幾万盃ぞ。

土器賣贊

深草のほとりに年ひさしくかくれすむあやしき翁ありけり。手づからかはらけをつくりて、いつもとしの末にはみづから荷ひいでゝ、みやこの町〳〵をひさぎあ

りくのみ、常は何いとなむともなく、草のとぼそふかくかきこもりて、その齢いくばくと・ふことをしらず。昔時より老にして今も老なり。かのしらはしの翁のたぐひにやあらむ。いとゆかしきことなり。

おもかげもかはらけ〳〵年の市

翁の賛

張九齢は明鏡の裏に白髪を憐み、丈山は清き流れに老の面影を恥。こゝにひとりの隱士あり、いづれのところの人といふことをしらず。常に葛てふものをたしめば、人呼て葛の翁といふ。もとより青雲權貴の地をいとひて、龍山公の御前に侍らされば、おのづからかきつばたの秀句を遁れ、資朝の卿に進奉らされば、むく犬のそしりもなし。只生前一盃の葛水、身後の榮聲にかへなまし。されば清濁明晦のさかひ、是不是いづれぞや。しかしきよからんよりはむしろ濁らんには。明らかならんよりは、はたくらからんには。

葛水や鏡に息のかゝる時

葛水に見る影もなき翁かな

此意を了解したるものは誰、其日ぐらしの翁有。このことをのぶるものは誰、夜半亭蕪村なり。

守武貞徳をはじめ、其角嵐雪にいたりて、十四人の俳仙を書きてありけるに、賛詞をこはれて、

此俳仙群會の圖は、元文のむかし余弱冠の時寫したるものにして、こゝに四十有餘年に及べり。されば其拙筆いまさら恥べし。何ぞ烏有とならずや。今又是に賛詞を加へよといふ、固辭すれどもゆるさず。則筆を洛下の夜半亭にとる。

花散月落て文斯にあら有がたや

むかし五條わたりにたまめける法師に倶せられたりけるをうな有けり。世のそしりをいとひて、みそかなるところに住けり。いろおとろひてかの法師かよはずなりけり。女いといと身をうらみてゆくゑなくなりけり。

しら露の身や葛の葉の裏借家

右はきつねの法師に化たる畫に賛をこはれて、とみにかいつけやりける。

蕪村文集 坤

洛　竹巣月居　閲
湖東　其獨亭忍雪
洛　醉庵其成　輯

春泥集序

柳維駒、父の遺稿を編集して余に序を乞。序して曰。余曾て春泥舍召波に洛西の別業に會す。波すなはち余に俳諧を問。答曰。俳諧は俗語を用て俗を離るを尙ぶ。俗を離れて俗を用ゆ。離俗の法最かたし。かの何がしの禪師が隻手の聲を聞といふもの、則俳諧禪にして離俗の則なり。波頓悟す。却問。叟が示すところの離俗の說、其旨玄なりといへども、なほ是工案をこらして我よりしてもとむるものにあらずや。しかし彼もしらず、我もしらず、自然に化して俗を離るゝの捷徑ありや。答曰。詩を語るべし。子もとより詩を能す。他にもとむべからず。彼疑敢問。夫詩と俳諧といさゝか其致を異にす。さるを俳諧を捨て詩を語れと云。迂遠なるにあらずや。答曰。畫家に去俗論あり。曰。畫去レ俗無二他法一、多讀レ書則書卷之氣上升、而市俗之氣下降矣。學者其愼旃哉。それ畫の俗を去だにも、筆を投じて書を讀しむ。況、詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや。波則悟す。或日又問。いにしへより俳諧の數家、各〻門戶を分、風調を異にす。いづれの門よりして歟其堂奧をうかゞはんや。答曰。俳諧に門戶なし、只是俳諧門といふを以て門とす。又畫論曰。諸名家不分門戶、門戶自在其中。俳諧又かくのごとし。諸流を盡してこれを一囊中に貯へ、自其能物を撰び、用に隨て出す。唯自己の胸中いかんと顧るの外他の法なし。しかれども常に其友を撰びて、其人に交るにあらざれば、其郷に至ることかたし。波問。其友とするものは誰ぞや。答。其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日〻此四老に會してはつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び山水にうたげし、酒を酌て談笑し、句を得る事は專不用意を貴ぶ。かくのごとくする事日〻。或日又四老に會す。幽賞雅懷はじめのごとし。眼を閉て苦吟し、句を得て眼を開く。忽四老の所在を失す。しらずいづれの所に仙化して去るや。恍として一人自イむ。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是子が俳

諸の郷なり。波微笑す。つひに我社裏に歸て、句を吐こと數千。最、麥林支考を非斥す。余曰。麥林支考其調賤しといへども、工みに人情世態を盡す。さればまま支麥の句法に倣ふも、又工案の一筋ならざるにあらず。詩家に李杜を貴ぶに論なし。猶元白を捨ざるがごとくせよ。波曰。叟我をあざむきて野狐禪に引ことなかれ。畫家に吳張を畫魔とす。支麥は則俳魔ならくのみ。ます／＼支麥を罵て、進て他岐を顧ず。つひに俳諧の佳境を極むべし。をしむべし、一旦病にふして起つことあたはず。形容日〻にかじけ、湯藥ほどこすべからず。預め終焉の期をさし、余を招て手を握て曰。恨らくは叟とともに流行を同じくせざることをと。言終て涙潸然として泉下に歸しぬ。余三度泣て曰、我俳諧西せり。我俳諧西せりと。右のことば丶夜半茗話といふ冊子の中に記せる文なり。夜半茗話は余が机邊の隨筆にて、たゞもろ／＼の人と討論せし事を雜錄したるものたり。然に其文を其まゝにて、此の集の序とすることは誠に故有。此文を見て波子が淸韶(洒)落なるや、其ひと丶なりをしつて、その句の僞り無事を味ふべし。かの虎の皮を引かぶつたる羊に類すべからずといふを、洛下の夜半亭に於て、六十二翁蕪村書

蘆陰句選序

むかし丹波の國に大なる璧もたるおきな有けり。そのたまうちにひかりをかくしてゆかしさ云んかたなし。人其玉を百貫にかはんといふ。翁おもふやう、かくてだにあるをひかりまさばあたひなほかぎりあらじとおもひて、百貫にはえこそとてうらず。さて夜に日にすりみがきけるほどに、はつかに瑕あらはれ出ぬ。翁あさましとまどひて、いよ／＼すりみがくにしたがひ、きず大に玉はまめばかりになりぬ。はじめかはんといひし人も、今はなおほひつ丶、さたなくなりけるとぞ。されや大魯が門流蘆陰遺稿といふものを出さんとして、序を予にもとむ。予が曰。遺稿は出さずもあらなん。いにしへより作者のきこえあるもの、遺稿出て還て生前の聲譽を減ずるもの すくなからず。大魯はもとより攝播維陽の一大家と呼れて、我門の嚢錐なりし。されはその佳句秀吟は人おのおの膾炙す。たれか遺稿の出るを期せんや。はた遺稿を出して、かの玉もたる翁に倣ふことなかれ。門流肯(きか)ず。ひそかに草稿をあつめて、几董に託して校合せしめ、彫刻半バにいたる。しかしてふたゝび序を予にもとむ。こゝにおゐてやむべからず、取てその草稿を閱す。予歎じて曰。遺稿出すべし。遺稿い

でゝ人いよ〳〵その完璧をしるべし。是大魯が身後の榮、ます〳〵その光を加ふるに足らん。門流微笑して去。このこと又序とすべし。

五車反古序

維駒父の十三回忌をまつるに、集えらびて五車反古といふ。ふかき謂あるにあらず、父の冬ごもりの句によりて號けたる成べし。はた父の筆まめに書あつめたるものを、よゝとねぢこみたる袋の紐ときて見れば、贈答の詩の草稿あり。或は花に來たれといふ天駒のふみあり。今宵の雪をいかにやなどそゝのかす高陽の徒の手紙あり。又は云すてたる歌仙の半ばかりにして、ところ〳〵墨引たるあり。其裏には多く人の句もみづからの句もかいつけたり。それをとかくつまぞろへして、今の世の人の句も打まじへ、ならべもてゆくほどに、上下二冊子となりぬ。序を余にもとむ。余病にふして月を越れど起ことあたはず、筆硯の業を廢することひさし。故をもて其ことを果さず、これこま忌日のせまりちかづくをかなしみ、しばしば來りもとむ。余曰。明日を待て稿を脱せん。明日すなはち來る。病ます〳〵おもし。又曰。明日を待て稿を脱せん。維こま総に卒業の期なきを悟て、竊に草稿を奪ひ去る。余も又追はず。他日そのことを書して序とす。

鬼貫句選跋

五子の風韻をしらざるものには、ともに俳諧をかたるべからず。こゝに五子といふものは、其角嵐雪素堂去來鬼つらなり。其角嵐雪おの〳〵其集あり。素堂はもとより句少く、去來はおのづから句多きも、諸家の選にもるゝこと侍らず。ひとり鬼貫は大家にして、世に傳ふる句まれなり。不夜庵太祇としごろかのことを嘆きて、もしほ草こゝかしこにかき集めて數百句を得たり。たとはゞ滄海に網して魚をもとむるがごとし。なほもれたるものいくほどか侍らん。さるを鬼貫句選と題して、はやく世の好士につたへむと、例の氣みじかなる板もとは八文字屋自笑也。

平安二十歌仙序

蕉翁去來一紙兩筆ノ書は、向某ヨリ菊居ニ傳來ス。居又長松下隨古ニ讓ル。居ハ古ガ叔父ナリ。向某ハ去來カ通家也。

右一紙兩筆のふみは、長松下の藏るところにして、げに稀有のものなり。其頃去來はさうなき作者にして、蕉翁もこのをのこ歎きがたしとつぶやかれけるとぞ。さある人のかゝる脇なんどせんと（に）

いとたやすかるべきを、自らの聴にことはりかねてや、翁のさたをこひもとめける。殊勝の事にこそ侍れ。さてこそ翁もかくやなと、ひねり直れけるも、なほこころゆかずや侍りけむ、「禮者うすらぐ春のしづかさ」と砥並山には聞へにける。一日太祇嘯山長松下を訪ひ、この書をひらき見て、いにしへの人の道に深切なること、かばかりに侍れば、すゞろ懐古の情にたえず。やがて三吟の發端となりて、廿チの席をかさねて、はたちの歌仙なりぬ。しかはあれど其角が月に嘯く体にも倣はず、嵐雪が花にうらめる姿にも擬せず、まいて今の世にもてはやす蕉門とやらん質をもはらにするにもあらず、たゞ己が心のさまざまに、おもひ邪なきをのみたとぶなるべし。もとより三子の意に得たりとする俳諧にもあらねば人の見むこともいとくるしとて草稿のまゝにて橘仙堂が棚架に打すてありけるを、あたら三吟なり、なんぞにしたまへと序して、三子を催すものは、三菓散人蕪村書

宴楽序

遅日亭の主人卓下をまほけ、諸子を引て宴す。磁器玉盤、猩脣駝峰、窮山之珍、蕩水之錯、蓋く具せずといふことなし。日午より夜半にいたりて、よく饕食すべからず。我黨只うらむ便々たる腹中、文雅の貯なきことを。總に題を分ち、俳歌をうたふて詩賦に換へ、庭に歩し月に嘯く。豈仙家の歡に讓るべけんや。

　　月の句を吐てへらさん蟾の腹

太祇句選跋

太祇嘗而小言すらく、青によしなら漬と云んより、なら茶と云んこそ、俳諧のさびしみなれ。焦遂が五斗はそらにさはがし。蕉翁の三斛こそ、長く靜にして、鉄杵を鍼に磨かし、點滴の石を穿つをしへにも叶て、我業の卒る時もありなむ。かりにもおこたりすさむべからずとて、佛を拜むにもほ句し、神にぬかづくにも發句せり。されば祇が句集の草稿を打かさねたるに、あなおびたゞし、人のイめる眉ばかりにくらべおぼゆ。げにやいせのはま荻のおきふしにも、ふんでをはなさず。勒萃として口よりいづるにまかせ、書おけるものにしあれど、なにはのあしのいづれ刈すつべきも見えねば、葎亭宛在の撰者も眼つかれ、心まどひてまめやかにゑらみ侍るべうもあらじかし。余二子にいふ。さははつべき期あらめや。大かたにこそあらまほしけれ。たゞ四時のはじめごとに出せる五六紙がほどをゑらみ取て初稿と題し、木にきざみて世にひろうし、二稿三稿といへるものは、年を經て

もほゐとぐべきわざなれとすゝめければ、二子もうけひきて、かしこうこそ申つれ。さらば其ことを世にことはり聞えよとあるにぞ、やがてしりへにかいつく。

むかしを今の序

亡師宋阿の翁は、業を雪中菴にうけて、百里琴風が輩と鼎のごとくそばだち、ともに新意をふるひ、俳家の聞えめでたく、當時の人ゆすりて三子の風調に化しけるとぞ。おい／＼流行の魁首にして、尋常のくはだて望むべききはにはあらざめり。師やむかし武江の石町なる鐘樓の高く臨めるほとりに、あやしき舍りして市中に閑をあまなひ、霜夜の鐘におどろきて老のねざめの憂き中にも、予とゝもに俳諧をかたりて、世の上のさがごとなどまじらへきこゆれば、耳つぶして、いと／＼高き翁にてぞありける。ある夜危坐して予にしめして曰。夫俳諧のみちやかならず師の句法に泥むべからず。時に變じ時に化し、忽焉として前後相かへりみざるがごとく有べしとぞ。予此一棒下に頓悟して、やゝ俳諧の自在をしれり。されば今我門にしめすところは、阿叟の磊落なる語勢にならはず、もはら蕉翁のさびしほりをしたひ、いにしへにかへさんとをおもふ。是外虚に背て、内實に應ずるなり。これを俳諧禪と云ひ、傳心の法といふ。わきまへざる人は、師の道にそむける罪おそろしなど沙汰し聞ゆ。しかるに今このふた卷のか仙は、かのさびしほりをはなれ、ひたすら阿叟の口質に倣ひ、これを靈位に奉て、みそみめぐりの遠きを追ひ、強て師のいまそかりける時の肴をなすといふことを、門下の人ゝとともに申ほどきぬ。

隱口塚序

こもりくの初瀨の堂の片隅に、まきもくのひの木笠うちしきて、ゆかしき春の旅寐姿は、よきもの見たるよし野の勞れを休んとなるべし。されば其吟魂のおり／＼この境にやどり來まさむことを願ひて、草をくさぎり、土をかきあつめて、一基の碑をいとなみ建るものは、やまとの好士何來なり。そのはじめに筆をたてて、手むけの句を奉るものは、平安の蕪村なり。蕪村百拜して書。

草臥てねにかへる花のあるじかな

桃李序

いつのほどにか有けん、四時四まきの歌仙有。春秋はうせぬ。夏冬はのこりぬ。一人請て木にゑらんといふ。一人制して曰。この歌仙ありてやゝとし月を經た

り。おそらくは流行におくれたらん。余笑て曰。夫俳諧の活達なるや、實に流行有て實に流行なし。たとはゞ一圓郭に添て、人を追ふて走るがごとし。先ずるもの却て後れたるものを追ふに似たり。流行の先後、何を以てわかつべけんや、たゞ日〻にをのれが胸懐をうつし出て、けふはけふの俳諧にして、翌は又あすの俳諧なり。題してもゝすもゝといへ、めぐりよめどもはしなし。是此集の大意也。

其雪影序

今や上侯伯より、下漁樵におよぶまで俳諧せざるものなし。それが中に一家をもて世に稱せらるゝことは、きはめてかたし。京攝の隆三四指を屈するだにもいたらず。そも〳〵三四とは誰、几圭其大指を領せり。圭はじめ巴人庵の門にあそびて、その眞率に倣はず、かたはら半時菴の徒に交りて、其贅牙に化せられず。ひとり俗談平話をもて、たくみに姿情を盡せり。たとはゞ小説の奇なることば〻、諸史のめでたき文より興あるがごとし。圭去りて又圭なるもの出ず。人或たま〳〵人情世態のおかしき句を得れば、則云圭流なりと。こゝに於てて一家の論盡ぬ。こと十三回、其子几董、小冊子を編て父の魂を祭る。世の追善集つくるにはやうかはりて、あながち紫雲青蓮の句をもとめず、ひとへに弄花醉月の吟を拾ふ。魚肉蔬菜、雜俎にして供するものゝごとし。余曰。さはよし。又父が意なり。かの闇室にこもり、せうじいとまめやかに、手念珠をはなたず、稱名こと〳〵しく、尼法師にこび仕へて、あやしく着ふくれたらんよりは、鶏骨床を支ゆれども、かたちかじけ、眼うちくぼみたるかたにこそ、もろこしの識者は與みし侍れ。　几董之此編、其幾乎。

花鳥篇序

郭文が勝具なければ、鬼貫が禁足にはくみしやすきにや。みよし野の山ぶみも、かり寐のゆめにたどり、あらしのやまの春のゆくゑだに、しらぬゑびすごゝろいとさう〴〵しければ、せめて朝夕草扉におとづるゝ人の、花さくらの吟詠をほくのはしにかいつけ、一帖にものして、臥遊のよすがにもとおもひたちつゝ、とかくするほどに、春煙眼を過ぎ、綠樹窓を蔽ひ、花苒として去つくす、日にゆふべをかこち、蕭條とふりくらす雨に曉をしらず、怠りがちなる老の身をうらみて、ひとり几上に肘する折ふし、ある人梅翁のたんざくを得て、この句にわきをよと、云ひおこせたるを取上て見れば、手澤淋漓として、雲外の一聲睡をさまし、言下に一

句を吐、所謂狗尾をもて貂に續たるこゝ地するを、門下の二三子第三第四とつゞけゆくまゝに、やがて三十六句にみちぬ。いとよし花櫻の後へに附して、則花鳥篇と題號して、我疎懶の罪を謝することしかり。

俳題正名序

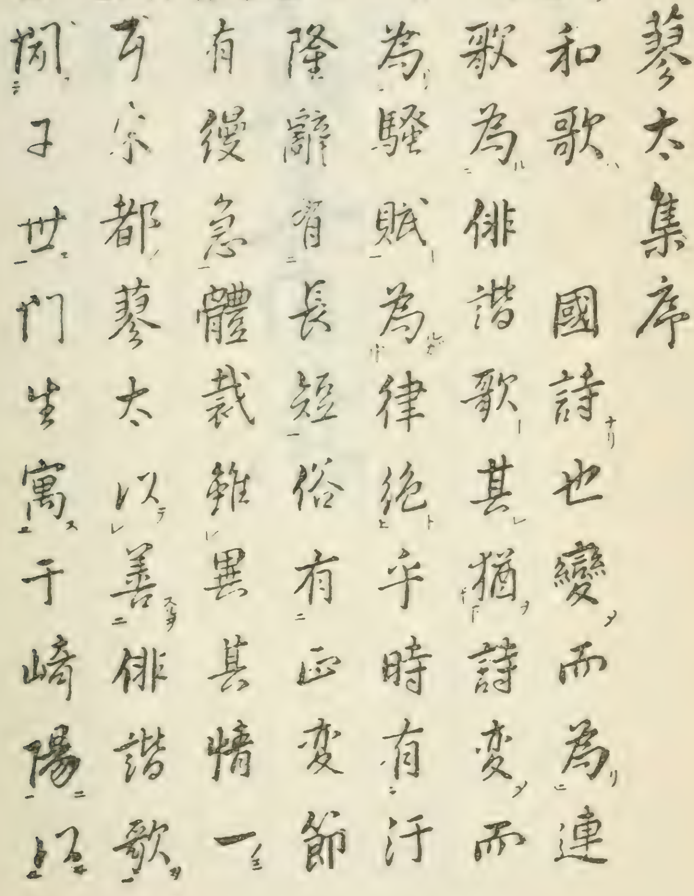
俳諧の去嫌のことはのことは、諸書にあらはしてその法そむくべからず。しかれども俳諧は活物也。時に臨て其法を背くも又法とす。付ヶに疎密あり句に輕重あり。一卷の緩急、句行の浮沈を相顧て、或おもてきらふものを七句にゆるし、字去のものを五句に禁ずる事あり。法は四時のごとし。去嫌の扱ひは風雨寒暖のごとし。變化なし。神釋祭奠の正名、草木鳥獸の正字をしらざる時は、その變に應ずることかたし。伏水蕉斎、俳題正名を著す。一たびこれを開けば、かの去嫌取捨、掌をさすがごとし。まことに俳諧の正字通也。蕉斎は夫白鹿洞の人か。

蕪　村　文　集　下終

蓼太句集

蓼太句集

和歌ハ國詩ナリ也。變ジテ而爲リ二連歌一ト、爲ル二俳諧歌一。其レ猶キ下詩變ジテ而爲リ二騷賦一ト、爲ルガ中律絶上ト乎。時有リ二汙隆一。辭有リ二長短一。俗有リ二正變一。節有リ二緩(緩カ)急一。體裁雖レ異ナリト其情一ノミ耳。東都ノ蓼太以テレ善スルヲ二俳諧歌一ヲ聞フ二于世一。門生寓ス二于崎陽一。以テ二蓼太ノ所レノ著ハス一章ヲ、示ス二之ヲ清人程


蓼太集序
和歌國詩也變而爲連
歌爲俳諧歌其猶詩變而
爲騷賦爲律絶乎時有汙
隆辭有長短俗有正變節
有緩急體裁雖異其情一
耳東都蓼太以善俳諧歌
聞于世門生寓于崎陽以

劍南ニ。程賦ノ一絶ヲ以テ寫シ其章ヲ、且手書ノ以テ遺ル焉。時人艶ニ稱ス之ヲ。丁酉ノ季夏、蓼太載テ酒ヲ顧ル余ヲ牛門ニ。請フ序センヿヲ其集ニ。余與ニ之對酌シ、頽然トシテ而醉フ。作テ而嘆ジテ曰、有ル是哉。昔シ者晁卿與ニ唐人一唱酬シ、明人著ス日本風土記ヲ、載ス和歌數篇ヲ。然ラバ則彼知ル我ニ有リ詩有ルヿノ和歌。

蓼太所著一章示之清人
程劍南程賦一絶以寫其
意且手書以遺焉時人艶
稱之丁酉季夏蓼太載酒
顧余牛門請序其集余與
之對酌頽然而醉作而嘆
曰有是哉昔者晁卿與唐
人唱酬明人著日本風土

矣。蓋未ダレ知ラ有ルコトヲ二連歌一也。而ルヲ況ヤ俳諧歌ナルヤ乎。知ルレ有ルコトヲ二俳諧歌一者、乃チ自ニ蓼太一始ル。今観ルニ二此集ヲ一、著作太ダ富メリ。重テ以テ示サバ二清人ニ一、則彼ノ五言長城ニ殆ンド将ニレ失セントレ墨守ヲ一矣。蓋シ我ガ日出之邦、升平五百十年、煥乎タル文教、洋ニ溢ス海内ニ一。此ノ事雖ドモレ

記載和歌數篇於則彼知
我有詩有和歌矣蓋未知
有連歌也而況俳諧歌乎
知有俳諧歌者乃自蓼太
始今觀此集著作太富重
以示清人則彼五言長城
殆將失墨守矣蓋我
日出之邦

小ナリト、可ニ以テ観ル
餘波ヲ矣。彼ハ以テシ
其詩ヲ、我ハ以テス吾
歌ヲ。各称スル盈耳ト
哉。是ヲ爲レ序ト。
安永丁酉夏六月南畝
子序

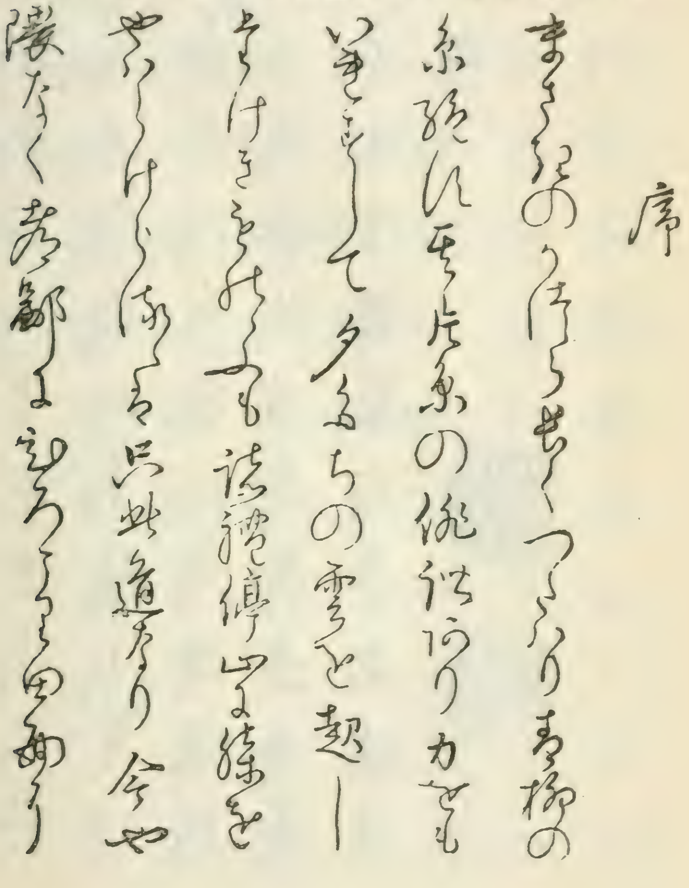
印印

升平百五十年煥乎文教
洋溢海内此事雖小可以
觀餘波矣彼以其詩我以
吾歌各称盈耳哉是為序
安永丁酉夏六月南畝子
序

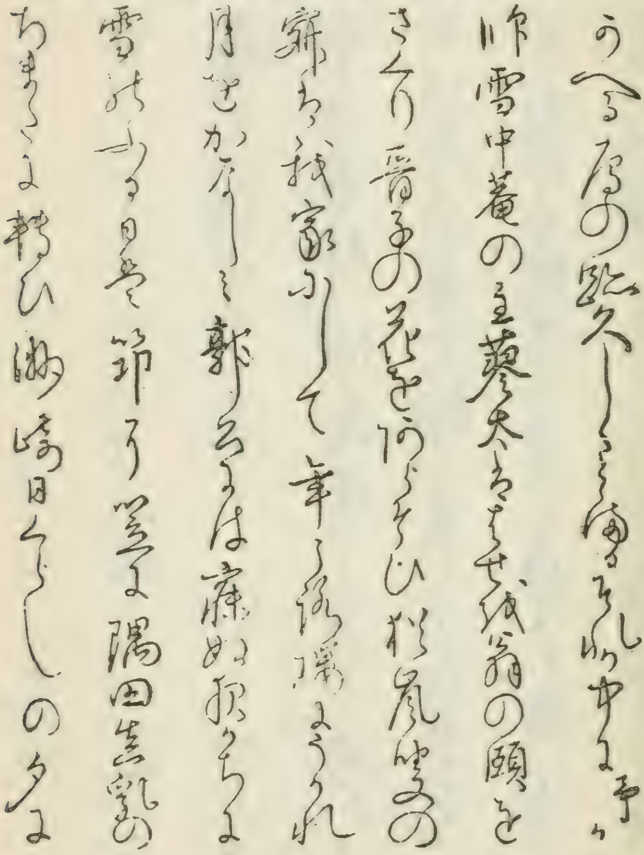



序

まさきのかづら長くつたはり、青柳の糸絶ず、其片糸の俳諧あり。力をもいれずして夕だちの雲を起し、たけきものゝふも諸禮停止に、嗜をやはらげらるゝは只此道なり今や隈なく都鄙にひろごり、田面にかへる鴈の跡久しくとゞまる。それが中に予が



師雪中菴の主蓼太は、はせを翁の願をさぐり、晋子の花をあらそひ、猶嵐叟の寂は我家にして、年ごろ櫻にうかれ月をかなしみ、郭公には寐ぬ夜がちに、雪のふる日は笻に笠に、隅田眞乳のちまたに轉び、洲崎日ぐらしの夕に食をわすれ、あるは途遠き蒼波に眼をあらひ、ある



は山ふかき白霧に憂をしのびし口ずさみ、つもりつもれり。さるを書肆何某梓にちりばめんと子規亭の扉を敲く事三たび五たびをかさぬ。師云、俳士に句のおほきは硯に筆のおほきに似たりと誰やらもいはれき。ましていぶせき藻塩草かきあつめては、人のみるめ

もいたづかはし。さればとてひたすらに拒めるも又事かまし。聊其需を塞げよとて、十が一をあたへられし趣を　吐月述。

蓼太句集春之部

歳旦

元日やうつはの水も伊勢の海
誰ひとり掃とも見えずけさの春
筆捨ぬ松こそよけれはつ硯
初鶏や又市に往甲斐ひとつ
若水や升なき時の人ごゝろ
今朝の春鳩の三枝を見付たり
黒きもの又常盤なり初からす
万才や爰八橋に酔てゆく

鉢植の其形はてゝむしといふものに似たれど、觸鬚のうごきなき此花のあけぼのを愛して

あらそはぬ國いたゞくや福壽草

五日の風枝をならさぬ此君が代の春をむかへて、ことしも東西の行脚をおもふ。

初空や十日は蓑のきそはじめ

東叡山のうしろ、根岸といへる所に、膝いるゝばかりの蝸廬をしつらふ。この地や、こと所より鶯の音色うるはしといへば、爰にことしの春を迎て田家の閑をうかゞふ。

しづかさの鍬にさし入はつ日哉

聖代

初霞長柄の橋もかゝるなり

人日

摘まぜて雪と八色の若菜かな
かゝる物賣ぬ代ゆかし若菜摘
若菜そゝぐほどは解たり忘水
澤盤の鍬もうごくなづなかな
裾野から山摘起す若菜かな

乳茶如風とすみだ川に遊て

つますとも爰を關屋の若菜哉

子日

此君とけふはひかるゝ小松かな

削懸

正月も影はやさびし削かけ

梅

梅が香の岩にしむ時水の音
むめがゝや心つよくも厚氷
咲かねる梅とあらしの日數かな
詩にねぢれ和歌に匂ふや梅花
三絃も接穂時なりむめの花
香について廻ればもとの梅花
梅が香の外にこほらぬ物は何
むめ咲やとまるもの皆にほひ鳥
梅枝をはづれて寒き入日かな
むめがゝや衣桁にうごく袈裟衣

社頭

梅香や風に百度の向ぢから
紅梅や神のこゝろも堅からず

臥龍梅

紅をねぢれて梅のしほりけり

道〻も此木這てやむめのはな

鶯

うぐひすの九ツねりて初音哉
鶯の鳴そこなふてかくれけり
うぐひすや月の星のと日和乞
鶯の朝隈さぐるはつ音かな

春眠

鶯の中に戸明ぬ都かな

老鶯巣

端居して鶯に顔見しらせん
鶯の音にふくるゝ鰍折／＼は

柳

むつとしてもどれば庭に柳かな
青柳やとし／＼の老のつまさがり
いかづちのはるかにうごく柳かな
裾迄はまだ暮きらぬやなぎ哉
家ひとつ市にしづまる柳かな
二間三間影吹入(いる)るやなぎかな
ゆり分て北枝もはやき柳かな

此庭へ能は這入てやなぎ哉
柳見て柳ほしいとおもひけり
橋にして踏だものから柳かな

霞

洛陽の朝餉過たり春がすみ
かすませて子やおもふらん蘆の鶴

行旅

馬借てかはる／＼にかすみけり

大井川

落來るや霞もあへず大井川

大和行脚留別

うしろにも前にも遠き霞かな

霞闇

誰どのゝ御先追らむ朝がすみ

奈良にて

夕霞たきゞの皷しらべけり

春月

五六丈瀧冴返る月夜かな
折ふしの衞も遠し朧月

鹿もよく寐て朧なり奈良の月
南から出たかもしらずおぼろ月

駿河の國に行脚しける頃、
女の琴彈けるに對して

ふきといふも草のまくらや春の月
春の月櫻ひと枝ひろひげり

猫戀

柊ふむ夜半も有べしねこの戀
濡たらば露とこたへよ猫の戀
おもひ寐の尾に蛇もしつ猫の戀

我庵の老猫にたはぶれて

鏡見ていざおもひきれ猫の戀

白魚

雪帆樓

白魚やそれとしる火の凄からず
しら魚や波わけのぼる友ちから

淡雪

淡雪や側から青き春日山
淡雪の降すがりけり去年の雪

雪解

雪解やゝう〳〵四百八十寺

余寒

酢このみの跡から春の寒さ哉

春風

春風や一度に起る雪の竹

誰をたが待伽羅ならむ春の風

春雨

鶯のぬれて啼なり春の雨

双六を退ば音ありはるの雨

春雨や枯るものには嚢ばかり

夜噺の傘へあまるや春の雨

春雨やあかつき見れば松の雪

はるの雨硯に請て假名かゝん

大津にて

三井寺の鐘きく春の雨夜哉

陽炎

陽炎の掃よせてある屑火かな

濱松里耻

岩角に兜くだけて椿かな

鳳巾

きれ几巾の夕越ゆくやまつち山

きれ凧に主なき須磨のゆふべ哉

海苔

此頃の朝夕やすし海苔二枚

青海苔をとゞけて白し礒の波

仲春

松梅と暮て正月二月かな

神事の跡はほとけの二月哉

紅絹裏のうつればぬるむ水田哉

筆捨山

筆取てむかへば山の笑ひけり

箱根

蹣跛ひく人を笑ふ歟はこね山

雉子

錦木にその尾立る歟雉の聲

髭しぼる諸羽に雉のあぶら哉

あけぼのや櫻をふるふ雉子の聲

たまごにはあぶなき雉のほろゝかな

涅槃

ねはん會やおくれてひとつ飛胡蝶

燕

どちらから化して禿ぞ燕ぞ

雲雀

朝凪やたゞ一すぢにあげ雲雀

ひとつ家に聲降くらす雲雀かな

夜もすがら空に居たかとひばり哉

菜の花に落て麥から雲雀かな

雀子

雀子や余寒の蠅を追まはし

蝶

植木屋の置て行たる胡蝶かな

寐る時はふたつでもなし飛胡蝶

蝶ゝや乞食の夢のうつくしき

つまむかと酢味噌を逃る胡蝶哉

蛙

つちくれにうごく物みな蛙かな

亭の燈の水にうく時かはづ哉
もとの繭に疊も荒て蛙かな
傾城の物ほすかたや鳴かはづ
種室の夜〱にえる蛙かな

富士根方にて

畑うちや大藤内が丸はだか

菫

人ふまぬ都わづかに菫かな

池田の宿にて

先ゆかし熊野が摘たる菫かと

野の宮

そこらひく牛もなつかし菫草

菜花

菜の花にのどけき大和河内哉

春望

春の日や門ゆく梵論の影法師

八橋

杖立て春やむかしの橋ばしら

大礒

祐成が惜みし春の夜明かな

爐塞

爐ふさいで二日もどらぬあるじ哉

苗代

秋風の二葉に寒し苗代田

雛

桃櫻白髪の雛もあらまほし
消かゝる燈もなまめかし夜の雛
三日四日の細みも雛の月夜かな
つれ〲と月見て立り紙雛

草餅

たち屑も女なりけり草の餅
下草の桃にはなれず蓬もち

胡葱

胡葱や小野の小町が物ごのみ
あさつきやどう結ても女文字

桃

桃咲や牛のよだれもやまと歌

汐干

ふり返る女ごゝろの汐干かな

出代

出かはりや四月へまたぐ大男
出かはりや飛鳥井翁て櫻町

花

おれ〱と折せて花のあるじ哉
長閑さは夜にこそあれ花ざかり
花散て猶永き日と成にけり
かばかりの花に置らむ夜の霜
成佛の棺ゆくらん花ざかり
是ほどにちらずばたゝじ花の陰
身にしみて晋聞花の雨夜かな
落たるを拾ふ鳥なし花ざかり
芝居皆やすむでもなし花盛

東叡山

雲雪や世に手をられて花切手

洛陽

歌一首もたぬ山なし花の雲
傘さして駕かく花のみやこ哉

舊都

紅葉より花にかしこし奈良の鹿

芳野

しら雲やちる時花のよし野山

麓にやどりて

めづらしや芳野を下りて花一木

花喰に鮎ものぼる歟よしの川

芳野大瀧

ちる花をあつめて瀧のみかさ哉

苔清水

苔清水花かきわけて結びけり

初瀬

むかし誰被はねてや峯の花

深草元政古墳

月に花に法の杖あり竹三もと

櫻

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

我宿の櫻わすれてくらしけり

割あまる都の外はさくらかな

來た道を又奥にせん櫻がり

ちる櫻ねぢよる人に倦(うむ)とき歟

物惜む老に見よとやちるさくら

夜さくらや三味線彈て人通

しばらく芳野の山中にとゞまりける頃、名ある所〻の花びらつみあつめて、武江の詞友のもとに文遣すとて

ひとつかみしら雲贈る櫻かな

宿かして是へとちるやゆふ櫻

うごかせば月こそ出れちるさくら

辨當で夢見歩行や山さくら

羨山居

櫻戸や腰にはつけぬ鎰(かぎ)わらび

日暮ては寺のものなり山さくら

早蕨の爪はぢく間ぞちる櫻

けふばかり老につもらじ散櫻

庚辰の如月六日家を失ひける時

ちり果て火宅を出たり家櫻

海棠

海棠やおられて來てもまださめず

海棠や花の中よりうす紅葉

躑躅

旅籠屋の夕くれなゐにつゝじ哉

鹿島にて

人の代に成て見上るつゝじかな

若鮎

若鮎の鰭ふりのぼる朝日かな

若鮎の小太刀遣ふて逃にけり

水かへば駒のひま行小鮎かな

山吹

山吹や旭のまゝに暮てゆく

やまぶきや月も尋て澄あたり

藤

投かけてたのむ色なり松に藤

立されぱまだ日は高し藤の花

山寺や一日ふぢの影ぼうし

春夏のおぼつかなさよ藤の花

行春

夕雲雀落るや春のとまりより
ゆく春やどちらへ渡る瀬田の橋
あれ春が笠着て行(ゆく)はきてゆくは
行春や一聲青きすだれうり

蓼太句集　夏之部

更衣

橋ひとつ出懸に寒しころもがへ
我に綿ぬきすまさせて寒さ哉
武士の矢ばせに立て袷かな

鳥酔と洛西に杖を曳て

いさ嵯峨も廻らばまはれ衣がへ

時雨窓に隣て一老婆あり。よく樂天が句を聞。徳山の轉心をすゝめて其深切なるに、四十余里の勞を忘る。

先(まづ)門の姥に用ありころもがへ

白重

すき立て猶黒髪や白かさね
白かさねにくき脊中に物かゝん

若葉

鳥啼てしづ心ある若葉かな

郭公

見ぬ春をこがれ歩行歟ほとゝぎす
是からは鳥の曇やほとゝぎす
郭公一聲夏をさだめけり
耳すますけしよ牡丹よ郭公
釣かゝる鯛から出たりほとゝぎす
竹植て寐ころぶ空やほとゝぎす
鳥影に鳥またれけり郭公

京にて

君がため音や惜むらんほとゝぎす

嵐山にて

二の聲は手をる花なり郭公

箱根

雲踏で聞日も遠しほとゝぎす
ほとゝぎす鳴や氷室の一雫
遠寺から寐よとの鳥やほとゝぎす
かたはらに鳥なきそらや郭公
ほとゝぎす巣を蹴落して出ける歟
一とせに三ツの月見やほとゝぎす
木(き)鳴(なき)して又物たらずほとゝぎす
世を驚の五位ものぞまず郭公

灌佛

山寺や五色にあまる花御堂

牡丹

月はひとつ影は牡丹のひかり哉
櫻ちる果やぼたんの雪丸げ
花はまだ雨ほしあへぬ牡丹かな
白雲の空ゆりすへてぼたん哉
鳥遠うして高欄に牡丹かな

明和九年四月廿五日、深川はせを庵再興成就の日、吏登翁十七回忌をまねきこして

取こして牡丹を蓮のうてなかな

青簾

爪さきを戀のはじめや青簾

葵祭

げに僧は木のはしとこそ諸かづら

杜若

何鳥の冠に着せんかきつばた
鶴越に使は來たりかきつばた

罌粟

しらげしに續てもろき月夜かな

麥秋

乞食せん世はあたゝかにはだか麥
旅寐してしるや麥にも秋の暮
麥の穗も出揃ふ卯月八日かな

茄子

一富士の隱るゝところやはつ茄子

筍

竹の子や花ちるさとの男きれ
筍をゆり出す竹のあらしかな
竹の子や客にほらせて亭主ぶり

鰹

くれなゐは花にかぎらじ初鰹
面白の妻なき宿やはつがつほ

鮓

誰にたが宿がして此ひと夜鮓
津のくにの伯母にこりてや鮓の壓
蓼に露持せて長しすし一夜
いとはずと是にいひけんすしの飯

大磯にて

鮓に肌ふれぬもうれし虎が石

花柚

惟光をふまへて手折花柚かな
一枝はもらひ過たる花柚かな

葛陂山人の洛におもむくを送る。

柚の花や立場〳〵の詩百篇

或人のものいふ女のもてる貝ふたつもてつくりたる盃の形は、さながら棚なし小舟といへる物に似侍ける。是に銘を乞れて

二へぎの花柚も嬉し星の舟

實櫻

實さくらやなを賴もしき吉野山

下闇

下闇に乾かぬ閼伽のしづくかな

黒塚

桑子さへ齒音おそろし木下闇

和歌浦

讀かねる葉の茂なし和歌浦

身延

此山の茂や妙の一字より

宇津山

蔦に道習ふて越るしげり哉

後醍醐帝御廟

百官の高み低みや夏木だち

葭雀

よしきりや漸暮て須磨の浦
隠家は市こそよけれぎやう／＼し

水鶏

日やけ田に水門たゝく水雞哉
菰草の奥は晝なき水鶏かな

翡翠

やどりぎの花ほど蓮に翡翠かな
蓮に居て蓮に遊ばぬ翡翠哉
川蝉の風かほるかとおもひけり

新茶

栂尾

唐土のさびしさ見せて新茶哉

しばらく洛にありて

嵯峨の柴折焚宇治の新茶かな

駿河の國にありける頃、子來子が蘆の湯の舍を音づれけるに、茶の一興あり。

三嶋から飛石いくつ苔のはな
絶ゝに溫泉の古道や苔の花

閑呼鳥

我に來てとまりさう也かんこ鳥
竹靑し木靑しひとり閑呼鳥

桐花

酒桶の脊中ほす日や桐の花

螢

うしろから胸はしり火の螢かな
追れては月にかくるゝほたる哉
遊ぶ手に闇の末つむほたるかな
傘さして螢の音を聞夜かな
關の燈のひとつうごかぬ螢かな

端午

難波津にて

幟見の果はありけり帆懸船

京にて

ほどく時我手の黑き粽かな
常世かと古きも立る兜かな

百煉鏡

煉かけて鏡暮けり五日月

競馬

翠簾越の誰に落けんくらべ馬

忍摺の石を尋て

見てのみやいさ帷子にしのぶずり

五月雨

五月雨やある夜ひそかに松の月
竹ひとつ書おぼへけり皐月雨
さみだれや艪舨にさはる蘆の音
橋を漏水音暗し皐月雨
夜はせめてほたる飛なり五月雨

旅行

川越る日も有なしや皐月雨

逢初川は伊勢熊野の二神はじめてま見えたまふ所とかや。爰に霖雨の夕晴もられしく

紀の月に逢初川や皐月晴

藻花

藻の花や隙なき水の中ながら

田植

松に日をうたひ出したる田植かな

遠里や二筋三すぢ田うへ笠

ひとりして月より淋し田植笠

山陰や人目おもはで田うへうた

乳守の遊女、此御田の乙女つとめてより川竹の名をのがるゝとあるも、ありがたきためしならずや。

住吉御田

神苗やけふをうき身の忘ぐさ

二州橋のほとりに庵を結し頃、山居せば上田三反味噌八斗小者ひとりに水のよい所、とある禪師の狂歌をおもひ出て、そこに商家の名のおかしければ

玉苗の門田持けりいくよ餅

青田

南都覽古

冬田より青田に悲し奈良の京

當麻

青田さへよし染寺の右ひだり

田草

物いはぬ夫婦なりけり田草取

山ひとつ脊中に重し田草取

秋の來る道つくるらん田草とり

若竹

それに競それにくらべて今年竹

岩を出て嬉しさう也ことし竹

どちらからつるゝぞ麻に今年竹

鵜舟

鵜づかひや朝ゝおもひ捨小舟

影も鵜に成てはたらく鵜飼哉

鵜づかひや其子に讓子にゆづり

つかれ鵜や遠寺の鐘も木の間より

照射

句兄弟

祐成がある夜戀せぬ照射かな

時致は山ふみなれてともしかな

蚊遣

隱家の暮て葉に洩蚊やり哉

蚊やりして後夜から里の月夜かな

爰かしこまだ寐ぬ里の蚊遣かな

蚊遣火やうらやましくも松の月

白骨觀

夏痩のわがほねさぐる寐覺かな

祇王寺

尼寺や紅粉白粉も蚊やり草

高野

蚊の居ぬも浮世の外ぞ嶺の月

紙帳

我庵は紙帳かぶせて置うよや

業平の知て居らるゝ紙帳かな

夏草

菊作る思案の外や美人草

しのばるゝものや葵の五六月

花かつみを尋て

里人はわすれ草とも花かつみ

小夜中山

紫陽花や襟につらるゝ八から鉦

紀州親しらず

荒礒や撫子しらず親しらず

秦徐福古墳

撫子の唐をやまとに塚經りぬ

庚辰の春家をうしなひて、晉南總吏仙が別莊にありける頃

杖立てさゝげ這するやどり哉

晝がほやひとり横たふわたし舟

ひるがほやたま／＼むすぶ波の露

晝顔や明るう咲て戀しらず

夕がほや空也の目には卽菩提

瓜

はらばふて瓜むく軒のかげり哉

瓜畑やいざひや／＼と草まくら

氷室

六月を櫻に知るや氷室もり

六月の氷もとゞくみやこかな

祇園會

祇園會や人をもる燈の薄ごろも

祇園會や京は日傘の下を行

富士詣

其夜降宿の浴衣や富士まふで

白河關

片袖は秋の風なり夏ごろも

竹婦人　簟

青きよりおもひそめけり竹婦人

曉は小町がほねや竹婦人

蓬生や手ぬぐひ懸て竹婦人

七符とも三符ともいはず竹婦人

胸髭に風こそわたれたかむしろ

蚤

客ぶりに見送る蚤の行衛哉

團扇

雨の手にうちわ遣ふや小傾城

植つけの田づら見て來る團扇かな

讃

おもしろのうちわや、とれば月、置ば影、おもしろの團扇や。

もの書ばかつらに似たり白團扇

扇

聽聞の跡は扇のあらしかな

いはけなき子にとられたる扇かな

清水

洛より東武におもむくとて

我影に先あふ關の清水かな

涼しさは千尋なりけり苔清水

家ふたつ中に流るゝ清水かな

山伏の汲ほして行清水かな

遊行柳

ひとすくひ腸洗ふ清水かな

自得

晒見てなを惜まるゝ月日かな

暑

市中

三味線にから臼のせてあつさ哉

大津絵に丹の過たる暑さ哉

捨苗の道〻枯てあつさかな

西陣

龍虎織手もあらそふて暑かた

貞徳翁旧跡鳥羽日(實)相寺

夏陰や寺を御傘のあまやどり

かしこに招れて珍膳になかひ、炎に膝を屈しては美味に舌打すれども、枕取たる我庵の夕べは心やすきをおもひ出にして

帷子やぬげば風もつ物ながら

沖鱠

誰人の凱陣よりぞ沖なます

鰹賣の阿字と聞ゆる耳もがな

雲峯

のぼるほどつかる〻日あり雲の峯

蓮

菅笠の影から蓮のうき葉かな

にごれるは葉とそよぎけり蓮の花

白蓮に人影さはる夜明かな

悼吏登翁

六月を経帷子に名残かな

一周忌　画像前

秋またぬ人のもぬけを泣日かな

三廻忌

似た人もなき六月の紙子哉

石碑造立

三伏の夏なき石の膚かた

夕立

夕立や相合傘は晴てから

ゆふだちや地には青田の篠をつく

納涼

皿ひとつ氷にくだく納涼かな

町の燈のひとへ櫻や夕すゞみ

足代に住持のしらぬすゞみかな

岩つたふうつり心や夕すゞみ

涼しさや寺は碁石の音ばかり

木鋏の落葉閑なりゆふすゞみ

神奈川岱

ふところへ入来る帆あり夕すゞみ

白隠禅師相見

涼しさや富士と和尚と田子の浦

龍華寺

わがこゝろ飛かと富士に鷺涼し

下紐関

下紐の関もる母やゆふすゞみ

麻斤が田家にありて

牛馬のこゝろもしりぬ夕すゞみ

四條河原

風涼し扇の立葉浮葉より

太神宮法楽

僧に似たりとて、宮中をゆるされず。五十鈴川の流をへだてゝ拝したてまつる。

我影も鏡にいれて神涼し

ふたゝび武隈の松にいたりて
我老も松のおもはむ下すゞみ

不忘山
かゝる日も雪わすれずの山涼し

夏月
野山より市のものなり夏の月

御祓
人去て誠見えけり御祓川
白鷺に烏帽子着せばや御祓川

蓼太句集 秋之部

立秋
流ゆく茅の輪にしるやけさの秋
驚とめて緘にも立やけさの秋
秋たつや一むら雨の雫より
虫の音の下萠聞や今朝の秋
忘ては秋たつ朝な〳〵かな

一葉
あけぼのゝ青き中より一葉かな
暦ほど音して桐の一葉かな
糸きれて琴にもしるや桐の秋

七夕
明やすき蕣つまん星ひと夜
鵲や橋にあまりてみをつくし
星に琴かりて更行端居哉
宵月や妻越舟のとゞく迄

星まつる夜残の暑忘がたく、
隅田川に小舟をさして
星逢に雪の橋かけよみやこ鳥

仙府の人々にとゞめられて
長居して星の一夜にわらはれん
七種や葛にうらめば萩に露

八日星
立琴も寐せるや星の二日酔

秋草
蕣や秋は朝からあはれなり
あさがほや猶まぼろしの樹ひとへ
我ものに手折(たをれ)ばさびし女郎花
姨捨によろぼひたてり女郎花
荒牧の中に痩けりをみなへし

眞間寺にて
眞間の井や道を千尋にしのぶ草

阿房宮賦をよむ
鬼灯や三千人の秋のこゑ
蓼の花嵐ののちをさかりかな
松風の晝は根にある薄かな
淋しさの都へうれるすゝきかな
くれなゐもかくてはさびし烏瓜

魂祭
月見れば人の顔なり玉まつり
世の中や鯛もくさらず魂まつり

亡師の新霊をむかへて
迎火やこよひふまれぬもの〻影

此客に餉つらばさぞ靈まつり
人のをく露としりつゝ玉祭

燈籠

夜〻は松に秋あり高燈籠
燈籠の中からさびし揚燈籠
燈籠や手をつくしたる風の前

躍

秋風に人まづなびく踊かな

京にて

飛〻に旅人黑きおどりかな

稻妻

稻妻や闇さへ洩て不破の關
いなづまや槇の夜雨のかはく迄

鷸

刈跡の薄にすがるいなごかな

奥州野田玉川

追立て鷸に見ばや川千鳥

稻

夕風や鶴もうごかす稻むしろ

駿府竹林精舍
此ころ推せよ花に五器一具
紫陽花を五器に盛ばや草まくら　この二句を父母にして

刈かゝる田づらも嬉し五器一具

鳴子

引あげて松の月夜や鳴子繩
活て居る身のからくりや鳴子引

添水

秋風の水を切かと添水かな
月細うこぼし減して添水哉

案山子

人先にやもめの立る案山子哉

河内路を過るに

楠のよろひ着せたるかゝしかな

秋蠅

飯もれば這て來るなり秋の蠅

秋蝶

けふ見ればやもめになりぬ秋の蝶
草臥て土にとまるや秋の蝶

虫

日暮ても野は錦なり虫の聲
眼を明ば晝寐なりけり虫の聲
十ばかり耳ある夜也虫のこゑ
虫の音や道ほとあけて長堤
我影の壁にしむ夜やきり〴〵す
冬瓜の腸たつ賊きり〴〵す
あれ聞て痩ぬ虫なしきり〴〵す
人ちかき命になりぬきり〴〵す
蜩や蟬を洩來る秋の聲

文月十日あまり天府雅君に召る。御庭の月いとしら〳〵しけれど、いまだ殘の暑堪がたき頃なりければ、かたへの人〻に仰事有て

虫どもゝ末の露なり砂糖水

蜻蛉

うごく葉の日なたおさへて蜻蛉哉

霧

覺束なはね橋ひとつ霧間より

松嶋にて

朝霧や跡より戀の千松しま

秋風

秋風やかりそめ事の一葉より

秋風に片羽煩ふ胡蝶かな

秋風や人にかけたる蜘の糸

秋の風芙蓉に皺を見付たり

高舘懐古

前後の戎衣一におさまり平泉のさかんなるを見るに、大路に車の行あり歸あり。左右の家々は軒むつび、はしらちぎりて、いとめでたし。蟻のごくにあつまれる人も、顔あたらしう過がてに、いづち行らんもしらず。たけきものゝふは金鞍にまたがり、たをやかなる女房は銀簪をかざす。糸による柳の御所はみどりに、琴の音をたやさず。風かほる伽羅の御所には、袖をひるがへし裳をかゝぐ。猶四方の風色をいはゞ、衣の關は、もろともにたたましものを、といづみ式部が離情をつくし、衣川は、たもとまでこそ波はたちけれ、と源重之が涙をそゝぐ。衣が瀧ころものさと月の山は、ながれに湧、白山には雪のあけぼのをおもふ。國見やま室根山たはしね山は、はなのくもにそひ、えいなせのわたりは、ほとゝぎすのいなせ鳴なり。いはゐの里は木立しぐらみ、金鷄山はあかつきを報じて、時守がつゞみを和するに似たり。はた毛越寺の堂塔四十余、禪房五百餘宇、中尊寺金色堂、經堂、吉祥堂、あらふる神社佛閣、山々日に映じ月にかゞやく。なかんづく、びはの柵は義士和泉三郎の砦にして、碧流岸をうち北上川に落て、高舘にそふたり。源廷尉にかしづきたる屋しき〳〵は、衆星の北辰を遶るがごとく、こゝに立かしこにわかつ。まいて秀衡一門の榮耀さらにいふべくもあらず。口をあまんずるには、鳳を裂、麟をほふる。目をよろこばしむるには炎天の梅花玄冬のさくらも、すべてこのときにおくれじとよそほふ。鶴は九皐のちまたに千秋を諷、龜は十符の浦に万代をことぶきしも、たゞ今たゞ

山そびえ川ながれたり秋の風

仙臺嘉定庵留別

名とり川細うながれて、桑乾の水をわたりしいに

しへのひとの面影もおも
ひ出て

跡先にふるさと持ぬ秋のかぜ

秋蒲吟

秋風や萩もなびくはなすゝき

必観主人の閑亭に、半日の
残暑をわすれ侍て

干てある鐘に来たり秋の風

秋 柳

いそがしや遊び過して散柳

花 野

あだし野に行あたりたる花野哉

追剝に夜はふりかはる花野哉

秋 夜

合歡の木の枕ひかせん老の秋

須 磨

宿借て寐ざめしらばや須磨の秋

諏訪湖水

秋の水に富士をひたして猶寒し

ある人にもてなされて

喰てしるむ玉川や鮎の秋

上總千種濱

しら波の染にあがるや千くさ迄

露

白露の果はありけり六玉川

農家に八十の老を賀して

米の秋杵ふりあげる翁かな

秋 暮

道問ば一里〳〵と秋の暮

鐘つきにのぼるも見えて秋の暮

潮見坂

舟くだく海とは見えず秋の暮

墓ひとつ顔見合せて秋のくれ

眠我と墨水に遊て

木母寺を力なりけり秋のくれ

我庵を客と立けり秋の暮

雪帆樓

捨て行歸帆ならねど秋の暮

高館毛越寺懷古

礎をかぞへあまして秋の暮

蕎麥花

蝶鳥の目にも後段や蕎麥花

蕃 椒

傾城の樂屋おそろし蕃椒

瓢

うか〳〵とまだ花のあるふくべ哉

雁

二羽〳〵とかぞへて悲し雁ひとつ

初雁や平砂にはやき月の霜

初雁や北斗と落る水のうへ

小 鳥

連雀やひとりしだるゝ松の中

鵙の來て一荒見ゆる野山かな

ひよどりの一羽わたらぬ庭もなし

崩してはかぞへなをすや四十雀

文殊奉納

山雀や文殊の智惠のむきくるみ

武庫山

武庫山の眠さますなわたり鳥

下總浦つたひ　二句
朝凪や小雀のとまるみをつくし
鶺鴒や潮來をしへて岩づたひ

芭蕉
さびしさの來る橋懸て芭蕉哉
染かねて我と引さくばせをかな

柹
物荒て時めく柹の木末かな
澁柹や代〻の歌にも撰殘し

待宵
待宵やところ〴〵に女郎花

良夜ちかき頃、蓼且が温泉の山に行を送る。
月の時そちら向ふぞこちらむけ

良夜
月を出て月に野山の入夜かな
ひとつとはおもはぬ夜也けふの月
名月のさがして照や岩間水
名月や巣を守鶴もよもすがら
名月や汐滿來ればさゞれ蟹
名月やねぐらも見えて花に鳥

二州橋邊横石別莊
かつらからさす枝の橋やけふの月

田家にあそびて
浮雲に鳴子ひかばやけふの月
僧はたゝく八百屋の門やけふの月

深川舟逍遙
川上と此川下や月の友
とはせを翁の申されし五本松もたゞ一木殘れり。
十人の月見の友や松ひとり

鹿嶋
笘船を神代の宿に月見かな
名月や何つく音もさらし臼
名月や物うつさじと西へ行
名月や生れかはらば峯の松
名月や月より外にくまもなし
鳧啼て漁村の松の月夜かな
名月や燈をけす風もかつらより

一谷
ふるさとの寄來る波や須磨の月

十六夜
柴屋寺にて
いざよひや闇からあまる鹿の聲
十六夜やこよひは闇の惜まるゝ

初汐
はつ汐や竹の裏行人の聲

野分
金屛に雨吹いるゝ野分かな
岩端の鷲吹はなつ野分かな

駒迎
旅人のはしり抜るや駒むかへ
駒牽や日やけて甲斐の黑おのこ

相撲
大内の砂を土産や相撲とり
しほらしや灸すへたる角力取
女ほど櫛笥持けりすまふとり

眠江亭
みどり子や見る目の前に相撲とり

相撲とろおとこいくたり庭の秋

夜寒　新綿

半分は青き蘆火の夜寒哉

竹賣て枝焚宿の夜寒かな

四十から酒のみ習ふ夜寒かな

里は今綿あたらしき日和哉

菊

荒〻て露もさだまるや菊の花

ものいはず客と亭主と白菊と

傾城の枕ふみてや菊つくり

あの露にうがてる石賊蛆の菊

白菊や花のこぼれて葉の雫

蝶ひとつ菊に喰入日和かな

ひと雫葉から油やきくあはせ

舌たらぬ兒にもとらむ菊の酒

漁村重陽

魚の名も菊色〻のしづくかな

木曾路

家ごとに祖父ある菊の山路哉

婆心公にて

しら菊やあるじの花に暮殘

白きにも浮世の善悪や菊あはせ

後月

若がへる菊のためしや十三夜

鰯つらぬ心に野あり後の月

白魚のかいこ（卵）うごくやのちの月

稲懸て里しづかなり後の月

金澤にて

隈／＼は海士の焚火や十三夜

新蕎麦

新蕎麦とこそ三盃の夢のゝち

新そばや座敷で悟る棒の音

茸

茸狩や月の干潟の小松ばら

尾越鴨

尾を越て命いそがし鴨の聲

うら枯

うら枯や迯ぬ水には丸木橋

うら枯や月の哀よりも日のあはれ

紅葉

九重を中に野山のにしきかな

掃音も聞へてさびし夕紅葉

影落て江はうき草の紅葉哉

人あしの歸がちなるもみぢかな

諏訪秋宮

花よりも紅葉にはこき泪かな

しもつふさ徳聖寺の庭上に
七色のやどりぎあり。

やどりぎや幹を花瓶に花紅葉

碪

是よりして年波よせる碪かな

遠里の都に出來てきぬたかな

目にかゝる月の裸や小夜ぎぬた

轉（こけ）さうな家に碪の拍子かな

あるひとの閑居にいたりて

夜嵐や翌の柚味噌も梢より

釜かけて柚味噌のうらみ閑夜哉

菅野氏の遠眺樓にて

すさまじき長月頃の花火かな

鹿

くれなゐの糸とこそきけ鹿の聲

鹿の音や千尋におろすみなの川

新酒　濁酒

山紫と千種の濱に遊て

新酒あり鶚(みさご)に鮓の所望せん

隈なきをのみくむ物歟にごり酒

落水

帆のうかぶものに成けり落し水

九月盡

秋風と木がらしの出帆入帆かな

錦着て夜ゆく秋を惜みけり

蓼太句集　冬之部

初冬

初冬の機(はた)に入てやきりはたり

時雨

植ながら松にしのぐや初しぐれ

秋風は蓑にのこりて初時雨

色かへぬ葉には露なりはつ時雨

蔦の笠さがしけりはつしぐれ

市中は胡蘿染てしぐれかな

夜座

傘たゝむ音にこそしれ初時雨

今朝見れば松の葉つもる時雨哉

夜もすがら我に髭ふる時雨かな

小春

祖師達の忌日〳〵を小春かな

葉を踏でおなじく惜む小春哉

山は今樵夫の笑ふ小春かな

冴返る日までよく似て小春哉

駿河の人々にわかるゝ時

身ひとつの霞なりけり小春凪

十夜

我戀は婆々になりたる十夜哉

口切

口切や苫の價も唐にしき

芭蕉忌

百回忌を七十年の今日にまねきこして、深川要津寺に佛塚造立の折から、西上人の花の陰にて我死んと詠ぜられしを思ひ出て

我ねがふ小春の望や十二日

駿河路や盧橘も茶の匂ひとありし桃舟亭に興行ありて

はせを忌や飯をゆかりの茶に染ん

掛川より贈れる布をまといて

冬枯や人には葛の居士ころも

落葉

又春の來るとも見えぬ落葉哉

雑冬

さびしさの眼の行方や石蕗の花
十月のあらいそがしや花もみぢ
たくはへて罪なき菴の干菜かな

枯柳

枯柳筏の飯にけぶりけり
枯ゝて月を柳の洩夜かな

冬牡丹

富りとはこゝをいふらん冬牡丹
姿をく柴のあみ戸や夕ぼたん

枯野

牛の尾の外はうごかぬ枯野かな
馬と見て一里は來たり枯野はら

鷦鷯

夕暮の篠のそよぎやみそさゞゐ
見ぬふりに物拾はせんみそさゞゐ

冬籠

灰占に先何待んふゆごもり
おもひかねて月見に出たり冬籠

歸花

おもてきる地主の木の間やかへり花
春雨とおもふ日もありかへり花
夢に似てうつゝも白し歸花

火桶

こぼれ居る官女の中に火桶かな

巨燵

鎧着て須磨のみやこの巨燵かな
長居して巨燵も闇になる夜かな
極樂の道へふみ込こたつかな

凩

木枯や瀬田行ものは月ひとり
凩にこがらし焚てしのぎけり

水仙

河竹の名には流す水仙花

頭巾

きか猿は先飼馴て頭巾かな
傾城の市にかくれて頭巾かな
千鳥鳴うしろ月夜の頭巾哉

紙子衾

羽二重の京に嵯峨ある紙衣かな

客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑を失ふ。

客の來て我に音ある紙子かな

老鶯巣

戸さゝぬを我錦なり紙ぶすま
菜大根鶴見て老をやしなはん

網代守

世わたりのはづれ〳〵に網代かな

ぬくめ鳥

爪たてぬ心もあはれぬくめどり
ある時は一はい鷲やぬくめ鳥

顔見せ

顔見せや紅粉白粉も菊の水
かほみせや誰に遠寺の鐘の聲

髪置

髪置やひと花さける肩ぐるま

霜

鉞立の門たゝくなり霜の聲

橋守へ橋はもどりて霜夜かな

氷つらゝ

障子はるこゝろの水やはつ氷

鴨遠し夜半(なか)の氷いづこまで

一雫しては入日の氷柱かな

炭

賣よりも買人寒し炭二升

更る夜や炭もて炭をくだく音

榾火

身延七面山にて

榾の火や祖師の胡座も眼のあたり

ほだの火や家につたはる老ひとり

水鳥

たゞ一羽離別れて行歟鴨の聲

鴛鴦のちぎりや沓の右ひだり

衢

押分て月こそ出れむらちどり

みを木にもちる物出來て衢かな

蛤にならじ／＼と千鳥かな

うごかすに居ればこほる歟むら衢

千鳥啼夜や名月の照のこし

友見えて月夜の衢嬉しい歟

吹上て汐くもりゆくちどりかな

雪

ともしびを見れば風あり夜の雪

降くらす雪の相手や水ぐるま

暮て行雪のかつらやひとつ松

雪折つ起つ棹さす小舟かな

白雪の中に灯ともす野守かな

頃日の曇さらして木々の雪

僧に對す

掃よせん君いざつくれ雪達磨

途中吟

はるかなる火にあたりけり夜の雪

畠ほど八百屋さがすや夜の雪

蓑脱でひとり湧けり雪の友

はづかしき飯くふ雪のあしたかな

鉢扣

鉢たゝき月夜は見えて哀なり

習はふとおもふ夜もあり鉢たゝき

煤掃

はせを翁の一とせ冬籠ありし橋町ちかく居をうつして

袖の香の蓑にもゆかしすゝ掃

衣配

今年あり裁(たて)ば去年あり衣配

年内立春

ことしとも去年とも見ゆる柳かな

年内立春の日、年わすれもよほし給ふかたにて

春の日をかりて遊ぶやとしわすれ

年忘洩來る椴の木の間より

夜半にくむ年わすれ井は誰が家

絶々に聞ふるしのび音に、

ひとり寐覺る草庵のうち

三絃を廬山の雨やとしのくれ

光陰を觀ず

かくて世は雛づくるなり年の暮

年波の淀とこそ見れしじみ汁

我草の戸は富家の肆にかくれて、樂庵の遊びを妻こふ猫にかへたり。

金銀の氣に物こほる師走かな

淨破利の氷にうつる師走かな

起されて見れば粟蒸師走かな

酒肆は升にいとまなく、茶肆は秤に事しげしと、師走は友のとぼしければ

鼓屋と浮世かたらむとしのくれ

節分

草廬

鬼は外月は内へともる夜かな

厄拂跡はくまなき月夜かな

大豆殼に七歩の吟ややくはらひ

寶船

たからぶね嵐のしらぬ一間かな

空の名殘惜まんと、入來る客には袋巾の桑門あり、鉾をよこたふる武士あり、猶琵琶はさびしく、鋼ははなやかなり。

蓑笠に庵の狭さよたから船

三芳野に旅寐して花の衾の下臥せし妹山脊山の佛も、まのあたり立さらねば

櫻木と戀した文や古こよみ

甚佐の風流をわが貧賤の荷擔にとりて

質にをく物に月あり年の暮

東方未明衣裳轉倒

あしをそらにまどふが、曉かたよりさすがに音なく成ぬるとぞ

祐成が蝶着て出たり年の暮

風鈴ときく時としの名殘かな

松の風　古五子第二出　　蓼太

今茲丙子年六月廿五日、我師東登翁の一周にあたりて、像前に時菓の奠を備、紅涙に筆を染て、諸で尊靈に告。嗚呼不佞蓼太若かりし時、不幸にして薪を負事あたはず。故園の梅は昔ながらの花芳しけれど、軒はとしぐの秋風に荒て、終に世を墨染の袂にもとおもひ立ぬるは、かのいはほの中に住はかは、とよみけむ人の心なるべし。かゝりける中にも、俳諧の狂句を好て隱遁のおもひ出とす。されど浮世の媚に踏違へて、いまだ向上の一路はたどらざりしを、一日蟻考老人と新古の境を論ずるに及で、深川に此師ある事をしりぬ。予南人の指車を得る心地して、彌生の三日とみに小舟もとめて霞をわたる。故人家在二桃花岸一とつくれる日のよそほひなるべし。頓て柴門をたゝけば、

主母幸庵にまかりありと莚をまうけ、寛語や〻終て爰に師弟の恩を荷ふ。折節、渉青葉五平舎等落あひて題を探る。わが俳を試給ふなるべし。是ぞ師恩の始なりける。今なを俤に立て懐舊に腸をちぎる。是より月雪花時鳥、年にねり月にきたへて正斧をこふ。猶思ひあまりて奥の細道の跡たどらまほしく暇申入る。師とゞめて、其國や雪深うして秋より末の初旅心、いと便なからん。近きあたりに足かためせよと、みよし野のたのむの鴈の頼む方に文書てたまふ。此秋は玉川の月にふけり、高雄の錦を袖の面目にして、神無月のはじめいほりに歸りぬ。其頃師は深川にいましけるを、川上とこの川下や月の友　とはせを翁の申されし五本松も程ちかきあたりに、若き人〻草堂を結て折〻むかへてけり。常は空坊四壁のみにして、田夫の壤歌葛西舟の艸帆、をのづからにかよふ。はた西山の山〻は霞に消、霧にあらはれて、もとゞりのごし。この庵守せよと招きたまへるより住る方は人に譲、こゝに菜つみ水くみ、其年も暮にけり。曾て蓼太松嶋に赴けるは卯月中の三日也。小名木川を北へわたりて、先龜戸の瑞籬をぬかづき、長途の末をいのり奉る。師も此所迄見送給て縮柳の吟あり。折からの麥の穗なみ、ほとゝぎす、閑呼鳥とりつかねて唯うつたふるがごとく、離別のなみだ胸にせまりけらし。實其秋やおもひいで羽の國に在けるが、ほのかに傳ふ、武江の本所あるは深川わたりの人、魚鼈となるのおそれ有て、わがしれる堂社こと〴〵く軒をひたせりなど聞ゆるより、されば老師の覺束なさ、なを其人かの人いかに成行けんと、ゆふべの雲を望めども、万里を隔たれば風にむかふ馬もおよぶべからず。たゞ山かなしく浦おもふに絕たり。かくて蓼太江府にたどり入しは十月六日の夕月夜なりしが、先柴門の見しにかはらぬぞうれしかりける。師手を取て、汝が文月七日の文に葉月初の歸路を告たりければ、途中にして此變に逢ぬるよと皆なげきあへり。かしこくも面あはせたりとよろこべる時も、老は先淚もろなりけり。それより漸七とせあまり八とせがほどは須磨に暮、吉野に明て、吾春秋も三十あまりに指を屈す。あゝ師は古稀の齡を跡になして、かの蒼〻たる髮は化して白く、動搖たる齒はぬけ落たり。まことにあはれむべき白頭の翁なりとひとりごち申されしが、此冬門人のあらましは吾にまかせ、冏雨の一句に南花眞人が風を慕ひ、遂の心

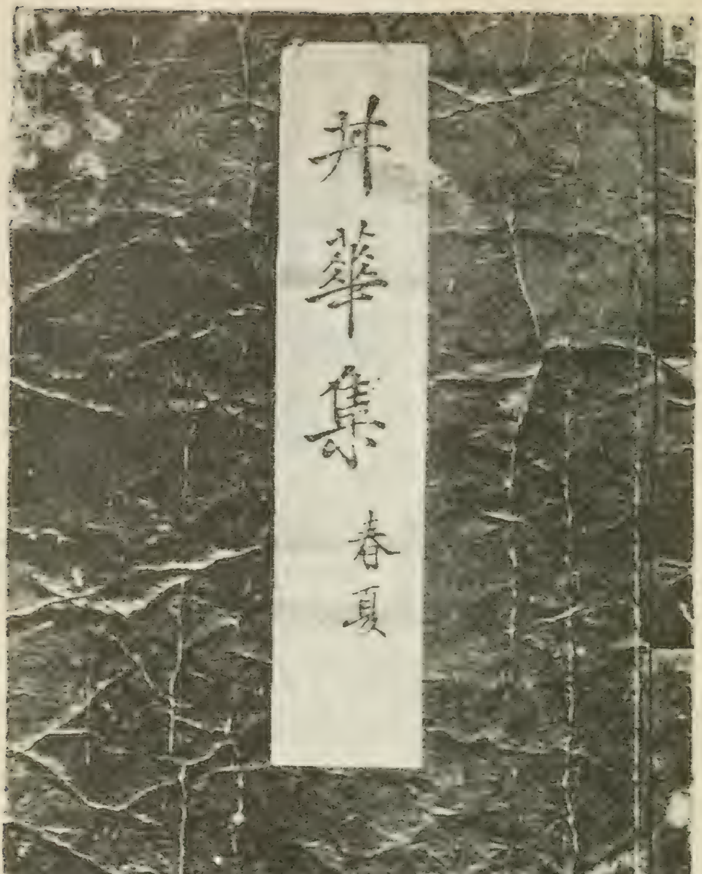
はとげられけり。されば蓼太去年の春は駿河路や盧橘の昔をしたふ人々の招について、卯月皐月の境は其國に在けるを、葛才が文に師のいたつきをおどろかされて、心急ぎの旅はゝきながら、吾又藤枝の驛より暑濕のいたみありて、漸水無月の初草廬にまろび入ぬ。さははか〴〵しくつかふる事あたはず。只緋にすがり空に望むのみ。悔てかへらぬ日數もつもり〳〵て、今年其時其日をおもふ。古人もいへる事あり。言はつくすべく情は終るべからず。よつてもつて五月雨の頃より一日一口の歌仙をつゞり、往事をありのまゝに述ていさゝか師恩に報ふ。又此冊に茂松子が手を借て肖像をうつす。遠して相見ざるの門人、近うしてなつかしとおもへる舊知の人々、一章の手向あらばかならず答あらん。其答るものは何。曉のかねの聲、夕暮の松のあらし。

發句集跋

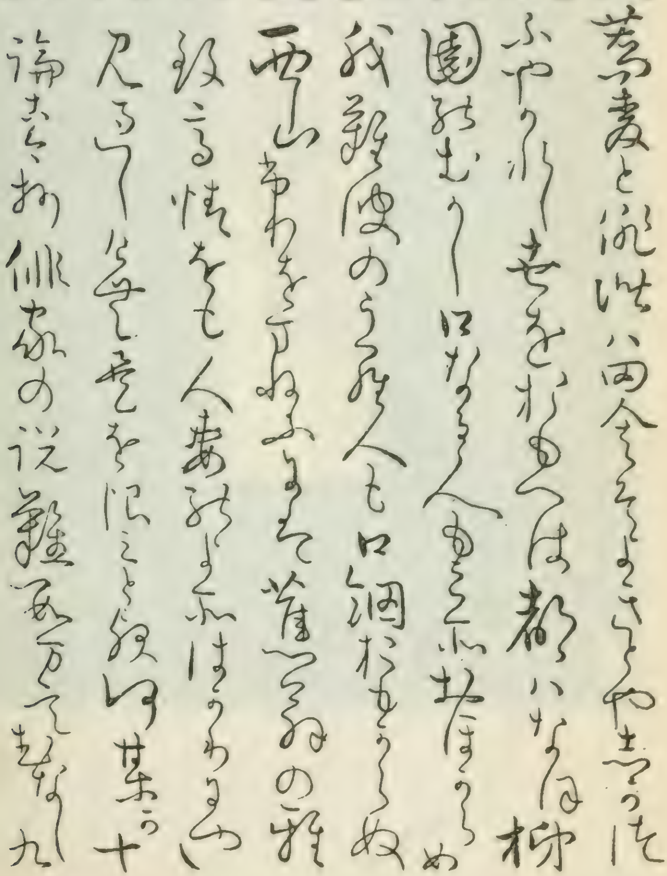
守武の神告曰、俳諧は何にてもなき、あとなしごとを好と、さるかたの言種なれど、何か又世の中それならざらんや。本より連歌に露かはらざる大事ならんかと、誠に雲井をかける時鳥、くゐぜをまもる蛙の聲、いづれか讃佛の縁にあらざるべきやは。家〱の風をあらそひ、蝸牛の角のつのめだちたる、何としてか神佛のこゝろに叶侍るべき。さるが中にも絶たるを起し、廢れたるを新むるは、正しく先達のしはざにして、彼是かよひてあるべし。其實みな落て、其花ひとり盛んに、其花からばしからずして、その實もつぱらほしいまゝなるは、いづれの道にも取れぬにや。九ツの病をのぞき、三ツの品をそなへ、十七の句法をたゞし、おほくの手爾葉をわかち、あまたの姿を定る事はかたきことになん。堪能の人といへども、句ごとに秀逸にあらずとぞ。唯春の水とゞこほりなく、秋の風聞所あらんこそ句の成れるならんか。其なれる句〱撰び集ることは、むかしよりかはらぬものから、世〱の變風は猶有ぬべし。今をもて古にならふるに火水よりも異とは、昔の人もなげき申されしか。梢にほこる花の春をもむかしとながめ、深山に積る朽葉の冬をも古と見んに、取捨は其人の心〱に有ぬべき事にぞ。今の雪中庵主の句〱櫻木に移すよし聞ふるに、其流れ汲我輩の、さすがによしともあしともいふべきにあらねば、今なを古のごとく此道のあとなしごとにはあらじかしと、書林の乞にまかせて筆を取のみ。

時明和六丑の秋

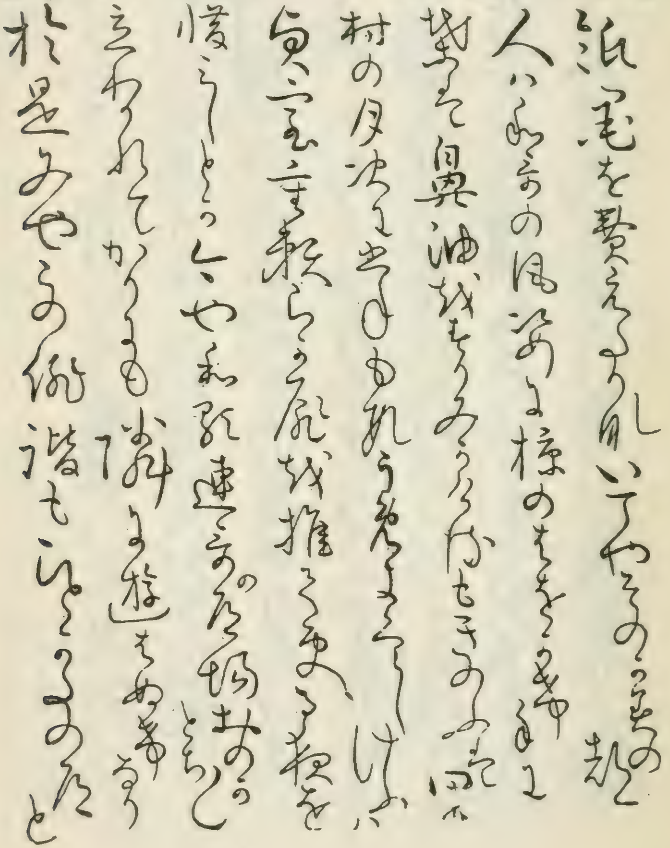
時雨窓月巣


井華集
春夏

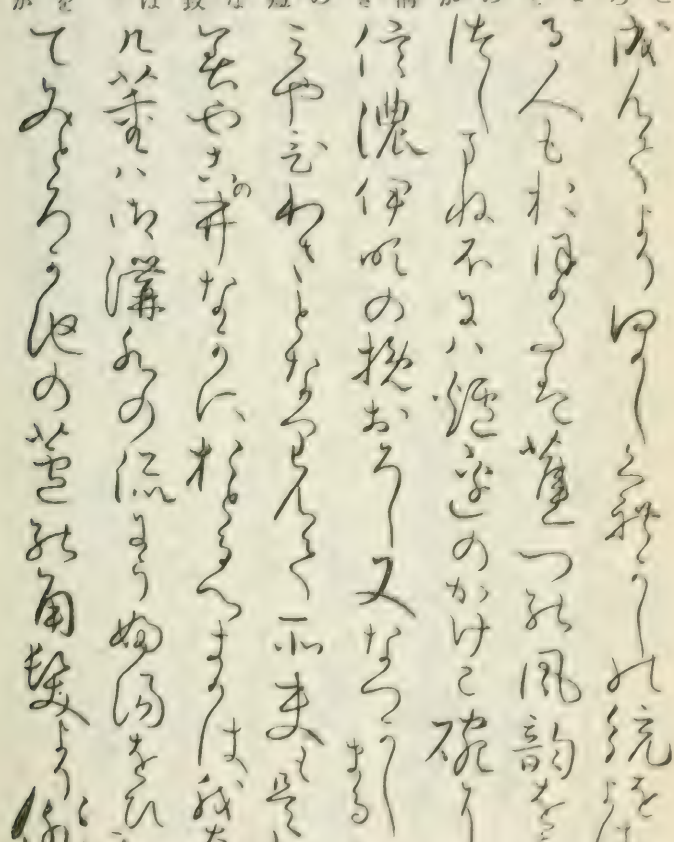
蕎麥と俳諧は田舍ぞよきとや。しかつぶやかれし世をおもへば、都はなほ柿園のむかし口なる人もこそおほからめ。我難波のうら人も口網おもからぬ西山ぶりをまねぶには、蕉翁の雅致高情をも、人妻のよそばかりにや見過しけむ。是を恨みと歟、何某が十論古今抄、俳家の說難數万言、むなしく紙謳を費えたりな。いでやそのかみの都人は、和歌の風姿に



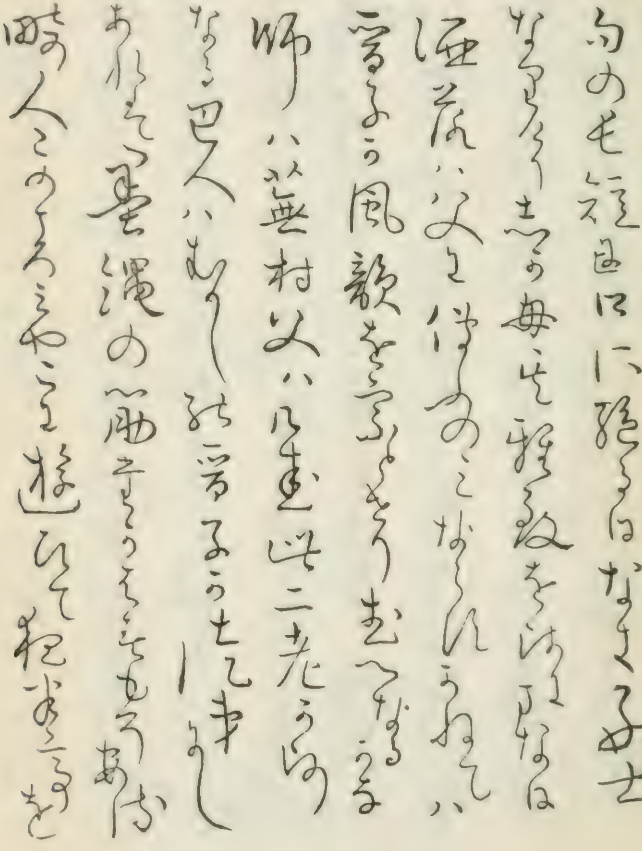
椋のはをかけ、手に葉は鼻油をすりみがけるも、きのふは里村の月次にひねもすうめきくらし、けふは貞室重頼らが屏を推て、更る夜を惜みしとか。今や和歌連歌の道場、おのがどち〳〵立わかれて、かりにも隣に遊ばぬげなり。於是みやこの俳諧もひとかたの道と成んてより、何がしくれがしの統をよばゝる人も、おほかたは蕉門の風韵をうつしまね



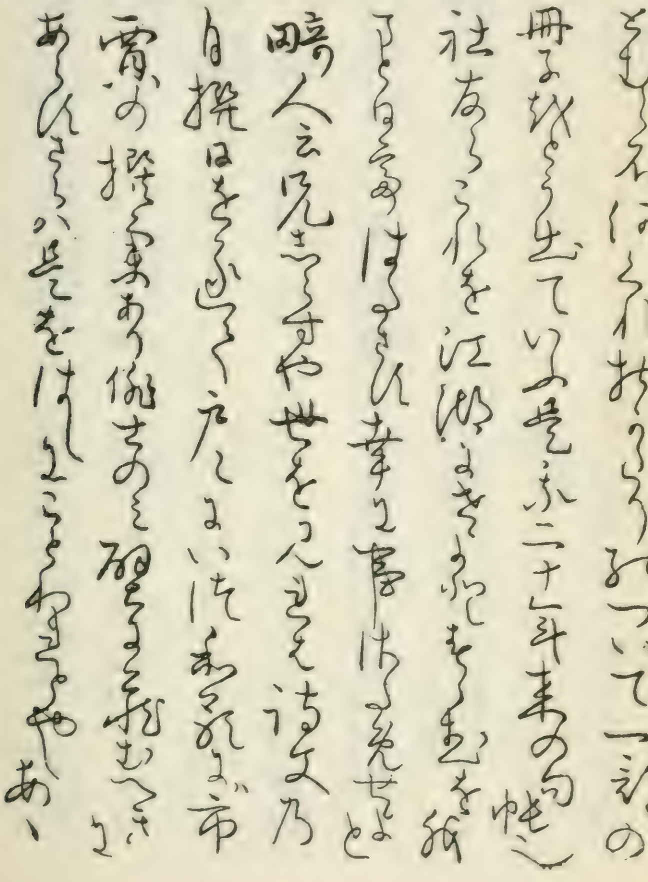
ぶには、爐邊のかけこ
碗に信濃伊吹の挽おろ
し、又なつかしまるゝ
みやびわざとなりんて
ぞ、人も是もみやとの
ゐなかにおとるべきか
は。我友几董は、御溝
水の流にうぶ湯をひき
て、みどろが池の蘆の
角髪より、俳句の長短
口に絶る日なき好士な
りけり。しかも其雅致
を師にまなび、洒落は
父に傳ふのみならず、
かねては晋子が風韻を
宗とせり。むべなるか



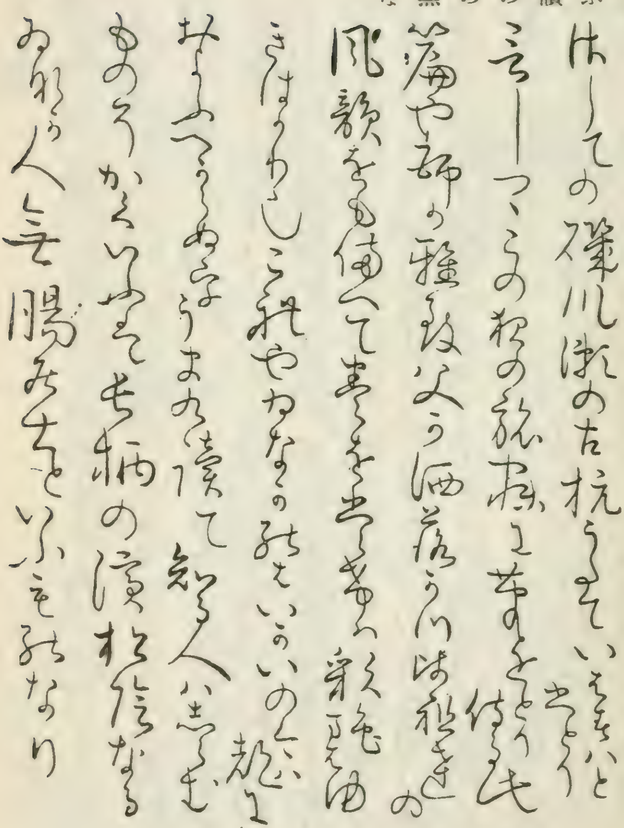
な、師は蕪村、父は几圭、此二老が師なる巴人は、むかしの晋子が徒弟にしあれば、嵐雪の筋たがはずもそある。晤人このごろみやこに遊びて夜半亭をとむらふ。何くれの物がたりのついで、一部の冊子をとう出ていふ、是我二十年来の句帳也。社友らこれを江湖にせよとすゝむを、我まどひてはたさず、若に事さだめせよと。晤人云、兄しらずや、世



を見れば、詩文の自撰日を逐て戸ゝにいづ。和歌には市買の撰集あり、俳士のみ壁に藏むべきにあらず。さらば是をはしにことわれと也。あゝさしでの磯、川瀬の古杭、うたていはずばとひとり言しつつ、この夜の旅寐に筆をとり侍る。此篇や師が雅致、父が洒落、かつ師祖達の風韻をも備へて、卷をひらけば彩色まばゆきばかり也。これやゐなかのはいか

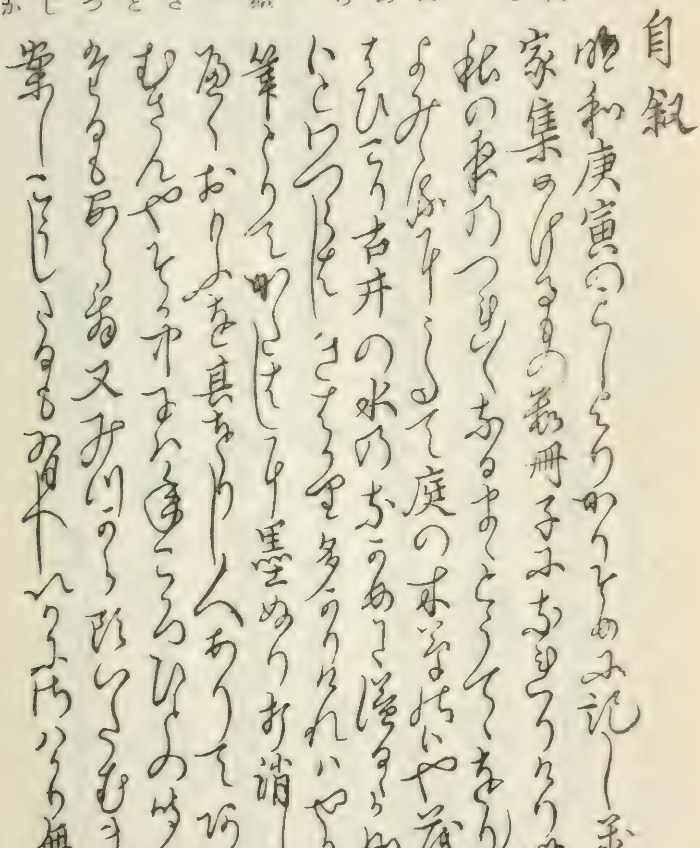


いの、今は都におよぶべからぬを、うまく讀て知る人はしらむものぞ。かくいふは長柄の濱松陰なるゐなか人無腸居士といふものなり。



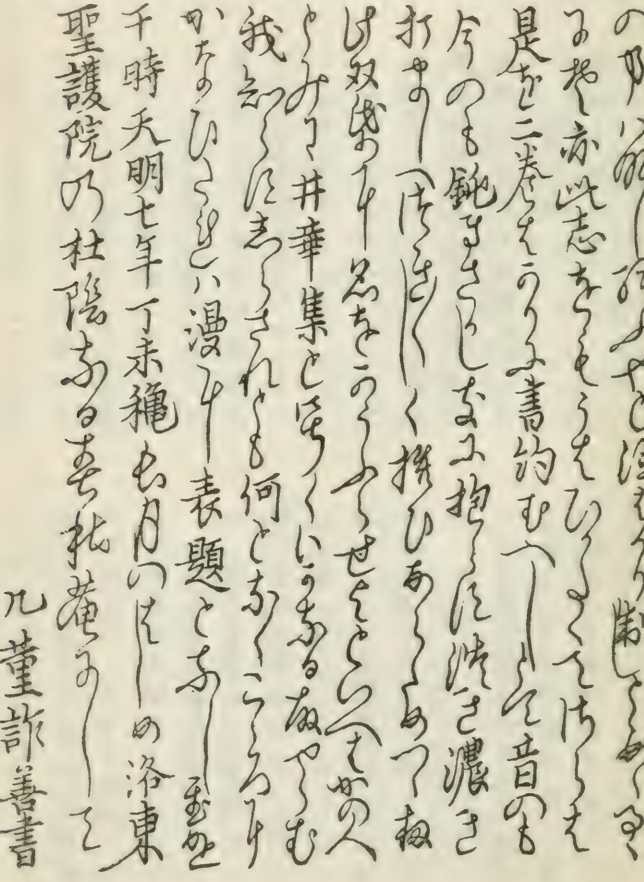
自叙

明和庚寅のとしより、かりそめに記し置る家集めけるもの数冊子になれりけり。此頃秋の夜のつれ〴〵なるまゝ、とらでゝをり〳〵よみゝるに、うたて庭の木草のいや茂りにはひこり、古井の水のながめに溢るゝが如く、いとわづらはしきばかり多かりければ、やがて筆とりてかたはしに墨ぬり打消しぬべくおもふを、其をりし人ありて、あなむざんや、そが中には年ごろひとの聞知たるもあらむ、又みづから頭いたむまで案じこうじたるも有べし。いかにさばか



り無下の事はなし給ふやと、泣ばかり制しとゞめらるゝにぞ、亦此志をもうばひがたくて、さらば是を二卷ばかりに書約むべしとて、昔のも今のも、鈍きさかしきに拘らず、淡き濃き打まじへ、つきぐ\しく撰びあらためつゝ、扨此双紙に名をかうぶらせよといへば、かの人とみに井華集と號く。いかなる故やらむ我知らず。しらざれども何となくこころにかなひたれば、漫に表題となし置ぬ。于時天明七年丁未秋長月のはじめ、洛東聖護院の杜陰なる春秋菴にして

几董詐善書



うぐひすの卯時雨に高音哉
鶯の隣へ逃てはつねかな
うぐひすやいせ路を出る暦彫

偶感

羽洗ふ鶯も見ゆ紙屋河
鶯の腥にかゝるや枯かつら

市中

鶯の二度來る日あり來ぬ日がち
鶯のたつ羽音して高音かな
初音して鶯下りぬ臼のもと

金衣公子

うぐひすや小太刀佩たる身のひねり
鶯や日の出の後の霜ぐもり

筥根にて

うぐひすに松明しらむ山路哉

新鶯

うぐひすの訛かはゆき若音かな

梅花見にこそ來つれ、とうたひ
て

鶯よ何がこはうて逃じたく
うぐひすの影ぼし見えて初音哉

狂雲妬佳月

梅がゝに狂ふがどし月の雲
埒もなき荊が中の野梅かな
見ぐるしき疊の焦や梅の影
梅ちるや京の酒屋の二升樽

山人に花咲ぬやとたづぬれば

咲散もいさしら梅の伏見人
をちこちや梅の木間のふしみ人

遠望

しら梅に餘寒の雲のかゝる也
牆を蹈で罪得べしこの梅が宿
狼藉を從者とはるや垣の梅
白梅にこはそも氷雨の降日哉

但聞人語響

梅寒し奴にくるゝ小盃
ぬつくりと寐て居る猫や梅の股
から鶏や梅の中行懐手

とりべ野舟岡の煙立さらでのみ
と、無常迅速の世のならひなが
ら、春の日のうらゝかなるけしき
には、人の命ものばはる心地す。

野梅咲て挽歌きこえずなりにけり
耕さぬ人に見らるゝ野梅哉
木に殘るこゝろや手折梅の花
梅の春鰒かくばかり白かつし

詩をうたひ、畫を工のあまり、
阮咸が風流をたしな者あり。

梅の窓に三線ひくや毛唐人

離別

戀々として柳遠のく舟路哉
若柳枝空さまにみどりかな

春水

わたりふたつ見えて夕日の柳哉
青柳やはつ神鳴の雨の後
寒かりし月を濁らす柳かな

辛崎の松は花より朧にて、とい
へるは、さゞ浪やまのゝ入江に
駒とめて比らの高根の花を見る

哉。たゞ眼前なるはとありける
とぞ。

比良の雪大津の柳かすみけり

犬に逃て庭鳥上る柳かな

さし木の柳の生立たるを愛して
寓居の柱に書。

老そめてとにめでたき柳かな

しばし見む柳がもとの小鮒市

春風如刀

貌いたき風のよそ目に柳哉

子日

手を添て引せまいらす小松哉

まないたの七野に響くわかなかな

七草に鼠が戀もわかれけり

蛤の煮汁かゝるや春小袖

賣引の宵は過つゝあはぬ戀

さめたらんほど念佛し給へと、
法然上人の答給ふ。いとたふと
かりけり。

氣にむかばねぶつ申せよ御忌の場

着だふれの京を見に出よ御忌詣

やぶ入の脛をしかくす野風哉

やぶ入や命の恩の醫師の門

藪入やついたち安き中二日

やぶ入の我に遅しや親の足

五雲、東府の俳士を催して、北野
聖廟奉納の句勸進し侍りけるに

白梅や機婦にねたまぬ花一重

田家

大事がる柿の木枯て梅の花

園日渉以成趣

荒につく畠の柳みどりせり

賣家のいせが軒ばや猫の戀

轉び落し音してやみぬねこの戀

琴の緒に足繫がれつうかれ猫

餘寒

よき衣に春の寒さをしのびけり

正月や胼いたましき釆女達

春寒く二ッ残りし鷄卵酒

春水滿四澤

あふれ越野澤や芹の二番生

日は落て増かとぞ見ゆる春の水

さす棹の拳にのるや春の水

五器皿を洗ふ我世やはるの水

川風寒み千鳥鳴也といへば、人
をして炎暑にも寒からしむとか
や。あるは蛙飛込と、水音を覩じ
たる言外の餘情、それらの妙境
は及ぶべくもあらねど

夕されば千鳥とぶ也春の水

磯山や小松が中をはるの水

野も山も冬のまゝじやに春の水

雪に折し竹の下行春の水

畫に光琳有、俳諧に鬼貫アリ。

行水や春のこゝろの置所

市陌

繪草紙に鎭おく店や春の風

春風のこそつかせけり炭俵

途にあふて手紙披ケば春のかぜ

少年行

春雨や簑の下なる戀ごろも

春雨に似氣なき雷の響哉
春雨や造化へもどす壺の壓
春雨や鼻うちくぼむ壬生の面
薄ゝ春雲籠晴月
賤男に道蹈かへんおぼろ月
おぼろ夜や南下りにひがし山
あじろ木のゆるぐ夜頃や朧月
三盃の酒にうかれて風雲の癖し
のびあたし、
しやせまし志賀の山越おぼろ月
塩山亭
寝ぬべき西山遣しおぼろ月
春の夜や柚を蹈つぶす小枚じき
海邊の曙といふ題に
むらさきに夜は明かゝる春の海
春の夜や連歌滿たる九條殿
鉢盆のよし野もゆかし露のとう
物咎ム伏見の畑や露の蕊
南都にて
熊坂に春の夜しらむ薪かな
元日の辟詑に來る二月哉
二日灸花見る命大事也
如月や一日誕(だま)す海の凪
傾城に莨蕩くはす彼岸哉
一休は何とおよるぞ涅槃の日
或山寺にとまりて
水に落し椿の氷る餘寒哉
奉納いせ太神宮
有がたさ餘りて寒し神の場
畫賛
紅梅に睡れり衛士の又五郎
紅梅に衣もどし行や盗人等
野鳥の巣にくはへ行木芽かな
田家
乙鳥や雪に撓みし梁の上
燕や流のこりし家二軒
むら燕牛の胯ぐら潜りけり
市鄽
つばくらや夜の鮓買の驚かす
村深し燕つるむ門むしろ
淀鳥羽のわたりにて
乙鳥や轍の小魚つかみゆく
旅意
三條をゆかみもて行霞かな
こたつ出てまだ日の覺ぬ霞哉
待日には來であなかまの蜆うり
干鱈やくつゝじの柴や燃んとす
遊糸白日靜
いとゆふにいとしづか也松の風
陽炎や酒にぬれたる舞扇
まさご路や陽炎を追波がしら
土脉潤起
焼寺も春來て萩のわか葉哉
かげろふや泥脚かはくくわい掘
晉子七十年懐古
夕がすみおもへば隔ッむかし哉
八巾(たこ)の尾の我家はなるゝうれしさよ

海士の子や舟の中より紙鳶
颸のそなた長閑にいかのぼり

西行忌

骨をもて作れば和歌の聲美也

點印箇の裏書を望れて
濱の眞砂路の遠き近きをうか
がひつ、句の甲乙を撰に、丹
青の色をもて分ち侍る。

えりわけむ眞蘇枋の小貝海苔の屑

倣素堂口質

雁がねも春の夕暮となりけり
風呂の戸をあけて鴈見る名殘哉

客中野遊吟

紅裏は屋敷女中歟遠雉子
きじ鳴や暮を限の舟わたし
虹の根に雉啼雨の晴間かな

句合に

三井寺の鐘はくるゝに雉子の聲
小松野ゝ蕨薬廣に成にけり
土を出て市に二寸のわらび哉
野を燒や小町が髑髏不言

野行

拔捨し野葱土かはく春日かな
摘草や印籠提し尼の公
道の記に假の栞やつく〴〵し
たんぽゝや五柳親父がしたし物

芭蕉菴の松宗和尚へせうそこに

椎の葉に盛こぼすらし春の雪
山かげの夜明をのぼる雲雀かな
起臥や身を雲介が友ひばり

應擧が畵に

春のあはれ雉子うつ音も霞けり

嶋原の歸さ

桐油嗅き駕に蛙を聞夜哉
飛〳〵に芹の葉伸や鳴かはづ
啼蛙神もはじめて鳴ル夜かな
三日月の影蹈濁すかはづ哉

村落

さむしろや蝶も卷込俄あめ
舟につむ植木に蝶のわかれ哉
峰の巣に爰源八の宮居かな
畑をうつ翁が頭巾ゆがみけり
苗代やある夜見そめし稻の妻
初草に心づよさよ春のしも
はづかしと客に隱すや田螺あへ

亡母二十五回忌

花の雲ばさちの數と經りにけり
咲をさへおどろくに散はつざくら

禁城の御みぎりを徘徊して

いとまあるけふまだ咲ぬさくら哉
散と見し夢もひとゝせ初櫻
そゝこ(か)しきあるじが接木おぼつかな
僧に成兒にはくれじ雀の子

上巳

雪信が屛風も見えつ雛祭
うら店やたんすの上のひな祭
雛酒や汐干を語る國家老
雛の日や翌旅にたつ客もあり

桃の日や雛なき家の冷じき

塩よし浦にて

落かゝる日に怖氣だつ汐干哉
鯛を切鈍きはものや桃の宿
もゝ咲ぬ誰喰さしの實生より
加持すとて群來る人や桃の宿

初瀬にて

こもりくの峰にさゝれないと櫻
淵青し石に抱つく山さくら
松伐しあとの日なたや山櫻

雨中多武峯

雲を蹈山路に雨のさくら哉
咲出てあらせはしなの櫻かな

夜は嵐の吹ぬものかは

けふ來ずて見ぬ友ゆかし山櫻
月のあかき夜はたのみある櫻哉

東山吟歩

大坂の遊女かしらずさくら狩
さむしろに錢置花のわかれ哉

勅額のたふとくかすむ櫻かな

絶壁懸河を渡て日毎に越來るは、
いと危き世わたり也けり。

筏士の嵯峨に花見る命かな

はじめて吉野山に遊びける時、
あけぼの夕暮の花をありきつゝ

二日見ていかさま花のよし野山

芭蕉翁百年忌

花といふ論定りぬさくら人

大和の何來といふ人、はつせ山
のかたはらに蕉翁の碑を封薄し、
こもりく塚と號く。翁や生涯漂
泊を恒とし、五天に白髪の勞を
いとはず。片雲の風にしたがひ
とゞまる所を知らざるがごとし。

雲水の香をせきとめて花の塚

雨日仁和寺に遊ぶ。

晴るよと見ればかつ散雨のはな
門賣の花屋が手よりちる櫻
かしこくも花見に來たり翌は雨
花過て雨にも疎くなりにけり

花に來て詫よ嵯峨のゝ艸の餅

須磨

葉櫻の中〳〵ゆかし花の中
秋といひし哀をすまの山さくら
女夫して住持醉しぬ花に鐘
元日の雲かさなりてさくら哉
夜櫻に青侍が音頭かな

分題飲中八仙
宗之瀟洒美少年
擧觴白眼望青天

醉て猶眼涼しやさくら人
慮外して祿かづきたる花見哉
植木屋の花うれぬ間に盛かな

觀想

廿とせの小町が眉に落花かな
花競ふ寺としもなしひがし山
底たゝく春の隅より遲ざくら

少年行

花手折美人縛らん春ひと夜
打とけて我にちる也夕さくら

君見ずや花に我等がおとし文

西行上人の意を追て鬼貫が口拍子に倣ふ。

來たか來い見ずに置てもちる花ぞ

識盈虚之有數

百花咲てかなしび起るゆふべ哉
花過てよし野出る日やわすれ霜
長き日の春中に暑しおそ櫻
遅き日やひとへからげる草履道
影遅し魚餌について日三竿

對酌

遅き日や清(すめ)ルは昇る飴あへもの
長日や宿替の荷の殿ス
長日を羽織着ながら寐たりけり

題しらず

蹇の顔ほがらかに春日哉
出代の跡濁さじやぬか袋
出かはりし身のかたづきや草枕

佐久良太比之辭

かの大臣の都に潮を汲せ給ひし風流には似氣なけれど、鯛の塩竈焼といふ物を製して、をの〳〵箸を下し、盃を銜むの興に乗じつゝ、やがて酔中の吟を諷ふ。其吟二句。

腸を牡丹と串せさくら鯛
山葵酢に肝をねらふや丸炙

春眠不覺曉

春の泊鯛呼聲や蛽のかた
門口に風呂たく春のとまり哉
關札やどなたのとまり春夕
僕ガ妻メの絹着て歸る春のくれ
今着キし澤菴漬て春ゆふべ

無聲詩

山吹や胡粉の見ゆる雨の後

有聲畫

山吹やさしぬき濡るゝ歩わたり
棣棠の影さす掘は夕月夜

逆旅

山吹にめで損ひやわるい宿

白馬金鞍入誰家

すみれ蹈で今去(さる)馬の跡かな
菫踏で石垣のぼる戀路かな
菫野や今見し昔なつかしき
五加木垣都の客を覗きけり
家ぬしの摘にわせたるうこぎ哉

奉納玉津島

おもしろき名の有がたやわかの春
青海苔や石の窪ミのわすれ汐
鮎汲や喜撰が嶽に雲かゝる

柑子を惜しみて砌を圍たる人の心こそいやしまるれ。

あだ花と聞ばけだかし梨のはな
いざ春に生(おふ)のうら梨花は今
紺かきが竹虎(もがり)がくれや花林檎
月中の盗人落よ李花白し

安良居祭

やすらゐや鬼も籠れる若草野
ばゝ嗅の肩ぬぐ空や御身拭

朱雀野にて

桑の花や雲たち隔つ霞の山
桑の花の紀路見越すや山のきれ
雪踏にて辿る山路のつゝじ哉

蝶夢不遇

草の戸や蘂を簪に蝶の留主
嘘ふたひで桑といふ病うつりけり
表具師が無沙汰呵りつ嘘の名殘

芳野の山廻りして

春過て夏箕の川や藤のはな
藤咲て田中の松も見られけり
白藤や猶さかのぼる淵の鮎
源氏などほのめく藤のあるじ哉
誰願ぞ地藏縛りし藤の花
藤橋やおもき身を越す孕鹿

花に醉、鳥にうかれ、あるは青樓の宿酒に三春の曉をおぼえざるも、又風流洒落のためにつかはるゝ奴なるべし。

死なでやみぬいたづらものよ暮の春
閑の戸に鎖おろす春の名殘哉

春暮ぬ醉中の詩に墨ぬらん

對友人

行燈をと℃さず春を惜しみけり
大名のひと夜島原くれの春
暮んとす春の狂ひや雹ふる
草臥て寐し間に春は暮にけり
還俗のあたま痒しや暮の春
行春や狸もすなる夜の宴
めづらしと見るもの毎に春や行
おこたりし返事かく日や彌生盡
ほとゝぎす古き夜明のけしき哉
月よりは上ゆくものかほとゝぎす
子規飯おとしの折からに

靜座

睡氣さす魔を蹴て行や子規
ほとゝぎす啼かと待ば蛛の糸

芭蕉菴にて

時鳥あとは松吹あらし哉

ほとゝぎすいかに若衆の聲がはり
ほとゝぎす咒詛の釘うつ梢より

詩仙堂の邊にて子規のしきりに鳴けるにぞ、丈山先生の、わたらじなせみの小河の、といへる歌をおもひ出て

ほとゝぎす鴨河越えぬ恨かな
あかつきや地震の後の杜鵑

丹青の彩をからず、うす墨を引はえたるごときよこ雲のたえ間より

ほとゝぎす天狗の礫ゆるせかし
探幽があけぼのゝ夢や子規
伏見の夜急に更たり杜鵑

峨山聞子規

まぼろしの花忘れめや蜀鳥

かさねばうとしいざ二人ねん

寒しとは小町が嘘よほとゝぎす
曉のかねてしゞまやほとゝぎす
子規けふはきのふと成夜かな

あればとてたのまれぬ哉契はまたきのふとけふはいはるべければ　西行上人

亂鶯欺子規

飛啼の若音あやなし時鳥

松浦佳則亭にて、短冊かけに句を望みけるに

とばしりし墨も頓阿の杜鵑

ほとゝぎす路通はもとの乞食哉

五斗俵の地をはなるゝや更衣

袷着てむかしごゝろや花の塵

病ム人のうらやみ顔や更衣

誤落塵網中

町内に家振舞ありころもがへ

馬の脊にかろく跨る袷かな

小褄より針ひねり出す袷哉

ある家にて

牡丹二代連歌は劣るあるじ哉

百兩のなき魂もゆるぼたん哉

ぼたん畑小草に箸を下す也

或御方にて

牡丹芳御坊主蜂にさゝれたり

ねたまるゝ人の園生のぼたん哉

此寺のぼたんや旅の拾ひもの

閨怨

短夜や妹がほむらの有あかし

みじか夜に敵の後を通りけり

旅泊曙

短夜や空とわかるゝ海の色

みじか夜を四郎兵衛が假寐かな

短夜や蟵の脱(もぬけ)に朝あらし

後朝

短夜や伽羅の匂ひの胸ふくれ

みじか夜は犬の鼾に雀かな

兵庫にて

短夜や蛸這のぼる米俵

短夜の香をなつかしみひと夜蕈

今少しなれぬを鮓の富貴哉

なれきとやいざとけ眞木の杜鮓

兼好法師の口まねして

下部等に酒もり過そ鯖のすし

ほとゝぎす待頃、北潟にて漁し鯖のうをに、活ながら薄しほきりたるものを早鯖といふて、都かたにて初がつほに代るもの也。

沖塩のはやせを戀や蓼の雨

卯花に加茂の酸漿のにほひ哉

千里蓴羹末下鹽鼓といふ題をもて、おの／＼句を合せけるに

幽菴が便ゆかしきぬなは哉

かきねにきえぬ雪と見るまで、と詠じけん

うのはなに寒き日も有山里は

明いそぐ夜のうつくしや竹の月

白罌粟に煤はく家や加茂の里

たれこめて祭見る家や薫す

荒たる家の籬さし覗きたれば、いやしからぬ女の里居とおぼしくてイみゐたる、いとゆかしくおぼえけるに

卯花や薄痘(いも)がほにしろいもの

筍に拾り添たりしやがの花

鳥散餘花落

かきつばた魚や過けん葉の動き

等閑に杜若咲く古江かな

伏水任口上人の舊房にて

よし吹やわか葉ながらの青簾

嵐して藤あらはるゝわか葉哉

巣なす樹もえだかはす若葉哉

わか葉して親と子跡き雀かな

葉櫻に一木はさまやわか楓

蟬に虫も聲添ふわかば哉

奉納石清水

君が代や今もわか葉の男山

むら雨の音しづまればかんこどり

かんこどり樹下に虱を捫る時

ねぶの木のその花鳥や布穀(かっこどり)

布引瀧

山鳥の尾上に瀧の女夫かな

瀧見して袖かき合すあはせ哉

郊外

麥うたや野鍛冶が槌も交へうつ

麥歌の聲まね行や琵琶法師

麥秋や埃りの中を薩摩殿

麥秋の草臥聲や念佛講

奉里が姉古友、洛にて薙髪し侍るに

うき草を拂へば涼し水の月

家事の公務に就て東武に赴く袁湖に餞す。

旅涼しうら表なき夏ごろも

戀

しのぶ艸顔に墨つく夏書哉

すゑ摘の母屋の柱に飛蟻かな

小角力が舊きにかへる酒煮哉

端五

髭黒の上手又出よくらべ馬

此非吾所以居處子

菖蒲太刀芝居に近き家かへむ

さみだれや船路にちかき遊女町

五月雨の猶も降べき小雨かな

さみだれの夜は音もせで明にけり

さみだれの空や月日のぬれ鼠

二日とまるは下々の下の客

宗鑑が竹の挽香を蚊遣かな

蚊やり木にたま〳〵沈の匂ひ哉

我につらし起て蚊をやく君が貌

蚊柱や蜘蛛の工のうら手より

鷄の寐つかぬ宿の蚊やり哉

蚊はつらく蚊遣いぶせきうき世哉

君が手のつめたさ見たり幮の月

吹折て蓬のむせびしかやり哉

夕殿蛍飛思悄然

あるじなき几帳にとまる螢かな

うき舟や痞おさへてほたる狩

水うみの低きに就て行ほたる

みたらし河に遊て

行水に誘れがほの花藻哉

川越(こえ)し女の脛に花藻哉

葭雀や曉て一二のみをつくし
川風や鵜縄つくらふ小手の上に
廣ごらぬ網や貴人の肱白し
えものある網やうれしきひそみ聲

有感

生て世にひとの年忌や初茄子
初瓜の價きのふのむかし哉

白砧百ケ日に

橘のかたみの衣に夏書せん
放参の鐘鳴かたや夏木立
神鳴の上りし松や夏の月
古君の化粧上手や夏の月
拔身賊と鞘のひかりや夏の月

堀川百首に、ゆひもやとはで早苗とりてむ、とあるに

雇はれて老なるゆひが田歌かな
湖の水かたぶけて田植かな
玉苗やけふ手よごしの二三反

村居

かしこくも盜人は來で水鷄哉

神樂岡崎の隱士高橋氏、住る庵の四隅より望るところの山岳を題して、詩歌連俳の詠を集めらるゝに、予は生駒山を得たり。

角豆とる籬のそなたやいこま山

金福寺芭蕉菴再成

角文字のいほりに題すかたつぶり
三日月の木ずゑに近し蝸牛
ひよんの葉の落てありくや蝸牛
罪深く夜を寐ぬ蝠や瓜の皮
毛虫這背中おかしや郭槖駝
いとし子に毛虫とりつくはし居哉
代官に妖(ばけ)て瓜喰ふ狐かな

扇合に

流れ來てなでしこによる扇かな
夜歩行の露にとぢたる扇哉

讀李斯傳

厠なる扇も喰らふ鼠かな
暗がりへ要のはしるあふぎ哉
うたゝ寐の夢想書とる團(うちは)かな
秋ならぬ閨の團扇や君と我

祇園會

うす痘の見えずていとし鉾の兒
酒ゆるす醫師(くすし)も見えてゆふ涼
涼しさや遠く茶運ぶ寺扈從
すゞしさや絹着ておはす老和尚

雨後、大德寺に遊ぶ。

涼しさやこぼれもやらぬ松の露
涼しさや花屋が店の秋の艸

醉登高閣

すゞしさや遣水うつるかけ鏡
涼しさや再びともす燭の下

あかしに遊ぶ。

こよろぎのいそ魚買んゆふ涼
夏瘦やあしたゆふべの食好み
撫子に霜見むまでの暑かな
水のめば腹のふくるゝあつさ哉
あつき日の都や鯛の耻さらし

金剛杖いかめしく、突ならし法螺貝かまびすく吹立行つらつき

いと愛なし。

暑日や御嶽まうでのさばき髪

難波橋の邊に舟泛て遊びけるに江南江北の遊客の舟花やかに、所せきまで漕出たり。

我を招く玉むし出よ涼ぶね

夜涼や露置く萩の繪帷子

醉中

葛水や工數を憎む女あり

くず水やうかべる塵を爪はじき

我等亦儒子

譬喩品の虫殺さじと拂けり

晒物のいく代めでたし虫拂

着すぐれぬ伯母の小袖や土用干

かなしくす小娵が貌の熱痱かな

汗拭や左袒ぐ夏芝居

あとさまに小魚流るゝ清水哉

山寺や綠の下なる苔しみづ

穢多むらのうらを流るゝ清水哉

山吹のわすれ花さくしみづかな

田中勘左衞門が愛蓮は、周茂叔をあざむくと聞え侍りしか。

茂助田に愛すともなき蓮かな

いゐの香に朝氣の蓮を愛す也

わけ入や浮葉乘越蓮見舟

けふもまた午の貝こそ吹つなれひつじの歩みちかづきぬらし

夕だちやけふのあゆみも未申

ゆふ立やよみがへりたる驍馬

白雨や水晶のずゞのきるゝ音

夕だちや傘を借す世は情

夏日

雲峯大工屋根やを憐めり

鬚のおし動かすや雲峯

かげろひし雲又去て蟬の聲

手に持ば手にわづらはし夏羽織

わすれゐし帷子ありぬ妹が許

難波梅女が母薙髪しけるよし告こしけるに

剃捨し髪や涼しき蓮の糸

夕がほや鼠葬るめくら兒

万民雨を悦ぶ。

喜雨亭に夕風わたる靑田かな

難題を集て探りけるに

桑の實や兒にまいらす李氏が環

瓜冷す井を借りに來る小家哉

待うけて醫師にすゝむる甜瓜哉

酢院を水主あやまちそ沖膾

夏日鳥卵の美を愛し、冬夜鯉鮒の冷味を賞す。よろづに珍しきを好むは、長安繁華の人氣なりけらし。

新芋に先六月の月見かな

夕がほやくれと呼るゝ油賣

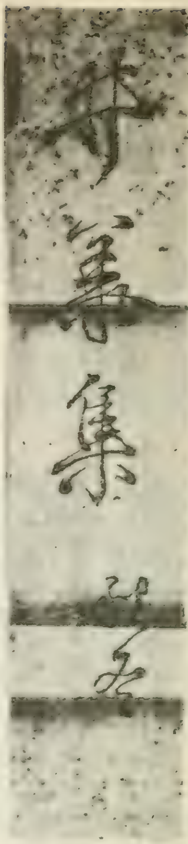
晝顔にしばしうつるや牛の蝿

孤村

禰宜ひとりみそぎするなる野河哉

名越の神事終ば、やがて水面に立たる五十串を拾ひて農家の守護となす事、かねて近在の土人川岸に聚り居て、我一と爭ふ事

也。



あかつきの神鳴はれてけさの秋

秋たつや宵の蚊遣の露じめり

形影自相憐

起〳〵の鏡するどし今朝の秋

馬鹿づらに白き髭見ゆけさの秋

立秋の翌庚申なりければ

明てけさ鍋の尻かく秋の聲

初秋や旭出ぬ間の寺まいり

日々醉如泥

今朝秋の腹に酒なしものゝ味

乞巧奠

振袖の憂をはたちやほし祭

いぐし奪ふ人の羽音や御祓川

梶の葉に配あまるや女文字

浪越さぬかさゝぎの羽や天の川

事しげき女をあはれむ。

髪とくをせめて願や星あふ夜

星合も山鳥の尾のわかれ哉

乙未秋 十唱

よみ歌をひそかに星の手向哉

據落てあさがほ淸し鬮の外

彩らぬ切籠の總(ふさ)に秋の風

島原や躍に月のむかし貌

桔梗ならをみなへしなら露にぬれて

やはらかに人分行や勝角力

花火盡て美人は酒に身投けむ

乞兒かへる徑の木槿しぼみけり

虫ノ聲非レ一ニおほとのあぶらしろき迄

賭にしてとうがらし喰なみだ哉

感懐

松風にかなしき聲や高燈籠

宵闇の氣のおとろひや高燈籠

死なでわれむかしの戀を魂祭

玉棚の親に見せけり錢五貫

魂だなや腰ぬけどのゝ居はからひ

攝待の茶にかき立る藥かな

やぐら、かたすかしなどは聞なれたる手なるを、著聞集に古き名の見えたるぞゆかし。

とし又きやつに勝(かた)れな腹くじり

御相撲や五年前見し美少年

胸あはぬ衣かづきけりすまひ取

關取や妻は都のをみなへし

遊高臺寺

萩に遊ぶ人たそがれて松の月

御しのびの下山や萩のから衣

萩の風北より來り西よりす

優妓中村歸長はかねて佛の道に志深く、四天王寺の邊に終の栖をもとめ、柴の戸に明暮かゝるしら雲をいつ紫の色にぞなさむ、といへる法然上人の御詠歌を念じつゝ、終にめでたき往生の素懷をとげたり。かれが所縁のもの追悼の句をもとめけるに

むらさきに見よや桔梗を手向艸

きちかうの露にもぬれよ鞠袴

朝がほや稚き足に蚤のあと

あさ顔や悋氣せぬ妻うつくしき

朝いする人をおどろかして

蚊屋はづせ蕣の花の赤むほどに

鉢植の蕣も見ゆれ檜垣舟

ある人の別墅にて

葉がくれに虫籠見えけり庭の萩

おもかげの幾日かはらで女郎花

生添ふや小松が中のをみなへし

いせのつと入といふ事を

頓入て望一に誰とさゝれけり

市に隱る二百十日はきのふ也

又平が畫もぬけ出ておどり哉

ふり附のめし喰こぼす躍かな

つゝみ合し夫婦出くわす踊哉

電光石火の世を觀ずる人あれば、戀慕の闇に身を惑ふもの有。

いなづまやみそか法師は老なりき

稻づまや隣の藏も修覆時

いな妻や壁を迯さる蜘のあし

雨後

いなづまや空にも雲のわすれ水

稻妻や山城の山河内の河

稻妻のおさまるかたや月の雲

鬼貫五十年懷舊

淋しさのとし〳〵高し花すゝき

刈とりてもとのみだるゝ薄哉

東武よりの歸さ、しらすかふた河の際より、松間の不二をかへり見る所あり。

伸上る富士のわかれや花すゝき

朝露や膝より下の小松原

夜坐閑

虫の聲艸のふところはなれたり

鳴神のたえ間や夜半のきり〳〵す

蘭の香や雜穀積たる船の底

蘭を愛す賓主の座いまだ定まらず

寓居園中十三唱之内

物しらぬ妻と撰ぶや虫の聲

今借した提灯の火や草の露

旅せよと我脊にあまる蓼哉

稻荷山

とんぼうに螽飛かつ朝日かな

古墳添新土

なき人のしるしの竹に蜻蛉哉

燒捨の人のむくろに秋の風

つり鐘に椎の礫や秋の風

秋風や捨ば買うの越後縞

たからなを握もちてといへる兒

とは、またやうかはりにたれど
露草や家中の兒の剃こかし
朝ぎりや施米こぼるゝ小土器
あさ霧や二人起たる臺所
霧こめて途ゆく先や馬の尻
霧深し何呼りあふ岡と舟

八月十四日新居舍

八九分に新酒盛べし菴の月
待宵をたゞ漕行や伏見舟

月前懷古

名月や朱雀の鬼神たえて出ず
新月に蕎麥うつ草の庵かな
水ばなに月澄わたるひとり哉

湖上

名月や辛崎の松せたのはし

青樓曲　二句

名月や金でつらはるかくや姫
月今宵やり手がうたのむかしぶり

迯夕陽迎素月

艸の戸や秋の日落てあきの月
まつ毛にも露おく秋や夜半の月

清夜の吟

うち曇秋は多けれ月今宵
名月や蟹のあゆみの目は空に

良夜雨

見ぬ月の千々に悲しき雨夜哉
船頭と月見あかしや肴きれ
淺河や月をよけ行歩わたり

駿府の旅寐をおもふ。

名月に富士見ぬ心奢かな

わかのうら

ゆく月や國なきかたに田鶴の聲
欠して月誉て居る隣かな

待宵は曇、良夜は雨を帶たり。

いざよひは雲ひとつなき寒さ哉
十六夜や闇より後の月の雲
いざよひやかざめを迯す汐がしら

悼太祇

十六夜やひとり缺たる月の友

臥待月の夜、湖邊の水樓に遊びて

月しろや金の波をまくら上
黒谷の初夜きく月の野川哉
返照らす有明の月や小便所

戀

夜べ逢ていとゞなつかし秋の暮
何いそぐ家ぞ火とぼすあきの暮
かなしさに魚喰ふ秋のゆふべ哉

旅思

馬下りて馬夫がわかれも秋のくれ
朱をそゝぐ入日の後は秋の暮
衣着よと母の使やあきの暮

述懷

老そめて戀も切なれ秋夕

白箸の翁といへるものは、元政上人の隱逸傳にも見え侍りしか。

とうがらし賣白頭の翁かな
うき旅や酒に擲ッとうがらし

待戀

幾度歟砧うちやむよそごゝろ
人妻の隣うらやむきぬた哉
熟柿の落てとばしる砧かな

遊子

ひとの國にやゝ馴るゝ夜の砧かな
比叡に通ふ麓の家のきぬた哉
指うちてしばらくとやむ砧哉
行舟に遠近かはるきぬた哉
仁和寺や門の前なる遠砧
衣うつよ田舍の果の小傾城

矢背の徹風爐に、ある人を訪ひて

養生の夫婦別在鹿のこゑ

西行上人の、世にこのもしき住居也けり、とよみ給へるに

柴の戸にいやしくもあらず鹿の聲
戀〳〵て田に蹈かふる男鹿哉
月と成闇となりつゝ鹿の戀

旋轉俯仰發揮我互互之摩擦謂不凡

立されば五歩に聲ある添水哉
案山子から苗一筋や秋の雨
草取し笠の辛苦をかゝし哉

田家荒蕪

燒畠のけぶりのするに野菊哉
あし早き雲の蹴て行く鳴子かな
早乙女も引板曳秋と成にけり

題　美人

ことし米西施が胸に痞へけり
馬わたす舟にこぼるゝやとし米
聟入に樽提て來る新酒哉
駒迎當時の歌仙誰〳〵ぞ

源氏物がたりをよみける折ふし

物のあやも暮て猶吹野分哉
かなしさもやぶれかぶれの野分かな
野分の夕杜子美が褌はづれたり
乞食にも臥戸のあればのはき哉
雨風の夜もわりなしや雁の聲

題　雁字

きれ〴〵の雲や鴈ゆく五字七字
米蹈の腹寒き夜や雁の聲
井伊殿の御拳見ばや小鷹狩
落鮎や畠もひたす雨の暮
今は身を水に任すや秋の鱗
錆鮎を炙り過たる山家哉
捨るほどとれて又なし江鮭
鶉わたる桂のあした加茂の暮

信濃路を過るに

鶴畀は畠ぬし也蕎麦の花
花そばや立出て見ればましろなる
二三升蕎麦粉えまほし我畠
花か穗かもみぢ歟蓼の紅キは
山河の野路に成行や蓼の花

九日

けふの菊秋の泣顏洗ひけり
太刀持の脊中に菊の日なた哉

愛菊

掛乞に八日の菊を見せにけり

不遠慮に公家の來ますや菊の宿

菊を見つ且後架借ル女哉

酒を出すうしろの音やきく畠

秋悲し白菊の色に染む事

田家

今いぬる隣の客に門の菊

此隣きくに琴彈ク門徒寺

丸盆に白菊を解く匂かな

わざくれに小菊買けり宵藥師

雲母坂を下りに

手折捨る山路の菊のにほひ哉

紫に似ずてゆかしき野菊かな

時雨のいそぎに此夜の月も曇勝なれば

空晴し月や最ひとつ牛祭

秋の月千々にこゝろをくだきゝて
こよひ一夜にたえずもある哉

月にたえぬ今宵ひと夜の寒かな

蕪叟判句合

後シテの面や月のやせ男

加賀の千代尼身まかりしと、息白烏よりせうそこせしかば

來る雁にはかなきとを聞夜哉

二柳が東行に

椎の實の落て音せよ檜笠

芭蕉菴にて

白露の百歩に茸を拾ひけり

紅茸やうつくしきものと見て過る

嵐山一周忌

鴫立てひとゝせふりぬ此ゆふべ

夕間暮鴫たつ澤のわすれ水
おもひ出ても袖はぬれけり　慈鎮和尚

蕪翁と曉臺が湖南の旅舍に遊ぶ。

さす月もあな冷じの九月幮

後苑

ひとりはえてひとつなりたる瓢かな

夕かぜやしぶ〳〵動く長ふくべ

草枯て人にはくずの松むしよ

渭堤の輞海亭に、東行の離盃をとりて

殘菊にさめじと契る欝金香

艸菴を立出るとて

歸來る日も松に見よ月の秋

於粟津芭蕉堂薙髪

稻刈て麥に田かへす我世哉

大魯判句合

痩鷹に落穗よけ行聖かな

しばらくは北へ流れつおとし水

亡父二十五回法會　小序略

雨露の舍あればぞ法の秋

由男が舞臺納に

色かへぬ松のはれ着や蔦紅葉

山莊

手折置し紅葉かげろふ障子哉

桂州和尚の隱栖を尋て

何の木ぞ紅葉色こき草の中

遊仁和寺

さながらに紅葉はぬれて朝月夜

君知や花の林をもみぢ狩

梅ケ畑といふ山里にて

薪樵る山姫見たりむら紅葉

高雄山 二句

よし野ゝ櫻は一目に千もとの花を見そなはす。

一もとのひとめに餘る紅葉哉

紅楓深しみなみし西す水の隈

長月の末木曾の溪に分入に、丹山碧水羇旅の目をよろこばしめ、將また迅速の感をなさしむ。

かけはしにけふも堊あるもみぢ哉

周防國より信州へわたる天産僧と同行して、途中に別るとて

わかれ路や草の錦を裁おもひ

鳥居嶺

橡の木の秋を剝るゝあらし哉

朝寒に鉈の刃にぶきひゞきかな

あさ寒や水嚾(もら)ふ家まだ起ず

喰く人に素湯まいらする夜寒哉

めかれたる松茸市の夜さむかな

不浄說法したる僧にはあらで

市に出るひら茸うりは法師かな

茸狩の柴に焚るゝさくら哉

傚七步詩

柚を燒や味噌は釜中にありて泣

柹割て君おもふやのうらとはむ

懐古

むかし誰この堀越えし鳴脚ぞも

出るかと妖物をまつ夜長哉

たばこ干す寺の座敷に旅寐哉

秋醉

逢坂の町や針研夜半の秋

わすれられし女の誓く北嵯峨のしるべに身をよせゐしに

妓王寺へ六波羅の鐘や夜半の秋

長月三十日須磨の浦づたひして

はる〳〵と來てわかるゝやすまの秋

さらしな姨捨の邊に杖曳けるは九月盡の日也。

月の夜を泣盡してや果の秋

あはれとしの秋もいぬめり

勾當の身をなく宿や暮のあき

葬に鶯見たりくれの秋

賢得眼前瘡
剜卻心頭肉

行秋や五月に糶しとし米

冬を待といふ題にて

小鍋買て冬の夜を待數奇心

初しぐれ今日菴のぬるゝほど

野風ふく室町がしら初時雨

吹上るほこりの中のはつしぐれ

信濃ゝ文兆が夕陽樓にて

雪見ゆる峯をかくして初時雨

難波女の駕に見て行しぐれ哉

遊金福寺

しぐれ過て草に落來ぬ松の風

杉たつる門に蚊の鳴しぐれ哉

羽織着て出かゝる空の時雨かな

しぐるゝや南に低き雲の峯

ゐなからどを西陣に伴て

錦織家見によればしぐれ哉

梅の樹の容(カタチヅクリ)すはつしぐれ、

疊屋のいなでぞありぬ夕しぐれ

芭蕉忌

俳諧に古人有世のしぐれ哉

義仲寺

枯〳〵て光をはなつ尾花哉

東武にありて深川芭蕉菴の正當會にあふ。

はせを忌や木曾路の痩も此ためぞ

善光寺の路人が家に客と成て、かゝる尊き御佛の邊近く旅舍せし因緣のありがたさに

朝毎の法ㇼや旅寐の一大事

布子着てうれし貌なる十夜哉

藪寺や十夜のにはの菊紅葉

上京や月夜しぐるゝ御妙講

春坡が小松谷の別莊に遊て

紅葉ちるこのもかのものわすれ花

散はてぬもみぢもあるを冬の梅

稲づまの見えし夜明てかへり花

愚なる僧の祈ㇼや歸花

蓼太と東海寺に遊ぶ。

澤菴をやらじと門の紅葉ちる

東叡山

下ㇼざまに又鐘きくや冬もみぢ

天府公侍座

しぐれ來て園のにしきを蹈日哉

長閑さに落もさだめぬおち葉哉

逃足に落葉蹈ゆく烏かな

此かぜの夏はふかいで落葉哉

草菴

二度までは箒とりたる落葉哉

伏水下村氏にて

日の影の枯枝に配る落葉哉

大村鶴汀興行

元服の面起すやゑびす講

貞柳が歌よまぬ日や夷講

淺艸寺前紫陌紅塵

十月の春吹風や海苔の屑

三河法師が喫茶會に招かれしに、あるじの風流、有馬涼及の趣にさもにたり。

口切の菴や寐て見るすみだ河

成美、あるじゝて、墨水の流に舟を泛ぶに、冬枯のけしきいと閑に、幽懷却客情を惱す。

我舟におもて合せよ都どり

闇を鳴く沖のちどりや飛ぶは星

水鳥や墓所の火遠く江にうつる

野の池や氷らぬかたにかいつぶり

春坡興行に

影うつる鷺のふすまやよばひ星

明石の浦浪夕陽に映じ、淡路島山咫尺に有。

貫之が船の灯による千鳥哉

夕鵆手にも來るかと淡路しま

鎌倉の袖が浦にて

裾ぬるゝ浪や七里がはまちどり

ゑのしま

籍いたし草鞋にはさむうつせ貝

不養公へはじめて召されけるに季吟芭蕉其角の三筆を御床にかけられたり。

俳諧の三神こゝに冬ごもり

書棚に塩辛壺や冬籠

さかしらいふ隣も遠く冬籠

長繁八尺空自長

短檠は二尺のものでふゆごもり

自悔

冬の夜や我に無藝のおもひ有

まらう人に炭掻すがた見られ鳬

男雲引風吹不斷

白花浮光凝薩面

茶の花の香や葉がくれの玉川子

茶のはなに喜撰が歌はなかりけり

對漆翁紹朴

爐びらきや紅裏見ゆるそのさび

口きりや此寒窓のかきつばた

白石城主君の御需により、二見

文臺のうら書をつかふまつりし

御報ひに、竹島といふ所の竹をもて爲に製せさせ給ふ花器を給はりけり。はた松島と申銘字御名判等も御染筆のよしきこえさせ給ふに、いと有がたく頂戴し侍る。

わが庵ににほひあまるや冬牡丹

水落石出

冬川にむさきもの啄む鳥哉

初霜や鳥を懼すから羽に

はつ霜や野わたしに乘馬の息

舟慕ふ淀野の犬やかれ尾花

芝泉岳寺懷古

石寒し四十七士が霜ばしら

尾上鐘

此かねや袖が摺てもさゆる也

紙衣着ていろは教る御僧哉

遠く遊ぶ子に曬ひたる紙子かな

四ッに折て行李にあまる衾かな

戀

恨寐の蒲團そなたへゆがみけり

疊むとて主客爭ふふとん哉

蓋も見ろつれなき人の蒲團哉

花美を好む老人の剃髪したるに

丹頂の頭巾似あはむ霜の鶴

箱根にて

關越えてうれしく被く頭巾哉

少年行

頭巾くれし妹がりゆく夜霙ふる

づきん懶く切られし髮を懷に

おちぶれて關寺謠ふ頭巾哉

頭巾着し戯男うつる鏡かな

紅閨の足につめたき頭巾哉

野行

背に比叡のはなれぬ寒かな

明ぼのやあかねの中の冬木立

冬木だち月骨髓に入夜哉

草の葉の霜より明て山かづら

海寶禪寺

結構な天氣つゞきや艸の霜

鶯のうしろ影見し冬至哉
いまそかりし師の坊に逢ふ枯野哉
鰒喰し犬狂ひ臥かれ野かな
皮剝の業見て過る枯野哉
大佛を見かけて遠き冬野かな

大根引といふ事を

大風呂の貝ふく迄や大根曳
大根引こゝら畠の字かな

淺間の麓を通けるに、燒亡の後三とせの春秋を經けれども、木草生ぜず、大石なども灰にうもれて、うすひ峠を越に、駕かくものゝ申けるは、一丈斗も下に赤き土の見え侍る邊りぞ其昔の道也と。田畑などは燒砂を高く掻よせたるまゝにて、只いたづらに荒れたり。

土までも枯てかなしき冬野哉

柏山眺望

こがらしや三ツに裂たるちくま川
凩にあらそふごとし鐘の聲

慶子上京に

顏見せや北斗に競ふ炭だはら
かほみせや矢倉に起る霜の聲

江戸にて

顏見せやしばらく冬の初日影
煎鯛に唉や此花蕗のとう
鰒を煮る汁なむ〳〵とこぼれけり
河豚好む家や猫迄ふぐと汁

燈下獨酌

煮凍や精進落るかねのこゑ
煮氷やもろく折たる萩の箸
活て居るものにて寒き海鼠哉
瘦葱にさかな切込磯家かな

敏馬浦客中

砂を吹家の棟川や冬下風

島田の千布は驛吏也ければ、臺輿など下知して嚴重に大井河の岸まで送らる。

やすき瀨や冬川わたる鶴の脛

金谷の庄家河村氏は古舟といへる俳士にて、曾祖父は如舟といふ芭蕉翁の門人也。一とせ嵐雪此家にとまりて、

大井川に舟あるごとし花の雪

といふ句を殘せりとぞ。予もせちにとゞめられて

かさゝぎの霜のひと夜をやどり哉

駿府の時雨窓に三日杖をとゞめて、一夜葛人が樓上に更る迄酒うちのみて

沖津鯛冬の山葵もたゞならね

熱田奉幣

馳折をしばらくおろす神樂哉
夜神樂や水洟拭ふ舞の袖

葬太魯

人をして兇しむ霜のきり〴〵す
初雪のしるしのさほや艸の莖
はつゆきや青物市のよめがはぎ

甲辰冬、別莊にをの〳〵をまねき、一夜はいかい催しけるに、明がたより初雪の降出ければ

幸のこぼるゝ雪や草の戸に

商人のよき蔵いやしけさの雪

恐是五侯家

誰門ぞ雪に寐ぬ夜の魚の背

盤銅の火は炎〳〵と雪見かな

たゝずめば猶降ゆきの夜道哉

原　驛

富士に添て富士見ぬ空ぞ雪の原

薩埵峠望嶽亭

晴る日や雲を貫く雪の富士

鮮き魚拾ひけりゆきの中

畫　賛

鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪

池水にかさなりかゝる深雪哉

鶏の戸の右も左もみゆきかな

いたく降と妻に語るや夜半の雪

青樓曲

二日見る雪の迎や手代ども

倣古今集物名　茶具寄

しなのぢや小田は粉雪に蕎麥畠

題　田家

柊の角をかくすや今朝の雪

旅人に我糧わかつ深雪哉

路樂、孝子を養て老の後を樂しまるゝを、竹によせてことぶくとて

杖と成たからな得しや雪の中

浪速人、手飼の犬を亡ひしを深く惜みて、追悼の句を乞けるに

足跡の梅花なつかし雪の朝

古硯銘

鈍きもの先氷るなる硯かな

題　畫

平仲が空泣おかしうす氷

出る日や風に吹るゝ蒲ごほり

かたぶきし水彌氷る盥かな

わきも子が油こぼれり玉櫛笥

郊　外

寒き野を都に入や葱賣

春秋をぬしなき家や石蕗花

炭屑に小野ゝ枯菊にほひけり

苦哉名利人
樂矣乞兒身

から鮭に名利のあぶらなかりけり

乾鮭や挽ば木のはし炭の折

去來七十年忌

まねし人のゆかしや夜半の鉢叩

戀

凍へ來し手足うれしくあふ夜哉

胼の手を眞わたに恥る女かな

杉良が僑居を訪て

うづみ火を手して掘出す寒かな

妻の留主に煮凍さがすあるじ哉

辭義をして皆足出さぬ巨燵哉

夜着かけて容(かたち)いぶせきこたつ哉

朔日や聟どのわせてたまご酒

納豆汁必くるゝ隣あり

をの〳〵の喰過がほや鯨汁

むづかしと今宵はやみぬくすり喰

藥喰おぼつかなさに人誘ふ

鳴海の千代倉が門前を乘打すと

て
盃は預けおくなり冬の梅

所思　爰名にて
白魚やさぞな都は寒の水
寒月や行ひ人の赤はだか
寒月に照そふ闕のとざし哉
寒聲やあはれ親ある白拍子
寒垢離やひとゝせ見たる角力取

畫賛
守武の水涕おとす火桶かな
火桶抱て艸の戸に入あるじ哉
駢掲の身を墨染や桐火桶
足袋賣の聲うち曇師走哉
水仙にたまる師走の埃かな

英が畫に
枯尾花醜き小町臥りけり

酒を聖賢として口かしこき男あり。
師走ぞと呵る妻あり舌ありや
餅搗の日も幸庵が茶湯かな

酔李白師走の市に見たりけり

亡父大祥忌
俤の三とせをいだく紙衣哉

、十三周
月雪に集てかなし筆の物

右は其雪影集に遺句七十余をもて、百韻を綴りし意を述侍る也。

、二十五回
寒月にうつし見む我かこち顔

哭亡師　終焉記略之
から檜葉の西に折るゝや霜の聲

、期年
おこたらぬ月日の數珠や一廻り

松浦公甫還暦賀　寄松祝
松千とせ算へもどせや古ごよみ
人住ずなりぬはしらの古暦

老懐
わかき人に交りてうれし年忘

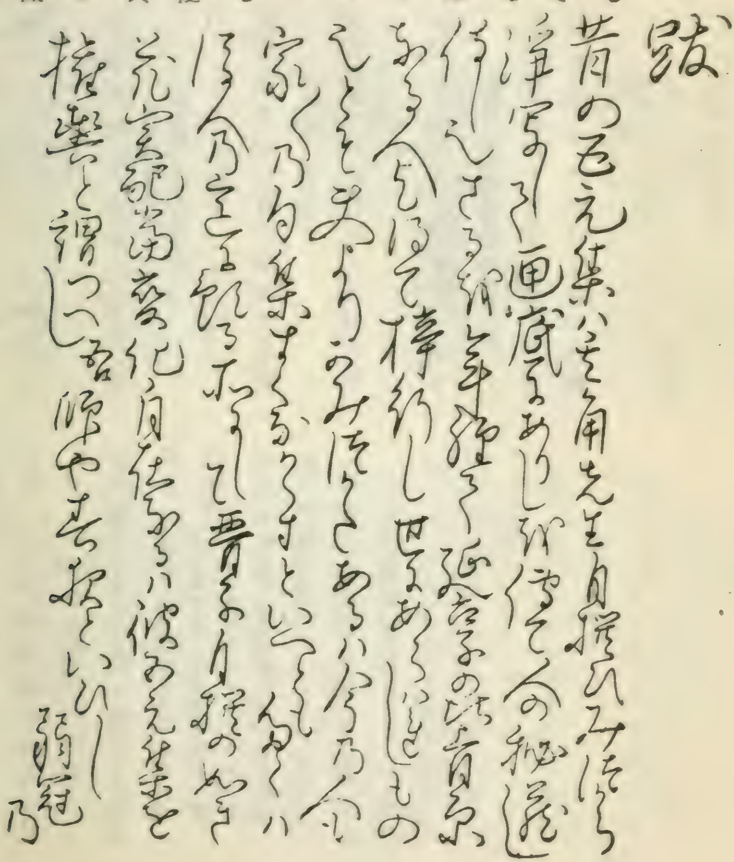
除夜、青樓に遊ぶ。
年かくすやりてが豆を奪ひけり

酔て寐た日の數〱や古暦
うそ寒う薑めし喰ぬ煤拂
行としや古傾城のはしり書
としの暮さる御方へ招かるゝ
春届く文したゝめつとし籠

大路のさま松立わたし、行かふ人のあはたゞしげなる中に、家〱の神わざいとまめやかに見ゆるぞ、またなくめでたき心地のせらる。
年ひとつ老ゆく宵の化粧かな
八十の老に親ありとし木樵

跋

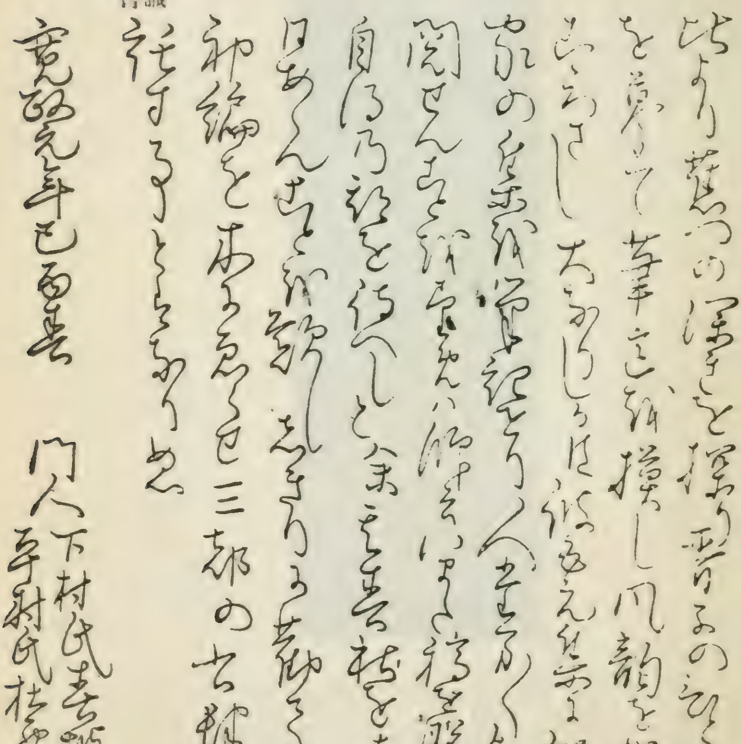
昔の五元集は其角先生自撰び、みづから浄寫して匣底にありしを、傳て人の祕藏し侍し也。さるを、年經て延享の頃、旨原なる人乞得て梓行し、世にあらはれしもの也とぞ。夫よりかみつかた、あるは今の人も、家〳〵の何集すくなからずといへども、多くは後人の意に預る所にして、晋子自撰の如き花實配當變化自在なるは、彼五元集を權輿と謂つべし。吾師や吞夜といひし弱冠の頃より蕉門の深きを探

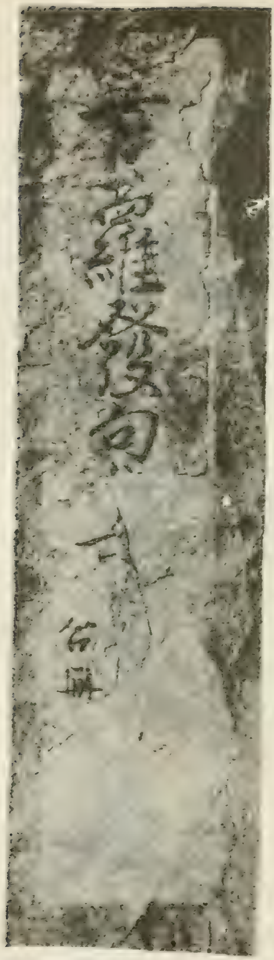


り、晋子のひとゝなりを慕て筆意を摸し風韵を學のこゝろざし大なりしかば、彼五元集に倣ひ家の集を筆記せり。人たまく乞て閲せんことを望めば、師云、いまだ稿を脱せず、自得の期を待べしと。余其春秋を待に日あらんことを歎じ、しきりに勸て先初編を木にゑらせ、三都の書肆に託す事とはなりぬ。

寛政元年己酉春

門人　下村氏春坡識
　　　平村氏杜栗書

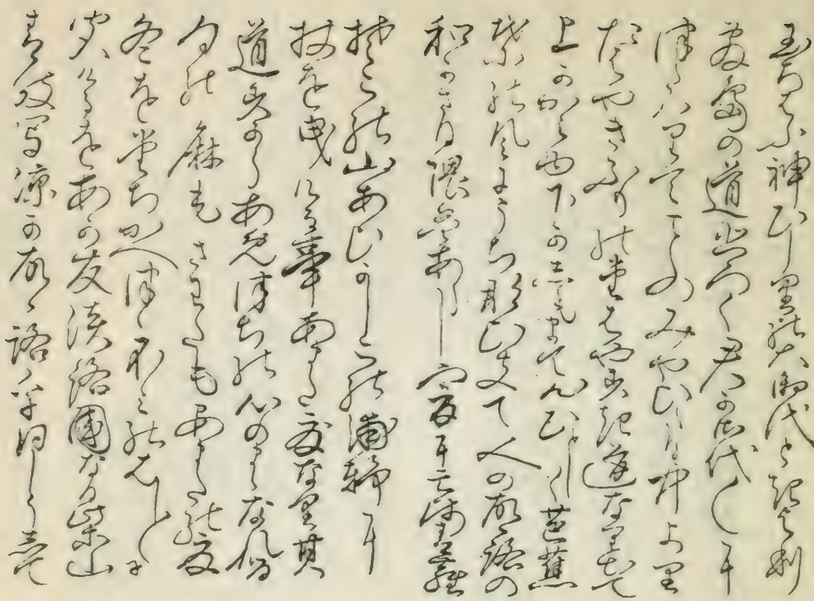




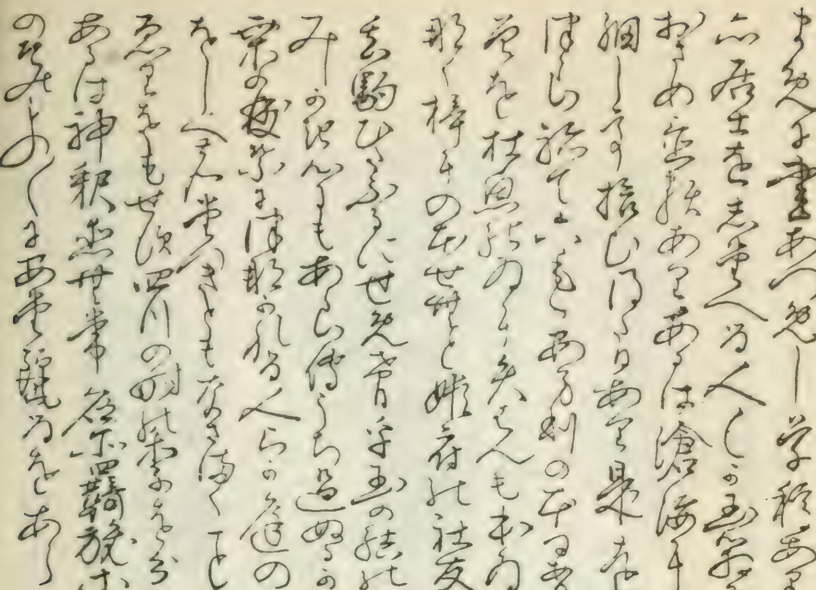
栗本玉屑宗匠選著

青蘿發句集

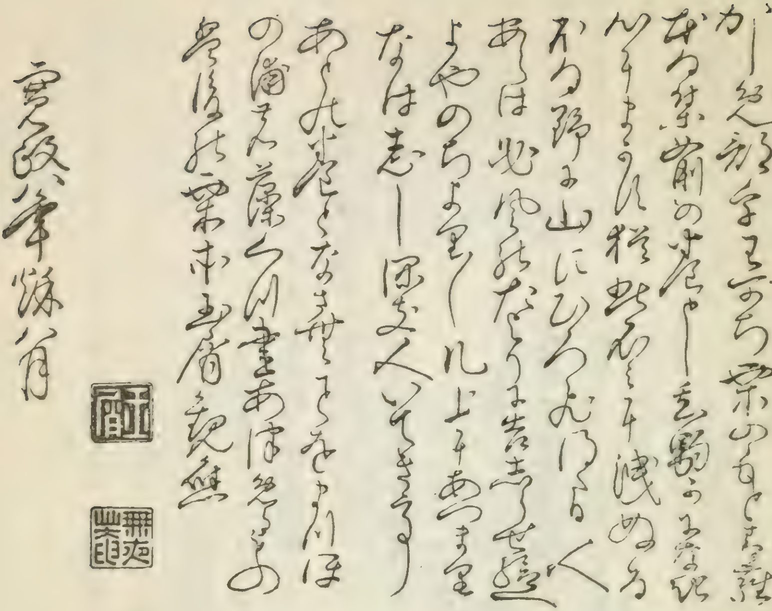
成章堂藏板



玉ちはふ神ひじりの大御代ときより、敷島の道ひろく、君が御代〳〵につたはりて、とのみやびたる中より、たはやきぶりのたはやすき道なり出て、上がかみゆ、下がしもまで、心ひとしく芭蕉葉の風にうちなびきて、人のこゝろの和がざる隈はあらじ。爰に亡師青蘿、そこの山あひかしこの浦輪に、杖を曳ける事あまた度なり。　其道すがらあめつちの心のまゝなれる句の、麻もさわたもあまたの夏冬をたちかへつゝ、ふみのはし〴〵に聞へけるを、あが友淡路國なる柴山青岐寫凉がこゝろを同じう



して、まめに書あつめし草稿あり。亦居士をしたへる人〴〵が玉箱におさめ置るあり。あるは滄海に網して拾ひ得たるあり。是をつらねて六も〻あまりのほ句あり。そを杜(蠹)魚の爲に失はんもほゐなく梓にのほせむと、姫府の社友玄駒ひたぶるにせめけるを、玉の緒のみじかき心にもあらでうち過ぬるが、栗の枝葉につながれる人らが、庭のをしへのたづきともなさまく、とゑりをもせず、四つの時の季を分、あるは神釋戀無常名所羇旅等のそのもののにあたれるを、あらかじめ部をわ



かち、栗のもと青蘿ほ句集前の巻とし、玄駒がになき心にまかす。猶此ふみに洩ぬるほ句、野に山にひろひ得たる人あらば、必風のたよりに告しらせ給へよや。　のちより〳〵几上にあつまりなば、志し深き人いできて、あとの巻となさむとをまつほの浦の藻くづ書あつめるものは、後の栗本玉屑観應

玉屑　無夜菴

寛政八年秋八月

序

世に得がたしとこのめるものは、おほかたはまことなき事にて、つばめの巣に貝を求るごとく、火ねづみのかはきぬも、めら〳〵とぞ焼ぬべき。たゞいつはりなくて、くちずたえせぬは、こと葉の道なれとて、青蘿句集をあめる人あり。此叟世にありし時は、ひたすら芭蕉の方寸にせまり、その實をまなびうつせるを、氷と水昌(晶)とのごとし。かの晋子が申せしやうに　時代蒔繪といふものゝ、年へて　そこねやぶれざるごく、風情の實を盡せる言葉は、なき世のいまになりても、かく天に求め地に拾ひて、やがて人のたからとなれるを、ありがたきわざなるべし、これをよみ是を見ん人、また叟がまことの心をつたへ、はがひの中の玉を得、かはぎぬの火にいりても焼うせぬさかひに至るべきものをや。此集のはじめに一語をそへよと、遠き國まできこえこしける、いまのくりのもとのまことの心をあはせて　かつしかの野人

贅亭成美誌

播姫府玄駒書

栗本青蘿發句集

春之部

歳旦

曙や淡路を春のしなさだめ

初日かげ人に先さす惠かな

誰戀ぞ田毎にみつる初日かげ

予が栗のもとなる三眺庵を、尾上高砂のながめ近きかたへうつして、香松庵とも呼そめぬ。わきてひがしのかた打ひらけ、春をむかふたよりも、先淡路島を心にとゞむれば

青海の春よりうつる草の庵

關東の古鄉もわすれがたく、關西のしたしみもわすれがたし。光陰我おもふ事をまたず。

鹿兒に十とせ綱手にかへす今朝の春

蓬萊に眼をかよはすや淡路しま

散ればさく春に今朝逢ふ命かな

鹿兒のわたりの綱手に引とゞめられて、この里にかくれすみけるも、はやはたとせ近くなん侍れば、替らぬ春をむかへし事のうれしさを、先なきちゝはゝに告奉るとて

蓬萊のうへにやいます親二人

初日影鶴に餌を飼ふ人は誰

薄雪の戀寐かなひて花の春

世をいたふ身は我としをさへわすれたりしに、ある人より法師は初老のはるに逢ひ給ふとて、衣服など惠まれけるに、さもありやとて

十德のうしろに來たり今朝の春

題若水

草廬に梅あり、梧堂あり。うめは春のこゝろを匂はし、梧堂は薪水に信をつくす。

若水を汲につけても庵のはる

明星の色を外山のはなの春

蓬萊やおのころ島をつみ得たり

まめやかに是も春たつはね釣瓶

立春

春たつや梢の雪にひかりさす

華に先二日ちかよる二日かな

雪を出て雪よりも青し松の風

三反の田麥みどりに庵の春

先春に空はあは雪梅つばき

子日

かの極樂といへるは、杉葉立たる又六が門、と詠給ふもいと尊し。

酒屋出て我は杖引子日かな

子日せむ鶴見る岡のとまりがけ

引添て杖にもむすぶ小松哉

人日

七種や七日居りし鶴の跡

七草やなくてぞ數のなつかしき

なゝくさや明日は野寺の初藥師

薺うつ遠音に引や山かづら

薺けふ六葉七葉にもさかへけり

薺つむ野や枯萩もおもひ草
まな板にうすくまかるゝ薺かな
薺うり我子になれよ錢くれん
薺うつさとを見るかに小田の鴈

若艸

若草やあるがなかにもしら菫
春もはや十色にあまる小草哉

左義長

おどろかすとんどの音や夕山邊
正月の榮花にほこる爆竹かな

梅

しら梅やたゆむあらしにほの匂ふ
梅さくやうときもおりに小盃
宵闇の名もある里かうめの花
梅がゝのちかまさる時薄月夜
あざやかに一輪づゝやうめの花
白梅や骨正月の塩かげん
節の日やあらかた開く梅の花
草庵の東隣は野梅かな
四方より道踏よする野梅哉
夜あらしの皆花となる野梅哉
能なしも寐ぬ夜がちなる梅の月
月の梅匂ふは花のひらくかも
梅をしたふ其夜の夢や嵯峨のあたり
闇の梅日頃の辻子にたもとほり
やり梅の流れし先や淡路島

柳

水の氣の取付初るやなぎ哉
けふ既に寒皆盡る柳かな
山かつらかけて遠目の柳かな
打かけて月をゆるがす柳哉
ひかりさす闇のあらしの柳哉
月もやゝほのかに青き柳かな
月花の外をおぼろの柳かな
青柳や折らんとすれば枝もなし

芹

淺澤や雪かた〳〵の芹の花
消る雪の味やとゞまる白根艸
我影の白髪をつまむ田井の芹

鶯

天地に今朝うぐひすの初音哉
初音して鶯たれをおもひ艸
うぐひすの木瓜もいばらも初音哉
鶯の池をかゞみにはつ音哉
うぐひすのあたり見廻して初音哉
黄鳥の音や雪の戸の玉箒
朝風呂にうぐひす聞や二日酔
黄鸝にさげものやらん屠蘇袋
うぐひすの茶入を覗く水屋哉
鶯の聲白梅歟紅梅か

白魚

しら魚は梅につれだつ盛哉
餅の雫や春の薄氷

春風

春風にのべふすいろや淡路島
散のこる葉を春風のもみぢ哉
あるが中に莨蒻玉も春の風

春風にさかふて濁る野川哉

春雪

春の雪梅には深きけしき哉
降込や棚なし船に春の雪
山茶花のおはりしほらし春の雪
梅が香のつもれる物か春の雪

雪解　凍解

雪とけてみどりの色や圃土
月けぶりて夜もとけ行野川哉
凍とけや野づらに高き鶴の脛

陽炎

陽炎や春の汗干(ほす)下小袖

西行庵にて
かげろふを手に取ほどや柴の庵

霞

行さきや眼のあたりなる野の霞
高根まで青麥の世や夕がすみ

涅槃會

ねはん會や散飯(さば)に誠をなく烏
傾城の拜んで笑ふ涅槃哉
幾春の繪の具や兀し涅槃像

春月

淺川の末ありやなし春の月
野は焼きて雲に雪もつ月夜哉
春の月さすがに障子一重かな
雪のまゝに竹うちふして朧月
梅散りて古郷寒しおぼろ月

藪入　出替

藪入やつゐでに古き墓參り
出替の笑にふくむなみだかな
養父入やうきを五日のわすれ草

雉子

雉子啼て跡は鍬うつ光かな
己が音に驚き顔の雉子かな
子をおもふ聲とやけはし夜の雉子
麥によき雨をきゞすのうらみ音か

春雁

春の雁立さはぎては日をおくる
行こゝろさえかへる日や小田の雁
なき友を算へて立か小田の雁
鴈人に馴る(るゝ)貌なるわかれかな

雲雀

時雨ほど聲ふりかゝるひばり哉
はなのさく草は巣にせであげ雲雀

蝶

蝶ねぶれ薄衣きせん日の最中
風の蝶きえては麥にあらはるゝ

蛙　田螺

田の水の高ふなるかも啼蛙
からすきにからき目見たる田螺哉

猫戀

のら猫の良にまたるゝ戀路かな
角はゆる迄啼つらん猫の戀

菜の花

雨に暮るゝ日を菜の花のさかり哉
菜のはなを見て來て休む野寺哉
よしの出てまた菜の花の旅寐かな

雛

はなさけり古きを祝ふ雛の宿

雛懸ふる親のこゝろや夜の鶴

汐干

遠島や汐干にかける牧の駒

うれしさについつかれたる汐干哉

網のうちを、智あるはされ、おろかなるはとゞまれ。

かしこくて蟹は遁行汐干哉

春日

春の中のけふは誠のはる日かな

鶺鴒のみだれ尾に引春日かな

春雨

降ぞともしらで暮けりはるの雨

はる雨や接木見に行園の奥

落つみし椿がうへを春の雨

春雨や茶に呼東舍と西隣と

寐つかれて月のはる雨見る夜哉

はる雨の赤兀山に降くれぬ

桃

色深し今年よりさく桃の花

桃山や行盡されぬおぼつかな

櫻

月も山も其ほとり也はつざくら

此景色誰三日月のはつざくら

寺も世をたのむこゝろや八重櫻

曙を深くかゝへて山ざくら

人をまたで散るはさくらの誠哉

松の奥うす〳〵暮る櫻かな

さくら見るけふも時雨のやどり哉

定なきをさだめ、窮りなきをきはむ。

定なきをさだめて散る櫻かな

（さだめてはカ）

花

春の夜のみじかきは花のあたり哉

浪の間はさくらうぐひや岸の花

散る花や夢かとぞおもふ袖袂

はなの中折〳〵曲る小坂かな

花守の折らるゝもしらぬさかり哉

ひや〳〵とこゝろ靜りて夜のはな

ぬれ袋に落花をかづく山路哉

盃の流るゝはなの絶間かな

散はなによき人がらや黒小袖

散花のはなより起る嵐かな

花曇

須磨あかしのはひわたれるほどを舟にて過るとき

潮曇あわぢのさくら散やせん

滿汐に持あふはなの曇かな

棣棠

山吹や池をへだてゝ入日さす

山吹も世につながるゝたぐひかな

春水

淺茅生にめぐり初けりはるの水

すゞりにも茶にもうれしや春の水

暮春

庭掃かぬ我名やたてそさゐたづま

柳芽をふきて又一日はだひら雪

春秋も常のこゝろを松のはな
あまのりは江戸紫の匂ひかな
夕汐や月跡砕く小貝取
如月に取つく野邊の景色哉
きさらぎや山茶花寒きわすれ花
井のもとも菫薺のはる遊哉
はるの山何事もなきながめかな
雀子のもの喰夢か夜のこゑ
はるの海遊びわすれて啼鳥
いかめしき聲や日すがら花の虻
おもしろふなれば別れや桃さくら
野の梅の咲よりかよふ田打かな
門なみにさくや山家の梅椿
はるの海鶴のあゆみに動きけり

暮春

からし菜の花に春行なみだ哉
行春や飛かふ蝶の心はしらず
わさくれに酒のむはるの名ごり哉
ゆくはるは麥にかくれて仕廻けり

夏之部

更衣

君が世の治まれるけしきは、何事につき侍りても、難有さいやまされるを

鎧着る世ならばいかに更衣
蝶ひとつ竹に移るや衣がへ
あさ貌のはやおもひあり更衣
更衣うすき命を祝ひけり
綿ぬきて水になさばや花の夢

佛生會

散けしの中に生るゝ佛かな

奉扇會

摘すとも花あり香あり白扇

牡丹　芍藥

はなのうへにこゝろ皆置牡丹かな
芍藥はかよはき花のうてなかな
袷着て牡丹にむかふあしたかな

芥子

色罌粟の巧みに見ゆる莟かな
白芥子や美人かくるゝ草の庵
しらけしの崩るゝ程の天氣哉
白罌粟に照りあかしたる月夜哉
ながき日のあまりを芥子の一重かな

杜若

杜若ものゝすゞしきはじめ哉
鴛鴦のかざしの花かかきつばた

卯花

風寒し卯の花原の明くらみ
卯のはなのさなみに曇る澤邊哉

杜鵑

花の夢の薄雲さらでほとゝぎす
我宿の山梔子しろし杜宇
夜の一聲こゝろにをくるほとゝぎす
蜀魂なくや矢をつく雨の中
千度なけば憂を添るぞ郭公
横雲に耳つけて寐むほとゝぎす

閑居鳥

衰ふる春より啼ぬかんこ鳥

月たゞ啼を門たゞ聞身よ鵑鳩

山一里われを送るか諫鼓鳥

はなのあと桔よと啼賦かんこ鳥

菖蒲

あやめ草綾の小路の夜明かな

戀のはしもかくるやあらむあやめらり

あやめふくけふもはなより苧の庇

田植　青田

植つけし夜は三日月の門田かな

松かげに追〳〵かゝる田うへかな

覺へんとすればとぎるゝ田唄哉

夜は君が手枕の手を田植かな

我庵はひる寐する間に青田かな

螢

藪かげやさゆりの花にとぶ螢

月の夜は地に影うつる螢かな

瀬の螢水を羽背にみだれけり

竹裏舍にて

笹の葉の夜散ほどや飛ほたる

鵜　水鷄

鵜のかゞり消て曉の水寒し

晝の鵜の現に鳴か籠のうち

あら面白の川なみや　あらうの世の中や。

世わたりや鵜繩の上も十二筋

聞うちにすへまぼろしの水鷄哉

おもしろやふりむく鵜あり行鵜あり

瓜

あだ花の猶なつかしや瓜のはな

瓜の葉の瓜をつゝみて冷しけり

納涼

すゞしさや八十島かけて月一つ

松一木馴て，ゞみのたよりかな

舟に病みし身をうし窓の夕涼

笹折て赤蟹なぶる夕すゞみ

すゞしさや惣身わするゝ水の音

雜夏

道をあらそふは隱者のたのしむところなり。

三つよれば其師やあらん蝸牛

我隣籬に交る麥の秋

角あげて牛人を見る夏野かな

誰知盤中餐　粒〻皆辛苦

田艸取うた泣にはまさる夕景色

鍬を取業はこまかよ豆のはな

葉には其うらみもあらむ葛の花

若竹に月のうすものかづけけり

口なしの淋しう咲り水のうへ

夏やみやこゝろをすゝむ鉢の菊

飲酒一盃の寐覺、去此不遠の淨土をしれり。

寐ごゝろや萠黄の蚊屋の薄月夜

暑き日や撫子つまむ山のかげ

ゆふ立や秋を催す桑ばたけ

萍やはづれては又月のうへ

蚊一つに身をくれかねて宵寐哉

人は皆横に目がつく横に行蘆間の蟹のあはれ世の中、とかく貴き御製、あへて人のをしへとなるは、蟹の事なりける事を

よしあしの其まゝすゞし蟹の穴

秋近し露に溢るゝつゆの月

李雨のぬしが初旅のいへづとゝて、よしの山の花屑、伊勢の濱荻の葉など送られける。さすがに風雅のしれもの、かの富てつたなからざるの人か。

狂へとて夏の胡蝶に花の塵

栗本青蘿發句集

秋之部

秋

ぬけて行茅の輪の先や夜の秋

松の蟬啼つゝ秋に移りゆく

あなめ〳〵秋風たちぬ竹婦人

草の戸の見事や今朝を露の秋

秋たつや人さめわたる艸の庵

蚤ふるふ袖行合ぬ今朝の秋

夏痩のふし〴〵高しけさの秋

起臥に立添ふ秋賊庭の艸

土用より朝皃咲て今朝の秋

七夕

盡ぬ世のためしを星の逢夜哉

草の戸の年のわたりや萩の反

海士が子の乾かぬ袖をほし迎へ

暁の簗に落けり天の川

空蟬を見るにも星の別れかな

魂祭

賑しやよき世の人の魂祭り

ほし合のうらさびしさよ魂まつり

なるゝ間のなきもはかなし魂祭

野分

芭蕉粦の野分見に來よ坊が庵

岩角をふみかく駒の野分かな

相撲

母親に見送られけり角力取

勝角力花も咲べき男かな

秋風

あぜ豆の黄ばみ初けり秋の風

一さかり萩くれなゐの秋の風

朝皃も實がちになりぬ秋の風

稲妻

いなづまのむら穗に通ふ田面哉

稲妻や今朝より森の薄紅葉

露

風の間や置ならべたる草の露
大粒に置露寒し石の肌

蕣

朝貌や清きかぎりをさき出る
蕣や横目すゞしき花の上
梅の後蕣のはなの一輪ぞ
あつき夜の朝貌の花に明にけり

蘭

蘭の香も閉を破るに似たりけり
らにの香やをとろへ初る日の移り
蘭の香や糸なき琴のしらべより
らにの香や碁盤の面打かすり
蘭の香は薄雪の月の匂ひかな

女郎花　番椒

霜にそむ秋に逢けり女郎花
兵の矢先に似たり唐がらし

秋蝶　秋蚊

秋の蝶いかなる花を夜の宿
しら／＼と羽に日のさすや秋の蝶
秋風に白蝶果を狂ひけり
秋の蚊やおのれつらしと晝もなく

虫

むしの音やこぼれもやらで萩の上
我夢の化してや床のきり／＼す
虫の音に折／＼わたるあらし哉
聞となく耳に置けりきり／＼す
棚もとや處もかへず蟋蟀
忘想の寐覺預けんきり／＼す
松むしよ美人の袖に落て死ネ

萩

吹分る中まで萩のさかりかな
暮るゝ間を縮緬に染ん露の萩
しら萩やいざよひの間を散初る

月

月と我中に今宵のけしき哉
我門を踏出すよりけふの月
こよひ更て月のこゝろを離れたり
花ほとゝぎす今宵の月のほとり也
名月や地に引替る天の川
名月や宵は夜中のひとむかし
名月や松にかゝれば松の花
名月やふくるにつけて泣上戸
坐に老し人花咲て月見かな
筆とりて四隅にわかる月見哉
松風の寐覺ばかりか軒の月
有はかたりなきは數添月見哉
雑水(炊)に月のあかりの菜花かな
辯になりて寐られぬ月の夜頃哉

天明らかなる年にあたるといへども、巳午五ツ六ツ未の春に至れる迄、風雨のいくたびか人のこゝろを驚し、五穀も是が爲に實をむすぶ色うすく、高きいやしきに及べるもいと諱すしく、すでに下れる世となりなんとせしに、久方のあめの惠み、夏夕立に秋旱して、殊に月見る夜ごろは田毎の三ふし草みのりて、いとめでたきけしきにめでゝ、

玄駒洸洲あるは東岡淇筍愚塞かいわたこゝろを船につみて、あら井川のながれの上に今宵のかげを待ゐたり。予も淡路の法師を携へて此船の客となりぬ。

稲の香の満るを今宵月の雲

十六夜や闇かと見れば花すゝき

いさよひやすこしはかゝる柿の澁

既望は葉がくれに見る蘭の香ぞ

いさよひや芭蕉の上は皆月夜

居まち月や友ます庵の夜の庭

秋雨

秋の雨月に對して猶悲し

秋雨や一羽烏の歸るそら

砧

ともし火に風打付るきぬた哉

うき身うつと人や聞らん小夜砧

蕎麥花

此頃の銀河や落てそばの花

月を質にむすびやすらんそばの花

雁鶉

春秋と移る夢路や雁の聲

羽音さへ聞へて寒し月の雁

いくつらも雁過る夜となりにけり

おもひなくて何やら雁のなつかしき

粟の穂やひとほしづみて啼鶉

鹿

鹿の聲高根の星にさゆるなり

寐時分や戸に吹付る鹿の聲

町中へよごれて出ぬ戀の鹿

角の上に曉の月や鹿の聲

驅やちかふ宵曉の鹿の聲

そげ／＼と瘦し貌なる朝の鹿

菊

三日月にかいわるきくの莟哉

憎きまで菊に慾ある隣かな

雨の菊かくれ過たるけしき哉

市中閑居吟

菊の香も市のへだてや下地窓

後月

曉はまことの霜や後の月

後の月蕎麥に時雨の間もあらね

尾花

秋の日やうすくれなゐのむら尾花

既になき色を秋ふる尾花かな

鶏頭

鶏頭の黄なるも時を得たる哉

鶏頭や倒るゝ日迄色ふかし

秋の暮

戸口より人影さしぬ秋の暮

柱にもこゝろもよらず秋の暮

秋の暮誰まことよりさびしきぞ

ながむれば海また海や秋の暮

秋のくれこゝろの花の奥を見む

雜秋

中〳〵に月は入日の秋の山

おそはれし夢よりつのる夜寒哉

秋風をあやなす物か赤とんぼ

身にふるゝ秋は露哉小萩かな
引かひもなきや鳴子のばらゝ黍
落栗や巠の命も山の奥

紅葉

水よりや染けん岸のした紅葉
見るが内に霜置月のもみぢかな

嵐山にて

山も川も谷もあらしの紅葉哉

暮秋

秋の月五(いつ)よさかけて鳴ちどり
うつりあし冬の來ぬ間に今朝の霜
せまり行秋や盡なく岡の虫
行秋や雲はあはれに水はかなし
風たへて小春ごゝろに秋くれぬ

冬之部

時雨

竹裏舍にて

初しぐれ自在の竹に吹かゝれ
蓑むしの死なで鳴夜や初しぐれ
梅嫌小粒に赤し初鐘禮(しぐれ)
しぐれけり土持あぐる芋がしら
二夜三夜寐覺とはるゝ時雨かな

こゝろおさまりて時雨聞夜は、疊給の竹のすれあふ音も聞ゆなり。

何所やらに花の香すなり小夜時雨

芭蕉忌

あかしの浦に、初てはせを忌をいとなみ侍りて

痩像に魂を入歟小夜しぐれ

夢にだに芭蕉翁を見ず

淡路より時雨もすなり月も照
翁見む夢のしぐれは誠にて

茶花

茶のはなやありとも人の見ぬほどか
ちやの花のからびにも似よわが心

麥蒔　蕎麥刈

蒔つけし夜より鶴鳴岡の麥
そばかりやよごれし袖もなつかしく

大根引

雪前や岡の月夜に大根引
忠度の腕これ見よと大根引

枯野

三日月に行先暮るゝ枯野哉
茶の木見て麥に取つく枯野哉

木がらし

木がらしや二葉吹わる岡の麥
雪を催す夜の木がらし面白し

氷

氷夜や疊にしぶる上草履
松風の落かさなりて厚氷
あぢきなき果を添水のこほり哉

千鳥

冴かへる空音は星かさよ千どり
なく千どり廿七夜の月の海
あけ月や風のひかりに啼ちどり
おもふ事吹取夜半や啼ちどり

水鳥

水鳥やのこらず守る人の顔
おもひ羽に月さす鴛のうき寐哉

斤鷃

袂まで來て歸けりみそさゞゐ
黄葉赤葉それかあらぬか斤鷃
捨石のかげで飛けりみそさゞゐ

生海鼠

苦しみをはなれて動く生海鼠哉
うき人のこゝろにも似しなまこかな

霜

初しもや水ひた〳〵の蘆の葉に
燈火のすはりて氷るしも夜かな
しら菊に赤みさしけり霜の朝

炭竈

すみがまや焼人みえて猶寒し
炭竈や雪の上行夕煙り

埋火

埋火に松風落る響き哉
埋火や梅の蕾もあたゝまれ

花の散には春をうらみ、月の曇には我身をおもふ。

埋火やいく夜かあぶる鼻ばしら

火鉢　火桶

長明の記に、かせきのちかくなれたるにつけても、世に遠ざかる程をしる。あるは埋火をかきおこして老の寐覺を友とす。

うき時は灰かきちらす火鉢哉
桐火桶霞うぐひすのこゝろあり

鉢叩

白髪より細き世や經ん鉢叩
鉢たゝき老の力のありたけ歟

冬籠

たる事や世を宇治茶にも冬籠
冬籠米つく音を算へけり
冬籠夜をりの病時を得し

雪

初雪や實は降のこす藪柑子
しは〳〵と降に音あり夜の雪
暮の雪水にもつもるけしき哉
面白や袖をはらへば棲の雪
雪の夜やわすれ〳〵に梅匂ふ
雪の人見ぬ世の友の風情かな
こゝろ皆竹にふすなる夜の雪
別莊や膳のかよひも夜の雪
こゝろだに置處なき深雪哉
大雪の夜を打崩す景色かな

寒念佛

まよひ子を呼聲たえて寒念佛
川筋や千鳥にかする寒念佛

寒月

烏飛て高臺橋の寒の月
荒海に人魚浮けり寒の月

雜冬

岡の麥茶の木は古き眺望哉
爐びらきや先ありつきし母の顔
罌粟苗に今朝いたゞきぬ霜の花

薄雪に甘みやさゝん梅嫌
今朝もまた霜はねかへす鎰かな
山茶花や雀顔出す花の中
曉のなみだ氷らん網代守
初雪の跡さかりなる枇杷のはな

年忘

夢の世の夢を見る間や年忘
年わすれ忘寐に着る蒲團かな
うき戀に似し曉やとしわすれ

歳暮

行年やかしらをあぐる田のひばり
行としや馬をよければ牛の角
ゆく年やとても難波の橋の數
世の外の身にも師走のあらし哉

淡路の法師、我庵をとぶらひけるに

年の市にまぎれ出けり峰の僧
きのふけふ枝ぶりかえつ年の梅
千尋あれ硯の海も年の波

かくれても望たへず。あらはれても又おなじ。

年〳〵や年の麓のあすならふ
匂ひしは夢にや見たる除夜の梅

松の悲しき秋風の樂にたぐへし水の音に、流水の曲をあやつる藝は是つたなければ、人の耳をよろこばしめんとにもあらず。獨しらべひとり詠じて、自からこゝろを養ふばかりなり。

おもしろう松風吹けよ除夜の闇

栗本青蘿發句集

寛政二庚戌冬十一月十七日

紅葉之御會

かけまくもかしこき御神の御末にあらせらるゝ雲の上までも、芭蕉てふ翁のたはやきぶりのめで度聞しめさせられて、こたびそが道のつかさなさせらるゝに、いせをの海士のかづきすも、須磨のもしほ汲つるも、あるは鹿兒のわたりの綱手ひきけるすら、やどなき

御庭のみまへにおしのぼりて、鶯蛙のうたとなふる事の、さざれ石の千世經べき數〳〵、生ふる草木の葉どのすゑ〳〵までも、有難き色は冬のけしきもなげなるにぞ、そのこゝろを賦して奉るとて

日をいたゞきて冬もます穗の薄哉

御宿題
殿前紅葉
眞砂までてりしく園の紅葉哉
落葉支流水　といへる御題を、ぁるかたより給ふに
吹ためて水に色添ふ落葉かな
辛亥春三月十七日
花之御會御宿題
殿前花
我等までや御目通りの花のかげ

神祇

菅神奉納
しら梅に散り込られて心清し
岩上奉納
岩上やかみさびませばほとゝぎす
神路山にいたりて、はやく髪おろせし罪をかなしみ、五十鈴川に袖うちしぼりて
我眼には霧のみ拜むなみだ哉

釋敎

他力安心のこゝろを
彌陀にすがる姿を風の柳かな
當麻染井寺
つゝじ折て染井の雫結ばや
如是相
うき寐すなりひとつ湊の鴈と船
逹磨忌や夜は更るとも更ぬとも

戀

妹がりや宵更初るうめの月
戀をせば滋賀のあたりや朧月
うす雪の曙を我こひ寐哉
かたおもひ齒にも合ざる鮑哉

雜

此部に出すは無季の句のみにもあらず。いさゝかとかはりたるを出す。
かゝろうき世の中にも、佛は其まゝ物にさはらざりけるを
さきかゝる梅風の朝雨の朝
其日暮しといふ事のたふとく、何事もたゞ今たゞ、時の外なき事を行ずるうちに、年くれ春きたりて年〻新なるこゝろを
青柳にむすびかゆるや柴の庵
蝶となる虫かひ得たり草の庵
月を見るうしろは寒し草の庵
搔槌餅
世に搔槌といふ名さへおかしきに、たゞきへらさるゝは彼が不仕合なるべけれど、長日の晝休みには、若おのこに引よせられてかりの枕をかわす時は、逢戀待こひの夢をもちぎり、または足なき碁盤のかたすみに雇れては、仙家の交りもなせど、朽折たるためしも聞ず。かくて彼れほどかたく目出度物はあらねど、生涯木枕をたゝく罪ありて、假にもやさしき女の手にふれざるをこそ恨なるとや。ある夜ひ

そかに後が後の世のねがひをきくに、かくて生涯の罪人なれば、衣うつ槌に生れんよりは、畑うつ鍬に生んか、たゞしはもとの擣槌か。

花のさく奥に何する槌の音

題 雲助

長持や身はとんほうの露の旅

世のうきはうきともしらで、うきはわかれの雪轉し、と謳ひけり。

たはれ女の頬先赤し雪の朝

人の用ざる時は婁痲を友として、一飯をたくはふ。渇するに眼を明けて生涯の貧しき事をしれども、五器携ふ乞食にもあらず。只諷諫を腸にして、今日より死るまで、おのれを慎まんと、天にちかひ地に俯すのみ。

きかさねて後ロの見へぬ寒さ哉

はいかいの道は例の自問自答の執行より、人和のひとつを守るべきおしへなりとぞ。此道をよくたもたんやいなと、心にこゝろの戒を立て、常に我髪を結びなれし彼石松が剃刀をいたゞき、其石の名のかたく、松は千とせの色をかえぬ例しなれば、今月今日翁の忌日たるをさちに、四十九年の先はいさしらず、卅九年の罪をあらためんと、世の中よかれの樂坊主とはなりぬ。

けふよりは頭巾の恩もしる身哉

鑪一ッをむすびて、月雪に人をもふくる處とし、さらに世の富貴と車馬の喧すきはしらざる也。こはもとひとりを愼めてふひじりのふるとをこゝろざしとす。

後の世のおもはるゝ時峰の松

燈火のおのれもしらぬひかり哉

世の諺に龜の甲より年の功といふ事侍る。そは智ありてかたきてふことにや。又老ぼれたるもあなれば、其たのみもすくなかりけり。しかあらば年の功より龜の甲なるか。龜はもと此爭ひをしらず。唯波にかくれて我をうしなひ、泥に尾を引てまたあらはる。是を書ものは几にかくれて分別をなさゞれ。

萬代もたのまねばこそ池の龜

離別

君が吾妻のかたへ駒をすゝめ給ふに

不二は白雲櫻に駒の歩みかな

此程是非亭にやどりて是非を諍もの無曇青岐其愁、其外儒あり、僧あり。この是非によりて三日四夜をかさぬ。いまだ是非の盡ざれども、今日は、はりまのかたへおもむかん名殘をとゞむるに

盡ぬうち散りて見せけりけしの花

道の邊の柳かげには、しばしとてこそたちどまりつれ。予は此

三伏のあつきに、こゝの柳澤の山陰に十日あまりの旅寐しけるが、けふは新友にいとまをこひて立さらんとするころ

結びさる清水かるゝな柳澤

文月のはじめ嵯峨のゝ落柿舍にたび寐して、朝とく別るゝに

別いふ手すさびなくて蚊遣哉

玉屑法師の旅におもむきけるに、小硯をはなむけして

秋たつや起出るかたにあらし山

脫負が西國におもむきけるを送りて

墨坪の奥はよし野と姨捨と

日くれなば花をあるじの首途かな

羇旅

牛窓

春の夜やうしをうしとも夢心

象頭山

はるふかく眞晝も杉のあらし哉

落馬して腰うつ影もさくらかな

丸龜を船出すに、蒼海旭に映じて滾〳〵たり。讃岐芙蓉このかたにさしむかひ、備の二州のかたは遙に山をつらねて霞み、伊豫路は白雲のかゝれるあたりにして、吳楚東南にわかれたるもかくあらん。乾坤眼に極がたし。

こゝろ問へいづくとまりの春の海

白石

白石の影碎け行海月かな

內の海といふ隱戸の迫戸ちかく船の往來も、わきて潮のかけ引をよく得ざれば危事おほしとぞ。かくて月はひがしの遠山にいと赤〳〵とさし出れば、親あるも子をもてるも旅のこゝろあらたまりて、十日あまりの浪の上の明暮に面テ日に焦したるを、人もこちぬる体にて古鄕のかたを打ながめ居つゝ、月のいつか丑みつをすぐもしらざりけり。

身一ツは浪も寐よげに春の月

いつくしま

廻廊や潮滿月にさくらあり

千疊敷

うみ山を霞いれたる坐敷かな

社頭鹿

枕にもなれよ旅寐の春の鹿

連歌堂にて

散る花を墨に摺り込め旅硯

宿とりて風呂に入間も山ざくら

手枕松

すゞしさや松の響きを夢ごゝろ

二軒茶店

行春もしらぬ往來や下河原

杜宇古鄕をめぐる夢ぞきく

天明らかに五ツの年にあたれる良夜は、但馬の國なる人〳〵に契りて、温泉の里今津てふ河邊に舟をうかべ、彼北國日和定めなきと吾翁も心に逝び給ふは此

月の夜頃のごとく、さなる古事のからがへもいといみじう覺ゆれば、先待宵より月を弄びて猶翌の夜を約せんとす。

待宵やおろかに契る月の雲

夜明れば酒さかなゝどあらため、いとおかしかりけるに、おもふどち數まさりつゝ、日もいまだ暮ざるより、月は東にあらはれ、眺め又新たに、船はさゝの浦左りに、來日の嶽右になし、江の上にむかひて漕のぼるに、波は金のどく花を散らせる上に居たり。

こゝろ皆浪にながれて月の京

名月や更て來日の峰高き

佐野の八幡寺のけしきは、あさもよひきの浦〱も、うたかたのあはぢの、あはれなるけしきなりけるを

さのゝ小称和歌の浦邊は鶴あらん

四條河原のほとりなる水月樓にやどりて

乞食の五器に求食るか小夜衛

伏見船中

苫船や夢に時雨るゝ八幡山

名所

幾人か千世の古道子日せり

芹川のあたりは深し春の水

短夜や夢さき川の朝わたり

蒲公英や音なし川のへり塘

立雁の負ても行かで浮御堂

鰹つり妻はまつほのうら船か

春の夜や雨をふくめる須磨の月

院磨のうらにいたりて壽永の昔をおもふに、出て遊ぶ胡蝶、人にかくるゝ雉子のおもかげも、いかなる夢のはしにやあらんとあはれを催し侍る。

陽炎の夢をつなぐか須磨の花

よしの山

七夜寐ても花の半ばやよしの山

夜ありきもはなのあかりや芳野山

あらし山の花は、水涓〻とさびしく、松朧〱と深し。さらに我境ともおもはざりけるに

花にさはぐ都の人よあらし山

はな散りて三日月高し嵐山

心敬僧都の、散花の音聞程の深山かな、と唫じ給ふ寂靜谷にて

わくら葉の落る間宿る太山哉

水鷄なくかたのゝさとは薄月夜

なちにて

白瀧や六月寒き水煙り

室津臨江庵にて

すゞしさや繪島をひたす月の海

生のびよ尾上の松の下すゞみ

秋たつやいなの笹原うつり來る

舞子の濱にて

橋立や夜明〱の天の川

名月や松に名あらば祇王祇女

やるかたのなきに見て泣須磨の月

立出ていさ久間見川けふの月

射おとすか夢野の鹿の夜の聲

高雄にて

紅葉踏て攀る寺の禁酒哉

曉やしほたれ山の秋の霜

難波津や橋めぐりして夜の雪

哀傷

墓原や是をうき世の山ざくら

門人奥村耳香を悼

わすれては坐をあけてまつ夕涼

蘿來を悼む

魂を招かむ月や萩のうへ

桃如を悼む

なみだには染ずもまつの秋の風

梅谷氏脫負がひとりのみどり子をもてり。去年予が見しころは、小田の早苗のとりぐ〵に、するつむ花の色を添て、いとまめやかに生たちけるが、今とし又問ふに、梅の沓のひらきもあへず、夜のあらしのいたく吹て、佛の別れの跡をしたひ、共に涅槃の誠に入ぬとや。げにかた身の袖のむらさきも、この曉のなみだなりけるを

ものいはどうしといふらん箱の雛

雨人が妻身まかりけるを悼む

夜は猶おもひゆられて五月雨

夜半のぬし、共に風雅を相かたろふひとりなりけるが、おのれに先だち身まかりけるをかなしみて

燈もたよりも消る霜夜かな

緣翁を悼む

死ぬとをしつて死けり秋の風

三木氏美喜女を悼

胸あはぬ日もありつらん花衣

鰕交を悼む

菊よ月よ我ひとり泣友にせん

重羽を悼む

花とさくもなき佛歟われもかう

玉のごとくなるみどり子の身まかりけるをいたみて

菊桔梗いづれか顏に似る花ぞ

きのふ見し人にはけふはわかれ、翌はいかなる世のありさまならん。我はたゞ父もなく母もなく、したしき友を柱の如く杖のごとく、おもふかひなく今年は無一房にわかれ、薪水にはなる。唯さへ秋のひとかたならぬ物から

あの譯を聞たし秋の鳥啼

雪中菴をいたむ

我おもひ雪の箱根を越さで泣

淇園を悼む

我なみだ地にしむ時か曉の霜

宗保を悼む

二十五年今朝あだしのゝ塚の霜

扇塚開眼 於須磨須磨寺にて

壁を添て塚の名ひとけ青嵐

佐屋の水鶏塚にて

俤や藪あり月あり水鶏なく

初秋の四十もうとき麻覺哉

贈答

半生堂の病床を叩て、主の閑をやぶる。

やむ人によしのをかたる春の雨

臘月四日のあした、雪のいとふかく降けるに、杖笠とりあへずうかれいづるついで、茶をたしめる法師を訪ふに、とみに釜たぎり、宵の挽ためありとて、見ぬ世の友のなつかしげに、こち居たる躰にてもてなされけるに

梅柳の故人茶に又雪の朝朗

初て藥庵を訪ふ。誠にあかざの枝をもて梁となし、葉をもて雨をしのぐの柄なりける。春夏は其芽を摘て三日の粮となし、かるゝ時は雪の日の杖とたのめるよし。清貧誰からたがはん。

夏草やうき世を覗く窓一ツ

可群が酒店に遊ぶ

酒の香を松にかこみて青嵐

初て是非亭に來りて主と是非をあげつろふ。そも何の是非なるや。天をこゝろとし、地を身となし、四時に隨て四時を友とするに、何の是非なるにや。道を守りて道をうしなひ、道にそむきて道に叶ふ。是滑稽の是非なるにや。予はたゞきのふも非にして今日も又非なり。いつかは是なる時を見ん。唯人情の止事を得ずして、みじか夜の賦を催せば、主にかづきものをかふて是非もなく打ふしぬ。

我儘のひとり寐うれし旅の蚊や

無憂亭にはじめてまかりけるに、ほとりの池水に卯花咲そひて月もいとゞあかゝりけるに、子規水鶏の聲をまちて夜もいねがてに、聞そらすまじなどいと興ありける。

短夜をきそふこゝろよ老の夢

うとければうとし、問るれば又なつかし。

花菖蒲津田の細江の便かな

蝸國が父の閑亭にて

すゞしさや垣のとなりは極樂寺

柏木何某の栖る方は、海前にたたへ、山後に聳てとこしなへなり。仁智いづれによるにや。主の心ばへいと風流にして、庭前の樹〱もそれに倣にや。天つちのまゝを生いづる中に、古松二もとの屈曲、千とせの色をかこみ、逢萊のしま根もいづこならん。さりや世〱に聞傳ふ武陵あれは曾根辛崎の松といへども、明暮の眺とする事の遠く侍れば、主のこゝろざしの如くする事あらざめり。かゝるたのもしき旅のやどりを求しは、柴山の主のおもふどちの情なるめり。よてほ句一くさをものして筆を

とゞむ。

千とせ經ぬらん涼しく宿る松の蔭

佐用の久保軒に主せられて月の客となる。この里は朝毎に霧ふかくたちて、蒙朧たるけしき、さながら春の俤にも似たりけり。

薄霧に花の香あらんけふの月

明月亭

橙の色を木の間の冬の月

ある人に對して

もの凄き道のこりけり岩の霜

千鳥聞其ちどりこそ生き佛

鶯里亭

うぐひすの巣の隣あり冬籠

丹波なる誰かれの社中に示して

たはむ程力いれけり雪の竹

竹裡舍

客あれや雪ふらぬ夜は竹の月　主人

客となりて雪降迄は竹の月

畫讃

海老　言花が一軸に

髭にまで孫子重ねつかざり海老

西行の畫に

花の香や袈裟も衣も腸も

十牛　巴紋亭一軸

牛の尾も殘らぬ色や春の草

一圓相　松夜舍一軸

花の中牛追ふものは牛を追ふ

行平贊

時雨聞て腸さぐる寐覺かな

峰入の畫

貝吹て雲踏わけよ花の跡

かよひ小町の畫

百夜かよふ初廿日は白牡丹

布袋

空も又空をやぶりて時鳥

脫負きたりて、瘦法師があやめ刈居る畫に讃を乞けるに

いつの世に戀せし人ぞ菖蒲刈

東雨亭　軸の畫

揚まりや暫しかゝりし月の雲

寒山十德（拾得）

夜遊びや二人が心月一ツ

瓢の畫

人ありて琵琶にや作る長瓢

小原女の畫

野の道を傳ひて山より薪をかつぎ出る明くれの姿は、まことに孝ある人と見へ侍れば、いみじうなつかしく、戀はかゝる女にこそあなりけり。

親も夫もいたゞく柴の木實哉

福祿(壽)壽贊

此人のこぼせし種か福壽艸

達磨の畫

見盡して不斷櫻と成にけり

林間煖酒畫讃

霜きえて酒の煙れる紅葉哉

我白に自畫自讃をつかはして

月今宵故人まぶたにうかむや夢

螢狩の畫

小坊主の智は水によるほたる哉

通玄の畫

一陽を出て走るや瓢の駒

賀

野上を賀す

五十まで母もつ人ぞ花の春

常和八十の賀

山鳥の尾のながき日を鳩の杖

初雛の末永き心を

桃さくら其奥床し夜の雛

何某が初の端午を祝して

家も身も幟立世を得たりけり

布舟が葎樓亭にかくれ住けるを
賀して

春に逢ふ寄居虫の宿や梅さくら

茶人宗巴八十の賀

千年の緑を松の自在釜

三木如三七十の賀

つたへ置け桃咲宿の不老不死

岸本社甫七十の賀

茶と酒の世の中あかき紙衣哉

五斗米のために腰を折ざるが故に、田園のあるゝ日なく、常のこゝろなほ靜に、おのづからなき齢ひのはじめといへる、むそじあまりひとつの春をむかへける農家の翁、風屌雅子をほぎどすとて

耕して鶴をまねけよ杖の友

脱負が雛はじめを賀して

鶴も巣を今日かけ初めむ雛の宿

たれをとひかれをまつべき身にしあらねど、此頃頭雉とかいへるやまひ大瓠ほどになれり。身にせまりていかむともなしがたかりけらし。此大瓠の用ひかたあらんや。智あらばたぞ用る事を知らむ。是おほくは黄泉に歸る船につくらむか。

船ばたや履ぬぎ捨る水の月

世の人の風雅にをける、柳さくらのにしきをあらそひ、蝶鳥のおのがさま〴〵なる其風情の、いさゝか實におち入、虚にそこなふもの數をしらず。むかしの人のいと筋を傳へつゝあるかなきかにして、糸によるものならなくにと詠じ給ひしは、其頃のうた屑にといひもてはやせしも、今はその屑なるものも床しくぞ侍る。俳諧の句を求るに、遍照があだに黒主がいやしきさまも、こゝろをとりはせられざれ。唯そのさま、人の面のどひとしからざるのたとへならんか。此心になく姿は千々にわかつ。是幻術第一の糸筋なりけり。しかも血脉をつがざれば、土梗芻蜊の、朝に形を得て、夕の雨にうちくさりたるにやあらん。風調より入ものは、我巣屈(窟)にあらざれば他の自在を知ず。こ

ところより入ものは、幻術自他にをよぼすなり。予人に會するとの夜、此幻術の箱をひらきて、眼前に海山をつくり、厳寒に花を咲せ炎天に雪を降す。是無幻の幻なり。幻人幻境に對し、幻境もまた幻なり。何がしの翁の句ゝ、皆この境に入て玄々の玄なり。我又此境をしたふ。是が爲に月花のつぶねとなる。廣く衆に交りて此道に遊べる人を友とせんと、かけまくもかしこき天満おほん神にちかへて筆を染侍る。

青蘿

花も實もたのまぬをとへ栗の本

雲水の吾みかのしほ播磨の國に、みやびのまじらひ深かりし鹿兒のわたり幽松庵のぬし青蘿詞宗、五とせあとに世をさりぬとなむ。このたび同國姫山なる玄駒のもとより、彼叟が生涯の發句をかいあつめ、とぢぶみとなし、此すゑに詞かいつけよと、吾が長門の國に卓錫の日、はろ〴〵と贈りこせり。是を閲せるに、心崑崙の麓をめぐりてしら玉を拾ふがごとく、大液に船を浮めて黄鶴の麗はしき聲を聞にひとし。誠や夢に白鳳を吐、金龜をのみし人の遺章とやいはむ。今更むかしを思ひ、藻にすむ虫のわれからといなみがたくて、へみ(蛇)をゑがくに足を添るのあやまちもかえり見ず、みじかき筆を採りぬ。これを櫻木にゑり殘さむは、蕉門の正風を學ぶものゝひとつの梯ならむか。寛政七ツのとし花見月三日夜、東都行脚花縣、赤間關田東菴のともし火のもとに書。

題靑蘿集後

靑蘿集二卷。其門人玉屑之所輯也。靑蘿世仕我藩。爲人灑落。好作諸歌。常放浪乎山水。未嘗以憂樂經心也。有故落魄爲僧。遂以諧歌自任。於是一時崇尙之徒。推以爲宗匠。後被宥得出入于　藩。々中之人。師事之者多。今玆遺稿成。書肆玄駒將梓之。携來請余一言。余於靑蘿爲姻族。喜玄駒之擧。因書卷末云爾。

寛政七年乙卯中秋

姫路　鈴木昌則　印　印

齋藤生厚書　印　印

寛政九丁巳歳

書林

京寺町二條下ル
橘屋治兵衛

大坂順慶町心齋橋東入
柏原屋與左衛門

播州姫路元塩町
隅屋喜右衛門

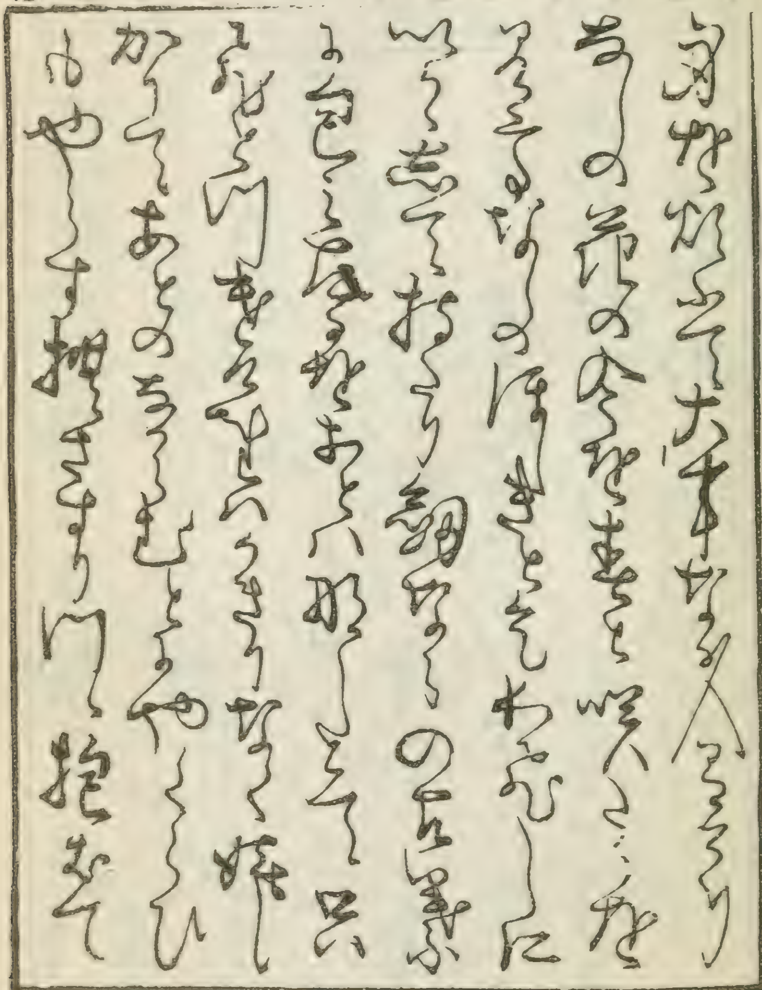
白雄句集 春

檉寮碩布著

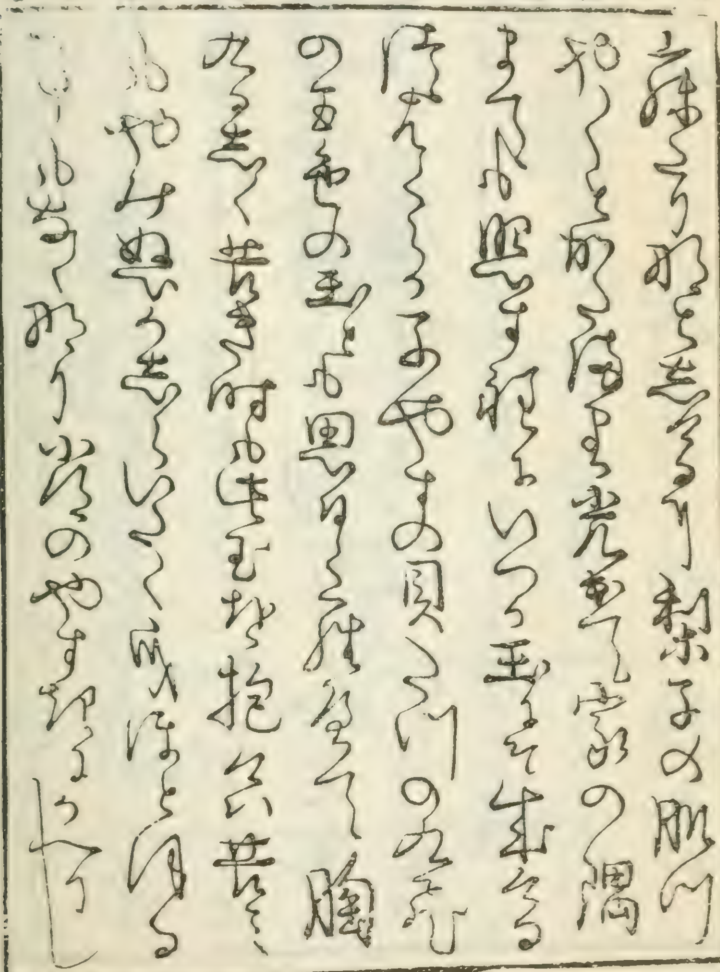
白雄句集

春秋菴藏板

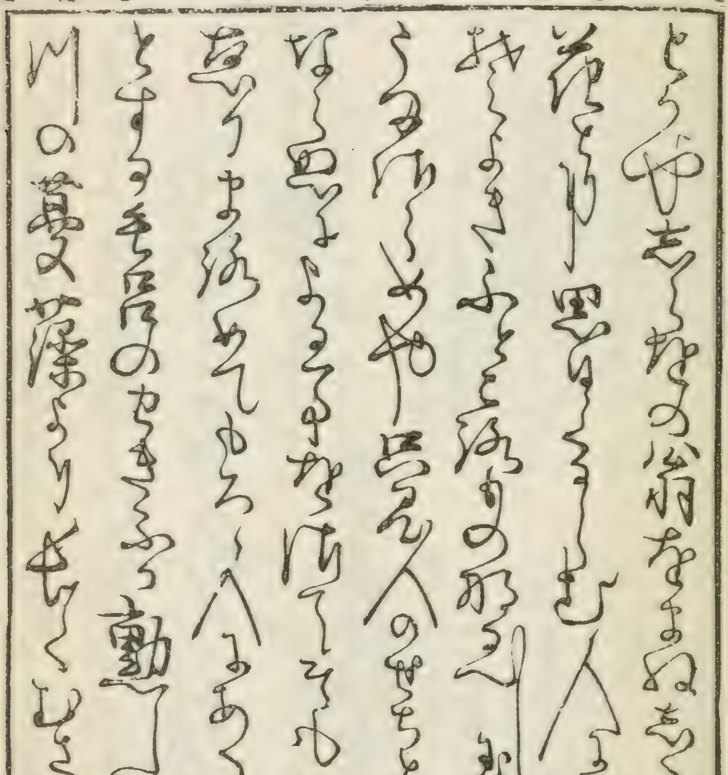
身を煩ふて大事なる人有けり。なしの花の今を春と咲たるを見て、なしのほしきと乞わびしに、いかがして持たり剣、ならの古葉に包みたるを、あとはなしとて只ひとつ遣ければ、かぎりなく嬉しがりて、あとのなからむとにやくらひもやらず。撫さすりつゝ抱



きて寐たりなどしけるに、梨子の肌つや〳〵とかたまり光出て、家の隅までも照す程に、いつか玉にぞ成ける。つばくらが子やすの貝、たつのくびの五色の玉とも思ひくらべて、胸くるしく苦き時も、此玉を抱けば苦みもやみぬ。かしらいたく身ほとぼる事もな



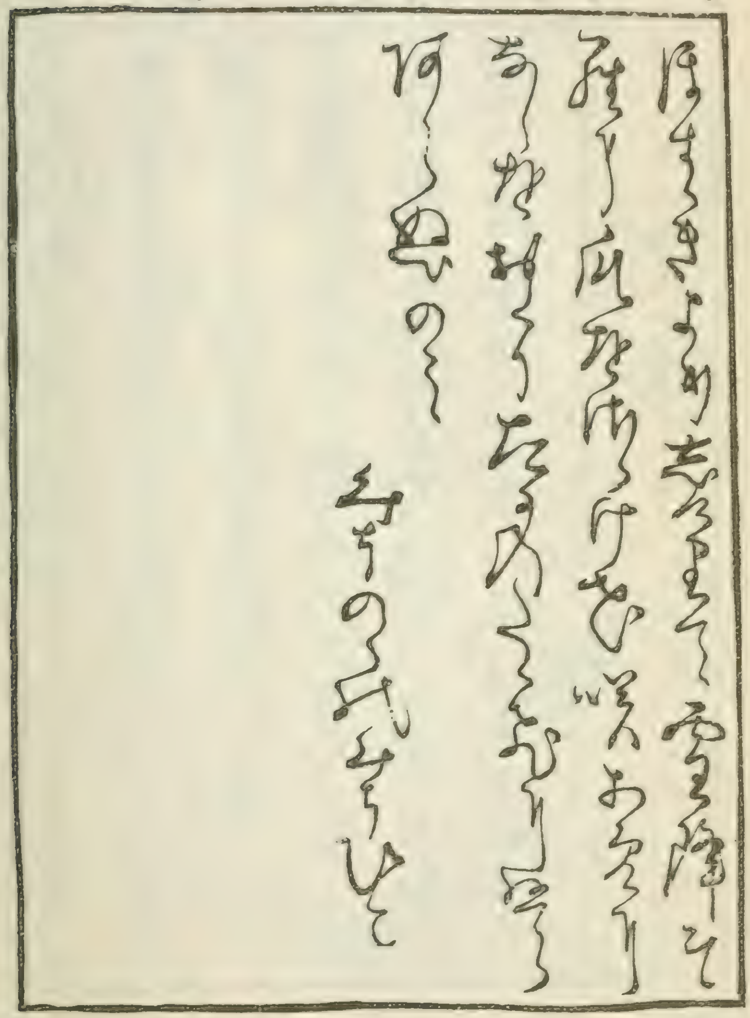
くなり、常のやすきにかへりしとかや。しらをの翁をまねしたひて、花とりに思ひくるしむ人にも、此集ぞよきふところものなるべし。玉をもうまざらめや。只見人のせちとせちならぬによる事を。さてそも是をゑりまろめて、もろ人にあたへむとする毛呂のせ



きふが動しは、あら
川の莚藻より長く、
むさしのゝほすゝき
よりしげりて、雪降
そらに瓜をさゝげ、
花咲あめになしをお
くりたるのたぐひに
はあらぬのみ。

みちのくの

みちひこ



白雄句集巻之一

春之部

歳旦

元旦や大樹のもとの人ごゝろ

万歳の頤(おとがい)ながき旦かな

あをげばいよ〳〵鳳凰城、俯してます〳〵國恩を思

若水やおよそ玉川猪のかしら

天鶏羽うつて萬鶏うたふの此曉、踐約せしみたり、沓ふみしめて山にのぼる田毎の日こそ戀しけれ。その田毎の日影戀しきが故也。山は姨すてしところにて、何れを年の始の姿といふべくもあらねど雪のむらぎへなるに、日のかはらかに光りあひたる、ものなつかしき旦なりけり。

碩布著

春いまだ田毎の雪間〳〵かな

勢大廟前元日立春

榾(ほだ)の木に今春たてる神路山

信中虎杖菴に春をむかひ、雪のきゆるを待て皇都に杖ひくべき趣を、人ゝにさゝやきはべりて

初がすみきその嶽(たけ)ゝたのもしき

北總千葉、宗胤禪刹に春をむかふ

歳ありて般若の聲を三の朝

蟻道およびそこの人ゝが、せちに霜雪の行脚を勞りしにぞ、はからずも甲斐の國栗原の驛に春をむかふて

身の春や遊ぶところに日かげさす

相中酒勾、南藏蜜(密)刹に春を迎ふ

みなみどり松を見海をけさの春

武野桃原菴に春を迎ふ

主がせちより先捫虱の貧を忘

世とゝもに身のきそ始おもふかな

夜道の行かひしげきには、さしも降つる白雪のあとかたもなく長閑也けり。

菴にのみふるとしの雪を門の春

法華書寫思たちし年の旦

心こめて筆試るとしかな

門人に草菴ゆづるべき年の旦

我と世をのがれん身にも初日影

歸童が家嗣佐太良(郎カ)の筆意常ならぬを祝して

天みつととつて七ッの吉書かな

陶水瓶といへる物を、まさこがめぐみける年の旦

日の匂へ(ひカ)小瓶に椒酒花ぞかし

病中

梅柳はつ春の眼たしかなり

新居もとより煤竹を入ねば、春のあらまし又いふにやおよぶ。

元政の松もかざらず老が門

人日

葛飾に知人いくら梅わかな

朝の間に摘てさびしき若菜哉

隣〳〵うしろも隣なづなの夜

七種のそろはずとてもいわゐ哉

薺賣鮒の釣場をおしへけり

粥草や葛飾舟の朝みどり

うち囃し馬も嘶よ薺の夜

葛飾の菘菜なつかしき今日や、いやが上の白妙に、枝のみちもさだかならねど、更科川のさら〳〵と澤邊にをりたち、袂をぬらさんとす。折から投ぜし文の奥に、見せばやなこれぞ信農の雪若菜　と一句にそへて烏洲坊が一籠をめぐみたるに

大雪の旦若菜をもらひけり

掛り舟岬のまつに子の日せよ

霞

國にそふ霞をはこぶ潮かな

遲日夢去て時とへば遙にこたふ

かた〳〵の鐘聞に霞める寢覺哉

醉さめや鷗を見こしの波かすむ

こまたになりて霞める野川哉

菴崎にて

うすみのや夕越くれば雨かすむ

より所なくて遠しや野のかすみ

梅

梅おりに舟よぶ多摩の渡かな

馬の子の家にかへるや梅寒し

遊台獄

捨氷院ゝの梅さかりなり

朝夕や何れとならば夜のうめ

梅が香や鮒ひつかけし釣の糸

宿の梅といはるゝ宿よ松もよき

ますら男の梅が香袖に射矢哉

うき艸のひと葉なりとも磯がくれ
おもひなかけそおきつしらなみ

磬鳴て梅おらんこゝろうせてけり

富家も乏き家もうめさきぬ

夜の梅寢んとすれば匂ふなり

閏月ありける年

加はれる睦月の梅花郁ゝたり

梅ゆひし藁假その(めカ)のにほひ哉

うちひらけよき日あたりやうらの梅

酒たうべて病に勝べしとの玉ひける醫師の家にて、傍人に申。

ひとゝして酒のみならへ夜のうめ

初寅の日、人ゝ斧おろし句つからまつるに、都の友を思ひ出て

便せよ麓はうめのくらま山
人にものおもふ顔なき里の梅

武野天満宮奉納

むさし野に松梅多きところ哉
麦のたけ梅紅に春ふけぬ

柳

やなぎ風に裏おもてなき時節哉
おもふ柳見にゆくころとなりに兒
日永きや柳見て居る黒格子
眠るかと鶴見て過る野の柳
正月の霜ふりこぼすやなぎ哉
月遠く柳にかゝる夜汐かな
梅やなぎうめうつろひて青柳か
膾うつ門に暮行やなぎかな
夕汐や柳がくれに魚わかつ
的形の矢落の柳しづかなり
柳なをしりぞき見れば緑なる

つばき

鳥の觜白玉椿きはづきし
薬おもてにかまくら椿咲にけり
飽てたゞ鴨の吸花つばき
なか／＼にはや散つきよ赤椿

木の芽

けしきたつ谷の木のめの曇かな
世の木の芽こゝろ鞍馬にかよふ哉
桐もやゝ黐皀角も芽をぞふく

鶯

飛鳴に鶯の機嫌しられたり
うぐひすにすげなき晝のかづら哉
鶯に圃すこしある屋敷かな
鶯のしら目にふくむはつ音哉
水あびて鶯となき脊はらかな
横に日のうぐひす見こむ書の小口
かならずよ鶯きかばやまの入
鶯の胸毛をこぼす春みなみ
うぐひすの今朝たく柴にとまりけり

蝶

蝶とぶやあらひあげたる流しもと
袖に来て袂にきへつみちの蝶
初蝶と見しより数の野づら哉
はつ蝶のちいさくも物にまぎれざる
酒くさき人に蝶舞すだれかな
から鮭にてふ舞晝の厨かな
二羽になりて蝶かへすなる野中哉
夕風や野川を蝶の越しより

猫の戀

猫の戀六日年こし更にけり
氷ふむ猫やゆく／＼戀死ん
このほどやうとくなりゆく猫の妻
戸をあけてはなちやり兒猫の戀

蛙

酒星を見に出て蛙きく夜かな
瞬やあしたの小田のかはづども
はつ蛙水にはなかぬ夜聲なり
脱すてしみのにをかしき蛙かな
起ふしに床の蟇追やもめかな
飛ちがふ蛙くらしや雨の曉

田螺　蜆　蝌

田にしわる野口の姫のにくきかな
苞(つと)の田にし田へ戻すべう雨をなけ
土舟や蜆こぼるゝ水の音
泥はもとの海へ目指のあさり貝
われがちに數あるものを蝌とり

蜂　虻

木ばさみのしら刃に蜂のいかり哉
蜂の巣も人たのめなる軒端かな
馬は眠犬は追なる門の虻
舞すくむ虻や地にそふ影久し

春の雪

あれなるが安房の岬(みさき)か春の雪
春の雪しきりに降て止にけり
海に見ん春の白雪地にあはき
とりさがし門にすさ切雪解かな
朝駒の朝川わたる雪解かな

春の雨

海はれて春雨けぶる林かな
春さめのこゝろながくも降日哉
春雨や小桶にかづくかす小鯛
おもひ絶て梅きる宿に春の雨

鴫立澤にありしころ

春雨や傘さしつれし濱社

春の風

はるかぜや吹れそめたる水すまし
うら若き川原蓬やはるの風
濱つとや歸るさをふく春の風

湍の嶋にて

春風や潮に手あらひ口そゝぐ
はるかぜに吹るゝ鴇(とき)の照羽かな

春の日

柏木の衛門が鞠をとんとけたれば、まりは枝にとまりつゝ、花はちらりほらりと

春の日を脊せで暮る簾(すだれ)かな

酒店

簾戸に鯛のこけちる春日哉
春の日や刀あづかる原やしき

長閑

のどけさや津ゝ浦ゝのおもはるゝ
長閑しや麥の原なるたぐり舟
遠干潟ふねのみよしの長閑也

ながき日

永き日や鷄はついばみ犬は寢る
うす曇同じ空にて日の永き

晝寢のくせを自はぢて

永き日に我と禁ずるまくらかな

也寥禪師の消息に酬

ながき日やみちのくよりの片たより
みちのくやいく關の戸を初便

二日灸といふことを

母戀し日永きころのさしもぐさ

かげろふ　糸遊

天眞古刹

陽炎やしづかなる日の敷かはら
かげろふや一掴づゝすさだはら

陽炎のもえて地にたつ松葉哉
糸遊にほどける艸の葉先かな
いとゆふやものによらねど角櫓
糸遊に兒の瞬きやさしさよ

紙鳶

舟にあげて舟ふりかはる几巾
几巾空見てものはおもはざる
いかのぼりきれての後の風ぬるし
たこみつよつ山邊の長が夕詠
夕ぞらや几巾見に出し酒の醉

初午

初午や七ッの年のくゞり道
はつ午や假そめゆけば七ところ
初午の日和は梅に柳かな
はつ午や小旗をつかむ舟上り

病後

はつ午や梅見ぬ年の梅を見に
初午に痘瘡かろき世なみ哉

涅槃會

梟のつらも佛のわかれかな
ねはん會や往來の人をひまの駒
涅槃會や身は寺入の穀つぶし

鶴の林を思ひ合すもことふりにたれど

礒なれし松も見らるゝねはんかな

老ゆく身を獨ごちして

去年より今年佛の別かな

彼岸

吹つれて梵論(ぼろ)も彼岸の歩み哉
山邊には桜(たら)の芽を摘ひがんかな

西行忌

捨がたき妻や子や兵衞尉と聞へしも西上人ときこへしも、たゞかりそめの名なる事を

花に死(しな)んねがひは欲のかゞみかな
みだり世に生れて世をや花の陰

出代　家婦入

出かはりの酒しゐられて泣にけり
やぶ入や桃の小みちの雨に逢
出かはりの一日にせまる誠かな
筑波根や世のやぶ入か遠霞

菫

なか〳〵によき衣はちよ野の菫

菴にうつる日

春どの野にのみ見しをつぼ菫
末黒野に咲ずともあれ菫艸
行や我すみれがくれの濱雀

菜の花　くゝたち

病後の吟

野ごゝろや筐(かたみ)の小菜の花を見て
かさね着や菜の花かほる雨あがり
菜の花のにほひは甘くにがきかな

茶店にて

摘そへよ膳のむかひの鶯菜
莖たちに春の地勢を見する哉
井のもとや莖たち摘ん寺泊

燒野

山焼やほのかにたてる一ッ鹿
越わびて淋しうなりし焼野哉

前書略

山焼や有情非情ももとの土

春の艸

一色にいろ〳〵艸の青きかな
背かけて草の青きを春の人
若艸や栞にむすぶ古すゝき
うら〳〵と草はむ春の野鹿かな
萍や生そめてより軒の雨
艸の戸や更行春の青かづら
鹿みちや籠に交りて蕗の臺
おもはさる瑞籬の内ぞふきのとう
うどの香や蛆に下駄はく山の兒
たんぽゝに東近江の日和かな
石原やくねりしまゝの花あさみ
めぐる日や指の染までわらび折
早蕨や一日路ならつくばやま
ふせ柴の十日たちしをつく〳〵し
聞からにしりぬ杉菜は土筆
杉苗に杉菜生そふあら野哉
水のほどとく角ぐみしかきつばた
野の潅み水うちふくみ茅花生
棲の朧つばな月夜といはまほし
出ばやな籬が野邊の麦踏に
苑豆やたゞ一色に麦のはら

苗代　種おろし

鴈は歸鴨はいづこへ種おろし
いとまなき世や苗代の薄みどり
行水や苗代小田にせきそむる
水鳥の歸ていづこ種おろし
苗代のかけ水はかる五十串哉
なはしろに鴎追るゝ礒田かな

雉

雉子の尾の飛さにみたる野風かな
きじ啼て嵐の野土けぶるかな
日や暮る尾をうちかひて枝の雉
鹿垣に番かけ込きゞすかな
もがきてや爪根あらはに網の雉
羽やたゝで峽の橋ふむ夕きゞす
山里や馬糟にきじの歩みよる
痩てたつ春の行衛や岡の雉子

歸鴈

歸る鴈みな麦喰に見ゆるなり
我こゝろ聲せで鴈のかへれかし
追聲のうしとや歸る小田の鴈

ひばり

明星やしめ野のひばり巣にぞ鳴
たつや雲雀すこし舞そふ濱雀
やぶかきや野越せうものひばり鳴
地蜘追ふて追そこのふてたつ雲雀

つばめ

軒燕八聲の鶏を聞おらめ
人住て燕すみなす深山かな
はしり帆の帆綱かいくゝるつばめ哉
巣乙鳥の下に火をたく雨夜かな
つばめ舞宿や日高に高木履

巣燕に雛巾かけし柱かな

鳥の巣

鳥の巣の明れば暮る日數かな
巣つくるやにくき鳥も親ごゝろ
巣鳥落ぬ木末にかへすよしもがな

拭ひ椽に塵をおとす罪ありて、こらい(へカ)ゐぬ家の子が、もろ手を指入、さしもに厚きわらの圍を落したる夕

巣はあだに軒の雀の聲高き

うそ

照雨や瀧をめぐれば鷽(うそ)の啼
鹿垣にうそ啼里のやすみかな

春の鳥

淺間山つなみせしあくる年、その麓を過るとて

砂ふるへあさまの砂を麥うづら
馬峯(まさくり)に舞入春のすゞめかな
足緒はゆるしら尾の鷹の後(うしろ)哉
物おもふ人に駒鳥(こま)鳴暮もがな

曲水

曲水はとても日和のゐんならん
きよく水やまさに小貝の蜷(にな)むすび

上巳

桃の日や下部酒もる蒸鰈(むしがれい)
匂はしや誰しめじ野のよもぎ餅

雛

紙雛はあるがうへなるみやびかな
蠟燭のにほふ雛の雨夜かな

なにがしの一女に對して

綾にしき雛にあやかるこゝろかや

彌生一日一女まうけし人の許に

みなあらた産家に隣る雛かざり

とくより春あたゝかにして、桃櫻やゝちりかひみだれたる三月三日を

旅人の窓よりのぞくひゐなかな
世の雛にみな折とりそ遅ざくら

桃

家あるまで桃の中みちふみいりぬ
里の桃蠶掃おろす日にあへり
うちそむき木を割もゝの主かな
崖の桃およひてもたゞすなをなる
あかつきや人はしらずも桃の露
かぎりなや堤より見るもゝの花

汐干

春干潟人の歩みのすぐならず
あと先の小舟をちから汐干狩
濱揚の牛はるかなる汐干かな
歩み來ぬ岬のなりに汐干狩

萬葉集の伊久里と聞へしも、今日あらはなりけり。

ひやひやといくり踏しる汐干かな

あまのまてかた、いざ此日春の干潟に杖をたてゝ

馬刀串(まてくし)にあはれは馬刀のちから哉

花　さくら

花とながめさくらとながめ日は暮ぬ
鐘つきを晝にかく花の麓かな
人戀し灯ともしころをさくらちる
行労さくらぬしつく一木かな

洛にて

寺〻を通りぬけけり花さかり
をちこちの櫻に紡ふ筏かな
瓶に酒いづこはあれど家さくら

はりまの國わたらひせしところ

夕風や汐木のさくらちりやすき

花一河を隔といふ題にて

水かさや香をのみ花の口おしき
ちろ櫻嵐に答ふことばなき
酒の科家さくらにて日暮たり
引あみの礒山さくらちるを見む

借屋戸神社

神こゝに控櫻も咲にけり
遠近やほの〴〵さくら風ぞなき

香に花につゝまれぬ春を桃櫻
春のあらしちらさる花はちらぬなり
世はさくら門は餬賣日和かな

奇(寄)朽木戀

椌木に余所の花ちるうらみ哉

東叡王のみあらか營建ある
その始の日まいりて

地祭や松のひま又花のひま

人の奥羽に行をおくる

松さくらまかせごゝろのみちのく歟

ひとへ山の邊にて

夕櫻夕越いざやひとへやま

道の爲には旅行をすゝめ、
酒に對しては杯をかくし、
老がいのち長かれと切を盡
せし保吉先生なくなりて忽
三歳、正當日の今日、北總
和暢亭にありて、亡がら埋
し一字、遙に情心こがれ飛
思ひを

椎寺も雨の降かに花のあめ

兄の七回忌にはる〴〵節曳
つゝ奥城所拜みけるに、七
とせの昔は只おもかげにの
み、初喪にかはらぬおもひ、
我人にのみありて

ちからなき旅して花に墓参

梨花　辛夷

花にけぶり軒の姨なしと詠りけり
朝雨や簾ごしなる梨の花
雉子一羽起てこぶしの夜明哉
木末踏みちに辛夷の白き哉

山吹

山ぶきを喰折春のからすかな
根をたゝで山吹ながるかけ樋かな
山ぶきやあたらかざしのから車
やま吹にくちなはを追旅人かな

つゝじ

大和のくにわたらひせし
ころ、高取の城ちかきあ
たりにて

山城や紫つゝじかぎりなき

片岨のつゝじとぎるゝ巖(いはほ)(巖)かな
今さらに蔦あさましや岩つゝじ

藤

藤咲や鵤(いすか)の觜も末の春
物がたり讀さして見る藤の花
藤さくや人もすさめず谷の寮
月かすかに犬なとがめそ夜の藤
しら藤や月ほのかなる山の兒
筏くむ夕暮藤の落花かな

鹿の落角

雨の降日にひろいけり鹿の落角
影や見る水やのむ鹿の角おちて

暮春

ゆく春や鄙の空なるいかのぼり
葉櫻に山こゝもとのはる深し
明日よりは身を夏旅の今宵哉

已下不分題

先ゆくも歸も我もはるの人
餅酒に慍(うん)じて春の野づらかな
美しや春は白魚かいわり菜
こりずまの世に犁ありて水祝
春の水藻臥の蜷も得たりけり
風ひとふき酒にけぶれる松の花
松の花柳の花は手にもとる
庭中にあるじ酒くむ接穂哉
古き代のみちのく紙やかみかいこ

圓光大師御忌

遠霞智恩院の鐘かすむらし
煤ちるやはや如月の臺所
鴈小屋のあらはになりぬ別霜
簑市に誰〻みのを春の雨

保吉を悼

逝し兒を生殘る我をなげく哉

三月三日、この人のうせし日なればこゝにひらふ。

聖護院御峯入、此春ありしと人のいふに

峯入やおもへば深き芳野山
みね入や篠(すゞ)にかぶるゝ道ありと

師の單忌、鳴立澤にありし頃

おもひ出てさし木の五加木(こぎ)摘日かな
淵の水深きはふかくぬるむ哉
春の月山椒の皮にむせてけり
朧夜や誰か寐て行鹿島舟
烏雲に入て松見る渚(なぎさ)かな

春詠都三百二十句

白雄句集　夏

白雄句集巻之二

碩布著

夏之部

更衣

元日の舊服、今日に至りてなを垢つきたり。しかはあれどもわが囊中俳諧にとめり。

更衣旅のほつれそれもよし
かへるさや胸かきあはすころもがへ
衣がへぬき簀の水ぞいまめかし
袷着て卯の花折んこゝろかな
馬とりの込に入けりころもがへ

楚川がよき衣めぐみたるに

あたらしき袷に今朝のあさ日哉
綿ぬかん／＼とて四月二日かな

伊勢の留主に招れて

たがはじな此日を祷のころもがへ

青簾

蒲くれや酒けしめさる青すだれ
うら表おもてはわきて青簾

灌佛

雲の歩み水の行かたや佛生會
灌佛や門(かど)を出れば茶の木原

一聯二句

御父の名はおろ覺佛生會
御母の名は人もしる佛生會
灌佛や芍藥園を見すかして

夏籠

夏(げ)にこもるこゝろは簾ひとへかな
鐘つきの妻にすゝむる夏花哉
何となく夏にいる人を見られけり

短夜

みじか夜や直宿袋のあげおろし
明やすき夜を泣兒の病かな

夏の月

みかき葉は椿なりけり夏の月
くちなはを踏しはたが子夏の月
町中をはしる流よなつの月

ほとゝぎす

起臥のこゝの夜待ぬ郭公
弓とりは弓持てきくほとゝぎす
夜の灯やこゝも住よし時鳥

あけれさの雞鐘か中ほとゝぎす
子規なくや夜明の海がなる
館の灯を待夜のちから時鳥

鴫たつ澤にありしころ

思ひよる門の榎やほとゝぎす
黒焼にせしは何もの子規

草菴に松栩植けるころ

をとしくるはわが松風やほとゝぎす

碓氷峠にて

鄙曇かならずよ山時鳥

あたみ入湯

有明や初ほとゝぎす槵ぶね
朝みどり庫裏の窓より時鳥
馬に鞍こはたが夜明ほとゝぎす

品浦海晏寺

江を採て似あはしの山ほとゝぎす。
國中やかけ時鳥厚木川
謝尙なら眞似て苦んに時鳥
啼らんと思ふ空八隅ほとゝぎす

鹿の子

八九間鹿の子見送る林かな
草の葉に見すく鹿の子の額哉
艸の原何を鹿の子のはみそめし

松魚

夜船とは僞ならしはつ松魚
夜松魚に裾ぬらしたる内井哉

三桃ぬしを携へし雨石老人の東武行は、やよひはじめになん參りあはせて、むまのはなむけせしが、ともに長居の老人は江戸に、我はしなのに、此日井ゝ亭をとひて、噂盡べくもあらずなりけり。

嘸くさめ嘸ほとゝぎすはつがつを

閑古鳥

なけば啼ふたつの山のかんこ鳥
閑古鳥世は山鳩も啼頃か
白樫を花に啼かもかむこ鳥
しづかさの啼もそこなはず鳲鳩
閑古鳥啼林より落羽かな

牡丹

園くらき夜を静なる牡丹かな
散さまや牡丹のぬしの物いまひ

牡丹花老人賛

牡丹袖に連歌戻りとしられたり

燕子花

三河の國わたらひせしころ

古道のかきつばたとふ日ぞ長き
雨のほどけふを葉のびの杜若
雨に人たちもとふるやかきつばた

芍藥

芍藥や四十八夜に切つくす
䒧なき芍藥園となりにけり

若葉

人の京にゆくを送る

世はわか葉氣相のわろき日はあらじ
見ありきて先問榧の若葉哉

園ゆたかに見ゆる若葉の關路哉
若葉して瀧のありたきところ哉
樹々のこゝろ若葉に遂し氣色哉

うのはな

むかばきに卯花かゝる雨くる(らカ)し
うの花や笆を見こしに夜の海
榊とりうの花を折雨部かな
卯の花や折ての後のうら表

青あらし

かしは山夏の嵐をうち見たり

馬門亭

人の知る曾我中村や青あらし
沙川や梢をあはす青あらし
山の邊や天蓼拾ふ青嵐

罌粟

花げしにくんで落たる雀かな
けしの花見て居るうちはちらざりし
花げしやうしろさびしき階子賣
罌粟の花十日たちけり散にけり

竹の子　わか竹

竹の子の葎の雨をかつぎけり
わか竹や牛のゆく筋あらしふく

甲斐しなのゝ國さかひを過るとて

白樫や篠竹原はわかばせし

紫陽花

あぢさゐやかれにうらやむ花あらん
紫陽花のすぐり寄たる蒼かな

烏醉居士之墓

あぢさゐのかはりはてたる思ひかな

水艸

實相無漏の大海に五塵六慾の風はふかねども、隨緣眞如の波のたゝぬ日はなし。

藻の花やみがくれてだに風さはぐ
水たゝへて水草うつす小沙彌かな
束鮒の刈藻にうごく門の月
うき草や同じ嵐のうき根茨

橘

老ふたり花たちばなに醉泣す
廬橘にかたちつくりす夜の軒

さつき

母の五十回を奠るも、たゞに命ありてよと身のつゝがなきを歎ては、乳房をしたひし恨も散ずるばかりに

をぐるまの死なで母吊ふさつき哉
綫毛龜の蓬にこもる五月かな

五月雨

假そめに降出しけり五月あめ
八專のうちぞともいふ五月雨
五月雨やひと夜嵐のかへし雲

さみだれは時雨むらさめ夕立のそらのけしきをつくしてぞ降

五月雨の音を聞わくひとり哉
もたれあひてみなもろかづらさみだるゝ

草菴客をとゞむ

君しばしさみだれの中の夕立ぞ

軒端の松の、雨に嵐に
みどりうしなひたるを

さみだれや枯なん松に普門品

入梅

焚火してもてなされたるついり哉

入梅(つゆ)の明(あけ)遠かみなりを暦かな

入梅のひま鼻とをさるゝ犢(こうし)かな

端午

やすみしろしめすみつば
四つばの殿づくりのため
し多かる中に、此日あや
めのかづらかけざらんも
のは、宮中へ入をゆるし
玉はずと也。是に倣はは
ばかりあれど、佳節のホ
何せざる者は、荆扉を訪
となかれと戯て

かはるがはる五尺のあやめ袖にせよ

軒あやめ市に牛かる思ひあり

塩竈にさうぶ葺居る童かな

家々にながき根ふきわたし
て粽めくもの持ありくに
ぞ、深山の柏葉も時に逢へ
る此日なるべし。

篠かしは葉どに露の節句哉

草の戸や粽をほどく夜の露

長々と肱にかけたりあやめ賣

菴の作事半なるころ旅に在
て

小菖蒲に素建の我家なつかしき

さうぶ湯やさうぶ寄くる乳のあたり

世をまゝに隣ありきやさうぶ酒

麗水堂に朝祝の酒、よきも
のさかなあざらけきをたう
べて

いざやとて燗酒に交し菖蒲酒

世はあやめそけてひと日は花かつみ

むつまじのあらむつまじの軒あやめ

くらべ馬

髪づらは老もわかずよくらべ馬

むつまじきつねをば何とくらべ馬

火串

思ひよらぬ哀を見るも、
うき旅のならひならず
や。

もえさしの火串に鹿の血(ちしほ)かな

火串ふつて獵矢(さつや)をそゝぐ小瀧かな

獵の男が弓、蜘の網、とも
に飢をたすからんはかりど
にこそ。艸菴にけふの糧を
たくはひしかば

命毛やわれは網せず照射(ともし)せず

田植

伊勢にて

御田植の酒の泡ふく野風かな

捨苗や田中の菴のはいり口

鳧の子を野水にうつす植女哉

早乙女の蓑かけ柳年経たり

早乙女のうしろ手しばし夕詠

木のもとや松葉にちぎる田植酒

早乙女の葛葉ふみこむ山田かな

青田

傘さしてふかれに出し青田かな

蝙蝠

かはほりの夕を宜禰がつゞみ哉

蝸牛

かたつぶり落けり水に浮もする
山繭孕や寸にあまれる蝸牛
楳茅にすゝけておかしかたつぶり

螢

庇やほたる夢人を訪夜の露
むら松やきえんとしては行螢
夏は夜と汝がとか庇ほたる

蟬

松の木や今日は朝から蟬の鳴
夕蟬の後木に鳴ふもとかな
蟬鳴てくるしやみのゝむらかはき

蚊

蚊遣り火のけぶりの末に鳴蚊哉
竹切て蚊の聲遠き夕かな
しばらくは高きまくらを蟵の月
蚊のさすや蚊火種ひらふ指の股
蚊に酒を吸さん夜半か蚊屋の月
ひとつ蟵に僕も朝寐の枕かな
下京やかやりにくれし藍の莖

子をうしなひたる人に

蚊屋の月亡子かへせと泣おらめ

夏の虫

油火に蚊とはいはずよ夏の虫

水鶏

艸しげみくいなの道に鎌入ん
遠近のいはぬ夜を啼水鶏哉

鵜

鵜の觜に魚とりなをす早瀬かな
數の鵜に鵜匠ひとりの目面哉

かはせみ

翡翠の筑波おろしに吹るゝ歟
中絶し橋を翡翠(ひすい)の小楯(たて)かな

氷室

世の責多かる中に氷のみつぎ

雪の中の筍より、水無月の貢、闘鶏(つげ)の野と聞も遠きにあらず。

朔日の御内わたりや夏氷

雲の峯

雲の嶺白きはうそのはじめ也
雲の峯きのふに似たるけふもあり

川狩

川狩や鰷の腮(あご)さす雨の後
川がりやその夜〳〵の月四分

涼

ゆかしとや人見む合歡の下すゞみ
すゞしさや蔵の間より向島
梳る人もありけり門すゞみ
すゞし江に鰶(このしろ)をうつ竿の露
蜀黍(たうきみ)のもとにかたろふ涼み哉
しき濤や枕一節の海すゞし

舟行まゝの富峯、市街にかくれたるを

うしろ涼し筑波はかくす家もなし

舷(ふなばた)に蓼摺小木や夕すゞみ

簟

たかむしろ酒したむ事を禁じけり
行水にうちまたがせよたかむしろ

扇

片手綱馬上に扇見事なり
明てしれ浅黄うちはに夜の露

薫風

唐人の書に

風かほれ唐とやまとの墨の色

虫干

虫干や菴に久しき松ふぐり

暑

日の前の浮雲暑き蔭(かげ)りかな
猶暑し簀干の魚にはこび雨

悼兎石

此界は暑し〳〵との眠(ねむり)かや

麻

麻刈の麻きぬあらみさればこそ

夕立

夕立や流れ出たるむもれ水
風そひて夕立晴る野中かな

清水

蛭のすむ数さへ見ゆるとは師が遺章になん。さるをこのほど滞留なす扁正蓮社に、一筋の流いと清きあるを

朝夕や戀る清水の蜷むすび
何なりと一木ありたき礒清水

祭

兒あふぐ扇の箔もまつりかな
樹々深く祭のあとの野曲突哉

夕顔

ゆふがほに阿兒(あこ)と呼子は女なり
夕顔や花の上なる籠り堂
窓のけぶりすゝけの花と觀じけり
葉がさねのひさごの花や石の露
夕貌や花の爲とてうえはせじ

晝がほ

晝がほや日のいら〳〵と薄赤き
ひる顔やわかちて擔ふ魚の露

蓮

白蓮に夕雲蔭るあらしかな

或ひとのもとに荷花ある事を

夙に起て蓮見ん爲ぞ夜訪し

瓜

蔓ながら都へなどか初眞桑
瓜の香にきつね嚔(はなひる)月夜かな
祖師堂にふりの香籠る曇哉

御祓

たゞこゝろ門の流も御祓の夜

雨にあひて

海川や御祓のあとの雨の聲

賀茂より七條の僑居に歸るに

川ぞひを戻るもよしや御祓の夜
篝けしてそれも流すか御祓川

不分題艸木

くるしくも雨こゆる野や夏蕨

訪ぬ人も葎の宿にかぞへけり

蟻のより釣鐘草のうつぶせに

山百合や歯朶の間より一ッ咲

熊野路にて　三句

慈冬の花うちからむくまで哉

濱木綿の花はいつさく夏刈す

西日さす濱は柴胡のしげりかな

むら雨や見かけて遠き花樗

梅熟す折にふれたる曇かな

葉柳の寺町過る雨夜かな

岩はなや旅人労ていちご食ふ

花柚水にうかべて糞の雁かな

歩み来ぬ早瀬はあとに夏木立

下闇や椎の葉がさね艸もなき

桐庵の賛

桐の花若葉のすだれ猶あらん

山高み、二國の境に立せ玉

ふくまの宮拜み奉て歸るさや、盤桓すれば上毛、流懇すればしなの山々、眺望ひまなき至景なりけり。御愛樹のもとにたちて

かみつけや緻木はしなのにしげみけり

葉櫻におくれ詣のこやたかな

合歡の木かげ人も日に〳〵夕なり

不分題鳥

大樹公の御船うかべさせ給ひしは、きのふと聞、綾瀬川にて

鵜一羽御狩にもれていく程ぞ

不破にて

松風や關はむかしに羽抜鳥

とやたかといふ事を

鷹に聲なし雨にたれたる塒莚

ひとしきり竹に柳にぎやう〳〵子

すさまじや雀の甕あらしふく

都々鳥や木曾のうら山木曲に似て

沙鶏の聲人あきちかくなりにけり

蚊食鳥とてもくらはゞみなくらへ

雜題

木瓜より舟を浮む

舷や年は四月のわかれ霜

凶年を悲みては膾炙口に苦く、有年を悦ては糲食口に甘し。

笆ごしに青ざし匂ふやどり哉

旅人に旅びと見せよといひけんも思ひあはすの折から、純枝なる者青梅を携來るに、我人興に入て

麦の青ざしをしいたゞきぬ掌

なき母の爲とかける笈摺のうしろさま、いとあはれなるに

冷し酒旅人我をうらやまん

夏旅や母のなき子がうしろかげ

夏詠都二百二十八句

白雄句集　秋

白雄句集巻之三　　　　碩布著

秋之部

立秋

梅牡丹萩おとらずも秋のたつ

馬買の小笠に秋の立日かな

はつ秋や片笘かけし艄ごゝろ

草よ木よ今朝秋たつと人の言

日に枯たる軒の小艸もいとわづらはしきを、むしり捨たるきのふは過て、花は覺束なくも

刈草の蘖に秋のたつ菴

はつ秋や誰先かけし笘根山

秋立日雨の降けり萱が軒

病後

つれなしや秋立ころのあぶら旱

桐一葉

山寺の入相の鐘の聲とにけふも暮ぬと入相の鐘、いり逢のかねの聲ぞきこゆる。

鐘の聲かねの聲桐の一葉おつ

一葉二葉のちは桐ともいはぬなり

渡る瀬にあらしの桐の一葉哉

音すなり筧の口のきり一葉

うつせみの空骸からは殘りけりきへてあとなき朝がほの花

なにと見む桐の一葉に蟬の殼

七夕

七夕や桂に寄ば月落し

たなばたや蚕に日覺て夜の閑

ばせを葉に覺しほどを星の歌

宵〳〵に馴しかこの夜天の川

天の河星より上に見ゆるかな

旅につかれて宵より寢、あかつきの星にかこつ。

なにとなく曇て星のわかれ哉

天の川野末の露を見にゆかん

星逢の濱に杖曳て天の川うちわたりしは、はたとせまり一とせになん。老せまる事このひまにも一むかしなるを

星ひと夜昔にかへれ伊勢河内

萩が花尾ばな葛花
撫子の花女郎花また
藤ばかま朝がほのはな
秋海棠星七艸になどもれし

友なる雨石老人、七月七日
の夜身まかりけるよし告こ
しけるに、なみだこぼれて
星の夜を臨終とや空をうち見たり

露

酒くまむあまりはかなみ枝の露
土橋の露ふみこぼす艸薬かな

草庵閑

露かくのごとく窓より傳ふ荏かな
朝露や砂にまみるゝむら小艸
釣人や聲だにたてず艸の露
むら露に艸のもとすへ見ゆるなり
露ちるや門の荏の瀧つくり

題楽山子遺草露

なき友は一とせ先の草の露

稲妻

いなづまの衣を透す浅茅かな
暮ぬとて稲妻落す古江かな
稲妻や嘰まぎるゝ宵の門
いなづまの闇にかぎらぬも哀なり
稲づまのおそろしうなる獨かな
いなづまやうしろはなせば江に落る
稲妻に匂をつけし魚藏かな
稲妻や障子さしたる虚労病
いなづまや何れ礒家は浅間なる
稲妻やとゞまるところ人のうへ
世ははかな電光石火酒酌ん

秋風

朝六や誰も通らず秋の風
秋かぜや蔦もたのます濱庇
吹盡しのちは草根に秋のかぜ
こもり江や嵐のあとの秋のかぜ

みちのく行脚のころ雨足山
にて

門に入れば僧逢なり秋の風

初あらし

夜半晴て砂利の高さよ初嵐
流れ出る埴土水や初あらし

靈奠

みな子なり靈まつ門に草箒
身に覆ふ齢につるゝ盆ごゝろ
魂まつり貧家の情ぞまとなる

旅中　二句

山かげや寐ぬをこゝろの魂祭
みの笠や我魂迎ふ宿は是

友なる霞白が小萩にそへて
莞艸をおくりしまゝに

盆ごゝろうきわすれ草えしかども
魂まつや枉さだめぬ宵の宿
たま待や石町の鐘のひゞきさへ
魂むかへまち得顔なる我人や

市中にあれ是見ありきて

先匂ふ眞菰むしろや艸の市
従弟どち月にかたるや玉祭

先師、品川の菴に在せし昔なりけり。

むかひ火や上總へむけば月が出る

かく古郷をしのばれし事先おもひ出ぬ。我に師あり、親あり。三人をさきにむかふるこの夕や、そとふく風も身入(みにしみ)はべる。去年の秋も旅にありて、みそはぎの一枝を五果百味にかへつゝ、今年も信農(濃)のくににありて、人の田圃の早よねや青そばや、手をれば麻がらの箸も有。ちぎれば蓮の浮葉もあれと、亡魂迎ふる旅のあらましを

しばしもとなき魂やどせ艸の露

迎火はとりわけ娑婆の悃哉

袖や覆ふ雨の迎火見へざるは

むかひ火や父のおもかげ母の顔

土べたに辛子(からし)さめけり盆の月

魂むかひこゝろ碓氷(うすひ)を越る夜ぞ

この一句は師が身まかる年の古郷行脚せし反古の末に見へけるを

生身玉

うき我に誰ゝまつる生魂ぞ

塩魚の塩こぼれけり蓮の飯

燈籠

燈籠みなきへて梢の燈籠かな

露けしや高どう籠のひかへ綱

中庭の簾見へすく燈籠かな

うす紙の灯籠にてらす草葉哉

門守の油つぎたせ軒燈籠

踊

おどる夜を月しづかなる海手哉

ある人のまぎれて入しおどりかな

相撲

嵐雪がその唐にしき角力見ん

西東あはぬ角力ぞあはれなる

甲斐なしやうしろ見らるゝ負角力

小手袖の昔にならへ艸角力

花火

知恵もなく舷(ふなばた)てらす花火かな

川面や花火のあとの梶(かぢ)の音

洲の松のはづれをこゆる玉火哉

稲妻に花火はしばしたもつかな

夜は秋のけしき全き花火哉

朝がほ

あさがほに瘧(をこり)のおちし内儀かな

朝がほや垣にしづまる犬の聲

蕣に簀干の魚も見て過ぬ

あさはものゝ朝顔の花もあたらしき

木槿

花むくげたつ日の早き思ひあり

めくら子の端居さびしき木槿哉

すゝき

雨そゝぐ岡の小家や花すゝき

猪(ゐのしし)をになひ行野やはなすゝき

空くせや尾花がすへの猪子雲

一むらの尾花これあだし野のありさまに

萩

七條の僑居に住しところ、
先のあるじが植置し籬が
もとの風情を

萩がきに萩咲そひしいほりかな

里うとし小萩が上に榾木つむ

もたれあひて一枝うごく軒の萩

芭蕉

露はれて露のながるゝばせをかな

ばせを葉やなにをちからに袋蜘

やれ芭蕉こゝろ此ほどものぐさき

蔦

壁の蔦甲斐なきばかり雨悲し

雨の聲淺茅の小蔦水こゆる

松がねの蔦に身をする猪子哉

美しう蔦はおとろふ人の秋

稲

おなじながら稲葉の露ぞ潔き

稲の花あらしの旬もはや過し

いね刈やのぼれば下る升よばひ

粒々辛苦の種まく口よりも

雨風をいとひしこゝろ盡し
を

かけ稲やあらひあげたる鍬の數

秋草不分題
さや川を下るところ

高水や蘆の白穂に雲おこる

あるが中に野川流るゝ女郎花

蔓艸のづんづと秋も二十日たつ

對門人

こと〴〵に我もしらずよ秋の艸

山ふかみちるか凋むか葛の花

きのふけふ葛葉にあらし吹とよ

蘭の香に老も若きも寐覺哉

立出て芙蓉の凋む日にあへり

この秋もわれもかうよと見て過ぬ

古寺発鐘埋地といふ題

犬栗や鐘は穂長の地におちし

末枯や坪前栽も世のごとく

きり〴〵す

きり〴〵す鳴止て飛音すなり

雨隣寐て月夜やきり〴〵す

寐もおしき夜や木槲にきり〴〵す

蝙蝠に鳴かはしけりきり〴〵す

きり〴〵す糧きる姫にうたるゝな

我見しよ薯蕷を喰居きり〴〵す

病中

衾ふんで霜の宿せうきり〴〵す

こうろぎ

縣井やこうろぎこぞる風たまり

蟀や一夜宿せし齒朶屛風

虫いろ〳〵鳴夜や宿にいとゞ飛

日ぐらし

とし四十蜩の聲耳にたつ

暮の雨日ぐらしも鳴ずなりにけり

蜻蛉

秋の季の赤とんぼうに定りぬ

蜻蛉に波の蔓艸亂るかな

秋の虫

虫の音や月ははつかに書の小口

草むらも艸むらも虫の詑音かな

鹿(しし)道(みち)や踏れんとばかり虫の鳴

聲さゆる虫は何〳〵銅(かな)だらい

艸菴閑

我あみ戸籠(こ)ぬけの虫をやどしけり

みの虫よなかでも秋のすがた哉

寐られねば、うき事ありて枕になづむ。

夜ながさや所もかえず茶立虫

八朔

八朔や旭のいろをたゝへ潮

鷹飼も出したのむの田づらかな

食てはこ(屎)す世を八朔の日和哉

八朔のさぞ稲雀竹にさへ

野分

小夜中や野分しづまる夢心

水寒し野わきのあとの捨筏

霧

艸の原きりはれて蜘の圍白し

簾(すゝ)のしの家霧のかゝらぬ日はあらず

霧の香や松明捨る山かづら

人戀し杉の嬬(つま)手に霧しぐれ

秋ぎりや蓑きるばかり降しきる

朝霧や晴るに間なき山のきれ

秋の雨

秋の雨あらしは宵の事なりし

蕗の葉や馬もくらはず秋の雨

敷藁や艸もえ枯るあきの雨

自他共白骨

野ざらしを見て通りけり秋の雨

なり瓢といふものありて、風月のため騒人めづる、何ぞ許子に荷膽(擔)せん。掛磬室中雨瑟〻たる日なりけり。さかづきをひだりに、秋風の鱸魚を右の袂に、そのしたゝかなるを負もて來れる客あり。かならずかの坊にこそと、思ふにたがはざる括嚢老仙なるを

浅からぬ瓢をいのち秋のあめ

待宵

待宵やひとりしぐるゝ廬屋釜

卜者平澤氏、我軒つゞきに居をうつしたるを

晴曇月まつ宵の卜(うら)たてよ

中橋と京橋との間に菴造せしところ

待よひや何れの橋に栞(しをり)せん

駒迎　放生會

貫(つら)之(ゆき)の清水にたてよ駒迎

放生會この夜鶴川も月夜なり

松高し月夜烏も放生會

月

嫗捨や松島やこよひ菴の月

名月や眞空になりて露くだる

名月や建さしてある家のむき

名月や夜網引かの芝さかな

嫗捨や松島や廣澤や石山や須磨や明石や黒戸のはま、むさし野はほどちかみ、清

き渚ははるかなりけり。

名月や眼ふさげば海と山

名月や降らば降れとは常の事

雨塘が午明楼上

月ひと夜出汐の森は忘れざる

溝竹におもひぞとゞく江の月見

長傳老禪師の隠室に遊ぶ

世は八重に捨し主と月こよひ

網引せし跡しづかなり浦の月

宵のほどくもりしかば

月にそふ雲のみわたにあらしかな

良夜雨

おもへとや月滿雲の底あかり

多摩の横野ちかきあたりに
宿かりて、五歩十歩月のか
げわづかにゆきゝして

野を竪に野を横さまの月見哉

述懐

今むかし月はしらずも澄夜かな

照月の月やうらみん夜蛤

人々清光をいふが中

名月や闇て琴かる罔兩

月こよひ爲にとならば竹きらん

陰晴さだかならぬこよひを
訪ける人々に對して

月に凝月にほどけんこよひ哉

名月や蘆のひと夜を蓬痺

舟もよひなど聞へしも、お
ぼつかなき空のやがて雨降
出ければ、我菴に頓の客ま
うけして

爰を舟とおもひ給へや雨の月

月晴なん雨に傘せで客來けり

茶路山暉同舟、深川五本松
にて

秋涼し月見をちぎる松がもと

良夜蝕の夜雨

蝕に雨に二夜の月を年ぞかし

月に影呑かむ駒のつかれかな

畫賛

名月や影四ッ橋の橋ばしら

春鴻が信中へゆくを送る

月姨捨目出たき影をいのるなり

貞徳老人の天鷲絨の枕は名
だゝる風流にこそ。をのれ
病ふにふしてこの夜床をは
なるゝ事、わづかにに じり
出たるのみ。

まくら肱に膝にせんかな月ひと夜

その名だゝるをむさし野に
かぞへて

をしかけやむさし鐙や月すゝき

既望

雨の聲いざよひの宵寐友あらん

くらぶ夜やけしきばかりに月かけし

雁

秋既に鴈の行かふ江の月夜

初鴈やみつよついくら山のきれ

うなひ子どものうた唄ふを
きゝて

かならずよ跡なる鴈が先になる

あの男ゆかばたつべし小田の鴈

淺茅が原にしるべありて、
そこにひと夜を

雁が啼君が四阿關屋かな
しら濱や落ざま影を月の雁
番雁の面に風ふく蘆間かな

きぬた

しるしらぬ里なつかしや小夜砧
相撲取も閑居る宿のきぬた哉
人や仕桃のはやしの小夜ぎぬた
遠ぎぬたこの川越ん橋もがな

淺茅が原

闇き夜の紙ぎぬたさへ秋ぞかし

早稻酒

早稻酒にものゝゆかしき在郷哉
早稻酒に垂打ばかり醉てけり

鳥威

山畑や笊もむしろもをどろかし
同じことを添水の繩や人の上
落る日に影さへうすきかゝし哉
日もなげにをどし作るや月明り

虫送る夜や先にたつ鳴子引

うづら

網の目やうきあかつきを鳴鶉

土佐光廣の畫に

鶉日にうれしさこぼす毳かな
しらず我番て見ぬを片うづら

鴫

漆掻あたまのうへや鴫のこゑ
藪かげや卵のからに鴫の啼

鴫

鴫たつて暮の焚火のもる夜哉
鴫たつや凡夫家路のいそがるゝ
夕鴫の淺瀬にたてる一羽かな
人稀に鴫啼て我夕かな

木實

毬栗の蓑にとゞまるあらしかな
澁柿や猪おしぬぐふ山がらす
牛の子よ椎の實蹄にはさまらん
枝の柿鳥は追はずさりながら
尾長啼澁柿原の雨氣かな

戸隱山にやどる

澁柿にしのびかねてや猿の啼

菌

茸がりをうらやむ旅のつかれかな
紅だけに山口しるき芝生かな
打杖に毒ある菌さくきかな
伐株や米かし水を茸つくり
なつかしや楓茸ふくきのこ山
三味泉(線)に松のかづらや菌狩

露時雨

ものゝ音秋は露さへしぐるゝか
火ともしの何もかぶらで露しぐれ
露時雨しぐれんとすれば日の赤き

秋の魚

山風や世を鮭小家の影ぼうし
さだめなや尾つれの鮭の死所
落鮎のあはれや一二三の簗
石おこす人をやうらむ鰍鳴

紅葉

浮雲の紅葉に晴る尾上かな
暮さむく紅葉に啼や山がらす
夕紅葉この川下は薄かりし

伏龜が眼病を

秋は紅葉眼にはれよ霧はれよ

正灯寺

門に入て紅葉かざゝぬ人ぞなき

后の月

不二晴よ山口素堂のちの月
老きはる人は誰ゝ後の月
後の月宇陀のむかしはいく昔

台嶺の鐘音、風翔て友みな歸りぬ。室中の燈いまだ盡ず。

閑てひとり見まじきは月の名殘哉

江都のならはし、かならず蚌蛤を賣歩行にぞ

はまぐりはそだゝぬものよのちの月

草菴の隣に、黄なる脣のものしりのくすしをはしける。素堂老人のふる句と、人いはゞいへ。

もろこしの書(ふみ)かた寄よ後の月
後の月わきて古人をおもふ事
へだゝりし人も訪けり后の月

旅中

后の月稲垣低き宿とりぬ

むさし甲斐が根行脚せしころ

山ひとへ二夜の月や甲斐武藏

秋の夜

秋の夜を小鍋の跫音(さう)すなり
長き夜を葉ずれに摺る軒の石蕗
傘に鼠のつきし長夜かな
燃しさる火や細ごゝろ夜半の秋
長き夜や礒の匂ひのものにつく
秋の夜や秋のあはれは晝よりも

建仁寺の鬼鐘は、子の刻にひとつをかぞへ、陀羅尼よみ〳〵卯の刻を百八の數のおはりとす。ほとゝぎす啼ころすらましてかなしき。

秋の夜や忘れさせては陀羅尼鐘
身ひとつはかねて夜寒の枕かた

要小夜あらし、うすき蒲團を透す。

うぶ髪の古郷遠き夜寒かな
思ひ侘ころは夜寒の簀垣哉

病中

ちぎれ〳〵ものも思はず秋いく夜

鹿

牛の子の鹿見て逃る月夜かな
閑にたへて酒酌ば月鹿も啼
鹿の跡見よや葛葉のうら表
聲くらし晝はわかれて鳴鹿か
行鹿の萩にうたるゝ野風かな
追るゝとしりつも啼か畑の鹿
絕ずしも谿へ下りしか月の鹿

山家にやどりて

鹿啼てまゝがましき旅寐哉

次の朝小萩がもとに杖をたて〻

暁がたに聞し鹿かも蹄のあと

江都にたらぬものなしといひけるに戯れて

花紅楓江都に鹿啼山もがな

里の女の木履をかしや鹿の啼

菊

僕ひとりは持たれど風塵中に栖みたるを

宿の菊と名のるよしかな田三反

黄ゝ白ゝ辞東籬

菊咲て花ともいはぬあるじかな

きくの香にそむく心もいづるなり

酒造る隣に菊の日和かな

白菊に北の御園は暮にけり

黄に咲ぬ酒卸ゆく門の菊

殊更に作らぬきくぞ九日なる

酔臥ば何の夢見ん宿の菊

炎菊の老はとく来れども、艸菴わづかに履ぬぎのみ。この日客あり、客に對す。

菊提て君老をとふ姿なり

何某の宮何がしの君より給ふ佳節の菊は、紫匂へるうすぎぬうちかけて、なか〳〵に隠逸のさたにはあらず。けふの御遊も思ひやられて

暁や菊の露ちる御幸町

この日の菊、瓶に滿りけるをよろこびて

艸の戸や隣〳〵のはこび菊

勢南一葉菴にありしころ、さかりなる桃の一枝を惠れつゝ、けふの花にさしそへて酒酌けるに

桃に菊けふを盧生が現かな

台嶽にて

僧が供地すりに菊を提し

病中

菊や咲我酒たちて五十日

露の音菊の障子にこの月夜

雨蕭瑟たるばかり、處明山人に訪れつゝ席上の作ありて、はからずも一軸一瓶の稱嘆にあふ。酬にと葉なし。薄酒の興をまうけて

菊の酒にちからある日の雨寒し

梅もどき

城うらや小さき牛に梅嫌

梅もどき花屋の柳哀れなり

梅もどきある人に花を問れけり

秋の暮

鶴をりて人に見らるゝ秋の暮

日の色や蓬ふかるゝあきのくれ

秋の暮髪生て人に問れける

鴫立澤にありしころ

澤蟹のあゆみさしけり秋の暮

氣のつけば馬も通らず秋の暮

わけもなや虫歯のおこる秋の暮

大寺や薬湯のにへたつ秋の暮

蓬生や人に聲なきあきの暮

語れかし秋のゆふべの蓑作り

洛にありしころ、僑居のさまかくのどしと、友どちのもとへ申つかはす。

小菜一把薪盡せし秋のくれ

行秋

行秋に絲のしら干哀れなり

ゆく秋やから板敷に風がふく

行秋の草にかくるゝ流かな

ひまの駒西へひがしへ行秋歟

鐘の聲ゆく春よりも行あきぞ

ゆく秋や情に落入る方丈記

巳下不分題

秋日和鳥さしなんど通りけり

秋日和しるや河豚のつれあそぶ

羽をかへす雎鳩に萩の入日かな

秋篠に朝風わたる堤かな

いそ山や茱萸ひろふ子の袖袂

荒蘭が崎を過るに

通し鴨入江の秋をまち得しか

觀世音たゝせ給ふ吉見の里を過るに、さきの年師とゝもに一夜をあかしつる宿の柱、處がらわきて昔のしたはれ侍りて

宿の秋我泣なみだあやしみそ

淺間山の烟いぶせくも、みやはとがめぬと聞へしにことかはりて山つなみとかや、吾妻一郡の里〳〵馬、人流れうせぬと、追おひに告るものありて、まち〳〵噂こゝろならずも、そこの門人をかぞへて文の奥に

生はとく死は歷て告よあきの水

下毛無長山普門禪寺眺望

階ひと歩〳〵に秋のけしきかな

蓑なるや聖かたしくあきの霜

大家に旅して餌のわかれかな

餌のわかれ未し〳〵と老ぞゆく

病中

冬瓜汁空也の痩を願ひけり

葉生姜や手にとるからに酒の事

九月朔日伊勢御遷宮

今朝の旭はつ日に似たる御遷宮

同四日

寒運神寶さぞ御せん宮

秋詠都三百二十八句

白雄句集

冬

碩布著

白雄句集巻之四

冬之部

馬巷に春秋菴ふたゝびなりぬ。洞友の丹誠大かたたならぬを、この日わが二翁につゝしんで告す。

初しぐれ艸の菴にてはなかりけり

一袋松かさ得たりはつしぐれ

宿の時雨さつさ時雨とうたひけり

はつしぐれたがはぬ空となりにけり

草菴のさまを

しぐるゝや脚折鐺を爐にかけて

軒端の一木、やゝ二とせの星霜を經たり。

松のほど時雨の楯となる菴

行しぐれ蓑着て追んおもひあり

宵晴を時雨わかるゝ小舟かな

芝うらや時雨て歸る牛の角

時雨るや舟まつ岸の戻り馬

旅中

刀根の二瀬しぐれわけたる渡り哉

猪に誰かけられし夕しぐれ

しぐるゝや鹿にものいふ油つぎ

椎柴に間なき時雨のはこび哉

見てたつやしぐるゝ櫓角やぐら

琴箱を荷ひゆくなり夕しぐれ

台嶺の鐘新に出來けるに

今年きく上野の鐘も時雨けり

よそ事にのみおもひしが、罪ありて友なる車來が八丈孤島にゆくを送とて

流人船資に時雨て見贈りぬ

十夜

年のほど十夜詣と呼れけり

榕賣家も十夜のともしかな

達磨忌

達磨忌に見やる經師が障子哉

達磨忌や寒ふなりたる膝がしら

達磨忌の口とりは昆布に山椒かな

だるま忌や沓ふみきりし箇根山

芭蕉忌

初祖正當日、ちかき友を招く。今曉とのほかに寒し。

朝六や啜りあひたる納豆汁
月は花はけふはしぐれの翁哉
つぎ歌のこれぞしぐれの物語

元祿の正風を世にひろめおこなはんとおもふもの、われのみかは、すくなからずといへども、ひろめおこなふにたらず。唯この翁にあることを

霜ときへてきへぬ翁のむかしかな
元祿や見ぬ世語を降志巻

去來あり、丈艸あり、其角はいが山の嵐をうらみ、嵐雪の旅行には不二をだに得見ざりしと。すへあまんの門葉、聲をあげ聲をのむかなしみを、難波の蘆のふしの間にこめてん。おもふにむかし今月今日

この日數の故人をおもふしぐれかな
しぐれの句もて奠る事哉ゝ

時雨行日をおもかげの翁かな

年々

也菜（蓼カ）禪師の畵に

松島をよく見て句なき翁かな

武野中毛呂の邑長権発の碩布が、あるじして焦翁忌いとなむ日、行嚢に藏したる遺像を壁にたれつゝ、其徳光の一燈をかいたて、謹て諸子と風運をいのる。

擔ひもて毛呂に翁のしぐれかな
靈まつや嘸かた〴〵我翁

こがらし

凩に笠一盞もほだしなる
こがらしや潮ながら飛濱の砂
こがらしや礒の水艸も盡ぬべし
木枯や市に業の琴をきく
こがらしや大路に鶏のかいすくみ
木枯やいづことまりの柴車

枯野　艸かれ

猪の篠根堀喰ふかれ野かな
馬附の琴佗しらに野は枯ぬ
馬の跡枯野の野越いそがるゝ
七ッ子に逢ふて淋しき枯野哉
仕合のうしろ風かな野は枯ぬ
擔ひゆく沽鯉のぞく枯野かな
小ともしや枯野の末を人の行
地車の轄ぬけたるかれ野かな
龍膽の何おもひ艸野は枯ぬ

旅寓

艸かれや風空さまに脊戸の山
いちはやく枯てや折る蘆のふし
草かれや鷺の居りたる濱庇
艸枯に雑炊すゝる樵夫かな

落葉

風の木の葉行さま一葉摑ける
椋の落葉宿に磨ん物もなし
そむき見れば木の葉曇の林かな
夜の青木のは身を刺おもひあり

まかすれば落葉にせまる戸口哉
日に悲し落葉たゞよふ汐さかひ
うら表木の葉浮べるさび江かな
村落葉鶏ころす人若し
脊につく霜の落葉や朝まだき

霜

此ほどや小蠅(さばへ)なせしも霜の道
何に身を寄すともなしや霜の鴈

鶴見橋上

朝夕や鶴の餌まきが橋の霜

兎明樓

海かけて霜の晴見る檻(てすり)かな
鐘の聲霜を知る夜の眉重き
夕霜の眼には見へで老が膝
燃てたつ蝶に霜のけむる哉
鬼齒朶も蘇鉄も霜の旦かな
たゝばたて蓬がもとの霜ばしら

江都にひとりの母をもちて、住よき嵯峨の菴をだに人にゆずり、東道の行かひ身を安ふせしも、ひとへに至孝の爲ときこへし重厚入道や、ことしも來て、夏日のまくらに涼風をまねき、霜雪の床に埋火かきうがち、いたはりけるも老きはるこの度の別れ、臥て號哭、天に叫ぶのなみだやまずとなん。きく我すらむねつぶれ侍る。憶に秋の半にや、姨捨山の月かけて、そり捨し母のしら髪を襟になし、よし光寺へ詣んと、すゞろごころのすゞろにたのもしかりしを。噫

日に消ぬ霜とやかこつ母の髪

九月十七日、伊勢の吳扇老人身まかりけるよし、師が五細糸のひとりなるをや。それのみかは、一葉菴の古へ、なつめ菴の明くれ、何か心なき人はしるらめ。十月十七日人〻とゝもに追善の席をまうけて

組そめし糸よかつらよ霜悲し

大願居士を悼て子息に贈る

若き人の經よみ習ふしも夜かな

天明四年霜月廿七日

時は葛の葉のかつ〳〵枯て、ものこひ鳴の啼かひなきゆふべなりけり。みちのく也蓼(寥カ)禪師遷化まし〳〵けるよし、おもひこま〳〵と、そこの門人よりつげこしける。禪師は伊陽の產、芭蕉の翁にゆかりありて、我爲に翁の枕表紙附屬の師、且(かつ)蓼禪無二の師たりしをや。

みちのくの空たよりなや霜の聲

毛呂の里はづれに、たがなづけしや、丸木もてかりそめわたる橋ながら、琵琶てふ名あるを

橋の霜からげし繩を四ッの緒歟

住吉に詣りて

松風や霜にはゝきして庭神楽

霙

うき雲や霙月夜を鳩の啼
匂ひなき冬木が原の夕あられ
薄暮やあられ興ずる樽ひろい
小夜あられ起見んばかり降にけり
中空に降きゆるかと夕あられ
つぶ〳〵と蕗の葉に降夕あられ

みぞれ

みぞれてもしら〳〵つもる穂垣哉
莚戸やみぞれ一時人こもる
口おしくみぞれにぬるゝ女馬かな

雪

雪がちにみぞるゝ篶(すゞ)の篠屋かな
雪まつや我庭もせの笆(まがき)二ツ
門〳〵や積も定めず雪掻す
雪の聲篠三葉四葉のうごき哉
飛たつは夕山鳥かゆきおろし
かいきへてまたあらはれつ雪の鹿
潮ぐもりみぞれの色を潟の雪
橋の雪舟遣り過し顧(かへりみ)る
雪の松(まつ)明たとはゞ夜の錦かな
吹こしの雪音たてゝ降夜かな
灯ともさん一日に深き雪の菴
ぬれいろや色なる雪の藪柑子
雪の野に雪をさゝげし荊棘(いばら)哉
雪の人桑たち丈にすゝみゆく
雪うちや七つの年を身のむかし
園の雪門の雪とて見はやしぬ
引すてし車の數よ夜の雪
降晴て雪氷るかに光さす

雪の日蘆葉亭に遊ぶ

おもしろや旅に傘して雪の宿
見もしらぬ人にものいふ門の雪
川そひや脊ぐゝまり行雪の人

樹瀾氏のもとに、さらなき筆の鑑あるをや。貞徳翁および名だゝる詩士、もゝとかぞへ六そじにあまれり。この日故人を友とするのよろこび、花を吟ずれば香風坐にみち、雪を吟ずれば柳絮袂に入の思ひを

月雪の墨の香ふかみ古人達

百雉が子をうしなひしを

霙小雪ふた親のこゝろ察し入

橇

城うらや橇の道に星光る

冬籠

冬ごもり籠乗たる日ぞ多き
冬ごもり漉水の音夜に入ぬ
捨られぬものはこゝろよ冬籠

里恭亭

金屏に旅して冬を籠る夜ぞ

埋火　火桶

埋火や鼾の中のほのあかり
人とひぬ火桶譲りて粥たかん
おしむ夜や埋火くらくいさり寄る

埋火やうちこぼしたる風邪薬
埋火や夜學にあぶる掌(たなごゝろ)

遠つ人まつとしきく几秋女、ことたびはわざとしも人もて迎ひられつゝ、至りて面するに、まうけのホ句いとせちに、酒よきものすゝめものし、老のいたはりまめなり。蕉翁に園女あり、鳥醉に星布あり、几秋あれど、其師おとりぬるぞくちをし。せめて埋火のもとに翁のゆい章を夜話にとりまじへ

語る夜のつき／＼しさよ桐火桶

巨燵　湯婆

人老て巨燵にあれる踵(きびす)かな
茶筌髪湯婆たゝきて寐ぬ人か
一夜ふた夜のちはたんぽも煩し(わづらはし)

榾

野火留にて

妻も子も榾火に篭る野守かな
をかしげにもへて夜深し榾の節
いちはやくもへて甲斐なし榾の蔦

寒

くらき夜はくらきかぎりの寒哉
くちおしや寒夜にくぢく捨ごゝろ
雷一聲まとしからず寒の雨

氷

あかつきや氷をふくむ水白し
薄氷雨ほち／＼と透すなり
鶏の嘴に氷こぼるゝ菜屑かな
氷る夜や諸手かけたる戸のはしり
菱の實の氷つきたる目かいかな
目出たくも酒はこほらぬためし哉

凍

梟(ふくろう)も死なねば凍ぬ梢かな
庭艸のよごれしまゝに風の凍
石に蝶もぬけもやらで凍しかな

冬の月

寒月や白紙の飛狩のあと
寒月や柴ぬすまれし咄し聞
浅からぬ鍛冶が寐覺や冬の月

鉢たゝき

川ぞひや木履はきたる鉢叩
野ざらしに何事いふぞ鉢たゝき

臘八

臘八にせめてうたがふ人もがな

紙衣　ふすま

二冬やこそくりなれし古紙衣
すさまじや市の衾の風たまひ

網代　罧

あじろ家の人住と知りて月寒し
網代木のそろはぬかげを月夜かな
行もどり罧(ふしづけ)に啼いよめ(鳰)かな

河豚

ふぐ提て竹の中道誰が子ぞ
鰒汁やおもひ／＼の八仙歌
ふぐと汁ひとり喰(くら)ふに是非はなし

冬の蠅

摺臼の音は忘れずよ冬の蠅
冬の蠅貧女が髪にむすぼるゝ
家の蠅凍て死たる骸（から）もなし

千鳥

兵庫の湊にて
酒桶に千鳥舞入あらしかな
遠浅や月の千鳥の舞もどる
あらき波風千どり闇夜の捨心
千鳥きく夜衣にたちし松葉かな
假まくら魚藏（なぐら）に千鳥降がごとし
小夜ちどり人喰犬も吼るなり
羽箒のふいと悲しくちどり啼

冬の鳥獣

鴨啼や浦淋しくもたつ楸（ひさぎ）
日に鴨の白沙あゆむ尾ぶりかな
夜の鶴鷺鷥の中よりも哀なり
松一木ひと木にをしのやどるかな
をし啼や一節（ひとよ）切（ぎり）ふく痩おとこ
落し来る鷹にこぼるゝ松葉哉
朝川や鷹野の躰を鳥の影
右になし左りにすらんぬくめ鳥
跡先に雀飛けりみそさゞゐ

冬の艸木

住ばかく茶の花垣ぞうらやまし
茶の花にたとへんもの歟寂栞（さびしをり）
茶の花や誰が箒せし里の道
茶の花に今般（いまがね）の雉子かくれけり

かな川蓬谷亭
橙や藏にそふ江の寒からず

徐柳菴やぶれたるを、そこの左禁なるもの、ふたゝびなせしよし告越けるよろこびを
枯しとてからしそ柳春ちかみ
鶏を盗しは誰かれやなぎ
びわの花汝（なんぢ）みのるはいつの事
水仙や折葉もさらに濱あらし
寒菊や虱（しらみ）をこぼす身のいとま

かへり花

返り花いはゞ老木のおとろひ点
かへり花咲よしもなく咲にけり
すかさずや道に酒賣歸り花
十月の櫻つぼめる木かげかな

麥まき

畑中や種麥おろす麻ぶくろ
しろやかぎり麥まく末の汐畑（煙カ）

掛菜

程あらで掛菜にむつき千家哉
里佗しかけ菜が下のつり階子
掛菜して世をやすげなる縣（あがた）かな
みのむしの掛菜を喰ふ靜さよ

不分題

立出て鶏の雛見る小春かな
炭がまやぬりこめられし蔦かづら
引すゝむ大根の葉のあらしかな
おもひしか菴のうしろの痩かぶら
あるかひも宿は志卷のやれ簾
組かけし塔むづかしや冬木立

から蠣の潮にもどるひとつかな
殼かきや世には出られぬうつぼ舟
から鮭の口はむすばぬをならひかな
わだつみや餅だにまかで海鼠かく
冬の夜や鵲の聲をきゝわぶる
替履のうしろさびしや寒念佛

隣家のよろこべるさはぎに

寒梅に比す産聲は男かな
髮置は千代經て白きためしかな

旅中

冬の海見よむさし野の比企野より

煤掃

蕉翁の詠波及すが中、貧波及せんのねがひ、且暮とふ友にかつて倦ず。ゆへに塵埃をまぬかれんとにはあらねど、市中のすみかいかんがせん。ひととせの塵埃今日にいたりて、はゝきはちびれ、さゝ竹のさゝほもこぼるゝばかり、是たが身につむ。積ともまゝ、それがし翁の詠波及せんの願ひ、市中の隱にしもあらず。隱にしなきにしもあらずといふ事を、薄酒兩三杯ひとりほこりて

掃からにおどろかれぬる菴の煤

歳暮

脊戸に門に師走月夜の米俵
つくろはぬものや師走の猿すべり
かぞへ日を雪間の霜のひかりかな
いろ〳〵に追るゝとしをこよみ賣
年のいそぎ齋宮の繪馬やをしの縫

臘月今日、身貧にして濃酒佳肴をうらむ。

行年やひとり嚙しる海苔の味

賓客あり、青樽を携て我を醉しむ。我爲には此夜の君子なることを

醉をともに春待年をおしむ哉
鼠子も春待としの一夜かな
行や年また逢ふよしもうるま人

この句は寛政二年來朝の琉球人歸鄕のころの吟也。

月雪や旅寐かさねてとし一夜

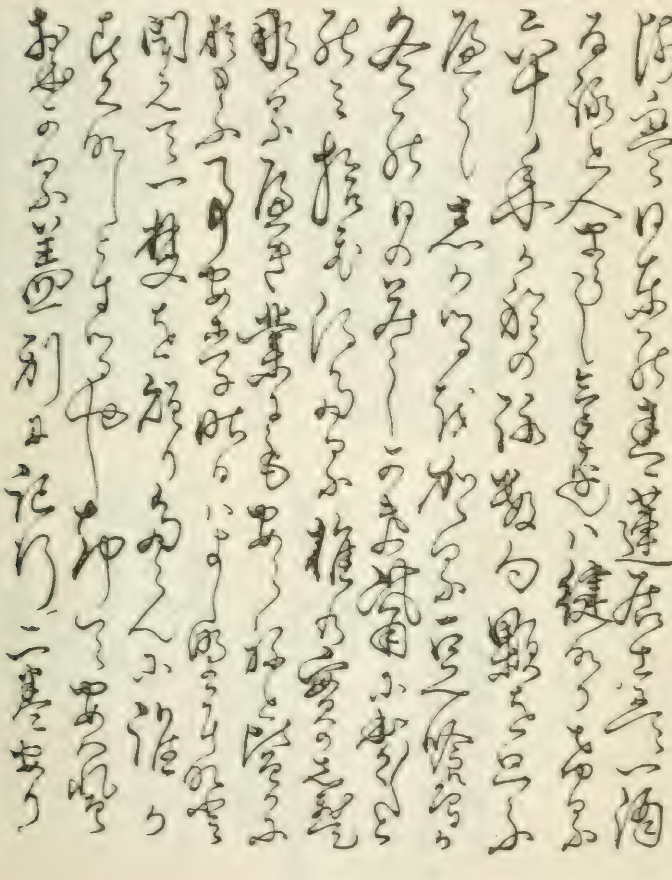
伊勢年籠

とし籠もみ火の御灯拜みけり
年も良くだかけさそふ松の風

冬詠都二百十八句

寛政五癸丑歳十二月穀旦
門人　巣兆謹書

師は日東の青蓮居士にて、一酒百詠と人まうしければ、健なりける六十年が程の詠數句數を思ふべし。しかるをかゝる豆噴鳥が、冬の日のみじかき背にほく／＼とのみ拾ひ得たるは、椎の實のしゐてなるべき葉にもあらねど、ひそかにおもふ事あり。昨日はよし野になど聞へて、一枝を贈りたらんに、誰かすくなしとするや。却てあはれぞおほか

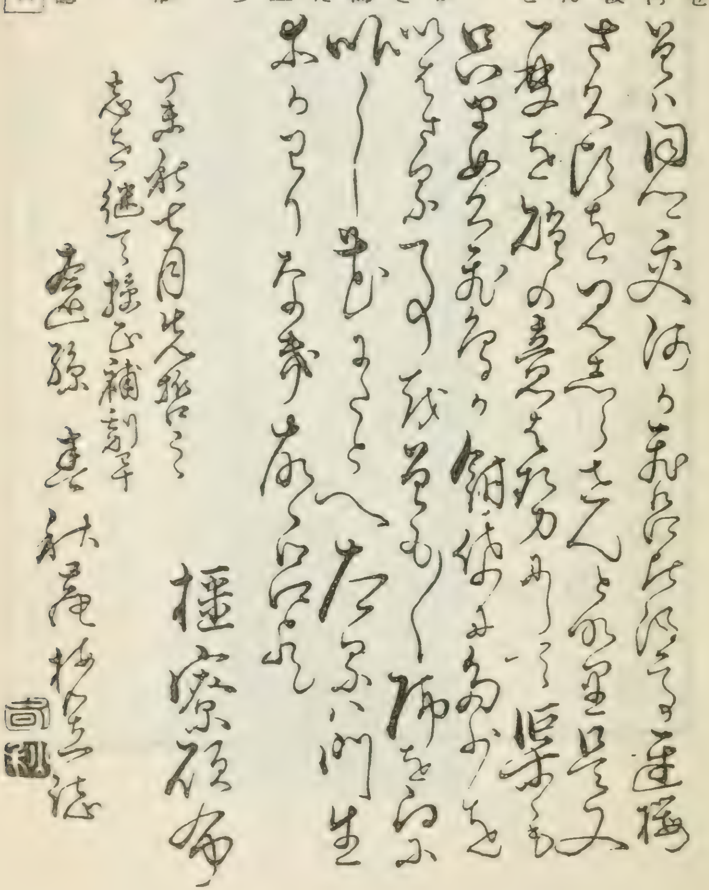


る。盖別に記行二巻あり。そは同郷亥河がひろひ得て、遅櫻さく頃を見しらせんとなり。是父一枚を贈の意ばせにして、渠も只まめくひ鳥か餌俗に多少をいはざる事を、そもへ師を白（あからさま）に吟じ花にたとへたるは、門生等がわりなきこゝろ歟。

橿寮碩布

丁未秋七月先哲之志を継て校正補刻畢

遠孫 春秋庵梅笠誌 【春】【秋】



京都書林　三條通升屋町　出雲寺文次郎

大坂書林　心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太右エ門

仝順慶町　塿屋新兵衛

江戸書林　日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛

仝二丁目　山城屋佐兵衛

本石町二丁目　英大助

芝神明前　岡田屋嘉七

淺草茅町二丁目　須原屋伊八

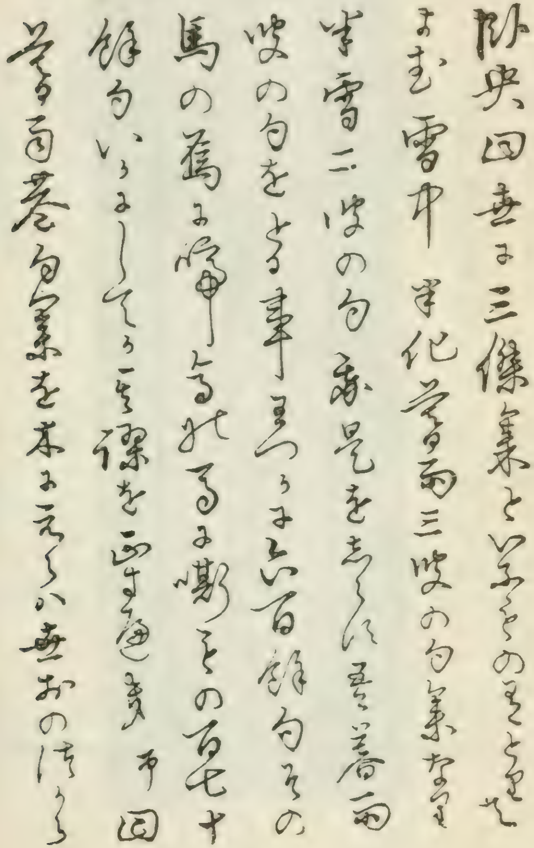
日本橋四日市　山城屋政吉

日本橋北十軒店　播磨屋勝五郎

曉臺句集

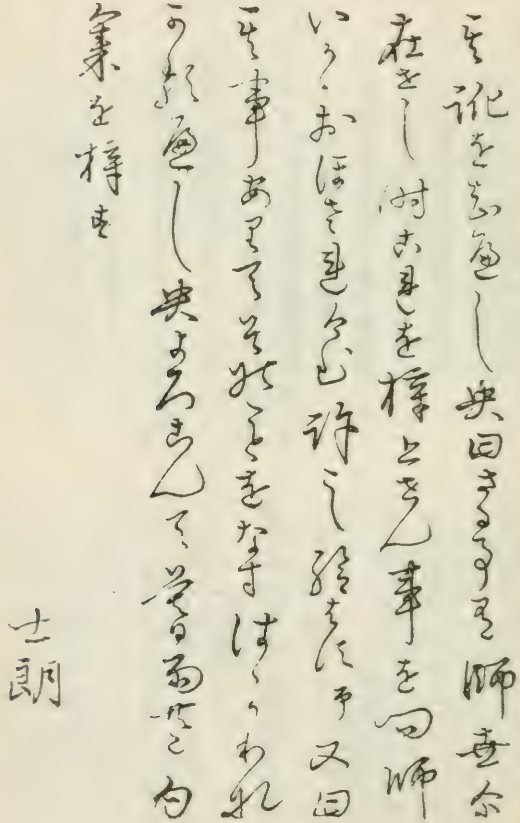
上

臥央曰、世に三傑集といふもの有。とりてよむ。雪中半化暮雨三叟の句集なり。半雪二叟の句、我是をしらず。晋暮雨叟の句をとる事、わづかに六百餘句、その馬の烏に啼、烏の馬に嘶もの、百七十餘句、いかにしてか其謬を正すべき。予曰、暮雨巷句集を木にえらば、



世おのづから其訛を知べし。央曰、さる事有。師世に在せし時、これを梓上せん事を問。師いかゞおぼされけむ、許し給はず。予父曰、其事ありてそのとをなす、はゞかりなかるべし。央、よろこんで暮雨巷句集を梓す。

士朗



暁臺先生叢句集上

春之部

歳旦

ふり袖のやまとに長し日の始

太箸や後ゝにひかへし檜木山

鏡餅母在して猶父戀し

神の春楠もいはほと成てけり

人中の龍駈出む四方のはる

物わかれ、人語はじめておこる。

元日やくらきより人あらはるゝ

元旦龍門にありて、士峯の初日をあふぐ。

忽然と活たり／＼はつ日かげ

武陵迎春

としの名殘をしまむと再可子が樓上に遊ぶ夜、門ゝに鈴ふりならし、清祓して大路をわたるものあり。

とし越の旅ゆきなりに辻はらひ

猶曙のけはひ見てむと酌て、太陽を待ふたりみたり。樓は隅田川の西岸に造り掛て下總の國の限を見さけ、十字街頭に市囂をさぐれば、さながら濟(きよう)して閑なり。

我と人と深山ごゝろや初日影

よろこびの雲見えそめて花のはる

いはゞいはむあら玉の夜のはじめとも

年頭元三の旦毎に蕉翁の筆跡を開て、心ばかりの鏡もちひなど備へ、卷の壽を調るに、去年はつとむる事の有て、かの一軸は宗祇法師が辭の一字よりも、はかなくなしつ。其料に宛ぬれば、きたなくも一行を謹書して、改る心の玉ともなせるなり。

此心我蓬萊のはな柑子

寓（偶カ）樂府臺に歸れば年の壽をもてなさる。思ふ所紀氏が客中にあり。

おしあゆはなくてもあらん干頭(ひづ)鱠

松のひまほの／＼見ゆるはなの春

蟄蟲うごめきて春陽を伺ひ閑人鎖(とざし)て御慶を避く。

むしけらもさし覗け此初霞

元日の子の日めづらしとて人ゝを具し、東野に出、ともに小松をとりて

根つかせて見せばやけふの子の日草

若菜

若菜舟一ふしあれや歌之助

京縞の頭巾で出たり薺うり

わかなつむ人をしる哉烏鷺

若菜つむ人落合ぬ紙や川

わかなの日晝から雨と成にけり

はつわかな鯉も切べき日なりけり

雨中人日

此門を名乘してゆけ若菜摘

袷や傘をさゝせてわか菜つみ
松かげにならびてうたへはつな摘
わかなの日三輪の酒うり出初たり
腰みのや己が礒田の若菜かり

この宵、朝はひとときは事替りてさかゆく民の薺打はやす音のあやあるも、手つゝ成もさえ／＼しく、一入ゆたけきおほむめぐみの皇朝こそ有がたけれ。

玉簾にきこしめすらむ薺打と

年のはるに春たちけるを

けふの春きのふと過し初若な

うめ

もどかしき梅二三日の莟かな
梅咲て十日にたらぬ月夜かな
火ともせばうら梅がちに見ゆるなり
曉のうめがゝふくむ板戸哉
御文庫のこなたおもてや梅の花
かなぐつて捨る莖ありうめのはな
長嘯の名殘もあらむをかの梅
浦のうめ花片つらにさきにけり
梅折て僧歸るかたは雲深し
突立てぬしなき杖や梅がもと
うめちるや草堂に燈歸し行
我宿のうめはいつさく梅の花

ふし見にて

梅林を出て懷に梅のつぼみ哉
梅林によるのほこりや薄ぐもり

正月十一日熱田踏歌

梅がゝに鼻息寒し笏拍子
うめがゝやつぼみはさまるはかま腰

聖廟法樂　四句

信仰を漢土(もろこし)までもうめのかぜ
うめさくら落花を踏ぬはやし哉
手向山有明さくら咲に梟
花鳥のまことを筆のはやしかな

八十賀

梅柳八十からも壽む

大黒の讃

うめやなぎ三にさかづき初音の日

題畫梅

水潜る節くれうめのした枝かた
花はひとへふしくれうめの古根より

柳

ほつかりと黄ばみ出たり柳の芽
二日見ぬ程や柳のおもがはり
やゝしばしけぶりをふくむやなぎ哉
のら／＼と柳見に行つゝみ哉
太刀の柄に手かけて潜る柳かな
吹あるゝ竹の中より糸やなぎ

籬前孤柳

見所はきのふをとつひ柳の芽
さし柳はかなきものゝ氣力かな
青柳に山路のこゝろはなれたり
人去て野中の柳風くらし
火燈(ほともし)があぶらかけたるやなぎかな
篝火のとぼり付べき柳哉

武州八王寺(子)星布

曉のほしを縮りしやなぎかな
隆達が破菅笠しめをのかつ

ら長く傳はりぬ。是からみれば、あふみのやあだし浪寄せてはかへる浪、漣づま舟の淺ましや、嗚呼、又の日は、誰にちぎりをかはして色を、まくらの（の字衍カ）耻かし、偶がちなる我床の山、よし夫とても世の中。

これは北窓散人が己圖して自此ばさら言を其肩にものせし風情もしたはしくて

しのばるゝ人聞そへて柳かげ

藪入

題 里祭

藪いりを獅子の口より見初けり
やぶ入や木履踏かく人ごゝろ

春雪

はるのゆき扇ではらふ衣紋かな
春の雪飛鴈の行降崩し
馬の尾をむすび揚たる雪間哉

雪解

雪解て沖中川を行方かな
ゆきどけや深山曇を啼烏
月曇る端山の雪解なくからす
古草やはるをり〳〵は雪の露

春日

日の春のちまたは風の光り哉
はるの日や梅のあたりのつゝみ箱
袖だけのまつの中行春日哉

春のくれ

秋は暮なむとする程燈とく立たるがよし。遅ければ老の心をへらして悲し。冬は又猶寒く、夏はうち渡る人のたそやかれやと定かに見わかるほどに、遠くも近くもきよげに、燈しきらめきたるぞ涼しさ又あらじ。春こそ夫にはかはりめあなれ。柳のをぐらく、花のしら〳〵とにほひ殘つ、見やるかたはものわかず暮しづみて、風のさゝやかにおもてはこび、水は音のみ山ははるかにひさるまでも、はしゐしたる春のこゝろこそいとふかけれ。膝のまはりかいくらみぬるまゝ、燭などとり來たる本意なし。

我ためにとぼし遅かれ春の暮
こゝろほどうごくものなし春の暮
古琴やねずみ出て行はるのくれ
はるのくれよめりぎつねのくさのあめ

春夜

春の夜の月も推なり梅柳
はるの夜の月より明て天龍寺
春のよを雁おひあかす野守かな
はるの夜ぞひとつは雁もかへり來よ
春の夜や何事もなき三輪の杉
はるのよのうそひめ戀ふる梟賊

伊勢神宮參する人をおくりて

春の夜の月に宿かれ花柑子
はるのよやねしなきさまの捨車

閨ふかく牡丹にいどむ春の情
ともし火にこがるゝ蝶を夢路かな

春　月

竹の葉の重るやとしの二日月
うぐひすの魂も奪ふかうめと月
うめに月月をうらなる夜なりけり
梅に月朗詠うたふ人あらむ
松とりて朔日ごろの松の月
くらき方はけぶるがごとしはるの月
べつたりとかすみかゝれり二日月
おぼろ月浪のうき鯛よるさへや
おぼろ月宇治の山邊を行ひとり
おぼろ／＼ゆき一すぢのほそ江哉
大ぞらにおりがねくらし春の月

竹にふくろうの畫讃
衆鳥花に醉り。ひとり竹間
にすめるものは

つく／＼と何おもふ竹の月朧

鶯

けふはとくはつねうぐひすねぐらせよ
鶯の嘴あらひせり紙や川
うぐひすの聲くれて後日は入ぬ
鶯や竹の園生に何のたね
うぐひすのほそ脛高に山路かな
うぐひすやものゝまぎれに夕鳴す
鶯と貌見合する折戸哉
軒ちかしきのふの初音うぐひす歟
うぐひすの七ッとまりや淸閑寺
鶯や人やり過す跡の聲
うぐひすの鳴てかくれる伏家かな
鶯のひよひと貌出す枯葉哉
うぐひすのけろ／＼と初音づくり哉
うぐひすはみだれ聲なり小關越え
うぐひすや目をほちつかす風のさえ
鶯の咽ふくらめしゆふ日かな

霞

八重霞日落ていまだ夜ならず
來てみればかすみの松に日暮たり

湖上吟

霞凝てものあらはなるうなへ哉
山くれて霞下せり大炊川
水の面にかすむ日の形みえにけり
浦くれてかすみながらに火灯りぬ
かすみこめて薄むらさきの匂ひ哉

春　風

はる風の夜はあらしにみだれけり
里の子の松葉いたゞく春の風
春風や淺田の小浪あさみどり
はるかぜに吹れて落す羽織かな
高圓や峯の春風くも結ぶ
雉の尾に見るまでぞはるのかぜ
はるかぜにおさるゝ美女のいかり哉
明る野や兎の尻に春の風

春　水

鳥の羽をみれば行なりはるの水
春の水東寺の西にみる日かな
うと／＼し日の形みえて春の水

頭巾着て誰やらわたるはるの水

めぐり來て髪膚にかゝる春の水

亡父三十三回

鳥雀、屋をめぐつて噪々と鳴、葛藟、根を絶て末葉色を失ふ。平安に夜半亭蕪村子なく成ければ、俳諧の子等妙嗣の志を山のごと積て台嶺の施金福精舍に法莚をまうくときこえしかば、年頃交游忘年の情に堪ず。手のものかいやり、園を出るより耳後に風を起し其日をあてゝ洛に至り、ともに追慕の營をなす。父うへもなき米のあらし、法は一味のともし火にかゝれば、梵唄岩にあたつて清響あり。人語水に落て烟霞を披く。是皆故人が趣なればぞ、罔兩そゞろに我を率て對すると觀れば幻々、たゞ孤松崗飀有のみ。

影とらむとすればはるの水黄なり

白魚

隅田川漁火

しらうをの骨身を浹（トホ）すかゞりかな

しら魚やうき世の闇に目をひらき

軒うらや干鱈かけたる鹿の角

信樂の茶うりがさげし干鱈かな

春雜

春の海邊何に集る人一里

はるの海の眞中に有て目覺たり

卯吸ふ顔に罪なしはるの人

日くれたり三井寺下る春のひと

春の情うち返す三井のあらし哉

はる寒し風の笹山ひるがへり

春さむし貧女がこぼす簑米

人疎し蠶飼ふ女賢ならん

七條あたりにて

夕がほの種うゝや誰古屋しき

花か實か接木をめさる人心

涅槃會や雲下り來る音羽山

桂裏子七十賀

千代傳ふ親は親なり芋がしら

風巾

切てやるこゝろとなれやいかのぼり

松かぜのうしろになりぬ八巾

出代

出かはりや君が花田の五尺切

春雨

たれ〳〵が夢うらきかむ春の雨

春雨や枯木の上を降くらし

旅人の夜川や越るはるの雨

はるの雨肝積持をなだめけり

春雨や猿子をいだく齒朶の露

手はじめは翠の茶山をはるの雨

蓴あり藻魚いとより春の雨

木の芽

倒木の芽を張岸のくづれ哉

蘆の芽に鴈の古屎なつかしや

若草の中にこもれりをみなへし

わかくさやくづれ車の崩れより

青草の上につもれる日數かな

龍門

誰人ぞ芹をさげこむ竹の門

蛭肥て芹ふしたちぬ日向水

茅ばなぬく小婿(聟)が禿いや瘦し

夜あらしや光偃す茅花原

蕨

負ふた子に蕨をりては持せける

わらび折に來ばこよ菴は叩鉦

菫

奥山や人住あればすみれぐさ

菫つめばちひさき春のこゝろかな

二軒茶屋といへるを皆々題して

打ちらす酒千變すはなすみれ

竹の葉の花にかさなる菫かな

組落て雀はなかむすみれかな

燒野

なつかしや燒野のすみれ活かへる

人の親のやけ野の雉子うちにける

雉子

夜のありか又鳴かはすきゞすかな

つま戀やひと羽に雉子の山移り

ねむり／＼さして行方や雉子の聲

三弦の川舟過てきじの聲

きじ鳴やうしろは須磨の藻塩草

夜をこめて關屋にさむし雉子の聲

茨五尺雉子のとまりあらはなり

名しるしの詞

道能つとむる時は名四隅に渡り、人能和。和(す字脫カ)ればよく人を益す。よく勤て風雅の信を忘れざれとなり。

雲ひくし日暮てくれぬ雉子の聲

雲雀

雨雲やをぐさかざして鳴ひばり

猪垣の崩れ口よりあげひばり

舞ひばり山ッ家の煙はなれたり

陽炎

園外に一室あり、号て松齋といふ。四壁三疊、めぐりに春草なびき合て、水南にながれ又東に流る。菜の花ちら／＼と咲まじれば、田土叩く女どものだみ聲に古唄うたひ出、兎とらへるあらし、このまふしかくれ、雲雀鳴夕ながめも、倉廩はつかにそむけ、市塵百歩を隔ざれば、かならずひとつとして打見うち聞にはあらねど、閑にひかれて唯我おもふ所也。顯るゝもの、きはめて盡る期あり。心に觀るものは春の日の長しと、いづれしなあらたまり、夜色又情を移せり。松齋〻〻一松齋、一躍して雅境に入。

陽炎の物みな風のひかりかな

かげろふにほの有明の月高し

かげろふの中來てくらむ戸口かな

陽炎やはや水蓼のけしき立

かげろふの蜉蝣を育る晴間かな
陽炎やまだかた形のむしの息
かげろふや卵の虫の巣を出る

栞字が墓前にて

かくばかりかげろふも胸をさすもの歟

猫戀

戀ねこのほだしも廿日ばかり也
こひ猫やわが古寺になき別れ

胡蝶

蝶とんで風なき日ともみえざりき
掬はれて行風情ありかぜの蝶
ともし火にこがるゝ蝶を夢路かな

春鴈

歸る雁蝦夷が矢先に待るゝな
ゆき果しとおもへば雨夜の雁ひとつ
春寒し比良の日向(オモテ)歸るかり
西山や日の上を行雁のすぢ
わかれ〳〵まつ山越えて歸るかり

おのれ曉臺、いへの國に母
もたり。夜に添目にそひお
もひまぎるゝかたもなくて

啼こゑの母ありときこゆ雲に雁
降雨は夜を行鴈のなみだかも
雨夜の鴈なきかさなりて歸るなり

紅梅

紅梅や照日降日の中一日
はなみちてうす紅梅となりにけり
紅梅や檜垣崩れておぼろ月

椿

赤椿咲し眞下へ落にけり

梨子

滴せばしづくと絶むなしの花

海棠

海棠や誰が置たる檜枕

田にしうる翠や竹田の痩女
と臥央がかつぎ出て、是に
おとの句あれといへるに

親なしと答ふ淀野の田螺うり
水口にころがりを打田にしかな
田にし鳴を田のたむぼゝ打ほけぬ

蛙

蓬生に身をうち付てなく蛙
簪にかはづの小腕おさへたり
果なしや今朝に成てもなく蛙
へしをれの河竹傳ふかはづ哉

菜花

菜のはなや人遠く藪疊はり
なの花や牛見え行葬の人
菜のはなに目當の柳風くらし
轍ゝ雨の菜のはなながるなり
山吹の小屋なの花の街かな
菜の花や市なぐれ行餧(アザレ)鳥賊
なのはなやかへり見すれば邯鄲里
菜の花のはつ〳〵みゆる都かな
なのはなやくるればもとの朝ぼらけ
城春にして菜のはなさきぬ外廓
なのはなにしのび女の戸出哉
菜の花の脊戸を流るゝ雨間かな
なのはなや南は靑く日はゆふべ

菜の花や是等も地主の木の間より
なの花や盃持て叹(畝カ)うつり
山もりがなのはなさきぬ鯨汁
年〳〵や里の山畑うちのぼり
畑うちや鳴呼陵のまつの陰

臥央が住居ましける時

子母錢や置て巣立る軒乙鳥
燕の面なぬらしそ浪がしら

柳に燕の畫讃

花の醉さましに來たか夕つばめ

山吹

しのび路のやまぶきかゝる髻かた

題 山家

芋汁に八重山吹の詠めかな
白雛の山ぶきちらす逆毛哉
散ときはやまぶき低きうらみ哉
おほかたに山吹ちりて起ならひ

三月

烏賊の墨ながるゝ小家の節句哉

雛

雛の間にとられてくらきほとけかな
ひなの間の客や桃かたさくらかた

不夜樓にて

雛のうたげ齡の欠伸ぞ恨なる
醉ざめやほのかにみゆるひなのかほ
齋坊を今朝は雛の一座哉

加茂の下流に遊びて

誰か有汐干うつさば河原松

ある人の曲水の宴まねびて遊ぶと聞えけるに、句を乞れて

曲水に秀句の遲參氣色あり

雛合

とり合せ目もみえず成て哀也

桃

關守は〳〵いづこもゝのはな
四五尺の桃はなさきぬ草の中
神垣にもゝみる里はなかりけり

ふし見にて

桃つら〳〵花盡る處水長し

梅さくら、多く名のためにめぐりを圍れ、あら垣結そへ、將世に朽なむとする程若やかにうゑつぎなどせられて、人のため又苦しき類ひ歟。

桃のはなひとり古人を名乘せず

堀尾氏が室六十賀

うはさせば桃に王母が影さゝむ
桃の花折手はづれて流しけり
月による氣色ともなくもゝの花
此ごろは夜雨〳〵や桃のはな

華

初はなや花の邊の落葉かき
花のもとたちされば四方は夕曇り
土佐が畫の顔に扇やはな見幕

雨日花鳥(頂カ)山に遊ぶ

中〳〵に寒きぞ花にたのみある

鴨の下流水樓に遊びて、廿日の月霞いと深く負ひてをぐらく、さしのぼるをみて

春の哀れ花の東に見る夜哉

洛東寺院に遊ぶ

はなざかりさゝらに狂ふ聖あれ

東山の花見にまかり、やすらひをれる程、雨のさゝと降出ければ、手にあふもの引かづき、我も人も木がくれぬ。

花人をうづみてひとりまつの雨

夕雨やはなのあたりをうちかすみ

ものなしが世を行形に花見がほ

都貢が宮所に赴くを

華を踏て岩に角なし鈴鹿山

幸馬が一周忌

花鳥の中も亡日はめぐるかな

故常が父身まかりける悼

春のはな法ッのたすけとみるまでぞ

維駒が別業に遊ぶ

花に來て我は都のたらしかな

再び家の國にかへりて

華は根に我に五尺の地を得たり

入門の其風子當によす

おもへたゞ心はなれてはなもなし

大鵬謝大いたはりに臥て四十余日、復せずして沒す。我相ちなむ事四十余年、悲しいかな。共に客中にありて夜に日に抱きたすけ、終に臨終の唱名をすゝむ。嗚呼、天年とあらば、さすがに交情の思ひたれりとせむか。其友を待て柩のうごかざりし遠きためし、今日唯今の上にもしからん。悲しい哉。客中烏雀屋をめぐつて其聲譲々。于時天明壬寅二月廿日於二東武一亡命

哀傷櫻十詠

野送りして歸りあひけりはつさくら

目にいたきけぶりの末やゆふさくら

夜ざくらにむかし泣よるひとり哉

風のさくら祈も終に見直さず

雨のさくらきのふをおもふ現人

さめぐ〵と涙ふくめり朝ざくら

嗚呼さくら枳ともならで江の東

かはり果し枝よわらじよやま櫻

きさらぎの有明ざくら見果けり

をらばをれ遲かれ疾かれ散さくら

双が関懐舊

華と我とわれと櫻の影ふたり

鈴鹿山にて

深山路やさくらは花にあらはるゝ

山中辻堂に憩て

千日の櫻さき出ぬ叩鉦

鈴鹿峠は伊勢と近江にさかふ

花のうへに海少あれいせ櫻

寒くあれど走井のさくら咲にけり

嵐山

けふ來ずばきのふの花のあらし山

花に歎き又花を呵す天龍寺

戀々とはなにしづめり嵐山

日くれて稲荷山にあそぶ

散をこそ夜のさくらの誠なれ

やすらひ祭見にまかりて

やすらひの花よ踏れなあとなる子

春も三月立ぬ。つと陽巢を訪ひ侍りき。主は梁塵抄なむ願の邊りに押當、轉寐をれりけるに

西寺のさくら告來よ老鼠

下臥やさくらをいだく月の暈

半天やさくらにかゝる月の暈

廿年を經て老婆に逢ふ

散につけさくらにとしを語り合

ちるはくく嵐に峯のはなのころ

蓬台嶺

うへもなき此世のさくら咲にけり

をとつ日の花の中より遲ざくら

枇杷園中花見

ほつとりと咲しづまりぬおそ櫻

磯山やさくらのかげのみさご鮓

影すむやうぐひながれて散さくら

我に續でうろたへものや夕櫻

関亞相公の御前に有ける日

むかし今のにほひたゞく櫻かな

南閣堂の櫻の色もうるはしきを、紙におしたるまゝにたびたまひける時

家さくら有明の月とみて立む

寛政庚戌二月、みよしのゝ山ぶみせばやと思ひたてるより、くつあゆひ片結びに結びもあへず、先佐屋とまりに仙兒亭を驚かし、旅心定れば

鳥聲を吞て地に有春の雲

みよしのゝ山踏してはるかに、南帝の御廟を拜しけるに、納言宰相の名をだに見る影もなき叢に埋めば、往事罔兩とし、幻にむかへてたゞ恐みかなしめるなり。

山鳥のねに行かたやよしの川

いがひ藪の里を隔し櫻の渡しをこゆるに、山は遠からず近からず。妹なり背也心通はして

君まつと待か御坂のおそざくら

事紅子東行をおくる

この別山ぶき鈍くふぢ愚なり

東行留別

うつの山一日春と別れたり

宇都の山にて

行春やつひに根付しさがの松

ゆくはるや驅出しがほの古兜巾

風おもく人甘くなりて春くれぬ

どちへ行雲とも見えず春一日

春をしと見やれば落る木の葉有

とりよれぬ春の行方や雲に鳥

生洲に遊びて

鱗（うろくづ）や翠の命をくれの春

春の名殘水がくれて香はよもためじ

はるといへど火ともすほどに暮し哉

倫五が一周忌

新茶古茶夢一とせをかたる日ぞ

春は行何やらひまの明ごゝろ

夏之部

更衣

更衣ひとり笑み行座頭の坊

更衣いきたうなりし隅田川

まり子にて

更衣まづ宗長の塚に詣ツ

袷買ふて京を出たり妾もの

幸の謡講なりころもがへ

酒飲の膝甍過ぬ更衣

むかふ歯のひとり落たり更衣

武藏の玉川を越る日

玉川の浪かけてけりころもがへ

よしのゝ山廻りせしに、清閑忘れがたきは、圓居の舊栖、とく〳〵の清水。

かへをしの衣や苔の露しめり

郭公

ほとゝぎす其夜を風のさわがしき

郭公野山をものに戯れす

時鳥なき行夜半の一かすみ

長安万戸子規一聲

ほとゝぎす南さがりに鄙ぐもり

東都の子規ハ啼かさなりて風情おとれば

かつしかに行てきかばや郭公

かはかふの聲やつゞきて時鳥

蜀魂古巣は泊瀬かみよしのか

ほとゝぎす聟も忘れな槙ばしら

都貢が挽歌

ほとゝぎす棺に物を書やらむ

子規憎しとおもひ捨し夜に

時鳥遂に憎しとおもふ夜や

日頃經て鳴日に疎し郭公

ほとゝぎす聞おくるゝも今幾夜

ほとゝぎすあらしにかゝる夜の聲

聲くらし人まどはせのほとゝぎす

子規啼やぬなはの藤加減

故人台界子は、もと鎰おさへもしつ、くつばみかいとらへし友として、しかも道の兄なり。ひとゝせ我身上の變にかゝりて、他の國にさすらふ事廿とせまり、亡人皆て俳諧にすゝみ、一派に名あり。我再び郷に歸る。台子沒す。されば一旦一夕雅情をまじへざる、千歳の遺恨是也。其男岱青子繼て風流にすゝみ、道を予に随て學ぶ。道の巧拙をもて靈、不滿の白眼することなかれ。予ひとたび天下の會頭と成て、嘆けれども名四方に有。是をもて足れりとせよ。聞、ことし今月忌辰にあたつて孝子岱青舊知を催し、法莚の俳諧をつとむと、頗懐舊に不堪。往事渺茫三十余年。

ほとゝぎす返せむかしをしのぶ山

子規啼や有磯の浪がしら

郭公鳴や虚空を大ごゝろ
蜀魂ひるはねぶりも落ぬべし
暁に魂入ぬほとゝぎす
十日ほど淡路をさらず郭公
　天明己巳二月夢想　一題二句
　御庭上の二樹　其所暑中に不圖
橘やまたうへもなきほとゝぎす
花さくら時に左近の子規
　六月八日大津より古(小カ)
　關越えして初て郭公を聞
うぐひすのみだれごゝろやほとゝぎす
　焦尾琴前
　得がたき香木一片をわかち
　給へける蕉溪の主へ申送る
逢ぬうらみ血を吐までぞ郭公
うすけぶり雪にきくかなほとゝぎす
　閑古鳥
ほろ／＼と夏の落葉やかんこ鳥
　客中
閑こどり我行かたへなきうつり
かんこ鳥啼や花なき野にもあらず
人見ずば汝(なれ)もなくまじ閑古鳥

草ぼこやゆふ越えゆけばかんこ鳥
都鳥の我を呼かも松の奥
我に答ふ聲ともきけり都鳥
　牡丹
華暮て月を抱けり白ぼたん
はなやかにしづかなるものは牡丹哉
　罌粟
かげろふにゆらるゝけしのひとへかな
露たかき麥の見こしや芥子の花
　銅駝殿中にて俳諧つかふま
　つりける日、老人白圖が此
　道に志深かりけるによりて
　居士と申事、
　台命にまかせて
龐居士が衣に倣へひとへけし
　嵯峨にて
しら芥子に焚火移ふや嵯峨の町
汐かぜや砂ふきかゝるけしの花
めら／＼と火さゝば燃む一重芥子
けし咲て並能(よく)なれば散初め
　杜若

鼻紙に足ふく人や杜若
鏡立て見ばみむ花よかきつばた
むかし女はらからすめり杜若
わりなさや道／＼開くかきつばた
すつかりと切ものにしてかきつばた
かきつばた穗麥の髭に立ならび
芍薬やはきもの失る水驛(みづうまや)
芍薬に甦(もたつ)するたる旅路かな
　夏草
壁やれて有たけ草の四月哉
　宰馬が身まかりけるを悼　壬寅三月廿二日亡命四月四日聞訃二告
死のみちや我も百里は遠からず
あはれ野や五形にもどす花の露
　卯の花
卯の花の草にかゝれりにはか水
　山家にやどる
うのはなの中行嚢のしづく哉
うのはなや妻木が中の爐の明り
　夏野

麦かれて夏野おとろふるけしき哉

麥

宵闇ぞ最中也けるむぎの秋

灌佛

花御堂賣僧が工ミ凡ならず

一夏

はつ瀬山一夏詩病僧あらん

短夜

みじか夜や人現なき茶師が許
月は月夜は短夜と別れけり
短夜やいつ葎のかいわり葉

松魚

冷酒一盃　鮮肉十片

夜の間のはな盜人よはつがつを
又嬉しけふの痲覺ははつ鰹
鰹よぶ浪よあらしよ屋かた舟

葵祭

下ゝの下のかざしもあふひ祭かな

若葉

花七分若葉にわか葉さす
人媚て朝宴す新樹陰
わかばして浮世に心うつり哉
若葉山ほとけとみしは古狸
雨雲のかき亂し行若葉かな
わかばして水とり雲のいそぎ哉
葛のわか葉吹切て行嵐かな

夏木立

雫を嚙て一峯こえぬ夏木立

夏蠶

みどり長く夕雨廻るあらし山
桑葉こく盲かはゆき蠶飼かな

伊勢世義寺にて

水札の子の淺田に渡る夕かな

筍

牛舟やたけの子時の佐渡便り
笋やひと夜にかつぐ八重葎

若竹

わか竹は月に養ふけしきかな
若たけや一宇の灯深からず

百合

草臥や百合になぐさむ鳳來寺
空ざまにゆり咲て日を稟るかな

金銀花

見る人のみるものにせよ金銀花

蓼

針の有こゝろに蓼のほそ葉哉

安也免

きのふ見し妹が垣根の花あやめ
花あやめ五尺の露をあぐろかな
はなあやめ五尺曇りの薄匂ひ

蟹取歌

蟹とり〳〵澤蟹の
さわたるきはみさわたりて
澤の小つゝら花あやめ
あやめしどろにふんとろん
拔しもいくら狩得てし
子をとられぬるおや蟹の
八ツの足ずりあはれしも
龍泉の水を出て、さゞれ石
の廐に甲を並べしが、今は
龍門の泥に眼をぬぐひて、
鉄いと鈍からむ。醉あらば
汝あならうと音にも鳴らし。

子をとられぬる親蟹の、泪や泡と吹ぬらん。仇かは腰の黍團子、蟹取／＼猿が島をおもひしるらめ、思ひわくらめ。

夕雨やをかに出揃ふ蟹の穴

端午

淺香にて

かつ色やかつみかけ行負(おひ)具足

客中

あやめかけて草にやつれし枕哉

一町の貧者先だつのぼりかな

草の戸のくさより出て蓬ふく

藥玉

藥玉やむすびてひさるみだれ箱

粽

粽はけて淀のゝあらしわたるかな

競馬

くらべ馬神たのみとぞみえにける

埒明て日の塵はらふ競馬哉

竹醉日

竹植て注連にさすはや琴の糸

（「三傑集」に「さゝばや聖の繪」とあり）

竹うゑて元政坊をおもふかな

女子をうしなへる沙漠を悼

辻がはな目なくなりたき思ひあらむ

帷子

かたびらに松葉さゝるゝ空寐哉

五月雨

塩鮭のあぶらたるなり五月雨

行方なき蟻のすまひや五月雨

五月雨やひとりはなるゝ弓の弦

文車や寄ては返すさつきあめ

さみだれや岸の山吹ふりしづめ

鳥の子の卵出しより五月雨

五月闇

燐(ヲニビ)ともしらでなつかしさつきあめ

しら紙にしむ心地せり五月やみ

蝙蝠

かはほりや古き軒端の釣しのぶ

蝙蝠や月の邊を立さらず

螢

實なき夜學と見ゆる螢かな

蚊

蚊ばしらや棗の花の散あたり

かの聲の夕に雲をおこしけり

利は得べし、むさぼるべからず、世上の人

樂しいか打手(うつて)の下の蚊のこゝろ

蠅

唐までもうつり行らむ蠅の足

はへにくしこゝろの先へたち廻り

丈芝坊がみちのくへ歸るを送る

二とせや身に添ふ蠅も打て去ぬ

伊豫の國松山の蘭芝、大和の國廻りして再び都に歸りのぼり、兎もし角もし書集めし日記やうの物を見るに思ひさす端々、能意に協て聞ゆれば

袖に見むみよしのゝ蚕三輪の蟻
蚕を追ふこゝろや唐のよし野まで
株木瓜や蟻の巣作る五月山

蜂の讃

身の露の甘きには似ぬこゝろかな
纏なる身のたのみより蜂おこる

安達が原

黒塚や納旅人を追ひまはる

蟬

初蟬や初潮の雲のたえ間より
薄雲の山路をすますせみの聲
せみ鳴て梢の蛙おちにけり

螢

ほたるうりすゞしの頭巾着たりけり
螢三ッ二ッはものゝなつかしき

舟中

盃のうへに吹るゝほたるかな
いふことのきこえてや高く飛ほたる
螢火や風の笹山吹おろし

瀬多石山のあたりの螢を狩

て、はる／＼人のつとに得させけるを、日頃籠にやしなひ夜毎母のながめに備置つれど、ひたと死うせけるを悲しみ給へば、ある夜と／＼く籠をふるひてはなちやるとて

魂ならば歸らめ草に行ほたる

水雞

水雞啼宿とこたへり妾もの
我やどの澤潟さきぬくひなゝけ

蝸牛

たのみなき角としおもへ蝸牛
おもひ得たり竹三竿にかたつむり

蟇

深草の鶉ともならでひきの聲

田植

田うゑ女のころびて獨かへりけり
かづらきの皇子（ミコ）よりや奥の田植うた
酌つゝや奥の田うゑのにひしぼり
つらり／＼うゑ田の縁（ヘリ）の百からす
我ものに植田の蛙啼つのる
つまなしのさす手引手や早苗舟

越の礒輪つたひに

海士が業濱田のさなへとりにけり
さをとめはみな海士が家の出立かな

さをとめの讃

鳰の巣に吹とらるゝな田うゑがさ

紫陽花

あぢさゐやよれば蚊の鳴花のうら
紫陽花の日和なるべし村ぐもり
あぢさゐに喪屋の灯うつるなり
紫陽花やおもひ忘れし跡の色
あぢさゐや晝も蚯蚓のくもり聲
とりよれぬあぢさゐ花のこゝろやな

蓮

葩を葉におく風の蓮かな

清水

草あらふ流の末や苔しみづ
汲てしれ命にかゝる苔清水

此奥に聖おはしぬ苔の花

桐のはな寺は桂の里はづれ

色に香に桐控(ウツロ)してはなに凝(コル)

鹿子

さをしかの子を立かくす箭先かな

鵜川

山本や鹿の子迷はす鵜のかゞり

暁は寒いやうなりうのかゞり

はなれ鵜の火を得さらぬも泪かな

雨一時うのかりなづむにごり哉

覆盆子

山ふみの鍬にかけたり莓いちご

李子

李子や供笥(ぐげ)をこぼるゝ敷かはら

楝の花

鞍つぼに酒吸ふ門やかきの花

志賀の山ぶみして

誰かきの花ずり衣名のりせよ

樗

鮓うりのかざしにとれや花樗

瀧水の雫かすりてはなおほち

菰鞍の見せ馬たてりはな樗

五月十四日也けり。故もなく餅搗まいかと人ゝがいひあつまりて、二臼三臼搗

青梅に臼まはしこむ餅あそび

青梅

十ヲたらず野中の梅の黄ミけり

海松

浮海松のしほよりからきよるべかな

藻花

藻のはなに水とり雲のかゝりけり

もの花や引かけて行ぬれ鎧

萍

萍や夜は稲妻の只をかす

麻

すは〳〵と夜は明安し麻畠

麻かりや白髪かしらのあらはるゝ

夕貌

ゆふがほの花立されよ夜の蝿

夕貌のはな踏盲(ふむ)すゞめかな

ゆふがほの華暁にうち見たり

夕がほや花の外には露ばかり

ゆふがほのはなをちからや木曾の奥

夕がほやあからさまなる閨むしろ

晝がほ

ひるがほは酒をのむべきさかりかな

瓜

初うりやまづ畑ぬしの茶振舞

瓜ばたに月夜の株(クヒ)瀬守りけり

冷し瓜宇治の堰(ゐせき)にかゝりけり

瓜の香や逢たき人の跡座敷

むだばなやわがねて仕舞瓜の蔓

干瓜や汐に流れしうつせ貝

ほしうりや身はかた〳〵の汐衣

一度他郎、我名の他郎とつく。今法師身まかりけると京にありて聞、句を尾の連衆に送る。是をもて一回忌

の俳諧をなす。

我名ひとつ枯て露けし瓜の蔓

氷室

鳥羽に倦て氷室に落すかな

氷室守龍に卷れしはなし哉

蘭芝、暇に居ける桂輪亭にて

日は氷室夜をなけ加茂の川ちどり

雲峯

ふけば散ものゝ冷まじ雲の峯

白雨

夕立や只一押に野への灰

見つゝゆけば夕立きえぬ清見潟

白雨や鼠巣に死ぬ茶木原

夕立や一棹岸へたらぬ舟

天明はじめ丑の年六月二日は、平相國信長公の二百年にめぐりあたらせ給ふとて尾張の圓徳見禪寺に懺法供養を、との外にとりおこなはるゝを、はるかに聽聞つからまつりて

けふの御法鳴いかづちも草の露

暑

糸ぐちのみだれて暑き手もと哉

逆行、日の岡に到て感慨懺愧

世の中の汗は石にも轍かな

よにふるを何にたとへむぬれ扇

六月の埋火ひとつ靜なり

夏雲

みちのくの完山、今年焦翁百回の法筵にあはむと、都にまかりのぼりて一七日の俳諧をつとな。曉ゝ其信いふべからずと、都鄙群集の風客涙を揮て是を感ず。花はおほよそに盡し、青葉がちなるより都を立はなれ、しばらく栗の龍門にとどまる。日ならず又行裝を告ぐ。去年はみちのくに渠我を送り、ことしは春雨菴に我かれを送る。渠も老へり、我もおいぬ。けふの離別一千五百里、今世の再會期べからず。

世のうつゝ隔てあはむなつの雲

懷古

大坂や霜幻の夏のくも

鮓の圖に

いびきの圖夢のうき橋とみる世かな

納涼

夕すゞみ糺の岸や崩らむ

竹涼し故人迎ふる意あり

すゞしさや腮さげて行夕肴

丈芝が薙髮せし時

髮の落見れば涼しき泪かな

針させばすゞしき鯛の眼哉

五明樓夜半、殘宴又はじまれり

すゞしくも明行月を照日かな

はだか子に乳の毛ひかれて夕涼

草の戸や柳すかして夕すゞみ
　みちのくにて
陸奥殿の涼臺なり千松島
　夫よりして人のまよひや川
　涼　と彪門がかつぎ出るに
　次
水音や琴を下樋に夕すゞみ
腹赤き蟹つり出さむゆふすゞみ
　簟
廬山寺の僧似合しや簟
　冷酒
塩鳥の齒にこたへけり冷しざけ
冷ざけや一順果し廻りはな
　祇園會叢雨樓對酌
山おろしの風みどりなり唐錦
月鉾や人群起る山かつら
　己、湘南幻住庵に在て、故
　郷に父を失ひし臥央を悼。
眼にいたき風も吹つらん蚊やり草
　此日は六月晦日也けるが、
　我はらからの者獨は三十三
　回、今獨は十七年のけふに
　當りたりければ、月を同じ
　う作善をいとなみ、何くれ
　とものかなしき今宵也け
　り。
うつせみや何を活甲斐に我はたゞ

曉臺句集　下

曉臺先生發句集　下

秋之部

日ぐらしの今朝しも鳴ぬ秋は來ぬ
鶯の淺茅かくれや今朝の秋
ころ〱と轉り出たり露のあき
芝前の箭拍子さえてけふの秋
　かなしびにひかれてかなし
　び侍るなり
　沖鱠
沖なますはやきをもつていさぎよし
　御紋
追かけよ五串（いぐし）にかゝるひやし瓜
初秋や友まして夜の靜なる
けふの秋死とも聞し人にあふ
　知多の浦一草亭にやどりて
けふといひし秋は今宵の五位の聲
　丈州が身まかりけると聞て
秋二日身をそぐ風も吹ヶばふく
　士朗佰青に別るゝ時
うつせみの現に秋をしる日かた

七夕

桔梗星に貸べく野は成ぬ
麻ひめのをしへ成らん貸小袖
玉箒のはなに迎む星のねや
竹取が由縁なるらむ女七夕
龐居士も娘もちけり天の川
汀にそふて流るゝ影や銀河
戯にあふぎながさむほし迎
さす汐や玉藻つかねて星むかへ
廿年あとのまつりやほし今宵
ほし逢や我は嬉しき親になひ
星あひやものめかしたる不二筑波
七夕や世に大かたはまさな事
さゝまくら星に一夜の名なるべし
ほし逢や心の友は伊勢小町
病ばたゞまくらの上ぞほし祭
星今宵夢みてはらむ人あらむ

酒星あれば地に酒泉なからんや

七夕や流るゝほしは酒くらひ
羅の袖や裂らむわかれ星
明がたや七夕づめの閨の雲
別れ星今は木隠れて見ゆるなり

ひとゝせはせをの翁、此國をたどりて、うき身の宿ふことを南にそへて、かなしみ申されしを、ふと星の夕に思ひ出て

下り帆にほしや迎ふる浮身宿
星の精や八日にさける白芙蓉

文月十日、國に、中将の君うせさせ給ひければ、民の心灯火盡しやうに愕闇し、敬ひ愼しみ、鑑して悲しみ奉るなり。

おしなべて月なき盆となしにけり
草まくら故郷の人の盆會かな
盆ごゝろ夕がほ汁に定りぬ
蜑の子や何はなくとも盆扇

皆家

たま棚にくさのゆふべのけぶりかな

題魂棚

鼠尾草や身にかゝらざる露もなし
美しや月の中なる盆の人
盆の月市に隠るゝ人は誰
送り火やなきは誠の跡座鋪
魂送り身にそふくさの夕かな
静さや町なき里の高灯籠
つくづくと雨見上るや高燈籠

踊

おもひきつて出れば出すますをどり哉
まくり手が踊崩してをどりけり

唐崎へ御渡ひか、山田へ舟をやりひはん歟。

秋の風三井の鐘よりふきおこる

秋風

秋かぜや火燈しのぼる浦の山

滿山秋雨の時、春風落花をおもふ。

秋かぜの吹につけても長等山

巣に籠る蟻のいそぎやあきの風
あき風や鷹に裂るゝ鳥の聲
秋かぜや鷹飼そむる酒の君
藤の實の鳴出しにけり秋のかぜ
あき風や寄かひもなき竹柱
市にふる飼の尾かれてあきの風

井澤(石和)といふ所より竹の下こえに行。此ゐさは川は鵜遣ふをのこの貴き御法にあひし經石など、今もたまく拾ひうる人もありといふ。みさか峠越てあやしき田家にやどる。

猪垣のむすびめきれて秋の風

客中

切角と野分追ゐる旅ね哉

左中將城破れて、洪鐘此金ケ崎の海に沈しと言傳れば

鐘はふかし浪近ければ秋の聲

木曾古城

水は日の西に落けりあきのこゑ

瀧谷慈光禪寺は澗をめぐりて入と三十餘町、雲霧の中をたどり、はじめ楠氏が三男庄五郎入道が證正禪刹にひらいて、風水清音に終りをとれるのみ。

雲起て寺門を出る秋の聲

稲妻

鉦の緒にいなづまつかむゆふべ哉

露

酒くさき人の寐がほや松の露

夜前亡人斗擻を夢見

逢ふはうれし夢絶てのち露を呵す

淺草の街に假にかりほして、月をかさね住居れるかたを、元のぬしへ返しあたへ、翌れば引はなれて又東の國わたらひす也。人々かくて其庵するゑ置べきよしなしとて、やがて跡なくかひほどき、暫、鶏な〱野等となしてむとぞ。すはされば楹の柱つれなくも我をわするらん、軒のばせを葉あだにものゝあとつきやすきうらみのはしくれに思ひ詫て、それさへ今宵のかど也けり。

けふは我翌は庵なき露のはな

木槿

もとの露すゑのしづくや花木槿
日の照や一雨殘るはなもくげ
蚤ふるふ願人坊や花木槿
二日咲木槿となりてあさ寒し
白木槿糸瓜の中に咲にけり

散柳

柳ちるや少し夕の日のよわり

女郎花

信濃の道下り、甲斐のさかひに入

川風のうつりも行かをみなへし
秋かぜをかつぎてふせり女郎花
をみなへしあやうき岸の額かな

朝貌

傾城蘭梅てふをみな、つく／＼し琴の曲あやしきまで妙なりけり。極て夜明なんとするをり／＼、かきならすわざをこのめり。鳴らせば玉うつ蓮草の上の露を飛ばし或は閑怨の情を動かし、忽閑雅のさかひにいらしむ。

明れば又青樓上

あさがほの莟もすくふか琴の爪

蕣はいなづまに見る莟かな

ばせを風過て朝がほのさかり哉

朝がほのはなこそみゆれ奥山家

あさがほの花はちけたりはなひとつ

桃明をいたむ

露はら／＼槿に翌のたよりなし

月くさ

野上にて

月くさの野上とやいはんよしもあれば

月草の色見えそめて雨寒し

月くさは露もてはなをくゝるかな

霧

伊勢の山田のみの手やといふに、人々ともに酒たうべ進ぶ。閑のめぐりいときよらかに、東うちひらけて先朝熊をいれたり。このもかのも皆此亭のながめをとりよろふたり。ひとり直下千尺秋色遲しとからびどいひ出たる有。よくいへり、誠に直下千尺

霧色あり百樹の上に酒吹む

山中

霧にぬれて我酒は酢し塩からし

きりこめて那須野狩野の犬の聲

霧雨の降崩したり餓鬼灯籠

亡母野送り

霧煙今や骨ならむ肉ならむ

收骨

露肉なし日もくらまりて相狹

初七日

はな芒九品のおまし告たまへ

なき聲のこゑ耳にあり秋の風

うつり行日に衰へて夜は長し

かはる夜や心寄せなき秋のくも

右喪中

萩

風なぐる萩の缺山日のかすり

かぜなりやうち返る萩のほの白し

しら露や水打越えし萩のうへ

色みえて萩のり越える燕しかな

はぎ原や花とよれ行爪さがり

小比丘尼の折て捨行野萩哉

偶成

一夜とめて向ふ柱のこぼれ萩

桔梗

桔梗咲て何れも花のいそぎかな

芒

犬の聲しばし里ありてむら芒

はる／＼と雲のかけりやむらすゝき

色もなく水おしかゝるすゝきかな

夕闇を靜まりかへるすゝき哉
長絹の紫かゝるすゝきかな
あらし立夜頃の芒黄みけり
蛇のきぬかけしすゝきのみだれ哉
日も寒氣たちぬ芒の花の上
村をばな夕越えゆけば人呼ふ
むらを花夜のはつ〳〵に鶉啼
を花散や鬐の毛を吹風の筋

蔦

上總の國を行脚して山邊といへる所に出づ。かの赤人の古墳も拜みてやゝ過る程山邊といへる名のおもひすてがたくて

つたの葉の水に引るゝやま邊かな
蔦たれて十尋尋見る滴かな
垣のつた濡重りぬへちまの葉
つた紅葉下戸を住する扉哉

蜩

ひぐらしや明るき方へ鳴うつり
蜩のなけばひさごの花落ぬ
日ぐらしのなけばつら〳〵古郷を思ふ

奮(寄カ)清淨の蘭若にのぼり、午時一睡清閑に入。

聲しみ〲浮世に遠し秋の蟬

秋蝶

秋の蝶日の有うちに消うせる

秋蚊

あきの蚊や香の烟の前を行

秋蠅

蠅たゞに死ぬ日をみたり秋曇

虫

鈴むしの鳴やころ〳〵と露の玉
すゞむしや手あらひするも蒔繪物

蟋蟀

寒き聲や敷居をくゞれきり〳〵す
きり〲す日のさすまでの古むしろ
琴爪を礎にうつやきり〲す
寐ぐるしや鳴そなゝきそきり〳〵す
二日見る佛の飯や蟋蟀
立出て鑽せばあとはむしの聲
夜あらしをあぶせかけたり虫のこゑ
曉や雨も頻にむしの聲
たよりなや水押かゝる虫のこゑ

常盤塚にて

虫の音や美人の涙いきかはり
秋のまと虫ほどに鳴物はあらじ

亡母三回忌

みのむしのさらに喪籠る思ひ哉
くつは虫いつかはかなきしもの聲

秋雲

しづけしや鶴に定るあきの雲
あら浪や波を離れて秋のくも

秋水

秋の水竹の根がらみ流るなり
あきの水こゝろの上にながるなり
茫々と芒折ふす秋の水

黑血川

かくばかり秋の色またあきの水

秋寒

二日咲木槿となりて朝寒し

秋寒し立出てみれば袖の浦

よし田山中砂走などいへる所は梛のゝはしりに、家づくりせし村々なり。芭蕉翁、武陵天和の變にあひて暫留錫ありしも此あたりなり。

山中にて

山がつの顔とぢるむぐら哉　翁

川口にて

勢ひあり氷柱消ては瀧津魚　仝

雲霧の暫時百景を盡しけり　仝

是等の吟をとゞむ。百景盡すに今猶不盡、夫より山深く入て

秋寒し日蔭のかづら袖につく

足がら越にかゝる古道、草をむすんでしをりし老樹枝乾て自寒し。

秋深し松はむかしの具足ずれ

篠の中道胸わけしてやう〳〵東海道梅澤のさとにいづる

さゝがに姫といへるみめあしき姫のいまぞかりけるが、糸のわざにはいと妙なるまでたくみなり。しかあれど織姫などのあやにものなす類ひにはあらで、色ある蝶の翅にかけ、玉むしの玉の緒もそがためにたえてん。只ものねたく心恐しければ、ふつに戀わたるかたもなくて、身をいたづらに棄がくれ、やゝ秋風の秋にあひて、ひとり夜寒のわびしらにまぎれ出ぬる折ふしは、あいなくゐどころに火さゝれて、うきをさへえなかずて迹まどひつゝ、いづちにか住巣てん。世人の上にもあらんかし。

しみ〳〵と夜寒き蜘のあゆみかな

音になかぬこゝろたくみや夜の秋

椎の實の板屋を走る夜寒哉

海近き雨や夜寒の濡むしろ

影見えて肌寒き夜の柱かな

秋野

秋の色野中の杭のによひと立

あきのゝやはや荒駒のかけやぶり

秋山

秋の山ところ〴〵に烟たつ

雨三粒降て人顯るゝあきの山

きのこ

雨はやし松茸山のすてかゞり

おくれ馳に魚さげゆかむ菌山

松茸や小法師どもが朝はやり

まつだけの灰やき寒し小のゝ奥

八朔

八朔や旅は寐がちにもの忘れ

田面の日壽ぶく馬醫の家婿哉

相撲

神妙に古き代したへ角低(觝)士

亂髪風情なるかな勝角力

寒ければ衣着にけりすまひ取

すまひとり死なで歸れり伊達の木戸

三日月塚懐古

大曾根の成就院、今は悉皆頑废(?)佛跡地を返して稗粟畝をたゝみ、彼三日月の碑はものゝ隅に押入、うしろざまにすゑたるなど、いと哀に覺えて

ありとだに形ばかりなる三日の月

蜀黍の穂首になびけ三日の月

六祖讃

三日月の光さしけり精米（しらげこめ）

八幡宮千百年法樂

若みこや月にかげさすをとこやま

月

狼の吼うせてけり月がしら

月みえてふり替りけり浪頭

けふの月雲井の龍よ心あれ

獨坐

月と我と物おもふ頃雲おこる

仲秋無月

月や雲跡よりせむる雨の聲

月の匂ひみちたり雨の高砂子

うちむれて詠むともなしけふの月

大かたは美女なりけらし月のまへ

夕がほも地に見えて月の今宵哉

月滿て芙蓉の花のすわりけり

折箸に萩垣ほどく月見哉

田鼠のわらひ出たりけふの月

酒吹（クラ）ふ蝦夷もくもらじけふの月

人遠く水長うしてけふの月

杜若又さく水の月夜かな

石山やのどかに出る秋の月

さをしかの角にかけてや峯の月

地はものゝ懐せましあきの月

大空や月はこゝろの上に置

月見して餘り悲しき山の上

雲はやしいろ／＼に月を過す哉

けふの月橘色に出る夜ぞ

月の隈十圍の杉の匂ふ夜ぞ

月の桂かたむけば又あらたまり

まどかにて二夜も三夜も秋の月

香千里日にやしむらむ秋の月

北海

月ひとり荒海をすゝむ今宵哉

池邊

人をいかる遊魚あるべし水の月

良夜滿興、川原乞食に酒のませて

月に酒おのれしのぶの亂萩

曉月鞍上吟

夜すがらや曉の鐘にけふの月

湖の面雨むらふりて月をうつ

仲秋ふたむら山にのぼりて

奥山は霰雲なりけふの月

ロずさみに

あらし吹雲のかよひにたちくれて
わけ入みちも二むらのやま

大卑は父に別れ、我は母を失ふ。ともに仲秋喪に籠りて

思ふ處ふたつなき夜の月くらし

ひとりこよひの月に對すれば、おもふ所とし頃睦まじかりし人々の八九は亡失せて、とありかゝりとたゞ其俤をむかふるのみ。己いそぢもこえたらん齢のほど、ことしや月の見果ならん、けふや清光の名残ならむかと、去年は旅寐に一人思ひ入て、袂の露も深かりけるが、何くれと同じさましてまこの秋にも逢るなり。さてしもつれなき命ともおもはざりき。

大かたは逢ふまじと見し月を友

十六夜のやみいよゝ降くらしつ、蕭〳〵も戸さし、らちこもりて去年今年など言くらべ、とぞりゐけるに、ゆくりなくの月の光さし出たりと人のおどろかしければ、そこらおしひらきて

中天をいさよひの月の出かけ哉

風かなし夜々に衰ふ月の形

早稲の香や藪を一重の晝談議

いなご

道のべやいなごつるみす穂のなびき

寺僧

月よしと小梛(小水葱)をのぼるいなご丸

秋雨

山鳩の脊中干なり秋の雨

秋の雨深草の町に行かゝり

あきの雨胡弓の糸になく夜哉

秋の雨ほね迄しみしぬれ扇

秋の雨欄きかほにかゝるなり
(原註しぐれイ)

信濃の道くだり、甲斐の國に歩みを引ちがへて行ほど、藤田の可都里は年頃交してしれる好人なれば尋ぬ。其夜ごろにもあれば、月を見せばやなどわりなくとゞめられ、望の夜もこゝに遊ぶ。士峯の北面まぢかくひたひにかゝるやうなり。

高根はれて裏行月のひかり哉

今宵空のきよらなる、十とせにだもえこそ覺ねなど、謹かれと共に夜更るまで興ず。

堪ずしも薄雲出るけふの月

あたり近き市川へまねかれ社司廣南子のもとに、むかし新羅三郎より給りの、ゆへよし正しくありて天國の劔を重寶す。謹て拜見す。

秋の霜三尺の龍やこもりぬる

其餘にも五勢大納言の書は賴朝公の賜のよし。今千歳の家名をかたぶけず、國にめで度譽なりけり。酒折の神社は甲府の東はつかに去て、山の邊にたゝせ給ふ。

こは日頃まうで侍る我國熱田のおほん神と一躰におはしませば、嵩族のうへたともぬるゝばかり、猶有がたう覺えてぬさ奉る。

小墾田のをはりの初穗かくもあれ

客中

我きけばをはり田をさす雁ならし

甲斐の國市川なる蘆南子がもとにやどれる夜は、しく〳〵雨の降出つ。空は月の出づるかも、うすあからみたるに、雨いよゝふりつのる。夜坐倚しづかにおもふ所感あり。

雨くらき夜のしら根を鴈わたる

甲斐の國道くだり、いぶせき山中にやどりて

いつの世はとありとしのぶふる里を

ひとり門田の月になかるる

此國の夷等道のほどをしへ迷はしなどしければ、あられぬ方に日くらしたり。いさゝかも情あるやう見えざるも又哀なり。

道くれて稻のさかりぞちからなる

東方天の極れるや、海の極れるや、神といへどもはかるべからず。仙といへどもしるべからず。

星盡る處まどかに出る月

途中

歸り來れば淺田の早稻田穗にみゆる

風行や濱田にしらむ穗のなびき

稻の香のねざめて近し五位の聲

引狼の田守をにらむ庵根哉

ひたぶる船頭に句を乞れて

川稻の香とりをさして潮來船

わりなしや法師夜田刈月の前

色ふかし田尻の小樔かくてかれ

唐崎の松に日ざしや秋の雨

鮫の尾の遠く沈めりあきの雨

翌は藤歩子のもと立出べきこよひ、其家の人ゝ打かたらひて、又くるとしのちぎりなどはかなくいひわたりて、山川百里の情只今にせまる。

心からの雨も降らむ夜の秋

秋夜

秋の夜や力の火かげ跡になる

草の花愁るあきの夜と成ぬ

あきの夜や膝こす水は渉られず

秋の夜もそゞろに雲の光かな

秋のよや心盡しの默りもの

あきの夜やひらき協へし笛の孔

秋の夜は梨子の齒冴の寒さ哉

秋のよや杵おし削る爐のあかり

玉むしの活るかひあり夜の秋

あきの夜やそろりと覗く君が門

擣衣

をとめ子が御衣打らし砧の石

遠砧夜のおとゞに聞ゆべし

西谷の衣うつ夜や焙り芋

山姥とみし人きえて遠砧
柿の蔕ぬける夜冴や遠碪
うつら〳〵月見つゝあればきぬた打
悲しきは上手なるべしさよぎぬた
砧打てつれなき人を責るかな

雁

南にも初かりがねの聲すなり
はつ鴈の信濃にかゝる夜は寒し
初かりや高ねを左右へひるがへる
きゝそめし夜より亂れて風の鴈
遠山や身をうちつけてかぜのかり
亂雁となるや靱の雲うつり
やう〳〵と立あがりけり小田の雁

渡鳥

京ちかき山にかゝるやわたり鳥
夕あさり鴫の目はやく鷲鈍し
おのれのみ貪る鵙の眼さしかな
かけなみに追れて高し鴫の尻

秋暮

犬蓼の節をれしたり秋の暮
鷺の眼の水に居るや秋のくれ

秋畑といふを題して

人の上に畑かゝれりあきの暮
象潟やいのちうれしき秋のくれ
梅干で酒吸ふてみん秋の暮

鹿

山鳥のさわぐは鹿のわたるかも
鹿の聲をばなの末にかゝるかな
こがれてや淺瀬見てゐる鹿のつま
あなう〳〵射よげに見ゆる萩の鹿
こけ猿も夜たゞ侘らむ鹿の聲
鹿の鳴音引結ぶ夢のたどり哉

閑坐所思

ある夜ひとり鹿の鳴音も六かしや
病鹿や霜に狹りし明の聲
鹿追ふや曉聲に雲を裂
別鹿霜の笹山わたるなり
ぬれ鹿に有明の月のひかり哉

九月朔日吾初て知命の日なればとて遂宮へ詣づ。川のほとりはつ穂ひた刈て、道せきまで干置るを、尊く侍りて申。

として又命は續り稲むしろ

菊の九日遊大津舊都

けふの菊なき世の都めぐり哉

きくの日清見寺に詣て

雪舟が筆の走か菊の露
籬菊や花のうら道一通り
山風や板戸たふれて菊の上
痩ぎくや只一もとのまさりがほ
みだれ籬菊折入て參りたり
白菊は露の泉とみゆる哉

夜宴菊

しらぎくのおなじ色としもなかり鳧
月しろし此はな燭を恨むべし

題百菊

華の色香我思ふ菊は只一種

はなひとり黄菊神妙にみゆる哉

燭とり〴〵夜坐亂れけり菊十種

香にふれよ菊のあたりのゑの子ぐさ

十三夜の月は矢作の橋の下に遊びて、かの上るり姫の舊跡にいであれば、おもふところたゞ管と絃と、見る所草頭の白露秋聲人語に對るのみ。

秋の花みなうつゝなし后の月

后の月すゞむうちより衰ふる

月の餘波閽守あらば孤枕

のちの月客に呼るゝ病あり

十三夜戸塚の驛にやどりて

月にゆかば鐘に夜明む建長寺

古園百里を去て故歩子のもとに二とせの秋にあふ。しかも九月十三夜なりけり。

雲百里今宵ふたゝび月の闇

九月十三夜もこよひになりぬ。今宵の清興、うたげまうけは好ゝ舎中のともがらなり。共に手からみて科野川の支流にのぞめば、獨ひそかに古園の感あり。

水日夜北にせまりてのちの月

十三夜は亡母六七日にあたりて

后の世の月ならば母の影もさせ

末枯

うらがれや西日にむかふ鳩の胸

何草の末がれ草ぞはなひとつ

葛

人目も草もしどろに葛の枯葉哉

葛の葉や篠田(さゝだ)男の蠅をなみ

くずの葉をおさへ付たり秋の霜

紅葉

うす紅葉するよと見ればちりはじめ

門叩狂僧憎し夕もみぢ

何とみても紅葉は松に極りぬ

紅葉散や髪かれて我けふもあり

後ト先に人聲遠し柿紅葉

蓼（靈カ）芝の畫讃

木食のわけ入かたや秋のいろ

三浦氏蛙聲を訪ふ

先門に入れば柑子の色にみゆる

途中

藤の實に小寒き雨を見る日哉

子東三回忌

三ッ栗に中の七日をおもふ夜ぞ

木實

岩の雀衣の袖の木の實哉

夜もすがら鼠のかつぐ栗かな

むづかしや茱萸にからまる薢蓫(ところづる)

茱萸の木のしごかれて行野間哉

洛の夜半主人、幻住庵のかり寐訪れし時

丸盆の椎にむかしの音聞むときこえしに、かたみて月を松もとの山　とかい付侍る。

日頃おもひまうけし事ども

とひもしいらへもしつ。月は四更にかゝる。夜のかさねいとうすく、裾引かくし肩おしならべて夢境に入。曳がしわぶきに目ざめて

暁の霜すがた寒し九月衢

秋懐

秋暑し水札鳴方の潮ひかり

鵙さしの柄うたれ行粟穂哉

はなかつら背きあふ野邊の初あらし

野路の雨刈萱獨ありのまゝに

鳩鳴や藪山口のつぶら家

蕎麥の花眞晝に暮ぬ不破の雨

鋭き物のかくは有まじ長瓢

むら雨を面白さうに芋畠

芋黒く竹黄になりて鵙の聲

鵙臺圖に

清げなる老のみさをや竹の春

さし鯖やかさねはいつのはたら塩

水海夕陽

秋のなみ星うち返す折もあり

落鮎や瀬の闇に沈むまで

老情旅にせまりて再び白川の關をこゆる

見つゝゆけば茄子腐れて往昔道

志賀の山ごえせんと、あられぬ道にまどひ入ッ、、高萱胸わけしてやう／＼と如意嶽に出づ。

頁蛇鳴花の古道風かなし

龍膽や岩のへげめの日にうとき

ばせを葉に落かゝりけり鬼がはら

山中や別當殿のことし酒

遇貧夫

肱に一嚢をかけて、はつかに満るをもて樂しびとする誠に樂しひ哉／＼。清らして貧し。かくてあらんより世になくてあらんなどつぶやく人は、常に金璧に面を照し、銀盞に歌舞せられむ事を事とし、必其患のしりへに廻るをしらず。そは是常に哀しびを迎る也。たゞ樂しひ哉、清らして貧し。

身のほどや落穂拾ふも小鍬ぶし

うらさぶる日、たどり／＼木母寺にいきて、佛念しツツあはれ成くま／＼をも見めぐり、日くれんとするほどに、鐘も鳴鴨なきさわぐ。此日は秋のなごりなりけり。

木母寺の灯に見る秋の行方哉

風あらに雨さへ降そひてやや寒し。誰かれも心ひとしう、いざわび寐してんと、むしろの端のやどり乞て臥ぬ。三更の頃さえ／＼しう空うちきらめきて、翌れば又うめ若の古墳に詣づ。

みの虫を繋ことなかれ落葉かき

すみだ川のわたりにかゝりて、いにしへをしのび今をおもひ、ともなふ人ゝも歎

く也。我もなく。
日たゞ夜たゞ都をさしてかもめなく

長月も廿日あまり八日の曉がた、夫と見るばかりの月いとかすかにさしのぼれば、秋の名殘も一しほあはれに覺えて

ほの〴〵を名殘と見つゝ秋の月

暮秋

塩負ふて山人遠く行あきぞ
秋の名殘山田の添水いとまあれや
あき餘波夕日の前に小雨降
あたら夜ををじかゞなけば秋は行
火ちら〴〵秋もゆくなり峯の堂
山風や兎鼻つく九月盡
綿弓の弦引きれて九月盡
宗旦の大工遣ひや九月盡
九月盡遙に能登の岬かな

冬之部

初冬や二ッ子に箸とらせける

湖上吟

霞日も又初冬のやうすかな
冬の日のさし入松の匂ひ哉

時雨

鳩の巣のあらはなるよりしぐれそめ
しぐれねばものあらたまる日もあらず

漁父畫讃

鱗のこゝろはふかしはつしぐれ
しぐれそめてばせを葉翌を繕はず
一むらの烟はなれて行時雨
しぐれ行果は一むらのけぶり哉
鐘の音やしぐれ降行あとのやま
しぐれけり尾根のすかひにわらび焚
つら〴〵と杉の日面行しぐれ
夕川や霧のしらみを行時雨
さし越ゝや深山時雨のぬれ彳

若狹國にて

沖の雲しぐれて歸れ後脊山
烏羽田には時雨ふるらし水菜舩

酒星あれば地に酒泉あり。溺て泥のごとし。

右うかむせ四郎右衞門亭に遊びての也

眼にのぼる花かき交て一しぐれ

挨拶

我ためのひと夜は菊の殘あり

義仲寺焦翁牌前

霜にふして思ひ入事地三尺
けふの今いまより後のかれ尾花
霜の庵旅寐まねびに佗巾
雲はしぐれ鐘は其世の感に伏
障子まで來る蝿も有翁の日

霜

薺の花つむしもの鼠かな
霜冴て雀ひそかに鳴夜哉
つや〴〵と柳に霜のふる夜哉
霜満る夜たゞ樟の匂ひかな

途中

霜に行草鞋のつまを焦しけり

しもを燒毎に寒鴉の聲くらし

空谷寒草

草かれて深谷の霜にあへりけり
霜枯て鳶の居る野の朝ぐもり

貧學

行燈に藥罐釣りたる霜夜哉
夢人の浮橋かゝれ霜の閨
おもしろう嘘つけ霜の濡頭巾
しる人はしるらし霜のぬれ頭巾

文字摺石

草よくも生たり霜のすり衣
曉や鯨の吼るしもの海
夜の霜醤に答へるよ狄の聲

妻におくれし亜満をいたむ

兩袖に泣子やかこふ閨のしも
目じるしの枯木たふれて霜の月

木がらし
ゆかしき物にてつれなきもの

木がらしにむかひかねたり辻諷

愛に悲しくて心ゆかぬもの

只一輪木がらしの風にさくら散

ことわりと思ひ辨へつゝ、
胸安からぬもの

うらみねや又風の吹夜なり
木がらしの只は置まじ花ひとつ
風や木から落たる猿の尻
こがらしに豆の葉荷ふ人をかし
こがらしや灯心賣のうしろ影
風の孛かせをみだす眞柴哉

御堂の十夜にまゐりあひて
父あひがたき法燈のかげに
かゞまり、通夜の人〻とゝもに念じつ。とよひ此みあかしに別れ奉らん事、名殘をしう唯心細う覺て

十方十夜御佛の前去がたき

小春

海の音一日遠き小春哉
魚つりの編がさひとり小はるかな

歸花

わすればな忘れぬ宿の栞哉
歸花祖父が戀の姿かな
住の江や一もと草のわすればな
夫そこに草の中なる忘れ華

茶花

茶の花に兎の耳のさはる哉
ちやのはなや雲雀鳴日もあれば有

冬夜

ふゆのよやまとしからぬ稻光り
冬の夜や曉かけて山おろし

冬月

月の情冬を定めり櫟木原
月寒く出る夜竹のひかり哉
冴きつて檜裂たり冬の月
砂に埋須磨の小家や冬の月

登山雞鳴

寒月の額にちかしをとこ山

寒

屋根うらに鼠鳴夜の雨寒し
寒きよの枯竹藪に明にけり

さむそらやたゞ曉の峯の松

幽 溪

山寒し出るより入日のあした

辻能の矢聲もかるゝ寒さ哉

妙義山に詣しかへさ

おもひ寒し峯の白雲吹わくる

寒天の行脚ならひにいたれば、白糸老人にいたはられて爐火右にかまへ、夜のかさね猶薄からず。しば〱安き思ひを得たり。

寒しとも思ひわすれて谷の聲

冬紅葉

十分に紅葉の冬と成にけり

東都に遊慰して郷に歸りし宰馬を訪ふ

ありやいかに隅田川邊の冬紅葉

知多の浦台中亭

汐風の吹よわるかたや冬紅葉

霜にぬれてもみぢ葉かつぐ小雀哉

等後眞如堂の紅葉見にまかりて

めづらしや今朝みる雪の下紅葉

なつかしや雪見し後の下もみぢ

冬木立

冬木立馬一寸の行方かな

冬 川

冬川や簸（箕カ）に捨（すて）てやる鳥の羽

川中に川一筋や冬げしき

夕川や動かぬものゝ又寒し

冬 枯

ふゆがれや寺門かすかに人を呼ぶ

何おもふ冬枯川のはなれ牛

枯 野

出る日のと拍子もなき枯野哉

葎さへ枯て出ぬる戸節かな

けふも折翌もかれのゝ萩の長ヶ

ぬつくりと夕霧くもる枯野哉

人目も耻もしどろに葛の枯葉かな

枯 蘆

蒼天に河邊の蘆のかれは哉

錦浦夜泊

枯蘆やしるべして行雨の聲

枯尾華

水際の日に〱遠しかれを花

芥火の烟の中に枯尾花

中〱に根づよく成ぬかれを花

落 葉

おち葉落そめて夜を鳴鳥かなし

落葉おちかさなりて雨雨をうつ

蒸ものや落葉堤の葭かこひ

あみ笠におちばかゝれり占や算

木の葉たく烟のうへのおちば哉

炬の火に落葉ふり分行夜かな

與板留別

此別梅も葉おちて柳ほそし

冬 構

越ｼ人は斯ても經けり冬がまへ

みそさゞゐ

壁くろや鼠行あふみそさゞゐ

冬籠

人離し京の眞中に冬ごもり
よ目が車音たりふゆごもり
冬ごもりとかくして世の情に落
鵆一羽我を廻るや冬籠
冬籠一字に運ひ夜戸川貴[?]
世を嫌のすさび悟らん冬ごもり

衾

さるにても輪回きたなし文衾

紙衣

騒物をかゝへる紙衣さはり哉
我かみこ鴨の足水かゝりけり

火桶

山居三日一日對客

山寒しせめて火桶の焼蜜柑
うき人の額にあてる火桶哉
居られし人の泪に兀火桶

えびす講

堂上に御沙汰有けりえびす講
屋敷から梅もらひけりえびす講

冬至

日は冬至晴れ鮭て日覺なむ[?]
向にうときすねん醉り冬至酒[?]

霰

霰下に目れ学館つゐまゝでりて[?]

あまつたふ星の霰かげにたく御[?]

冬嶺江上を臨といふ鳥羽の湊を見廻りて

夕闇のまつ風のぼるちどりかな
舞鼓す下駄の雨音に霰哉[?]
酒ちどの雪の中より霰はらゝ[?]
風はやく二ツにわれてむらちどり
心われしてや二潮に鳴ちどり
月も見え雪も降出てなく鵆
曉をまぐれて行やむらちどり
闇明てかいくれみえぬちどりかな
水鳥やさすがに雨をうちそむき
水鳥の巴になりて狂ひけり
水とりの立行程や波の桂[?]
人をたゝうらみ雪也はなれ鴦[?]
しのびねに鳴夜もあらん離れ鴛
うか／＼と日に照れ居るやはなれをし
鵆の山を越え来てうきね鳥
かひつぶり浮出まで見て過ぬ
雨もふり風も吹調のうきねどり
浮寝や鯖明に射出され[?]

鷹

出羽の國にて

あら鷹や山を出羽の朝曇り
鷹組て鶴の毛散すみぞれ哉[?]
たかそれてむなしく月と成夜かな

狐[?]

いり鷹に軒の松風ふなり[?]
鷹の跡しら雪となりにけり

から鮭

空也の痩にたくらべられつゝ或は猾賀の腰にふれし

は、汝がいみじき冥加なら
ず。
から鮭や汝も木の端炭のをれ
からさけをしわぶりて我皮肉哉

河豚

今はなき身をもて鰒のいかり哉
身をまゝに沈めかねたり河豚の腹

生海鼠

昏々冥々として蒼海の浪に
のたれ、あるは沙上にころ
がりて、終に庖丁にをはり
を取汝を憐む。
生海鼠干伊良古が崎の二日凪

網代

くらきよりくらきに歸るなまこかな
槇の嶋見ゆる網代のかゞりかな
春日野の片端麥を蒔そめぬ
冬田刈夕ぐれ人のひとり哉
炭がまや掣の烟の櫟(くぬぎ)原(はら)
寒鳥の日を追入ぬあだゝらね
坂鳥の胸をうたるゝ笞(シモト)かな

納豆叩衍や四百八十寺
風さえて今朝よりも又山近し

神樂

太郎吉が皷うつぞや里かぐら

鉢叩

にが〳〵しおのれ二代の鉢たゝき
煩腦の犬にかまれなはち叩
はちたゝき今はむかしの忍び路や
愚に歸る曉ごゑや鉢たゝき

冬鹿

さめ〴〵と鳴か冬のゝ離れ鹿
人をさへなつかし氣(け)なり雪のしか
きのふ見し木下もさらずゆきの鹿

榾

曉や榾焼そへる山おろし
又
ほだの火や曉かけてやまおろし
雉子兎釣しかけたり榾あかり

畫讃

親と子のうき世やかたるほだの影

寒菊

寒菊に南天の實のこぼれけり
かんぎくや更に花なきはなの後

水仙

水仙やうき世小路の玉すだれ

雪

薄雪や草の節さへをれかゞみ
雪もてる雲の尻兀ちからなし
ゆき空やおのれさかしき卵子うり
青雲や大虚に雪の降のこり
空高く低く雪吹を廻るかな
あやなくも霰降かつ小雪哉
鴈は悲し咎するは哀れ雪の人
柳折て雪を戀慕のわかし酒
鳥の殼叩衍やよるの雪
雪はやみて猶ふる雪のあらし哉
猪突の控に立る深雪かな
雪の人母や養ふ子や育つ
日くれむとして又雪の降初る

降行や又みえそむる雪の人

不破の雪さながら書の色ならず

鉢の僧歸り來よ雪に物問む

積雪や紅粉吹かけし小傾城

月もれて雪の降迄も見ゆるかな

雪は降流るゝは漁父が火影かも

蓑の裾に小魚付たり市の雪

金閣寺閣下に老樹あり

月雪をこめて櫻の朦かな

佛魔窓馬州が十七回の句を乞れて

佛も魔も曉は雪の十七年

人の妻を失ひけるに

けふよりや月雪泪針目衣

雪の深かりける霜月、さりがたき夕よしありてともなふ人ふたり、かよはき從者ひとりぐして會津の山ぶみす。其日おもひさすかたまでは行もやられず、山賤をたのみよりて、よすがら焚火のもとにかいつぐみ一夜を明す。風の吹入破れば茲などはりてふせぎとす。

人として雪に巣作る類ひかな

雪深く人は世渡る桙をたえて

老て壯なるものは白鶴のきよげなる也。かゞまざるは竹節のみさをなり。老人木吾子に廿餘年を經て對話すさらに今日白頭をいはず。

雪中に梅あり我にしのぶ草

霰

あられ降軒は黄めり正木つら

冬の情月明らかにあられふる

玉霰思ひまをけし竹柱

靜さや枯藻にまろぶ玉霰

たまあられ水に沈めば消ぬべし

氣たるみし膺の面うつ霰哉

縄ふしに霰はさまる垣根かな

玉霰鍛冶が飛火に交りけり

氷

穭(ひつしほ)の何をちからに薄氷

はかなしや童文字書うす氷

大谷の御堂に母の骨をさめ奉りて

氷なみだ御齒にしむな山おろし

寒夜

鉄床の音も撓まぬ寒夜かな

師走

さく／＼と栗搗師走月夜哉

百姓の板戸負行しはすかな

旅行や一とせはたゞ茶一ばい

落る齒のはじめて年の惜きかな

ある日嵐月一瓶の花を携來しを謝して

予が病を憐みて園中に數種の花採て起臥を慰らる。其句ひいとふかく、露のきらめけるをうちみるより、頭のほとぼり胸のあつしさもすゞしく、

めざむる心地すれば、いさゝか筆をもとり見むとするにつけてもおもひよりぬ。まとや輞川の畵圖をひらきて、病をわすれたるもげにさる事ぞかし。先水仙の冷かに咲出たるひかりには、玉の簾もしのばるれど、杜若のわすれ顏もなく朧氣ならぬ色にこそ、猶し心はひかるれ。何〳〵一室はつかに丈にみたざれども、花一筒に四季をこめたり。依てひとりおもふ。

　齡延枕上盧生夢
　蝶舞枕邊莊子魂

咽をかまくら街道といへるは、天下老和尚の頓坐(挫カ)也。我久しく病勞れしそがらへに、彼街道ふさがりて苦痛する事十餘日、夢となくうつゝとなく今は葛のほそ道のほそきかぎり、命にかゝるものとては、はつかに露のうるほへるのみ。

冬ごもりうき世の道はたえ〴〵に
降は雪よ起返るちからむづかしや

　感慨懺愧

あたゝかに着て耻かしや年忘
おもひ出していふ事なかれ年わすれ

　賀初老

とし忘れけふ白髪の仲ま入
なやらふや今宵しのぶの戀もあらむ

　遙見簾前士峯

年忘れ不二をとりまく坐敷哉
歳の暮隱者かたぎの耻かしき
年迫て風大虚(おほぞら)を鳴らすかな
としのくれ鏡の中にすわりけり

拾遺

　佛仙
　都の冬集序

北海に一仙あり。常に舌頭に有聲の花をあらはし、牀前無形の月を照らす。時に高吟舞踏して西に走り又東す。こも〴〵市中の優游にまじはりて他の風詠を甘じ、猶長安に入て宏く麗景にとゞまらず、熱燗三盃引かたけてついと飛揚す。しりへに一冊子を残せり。とりて周擧はじめに賛す。

　蒿里歌

夜半の鐘の　おと絕て　めにみる
よりも　霜の聲　きく耳にこそ
しみはすれ
　友ちどり　呼子鳥　都鳥　はかな
　し　はかなしや　みやこ鳥
きのふ墨水に杖を曳て

柳條に月をかなしび
けふは杖を黄泉に曳て
弘誓の棹歡に遊ぶかし
　夜半の鐘の　おと絶て　むなしき
　梵を　まつのかぜ
聖護院の杜の空巢には
友鳥こそまどふらめ
難波江の芦の浮巣には
友鳥こそわぶらめ
　わぶらめやいた〳〵し　伊丹のい
　めぢいた〳〵し
　さらでだもしぐれの雨は降ものを
　心に雲の行かひて晴ぬは誠なるか
　も
友ちどり呼子とり　あゝ都鳥はかなし
や　都鳥はかなしや

石吳夜半亭几董

森川の東涯にひとつの樓あり、單嶽と名づく。山は青き程に隔り水は長く其終を盡し、楓村の烟は征客の蹤をかくす。尾越のわたり、駒墳の漁舟、寸馬豆人おのづから畫中にあそぶ。遊ぶ友乏からず。今宵は水上の月に清興あらせんと、酒携る僧あれば、佳肴を器にす俗あり。糸あり、竹有。三舟の才待におそしなどさゞめきあひ、一葉をうかべて千里に游むとす。あらうたて、雲のはたてのむら〳〵とうちしらみて、雨聲しきりに川づらを這ひのぼれば、進をまた單嶽にうつして

筏士にとへば遠山も雨の月

世繼集小序

煙客を率て十洲に游吟をおもふものは、湖東日野の梨丈ぬしなり。頗抜煙弁月の士、常に清響を叩て悟とす。此春齡老のはじめにかすまへられしより、遠近交游の文音同鄉忘年の友生、毛伐洗髓をもてほぎごとをよす。其辭嘹〻として鳴鶴穿雲の聲あり。餘韻あやなる哉。あやをあやとして一卷をあみあらはし、是に名あらむことを告ぐ。おもふに始あるものは必後なからんや。猶一紀にあふごとに此卷の後へを繼出さば、さながら壽に從ふなりとすゝめて、世繼集とよばしむ。おのれ曉臺、鳴鶴穿雲の聲を合せて龍門の南窓にかく書。

今はむかし、先師机下に一冊子あり。こは折にふれたる自詠を筆し、或は門人等打聞まゝにしるしおけるを、ほど遠き朋がらは見聞のつぶさならざる事をうらみ、あながちに木に彫む事を乞侍れど免し給はざりしを、師遷化の後程なく三傑集に、何くれと是がなかばを出せり。剰うち聞のわいだめなく、頗誤りつたふる事、三に一ッは師の本意を失へり。今其誤を正しさとさしめむと、天地の二巻を著す。但古く冊子に出たるは、おほやうは再びせず。且かゝなたこなたに落散所の句も又鮮なからず。こはより／＼に渉獵して、もれたるを掬ひ遺れるを拾はゞ、再び豁然として彌全を得むと、

暮雨臥央しか云

文化六年
己巳仲秋日

書林

名古屋本町一丁目　風月堂孫助

同　本町七丁目　永樂屋東四郎

同　本町十丁目　松屋善兵衛

半化坊發句集

風曉夢を破て、遊子關を越んと聞へしも、實や我半化翁も、其はじめは中頃の風に遊び、加の淺野川の二夜庵に三とせあまり結びたる夢も、古調の爲に破れ、終に深雪ふる越路に立出て、

苦しさに休めば蚋のたかりけり

姨捨や石に置身も月のため

漏さるをたのみぞ雪の鷹かぶり

など風吟し、客中に年を越て、霞たつ春は都の花にうかれ、ほとゝきすの一聲は淀の渡りに聞、月の淸きには須磨の浦をたづね、橋立の詠には無季の格もしからんと、

橋立や守神なくば波越ん

かくいひ捨て、暫く此邊りになん周流せられける。とりが啼あづまの方もしたはるゝ折からは、甲信の音信に笠をかたぶけて、此間に年をかさね、ふたゝび武城に二夜庵をいとなみ、漂泊の勞を養れけるが、例のうかれ心より、しらぬひの筑紫がた見まくほしと、又もや都にかへり給へば、したしき人ゝの杖をとり笠をかくすに任せ、市中に居をしめられしが、名利のさはりもあればと、東山にかくれて、故翁の、

柴の戸の月や其儘あみだ坊

と聞えしさびをつぎて、南無庵の古しへを慕ひ、其地に芭蕉堂を結び、閑ならん事を願ふといへども、門人遊子日々につどひ來り、閑居のいとまもなきに、うかれ神の立さらでや、ある日は湖邊に吟ひ、或時はいせ路をたどりて、何ひとつ書集たる句もなかりしが、年頃よみ捨られし種々を拾ひつゞりて、好士の爲にもやとおもふ折ふし、予か同友の車蓋、東行脚のかへるさ、四山に一嚢をひらき、師の句ある事を告る。そが中に、

三ヶ月の片羽でありく浮巣哉

仰向て水のうら見る天の川

宵闇沈々眠らんとすれば月我にてる

星石と成秋天高く風あるゝ

是等の舊作をはぶくといへども、ともに聞知れる句をかぞふるに千餘章に及ぶ。しかはあれど、多きは紛るゝ事もあらんなれば、纔にあつめて、滿ればかくるのことはりもあればと、餘は後篇にゆづるにはしかじと、

四山亭の嵴水禿筆をふるふ。

于時天明丙午春

半化坊發句集 上

立春

狐狸屈仙ニ一樹有。其大ひなる事は

海も山もみな下蔭やはなの春

元日や此心にて世に居たし

元日と思ひの儘の朝寝かな

見る物は先朝日なり花の春

元日や松静なる東山

正月や三日過れば人古し

正月や皮足袋白き鍛冶の弟子

當年は東西に行脚の志有ければ

我恵方多し松しまいつくしま

梅

梅が香やおもふをなき朝朗

梅咲や藪に捨たるすみだはら

山蔭や畑の中にむめの花

折盡す鬼もなき世ぞ野路の梅

軒の梅彳ば犬の吼にけり

村はしや竹につらなる梅椿

日の影や我肉ゆるき梅が下

夕暮や飼猿下りて梅の月

梅の月消へて窓もる匂ひかな

折音は誰ぞや寐覺に梅匂ふ

梅咲て門は海老やくにほひ哉

臥龍梅

角たれて香に眠る梅の形かな

若菜

若菜野や赤裳引づる雪の上

筐もる雪も若菜の野末哉

鶯

黄鳥や起れば枝に狂ひ居る

鶯やひとくと啼て籠の内

朝朗去年の鶯啼にけり

黄鳥の鳴かで來にけり臼の上

鶯やうぐひす來啼餌摺鉢

うぐひすや谷の下音を聞初る

黄鳥の初音聞らんほとゝぎす

松

靜さやゆふ山まつの若みどり

あらしにも直なる松の綠かな

柳

靑柳や酢賣の潜る門の内

釣人の蚓堀けり柳かげ

舟留て語や嶋の柳かげ

透し見る舟景色よし江の柳

二本、の柳吹結ふ風情かな

遠里や柳一もと打曇る

霞

海の日の半見るよりうす霞

山霞み海くれなゐのゆふべかな

春の雪

都邊や小袖に消ゆる春の雪

春もまだむなしき雪の田面哉

日晴ては燃るがごとし春の雪

春の雪仰向うちの眺かな
白波となり行磯の雪解哉
雪解迄は往來の踏し野竹かな
雪消へて麥一寸の野づら哉

春風

春風に雪踏ぬらすや東山
はるかぜや草木に動く日の光り
春風や肩に乘子の鼗(ふりつゞみ)

春日

春の日や夕賑ふ海の幸
春の日や鷗ねぶれる波の上
脱捨し田簑に春の日影哉
薪盡て門を出れば春日哉

雉子

草による駒驚かす雉子哉
顔かくす雉子に日のさす野中哉
何事の寐覺なるらん夜の雉子
聲たてゝ水飲む谷の雉子かな
雉子啼てさゝらなき町としられけり
目を覺す雉子も有らんきじの聲
曙や里はくだかけ野は雉子
飛退て雉子啼けり野べの杭
雉子のみ曇らぬ雨の野面かな

雲雀

月に啼心はなき歟夕雲雀
雲雀啼て三つの光も見る日哉

駒鳥

駒鳥の日晴てとよむ林かな
高〳〵と駒鳥啼けり夜の松

蛙

月の夜や石に登りて啼蛙
山里や盥の中に鳴蛙
並び居て鍬にかゝるな田の蛙
腹動く蛙にうつる夕日かな
蛙啼田の水うごく月夜哉
夕雨や水田溢てとぶ蛙
山もとや蛙啼江も家の間
むし追て日南へ出たる蛙哉
今土を出てまじ〳〵と蛙かな
蛇は串にさゝれて啼蛙

地虫

行とゞく春の日影や虫の穴
今出し地虫哀れめ道の中

蝶

風止て蝶の出て來る野原哉
木々小草いろ〳〵の中に黒き蝶
ぬるゝ日をそこねもやらず蝶の羽
蝶飛や小狐狂ふ岡のはら
日の影や眠れる蝶に透通り
川波やあやふく越る蝶も有
道のべや馬糞の胡蝶花の蝶

陽炎

陽炎やはかなきと見る人もなし
かげろふや消へてはもゆる波の隙
陽炎の外は動かぬ景色哉
かげろふは眠る狐の魂なる歟
陽炎の跡に氣を吐守宮(やもり)哉

陽炎や黒きをもゆる灰汁の槽
糸遊によろづ解行都哉
糸遊の亂〳〵て靜也

朧月

興盡て山下る森の朧かな
朧夜やみなあらはれし月ながら
有明や朧は消えて立烟
春の夜や月に移れるさゞれ波
おぼろ夜や淡路の灯岸の松
築地より風匂ひけり朧月

春雨

春雨やのたく〳〵歸る孕鹿
春雨や土あらはれし北の山
春雨や編笠着たる物囉ひ
春雨や曉晴て花一つ

涅槃

古寺や泪に兀るねはん像
かゝる世に出ても說す涅槃像

蜂

六尺の人追ふ蜂の心かな
似我蜂や己が姿もかへり見す

田打

鋤鍬も今を春邊の田面(畑カ)かな
艸〳〵の根を逆さまに田打哉

春の雁

つく〳〵と海見て居るや春の雁
砂はむと浦人いへり春の雁

堅田に至りて、故翁の吟をおもふ。

病雁も殘らで春の渚サかな

猫戀

一ッ家の猫も啼ゐる春邊哉
けふははや忘れにけりな猫の妻

菜の花

菜の花や遊女わけ行野の稻荷
菜の花や千里をくまに咲續

菫

うつくしき道有世也すみれ草
菫野やいざ胡坐して笛籟ん
ぬしや誰垣よりうちも菫のみ

鳥巢

鳥の巢となしけり妹が髮の落
鳥の巢や或は木葉への蔭
鳥の巢や梅うのはなもしらぬ內
こゝろこめて巢作る鳥歟茨の奧
鳥の巢やひとつ太きはほとゝぎす

桑子

我儘に這はで飼るゝ桑子哉
太布の袂に馴るゝ桑子かな

櫻

櫻咲これぞ和國の景色哉
入山の櫻咲たつ朝日かな
御車や櫻が下の牛の聲
根をよけて火焚ヶ櫻に狂ふ人
世を捨る山陰もなきさくら哉
行暮て櫻にむせぶあらしかな
醉覺て起れば月の山さくら
したはしきものや櫻に白拍子

磯山や櫻過行釣小舟
雨の日や旅人越る櫻山
散かゝる櫻抱けり酒の醉
戻りなば人にも告ん初さくら
糸ざくら身にふるゝ日はあらし哉

知恩院に至りて

町中に櫻分入るや知恩院
散さくら我醉顏に冷たかれ
散果し櫻に啼や山がらす

御室にて（二句）

櫻にも人にもうつる心かな
我〳〵も花に袖する御室哉
一日もかけずに來てや散さくら

はじめて花供養いとなみて

活て居て望の日の花備へけり
櫻咲さくら散つゝ我老ぬ

芭蕉堂にて

時なれや花の中なる翁堂
花戻り錢落したる坊主哉
夕暮や花に猪追ふ嵐山

ふたゝび嵐山にいたりて

花に並ぶ松風光る夜と成ぬ
雨そほ〳〵花の梢に猿の尻

故翁の吟を思ふ

湖てるやまた吹入ぬ四方の花

脚下清風にまかせて、東關の方に葛坡君を携ふ車蓋を送る。

道のため花に寐初よ岩まくら
いろ〳〵に見するを花ぞ不二の雲

山吹

山吹や終には流す花のかげ
山ぶきや花ふくみ行魚もあり
やまぶきの花の下ゆく芥かな
やまぶきや暫しかけ置洗ひ衣

躑躅

逆さまに咲や端山の花つゝじ
夕山を根こぢて戻るつゝじ哉

雜

若草や臼をころがす翁有り
柴垣や匂ひゆかしき蕗茗荷

（「芭蕉堂三代集」夏之部に組入れたり）

藪かげに延過しけり蕗の薹
青海苔や葭簾に付し蜑が軒
春の野や烏うつ人に我らとき
鞘赤き長刀行や春の野邊
川越て鳥の見てゐる燒野哉

川中島にて

川しまやつばな亂れて日は斜

兩國なる遊水樓にて

橋長し人多し實春日哉
ゆふべ〳〵靜まる春の心かな
驚かぬ風渡りけり春の暮
海棠や戸させし儘の玉簾
隱家や梨一もとの花曇（盛衣）
岩端や五六寸なる藤の花
摘〳〵て人あらはなる茶園哉
田樂に土焦したり春の庭

旅人の米ほしがるや里の春
大津畫の鬼も佛も春邊哉
夕川や鱒にうたれし獺の聲
櫻過菜の花越て金閣寺
鷄のよごれ來にけり春の水
あかねさす藪を出けり春の水
底のなき柄杓流れて春の水

留別

いざ行ん魂花に染(消カ)るまで

濃州に訪れて

春雨や老鳥は塒に眠るのみ

留別

ほどもなく又歸り來ん彌生山

桃里亭に杖をとゞむる事三度

留主に來ても居よき花の軒端哉

養老亭に遊ぶ事三日

起ふしに眺る春の野山かな

棧谷亭を訪ふ

鳥啼て谷間も春の木立哉

眞蝶が本腹（復）を賀して

春の日や風におそれぬ床ばなれ

病中の吟

痩骨に梅が香うつる朝かな

夏

更衣

拔し綿や鼠の巣ともなさばなせ
寐て見れば蟲のかたき袷かな
晝過や何もせぬ身の更衣

客中更衣

きれ〴〵の綿流さばや衣がへ
更衣我にも着する主かな

初夏

産湯かけし佛にうつる朝日哉
九日の躑躅しはなし卯月かな
高からぬ花となり行卯月哉
蚊の聲もうつ心なき四月かな

旅行

山陰や蕗の廣葉に雨の音
青葉若葉下は玉ちる岩の水

時鳥

晝も啼里には聞ずほとゝぎす

伊勢にて

蘆原や神代はしらずほとゝぎす
時鳥啼戻りけり山かづら
ほとゝぎす古き言魂思ふのみ
待甲斐有二羽啼過るほとゝぎす
郭公聲有かげの地を走る
ながなけとおだまききくる賤杜宇

谷汲山に登りて

俳諧の羅漢ならべりほとゝぎす

室の津

室の津や千舟啼越すほとゝぎす
我がわれをうらやむ去年の時鳥
ほとゝぎすなかでさへよきに鳩の海

閑居鳥

大寺や京に來て啼閑居鳥

胸をうつ思ひぞ旅のかんこ鳥

山もとや市にきこゆるかんこ鳥

啼幷ぶ友どりいかに閑居鳥

閑居鳥ましらも叫ぶ小雨かな

いまだ白頭の雲水にもあらねば

なまなかに耳も聞へてかんこ鳥

蚊喰鳥

雨の夜や軒下かける蚊喰鳥

牛吼る窓飛さるや蚊喰鳥

牡丹

花にまけて花も俯向牡丹かな

白牡丹只一輪の盛りかな

芥子

二三本芥子作りけり弱法師

散にけり芥子のみに吹風も有歟

白芥子の花透朝日夕日哉

まだ咲ぬ芥子倒しけり杜賣

芥子咲て狐の娵入月夜かな

（『三傑集』『芭蕉堂三代集』共に「まだ散らぬ芥子倒しけり階子賣」とす）

百合

星の夜も月夜も百合の姿哉

百合の花晝の姿はなかりけり

俯向し百合に雨降垣根哉

荵草

荵釣（つる）軒に寄添ふ女かな

釣荵いづくの岩を離來し

嵯峨も今酒賣軒の釣荵

葎

古寺や葎の下の狐穴

隣にはかなぐり捨し葎哉

小北山にて

聲あはれ葎の奥の梓弓

葵

くれ行や日陰の葵花直し

口に動く葵まばゆき寐覺哉

髭づらに葵かけたる祭かな

神の葵地にかへされぬ後安哉

若竹

竹子や月を左右へ吹なびき

竹の子もほど有らじ土のわれにけり

篁やわけて今年の色緑り

若竹やふしみの里の雨の色

今年出し竹もかたまるあらし哉

節句

十万の軒やいづこのあやめ艸

洛中節句

四辻や匂ひ吹みつあやめの日

分越し笹を粽に見る日かな

夏艸

夏草や所〳〵にはなれ駒

奈古眺望

夏艸もはつかに浪の汀かな

川中島

川嶋や夏かれ草に鳥の糞

五月雨

さりながら雨くらからぬ五月哉

ひた〳〵と若物身につく五月雨

漸行て又登りけり五月雲

山寺や軒の下行五月雲

田植

田植歌中〳〵古き詞有り

蛭游ぐ中にも馴て田植ける

蝸牛

登りつめて落たり竹の蝸牛

道渡る式部が筆やかたつぶり

火串

角も牙も今朝哀なる火串哉

暁は土にも入火串かな

水雞

敲ともきかじ野川に啼水鶏

溜池や漬木のうへに水鶏啼

暗は水門潜る水鶏かな

仰向て啼か水鶏も月の下

螢

更行や螢地を這ふ町の中

草うてば螢亂るゝ古江哉

飛螢舟に扇を揚にけり

碎よと打ざるものを螢かな

蚊

關東の子の門に泣ゐる蚊遣かな

釣侘て水にぬれけり舟の蚊帳

蚊の聲のむら竹洩るゝ烟りかな

蓬生や君がためとて焚蚊遣

下蔭や紙帳の中に鉦の音

水鳥の巣

つゝかれる迄魚のよる浮巣哉

ゆられ〳〵終には鳰も巣立けり

夏虫

片羽燃て這あるきけり夏の虫

筆留て打拂ひけり火取虫

蟬

はつ蟬の今這登る榎かな

所〳〵啼さす蟬に照日かな

蟬啼て杉にも脂の流れけり

團

軒に立て裾叩ゐる團かな

水うつてあふぐもよしや渋團

兩國にて

金銀のうちわつらなる小舟哉

日の影をおさへてねぶる團哉

川狩

川狩や君と匍匐岩の上

川狩や魚串立る石の間

鵜

つく〴〵と鵜の留りけり魚の簄

鵜の面に川波かゝる火影哉

晝貌

晝顔やきのふの花は日に焦れ

晝がほや花吸ふ虫も飛かへり

晝貌は日のそみかゝる色なる歟

夕顔

夕顔や花より外はわきがたき

夕がほや無似氣人の里わたり

夕がほや鼠の傳ふ軒のつま

涼

あら涼し眠るためなる月の下
ひとり居れば涼みの留主も涼しけれ
涼風に眠り上戸のうねりけり

暑

ほくち搗臼のわれのく暑哉
暑き日や降ゝばふるぞと云ながら

雑

目覺けりうつゝに打し顔の蠅
幽蒸や身をかざるべき事でなし
夏川や馬繋おくみをつくし
夏川や岸に漁火の燃殘り
夏川や笊抱へてゆく女
戀に川渡りけり夏の月
馬柄杓の錫そゝぎ行清水哉
大木を見てもどりけり夏の山
たぐひなく夏の山水を見る日哉
神子村や栫の下の紅のはな
右左四角に廡の茂みかな
丹波路や綿の花のみけふもみつ
君とよむ竹にも啼やぎやう〱し
夏の夕吹倒さるゝ風もがな
日盛りや半ば曲りて種胡瓜
山かげやふるめ童の蓬つみ
水無月や屋根なき舟に身を焦シ
水無月の限りを風の吹夜哉

草津にて

六月やいたる所みな溫泉の流
溫泉はあれど六月寒き深山哉

溫泉の瀧

溫泉も涼し我はた走る瀧の月

日光中禪寺

あら涼し四十八湖を渡る風

同日光（二句）

蚊も喰はで慈悲心鳥の鳴音哉
日は更に月もかゞやく山涼し

うらみの瀧

ことによし裏みて潜る夏の瀧

室の八しま

煙たへて久しき宮の茂り哉

親しらず

親しらば通さじ夏の海ながら

甲斐しら根

百里來し甲斐有夏のしら根哉

禪林家

心すむ水有うへに夏の雨

禪林

降にあらず消ゆるにあらず夏の霜

白山奉納

神の柞雪の麓に茂りけり

江の島

嶋涼し汐うちあはすうへの月

戸隱

此山や夏のさくらに夏の雪

淺間

夏は猶もゆるか雲の淺間山

殺生河原

暑き日や蝶鳥落て石黄ミ

留別（二句）

炎天のくるしき數を便りせた

風薫る所〱に寐て行む

遠人を訪ひて

風薫る奥の木立は何〱ぞ

越の雪嶋の遙なる斧久の日光に住けるを尋て

夏は猶思ひ増らん雪のしま

日光にて身まかりける大路をいたむ

なき跡に散るわくら葉を見る日哉

半化坊發句集 下

初秋

何となく秋も一日過にけり

とく起て鼻ひる僧や今朝の秋

深艸にて

秋立や店にころびし土人形

秋もまだそことしわかぬ夜也けり

七夕

今宵なくば石ともならん二ッぼし

年〱に思ひ増らんわかれ星

またるればまたるゝもの歟ほしの戀

星の戀空には老もなきやらん

僞の世にまつられて二ッぼし

灯籠

切籠消えてあなめ〱や草の原

露わけて切籠結ぶやうなひ松

夕晴や切籠提行京の町

玉祭

夢に見るも魂棚近く寐し夜哉

有時はあるのすさみにして、隔りがちなるうち、世を去し妻の塚に詣て

腹立る顔でも見たし玉祭り

送り火や埋れ寂石のまだ煙る

桐亭を訪ひて

息災な我も來にけり玉まつり

かのなき魂ならばかへらんと詠ける、あはれなど思ひ出て

死なで歸る此夕暮に蓮の飯

蟻の來るばかりぞ墓の瓜茄子

朝顔

葬や手拭提し花見達

土に遣ふ朝顔は猶哀なり

朝顔や淋しう寐れば起安く

朝貌や同じ心の友も來ず

（『芭蕉堂三代集』は此句を蒼虬とす）

凋までは朝顔だにも見ざりけり

萩

萩に葉に花の付たり雨の萩
垣荒て犬踏分る小萩かな
押花となれり猪の臥野邊の萩
捨石に花うつ萩のゆふべかな
散にけり咲にけり萩の動くうちに

旅行

萩はらや花身に付けて分出る

荻

荻の聲舟は人なき夕べ哉
波越や雫ながらに荻の聲

薄

夜あけや薄がもとの道者笠
半散る尾花吹やむ月夜哉
取付て地に付鳥や薄の穗

木槿

露の木槿おもへば朝も哀也
禰宜達は何觀ずるぞ木槿垣

艸の花

雨の野や人もすさめぬ女郎花
折て見たり捨たり道の艸の花
山もとや馬脊の中に艸の花
武藏野や雲に咲入る艸の花

露

しら露やうつくしき夜と成しより
椎の葉に露のみ盛りし旅寐哉
谷陰や草より下の松の露
露ちるや桂の里の月の音

霧

傘さして霧分行や山法師
朝霧や濡て起行野邊の駒
舟漕や薄霧洩るゝ火はいづこ

稲妻

稲づまや靜ならざる秋の空
稲妻やよく寐る人の草まくら

秋風

秋風や酒の過たる顔もなし
星多き夜はつよからず秋の風
秋風や山邊に動く火の青き
松杉の常盤も秋は秋の風

鳥羽の浦に至りて

秋風や浮身を波に走りがね
秋風にしら波つかむみさご哉
秋風や蜑の呼聲楫の音

あふむ石にて

秋風やうきはうつらぬあふむ石

虫

埋もれて啼や芥のきり〳〵す
いとゞ鳴地を吹にけり夜の風
折〳〵や藻に啼むしの聲沈む
月消へてむしはあらしの下音哉

羅生門の邊にて

簑虫の鬼の子も見ぬ九條哉

雁

月ひら〳〵落來る雁の翅かな
はなれじと呼つぐ聲氣闇の雁

仰向てまづ風情也雁一羽
あれほどにひとしきもの歟天津雁
天津雁小田に見る日は亂れけり
夕暮や啼過る雁小田の雁
初雁の痩て餌をはむ磯田哉

稻

風流も先是からぞ稻の花
見ぬ人のためにもなるや稻の花

湖のほとりにて

植たしや稻葉によするさゞれ浪
見人もなき月の田毎を刈身哉
夜田刈や明て休らふ身でもなし

瓢

今朝からは土に付けり種ふくべ
莖ながら瓢を叩く童かな

月

けふの月空はかぎりもなかりけり
明月や座頭の妻のかこち顔
海原や目のをよばぬを月の隅

良夜の雨

月こひて雲も百度見る夜哉
恨まじ月の桂の花の雨
今宵なれや月にむかふも月の上
名月や入山までもたどりつく

阿漕が浦にて

月に猶哀あこぎが海の底

再び此浦に來りて

十六宵も月に阿漕はなかりけり
十六宵や山にむかふて眠るうち

野分

戸明ば月赤き夜の野分哉
海山の中に野分の庵り哉

砧

吹すれる竹の奥なる小夜砧
薄月や水行末の小夜ぎぬた
松風やきぬた幽に谷の里
浪高き夜や衣うつ蛩が軒

客中

身のうへも人にまかせて砧かな

川鹿

つたひ來し石の下より啼鰍（かじか）
聲かはす鰍隔る早瀨哉
釣人にならびて川鹿聞夜哉

鹿

啼止て鹿二ッゆく谷間かな
岩端にいとゞやつれて雨の鹿
山里や軒に來て啼夜半の鹿
聲絶て足音近き小鹿かな
數十疋峰越ゆくや晝の鹿
見廻して又啼にけり月の鹿
山はなやたちかへりつゝ鹿の鳴
こがれ來て水にも入や谷の鹿
啼絶て鹿のつくばふ夜明哉
小男鹿のよび下る月の尾上かな
耳立て啼音にむかふ男鹿哉

鳥

秋も(はカ)猶鴫のゆふべぞおもはるゝ

うづら啼野を走りけり赤鼠
木つゝきや何の味ある山木原
百舌啼て風腥き木の間哉
日のさして鴫の贄見る薬裏哉
風に猶あとなき鴫の印かな

雞頭

鷄頭は動きもやらず臼の音
鷄頭や極のためとて打たゝき
鷄頭に秋の哀はなかりけり

菊

菊の日や盛りは後の事ながら
千世を經し古根も有らん谷の菊
作り倦て今年は菊の山路哉
菊の酒醒て高きに登りけり
綿とれば菊となりたる朝かな
一尺の菊の花見る浮世かな
むさぼらぬ花の價や市の菊
酒瓶に興じ入けり菊の花

後の月

十三夜と見初しもかくの空ならん
我衣に洩る思ひ有り後の月
後の月水を束ねしどきかな

木實

雨毎に澁や抜なん柿の色
青柿の落盡しけり谷の坊

孛生のうらなしと詠る邊にて

有なしの實にも齒のなき翁哉
秋の暮片枝の梨も落盡す
守人なき木の實はみけり山烏
我ために椎を器にもる山家哉

壽山亭にて

命永き樹や殊更に實を結ぶ

露時雨

露しぐれ時雨し跡の照る日哉
折さして枝見る猿や露しぐれ

秋雨

秋雨やけふ菰槌の鉈作り

或寺に老僧の佛彫居けるに

秋雨に焚や佛の削ゥ屑

四山亭に遊びて

秋雨や追出す晝の濡鼠

紅葉

紅葉〻や雲の下てる高雄山
紅葉見や顔ひや〳〵と風渡る
紅葉散て竹の中なる淸閑寺

長岡に至りて

長岡や蔭行我をてる紅葉
山里や烟斜にうすもみぢ
水銹江やうへは柞の薄紅葉
ほの見るや岩にかゝれる蔦もみぢ

さし出の磯

黄昏や水にさし出のうす紅葉

雜

むら端や黍がら折て風さはぐ

穂屋の祭に至りて

御射山やきのふは薄けふは里
刈萱はまことに秋の花なるぞ

石山

雲霧の袖に入や南嶺山

磯邊にすゞて

穂薄よき秋に鶴聞宮居哉

酒折の宮もほどあらざれば

火ともしの神もめづらん月今宵

永き夜や目覺ても我かげ斗

卯辰山麓にて

艸の實や空しく土と成ばかり

花の香や桔梗にうつる人通り

飛鳥山

秋の日やたることなくて飛鳥山

卯山眺望

山もとや櫻にかゝる秋の雲

角田川

聲も立ず野分の朝の都鳥

行秋や見歸れば舟の跡もなし

留別（二句）

名殘多し秋もよし田を出る時

散にけり柳結ぬる時なれば

夕雨や奥野ゝ里の忍艸

（夏季なるべし）

剃髪

剃捨る白髪に露のうく日哉

髪をおろして間なきに

剃れ敷のつよく、さしけり捨坊主

旅行

終に身を啼破るらん秋の蟬

草臥て月にも啼す旅烏

布施の海

いにしへも月いにしへも布施の秋

葦小屋の火にもならぶや溜り水

越中馬見井

只ならぬ蹄の跡や水の月

南坡庵を訪ふ

おもしろき庭や花野の中舍り

けふや仲春下のまねきにしたがふといへ共、眠るのみ餘事なければ

木兎や何きゝためし事もなく

（「芭蕉堂三代集」此句を冬之部に組入れたり）

留別

便せん月に二見の硯石

過去し素然、夢に發句を請けるに

なき人の發句きゝけり秋の雨

小町有り式部ありて、をみなの才ある國なりければ、今もまなばゞなんぞおとる事のあらじと見へ婦人に送る。

筆取て千艸の花におくるゝな

稱月亭にまねかれけるに、酒は常の産にして、菊は主じの愛する所なれば

流るゝも酒の泉歟菊の奥

高野尼村にて椿の直なるを見出し、主じに是を望むに、こゝろよくあたへければ

杖に切て實は捨て行椿哉

鼓が浦

くれ行や鼓が浦も秋の聲

斗墨庵にて

秋風や川邊の庵に老二人

東溪亭にて

枕して紅葉見初るうらの山

冬

時雨

朝日や日の行ちちを夕時雨

初しぐれ日にふれ身にもふれにけり

驚かぬ網引のさまや初しぐれ

時雨ゝや角まじへゐる野べの牛

時雨ゝや竹かつぎゆく鳥羽繩手

時雨ゝや牛に付たる油筒

行雲のはし亂ツヽ初しぐれ

土山や唄にもうたふはつしぐれ

神祇釋敎といふ題にて〔…〕

御首てる正面通りしぐれけり

しぐるゝや宮に兀たる鬼女の面

凩

こがらしや日の梟の地に羽うつ

木枯の中に靜けき朽木哉

木がらしや西山淺く夕附日

枯野

かれ〴〵し野中に松のあらし哉

枯て猶淸き野守が鏡かな

冬木立

捨果し景色でもなし冬木立

此うへは折るゝばかりぞ冬木立

雲起る谷の上なる冬木立

炭

きり〴〵す振落しけり炭俵

何事もいはず炭賣翁かな

千鳥

聲立て氷を走る千鳥哉

住なれし人はよく寐て小夜千鳥

貫之のうき旅ゆかし啼ちどり

驚かれて朝日に眠る千鳥哉

水鳥

水鳥や何はなくとも夕ながめ

浮寐鳥岩に身をうつ夜もあらん

月澄や音なき水に浮寐鳥

霜

霜滿て竹靜なる夜也けり

初霜の木に葉撥(搔カ)捜し百舌鳥の啼

山里や焚木の霜のもゆる音

赤〳〵と霜氷りけり蕎麥の莖

橋の霜誰が落してや炭二ッ

妙義山

白雲や麓は岩に霜柱

岩鼻にて

霜氷る岩の下道踏出かな

四條川原にて

ならはせや霜夜を斯く鷹かぶり

氷

更行や氷を渡る猫の聲

折沈む竹のうへなる氷りかた

氷澤

切くだく上は氷の砥山かな

氷りけり實のらぬ稲の臥しまゝ

我門にひとつの駒を得たり。千里の行先を蒔く。

氷にもおくれはせまじ駒の聲

衣が崎に至りて

かく見るは氷らぬうち歟浪の不二

諏訪湖

不二見んと氷に立や諏訪の海

星きら／＼氷となれるみをつくし

雪

白妙は遠山而巳ぞ小雪ちる

薄雪やまたかたちよき峯の松

所／＼雪の中より夕けぶり

おなじ色を重／＼て雪の山

更行や雪に羽叩く鳥の音

田のうへを啼迷ひけり雪の雁

住ばすむ事ぞ谷間に雪の里

沈むほどは積らぬもの歟雪の舟

猪の倒ふしけり雪のはら

角振てあゆみもやらず雪の鹿

雪ちら／＼日に降暮て月に降

此ために根はしがらむか雪の竹

北山は小雪散らん軒端吹

夕暮や雪を抓て枝の鳥

北の雲黒きより雪の降初る

見るうちに降うしなふや雪の梅

曙や所／＼に雪の塔

舞扇雪にかざすや下川原

日頃見し松も深雪の高根哉

其雄に訪れて

踏分て何見る人ぞ雪の山

文鶏亭にて

閑さや垣の外なる雪の舟

留別

旅てたつ日も遅し雪の山

安田の綱渡りにて

降ふるや雪をたぐりて渡し守

鉢叩

いかならん祖師の心ぞ鉢叩

鉢叩月下の門をよぎりけり

竹買に來た親父也鉢たゝき

臘八

臘八や今に迷ひを傳へツヽ

臘八や仰向ばはや星もなし

冬の月

たゞひとりすめる景色や冬の月

寒月や狐なが啼地に倒る

車蓋が門戸を叩きて

寒くとも戸さすな庵の松の月

雑

枯蘆の日に／＼折て流れけり

かれ／＼や竹の中なる草の莖

歸り花一輪をしむ薪かな

更行や机の下の桐火桶

こつ／＼と咳する人や紙衾

橋やことにをかしき野夫の様

日影もる壁に動くや冬の蠅

矢田の橋の邊にて

冬の野や何と臥べき艸の莖

素然一周忌に

廻る日や雫の椽に泪そむ

留別

語り足らぬ朝戸出寒き山邊哉

一艸亭

氷柱なき軒にふたゝび入日哉

或る宿に立よりて

舍りうれし時雨乾かす我衣

甲斐より信州へ越る

數十丈見上れば岩の垂氷哉

一本岩又は天の柱ともいふ所にて

雲かゝる天の柱の冬木だち

神無月廿日あまり、故翁の潮東行脚の跡を慕ひ、日野山の邊を過るに、剃れたる身には砧の響哉 と聞へしも今はむかしにて、目出度御代のしるしなるにや。山も岡となり、林も畑とかはりて、しら波の煩ひもなき折から、紫英亭にいたりて、暫く時雨をはらす。

剃れさる身に冬しらぬ舍り哉

臘月會陸亭をとぶらひはべるに、よろづまめやかにて、日もゆふぐれになりければ

かへらむとおもへば寒しやまの庵

雜之部

目もたゆし白雲動く不二の形

つゝしまん物聞山も軒近き

江島

去がたや夕日の不二に汐がしら

中嶽

つく〳〵と岩立神の杉間哉

日光

日面も日うらも照す宮居哉

不斷櫻

咲ば散散ば咲つゝ此さくら

上諏訪

俯向て聞やふしきの神の數

七面奉納

月花に神も數有面かな

善光寺

よごれたる我にも法の光りかな

杖突坂

歩行にせん杖突坂のためし有

送別

旅はさぞ土に臥日も有ぬべし

金洞山

雲埋む岩木の下の旅寐哉

或人の宿にて

木に草に花も實も有舍り哉

車蓋、三聖の像を彫て、開眼の句を乞けるに、故翁の吟をおもひて

月花の道守初ん聖達

客中

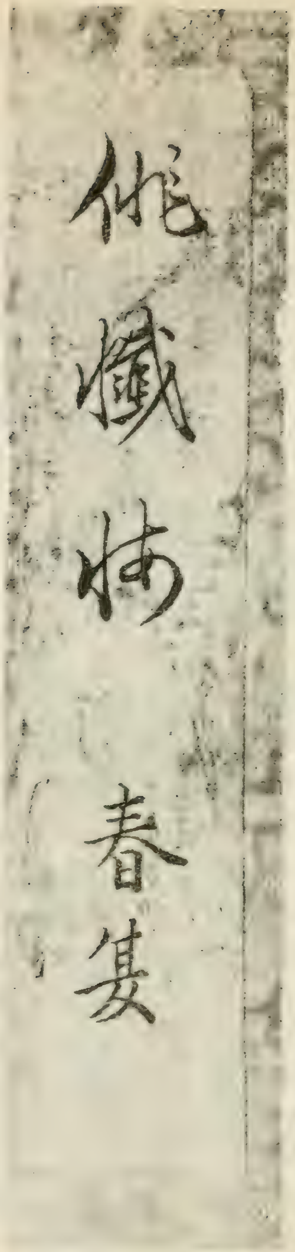
雲水やよろづに心とゞまらず

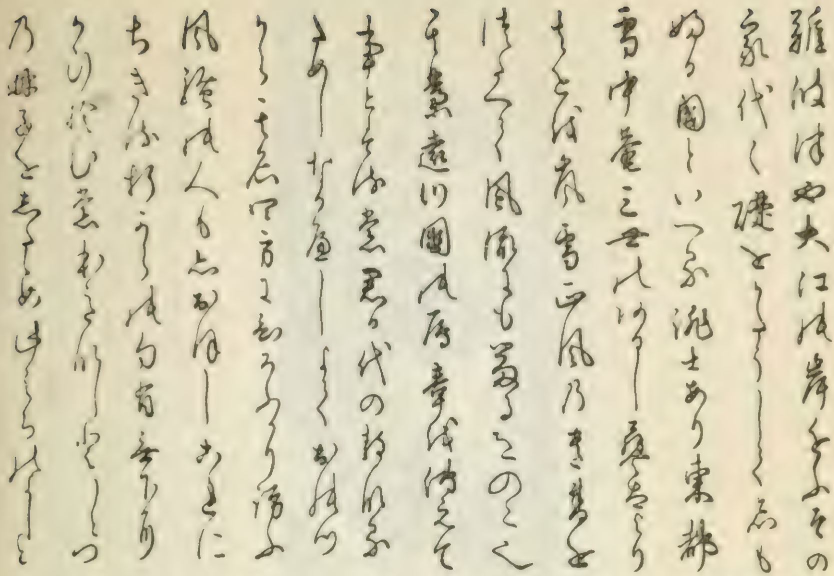
跋

天策や雁の翅の我にはあらじを、針目衣引つくろひ、武蔵野の月見まく、秋風たち初る頃よりおのがすみ所出て、武しまの清浚こゝ〳〵の人〳〵を驚かし、一夜二夜と日をなんへにけり。こゝにも我れ人十とせ余り先に社交給ひけるとなん。そが時書給へるこの頁ども見るにあやに。あやしきまで書くに、栞〳〵のさきありしを、ことゞ〳〵にかひしたして、旅寝る宿の棚つたひ、我師田の白子なる宮崎氏に立よりて、そを白樺に酒に主じ早く近頃の作や集の置れければ、さまこれほひあはせて櫻木にえりて。おのがともがらに見るとあかめや。

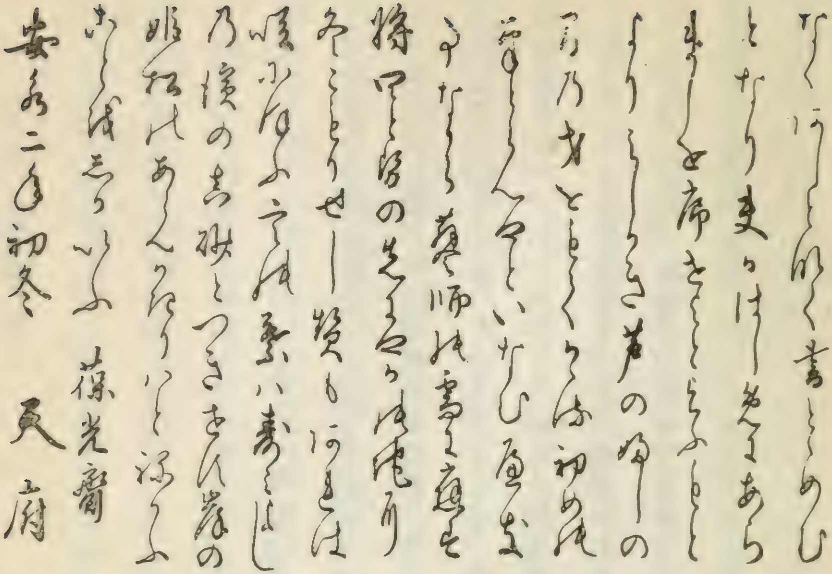
夏の樹東 書

半化發句集　後編　嗣出
半化文集　未刻　近刻　全
俳諧世說　半化房撰
天明七丁未正月吉日
皇都書林　御幸町姉小路上ル町　菱屋孫兵衛
三條通幸町西へ入町　菊舎太兵衛　合刻


春



難波津や大江の岸近ふ、その家代ゝ礎をかたうして、名もふる國といへる誹士あり。東都雪中菴三世のあるじ蓼太より、はせを嵐雪、正風の遺書をつたへて、風流にも富るをのこ也其の業遠つ國の雁章を傳えて、事とはるも君が代の靜なるためしなるべし。よておのづから其名四方にひろがり、訪ふ風騒の人も亦おほし。これにちぎる折からの句有。無下にかひ捨むも本意なしと、ひとつの册子をしたゝめ、此みちのよしとなく、あ



しとなく書とゞめむとなり。夫がはじめにあらましを序せよと乞ふ。もとよりみじかき蘆のふしの間のオをもて、かゝる初めの筆とらんやといなむべき事ながら、蓼師の需に應ず。將四とせの先にや。かの地に冬ごもりせし契もあれば、咲にほふ言の葉は、すみよしの濱の眞砂とつきせず。岸の姫松のあらんかぎりはと、ねがふことをしかいふ。

安永二年初冬　　蓀光齋

天府

俳諧懺悔文

倩、我この道にあそびしこしかたをおもふに、廿とせあまりのむかし、東武の活々坊舊室の門に入て、芥室の號をゑたれど、たゞ歳旦せいぼの二句をなすのみなりし。とし經て浪花の牛時庵勃々庵の社中になりて、舊國あるひは舊州とあらため、流行の點取に勝負をあらそふを是として、蕉門の風雅はちからなき物とのみ心にとゞめず。松露吸露又は雪中の庵主たちへも面をあはせながら、そのみちのおくをたづねさぐる事もなく、さながら天上天下唯我獨尊の思ひに、我も浪花に一人の作者也と、鼻のあたりうごめきて、廻も生なむこゝちなりしが、四とせ巳前のはる、家の業によりてみちのおくに下りしが、かの松がうらしま一見せばやと、千賀の塩釜の浦より、ひと葉の舟にさほさしてうかれ出たり。こゝや名にしおふ扶桑に三つの勝地なれば、あだに見過さむも本意なしと、かねてのあらましにて、袴羽織の禮服おこがましう氈うち敷、筆硯の調度もきよらを盡して、こと〴〵しく置ならべ、舟人に物がたらせて漕出ぬ。

頃は彌生も半過ぬる頃なれば、行〳〵さくらは梢にほころび、すみれたんぽゝは堤に咲みだれ、木の間のうぐひすも入江の蛙も、おもふ所みる處風韻あらずといふ事なし。江の中三果淅江の潮をたゝふと、はせを翁の詞も思ひいでられ、あたかも仙境に入かとばかり、やをら筆をとりて案にしづむに、風景にけおされて一句も出ず。とかくして舟は雄島の岸につきぬ。それより瑞巖寺五大堂など名だゝる處を見盡して、寺前の何がしが許にやどり、この樓に昇りて見わたせば、松どものいくとせへたりともしらぬ色なるが、潮にかげをひたして誠に笑ふがごとし。高欄に倚て硯引よせ、おもむきをさがすに、日既に西に沒し、斜影紅をなして海上又ひとつの景色を添り。江の間〳〵小舟を漕つれ、魚をわかつ聲〳〵またあはれなり。ほどなく晩鐘告わたり、もののあいろもみえず。いざ夕ぐれの松しまをと筆をとりたれど、草のうへの露もうかまず。夜も早更行むとおもふにも、又あひがたきこの夜なるにとうちも眠らで、高欄にふとんうちかけ、悠然としてもたれゐたり。折ふし廿日餘りの月のさし出たるに、磯

うつ浪の月に映じて白妙に、島〳〵の松のいろもおぼつかなきさましたる、墨繪のまつしまともいふべし。これをもとかくにおもひぬれど、一句のおもむきを得ず。春の夜のならひとて、ゆめばかりに明わたるよとおぼへて、東の方しらみてわたり、鳥の聲枝に聞え、朝がすみうちそびき、海の面靄〻としてきのふにかはる風景なり。かくて日のひかり竿ばかりにさしのぼり、霞の衣のほころびたるに、島こそひとつみえたれ。あはやとおもふうちに、こゝかしこあらはれ渡る千島の松のみどり、きら〳〵しく、名工の彫めるごとく、妙手の繪がける如し。心詞も及れず。この時興に乘じて心頭にうかぶ物あり。うつゝならず筆をとれば、

　朝霧やあとより戀の千松しま　と書終りて、よく〳〵おもふに、是は雪中庵前のとし行脚せられ、此島にあそびし句也。東都にてものがたり有し頃は、たれもいふべき事ならむと、大概に聞なし置たるが、このときの實境に催されて、心にうかびたるなり。暫〻ひとり推敲をなすに、朝霧のたちおほひたるが常ならずと賞して、五文字を

置、跡より戀の、と艶詞を加へたるおもしろさ。意味深長なる事、古人のほね折し處みなかくこそあらめ。我も人も同じ事いふとのみおぼえゐたるが耻かしさ。はじめて我及ざるを知たるも、此松島一見の德により、かゝる絶妙の境をさぐり得たるも、外ならぬ因緣にやと、このとき胸裏に雪中を師と尊びて、我をしりたるは、あつぱれの大悟ならむと自得し、江戸にかへりて雪中菴主にこの事をざんげす。師しめして曰。よし〳〵夫こそ我家のりくつをはなれたる、一路向上の風流なるをや。世塵得失を忘れて、月下推敲の句を點頭すべしとぞ。それよりこのかた花にうかれ月にあくがれ、雪に寒き日も、蕉門の意をさぐるに仰げば彌高し。去ども老若貴賤のわいだめなく、老後のたのしみといふ教なれば、こゝろを遊しむるにたれり。猶行すえの修行むなしからずば、下手の數にも入なむ。そは生涯の本懐、このみちの冥加ならむかし。

明和七年庚寅冬十月十二日

浪華荒陵山下於蕉翁牌前　回心齋　舊國　謹誌

元日やこの時人詩二万歳
元日やうたひすもたかでしづか也
そのはるめがねに眼鏡かゝせばや
元日のあそび所をさがせば
吉町の元日やこれ噂〳〵に
らまれしむかしの附にかへれど、南州のことぶき猶たのみ有。
百までは三十九年はなのはる
埜其堂可其利
唯起てかん祝けりわれが春
設けりはやかみの町しもの丁
とし玉ふおにの行衛やはつ霞
いつはともあれはつ鳥〳〵
武州鬼石綱田氏八十賀
まさ夢や浪花は梅のはなのはる
ふくわらやおくある米のはいり口
元日や二日とかゝる夕まぐれ
ひとの心をたねとして、万のことのはとぞなれりけるとは、

我生涯のみちにも當し
なにはづのはるや二日は淺か山
門松は王母に無の楽木哉
見あるかむいさ門〳〵の松の月
かど松やかゞ見のおやに物申
有感
つながるゝ三尺の世やさるまはし
さる引の友にあひたりうつの山
住吉本納良能韵進
しら鷺のかすみこぼすや松の陰
なゝ草やおやの拍子にかしこまり
七草に不二の山彦うとふ也
楓橋夜泊讃
とだへては船に聞ゆるなづな哉
雨がちに雪ふる朝やわかなつみ
きむき方に立て若菜の御供哉
袂ふく若ながすへや小まつ川
骨かへて腹立させむ妙しろ女
一キ角つねに申されしは、

好、気根、稽古の三つにくらぶれば
すきこそものゝ上手なりけれ
狩葉の師、大ばしらも宗椎も、一つれ〴〵この
歌を誦し申されし。
ほろゝうちてちらすた花のきじかくし
すみだ川にて
撫摩浪をうつて妹がるはたぞよぼろ夜に
古畫に
かゆ杖や馬の内侍をしとゝうつ
二段大根の畫
此大根人にはみせぞはつ子の日
風原畫
むめひとり咲ぬこと木はまだ寒し
時人に諂らはずむめさきにけり
武州兒玉郡佐貞寺といへるにむめあり。花五色にしてめづらし。
花さらば又いつ色のむめの庭
香を狩てむめのはやしに入夜哉
ちるむめや獺のかつぎし魚のうへ

ひらの町神明境内、出世天神は松木家より奉納ありし神躰也。

さくや此花みむまつの木の間より

たえず匂ふ梅又もとの香にあらず

梅咲て木をとこがちの花見哉

後朝

我袖のわが袖ならずむめの花

一支考曰。俳諧はたゞ梅の花のやうに有べし。此はなのかたちは世にへつらはず。たゞ有のまゝに咲いでゝ、殊勝のものなり。しかるにあやなきやみの夜すがらにも、たゞひとりにほひゐたる雪の裏は更なり。花の佳名を世にもとめぬは、俳かいの人のためにして、名をいそぐまじきたとへにてあるべくゆ。さればとて捨てゝ世をするすみなるもにくき物なるを、深き時は晴香の月にうかび、あさきときは疎影の水に横たふ。風流ならざれば俗におちやすし。さびしからざれば酒色にまどふ。あるひは寒く、あるひはあたゝかに、世に殊に自在のものにて、これらを法師がよのつねの工夫にいたすにてゆへ。

鉈さげて出たりな梅の亭主ぶり

おもひ切て梅見に出む日こそなき

几董が夜半亭になりし賀

一條院の御時、花有喜色といふ心を人〻につかうまつりしに、刑部卿範兼、君が世にあへるはたれもうれしきに花は色にも出にけるかなと詠玉ひしも、かゝる折からの壽におもひあはせて

はるの夜も半になりぬむめがやど

散しほや香もそゞろげに梅花

主家のつとめ功なりて、國にかへり申さるゝ信濃ゝ人に

おとらめや陶朱買臣むめの笠

むめひと日〱かゝゆる餘寒かな

下もえや忘れて過しかきつばた

木曾深坂といへる所にて

下もえてあつもの富る山家かな

春庭曲

むめ柳出あひも上手同士なり

一洛の諸九、松しま行脚の折の添へちからにとて、案内のために遣しける元二郎といへる、あらおやぢの七十五才になりたるが、風景のおもしろさにめでてや有けむ。

いのちこそたからの山の松しまや

かく不風流のものだにも、時に感じて自然とうかびしものなり。又みちのくの二本松に、俳諧すけるもの共、さくらがもとに酒くみかはしあそびゐける中へ、所の百姓のいでゝ酒のませ玉へと乞ふ。ほ句いたし申されなば、いかにもとたはれしに、この人しばし案

じて
きのふより翌よりけふのさくら哉
いひ出されて興さめ、人ゝほ何も出さりけり。

うつかりと名所の中に田うち哉
母やまたむ我うつ畠のおほき事
川島もはたけうつ也淀かつら
いて僻や木わたの里のかり足駄
背ごゝろの火冴返るなます哉
雪消て遠山桜となりにけり

相州檜原玄賓庵主勧進
七十賀　松延師友といふ事を

松につれてあるじにつれて松の花

伊豫の國朝くらの庄官かたに、今治の太守の名を玉ひし青三位といへる松に

蔭深ししゐもひろはで松の花

覺英僧都舊跡みちのくくづの松ばら　六百五十年忌

松にこそ葛のむかしを呼子どり

上毛にて

蛩立や左のゝ酒やのひたしもの
ひとつ吞てうす紅梅や薢(ところ)うり
おところへやむらさき匂ふ蕗のとう

一おにつら曰。未熟の人の俳諧は、春雨のと五文字をいひ出し時、はるさめ先に出ゆといへば、秋さめのとつけかへ侍らんといふこそうたてけれ。春の月はくれ初るよりおぼろだちて物たらぬけしき。夏の月は灯をとをく置てながめ深し。秋の月はまどに、軒に、海に川に、野に、山にながめ有。冬の月はひとむらの雲の雨こぼし行、ひまをてらしていそがし。はるの雨は物こもりてさびし。夕だちは氣はれて涼し。秋のあめはあはれにてさびし。冬のあめはそこよりさびし。うぐひすはきく、郭公は待侘るこそ詮なるべけれ。四季折〳〵の草木ひとつ〳〵辨ふべし。

はるさめや舍がてらの年八卦
地にあらば連木すり鉢猫の戀
あかつきや猫の戀するはつせ山
戀〳〵て猫のおなかやはるの月
（原註腹中）
おもひかねて猫はなちやる雨夜哉

はりまや九兵衛　三廻
北はまの獨尊ともいはれし人なれば

今は三とせぼさつの中のねはん哉
しらうをに有明月のうるみ哉
白魚やこの傳奏はなにの君

父をうしなへる人に

霞日やのこせしめがね見れば猶
かすませも果ず江戸ばし日本ばし
三條や霞ひとへに人ひとり
帆ばしらに霞の袋脱したり

内田活丈子、上がたへのぼり申さるゝに、我は先だちての

ぼりし折

すみよしに松とて笑ふ山かつら

きさらぎや手もとおぼゆる葦の水

おぼろ夜を見つけ出したりすみだ川

述懐

おぼろ夜や我もむかしのをとこぶり

朧夜や越路にかへる鏡磨

凡十子の國にかへり玉ふをおくるに、なにか別れのかなしかるらんとは、大江の白女がいのちをかこちしことのはながら、左にあらで

かならずよ似た春の來てかたるべし

いとゆふや南に向ふ東大寺

かげろふやたちも及ばぬ不二の裾

あしたにはかげろふ立ぬ鳥邊山

花頂山にて

かげろふや僧の答ふる小かぢが井

陽炎や荷鞍ほしたるはし驛

たがために酢みそ待らむはるの艸

長閑さや竇にはぢかるゝ海苔の香

信州上諏訪自得所持、はせを翁より傳來の、うぐひすの水滴に、人〻の句を乞はれけるに

おし親のうつはや道の月日ほし

うぐひすの旭むかへてはつ音哉

うぐひすの巡るや軒のいも俵

金色(衣カ)鳥や鉋つかはぬ家のさま

鶯の初音やちさくうちかへし

きぬ〱にうぐひ啼てうとまれず

まだ寒し畠うつりしてなくひばり

我はたに雲雀舞はせて日は入ぬ

桒人町にて

破を舞ふて急に落るかあげ雲雀

落しほの月をおくるや蜆とり

すみよしや粉濱の蜆赤みそに

生のりや江戸の南の小むらさき

西の京 西大寺など見巡りて、

— 遍照がうたをおもふ。

柳にも誠少しつゆの玉

きのふ今日あすの柳のみどりみむ

章臺

見盡してかゞみにうつす柳哉

老情

春やむかし出口の柳みてかへる

青柳やおもへば長きつゆのみち

なか〱に柳のあるじはる易し

大筒の玉にもぬける柳かな

女あふぎをひろひし人に

落にきや女のこしのやなぎより

江戸兩國逍遙

漁舟みえて吹なりはるの風

しのぶ夜のしら玉椿散にけり

鶴舞ふて椿扇〱ちる日かな

夜半亭蕪村を悼

この叟の潔き性質を思ひて

落るときおちし椿の一期哉

老少不定の心を

落つばきうつろふ花は枝にあり

靈山丸山あるは花頂の風聲水音、みな此會式の興を添ふるなるべし

糸竹の花の雲間や壺直し

うどの香や詞少のをとこ文字

遠州高遠の志むら氏、筆道のほまれ有しが、二月廿五日故人の數に入申されしを聞て

西行のもちより二十五日哉

夕がすみどれが女のふまぬ山

やぶ入りの二日になりし夕日哉

對　客

我はせきあえずも山葵たゝきしを

活々坊の云。一座の宗匠は軍中の大將軍、商家の番頭などの心もちにして、一座作にほころときはしづめ、一席しづかならば、文引たてゝ句をなすべし。ひとゝせ初午奉納の畫馬、連衆作に作をあらそひし跡へ、堪川が

初午やゆらり〳〵と人通り

かくいひいでしかば、かくべつきらびやかに出來ばえせし。是死活のあしらひ也。此一句ばかり聞たる人のなに事もなき句なりなど評したらむ。物その場の差略あり。これを思へば發句ばかり云つたへて、いにしへ人の句を評せむは、おぼつかなき事ならむかし。

はつ午や有ともしらぬ古社

はつ午や戸に拍子とるめくら兒

はつむまや新別當の靑あたま

二月堂

水取や井をうち廻る僧の息

苗代につくばのこのもうつる也

なはしろやきのふは艸の水がくれ

苗代や小蛇のわたる夕日かげ

君が代や米喰ふとてわらびうり

たんぽゝや野をめぐり來る水の隈

なのはなやおにの諷ひし門の跡

尾崎氏江戸下りに

四方は花あべ川もちに江戸女郎

三尺の松みどり也やけのはら

眠さめてひとゝき春の夕日かな

はるの日の風巾ものぼらず夕くれぬ

飼かふて海女と酒くむはる日哉

ぬれ鶴やす黑の薄分て行

畫　圖

紅梅に兒の唐輪のそこねけり

一進二円。誹諧はたゞ物の本情にまかせて、時のよろしきに遊ぶなり。古式につながれ、其粕をねぶるまじき也。たとへば八卦には、離坤兌乾坎艮震巽とあるを、易には乾兌離震巽坎艮坤といへば、おなじ文字にてはしる也。走てよきもあしきも、其時にのぞみての事なるべし。古人の格式は初心の人のため、中品已上の俳諧は、われしりて我するなれば、一字一點の學文も入るべからず。學文は階子也。はやくのぼり

ていらぬとはしるべし。下品のうちは
しり過て、踏子ふみはづしたらんもあ
やうし。

紅梅に日本ばれの天気哉

紅梅はさめて彼岸の夕日哉

鳶の輪の下に鉦うつひがんかな

　伊勢山田ある寺に、秋葉山勧
　請のやしろ有り。かたえなる
　ひと木に

三尺の接ほも梅の匂ひ哉

ひがし向にし紅梅につぎほかな

物さはる夢のみ見する接ほ哉

　園田七郎左衛門風七が七十賀

猶花にちぎらむ蝋知の諧楽ぶり

　亡妻三回の追悼
　わかれにし其日ばかりはめ
　ぐりきて　といせの大輔が
　ふる事も

にた花の物いはぬ日ぞ恨なる

　上毛清水寺奉納

花さくや御瞼(みかへり)の届くまで

　雪中庵七十の賀
　老師が古稀の祝に、我も二
　つちがひの老弟といはむも
　をかし。

たえずみむかたみに花のかゞみ山

　摂州溝杭矢島氏へ八十賀

山口や花の千もとの八十せ川

かはらけに味噌も置れぬつばめ哉

つばくらや其子もかゝる思ひせむ

家分てつばくら待む棚つらむ

　河州岸田堂

かけしるや其梁のつばくらめ

一古き歌を折よく誦しいでたらむは、あ
らたによめるよりも風情ありとや。淀
のわたりのほとゝぎす、宗盛の宇佐の
奉納など、手がら有てきこゆと承る。
ちか頃をはりの人のつまの七とせま
で、腰たゝで有しが、つひに身まかり
しとき、其丈のおもひいでゝ申。

麦喰し雁とおもへどわかれかな

野水が句をつぶやきしは、いとあはれに
して、野水が作せるよりも情あつかりけ
ると、鳴海の蝶羅ものがたり也。

行雁や北斗の外は雲の浪

つまなしや一羽たち行雨の雁

かへる雁紀の路や花のほころびし

衣擣ばかへり来よ雁かへり来よ

雁風呂にうちくべられし染木哉

大旦那となりけり春の雨やどり

鳥の巣や小僧にしめす事ひとつ

　荘子の畫

其鼻に入れて眼覚せ蝶のゆめ

蝶〳〵もしろきに事はたりぬべし

雫して羽扣く雨の胡てふ哉

たちいでゝ初蝶見たり朱雀門

世を世とも三月がほのこてふかな

蓮立に翌飛ぶ蝶のすがりけり

蝶の髭立ふるまひにかくしけり

なる神の撃ぞや胡てふ舞出よ
みよし野の吉野のおくや蜂の壁

にしきどにはちのす有と申けり

山里

雪解や今更木ゞの下紅葉
雪どけや谷の戸いづる檜もの
片隅に鍬のひかりやはるの雨

高雄山にて

はつ戀や袈裟も紅葉も青きより

鳥醉曰。ばせを翁古池の吟、世上にいろ〳〵と解をなす。恐らく翁の心にあらじ。其比尾城の四五子やゝ正風にもとづける折なれば、ひとしほ易きかたに骨髓を盡し、彙にしめすの五文字ならむ。キ角が山吹やと申せしは、おもしろけれど、衆口もとの旦風にかへらん事をなげき、山吹の花なる汝にはよからむ。我はかくこそと御申ありし。句上の事はさもあれ、みちに志のあつき事をおもふべしと。

清女が御簾をかゝげし畵に

猶みたし花の夕邊の月のかほ
ねむき目や水をはなれてなく蛙
思ひ出や蛙一匹御溝水
ふり出して眠しづまるかはづ哉

ある諸侯の御やかたにて

ほり池や御領のかはづゐてまいる
信玄の團扇ゆら〳〵かはづかな
千町田に聲あはせけり井の蛙
雨のかはづあるはつま戀夜もあらむ

有感

青からば憂には泣かじあか蛙
ほしかげに田にし鳴也豐浦寺
龍にかしてあとにこさるゝ田にし哉
革足袋のもえいづる春にあひにけり
其中のひとつは落よいかのぼり
いかのぼりどちらへ落む安藝黒田
物洗ふ側へ落けりいかのぼり

庄田勝音を悼

いとされて風巾のゆくへや西の空

越後のくにゝ有といふなる

むら消へし雪のまに〳〵雁かけ
出かはりの人ひと月はおにもなし
でかはりの井戸には淺きちぎり哉

南京行

子をおもふ闇はあやなしたゝき鹿
鹿の角おぼつかなくも拾ひけり

上巳

ひなの膳揚名の金太郎あらしけり
白桃の蓉にひなのかほかゝむ
おもかげのかは子を出ぬ古ひいた

飛彈の山中に

六十の息子もちけりもゝの花
桃分て來たぞや伽羅の油うり
咲初て桃なきさとはなかりけり
桃さくや跡目披露の片山家
狐去て桃林しばし春を笑ム

東方朔、山岡頭巾をかぶりて、
桃をぬすむ畫に

此もゝや年の眞砂は盡るとも

叔父前田良阿君悼ム

はろの夜のかたはれ月も入にけり
はるのよゝやふしみあたりの片はたご

墨江に落日を見る

人去て三日の夕浪しづか也
蟹とりて甲に物かくしほひ哉

和歌の浦にて

潟は干て便なきかにのはさみ哉
ながき日やけさ追やりし黒き蝶
永日やまだ中山の八から鉦
寺もちし初や花のてい主ぶり
くゝられぬ豆腐も來たり花の頃
世は花になるともしらずおく吉野
ありもせよひと夜は花にいなびかり
花を分てはなさきにけりよしの山
江戸酒にいたみの衆のはなみかな
花に下戸あはぬ敵とは無念也
花に世をとりて七日の上戸哉

白顏五千句に

さくやこの五度はなのよしの山

あらし山の花みむと、たれか
れ訪ひ、野の宮天龍寺など見
めぐりしに、臨川寺のあたり
より、雨しきりにふりしかば

花とちるは雲也雨のあらし山
落貝の提重遲きはなみかな

仁和寺にて

花を踏て蛇のうへ行人の聲
はなの山伽羅ぬすむ人をみつけたり

歸　坂

京の花見ゆめにもあらずぶとの跡
花みぬ人唯ちるまでの名也けり
ちり〳〵て花の氣違しづまりぬ
老はたぞ淚おとして花にたつ
一船留て陸はさくらの花車　西鶴
此第三の事　後水尾院樣ゟ御たづね
被レ下ゆに、宗因が申つるが、留てゆへ
ば、とまりも可レ仕と御答申上し、其と
し柄人がらにもよるべし。
初ざくら田舎の人が見て仕廻ひ
油斷して二番ざくらのはなみ哉
手をうたばちりもやすらむ初櫻
うぐひすのしろき眼やはつざくら

山　家

白箸に蕨のあくやはつざくら
客ぶりはさくらにあるをわらび汁
曉に雨の降たるさくらかな
月は雪はおしなべて櫻ながめけり

上毛烏遥先生八十賀

さくら咲とほ山も何君が杖
世にうむや十日過たるさくら守

豐竹越前司馬の叟、八十の賀
しけるとき

わかや和歌ならば人丸ざくらかな
もる神の廿日も過ぬあさざくら
一活々坊いへるは、沽德の詞に、俳の魔

心といふは、人の師にならむとおもふ故也。此故にて修行半途なり。いつまでも人の弟子たらむとおもふべし。弟子になりて終るべからずと云々。雪中庵もつね〳〵此事をいひて、御互にいつまでも稽古あれかしとおもふ也と申されし。

海棠やかたけて過る日本ばし

かいどうの花さきにけり永日に

吉野出て又おもしろし三月茶

奥州二本松西光坊といへる僧、錢笛といふものゝ妙音を聞て申。いかに伯樂の三位なりとも、この笛に油断すべからず。

蕈二ツの笛にもかへそおぼろ月

蛤むくいせの浦人はる深し

花咲て人にはうとき大根哉

はる三つきおもへば我もあふむ石

一日は不二見ぬ山や赤つゝじ

一雪中庵にて夜話のせつ、門人山幸申けるは、キ角五元集の中に「しまむろに茶を申こそしぐれ哉　といへる句、いかなる事にやとたづねけるに、蓼太の曰。此事先師吏登物がたりに聞しは、むかし初代の一蝶はキ角と相よし。しかるに蝶故ありて公の罪をかふむり、伊豆の島に流さるゝに、友人これかれ別れをおしみ、舟場までおくりて、信友の情をなす。一蝶申けるは、かゝる身のふたゝび相見む事かたし。是までの御懇情、いつの世にかは忘申さむ。我かの島の事を聞に、大かたの人、魚をとり日にほしかはかして、江戸の便にひさぐと承る。我も又さこそあらめ。然ばうをの腮に、木の葉やうの物をすこしづゝいれをくべし。若、さやうのもののゝ入たるほし魚あらば、蝶がなせるものよと思ひ玉へかしといひて別たり。人々其舟かげのみゆるまで見おくり、キ角はいとゞむねふたがりて、立もさらでありし。其後ひとゝせばかりありて、キ角が僕、日本ばしの魚の店にて、乾魚の有しをとゝのへかへり、かてぐさになさむと、たわゝなるうをを大にあぶりけるに、むろといへるひうをの中に、さゝの葉のやうの、なにともしれがたきが一枚出たり。のこる魚どもにも各おなじやうに有し故、扨、島のやつらは、をかしき事をなす也と笑ふを、キ角ふと寐みゝに入り、やをら起あがり、蝶がいひし事を思ひ出し、此乾魚はいづかたの島よりまいりしものかと、其ひさげる問屋へ人はしらせてたづねけるに、大かたは八丈大島よりわたし申よしを申。角こゝに於て、蝶がいひし詞を思ひ、傍友の情しきりにうごき、蝶がしたしかりし友どちをあつめ、茶を申入、此干うをゝ出

し、これこそ蝶が中のこさ(せ)しかたみなれ。いまだながらへて、かゝるわざをなしけるよと、みな〳〵そなたのかたに向て、はるかに信友の情、今更涙とゞめかねたりしとぞ。角が何もこのときの事なりと、師のものがたり有しとぞ申されし。

いなさ吹彌生の末や大がつほ

むさしのにて

なしの花有といふなる逃水は

ちるなしを花のみぞれと申さばや

けば〳〵と旭さしけりなしの花

なし咲る夜をしろがねに價せむ

仙臺つゝじが岡にて

木瓜さくや此玉川はむつの外

躑植る叟や秋にあはむとす

部へは人して躑の分根かな

春さびし露の古葉に夜のあめ

背おふ子に泣雨の夕かな

いさ竹の秋風聞む相國寺

谷の藤泥に尾を曳風情あり

ちぬの浦

行はるや堺のうらのさくら鯛

うり聲はとほ山どりかさくらだひ

上毛のくにゝ侍て

桑子もりつげの小櫛の落かゝり

夜の守護ひるの守や蠶棚

衣川蠶の蝶のながれけり

月もはるの朧に細きかぎりかな

玉東江戸下りに申遣す。

みつけ番にしかられな。うす雲高尾に長じりすな。

行はるや江戸は牡丹に杜若

ゆくはるのしころは切れて遅ざくら

ゆくはるも銀杏の花のひとよ哉

行春や鯵にうつろふ鱠の味

春かへれ〳〵と深山ざくらかな

もろこしまでも行ものは

石火矢に船出す春の行方哉

中といふ字をかゝせて、家の政事をつゝしみ給ふ御方へ

はるの日や有のまゝなる午の影

晩春曲

この月にほとゝぎす鳴ヶはなの雪

朔日とたしかに申せはつ袷

さくら狩家にかへればあはせ哉

なにとなう夫婦みかへる袷かな

どこやらに女さびしきあはせかな

きのふは、紅にさかりをみせし蘭生のさくらのむなしく散て、けふや、うのはなのしろきにかはる世のはかなさを思ひやりて、はやし氏のもとへ申遣す。

花のいろにそめし袂をはつ袷

衣がへはゝきとる氣になりにけり
こゝろまで醉にあふ日也衣がへ
向ひ同士物いふ夏のはじめかた
琴のはる三線の夏となりけらし

一鳥醉曰。附句は次の句ぬしのために、よろしきやうにと心がくべし。鞠のあしらひ成べし。猶さしあひ去嫌の多きものあり。たとへばかのあふみの筑間祭などいふ季は、夏にして神祇なり、戀也、名所也、所名也、句に依ては人倫　おもかげなどのさしあひ有。むさと遣ふまじき季なりと申されしか。

汗ふきやつくまの鍋の二つより
花去て鳥まつ簾の青みかな

十南斎はじめの叟、一日一万三千のほ句を吐て、俳道の和左大八なりと世になりしも、光陰のつるをと早く、二十五年に成ぬる事よと、今の主迩懐舊の情を述侍る。

發句を射し名の通矢(とほしや)も九千日
白絲のうら吹かへるわかばかな
大太刀の御朱印もちし若葉哉

烏醉居士十三廻

この翁、なにはにたびねして、おはしける事などおもひいで、烏明百明の二叟へ申おくる。

葉になりて殘るさくらや壬生山家

花廾の功、ます〳〵江林墨水に名をなし玉へと、にしむら氏が新宅に

しげれ〳〵若葉の花の宿はゐり

はこね山にて

夏木立伊豆の海づらみへぬなり
卯のはなや曉の風月をふく
ひとゝせの天地易き四月かな
大かたのみどりを盡すうづき哉
もえぎ地のあやおり亂す卯月哉

一支考曰。月雪花ほとゝぎすは、君にもあらず、父にもあらず。我らがためのなぐさみもの也。くそともいひ、味噌ともいひ、人參附子ともあがめて、四季に心やすき出入のものともいふべし。擧てよき時はほめ、をかしき時はそしりてもあそぶべし。心にとゞめざれば無一物の人なりとて、月花もはらたてぬもの也。

灌花會

灌佛や五段がへりもなさるべく

木といふ題にて

庭更に木鋏の音かすかなり
こがねある塚とこそ聞ヶ桐のはな
春過てはやさくみかんからじ哉
香久山の花や見捨て酒うり

閑　窩

たちばなや碁盤かゝへて下手ふたり
橘やならの都のふる手かひ
この殿に人しづめたるぼたん哉

切て遣るあとの明たる牡丹かな
巳の刻のかねをぼたんの花の時

漢相國肅(蕭)何書

無事にして芍薬の花ちりにけり
芍薬やおくに蔵ある淨土寺

一はせを行脚の文中に、女性の俳士にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬもの也。此みちに親炙せば人をもて傳ふべし。流蕩すれば人敬ふべからず。此みちは專一無適にして成す。能(よく)をのれ省(かへりみる)べし。

芍藤のちるや落るやいつの間に
芍薬や末の十日の雨に落ッ
千兩のかくしづま有かきつばた
杜若凡のこさぬみづのいろ
其色のひとつに富りかきつばた
からふじて芥子の使の市を出る

愛女をうしなへる人に

芥子ちりぬよしや牡丹も廿日艸

幟を立はじめし祝に

紙子着む音たのもしきのぼりかな
芥子咲て抑雨とふり風とふき

有所思

白芥子のおのれをしるか花ひとへ
白髪を吹るゝけしの主かな
咲ときや淺間に向ふけしの花
さきつめて莖みじかげの葵かな

上毛小林里旭が父を悼。

老松の千代を譲りておちば哉
そらまめやしどろに花のこむらさき
妙觀が刀花柚に用んや
竹の子も切盡しけり明知(智カ)風呂
若竹や月の細りも二十四五

一蓼太曰。都て人の句を聞に、其場其人貴賤老若にかけて、景曲觀相のうへを以て辨ぜずば、あらはに口をひらくまじき事にこそ。新古の沙汰に及ばむもおなじ。たゞ人の句を聞て、其まゝ成ほどゝ早速に感じたらむは、其人の俳諧しられてはづかし。

麥秋やよしのゝおくにこもるとも
加藤二にめし喰せけりむぎの秋

島田驛拼(桃カ)舟にて

苗に其たびねなつかし手作麥
かつらぎの神わざなれや麥の秋
麥秋や嵯我(峨)もさがにはしてをかず
宇治殿のせうじ立けり麥のあき
おのれさへ時ある蚕の四月哉

閑居

花落る江によし雀のはつ音哉
よしきりの鳴止ムかたや筑波山
よしきりのよし一株にたか音かな
蜘の糸つくろふ雨のはれ間かな
やぶれけり袋の蜘の親しらず

金春なにがしかたにて

僧脇の月は出にけりほとゝぎす
ほとゝぎすくゝり枕の茶も匂ふ

綿帽の雪に赤けりほとゝぎす
紅の舌一枚やほとゝぎす
ほとゝぎす月の出石の連歌つ

すみよしにて

出雲小野々神なのたかほとゝぎす
はおらやよ試すをたえほとゝぎす
ゆえゝすすめげ内しあよみ・今の月

三井寺にて

きといへば門前よくへほまゝます

観音の法をゝ十夜にかゞ

百不二年月雪花にほとゝぎす
太山経論はみぬ時ほとゝぎす

一ゆやされ、事にはらみ何といへる句、関白うふやたちも何を聞て素晴をなつ。今の世の俳諧師たどゝいへるこもしきこゝろとは、あたじ目にかたるべからず。むかし、書の聖が晩首紀続後撰集 帰へ入か人より山情 かわくたしなみ侍りしに、時雨霜月といふ題を得て、この句を出すし。時守の浪帰へ見ゆ。・すゞきにかくまでさとみゆる哉 わらたるふなに

ふし見の雑貨 白川の田畑 なども今このたびひなり。はやしの縁も うき世の薬はみた小町也 といふ句を、ひうしくこゝにかけて、品かはりたる趣をして といふに出せり。

我も秋たもたさ書けりほとゝぎす

ふきくらつるか岡にて

なけよやよ百万たゝけ郭公

三條橋取にきうくし時

きゝ初て三百町程やほとゝぎす
ほとゝぎす啼てはてしてて六月や

一雲中鹿兵。一章の情意をおうかへて、わざとましあひの句をたすべからず。むかし、はやし縁の衫見たみゝのうとゝもあはれみて、つんぼの句をせられすとかや。是一座のさしあひくり也。

川ぼわ一串刺まがりの使名男
月もたれ露こぼたけれ百のはな
神おもひ百のはつ花あこ日かた
かんこどり何や翁の腹ふくれ
下顔若葉ふなりかんこどり
よしきりの背うち過ぬ関もとり
かんこどり江戸を去る事八百里

旅情を筆

雨をいれしまの十月やうらへひすも

一鼠雪月。句を吟するに、なきりてゆくちをしとて。ひたもの都にのぼり、後移はかしきえらで、執筆へ句を渡されしと也。

花の京かまくらの夏はつ鰹
水かけてかつほは一倍のきほひ哉
南部の鶯のしろみやはつかつほ
おちかへる八百町や小鯖うり

東津寺経会

鰹にあるうちは不易のあふぎ也

これみつが蜘捨にたつ扇かな
廿年女あるじのうちはかな
山中
麻生てゆがまぬ家はなかりけり
乞食の世にある夏とみゆるかな
朝風や魚の血こぼすみさごの巣
紅うらの袂こぼるゝ野ひるかな
夕すゞみ地藏こかして逃にけり
左專濟女三壽
聲まいり各涼し御招靈岡
すずや万円万寸の和田のはに
すずにたふゝすけり寺言わ
まけがたや虫音紅を吐蚊のむゆか
俳諧なにかし独吟歌仙の時
あさましき事にかゝりかまいし
とかへ
閑庭まで千度飛皆の手ばれ哉
五作句も二の九文字の目い付けり
江戸みやげもとこにたして間てより

紫蘇畠や雨の嶽上のうすぐもり
一キ角云。さしあひくりといはれむより、まづ句者といはれよとは尤の事也。句者と成ば、さしあひは自由なるべし。たとへば非常のとき、なりもの、音曲今より御免とある。早ゝまちかねて出さむはよからじ。一両日もさしをきて、扨可ならむ。句者は此處につまらで外のものを作せむ。さしあひくりは六句めづゝに、松の句を出さめ。
三界無安といへる心を
立山の人泉に寐て蚊のちごく
拂ふ手にはかなや蜩の雨やどり
うきゆめのあるとき嬉し蟬の聲
高安の鮭はさもあれめしのはへ
魏うちや上手になりし我こゝろ
扨こりよ餘り萍末のかたつぶり
此句は、位のぼれる人のすきめられし事によせて申侍りし。

かたつぶり道合たりつの大師
事さまやめでたき雨のかたつぶり
雨の日や日の間のぼるかたつぶり
雛子の夕がほさしてかくれけり
手にふるゝ團のかげや水の月
萱のとう雨のけあげのかひぐくし
夕立やおくれし雨に日のうつり
許六のほとゝぎすに對
ひとしほやさ浪くゞりし鱸の味
月の夜はおのれを遊ぶほたる哉
ちやうちんにあたりて黒き螢哉
夕かぜやほたるの中の洗ひ馬
一淺ゝ目。詩は長刀、和歌は刀、連歌はわきざし、俳諧は懷劍也。こゝろ切におもひつめれば、其詞事はやく始皇の胸先をさすにいたる。刄長くば其所にいたりがたらむか。むかし蟬丸といふ顯を千はり、
夏瘦と問はれて袖のなみだ哉　と

いひけむも、卽懐劒のきれ味なり。

なつやせや西日さし込ム竹格子

むらさめや灰の落つく藍畠

小さめふる空やむくげの朝ぼらけ

さゆり葉やむらさめ過る虻の聲

水僊の根をほす軒のあつさ哉

日さかりをしづかに麻の匂哉

しのぶ戀といふ事を

吉田屋の紋に喰れけり伊左衛門

一長嘯子の云。はじめて物を誦し、よみかぬるは、夏中人の家に入てしばしあれば、そのもの、かのものとわかるが如しと。

かたびらやなべて世にある人のさま

かたびらやさもなき人の折目高

かはほりやせめても苔の花に鳥

宇治にて

かはほりや大黒彫む板間より

譲られてけふはつ舟のうがひかな

その外の罪はつくらぬ鵜飼哉

月入て鵜川に高し老が聲

月みせて船に子を守うがひかな

麻(淺カ)生庵野坡三十三廻、無名庵にて風律興行

塚に生ふ藜もゆかし杖のあと

さらでだに乳母かしましき粽かな

歌によまれ湯にたかれたるあやめ哉

五月五日、加茂にて

のせ勝て埒を出たり馬の汗

東武馬光卅三廻、石漱興行

ありし世のそのすみの香や入梅じめり

降事にみなしておりぬさつきあめ

どの雲のふるともみへず五月雨

春鶯囀蝶羅ぬし、五十の宴催されしも、まだ四とせのほどぞかし。あはれ七の叟のむしろがみにもとちぎりしも、今は空ごとゝなりぬとて、亀章山父のもとへ申遣る。

百とせも半鳴海やさつきあめ

一吏登の云。我句を人に聞しめ、きこへがたくいふものあらば、よせ直すべし。口論のいつも我に理有がごとし。樂天が老婆に問ひしも、この事なりと申されし。

二つめの清水に足をひやしけり

呑てから宮守のみゆるしみづ哉

蝶のほめのこしたる田うたかな

おもひかねて苧桶に老の田唄かな

田植唄嫁に拍子をすゝめけり

加州沼水、國にかへり申さるるに

かへる山雪のしら山夏ながら

豫州松山法秀寺南嶺和尙にわかるゝ詞。

月日は百代の過客にして、行かふ人も旅人也と。さればいくかぎり人のうちにて、かく寢食を倶にするは、ひとかたならぬ因にや。去ば再會たのみありと、別れにのぞみ互に

手をとりて一笑す。

相蚊やに何かくす事夏の月

己亥夏、偶浪花舊國、余與同
上洛、到二草津驛一而分レ手時有レ
歎。

共是東西過客人
同行千里日相親
別離今日暫分手
再會尙期明日辰

豫章南嶺艸

あぢさゐや人はいつまで同じ事

線繍花の飛鳥川にや生ぬらむ

丸綵これほど暑きことはなし

あつき日や濱に下魚の算をなす

周茂叔讃

ひとり閑時や蓮のひらく音

から網の間にほゐなし夏の月

涼とる舟漕ぬけてなつの月

道問へば川にそへよと夏の月

ある人の文拾ひけりなつの月

二柳庵東行に申遣す。

古曾部のあるじも扉をひらき、山崎の坊様も夜具のさたに及ばむは、このたびの行脚成べし。

留主遣ふいほりはよもや夏の月

東西夜話に、支考の曰。かゞり火にかじかや浪の下むせび　かゞり火におどろかす魚はあまた有ながら、むせぶといふ一字をよせていはゞ、かじか小海老のほか有べからず。句は其魂を見、本情をとるべし。

ある人云。風雅のりくつといふはいかに。曰。風雅にりくつなし。おの〳〵こゝろのりくつ也。人の心をまなぶべし。句をまなぶべからずとなり。

氷室守七世の夏にあひにけり

ひむろもり近くめしなば消ぬべし

なきさしてにべなき蟬の行方哉

鳴盡す終りや蟬の水調子

一つねに風流の心なき人も、もの〻善あしきに感じて、おもはず秀逸の句あり。遠江の國に、あるひとの子をうしなひて、其ひと〻せのめぐり來し頃、

去年まで叱つた瓜を手向けり

かく千万のあはれをふくませ申出しと也。

葉をもれて涼しや瓜のひさがしら

雪中庵の畫讃、からす瓜の一軸、丸彤氏へ遣すとてうら書に

我薗の夕くれなゐぞからす瓜

はつ茄子公家ひと口にまいりけり

ほの明のはこねこしたりはつ茄子

手にふれば瑠璃やくもりて初茄子

あつ盛の畫

はつ茄子いづこに薄刄あてゝみむ

ぬれて猶雨の水鶏のさやかなり

一雪中庵云。キ角がつけ句に、毛拔にも名を給ふ君が世とあるは、かの尾州な

こやの毛抜師南方といへり。孔明出師の表に、深く不毛の地に入て今南方定と云〻。不毛といふよりして、むかし、近衛殿下の被下し名也と。

たとへ盛しの榮躍に、もちのかわ、といふ事に

京の人や鉾見にのぼるひがし山

祇園會

我子にてゆへあれにほこの兒

背かさりあれほこの町山の丁

いつはあれど水みる夏の都哉

雪中云。句振は我生れのまゝにして、修行ありたし。つくろへるはいやみなり。土地によらずして、句に都ぶり有、部ぶり有。高雄といふ遊女の、ある田舎人に異見しけるは、そこには、いなかにて歴〻の御かた也。此ほどは江戸染のはやり詞など似せ玉ふがいやみなり。能おとこと、金つかふ人と、はやり詞に、傾城は倦てゐれば、只ありのまゝなるが可愛なり。其ありのまゝなる人に、おろかなるはなきものなり。ゆめ〳〵にせ玉ふなと申せしと。一座せし貫支といへる人の物がたり也。かかるあそびものゝうちにも、名だかきは心の置所格別なり。しからば風雅も。（原本以下ナシ）

一希因云。大かたは初のほどめづらしく、様〳〵と句をねり、二の折よりは退屈して、いゝがちの様になりはてゝ、三四の折より巻の面あらめに、一巻の模様をうしなふ也。是つれ〳〵にいへる、木のぼりの上手といへるは、木にのぼる時はいはで、下りる時あやまちせそと、ひたものいゝしににたり。

名聞に四條へ出たるすゞみかた

浴のてふむ、浪花に下り申されし折、はじめて逢けるに

にごり江のこゝろ遣ひもはちすかな

今は三十餘年の知音なり。

雪中二世更登居士二十五廻通

題　江戸深川　要津寺

定甚法師のとのはも、けふの法莚におもひでられて

本堂に蓮のかげさす夕日かな

さらし井やをとこ世帯のけふはとて

入江子を悼。

酒ひやす泉には唯月ばかり

奥州せのう（等舟出店の賀に（衍字カ）

呼井戸にに猗手がらある清水哉

さらし井や家のうちなる六玉川

一書林何がし、わづらひて心地死ぬべくおぼへしに、菩提所の和尚を請じ、末期の安心をすゝむるあらましにて、念頃に後生の大事を述られけり。なにがし、むづかしきをのこにて有ければ、おもき枕をあげ、様〳〵の御しめし、

ありがたく存候也。ひとつ御たづね申度事の候は、みな死候跡にて野おくりのせつ、御引導と申事きゝ、さだめて能所へまいる事を御教被下候事に候半が、折角御聞られても、其時は息たへ耳もなし、生たる人のみ承り候。あはれ御情には、只今仰下されたしと願ふ。和尚、すつとたちて、佛前にありける法然上人の一枚起請をとり、よみ聞せ、これ有がたき所へ行道中紀(記カ)也と被レ申。病人大にさとり、扨〻けつかう成道中紀にてこそ候へ。有がたし〳〵と、息のかぎり念佛し、往生をとげ申ける。これ書林に對して題のうごかぬ處也。

手枕や町のいづこに井をさらす

川狩や半日無爲の境に入

ほとけとは魚狩ときの心なり

雲抱て夕立こゆる北のうみ

三五粒蓮に落けりなつのあめ

夕立や江戸は傘うりあしだ賣

加賀の紫貧、はし立へ行。

先にたつ丹波太郎や道しるべ

阿波加賀江戸の風士十餘輩、荒陵山下の天曉院にあそびて、見わたる名所古跡を題にとり、ほ句するに、天王寺を

舍利拾ふたもとは玉の風かほる

ひるがほや轍にくぼむ作りみち

鼓子花やかくれて住る女蜘

ひるがほや眼の玉のちりてのち

一淡々、猫を飼けるに、我喰けるめし夜菜などを我箸に分遣し、膳の脇にてくはせけり。門人の曰。先生餘りなる不行跡の飼せられやう也。猫のくせあしく成候半と。淡笑曰。さればとよ。初め二三疋の猫は隨分と行儀に飼つけ、首玉なども奇麗に、諸事めし遣の女共の取斗(計)たりしが、いづくへかぬすまれ、十日と內の用にたゝず。必竟うつくしく飼たる故、人もほしがる也。依て此猫は飼しはじめより、かくあしく育たる故、一二度は盜まれたれども、行儀あしき故追かへされしとみゆ。いづれも能御考候へ。猫は所詮ねづみの書物を荒すをふせぎの役が專一也とみる時は、餘事にかまはす、唯鼠の役といふ所が眼のつけ所也。俳諧も又かくのごとし。こゝが眼字、それが其題の專といふ事を見さだめたし。

風吹てひるがほの花みつけたり

夕がほに角力が母のすがたみむ

夕がほや戻つたうしの臭で見る

勢州白子山觀音堂奉納。江戸升屋貞國勸進の畵馬

禮まいり彌ひらけめうがの子

抱かごやかくしかねたる山かづら

不二庵の句に、頭に貞女立ぬ

く水鶏哉　とありしに句兄弟
せむとて

手もさゝじ兄の抱かごころぶとも
抱かごやたしか妹は玉はゝき
むしぼしや紙魚追ながら物書す
むしぼしや立いづる戸も桐柳
花見小袖うつりにけりな葛水に
むしぼしや鈍く傳へし腰の物

はせを翁の文に、他の短をつげ、おのが長をあらはす事なかれ。人をそしりて己にほこるはいやしき事也とかゝれし。今世の中大かた蕉翁の教を守といへ共、この遺訓を守もの、百人にひとりふたりならむ。

名越夕祓

子をつれて茅の輪を潜る夫婦哉
夕かぜや夏越しの神子のうす化粧
形しろや艶しき肌もふれきなむ
五十くしに鮭の烟かゝるなり

洛の几董、はじめて相見しける時

これからの實になる秋を隣哉

なるみ、千代倉鐵叟、予がもとにたづね來ませる折の文をこゝにうつす。

難波がた安井舊國のぬしは、もとよりのちなみ深かりければ、此處に至らばたびのつかれをも息めむなど、伴なふものにもかたりなぐさめて、夜舟の纜をうち拂ひ〳〵、漸三津の濱邊にあがり、大江のあるじをたづねけるに、予が出坂をまちまうけ玉ふの志あさからずなむ侍れば、誠にさくやこの花の都人の情、かのから國の梅酸のそらごとにはあらず。その厚を謝して以、一句をつゞり賀し侍る。

乾く日も更になにはの梢かな　藏六園

己卯中夏日　七十二叟書



一西山宗因に俳諧の去嫌を問に、因曰。むかし呂孫新式を講ぜられしに、何はなにゝ嫌ふ。他は准之と云々。この准レ之とあるが第一の要語なり。其准レ之とある、准る人の了簡、よきもあしきも其人の旨に依る。俳事又准レ之と申されしとか。

元日のうら打風やけさの秋
形しろやあとに流るゝあきのみづ
大坂やまつりの跡のあきのかぜ
秤口のにしに聞えてけさの秋
秋たつや持佛の箔の目にかゝり

民家．

がつしりと鉄に音ありけさの秋

桐ちるやむめの暦の下の巻

駝鳥といへるものを

桐ちるやみぬ唐土の鳥はみせて、

けふとくれて二日のかげも秋の月

なりひら、淸女などのことの
葉を思ひて、枕の草紙の趣に
したがふ。

彦ぼしよこれ牧方の馬やらふ

ほしあひや石ともならで待課せ

中に落るほしや七日をよしの川

しのぶれどあの光也ほしの戀

御祓せし水にもあらず天の川

ある妓家にてほし合を

七夕の今宵大ぼし力彌かな

此句餘りけやけくいかゞ也と、申さるるかたおほきよし、沙汰有につけ思ひ出し事有。ひとゝせ東武にて雪中庵の附句に、おれも是れから賢者になるはづといふ前句に雪中、「ひそ〳〵と矢間千崎ほり小寺と附られけり。其席魚汶連丈などいさめて云、おもしろき句ながら浮世めきけり。こゝは間神崎などゝあらむにやと申。蓼笑て、夫にては近代にて遠慮もあり、實にはまりてもいかゞなり。都て和朝のてあそび、源氏いせ物がたりなど、上古の人あながちに不レ可レ尋ニ其作者一只可レ翫ニ詞花言葉一而已と戸部尙書もおく書有。これらをいふにあらねど、俳事又八雲の末なればト下略。

「ちからとあらむには風流なし。七夕のあふぼしとつゞけて、力彌とされたる宗因の風到をおもふ斗、ひとゝせに數千の句をいひ捨るうちの我なぐさみなり。我にはゆるせとありしひとつの辯と、大様に見なし給はれかしと。

戀〳〵て花よりほしの七日かな

送られてみなしらぬ火と成にけり

鍋墨かゝげて商ふ叟を見て

中〳〵に死なで此世を麻木うり

草市やいづれの家のたまの床

瓜茄子さゝげを畵しに

また棚の花ぞむかしの櫻鯛

魂だなや雛傳し影法師

たままつり八千世諷ひし一座也

うらやまし迎鐘つく他(ひと)のおや

たて済す其夕ぐれや高燈籠

影さすは月に成しよたかどうろ

露下梧桐一葉飛

棒桐のいま二葉にとなりにける

子はかくしおやはかくれておどり哉

おどり子やまだ片形のたつたひめ

眞中へ旭のいづるおどりかな

人のおやのちやうちん赤き踊哉

さとの子のおしやられたるおどりかな

上毛小塙地藏奉納

盆のはへ地藏まつりにしくはなし

痩たかと背中みせけりぼんの月

初月のかげかた過ぬ芋の茎

桐ちらできのふも過しあつさかな

舟はりの露にかげろふ花火哉

八朔もから〻三八あけはなれ

途中吟

いなづまや不二の麓のはなれ杉

稲妻や乞食臥しあめの空

いなづまや鉄漿つけかゝる妹がかほ

雨の秋うらがれてみゆるあはれ也

追はであれ萩喰ふ馬齧にかゝむ

ちる萩にうたれて萩の咲にけり

一空摩居士物故のまへ、今の雪中庵のするがの國に行脚とて、たび立ける暇別にとて、あさがほの花を畫て、ちるともちらめ蕣のとありし俊成卿の御うたは、かのから國の柾温が枕をなでゝ、人と生れては、たとへ臭きものといはれて成とも、世に名ののこれるやうにとの心ばへにおなじ。つとめよや道の修行としたゝめて、

あさがほやおろかながらも花心

白雁と両人へおなじ様に書て渡されし。其行脚の留守のうち故人となり申されて、今はかたみとなりし事よとて、完来ぬし右の畫讃をみせ申されし。遺訓の心通じけるにや。

おもひ出や蕣の花の手折るゝ

蕣に鉦鼓のあふてあはれなり

あさがほや今更ひるをふみこたへ

これは秋のすゑに申ける句也。

あさがほに傾く塔のしづくかな

これも元興寺にての吟なり。

蕣の松に并びて旭かな

手折間に秋風たちぬ女郎花

呉逸が家を訪ひて

肌寒き秋のちからや堺箴

一なるみ千代倉蝶羅云。我は酒屋なれば能酒を造りて、俳諧はおりふしのなぐさみ也。知ある人の藝を好きたらばあそぶべし、ふけるべからず。狂ふは彌あしゝ。其所は飛脚屋なり。通路の事にくはしくば、扨たのしみに遊ばれよ。家を捨、業を止て名人上手になるは夫人によるべしと申されし。又、江戸藏前祇徳といへる人の

風月より家業はおもし傘の雪

とかゝれしも、これにおなじからん也。

酒造る桶に音ある夜寒かな

尾陽鉄叟を悼。

この頃おほき世や更にとなき人をいためる、いにしへ人のことばも思ひ出て

世のゆめや西へ見おくる秋の雲

嵯峨の重厚、加古川の山李など、花やがうらに案内して

雨の日の薄にも似た案内哉

擘かれて夜寒の禿不便なり

かへ鶉の曉寒し宇都の山
朝寒や戴〳〵と蚊のうしろ影
月落てひとすぢ蘭の匂かな
きのふみし馬昇入ぬむくげ垣
夕がほの實も市に出て朝寒し

麻生庵の詞を思ふ。

長松がおやと申て西瓜かな
鳴うかと髭かきあげてきり〳〵す

人家

きり〳〵す猫にとられて音もなし
ふたりぬる夜は面白しきり〳〵す
媒に追やられけり蟋蟀
とんぼうや岩切通す水のうへ

關東道者のよし野よりいづるに

とく〳〵の水も吞だか赤とんぼ
とんぼうや秋ともしなき眼玉

信州簑虫庵承和坊勸進

みのむしよ月の有夜は出てかたれ

月にも鶴人、花にも鶴人とあけくれむつみ交しも、いつしかそこの國にかへりて、能友ひとりうしなへる事を

秋はものゝ松見ても其人戀し
霧雨に小むろうたふはたれが馬

耳鳥齋ぶりの畫をかきて

蟷螂が斧九太夫やよこ車
松むしやひるをば何と瓜のさね
芋うりや月にわかれし秋の聲
からめくも秋の聲也夜はまぐり
日の辻や雨こぼし行秋のくも

北濱といふ題を得て

雲こぼす雨にもちらず市の秋
鰐のゐる海たいらかに秋のくれ

糸瓜の畫

洗へとや三千人のあきのみづ

をとこ山放生川のほとりにて

鯉桶の水そゝぎけり女郎花

一はせをの翁、加賀の一笑が塚にて、「塚もうごけ我泣聲はあきのかぜ」と。其後に駿河の府中、箍つくりの九兵衛といへるおやぢの死したるに、又此句を書て手むけられしは春なり。門人かれこれいぶかしく思ひ、たづね申けるに、答、九兵衛が死したる、頓に聞ておどろき、一笑を悼たる時の心に同じく、外にいふべき詞なくして認たり。世の人の噂はともあれ、我泣聲は春ながらも秋の風とおもふべしとなり。八文字を換骨して春となし申されし情、鬼神も虚空に聲をのむべし。

見ぬ戀や夜のあらしの荻をうつ
あきの風まづ荻に來てけたゝまし
雨過て庭の荻はらしづかなり
九つの花みな空しけいとう花
若たばこほしたりいせが家のあと
靑なしや薄匁わたせばあきの水

江戸靑山邊にて

南瓜の一番首や組やしき
世の中や紫蘇にまかるゝ唐がらし
唐がらし舍利に成てもまだからし
木がくれて大内山の唐がらし

自能、あるとき一巻の變化を説申されし序、物がたりに、むかし淨るりの作者近松門左衛門、國性爺といへる狂言をつくり出して、大あたりせし跡を、猶おもしろき趣向もがなと、枕をわりし工夫にわたる。其時の芝居ぬし竹田近江申は、作者のこゝろには左こそ存ぜらるべきか。去ながら大あたりのあとは、大体すら〳〵としたる事をなしてをかるべし。國性爺にてよほど德分あれば、一二年不當りしたりとも、我等式がたべゆほどは澤山なり。其間は古きものにても出し、其内には自然とよき狂言も出ゆ半。夫なうへ、それよりうへと趣向に趣向をかさねたらむ。かくもて行かば我家業は盡果申さむ。たゞ天然にまかされよと申たるは、一道に秀たるものゝ詞、諸道に通じ、俳諧の一卷の變化も、この心專要なるべしとかたられし。

ならの宿にて

鰆うつ宿の外面やしかの聲
雌にみせそ雜水にひたす鹿のつら
夜の明て山の高さよしかの聲
ひとしきり鳴子音して口は入ぬ
鳥有てけふもくらしつなるこひき
百舌鳥鳴て曉杉のしづく哉

谷風梶之助が畫に

關角力霞とともにいでける歟
あの腹にやどりしものか角力取
撫られて母に身をまかす角力哉
すもふとり丼ぶや雨のひる餉どき
のり掛の角力にあひぬうつの山
からくして關を出ぬ角觝とり

防人の名だゝる谷風等見いづみ川などゝ呼れしつわもの共も、早二代のものとなり、見物につれだちし好人の家も、既に二世三世の人に伴ふ。我身ひとつけとよまれし歌には似げなけれど

五十年角力を見たり福祿壽
大井子がめしも喰たか角力とり
出女の物ぬふかげや秋のくれ

不知明鏡裡

拔盡すしろき鼻毛や秋の暮
百里來て袴づとめやあきのくれ
妹がりの分別いでぬあきのくれ
新宅に聽わたるや秋の暮

大いそにて

鴫立てあとに宿引をとこ哉
たちもせで鴫二羽ならぶ夕日哉

嘆ミ深草裏

むし聞や古禰宜ひとり誘ひ出し

なくとばかり聞なば虫の笑ふべし

篩明てうれしき虫の聲聞む

肌いれてうづら聞けりかはらけ師

磯ばたや日のさす栗にうづらの子

風ぼう〳〵うづら見せたる草のはら

一宗祇師法師名月の句、ひとゝせの月をくもらす今宵哉　又雨のふりけるときも、此句を誦して用られけり。詞は古きを以て、心あたらしくせよとのしめし。いろは四十八文字みな切字也と、申おかれる故人の金言こゝにありと、淡々老人門弟にかたられし。

ぬれ色や飯(はまち)一濱朝の月

月の夜や聲細〳〵とあぶら賣

藏□(不明、物カ)亭の反古をさがしけるに、いとなつかしさもいやまして、かの貫之定家の兩卿、天王寺の鳥井にのこされし事などおもひいでゝ

月にうつれ忘れてしのぶ人のかほ

百千万劫菩提種

ひがんの蚊釋迦のまねして喰せけり

几十ぬし、須磨の行かへり九度になりし折、一集を催されし。猶たへず通行し玉へとて

見のこすな月見の松もいま二本

此二本といへる事たづねし人のありしにて、おもひいでらるゝは、いつの頃にやありけむ、殿下の君立入の去畫工をめし、御襖に須磨の風景をゑがくべしとなり。卽つかふまつりまいらせしに、能出來たり。たゞし月見の松今二本たらでやと仰あり。かの工は須磨のちかきあたりにうまれし者なれば、いかでかこの處の事、あやまりぬべきとおもへども、心すみがたく、其後國にかへり須磨に至り、月見の松をかぞゆるに十一本ありし。我畫て奉りしは九本也。ふしぎにも恐入て、御内の衆にうかゞひしかども、いかにたゞうち笑ひてかたられず。としを經て又承りしに、いつの頃にか、しのびの御遊ありて、よくおぼしめしこめられし事と、みそかにうけ玉りて、おどろき入しと、卽畫工のものがたり成し。

をさまれる月に鶴なく夜半哉

入月や鶍(いすか)のわたるあまの川

荻なりて月半天にさやかなり

有岡のさとにあそびし頃、呂東ぬしの案内にて、月もやどかるといひけむ昆陽の池の堤を巡れば、今宵の淸光いづくにかある、唯水面しろかねをうち敷たるにひとしく、一瞳一物の外さらに物なし。

影滿て池一輪の月夜かな

鎌かぢのまだねぬをとや秋の月

囊中自有錢

酒かふてかはらむ月の渡し守

野に立て月存分のながめかな

北上川に舟呼聲の夜毎に聞え

てさびしく、又あはれに秋の
さまを思ひ、國分氏のもとへ
申遣す。
舟に巴峽(峽)の月の猿よりも
不二庵伊賀へ、月見にまかで
申さるゝを
我みちの魯國の月見らうらやまし
ふしみ登ぶねのかしましき事を
名月はてうちんゆるす夜舟かな
信夫吞溟懷舊
水流れ人去て唯月ばかり
鐵屋几掌は万にためしき叟な
れば
ひとりかへる道又月も淸からむ
月の夜、墨江にて
我も見たり七十年の松に月
まつ宵や情のまじるうす曇り
おにつら曰。誹諧の道はあさきに似て
ふかく、易に似てつたはりがたし。初
心のときは淺きより深きに入、いたり

て後は深きよりあさきに出るとか聞
し。むかしは初中後を經しかど、今は
其修行する人だになく、心みなさきに
はしり、いつしかひともゆるさぬ上手
にはなりけらし。これをおもふに、誹
諧はたゞ當座あだ口にして、根もなき
いゝすて艸なりと、かろき事におもへ
るなるべし。これも又和歌の一躰とか
きく時は、かりにもあさ〳〵しくおも
へるは、ほいなき事にぞ侍ると。
名月や月の名所は月にあり
花雪と見捨〳〵て月の鴈
粟のはなふみし夜もあり今日の月
あかつきの雨にもあへりけふのつき
西みればまだ夜はふかし今月の月
我家池魚の災にかゝりて、人
人ひそみつゝしめる中、おの
れに過たる造作のさま、いか
ひあほう宮とや笑玉はむとて
足代の山兀としてけふの月

名月や更て皆鳴荻すゝき
月今宵荻も音せよ萩もちれ
十六夜や雲により添ふ月の痩
あさがほのかげかすか也十七夜
夜半興行綴一夜松
北野天滿宮奉納
御意に入む北野ゝ森のむめ紅葉
紺かきの火おこすかげや秋のあめ
あきの日のくれて馬呼ぶとぼし哉
山みえて秋ひとゝきの入日かな
仙臺しほせ布朴かたにて、和
歌の友のよりて、おの〳〵當
座ありけるところへまいりあ
はせしに、題のひとつ係りぬ
るに、ほ句いたすべしと申さ
る。
名所礎
衣うてやあつさはきのふけふの里
夜は夜とて箔やがつまの礎哉
若衆や近所のきぬたうち歩行
媒もきぬたうちけり宵のほど

雨催ひ須磨のきぬたの通ふ也

一良能曰。初心の修行は、いかにも無分別つよきとおもふほどの句をする人、上手名人の場へもいたるべし。初からおとなしく姿情とゝなひ侍る人は、功者といふ中途にて終るべしと、細川公の耳底紀(記)にもしるさせ玉へり。都ての藝能みなかく有べし。

から衣下手にうたせてね入けり

寺の碪念佛にあはで月白し

母のきぬたつま持べしとおもひけり

聞怨

留主の砧江戸へひとけと打たりけり

一雪中庵曰。ほ句を案ずるにこゝろにうかび、我にめづらしく、したゝめ見るに、不レ思も前人の趣向におなじやうなる句がいづるものなり。是かねて聞感じ、心裏にのこれるものか。又は案じ其境に行あふもの、故人の句に方弗(髣髴)たるあり。皆好の道よりいづるものにして初心惡功(わるごう)の入たる人の、他の趣向をぬすみて一二字を入かゆる事などゝは、混ずべからずとかたられし。我もちか頃、

後シテや月のおもても痩女　几董が句ににたり

飯だこや朝むらさきのひとしぼり　巴人が句ににたり

水鳥のかしらならべてあさ日かな　布舟が句也

猶去秋の句、ぼたもちや小豆のかたにあきのかぜ　と案じて、我もをかしく人もめづらしと申ぬ。後ふと江戸の春來が東風流といへる集中に、附合の句、ぼたもちはあづきのかたに秋の風　とありしにおどろき、句帳を脱したり。故人の句に作者のちがへるもまゝあり。かやうの事にや有けむかし。しかれどもつね〴〵の俳力をみて、人の句をひらふものと、古人今人の句に同巣の句をなすものとは、一がひにこゝろうべからず。人こそしるらめ。我何の事をいふにはあらず。世情のあらましをのぶるもの也。見む人ゆるさしめ。

樂頭の眉しらけたりあきのかぜ

吹ぬける鱸の口や秋の風

反かへる鯵のひものやあきの風

いつしかにかはく砂糖や秋のかぜ

北越のならはしを

三越路や雪に追るゝあきの風

八十島といふ所にて

あき風よのざらしぶりの歌聞む

洛の蝶夢、あづまの吞阿など伴ひ、すみよしの升市に詣て、高拜殿千珠滿珠の丘などおしへ侍て

松に月玉出の岸と申なり

おなじく十五日、四天王寺の念佛會、伶人の舞樂をみて

月さすやはちすのうへに舞のかげ

夜半亭有文の二子を伴ひ、すみよしにあそびて

たがうゑし松にか千世の後の月

日のいろや野分しづまる朝ぼらけ

木犀のおもひ出しては匂ふかと

杏谷子へみづから彫し石印をおくりて

おし分てめでよ花のゝ品さだめ

手折まじとても数ある花のはら

川こす人の直段をきはめて、八十文川九十文川などゝいふも

水に日の價や秋の大井川

義中（仲）寺芭蕉翁塚名録集

とりとめた風こそ見へね花すゝき

花すゝきふかれながらに日は入りぬ

一曾呂利は滑稽の人也。大（太）閤秀吉公有時諸臣に向はせ玉ひて、世に恐ろしきものはなにならむと仰あり。君こそ恐ろしきものゝ頂上にてけと、一同に申あげたるに、坊が曰。御前様ほど恐ろしからぬ物はなし。手柄をすれば御ほうび、あしき行ひあれば罪を御糺し遊さるゝ。よしもあしきも我心にあれば、君は恐ろしきものにこれなし。ただ世に恐ろしきものといふは、無分別ものにとゞめ申たりと申上ければ、公大きに笑はせられ、諸士もあつと口を閉たりしと。からくにの東方朔、我朝の杉本、あつぱれの俳諧なりと、するがの乙児はなしなり。

駒牽やけふ切立の白ふどし

琵琶と讀し手水鉢に

伯（博）雅に柄杓とらせんあきのかぜ

いさ華てきぬた聞たし塔のうへ

細脛や蘇覺ろ老もたつ鹿も

大かたの草におくれて尾花かな

江戸琢馬子をおくりて

まねくらむおくる薄にまつ尾花

一蓮二坊くずの松原にかける。この頃一般の才人恐ろしき詞をもて、針灸秘訣の諺をのみめづらしといひ出たるに、しらぬ人はしらず。知るものはいかに浅ましとかおもふらむ。下略

此しらぬ人はしらず。しる人はいかにをかしからむといへる。世上大かた此そしりのがるべからず。

川口逍遥

浅づまに鮪の雫をあびせけり

少将にかしらはられしふくべかな

なにがしの殿に似たるよたねふくべ

蕎麦咲て花の都とおもひけり

そばの花峰は浅間の夕烟

韮を踏てはおなじく惜小めろ哉

狩人にたけ守めでゝ山易し

二の足にふみ潰されしきのこ哉

故郷群牛引横休

いねかりて天地にこわひものはなし

ふくむ木を落して雁の はつ音哉
船たで(焦)る 烟のすへやかりの聲
雁鳴てきくのひと枝つぼみけり
花と呼ぶ鯛より鮭のもみぢ哉

九月九日、高津の宮に詣。

たかきやにけふは栗むす烟みむ
酒ことし 一二の船のきほひかな
雪も解よ不二見て過る新酒の香

細川玄旨法印の我も大回し三段ぎれの仕やうは習たれども、いまだせぬほどに、もはや一期すまじき也。人のしらぬ事つよくしたがるは、まぎらかしの下手の事也。

さればこそ花におもひし野分哉

紹巴が一段ほめて、扨かやうのほ句は重て御むやうなり。さあれば人がしたがりてあしき也。耳底紀(記)にかきたまへり。

孔明がやぐらの琴、よしつねのひよどり越、それらは無レ據事にやあらめ。今どきたま〳〵物おぼへたる人の三段切素秋などゝ好ていたさるゝは、きのどく也と魚汶のはなし也。

蛩ゝや露菊よりのちは花もなし
あらそはぬ秋とは菊の上手かな
菊簞笥通して起る野ぎく哉
露帶てあるじも立りきくの朝
馬牽て菊一本の所望かな
きくおなじからず然(しかる)につくる人
菊あはせ花ものいはゞ歎ずべし
鱸たゝく音は隣かきくの花
我ものと成て十日のきく淋し
起〳〵て菊に十日の朝寐哉
老みせじ〳〵と菊にこてふ哉

十三夜

名月の共夜は丸しけふの月
兎の子百日になりぬ后の月

畫讃

夕霧に立盡したるかゝし哉
大かたの月を見果る案山子哉
霞ませて尾上に見たきかゝし哉

清水うかむせ四郎右衛門かたに、はせを翁の一軸有。
松風の軒をめぐつて秋くれぬ
とこれ翁、はなやがうらにて遷化ありし前、九月廿六日したゝめのこされし物なり。これが祭を後々まで執行むと、二柳庵のぬし、あらたに松風會といふ事をはじめらるゝに

いく千ゝの秋吹わたれ松風會

たかのゝ御山にて

あさ霧や御廟にまいる兒の聲
うらがれて不二三尺のたかみかな

中山由男舞臺納

夜嵐もこの人の事千ゝのあき

雪中庵蓼太空鷹居士、九月六日身まかり玉へるに悼の句、
呼かはす聲や霞のうらおもて
と、はるの文のめでたかりし

も、ことしの秋のたよりはか
たくて
そなたぞとふり向ば唯秋の雲

暮秋

くれ〳〵て秋の行方や雨の音
翌をいかにさびしき秋もなごり也
あきの月九月も廿九日かな
初しぐれ露のうたがひ解にけり
うらぎくのそよぐ斗や初しぐれ
神のたびかしま殿よりしぐれけり
月はまだ有かなきかにはつしぐれ
初しぐれいはゞ關寺小町かな

おはりの巨舟ぬしを送て

たびがさによし降とても初しぐれ

一淡々老人の曰。むかし水無瀨の上皇の御に、春夏のすがたはふとく大きに、あき冬のうたはほそくからびてよむべしと勅ありし。我俳かいもこれにならひ奉りて、四季のほ句もその心をもて詠ぜむこそ、本情にかなひ侍らむかし。又堅の題はおもしろく、横の題はうつくしく作せむも俳かいならめと。

半時庵淡々二十五囘忌

しば〳〵と浪にいる日やむめの花 と書おくられしたんざくを取いでゝ

香は今も其ふたむかし冬のむめ

一古物がたりに細川三齋より 太閤樣へ獻上の兜、立ものは八日月成し。又千の利休よりさしあげし石燈籠、火袋のすかし八日月なり。物其わかち有ながら風流の心あへりしと、人々かんじ申けるとか。

爐びらきや泥鏝のひかりも八日月
としよりに來年を問ふ小はるかな
初しもやひと足すべるわたし守

夜半亭几董、はじめは春夜樓といへり。去とし東都へ下り、初代の夜半翁がすまれし石町のかねのほとりにて、雪中庵など俳諧有て、二代目蕪村のあとをしりて、夜半亭となのられしは、ひとゝせふたとせのうちにして、酉の十月廿二日、伊丹なる古川子の別莊にて、はからずも身まかり申されし事をいたみて

二度の名もうしや小はるの夜半の聲

冬日

日あたりや寒菊も子を儲すほど
たま〳〵に鳥なく冬のひなたかな

豐後の人の國にかへるをおくる人にかはりて

しぐれずに笠縫の島に見るまでは

花屋がらの事

一ばせを翁なにはのゆめと、むなしかりしたびやのあとは、御堂前花やのうらと斗にて、さだかに其處をもたづね申

人なし。我もひさしく此事に志有ながら、能よすがもなくてうち過ぬ。今年いかなる幸にや。おはりの千世倉蝶羅翁のふるきあとを、たづねばやとのおもむきにて、羅川十叟雄山の二三子、こゝろをあはせ、かろからぬ御しるべをもてかたらひよりしは、南の御堂前南久太郎町花や仁左衛門といへる人にて、元祿のむかしのまゝに家つゞきて侍るが、これがもちつたへし地は、はなやのうらといふめり。又、寸馬呼見の兩子もかの仁左衛門とは故有てちなみ侍れど、此家こそかの舊地といふ事をも聞侍らざりしに、ふと物の次手に此事申出せしも同じ頃にて、おの〳〵手をうちて悦にたへず。さらばかの亭をとかりものし、羅川十叟、これが主まうけをなし、石激雲亭、其席の事にあづかり、都て連衆十八人うちこぞり懐舊の一會を催ふし、はるかに翁のたましゐをまつり奉りぬ。又樵風といへるは之道の孫にして、蕉門の志を起し、花やのあるじも生木とて、これも我徒のみちにいらんとのあらましにて、かれこれうちかたらひ、そのかみ翁かれのゝ吟、かつ丈草のくすりの下と誦し申されしのち、たへてひさしき舊地にてかく文臺を立、之道の孫弟、はなやのあるじの一句を手向申さるゝは、祖翁の靈神さぞ嬉しとやおぼしめすらめ。風雅のみちたえず、因と緣との薄からざる事よと、涙もおつるばかりになむ。今そのおもむきをかきしるして、翁をしとふ人〻に、其古き跡の正しくのこれる事をしらしめ侍るもの也。

かれ野見しかりねのゆめや八十年
　　くすりの下をおもふ埋火　羅川

其せつ諸國よりあつまりし短冊は、みな花屋仁左衛門に納む。かつはせをの翁、元祿七年九月、ならより大坂へうつり玉ひ、十月十二日物故ののち、あふみのあわづ寺におくりし終

日の事實、おなじく花やかたに藏之。

大坂のばせを塚は、天王寺毘沙門坂の下藥師院といへるに有。即門人野破(坡)叟の造立にて、表の文字は堂上がたの御筆、うらの銘文は筑前の醫香月なにがしの作る處也。六行會といふものにくはし 其のちいかなる事にや、野破(坡)門人梅從といへる人、天王寺椎寺のうしろに塚を立しのちは、此つかたれまつるものなかりしにや、寺も今は時宗となり遊行寺と呼ぶ。塚も墓所のせと口にありし。明和七年庚寅の十月、寸馬舊國こゝにたづね、位牌なども往〻野破(坡)の納しをもとめ出して祭事三四年、その〻ち加州の三四坊二柳、この塚を寺の前にうつし、年〳〵會式俳諧あり。

翁忌

しぐるゝやむかし夜伽のかゆの音
はせを忌や長良の山もけふこそは
芭蕉忌やさゝ角が餅の冬牡丹
行燈の糊につたふや冬の蠅
御命講やあさ日を拜む御上人
おめいこや女中の法花けふばかり
人我て念佛申十夜かな
若後家のことしも出來て十夜かな
ちりめんのおめこ紬の十夜かな
雪中の叟、夜ばなしに云。句のあたらしみといふは、古よりいでゝ別に奇を求むるものにあらず。ある娘の子のいと寒かりし日に、友どちとの咄しに、風も寒ひかしてふところへ入たといひし。去ば家はうごかぬ處、肌に通るは本情也。ふところへ入るといふがあたらしみ也と申さる。魚淡の日。この頃も去寺にて古後(御)達のよりあひて、姑どもは、かへつて姑どもを(※)

姑ゝ今どきの嫁共は、かへつて姑どもをなかせます。左樣〳〵わたくしも隨分きげんをとるが、當世じやと申あひたり。そしるは本情にして、なかせらるるとあやまりがほに申が、あたらしみならむと、倶に笑ひて茶を過しぬ。山幸のいへる。巨燵にいくたりもあたりてねるは、きくの花の咲たやうにと、支考がかけるも是也と笑ひて、又一腹を過す。

嫌の灰の暦にかゝる冬至かな

山本羅川七廻

亡人戀しき折ふしごとや、ひとゝせは冬の日、又のとしははるの日とかぞへ〳〵て、ことしのけふの手むけには

はや七部のち猿みのにしぐれけり
京淋ししぐれ狩して遊ばふよ
風吹ば木にもかやにもしぐれけり
落付てうしの物喰しぐれかな

夜半几董身まかりし事を、江戸の成美がかたへ申遣とて

おどろけやおどろくな此世のしぐれ
師走野や鶴追のけて麥を蒔く
影追ふて破魔矢ほしけり冬日向
正面に祠堂のぬしや御取こし

しれる關取のとし老て、杖にすがり、本願寺へまいりしをみて

御取こしや三つ輪くみたる角力とり
御火たきや宮司がをとこの鼻の下
芥にもならで果けりかへり花

一良能云。世に來山が、門松やめいどのみちの一里塚　といふ句をもて禁忌なり。いかにあたらしき事をいはむとて、風雅の罪人になれりと云人あり。これは來山がすみける家のうら家にすまゐせしものゝ、大卅日に身まかりけり。來山が隣は家ぬしにて、不斷は庭を通せしかど、元日なれは翌こそと申。う

らのをのこはやもめにて、遠き親類などのとり賄たれば、はやくとり仕廻たき人なるを、來山聞てきのどくがり、我は世をのがれたる風人なれば、かまひなしと許して、元日の夕がた我家より、野おくりを出しやりての詠なるよし。夫を罪人といふも又道を重んずるの謂にて、殊勝には侍れど、物は其時の様を能〻考ていふべし。人の句を聞むもおなじ。

口切やつる松太夫いまだ來ず
くちきりや御次はならのあられ樽
御師どのに灰かづけゝり麥の畦

　羅川十三廻
十三年その霜月のしもはおく
鴨ながら霜ふるひけり明がらす
朝しもやおしなべてかものぬはれ伏

　伏見船中
むろにねるむめさへ有に箔のしも
うか〳〵と白きく老ぬしもの朝

　岡橋叙夕十三廻
十七年霜置松はそれながら

　上毛湖鏡悼
みなかるゝ草とはしれど此別れ

　天満如瓶一周
　歸厚堂のぬし身まかりける又のとし、かの舊庵を訪ひて
石蕗の花も其すみ染にさけよかし
殘菊や小雨のうつるにし日かげ
ほし舍る冬木の梅のたち枝哉
水仙の能く雁かもに煮られずよ
水仙やひともとの花とおもはるゝ
大空は煤にかすめり寒のむめ

　中山與三郎がやぐら初に
　むかしは嵐、今は中山、三代のやぐらぬし、是優門の世家といふべし。
三代ぞ外になにはのふゆのむめ
すみよしや松の外には大根畠
こがらしや白衣の僧の門に入
松苗にこがらし落てしづか也
月もるや榧のはな散土手のうへ

一活〻坊舊室、傳馬町の新道にあられし時、門人たれかれ寄つどひ、俳道の奥儀をたづねけるに、其答例の高調子なりければ、門人の曰。今少しひきく仰られよ。外面に人や聞ん半と申せば、活〻笑て、これほどに申ても熟得なきかたも有に、此みち執心にてたち聞する人はすせう(殊勝)也。呼込てもきかせ度事と申されし。活々を悼
活〻の字もたのみなしかれ尾ばな
はつ雪や家の工に酒汲む
やゝ有て雪より暮るゝ野山かな
雪一丈かゝる日にのめおにころし
鯛あげの聲横たふや雪のうへ

　駿河の乙兒國にかへり申さるるに、我もかみつけにたびだ

つとて、雪中庵にして手をわかつ。

いざ雪のはなし契らむ不二淺間

蝶有てこのふる雪に舞はゞいかに

　家のわざに行來する事四十餘年、半はくるしみ、半はたのしむ。

月の富士雪の不二とてはたびいくつ

乙雪や未進ねがひの小百性

雪に鶴ゐん居の轉ぶ所まで

鳴貫の雪かきわけて居こし哉

笘もろやたる氷をたゝく礒の浪

一瓢(蓬カ)生の云。人に句を見せ相談に及ぶとも、しれた事にても書て見すべし。ことばにては聞あやまり、いひ誤にて、所のたがひめ五音の不通にて、句の姿情わかりがたく、あたら句を失ほどに受とらぬ故、捨る事まゝあり。

智者福者中入たりふぐと汁

一むかしの判者はいかにも覺悟おとなしく侍り。つゞきの原に、

ちる梅を梢に返す羽蟻かな

宗祇の発句、ちる花を梢にかへすあらし哉　此姿情のわかり無覺束に、なにともかゝず。左もあしきにあらず。他につがひ侍らば下にたつ事かたかるべし。と素堂判也。

金屏にことしの雪のひづみ哉

さくさくと薬喰ふ馬や夜の雪

　三世雪中庵蓼太居士

　さみだれやある夜ひそかに松の雪

　右の発句にめでゝや、明朝の雲南　裡(程)劍南といへる唐人よりからうたおくりしと聞て美名たかくからくにゝさへ、もてはやしぬる事このみちの規模、分て雪門のほまれなるべし。

雪のあとかゝげて松の月夜かな

雪の日や火桶に硯うちわたし

　雪中待人といふ

うさぎ煮て樵の音きく夜哉

鷹の殿鳶が娘を獲(えもの)かな

ひる過や氷のうへのはしり水

　念阿坊半僧半俗といへる人の、よしの山に分入、とくとくのみづのほとりにて、一つの石をひろい得たり。其かたち西行に似たるも、風流の志こりし處かとて

氷うつて得たりしや此玉かしわ

一本のかしわにさはるみぞれかな

ひとりねや御袖赤坂のかし蒲團

　夜話

幸斎がはなし何くく紙ぶすま

つもる事しらで霰のはしる哉

獵人の火蓋をはしるあられ哉

炭はねて庫裡に狸のはしる也

　終年帝城裡不識五侯門　といへる事を

ほだたくや殿様しらず年しらず

寒月や經よみしうる　法花坊

一山川舊跡したしくたづね入べからず。まして私に名をつける事なかれ。主あるもの一針一草たりとも取べからず。山川江澤にもおの／＼ぬしあり。つとめよや。四季いひ習たる季の詞の外、めづらしく季に用べからず。世の人三歩が二も合點のうへならでは、季に遣ふ事なかれ。とは、はせをの翁行脚文のおもむきなり。

たゞし、四季のことばにうち添て遣ふは、又おもしろからむか。

上總戸の釘あらは也冬のつき

冬ごもりこゝろに須磨の月見かな

かれしやら桂もみえず冬の月

有　戀

けふに成て叶はぬ戀や冬の月

冬の月夜どに照とおもひける

ふゆの月椋の梢をはなれたり

冬の月人にくもらぬひかりかな

寒梅や箱はづれて五三輪

むめさくや冬の月夜の朝ぼらけ

尼といふ題にて

清盛の文張てある火桶かな

した／＼と雨ふる宵のさむさかな

藍に似て寒し野づらのたまり水

あら寒し／＼と淺間見あげたり

吹立る鴻のうは毛の寒かな

あづかりし人の小判の寒かな

つとめては日を焚人の寒かな

あら釜の鉄氣たき出す寒かな

佛につかうまつるべきとし頃なればと、ことし神無月の末、我淨土門の尊き教を受侍りしかど、いまだ世のわざののがれがたきまゝに

十念につゞく霜月師走かな

尾上菊五郎が京へのぼるを祝して

わざをぎのいさをしにならして、なにはのさためでたく、都へかへりのぼる事を見はやして

東風吹むたよりまつ也梅の冬

蓋つけや女にわたるちからすぢ

樓高し寒夜に聲をさらす人

寒聲の若は念佛申けり

ある書を讀て

生葱や小仙の世を爪はじき

丸盆につや／＼白しあらひ葱

最上川この月ばかり大根ぶね

大根引て松風の音ばかりなり

あくる戸の人より先に落ばかな

聞なれて掃たく宿のおちばかた

これは道因法師の姿を書にかけるなり

むさし野を二日吹るゝおちばかな

まつ戀の題に

こぬ人やとにあかつきの鐘さゆる

しのぶこそ風情あれといひし

に
をし鳥にしらすや鯖のおもしろみ
かもなくや衣〳〵の戸のうしろがみ
鴨の毛や吹亂されて、水に入
ほしみえてかさゝぎはらむ夜頃かな
千鳥鳴キつゞいて老の念佛かな

三州國府柳雨子所持、あはぢ
しまといへる貝盃に

挨ほして見よや繪島の浦千どり
聲さなてねぶとにさはるちどり哉
雨止てうしみつ過るちどりかな
寒さうに人はいふ也あじろ守
なまこもし柳の露のかたまるか

一手にはとゝなはされば、天地の神にかなはず。我人ともに受さる處有べし。かのいせの團友、さぬきの浦にて、「なまこともならで果けり平家蟹　との初案認ながら、いまだに心行ぬ事のあればこそ、其夜のゆめにあまたのかにゝせめらるゝと見しかば、再案、「なまこともならでさすがに平家也　是かげ清のうたひにも叶たる手には自然と備り、句ぶりもかく別也と、我心中に服(服カ)せしかば、心神ともにおさまり、其夜はいさゝかのゆめにも見ざりしとか。又キ角が、「此木戸や錠のさゝれて冬の月　平家ものがたりのうちに、此木戸は錠のさゝれてゆぞこなたへ。下略

酢をさせば糊浮にかへるなまこ哉
網子むれてよみ潰されし海鼠哉
ある僧の女の手からなまこかな

かつらぎの大君の畫に

妥女より先へまいりしなまこ哉

つれ〳〵を謡て

しやせましかくやあらましふぐと汁
叱られし鰒も喰たし母戀し
洗ふ事ふくは外様にまかせたり
鰒の扉をうつゝや媒の亂れ客
たれやらが歴より白し洗ひ鰒
羨房にさたばしするなふぐと汁
分別の字に抛むふぐの腸

まぬるとしの冬、三島の驛に
とまりし折、はせを翁のすみ
つかぬとありし詞もおもひか
へして

置ごたつこゝよと不二の見ゆるまで

我は七十、婦は六十。

かげぼしやこたつに向ふつゝ井筒

老情

脱まいと一町廻る頭巾かな
くろかみと見ようば玉の投頭巾
あかゞりや君にひかれて雲のうへ

加茂の明神勸請の祠奉納

水潜る色も丹塗のもみぢかな

晩年

猫板にかくてぞとしのかくれ里
まちかねて痲屋にほむらの湯婆哉
むつごとも古きたんぽのもれやせむ

石町のかねに枕をそばだてゝ

冬ごもりわづかに石蕗の花をみる

拜領の鼠馴付ぬ ふゆごもり

冬ごもり蠅の古巣をながめけり

七日みる若菜の巻やふゆごもり

過さりし人の事を思ひ出でゝ

暦かへばその月と日は有ながら

都のさまも恭うちはてゝ、け
ちさすばかり大路のゆきゝの
きは〳〵しくも

ちやつせんや宗左が門ドもうり過る

ひとゝせを風にとられつ暦うり

鏡屋のかどに立けりこよみうり

うしとらと恐ろしき野をはちたゝき

鹿ひさぐ家ともしらすはちたゝき

山里はさびし都もはちたゝき

何踏だ念佛なるらん鉢たゝき

いとさむしと見ゆる夜の

辻君に衣かられなはちたゝき

北は黄に石蕗咲ぬらしいぶき山

一支考の曰。風雅のかたはしをこゝろへたるもの、たま〳〵名家の一巻を見て、此句はをかしからずその句は味うすしなどいふあれど、一巻につらぬる事、あながちに一句のうへを論ぜず。ひと度は雨となし、ひと度は雲となし、中品の眼をとゞむべき事を恐るとなり。

法然上人の語を聞て

寒念佛ヨのさめたらむほどは聞け

師走の雨世にある人のほめ申

寒椿咲てちりけり伊豆が崎

大籔や竹の子はらむ寒のあめ

かほみせや衣に掃るゝはしの霜

かほみせやひいきの馬をまちかねる

寒の紅粉團十郎へまづ参る

すゝはきや盥のうつる日のひかり

佛名のおはりに僧の笛聞む

かん明や三味線ばこにものゝ音

節分の豆こぼしけり角力とり

一防人丸山權太左衛門が角力の高名はいふも更也。全躰心やさしく風流にして、雪中二世吏登の門に入、俳諧のほ句をなす。あるとき連中の望にて、我手のひらを墨にて紙におし形をなし、其かたはらへ、

ひとつかみいざまいらせむとしの豆

かれが身の丈六尺三寸七ぶ、手のひら長さ七寸九分あれば、よき祝の句也。あら〳〵しきわざのものながら、かく風流なりしも、いとやさしかりける。

あひる三度巡りて暮るゝ冬至哉

庚戌十月、はせをのやどり塚にて

我戀は松をしぐれの十二日

茶のために月うちならす氷かな

川風さむき夕ぐれ

とらへよと君にすれあふ頭巾哉

めうがやに一夜遊ばむとし忘れ

としのいそぎとて、餅つくあ

らまし、井のもとにたちまふ
下女どもの我はがほなるも、
晏子が御者の風情なるにとを
かし。

かたはらに尻なき妹や米洗ひ

橋の木に引さきし紙子哉

寄床し鴨が鳴てもすみだ川

歸路寒

雲助が衣紋つけたる蒲團哉

大佛の窓よりたかししぐれ不二

たからぶねうるや宵間のひとあらし

あはれいかに寶舟うる人のさま

紅うらの衣もらひけり若たりけり

箱根明朝又一年

花ちつてのち月雪をとし忘れ

とし忘れつの國のなに思ふらん

面うちも見よや師走の人のかほ

たれかをしむ師走の月も十六夜

こがねなる世は面白し年ひと夜

世のいそがしきを忘れむと、
なにはの大寺にまうでけるに、
としのをはりのたまゝつりな
どいへる、ふる事のおもひい
でられ、むすぶちぎりのすへ
はかはらじとよみし、しら石
玉出の水にむかへば

親にあふとしのかめ井の水かゞみ

行としや白髪をかくすおやもなし

としの市子にまじりたる餅かな

年の市たつうら町は月夜かな

としの眉いざ傾城につまゝれむ

寢覺せぬはるの夜ちかくなりにけり

覺しらで三日先みつ　とは松
江の叟の不二の雪みたりし、
風流の觀相もおもしろけれど、
我は脈破(波)馬援が老壯にな
らひて、猶いくとせの東行を
願ふ。

髪髭も不二と常盤に　六十五

とし忘貝ひろはむと、なには
のうらづたひして、すみよし
の社にまうでけるに、生茂る
松どものみどりなる枝うちか
はすときは木、きねがつゞみ
のうらかぜにひゞきて、世の
外の心地ぞせらる。まとや無
事をもて寄特とすといへる御
神託(詫)も、ひとしほありが
たくて

としのくれ住吉はよき宮所

年ひと夜あらおもしろの飛鳥川

攝州ふく原、沙月九十才にて、
十二月廿五日身まかり申され
しに申遣す。
人壽百歳のくにゝうまれて九
旬を一期とし、はるちかく見
やりてもとの國にかへり申さ
るゝ翁をうらみて

たる事をしろや命のとし仕舞

異方の災にあへりし去年のく
れにひきかえて、あらたなる
家にはるをまつとて

めでたさや大卅日の夕がらす

立春在蠟(臘)

はるや來しけさは五つの花の雪

餅つきやこしきがうへの山かつら

既　春

初とりやめかりの息のゆるみより

四季のほ句千あまり、すみつきの事ぐさ百三十かさねのもの、みづから筆とりかき納て

ふたおやにみせたし今年六十九

寛政二庚戌年十月

それ大和歌は天地ひらけ初しより、地の花の天にはじまり、天の月の地にすめる、天地和合の大道たどちに詞となりて神を貴み君をあがめ、世を治め身をおさむる道とはなりけらし。（春は）先梅かざすより、桃の雫の盃にしたゝり、菖蒲葺軒には、のぼり甲なんどを立ならべて、よこしまの氣をしりぞけ、菊の白露は淵となるらむいく世のすへまてをいひとぶき、一陽來りかえる頃には、おさなき人の髪を置初、袴着そめなんどして、神に詣せんとて出たちたるを、老たるひとの杖に腮（鼓）かけて、見送りゐたる心のうちこそたのもしけれ。四海浪しづかにして、橋わたさぬ道もなければ、往來に足をだにぬらさず。かくおほん惠みふかく治る國のためしには、民くさうるほひて、俳諧のつらねうた（をつらね）なを万歳をうたひて、人皆鶴龜の齢をしとふ。かゝる御代こそあふぐべけれ。

おにつら

（此一文は鬼貫の『ひとり言』『祝』と題せるものを、跋の如く附載せるなり。）

附言

安井舊國名政胤華名宗二號同心齋又稱大江隣其先出村岡之清流在武門而姓於小島國初卜居民間從事銀山之役政容胤道頓之系改姓安井拝北海諸州之産大啓交易場又享保中政勝創東都脚力之職以令末葉參商讓業於舊國職道益盛居士舊國其性清雅九歳班職中交替兩都者都七十回黽勉不弛者殆六十年以是久任職掌流範于當世大起家聲垂訓于后昆加旃于歌道于俳諧于鎖術于筆鋒各倚名家探其秘賾専名俳流不必洒其伎而常言夫俳自然聲感事述其志耳不必潤飾譬如花木天生者自然

安井舊國名は政胤、華名宗二、同心齋と號し、又大江隣と稱す。其先は村岡の清流に出づ。武門に在りて小島を姓とす。國初め民間に卜居して、銀山の役に從事し、政容道頓の系を胤ぎ、姓を安井と改む。北海諸州の産を拝して、大に交易場を啓き、又享保中政勝東都脚力の職を創めて、以て末葉をして參商せしめ、業を舊國に讓て、職道益々盛なり。居士舊國、其の性清雅、九歳にして職中に班し、兩都に交替する者、都て七十回、黽勉弛まざる者殆んど六十年。是を以て久しく職掌に任じて、範を當世に流れ、大に家勢を起して、訓を后昆に垂る。しかのみならず歌道に、俳諧に、鎖術に、筆鋒に、各々名家に倚つて、其秘賾を探り、専ら俳流に名あれども、必ずしも其伎に泥れず、而して常に言ふ、夫れ俳は自然の聲、事に感じて其志を述ぶる耳、必ず

可愛剪裁者容態可惡俳之所貴在語近於耳意徹於神也可觀其志操卓異緊如是一時居士遊于松嶼臨扶桑三絶之妙境沈吟苦思未得一句夢寐有感著懺悔一章以演其所自得又嘗西上之辰采途於北陸凡所經歷山川之美驛程之勝悉圖画之以貺未見未聞衆庶其它所鈔録不勝枚擧也予素有師檀契識居士者熟今見俳諧懺悔一帙幸書居士生平萬乙聊供夫懺悔之一端者而已旹寛政庚戌中冬朔　阪陽城南圓通蒙光誌





しも潤飾せず。譬はゞ花木の如し。天生の者は、自然にして愛す可し、剪裁する者は、容態惡む可し。俳の貴ぶ所は、語耳に近うして、意神に徹するに在りと。観つべし、其志の卓異なる、概して是の如し。一時居士松嶼に遊んで、扶桑三絶の妙境に臨み、沈吟苦思して未だ一句を得ず。夢寐感ありて懺悔の一章を著はして、以て其自得する所を演ぶ。又嘗て西上の辰、途を北陸に采り、凡そ經歴する所、山川の美、驛程の勝、悉く之を圖画して、以て未見未聞の衆庶に貺ものす。其他の鈔錄する所、枚擧に勝へず。予素より師檀の契有りて、居士を識る者熟めり。今俳諧懺悔の一帙を見て、幸に居士生平の萬乙を書し、聊か夫の懺悔の一端に供ふる而已。時に寛政庚戌中冬朔

阪陽城南圓通蒙光誌す

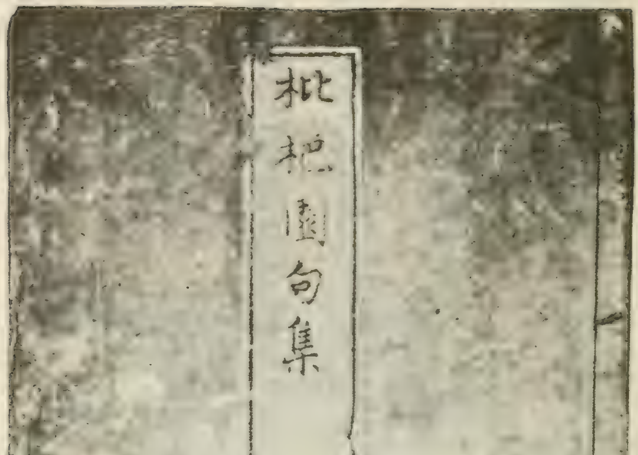
寛政二庚戌年十二月

大江隣藏板

江戸　西村源六

大坂　藤屋彌兵衛

京都　橋屋治兵衛板


枇杷園句集
乾

士朗先生以刀圭之餘暇。慕蕉翁之風。至老益篤。雖身在城市。心常遊丘壑。其所居四窻皆有名。南曰朱樹。一根赤松。時掩比鄰。西曰枇杷園。疎雨蕭々。閑彈四絃。如珠落盤。故世或稱琵琶園主人。北曰緑蘿。黄鸝所宿也。東曰望山月。猿山新月。影升居樹。先生對之曰。是吾煙霞疾也。蓋其賞心殊在月下。故其所咏最多。嘗遊須磨。又吟富嶽而歸。先生之號。幾與二勝相並矣。此集則卓池椿堂蕉雨宇洋松兄所輯也。書成。謂余序之。顧余與先生往來最久。是以不題其集。而状其行如此

文化甲子之秋 [illegible] 一句井

枇杷園句集巻之一

春

年内立春

としの内に春は來にけり靑蓮

歲旦

何事もなくて春たつあした哉

元日子日

松はまだちつぽけなれど花の春

佗盡し〳〵てぞはなの春

賀

としつむや年〳〵に年の美しき

若菜

老がつむ若菜をひとのもらひける

古のわたりにて

道くさは蠶の子もする梅若菜

齋

臘月六日の夕ぐれ杉村といふ庭をゆくに、杉の生垣引をりたる、たゞにこのもしき菴あり。宵月の西にといへるけしきして　やがて齋を打出たり。

世わすれに齋打らん月と梅

梅

澤山な月日が出來てうめの花

花さいて梅をらぬ日はなかりけり

江の上や二人してをる梅のはな

白梅の大げしきなる野中かな

筑州山鹿のさと秋枝氏求に應じて若ゑびすといふ事を

釣のいとも香に匂ひけり梅の花

きたなきが人のこゝろからうめ乞食

九岳亭

うめがゝや藪の中まで掃ちぎり

初瀨にて

貫之の草のまくらぞうめの花

梅がゝやかたじけなくも宵月夜

芭蕉翁肖像開眼

眼も鼻もひらかせ給へうめのはな

月前

からびたる影の藪木のうめの花

暮雨巷法會

散うめはみな墨染の匂ひかな

五十は山の麓、六十は山の半腹、老の山路大儀にはあれど、そろ〳〵まゐる。つゞいて來させませ。

山ふるき春あり梅の下傳ひ

鶯

ほうと啼鶯遠し峰の松

鶯に霞のかゝるゆふべかな

ゆかしきは只鶯のこゝろ哉

北の小庭に鶯の來りたりとて、庭掃のをことの告たりければ

鶯をもどすな梅に垣ねして

鶯に清瀧の水しづかなり

どこでやら鶯なきぬ晝の月

柳

青柳にうき世の塵はなかりけり

伊勢にて

青柳のあめや小家のひとつ口

青柳や暮て啼續淀の犬

矢矧にて

青柳の東海道は百里かな

若草

われに句なし若草みゆる塘哉

霞

とし寄のほく〳〵とゆくかすみ哉

古馬のきげんなほりぬ畠がすみ

初潮

蜊蜆貝の初潮にこもる霞かな

春雪

はるの雪鳥のさはらぬ枝もなし

旅人よ雪はふれども春の空

土山にて

消のころ雪にもあそぶ子供哉

春雨

大佛のあめを見にゆくはる邊哉

春風

明日も出んあすも野に出ん春の風

はる風やむねにあてたる檜がさ

陽炎

陽炎を淋しきものとしらざりき

かげろふやつぷりと落しかたつぶり

春月

春の月雉の遠音に傾きぬ

春の月松にこぼれ竹におろ〳〵す

槲すれと鳥がなく也春の月

花

とし〳〵や花守やどの薪一駄

絶〳〵に花見るやどの茶汁哉

散來るを花と見てこそ目はさむれ

袮といふ所にて

このもしき庵やさくらにさ(ぎ)ひかへり

虎足菴

つく〳〵と見てをれば散る櫻哉

芭蕉堂新成矣。肖像安置し奉りて

蝶鳥もみなやすげなり花のかげ

駒吳井

よきことはいひたきものよ花のかげ

宇津の山にて

よきほどに花のかげある山路哉

問たきは花盗人のこゝろかな

芳野行

甲子吟行に曰、ひとりよしのゝおくぞたどりけるに、まことに山深く白雲峰に重り烟雨谷を埋んで、と書れたるが、其雨けふも降出づ。おぼつかなき欠道を分入て、とく〳〵の清水のとく〳〵と聞ゆるをちからに山をくだる。つら〳〵此西行菴のさま清水のやうを見るに、とく〳〵の音心にひゞき、散かゝる花袖に清し。芭蕉翁の、こゝろみに浮世すゝがばやとの

たまひけるを思ひ出るに、身はすゞろに寒け立ぬ。されば晝はわれ〳〵が訪ひ來るにも淸閑をけがすべけれど、夜はまことに常住の月澄て、心もいとゞすみわたりぬべし。

世を捨にありくさくらの山路哉

嵐山

松さくら一木置なりあらし山

花七日ものもくはさぬ嵯峨の宿

ふたゝび嵯峨にゆきて

淋しかれとけふこそおもへ花のかげ

木母寺

花に鉦いかなる罪のほろぶらん

年〳〵に花の見やうのかはりけり

眉山の花見むと、豐宮崎の文庫を過て水に添ひて山村に至る。かり初に分入る山のやがてすまばやとさへおもひければ

花の木にむすびかけたる菴も哉

はなの事いひ〳〵もどる山路哉

歸路

こゝらの土は鐃噴ふ土ちやに鎌まかしやれ、とうたひゆく童女に案内させて、辛洲の神宮に詣づ。

燒塩の辛洲のさくらけぶりけり

王野行

王野のやうをみるに、しづかなるを躰として淋しきを用とす。鳥の樹に啼水の岩にむせぶ音、いづれか淋しからざらん。されど躰は一にして用は百千にわかる。百千にあそぶ人猶多しとせず。況や一にあそぶ人をや。世のうきよりは住よかりけりと住る人にやあらん。ちいさき松の菴に文机の外見るものなく、かたはらに同じさましたる僧のありけるが茶を煮る。いかなる人にて渡らせ給ふにかと問へど、うち見たるのみにてものもいはず。うらやましき栖哉と、そこの石に尻かけて、

花の雲これらも閑ならざるや

いかゞとおもふ心より、かく申出侍りぬといへば、あなかしましとて、かたはらに有ける僧の戸をさしこめたるこそ、いとどこゝろは床しけれ。日は西の山にかくれて見るものみな朧〳〵しく、小倉の山のをぐらき木の間にぞなりにける。

朧夜やおぼつかなくもほとゝぎす

と口ずさみければ、かの僧の出來りて茶のよく煮へて侍るぞ、しばしとてむかへられたる、いとうれしくてたちいりぬ。

涅槃會

これほどに見事に死ねば佛哉

盜人の返してゆきぬ涅槃像

薪買にゆくひとゝへばねはん哉

菜花

菜の花に大名うねる麓かな

桂五亭

菜の花にそめよすゞめの袮衣

かくいひけれども視すゞめは
させるけしきも見へず、子雀
は先に心得て

菜の花に口ばしそめて啼雀

梅に見て菜の花咲はぬ鳥もなし

戯人

戯人や小さき袖をうち明て

歸雁

三夜二夜鳴絶て空に雁一ツ

西洞

いま一度堅田に落よかへる雁

熊谷にて

鳥雲に入る熊谷の塘かな

蝶

つまゝうとすれば蝶ゆき蝶とまる

菫

すみれ草けし人形をこぼしけり

凧巾（たこ）

凧巾（たこ）かけてさびしき夜の柱哉

蛙

浮しづむ夜のけしきを啼蛙

人もふえかはづもふへて山家哉

燕

乙鳥の媒にもならぬ小貌かな

塩木つむ中を燕の往来哉

雉

かへり来て啼か焼のゝ雉の聲

ほろゝとは花に雉なく拍子哉

鬪うつりしては又なくきゞす哉

幻住菴にて

松もとの雉聞へけり菴のあめ

雛

ひなの鶴花のかげよりみへそめぬ

すゞめ子も来るや雛の膳まはり

桃

伏見にと日くれて来たりもゝの花

汐干　久両山の麓にて

汐干ともしらで過ゆく波間哉

藤

藤のはなながくもがなとおもふ哉

客半日の閑を得れば、あるじ半日の閑を失ふ。されば閑は得がたきもの也。小原の霜にともなひ、高野の霧にまじはりし後世菩提の修行者も、閑を得るに骨をりければ、柴引むすぶ草のうちに松の枝折くぶるけふ半日の楽は、主人もゆるし給ふべし。幽篁に琴を弾て月をのみ友とすといふ、けふのわがこゝろばへ也。

山藤の棚はしかけし住居哉

題しらず

ふうはりと鶯は来にけり春のくさ

父母のありかを竹になくすゞめ

美しき砂に小松のみどり哉

月花を捨て見たれば松の風

花とりやさらでも竹はみどり也

善光寺に通夜こもりする人の念佛の聲

は、まつ風にたぐひておびたゞし。夜明るまゝに見れば老たるひと牛に過たり。まとに佛の手をとらせたまはではと見ゆ。旅になれたる衣の袖うちはらふけしきもなく、よろぼひ出て群集しけるぞかたじけなき。

朝な〳〵虱掃出す御堂かな

暮春

あさ〳〵は寒し春ゆく荻の門

ゆく春をあはれむ竹の日影哉

椿堂輯

枇杷園句集 巻之二

夏

更衣

けうこそは父のもの着ん更衣

老懦

更衣人のけしきにおどろきぬ

卯のはな

卯のはなもしらで垣ゆふ男かな

時鳥

美しき空や高音のほとゝぎす

ほとゝぎす思ひ捨ても月夜かな

むら雨はむら降もするを時鳥

住よしの橋かゝりけりほとゝぎす

野にやまに身は三ツもあれ時鳥

菩提山萱堂にて

念佛を米かむやうにほとゝぎす

なかぬ間よ空一ぱいのほとゝぎす　とは丈草法師の風興なり。こよひの月殘霞につゝみて、ほとゝぎすの來べきけしきなりとて、二三子は例の瓢携來て、松下の飲に蟹の足とりちらしぬ。

迎には誰をやらうぞほとゝぎす

若葉

逢さかやいつまで寒きうら若葉

御塩殿にて

御塩荷をつくる榊のわか葉哉

茂

たう〳〵と瀧の落こむ茂り哉

灌佛

尾花が崎をゆき過るに、山のかたはらに旅ゆくひとの結縁にとて、むしろの上に御坐して花御堂をつきすへたり。

道ばたで佛はうまれ給ひけり

竹子　蝸牛

たけの子や子供たてこむ寺の門

眠たさに竹の子をりに出にけり
伊勢が家はきのふうれたり蝸牛

牡丹

どく／＼と牡丹つけこむ塀の内

芍薬

五六代芍薬つくる山家かな

芥子

白けしに窮屈もなき小家かな
あらし過て又咲出たりけしの花

萱花

萱生ぬはや花咲ぬ露もちぬ

諫鼓鳥

閑古鳥青葉まじりの花の中

蚊帳

連日のあめに日たくるまで
寐すごして

餌ひろふすゞめのありく蚊屋の外

螢

宵の間や大竹原をゆくほたる

粽

此殿やむかしながらのさゝ粽
うれしさにいくらもほどくちまき哉

五月雨

五月雨のいせに鐘なき夕かな

萱津の里

さみだれがやめば屋ね堀る烏哉

粟手の森

ひとりたつ鷺の白さよ五月雨

竹酔日

たけ植る日もひとの來て遊びけり
竹うゑてまた植にけり萱のはな

竹なき庭は人の住居もきたなく俗なりといふいにしへ人のとの葉をきゝ覺て、俄に小さき竹を植たれば、したゝかにおもしろき人とはなりたるつもり也。

たけうゑに來た貌で啼すゞめ哉

青嵐

むしろ取てたてば舟ゆく青嵐

青田

うゑて去る山田を鹿の通りける

いせ吉兵衛が茶店にあそぶ

田を植るひともかへりぬいざゝらば

松ざかにて

雨雲の垣鼻ゆけば青田かな

水雞

さまよへばくいな啼出る草の門

古井のさと雨ゝ風ゝ亭にて

こゝゆかむ水雞の小田といふ處

紫陽花

紫陽花やみやこを雨の木間より

夕がほ

夕がほやもたせかけたる老の杖

鵜川

待ほどもなくて過ゆく鵜舟哉

金花山の麓に立て

鵜のかゞり消て長良に灯の一ツ

短夜

みじか夜や關屋に殘る笠の露

夏月

太秦は竹ばかりなり夏の月

夏の月ぬれ〳〵しくもみゆる哉

團扇

光琳がちどり啼なり古團扇

清水

鶯の笹葉を散らす清水かな

蟬

蛭の口搔ば蟬なく木かげかな

蓮

晝ねぶる身の尊さよ蓮の花

暑

あつき日や小庭のまつに迯かへり

大蟻のたゝみをありくあつさ哉

雲峰

道ばたに撫子さきぬ雲の峰

夕だち

夕だちや頓て火を焚藁の家

納涼

あらましのすゞみ草なり栗と稗

居こぼれてすゞしき月のむしろ哉

檀溪

すゞしさに人の來ふるす菴かな

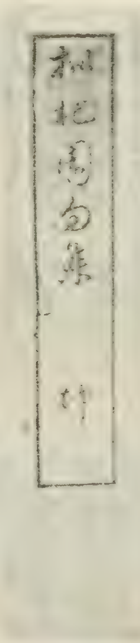
丙午の年六月木曾にゆきぬ。谷のひま〳〵雪をつみ、檜原のおく花を殘して、四時のけしきひとつとしてのこるものなし。何ぞ別に仙境を尋ねむ。

とし寄の多さよ木曾の夕すゞみ

御祓

御祓してはや花いろの袂哉

宇洋輯



枇杷園句集 巻之三

秋

初秋

はつ秋の川瀬にたてる小さゝかな

獨坐

松の露落て秋しるひとりかな

ちゝめくや秋たつ竹のぬれ雀

菴の戸へ拾ひ入たり桐一葉

星夕

かも川やたれやらわたる星の夕

天の川糺のすゞみ過にけり

水あひに鳥もゆくか天の川

舟行

一さほに舟漕入れよ天の川

灯籠

灯籠の油たがろゝ榎かな

篝

檀渓

露に音あり誰住なれて茶の煙

素外法師がむかはりの追福の日、をりにふれて思ひ出る人／＼は、丹波の青阿法師曾津の紀風なり。

白露に取あつめたるおもひかな

いなづま

いなづまや終にすゞしき庭の松

山に居れば稲妻みゆる海の上

舟よりあがりて

稲妻に爪づく淀の塘かな

秋風

あきかぜや舟より舟へゆくからす

秋風の吹すかしけり藪の月

須磨寺は戸を閉にけりあきのかぜ

悼松兄

むつましきかぎりを師弟の中といへば、ましで此松兄は身にそへる子のたぐひにて、年のよはひもいと若く、老を捨ては先だつまじきならひなるに、けうのたけきは何事ぞや。

秋風や行空もなき夜の鶴

朝貌

ひや／＼と蕣のさく垣ねかな

朝さかぬあさ貌はなし朝な／＼

いくほどの世を蕣のまつの枝

数屋ごしに蕣見ゆる旅ね哉

萩

露萩やむすび捨たる蠅すだれ

のぞくまでものかく萩の夕かな

よきほどによごるゝ萩の小庭哉

桂五亭

よき夜とて土間にも居たり萩芒

萩にしをれ芒によわる西日哉

荻

虹のねや暮ゆくまゝの荻の聲

これとても老ゆくものよ荻の聲

女郎花

をみなへしみやこはなれぬ名なりけり

芒

陽炎の秋にもあへり花すゝき

芒より出てますをのすゝき哉

淋しさにたへてや野邊の芒散る

霧さめのさとに日のさす芒かな

都にて

法輪のすゝきをかたる雨夜哉

艸花

鳶のなく日のさびしさよ艸の花

稲花

湖のみづのひくさよ稲のはな

蛬

明る夜のあらしを啼かきり／＼す

きりぎりす啼やいつまで瓜のはな

鴈

雁並ぶ聲に日の出る河原かな

かならずやくれて雁なく門田哉

十日ほど荻吹しきて雁の聲

雁がねに鳥のまじる堅田哉

三河の楪堂を訪ふ日、小舟に棹さして矢矧川の下流にあそぶ。

はつ雁のおのが空問ふ夕ぐれや

童謠

雁ゝ竿になれ、あとの雁先へなれ、先の雁あとへなれ、鍵になれ、竿になれ、竿になれ、鍵になれ、雁ゝさほになれ

雁ひとつさほの雫となりにけり

鶉

わが聲におされてひさる鶉哉

鴫

聲くれてまたたつ鴫もなかりけり

砧

小夜ぎぬた闘の東はあはれ也

小松吹伊賀はきぬたの夕哉

芙蓉

月宵〳〵芙蓉日〳〵にはなの露

月

宵〳〵に來るものなれば月を友

須磨行

ひぢがさ雨の降出ければ、あやしき小家にはしり入て

海人が家は袖にもたらず月の雨

あかしへゆかむとする曉

須磨すだれ煙るも月の名殘哉

あかしにて

月高く鴈がね低し淡路島

蜑が家を覗てありく月夜哉

ひや〳〵と月に聲ある木間かな

萬代や山のうへよりけふの月

松かげのはや月にてぞ有にける

名月といふはめでたき月夜哉

月見とてゆけば錢とる小橋哉

十五日山行

おなじ人と同じ事してあそぶほどおもしろきものはなし。されば二日三日の月のころより、例の人ゝかたらひかはして、南陽が母の住る露もる山の柴の菴をとふ。白雲跡をかくして、わが來し道もさだかならずといふけしきながら、思ひしよりはいと淺くて、市中を去事わづかに一里、晴嵐夢をやぶりて、現に秋色にたどり入る。木ゝの梢も月をまねきて、けふの日のくれ初るぞことに嬉しく覺ける。

松やまを枕にあてゝ月見かな

雨の日信濃にゆく人を送りて

姨捨を雨にのぼりぬけふの月

雨晴山月高

海山を洗ひあげたる月夜哉

中秋前一夕雲月をつゝみてくらく、十五夜は雨いたく降、風木ををるばかり吹あれてすだれを揚ず。

降あめをながめくらしつけふの月

秋の夜は明てもしばし月夜哉

白圖亭

古さどや老の寐ざめに出る月

卓池亭

夜もすがら月の傳する菴かな

山家に宿かる月のけしきおもしろければはやくも寐ず。主出て此夜ごろ鹿の軒ちかく來てなくといふに、待となけれどこゝろにかゝりて終に其夜をあかしぬ。

夜あけてもはなれかねたり萩と月

畫賛

海老を喰ふほとけの膝も月夜哉

贈伯先四十賀

千代の坂路のほどには雪もけ、花もけ。月の光りはことによくけ。

おもしろう年よるひとよ月の秋

となりにはむしろ疊むか月の雲

硯靜亭

いざよひや月になりゆく荻の聲

八月十六日、瓢合といふ事をして

十六夜の闇にぬれたる瓢かな

井戸田にて

いざよひも過て月見る在處哉

十三夜

梅いろの田にたつ人も月見かな

三河紀行

空也上人はこゝろもと葉も世人には引ちがへておはしければ、わが住給ひける山の菴のさはがしきとて、都の四條が辻に蓆むしろ引廻して住給へり。そは行德を積かさねての上のことにこそ。あはれ貴くかたじけなし。愚癡の身にはおもひとるべきわざにもあらず。山にそひ水にそひ、心のはるゝかたもやと、三河の國におなじ心したるひと〴〵をかたらひ出て、そこの大樹寺といふ御寺にまうづ。時は九月十三日なりけり。又、瀧の山寺といふ處あり。清淨幽閑にして夕霧の底には水聲を湛へ、白雲の頂には秋の色をとゞめたり。ありがたき地なればとて、頓て岩根の松かげにこゝろをすましぬ。

名を得たる月なればこそ瀧のうへ

秋夜

秋の夜や壁にかけたる泣面

秋の夜のありさまを思ひつゞけて書出るに、紙十ひらにはたらで七ひらにはあまりあり。いとむつかしきすさびかなと、其もの〳〵をかぞへあぐれば、みな古へ人のいひふるしたる古言のみぞ多かる。うるさしや、きたなしや、墨引けしてかいまくねたれば又淋しく閑にして、西行はせをのあとなつかしく、

これ達のすがた作らば朽木哉

朽木はなに〳〵、うめかさくらか、思ひ入にはよき木かげながら、山の奥にも鹿の啼ば、こゝすみよしとは誰人かおもふべき。頓て心をひきちがへてかたぶく月にさしむかふに、夜のけしきぞあはれは深き。

秋の夜は山のおくにもまさりけり

秋　雨

秋擧が菴にて

住なれしさとこそよけれ秋の雨

こつもが浦にて

秋のあめところ〴〵に日は入ぬ

彼　岸

藪寺の鳩に豆まくひがんかな

秋　山

枯て久しき松こそみゆれ秋の山

秋　水

鶺鴒の毛ごろも染よあきの水

鹿

鹿老て妻なしと啼夜もあらん

そめばけもなしゆけば鹿の聲

香聞山雪江が菴にあそびて

門たてにゆくひともなし鹿の聲

秋葉山の麓和田の屋といふ處にやどりて

啼鹿の聲より深き栖かな

明果てかなしくも鹿の啼音哉

菊

しらぎくの山路わすれぬもあはれ也

送花叔歸故郷

むだとに身は老くれぬきくの花

父母を見るたのしさを菊の花

訪草菴

うらやまし菊もつくらぬ庵の庭

白露のしらでありしか黄ぎく哉

花ことに菊にもあらず八重葎

客中九日

たび人に一枝くれよきくのはな

紅　葉

かへり來れば水に散しく紅葉哉

秋　暮

西に見る山の高さよあきのくれ

よい月が出やうとするぞ秋のくれ

大蘇亭

日のくれぬ日はなけれども秋のくれ

案山子

おもしろきひとにはなりてかゞし哉

無　題

蜻蛉の十ばかりつく枯枝かな

稲こくや刈や田に焚夕けぶり

片扉閉て久しき匏（ひさご）かな

松かさよ松露よ菴の灯はほそし

悼如東贈帶梅

あきはものゝ入の親さへつれてゆく

八月八日の日、遊行上人近江の國へわたり給ふとてひしめく。やがて四十九院といふ處につかせ給ふ。輿の内をみれば髪髭はおどろにして御膝の上をもすぎて、いと殊勝にぞまし〳〵ける。

おどろふくあきや遊行の旅の空

東須磨にて

何をしてひとはくらすぞ須磨の秋

九月十六日、遠江の國有玉といふ處にて

月と日の間に澄り不盡のやま

卓池輯

枇杷園句集 卷之四

冬

時雨

はつ時雨野守が宵のことばかな

鳴海にてしぐれそめけり草鞋の緒

竹葉軒

さゝ竹にさや／＼と降しぐれ哉

獨居や古人かやうの小夜しぐれ

芭蕉忌

世にふるはさらにはせをの時雨哉

素堂は蕉翁の善友なり。一日風のばせをの破れやすく、霜の荷葉のかるゝを悲しみ、世の形見草にもとて甲子吟行を評して曰、靜なるおもむきは秋しべの花に似たり。その牡丹ならざるは隱士の句なればなりと。けふまた其靜なる趣を弄して手向草とす。

月時雨さりとては古きけしきかな

一雲に夜はしぐれけり須磨明石

山茶花に手をかけたれば時雨けり

茶室迎友

窓ぶたになるやしぐれの松のかげ

夜しぐれに小鮠焼なる匂ひかな

東門公子と申奉る公子おはします。雪後の野邊に狩くらして御獲ものあまたあり。中に雁ひとつを平の士文子に下さる。此士文子琵琶の上手になんありける。其家に吳捌といふ家の子あり。ちか頃あらたに、はつ音といふ琵琶造り出してまゐらせたり。そがはつ音聞まほしとて、人／＼の入つどひ給ふ夜は、かの雁たまひたりける夜なりけり。荻野撿挍、その夜の宗匠として四絃かきならしたりければ、嘈〻切〻と聲をまじへ、まとにあはれにして、時雨も月もけしきをはこびぬ。

時雨來るか雁がはつ音の琵琶の上

かゝる夜のありさまこそ世の勝事なれとて、琵琶ひらきのと葉をつゞりぬ。

落葉

落葉たく軒のまつ風夜をさらず

あさ〳〵や落葉掻下す屋根のうへ

不破の關にて

霜にあけて馬の鼻ふく落葉哉

大和の國を行脚して畝火のやまはいづこ、耳なし山はどれぞとたづねづりく。水のあなたに樵夫の立たるを呼かけて、のう〳〵もの申さん、のう〳〵もの問むとひしめけど、聞とがむるけしきもなければ、

此人も耳なし山よ落葉掻

木枯

こがらしやけさはふへたる池の鴨

梅門亭

ちら〳〵と日もこがらしの苔の上

こがらしや口に〳〵鴛鴦のうつくしき

こがらしや梅一ぱいに出る月

網代守

宇治に妻ありあじろにかゝる思ひ哉

千鳥

生海鼠ほす袖の寒さよ啼ちどり

柿寺や藪のうちにも啼ちどり

五道亭

鴛鴦がなけば枯たつ蘆邊哉

大津にて

湖を鴨で埋たる夜あけかな

冬月

あくまでも閑に出たり冬の月

さり〳〵と苔ふむ冬の月夜哉

さま〴〵と降あぐ空や冬の月

大魚追悼

泣は父なかるゝは子よかれ尾花

枯野

むつましう住やかれ野ゝひとつ家

詩仙堂歸路

丈山のさたもくれゆく枯野哉

訪野雀

かれ〴〵や野邊に出向ふ庵の犬

麥阿が菴を訪ひて

これ見よと霜の田芹を菴の窓

花にかたらひ月にちぎり夫妻の枕は、五百生の宿縁と聞へながら、一夜の露ときえぬるぞはかなき。青霞も此悲びに逢り。そが中にいたはしきみどり子の残れるあり。いまだはへばたて、たてばあゆめといふばかりにはたらで、花ちるあとの實一ツを見るこゝちせらる。是も又なみだなれとせめてものちから艸也。

山吹の實や霜寒き枕もと

鵜沼のさとを經て關にゆく

雉も啼犬も霜夜の山邊哉

氷

勝山を舟さし下せば藤竹引まとひて日を見ず、風あらく雪さへ降て寒さはだへを徹す。

白浪のかけては氷る小さゝかな

冬木立

芭蕉翁百回忌千句卷頭

ちなみよるもの無量也冬木立

雪

青天に雪の遠山見へにけり

はつ雪や人のくれたるひの木笠

暁やあらしは雪に埋れて

雪掃やわがあとへ来て啼雀

さはつても雪は降なり奥山家

月雪やこよひも月は宵の内

衾

篷に音あり衾にさはる夜もすがら

鉢たゝき

あともなき寐ざめの友よ鉢たゝき

南無月夜南無雪時雨鉢たゝき

歳暮

年のまさに暮むとする日、末森といふ所にゆく。爰に淵水あり、猫が淵といふ。藤竹をよぢ渓水をわたりて共上に出づ。池塘尾花枯て雪のごとく、鳧鴨影沈て水底に清し。是より路を西にとれといふ。菁蹊中〳〵に廣く、松高して民家適に見ゆ。いさや年の用意にとて蓬莱のかざり松齒朶やうのもの引とりて、

ゆくとしの廿九日も子の日かな

こはことしむ月の一日、したしきもの三五輩暮雨巷の大人にいざなはれて共に子日せし處也。竹にあけ柳にくれ、はなほとゝぎす月雪とのさばりつゝ、おもはずも亦爰にめぐり来て、一年の始終を松によせたる事、いとめでたく、いと感あり。

野秀亭

煤はきや飴の鳥うる藪のかげ

ゆくとしのこそりともせぬ山家哉

年もはや小松うり来る日、市上に立て童戯を見る。

としくれぬ松葉角力のあらそひに

花月一變のあそびにけふの日も既にくれて、としもはや一瓢の酒の残りすくなく成ければ

瓢箪で鯰おさへてとしくれぬ

枇杷園句集 卷之五

蕉雨輯

雑

倉澤

けふも見へ〳〵けり不盡の山

よしのゝ馮月が四十の賀に

よしの山若きはひとの耻かしき

大空に限なき鶴のよはひかな

住わびてかしこき竹のはやし哉

海人の子等の潮の干潟にむれ出て、汐木拾ひあるきけるが、頓て汐みち来れば、みな蘆邊をさして歸りけり。さて鷺かした

るにはあらねど、おりゐる潟のなくなれば、聲〳〵に立あがりて多くの鶴の鳴ゆくは、幾千代を重ねたらんといとめでたし。

鶴啼やからりころりと和歌の浦

大黒賛

花よ實よ四時かやうの子の日草

多春園の櫻見せさせ給ふ。參りてうかゞひ侍る。泉石のやうは申さず、抑木を植ること子のごとく植させ給ふ。七日の日早き櫻はちり浮びて、汀のけしきことに〳〵おもしろし。かの花の上漕と聞へたる象潟の景色もおもひやられて、花に漕出よ小さゝ舟　とはつゞけ侍れど、こゝにかしこに心も身もはしりありきて、五文字はいまだとゝのはず。遲ざくら木深き處に分いりて停雲岡に登る。

朝上停雲岡　雲在花深處
暮下停雲岡　花深雲未去

舞津晩望

東望三千五百峰　晚雲中斷出芙蓉
芙蓉白雪千秋色　長入園林照古松

平曲會式

床頭置琵琶二面。彈中或弦斷則預設一面急以代之。

曲中禁談笑、吸烟管、打唾壺、必應有意。凡曲調者貴舒暢、舒暢則說盡。

心中無限事

鶯の聲こまやかに月の光閑なり

何の御時にかありけん。瀧のもとに連歌あそばされけるに、岩走る水の音の心にさはりて、句案にわづらはしくおほ（はカ）せばとて、頓て瀧壺に松が枝を打入させて、音をとゞめ給へり。ありがたき事にこそ。

曲終不收撥、更唱祝世之句。

舉坐助音

ことぶきの曲終て撥を弦のうちにはさむ。

脫袴。

把盃。

洋峨在心。形素（？）已忘。蕩然山頽。亦復不妨。

瓢歌並序

形便〻としてみづから不用の才をたのみ、自然をたのしむ瓢有。ある翁の是に一口をひらき給へば、居然として忽有用の物となる。赤人の菫、西行の庵の落花、寂蓮顯性（昭）の歌の反古、高野大師の爪印、芭蕉の翁の雫と雪、越人が風雅の藻思までもみなおし入たれば、さらに便〻として磊落たり。瓢歎じて言て曰。わが自然をうしなへり。わが自然を失へり。翁叱して曰。汝に炭をもらば何とかいは

ん。曰。寂し。酒をもらば何とかいはん。曰。躁し。米をもらば何とかいはん。曰。静なり。又叱して曰。閑ならば汝何ぞ自然をたのしまんや。瓢、愕然として歎て曰。

鴎〳〵機をわすれたる鴎

　同じ流の藻塩草　虚瓢

鴎〳〵機をわすれたる鴎

　同じながれのふる瓢　虚瓢

　ながれ出ばや冬の海　虚瓢

松兄輯

跋

朱樹の翁、常にいへる事あり。一年三百五十餘日、風月花鳥をそゝのかして、日々に狂唫することと三百餘句、自得のもののわづかに八九、餘はみな棄つと。こゝをもて年々叟自得の八九を拾ひあつめて琵琶園句集なせり。かくて風月狂吟の情をしたふは、輯る者の雅情といふべし。

東呂庵　岳輅

尾張名古屋　永楽屋東四郎
東壁書房


曾波

叙

巢兆翁善誹諧十七字吟厭世之煩囂而隱于關屋之里其居之東稲田萬頃一望瀰空因號曰秋香庵又自稱菜翁性嗜酒愛客錢到手則散之不惜瀟灑脫落其人可觀矣翁又善畫氣韵高古有鳥羽僧正之風其常所用之松甫印即其父山本龍齋先生表德之私印也翁以為畫中款焉先生於余丈人行也因余與翁

叙

巢兆翁、誹諧十七字の吟を善くす。世の煩囂を厭ひて、關屋の里に隱る。其居の東、稲田萬頃、一望空に瀰る。因て號して秋香庵と曰ふ。又自ら菜翁と稱す。性酒を嗜み客を愛し錢手に到れば則ち之を散じて惜まず。瀟灑脫落、其人觀る可し。翁又畫を善くす。氣韵高古。鳥羽僧正の風有り。其の常に用ゐる所の松甫の印は。卽其の父山本龍齋先生表德の私印なり。翁以て畫中款となす。先生は余に於て丈人の行なり。因余翁と交情殊に密なり翁妻子を棄て道山に行く者。已に三

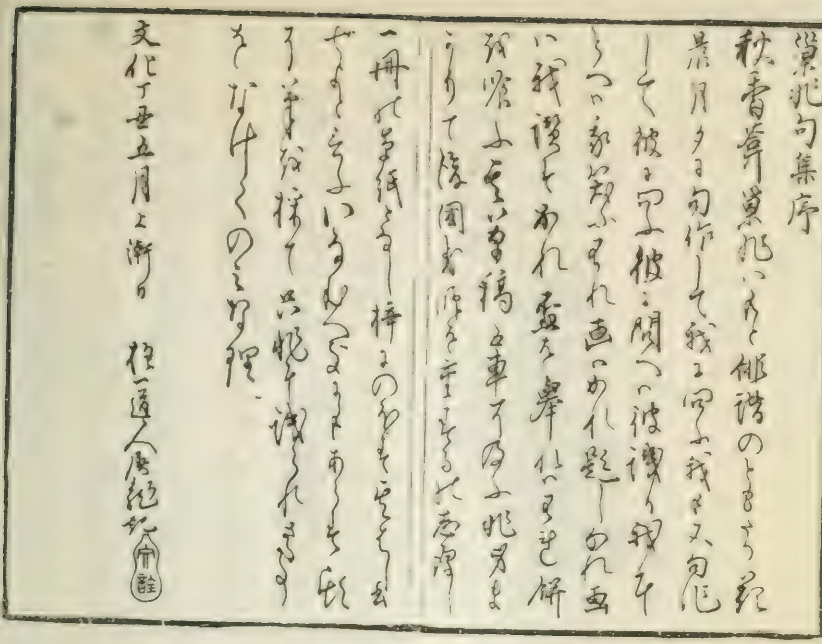
交情殊密。翁弃妻子而行
于道山者。已三載。今茲其弟
子國村者。集其句而欲傳諸
同志之士。乃徵序於余。讀之
不勝感舊之情。於是濡筆於
涕而題其首。

文化十四年丁丑夏五月
友人　鵬齋老人興撰

載。今茲其の弟子國村といふ者。其句を集めて諸を同志の士に傳へんと欲す。乃ち序を余に徵す。余之を讀んで感舊の情に勝へず。是に於いて筆を涕に濡して、其の首に題す。

文化十四年丁丑夏五月

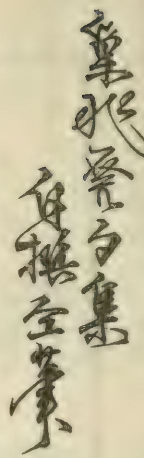
友人　鵬齋老人興撰
印　印



巣兆句集序

秋香庵巣兆は、もと俳諧のともたり。花晨月夕に句作して我に問ふ。我も又句作して彼に問ふ。彼に問へば彼譏り、我にとへば我笑ふ。われ書ばかれ題しかれ書ば我讃す。かれ盃を擧れば、われ餠を喰ふ。其草稿五車に及ぶ。兆身まかりて後、國村師を重ずるの志厚し。一册の草紙となし梓にのぼす。其はし書せよと言ふ。いなむべきにもあらず。頓に筆を採て、只兆に譏られざる事をなげくのみなり。

文化丁丑五月上澣日　抱一道人屠龍記 文詮



歳旦

大あたま御慶と來けり初日影

倹皮翎
玉箒はつ子の松にとりそへて
君をそ祝ふ賤か小家まて

けふとてぞ猫のひたひに玉はゝき

竈獅子が頤ではらひぬ門の松
（此句「一茶發句集」に見えたり）

野店

酒旗やとうふ和らぐ御代の春

梅

藪尻にはづみのつくや梅の花

とりわきて蕎麥粉の禮や畠の梅

皿鉢の寒いうちなりうめの花

山家に遊びて

梅折やこれも雀の賓もの

とし毎に圍爐裏借るなり梅の主

坂倉素交と梅見にまかりけるに
雪のけしからず降ければ

すべつても梅にすがらん杉田みち

難波にて

舟曳や五人見事に梅を嗅(かぐ)

梅散るやなにはの夜の道具市

觸家根の出村へむくも梅の春

うめ散や蛤貝の蝶つがひ

魯隱が別荘

柿壺や奥に老木の梅の花

十團子に氣のつく梅の沓かな

苞もの春負たる老人の繪に

今出た黨花の梅田を梅の花

母上の密（蜜）柑召けり梅の花

梅が香や様子のよさに芹を摘

鶴島夜泊

梅が香やおもへば痳たる纜の上

七福の讃

隣から梅に階子や福祿壽

旅僧を布袋かと見し春の水

初寅

酒樽を鉾でまねくや沓おろし

巳待

福天の御息もかゝれ玉の春

大黒天小ねらに松をひかせ給ふ

人麻呂に鯛もあれかし若惠比壽

乘かえの鶴もあるなり落し角

柳

青空に馴て米ふむ柳かな

黄昏は湯衣かけたる柳かな

傘かりて踈き人見ろ柳哉

待戀の翌日に延たる柳かな

青柳ほどけて枸杞の垣根かな
詣村を町家にまぜて柳かな

あかつき衣紋坂と云處を過るに

四□□□□家根にもさつと青柳
（四字不明、下の二字は「兵衛」とも讀み得）

人日

とく〳〵の水より淺き若菜哉
金杏がひと群出たり摘わかな
七種や御木がしらに蔀ばかま
むく〳〵と若草はゆれ草の庵
わか草や鍬のさわりし小笹道
べたと置鍋のめぐりも春の草

菫

ゆく水に嗅で捨けりすみれ草
市女笠すみれ尋ぬと答へけり

なの花

菜の花や染て見たいは富士の山
菜の花の舞こんで居る坐敷哉
菜の花や小窓の内にかくや姫
なの花に造り木見ゆる明屋かな
小袋のこぼれ花咲菜種哉
菜の花や初土器の非堰の里

山吹

山吹は峯入ちかき盛りかな
やま吹やぬれ手を切て九折
山吹に蛙のたゝく扉かな

花

いくとせも花に風吹さくらかな
鵯の枯す木の間の花の咲にけり
道命とうしろあわせの花見かな
歸るさに松風きゝぬ花の山
菓かけて一夜明たり初ざくら
椀家具も音せで花の小鹽山
かし鳥のあたりに今朝は花見哉
宿かりて又見ん花のあらし山
先花の大山崎やひがし白
ちる花や帶しめ直す石の上
麻ごゝろも蕪持兒や門の花

隅田川にて

四阿を馬屋にしけり花の雨
暮そめて小家したしき櫻哉
白魚の雯等で孕むさくら哉
扇借せ花見出て來る鼻の先

老懐　遊女奥州が戀言を摘

挑灯のてれんも見へぬさくら哉
朝の間にさくら見て來て老にけり

金輪寺濤音閣

村雨の若葉をいそぐさくらかな

諸鳥

片瀬からこゝろにかけし櫻かな
手のくぼに殘る小鯛や潮の花

牛島奉納

藤折らじ肩にかけると呼子鳥
腹赤焼家を巻なり藤の花
むかふから旭湧なり藤の花
藤咲てゆらつく橋のすがたかな
流れ汲隣もひたすつゝじかな

山姫や溫泉壺に活し花つゝじ
三圍の鳥居とそだつ杉菜かな
苗松のひとつに育つ杉菜哉
紅梅にいともかしこし御應宿
放下師が雫をかほらせ桃の花
桃咲や西瓜畠のあらおこし

うたぶくろといふものに歌書たるを見て

おもひ入る蛙や摘んつく〳〵し
はびこらぬ顏で芽を出すちよろぎ哉
駿河なる山葵越るや箱根山
連翹や鳴のわらじのかけどころ

國村柳翠兄といせ參宮する馬のはなむけに

双六の六部に逢ん宇都の山
太〻や福引とりてぬけ參り

初午

鎌くらの佐助や誘ふ旅ごゝろ
朝ぐもり六浦の楪(爆)竹今や焚
太箸や削らぬさきの杉の月

蓮根の穴から寒し彼岸すぎ

初雷

あしがらはまだ出ぬ神のとゞろ哉
田やかへすへたら〳〵と谷の底
畠打や穴のきつねに餅居て
どこぞでは婆〻にやならんたけり猫

田家

鶯の鳴や色めく繩すだれ
うぐひすや竹の子見たる市戻り
鶯にこの曙を田舍かな
鶯を二籠釣て野は遠し
うぐひすの家根からをりる畑かな
鶯やもとの淸水の原屋敷
鶯のみがく椿や藁屋なみ

かまくらにて

うぐひすや夢想國師の堂の前
雉子が鳴餅屋の脊戸も塔の辻
高茅の刈らぬ裏戸も雉子の聲
二葉より豆鐵炮やきじの聲

廣畑に雛もまだなき雉子かな

鎌倉覽古

灰蒔し畠があればぞ啼ひばり
旅人の五日遲くばさぞ雲雀
つばくらに殘す築地や撞木町

蛙

かたむきて田螺も聞や初かわづ
我からと藻屑の中に啼蛙
禪門にをくれては飛胡蝶かな
鍬笊に盛ればこぼるゝ田にし哉
柴の戸や泥かけて行田螺とり
隣同士白魚買ん夕月夜
しら魚やしらぬ薬に盛舟の上

霞

和布を刈や霞くむかと來て見れば
霞む日や佛のあかし遲なはる
防風で渚は葺なり春の風
春風や一期さかえし榛の花
春雨や斯しておいて峯の雲

はる雨や簾を卷て鶴御覽
芹生にて芹田持たし春の雨
炭賣と手に手をとりて春の水
曲らずにくわゐの角や春の水
山里は麥飯すゝむ雪解かな
雪解や穴のきつねの官上り

由井濱覽古

佐保姫の額に見ゆれ磯の浪
佐保姫の野道に建る小旗かな
佐保姫に駒もよまるゝ鼻毛かな
茅屋根に鶉の長閑なり鴫の雨
山姫の動かす松に春深し

時鳥

谷へ掃はゝきのさきやほとゝぎす
鳴け聞ふ木曾の檜笠で時鳥

遠山やところかはればほとゝぎす
ひがし山とつてかへすやほとゝぎす
よし田殿末社巡りやほとゝぎす
新しき橋のにほひやほとゝぎす
時鳥まだ見に來ずや隅田川
ほとゝぎす九反かけたよ紫屋
時鳥啼や御繪師の宿衣
いざやとて脊を干す鳩よ時鳥
あかつきは鐵漿もにほへやほとゝぎす
早乙女が横轉ふ庵やほとゝぎす
茶引草裾になびくやほとゝぎす
三圍で聞もやすらんほとゝぎす

草庵の廬橘大雪にいたみてわか葉の頃も不沙汰なりける八千代の蔭をしのびあへざるに

ほとゝぎす啼けばむかしの軒端哉

上野國赤岩高恩寺に高野大師の持せ給ふ五鈴あり。それが中に松虫とやらん清音すぐれて涼しく聞へたるありければ

松虫の音にふりたてよほとゝぎす

桐生米室を訪ふ

脊戸口の伏猪もやさしほとゝぎす
三井寺もほろ〳〵あへ賦ほとゝぎす

山寺

浴室に苔がはへたり閑子鳥
とゝ鳥の日馴て啼や閑子鳥
閑子鳥啼や朔日十五日
十景を握て啼や閑子鳥
眺なら常山(くさぎ)の花やよし雀
笈佛の戸をたてゝ聞水鷄かな

成田にて

盃が出ればはや來るほたるかな
隣から灯かけのさして行ほたる
曲りこむ藪の綾瀬や行螢
豆の葉や豆腐に着せて飛螢
螢追ふ門や風呂焚やせ男
糸竹に蝙蝠の舞月夜かな
かはほりが眼を射てやらん小挑灯

華他か五禽の戯といふことをし
て

晦の月後は臥猪の鼾かな

旅中

芒から蚊の出る宿に泊りけり

蠅追ふてひやうたん町に入にけり

紀の闕も越ば伴へかたつぶり

草庵に茶立虫といふもの啼。あ
る人のいひける、この虫の聲を
聞時かならず好事あるべし。諺
にかくれ里ともいへりと

米櫃のそこらであらん隱れざと

蟬啼やとばしる瀧にはぢかれて

蟬の音に薄雲かゝる林かな

南湖

赤貝にひかるゝ裾やころもがえ

山寺や蜂にさゝれてころもがえ

草堂

茶釜ほどある歟なき歟の牡丹哉

門守の婆ゝも野等こく牡丹哉

打水の雲きりにたつ牡丹かな

岩からもはへずにやさし杜若

おし出して塔一蓋の若葉かな

山路來て見事に歩行若葉哉

傘のちいさく見ゆる若葉かな

爺婆ゝが寐所掃出すわかば哉

ふるさとの梅の若葉や堂籠

路川が兒の追善に

卯の花やかくれん坊のそれなりに

うの花や振て投こむ松明殼

卯の花を粉にはたきたる嵐哉

卯の花やそも〳〵これは土器師

庵を出て雪ほどしろしけしの花

鷺の來て伴ふ宿やけしの花

鴉の醉葵見しより醒てけり

あぢさゐや煮てかためたる花でなし

夕顔

夕がほや逢たき人の途(衍字カ)飯時分

夕顔やよその空なる稲の殿

夕貌や夕越へくれば馬に餅

晝顔や芒の玉の消るとき

馬借て伊香保に行んあやめ哉

雷晴て蓼まだ苦き氣色哉

土持は買人やつきし蓼屋敷

若竹や龍這のぼる藪からし

竹の子や筧の通る路すがら

竹の子や客に問れて雨の簑

たけの子や馬飼ふほどの藪の主

竹の子を花活に切るぞさかな

竹植て犢鼻褌かけばやとおもひけり

舟中

見落すな合歡の小家の酒ばやし

合歡咲や柘の小櫛もほしげにて

藻の花やさそひ分たる紺屋形

川骨や砕けぬ花にさゝら浪

蓮の香に起て米炊あるじ哉

鴫立澤にやどりて

鶏が啼翌日はかならず虎が雨

妻沼にて
五月雨やまくら借たる桑の奥
五月雨や眞野の長者の菅を刈
夕立やいたゞく桶もぬけるほど
ひるがほに足投かけし植女かな
植かけて飯くふ小田はなかりけり
夏の夜や茶木の梢に敷むしろ
みじか夜や三味せん草に蝶のかげ
夜をこめて打や淺黄の夏衣
六月は稻の葉伸に朝茶かな

端午
江に添ふて家〱に結ふ粽かな
こそ〱と夜舟にほどくちまき哉
尾上から大根おろしやはつ鰹
憂人の餅にもすこし初がつを
廣魚の蜑のいきりやはつがつを
江の島や傘さしかけし夏さかな
芋の葉で一夜育ん初なすび
村中にうからやからやひと夜酒

玉鉾の白ひ(い)日傘も通りけり
凉しさは田舍に見ゆる夫婦かな
凉しさにかたちづくりす山の上
風薫るまくらや小笠小風呂敷
竹の葉や脊を擽るたかむしろ

淸水
ひや〱と田にはしりこむ淸水哉
駒の出んひさごをひたす淸水哉
花桶もいたゞき馴し淸水哉
見し人の鍋搔て居る淸水哉
馬に鞍醫者を夏野の行衞哉

春夏都二百三十七句

巢兆發句集

(以下は國村の板下なり)

普光寺客中
なに事かしなのぶりなる今朝の秋
秋たつや田の草とりをよぶこ鳥
ひとわたり茶のかいわれてけさの秋
初秋や鶴をうかゞふ五位の聲
猫のかくはしらもひかれ今朝の秋

隣家看白
夜ざらしの二布干なり天の川
星逢に見やる山田の立樹かな
鱸舟すゑによる瀨や銀河
七夕に星の入たる色紙かな
年〱や梅ぼしくさきかし小袖

信州若人亭
七夕後朝
朝貌の花に澄けり諏訪の湖

七月十日

まつ島やされば琴引秋の風

かはほりも里のやつれや秋のかぜ

馬蜩(くまぜみ)に打まかせてやあきの風

野分にも關屋の蘆の片葉哉

しなのゝ國吹嵐と云處にて

粟少しこれや鳴子の吹あらし

もとあらの萩をしぼるや秋の雨

尻ぺたの蚊を打芋の葉風かな

修理の太夫顯季卿なりしか、木賊刈その原山の秋かぜにみがゝれ出る夜半の月かげ　と詠るをその娘の君、鏡のうらに鑄させて、戀しき時の父の記念と見たまひけるを、尼になりてのち、法隆寺の峯の藥師佛におさめけるとかや。玉棚のおくなつかしきをりにこそ、とおもひよせられ作りて

盂蘭盆やたまに呼込鏡磨

老ぬれば西瓜に辷るおどり哉

八朔や賢の貌のめづらしき

鹿

馬屋より下に來て啼小鹿かな

笹山や小男鹿急ぐ夕間ぐれ

大坂の便に申ける

河内屋で膳を出さばや渡る雁

旅ひとりひはら〳〵と鴈がなく

乙因を歎くもありや南部雁

(乙因は金子半藏と稱し、奥州の人、江戸住、文化四年四月二十五日名古屋に歿す。)

鶉一羽來て搔さのはす薦かな

友人蘭窓、野もせにすだく虫の音を狩て、あまた竹叢の軒端に掛ねけり。唐もろこしの籠の目あらみ、赤土の露を絶さず、瓜茄子の養ひおろそかならねば、うぐひすの子の笛に馴るごとく、たがひに清音をたしなみて令〳〵とふり出る聲、長月のはじめに至るまでもうちかれず。是をもつて人間五音の調べおよばざるを愧るといへどもむべなりける。

鈴虫になるや籠のきり〴〵す

土べたの鐘もひゞけときり〴〵す

まつ虫や風の吹夜は土の中

閑庭

ほつれ笠着た僕もあり虫の聲

探題

たもとから稲輪の田井の螽哉

蜻蛉や錢百つけし杖のさき

白露のたけもたゝぬやつゞれさせ

あら物おもひの翁や。上田の辨才、松もとのはり箱とて、あだし仇名のゆかりもなつかし。淺葉(淺間)の湯げたあさくとも、波て見ましを、さゝのふし寐に。

はり箱がまくらに狂ふ夜寒かな

山家

年□□(二字不明)の推にもはまる夜寒かな

朝寒や夜明し寺の鼠ども

美濃の関善司野と云處にて

翌日はく草鞋打家の芒かな

一休が魂迎するすゝきかな

弓取の見込も深き芒かな

寐たがらぬ家を追こむ芒哉

隣家

萩咲て夫婦の小言かくれけり

立臼に小根がはへてや萩の花

病中重陽

菊添よおろかながらも薬鍋

きくさく〳〵や驛〳〵の酒祭

一枝折盗の戒を得ざる菴なれば

腹いせに溜石あぶるもみぢ哉

釣柿の干餘て染る紅葉かな

日ぐらしも啼ねば淋し初もみぢ

秋草

閼の戸にほの〴〵見ゆる糸瓜かな

先いはへ小ぬかに似たる稲の花

端近に客はおかれぬばせをかな

壁ぬりの隣へまはる紫苑かな

こま〴〵と垣根結びておみなへし

足弱の杖にからまる眞葛哉

露

草の戸や非をとり込て露の玉

みよ〳〵と夕貌つたふ露の玉

姥山良夜

里人や白髪になりに行月夜

明月に都は芹のもやしかな

廣田社

鳥居出ておしさや杉に秋の月

明月や小島の須の茶つみ舟

貝われの茶畠のおくや初月夜

對清光病中

抱おこせおのれ月見む萩芒

仲秋無月

十六夜もはづれて松の草鞋哉

中川といふ處に至る。小家がちなるあたり、それとなくしのばしくて、さしのぞきけるに、

どれからと萩の隣や後の月

象潟の合歡の落葉や后の月

柞原薪樵るなり秋のくれ

時雨

柴の戸に夜明烏や初しぐれ

兎や角と筧せしより降時雨

尼達の旅寐催すしぐれかな

取あへぬ山桝さかなやはつしぐれ

朝夕の不二もけぶらぬ時雨かな

市人の炮鋒(碌)冠るしぐれかな

時雨るや一降ふつて峯の松

生田の森にて

小雪せよ笠着て舞ん神の前

急がねば初雪のふる旅路かな

初雪や閼の清水の埋(うづも)れむ

はつ雪や石に敷たるさんだはら

霜月なかば松もとより故郷へ歸るとて

初雪に着るや古手の蔦の紋

雪明りあかるき閨は又寒し

大雪に餅をならべし莚かな

初霜や田の土とりて竈をぬる

伊勢の御師の折敷に溜る霰哉

武甲山の谷間を通るに、落來る瀑布のそのまゝに氷るあり。さながら千條の玉枝をかへ（けカ）たるが如し。まだ見ぬ人の土産にもがなとおもひたるほどに

鞍壺に瀧を負せん氷柱かな

こがらしや口もきかずに草の菴

須磨夜泊

あら寒やかの村雨が閨の月

比企の郡毛呂と云處より同行の江戸に歸るを送る。この日十月晦日なり。

菜さぞ小手さし原を歸る神

小笹吹風も何やら神無月

野火留や宵曉のかぶら汁

冬枯のなつかしき名や蓮臺野

鎌の柄を空に伸して冬木立

小金が原にて

菎蒻に馬の踏こむ狩場哉

梵院照法燈

明るさに蕎菱切賣も十夜哉

風邪ひかぬ御法の聲や御命講

信州柳荘追福

月を見に今年も出ばや寒念佛

斗入法師身まかりけるしなのゝ國七くりの湯といふ處に行て、その跡を吊ふとて、

惟茂とおなじけぶりや積（つむ）落ば

梵論の行麁靜に落葉哉

かどみ磨寺町のぞくおちばかな

爺婆ゝの有がたくなる木の葉哉

みちのく行脚の頃

榾焚てよしつね殿をひゐき哉

明ぼのを結びながすや炭けぶり

炭賣て小野で別し碁打かな

千どり

まつ原や馬にわかれば啼ちどり

には鳥が啼ば閨へぬちどりかな

旅烏磯にともなふ千鳥かな

一年三百六十夜寒閨の恨をかこつといへる臏家の婦人をあわれむ。

きぬを踏脛より鴨のあぶら哉

越後からふたつ連てや浮寐鴨

蘆鴨の寐るより外はなかるべし

かならずや三千の後宮、午房のちからをたのむにあらじ。にんじんを好ものゝ琴心を挑るとて、淺づけの淺からぬちぎりとこそかきならされける。

錦木や染ぬ大根に啼家鴨

むさしのゝ野中に引や土大根

盤築（岩槻）の城下にやどりす。

諸客混雜の中にて

葱の香や浮世をわたる其中に

山家に遊びて

茶の花や茶菓子のなさにおりに行

神無月の末にやありけんむさし野を越ゆるとて

逃水の果や花さく茶の木垣

水仙や屋根が出来たと啼鳥

韓び人もなくてや残る冬のきく

一ノ相如が鷺をうながせば、三日東坡が千錢を愁ふ。あなあぢきなや白鶴城東の乞食。

年暮

難波津や酒をひかへて冬籠

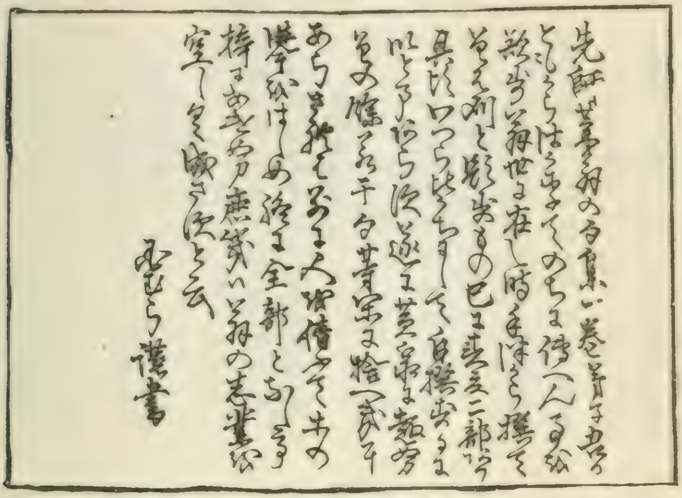
煤竹もたはめば雪の雀かな

年暮ぬ市に住なら明石潟

行としや千代の衛の須磨の浦

我庵はよし原近師走かな

秋冬部一百十九句



先師蕪翁の句集一卷、弟子等がともがらはかりて、のちに傳へん事を議す。翁世に在し時、手づから撰て、そば刈と題すもの、已に春夏二部あり。其頃わづらひがちにして　自撰するにいとまあらず。遂に黄泉に趣(赴)ぬ。その餘若干句、等閑に捨べきにあらざれば、別に人を請ふてこの擧をはじめ、終に全部となして梓にあげぬ。庶幾は翁の志業を空しく成さずと云。

園むら謹書

書房

大坂心齋橋南久宝寺町

河内屋八兵衛

江戸馬喰町三丁目

若林清兵衛

咸美郭集

孔

代言

此度兒輩等發句
集出板以書〆人様
相まし〱申候而極て〱方
しくなど甚ゝ素意不能意之
事の故ゝ申候　何之一部
進呈仕候　後日笑覧之様
存し候病中略書候得共
てん〱以上

成美

此集は故有てはやう見めでにたれば、いで我も序をかきまゐらせてんと成美ぬしに契侍りしかど、ぬば玉の夜ひるとなく、四方八方の責をふせぎかねつゝ、春日秋夜を、くれがたく明がたき物としも覚えず、たゞまぎれにまぎれ筒のみ在ふる間に、心にもあらで年さへこえぬべう成にたれば、萬なげうちてなん。抑俳諧の道は我しらぬ事ながら、古今集にすではい諧歌を撰入られにたれば、其根ざしふりにたらずや。されば末の世には、橘の八千またに枝葉たち栄ん事うべ也けり。謌と俳諧のけぢめは、只みやび里びの詞のみにあらず、其もとむる意に在とぞ。思ふに清少納言が船のみちを、とほくて近き物といひしにひとしかりぬべし。何がしとやらんの句に、褻くひし雁と思へど別かなといひしなど、

げに遠くて近き物となん、いと若かりしをりきゝ侍りき。今、成美ぬし、とし比この陰によりて月花は更也、をりにふれ事につけて、大方の思ひよらぬふしぶしを、はつかなる句にいひのばへ給ひしを、埋木のくちはてなんをゝしみて、其木陰に拾集たまひて、こたび花ぐはしさくら木にゑりて、天地のいやとほ長く傳へてんとかまへ給ふるは、おのづから孝の道にもかなひ、且は世のすき人も、時じくに此櫻の陰によりつゝ、名にしおふ芳野のはなをしも見が如く、唐にしき立田の紅葉なす、しく物なしとめでざらめや、たゝへざらめや。

賀茂季鷹

成美家集序

成美翁。俯仰古今之觀。包含自然之思。攬天地之慘舒推遷。人事之聚散離合。喜笑怒罵。所會之境。所遇之景。皆寄之徘(俳)諧。其抽思也無窮矣。故能寫人難狀之象。其吐奇也無測矣。故能述人所未道之妙。寄之山嶽歟。孤峯萬仞。絕嶺千丈。可以攬象緯。可以扶雲漢焉。寄之江海歟。浩蕩彌漫。一瀉千里。波濤馳驟。風雲飛騰之狀。可以奪膽。可以駭目焉。寄之富貴華麗歟。金屋珠欄。虹梁分翔。貂璫俊雅之豪。嬙嬪媚嫵之麗。可以悅人之目。可以動人之心焉。其餘隱逸緇流徘(俳)優雜伎之意。千象萬狀。使覽者拭背極目。心駭神悸。瞠乎莫甄別。其所以寄懷也。是以四海騷人推以爲一代之宗匠。嗣子包壽與及門之士。就其華林金谷之園。挹其菁華。咀其至味。錄爲二卷。上梓刷印。以布於世。雖未足罄翁之富贍。覽者須觀其瀾。而測其浩瀚泛濫。無所不有之大矣。文化丙子春正月

綾瀬龜田長梓撰

古作素翠授字

成美家集上之巻

春

としのうちに春たちける心を

ふゆの春卵をのぞくひかりかな

年のはじめに

けふに明て無筆歌よむ國の春

おろかにもをしみし年を君が春

看經もそこ〳〵にしてはなの春

ぬけて出る夜着よりすぐに花の春

元日も過ゆくくさの扉かな

ものむつかしきあたりなれど、さすがに松ども立わたしたるは

小家みなわが春〳〵とおもふかな

贅亭謙圓
男 常蓍子強 仝校
坎窩久藏 補定

芒に霜の髭四十一と、はせを翁のたはぶれ申されけるそのとしのはるをむかへ、吾蓬萊のかざりものに白蓮の文を思ひよそへて

わらへ人薢(ところ)と海老とわが髭と

哭葉崎子

雪あられふりあるゝにつけても、いかに〳〵と思はぬ日なし。さりとも梅さくはるにうつらばなど、はかなきたのみをかけしに、日こそあれ元日といふ夜のほどに、むかし人の數に見なしぬ。門にたてたる松竹も、いまは恨みのたねとなり、小庭に來なく鶯も、たゞなみだの友となるばかりなり。

なに事もひと夜につきし千代の春

元日もはやくくれて、ふつかもすでに過ぬ。

三日減るはるやそれだけ月になろ

松しまもそこらにあるかはつがすみ

門さきの枯木もかすむこゝろあり

せりよめ菜すこしの事も霞けり

日にあきて鷄のとびこむかすみかな

かすみ來てまぎれにけらしふる小袖

箒かきはらひて春をむかへしも、としははからず市中にありて

いまさらに面目もなしかどの松

人日にしたしき人のうせけるにおもひつゞけし

門まつもなみだをそゝぐものなる歟

人日對久藏

薺うつ江戸品川は軒つゞき

妹が子は薺うつほどになりにけり

老の浪年くはゝれども丈山翁の
心操なし

春を見に淺草川をわたるなり

春のれうとて青竹にて製したる
茶筌を賣人あり。その人病なく
して卒にたふれたり。牛の價を
論ぜしよりも猶はかなさのたぐ
ひなくて

大ぶくや泡と見し世の人のうへ

子日せし跡とや人の立ありく

まづひとり旅人通る子日かな

さくと見てふた夜過しぬ風の梅

咲梅にひかりあはすや貝のから

假家に名ふだかけけりうめの花

人すめば水もこぼれて藪のうめ

われことし三十六、安仁が鬢の
髪やゝしろみたり。宗祇法師が
鬢とはとたがひたれど

香をとめて白髪愛せん窓の梅

野の杭の人とも見えてうめのはな

ふる家や賣そこなふてうめの花

寒村野梅

古澤や牛に齅(嗅)るゝうめの花

淺くさや梅すくなくてはるの空

うめが香を袂にいれてそら寐かな

梅がゝや灯心かけし軒のつま

うめが香の家一ぱいに小雨かな

子どもの道中すぐ六といふもの
うつを見て

東海道のこらず梅になりにけり

擬古

梅に立や錢なき詩人淸く瘦て

紅梅に大根のからみぬけにけり

うめ柳ひとつふたつはとしもとれ

題畫

家ありてまた柳ありどこまでも

おもしろや柳の間を人のゆく

春の柳もたれごゝろになりにけり

でくるぼのやなぎをわくる扇かな

家はみな春は柳でおもしろし

青柳に留主はあづけむ門の鎖

くゞりこむ春となりけり門やなぎ

魚提て柳がくれにもていりぬ

亡父の忌日に

しかられし夢は柳のしもとかな

階子とるあとは芽になる榎かな

とし寄の鳩によばるゝ木の芽哉

田家

わか菜摘てやがてけぶりを立にけり

猪のふむあとさへ春につむ若な

春の草ひきむしりて下も喰ふべし

よくいねて今朝目にかゝる春の草

はや誰か扇すてたるはるの草

別玉屑

はるの草心さぶさを抱きけり

草菴

鶯をきくにもさはる葎かな

うぐひすのうすぐろくなるゆふべ哉

うぐひすのかくれあらはれ見えずなりぬ

うぐひすや浮世にすまば中二階
うぐひすのなく音を顔にかけてけり
鶯やふた聲ほどは朱のうち

かつしかの舊居のなつかしきに

住し藪の鶯かいま聲するは

と申いで侍れば、かたへにある人

春さびしとやしたひ來つらん

かく附侍し。これらはいかいの連歌ともいふべきにや。

海苔たゝく家とて杖を入やすし
正月はからかささへもおもしろや
正月のこゝろ崩るゝ彼岸かな

涅槃會のあくる日、すみだ川に棹さゝせて三河法師が關扉をたたく。

春さぶし月まつほどの後世がたり

ある禪師のいはく、風雅は俗にちかく、俗は風雅に遠しと。

はる雨や博打に隣る夜手ならひ
はる雨や窓はいくらもほしきもの
春雨はみるふきぬるゝ雫かな
はる雨や編笠ごしの音羽やま
春雨やふるにさはらぬ茶の煙

題 按摩取

はる雨や化物ばなし錢五十
起〳〵や舌もつれしてはるの雨
朧月やなぎの枝をはなれたり
朧夜や吉次を泊し椀のおと
かまぼこの煙へだてゝはるの月
さゝやかばくもりもぞするはるの月

少年行

印籠をたづね戻るやはるの月
錢嗅き人にあふ夜はおぼろなり
くさの戸や丸くなくともはるの月
鯛の汁喰ふて出たれば月かすむ

讀論語

春の夜や酢を乞に來る隣あり

餘寒

はるの寒さたとへば蘆の苦みかな
古卒の店までもゆけはるの海
光琳が畫に渡るゝやはるの水
すぢかひに寐ても見ゆるや春の水

墨水晩望

人うつす水のこゝろもはるなるか
はるの水まがり〳〵のおもしろや

乙二坊に對す

春風のあと先もみな咄かな
鎌倉の世から畑うつおとこかな
寒食のこれをもいとへ唐がらし
かげろふやいせの御祓捨てある
陽炎や世はとにかくに捨にくし
何となく見らるゝ鳥のから巣かな
巣をたちて鳥の心はあともなし
艸の雨土器屑になく雉子
魚提て松やまゆけばきじの聲
草山や潮じめりにかへる鴈
かへる雁ばら〳〵になりて見ゆるなり
はたご屋は夜も戸たてずかへる雁
雲雀たつ七野をふたつ見殘しぬ
蛙なくそばまであさる雀かな

露の雨おのが二月となく蛙

かはづ鳴里の雨夜も小百年

春の鳥何をおもひぞ胸ふくれ

草臥や身をたふれたる蝶の中

とびたちてもろきは蝶のこゝろかな

ひらく〱と墓原までもはるの蝶

蝶まふや薪一把も門ふさげ

白魚のすこしまがりて長閑なり

しら魚はお僧すこしはまゐられよ

わかき時より虚弱多病なるを、亡父のつねになげき思はれしに、病身つゝがもなくてやゝ老の數に入ぬる事、わづかに孝のひとつとやいふべき。

かい撫の春やむかしに吾しら髪

讀寐婦賦

春の夢さめて隣のはなしかな

接木して花さくと夢に見たりけり

待花

はなやさく心にかゝる夜着の襟

何ともなき世の中やはつざくら

あはたゞしけふ花さくと人はいふ

田家にひと夜ふたよ泊りて

寐過すや麥のあさ露桃のあめ

はらく〱や桃はちるときをしいもの

紙雛は花見る顔に書にけり

歸らうといふまで人の汐干かな

西行は汐干を見てもなかれけり

ねるほどは風ふく花の木の間かな

花の中大事にもてよ桶の水

をれながら芽をはる花の下枝哉

貧乏が追ふても來ぬぞ花の陰

おもふ事花にまびれて何もなし

はなに寐て起てももとの春日かな

朝飯を過すや花の鐘がなる

わが多辯なるを人のにくみけるに

ものいふもいやなりけふは花の蔭

へなく〱とするや小橋もはな心

なまなかにかへる家ありはなざかり

花のなかすこしちれともおもふたり

源氏物がたりかゝり侍て、そのぬしなくなりて後、空庵へかへしつかはすとて

花鳥もおもへば夢の一字かな

江口の女の象に乘たる畵に賛のぞまれて

ねぶき眼をひらけば花の浮世哉

石川や飛わたりするはなごゝろ

上野にて

宮さまもおよらぬさうな花に風

茶草紙

ちとせふる松だにくゆる世中に

けふともしらでたてるわれかな

これは松樹のきりくひに火のもゆるを見て書寫の性空上人の吟じたまふとなり。

ちるはなの中にたちたる此身かな

花の句あまたよみける中

花を折こゝろいく度もかはりけり

頤に杖する花と身はなりし

冥々が七十の賀

いつまでもかくてませ〳〵はな千句

六になりける娘のそのかの母と手たづさへて葦ほり、つばなぬきてあそぶに、あるやんごとなき方の花見し玉ふとて、上﨟たちの立ありきつゝ、あこよ、名はなにと、としはと、とひたまふに、ふしめになりて名は糸とまうす。年はこれとて、ゆびひろげたるに、みなあひきやうありとてわらひ給ひぬ。たかき人に名をきこへあげしを、かれが一世のめいぼくにして、そのみな月なくなり侍しが、ことしかの花の陰もなつかしく、ひとりすみだ川に杖ひきて花見ありくに、さらにこゝろもなぐさまず。古墳の柳のみ風にうごきて、したふがごとくうらむが如し。

しなばやと櫻におもふ時もあり

晋子嵐雪が像に、おの〳〵花の句を題せよと人の望ける。二句

花に酔て涎もすぐに十万句

出ぎらひの身をふり埋め花の雪

重箱に鯛おしまげてはな見哉

掛乞の顔もわすれてはなの蔭

閑斎が古家もとめてすみはじめけるよろこび

うす壁や鼠なく夜もはなの空

をれぬすめとても花には狂ふ身ぞ

遅日を

泥水もはなをうかめて暮かねし

哭浙江

膝をかさね膝をもたせて作句に交りし事二十餘年なりし閑斎が閑も、いまはまとの閑になりて、ながく作意を聞事なし。

はる雨やそこにより居しはしらあり

いつのとしもすみだ川に腰をおされてたづさへ遊びしも、ことしは

杖とたのむ人あらば花も見やうもの

関屋の里のみやこ鳥、嵯峨の鮎くひにといざなはれて、旅ねの夜のうす蒲團に東山のたゝずまひ、まづなつかしと、此晩杖をはじむる秋香庵が笠のうちに額さし入て、かくぞさゝやきける。

踏ところ草鞋にかゝるはなの塵

あるやんごとなき人の、杖つくやうやしりてあるとの玉ふに、なにともおぼえ侍らずと答申せしに、杖をいさゝかもたのむ心なくつくべしと仰られし。此ことわり何事にもかよひてたふとくおぼえし。われ脚病、脛よわければ、はつ老のけふより杖をもちふるに、かの御ものがたりはおもひ出ながらかくぞ申侍る。

たのむなり花の跡とふ竹の杖

さつとちるはなを拍子やもどりあし

灯ともすにこれはいつまでちる花ぞ

ちるはなや舞も出べき腰あふぎ

永日のこゝろを

よく見れば捨し山葵の芽になりし

こゝろのとまる戸がくしに咲たりな
ひのみこ阪の小ざくら

是はしなのゝくにの白ひきうた

なりとぞ。此こゝろを發句にせ
よと、柳荘がもとよりいひこせ
しに

あふむけば口いつぱいにはる日かな

野遊のこゝろを

くれるまで我もすみれの上にゐて
野の菫しづかにあゆむ烏かな
狼に夜はふまれてはなすみれ

勇の字の題を得て

蜂の巣をひとうちにして晝寐哉

一瓢上人の新室は俳士をあそば
しめんれうなりと。われまづひ
と夜ふたよの枕に疊を汚さんと
す。

夏ちかの誰も柱によりやすし
山吹に晝なく雛のすさまじや
やまぶきや牛だまされて芹生まで
やまぶきやさくらがちれば我もちる
山ぶきに日のさす春もいますこし
菜のはなに夜のおぼろはやぶれけり
ものいはぬ人も春なりふぢの花
身のひまやうしろあゆみにふぢの花
かたげゆくこゝろとなるやふぢの花
としよれば見さだめがたし藤の花
竹をみるこゝろとなりて春はゆく
よしもなきしる人ふえてはるは行

長恨歌
養在深閨人未識

ゆく春を鏡にうらむひとりかな
春の山けふはや夏におしかゝる

三月盡の日江嶋にあそぶ

賴朝の献立つきて春のくれ

巣兆が千住の茅舍にひと夜とま
りて

ゆくはるやおく街道を窓のまへ

おもくわづらひて、はるもなか
ばすぎゆくころ

いかのぼりいかになりゆくわが身ぞと
　おもふもそらにくるふこゝろか

夏

我まへに雲行影やころもがへ
耳のなることもわすれてころもがへ
更衣膝にまづおくひねり文
世まかせのこゝろともなれころもがへ

四月はじめ、はこねのゆあみに
出るとて

う月たつ宿は草木にまかせたり
白ぼたん崩れんとして二日見る
このゆふべ鬼に喰れし牡丹かな
日くるゝにいつまでつぼむかきつばた
杜若花のそばよりつぼみかな
虫蝕に葉はたちのびてかきつばた

人〳〵筆とりて一紙を書けば一
句を題す。むかし清少納言が古
歌の一字をかへていひし事を、
ふとをもひ出て

かきつばた疊に墨はこぼれても
杜若人ありと見えてこぼれ米

灰捨てしばらくけしのくもり哉
すみよしの松の木間にもけしの花
よしや世は木棉ひとつに茄子さく
すめば世に山のひくみの麥ばたけ
橘ゆけば人に見らるゝ若葉かな
わか葉して佛のお顏かくれけり
あさ起も朝寐も竹の四月哉

一日百句の中

ひろごりて伊吹にさはるとし竹
若竹やひきたわめても寐て見たし
竹の子やかたばみ草のとりついて

待郭公といふ事を

はらのたつこゝろのはしもほとゝぎす
ほとゝぎす鳴や佛の爪はじき
ちら〳〵と見しかとぞおもふほとゝぎす
藪寺や箏月夜ほとゝぎす
はしり出て紙魚も聞らん時鳥

蝶夢法師の旅寓をたづねし日、月川上人重厚法師などもろともに、いざ給へ、すみだ川の若葉のけしき見せ申さんと、かしこより小舟にのりて

ほとゝぎすもひところさそへみやこ鳥
五加木茶やふり出てなく時鳥
柴かつぎ見あぐるそらやほとゝぎす

市街はいかいうた

から臼のとなりにすめばほとゝぎす
なけども〳〵まぎれこそすれ

このすぢを人もきくらん蜀魂
はやつゆの草木となりて杜宇
塵ほどのものが鳴なりほとゝぎす
夏來れば人しづまりて閑居鳥
やまぶきに實もとまるかや閑子鳥
石臼はぬすみ人もなしかんこどり
けふもまた梨子をかぞへてかむこ鳥
かんこ鳥柳のむしもかくれけり

秋田の無事菴、わが草堂にあそぶと十日あまり、あるあさみづから木鳥(鶯)おし切て、すみだ川の流にながし捨ぬ。その胸中ちりばかりの念慮なきをみな人うらやむ。從來の無事、またいよ〳〵無事ならんとたはぶれて

似たものは客にあるじにかんこ鳥
鳴わびて戻るも見ゆる水鷄哉
世中を是でまぎらす蚊やりかな
蚊やりするはりあひもあり眞土山
後の世や蚊をやくときにおもはるゝ

葛飾三惜の中

蚤とりて有明の月は出にけり
なつのよは土器ぬれて明にけり
夏めきて人顏見ゆるゆふべかな

四月六月、草菴の名殘

鼠なき菴しげらん今宵より
みじか夜はとてもかくても過ぬべし

右移柄辭あり、略之。

短夜や蜆くふさへもどかしき
みじかよや橘にほひ月はさす

夏の人といふ事を題して句せよと人の望けるに

夏の人月にもありのすさびかな

大磯に泊りける夜、ほとゝぎすのあまたなくよし人のかたりけるが、曉までおとせざりければ

夏のよは燒酎賣のひと聲に

結制を

一笊の塩やとけゆく夏百日

五日

粽ほどくそれにつけても草の宿

粽ゆふ小冠者に戀のこゝろあり

をかしやな葎の中にふくあやめ

五月雨のあすは檜もたのみかな

五月雨や三日見つめし黒茶碗

きのふ見し旅人もどるさつき雨

五月雨や西もひがしも本願寺

さみだれに鶯なくや何のひま

さみだれのまたをとつ日に似たりけり

つゆの身をもてあつかふや五月雨

さみだれや吾かつしかは藤の蔭

いつのむかしならん、柴扉に杖をむかへて鶴芝の三吟ありしも、たゞめのまへのやうなり。

さみだれて我宿ながらなつかしき

右哭土朗翁

味噌水もさみだれくさくなりにけり

さみだれの中に三度のけぶり哉

さみだれは喰ふてはこ(屎)するたとへ哉

虎が雨といふ題に

尺八の雫におちよとらがあめ

蟬の羽も夏はへだゝる心かな

こゝもまた蟬を浮世に山の家

なにゝこの袴着ろ世ぞせみの聲

いて戻れ大津車にかたつぶり

百般の世塵靜ならず、たま〱人來りて、いかにやなどいふにこたへて

よの中はかくして過せ蝿はらひ

蝿打てつくさんとおもふこゝろかな

海までも吹てとれ〱蚊屋の裾

わびぬれば蚊の入かやもたのむ也

たちばなの香にせゝられて、ときこえし風流にはたがひて

かつしかの蚊に寐かねつゝ椎の月

庭鳥もふりかへり見るゆりのはな

我宿は夜さへ見ゆるゆりの花

古家や草の中より百合の花

傘にあまりて見ゆる夏の山

丸山眺望

不二は朏よりおこり、三浦かまくらは腰のほどにつらねたり。欹ものは箱根あしがら、臥るものは大島はつ嶋、ちかきは眞鶴のらくつゞき、遠きは甲斐信濃のやま〱、さゝやかなるは三嶋ぬま津の家居、大なるものは

夏山や袂によする伊豆の海

橘やひと夜とめたる泣上戸

あなにくや鵜老鬼婆のたぐひ、劍をぬきて追しといふ古こともおもひ出て

よし原の蝿になげうつ小判かな

いづかたに夜はしるらんはつがつを

晋子が口氣

白眼に貧乏人やはつ松魚

ふたりまで友達死で初がつを
むづかしき世も日はくれてとぶ螢
小ふくべの青みにつくやとぶほたる
貧しさに螢とぶにもまぎれけり
南無〳〵といふにもくるふほたる哉
くさの家は百萬遍にとぶほたる

與境に身をしたがへて靜なるいとまなし。たゞ日くるれば俗事おのづからしりぞきて、しばらく寸心をやしなふ。

人に遠し宵よりこもる鰯の山
たちばなやむかし小袖の賣に出る

おくの東嶽より十符の里のすがごもをおくりこせり。うち見るより古き名のゆかしく、めづらしく、さていとすゞしげなれば、あしたにしきゆふべにひろげつつ、三符もなゝふも誰をかふさせんなどめで興じて

夏はたゞひろ寐むしろに夜の月

小梅閑室

杜宇しば〳〵鳴わたり、水鷄まれ〳〵おとづれたり。ほたる飛かふ稻葉の風も、軒にしげれる木立よりおとして、さらに扇もわするばかりなれば

月と雨かはる〴〵やなつ座敷

あさぢが原の中にこだかき岡あり。そこに三阿法師がかたばかりなる菴しめてすみける頃尋行しに、世ばなれたるすまひのすべて西上人の物ずきにかなへり。

松ふかし人目おもはで夏の月
庭中に階子のかげや夏の月

施米といふことを

麥米やこゝろもの袖にあまるほど
貧しげに扇の見ゆる戸口かな
夏野行扇のはしもたよりかな
身のむかし戀せし人か夏野ゆく
うちはもつ人はこゝろのやはらかき

牛嶋にある釋迦像の貞観の古碑、うすき紙にすりもどろかしたるを枕がみにかけたり。

涼しさや夢を佛に見せまうす
何事もむかしになりぬゆふすゞみ
すゞしさにいくらも喰ふや枇杷の玉
涼しさや百合も芒も手にさはる
すゞしさや家のまがりは夜見えず
貧すれば身をさま〴〵に夕すゞみ
すゞしやと人いふ聲をほだし哉
家〳〵にあひるもどるすゞみかな

南部の一草、はじめて京へゆく。しれる人のもとへ狀書てそへよといふに、したゝめつかはすとて

夜すゞみやかならず袂ひくあらむ
とかくして崩れも行やくもの峯

題 范蠡

くものみねかくれ處は見ておきし
此ごろの見るものとては雲の峯

先師去年の此頃、八仙人のかたを畫て給りければ、とく一軸にしたてゝ見せ申さんとせしに、その事はたさず。今おのれがお

こたりをなげきて
皐月來ぬ死なぬ藥も譃そらごと

ほそみちの古きひとすぢをたどり、しら川の關こえんとする羅城法師をおくりて
夏草のおくものこさぬ杖ならむ
山芋の蔓にひかるゝ淸水かな
のら猫の眞葛わけ入しみづ哉

題　西行
このおくにしる人あれな山淸水
吼犬もしづまる蓮の夜あけ哉
撫子のふしぐ〵にさすゆふ日かな
なでしこのばらに〳〵なるもあはれ也

新成松齋
半日は浮世わすれてねぶの花

民玉子、みちのくの名だゝる所所見めぐらんといふに、西上人のと葉をそのまゝにいひ出て、けふのこゝろをのべ侍る。
合歡の旅ねおくゆかしくぞおもほゆる
素嶠居士は、をとゝしの春久しくやみて家にをはりぬ。麥宇は、西の國へ下らんとして伏見の舟の中にて、にはかに病おこりてむなしくなれり。したしき友どち、本行上人のもとによりあひける日、懷舊の附合して此ふたりのなき玉をなぐさむとて、おの〳〵香や花やといとなみけるに
夏くさのつゆもかゝるや反古さらへ

曲直老人、七十初度の賀にあはせて、あらたに家つくられしを
なつ桃に老せぬ門とたづねけり
夕立や耳のそこなる雞のこゑ
白雨や安居の沓の流れさる
ゆふ立のむしりて給へ門むぐら

題　長明
夕立や家こし車の雨そゝぎ
ゆふだちやまたあらためて百日紅
あつき日や軒のつまなし落もせず
暑き日や日をふるかたの烏賊の骨
あつき日のたよりともなれ青楓
あつき日やこゝろなぐさの桶の漏

天狗のうへを題にわかちて發句して戯けるに、呑熱鉄といふ事を
胸あつやあさ夕倦し茄子汁
あすも見むはつ花茄子吾なすび

讀莊子
ねぬや人蚕より大なるはなし
晝がほの赤みに人も秋ちかし

山家のなどし、いぐしたつるわざもなければ
おもふとみな白雨に流しけり
紙屑の袂をぬける御祓かな
みそぎ川こゝろねぢけし人もなし

成美家集

成美家集下之巻

秋

はつ秋や何の烟も眼にかゝる

はつあきやけさは柱に手のとゞく

立秋のこゝろを

灯ともすもまづめづらしや夜の秋

はや秋の柳をすかすあさ日かな

男 贅亭謙圃

帯菴子強 仝校

次窩久藏補定

賣家のとなりにすみてけさの秋

淋しさにつけて飯くふ宵の秋

月僊上人の大なる茄子ふたつ畫るに書つく

汁妍のうれしきあきにうつりけり

殘暑のこゝろを

七夕にねがひのひとつ涼しかれ

あふぎ臥あともまくらも天の川

ほしのあふ夜や我がちに草の花

薙髪してのち

たなばたや涼しいさへもうれしきに

窮郊井をさらふによしなし

銀漢豆腐の水にかよへかし

桐ひと葉手を打かへすけしき哉

よをこめて鼠はじきにひとはおつ

かりそめや壁に釘うつ玉まつり

なつと秋とふたつにわりし西瓜哉

燈籠や顔見し友はひとりなし

高燈籠見まじとすればめにかゝろ

をどり來て山もとちかくなりにけり

珠數のすく袂も秋のかたびらや

角力とり露の妻子もありときく

つゆの身とおもひもかけず相撲とり

秋のくれ立出にけりすまひとり

おくの乙二がもとより、かつし
かの秋の風、垣のはこべ實やむ
すぶなどいひこしける返しとは

なくて
くさの露葉見し人をおもかげに
よく見れば露もしばらくひとさかり
ふつか三日四日五日露の置まさる
我歸る家は見ゆるぞ露の中
身ひとつは水汲ずともくさのつゆ

草庵條長なし

のぞみならいくらもくれん露の玉
美しや世にたとへたる草のつゆ
つゆの身といふもまとやまくらもと
玉川はふたつも見たりつゆのあき
家はみなつゆの中にてうつ火かな

乙二とわかるゝ時

つゆ淺茅たがひにながめられにけり
いなづまや人のあゆみもおそいもの
稲づまや念佛十疊の間に入
いなづまや野にたつ人もあればある
稲妻とひとつになるやくそかづら
いたづまに梨子の接木のいたみけり
いな妻を待や侘ねの探しもの

杖を曳て梅山居をたづぬるに、無門の關たかく鎖せり。いかなるか是秋風一時の情。

秋の聲門たゝけどもこたへなし

あさがほの句あまた作りける中

情出してさけよ朝がほ人もつゆ
あさがほのはや此秋を咲へらす
杉子とるいもがあさ顔咲にけり
あさがほをあすも／＼とおもふ世か
あさがほのはやしぼむ見るけふの秋

草堂兀坐

あさがほのさく見てけふも過すなり
朝は蕣夜はいな妻の世となりぬ

一日百句の中

牛捨る野にも立るやをみなへし
そりかへるほどあはれなり女郎花
秋風をまつとてたつやをみなへし
はじめから吹をられけり女郎花
かなしさのちらりと見ゆる萩の花
養むしよ甘露ふれりと人はいふ
有明や馬のなくまできり／＼す
月や入寢に鳴よるきり／＼す
牛の尾にうたるゝ秋のほたる哉
小屏風やたてはさまるゝ秋の蝶

躡屐無勞問惠休

杖むけてまづあはれなり秋の山
柴の戸はあくるよりはやあきの風
人すめばすむとてふくや秋のかぜ
鴛鴦も吹わけられて秋のかぜ
身ひとつにからまで吹かあきの風

鎌倉にて

名をとふや畠／＼の秋のかぜ

病後

棲ふみてころびやすさに秋の風
ひとつ灯の消もはたさずあきのかぜ

あたりへものむつかしきかきほに はひまつはるものあり。夕顔の露けき風情にはたれも／＼見なさず。そこに咲るはととふ

人もなきに、たま／＼柴扉をたたける隠士に對して

はづかしや絲瓜にかゝる夕けぶり

なにはに一とせあそびて、來る年の月の頃には必歸り來むといふに、老後の露命おぼつかなしなどおもひながら再會の期を約して

それまでの命こらへん風の秋

かまくらにて

里人の新のぼりて月のくも

さびしさにたへたる人のまたもあれないほりならべむ冬の山里。われまた庵ならべん心ざしあれば、其由上人の新居のまことにうらやまれて

月清しふところにせんかんなくづ

陰に居て月に座しきをゆづりけり

身のひまや朝寐よきころ月の頃

名月の雲にほゆるや山の犬

脚病一歩をすゝめず

名月を追ふてひけ／＼庭むしろ

名月を大事にふくや松のかぜ

名月やとばつゝしむ夜の人

名月やわするゝころを風のふく

名月や律の宿にかへりけり

草庵

名月のひかりばかりぞにぎはしき

名月にあふや小庭のひとつ瓜

名月を人にも見せずかくれさと

はや出しわが庭松に月は出し

家ふたつあれば月見るもやうかな

ふはとぬぐ羽織も月のひかりかな

十五夜

世にあくと人にはいひて月見かな

仲秋無月

雨見ゆるそれさへ月のちからかな

乙因が故郷におもむくわかれにのぞみて

有明のひかりしみつく袂かな

世中やなるこ曳てもわたらるゝ

ちる木槿掃あつめては見られけり

白木槿毎日しぼむころをみろ

何もせず木槿さくまで世はなりぬ

門の秋木槿咲籬ほつれたり

亡人呑溟がみづから寫せるひとつ橋集、わが方にとゞめありしを、つま子のもとへかへしつかはすとて

葛の葉をかさねて夢の古さらし

秋江晩望

松芒そのほかのものなかりけり

ちゝぶ山遥いところや花すゝき

此おくにしる人もあれ花すゝき

これよりして秋の日よわるすゝきかな

芒はら果はしほやくにほひかな

飯櫃や下葉をれこむ風の荻

これさへもへりゆく秋よ唐がらし

秋はたゞなみだもろくも唐がらし

何人かすみて顔出すまどの蔦

ひと寐入よくしてきけばころもうつ

大かたの茄子たふれてうつきぬた

庚申の三弦のころきぬたかな

箒木にかくれてうてる砧かな

陽子なくなりてのち、狂句をかしきふしもなき事をくゆ。ひとたびは亡人をかなしみ、ひとたびはのこれる命をめづらしとおもふ。悲憂かはる〳〵胸をせめてこゝろほれたるが如く、狂せるに似たり。

しるやいかに我さま〴〵に秋の雲

浙江潮かれ盡てより春秋行かふこと既に七度、ひさしく波浪の淸音をきかず。俗耳を洗ふによしなし。

風悲しわすれぬをわが秋の友

喰て寐る身のつたなきに秋のくれ

閑中日月長といふことを

秋の暮鐘長閑なり人なしに

露の家は鴈とともに寐や壁ひとへ

夜增戀といふ題に

夜の鴈かさねかけたるおもひかな

大竹もなびくや雁のわたりぞめ

破れ戸に釘もきかずや宵の雁

秋の日は雁の羽風に落にけり

眼のまへに蝶死でなく鶉かな

古沓や荻にかゝりてなくうづら

おろ〳〵と人に見えけり曉の鹿

やせ〳〵や身をつまだてゝ男鹿鳴

しかきけば木の葉のやうな我身なり

三夜さきくおなじ所やしかの聲

食に肉なし

わびぬれば柚味噌の釜を喰ひけり

蜻蛉もちとふりかへれ神路山

蛤の息もつきあへず野分ふく

淺草やすゑは稻葉に三日の月

みか月のひかりをちらす野分哉

後の月鴈大聲にとぶ夜かな

のちの月葡萄に核のくもりかな

白雨居士の一周忌に、人〳〵あつまりて追善のはいかいしける日、懷舊のこゝろを

后の月かたりあふほどたのみなや

さゞ浪も身にかゝるかとのちの月

のちの月薬は杖にきられけり

尾花みだれてむなしくまねかず、桐おとろへて葉のおつるとはやし。臨海主人、にはかの病に物故のよしをきく。時しもあれとおどろかれて

後の月あれよとおもふ人はなし

右哭莽蟻

老懷

酒はいかい口はさかりてのちの月

寐られぬ夜に

おもひ出るむかしもなくばいかにして
寐ざむる秋の夜をすぐさまし

うれしさや夜さぶの陳皮唐がらし

茶をのめば目鏡はづるゝ夜さぶ哉

小判よむとなりをもちてよさぶ哉

長夜のこゝろを

秋の夜は松しまの松もかぞふべし

ながき夜を我にむかふや屛風の繪

背柴の崩れてのちも夜ぞ長き

菊さくや五つはのこる唐の皿

夕ぐれにけふもまたなるきくの花

きく咲て雀の米も日和かな

行燈の壷さへ見えてきくの宿

きくの香に下部が桐油こゝろせよ

ひと壷のなためものなれて菊の花

みそ焼ば小金もへりて菊の花

菊を見て一日やりのこゝろかな

園女賛

菊の香をもてしづめたる硯哉

菊は花のとぢめなりとや、もの
ごゝろぼそきをりから

來年も見るとやすらんきくのはな

寒ければ顔もてよする柚みそかな

秋茄子葉に焼ぞあぢきなき

あきもやゝ黒みに入ぬからす瓜

落栗や兎のあそぶところなし

閑窓獨坐

日は過る梢の柿と見あひつゝ

吾ふくべ種なるまでに秋を見し

椎ひろふ浮世過すもやすいもの

神田祭

部の拍子はむかしにて花笠大名衆の警固おごそかに、神輿のわたらせ給ふさまいと尊し。神人氏人どもけふをはれと出立つゝはなかざれる車ども曳つゞけ、笛鼓おもしろく打吹たる、實に太平の音なるべし。此車を花出しといふ。東の俗語なり。是は加茂八幡などの祭に、出し車といふを出させたまふにおもひよそへてかくいふにや。

花出しやうごき出たる秋のやま

魯陽と舟をおなじうして此長流にあそぶ。

かなしさや秋の日は入(いる)角田川

うら枯やふねは下(くだ)るぞおもしろき

末がれやつきそこなひの鐘の聲

やま里は是を人目に案山子哉

見る人の唇かわくもみぢかな

水くむも浮世がましや夕もみぢ

我からの鼻息見えてゆふ紅葉

底すみて魚とれかぬる紅葉哉

ひよ鳥も來て悲しがるもみぢ哉

住なれて魚なき國のもみぢかな

若一王子の田樂踊、さはる事ありて秋の末におこなはれけるに參りて、花のころは花もて祭るといふ古とおもひ出て

舞人よ紅葉のころは袖のかぜ

名月もふたつ過たりつゆしぐれ

秋の果龜は小藪にはひ入ぬ

朝がほを芋と見るまで秋たけぬ

あきの日のさすやかぎりと山の腹

小の九月に

この秋は晦日さへなくて暮にけり

ゆくあきや門の小草のほつれより

暮秋のこゝろを

秋の山すそは時雨とふりにけり

音にたてゝふくべもなるや秋の果

暮秋

きり〴〵す會我ものがたりよみはてず

冬

大名のもみぢふみゆく小はるかな

猿曳の小春機嫌に出にけり

名所

犬吼る晝も淀野のしぐれかな

人ゆけばやがてしぐるゝ野中かな

宵の中上野浅草としぐれけり

人は寐て鼠の顔にもるしぐれ

青草のすこしもあれば時雨けり

梟の身をまかせたるしぐれかな

蕉翁の像數枚を畵がきて、人〴〵にわかちおくるとて

くま刷毛に上野のしぐれそゝぎけり

光廣卿聞書に、秀歌の躰大略猿藉無棒者歟といはれたる定家卿の首をしめて、問たきなりと。此こゝろ誰もあるべし。

芭蕉會にその唇を守る哉

けふの供米を勸進申されけるにつかはすとて

はせを會に瓢の底をたゝきけり

几董が伊丹といふ所にて、にはかになくなり侍りしよし、はやく便にいひこしける。風雅にかゝづらふ人の道路に死なん、是天の命也と、はせを翁も書のこし申されける事などおもひなぐさめて

旅笠をつひのやどりやかれ尾花

一天四海皆歸妙法

御命講子どもの親も呼れけり

十夜

酒賣の十聲ひと聲たのみあり

すくひとれ十夜の汁の芋杉子

見佛聞法

生海鼠さへこの時にあふ十夜哉

十夜とて袖ふりあふもたのもしや

葱の玉神のお留守とにほふなり

木がらしの人も草木に似るものか

こがらしのふくや瓢の種をさへ

木がらしになに事もなし豆腐槽

落葉して日なたに立る榎かな

貝むきが手もとまぎるゝ落葉かな

明るまで人はよく寐ておちばかな

鵙まで落ば寒がる風情かな

人さらに狸のあとをふむ落ば

この頃の疊ざはりも落ばかな

落ばして小寺〴〵のあそびよき

鳥めらが來ては屋根ふむ落ば哉

日みじかに見てもをらるゝおちば哉

ちる木の葉いくへの下の我ならむ

花にうかれ月をもてあそびしも

すみだ川木の葉がちにもなりにけり

松竹におもひもいれずみそさゞい

浙江二七日に

人をとふ我も冬野のきり〳〵す
見るほどに歸らんとおもふ歸りばな
わがすむ軒端つゞきの其由上人は、今の月川大德の古き名を乞得て、狂句にあそばんといふをよろこぶ。
水僊に霜の白さをつたへけり
水仙は葱のきはにて咲にけり
姿まきやその夜狸のつゞみうつ
辛崎の松も見ゆるや大根びき
かまくらやをさまる御代は大根曳
大根ひくその夜や松にきり〳〵す
大根ひきて松はひとりになりにけり
長明が車もおせや大根ひき
棒提てゆけば鴨なく澤邊かな
ぬす人も妹とぬる夜やなく乳(千)鳥
川千鳥牛の喰ものなかりけり
肩ほねの鳴るにつけてもなく千鳥
すみ〳〵にものおく冬の夜はをかし
炭つむも物氣に入らぬ浮世かな
炭なしといふ輩小夜も更にけり
鐘なるやすみのはねしも宵のこと
炭といふ題に
木のはしの法師も炭により給へ
いつまでか病にもならで古ぶすま
引かぶるよし野のおくの衾かな
うなり出す三斗の釜も霜夜哉
旅人の捨た客なり曉のしも
老情
寐つくさへ拍子ものなり霜の月
哭巢兆
三十餘年の舊交、たゞ一時のあだことゝなりてながき恨をいだく。書齋の雅名も今朝一片のけぶりとともにあとかたなし。
なにごともひとつ殘らず霜の草
亡妻が墓まうでして
塚の霜われも苔にはちかき身ぞ
鍋をかるも戻すも寒さかな
家さぶく桐の赤葉のひとつ哉
寓(偶カ)感
つたなさの寒さにつれてまさりけり
藤棚の下に米つく寒さかな
貰てやる夢さへも見ず冬ごもり
あさ顏の蔓もはらはで冬ごもり
うしろには松の上野を冬ごもり
ひとつ灯にひかりかはすやふゆの月
梅などもうめと見ゆるやふゆの月
はつ雪や灰にかいたる梅のはな
から家とおもへば煙る雪のくれ
あさのゆきおなじ文こす友ふたり
魚くふて口なまぐさし晝のゆき
さゝやくもたま〳〵見えて雪の人
雪になほけしきもてとや鐘がなる
ゆきの日は腹たつ人も來ざりけり
撰一瓢
雪の日は疝氣の虫も音をいれぬ
ゆふべまで捨たい宿をゆきの宿
醉人狂客かはる〳〵見まひ來れば、座のこゝろ物にうつりて靜なるいとまなし。

しばらくは雪にかくれん市の門

韓人不二を見る畫に

のけぞりて雪の上なる雪の山

ことしは市中に居をうつして

大雪や我を山家に庭の松

氷捨てたゞ何となくあはれなり

我やどは氷をつるすあたりかな

梅の咲をりもあらうか厚氷

柴の戸や氷しまゝに捨ておく

月霜や齒ぬけとなりて鉢たゝき

ふとん着て山さへ寐るをはちたゝき

枯菊をまたもてはやすあられかな

豐鑑禪師の虎によりてねぶれる圖

冬至なりふたりのわつぱはや戻れ

冬至とて壘の墨を拭せけり

くすり喰箸を下せば鐘がなる

河豚汁妻といふもののなくもあれ

君が代は誰もくふなりふぐと汁

孔子遠跡一塵埃

河豚くはぬ人さへもまた夢なれや

久賊と題をさぐりて

から鮭は花さかぬ梅の木ぶり哉

暑天にあふぎ臥て、わが書をさらさんといひしもののしりのうへにはさもあるべし。このはいかいのまじはりは、

から鮭の腹にはかくすものもなし

乾鮭の梅を喰をるけしきかな

冬の夜やどこを明ても月はさす

寒月や薬の紙のそらにとぶ

寒月の柳などにはかたぶかず

寒月やひとり破れしくすり瓶

ひく汐の淺くさすぢ(筋)や寒の入

寒聲を鬼もきけとや羅生門

埋火や我名わするゝこゝろあり

うづみ火やよし野のおくも是あらば

埋火や眉やくばかり小夜ふけし

虬戸ぬし、舊里にかへる。春はまたかへりのぼらんといふに、其詞かならずわするなといひて

梅さかばおもへ爐に手を交へしを

讀莊子

腮の髭火桶に腑をかくしけり

、仁波海の外にながれて琉球の聘使まうで來しに、おほやけよりさまざまのものたまひ、から衣袂ゆたかに、おもゝちほこらしげにゆきかふさまめづらし。

よき時をうるまが袖に寒鷄卵

成美みづから心にとふ、かしらの雪霜はらふべくもなく、腰に梓の弓をかけたり。なにごとをいとなみ、なにごかなれる。東都十年もなほ速なりといはむか。我こゝろ是にこたふることばなし。たゞ

範の日にとしこそたまれ事納

すゝはきや水うちかけし松の色

まがはしや小家〳〵の煤はらひ

せきゝに市のかくれ家見られけり

節季候はいかなる人のなりぬらん

せきゞよ名のため狂ふ人もあり

せき候にふみ過らるゝ伏家かな

三十九の春に

さすがまた老といはれむあすの春

年はかく氷をはしる入日かな

はや暮よ三日ばかりは何にせむ

題　畫

畫模の人にもとしのくれゆくか

かつしかの草堂

しづかさにおぼえられつゝ年ぞゆく

貧しさにたゞ居するなりとしの暮

春をほすも入日がちなりとしのくれ

とし〳〵れぬ喰ちにたさぬ唐がらし

雑

秋の雲そゞろにはしりて、陽子が俤まのあたりをさらず。あしたのつゆむら〳〵見えて、陽子があだなるちぎりをおもふ。陽子なくたりて後、われ世にいけるかひなし。われさらに陽子をわするゝ事なし。陽子、地下にわれをなにとかおもふ。

ひとゝせはよくらへにける命かな

翁の像に題す

笠を着て草鞋ながらの佛かな

鶴

すぼ〳〵と夕ぐれて見ゆ鶴の尻

鶺　鴒

留守〳〵と宿の鶺鴒にいはせけり

樵　夫

木をこりてかくまで老ぬあすもまた

母のうせける時

母なしに我身はなりぬ身はなりぬ

去來叟百年忌辰

人は土地の清きによりてよく聞に、土地は人の雅なるを得て其名ます〳〵久しきにつたふべし。去來叟が落柿舍における、人と所とふたつながら相得たりといふべし。

それよりして見し人はなし嵯峨の山

初　戀

きのふ見しも詠られけり庭の草

親猿の愚かに見ゆるもあはれなり

いづかたに車はとまる夜のあめ

我宿やとし〴〵山によりかゝる

文化十三年子七月開板

江戸書林

中村屋武兵衛

跋

家君夙攻俳諧之學簿書計筭之暇情之所遇節序景物離合忻戚慨今懐古備以成章其至斟形迹於無朕洩造化於傳神乃語言文字外別出一機軸矣於是四海賢達郵寄賡唱推為主盟焉晩罹疾退老葛飾之瀕頤志泉石毎長林清寂水流花開環坐兒孫吟哦自娯積久成帙人有請上梓剞劂以貽於海區者必拒之曰老鈍頽唐毎意與境會結習未除聊復爾々要之意薄色淡奚

跋

家君夙に俳諧の學を攻め、簿書計算の暇、情の遇ふ所、節序の景物、離合の忻戚、慨今懐古備さに以て章を成す。其の形迹を無朕に斟み、造化を傳神に洩すに至つては、乃ち語言文字外、別に一機軸を出す。是に於いて、四海の賢達、賡唱を郵寄し、推して主盟と爲す。晩に疾に罹りて、葛飾の瀕に退老し、志を泉石に頤くす。長林清寂水流れ花開く毎に、兒孫を環坐して吟哦自ら娛しむ。積久帙を成す。人の上梓剞劂以て海區に貽らんと請ふ者有れば、必ず之を拒んで曰はく、老鈍頽唐、意と境と會する毎に、結習し、未だ聊復爾々を除かず。之を要するに、意薄く色淡く、奚んぞ觀に當る

足當觀哉今玆二三同盟
與子弟輩心期於必傳固
請刊之乃抜為六百三十
七裒為二巻又命余記其
後因謹録嘗所聆左右者
記其後云

文化丙子春正月

男包壽撰 印

に足らんやと。今玆に二三同盟子弟輩と、
心に必傳を期し、固く請うて之を刊す。乃
ち抜いて六百三十七と爲し、裒めて二巻
となす。又余に其の後に記すことを命ず、
因つて謹て嘗て左右に聆く所の者を錄
して其の後に記すと云ふ。

文化丙子春正月

男　包壽撰　印


蔦本集
乾

序

余は乃ち酒人なり。左に蟹螯を持ち、右に酒盃を擧げ、世の所謂俳諧の詞を學ぶ暇なし。然りと雖も紙上墨を有つ者は、瀏覽せざるを得ず。頃者、鈴道彦撰する

序

余乃酒人也左持蟹螯右
擧酒盃無暇學世之所謂
誹諧之詞雖然紙上有墨
者不得不瀏覽焉頃者觀

所の蔦本集を観るに言々句々風致あり。以て人の耳目を悦ばしむるに足る。是に於て酒間或は其句を摘て、以て文字飲の具に供し、毎に豪興を添ふ。甕頭に酔倒するを覺えず。因つ

鈴道主所撰蔦本集言、句、皆有風致足以悦人之耳目於是酒間或摘其句以供於文字飲之具毎添豪興、不覺醉

て此書を其端に書す
衛。道彦は仙臺の産、
舍を金令と號し、江
戸に僑居し、其技を
以て世に鳴ると云ふ

鵬齋老人識

倒甕頭矣、曰書此言于
其端爾、道彦仙臺之産
舍號金令僑居于江戸
以其技鳴于世云

鵬齋老人識

題辭

一　祖神の風德よつの海にあふれてければ、今の金令舍がどき七ツ子の口きくやうなるほ句共の、恥かしくももろ國に聞えて、かの集この集にのせくはへてもてなさるゝ、忝なしとやいはん、めいぼくとやいはん。且其多かる中には、文字をあやまり、手爾於葉をそこね、人の句をおのれが名にしるし、おのれが作を人の名におしとられたる類若干ぞありける。いでやにしに東に天さかる鄙人のわざならずも、聞づていゝ傳に流轉せし物の、強ちにとがむべからずといえども、道に執するの心にとりて、是ほど口をしくうとましき事はあらざるべし。夫山がけのうす紅葉こき紅葉柞はぢ楢柿かへでさま〳〵なるに、蔦の蔓のこれかれとからみまつはり、高きにひくきに、草とも木ともわかちがたく染なしてあやしけれども、一度其根によりて一筋を引よせたらば、是が蔓とも、渠が枝とも、あきらけくわかれ侍らんか。是この集に標題して呼そむる蔦のもとの微意なるのみ。

一　俳家往々句集有。歌に家〳〵の集有と同じく、其家の風吹絶んを悲しむより、うけつぎたる家の子、傳へたる門人等の致すいさをしにぞ有けれ。又別に一家有、名利之助が田地持廣げ、瓜も茄子も作り取なる句福者の、我をしられて悦こばんは、芽出度今生をこそ言

べけれ。化して虫に鳥にも成なん、耳に何事をか聞何事をか思ふべきとて、身みづから撰み定めて、何某が句集などいゝ罵しり時めくぞ、人の目の鞘はづさするの業なりけるや。後の世こそ恥かしけれとて、一期の歌ども燒すてける人の心の清らに聞ゆるといづれぞ。さて金令社裏に筆まめの護物と云此道におゐてのしれ者有けり。かの正徹法師がなからんあとの草根集をや心にひめたりけん、右に左にありそ海の、早稲に晩稲に拾ひ集め書あつめつゝ、年ごろふくよかなる籾だてして持けるを、さら〳〵とこの蔦の本の料に斗よせられけることの是非なきながら、半途にしてかゝる目に逢は、ほとゝぎす鳴やなかずの卯月空に、青さし刈られし心地すとぞつぶやくめる。

一　前に云文字てには等、動もすれば相違して諸集に出されたるの多きを、改め正さんの思を企つるにいづるの蔦の本なりければ、羇旅感偶に生れし物の常の題詠とまぎるまじきの徴を懲さんが爲に、はしづくりを載てながきを厭はず。其日其席の證にたてゝ、自他の作分明ならんが爲に、人名を記て殘さず。見る人他の家の集にくらべて、煩らはしと云事なかれ。

蔦のもと春之部

陂三

すら〳〵とあくる名なれや玉の春

さほ姫や長柄のはしは絶たれど

元日句なし。二日に題す。

笠買んけふは翁の華のはる

斧の柄も朽んこゝちすはつ暦

鰒に來し顔を洗ふて御慶哉

梅若寸來の初懐紙には、雛筆玉人等の一字を分て、題に探り侍る。

大和ぶり玉のはるとも申けり

かき初の纖手あくなよやよ硯

はつ春は茶うりも來ぬやおもしろみ

立松に來てもさはるや四十雀

よしみつの御寺に年籠の通夜申事應の冥加ある我々なりけるかなや。曉念同音にとなへ、御戸きり〳〵とひらける文化三年のたゞいまなりけり。

初としの涙も恥る臼の御座

正月はみなが足袋はく月夜哉

梅翁の塚によるさへ春ごゝろ

松過や小ひらめなどのとれて來る

万歳やはたご物くふ顔もせず

万歳や松たてさせて來る氣韻

豆畑のあとに兎の子日かな

七種

わか菜の夜跡戀しくも更にけり

楪をく折敷もけふは若菜哉

宗門も氷ると聞に今朝の芹

讃壽星寄白鹿之圖

坤雅曰。鹿乃仙獸。性能自樂。角下必懷璚。蓋有蒼有白有玄。皆千歳之後而所變之文色也。壽星豈不愛乎。

この遊見て後ひらけはつ暦

春風

はるかぜや日陰の芹も打けぶり

春風に我名かへばや京太郎

よき人のよき中に似し春の風

春の日や松葉掻てもあそばるゝ

ちらほらと松も歩行や春の野等

山の道ものどかさうなり楫枕

霞

月雪の外に霞の朝ぼらけ

小池にも汀をなして霞む日ぞ

霞日の風さはぐ迄寐たりけり

和讃でもしらばひかふに月霞む

鶯　雲雀うそなんど

鶴龜のうぐひす聞て居にけり

黄鳥の汐にまかれし小藪かな

鶯の妻鳥さぞや聞をらめ

うそ鳴や木がくれ初る梅が筳

如意輪の御貌日永し鶯の鳴

山陰も空さへあればなく雲雀

ひな曇舞ぬひばりも空に聞ふ

春の人に鴫の草ぐきをられけり

猫戀

どの屋根の窓がおもひぞねこの鳴

この頃はつらも洗はすおとこ猫

山ひとつあなたの猫の來る事よ

火傷ねこかくても春はわすれぬか

白魚

千代倉も箕ではからぬ白魚哉

しらいをの歌よみたがる内儀哉

白魚の水すてたれば草のもえ

白いをの孕みてふとく成にけり

榛の木の花見に來ませしゞみ汁

梅

山鳥の梅さはがして立去りぬ

三とせ見ぬこゝちもすなり梅花

宵の梅増賀の床も匂ふべし

隱亡が梅も咲けり千代の春

せつきける昨日のくやしくて

ちりて後おもふに梅ははやかりし

子ごゝろに覺えしはそもうめの花

さめ〲と泣た笑顔や谷の梅

輪かざりや梅にもひとつつゝかける

うめの花苔こぼるゝくせの有

方丈はまだ水仙やうめの花

梅屋敷

さす傘の江戸は梅見も群にける

凍笹に小鳥の糞もうめの花

久しぶり云て並ぶか梅つばき

椿

一はるの花を持ける椿かな

庭の椿果報やけしてさかぬ哉

億良等か古郷なれやちる椿

とかくして人日とぼしき椿かな

柳

とり分て荒たる宿の柳かな

曾我野の雨坊、つくばの道
隣、みちのくの文卿、右雄
の茶人、さて年〻庵いづれ
もすぐりて左きゝのしれも
の共、居並びて盃かはすに、
なみ〲の事言出て、この
春光に恥かゝすな、とひし
めく漫興なり。

名殘なく雨のはれたる柳哉

田にし鳴亀なき頃は草わかみ

はつ草やわすれし史を見るこゝち

あそぶ子の鈴がなるなりくさの春

ふる郷にこんな道あり春の草

夕かげやをるほどになる蕗の薹

つく〲しつむや榼の片手にも

如月

きさらぎや内儀の留主の小酒盛

衣更着や裏からみゆる御路次町

如月や毘沙門堂の昔茶に行

きさらぎや釣瓶にあかる井の小鮒

孔子盗跖一塵埃。君のみた
だ〲うらやむべし。

春の月あとへ年とる御顔哉

うがいして娘寒いかはるの月
業平の一期に似たり春の月
家かげなどに見そめてをかし春の月

かしこにも人行けりな山を燒
飾焚やかまはぬ事になく鴉
どちからも田中の神やかざり焚
わか松に鶴の立たる春寒み
雪解を見はりて居るや雎の鳩
春の水まだ小ぐらきに見ゆる也
霞より降ぞまことのはるの雨
うちぬれぬものこそなけれ春の雨
たれこめて白かみ恥ん春の雨
春雨の漏家もとなら梅が崎
はるの露いつの露よりまどかなる
便船もいひよくなるや事納め

鳳巾

几巾すゑぬ空とてはなし南吹
切凧を乘せて來にけりもどり駕籠

山居

日よければしたしき里の凧が來る

紅梅

紅梅をけさは佛に手折けり
紅梅やどこかの野火に日のかげり
紅梅やあれこれとして狭き庭
菜の花や薺の花や小鳥ゆく
たんぽゝや瀧よりうへの里の春
蒲公英や菜に行蝶の道次手

桐生足利と行過る頃

はたをりも胡葱結べよい日和
搗臼をく軒のひまさや母子ぐさ
熊うちも鋤かつぐ日か薺ちる
まよひ子も死ぬまい時ぞはこべ咲
三葉まではたしかにほぐすさし木哉

雉子

草先や小家のかげにもきじの聲
酒をりの楠も若やげ雉子の聲
雉子なくや人を身にする舟の闇
ねこの子の雉子に逃こむ戸口哉

歸雁

雁なくやおく野の鹿も歸るとて
ゆく雁にかざしそめたる扇かな
門田から立しがやがてゆく雁か
なけ田にしさらす垣根にならぬうち
蜑が家の穂垣小高し鳥さかる
春の鳥みな妻もちに見ゆる也
閼寺のいとけながるや雀の子

牛込穴八幡の境内、市中を去事咫尺ながら、林泉とこしなへにふりて、さらに他山のおもひをなさしむ。

角落す鹿もそこらの崩れ土

蝶

ほろ〳〵とこぼれかゝるや草の蝶
子をすると聞ばいやしやてふの腹
よべば來るよしのあれかし飛こてふ

蛙

嫁くれし家をとりまいてなく蛙
からころとなくは妻ひく蛙かな
其聲を頓てあかれなはつ蛙
足もとの餘寒にまけな啼蛙

雛

よく見れば坊が妻なり雛買

逢邑行脚せしころ

蓙敷て雛のむかふへをかれけり
米をつく隣もありて雛の宿
打つゝくのみを梅若参りかな
永き日や足の弱さにあそびあく
舟木伐と聞さへ遅き日頃かな

内外につけてあふなけあら
ぬ一憲のさらば笠に

このもしや親のつきやる芳野行

花

はつ花のちる時人に見られける
誰が馬のたが馬よぶぞ花の山
花の寺入て黒う見ゆるなり
花に雨しかはあれども華の雨

鶴芝集中雨吟の時也。士朗
と主客の坐をかえて出せし
旅情の句。

雨にとはからざりけるを花の宿

荘厳寺の満花、生滅々已の
鐘の聲もまとしからず覺侍
りて、

いつまでもあらんけしきや花の寺
花の戸に巻て立たるむしろ哉
花を見るこゝろは親もをしえぬぞ
鳥の眼もうちとけつらん花の空

寛永寺　五句

ふる千代の花をまじへし甍哉
院／＼の蕎麦も何石花盛
大八で米押す聲も花に鳥

東叡法王の御林あふぎ奉り
て

花七日風のはふり子召れけめ

花の上なる月夜も残さめや
と、小風呂敷にへばりつき
たる護物を引たつるとて、

見残せや九品にあてゝ暮の花
傘さして講も聞けり花の山
唯識のたゞ中なれや花七日
曙や花のなさけの人に來る
花に風七つ小姫が手にもふく

勧進能ありけるとし

ちる花にたはけからばや鈍太郎

たれかれ誘ひ出たるけふな
るべし

宗貞がうきいふ友もなき花見

上野より信濃界行脚せし頃

花を見た御禮申さん薬師堂
頭陀と寐し冥加や花を二季越
花に見する心のほしや習しらで

木母寺

口をしく土堤に出けり土堤の花

酒折さして旅立おもひなり

ぬ。さて人〱の離筵に、
ちる花に氣相見せけり小風呂敷
花果て揃ひし樹〻のけしき哉

櫻

あかるみへ出過てさびしはつ櫻
ゆさ〱と櫻もてくる月夜哉
不受不施の御寺も花はさくら哉

玉川にべく丸を主とせし頃

あたら松の利にもなるかちる櫻

桃

桃の花熨斗添ずとも贈るべし

酒くさき鹿太が、ひとゑ梅
一重桃ひとゑ椿など題を採
らせたるに、

紅梅も過た野もせやひとゑ桃
御かこひの外は家中の桃のはな
山鳥はまだ冬で來る辛夷哉
ちりもせでなくなる木瓜や草の中
子そだてや木瓜にも尖をあぶながる
木つゝきも來ずなる筈よつゝじ咲
あぶなげもわすれてゆらぐ磯馴藤
山かげや藤の下家又見ゆる

山吹

山吹や客の歸りてをしき時
やまぶきの咲て憐と云れけり
山吹やあれる葎がもふもゆる

菫

わが戀は舞子の松の下すみれ
世は奪と道ゆきぶりに菫つむ
ある處にあるぞすみれは口をしき

藤垣の淺茅にしらぬ種のこ
ぼれて咲そめけるを、

たらで住菴見たてしよ白すみれ
落逕に咲もこそすれこき菫
そら豆の花にせかるゝ扱茶かな
山人や薪にすとて木實植る

まさきの槻菴に、又來ずや
あるべき、侍るゝよしの年
はふるともなど、ちぎりけ
る頃。

夢にせぬしるしにまくぞ蔦の種
地に油たれかころびて春のくれ

足利より笠かけ野越てける
時

高き代の松にふれけり春のくれ

行春

ゆく春や脊戸門明て麥の雨
春過し春や塙の松の聲
夏近になるや旅僧の白脚半

いらざる紫塵のまじはり、
藻にすむ虫の我からとは申
ながら、またやこりずまに
こかさるゝ苦しみ。やうや
く生路に走り出て、十時に
とりつく黄昏なりけり。

燒たかと門の蛙に笑はれし

文化三年うるま人まいりつ
きぬ。事どもなりて、明日明

日鎬馬に水かはんと云。道のほど久かたのあめが外に見やらるなれども、家路とおもふ人〳〵の戀しさ押はからるゝ中に、一人のくすしはかなくなり侍るよし、遂に此地の北邙にいまはしの形見を殘すとなん。

万歳も悲しかりけりこのはなし

六歌仙讃

黑主

若年の松にもほしき名乘かな

業平

桑子にもならんと人の云よりし

遍照

嫁菜には何となきけを嵯峨戻り

小町

はこべらも實をもつ花は有てふに

康秀

春芽ふく林に史をくらべしか

喜撰

ひき鶴の脊にものせたしうしろつき

雞旦より人日までを云つゞけてはべるを、何七種と申てこの十昨庵にあつまるゑせものどものする事なり。

一とせの元日せうぞさびはなし

二日にも猶いねつまんぬかまくら

殘雪といふもおどけた三日かな

卯槌うつかげも見せぬや四日月

松もはや五日になりぬはかま客

はちの木を焚ても祝へ六日年

しら魚にはまり過たるすゞ菜かな

蔦のもと　夏之部

東坡笠猪首に斎なし、遠くはとばれたる胡準の執心をよろこぶ。

たが來ふぞ藤の裏葉になる小窓

袷にもおくれてさびし木かげ藤

十昨々庵主の別號あるによるをや

旅人はとく〳〵すべきなりころもがへ

夏來れば荒こそまされ松の菴

ひとゑ着し人もちらほら鶴見橋

あらためてふりよ卯月のすみだ川

鎌倉のみてらにて、政子のけはひけづりし給ふ(ひ)けると云十二の手箱を拜む。この御方のゆゝしかりし一期のまとはしるべからずながら、かれこれに書殘せるものゝはし〳〵よみ覺へたるにてらしあはせて、思はるゝ事の多かる。

卯月にも曇らで罪を十寸鏡

靑簾檜垣の茶屋に參らすや

麥ゑます門川ほしやまきすだれ

丈草句あり。下京をめぐりて互娃行脚哉。我又あり。

深川に寺行脚せん佛生會

うき人もいさゝせ給へ佛生會

夏に入ときけと哀れやいとま乞

夏に入て来ぬ人多し十時庵

同行雛秀が能見堂に侍をも
かまはず

景に又ひとつ六浦の麦黄ばむ

金澤にはたご喰ぬ人には、夏嶋も四望亭も知るべからずながら、

なつ鳥を扇の下や四望亭

三嶋のおがまれ給ふかたへに、應安二年としるせる鐘あり。とはこの地の主にておはします、如来のものなりとぞ。彼放下僧が新串て見知らぬ親の仇をしり得てうちはたしけるより、放下僧の薬師と申つたへはべるとかや。扉板敷いやふりにふりてまことしやかなり。

御壺よりいざ出し給へほとゝぎす

おほけなき御佛を放下師のやうにいひなしたるも倫旅のながき日わすれなるべし。

逢生もまつ事のありほとゝぎす

柚の花にそばへてもまて郭公

青空やほの〴〵と啼杜鵑

深川の汐先雨や子規

北堂のうつされまします總井戸に詣はべるかたへに、翁のいましめられて、そが縄はおそろしの鬼の引しめてうしろに立たる形と、それに連添けるとみゆるをうなの、百八つまぐりてたのもしげなる形とありけり。翁はつくしの白大夫にて、神につれなかりけるみせしめとかや。をうなは引かへて、心を松のはにつゝむと神のうけひき給ふけるむくひなど、かんな文字して書て侍りければ、

婆々どのゝ小耳からばや時鳥

小石川小日向かけての眞景

水戸殿で飼はれたやうぞ杜宇

江上数峯青とは誰やらが神句のよし

蜀魂啼て江上數峯青

草津の温泉道者になり侍る頃

海松よりはなのりそからん郭公

あびせかけてなくや白根の子規

閑古鳥

ばさ〳〵と飛あらはれつかんこ鳥

閑古鳥なくや終日遲ざくら

長き日に生れたやつよ閑古鳥

白げしの咲日の聲にかんこ鳥

閑古鳥啼や漕去艪一聲

鶯も老ぬさぞかし梅田枇杷

苗曝ふ年もしらずや行々子

汐先やよしきり騒ぐいなさ東風

古杉坂双鳥且秋香庵を先達にして、三たり四人宮根路ふみけるをり、秋暮亭を泊りに定む。日ごとに高く雨面白かりければ、足静かに洗

ひ鬢かきあげなどし、おの〳〵あが家の思ひをなすといへども、あろし葛三例の筆草とりに出たるとてなし。竟日磯に袖笠したる人の見へば必そならん。

でゝ虫のふたつ過まで窓に顔

木曾の檜笠越の菅蓑をかけて、道の神におがみ参らすべきの四阿を、藤垣にしつらひける頃、

かはほりの遊ばん料になるな窓

出そめし蚊を見て居れば喰ひけり

小庇や聟とられて蚊の迷ひ

胡瓜さへ苗でうる日をはつ鰹

江戸橋はくゝらぬといふ松魚哉

鮎提て家の遠さや闇のうち

みじか夜や大野の芋原音もせず

團扇もたで出れば貧しなつの月

なつ山や片戸明たる裏の門

夏山や紫つゝじ遅さくら

一休も諱いはざりし牡丹かな

ちろ連も夜はちろなよやよ牡丹

牡丹の名あれこれとかぞへまはる中に、眞紅の崩れそめし花有、それが名は、

うちかけし袴に似たり京遊

芍薬や籠に鶸啼日かげ家

さゝ百合の窓のぞきする伏家哉

百合寒し水乞鳥の鳴なべに

濱かぜのけしにあれ込雀かな

唐鳥の匂ひのす也罌粟の花

貧乏も仕課せて見よ茨の花

杜若

手に折ていよゝ俺れずかきつばた

この頃は雨にまけるや燕子花

魚類でも法事はさびし杜若

高椽や見ろ人も居ぬ杜若

さびしさや火を焚家のかきつばた

庭にして卯花みばや田一枚

ゑぼし着て卯花折しむかしかな

小雨村は吾妻の温泉守の寄をさけんとてくだり住處也四月八日を時として又山へうつる。

卯花に明た戸もなし小雨村

華さくらや世にうき人の出ありく日

法親王の御築地なるべし

わか楓くれの御菓子屋参ろころ

曲水の茶色も過ぬわか楓

仙臺侯の館となりけり、龍寶寺と申に文庫を置て、見たき願をたてるものにはかよはせて見せらる。

楠ちるや七ツかぎりの書物よみ

木も夢になりて茂るや壁の穴

若ければ筆の華され見られける

ひとつ葉の下にも見する蔭り哉
はゝき木の物めきてたつ浅茅哉
箏や妙義の神巫が小鳳呂敷
子にやりて露も持ずや竹の親
おもひ出て菖蒲をやりぬ峰の寺
都邊や手苗捨てもあやめ草

所思

かぞいろや我にも太刀を飾られし
梅雨蒼々草刈か遂ひとつゝ煙り
五月雨を何とかしまの御齋(おものいみ)
さつき雨谷の小橋を願ひゆく
五月雨に水の手切(きれ)し小寺かな
さみだれや金魚飽るゝ楪の漏
五月雨まけた守敏が執(しふ)ならん
五月雨や眞菰見てのみくらす家
さみだれも湊になりぬうつぼ草

みぞろ木やしぐれてはこぶ皐月雨

九朴坊旅に大事の割子を忘れて、みぞろ木へもどる。

蜑半山の日よりをうらなひあてたり。

三重四重に吹や南雲の靑嵐
合歡さくや世にあかれたる豆腐茶屋
富士川の合歡にとりつく家路哉
ねぶ咲や去年の六部の一周忌
紫陽花に夏は來にけり山の町
下闇や鴉のありく小草原
何虫の蝶かわづらふ木下やみ

康頼法師が寶物集よみ終りけるころ

世には寐ん夏刈蘆の丸屋して
まとこの藻に住なりや手長蝦
掻よせた藻にも花咲け魚津道
門ひとつ出れば麦刈苗はこび
早乙女よ夜邊の咄も盡ぬべし

植し泥もすきまぬに米や黒葉さす
わや〳〵と植て去けり田一枚

水雞　ならびに鵜

聞(きか)ず顔してたゝかせんはつ水雞
さ寐されば來ずよ水雞はねぢけもの
谷の戸や鳥も來ぬ木に鳴水雞
括られし咽わすれてや鵜の心
鐘の音の消るひまより飛螢
螢火を蜘の振舞ふ蘆家哉
子ながらも鹿哀れなる痩ざまよ
殺さずばひはぎもなせよ火串さす

草庵一名物有

日は見せし常夏月の筒なし井
けふこそは扇とるらめ氷室守
祇園會のけふによき名や心太
繋ぎ田も落つく今日か土用入

このつなぎ田は常陸のくににてうかし田と云たぐ

ひ成べし
あつき日や果なし坂の奉加鉦
馬鹿島ののめりありくや雲の峰
雲の峰大名宿に入かゝる
葬禮の田中をゆくや雲の峰
夕立の雀の宿ぞいそがしき
淺澤や鳥のあとにも湧清水

水甚清ければ魚住ずとうけ給はりしが、人絶ておらざれば閑過てさびし。

すゞしさや下駄も圓坐も二六前
舟すゞし釣ばと思ふ蘆間〳〵

江島

不盡が根も波やはこぶと海涼し
宮守に歇間る迄すゞみけり
馬なくや晝寐起よと八ッ下り
乙姫の床にもかえじたかむしろ

箱枕うつくしよしと云て寐ん
どの友も帷子すがた四十めく
玉笹の閨にはあらじ汗拭
寐起から團扇とりけり老にけり

梔子園に若殿達の乘鞍きそはれし夕の餘興を、

高椽や扇であふぐ馬の面

蟬

大日の格子もあく日蟬の聲
蟬がなく出やうとおもふかた〳〵に
瀧かけて聞ばかぼそしせみの聲

蓮

新部屋が一の見處や蓮の花
朝朗露ゆりすえて蓮匂ふ
浮蓮に魚乘らんとぞ守りける

過たるは及ばざるの心を

蓮池に滿りさて見る處なし

撫子

蓬生やなでしこを草になしはてし
常夏の日なたは馬も見捨るか
撫子によろひまもなし勢多の橋
晝貌や蘆火焚く家に取ついて
ひる顔や鞠子の汁もなき時分
蟻のた〳〵來るやゆふごの徑より
はへもなき眞葛の花や御庫裏さま

心に思ひける事を

直けれど麻の蓬はにほひなき
山の邊は夏もやすめぬ鷲しかな
漏軒の雨にもうれし蓼の露
小灯で埒あく客や蓼の露
瓜くふた口や寺子で寐たむかし
脊の縫目かた寄て瓜を袖の土産
寐るべしや梅干ほして一晝間
ひと夜酒そも箏のそだつ時

御祓

御祓の夜七夕姫も揃召すか
御祓して風ひくまいぞ菊之丞
出直すや妻子を連て御祓川

隨齋のいつくしまれし小娘の、はかなくきへて日數へにける後、涼みとる床几に申つかはしける。

春の合歡その子とときし枝やそも

わかき人のいまはにいひ置たりとて、伯父なりける人の許より、宣啓がなき跡の記念永く見給へとて、淸女が枕の草紙を送りこされけるに、老たる我にはしばらく餘所のものあづかる心地して、只うたかたの世をのみぞなく。

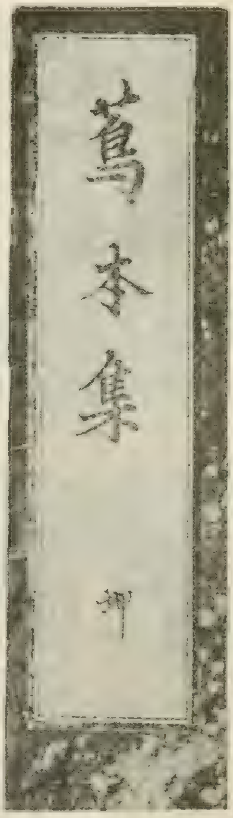
ほたる火の翌は誰が見んこの草紙

猿若勘三郎座にして、中村歌右衛門が七役を見にまかりけるに、七人連なるもをかしと、梅壽が傾城をいゝ出しより、蛋は誰、たれは獅子といゝつゞくる事にはなりぬ。さておのれは鐘馗にあたる。

蚊の中に泣鬼見せつ眼の光り

大磯の虎が十九のくろ髪に袈裟うちかけ、鐙やう／＼とふみ叶へたるが、袖の扇や落しけん、口とりのわらはが取あげて、鞍の上にさしのべ手わたしするの形かきたる繪の讃。

富士をさへ見まじとかざす扇かな



蔦のもと秋之部

立秋

おもふにも過て涼しや今朝の秋

文月や先露とよむ嘘ぐさ

鶯の子のおもひ羽生ん秋のたつ

三日月の入さの松や扇をく

星の朝やさしと見えぬ草もなし

蜩はよき聲もてりほし今宵

妻ぼしにたのまれてしや火とり虫

隆辰(達)節面白かりける席上也、をうなどもとり／＼に今宵ををしむ

願へとて七葉の梶を出されし

すゞしとて星のしづくや諸白髪

一つぶ降ても銀河のわたりとまるとなんうちかとつ小女に戯る

鵲があるではないか雨の星

星にかゝふ色あり菊の酔はじかみ

八月の朔の事なるべし。
ものゝ折鐵にとけれもありした
たぎくりもかへりて。

興風たよむさへ涼しほしの節

けゝ意木もたもとまる中徒用殿

いへけたかりし事を失なり

りゝ

人黙て音はいよゝ鼠の目

学俗紅花から青蕪や杉の色
目のよごしも衰れなり。

これやこの蛙供に何か都もの

むかひ錦藻に住虫も父またん

迎火や兜家育戸家は子の多き

とある家にむかひ火見へて降雨か

蚊遍や粉ひき臼にも風のたつ

蝶いまだ焦生姜どりて青むした

日本武の御いさをしそこ愛
に感じ奉りつゝ、つとめて
かゝる野を越ゆ。

野火留の霧の降くる膝折か

稲妻

いな妻や大根蒔て雨をまつ

稲づまや諸もくあまりやしきり

稲妻や駒かた寄は人の中

いなづまや掛よぶ聲のをり／＼に

稲妻やすさまじくなる目が作

露

いつまでも珍らしかれよ露の秋

しら露や人はよく寐て起ん事

見ずしらぬやらに並ぶや草の露

夕かげや草もぬらさぬ露の玉

降雨の中にもなくや秋の露

情の餘りに感ぜらるゝ、／
ふ[illegible]かたかたに聞しか
ゆるにおもては、露ちに聞
かつときて、何からのつや
／＼しからんをのみむがく
べきかは。

下露やこれは夜啼梟の木

無説上人をなをしれ

朝露の佛となしらせ賄みけり

月満の露はひたものあるゝなり

七夕も來ぬには中もる木椎茸

あなき物に心を入るの作誌
みせんも大原の茅原がみが

むし

明年の木綿は花かまたまた木槿

白戸の秋けよ[illegible]くらのいも赤草

ちる柳髄も穂くせの付にけり

砧

朝がほも日毎はさかね片折戸

露にうけたや鍋両のもまちり[illegible]

鶉鶉に野の月星やてあるゝ戸

宗因に夏紙衣あり

朝がほに我もはをらん秋紙衣

老　おのをけた

秋はみな世になるや山の草

ひら／＼と朝霧乾くすゝきかな

詠たくば尾花がくれに窓見べし

日ぐれ比日のさす寺の尾花哉

女郎花

仏神にもまた帰つかれや女郎花

まほとに飛ともふさす女郎花

をみなへし何のすくせに織蓄くさき

[illegible]

秋の夕昼の丝讃もありけむ世

是はやき顕造能や萩の智

見定めた貴もなしや萩のはな

もとをりの其文が門に入に誌して俳諧をひねる

小草やみぞはぎや庵の七草す

尼になりし人はたれ／＼草の花

虫

なく虫の中へさしこむ馬の鼻

見たきものの小石が下のきり／＼す

[illegible]に、松虫鈴むしのみ違へぬるは、[illegible]にあやまりたるにや。

[illegible]

鈴虫よなど死にふる霜はそれ

松虫よなどの月にふく笛はそれ

ちまきの作にもおふさる色かな

日本も貴にこそなれれいなご哉

世に鳴るやうの音する蟷螂かな

蟷螂の頭をそこくろや舟の五器

萩折つ尾花しごきつ小鷹狩

はつ月や烏帽子着し人のうしろ影

月よさに通りぬ大の伊勢参り

月の雲行はよけれど夜のへらむ

あばら家は月のもるにぞ住れける

六十にあてゝ白やいく夏月

十四や月につゝんで家一つ

[illegible]

ぶに

羽にも嫁にも見せんこの月夜

雲の月ぬけたところや諏訪の湖

待宵[illegible]

岩はなや紺も雲の盤そゝげ

待宵や浦島が筥のはなしせん

長閑さの十五夜見べきまつ宵ぞ

良夜

けふの月さてもをしまぬ光かな

名月や小ゆかこ阿れし所の餅

鬼月も顯ひし空か駒の影

このもしやわづかの家の庭の月見

看経のうしろせはしやけふの月

月見せよかくす事なき菴に寐て

老ては人にきらはるゝならひ、蕭然として只東壁に碓酒巾をかく。

蓬莱なんたれも来ざらん月今宵

[illegible]の縁にこそ。この十時庵はその桜さへあらざりけり。

うき秋や雨の最中と降盡す

雨今宵天の原さへ見せぬかや

なよ竹の風須らふて打ふしける。翌の日いかにやいかにと人のとひこしつるに、

十五夜を闇明しけり秋の雨

十六夜

いざよひは咄の多き夜なりけり

十六宵や一霧もちし松が浦

いざよひやしらぬ古郷に來た心

はつ汐や松の下なる後架みち

汁かけてかき込飯や野分吹

秋の暮焚火にもの丶見え初る

小笹生に野菊の咲し朝寒み

うそ寒や地雉うしとて越す隣

我家の珍らしうなる夜寒哉

ある院に蕘日召る丶夜寒かな

岡崎の橋に月すむ夜寒かな

甲斐歟がみな身にしむぞ夜を寒み

我妻の貌白うなる夜寒かな

臺所に傘のころつく夜寒かな

砧

唄なきはさる事なれや小夜碪

河内路や情はらつきてころもうつ

古詩作あまたよみける心らつりに

僧見ありや窓にあたつて衣うつ

乙鳥の行空見する紫苑かな

すがる臥野菊は折ふ枝もなし

なでしこは蓑虫が着て仕舞けり

蘆の穂に里離れする雀かな

穗あし刈僧や其まゝ水滸傳

犬蓼のかぶせかゝるや釣の邪魔

ひや〱と地を這ふ雨や紫蘇の花

唐がらし鷄なく野のものならす

坊が子によき齋せうぞぬかご飯

黍の中嚔ひして誰か來る

物へまいる道なりながら黍の出來

粟の穗にかゝるけぶりのひとつ家

二世安樂としるせる小寺の鄙ぶりなるべし

御佛の肩にも一把稻の秋

須濱ありさて扇あり秋田づら

早稻の穂や雀もしらぬ坊が作

稻の香や鷺も眠りをさますべう

早稻干すや道も小廣き闘手前

稻かけてけしきたりけりひとつ松

案山子

かならずよ案山子が立ば山の雨

たつ案山子どの山松が久しいぞ

我庵や門にかゝしを立らるゝ

雨の聲案山子に袖をかはし行

鳴子曳里に成けり蘆に風

山かせやどこの鳴子のむら雀

藤垣の藁ぶきに、用なき縄をひきかよはして、あながちに田家をまねぶ。

琵琶もたぬ雨のそなへよこの鳴子

人のなす業なりながら山の引板

鹿

龍膽のくるゝかげより鹿の聲

紅葉ふむ鹿は晝さへ鳴にけり

鹿の音に月さしそへて澄夜哉

小畑に鹿の音しめて聞庵か

雁

雁がねや星の便りもある日頃

露の戸にあはたゞしさや雁の聲

音づるゝ雁には江戸も雨夜哉

はつ雁や宮鳴をかたりあふ夜頃

雁啼やあやうき水も澄し空

今くふた麥腹さびし鴫の啼

鴫の聲院の芙蓉を鄙にする

鶺鴒の寒さもて來や藪の陰

鴫啼てなぐさむかたもある空ぞ

立鴫におどろく小家のうしろ哉

餅くふた馬の氣相(きあひ)やなく鶉

后月

眞鶴の命よろこべ後の月

後の月山里ちかくなるころ

木まくらを坊主にするか十三夜

後の月片母持しこゝろ哉

詩僧を主としていたく更たり

十三夜や寐處あかるき障子窓

姨捨にはづれしくやしさながら

后の月澄や二人がたび硯

日本の何某つくるとしるして南京もの、ある所にありてあり。其筆とりける心の哀れは、かの仲丸の月にもいかでおとり侍らんと、阿波の草史が物がたるに、

外市を書て泣しか五郎大夫

長月の秋や小松も荒につく

家ふたつ戸の口見えて秋の山

一瓢上人のひゆびにまねかれはべりて

炭そゝぐ水も秋すむ苔のうへ

秋の日や柿喰過て腹のへる

さびしさや塘にたまる山の雨

私曰。此さま秋ならずしていづれにかまぎれん。

耳につく草鞋の音や秋の雨

檢校の堀井手間どる秋の雨

菊

猶をしき山邊や菊の遍き日

聞ましや菊咲よりの浮世事

莫嗔野店無肴核
博酒堪沽豆莢肥

不盡すむや菊の日和を翌にして

きくの香に云たてせうかこの硯

荻萩に泣あきたれば菊の花

菊の香にあらためてしや月夜さし

小ぎく咲日なたになりぬ椎がもと
しら菊にあたゝまりまつ十月かな

碩布の山住にて

には鳥のいく孫彦やきくの花

やきらは悉皆の獣をいれじとてする也。小さき箱の蓋やらの板を串の頭にさして、そこ爰に立をく。山畑にとよめるやきしめ是なり。

焼串は焼る菊にもひかぬ哉
雨露や明るわびしき木の菊

みちのくの百非坊一ひらの菅笠を贈るに、白川の關おぼつかなくて、長月九日といふにとどき庵にはとどきたる。

うち着せて菊守らふぞ敷すとも

紅葉

傳教のめでたさ見ゆる紅葉哉
すさまじや紅葉を染る露の音
しらぬ人もふりてぞみゆれ柿紅葉

振る瓢も蔦に痩るや小坂越

小坂越は半田の金山を左に出羽の國へ赴く一條の難路也。乙二がほそ脚に覺ありとて歎く。

梅干を薬にいふや蔦の宿
ひき寄て蟷螂うつりぬ下り蔦
うら枯や木竹ちらばる蕗の町

むかし坊主小兵衛ありしが今又あり。

温ならん坊主小兵衛が門の柿
刈あとの柴にもゑむや山の栗
さびしさや菌のかさの窪たまり

行秋

行秋や松葉こぼすを手持にて
ゆく秋や鴫の羽根搔くい〳〵と
たまに見る舟も行かげ秋暮る
つごもりもなきに逢けり越の秋

心うき年にも有かな廿日餘り九日といふ春ぞくれぬる

と長能の歌もおぼえおきはべるよし、石海があはれがるにぞ、人ゝ凡ならずとうけがふ。

蠅も居ぬ蚱の家や九月盡

人として酒のみ習へ夜の梅と聞えしほとけの十七年忌吊ふ今にも、膝のうへ放ち給はざりし盃の、幻に殘りてわすられざりければ、

さめやすき新酒はくまじ白雄來

蔦のもと　冬之部

時雨

番雁の醉もちかねるしぐれかな
あり數の宮も藥家もふる時雨
しぐるゝを夜となおもひそ鼠の子

木母寺はしぐれも夜〳〵の方はづれ

淡白の處探りかたしと云か
みつけの阿兮をよろこぶ。

旅すれば時雨の跡のむた〻まり

灯もおかでよく寐る客や神無月

霜

霜がれや生姜も植てある小庭

霜の空はねかえりたる氣色哉

しもの鷲浦山しくもかなりけり

越の國ぶりを

置霜や日雇出て行錢五十

霜の無かくまで庵をわびしめる

花實はてし草と見つゝも霜悲し

いにしへは秩父の國と有けるよし、まこと左にこそとしられて、公私の外なる空山閑地若干多く、便にまかせ力にかなへてまくさなど刈とるをかせぎ山と云。さて人目も草もとよめりける山里のいかにもさびし。

おく霜や烏もなかぬ稼山

竹もなき藪の垣根のはたれ霜

朝あれにこりて戸ざせし小春哉

蘆の家のとく冬なれし小はる哉

こがらしや雲水てらに草鞋とく

寺建る僧のかり居や冬日なた

冬空に只見る富士の命かな

此句水無月に聞ても寒しと奥羽の奥老が返事しける。空ほめにてや有けん。

冬の月槇の下みち見ゆる也

只すみにすみて小くらし冬の月

月も見ぬ十夜參りの脊中つき

草庵實趣

しぐれ會や客を連來て錠明る

像前に道を祈りてこゝろにおもひし事を

ふる霜の我なれさても雁翅檜

よき友の四のうみにみちたるは、おのれ金合がとこ(德)にあらず。

翁忌や箸も飛騨からもらひもの

小千谷由都留亭時雨會百員
巻頭

會式めく事にもなりぬ翁の日

惠比壽講この初雪はいくらにす

人も合器(ごき)もすりはげてさて納豆汁

よしありと見ゆる家もなし冬搆

鴨のなく脊戸田へ千里冬かまへ

玉珂老人の古き手利にうなづかせし句

男めが鯨はつかであじろ守

押並びてかゝる事する網代守

かぞへ日の仕やうもないかあじろ守

よしことのよびを亞然とからがへ定めて、いよゝ藤垣の指をりにつらねはべるべきよしを申つかはしける紙

のおくに
榾の火にとく焚けよとおもふ名ぞ
榾に寐し旅人狸にてありつ
冬を住まば山邊の事よ手柴こる
画暦になどて火桶は書ざりし

草庵の客僧を旅立する時
巨燵から寐にゆくさへもわかれ哉
あやしみし煖婆（たんぽ）を我も抱きけり

川ひとつ越る佃島ながら、磯家の哀れさらに、江戸橋のもの音聞ふる地ともしられず。
衾干す軒も主やら隣やら

同住よしの社にて
片そぎや紙衣の垢を恥申
紙衣召す刀自の袖褄薫る哉

麻露庵が此年の冬を防としけるに
紙衣二ッ老と貧しと着重ねし

みちの嶋には六ツも七ツも鍍年ふやしてさびたがるよ
かみこ着し我をしかるか鴨の聲
紙衣着ん富る式部を妻にして
蒲團着て寐ろや小だてに持佛堂
炭竈と聞さへふけし月日哉
をれ火箸笑ふなこれは炭の鞭
日のつまる沙汰も過けり石蕗の花

小文庫有磯海等の調を聞んと云加賀の廿谷に
かり寄た木馬すゑるや枇杷の花

墨田川に妻しある家を忘れて、廿日餘り藤丘なる浦人が亭に俳諧をいどむ。
茶山花を折とて見たり爪の伸
花さくをとりえに置や古茶木
うつくしう人もかうなれ枯尾花
水鳥を見て見かへれば枯尾花
枯葛や何ぞと聞ば呼ましら
菊がらや佛の花も一からげ

さがみの國もろこしが原に
あなる筆草を硯にひてるとて
やまと假名かれ草もても書れける
枯あしや雪のちらつく風の跡
蘆に舟まこと人目もかれにけり
はちす葉のあまりといへば枯にける

こと葉の主になり侍るべきのふるきを媼扇の雨鳥亭に説盡しける時
梟も柏かれての体たらく
今はとてなれも枯たかかれかしは
天龍の喧嘩きこゆるかれ野哉

岩澤のわたし信濃川最第一の急流とかや
岩澤や水に追れて飛木の葉
木葉ちればけぢかき鳥も山路めく
隣る木もなくて銀杏の落葉哉
藪陰も落葉しにけり何くれと
がさつくや膳棚までもむら落葉

鶯雪雲人蘆庵等とぞりてははやく上手にならんと句りあ

へるに

まつ事の至極なるべし麥を蒔
冬されやさぞ鎌倉の麥ばたけ
蕎麥刈に道かりたれば瀧のうへ
稗刈し跡のみ見居る山の冬
犬の子も干さるゝ籔や芋がしら
杵ほどの蕪引得たりすて畑
葱白しまとの冬になるほどに
鶴の脛長しとなくか冬田つら
冬更ぬ田にしの穴のみゆる迄

水鳥

水鳥も鬪諍さまは見にくしや
水鳥の入まはりけり津久井縣
鴨なくや雪にもち込南じけ
水鳥のあくたにつくや冬のおく
鴛鴨よ延喜の御代の鳥ならん
小鴨にも餘所〳〵しさや都鳥
水鳥の鷹に逃たるさむさ哉

千鳥

千鳥には鴫の木葉のなりつらめ
鶺鴒も二三度はしる千鳥かな
舟の闇千鳥に沖洲しるばかり
光琳が千鳥見よなら薄月夜
狼もしづまる里のちどり哉
千鳥鳴や籥かけ一人乗るわたし
冬更てみな番鶴にみゆる也
薪割し跡にも來るや冬の鳥
こわいもの見たしそも〳〵ふぐと汁
河豚のつら憎しといふはおもふより

わすれねばおもひ出さず
ゆと書し高雄がふみをい
い出て、如毛頻に此句を
感ず。

手さぐりや乾鮭はづす壁の釘
から鮭をとふ〳〵くはで仕舞けり

くらき夜のはり合になる冬至哉
孫晨も寐處かえん冬至かな
子祭によごれん料か松の榾
禰宜殿を行逢客（ゆきあひきやく）や大師講
きさらぎの花に死ぬ氣かはち敲
鉢たゝき明るあしたもないやうに
定盛もさぞや雪吹の手しま蓙

雪

はつ雪や入院の僧の禮まはり
初雪や宇治の小茶師がひとり釜
雪國のはなしはうそでなかりけり
たのまれて聞ふる鐘や雪のくれ
くれの雪刀根もうめたか鵜の歸る
雪の日やゆゝしき家の水遣ひ
雪風や鶴の目つらに吹そびき
鳰なくや雪になりきるあたゝかみ
雪になる風さきひくしなく鵜

一茶が清貧を尊とむ

塵とては栂の古葉を庵の雪

雪の日や鹿の素通る濱の町
豆からにつくや鳥も由喜の鳥
雪園はことに大事の後架かな
菴雪にとぢて弘智の無物おもほゆる

傘さしかけさせたる傾城の
讃に

京町の遠きにほこれ袖の雪
在寺や天井張らぬ雪あかり
伊勢の綴も寐る日のあるかつもる雪
山里や雲さへ來れば霰降る
あられふる篭のまがきや子はほしき

馬酔木忍冬しどろに枯殘りて、手兒女が井はかしこに見ゆる。

みぞるゝや雪にあれたる小笹原

山田の畔の枯すゝき刈人なしにとよめるにもよりなん

刈人もなき伏濫に冬の雨
冬の雨水にもしむと思ひなす
禪門の藪さがしする氷かな
くさ〲と家鴨のよこす氷かな
松風も氷り付たか寒の入
折つゝもまとしからね冬の梅
死なれたる和尚は損よ冬椿
寒念佛子の爲ならばをくまいか

老　懐

篤と寐ん戀もしけるを寒苦鳥
節季候よおれが衾はとうはやす
節季ゆも來ずなる餅のさはき哉
花殼を炭團の膿を菴の楪
炮録はいつも有ふにとし用意
何〲ぞ土たく家の年用意
芝生まで聞へて寒し年の市

うは置の千茱剣むもうはの空と聞えし部ぶりなるべしいまだ名子とも水のみともわかれぬ譜代どもの、正當せし夫もなくて、麥つく臼のかげに産血こほすをあながちに咎めず、庭子とよびて育つるにぞ、三世のみなみおもはれてとにこのもし

くれ〲と鬼追ありく庭子哉

今日を捨て明日の俳諧に生よと云事を丿旦坊に示す

鬼よりも古みをやらへ菴の豆
よし野下りる心はせぬぞ豆まく夜

春と云ものにほだされたれば、唱へ殘せし御名をもおもはず。

小窓から見てもみゆるや年のくれ
色かえぬ硯洗ふて年とらん
鉢僧もなしめば哀れくるゝ年
松の葉も箒にあへば年の塵
梅士筆とらへた富を庵の年
としの夜やむかひ合ふ樹のかたるさま

三國嶺三社権現法樂赤城をおがみて、先今日の道行ぶりを明し奉る。

月雪に痩るまゝを見せ申

彌彦へむかひ來りては、いよ／＼修行の實にいたらん事を、

鵲の巣鳥の聲も聞んかな

諏訪の御社は此行の終りにまいらんと思あてたるにぞ

こゞゆともしなぬの神よかへしませ

小千谷より長岡へ逆り下る舟中、誰かれ、中にも寒かるあたまの巣也坊をば、荷物の間へおしこむ。

おとなしう疝氣も聞よ櫨の音

六人を包んで嬉し雪の笘

みの笠打かつぎ、さかさ井のわたりまかりける、かたへに常よりもとおぼしき小寺の侍るを、人にとひければ、竹之亟寺と申はこれが事也と申ければ、竹之亟とは誰が事ぞと又問ければ、市村羽左衛門が若衆なりし時の名にして、其まゝ竹之亟が墓はあれにてはべる也と申ける。いと哀なりけり。

ふりよ／＼とても時雨の竹之亟

都義の山寺に詣てはべる。よしなき樵の道をかりて登るほどに、蔦にとりつきつづらにかくれ、鹿の跡兎の糞をしるべにたのむ徑のあやしくおそろしけれども、前世にくるしむは後世の樂しからん種也と思ひあてゝ登る時の苦しさはその儘下る時の安からんをとて、つとめて汗を霜雪にそゝぐ。

なか／＼に冬こそよけれ栞さす

草菴もと丈草が貧に讓らずといえども又一長物在。

着ても寐るこれやまとのかくれみの

今一聲のきかまほしさに

山路くれぬ處の人の眞似をして

人世莫爲婦人身
百年苦樂因他人

をうなの事を解して才發なる、やゝもすれば肝火の高ぶりて、一重梅のさびしく散はつるの多きを、梅夫が小娘のはまもにいましめんとて、二行物書てあたへたる也。猶又句あり。

墨しらぬ硯になるな玉ぞとて

はいかい文字有すらくるしと覺へて、秋のくれのどことらまへんけじめもなく、遊びありかんをのみ申さるるの古意にうなづきつゝ、桑年の雅號ひとつを考訂せしむるとて、

ありがたや繩もむすばぬ世のこゝろ

角田河四時

身のうくてちる花見ばや角田川

苗うゑる雨がふる也すみだがは

三日月も見る間あるもの隅田川

月雪に換てしづけし墨田川

俳諧書舗

江戸本石町

西村源六

松窓乙二發句集

序

わが松窓は奥ゆかしきみちのくにに生れて、師としつかふる人もなく、いにしへをさぐり、いまをかうがへて、俳諧のみなもとにさかのぼり、おほよそあづまの國には、母指人指のごとくかぞへあげられて、はや人のさつま潟にも名ひゞき聲とゞろきたる叟になんいましける。末期ちかき頃家集いできにたれど、世にはまれ〴〵なるうへ、四時のながめさへおぼつかなく、梅のあたりにきちかうをとこへし咲みだれ、千鳥鳴夜の荒磯に蟬うぐひすなんどまじらひて、屛風繪のごとく見きく人のわづらはしきをうちなげき、一具古翠のまめ人類題して小冊とはなしぬ。あはれこのふたりは松の下陰にひととなりて、世にゆるされたる寫瓶のうつはものになんありけり。

多代女

松窓翁生涯所咏。凡二千餘什。今之所抄者。僅七百餘。翁好遊歴。奥羽二州。來往無虚日。其在松前函館。通前後殆七八年。所得最多。偶有涉京畿者。多是想像寄興。總集羈旅之作。十居五六。今多略之。將待他日別編其遺也。

一具愚春識

松窗乙二發句集上

一具菴一具
蕉甫亭古翠　輯

春の部

睦月閏のあるとし（別本此下に「武さしの友人に申おくる」とあり）

元朝の不二ふたつ見んらやまし

年立や團十郎がふくべより

（芭蕉の四山瓢此頃は團十郎の所藏に歸せりと云）

春や祝嵯峨にて向井平二郎

江戸より歸て草庵の立春

旅寐せし春はむかしよ武藏坊

松前よりかへさ玉之亭に南朵賈ふところよりありて、三とせの草枕に老に老をかされし書懷。

春立ぬ山にすみれは摘もせで

所は塩釜法蓮寺とおぼしくて

初夢や訪へば出さるゝ桐火桶

袖が崎仙臺太守公の別莊にわが片倉君に陪從して、

御降もまれなる數に覺へけり

屠蘇なめて來る人よみな國の聲

日映萬年枝

夜明ればみな蓬萊の草木かな

万才の留守の妻子やめし時分

江戸に春を迎て吾妻橋より眺望

萬歲ものぼれ筑波の朝南

母のある睦月七日の寒かな

小鳥啼門も野町の子日過

七草や馬屋祭の猿もゆく

老が身は薺屑にもをとりけり

錢さげてあらはしたなや薺買

親と子の間にこぼるゝ薺かな

かの草を打はやす事もたきならはしの嶋にあるに、雪さへいとどふりかゝりければ、

薺なら垣根草ならなかりけり

芹提て出たりな鷺の住家より

旅すればわれさへ嬉し畑芹

霞迄降約束歟若菜の夜

赤湯の里

うら白もある山もとの若菜かな

御忌鐘死なぬ藥もありときけ

佐保姫といふも正月言葉哉

上野

さほ姫のたぶさの風か少しづゝ

あの畑はしつけぬ麥かどんどやく

しのぶの奥にて

梅さけば茶の實植ると聞日哉

日のくれぬものにして置け梅花

物ふりぬ梅の鳴子の鳴るあたり

巣兆が繪かける恵比壽大黒の賛

むつましき神の宿にはうめの花

かはる瀬の月の輪わたり梅花

（別本「奥の細道に、月の輪のわたしを越てとある所也」と前書あり）

子を呼に出て子をつれて梅夕

老怖

梅に月待れて出るもうと〱し

ひとりつゝ起揃ふてや梅の宿

梅の花これや小家は繪にもかく

む月十五日赤湯の里に添ふてゆくことあり。鹿の香流も氷の楔ひまなくうちて、さらに春とはおもはれず。

大歩に月日を願へうめの花

鬼貫や井戸のはたなる梅花

むかし誰か旅寐はじめて梅に鳥

如月二十五日菅神法楽

きのふ見しこゝろには似ず梅の花

今朝虹をかけしともいふ柳かな

へなたりをへな〱と吹柳かな

春もまだ子のさびしがる柳かな

兜巾着て見れば淋しき柳かな

青柳の中より見たり朝ぼらけ

十日ほど旅する朝の柳かな

七草の秋にあへとて柳さす

芽柳を見ぬ人のいふ寒かな

正月の下戸くゞり來る柳かな

花椿鬼門射る矢のむけ所

月させどよく〱くらき椿かな

諸天寺道にて（別本「目黒みち」）

木がくれし人鶯よ〱

鶯の飛かたに心うつりけり

鶯や田づらから來て見えずなる

反古焼て鶯待ん夕心

うぐひすの初影うつる紙帳哉

幽栖

鶯や菜刀さげて出るあるじ

鶯やはらみ雀はくるしい歟

鶯をふくや小城のあまり風

うぐひすや物の芽をはむ心なき

ちる梅の片空かけて鳴雲雀

朝雲雀聲寒からぬさむさ哉

雨になく尾長鳥もこれや春の鳥

さう鳴は嬉しい事かはるの鳥

途中

旅心こまかにおもへ蜆賣

春の朝蜆はくろき物ぞかし

この物をふみに出て

蛤や波つまづけと並べ見る

春立てまだ九日といふより見たたぬ病に臥して彌生過るにもいまだ枕をもたげず

蛭子とも波をはなれし蜊とも

行方も海苔柴多き月夜かな

海苔柴も風がふくぞや朝ぼらけ

のり波ば鴎来るなりちらほらと

　海外（函館松前の事なり）

若草や野に立る木もない處

春草にそつと置たし我葎

はる〲とのかぎりを見ばや山のうへ

春草によき夢見るかはなれ家

草の戸や狗子草も萌出る

雪解や近劣する妹が軒

ふんばつて解ぬ氣になれ松の雪

山彦もぬれん木の間ぞ雪雫

　境木といふ所は木もなくて尤（最カ）高き頂也。吹風身をさくがごく寒けれど、老てはますます壯なるべし。

雪分る我をたとはゞ霞む鬼

木のほやも霞残さぬ夕かな

霞戸や死んだふりしてけふも蘇ん

かすむ日やあまき物くふ布留の里

霞事忘れてゐるか椿ども

落馬せし去年の山路の霞哉

水吞て寒さめたり八重がすみ

東風ふくや笆が嶋の注連はりに

夕東風の上ずりやすき名古曾哉

春の風市の月夜の身にそはね

吹ためて風は留やら春ごゝろ

　病中吟

春の雨心はぬれて古郷へ

　知恩院

御法會の埒もとらぬに春の雨

春雨や木間にみゆる海のみち

鶴などはとしよるものを春の山

　常盤崎兎子公別莊

はるの山にとりまかれてぞ住れける

手習に越しはむかし春の山

明るより扇さす日やはるの山

　ふる事をおもひ出て

烏帽子着て白川越す日春山

隣から南へむくやはるの水

翌の夜は滿月さそへ春水

山と水春にして置ところかな

　法務の世をのがれんとおもふ年、ものへまかりて、

とく〱と身の春さそふ山水歟

春の夜や袂の熨斗をおもひ出す

春の夜の爪あかり也瑞巖寺

砂川に足跡みゆるはる日かな

遲き日に着たら倦うぞかくれ蓑

　伊勢にかしこき長官何がしの米字の壽の句を同じ國の人より乞れて

遲き日の神代に似たる翁かな

熨斗むきも覗く門とて日の遲き

六里來て田を打あたり中尊寺

泥つきてゆかし慈姑は何の玉

髭白髪おもひは春にうとまれし

　去年の秋もこのあるじのもとにありて、七夕やひらふて戻す蚤が櫛といひしが、此國をさすらひて又こゝの初霞をかぶ

蜑が春櫛の繪の松はありふれし
手のひらに汐すくへとや春の宿
暖になれば春なし七重濱
寐て起ておろかや是も春心
雛追てすぐにこがるゝ男猫哉
（別本上五「雛追て」とあり）
土筆風の小松もうらやまず
正月や忘れてあれば袖の月
二月のあれ三日月がく
如月や起はぐれしも朝ぼらけ
如月の梅見し夜より袖の月
鶴老人が予を送て黒澤尻迄とて
うち出ぬるは晦日の日也けり。
つきならす杖は龍のごとく、草
萌むみちたひらにて、和山越し
たるよりもさすがに心つよし。
二月をのがしはやらじ老二人
又嬉し二日灸も過し春
家に七ツになる三郎もちぬ
夜は夜とて忘れね凧の置處

飯粒も春は來にけり凧
凧まだつめたい黨山の空
凧の尾に驚きなれし家鴨かな
乙の子の生れ日くれて春の月
加茂へ來て捨火の沙汰も春月
まゝしきは荒野の雲よ春の月
長嘯が鼻かむ春の月夜哉
接穂した木もなし酒もなきあたり
木鋏のおそろしげなりつぎ穂時
四ツ谷ならねど紙草履はきて山
下より川口とめぐり詣る夢のう
ちに
薺にも花さくあたり六あみだ
拾ひ子や薺の花の夕ぐもり
菜の花の中や手に持獅子頭
蒲公英や一日にみやる薹と花
あぶくま川をわたりて
なぐさみや茅花あつめて枕にす
小鳥等が餌も有げなり茅花原

酒折は十日もおそし植る菊
蘆の芽に軒つぶしてや居ぬ千鳥
留主の嫗はさぞ鶴髮みだれて
藪萵の芽にいひ出すか歸る事
木の芽くふ小鳥も待ばまたれけり
殘月に心もなくて飛つばめ
巢乙鳥のきげんそこねる嵐かな
霧なしの里片倉氏の別荘にて
（別本「鬼公子の別莊」とあり）
待ば來るきゞすの外は松の風
鶯の日は暮にけりきじの聲・
江の空や歸らぬうちは雁のもの
琵琶湖に題す
月のある夜を唐めきて雁の行
雁よけも春ぞ名取は古郡
小田に降雨見てもひく小鴨哉
雀子や家のうしろは淺茅原
子を呼敷雀の聲の太くなる
踏苔の匂ふさうなりなく蛙

庵の種三粒持てもなく蛙
海苔喰に鼠は來るになく蛙
親のおやも有けるものかなく蛙
長生をするも詮なし薹
包れてしづまる虻や白い紙

老ても春はうれしくて

飯蛸の飯より多し遊ぶ事
廣大なことで泣れず涅槃像
涅槃像ひまゆく駒も見ゆる也
蝶鳥や死ぬ日が先きになる佛
雛の君吾妻下りをなされける
江の西の桃折越しぬ江の東

このあたりにはわづかに草の萌出しのみにて、梅は露ほどの莟をもてり。殊にみちとせの名ある花は、三日のけふに咲あはせたるもなきけしき也。

雛しらず桃又しらず雛の貌

上野

古郷にくらぶれば散さくらかな
さりとては齢かたぶく櫻かな
有明は雫になりしさくら哉
志賀寺やさゝらに犬の二人扶持
準縄（すみなは）に美しうちるさくら哉

つゝじが岡にて

遠山のしたしき花の木間かな
花散やつぼ〱と鳴る水の奥

草庵

花の香に出ては鼠の暮いそぎ
花に乞食增賀の衣着てあり〱
花さくや朝めしおそき小商人

ことしも病を身とし草を枕として

何所の花どこの芝居か死どころ
花の雪衾かぶりし夜に似たり

途中

庵にみゆる花の山風吹にけり
花守の無沙汰か小田の片あらし
なま中につゝじ咲てぞ山ごゝろ
さきの世は朱雀の鬼かつゝじ賣
山吹や荒鵜に暮を見せに出る

佐藤庄司が丸山の館址にのぼる

酒こぼせ菫の外は山の草

傾城贊

赤人の日には菫か寐る一夜

庵を出て一日程

入れば入我も出羽の雲に鳥
小づれとていそがしげなり歸る雁
垣根田の蘭も刈そめや夏の來る

春ををしむ

さほ姫も幾度けふをふりむくぞ

江戸にて

羅漢寺のものと成けり春の暮
面買てくれて子は寐て春のくれ

夏の部

更衣根つかぬ松ぞものたらね

人中へ朝日さしけり更衣

途中吟

鶯にあはぬ日はなし袷時

袷着て参りゐるなり文使

江戸にありて（別本「こぞより江戸にありて、花にきさらぎの十五日も、つゝじに彌生の晦日も暮て」とあり）

御佛の生れしけさや不二の山

ころんだを繪に見て久し鍋祭

清水をふみ、茨の香を傳て、雲居禪師のすみ給へ（ひ）し山に詣。

壺の茶のとうから盡てむかし寺

我家は

水二筋夏花そゝぐと田へ行と

夏書せん絃なき琵琶のうら表

短夜の滿月かゝる端山かな

みじか夜を雨降鵜に明にけり

酒田高野のはまにて

よる波の砂に濁りて夜短し

みじか夜や山の嘴しが水になる

短夜を寐たや牡丹の花のうへ

鶯に散すましたる牡丹かな

物の露落るも嬉し牡丹越し

村雨や寐る宿ならばかきつばた

西寺の西日かすりぬかきつばた

をし水によごれぬけしの莟かな

花芥子や笠もかざりになればなる

作寺に錢なきころやけしの花

けしに須彌入れし心よ露の月

禰宜殿に馬もかられず麥の秋

穂に出れば一品くだる田麥哉

太田原を出て

旅衣なす野のいちごこぼれけり

山もとは日照雨ふるいちごかな

摘つむそこらあたりの若葉かな

若葉風ふくや提行馬の沓

卯の花に氣の毒がるやめくら馬

卯の花の暮も見がてら茶振舞

麥ふみし人の卯の花さきにけり

茨の花ちりぬるをわが岡の家

名殘なく花吹なくす茨かな

二十八年（別本「四十八年」）をへて谷地にいたる書懷

小手まりや白髪としらで昔見し

橘のつぼむとくさきむかしかな

松島に行巢兆法師を忘れず山の下流迄送る

常盤木の大心なる落葉哉

松葉散竹筒は酒の盡やすき

出羽のゆきゝ蘭丈がもとにて

松の葉のかへれば来れば軒にちる

長翠佛苗五寸を見て白川を越しより、予が庵を出羽のゆきゝの中やどりとして、渉雞の聲に草鞋をときはじめていく度といふもしらず、あるは松島の初日を

たふめ、萬の松原にさくら咲方
を軒として、登基居觀を想像し、
忍山には秋の日の暮てもくれぬ
その影をしのびしも、今はむか
しのかたみ草となりぬ。予もさ
いつとし宮館に病て死なではか
なくも生のびしが、身は老、命
は鋒ながらいまだ歩行神のはな
れず、此塚に來て涙をこぼすは、
濁りにしまぬ葉の上に向ひあは
せするも遠からじとおもへば、

松ぞ散ひとり言いふ隣の上

茂りけりどの家見ても庵らしき

神鳴るを出てきく家や夏木立

酒田日和山眺望

風筋は熱海(あつみ)に成て郭公

時鳥初音せし夜の法蓮寺

降あめに位つけたりほとゝぎす

最川竹園景

ほとゝぎすまだ曙のすみれかな

あふくま川

時鳥鳴ならしほれ釣の糸

不二見ゆる所や舅の閑古鳥

露を見て居ればたくなりかんこ鳥

妻のある隱者あはれぬ(ぬカ)閑子鳥

遠鄕

鶯の老にくらぶる老もなし

白川の田植見て來よ鳴水雞

水雞なけ水乞鳥はくるゝ也

有明をおのが夜にして鳴水雞

乙二とはをうなめきたる名たり
といふ人にたはぶれて

姨捨に出れば草のほたるかな

ほたる火や雀が家の竹のかげ

山の端の空も螢もよあけかな

ほたる火や屋根よりこける苔のおと

鬼灯の花は暮たに飛ほたる

松島に隱る名の、象潟の因とな
りしを、あらすきかへして、俗
れわざするは、そも何のすく世
ぞ、とさみだるゝうちにおもひ
つゞけて、

降雨のほたるともなれ小百姓

蝸牛淺茅に花の咲をまつ

山風の吹ぞ葎のかたつぶり

蚊ひとつに青空ちかきゆふべかな

蚊に起てお貌さびしや彌勒佛

苗の色蚊のなき里のやうす哉

秋田の湊にありし頃

出る月のおそしはやしや蚊屋に入

母の亡がらを棺にをさめまゐら
せて

蓮さへとゞまるものを蟵の中

五月五日接引精舍にありて

我眼には藥降日も雨の露

投こんで見たき家なり笹粽

酒田にて

古鄕をおもはぬふりぞ粽とく

象潟の風景みな砂に埋れし前の
年なりけり、酒田に下りてあや
めふく日にあへ(ひ)ぬ。ことし

またはからずもこゝにさすらひ
てけふにあふ。
曾てこの粽ときしが粽とく
仙府にありて
粽とかで雄島の僧はいなれける
海外にありて(函館の事なり)
このやうにあやめ葺いても寒かな
あやめふけ目白の不二の暮ぬうち
あやめふけ鶴を飼ふ宿のなまぐさき
山里のならひに
葺とはや霧ふきかけるあやめ哉
戸明れば今朝の影さすあやめ哉
古妻やあやめの冠着たりけり
眞山を假山とする人の家にて
(別本「河道上人の院内」と前書せり)
五月雨や薬守の神もおはす庭
龍宮でつく鐘の音歟五月雨
五月雨の芒むら／＼夜の明る
さみだれの水雞鷺尾長鳥

やどりせし戸のひまより青き葉の見ゆるは何の木ともわかず
入梅(つゆ)に來て鳴は不斷の小鳥かな
種ひてず麥まかぬ函館松前に四とせありて、鰺が澤に歸郷の舟あがりせしあくる日、山添に田を植る人を見る。されば道のかたはらに捨置たるすら、おまき露ふる蓬萊の草のこゝちせられて、
嬉しさはこれにもたりぬあまり苗
さくら花ちりぬ早苗の風祭
緒絶の橋の其爪がもとに行に徳一といふ山根を過て
苗とるも植るもひとり子もひとり
富岡を出て木戸のうまやに近き西に時鳥山といふをゆく／＼みる
片乗りになる駕の戸や苗のみち
行前の茶店よりこの山を望む
代かきがよくしる雪よ月の山

蟹の泡鬼のめしなどいふを
紫陽花にあらぬ名をよぶ山家かな
あぢさゐや仕舞のつかぬ蕢の酒
紫陽花ややがて地をふく風の前
蚶滿寺
苔ふみて花にもなさず岩根道
水かけて明るくしたり苔の花
かたばみの花の宿にもなりにけり
かたばみの花雨降となく雀
簟に居つかで朴の木の枕は頭のいたきものなれ
南天の花こぼるゝよ腹のうへ
雄勝峠を越る時
夏霧にぬれてつめたし白い花
我影の寐やらとするぞ夏の月
山の井にあす迄のこれ夏の月
山人は山草刈れやなつの月
六月朔津輕玉之亭
手にのせて氷見る間を朝衍

水賣年寄日ではなかりけり

とんぼ追ふ影と念佛申楽の眼と耳をはなれぬ南無道元小法師

なでしこと今朝迄見しを佛の子

餘の草は名もないやうに野撫子

成美が幼き娘の一めぐりに申つかはす

其親にその子とゝきし合歡や咲

あはれげもなくて夜に入蓼かな

草の庵あかざの闇のかはりけり

山家の夏といふ和歌題を得て

瓜木植る日をさて置て栽植る

粟蒔やわすれずの山西にして

蓮一葉うくや嬉しきものゝ數

蓮の糸蓮の葉ともながめけり

六田を前に野田の渡りをあとにして

麻とてはまれに蓬のまがりみち

不足ぞとおもふ側なし麻の露

麻刈や水乞鳥を見て歸る

二人の孫とわらふ〳〵六皮半にむきて

瓜喰て蟻に引れな木陰まで

瓜の皮下手にむかせて竹の月

雨の草瓜の鳴子もそれながら

世忘れにはしり入けり青すゝき

青芒涼しき闇のほのか也

夢南法師(一具の前名也)と石住といふ奥山家にとまりて

皂角の花の香をのみ吹あらし

ある行脚予が湊の侘寐を尋來りければ皷に行先をしめしやるとて

水の粉のふき散方へ往てやどれ

水飯やあすは出て行草の宿

川風の千鳥おもふや心太

蝶鳥のまゝ母らしや梅を煮て

さます事煮梅にならん子の寐起

鮓なれよ松をかぞへてくゝるうち

鮒すしに藻をかり初の宿りかな

稲妻の一夜に甘し酒の味

(別本「一夜になりぬ」)

曙の春を見せたし竹婦人

掛香や心ときめく行遊び

晒井や餘所へ家鴨をあつらへる

さらし井やおもひ紛れし苔の露

秋田湊

雨をともなひ、雨に伴れて、此地にさすらひしより、小鯛と烏賊賣聲も十日斗絶て、又十日ばかり過ぬ。あはれ晝さへくらくて、たゞ海の鳴のみをきく。

百合清水山路ゆかしき折もあり

朝の間に見てゆく野路の清水哉

村中の鏡くもるにわくしみづ

妻と子が大事の清水にごしけり

これは娘は縁ならずして家に歸り家刀自は病にあやうき時の句也

酒田より秋田の湊へゆく舩底に起臥して、汐越にかゝる夕、海

士が家にひとしき客舍にうつる。
老が身をしたひ來にけん卅の蚤
久保田の旅窓あくるあした
蚤のあと消る迄見ん筑波山
中禪寺經堂を守る老法師はいさ
さかしる人にて
紙魚わかぬついでに蚤の咄しかな
書　窓
赫夜姫紙魚の行方ぞ覺束な
あつまれば一度に憎し物の蝿
酒呑のうるさがるなり蝿はぢき
蝙蝠や秀衡殿の油さし
山鳥は人ひく鳥よ蚋のさす
孑孑よ蝶になるさへにくきむし
秋田の湊に、つくしの乙盗とと
もに假寐する頃、浪にぬれ露に
しほれ來し旅衣、ほす日なくて、
雄鹿山も鶴も見ず成りぬ雨つゞき
夕やけのさむるにはやし鵜川人
はなれ鵜の羽黑の山は日暮たり

夕けしき鵜の足水にはじまりぬ
鵜匠らがひたとぬれたり小夜嵐
鵜匠らが濁りしといふ夜川かな
鹿の子〱山風ふくぞ寐に歸れ
鳩の中走りぬけたる鹿子かな
むかしより仙臺に國分侍といふ
あり。山もと近き所にすむ。そ
の家をのぞくに、
照射にはいづれの弓をすゝけ弓
盃をあぐるもの、琵(琶字脱カ)
を抱くもの、棋をかこむもの、句
を案ずるもの、芍藥の徑を傳ひ
來て酌とるもの、花笠の紐むす
びたれてをどり出るもの、是は
これ城北山莊のあそびなり。
けふのこと扇に書にあまりけり
あぶくまや扇拾ひし去年もくる
をのこどのさゝらにしたり團扇の繪
露臭くなりぬべらなり汗拭
甲斐に行人を送る
夏羽折鶴の紋をのしありけ

中禪寺
帷子を着て寒がりぬ御僧達
かたびらや風のそばへる舟のうへ
嘉右衛門はかたびら時の晝書かな
鶯のうしろ見らるゝ暑かな
蕗の葉を引さいてみる暑かな
さびきつて錠(碇カ)のあつし砂のうへ
出羽より越路にいたる山中水無
月六日の唫
莫大に降雪見たる鶯賦
風かをる幕や鞠場の茶の給仕
脛高くかゝげし人も風薫る
龍宮圖
八大龍王すゞしさうにて小淋しき
涼しくも見えず大工の筆硯
途中彌彦山を仰ぐ
草枕神もすゞしと御らんぜよ
宇考亭
土用東風天の川より吹やどり

夕立にすはや心の太山(みやま)めく
夕立につれたり山の木草賣
夕立やつかねて捨し藍の色
井に落す硯もやがて夏の行
風さそふもの〻み多し御祓の具
白雲や茅輪くゞりし人の上
　小千谷にありてみな月盡日
妻と子が茅輪くゞるよ目に見ゆる

松窓乙二發句集上 終

松窓乙二發句集下

一具庵一具
蕉雨亭古翠 輯

秋の部

朔日の禮からいふやけさの秋
　本莊にて立秋の夕
すり出し墨にも月をまたれけり
　秋をさだむるはじめとは七夕の夜を翁も申されし
立秋もまことしからね六日まで
　途中立秋
けふからは星の草なり野撫子
　法と願と、糸による心のすぢのひとしければ、
七夕の夜も餘所にせず西東
七夕や拾ふてもどす蚤が櫛
　新潟より海越の佐渡山を望む
小木の間の婆々もかすらめ唐衣
星合や白き袴に更る人
　大館客舍
やがてうつ砧の槌も星今宵
ほしのうた覺る事にせざりけり
高き木に花もあれかし星の戀
すゞしさや願の糸の吹たまる
　母の喪にこもりける頃
喪の家をはやくかたぶけ天の川
天の川月の兎ははや西す
天の川田守と咄す眞上かな
　鐵船が魂を祭る
我造る茄子の馬に乗て來よ
月さして歸るもありぬ墓參

灯籠が消ても來るや水もらひ

他に三とせ痲て（別本「やみて」）五とせぶりにて古郷の盆會をいとなむ。

我箸も芋殼にかぞへまぎれけり

しらゝ迄こゝろをやりて扇置

一杯の茶もほの〴〵し扇おく

ひなびたる聲と、あれたる宿と、並居たる人の涙と、ひとつ所にあつまりたる哀をさし覗きて、

木槿さけ〳〵とや梓呼

淺茅さく宿ぞ木槿の花も咲

病すこし心よければはこ館より松前へうつる留別

朝貌に立出ろ身はむくげかな

蕣やけさは八月十五日

朝貌に北窓せばき住居かな

蚊屋しらぬ蚊よ朝貌の花一つ

へり行や月と酢瓶と朝貌と

信濃川のほとりにて

小萩さく川上見よとさす鶺鴒

疊にも萩の匂ふ蟋蟀の來る

うらむとは小萩が串葛のこと

文月四日文卿がともからと木下よりかへさ、あやしの家にやすらひて、

親にのみ蚊屋つる家ぞ萩いそげ

檜原峠に上りつめたる所に駕を居（すゑ）て

山萩の散や日のさす膝のうへ

これとても盛ありけりまんじゆさげ

曼珠沙華遊ぶ鳥さへもたぬ也

訪友人

さては留守芒むすびて置れたり

山陰の野に暮いそぐ芒かな

青空や芒に寒いくせがつく

はらむとは芒にやすき言葉哉

荒谷より澤邊といふうまやまでは、小みち（六町一里の事）四十里ばかりのよし。立るかゝしの弓と矢も、心ぼそく見ゆる所也。

いとせめて草花多し道下り

錦木をおつとりまきぬ草の花

草花や明るくみゆる母屋のすそ

嬉しさに淋しく成ぬ草の花

笹垣をくゞれよ秋の花もらひ

我丈ヶにあまりてさびし女郎花

蘭白し蜘のうるまひ憎けれど

鬼灯や旅せぬ人は夢に見ず

鯖野村醫王寺のかへさ

ゑの子草道より下になりにけり

蒜箇程の芋もちて〻草の宿

古禪師の手向

芋あぶる烟につれて去（いな）れしな

小千谷出雲崎の間に遊ぶ事四十有六日、長月十八日ふたゝび長岡に歸り來て舞々庵に入、明ればば父の忌日にあたりぬ。

ぬかご焼て我庵ぶりに奉る

草の戸ざしの月夜〳〵は訪ふ人もおもひたえて

露なれて虫のやうにも寐ざりけり
天の川も虫のなく音も常になる
呪詛で蚯蚓鳴かせず庵の僧
そこらうちいひあはせてや飛螽
とんぼうや片足あげし鷺のうへ

疎籬老人が山居を訪ふ

露寒し我足あとを又歸る
めら／＼と煙かゝるや露の上
山にある家のやうなり露の闇
露ちるや朝の心のまぎれ行
夕つゆの梢そろはず道の隈

重厚老人に訪はれて

寐て御座れ苔の朝露まだ寒し

靄中

露置や我も草木にいつなりし

光堂

露の身に明りさしけり堂の内

母喪中
北の岡山に葬り來れば朝／＼その所の霧を分て

置露にいつ迄へるぞ墓の土

一戒ぼとけのめぐりの日、矢越の崎のこなたに舟がゝりして、念佛となへぬるに、

見るのみ歟霧の雫を膝のうへ
霧雨や白き木子の名はしらず

緒逸春翠素菊を供して天王寺といふ山里に分入

霧雨やあまりに低き木のうつぼ

わにのすむ大磯の根と呼べき、犀瀨四十里許の間、裾にゆくゆく、浪うちかけられて、

秋風のさても明るき寒かな
あきかぜや白き雀をけさもみる

（右二句の季語を別本には共に「朝顔」とせり）

秋風や寐よとの鐘はいつもつく

庵びらき

摺墨をのぞきにおはせ龍田姫

門馬より早池峰を望て

晴きつてお寒からふよたつ田姫
菊を見て年寄たまへ龍田姫
角力取の宿は淺茅と答へけり
いなづまやあすは旅する人の來る

横はまにて廿七夜の吟

八月もうら崩して啼千鳥

秋立やうすは荻萩の葉にもおとらで

三日月や世捨人らが立さわぐ
三日月や風にふかるゝ尾長鳥
三日月を見にこそ來たれ芒ふく

乙彦すけひら等に伴れて、杖のむく所にあそぶ。

砂山も道ありけりなはつ月夜

雨　十四日

ぬれながら月の使に來る月か

淸光に乘じて吟歩するに、およんの濱も見えわたりて、

名月の夜にも炭やく煙かな
名月や人の白髮の寒かりし

松窓獨坐

名月はすゞしき月のにほひ哉

（別本「すゞしき苔」）

書懐

名月や病に富る影法師

直江津の三よさの月をひとり／＼にあてゝ見んとて、待宵の日たどり着ぬ。あくるあした潮の嵐、旅やかたの窓に吹つけるより雨ふり出ぬ。夜もふる。ひとり／＼といふは、ちくま川を左右にしてすむ、石海とゆづるとなり。

雨の神磯歩行する名月歟

枯木ほど更るものなしけふの月

六十に四ッをそへたる良夜

命なり月見る我をくふ蚊まで

今年の良夜は、兒孫をそばに置て月見るも、おろかにたのしくて、

旅寐せば月にもあはじ葎の戸

先人手づから庭裡に數株をうつし植て、とく繁陰をいのり申されしは、二十六年のむかしなりけり。殊に雪のあした月の夕は此君ならでも、これに對して硯をならし盃をあげたまはざる事なかりき。ことし文月中の九日千秋のかたみを殘してなくなり給へ（ひ）しが、吹風置露も身にしみてたゞ哀とのみ覺ることよひ、

名月や親の位牌を松の上

分外にまたせて今宵月は西

月嬉し乳房はなれし子の心

去年の旅寐に、老が身はあすをもたのむべからずなど、人につぶやきし事ありしが、

死なぬ心今宵の月に見られけり

仲秋無月　二句

月やこの芙蓉も持たずくもる庵

月に降ておのが哀となる雨歟

山家にやどりて

祖母ひとりいざよふ月を見ざりけり

十六夜の闇や至極に念の入

十六夜の明（あけ）て聞ゆる鳴子かな

さす月の寐所やすき雀かな

五智にて

住ばこゝ椎の風折月さして

なる音は添水なるべし月の中

月代はかならず吹よ根なし風

よんべ寐しころにもなりぬ軒の月

かけのぼる脊戸山あれや秋の月

松のなき世ならば何とあきの月

浪よけの合歡刈分よ秋の月

十七回忌

つもる秋親の白髪に似る斗

すむものゝかぎり盡せり秋の水

さむしろや秋の戸口の日南水

關守が棒の先なりあきの山

朝寒や弱檜（サワラ）に墨をうてば散

摺上川

粲守の夕寒つのるはなしかな

待もせぬ月や夜寒の黍どころ

秋寒し片空かけて山の形

松竹になる氣もうせる野分かな

大はま美里がもとにありて

稗貫の神は何神野分ふく

野分ふく空もせまれり山清水

平潟にて

鹿の聲潮くさくもなりにけり

今朝も寐て行か萩の鹿臭き

鹿の聲風より月の出る也

さかしきにうら表なき會津嶺の紅葉ふみ分るのみにて

小男鹿や里へとゞかぬ聲を持

行〳〵て

水苔と鹿に又逢ふ山路かな

風の鴫突はづされし夕かな

さし餌して鴫に秋をぞかたれける

鶉なく野を片脇に水見舞

酒田高野のはまにて

吹うらとこゝらはなれず浪の雁

我ものとさわげや雁の九十月

日のさしてとろりとなりぬ小田の雁

わたり鳥鳥の海には灯のとぼる

君が代の千代の數かも稲雀

梅園に申す

かけす鳴(なか)ば山越す頃とおもはれよ

仿蕪川

それとなくかゝし立たし向ふ山

矢に羽をほしげもなくて立かゝし

案山子より日のさし初てたゝへ水

長岡の東け(?)白といふ里に入

燒屑にしめ〳〵とふるしぐれかな

四ツ谷の里を過

麥蒔て冬にしてあり小家の秋

最上川のほとりにすむ龜年がもとにて

稲舟のいねともいはぬあるじ哉

川稲の花をさまりし月よかな

稲たんとつけて短し馬の首

鎌鳴らす秋はどこでも稲葉山

老婆が七日〳〵の花も、呼(よべ)ばもて來る四五軒の農家もありて、

稲かけて菊の日遠し垣隣

佛にも初穗といふか木綿(わた)所

山かげやこゝすむ人の木綿もふく

寐冷せし宿や紫苑の片なびき

大風の紫苑見てゐる垣根かな

薏苡仁を植し母なし芙蓉咲

しのぶの奥にて

水はやし龍膽なんど流來る

こま〴〵と穗にこそ出れ川原蓼

からす瓜そも〳〵赤きいはれなし

拍崎にありて(別本「長月四日」と冠す)

九日にあはゞ黄菊の寺泊

人るな月夜明ぬうちはけふの菊

あたゝかに見ゆるものなり菊の花
赤いとて淋しがりけりきくの花
雁などをころす家さへきくの花

老　躬

ともすれば菊の香寒し病上り

出門口號

成美は題目にひたとかたぶき、巣兆ははやく酒に醉ふとか。道彦は向島に隱居すとも聞ゆ。

きくの秋白髪くらべにむさし迄

我腰につけたる朝ぼらけ（蜾の銘カ）に、俳諧の古人達を勸進することありて、

置露の菊勸進に出ばやな

ある人の家にて

旅するか暦のうへのきくの枝

名取郡のみちのかたはらに人待貌の小家あり。

田の畔に萩のかはりかきくの花
馬の尾も暮行九月九日かな

旅にしあれば椎の葉にもる、とありしむかし人の草枕ならねど、老ては物にふれて心細き事のみぞおほかる。

筍の飯も我家ならず后の月
なぎの花こんにやくの花後の月

高館十三夜

名殘見せて月はむかしにさし向ひ
水張の菅家の像も十三夜

米山麓

蔦の葉はおそらく赤し茶屋の茶は
もみちせぬ所はあれど夕木玉

酒　田

熱海(あつみ)から來し人のいふもみぢかな
散榎の實鳥もひらふに子も拾へ
榎實はむ鳥の中よりなく鴉
堂守が茱萸迄くらふからす哉
草の戸や末枯しらぬ水の味
日は西になりぬ柚味噌の釜の影

椎　谷

一曲り出て荒海や落し水

この郡は鳥海山の北にひろがりて、はじめの秋も雁の來さうなけしきをふくめり。

からころと砧も初夜由利の空
橋に火かげさす家の砧かな

筥館の空は九月のけふ、霰の先がけをまたで、

初雪や御雛の餅の過し今朝
月をさへ先へ廻して秋のゆく
行秋を鴨は迎に來たさうな
起しても又臥すきくや九月盡

冬の部

十月や日の暮る日の梅の花
初冬の闇引はへて安達太郎根(あだたらね)
龍膽はどこの山根の初冬ぞ

冬來たぞ山路の菊にもらひ泣
（別本「草庵を出て米澤へ行途中」と前書あり）
達磨忌や南天の入汁の中
鶴亀に見せたきものや夷講
翁忌逮夜
墨つけて翌日を待べし旅衣
十二日
旅のあはれ手向せうものはせを佛
淋しさの冬の主かな我佛
翁の日は朝とく起たれど、何をかせん、楮つむさへものうくて、
しぐれ待のみをのゝえの朽法師
山人は木祭すらし初時雨
俤は軒のあやめのはつ時雨
斧柄即興
菊の日のきくより白きしぐれ哉
翌日もふるとてけふも降時雨かな
とにかくに篠家はむすべ時雨人
時雨雁眞手にならぶ時もあり

下紐の關を西に出て
しぐれてや大分見ゆる櫻の木
ひと時雨するや素堂が嫁菜迄
門を出る時
いつの旅もしぐれさそはぬ事ぞなき
此君亭
しぐれけりほち／＼高き竹の節
秋の別をきのふ吹送りしが、けふもやまず。
月越しの松風ぬらすしぐれ哉
こがらしの乾にさりぬ世捨人
はこだて
木枯のこりよとばかり旅寐ふく
初雪や晝ふるものとおもはれず
みなこもる冬とてもなし初瀬の里
なき人の來る夜近かれ冬籠
米澤高畑にて
餡つゝむ店の木葉も多げしき
白雲の濁る日もある落葉かな

木葉とはちる頃の名か木葉とは
小坊主は風もひかぬやちる木葉
何がし（別本「北枝」）の集に、角つゝむ越路の牛の寒哉、といふ句を此國にありてふとおもひ出ぬ。
角つゝむ牛を見やうぞ散木葉
楢の木はまだなくならず柞の木
よきことは言葉すくなし歸花
枯てこそ忘れ草なれわすれ草
出雲迄里はいく里枯尾花
萩芒從弟のやうに枯にけり
枯蘆やひだるき我に猶みゆる
枯蘆の庵相に明る月夜哉
冬草やはしごかけ置岡の家
田に麥をまく國へゆけ鳴鳥
白魚のとれぬ咄しや水仙花
水仙に花なき里の小鴨かな
いたつきの癒るを待こと五日ばかり、太田の人／＼に案内せら

れて足利へ行途中

くだら野の鶴にもまけじ足二本

親の日の朝日を拜む枯野哉

鰒一ッ來て見劣るや遊ぶ魚

花をふむ鳥よりにくし鰒の面

水鳥やこんな奥には菊と家

水鳥の筲にかゝれり暮の波

飯坂春翠が家

山水や鴨の羽色に流れこむ

月の夜をきたなくするな鴨の聲

寐ることをあまりきらひな小鴨哉

尻ざりに鴨見て入ぬ門の口

青竹のそなた表や池の鴨

おくの海舟中

錢百で買れうならば波の鴨

雁鴨の日さへ短く成にけり

冬三月折角をそべはま千鳥

編笠を着た人寒し千鳥より

はまの子は正月待よ鳴千鳥

湖のあけぼの覗けみそさゞゐ

齒のぬけし今朝ともしらずみそさゞゐ

みちのくも出羽の境、湯原にて

山風の吹出口なり冬の鳥

朝茶のむうちは居よかし冬雀

笆が嶋を北にみる所は

小鳥井の小磯といはめ霜日和

馬の目の哀げもなし霜日和

栗生津のやどり

寒いはづ彌彦の道を軒の下

家ありと聞も寒しや山の陰

莚帆の來るよりさむし行姿

竹の葉の世に美しきさむさ哉

奥の海

寒いにもよい程があり楫枕

宿かれば木綿の實をふむ寒哉

寒空や筏にのせし鍋の跡

雄島の夜叉もつめたい目にあふた

結廬在人境

沓つくる家かと寒くとはれけり

赤湯にて

山鳥のおのが裾野も雪ふりぬ

雪といふ日の差別なく降にけり

降雪の太山樒は高くあれ

巣居が身まかりしよし、きよがもとより文こしけるに驚て、

けふよりや佛をつくる雪と見る

芋澤といふ山里にて

なけば名の聞たくなるや雪の鳥

むかし繪を見て

尻鞘は誰やら雪の鈴鹿越

そも漁者の短艇にひかれ、閑鷗に伴ふは、詩つくる人のうらやむひとつにものしぬ。中にも獨釣寒江雪といふはよき詩のよし。嵐にへだてられて出羽の國矢代峠の麓の里にあること二日、蓋簾を押て戸外を見るに、木斧の音幽なる谷にひゞきて、木間に暮いそぐ影は、世に繪がき

残したるゆかしきけしきなり。

雪に樵る翁もひとり蓑と笠

きのふにも似ず朝日はなやかにさしのぼれば、おなじ宿りを出るに、猶もかなはで、

負れても足する雪の桂橋

橋の名はをかしけれど、寒くくるしきは負ふ人にもまさりたる老が身なるべし。

彼は来る人、我は行人。

出ぬけたる樵ながらに小笹原

雪車負ふて歸るにしりぬ遠い道

荒神の松も買れぬみぞれかな

みぞれにはさせる句もなし山の坊

山の月霰こぼせし貌もせず

落馬しておもしろげやむ霰哉

消まいぞ霰の音がうそになる

鍾氷る俊惠が寺の寐覺哉

未練とはこれらなるべし薄氷

山近くあればおもふや鵔鳥

それ鷹に拳見せけり西明り

盛岡に久しくありて

曆書田山の冬も今少し

（別本「田山はめくら曆の出所をいふ」と頭書あり）

冬鹿のあまり近きぞむとくなる

木兎の身にも大事な月日哉

柴漬し河や家より少し北

柴漬の沉むをのぞく小舟かな

斧柄と名づけて僑居にうつりし時

折柴のなほ細かれや爐の煙

あくるあした

寒けれどたのもし月のもりし跡

榾の火に影なく成ぬ壁の月

庚申の夜に逢ふ寺や榾明り

宮古嶋にありて

大切な埋火一ツかりの宿

埋火といふ名をもてり星ひとつ

鎌倉の世を先ツおもへはかり炭

風ふけば降こむ雨や炭けぶり

草珺をとふに、一間なる所に上を着て、殊勝におこなひゐるを、しばらくこなたに待て、

いたゞいて御文置間やはしり炭

衾着よ〱とや峯の松

多竹、人をして野ならしむ。我すみ家にとゞまる一娥法師に贈。

ふすま着てきけ鶯のありく音

米澤途中

胼祈る神も有げに遠小里

足利學校

ふむまじよ冬の薺もむかしめく

南にさかしく立るを七面といふ。根山のなだらかにひろがりたる上より人すむ家あり。少し下りて商家青樓に十字街をなせる所、すべて山の上といふ。

すめば住七面の冬を背戸の口

針に緒を長くつけたり冬の宿

遊ぶ日は菜實になしや冬椿

寒月や御廳の宿もするあたり

寒月は涙こぼさぬ照やうぞ

臘八のこゝろを

師走茶をめしにや山を出る佛

師走中の九日三厩にて二句

よる浪のこゝぞ暦の軸はづれ

降雪を仕事にはくや懸り船

賓ほどはありとも見えぬ柊かな

節分の夜

折人は鬼の子にせん梅花

慮外なりなやらふ宵の足たらず

なには人の文を得てうらやむ事あり。

住よしの岸に行（ゆく）てふ年わすれ

病おこたらず水原より青（？）窓に歸りて、東峨文仲夢南の人〴〵にすゝめられて、

死ぬとしを枯木のやうに忘れけり

年内立春

佐保姫につめたさかくせ年の内

むさしとむつとの二法師、喜年が別荘にうつりて、

年をしむ日もよき程ぞ六くさの家

筥館をのゝえ

いく度かあぶる硯も年一夜

どう聞て見ても戀なし除夜の鐘

雜の部

出羽行脚のころ

橋姫のひとりはあれよ最上川

彌彦神社

東の間にかはるや風のうら表

尾花白阿があるじせる遊舫に日のかたぶきて

餉に手をさゝれにけりな外が濱

我をはじめとして

俳諧師梢の柿の蔕ばかり

ひぢ曲坂

見よがしに青き實のあるものゝ蔓

所思

我とても墨はく烏賊の逃所

舟中

氷雨降りし雲をさまらず最上河

喪中

星となりて夜は見えたまへ母の影

古稀をもろこし人は逢ひがたきやうに申はべれど、（別本此文の前に「撫松樓迂翁壽詞」と題せり）

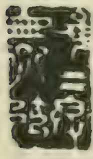
千代の數貝まゐらせよ伊勢の蟹

松窓乙二發句集下　終

跋

數の堂塔をつくり、あまたの僧尼を供養したるをさへ、無功德と答へ給ひしは、放慢邪僻のこゝろを破斥して、無作の大善根にみちびくはかりごととなん。あはれいづれのみちにまれ、こゝろざしをたてゝ、高きにのぼりみなもとをさぐらんと欲する人は、この垂辞をよく〳〵肝腑にしめて、修行すべき一大事の因緣なりけり。松窓はわがはいかいの道にはゆゝしき博士にぞおはしける。されど一句つくるごとに、同盟あるは社裏の人〳〵に批評させてのち、稿を脱することつねなり。こはさらにちりばかりの魔心なく、無爲湛然のたかきさかひにあそべる、たふとき心がまへにあらずや。その世にいませしをり、月をうそぶき、花に醉ひ、鳥をうらやみ、雪に耕し、あるは伊達の大木戸に客を送り、つゝじが岡に人におくられし藻思の、あせみの露のかわきやすう、浮雲のあとなくきえむことを口をしがりて、櫻木にゑりつけ、なにがしが文庫にをさめたるは、これもまた例のやまひのうとましうて、無功德のいましめをふかくまもらんとおもひかまへたる人達のすさみになむ。

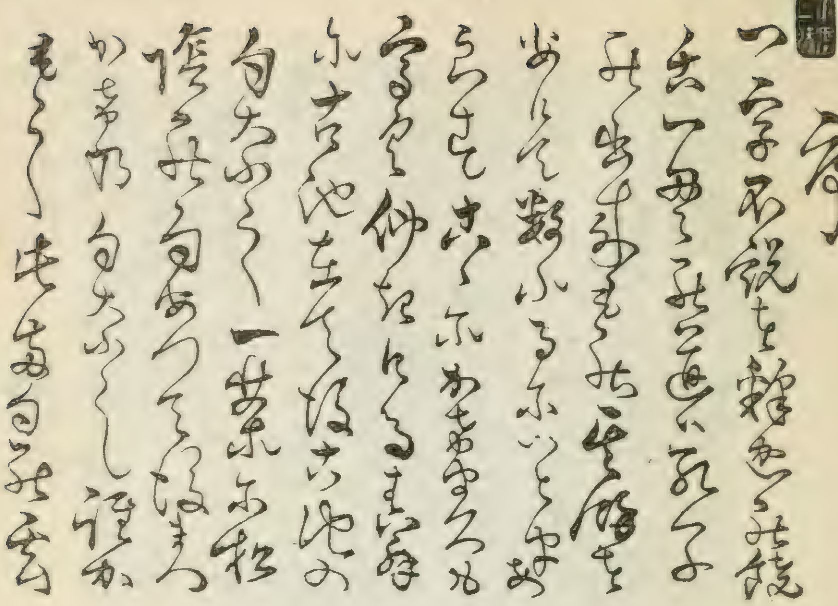
默菜主人誌



東都書肆
日本橋四日市廣小路
桂林堂
上總屋利兵衛
同　惣兵衛

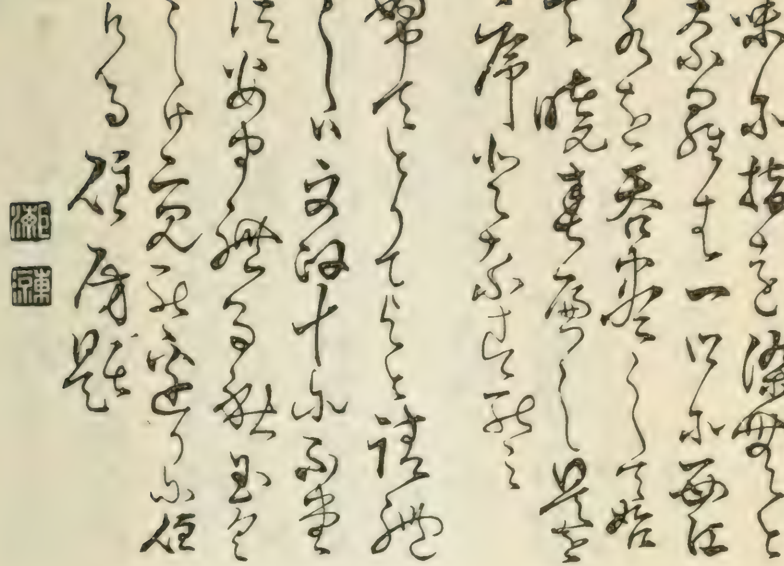
[illegible]余發句集

上



印　序

一字不説は釋迦の饒舌、一貫の道は孔子の出來もの、其餘はあげて數ふるにいとまあらず。ここにかけまくも高く仰ぎけるは、翁に古池（の句二字脱カ）在て後古池の句なし。一茶に松陰の句あつて後まつかげの句



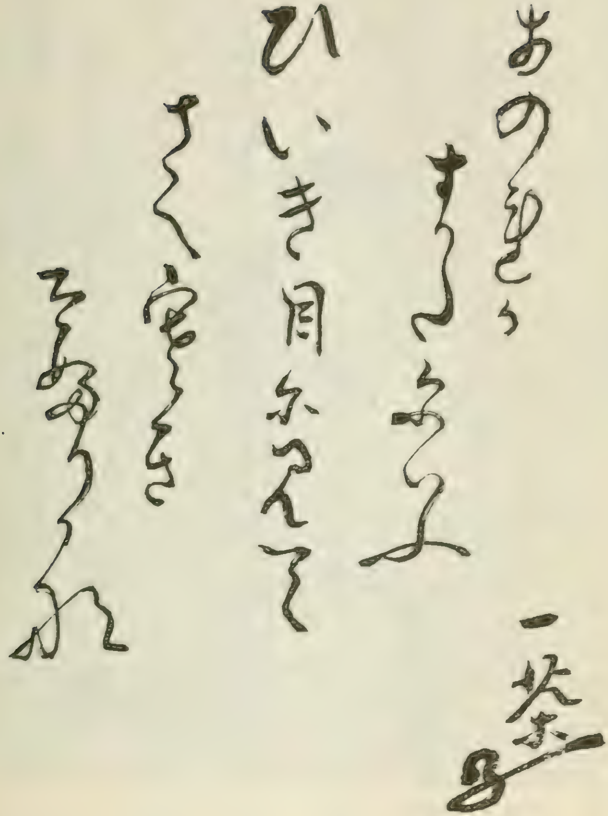
なし。誰かもし此兩句の玄味に指を染むとならば、一口に兩江水を呑盡して始て曉すべし。

是を序となすのみ。

ふでとりてよと請れしは文政十にふたつあまれる秋、玉くしげ二見の邊りに住ける碓房題

印　印


俳諧寺一茶肖像
春甫雲信寫


一茶

一茶發句集上

春之部

元日や上々吉の浅黄空

元日も立のまんまの屑家哉

還暦

春立や愚の上にまた愚にかへる

新家賀

年立や雨おちの石凹むまで

蓬萊や唯三文の御代の松

富士画に

初春や千代のためしに立給ふ

長谷の山中に年籠りして

我もけさ清僧の部なり梅の花

三嶋の井は遊女柏木がかた
みなりとかや

若水のよしなき人に汲れけり

福わらや十ばかりなる供奴

かま獅子が腮ではらひぬ門の松

（此句巣兆が自撰自筆の
句集「曽波可理」にあり）

逃しなや水祝るゝ五十聟

初夢に猫も不二見る寝様かな

袴着て芝にころりと子の日哉

小松引く人とて人のをがむなり

垢爪や薺の前もはづかしき

天神参

ちさい子の麻上下や梅の花

梅の木や欲にや願はぬ三日の月

梅折や盗みますぞと大聲に

相馬覺古

梅が香や平親王の御月夜

梅咲や唐土の鳥の來ぬ先に

月の梅の酢のこんにやくのとけふも過ぬ

笠着るや梅の咲日を吉日と

山鶯よりもめづらしく新金
を窗にあてけるを

二歩判の初音出しけり梅の花

下戸村やしんかんとして梅の花

梅の花爰を盗めとさす月か

そら錠と人には告よ梅の花

嶋原

入口のあいそになびく柳哉

犬の子の踏まえて眠る柳かな

けろりくわんとして烏と柳哉

御殿山

鶯も親子つとめや梅の花

うぐひすにあてがつておく垣根哉

鍬の柄に鶯鳴や小梅村

黄鳥のまてにまはるや組屋敷

松室にあそぶ

うぐひすの馳走にはかぬ垣根哉

黄鳥や泥足ぬぐふ梅の花

鶯ののにして鳴や留主御殿

うぐひすやよくあきらめた籠の聲

老婆洗衣画

彼の桃が流れ來るかよ春霞

輕井澤

笠でするさらば〳〵やうす霞

菜翁とあそぶ
此門の霞むたそくや隅田の鶴
栗之六十賀
古松や又あらためていく霞
けふも〳〵霞んで暮す小家哉
誰それとしれて霞むや門の原
西山やおのれが乗るはどの霞
小兒のあどけなさを
鳴猫に赤ッ目をして手まり哉
素鏡が母八十八才賀
門畑や米の字なりの雪解水
雪どけや鶯が三疋立臼に
世にあればむりにとかすや門の雪
庵の雪下手な澄様したりけり
門前や杖でつくりし雪解川
三日月はそるぞ寒はさへかへる
藪入や墓の松風うしろふく
芽出しから人さす草はなかりけり
店開賀
福の來る門や野山の朝笑ひ
かくれ家や猫にもいはふ二日灸
初午
花の世を無官の狐鳴にけり
歯も持たぬ口にくはへてつぎ穂哉
一年を賣て親を養ふけ孝行
云(は)ん方なし
出代や汁の實なども蒔て置
出かはりやいづくも同じ梅の花
二月十五日雪ふりけるに
花のところへ雪のふる涅槃哉
寢て起て大欠して猫の戀
蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀
うかれ猫希妙に焦てもどりけり
行がけの駄ちんに鳴や小田の雁
板橋
かしましや江戸見た雁の歸り様
閏二月二十九日といふ日、雨も漸おこたりぬれば、朝とく頭陀袋首にかけて、足ついで例の角田堤にかゝる。東はほの〴〵しらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。しかるに上のならせ給ふにや、川のおもてに天地丸赤〳〵とうかめて、田中は新に道を作り、みぞ堀はとく〳〵板をわたしておの〳〵御遊を待と見へたり。誠に無心の草木にいたる迄春風に伏しつゝ、めでたき御代をあふぐとぞ覺へ侍る。
五百崎や御舟をがんで歸る雁
善光寺
開帳に逢ふや雀も親子連
雀の子そこのけ〳〵御馬が通る
竹にいざ梅にいざとや親雀
雀子やお竹如來の流しもと
慈悲すれば糞をする也雀の子
雉子鳴やきのふ焼れし千代の松
夕雉子の走り留りや鳰の海
黑門や下々に〳〵と雉子の聲

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙かな

向〳〵に蛙のいとこはとこかな

めでたさの煙拳へてなく蛙

我を見て苦い貌する蛙かな

象かたや櫻をたべて鳴かはづ

玉川や先御先へととぶかはづ

ゆうぜんとして山を見る蛙哉

南都

朝起の古風を捨ぬ乙鳥哉

晝飯をたべにおりたる雲雀哉

横乘の馬のつゞくや夕雲雀

棹鹿よ手拭かさん角の跡

右 八十五章 魚淵 二休 校

それ虹に世話をやかすな明り窓

神風や虻が教へる山の道

奉納

おんひら〳〵蝶も金ぴら參り哉

てふ飛や此世の望みないやうに

葎からあんな胡蝶が生れけり

田に畑にてん〳〵舞の小てふ哉

門のてふ子が這へばとびはへばとぶ

さをしかや蝶をふるつて又眠る

てふといふ娘山路の案内しけるに、俄雨はら〳〵ふりければ

木の陰やてふとやどるも他生の縁

橋本町上人

陽炎や歩行ながらの御法談

かげろふや臼の中からまー筋

陽炎や蕎麦屋が前の箸の山

八巾上てゆるりとしたる小村哉

美しき八巾上りけり乞食小屋

我蒔た種をやれ〳〵けさの霞

かまくらや昔どなたの千代椿

菜の花や霞の裾に少しづゝ

かるた程門の菜の花咲にけり

大菜小菜喰ふ側から花咲ぬ

春の日や暮ても見ゆる東山

傘さして箱根越すなり春の雨

春甫新宅賀

安堵して鼠も寢るよ春の雨

婚禮

春雨や相に相生の松の聲

春雨や鼠のなめる角田川

穴藏の中でものいふ春の雨

負弓の藪にかゝりて春の雨

鳩いけんしていはく

梟よつらくせ直せ春の雨

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月

ついそこの二文渡しや春の月

春風や牛にひかれて善光寺

春の風おまんが布の形りに吹

狗(ゑのころ)が鼠とるなり春の風

待〳〵し日永となれど田舎哉

手のひらにかざつて見るや市の雛

おらが世やそこらの草も餅になる

我宿は何にもないぞ巣立鳥

好〳〵や此としよりを呼子鳥(よぶこどり)

観音奉納

只ための花もはら〳〵あの通り

花のかげあかの他人はなかりけり

如病得醫

花を折拍子にとれししやくり哉

花の陰なむさん火打なかりけり

斯う活て居るもふしぎぞ花の陰

三月十七日保科詣

花ちるやとある木陰も小開帳

人撰して一人なり花の陰

おとろへや花を折にも口曲(まげ)る

花の木に鶏痳るや淺草寺

堪忍をいたしに行や花の陰

山の月花盗人を照らし給ふ

刈萱堂

花の世は地蔵ぼさつも親子哉

花の木のもつて生れた果報哉

大和めぐりする人に旅の眞言といふをさづけて

かならずよ迹見よそはか花の雲

今の世や猫も抄子も花見笠

有様は我も花より團子かな

苦の娑婆や花が開けばひらく迚

山下常樂院に人〻こぞりて傘とむ佛おはしけるが、とし千百年の供養なりとて讀經いと殊勝也。かくふつゝかなるおのれさへ、すぐせの結縁うすからざるにや、かゝる時に生れ逢ふとのうれしく、しばらく隨喜の泪を拭ひぬ。そのかみ其角六あみだかけて鳴らん時鳥とありしも、けふのやうなる折にやあらん。是さへ今は百とせのかたみと成りぬ。かくいふけふもいつか又昔とならん。されど我後の世をたのみおく軒ばの梅さへ持ぬ境界、御佛必見捨給ふなよ。

花桶に蝶も聞かよ一大事

新吉原

行灯ではやしたてるや花の雲

御所にて

棒突が隠でをしへる櫻かな

人聲にほつとしたやら夕櫻

櫻へと見えてじん〳〵端折哉

氣に入た櫻のかげもなかりけり

一本はさくらもちけり娑婆の役

此やうな末世を櫻だらけ哉

東西の花に散立られて心も山にうつり行といふ日は三月廿日也けり

煤くさき笠も櫻の降日哉

君が代の大飯喰ふてさくら哉

けふは町隣なる麻美と前の日より約し置けるに、かれさはりありてやみぬ。さは

とて翌の命待ものかはとただ獨來たりしに、幸懐に五元集といふものゝあれば是究竟の句相手なり。

小坊主や親の供して山櫻
櫻〳〵と唄はれし老木哉
下〳〵に生れて夜もさくら哉
一夜さに櫻はさゝらほさら哉

鞦韆戯

ぶらんどや櫻の花を持ながら

櫻艸といふ題をとりて

我國は草もさくらを咲にけり
今少したしなくも哉菫艸
百兩の石につり合ふつゝじ哉
春の日の入所なり藤の花

根岸にて

山吹をさし出しさうな垣根哉
惣〳〵にきげんとらるゝ蠶かな
さまづけに育られたる蠶哉
やよ虱這へ〳〵春の行方へ

地獄

夕月や鍋の中にて鳴田にし

餓鬼

花ちるや呑たき水を遠霞

畜生

散花に佛とも法ともしらぬ哉

修羅

聲〳〵に花の木蔭のばくち哉

人間

さく花の中にうごめく衆生哉

天上

かすむ日やさぞ天人の御退屈

右 八十三章　　春耕校　稲長

夏之部

下谷一番の貌して更衣
おもしろい夜は昔なり更衣
としとへば片手出す子やころもがへ
けふの日や替てもやはり苔衣
立ながら綿ふみぬいて出たりけり

文虎が妻身まかりけるに

おりかけの縞目にかゝる初袷

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷
春日野の鹿に嗅るゝ袷哉

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷哉
鶯のほゝと覗くや花御堂
かくれ家や死ばすだれの青いうち
夕かげや鶺の小脇の夏花持
是ほどのぼたんと仕かたする子哉
てもさてもても福相のぼたん哉
通ひ路に階子わたすやかきつばた

二十四年桑花只一夜夢

善盡し美を盡してもけしの花
芥子さげて群集の中を通りけり

卯の花の垣に名代のわらぢ哉
萑の苔花さくすべもしらぬ也
我上へ今に咲らん苔の花
乾く迄繩張る庭や若葉吹

禪寺

隅〱も掃除届くや木下闇
法談の手まねも見へて夏木立
せい出してそよげ若竹今のうち
若竹と呼るゝうちも少かな
あつばれの大若竹ぞ見ぬうちに
餅になる間と配る枕かな

老翁岩に腰かけて一軸をさづくる圖に

我汝を待事久し郭公
これでこそ御時鳥松に月
ほとゝぎす俗な庵とさみするな
此雨はのつ引ならじほとゝぎす
せはしさを我にうつすな子規

鎮西八郎爲朝人礫うつ所に

時鳥蝿虫めらもよつく聞け
卯の花も馳走にさくか子規
先住のつけわたりなりかんこ鳥

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

高野山

地獄へは斯う參れとやかんこ鳥
前の世のおれがいとこか閑古鳥
雲を吐く口つきしたり蟇
罷り出たるは此藪の蟇にてゆ
目出度さはことしの蚊にも喰れけり
晝の蚊の來るや手をかへ品をかへ
我宿は口で吹ても出る蚊かな
隙人や蚊が出た〱と觸歩行
晝の蚊やだまりこくつて後ろから
蚊柱の穴から見ゆる都かな
とし寄と見てや鳴蚊も耳のそば
芝浦や初鰹から夜の明る
蜘の子はみなちり〲の身すぎ哉
かはほりやさらば汝と兩國へ
鹿の親笹吹風にもどりけり
神國に天から藥降にけり
五月雨の竹にはさまる在所哉

妙義

五月雨や夜もかくれぬ山の穴

粒々皆心(辛カ)苦

もたいなや晝寢して聞田植唄
早乙女や箸にからまる艸の花
寐せつけし子の洗たくや夏の月
茨の花爰をまたげと咲にけり

右 五十八章

呂芳 士英 校

日々懈怠不惜寸陰

けふの日も棒ふり虫よ翌も又
ひいき鵜は又もから身で浮みけり
はなれ鵜が子の泣舟にもどりけり

初螢ついとそれたる手風哉

不忍池

螢火や呼らぬ亀は膳先へ

きれわらぢ螢とならば隅田川

夕月や大肌ぬいてかたつぶり

柴の戸や錠のかはりにかたつぶり

かたつぶりそろ／＼登れ富士の山

なか／＼に安堵貌なり羽抜鳥

屏が雨など輕んじてぬれにけり

六月や月夜見かけて煤はらひ

小金原

母馬が番して呑す清水哉

人來たらかへるになれよ冷し瓜

旅人や山に腰かけて心太

無限欲有限命

此風に不足いふなり夏坐敷

旅瘦をめでたがる也夏坐敷

松影や扇でまねく千兩雨

手にとれば歩行（あるき）たくなる扇哉

西山や扇おとしに行月夜

獨樂坊を訪ふに錠のかゝりければ三界無安といふ事を

蝿よけの草も釣して扨どこへ

豐年の聲を上けり門の蝿

蝿一つ打てばなむあみだ佛哉

世がよくばもひとつとまれ飯の蝿

侍に蝿を追せる御馬かな

やれうつな蝿が手をすり足をする

蚤の跡かぞへながらに添乳かな

のみ燒て日和占ふ山家かな

蚤の跡それも若きは美しき

蟬鳴や我家も石に成るやうに

蟬鳴や天にひつゝく筑摩川

ねがはくは念佛を鳴け夏の蟬

新家賀

涼しさや糊のかわかぬ小行燈

春甫京へ行を送る

涼しからん這入口から加茂の水

兩國橋上

下見ても法圖がないぞ涼船

草雫今拵へし涼風ぞ

藪村の貧乏馴て夕涼

魚どもや桶ともしらで夕すゞみ

涼しさや彌陀成佛の此かたは

銚子にて

朝涼や汁の實をつる脊戸の海

きのふは鮮魚に宴してけふは松宇佛

夜涼か笑ひ納めてありしよな

涼風やちから一ぱいきり／＼す

すゞ風も隣の竹のあまり哉

身の上の鐘ともしらで夕涼

上總國百首の鄕は、東南に山連り、西北にうみ開けて、防人の備へに究竟の地なりとて、此度陣屋いとなむ繩張といふと有。其畠の瘤のやうにさし出て妨なる小家あり。主と見へて翌をもしらぬ老婆ひとり麻をうみて

居たりけるを、奉行人深く憐みて汝子ありやといへば、老婆いふ、をのこひとりもちたりけるが、いつ〳〵のとし古郷をよそにふり捨て、今は江戸の本所とやらんに、人の髪ゆふわざをなすよし、風のたよりに聞侍るとばかり、泪はらひ〳〵こたふ。さあらば其男呼返すべし、よろしき稼地にかひ〳〵しき家をあたへん、しかのみならず其男には永く髪結司のゆるし文とらせて、汝には生涯二人ふちといふを申下して、身をやすくすぐさせん。あさ糸の細き稼ひをやめて、遲々たる春の日にはちりかふ花に無常を觀じ、淒々たる秋の夜にはかたぶく月に西方をねがひ、明暮心任せに菩提の種を蒔なば、なんぼうたのしからん。汝が此家このかまへのさはりになるこそ、天より汝に幸ひ下し給ふなれ。とく〳〵家をしりぞき、あしとにうつれよといふに、老婆むく〳〵とはらたゝしきそぶりして、灯心つかねたらんやうなる首打ふり〳〵いふやう、よくもあざむき給ふものかな。是はわらはが先祖より、いく世ともなく住ふるして、大事の〳〵栖なれば、たとへ黄金屋にとゞく程給るとも、我目には一椀の麥飯にしかずとこそ思ひはへ。たゞ〳〵此はにふの小屋こそさうなき寶なれ、よしや命斷るとも外へは行かじ、と手すり足すり貝を作りてなかぬばかりに申せば、奉行人の慈悲も今は施すべきようすがなく、老婆のちになくひそと、ふたゝび繩はりして、ついに其家をよきて地とりなりぬ。あはれ月日の照らすかぎり、露霜のおつる所に生とし活るもの、たれか國命そむき奉らん、しぶときをこの者にぞありける。

月さへもそしられ給ふ夕涼み

碓氷にて

しなの路の山が荷になる暑哉

蕗の葉にぽんと穴あく暑哉

迹からも又ござるぞよ小夕立

湖水から出現したり雲の峰

蟻の道雲の峯よりつゞきけん

投出した足の先なり雲の峰

川狩や地藏の膝の小脇差

川狩のうしろ明りやむら木立

玉川

萩もはや色なる浪や夕はらひ

麻の葉に借錢書て流しけり

右 五十五章

素鏡 文路 校

一茶發句集下

秋之部

秋立や隅の小隅の小松島

狗子有佛生

秋來ぬとしらぬ狗か佛かな

星さまのさゝやき給ふけしき哉

聟星にいて披露せん稻の花

娵星の御顔をかくす榎かな

子寶が蚯蚓のたるぞ梶の葉に

病中

うつくしや障子の穴の天の川

木曾山へ流れ込けり天の川

わらぢながら墓參りして

息才で御目にかゝるぞ艸の露

末の子や御墓參りの箒持

亡妻新盆

かたみ子や母が來るとて手をたゝく

玉棚や上坐して鳴きり〴〵す

魂送

おれが場もとくたのむぞよ佛達

精靈の立ふる舞の月夜哉

山里やあゝのかうのと日延盆

べつたりと人のなる木や宮角力

草花を腮でなぶるや勝角力

板行にして賣れける負角力

椽はなや二文花火も夜の躰

稻妻やうつかりひよんとした貌へ

神前

秋風や草も角力とる男山

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山

病後

かな釘のやうな手足を秋の風

さと女三十五日

秋風やむしり殘りの赤い花

秋風の吹けとは植ぬ小松哉

墨染の蝶がとぶなり秋の風

正見寺の上人十ばかりなる後住を殘して遷化ありし哀さに

秋風やちひさい聲のあなかしこ

五十過ては

露はらり〳〵大事のうき世哉

露置や茶腹で越るうつの山

しら露やいつもの處に火の見ゆる

露ちるや地獄の種をけふも蒔く

しら露に淨土參りのけいこ哉

火ともして生おもしろや草の露

男女私にちぎりて夜ひそかに逃行を教訓して

人間(とは)ば露と答へよ合點か

愛子を失ひて

露の世は露の世ながら去ながら

露ちるやむさい此世に用なしと

あり明や淺間の霧が膳を這ふ

寢がへりをするぞ脇よれきり〴〵す

彌陀堂の土になる氣かきり〴〵す
きり〴〵す聲が若いぞ〳〵よ

經堂

虫の屁を指して笑ひ佛かな
寒いぞよ軒の蜩唐がらし
其分にならぬ〳〵と蟷螂哉
古犬や蚯蚓の唄にかんじ貌
御祭に赤い出立のとんぼ哉

二百十日

世の中はよすぎにけらし草の露
御目出度存ゆけさの露

うどん花

甘い露ばせをさく迚降りしよな
朝顔や人の貌にはそつがある
朝貌の上からとるや經(金)山寺
女郎花あつけらこ(か)んと立りけり
鬼灯を膝の小猫にとられけり

萩寺

存の外俗な茶屋あり萩の花
耳に珠數かけて折なり草の花
入相の閑處なり草の花
きり〳〵しやんとしてさく桔梗哉
むだ花に氣色とられし瓢かな
江戸川や月待宵の芒船
名月や先はあなたも御安全
明月の御覧の通りくづ家哉

病中

名月やとばかり立居むづかしき
明月のさつさと急ぎ給ふかな

右六十二章　希杖　楚江　校

明月を取てくれろと泣子哉

姥捨山

けふといふけふ名月の御側哉

赤馬關

名月や蟹も平をなのり出

筑摩川舟留

名月やつい指先の名所山

やかましかりし老妻ことしなく

小言いふ相手もあらばけふの月

姨捨などゝは老足むつかしく

有合の山ですますやけふの月

月蝕

人貌は月より先へ缺にけり
むだ草も穂にほがさいて三日の月
深川や蠣殼山の秋の月

春耕孫祝

門の月ことに男松のいさみ聲
翌の夜の月を請合ふ爺哉
明く口へ月がさすなり隅田川
秋の原知たらなんぞうたふべき
秋日和とも思はない凡夫哉
なぐさみのはつち〳〵や秋日和

母のなき子の遣ひならふに

をさな子や笑ふにつけて秋の暮

病後

ゐいやつと活た所が秋のくれ

中〳〵に人と生れて秋の暮

八月二十九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の舊友たれかれ、八月二十八日詣るとしるしてありけるに、今は三十年餘りの昔ならん、おのれ彼地にとゞまりて、一つの鍋のもの喰ひて笑ひののしりむつまじき人達なり。あはれきのふ参りたらんには面會してこしかた語りて心なぐさまんものを。互ひに四百餘里の道程へだゝりぬれば、ふたゝび此世には逢ひがたき齡にしあれば、しきりにしたはしくなつかしくなん。

近づきの樂書見へて秋の暮

茶店の万灯日ましにへりぬ

兩國の兩方ともに夜寒哉

六十にふたつふみ込夜寒哉

あばら骨なでじとすれど夜寒哉

若僧の扇面に

影法師に恥よ夜寒のむだ歩行

旅

一人と帳面につく夜寒かな

草藪も君が代を吹小夜きぬた

豊秋

二軒家や二軒餅つく秋の雨

外が濱

けふからは日本の鴈ぞらくに寢よ

旅にありて

鴈啼やあはれ今年も片月見

白川や出り直して天津鴈

田の鴈や里の人數はけふも減る

おちつくと直に鳴けり小田の鴈

天津鴈おれが松にはおりぬ也

朝夕や峯の小雀の門馴る

立鴫の今にはじめぬ夕かな

普陀らくや蛇も御法の窩に入

蛇も入穴はもつぞよ鈍太郎

足枕手枕鹿のむつましや

しき鴫や深山の鹿も色好む

やさしさや鹿も戀路に迷ふ山

人ありと見せる草履や田番小屋

米穀下直にて下々なんぎなるべしとはこと國の人うらやましからん

日本の外が濱まで落穂哉

旅人の垣根にはさむおち穂哉

姨捨はあれにゆとかゝしかな

人はいざ直な案山子もなかりけり

穂芒や細き心のさわがしき

奚に正風院此奥に百花あり

門に立菊や下戸なら通さじと

大菊や今度長崎よりなどゝ

勝た菊大名小路通りけり

まけ菊をひとり見直す夕哉

后の月

月の貌としは十三そこらかな

名所紅葉

缺椀も同じ流れや立田川

棹鹿の水涕拭ふ紅葉かな

大寺の片戸さしけり夕紅葉

毒草

人をとる茸(きのこ)はたして美しき

茸狩のから手でもどる騒かな

戸隠山

初梨の天から降た社だん哉

柿の木であいと答へる小僧哉

小布施

拾はれぬ栗の見事よ大きさよ

虱を捻りつぶさんとのいたはしく又門に捨て断食さするも見るに忍ばざる折から御佛の鬼の母にあてがひ給ふものをふと思ひ出して

我味の柘榴へ這す虱かな

老の身は今から寒さも苦になりて

山畠や蕎麦の白さもぞつとする

秋の夜や障子の穴の笛をふく

庵の夜や寝あまる罪は何貫目

末枯や諸勧化入れぬ小制札

九月盡

けふまではまめで鳴たよきりぎりす

右

六十四章　雲士 掬斗 校

冬之部

やあしばらく蝉だまれ初しぐれ

ぼた餅の來べき空なり初時雨

初時雨夕飯買に出たりけり

目ざす敵は雞頭よはつしぐれ

旅

しぐるゝや家にしあらば初しぐれ

桑名

蛤のつひのけぶりや夕しぐれ

途中にて素玩に逢ふ

しぐれ込め角から二軒目の庵

夜しぐれやから呼されしあんま坊

人の爲しぐれておはす佛かな

悼

鳴鳥こんなしぐれのあらんとて

盗人おのが古郷に隠れて縛られしに

業の鳥罠を巡るやむら時雨

茶畠を通してくれる十夜哉

もろもろの愚者も月夜の十夜哉

蔦ひよろゝひゝよろ神の御立げな

桃青霊社

御寶前にかけ奉る初しぐれ

はせを忌やとしもまめで旅虱

義仲寺へ急ぎ候初しぐれ

はせを忌や晝から錠の明く庵

はせを忌に丸い天窓の披露哉

御取越飴で餅くふはなし哉

春日山

さをしかやえひしてなめる今朝の霜

霞まで生やうものか霜の鐘

橘上乞食

母親を霜よけにして寝た子哉

追分

霜がれや鍋のすみかく小傾城

霜枯や新吉原も小藪並

一人旅

次の間の灯で膳につく寒哉

としかさをうらやまれたる寒哉

上野の麓に蝸牛のから家かりて、露の間の夢のむすび所とす。きのふあたり住倦たる人のなせるわざにや、垣の穽のそれなりに枯て、其實はほろ〳〵落たり。いく人の泪をかけし果とも思れて、秋にたち増りて哀なり。又門口に二尺ばかりなる(「哀なり」以下十四字の脫文、別本によりて補ひたり)土をならして菜のやうなるもの蒔置けるが、雪の片隅にほや〳〵と青みぬ。是必愛度春を迎へて餅いはふべき旦の料ならんか。壁は七福卽生の守り張重て、盗人の窺を防ぎ、窻は大根注連といふものを引はへて、回祿を逃んとす。荒神松はいまだ野の色ながら横さまにこけたり。皆たゞ行末いつ迄か住果んあらましぞと見ゆるも、今は雲にや迹をくらましけん、山にや影をかくしけん、すべていづこかついの栖ならん。かくいふ我もしばしが程に又人にかくいはれんことをおもふのみ。

身に添や前の主の寒迄

文化六年十二月十五日

賀舊家大川氏

木枯や千代に八千代の門榎

木がらしや雀も口につかはるゝ

水仙や大仕合のきり〳〵す

水仙や垣に結こむ筑波山

嵯峨村と名乗り貌なり枇杷の花

おち葉して日向に酔し小僧かな

落葉して三月ごろの垣根哉

花鈿委地無人收

思ひ草思はぬ草も枯にけり

枯芒昔婆ゝ鬼あつたとさ

女郎花なんの因果で枯かねる

大根引大根で道を教へけり

雉子なども粗鳴にけり大根引

鳴雀其大根も今引ぞ

爐開やあつらへ通り夜の雨

朝晴にはち〳〵炭のきげん哉

分てやる隣もあれなおこり炭

炭の火に峯の松風通ひけり

炭の火に月落烏鳴にけり

榾の火にうしろむけけり最明寺

榾の火や日出度御代の顔と顔

旅

斯う寐るも我火燵ではなかりけり

嵯峨山

はや〳〵と誰冬ごもる細けぶり

歸庵

留主札もそれなりにして冬籠

小人閑居成不善

冬籠惡もの喰のつのりけり

さし捨し柳の陰を冬籠

眠り様鷺に習ん冬ごもり

西の木と閉てたのむや冬籠

はせを塚先拜むなりはつ紙子

加茂の水吉野紙子とほたへけり

大坂八軒家

舟が着てねとはぐふとん哉

祐成がふとん引はぐ笑ひ哉

今少雁を聞迎ふとんかな

漏どのがおそろしといふ衾哉

三日月と肩をならべて網代守

網代守爰にとゑへん〳〵哉

網代守天窓で桿をとりにけり

さきのとしの大なひに鳥海山はくづれて海を埋め、甘満寺はゆりこみ沼とかはりぬ。さすがの名どころもまとにうらむがごとくなりけり。

象がたの缺（カケ）を掘で鳴千鳥

御地藏と日向ぼこして鳴千鳥

おちつきにちつと寐て見る小鴨哉

汝等も福は待かよ浮寐鳥

みそさゞいちゝといふても日が暮る

皺をかくして母の夜伽かな

門口に來て氷るなり三井の鐘

一さんにとんで火に入あられ哉

盛任がしやつ面たゝくあられ哉

初雪や俵の上の小行燈

はつ雪や今行里の見へて降

初雪やときつかはるゝ立佛

初雪や鳥も構はぬ女郎花

石の上の住居のこゝろせはしさよ

雪ちるやきのふは見へぬ借家札

くる人が道つけるなり門の雪

ちとたらぬ僕や隣の雪もはく

むまさうな雪がふうはり〳〵と

ぽちや〳〵と雪にくるまる在所哉

犬どもがよけてくれけり雪の道

雪ちるぞ脇から見たら榮耀駕

十二月二十四日古郷に入

是がまあ終の栖か雪五尺

一茶病中のていたらく

柾なりに吹込雪や枕もと

棧や凡人わざに雪舟を引

聖は又どこの月夜の里神樂

行人を皿でまねくや藥喰

鰒汁やもやひ世帶の惣鼾

出始を祝ふてたゝく瓢かな

一夜さは出來心なり寒念佛

寒念佛さては貴殿でありしよな

叱らるゝ人うらやましとしの暮

梟よのほゝん所か年の暮

ともかくもあなた任せのとしのくれ

節季候や七尺去て小せきゆ

夕月や御煤の過し善光寺

念々相續

みだ佛のみやげに年を拾ふ哉

節分

福豆やふく梅干や齒にあはぬ

かくれ家や齒のない聲で福は内

餅花の木陰にてうちあはゝ哉

神の灯や餅を定木に餅をきる

我門へ來さうにしたり配り餅

わんといへさあいへ犬もとし忘れ

長崎

君が代やから人も來て年籠

雜

おのづから頭が下るなり神路山

掃溜へ鶴の下りけり和歌の浦

月花や四十九年のむだ歩行

鶴の子の千代も一日なくなりぬ

牧人七十賀

佛ともならでうか／＼老の松

きゝ給へ竹の雀もちよ／＼と

琵琶湖

龜どのゝいくつのとしぞ富士の山

天下泰平

松蔭に寢て喰ふ六十餘州哉

右　百六章　文虎 春甫 校

（右百六章は冬之部のみの句數にして雜の八句は加はらず）

朝茶つみ夕茶つみつゝつむとしのつむりの雪ぞ野らにまがへる

世の中はかくてもへけれぬるてふの夢見てばかり身をすぐす哉

かつしかの栖立退く日、さし木のめ吹たるに

古菴にのち住人よ花さかば心さし木の櫻とをしれ

いさましの老木さくらや翌が日に倒るゝ迄も花は咲ぬる

うつ波に千度しづみてうき草のうき世並とて花や咲らん

夕立のまだ晴やらぬ木の間より雫ながらに出る月かな

功成身退といふ事を

里／＼を涼しくなして夕立の光りしりぞく山の外かな

七夕の人見給はゞむさしのゝ草葉のむしとおぼしめすらん

念彼觀音力

稻の穂よ南無稻の穂よ〳〵かゝるみのりの秋はあらじな

行雲の迹からはける青空へうそを月夜のむらしぐれかな

木曾おろし雲吹盡す青空のはづれにけぶる淺間山かな

こちあなち風のまに〳〵吹けばとぶ塵の身にさへせはしなの世や

いくばくのなげきこりつむ小車の下り坂なる我齡かな

みちのくへたつとて

ながらへて歸らん事もしら川の關を越行老の身なれば

追風にうしろ任せてあみだ笠おのづと西へ吹れ行くなり

月を覆ふ雲花を散す風、善惡表裏はめぐれる車の輪の如しと、いにしへの人のことばこそむべなれ。我師は能これを曉し生涯を自然に任せられしに、いぬる文政丁亥の冬身まかられてのち、敎へを請し人〳〵、遠き境までも最寄〳〵にいひ傳へ、はやくもかけあつまりて、殘れる人にものとふに、いひおける一言もなく、そのうへ何者のわざにや、日頃机のほとりにつみ重ねたる反故ものゝ本どもをさへ、空吹拂ふ風の塵ばかりもなく失はてゝ、いたづらに漉かへす紙のうちにやひさがれけん。哀れ尊き文もあらんに、見る人なくばねう比丘にこがねうちくれし論に同じ。手の物とられしこゝちして、おの〳〵むなしく家に歸り、訪れし時〳〵書捨おかれし筆の跡とり出し、或は行かふ市の星見世などに見當る行脚の時の日記やうなるもの、價もてこれを求などしつゝ、あしこ爰ひろひ集てこのふたつの卷となすは、ながきかたみと見るべきまで也。

文政十あまり二とせといふ年の冬俳諧寺の沙彌　某しるす

文政十二年丑七月

信州　俳諧寺

門従藏板

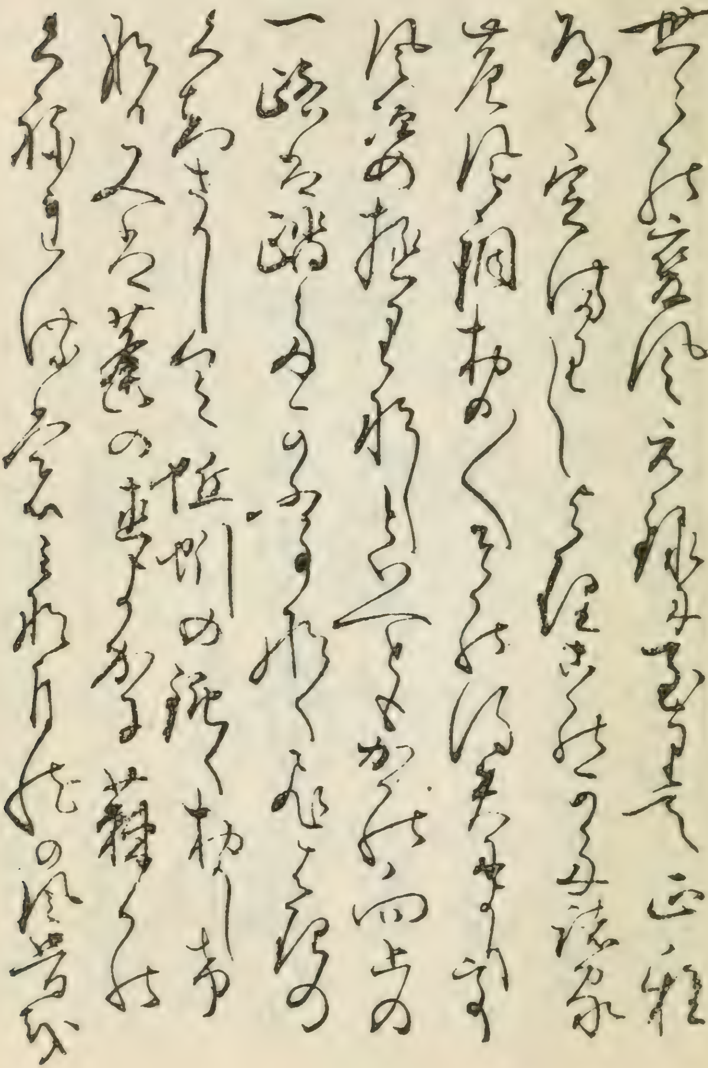


俳諧寺一茶翁著并圖

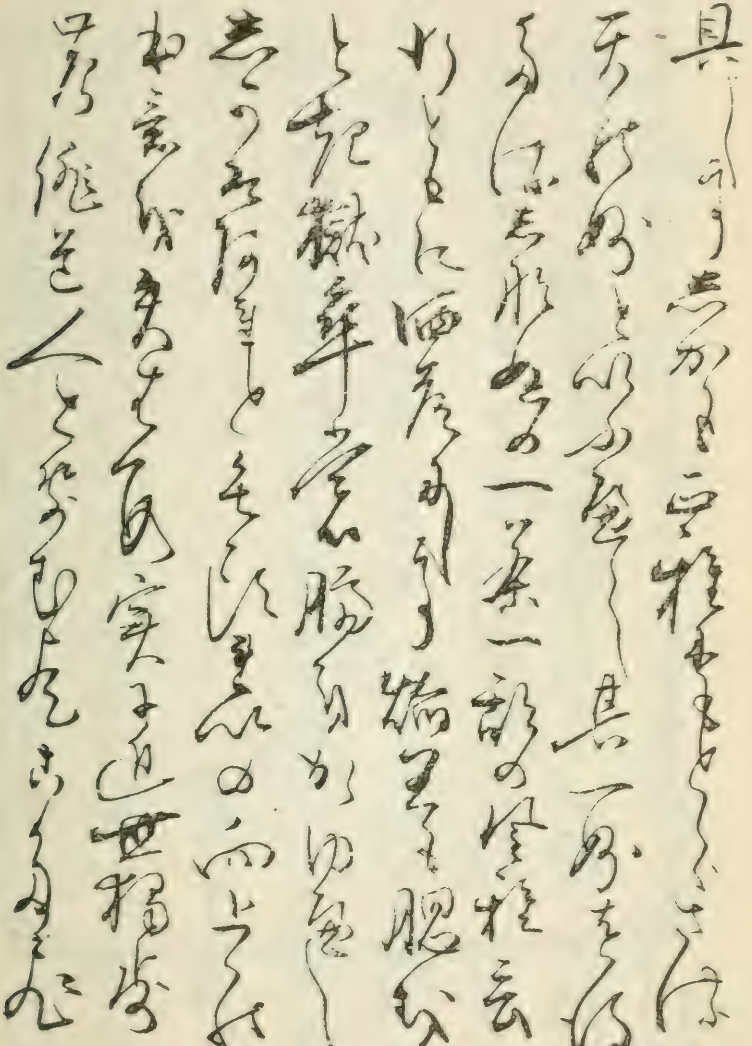
我春集

信陽　弓明菴藏梓

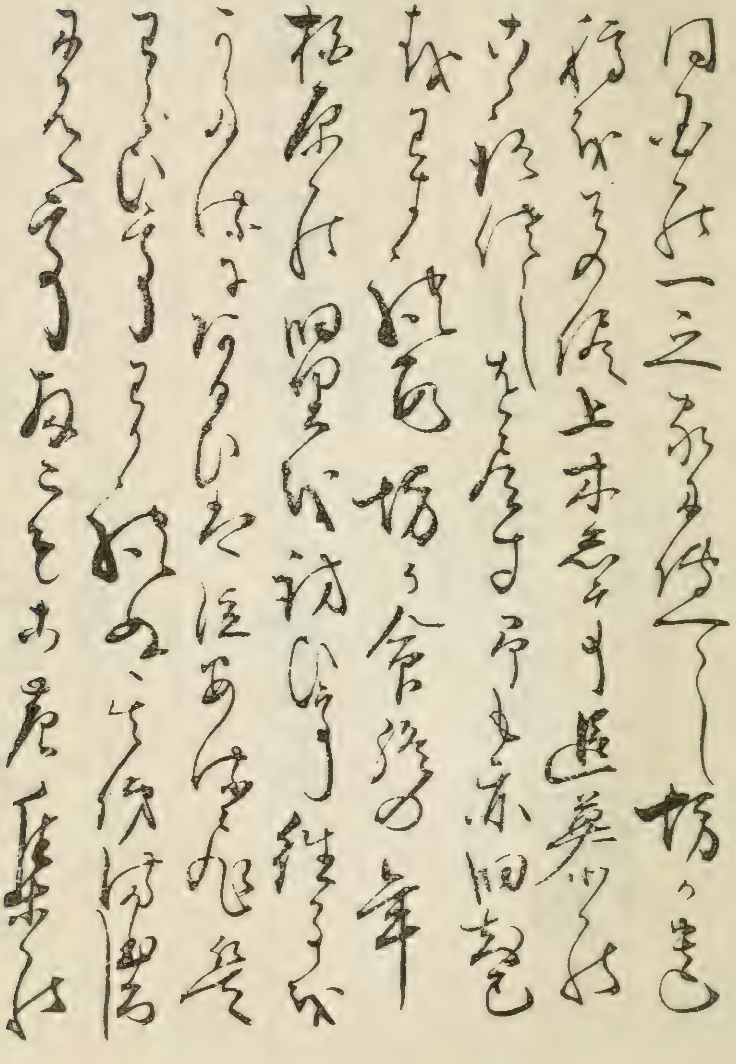
世〻の變風、元祿に至りて正雅やゝ定まりしよりこのかた、諸家の風調、おのおのその得失によりて、風姿極りなしといへども、かの向上の一路は踏たがふ事なく、ひばりのくちさかしく、蚯蚓の鈍くおかしげなる、



又は道の直(すぐ)よかに蕀のくねれるも、みな自然の風骨を具して、しかも正雅にもとらざるは天の妙といふべし。其一妙を得たるしなぬの一茶、一期の風雅言行ともに洒落にして閻王も腮をとき、獄卒も臍をかかゆべし。し

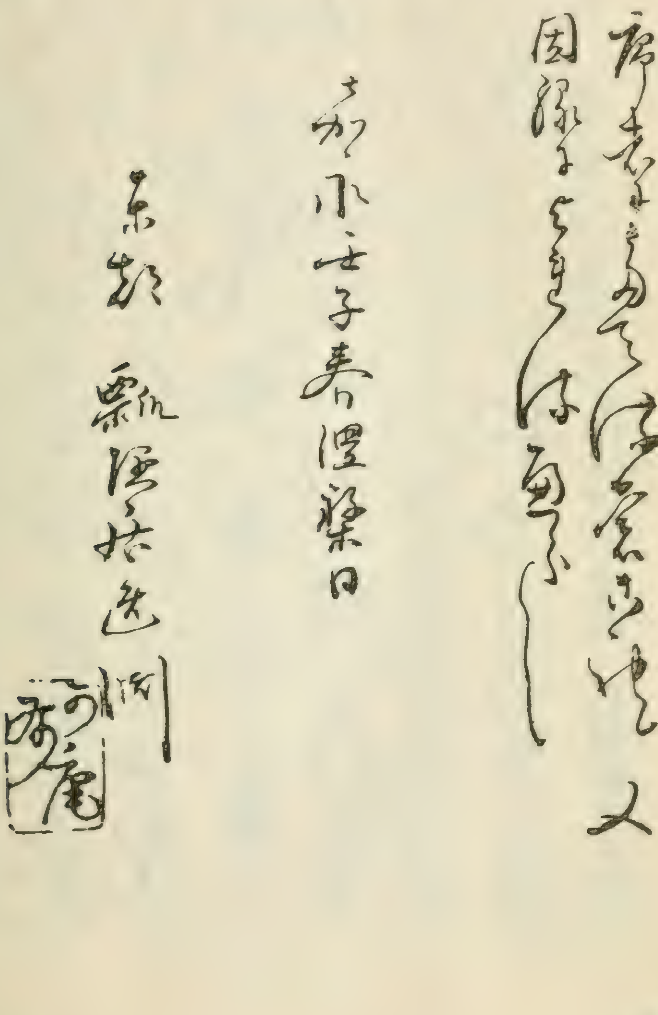


かはあれど毛頭れいの向上の本意を失はず、實に近世獨歩の俳道人とせむ歟。このたび同國の一之、家に傳へし坊が遺稿を、その儘上木して追慕のこゝろざしを盡す。予も亦舊知己をわすれず、坊が命終の年、柏原の舊里を



訪ひて往事をかたるに、あるひは泣、あるひはわらひてわかれぬ。其俤まぼろしに見へて、扨こそこの集の序者にたてるも、これ又因縁によれるべらし。

嘉永壬子
春涅槃日
東都
瓢隠居逸淵



昔たんごの國普甲寺といふ所に、深く淨土をねがふ上人ありけり。としの始は世間祝ひどしてざゞめけば、我もせん迚、大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の曉にしか〳〵せよと、きといひをしへて本堂へとまりにやりぬ。小法師は元日の旦、いまだ隅ミ〳〵は小闇キに、初烏の聲とおなじくがばと起て、敎へのごとく表門ンを丁〳〵と敲けば、内より、いづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧にゆと答ふるよりはやく、上人裸足にておどり出て、門の扉を左右へさつと開て、小法師を上坐に稱(請)じて、きのふの手紙をとりてうや〳〵しくいただきて讀ていはく、其世界は衆苦充滿にゆ間、はやく吾國に來たるべし、聖衆出むかひしてまち入ゆ。とよみ終りて、おゝ〳〵と泣れけるとかや。此上入みづから工み拵へたる悲しみに、みづからなげきつゝ、初春の淨衣を絞りて、したゝる泪を見て祝ふとは、物に狂ふさまながら、俗人に對して無常を演ルを禮とすると聞からに、佛門においてはいはひの骨張なるべけれ。それとはいさゝか替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも厄拂ひの口上めきて、そら〲しく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家は、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せにたんむかへける。

目出度さもちう位也おらが春　一茶

こぞの五月生れたる娘に、一人前の雜煮膳を居へて

這へ笑へ二つになるぞけさからは

文政二年正月一日

とし男つとむべき僕といふものもあらざれば

名代にわか水浴る烏かな　一茶

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月　、

山の月花盗人をてらし給ふ　、

善光寺堂前

灰猫のやうな柳もお花かな　、

さくら〳〵と唄はれし老木哉　、

櫻へと見えてじん／＼端折哉　、

（頭書）ツボサウゾクハウハギハ上衣ノツマヲハサミタル姿也。今云カイドリハシヲリノサマ也。玉カツラニツボヲリ姿ト云々。

初午

花の世を無官の狐鳴にけり　、

かくれ家や猫にもすへる二日灸　、

葎からあんな胡蝶の生れけり　、

上野遠望

白壁の誹れながらかすみけり　、

苗代は菴のかざりに青みけり　、

花の陰あかの他人はなかりけり　、

二月十五日

小うるさい花が咲迚寝釋迦かな　、

み佛や寢ておはしても花と錢　、

猫の子や秤にかゝりつゝじやれる　、

玉川

さらし布霞の足しに添へけり　、

妙專寺のあこ法師たか丸迚、ことし十一に成りけるが、三月七日の天うら／＼とかすめるにめでゝ、くはんりうといふ、ふとくたくましき荒法師を供して、荒井坂といふ所にまかりて、芹薺などつみて遊ぶ折から、飯綱おろしの雪解水、黒けぶり立て、動／＼と鳴りわたりておし來たりしに、いかゞしたりけん橋をふみはづしてだぶりと落たり。やあれ觀了たのむ／＼と呼はりて、爰に頭いづると見れば、かしこに手を出しつゝ、たちまち其聲も蚊のなくやうに遠ざかると見るを此世の名殘として、いたましいかな、逆卷く波にまき込まれて、かげも容も見へざりけり。あはやと村の人／＼打群りて、炬をかゝげてあちこち搜しけるに、一里ばかり川下の岩にはさまりてありけるをとり上て、さま／＼介抱しけるに、むなしき袂より蕗の薹三つ四ッこぼれ出たるを見る（見るにカ）つけても、いつものどくいそ／＼歸りて、家内へのみやげのれうにとりしものならんと思ひやられて、鬼をひしぐ山人も皆／＼袖をぞ絞りける。とみに駕にのせて、初夜過るころ寺にかき入れぬ。ちゝ母は今やおそしとかけ寄りて、一目見るよりよゝ／＼と人目も耻ず大聲に泣ころびぬ。日ごろ人に無常をすゝむる境界も、其身に成りては、さすが恩愛のきづなに心のむすび目ほどけ

ぬ(ぬるカ)はとはり也けり。旦には笑ひはやして門出したるを、夕には物いはぬ屍と成りてもどる。目もあてらぬ(られぬカ)ありさまにぞありける。しかるに九日野送なれば、おのれも棺の供につらなりぬ。

思ひきや下萠いそぐわか草を
野邊のけぶりになして見んとは　一茶

長〳〵の月日、雪の下にしのびたる蒲公のたぐひ、やをら春吹風の時を得て、雪間〳〵をうれしげに首さしのべて、此世の明り見るやいなや、ぼつりとつみ切らるゝ草の身になりなば、鷹丸法師の親のごとくかなしまさらめや。草木國土悉皆成佛とかや。かれらも佛生得たるものになん。

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙哉　一茶

梅の花夋を盗めとさす月か　、

松嶋の小隅は暮て鳴く雲雀　、

大猫の尻尾でなぶる小蝶哉　、

三月十七日ほしな詣

花ちるやとある木陰も小開帳　、

通りぬけせよと垣から柳かな　、

餅腹をこなしがてらのつぎ穂哉　、

正月元日の夜の丑刻より始りて、打つゞき八日〳〵に天に音樂あるといふ事、誰いふともなく云觸らして、いつ〳〵の夜、そんぜうそこにてしかときゝしと(いふ脱カ)人も有、又吹風の跡なし事とけなすものもあり、其噂東西南北にばつと弘りぬ。つら〳〵思ふに全く有りと信じがたく、又ひたすらなしとかたづけがたし。天地ふしぎのなせるわざにて、いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下りて舞したためしなきにしもあらず。今此天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優してたのしむならめ。それを聞得ざるは、其身の罪の程によるべし。何にまれ、あしからぬとりさたなりと、三月十九日夕過より誰かれ我菴につどひつゝ、おの〳〵息をこらして、今や〳〵と待うち、夜はしら〳〵明て、窓の梅の木に一聲有。

今の世も鳥はほけ經鳴にけり　一茶

鶯の馳走に掃しかきね哉　、

馬迄もはたご泊や春の雨　、

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る　、





かすむ日やしんかんとして大坐敷　、、
横乗の馬のつゞくや夕雲雀　、、

京嶋原

入口のあいそになびく柳かな　、
藪村やまぐれあたりも梅の花　一茶
正月や夜はよる迄うめの月　、
茶屋むらの一夜にわきし櫻かな　、
翌〳〵と待たるゝうちが櫻かな　白飛
なぐさみにわらを打也夏の月　一茶

卯月八日

長の日をかはく間もなし誕生佛　、
五月雨も中休みかよ今日は　、

病後

ちりの身とともにふは〳〵紙帳哉　、
五月雨も仕廻のはらり〳〵かな　、
小坐頭の天窓にかぶる扇かな　、
竹の子と品よく遊べ雀の子　、
入梅晴や二軒並んで煤拂ひ　、

谷藤橋

這わたる橋の下よりほとゝぎす　、
はつ瓜を引とらまへて寝た子哉　、

人形町

人形に茶をはこばせて門涼み　、
今迄は罰もあたらず晝寝蚊屋　、
蚊がちらりほらり是から老が世ぞ　、
世がよくばも一つ泊れ飯の蠅　、
卯の花に一人きりの社かな　、

幽栖

虫に迄尺とられけり此はしら　、

身一つすぐす迚、山家のやもめの哀さは

おの(が)里仕廻てどこへ田植笠　一茶
あつぱれの大わか竹ぞ見ぬうちに　、
花つむや扇をちよいとぼんのくぼ　、
としよりと見るや鳴蚊の耳のそば　、

戸隠山

居風呂へ流し込だる清水かな　、

此入りはどなたの菴ぞ苔清水　、

一つ蚊のだまつてしくり〳〵かな　、

其門に天窓用心ころもがえ　、

かくれ家の柱で麦を打れけり　、

越後女旅かけて商ひする哀さを

麦秋や子を負ながらいはし賣　、

笋よ人の子なくば花咲ん　、

芝でした休み所や夏木立　、

山苔も花さく世話はもちにけり　、

孑孑の天上したり三ヶの月　、

獨樂坊

寢所見る程は卯花明りかな　、

法の山や蛇もうき世を捨衣　、

としみちのくの方修行せんと、乞食袋首(にカ)かけて小風呂敷せなかに負たれば、影法師はさながら西行らしく見えて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖〔(頭書〕似雲法師　西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみ染の袖」と、思へば〳〵入梅晴のそらはづかしきに今更すがた替へるもむづかしく、卯花月十六日といふ日、久しく寐馴れたる菴をうしろになして二三里も歩みしころ、細杖をつく〴〵思ふに、おのれすでに六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく命、又ながらへて歸らんとも白川の關をはる〴〵越る身なれば、〔(頭書〕天哉子ノ迹ナガラ是モ歌ノヤウナレバ書ツケヌ　ながらへて歸らんとも白川の關をはる〴〵越る身なれば　一茶」十府の菅菰の十に一つもおぼつかなしと案じつゞくる程に、ほとんど心細くて、家〳〵の鷄の時を告ル聲も、とつてかへせよとよぶやうに聞へ、畠〳〵の麦に風のそよ吹くも、誰ぞまねくどく覺へて、行道もしきりにすゝまされば、とある木陰に休らひて痩脛さすりつゝ詠るに、柏原はあの山の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何となく名殘りおしさに、

思ふまじ見まじとすれど我家哉　一茶

おなじ心を

古郷に花もあらねどふむ足の
迹へ心を引くかすみかな　仝



あまひらをおどろかさじと青麥に
　ほどよき風の吹すぐるかな　仝

日〻懈怠ニメ不レ惜二寸陰一

（頭書）朱文公勸學文　勿レ謂今日不レ學而有レ來日。勿レ謂今年不レ學而有レ來年。日月逝ヌ矣。歳不二我延一。嗚呼老タリ矣。是誰ガ之愆アヤマチゾ。

けふの日も棒ふり虫よ翌も又　一茶

無限欲有限命

此風に不足いふ也夏坐敷　〃

起〳〵の欲目引張る青田哉　〃

心に思ふとを

古郷は蝿迄人をさしにけり　〃

直き世や小錢程でも蓮の花　〃

松陰や寢蓙一ッの夏坐敷　〃

題　童唄

三度播て蜻蛉とまるや夏座敷　希杖

片息に成て迯入る螢かな　一茶

夕貌の花で涕て（て衍カ）かむおばゝ哉　一茶

あつい迚つらで手習した子哉　〃

大螢ゆらり〳〵と通りける　〃

田中川原如意湯に晝浴みして

なを暑し今來た山を寢て見れば　〃

なむあみだ佛の方より鳴蚊哉　〃

とべよ蚤同じ事なら蓮の上　〃

かくれ家は蝿も小勢でくらしけり　〃

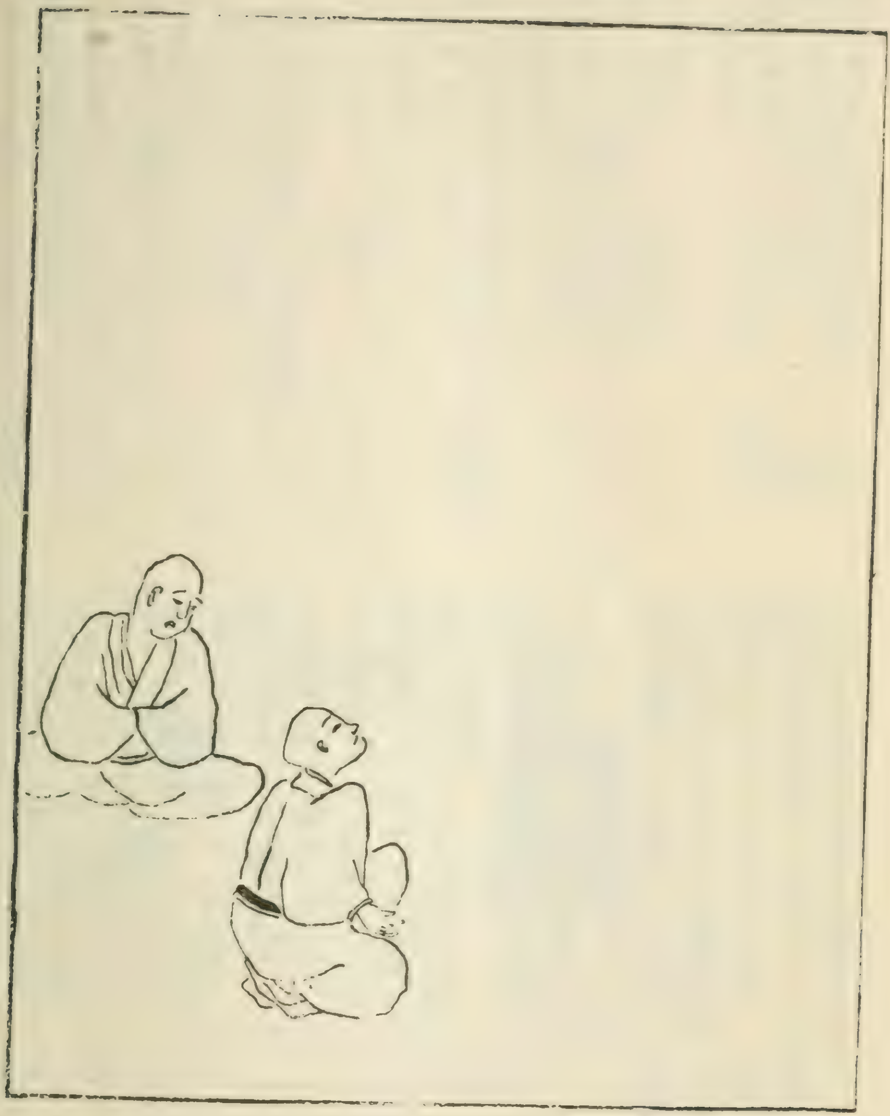
ひいき鵜は又もから身で浮みけり　〃

松の蟬どこ迄鳴て晝になる　〃

今迄は罰もあたらず晝寢蚊屋　〃
（此句重出也）

はなれ鵜が子のなく舟にもどりけり　〃

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲きたり迚、いひつぎきゝ傳へて界隈はさら也、よそ國の人も足を勞して、わざ〳〵見に來るもの日〳〵おほかりき。おのれもけふ通がけに立より侍りけるに、五間ばかりに花園をしつらひ、雨覆ひの葭など今様めかしてりゝしく、しろ



春がらお

紅ゐ紫、はなのさま透間もなく開き揃ひたり。其中に黒と黄なるはいひしに違はず、目をおどろかす程めづらしく妙なるが、心をしづめてふたゝび花のありさまを思ふに、ばさ〳〵として何となく見すぼらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りのたをやめの側に、むなしき屍を粧ひ立て並べおきたるやうにて、さら〳〵色つやなし。是主人のわざくれに、紙もて作りて葉がくれにくゝりつけて、人を化すにぞありける。されど腰かけ臺の價をむさぼるためにもあらで、たゞ日〳〵の群集に酒茶つひやしてたのしむ主の心、おもひやられてしきりにをかしくなん。

紙屑もぼたん貌ぞよ葉がくれに　一茶

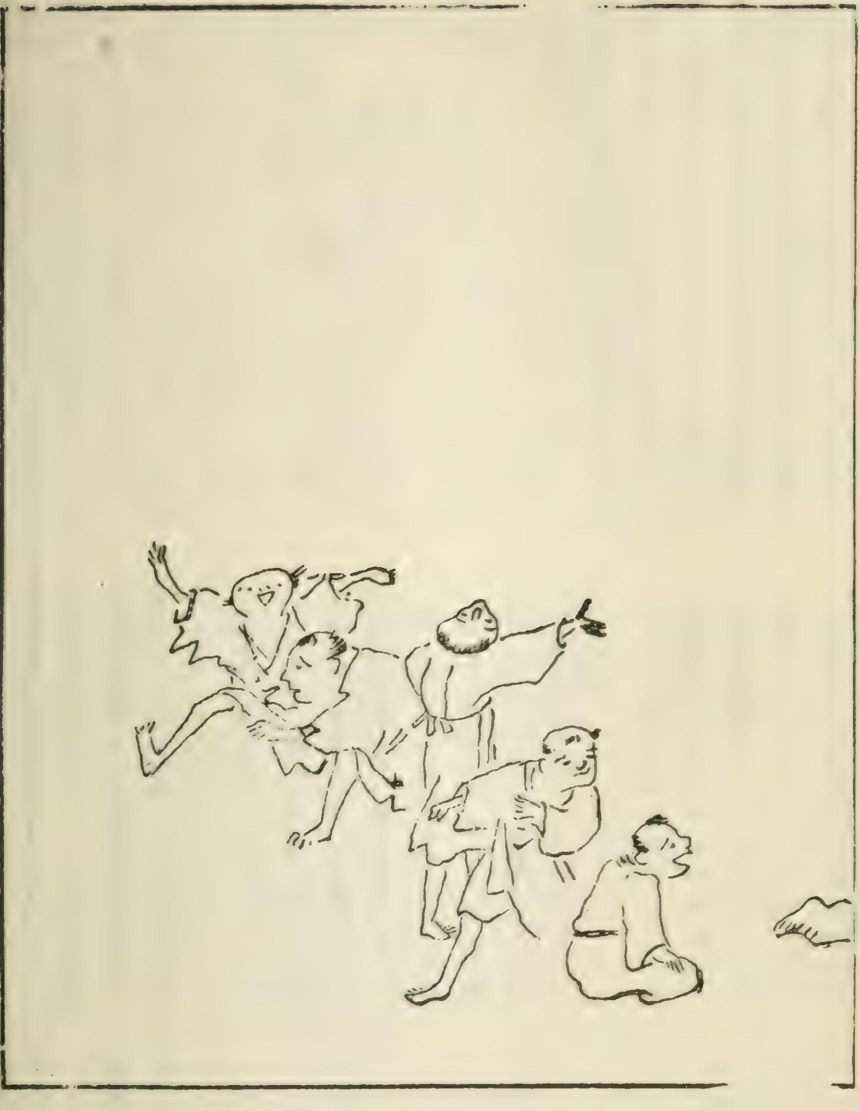
蛙の野送

爰らの子どもの戯に、蛙を生ながら土に埋めて諷ふていはく、ひきどのゝお死なつた、おんばくもつてとぶらひに〳〵〳〵、と口〳〵にはやして、芣苡の葉を彼うづめたる上に打かぶせて歸りぬ。しかるに本草綱目、車前艸の異名を蝦蟇衣といふ。此國の俗、がいろつ葉とよぶ。おのづからに和漢心をおなじくすといふべし。むかしはかばかりのされどさへいはれあるにや。

卯の花もほろり〳〵や蟇の塚　一茶

此もの諸越の仙人に飛行自在の術をしへ、我朝天王寺には大たゝかひに、ゆゝしき武名を殘しき。それは昔〳〵のことにして、今此治れる御代に隨ひ、ともに和らぎつゝ、夏の夕暮せどに莚を廣げて、福よ〳〵と呼べば、やがて隅の藪よりのさ〳〵這ひよりて人と同じく涼む。其つら魂ひ一句いひたげにぞありける。さる物から長嘯子の虫合に歌の判者にゑらまれしは、汝が生涯のほまれなるべし。

ゆうぜんとして山を見る蛙哉　一茶
鶯にまかり出たよ引蟾　其角
思ふをだまつて居るか蟾　曲翠
一。雫。天窓なでけり引がへる　一茶
（頭書）雷（イナヅマ）
そんじよそこ爰と青田のひいき哉　、
閭の蚊のぶんとばかりに焼れけり　、
鵜の眞似は鵜より上手な子ども哉　、
寢並んで遠夕立の評義哉　、
留主中も釣り放しなる紙帳かな　、



山番の爺が祈りし清水かな　、

蓮の葉に此世の露は曲りけり　、

狗に爰へ來よとや蝉の聲　、

五月廿八日

とらが雨など輕んじてぬれにけり　、

しなのゝ國墨坂といふ所に、中村何がしといふ醫師ありけり。其父のわざくれに、蛇のつるみたるを打殺したりけるが、其夜かくれ所の物づき／＼痛み出して、つひにくされて、ころりとおちて死けるとや。其子、親の業をつぎて三哲といふ。並〻／＼より勝れてふとくたくましき松茸のやうなるものもちたりけり。しかるに妻を迎へて、始て交りせんとする時、棒を立たるやうなるもの、たゞちにめそ／＼と小さく、灯心に等しくふは／＼として、今さらにふつと用立ぬものから、耻しくもどかしくいま／＼しく、婦人を替たらましかば又幸あらんと、百人ばかりもとり替へ引かえ妾をかゝえぬれど、みな／＼前の通りなれば、狂氣のごくたゞいらちにいらちて、今は獨身にてくらしけり。かゝる事うぢ拾遺物語、其外昔双紙などにばかりと思ひ捨侍りけるを、今目の前に見んとは、是かの蛇の執念に其家血筋たやすならんと、人／＼ひそかに噂（呟カ）きけり。されば生とし活るもの、蚕虱にいたる迄、命おしきは人に同じからん。ましてつるみたるを殺すは罪深きわざなるべし。

魚どもや桶ともしらで門涼み　一茶

とくかすめとく／＼かすめ放ち鳥

彼岸の蚊釋迦のまねして喰れけり　大江丸

水ふねにうきてひれふる生け鯉の
命まつ間もせはしなの世や　光俊卿

ふしつけしおどろが下に住むはへの
心おさなき身をいかにせん　俊頼卿

淺間山

晝貌やぽつぽと燃る石ころへ　一茶

俳諧宗雲水に送る

鬼茨も添て見よ／＼一涼み

古之爲ㇾ關也、將ニ以禦ㇾ暴。今之爲ㇾ關也、將ニ以


サヘ耻カシイ
ボウトウ
セノダナア

爲レ暴。〔(頭書)孟子。〕

關守りの灸点はやる梅の花　一茶

人聲に子を引かくす女鹿かな　、

はつ螢其手はくはぬとびぶりや　、

蓮の花少曲るもうき世哉　、

隈界(界隈カ)のなまけ所や木下闇　、

大沼

萍の花からのらんあの雲へ　、

越後

柿崎やしぶ〳〵鳴の閑古鳥　、

江戸住居

青草も錢だけそよぐ門涼　、

なでしこに二文が水を浴せけり　、

小金原

母馬が番して呑す清水哉　、

風あるをもつて尊ふとし雲の峰　、

疫病神蚤も負せて流しけり　、

茂林寺

蝶〳〵のふはりとんだ茶釜哉　、

櫻迄惡く云はする藪蚊哉　、

蟻の道雲の峰よりつゞきけん　、

高井郡六川郷六かはの里、山の神の森にて栗三つ拾ひ來りて、庭の小隅に埋め置たりしに、つや〳〵と芽を出して嬉しげなりけるを、東隣にて家に家を造り足しぬるからに、月日の惠みとゞかず、雨露の潤ひうとければ、其としやをら一尺ばかり伸びけり。しかるを此國のならひ、冬に成れば、東より西より、南より北より　家の大雪をひたおとしに落し込むからに、恰も越のしら山、一夜に兀と涌出たるにひとしく、其山に薪水をはこぶ道を作るに、愛宕山の石壇登るがごとし。漸二三月ごろおしなべて長閑なるに、隣〳〵の脊戸島は草木青みわたりて花もまれ〳〵咲けるに、彼山はいまだ眞白妙に風冴へて嚴寒を欺くけしきにて、やゝ卯月八日、髮さけ虫の歌を厠に張るころ、山鶯の折しり貌に鳴けば、雪の消へ口より見るに哀なるかな、栗の木末は根際よりぽきりと折て仕廻ぬ。人ならば直に無常のけぶりと立昇るべきを古根よりそろ〳〵青葉吹て、かろうじて一尺ばかり伸けるを、又前のごとく家の雪を落し込れてぽきりと

折れ、年〳〵折れ〳〵て、とし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入るちからなく、されど此世の緣盡ざれば枯も果ずして、生涯一尺程にて生て居るといふばかりなるべし。我又さの通り、梅の魁に生れながら、茨の遲生へに地をせばめられつゝ、鬼ばゝ山の山おろしに吹折れ〳〵て、晴れ〳〵しき世界に芽を出す日は一日もなく、とし五十七年、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ也。しかるに、おのれが不運を科なき草木に及すとの不便也けり。

なでしこやまゝはゝ木々の日陰花　一茶

さるべき因緣ならんと思へば、くるしみも平生とは成りぬ。

朝夕に覆かぶさりし目の上の
辛夷も花の盛り也けり　一茶

其引

子ばかりの蒲團に蘆の穗綿哉　山崎 宗鑑
竹の雪はらふは風のまゝ子哉　正勝
うつくしきまゝ子の貌の蠅打ん　紅雪
なげゝ迚蚊さへ寢させぬまゝ子哉　未達

貞享四丁卯歌仙
葛の繩目をゆるされし文
まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて　芭蕉

色圖拾遺
下部ひそかに首埋めける　未達
繼母の又口ばしる夜の雨　芭蕉

おく五歌仙
山木かくれて草に血をぬる　風流
わづかなる世をまゝ母に僞られ

小さき土鍋のありけるを我腹の子にとらせて、とらせざりければ、鶯の鳴をきゝてよめるとなん。

鶯よなどさはなきそちやほしき
小鍋やほしき母や戀しき　貫之娘

親のない子はどこでも知れる、爪を咥へて門に立。と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に蹲りて長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり。

我と來て遊べや親のない雀　六才 彌太郎

昔大和國立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日程ほしてより、飯を一椀見せびらかしていふやう、是をあの石地藏のたべたらんには、汝にもとらせんとあるに、まま子はひだるさたへがたく、石佛の袖にすがりてしか〳〵ねがひけるに、ふしぎやな石佛、大口明てむし〳〵喰ひ給

ふにさすがのまゝ母の角もぽつきり折て、それより我うめる子とへだてなくはごくみけるとなん。其地蔵ぼさち今にありて、折〳〵の供物たへざりけり。

ぼた餅や藪の佛も春の風　　一茶

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世に生れたる娘、おろかにして、ものにさとかれ迚名をさとゝよぶ。とし誕生日祝ふころほひより、てうち〳〵あはゝ天窓てん〳〵、かぶり〳〵ふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしや〳〵しやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それもたゞちに倦て、障子のうす紙をめり〳〵むしるに、よくした〳〵とほむれば誠と思ひ、きやら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうになか〳〵心の皺を伸しぬ。又人の來りてわん〳〵はどこにといへば犬に指し、かあ〳〵はと問へば烏にゆびさすさま、口もとより爪先迄愛教（嬌カ）こぼれてあひらしく、いはゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺へ侍る。此おさな、佛の守りし給ひけん、迨夜の夕暮に持佛堂に蠟燭てらして鑰（リン）（マヽ）打ならせば、どこに居てもいそがはしく這よりて、さわらびのちいさき手を合せて、なんむ〳〵と唱ふ聲、しほらしく、ゆかしく、なつかしく殊勝也。それにつけてもおのれかしらにはいくらの霜をいたゞき、額にはしは〳〵波の寄せ來る齢にて、彌陀たのむすべもしらで、うか〳〵月日を費やすこそ、二つ子の手前もはづかしけれと思ふも、其坐を退けばはや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつゝ、剩、佛のいましめし酒を呑む。（是ヨリ見ルニツケツヽ迄小児ノサマ）折から門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲のすれば、たゞちに小椀投捨て片いざりにいざり出て、聲を上げ手眞似して、うれしげなるを見る（に）つけつゝ、いつしかかれをもふり分髪のたけになして、おどらせて見たらんには、廿五丼の管絃よりもはるかまさりて興あるわざならんと、我身につもる老を忘れて、うさをなんはらしける。かく日すがらをじかの角のつかの間も、手足をうごかさずといふ事なくて、遊びつかれる物から、朝は日のたける迄眠る。其うちばかり母は正月と思ひ、飯

焚そこら掃かたづけて、團扇ひら／＼汗をさまして、閨に泣聲のするを目の覺る相圖とさだめ、手かしこく抱き起してうらの畠に尿やりて、乳房あてがえば、すは／＼吸ひながら、むな板のあたりを打たゝきて、にこ／＼笑ひ顏を作るに、母は長／＼胎内のくるしびも、日／＼襁褓の穢らしきもほと／＼忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、なでさすりて一入よろこぶありさまなりけらし。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉　　一茶

より／＼思ひ寄せたる小兒をも、遊び連にもと爰に集ぬ。

柳からもゝんぐあゝあと出る子哉　　、
蓬萊になんむ／＼といふ子哉　　、
年間へば片手出す子や更衣　　、

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷　　、
名月を取てくれろとなく子哉　　、
子寶がきやら／＼笑ふ榾火哉　　、
あこが餅／＼とて並べけり　　、
妹が子の脊負ふた形りや配餅　　、
餅花の木陰にてうちあはゝ哉　　、
涼風の吹く木へ縛る我子哉　　、
わんぱくや縛られながらよぶ螢　　、

其引

あゝ立たひとり立たるとし哉　　貞德
子にあくと申人には花もなし　　芭蕉
袴着や子の草履とる親心　　子堂
花といへも一ついへやちいさい子　　羅香
春雨や格子より出す童の手　　東來
早乙女や子のなく方へ植て行　　葉捨
折とても花の木の間のせがれ哉　　其角

はしとり初たる日

鴟鳴や赤子の頬をすふ時に　　仝

男にきらはれて親のもとに住みけるに、おのが子の初節句見たくも、晝は人目茂げゝれば、

去られたる門を夜見る幟かな　　よみ女しらず

子を思ふ實情さもと聞へて哀也。猛（猛カ）きもののふの心を和らぐるとは、かゝる眞心をいふなるべし。いかなる鬼男なりとも風の便りにもきゝなば、いかでかふたゝび呼び

歸さゞらめや。

所有畜類是レ世々ノ親族ナリとなん、親をしたひ子を慈む情、何ぞへだてのあるべきや。

人の親の烏追けり雀の子　鬼貫
夏山や子にあらはれて鹿の鳴　五明
負て出て子にも鳴かする蛙哉　東陽
鹿の親笹吹く風にもどりけり　一茶
小夜しぐれなくは子のない鹿に哉　、
子をかくす藪の廻りや鳴雲雀　、

樂しみ極りて愁ひ起るは、うき世のならひなれど、いまだたのしびも半ばならざる　千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑り子を、寢耳に水のおし來るごとき、あら／＼しき痘の神に見込れつゝ、今水濃(膿)のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるに等しく、側に見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日經たれば痘はかせぐちにて、雪解の峡土のほろ／＼落るやうに、瘡蓋といふもの取れば、祝ひはやして、さん俵法師といふを作りて、笹湯浴せる眞似かたして、神は送り出したれど、益／＼よはりて、きのふよりけふは頼みすくなく、終に六月廿一日の蕣の花と共に此世をしぼみぬ。母は死貌にすがりて、よゝ／＼と泣もむべなるかな。この期に及んでは行水のふたゝび歸らず、散花の梢にもどらぬくひとなどゝあきらめ貌しても、思ひ切がたきは恩愛のきづな也けり。

露の世は露の世ながらさりながら　一茶

去四月十六日、みちのくにまからんと善光寺迄歩みけるを、さはる事ありて止みぬるも、かゝる不幸あらん迚、道祖神のとゞめ給ふならん。

其引

子におくれたるころ
似た貌もあらば出て見ん一踊　落梧

母におくれたる子の哀さに
おさな子やひとり飯くふ秋の暮　尚白

娘を葬りける夜
夜の鶴土に蒲團も着せられず　其角

孫娘におくれて、三月三日野外に遊ぶ
宿を出て雛忘れば桃の花　猿雖



娘身まかりけるに

十六夜や我身にしれと月の欠　杉風

猶子母に放れしころ

柄をなめて母尋るやぬり團扇　來山

愛子をうしなひて

春の夢氣の違はぬがうらめしい　仝

子をうしなひて

蜻蛉釣りけふはどこ迄行た事か　千代

やんどなき人〳〵の歌も、心に浮ぶまゝにふとしるし侍りぬ。

よみ人しらず

哀也夜半に捨子の泣聲は
母に添寢の夢や見つらん　爲家卿

捨て行く親したふ子の片いざり
世に立かねて音こそなかるれ　兼輔卿

人の親の心は闇にあらねども
子を思ふ道に迷ひぬる哉

頌日

未ダ擧レ歩ヲ時先ヅ已ニ到ル　未ダ動レ舌ヲ時先說キ了ル
直饒著々在ルモ機先ニ　更ニ須シ知ル有ルコトヲ向上ノ竅一

(頭書)著々ハ碁ノ言ベ、一手々々と云心也。

貰ふよりはやくうしなふ扇かな　一茶

俄川とんで見せけり鹿の親　、

大寺や扇でしれし小僧の名　、

曲者隠れてうかゞふ圖

あばれ蚊のついと古井に忍びけり　、

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな　、

太郎冠者まがひに通る扇かな　、

紫の里近きあたり、とある門に炭團程なる黒き巣鳥をとりて、籠伏せして有りけるに、其夜親鳥らしく夜すがら其家の上に鳴ける哀さに、

子を思ふ闇やかはゆい〳〵と
聲を烏の鳴あかすらん　一茶

盗人おのが古郷に隠れて縛れしに、

業の鳥罠を巡るやむら時雨　、

御成り場所に、鳥どもの餌蒔をしたふ不便さに、

人眠き鶴よどちらに箭があたる

箭の下に母の乳を呑む鹿子哉　立志

さすがのさつ男も弩切りしはかゝるおりになんありける。

おのれ住る郷はおく信濃、黒姫山のだら〳〵下りの小隅なれば、雪は夏きへて霜は秋降る物から、橘のからたちとなるのみならで、万木千草上ゝ国よりうつし植るに、とく〳〵変じざるはなかりけり。

九輪草四五りん草で仕廻けり　一茶

鎮西八郎為朝人礫うつ所に、

時鳥蝿虫めらもよつく聞け　、、

鹿の子や横にくはへし萩の花　、、

老翁岩に腰かけて軸をさづくる図に、

我汝を待こと久しほとゝぎす　、、

閑栖

我家に恰好鳥の鳴にけり　一茶

二三遍人をきよくつて行螢　、、

飛螢其手はくはぬくはぬとや　、、

成蹊子こぞの冬つひに不言人と成りしとなん、蕉笠のもとより此ごろ申おこせたりしを。（〔頭書〕史記李廣傳ヵ贊ニ桃李不言下自成蹊）

つの国の何を申も枯木立　、、

白笠を少さますや木下陰　、、

まかり出たるは此藪の蟇にてゆ　、、

雲を吐く口つきしたり引蟇　、、

赤い葉の栄耀にちるや夏木立　、、

稲妻や一切づゝに世が直る　一茶

石川はくはらり稲妻さらり哉　、、

夕霧や馬の覚えし橋の穴　、、

秋風に歩て逃る螢かな　、、

二番休

乳呑子の風よけに立かゝし哉　、、

逆にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮　、、

七月七日墓詣

一念仏申だけしく芒哉　、、

木啄のやめて聞かよ夕木魚　、、



木つゝきが目利して居る庵哉　、

經堂

虫の屁を指して笑ひ佛哉　、

得手ものゝ片足立や小田の鴈　、

山寺や椽の上なる鹿の聲　、

下手笛によつくきけとやしか(の)聲　、

茸狩のから手でもどる騒かな　、

さと女卅五日墓

秋風やむしりたがりし赤い花　、

さをしかの喰こぼしけり萩の花　、

我やうにどつさり寝たよ菊の花　、

のらくらが遊びかげんの夜寒哉　、

露の玉つまんで見たるわらは哉　、

立よらば大木の下迚、大家には貧しき者の腰をかゞめて、おはむきいふもとはりになん。爰の諏方(訪)宮に大きさ牛をかくす栗の古木ありて、うち見たる所は菓一つもあらさりけるに、其下をゆきゝする人、日〳〵とり得ざるはなかりけり。

十五夜は高井野梨本氏にありて、

古郷の留主居も一人月見哉　一茶

月蝕皆既　亥七刻右方ヨリ缺、子六刻甚ク丑ノ五刻左終

人數は月より先へ缺にけり　、

人の世は月もなやませ給ひけり　、

潜(借)上に月の缺るを目利かな　、

酒盡てしんの坐につく月見哉　、

おのが味噌のみそ嗅をしらず

蕎麥國のたんを切つゝ月見哉　、

九月十六日正風院菊會

鍬さげて神農貌や菊の花　、

菊園や歩きながらの小盃　、

杖先で書解する也きくの花　、

入道の大鉢巻できくの花　、

下戸庵が疵也こんな菊の花　、

さと女笑貌して夢に見えけるままを

頬べたにあてなどしたる眞瓜哉　一茶
どう追れても人里を渡り鳥　、
山雀の輪抜しながらわたりけり　、
鵙の聲かんにん袋きれたりな　、
蟷螂や五分の魂是見よと　、

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる故郷山　、
行灯を松に釣して小夜砧　、
行な鴈住ばどつちも秋の暮　、

若僧の扇面に

影法師に耻よ夜寒のむだ歩き　一茶
こんな村なんどの行か渡り鳥　白飛
藪陰やとし酒屋のとし酒　士英

老樂

子どもらを心でおがむ夜寒哉　一茶
蛗のとぶや唐箕のほこり先　、
小菊なら縄目の耻はなかるべし　、

戸迷ひせし折からに

小便所爰と馬よぶ夜寒哉　、

喧嘩すなあひみたがひの渡り鳥　、
さをしかやゑひしてなめるけさの霜　一茶
狼は糞ばかりでも寒かな　、
一つかみ塗樽拭ふ紅葉哉　、
むら千鳥そつと申せばばつと立　、
炭の火や朝の祝義の咳ばらひ　、
三介が敲く木魚もしぐれけり　、
木がらしやから呼されし按摩坊　、

善光寺門前憐乞食

重箱の錢四五文や夕時雨　、
大根引拍子にころり小僧かな　、
はつ雪の降り捨てある家尻哉　、
木がらしや折介歸る寒さ橋　、
菜畠を通してくれる十夜哉　一茶
雪ちるやおどけもいへぬしなの空　、
能なしは罪も又なし冬籠　、

強盗はやりければ

張番に菴とられけり夜の霜　、
彼是といふも當坐ぞ雪佛　、

お袋がお福手ちぎる指南哉　、、

餅搗が隣へ来たといふ子哉　、、

餅花

かまけるな柳の枝にもちがなる　、、

子のまねを親もする也節き候　、、

東に下らんとして中途迄出たるに

護持院原

椋鳥と人に呼るゝ寒かな　一茶

木がらしや廿四文の遊女小屋　、、

両國橋

寒垢離にせなかの龍の披露哉　、、

かも川をわたらじとちかひし人さへあるに、ひと度籠りし深山を下りて、しら髪つむりを吹れつゝ名利の地に交る。

はづかしやまかり出てとる江戸のとし　、、

其迹は子どもの聲や鬼やらひ　一茶

小人閑居ノ成ニ不善一

冬籠り悪く物喰を習けり　、、

廿一日節分

一聲に此世の鬼は逃るよな　、、

けふからは正月分ゾ麦の色　、、

札納

梅の木や御祓箱を負ながら　、、

廿七日晴

坊守り朝とく起て飯を焚ける折から、東隣の園右衛門といふ者の餅搗なれば、例之通り来たるべし。冷てはあしかりなん、ほか／＼湯けぶりの立うち賞翫せよといふからに、今や／＼と待にまちて、飯は氷りのごとく冷えて、餅はつひに来ずなりぬ。

我門へ来さうにしたり配餅　一茶

他力信心／＼と、一向に他力にちからを入て頼み込み候輩は、つひに他力繩に縛れて、自力地獄の炎(ホノホ)の中へぼたんとおち入候。其次に、かゝるきたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚になしくだされと、阿彌陀佛におし誂へに、誂ばなしにしておいて、はや五体は佛染み成りたるやうに悪るすましなるも、自力の張本人たるべく候。問ていはく、いか様に心得たらんには御流義に叶ひ侍りなん。答ていはく、

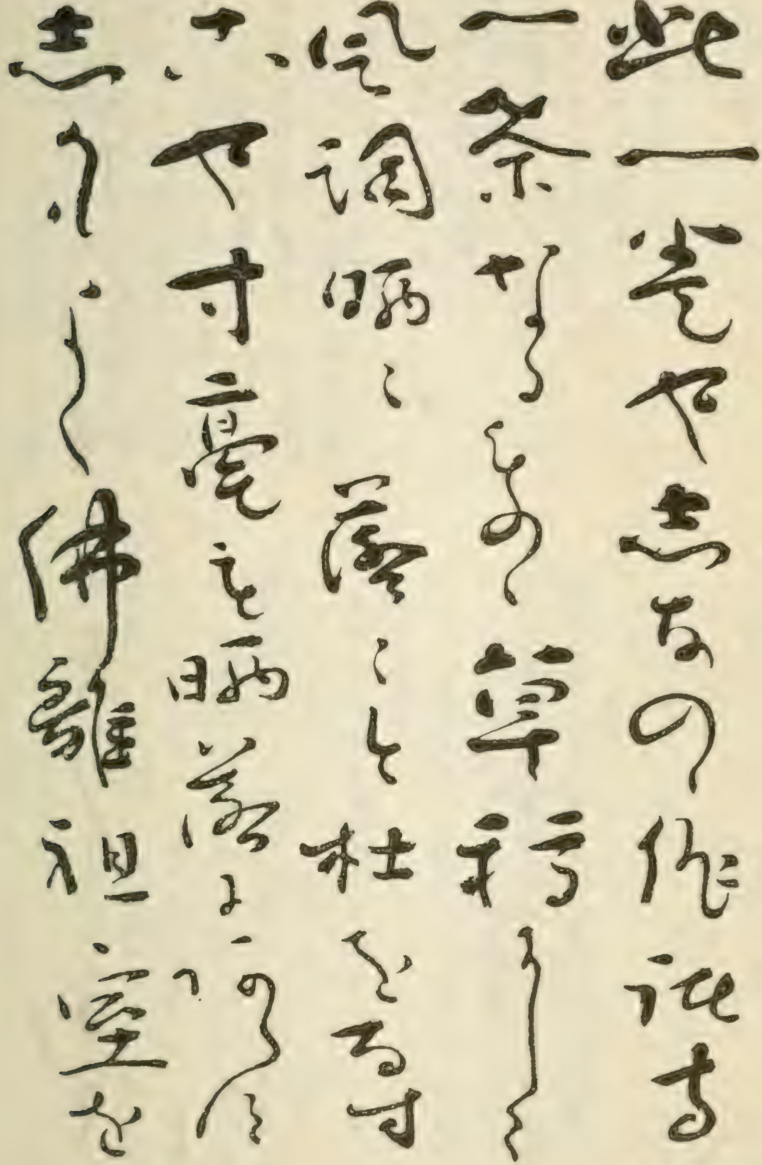
別に小むづかしき子細は不存候。たゞ自力他力、何のかのいふ芥(アクタ)もくたをさらりと、ちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、其身を如來の御前に投出して、地獄なりとも極樂なりとも、あなた樣の御はからひ次第あそばされくださりませと御頼み申ばかり也。如斯決定しての上には、なむ阿みだ佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に、手長蜘の行ひして人の目を霞め、世渡る鴈のかりそめにも、我田へ水を引く盗み心をゆめ〳〵持べからず。しかる時はあながち作り聲して念佛申に不及、ねがはずとも佛は守り給ふべし。是則當流の安心とは申也。穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしの暮　　五十七齢　一茶

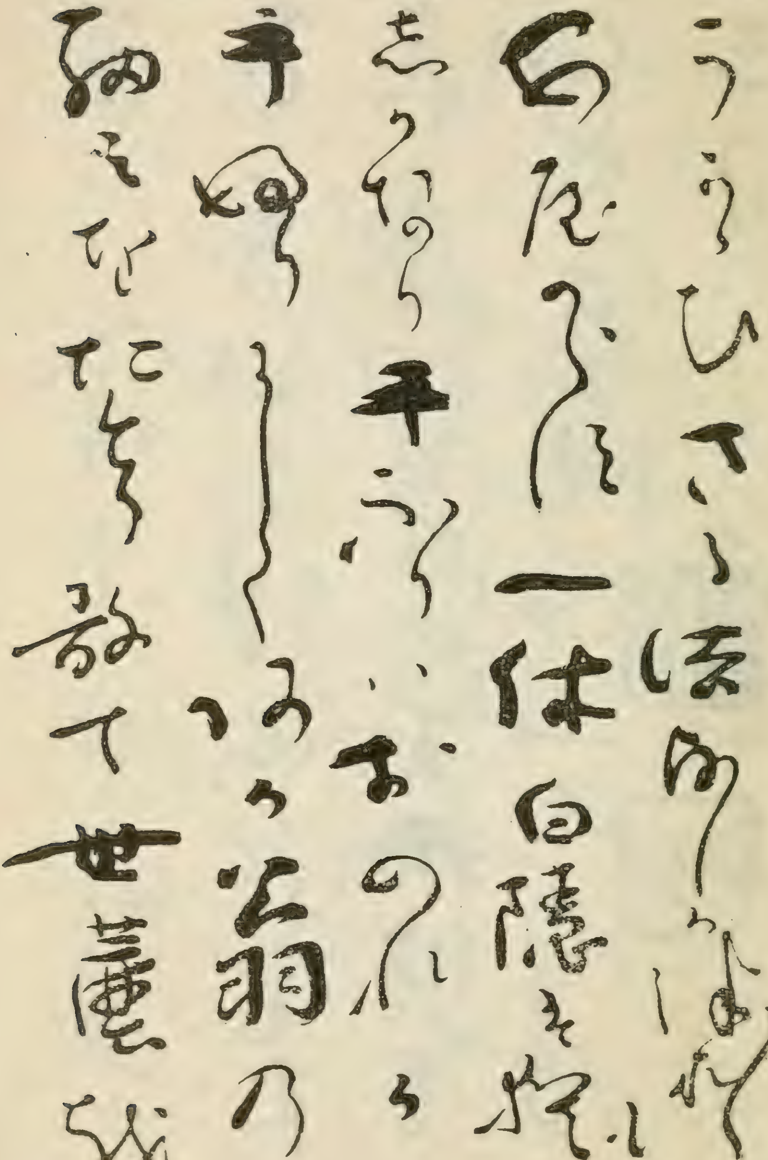
(頭書)親鸞上人　隔ヌル地獄極樂ヨクキケバ
只一念ノシハザ也ケリ

文政二年十二月二十九日

此一巻やしなのゝ俳諧寺一茶なるものゝ草稿にして、風調洒ゝ落ゝ今杜をなす。こや寸毫も洒落にあらず。しかもよく佛籬祖室をうかゞ



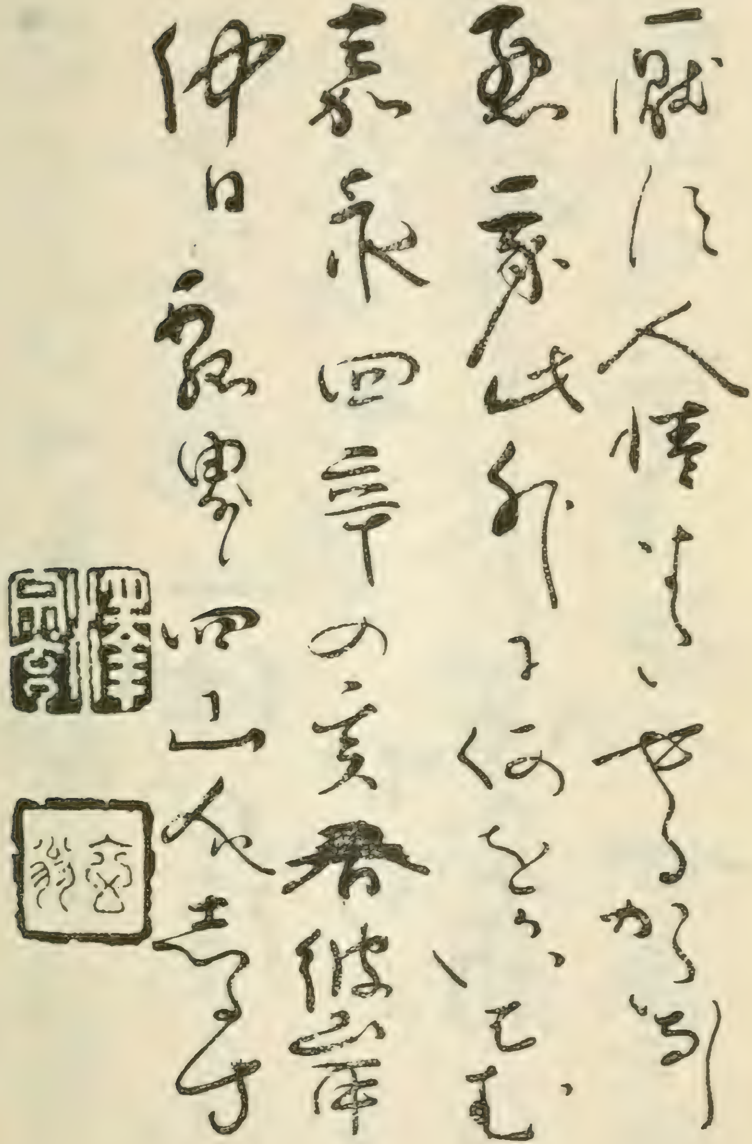
ひ、さる法師がつれづれもあやからず。一休白隠は猶しかなり。手ぶりはおのれが手ぶりにして、あが翁の細みをたどり、敢て世塵を



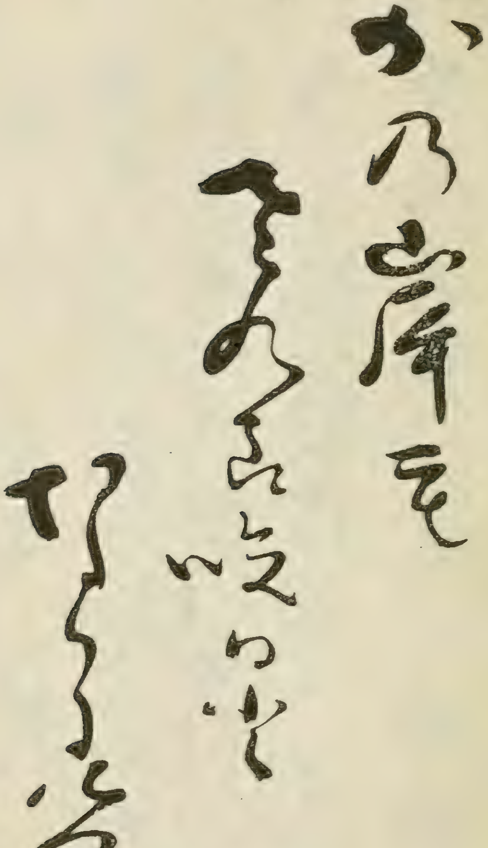
眠ず、人情またやるかたなし。惡我此外に何をかいはむ。

嘉永四辛の亥春彼岸仲日

瓢界四山人しるす



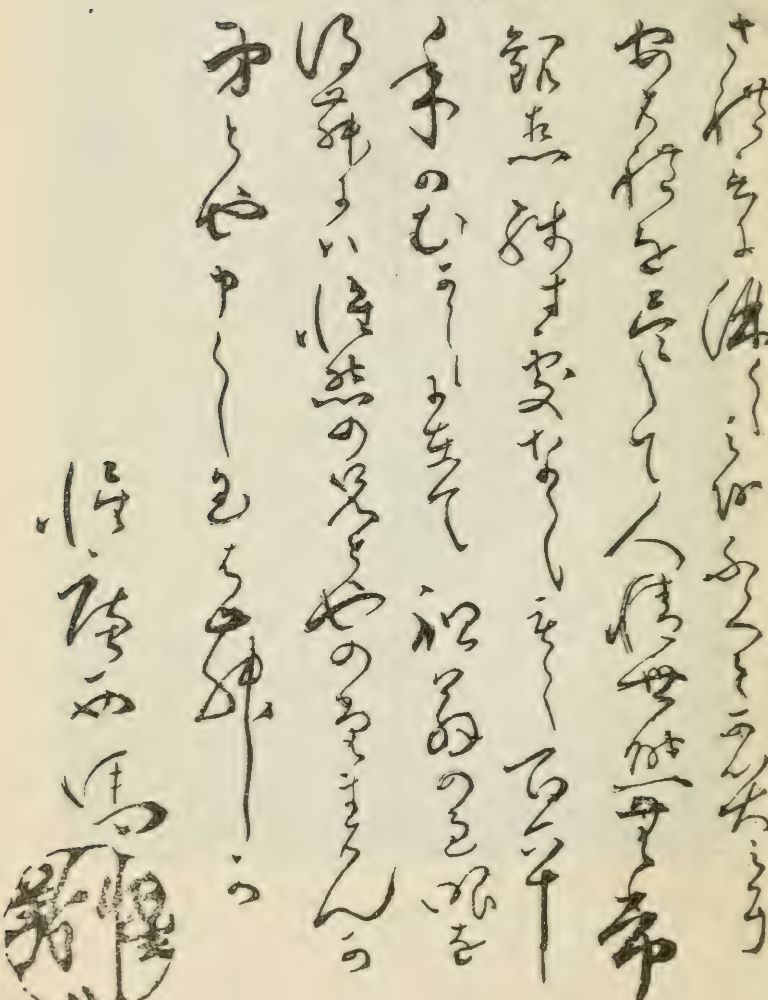
かの岸も
さくら咲
日となり
にけり



惟然坊は元祿の一畸人にして、一茶坊は今世の一奇人也。そが發句のをかしみは人〻の口碑に殘りて世のかたり草になるといへども、たゞに俳諧の皮肉にして、此坊が本旨にはあらざるべし。中野のさと一之が家に祕めおける一巻物や、ざれ言に

淋しみをふくみ、可笑みにあはれを盡して、人情世態無常觀想殘す處なし。もし百六十年のむかしに在て、祖翁の過眼を得むには、惟然の兄とやのたまはんか、弟とや申し玉はむか。

惺庵西馬





種菜觀向深

屠龍之技序

輕擧道人。誹諧十七字の詠を善くし。目に觸れ心に感ずる者。皆之を言に發す。其の發する所の者。皆獨笑獨泣獨喜獨悲の成す所なり。而も人の之を聞く者も亦我と同じく笑ふ耶泣く耶喜ぶ耶悲

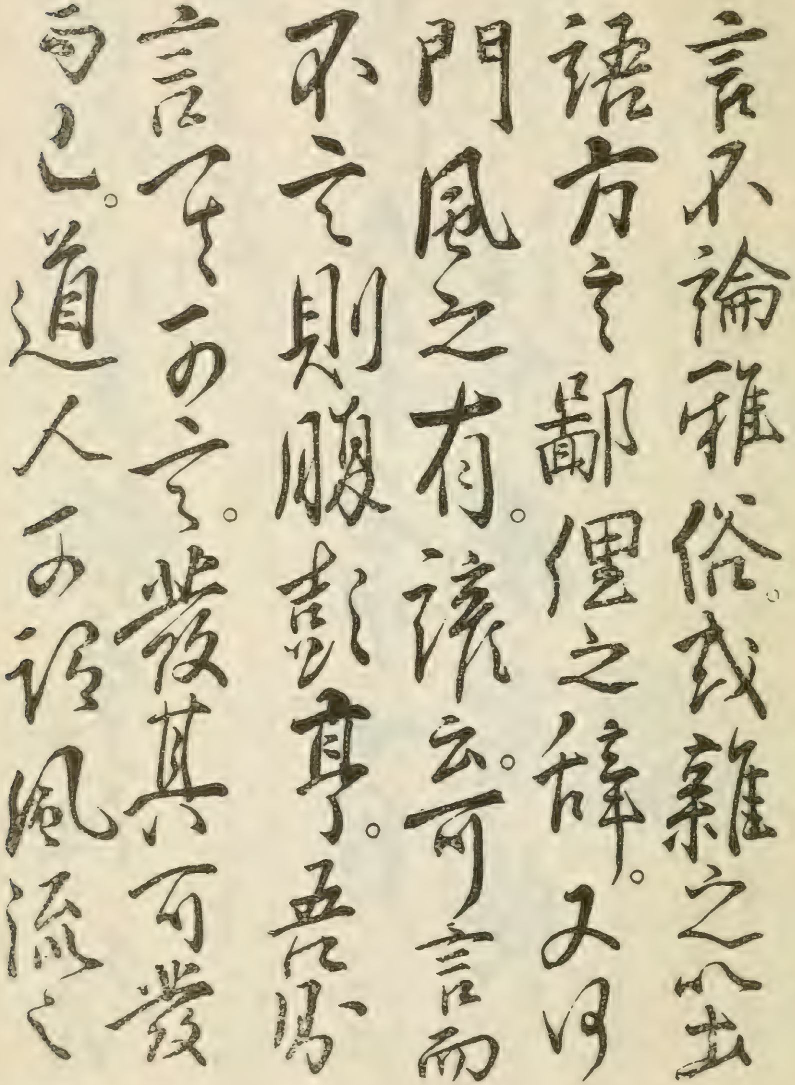
屠龍之技序

輕擧道人。善誹諧十七字之詠。觸於目感於心者。皆發之於言。其所發者。皆獨笑獨泣獨喜獨悲之所成也。而不知人之聞之者

しむ耶を知らず。唯其の言ふ所を言ひ。其の發する所を發する耳。道人嘗て自ら謂つて曰はく。誹諧體なる者は。唐詩に昉まる。而して和歌之に效ふ。今の十七詠は。蓋し其の餘流なり。故に其の言雅俗を論ぜず。或は之に雜

亦与我同笑耶泣耶喜耶悲耶。唯言其所言。發其所發耳。道人嘗自謂曰。誹諧體者。昉於唐詩。而和歌效之。今十七詠。蓋其餘流也。故不

ふるに土語方言鄙俚の辭を以てす。又何の門風かこれ有らん。諺に云ふ。言ふ可くして言はざれば則ち腹彭亨す。吾は則ち其の言ふ可きを言ひ。其の發す可きを發する而已と。道人は風流の巨魁にして其の髓を得たりと

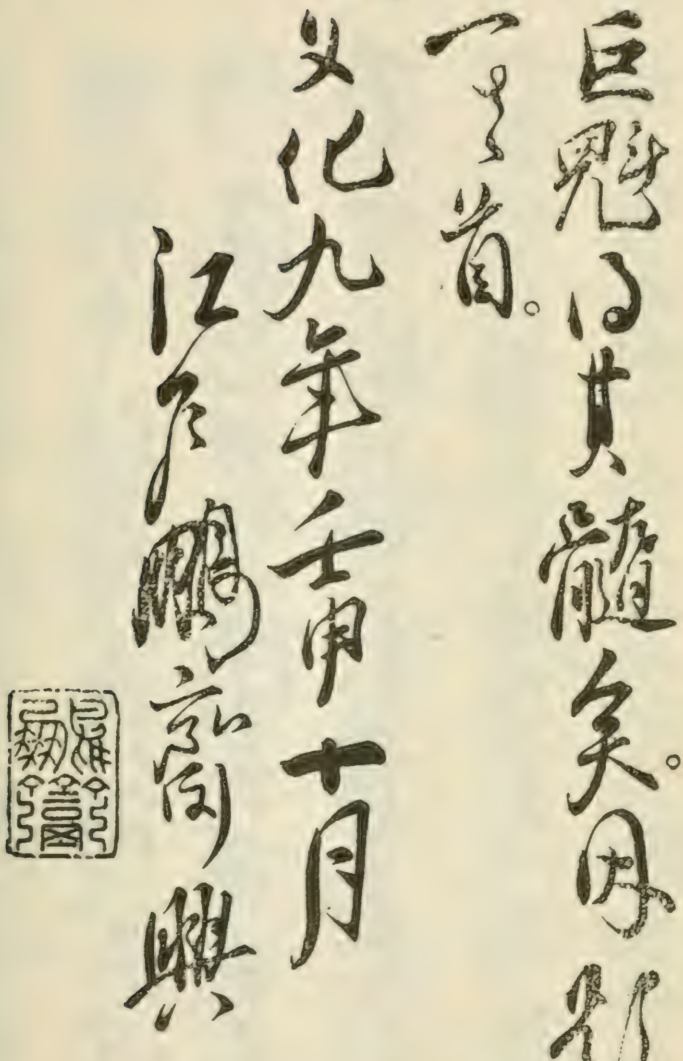


謂ふ可し。因つて共首に題す。

文化九年壬申十月

江戸鵬齋興

印



こがねのこま

うぐひすは鳴ともかたし腰瓦
から傘のほねのたくみも柳哉
筑(築ヵ)山の戸奈瀬にをつるやなぎ哉
うめが香や叟の亘燵も周防どの
かげろふや野馬の耳の動く度
ゆめに見し梅や障子の影ぼうし
芹喰ふて翼の輕き小鴨かな
雛よりもかしづく人のひゐなかな
花ひと木鞍置馬を蔽しけり

傾廓

夜ざくらや宮挑灯の鼻の穴
芋の實の四もたらでや暮遲し

讃戯畫

鶯の身をさかさまに初音どん
かわら燒く松のにほひや春の雨
花びらの山を動すさくらかな
牛ほどの蟻見付たり桃のゐだ
蝶〳〵や獅〻のねむりの上を飛
衆徒よ兒木葉天狗よ山ざくら
連翹の菩喰ふかかわら鶸
鳥追の昔し相樣やうめに鳥

三月盡

等木の袷尋る晦日かな

悼米翁老君

聰(さと)き人も耳なし山や呼子鳥
船頭も象と成けり夏まつり

舟行

ながれゆく椎木屋舗ほとゝぎす

無同剃髪しける時

よし野よく櫻ん坊の天窓かな
爐に寄ればよらるゝ夜也杜宇
守る人に枕かそふよ瓜ばたけ
居眠をりつぱにさする扇かな
一樹の蔭他生の緣ぞ心太
ほとゝぎすこれを喰ふか栗の花
飛ぶ蝶を喰んとしたる牡丹かな
わか竹の弓にうたるゝそだち哉
郭公たゞ有明のかゞみたて
晝中に入梅のしるしやほとゝぎす

達摩の讃

石菖や尻も腐らず石のうへ
脫かへて花見虱に別れけり
近付の森のあたりやほとゝぎす
匡衡が壁をのづから五月あめ
紫陽花や硝子(びいどろ)吹きが椽の先
闇暑し舟にもうごくあふぎ哉
としぐ〵や御祓に捨る多葉粉入
すゞしさは家隆の歌のしるし也

かぢのおと

星一ッ殘して落る花火かな
生餉や納屋が柱の茱萸俗

明星や沖から戻る雁の行
あゝ欠び唐士(土カ)迄も秋の暮

少年行

飛ぶ鷺や時雨來る夜の膝頭
こがらしや明は木の椌(うろ)園の竹
河豚喰た日はふぐゝうた心かな

青樓

此年も狐舞せて越へにけり
繪馬かきやくれゆくとしの走筆
遊べ春梅の鼻毛の延次第
余處になき箸紙賣りや梅の紋

遠望

散る花を汲とも見へつ菌(こえ)柄杓
車ほど舟押す人や汐干がた
ほとゝぎす手燭にくらき夜の空

空臺明月待君王

今上る客は化物ほとゝぎす
翌も又こゆる暑さや雲の峯

淺草の富士詣に

これよりして御馬がへしや羽織不二
すげ笠の紐ゆふぐれや夏祓

七里濱にて

浪に立人も馬鹿鳥磯の秋
かひ爺もとられし音の野分哉

後朝

湯豆腐のあわたゞしさよ今朝の霜

出山寺に晋子の發句碑たつるとて

草莖の今に殘るや人の口
告わたる木綿付鷄や年の關
をさがりの雫苦むや梅若し
張子屋も梅は咲たり豆達摩

花街

松は皆人に植たる二日かな
青柳やいなりの額の女文字

春眠

たらぬ夜に日を足す日有花の雨

米翁老君の三周に

高宗が三年ははやし桃李
松山の花のけむりや春の風

鐃ゝ錚ゝ金鐵皆鳴

はつ秋や嗽茶碗にかねの音

榎嶋辨才天法樂

名月に松明もたのまぬ岩窟かな
杳音にくれたのもしき紅葉かな

神田明神祭禮

梯實の迯行かたや猿のだし
上臈のひとり歩行や月の秋
今下す雁は小梅か柳しま
みの笠も草を通ぬ野分哉
雲の月見しやそれとも有馬筆

鶺鴒や芥は見へず水のうへ
野路や空月の中なるおみなへし
先ひと筆〳〵や雁のふみ

傾廓

燈籠も鵜の背と代りけり
素麺にわたせる箸や銀河
はつ秋や心に高し空の鳶

琴流君の一周に當給ふ

川風の行て歸らぬ綱火かな
蜀黍やさしも隱せし閨の中

秋聲

蚊の背にさゝらと言て初けり

紫式部の畫の賛に

明月や硯のうみも外ならず

乞巧奠

牽く牛のはなの穴ぞも星二つ

狸の腹鼓の畫に

うち落せ秋の夜雨のふる瓦
野分立つ空やからすの弱法師

臘八や隱者は山に入るも有り
うね火山耳なしやまや二た時雨
江戸畫圖の冬田や鶴の一跨
竹取の翁や楪の太郎冠者
もちつきの駒のかしらや杵の先
沾德が手紙とゞくや塩がつほ

至日

藪蔭のうめを探るや稲光

みやこどり

伐木丁々

山更にひゞ切る音や秋の風
豆萁の中這て居る弟かな
樹の丈に姿見へけり秋の雨
昔みし御花小判やけふのきく
木兎曳きや初笑ひし輩は
舟猿の舳先にさみし九月盡

木斛の照葉見つけし時雨哉

傾廓

君平が占もあたらず大晦日

畫の讃に

かた足はちろり下げたか雪の鷺
餅花や昔ながらの筥階子
八橋やながるゝとしの疊臺
行年や株にかゝる金もがな
江を渡て惠方參やうめ柳
ゆきみそれつもり〳〵て梅花
夜べ捨し玉子の殼や飛胡蝶
蠶玉を糸捨たる貧家かな
起よ今朝上野の四ぞ花の雨
初午や犬に嗅れな此趣向

花蔭亭の娘はつ鉄漿に

先ふくむかねは株はなの春
錢賣の覗て行や朝さくら

上巳

傾城やまづ曲水の椽に腰
深山木を几帳にのぞく櫻哉
鴨の花吸ひに来る夜明かな

多田薬師法楽

是は日の薬になるか花の雪
皀角（さいかち）に階子わすれて春の雨

牡丹一輪青竹の筒にさして送られける時

仲光が討て参しぼたんかな
案内子が小便したるわかばかな
ほとゝぎすいたき枕に寐たよ哉
もれ出る籠のほたるや夜這星

悼蕙魚

膝抱て誰もう月の空ながめ
山茨や卯の花をそき垣根より
五月雨やいつ見しまゝの淡路島

木雙が潮十と名改するに

筍やこの百性（姓）も六代め
山樵がきれ口にくしほとゝぎす
湯泉に立し人の噂や涼臺
羽をためす乙鳥高し今朝の秋
鵲のはし子呼也ほしの竹
此土手の馬追ひ出や舟かふね
地にあらば二股大根天の川

中秋無月

物干の芒に雨を聞く夜かな
十六宵や去年の日記も雨の事
けふぞ知る鶩の愚かりの聲
雁も田に居馴染む頃や十三夜
昏る日を荷ひ戻せよ紅葉賣
いつ月になりて時雨は松の聲
其以前鮟鱇くひし人の膽
寒菊の葉や山川の魚の鰭
水鳥の脊中を走る霰かな

丙辰春詞

竹藪にうぐゐす笛も生けり
君が爲まくり手したり若菜摘
人の日の粥も雪間のわかな哉
鶯も舎那王どのやうめの肘
藤房と正成と花ひとへかな
三味線の名にしをひぬる薺哉

花未開

笑わせて笑ぬ花や車僧
汐干狩比日の裏に歌書ん

草色遙看近却無

何草と見へずに青く野は成ぬ
欵冬の水なぶりする夕かな
往昔のお腰かけ石藤のはな
うの花や槇の柱のわれにさせ
鶯の子は宗盛かほとゝぎす

書賛狂句

彦根侍の口眞似して
さして見ろぎよやう牡丹のから傘ダ

椎の木かげ

十鳥千句獨吟巻頭
うぐゐすに北野の繪馬かゝりけり
とぶ迄を走つけたる春雉哉
乙鳥や汲ではなせし桔槹
ほとゝぎす鳴やうす雲濃紫
魚狗（かはせみ）や笹をこもれて水のうへ
田の畔に居眠る鴈や旅づかれ
山陵の吸筒さがす夕かな
木兎も末社の神の頭巾かな
おし鳥のふすまの下や大紅蓮
蒼鷹の拳はなれて江戸の色
夕立や靜に歩行　後　さし
綠樹影沈ては
仙薬を魚もなめてや雲の峰
秋既ちかづきふへて螢がり
きぬ〴〵の橋に成たかあの鴉
痲やと言ふ禿まだねずけふの月
花方に團子喰せつ今日のつき
名月やもと塩竈の人通り
印籠の一ッ下るやからす瓜
貝の斑の雀に似たり夜蛤
降り年や初茸賣りが聲の錆

重陽
太刀懸に菊一とふりやけふの床
見劣し人のこゝろや作りぎく
冬の野や何を尾花が袖みやげ
見し夢や時雨の松の畫から紙
來ぬ夜鳴く衛や虎が裾模様

俊成卿の畫に
おもふ事言はでたゞにや桐火桶

河人が初七日に橋場の保元寺に參り
松を時雨むかしうき世の鞠目附
仙人の碁盤に向ふ巨燵かな

望白馬津
市人の喧嘩やとしの川向ひ
麓にも手を組む松や師走山
としの菊うち拂ふ袖のほこり哉
行年や何を遣手が夜念佛

丁巳春興
いく度も淸少納言はつがすみ
茶の花や簾（しし）落たる道の輻
うぐゐすぞ梅にやどかる鳥は皆
のり初る五ツ布團やたから船
はる雨のふり出す賽や梅二輪
火もらひに蚫の殻や梅の實
出代の居あつき棒かな
歘冬や水のけぶりも此ごろは

ちり積て山樵が荷や花一朶

却走馬以糞

はるの田や畫繪の馬の幾かへり

更衣

晉八が郷人形も袷かな

待ぬ蚊の聲の高さや杜宇

樹作りが衣かゝれり庭若葉

夏山の火串は樹の紙燭かな

板行のこれも久しきのぼり哉

たけがはもうつ蝉も碁や五月雨

（竹河空蝉共に源氏の巻の名なり）

はつ秋や寐覺て笛の指遣ひ

七夕の硯に遣ふ楊枝かな

秋にはたへぬと良經公の御うた
にも

月の鹿ともしの弓や通來て

黒樂の茶碗の欸（？）やいなびかり

かけ稲を屛風に眠る小鷺哉

寛政九年丁巳十月十八日、本願
寺文如上人御參向有しをりから
御弟子となり、頭剃こぼちて

逃るべき山ありの實の天窓哉

草の戸や小田の氷のわるゝ音

鴫立澤にて

三千風に見付られけり澤の鴫

箱根湯泉本福住九藏がもとにと
まりて

先むすべ冬の出湯泉のわく火鉢

御關所

冬枯や朴の廣葉を關手形

薩埵峠にて

夜山越す駕の勢や月と不二

降霰玉まく葛の枯葉かな

うつの谷峠にて

あとからも旅僧は來り十團子

汐見の觀世音に參り

あとになる潮のおとや松のかぜ

十一月十八日京着

木屋町にて

布團着て寢て見る山や東山

清水寺に參りて

春待や柳も瀧も御手の糸

戸奈瀬の雪を

山の名はあらしに六の花見哉

朱雀野に日くれて

島原のさらば〳〵や霜の聲

佐谷（屋）川にて

水鳥は流るゝ脊や橋の霜

江尻の驛寺尾與右衞門が許にて

置巨燵浪の關もり寢て語れ

光廣卿の倭歌によりてなり

十日の夜小舟にとりのり清水の
湊をこへ、三穗の明神を遙拜し
て、絶景言葉につくされず。

いつ迄も夢は覺るな霜の舟

十二月十四日江都にかへりて

網の名もとし白河の旅寐哉

ゆくとしを鶴の歩みや佐谷廻り

戊午春興

うぐひすや雲水の井を水かゞみ

塩竈のあたりに煙るやなぎ哉

千づかのいね

春雨のほろ／＼和へや御ものゝ棚

鳴かぬ田もなく田も動く蛙哉

水無月なかば鉢扣百之丞得道して空阿彌と改、吾嬬に下けるに發句遣しける。

水貝の鉢に小嶋やまつ嶋や

其夜降山の雪見よ鉢たゝき

はつ秋や夏を見かへる和田峠

夕露や小萩がもとのすゞり筥

泰室改名春來

嶋臺の鶴と成けり茗荷の子

刈除けて鴈待つ小田の景色哉

待宵や降出す庭の捨篝

明月や曇ながらも無提燈

晩器改名朝四

いろ鳥の中によき名を鶺哉

しらぎくや籬のうちの羽林軍

龍膽や慈鎮の菊の後にさく

をり屑の堰(ゐせき)にかゝるもみぢかな

落葉して都の見ゆる菴かな

存義先師十七回忌

ふるどを鳴て千鳥の磯めぐり

雪おれの雀ありけり園の竹

ゆきの夜や雪車に引せん三布團

一年好景須君記

口切や南天あかしうめ白し

百兩と書たり年の關手がた

胡麻節を軒端の梅のつぼみ哉

はるさめやかるたの鬼も綱が手に

から猫や蝶嚙む時の獅子奮進

人影や月になりゆく夕櫻

三月盡

ゆくはるを小塩の曲せや一と奏

老驥伏櫪而志在千里
烈士暮年而壯心不止

唾壺も四ッ迄たゝく水鷄かな

妹許の櫻煙草や十三夜

鵙の枝踏むおとや冬木だち

庚申春詞

汐擔桶(たご)は沖のかすみや汲に行

讀抱朴子

首延て霞を呑か嶺のつる

ありと云ふ二王の筆やおぼろ月

松を畫に晉行梅や金砂子

はるさめや筏になりぬ竹かへし

朝妻ぶねの贊

藤なみや紫さめぬ昔筆

聞そめてなかぬ夜ゆかし鵑

きりはたり提燈持も虫撰み

逢ふやいかに夜のにしきの星の竹

東陽山

紅葉見やこのごろ人もふところ手

歳暮

一文の日行千里としのくれ

書春興

今や俳諧蜂の如くに起り、麻のごとくにみだれ、その糸口をしらず。

貞徳も出よ長閑き酉のとし

榎島參詣

さくら貝手ごとに拾へ島同者

悼無同

初七日に舁くそ餅も間にあわず

名月や八聲の鶏の咽のうち

きくの宿碁經見て居る主かな

會式

佛力やまだ見ぬ花のよし野紙

門(文)覺上人の院宣を持來たる

戯畫たるに

伊豆千鳥その足あとを力かな

李笠翁にならふて

一幅の春掛ものやまどの冨士

井の水の淺さふかさを門すゞみ

水になる自剃盥や雲のみね

永代橋のもとに銀鱸をあぐるとき

さし覗く顏も鷗や五兵衛舟

朝がほや花の底なる蟻ひとつ

新蕎麥のかけ札早し呼子鳥

良夜颶風驟雨

宵寐して雨夜の月は夢にみむ

露吸て蟲も千代經ん渓の菊

未白が一周忌に

ひとめぐり廻りて居るたかべ哉

月の晝うき寐の鳥をかぞへみむ

年尾

としの夜や庭火に白き犬の貌

植木屋が歳暮の梅のにほひ哉

沼のおと

鳥さしが手際見せけり梅林

から傘に柳を分るいほり哉

錢湯も淺香の沼の六日かな

鉞に氷を碎くあつさかな

物申に返事のおそき暑哉

とび移る蟬の羽赤きあつさ哉

御祓して各〳〵包む袴かな

立秋

先一葉秋に捨たるうちは哉

七夕

空に二ッほしきもの有り機道具

人有や野分風の中を飛ぶ筵

いなづまや夜と晝との田一枚

旅人にかしてうたするきぬた哉

臺笠も立傘も有り作り萩

柹畠やけろりと二本休みとし

鶴の子の額は赤き梢かな

霜葉紅於二月花

もみぢ折人や車の醉さまし

歳暮

ちよと鳴けとしくれ竹の庭雀

讀王充論衡

わか草や鶴の踏だる跡は皆

初子の日、長浦とゆふ所にて

松眞木も引けや若菜の茹加減

乙鳥の棚うちつけよ花のやど

是歳文化丙寅春二月二十九日晋子の百年忌たるにより、肖像百幅を書き、上に一句を題して人人にまゐらせける。又追福の一句をなす。

囀れや魔佛一如の花むしろ

田から田に降ゆく雨の蛙かな

護田鳥の鳴く木屋が置場や宵の月

剖葦や燈火もるゝ夜の川

鷲の栖む其木末とは柏餅

さきのぼる葵の花や段階子

初幟を祝ひて

牿を餌に釣上たりな吹ながし

やよ水鷄さいたる門を敲とは

巨團八十賀に

突ふるせ神の切けん此藥

賣藥が黒き扇の暑かな

かみきぬた

百舌のなく木末は昏て十三夜

駒宮如岡を悼て

露霜に手を合たる紅葉哉

箕輪石川侯口切出し給ふときゝ
て
軒にけふはこび手前の時雨哉

歳暮
鷹の栖む山は霞むかとし木樵

の春興
鴨のりて氷ながるゝ春日かな

鎌田の梅見にまかりて
萬叢を居並て待つ田舎哉
はつ午やしるし斗りを揚豆腐
芹摘みに出て孫もるす彦も留主

文化丁卯春、當流の宗義、積年の惑亂悉く御裁斷有て、二月十八日築地御坊に召れ、關東三十三ケ國の御末寺、各御教受有り。本如上人の御德義四海にあふれ、誠に鳥驚きぬといへるも今此時也。

うぐひすに御堂の皷靜也

金澤の汐干に
經緯の潮や蜊の綺このみ

漢土揚子江
日本隅田川
茶の水に花の影くめ渡し守

甲子の大黑天を畫て
月花もいざうち出さん小槌より

元木の彌陀に詣るとて
御影供の團子も花も降る日かな

卯月の八日に
珍敷ひものが咲ます垣根かな
今ひと聲荅る山やほとゝぎす
落る音おとすおと有り園の梅

乞巧奠
袖ふるは廓の屋根や星の竹
牛牽て川越す人や星の宵

堀川院の御時よりとぞ
虫撰聲なきは皆うつくしき
笠脱でみな持せけり萩もどり
馬市の借屋に一と夜秋の月
雲の井とぎれは月のみなと哉
啄木鳥みねのあらしや谷の聲
つる引けば遂に遠しからす瓜
秋雨や筏の床の夕けぶり
燕の殘りて一羽九月盡
から傘を返せばもとの時雨哉
達磨忌や朴の落葉の斧片し
遠山に赤き宮あり冬木だち
鷹犬の縄に引るゝ枯野かな
時頼の麻酒を笑へみそさゞゐ
枯葉ゆく葱の小川や牛の繪馬
かみ置や男の肩にこぼれうめ
粥一ツくうや不ㇾ喰や鉢たゝき
鷤のひと足ぬきや冬の川

歳暮

いせや伊勢今としも賣らす鏡研
注連なはの餅さしくべつ庭竈

春興

見て笑へ若菜の薬に天下筋
師遠が苔をひくやけふの松

墨子悲絲

そめやすき人の心やいとざくら
錢突て花に別るゝ出茶屋かな
かね撞ぬ撞(鐘)樓有けり夕ざくら

瑞麟寺をよぎる

ゆきとのみいろはに櫻ちりぬるを
ほろ幗の山かげ忍べほとゝぎす
壹二丁先をゆく帆や麥の浪
山寒し瀧より下の蟬の聲
初茸や廻さば獨楽にまわるべく
屑買ひの吹れて歩行野分哉
海山と名の立分る角力かな
秋雨やそれは降る鳩晴る鳩

東陽精舎にまかりて

地に敷や佛の場の天竺花

龜貝判者披露

はつ鴈やはつかの闇に聲は月
隱家は同じはちすの垣根かな
名月や洋に見なれぬ獸あり

芥川わたるところ繪たるに

抱かれたり負たり風の萩すゝき
いぎたなき隣も有を飼うづら

橘千蔭身まかりける。斷琴の友
なりければ

から錦やまとにも見ぬ鳥の跡
吾書る菊に讃なしかた月見
山茶花や根岸尋る革文筥
しぐるゝは鷲の羽影や冬の海
きぬぐゝのふくら雀や袖頭巾

神名川に旅寐して

さまぐゝの鳥を千鳥と聞夜かな
和田海の底もにしきや冬ざかな

歳暮

我かどに松負春せ馬やとし儲
市人の天狗礫や土のかね

春興

難波津の習ひ始やうめの花
うぐひすの遲音笑ふや垣の梅
初午や二ッ瓶子の黒羽おり

二月二十五日翰場が庭の菅廟に
て、はゐかいもよふしける。

一順をつけよ蛙もうぐゐすも
花見ても依怙ある人のこゝろ哉
鳥うちのよくも反る也老が身を

己巳四月江の嶋辨才天三社開

帳有ける時

扇にて扉ひらくや狂言師

八専に明るき麦の田一枚

かさゝぎの橋場を渡れ星迎

いなづまやしばし明るき椎が本

名月や維法居士が露の不二

車井の音や雲井の渡り鶴

小夜千鳥来だ寐ぬ船の帷幕

水鳥や行あたりては右左

花ぬふとり

己巳の冬、居を麻塚といふところにうつして

取遣りもおかしき村の歳暮哉

節季候は百轉(囀)のはじめかな

元日の朝寐起すや小田の鶴

うめ守に硯借れば筆もなし

山藤の梅まだ寒し活大根

うぐゐすや梅に氷れる枝もなし

梅を縫ふ糸ならなくに春の雨

桃洞に遊る　曲水居

この道の手綱ゆるすや春の駒

朝三いつのとしか予と京師に遊ぶ。ことし又心牛にいざなはれて花洛にをもむく。その餞して

當て來よ大和路かけて二の替り

鳥一ツ梭を投たりいとざくら

讀仙經

朝々の洗ひ流しや蜂に成れ

小田返す初いなづまや鍬の先

人麿忌

ちる花やあまぎる雪の鍋鑄かけ

文臺之銘　曲水居

しら魚や是も居杭の橋柱

花に飽て杭にねむる胡蝶哉

佛生會

生れ出てうき世の花の一御堂

なま鯛や光絹をぬけ更衣

たゝかずに水鷄の入や戸なし庵

竹醉日

よひさめて竹もる月や十三夜

ゆふ立の今降るかたや鷺一羽

山梔子の花を相手や世捨いほ

七夕

かさゝぎとけふは呼るゝ鴉かな

晝寐して晩待星を顔に笘

十三夜

熱燗をふくや後の月の松

店賃のかりも結ばず九月蚊

野州旅行

問ひ來かし榎の紅葉地藏堂

山川のいわなやまめや散もみち

未春興

今朝解くや氷のわか菜霜の梅

鵲の來て豆煮おとや二日灸

三冬雪なし、臘月十七日雪ふる。

刈らでけふ雪待つけぬ庭の荻

鳥追の足袋の白さや川向ひ

人の氣のほころび初つはつ櫻

干海苔に小海老見付て哀也

をきふしも竹の自在や梅の花

榎見へ白壁見へてかすみ哉

芹賣れてさみしき鶯の栖哉

初燕くるふよふなり袖袂

江戸節一曲をきゝて

紫陽花や田の字盡しの濡ゆかた

ほとゝぎすなくや有馬の火見番

毛虫今蜘蛛のふるまひ杜宇

ほとゝぎす猪牙の布團の朝じめり

住吉をどりの畫の讃に

ふけや此すみよしの風うちはより

魚一ツ花野ゝ中の水溜り

百舌鳥の尾のふる里寒し稻ぼつち

鼠とる猫、鳥捕る鷹、みなこれ
世上のありさまなり。

草の戸に蠅虎(はいとりぐも)をながめけり

宇治の里一見の時

いた妻や二度にみせたる寺と橋

葉月十五夜寒光洞にて

十六宵も獅子の氣遣りか廓の月

名月に御歌所も覗きたし

藤澤にて

人知らでうけらの花の盛りかな

榎島法樂

すげ笠の月と時雨や山ふたつ

うめの立枝

客船に入日殘して時雨かな

傘はまだ時雨るゝ音や星月夜

から／＼と日本堤の落葉かな

至日

今日よりして春の歩行や日の鴉

餅花や柳さくらを一木にて

歳暮

大名は鸚鵡に似たりとしのくれ

壬申春興

梅わか菜皆よし／＼や庵の春

うぐひすの舌うちしたり花の味

紅梅や今朝は未だ來ぬ白すゞめ

人日

ふるとしのふる名は呼ぬ鈴菜哉

うぐひすや今谷を出て身づくろひ

む月十七日杉田にあそびて
解き舟の橋を境やうめの華
これは〳〵爰をや梅のよしの山

上巳
居候夜着の間出て桃のはな

すみだがはの花見にゆきて
遅りやいかに張良朝ざくら
蝴の園に暫く花も舞ふ小蝶
苗賣りに初音聞ばやほとゝぎす

圓覺寺にまかりて
鐘涼し女の力聞へけり

權田坂と言ふ處にて
ほとゝぎす楓花咲く山路かな

維摩經をよみて
解脱して魔界崩るゝ芥子の花

青樓草市
市分てもの言ふ花やをみなへし

新蕎麥や一とふね秋の湊入り
はつ茸や杏斗りの小むらさき
啼く山の姿も見へつ夜の鹿

良夜
名月や何に似たるぞ鍋の蓋
炮焙に何ふすぶるぞ秋の雨
趁浪を追かけて刈るすすき哉
鯊魚釣りや蒼海原の田うへ笠
みねとなり渚と成るや秋の雲
山紅葉照るや二王の口の中
又もみぢ赤き木間の宮居かな
みの虫や啼ねばさみし鳴く(も)又

歸去來
歸なむ居酒一と口菊寂ぬ

春興
うぐひすの口明く影や下地窓
梅白し眞の手桶の星月夜
こも(ぼ)れても若菜の土や二疊臺

む月二十五日、下谷源空寺の御忌にまかりて
閑たる春の光や江戸の御忌
うぐゐすに糸針借む梅の宿

正月四日南岳畫師身まかりけるよし、門人寛柔が書狀とゞきけるに
春雨にうちしめりけり京昆布
初午や霜解道の竹いかだ

新梅莊滿開
朝飼から鶴もまだ來ず梅の宿

處士之家か。終日花を詠て落日にいたる　林
うめ暮て歸る鶴待つ端居かな

李太白
小閑波を歩行て取む春の月

葛城とゆふ謠曲、一聲一張をうけたまわりて
聞け春の夜の月白し梅しろし

詩骨牌に女もひとり春の雨

二月二十八日、駐春亭以一が利休忌にまかりて

竹葉にかすむ一間や無盡燈

慈雲山にまかりて

狗子のころび歩行や花の雪

暮の雉子鳴く度に散る櫻かな

三月二十三日夜、隅田川をわたり花を見る。歸路八百屋善四郎がもとにて

行春の袋比目や餅がつほ

卯月九日榎島參詣とて立出ぬるに

川崎を蜂の飛ぶ日や女旅

富塚にて

百貫目の長持ふるや若葉山

神奈川はね澤屋にて

天に有らば千鰒のなりや杜鵑

八十の賀に

先づ祝へ八千代の春の椿餅

掴む手にあまる螢のひかり哉

夏山に何射弓ぞ弦のおと

高野山蓮華乘院を招じて

蔓ものも包ぬ草のいほりかな

三叉江擧銀鱸

いざ月に顧かぞへむ活けすゝき

肴核既盡て樓船に藝子只二人

打水に目通ゆるす下部かな

なでしこや呉服穴織が手のすさみ

ふみ月三日木釜が身まかりぬるを聞て

波羅密の舟にもがもな桐一葉

敏行が驚れぬる三日の月

柳屋安五郎、さごしとゆふ魚を送る時

暑さにもさわら(鰆)ぬよしの見舞哉

遊百花潭之水樓

折琴よ蠻三味線よすゞみぶね

ふぢ袴誰にひかれてほころびぬ

青樓八朔

仕附苧の殘る暑や節小袖

八十六翁巨園身まかりける時

葭翠簾に蝶のはさまる野分かな

良夜

仙境の新酒呑にかいなれける

名月や尻うちたゝく十寸の駒

文化十癸酉年夏六月、西洋商舶載南粤巨象來、將貢江府。故有不受、却異邦。

狹ひやら象は南へかへるかり

重陽

園の中の星にしたむや菊の酒

十三夜の月を見むとて、人々のそゝのかすにまかせて、玉河わたりに杖を引て

月の今日入べき山や稲ぼつち

武藏之野無山島。月出於草入於草。明萬曆中之人農丈人と言ものゝ詩なり。めづらしければ其意もてうける也。

栗焼て匣古む十三夜

うつおとは翌の豆腐もきぬた哉

懸魚やかけてぞたのむ鰯網

山蜂に乳房吸るゝ葡萄かな

飛そうなからす驚しや柿畠

駒形の碑を擂て来よ草の花

千両で賣るか小倉の初しぐれ

達磨忌

如何なれば祖師さいの目の納豆汁

藏經に日の引渡る長夜かな

十夜

種冬瓜汝も法然天窓かな

日蓮忌

山さくら昔しながらの吉野紙

惠比須講

下戸も一ッうけて三郎ゑびす講

ぬくめ鳥明ればこぼす湯婆哉

芋頭嵩や落せし酉の市

屏は無か獅々はいかにや獣店

沽む哉花屋が室の玉つばき

持ながら雀を折む雪の竹

洗硯魚呑墨

わか鮎やすゞりを洗ふ流にも

煮茶鶴避煙

つる高き松の木蔭や花見茶屋

卜鄰に送る　南香育

雁金は燕にかへし申候

甲戌春興

若菜ひく女も鶴の歩行哉

羽子の子や梅にとまれば呼子鳥

筏ゆく跡又白しうめの影

七種のうち揃たる田舎かな

はる雨に濡て戻し女猫哉

隅田川梅屋にて

默禮の思ひ出されず梅の道

藥王寺のうめを

枝垂梅彼岸さくらに後ロ向き

洲蛤月頭には西に有り

うら人が握拳の榮螺かな

涅槃會

ヨヽにふる佛の道や春の雨

西行忌

其衣更着の餅草を團子哉

石濱にゆきて東岸の花を見る

帆が隱し帆が見せてゆく櫻かな

三月五日隅田川の花を

口明て鳴や燕の子安貝

駐春亭利休忌に

騏驥の布引く花の堤かな

螻蛄刻のうごくよふなり春の雨

待とても花にねぬ夜はなきものを
ほとゝぎすいかに難面き笘枕

ら月十八日古筆了意が宅にゆきける時、岩倉三位殿不二の山見むとて、忍びて吾嬬に下り給ぬとて、立よらせたもうに不計謁見して

岩倉のしのび音もれつ時鳥

御かへし　三位殿

山寺の青葉がくれのほとゝぎす
きく人がらに聲ぞそへぬる

夏草や深き思案の葎の主
小金花龜住む池の玉藻かな

楞嚴經

摩登伽が化粧崩るゝ芥子の花

淺草人丸堂建立の時

俳諧師等も雪と見るさくらかな
雨の子の乳のむ音や苔清水

悼白貢

朝がほや瑠理の世界に人は今朝

此花莫遺俗人看　新染鵞黄色未乾
好逐秋風天上去　紫陽宮裏要頭冠

舞ひ人の冠に似たりねりの花

青樓俄狂言番組

大庭や豕の床有萩すゝき
影は空にすみよし踊けふの月

荒神の繪馬かけるあふぎに

鼻聲の御釜拂や秋の蟬
鶺鴒や又來ては尾をふる井筒
さして行から傘白し初時雨
初氷うつりにけりな妹が顏
尾頭をいざ言問む海鼠うり
遠千鳥弓矢の沙汰もなかりけり

文晁が畫ける山水のあふぎに

夕ぐれや山になり行秋の雲

至日

初雪や椽に小鳥の足のあと
子を巾聲も春めく冬夜哉
鵜の割る氷のおとや朝ぼらけ
善男子善女人御講参や西ひがし

戌歳暮

行や年すは煤竹の伏見町
節季候や竹の林の雪すゞめ
市人や雪に頭巾のひた兜
餅花やほこりの見ゆる朝掃除
煤膾橘柑の乾はきくの花
金杉も餅搗唄に廓嗅し

畫の讃に

釣上た鯛よ小判よとしの市

藍雲樓にて

傾城のふくさ捌きや大晦日
松と梅折かけ垣の竹の障

去年甲戌の秋の頃より響者春雪と言ものゝ謎〳〵流行して江都に喧し。

去年かけた謎は解たり春の雪
程ヶ谷に鶴乗捨つ梅の花
うぐひすにほゝろ日の出る山路哉

阮籏が三味線は晋子に犀をかけられ

鶯や摺小木しばし朝朗
はるさめや更て筒に入石のおと

二月十七日迎福秋香巣兆

名は残る楝の實の木ずへ哉
蒼蠅の葵して行ぬ白牡丹
うめ散て驚草白き木蓮哉
蛤のにじりながらや遠干潟
田の畔に花見て歸る雨も有

旌住の里に蛙合戰ありとて人々まかりける

轡に前子に手負ひを荷ふ蛙哉

九阜のもとより初鰹送ける

魚の脊に鎌倉山の青みかな

その一ふしを龜田先生へ送ければ

鵬齋

初がつほ一句も出ぬうまみかな
勅をうけて切かねて居る牡丹哉
ふみ碎く蝶の力や芥子の花

靜養庵を訪ふ。座いまだ溫ならずして蕎麥を出す。其味高々、更科をそしり栗山を笑べし。

うつに曳く涼しき浪の勝手かな

およし婿壻を祝て

やよすゞし夏も屏風の蝶番ひ
に德の御製にもれぬ蚊遣かな
風呂敷の日除も涼しみそぎ舟

乞巧奠

をり姫の織屑飛や星の歡
秋に先仕たり新蕎麥新豆腐
かげほしの唐繪に似たりくれのをも　百香
啄木鳥に日暮殘る木末かな

初鶴や晴れば見ゆる無人島
晝の間の一ト時あつし夜半の虫

良夜

名月や引ふくらめし五人張
いざよひやいざ清見がた田子の浦

淺茅が原の松間を過とて

玉姬のたま〳〵見せつ月の顏

初雁を聞て

さへかえる余藤の木瓜かりの聲

八月廿日、弘福寺の普茶に罷て風子惠良に謁す。玄關の左右、木樨の大樹二本あり。

蚊子鐵牛何有分別

木樨や金銀の香を悟り不得

東陽山

賢を賢として色にかへでの紅葉哉

上野淸水にて

舞臺から短冊の飛ぶ紅葉かな

髮置を祝て

冬の田に鶴脛長し飴ぶくろ

至日

むりやりに咲や一鉢冬至梅

古田高麗の茶盌を畫にうつし、
其上に讃しておくるとて

幾時雨ふるやふる田のかたみ哉

東叡山の清水に

如意輪の頰杖したる落葉かな

水却て炭を斗るやかたし貝

石蕗(つはぶき)の日蔭は寒し猫の鼻

獺良の崩れ次第や冬の川

歳暮

塩魚に正月ちかき日さしかな

いさ珠を拾んとしの浦傳ひ

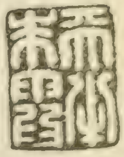
抱一上人春秋の發句有り、草稿五車に積べし。其十が一を擧て一冊とす。上人居を移事數〳〵也。其部を別(わかつ)に其處を以す。これ皆丹青圖繪のいとまなり。此冊子の跋文を予に投ず、尤他に讓べきにもあらず。唯寛文延寶の調を今の世にも弄もの有らば、其判を乞んと。是上人の望給ふところ也と。春來窓、三叉江のほとりに筆を採畢。



跋 印

草抱一隱君を識る蓋し三十有餘年。隱君の操。終始一の如し。性誹諧を好み。圖畫を善くす。草誹諧なる者を知らずと雖。其の畫の日に進むを觀て。又誹諧の韵。審宮商に中るを知る。古云ふ。詩は有聲の畫。畫は無

跋



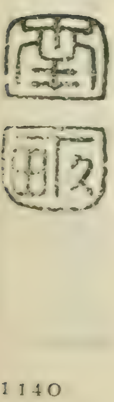
覃識抱一隱君蓋三十有
余年。隱君之操。終始如一。性
好誹諧。善圖画。覃雖不知誹
諧者。觀其画之日進。而又知
誹諧之韵。響中宮商矣。古云。

聲の詩と。隱君の思。有聲を以て發する者有り。無聲を以て發する者あり。有無遺さず。亦何ぞ自在なる。宜なるかな朱門を辭して白屋に處り。薫灼を舎てゝ閑曠に就くや。居龍の技。以て日を消す可し。若し夫れ庖丁の刀。目

詩有聲畫。〻無聲詩。隱君之思。有以有聲發者。有以無聲發者。有無不遺。亦何自在也。宜乎辭朱門而處白屋。舍薫灼而就閑曠也。居龍之技。可以消日矣。若夫庖丁之

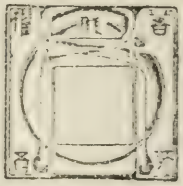
に全手なし。陳平の肉。天下を宰割する。果して何の益ぞ。龍か〻〻。居つて珠を獲。草の如き俗吏。其の鱗爪を希ふも。亦得可らざるのみ。
文化癸酉清明の後日。南畝草緗林樓中に書す

刀。目無全牛。陳平之肉。宰割天下。果何益矣。龍乎〻〻。居而獲珠。如草俗吏。希其鱗爪。亦不可得已。
文化癸酉清明後日南畝草
圭子緗林樓中



昭和三年十二月二十日印刷
昭和三年十二月廿三日發行

日本名著全集 第一期出版
江戸文藝之部 第二十七卷
俳文俳句集（非賣品）



編輯發行兼印刷者 東京市日本橋區呉服町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所 東京市日本橋區呉服町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二卷 書目豫定一覧

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○近代艶隠者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土産 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三卷 芭蕉全集

【正篇】○俳句集 芭蕉句選・句選拾遺・補遺 ○連句集 江戸兩吟集・江戸三吟・次韻・俳諧集・補遺 ○俳文集 文集・補遺 ○評言集 貝おほひ・田舍句合・常盤屋句合・初懐紙評註・箱の原 ○紀行集 甲子吟行・鹿島紀行・笈の小文・更級紀行・奥の細道・嵯峨日記 ○書簡集 消息集・異讀集・補遺 ○語錄集 葛の松原・去來抄 三冊子 山中問答

【外篇】○虚栗 ○冬の日 ○蛙合 ○春の日 ○鶴の歩 ○曠野 ○其袋 ○瓢 ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○笈日記 ○續猿蓑 ○韻塞 ○小文庫

【附錄】枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○全傳 ○芭蕉翁繪詞傳 ○年譜

第四卷 第五卷 近松名作集 上（第二回配本濟） 下（第六回配本濟）

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河波鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧徳 ○五十年忌歌念佛 ○槍狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡

○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川 ○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繋馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下（第十四回配本濟）

○曆 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○鬼富仁親王嵯峨錦 ○お染久松袂の白しぼり ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○愛護若塒箱 ○傾城思升屋 ○八百屋お七 ○心中二つ腹帶 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○鬼一法眼三略卷 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大內鑑 ○苅萱桑門筑紫𨏍 ○敵討襤褸錦 ○釜淵雙級巴 ○ひらかな盛衰記 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記 ○名縁伽羅千代萩 ○鎌倉三代記

第八巻 歌舞伎脚本集（第十九回配本濟）

○大名なぐさみ曾我 ○好色傳授 ○傾城淺間嶽 ○桑名屋德三入船物語 ○加賀山廓寫本 ○殿下茶屋聚 ○隅田川續俤 ○男伊達初買曾我 ○あげまき助六廓の花見時 ○東海道四谷怪談 ○十六夜清心 ○忠臣藏年中行事

第九巻 浮世草子集（第十六回配本濟）

○好色万金丹 ○御前義經記 ○けいせい色三味線 ○沖津白浪 ○傾城禁短氣 ○日本新永代藏 ○世間息子氣質 ○新小夜嵐 ○世間娘容氣 ○浮世親仁形氣

第十巻 怪談名作集（第十二回配本濟）

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○蕣句冊 ○垣根草 ○漫遊記 ○附録百鬼夜行繪卷

第十一巻 黄表紙廿五種（第一回配本濟）

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記

○睟多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本
○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道
万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○卽席
耳學問 ○廬生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語
○世上洒落見繪圖 ○桃太郎發端話說 ○十四傾城
腹之內 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○
世諺口紺屋雛形 ○稗史億說年代記 ○御誂染長壽
小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間
萬事吹矢的（草稿）

第十二巻 洒落本集

○傾城買四十八手 ○契情買虎の巻 ○嫖客三體誌
○娼妓絹籭 ○遊子方言 ○月花餘情 ○百花評林
○大抵御覽 ○異素六帖 ○廓中奇譚 ○辰巳の園
○和唐珍解 ○通言總籬 ○辰巳婦言 ○令子洞房
○寸南破良意 ○仕懸文庫 ○猫射羅子 ○道中粹
語錄 ○聖遊廓 ○錦の裏 ○三敎色 ○契國策
○眞女意題 ○甲驛夜の錦 ○田舍芝居 ○婦美車紫
鄽 ○起承轉合 ○粹町甲閨 ○古契三娼 ○滸都
洒美撰 ○夜半の茶漬 ○志羅川夜船 ○穴學問
○狂訓彙軌本紀 ○娼妃地理記 ○遊僊窟烟の卷
○女郎買精味噌汁 ○美地の蠣殼

第十三巻 讀本集（第七回配本濟）

○櫻姬全傳曙草紙 ○昔話稻妻表紙 ○本朝醉菩提
○三七全傳南柯夢 ○占夢南柯後記 ○天羽衣 ○
飛驒匠物語

第十四巻 滑稽本集（第三回配本濟）

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面
草 ○人遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇
妙圖彙 ○浮世風呂 ○早變胸機關 ○客者評判記
○浮世床 ○人間萬事虛誕計 ○同上後篇 ○假名
手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今百馬鹿 ○八笑人
○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會室の梅 ○
譌來雀 ○一雅話三笑 ○言葉の花 ○鯛の味噌津

第十五巻 人情本集（第二十一回配本濟）

○春色梅曆 ○春色辰巳園 ○春色惠之花 ○英對暖
○梅見船 ○閑情末摘花 ○假名文章娘節用

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳

上（第四回配本濟）
中（第九回配本濟）
下（第十七回配本濟）

第十九巻 狂文狂歌集

○萬歲狂歌集 ○德和歌御萬歲集 ○狂歌才藏集
○貞德狂歌百首 ○建仁雄長老狂歌集 ○世の中百
首 ○吾吟我集 ○狂和うた集 ○狂歌若葉集 ○
狂歌酒百首 其他

第廿巻 **修紫田舍源氏** 上（第五回配本濟）
第廿一巻 下（第十五回配本濟）

第廿二巻 **膝栗毛其他** 上（第十回配本濟）
第廿三巻 下（第十一回配本濟）

○東海道中膝栗毛　○續膝栗毛　○續々膝栗毛　○南總記行旅眼石　○江戸前噺鰻　○落咄彌次郎口

第廿四巻 **和文和歌集** 上（第十三回配本濟）
第廿五巻 下（第二十回配本濟）

○賀茂翁歌集　○にひまなび　○歌意考　○天降言　○うけらが花　○琴後集　○楫取魚彦家集　○ひとよはな　○東遊日次記　○藤簍冊子　○志濃夫廼舍家集　○六帖詠草　○同拾遺　○桂園一枝　○同拾遺　○亮々遺稿　○浦のしほ貝　○しのぶぐさ　○言道歌集　○良寛歌集　○女流歌文集

第廿六巻 **川柳雜俳集**（第八回配本濟）

○武玉川十八篇　○柳多留三十一篇　○誹風柳多留拾遺十篇　○川傍柳五篇

第廿七巻 **俳文俳句集**

○獨言　○鬼貫句選　○七車　○とく〳〵の句合　○五元集　同拾遺　○玄峯集　○去來發句集　○丈草發句集　○風俗文選　○[illegible]人盡　○鶉衣　○千代尼句集　○松の聲　○太祇句選　○同後篇　○春泥發句集　○樗良發句集　○蕪村句集　○蕪村文集　○蓼太句集　○井華集　○青蘿發句集　○白雄發句集　○曉臺發句集　○闌更發句集　○俳ざんげ　○枇杷園發句集　○成美家集　○道彦發句集　○乙二發句集　○一茶句集　○おらが春　○屠龍之技　○みさご

追加篇
第廿八巻 **歌謠音曲集**

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）　○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段）　○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ヶ森の段）　○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段）　○廓文章（吉田屋の段）　○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段）　○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）　○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段）　○木下蔭狭間合戰（七つ目・竹中陣屋の段）　○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）　○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）　○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）　○八陣守護城（八の切・正淸本城の段）　○生寫朝顏日記（宿屋の段）　○壺坂靈驗記（澤市内の段）　○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）　○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○秃萬歳○炎すゑ殿の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀬○ぬれ扇○亂髪夜編笠○助六所緣江戸櫻○常階帶花樹○道成寺○淨瑠璃供養○邯鄲○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○疊繪の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間嶽○尾上雲賤機帶○源氏十二段○賴光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹脊の鶯合

○常盤津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○雨顔月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靱猿○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木○寄罠娼釣狐（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞔關守（宗清）○願絲緣苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○[illegible]連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○淸元節

○梅の春○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松淸元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間苅豆（かさね）○法

花姿色同(山歸り)○月花妓友鳥(山姥)○笹花手
向橋(吉原雀)○復新三組盃(大山參り)○道行浮
塒踊○道行旅路の嫁入(八段目・おかげ參り)○
六歌仙容彩(文屋・喜撰)○彌生の花淺草祭(惡玉)
○おどけ俄煮珠取(玉屋)○道行旅路の花聟(落人)
○再春菘種蒔(舌出し三番)○初霞淺間嶽(淺間)
○〆能色相圖(神田祭)○造鈍菊睦言 菊畑三菊)
○菊婚閨睦言(お岩)○倭假名色七文字(手古舞)
○重褄閨の小夜衣(白絲)○明烏花濡衣(浦里)○
梅柳中宵月(清心)○日月星晝夜の織分(夜這星)
○初櫓噂高島(三人三吉)○貸浴衣汗雷(夕立)○
忍逢春雪解(三千歳)○色増艶夕映(雁金)○花雲
助相肩(雲助)○青海波○助六曲輪菊(助六)

○新内節

○二重衣戀占(花咲綱五郎)○若木仇名草(蘭蝶)
○千日寺名殘鐘(三勝半七)○眞夢血染抱柏(花園
平三)○歸咲名殘の命毛(尾上伊太八)○傾城音
羽瀧(おとは七郎兵衞)○膝栗毛「赤坂の段」○膝
栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪(浦里)○明烏後眞
夢○果身寶の段

○薗八節

○道行相合巨燵(梅川)○桂川戀の柵(お半)○鳥
邊山○花街の色糸(植木屋)○道行菜種の亂咲
○江戸の繪姿(おひな吉三郎)○道行緣花房(お花
半七)○口舌八景(小いな半兵衞)○小春治兵衞巨
燵の段○夕霧

○江戸長唄(めりやす大薩摩を含む)

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流
相生獅子(相生獅子)○二人椀久○英獅子亂曲(枕
獅子)○百千鳥娘道成寺(さなきだ道成寺)○高
尾さんげの段(高尾懺悔)○天人羽衣○京鹿子娘
道成寺(娘道成寺)○英執着獅子(執着獅子)○風
流妹脊の杜建(杜建)○門出京人形(水仙丹前)○
亂菊枕慈童(菊慈童)○鐘入解脫衣(解說)○劍烏
帽子照葉盃(劍烏帽子)○柳雛諸鳥囀(鷺娘・うしろ
面)○初咲法樂舞(法樂舞)○ねこのつま○乘掛情
の夏小立(與作)○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の
鏡關寺小町(關寺)○春調娘七種(七種)○童子戲
面被(めんかぶり)○衣かづき思破車(やれ車)○
童獅子○紋草吉原雀(吉原雀)○相生獅子○嫐
染分紅葉(うはなり)○隈取安宅松(安宅)○御代
松子日初戀(小松曳)○其容形七枚起請(こもそら)
○關東小六後雛形(淡島)○其面形二人椀久○黑か
み○女夫松高砂丹前(高砂丹前)○菊壽の草摺
○勢五大力○吹雪の雛形(雛形狂亂)○三重霞嬉
敷顔鳥(三重霞傀儡師)○舞扇薗生梅(舞扇)○濱
松風戀歌(濱松風)○ゆかりの月○美面より○七枚
續花の姿繪(汐汲・猿廻し・老女)○遲櫻手爾葉七字
(花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・直擇蛋)○戀
男調松風(調松風)○再春菘種蒔(舌出し三番叟)○戀
畏奇掛合(犬神)○四季詠寄三大字(門傾城・鹿島踊)
○閻鼓姿八景(節季候・心猿・晒女)○正札附根元草
揩(正札附)○寄三津再十二支(小原女・乙姫・四
つ竹)○其九綸彩四季櫻(丁稚・天下るの傾城)○

新獅子〇三升猿曲舞（猿舞）〇石橋（外記の石橋）〇老松〇不動〇七所御攝初鐵漿（西王母・藪入娘）〇大和い手向五字（官女・牛若）〇外記猿〇入復新三組盞（初雁の傾城）〇廓三番叟（廓三番）〇歌へすゞ〜餘大津畫（蒔娘・闇三の座頭・闇三の奴）〇月雪花蒔繪の巵（月の卷）〇拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）〇八重霞賤機帶（賤機）〇後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）〇御哉玉海老手遊（とんび奴）〇吾妻八けい（八景）〇六歌仙容彩（業平小町）〇姿花後雛形（小鍛冶）〇初子日〇俄獅子〇外記の傀儡獅〇初しぐれ〇巽八景〇花翫曆色所八景（助六・景清・新鷺娘）〇勸進帳〇花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷）〇島臺〇軒端松〇士農工商〇秋色種〇雛鶴三番叟〇花見車〇手習子〇織どの〇常磐庭〇鶴龜〇五色の絲〇今様小鍛冶〇柳糸引御攝（裸三番叟）〇壽〇鞍馬山〇翁千歲三番叟〇廓丹前〇菖蒲ゆかた〇喜三之庭〇紀州道成寺〇連獅子〇時雨西行

〇歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

〇小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に何唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇

第廿九卷 **謠曲三百五十番集**（第十八回配本濟）

脇能物

〇翁〇高砂〇弓八幡〇志賀〇淡路〇御裳濯〇代主〇松尾〇佐保山〇養老〇大典〇放生川〇老松〇白樂天〇鶴龜〇東方朔〇白鬚〇大社〇源太夫〇寢覺〇鵜祭〇輪藏〇道明寺〇難波〇富士山〇江島〇賀茂〇竹生島〇氷室〇和布刈〇逆鉾〇九世戸〇要石〇嵐山〇金札〇岩船〇玉井〇西王母〇吳服〇右近〇繪馬〇鱗形〇內外詣

修羅物

〇田村〇八島〇箙〇忠度〇俊成忠度〇經政〇通盛〇兼平〇知章〇賴政〇實盛〇清經〇朝長〇巴〇敦盛〇生田敦盛

三番目物

〇野宮〇井筒〇東北〇梅〇佛原〇采女〇芭蕉〇墨染櫻〇身延〇半蔀〇夕顏〇雪〇楊貴妃〇江口〇定家〇千手〇二人靜〇六浦〇藤〇杜若〇小鹽〇雲林院〇誓願寺〇羽衣〇落葉〇遊行柳〇西行櫻〇葛城〇瀧田〇三輪〇卷絹〇吉野靜〇住吉詣〇松風〇熊野〇草紙洗小町〇山姬〇祇王〇吉野天人〇胡蝶〇鷺〇源氏供養〇大原御幸〇關寺小町〇鸚鵡小町〇檜垣〇姨捨

四番目物

〇三井寺〇櫻川〇柏崎〇百萬〇玉葛〇浮船〇三山〇籠太鼓〇籠祇王〇隅田川〇蟬丸〇花筐〇雲雀山〇飛鳥川〇班女〇加茂物狂〇水無月祓〇室君〇初雪〇花軍〇富士太鼓〇梅枝〇鳥追船〇竹雪〇藍染川〇水無瀨〇砧〇求塚〇卒都婆小町〇女郎花〇通小町〇戀の松原〇善知鳥〇阿漕〇藤戸〇松虫〇錦木〇船橋〇綾鼓〇戀重荷〇鐵輪〇葵上〇道成寺〇雨月〇木賊〇弱法師〇景清〇俊寬〇攝待〇鉢木〇土車〇高野物狂〇蘆刈〇盛久〇小督〇春榮〇仲光〇重盛〇

楠露○櫻井○正行○木曾○七騎落○安宅○切兼曾我○元服曾我○小袖曾我○藤榮○自然居士○東岸居士○花月○放下僧○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○菊滋童○枕滋童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○笛之卷○湛海○忠信○錦戸○現在巴○關原與市○禪師曾我○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

五番目物

○鵜飼○鍾馗○熊坂○項羽○昭君○松山鏡○野守○檀風○烏帽子折○鞍馬天狗○善界○車僧○第六天○大會○葛城天狗○松山天狗○舍利○殺生石○小鍛冶○鵺○雷電○谷行○國栖○春日龍神○大蛇○愛宕空也○龍虎○飛雲○大江山○羅生門○土蜘蛛○現在鵺○安達原○紅葉狩○船辨慶○碇潜○張良○皇帝○一角仙人○融○須磨源氏○絃上○海士○當麻○來殿○山姥○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々

番外物

○鼓の瀧○徑山寺○兵揃○横山○玉取○和國○四季○由良物狂○香椎○内府○島廻○玉島○現在經政○卒都婆流○當願暮當○徒然○上宮太子○松浦物狂○蛙○碁○吉野○定家○一字題○眞方○近江八景○博多物狂○初瀨六代○舞車○舞車○俱利加羅落○隠岐院○阿古屋松○反魂香○笠取○太刀堀○母衣○更科○五輪碎○西濱八景○鶴龜○嗒○菊露○奈良八景○山家秋○東國下○西國下○弓矢立合○箱崎○鵜羽○布留○鼓瀧○阿古屋松○芳野○香椎○浦島○休見○上宮太子○吉野詣○笠卒都婆○貞任○伏木曾我○明智討○柴田○北條○空蟬○高安○狭衣○高安小町○安達解○宮城野○朝顔○實方○高野詣○隠岐院○丹後物狂○笛物狂○鳥追○松浦物狂○和國○松浦○粉川寺○反魂香○鷄龍田○池贄○荊苙○守屋○佐々木○齋藤五○横山○春近○十番切○千引○豐干○護法○常陸帶○現在千方○泣不動○橋天狗

以上日本名著全集、第一期出版、「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二册は、第十一卷黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一册乃至二册宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に伴ふ多量製産の利得を以て、益々いゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一册あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同様に申受く。

○送本料は、會費の外に一册あて金十二錢を要す。

